


現代文學全集





Digitized by the Internet Archive
in 2023 with funding from
Kahle/Austin Foundation

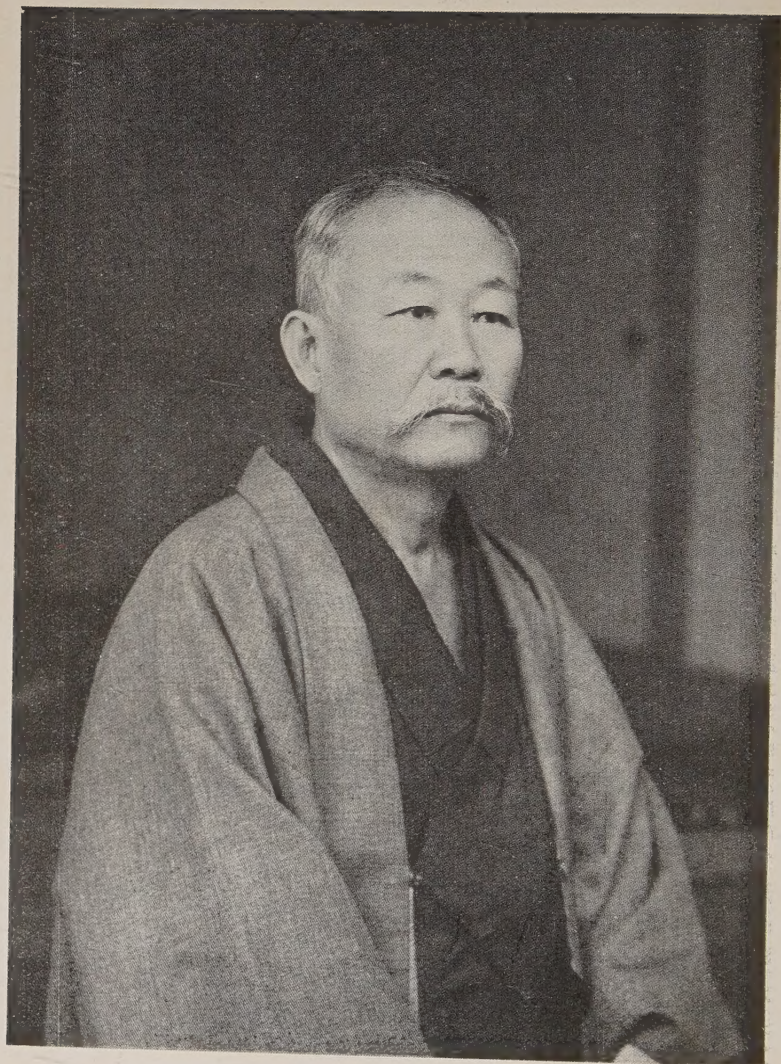


幸田露伴集

改
造
社
版

杉浦非水裝幀





影 近 者 著

PL755.6

.G38

v.8

「幸田露伴集」目次

卷頭寫眞（照影）
序
詞（筆讀）

蘆 <small>あし</small>	名 <small>な</small>	運 <small>うん</small>	土 <small>ど</small>	一 <small>いち</small>	寢 <small>ね</small>	辻 <small>つじ</small>	眞 <small>まこと</small>	一 <small>いち</small>	奇 <small>き</small>	對 <small>たい</small>	風 <small>ふう</small>	風 <small>ふう</small>
の	和 <small>わ</small>		偶 <small>ぐ</small>		耳 <small>みみ</small>	淨 <small>じやう</small>	美 <small>み</small>	利 <small>き</small>	男 <small>おとこ</small>	鬨 <small>ごう</small>	流 <small>りう</small>	流 <small>りう</small>
一 <small>ひと</small>	長 <small>なが</small>		木 <small>き</small>		口 <small>くちう</small>	鐵 <small>てつ</small>	瑠 <small>る</small>					
ふ												
し	年 <small>とし</small>	命 <small>めい</small>	偶 <small>ぐ</small>	劍 <small>けん</small>	砲 <small>ぱう</small>	璃 <small>り</small>	人 <small>じん</small>	那 <small>な</small>	兒 <small>こ</small>	體 <small>たい</small>	魔 <small>ま</small>	佛 <small>ぶつ</small>
.....
三 四	二 七	一 五	一 六	一 七	二	七	六	五	五	六	六	三

年	雲	あ	さん	ひ	き	荷	つ	う	さ	風	五	術	付	雁	太	不	佐		
譜	の	が	な	と	く	葉	ゆ	す	ら	流	重	競	焼	坂	郎	渡	ケ		
	袖	が	き	り	の	盆	く	さ	ひ	微	塵	藏	塔	べ	刃	越	坊	安	島

四 三	四 五	四 四	四 三	四 二	三 八	三 七	三 七	三 五	三 四	三 五	三 五	二 六	二 七	二 六	二 五	二 五	二 四	二 三	二 二

風

流

佛

發端 如是我聞

上 一向專念の修業幾年

三尊四天王十二童子十六羅漢さては五百羅漢までを胸中に藏めて鈍小刀に彫り浮べる腕前に、運慶も知らぬ人は讃歎すれども鳥佛師知る身の心恥かしく、其道に志す事深きにつけておのが業の足らざるを恨み、爰日本美術國に生れながら、今の世に飛驒の工匠なしと云はせん事残念なり、珠運命の有らん限りは及ばぬ力の及ぶ丈を盡してせめては我が好の心に満足さすべく、且は石膏細工の鼻高き唐人めに下目で見られし鬱憤の幾分を晴らすべしと、可愛や一向專念の誓を嵯峨の釋迦に立し男、齡は何歳ぞ二十一の春。是より風は嵐山の霞をなぐつて陽な斷つ俳諧師が、蝶になれと祈る落花のおもしろきをも眺むる事なくて、見ぬ天竺の何の花彫りかけて永き日の入相の鐘に悲しむ程凝り固まつては白雨三條四條の塵埃を洗つて小石の面

はまだ乾かぬに、空さりげなく澄める月の影宿す清水に、瓜浸して食ひつゝ齒牙香と詩人の酒落る川原の夕涼み快きなも餘所になし、徒らに垣をからみし夕顔の暮れ残るを見ながら白檀の切り屑敷遣りに焼きて、是れも餘徳とあり難がるこそをかしけれ。顔の色を林間の紅葉に争ひて酒に煖めらるゝ風流の仲間にも入らず、硝子越しの雪見に昆布を蒲團にしての湯豆腐を粹がる徒黨にも加はられれば、まして島原祇園の艶色には横眼遣ひ一つせず、おのが手作りの辨天様に海流して餘念なく惚れ込み、琴三味線のあぢな小歌は聞きもせれど、夢の中にも緊那羅神の聲を耳にするまでの執心あれば、昆首竭摩の魂魄も乗り移らでやあるべき。かくて三年ばかり浮世を幕直に渡り行きければ、勤むるに追付く惡魔は無き道理、殊さら幼少より備はつての稟賦、雪を圓めて達摩を作り、大根を斬りて鷲の形を寫しゝにさへ、屢人を驚かせしに、修業の功を積みし上奮發の勇を加へしなれば、牙えし腕は愈々冴え、鋭き刀は愈鋭く、七歳の

初發心二十四の曉に成道して、師匠も是までなりと許すに、珠運は忽ち思ひ立ち、獨身者の氣樂さ、親譲りの家財を賣つてのけいざや奈良鎌倉日光に昔の工匠の跡訪はんと少し許の道具を肩にし、草鞋の紐の結びなれて度々解くるを笑はれながら、物のあはれも是よりぞ知る旅。

下 苦勞は知らず勉強の徳

汽車もある世に、さりとは修業する身の痛ましや、菅笠は街道の埃に赤うなつて肌着に風呂場の虱を避け得ず、春の日永き暇に疲れては蝶うら／＼と飛ぶに翼羨ましく、秋の夜は淋しき床に寢覺めて、隣りの齒ざしみに魂を驚かす。旅路のなげなき事、風吹き荒み、熱砂頻にぶつかる時、眼を閉ざてあゆめば、邪見の喇叭、氣を注げるがら／＼の馬車に膽ぢやみあがり、雨降り切りては新道のさくれ石足を噛むに生爪を割がして惱むを、脚窓の車夫法外の價を貪り、尙も並木で五割酒錢は天下の法だとゆする。仇もなさけも一日限りの、人情は薄き掛け蒲團に襪首さむく、待遇は冷やかな平の内に蒔蕪黒し。珠運素より貧しきには馴れても、加茂川の水柔らかなる所に生ひ立ちて、はじめて野越え山越えのつらさを覺えし草枕露に濡りて、

舊文の新刊は、感ずるところあり
や、四、青、ふ、れ、く、な、り、の、ま、ち、一、言、け、ん、と
す、る、こ、ろ、や、四、く、無、き、う、れ、く、な、り、の、ま、ち、
有、り、然、る、は、則、ち、試、一、句、を、通、へ、四、く
や、影、一、啼、鳥、聲、年、裏、の、変、一、鳥
や、ま、ま、雲、影、か、ま、ま、る、め、是、こ、こ
寂、ま、さ、へ、

旅立ち王ふ離別には、是を出世の御門出と義理で喻して雄々しき詞を、口に云はする必が眞情が、狭き女の胸に餘りて案じ過せば潤む眼の、涙が無理かと、粹ほど迷ふ道多くて自分ながらに思ひ分たす。うろ／＼する内日は立ちて愈々となり、義経後に男山八幡の守りくけ込んで愚など笑片類に叱られし昨日の聲はまだ耳に残るに、今、今の御姿はもう一里先か、エ、せめては一日路程も見透したきか役立ぬ此眼の腹立しやと、門邊に伸び上りての甲斐なき縁言それも尤なりき。一ト月過ぎ二ト月過ぎても此恨綿綿らう／＼として、筑紫等習ふ隣家の妓がうたふ唱歌も我に引き較べて絶ゆる事なく悲しきを、コロリン、チャンと済して貰ひ度しと無慈悲の借金取めが朝に晩にの掛合、返答さへも力無や、男松を離れし姫篇の、斯も世の風に廻るゝ者かと俯きて、横眼に交張りの袋戸に廣重が繪見ながら、悔しいにつけてゆかしき忍ばれ、早う歸つて下されと獨言口を洩るれば、利足も拂はず歸れとはよく云へた事と吠え付かれ、ア大きな聲して下さるな、あなたにも似合はぬ、と云ひさして、御腹には大事の／＼我子ではない顔見先からいというてならぬ方様の記念、唐土には胎教といふ事さへありてゆるがせなら

ぬ者と或夜の物語に聞かして此ありさまの口惜と腸を斷つ苦しさ。天女も五衰ぞかし、瑛瑛の櫛、眞珠の根掛いつか無くなりては華堂の美しかりける、儚ともまらず、身だしなみも懶くて、光ると云はれし色艶屈託に曇り、好みの衣裳數々彼に取られ是に易へては、着古しの平常衣一つ、何の燒かけの靈香薰すべき。泣き寄りの親身に一人の弟は、有つても無きに劣る賭博好き酒好き、おちぶれて相談相手になるべきならねば、頼むは親切な雇婆許り、あぢきなく暮らす中、月満ちて産聲美しく玉のやうな女の子、辰と名付けられしはあの花漬賣りなりと、是も昔は伊勢參宮の御利益に粹といふ事覺えられしき宿屋の親爺が物語に、珠運も木俵ならず、涙掃つて其後を問へば、御侍なされ、話の調子に乗つて居る内、爐の火が淋しうなりました。

第三 如是性

上 母は風に香の 進る梅

山家の御馳走は何處も豆腐湯波干鮭許りなるが、今宵はあなたが態々茶の間に御出掛にて、開化の若い方には珍らしく此无爺の話を冒頭から潰さずに御聞なさるが、快ければ、夜長の折

柄お辰の物語を御馳走に饒くりませう、残念なは去年ならばもう少し面白くあはれに申し上げて輕薄な京の人イハ是は失禮、優しい京の御方の涙を木曾に落させよう者な、惜しい事には前商一本缺けた所から風が洩つて此春以來御文章を讀むも下手になつたと、菩提所の和尚様に云はれた程なれば、ウガテとかコガシとか申す者は空抜にしてと斷りながら、青内寺煙草二三服馬士張りの煙管にてスバリ／＼と長閑に吸ひ、無遠慮に掃さく／＼て立つ灰の雪等に落ち来るをぼんと擲きつ、どうも私幼少から讀み本を好きました故か、斯いふ話を致しますると圖に乗つてをかしな調子になるさうで、人我の差別も分り憎くなると孫共に毎度笑はれまするが御聞づらくも癖ならに癖ぞと御免なされ。さてそのち室香はお辰を可愛しと思ふより、情には鋭き女の勇氣をふり起して、昔取つたる三味の撥ふた／＼と握つても、色里の往來して白痴の大靈、生な通人めらが間の周旋、浮れ車座のまばりをよくする油さし商賣は嫌なりと、此度は象牙を柁に易へて子供を相手の音曲指南、藝は素より鍛錬を積みたり、身持はみだらならず、且ば我子を育てんといふ氣の張あれば、おのづから弟子にも親切あつく、良い御師匠様と世に

心細き夢おほつがなくも馴れし都の空を遶るに、無残や郭公待ちもせの耳に眠りを切つて破れ月の罅隙に、我は顔の明星、光りきらめくうら悲しさ。或は柳散り桐落ちて無常身に染みる野寺の鐘、つくく生命は森を縫ふ稲妻のいと織き難き者と観するに付けても志願を遂ぐる道遠しと、意馬に鞭打ち勵ましつ、漸く東海道の名利古社に神像木佛樂欄間の彫りまで見巡りて鎌倉東京日光も見たり。是より最後の樂は奈良ちやと急ぎ登り行く碓氷峠の冬最中、雪たけありて樹寒き淺間下しの烈しきにめげず應ぜず、名に高き和田驪尻を藁沓の底に踏み蹂り、木曾路に入りて日照山、棧橋寢覺後になし須原の宿に着きにけり。

第一 如是相

書けぬ所が美しさの第一義諦

名物に甘き物ありて、空腹に須原のとろろ汁殊の外妙なるに、飯幾杯か滑込ませたる身體を此儘寢さするも毒とは思へど爲る事なく、道中日記註け終ひて、のつそつしながら煤びたる行燈の横手の樂書を讀めば山梨縣士族山本勘介大江山退治の際一泊と兎筆の跡、さては英雄殿も

ひとり旅の退屈に閉口しての御わざくれ、をかしく許りかあばれに覺えて、初對面から膝をくづして語る炬燵に相宿の友もなき珠運、微なる埋火に脚を烘り、つくねんとして櫓の上に首投げかけ、うつら／＼なる所へ此方をさして來る足音、しとやかなるは踵に龜裂させしきき程の少女ならず、御免なされと模越しのやさしき聲に胸ときめき、爲かけた欠伸を半分噛みて何とも知れぬ返辭をすれば、唐紙する／＼と開き、丁寧に辭義して、冬の日の木曾路、嘸や御疲に御座りませうが、御覽下され是は當所の名譽花漬、今年の夏のあつさをも越して今降る雪の眞最中、色もあせず居ります梅桃櫻のあだくらべ、御意に入りましたら蔭膳を信濃へ向けて人知らぬ寒さを知られし柳の御方へ御土産に、と心憎き愛嬌言葉、商賣の艶とてなまめかしく、賣物に香を添ふる口のきふりに利發あらはれ、世馴れて濫らず、さりとて輕佻にもなきとりなし、持ち來りし包、靜かにひらきて、二箱三箱差し出す手つきのしをらしさに、花は餘所になりてうつ／＼と覗き込む此方の眼を避けて背向くる顔、折から除洩る風に燈火動きて明らかに見えざるにさへ隠れ難き美しさ。我折れ深山に是は何物。

第二 如是體

粹の父の子實の母の子

見て面白き世の中に聞て悲き人の上あり。昔は此京にして此妓ありと評判は八坂の塔より高く、其名は音羽の瀧より響きし宝香と云へる藝子ありしが、さる程に地主權現の花の色盛者必衰の理をのがれず、梅阿何某と呼ばれし中國浪人のきり／＼として男らしきに契を込め、淺からぬ中となりしより、よその戀をば最良にする客もなく、よぶ人の絶々になるにつけても、よしやわざくれ身は朝顔の、と短き命拾撥にしてからは恐ろしき者にいふなる新微組何の怖い事なく、三筋取つても一筋心に君さま大事と、時を憚り世を忍ぶ男を隠匿し半年あまり、苦勞の中にも助くる神の結び玉ひし縁なれや、嬉しき情の風を宿して帯の祝ひ芽出度悦びしが、舒びし眉間に忽ち皺の浪立ちて、騒がしき鳥羽伏見の戦争。さては方様の憎い程の氣強さ、爰なり丈夫の志を遂ぐるばと、一ト群の同志を率ゐて官軍に加はらんとし玉ふな、止むるにあらねど生死争ふ修羅の巷に踏入りて、雲のあなたの吾妻路、空寒き奥州にまで、歸る事は云はずに

り。七藏衣裳立派に着飾りて顔付高慢く、無沙汰詫びるにもあらで、誇り氣に今の身となりし本末を語り、女房に都見物致させかたんに御近付に連れて参つた、と大風なる言葉の尾につきて、下ぐる頭も低くしとやかに、妾めは吉と申す不束な田舎者、仕合せに御縁の端に續がりました上は何卒末長く御眼かけられて御不勝ながら眞實の妹とも思しめされて下さりませと、演ぶる口上に様直なる山家育ちのたのもしき所見えて室香嬉敷、重き頭あげてよき程に挨拶すれば、女心の柔なる情ふかく、姉様の是ほどの御病氣、殊更御幼少のもあるを他人任せにして置きまして、祇園清水金銀閣見たりと何の面白かるべき、妾は是より御傍さらず御看病致ししよ、と云へば七藏顔膨らかし、腹の中には餘計なと思ひ乍ら、ならぬとも云ひ難く、それならば家も狭し、おれ丈クは旅宿に歸るべし、と云つて其晚は夜食の膳の上、一酌の酔に浮かれての漫行き、鼻歌に酒の香吐き、川風寒き千鳥足、亂れてぼんと町が川端あたり止まりし事あさまし。室香はお吉に逢ひてより三日目、我子を委ねる處を得て氣も休まり、爰ぞ天の恵み、臨終正念違はず、安らかなる大往生、南無阿彌陀佛は嬌喉に粹の果を送り三重

鳥部野一片の烟となつて御法の風に舞ひ扇、極樂に歌舞の女菩薩一員増したる事疑ひなしと様子知りたる和尚様隨喜の涙を落されし。お吉其儘あるべきにあられば雇ひ婆に錢やつて暇取らせ、色々片付くるとて持佛棚の奥に一つの包物あるを、不思議と開き見れば様々の貨幣合せて百圓足らず、是はと驚きて態々見るに、我身萬一の時お辰引き取つて玉はる方へせめてもの心許りに細き暮らしの中より一錢二錢積み置きて是をまゐらすなりと包み紙に筆の跡、讀みさして身の毛立つ程悲しく、是迄に思ひ込まれし子を育てずに置かるべきかと、遂に五歳のお辰を連れて夫と共に須原に戻りけるが、因果は壺皿の縁のまはり、七藏本性をあらはして不足なき身に長半をあらそへば、段々惡徒の食物となりて瘦せる身代の行末を氣遣ひ、女房うるさく異見するに、なんの女の知らぬ事、びんからきりまで心得て穴熊毛綱の手にかかる我なられば、負くる許りの者にはあらず、と駈出して三日歸らず、四日歸らず、或は松本善光寺、又は飯田高遠あたりの賭場あるき、負くれば尙も盜賊に追ひ錢の思を盡し、勝てば飯盛に祝ひ酒のあぶく錢を費す。此癖止めて止まらぬ春駒の足極早く、坂道を飛び下りるより速やかに、親戚

りの山も林もなくなりかつて、お吉心配に病死せしより、齡は僅に十の冬、お辰浮世の悲みを知りそめ、叔父の歸らぬを困りて途方に暮れ居たるに、近所の人々、彼奴め長久保のあやしき女の許に居續して妻の最後を餘所に見る事情しとてお辰をあはれみ助け葬式済ませけるが、七藏其後愈身持放埒となり、村内の心ある者には爪はじさせらるゝなまかまはず、遂に須原の長者の屋敷も、空しく庭中の石燈籠に美しき苦を添へて人手に渡し、長屋門のうしろに大木の樅の梢吹く風の音ばかり、今の耳にも替らずして、直其傍なる荒屋に住ひぬるが、さても下駄の齒と人の氣風は一度ゆがみて一代なほらぬもの、何一トつ満足なる者なき中にも酒盃のみ缺けず、柴木へし折つて箸にしながら象牙の骸骨に誇るこそ思なれ。かゝる叔父を持つ身の當惑、御獄の雪の肌清らかに、石楠の花の顔氣高く生れ付ても、お辰を嫁にせんとしむ者、七藏と云ふ名を聞いては、山拔け雪流より恐ろしく、おぞ毛ふるつて思ひ止れば、二十を越して痛まじや生娘。晝は賃仕事に肩の張るか休むる間なく、夜は宿中の旅館屋廻りて、元ば××かも知れぬ客途にまで廻られながらの花漬賣、歸りば一日の苦勞の塊り、銅貨幾箇を酒に易へて、御

用あられて爰に生計の絲道も明き、細いながら
炊煙絶えせず安らかに日は送れど、稽古する小
娘が調子外れの金切聲、今も昔わいワツとお
辰のなき立つ事の屢なるに胸苦しく、苦勞ある
身の乳も不足なれば、思ひ切つて近き所へ里子
にやり、必死となりて稼ぐありさま、餘所の眼
にさへ是を見て感心なと泣きぬ、それにつれな
きは方様の、其後何の便もなく、手紙出さうに
も當所分らず、まさかに親子、笈かけて順禮
にも出られれば逢ふ事は夢にばかり、覺めて考
ふれば口をきかれなかつたばもしや流彈にでも
中られて亡くなられたか、茶絶鹽絶きつとして
祈るを御存知ない筈も無からうに、神様も戀し
らすならあり難くなし、と愚癡と一緒にこぼる
る涙、流れて止らぬ月日をいつも、憂に明か
し恨に暮らして我齡の寄るは知られど、早い
者お辰はちよろ／＼歩行。折ふしは里親と共に
來てまはらぬ舌に菓子れだる口元、いとしや方
様に生き寫しと抱き寄せて放し難く、遂に三歳
の秋より引き取つて膝元に育つれば、少しは紛
れて、貧家に温き日のあたる如く、淋しき中
にも貴き笑の唇に動きしが、さりとては此子の
愛らしきを見ようともし玉はざるか、歸られざ
るつれなき、子供心にも親は戀しければこそ、

父様御歸りになつた時は斯して爲る者ぞと教へ
し御辭誼の仕様能く覺えて、起居動作のしとや
かさ、能く養けたと覺めらるゝ日を待つ居るに、
何處の龍宮へ行かれて乙姫の傍にでも居らるゝ
事ぞと、少しは邪推の恰氣萌すも、我を忘れら
れしより子を忘れられし所にも起る事、正しき
女にも切なき情なるに、天道怪しくも是を惠ま
す。運は賽の眼の出所分らぬ者にて、お辰の叔
父、ぶんなげの七と譯名取りし蕩樂者、男は好
けれど根性圖太く、誰にも彼にも疎まれて大の
字に寢たとて一坪には足らぬ小さき身を、廣き
都に置きかれ、漂泊あるきの渡り大工、段々と
美濃路を歴て、信濃に來り、近しも須原の長者
何がしの隠居所作する手傳ひ、柱を削れ羽目板を
付けろと棟梁の差圖には従へど、墨繩の直な
に倣はぬ構造、お吉様と呼ばせらるゝ秘藏の嬢
様にやさしげな濡を仕掛け、鉤屑に墨窓で思を
云はせてもしたるか、とう／＼そのふしてと
んでもなき穴掘り仕事。それも縁なら是非なし
と愛に暗んで男の性質も見分けぬ長者のえせ
粹三國一の狼藉取つて安堵したと知らぬが
佛様に其年ならし跡は、山林家藏縁の下の糠
味噌瓶まで譲り受けて、村中寄合ひの席に肩
づかせての正座、片腹痛き世や。あはれ室香

はむら雲迷ひの野分吹く頃、少しの風邪に冒され
てより枕あがらず、秋の夜冷やかに蟲の音遠ざ
かり行くも觀念の友となつて獨り寢覺の床淋し
く、自ら露霜のやがて消ぬべきを悟り、お辰素
性のあらまし顛ふ筆のにじむ墨に覺えなく認め
て守り袋に父が書き捨の短冊一トひらと共に藏
めやりて、明日をもしぬ我がなき後頼りなき
此子、如何なる境界に落つる共加茂の明神も御
憐愍あれ、其人命あらば巡り合せ玉ひて、藝子
も女なり、優しき心入れ嫁しかりきと、方様の
一言、草葉の蔭に聞せ玉へと、遙拜して閉ぢた
る眼を開けば、燈火傳に螢の如く、弱き光りの
下に何の夢見て居るか罪のなき寝顔、せめても
う十許りも大きくして銀香霽を結はしてから死
にたしと袖を噛み忍び泣く時、お辰驚されてア
ッと聲立て、母様痛いよ／＼、私の父様はまだ
歸らないかえ、源ちやんが打つから痛いよ、父
の無いのは犬の子だつてぶつから痛いよ。オ、
道理ちやと抱き寄すれば、其儘すや／＼と睡る
いぢらしさ。ア、死なれぬ身の疾病、是ほどな
さげなき者のあらうか。

下 子は岩蔭に咽ふ清水よ
格子戸がら／＼とあけて、締める音は静な

りながらあまりの慕はしき、忘れぬ殊勝さ、かゝる善女に結縁の良き方便もかな。噫思ひ付たりと小行李とくく小刀取出し、小さき磁石に鋒尖鋭く礪き上げ、頓て櫛の棟に何やら一日掛りに彫り付、紙に包んでお辰来らばどの様な顔するか待ちかけしは、懸は知らずの様様めをかしき所業あてが外れて其晩吹雪向やます、女の何としてあるかるべきや。されば流れざるに水の溜まる如く、逢はざるに思ひ積りて愈なつかしく、我は薄暗き部屋の中、煤びたれども天井の下、赤くはなりてもまだ破れぬ畳の上に坐し、去歳の春、すが漏したるか、怪しき汚染は瀧の絲を亂して書機（カキモノ）の李白（カキモノ）の頭に跳けど、たて付よければ身の毛立程の寒さを透間に唧ちもせず、兎も角も安樂にして居るにさへ、うら寂しくて自ら悲を知るに、ふびんや少女の、あばら屋といへば天井も無かるべく、屋根裏は柴焼く煙りに塗られて怪しげに黒く光り、火口の如き煤は高山の樹にかゝれる猿屋柳のやうにさがりたる下に、あのしなやかなる黒髪引詰に結うて、陽見えたるぼろ畳の上に、香露凝る半にして壁倚頼らかな纖細な身體を厭ひもせず、なまやかにおとなしく坐して居る事か、人情なしの七藏め、大方は小鼻怒らし大胡坐かきて爐

の傍に、噫、憎さげの顔の見ゆる様な、藍格子の大どてら着て、十分酒にも暖まりながら、分を知らればまだ足らず、爐の隅に轉げて居る白鳥徳利の寐姿思々しきうに睨めたる眼シロリと注ぎ、裁縫に急がしき手を止めさせて無理な吩咐、跡引き上戸の言葉は針、とがくしきに胸を痛めて答ふるお辰は薄着の寒さに慄み厭うるに用捨もあらず風、邪見に吹くを何防ぐべき骨露れし壁一重、たるみの出来たる筵屏風、あるに甲斐なく世を經れば貧には遅も七分凍りて三分の未練を命に生さるか、噫と許りに夢現分たす珠連は歎ずる時、兩月に雪の音さらくして、火は消えざる炬燵に足の先冷たかりき。

第五 如是作

上 我を忘れて而生其心

よしや背に暖ならずとも旭日きら／＼ときしのぼりて山々の峰の雪に移りたる景色、眼も眩む許りの美しさ、物腰き西洋の塵も此處迄は飛んで来ず、清淨潔白實に頼母敷岐蘇路、日本の古風残りて軒近く鳴く小鳥の聲、是も神代を其儘と、詰らぬ者をも面白く感ずるは、昨宵の嵐去りて跡なく、雲の切れ目の所々、青空見

ゆるに人の心の悠々とせし故なるべし。珠連梅干湯茶に夢を拭ひ、朝飯平常より甘く食ひて泥を踏まぬ雪香輕く、飄々と立出てしが、折角吾志、彫りし櫛與へざるも残念、家は宿の爺に聞て街道の傍を僅折り曲りたる所と知れば、立ち寄りて窓からでも投込まんと段々行くに、果せる哉櫛の木高く聳えて外圍ひ大きく、如何に須原の長者が昔の住居と思はるゝ立派なる家の、横手に、此頃の風吹き曲めたる荒屋あり。近付くまゝに中の様子を伺へば、寥然として人のありとも想はれず、是は不思議と、やぶれ戸に耳を付て聞けば、竊々と囁くやうな音、愈あやしく尙耳を澄せば吸り泣する女の聲なり。さては邪見な七藏め、何事したるか、と彼此さがして大きな節の抜けたる所より眼けば、鬼か、悪魔か、言語道斷、當世の摩利夫人とさへ此珠連が尊く思ひし女を、取つて抑へて何者の仕業ぞ、酷らしき繩からげ、後の柱のそけ多きに手荒く縛し付け、薄汚なき手拭無遠慮に丹花の唇を掩ひし心無さ。元結空にはじけて涙の雨の玉を貫く柳の髪のはげ長く垂れて顔にかゝり、衣引まくれ胸あらはに、膚は春の曙の雪、今や消入らん許り。見るから忽ち肉動き肝躍つて、分別思案もあらばこそ、兩戸蹴開き飛込ん

淋しう御座りましたらう、御不自由で御座りましたらうと機嫌取りどり笑顔してまめやかに仕ふるにさへ、時々は無理難題、先度も上田の姉妹になれと七めの云ひ掛りしよし。さりとては胴怒な男め、生餌食ふ鷹さへ咬め鳥は許す者を。

第四 如是因

上 忘れぬのが根本の情

珠運は種々の人のありさま何と悟るべき者とも知らず、世のあはれ今宵覺えて屋の角に鳴る山風の寒さ一段身に染み、胸痛きまでの悲しさ、我事のやうに鼻詰まらせながら亭主に禮云ひておのが部屋に戻れば、忽氣が付くは床の間に二タ箱貰つたる花漬、衣脱きかけて轉りと横になり、夜着引きかぶればありく、と浮ぶお辰の姿首さし出して眼をひらけば花漬、閉づればおもかげ、是はどうぢやと呆れてまた候眼をあけば花漬、ア、是を見ればこそ浮世話と思ひの種となつて寢られざれ、明日は馬籠峠越えて中津川送行かんとするに、能く休までば叶はじと行燈吹き消し意な靜むるに、又しても其美形、エ、馬鹿なと活と見ひらき天井を睨む眼に、此度は花漬無けれど、闇はあやなしあやにくに梅の花

の香は綺を洩れてする／＼と枕に通へば、何となくときめく心な種として咲きも咲きたり、桃の姫櫻の色、さては薄荷菊の花まで今眞盛りに、蜜を吸はんと飛び来る蜂の羽音もどこやらに聞ゆる如く、耳さへいらぬ事に迷つては愚なりと、險堅く閉ち、極巻頭を蔽ふに、さりとては怪しからず麗しき幻の花輪の中に愛嬌を湛へたるお辰、氣高き計りか後光膝朧とさして白衣の觀音、古人にも是程の彫なしと好な道に恍惚となる時、物の響は冴ゆる冬の夜、臺所に荒れ鼠の騒ぎ。憎し、寢られぬ。

下 思ひやるより増長の愛

裏付股引に足を包みて頭巾深々とかつぎ、然も下には帽子かぶり二重とんびの扣紐惣掛になり、其上首筋胸の周圍、手拭にて動かぬ様縛り、鹿の皮の袴に脚絆油斷なく、足袋二枚はきて藁香の爪先に唐辛子三四本足を焼かぬ爲押し入れ、毛皮の手甲して、若も時の助けに足櫃まで背中に、用意十二分にしてさへ此大吹雪は容易の事にあらず。吼立つる天津風、山々鳴動して、峰の雪、梢の雪、谷の雪、一齊に舞立つ折は一寸先見え難く、瞬間に路を埋め、腰を埋め、鼻の孔まで粉雪吹込んで水に溺れしよりまだま

だ苦し。ましてや用意おろかなる都の御客様なぞ、命惜くば御逗留なされと朴訥に仁に近き親切なるほど話聞てさへ恐ろしければ、珠運別段急ぐ旅にもあらず。されば今日丈の厄介にたりませう、と尻を炬燵に据ゑて、退屈か輪に吹く煙草のけぶり、ぼんやりとして其邊見回せば端なく眼につく栢槨のさし櫛。扱は花漬賣が心づかず落し行きしかと手に取るとたん、早や其人床しく、昨夕の亭主が物語今更のやうに思ひ出されて、叔父の憎きにつけ世のうらめしきに付け、何となく唯お辰可愛く、おれが神佛なら、七藏頓死させて行方しれぬ親にはめぐりあはせ、宮内省よりは貞順善行の縁綴紅綬紫綬、あり丈の褒章頂かせ、小説家には其あはれおもしろく書かせ、祐信長春等呼び生かして美しさ十分に寫させ、そして日本一大々盡の嫁にして、あの維縹の木綿着を綾羅錦緞に易へ、油氣少きそゝけ髪に極上々正眞伽羅梅檀の油付させ、握り飯ほどな珊瑚珠に鐵火簪ほどな黄金脚上げてさゝせてやりたいものを、神通なき身の是非もなし。家財賣つて退けて懷中には猶三百兩餘あれど、是は我身も立る基、道中にも片足満足な草鞋は捨てぬくらゐ儉約して居るに、紺紋の半掛一トつたりとも空に恵む事難し。さ

た其肢體を縛つてと云ふのでない註文ならば天窓を破つて工夫も仕ようが一體まあどうした譯か、強て聞くでも無けれど此儘別れては何とやら佛作つて魂入れずと云ふ様な者話してよき事ならば聞か上でどうなりと有丈の力喜んで盡しませう、と云はれてお辰は、叔父にさへあさましき難題云ひ掛けらるゝ世に赤の他人で是ほどの仁慈胸に堪へてぞつとする程嬉し悲しく、咽せ返りながら、屹と思ひかへして、段々御親切、有り難うは御座りまするが妾身の上の話は申し上げる申さぬでござりませぬが申されぬつらさを御察し下され。眼上と折り合れば懲らしめられた許の事、詩々と暗闇の恥を申してあなたの様な情知りの御方に淺基な心入と愛想つかさるゝもおそろし。さりとして夢さる御厚意がないがしろにするにはあらず、やさしき御言葉は骨に饅んで七生忘れませぬ。女子の世に生れし甲斐今日知りて此嬉しさ、果敢なや終り初物、あなたは旅の御客、逢ふも別れも旭日があつた木梢離れぬ内。せめては御荷物なりとかつて三月野、馬籠あたり迄御肩か休ませ申したけれどそれも叶はず。斯云ふ中にも叔父様歸られては面倒、どの様な事申さるゝかも知れませぬ程にすぎなく申すも御身の爲、御

迷惑かけては済みませぬ故どうか御歸りなされて下さりませ、エ、千日も萬日も止めなき願ひありながら、と跡の一句は口に洩れず、薄紅となつて顔に露るゝ可愛さ。珠運の身になつてどうふりすてらるべき。假令叔父様が何と云はれうが、下世話にも云ふ乗りかゝつた船、此儘左様ならと指を衝へて退くば、なんば上方産の臍玉なしでも仕憎い事、殊更最前も云うた通りぞつこん善女と感じて居る御前の愛目余所にするは、一寸の蟲にも五分の意地が承知せぬ。御前の云はぬ譯も後先を考へて大方は分つて居ること、兎も角も私の云事に付たがよい、惡氣でするではなし、私の詞を立て呉れても女のするでもあるまい。斯様しましよ、是からあの正直律義は口つきにも聞ゆる龜屋の亭王に御前を預けて、金も少ば入るだらうがそれも私がどうなりとして埒を明けましょ。親類でも無い他人づらが要らぬ差出た才覺と思はるゝか知らぬが、妹といふ者持ても見たらば斯も可愛い者であらうかと思ふ程いとしてならぬ御前が眼に見えた艱難の淵に沈むを見ては居られぬ。何私に善根爲たがる慾ぢやと笑うて氣を大きく持つがよい、さあ御出と、取る手。振り拂はば今川流、押り占なば西洋流か、お辰はどちらにもあ

らざりし所、無類珍重嬉しかりしと珠運後に語りし由なるが、それも其時は諛なりしなるべし。

下 弱に施すに能以無畏

コレ吉兵衛、御説義流の御説諭をおれに聞かせるでもなからう、御氣の毒だが道理と命と二つならべてぶんなげの七様、昔は密男扱帶も仕てのけたが、おとなしくなつて我の姪か、賣るのではない養女だか妾だか知らぬが百兩で縁を切て呉れろといふ人に違る許の事、其をお辰が間夫でもあるか、小間癒れて先の知れぬ所へ行か否だと吼顔かいて逃げても仕さうな様子だから買手の所へ行く間一寸縛つて置たのだ、珠運とかいふ二才野郎がどういふ續きで何の故障だ。七・七・七。靜にしろ、一體貴様が分らぬわ、貴様の姪だが貴様と違つて宿中での譽者、妙齡になつても白粉一トつ付けず、盆正月にもあらゝ木の下駄一足新規に買はうでもないあのお辰、叔父なればとて常不斷、能も貴様の無理を忍んで居る事ぞと、見る人は皆、商切貴様に嚙んで涙をお辰に饅すわ。姑に凍飯食はするやうな冷たい心の姪も、お辰の話聞ては急に角を折つてやさしく夜長の御慰みに玉子湯でもして

で、人間の手の四五本なき事もどかしと焦立つまで忙はしく、手拭を棄て、繩を解き懷中より櫛取り出して亂れ髪梳けと渡しながら冷え凍りたる肢體を痛ましう、思はすしかと抱き寄せて、嘸や柱に背中がと片手に撫て擦るを、女あきれ兎角の詞はなく、サツと此方の顔を見つめるにきまり惡くなつて一足離れ退くとたん、其邊の壘雪だらけにせし我香にハツと氣が注ぎ、譯も分らず其まゝ外に逃げ出し、三間ばかり夢中に走れば雪に滑りてよろよろ、あやや膝突かんとしてドツコイ、是は仕たり、蝙蝠傘手荷物忘れたかと跡もどきする時、お辰門口に來り袖を捉へて引くにふり切れず。今更餘計な業仕たりと悔むにもあらず、恐るゝにもあられど、一生に覺なき異な心持するにうろつきて、土間に落散る木屑なんぞの詰らぬ者に眼を注ぎ、上端に腰かければ、しとやかに下げたる頭よくも擧げ得ず、貴方は龜屋に御出なされた御客様、わたくしの難儀を見かれて御救ひ下されたは眞にあり難けれど、到底通れぬ不仕合と身をあきらめては、諦めなかつた先程までの愚が却つて口惜う御座りまする、譯も申さず斯う申しては定めて道理の分らぬ奴めと御さげすみも産しうござりまするし、御慈悲深ければこそ繩まで解

て下さつた方に御禮も能は致さず、無理な願を申すも眞に苦しうは御座りますが、どうぞわたくしめ元の通りお縛りたされて下さりませ、と案の外の言葉に珠連驚き、是はくゝとんでもなき事、色々入り込んだ譯もあらうがさりとてはつれなき御頼み、縛つた奴を打てと云ふのならば瘦腕に豆許の力瘤も出ませうが、いとしていとして、一日二晩絶間なく感心しつめて天晴菩薩と信仰して居る御前様を、縛ることは赤梅檀に鉛細工の刀で彫をするよりまだ難し、一昨日の晩忘れて行かれたそれその櫛を見て合點なされ、一體は龜屋の亭主に御前の身の上あらまし聞て、失禮ながら悠然な事や、私が神か佛ならば、斯もしてあげたい彼もしてやり度と思ひましたが、それも出来ねばせめては心計、一日肩を凝らして漸く其形をしたも、若や御髪にさして下さらば一生に交なき名譽、嬉しい事と、態々持參して來て見れば、他にならぬ今のありさま、出過ぎたか知りませぬが堪忍がならで繩も手拭も取りましたが、惡いとあらば何とでも謝罪しましよ、元の通りに縛るとはなさけなし、鬼と見て我を御頼みか、金輪奈落其様な儀は御免蒙る、と心清き男の強く云ふをお辰聞ながら、櫛を手にして見れば、

ても美しく彫りに彫りたり、厚は僅に一分餘り、幅は漸く二分許り、長さも左のみならざる棟に、一重の梅や八重櫻、桃ばまだしも菊の花、薄荷の花の眼も及ばぬまで細きを浮き彫にして香ふ許り、そも此人は如何なればかかる細工をする者ぞと思ふに連れて腫は通ひ、竊に様子を伺へば、色黒からず、口元ゆるます、眉濃からずして末秀で、眼に一點の濁りなく、形の外におのづから賤しからぬ株露はれて、其の親切なる言葉、そもや女子の嬉しからぬ事か。

中 仁はあつき心念口洩

身を諦めてはあきらめざりしか口惜とは云はるれど、笑ひ顔してあきらめる者世にあるまじく、大抵は裏商噛みしめて思ひ切る事ぞかし、到底通れぬ不仕合と一概に悟られしはあまり浮世を恨みすぎた云ひ分道理には合つても人情には外れた言葉が、御前のその美しい唇から出るも、思へば苦しい仔細があつてと察しては、御前の心も大分は見えていちらしく、エ、腹立しい三世相、何の因果か誰が作つて、花に蜘蛛の巣、お前に七歳の縁ぢややと、天道様まで憎うてならぬ此珠連、相談の敵手にもなるまいが幸い背中は孫の手に頼めぢや、なよくとし

れて、是は是は、婚禮も済まぬに。ハテ誰が婚禮。知れた事お辰が。誰と。冗談は置玉へ貴郎ならで誰と云れてカッと赤面し、乾きたる舌早く。御亭主こそ冗談は置玉へ、私約束したる覺なし。イヤ怪しからぬ、野暮を云はるゝ。都の御方にも似ぬ、今時の若者がそれではならぬ、さりとは百兩投出て七藏にグツとも云はせなかつた捌き方と違つておほこな事、それは誰しも羞かしければ其様にまぎらす者なれど、何も紛らすに及ばず、爺が身に覺あつてチャンと心得てあなたの思はく圖星の外れぬ様致せばおとなしく御待なされ、と何やら獨呑込の様子、合點なられば。是御亭主勘違ひ致さるゝな、お辰様をいとしところ思ひたれ、女房に爲ようなぞとは一厘も思はず、忍びかれて難儀を助けたる許の事、旅の者に女房授けられては甚だ迷惑。ハ、ハア、何の迷惑、器量美しく、學問音曲のたしなみは無くとも縫針暗からず、女の道自然と辨へておとなしく、殿御を大事にする事請合のお辰を迷惑とは、兩柱の御神以來圖ない議論、それは表面、眞を云へば御前の所行も曰くあつてと察したば年の功、チョン鬚を付けて居ても粹ぢや、實はおれもお前のお辰に惚れたも善く惚れた、お辰が御前に惚れたも善く惚れた

と當世の惚れ様の上手なに感心して、嬬とも相談して支度出来次第婚禮さする積ぢや。是珠連年寄の云ふ事と牛の轍外れさうで外れぬ者ぢや。お辰を女房にもつてから奈良へでも京へでも連れ立て行きやれ。おれも昔は脇差に好みをして、嬬も鏡を懷中してあるいた頃、一世一代の贅澤に義仲寺をかけて六條様参り一緒にしたのが、旅ほど鳴が可愛うておもしろい事はないぞ。いまだに其頃を夢に見て後で話に、此間も嬬に眞夜中頃入齒を飛出させて笑つたぞ。コレ珠連、ホイ是は仕たり、孫でも無かつたに。と罪のなき笑ひ顔して綺麗なる天窓つるりとふでし。

中 實生二葉は土塊を抽く

我今まで戀と云ふ事爲たる覺なし。勢州四日市にて見たる美人三日眼前にちらつきたるが其は顔に黒痣ありてそのところに白毫を付けなばと考へし也。東京天王寺にて菊の花片手に募参りせし艷女、一週間思ひ詰めしが是も其指つきを吉祥莫持せ玉ふ鬼子母神に寫してはと工夫せし也。お辰を愛でしは修業の足しにとはあらざれど、之を妻に妾に情婦になどせんと思ひしにはあらず、強ひて云はゞ唯何となく愛でし勢

に乗りて百兩は興へし耳、潔白の我心中を付る事出来ぬの翁めが要らざる粹立馬鹿々々し、一生に一つ珠連が作意の新佛體を刻まんとする程の願望ある身の、何として今から妻など持つべき、殊にお辰は叔父さへなくば大盡にも望まれて有福に世を送るべし。人ば人、我は私の思はくあり。と決定し、置手紙にお辰宛て少許の思を枷に御身を娶らんなどする賤しき心は露持たぬ由を認め、跡は野となれ山路にかゝりてテクテク歩行。さても變物、此男木作りかと譏る者は肉團奴才、御釋迦様が女房捨て山籠せしは、者婆もヒを投げた癪病、接吻の唇ポロリと落しに愛想盡かしてならんなど疑ふ輩なるべく、尊し、尊し、銀の猫捨てた所が西行なりと喜んで譽むる輩、是も却つて雪のふる日の寒いのに氣が付かぬ詮義ならん。人間元より變な者、目盲ひてから其昔拜んだ旭の美しきを悟り、巴里に住んでから澤庵の味を知るよし。珠連は立鳥の跡ふりむかず、一里あるいた頃不圖思ひ出し、二里あるいた頃珠連様と呼ぶ聲、まさしく其人と後見れば何もなし。三里あるいた頃、もしえと袂取る様子、嬬にお辰と見れば又人も居らず、四里あるき、五里六里行き、段々と遠くなるに連れて迷ふ事多く、遂には其顔見たくなりて寧

上げませうかと老人の機嫌を取る氣になるぞ。それを先度も上田の女衞に渡さうとした人非人め。百兩の金が何で要るか知らぬが、あれ程の善い女を金に易へらるゝ者と思つて居る貴様の心が鄙しい。珠運といふ御客様の仁情が半分汲めたならそんな事云はずに有難涙に咽びさうな者。オイ、龜屋の旦那、おれとお吉と婚禮の媒妁役して呉れたを恩に着せるか知らぬが、貴様は止して下され。七七四十九が六十になつてもあなたの御厄介にならうとは申しませぬ。お辰は私の姪、あなたの姪ではなしさ。きりきり此處へ御出しなされ。七が眼尻の上らぬうち素直になされた方が御爲かと存じます。それともあなたば珠運とかいふ奴に頼まれて口をきく許りぢや、おれは當人ぢや無ければ取計ひ兼ねと仰やるならば其男に逢ひましよ。オ、其男御眼にかゝらうと珠運立出でつくぐと見れば、鼻筋通りに眼つきりしく、腮張りて一癖確にある悪者。膝すり寄せて肩を怒らせ、珠運とか云ふ小二才はおのれだな、生弱々しい顔をして能もお辰をかどわかした、若いには似似感心な腕。併し若い、關鶏の前では地鶏はひるむわ。身の分限を知らず尻尾をさげて四の五のなしにお辰を渡して降参しろ。四の五のなしと

は結構な仰せ、私も手短く申しませうなら、お辰様を賣らせたくなければ御相談。ふざけた囂語は置いてくれ。コレ七、靜に聞け、どうか賣らずと濟む工夫を、と云ふなも待たず。全體小癩な旅鳥と振りあぐる拳。アレと走り出るお辰、吉兵衛も共に止めながら、七藏、七藏、扱も其方は智慧の無い男、無理に賣らずとも相談のつきさうな者を。フ、相談付かぬは知れた事、百兩出すなら呉れてもやらうが、とお辰を捉へ立上る裙を抑へ、吉兵衛の云ふ事をまあ下に居てよく聞け、人の身を賣買するといふは今日の理に外れた事、娼妓にするか妾に出すか知らぬが。エ、喧擾しいわ老耄、何にして食はうがおれの勝手、殊更内金二十兩まで取つて使つて仕舞つた、變改ばとても出来ぬ、大きに御世話、御茶でもあがれ。とあくまで罵り、小鬼攫む鸞の眼ざし恐ろしく、龜屋の亭主も是までと口を噤むありさま、珠運口惜く、見ればお辰はよりどころなき朝顔の嵐に逢ひて露飽く、此方に向ひて言葉はなく深く禮して叔父に付添立出る二々足、三足め、又後ふり向きし其あはれさ。八幡命かけて堪忍ならずと珠運七を呼留め、百兩物の見事に投出して、亭主お辰の驚くに關はず、手續油斷なく此悪人と善女の縁を切りてめでた

しめてたし、まづは龜屋の養女分となしぬ。

第六 如是緣

上 種子一粒が雨露に養はる

自分妄狂しながら息子に傾城買を責むる人、あさましき中にも道理ありて、七の所業誰憎まぬ者なければ、酒吞で居ても彼奴娘の血を吮うて居るわと盛言され、流石の奸物も此處面白からず、荒屋一トつ遺して米鹽買懸りの云譯を家主龜屋に迷惑がらせ、何處ともなく去りける。珠運と思ひ掛なく色々の始末に七日餘り逗留して、馴染につけて亭主頼もしく、お辰可愛く、圍爐裏の傍に極樂國、迦陵嚩伽の笑聲聞けければ客あしらひされざるも却て氣樂に、鯛は無くとも玉味噌の豆腐汁、心協ふ同志安らかに圓坐して食ふ甘さ、或は山茶も一時の出花に、長き夜の徒然を慰めて圍ひ栗の、皮剥てやる一顆のなさけ、嬉氣に賞翫しながら彼も刺きたるに我に呉るゝなかしさ、實に山里も人情の暖さありてこそ住は都に劣られさきりながら指折り數ふれば最早幾日か過ぬ、奈良といふ事憶ひ起しては空しく遊び居るべきにあらずと、ある日支度整へ勘定促し立出んといふに亭主栄

不悉。龜屋吉兵衛様へ岩沼子爵家徳田原榮作とありて末書に珠運様とやらにも此旨御鶴聲相傳へられ度候と筆を止めたるに加へて。二百圓。何だ。紙なり。

第七 如是報

我は飛來ぬ他化自在天宮に

オ、お辰かと抱き付かれたる御方、見れば髭うるはしく面清く衣裳立派なる人、ハテ何處にでか會ひたる様なと思ひながら身を縮まして恐る振り仰ぐ顔に落來る其人の涙の熱さ、骨に徹して、ア、五日前一生の晴の化粧と鏡に向うた折、會ひたる我に少しも違はず、扱は父様かと早く悟りてすが乙女の利發さ。是にも室香が名残の風情忍ばれて、心強き子爵も、二十年のむかし、御機嫌宜しうと言葉尻力なく送られし時、跡ふりむきて今一言交したかりし邪見に唇嚙締て女々しからぬ振りが爲にか粧ひ、急がでもよき足なわざと早めながら、後見られぬ眼を恨みし別離の様まで胸に浮びて切なく、娘、ゆるしてくれ、今までそなたに苦勞させたは我誤り、もう是からは花も賣らせぬ、襖樓も着させぬ、荒き風を身にもあてさせぬ、定めし

おれの所業をば不審もして居たらうがまあ聞け。手前の母に別れてから二三日の間、實は張り詰めた心も思には緩んで、夜深に一人月を詠めては人しらぬ露攀き袖にあまる陣頭の淋しさ。又は總軍の鹿島立に馬蹄の音高く朝霧を蹴つて勇ましく進むにも、刀の鐙引かるゝやうに心たゆたひしが、一封の手簡書く間もなきいそがしき中、次第に去る者の疎くなりしも情合の薄いからではなし、軍事の烈しさ。江戸に乗り込んで足溜りもせず、奥州まで直押に推す程の勢、自然と煩瑣の煙に馴れては白粉の癪り思ひ出さず、喇叭の響に夢を破れば吾妹子が寝たれ髪の婀娜めくも眼前にちらつく暇なく、戀も命も共に忘れて、敗軍の無念には勵み、勝鬨の銳氣には乗じ、明けても暮れても腕を抱し肝を焦がし、饑ゑては敵の肉を食ひ、渴しては敵の血を飲まんとするまで修羅の巷に阿修羅となつて働けば、功名一トつあらはれ、二ツあらはれて、總督の御覺えめでたく、追々の出世、一方の指揮となれば其任愈重く、必死に勤めけるが、仕合に彈丸をも受けず皆々凱陣の鳴、其方器量學問見所あり、何某大使に従つて外國に行き、何々の制度能く取調へ歸朝せば重く舉用あらるべしとの事。室香に約束は違へど、大丈夫

青雲の志此時津ぶべしと、殊に血氣の雀躍して喜び、米國より歐洲に前後七年の長逗留。アア今頃はどうして居るるか、生れた子は女か、男か、知らぬ顔に、知られぬ顔、早く煩摺して膝の上に乗せ取り、護謄人形や、空氣鐵砲、珍らしき玩具の數々家苞に遺つて、喜ぶ様子見たき者と、足をつま立て三階四階の高樓より日本の方角眺めし度々なりしが、岩沼卿と呼せらる、尊き御身分の御方、是も御用にて歐洲に御滞在中、數ならぬ我を見て御子なき家の跡目に坐れとのあり難き仰せ、再三辭みたれど許されれば辭み兼ね承知し、共々嬉しく歸朝して、我は輕からぬ役を拜命する許か、終に姓を冒して人に尊まるゝに付けても、そなたが母の室香が情何忘るべき。家來に吩咐て段々結せば、果敢なや我と榮は分けて、彼岸の人と聞くらさ。何年の苦勞一トつは國の爲なれど、一トつは色紙のあたつた小袖着て、塗の剥けた大小した見所もなき我を思ひ込んで、女の捨難き外見を捨て、譏を關はず、危き厭はず、世を忍ぶ身を隱匿呉れたる志、七生忘れられず、官軍に馳參せんと、決心した我すら曇り聲に云ひ出せし時も、愛情の涙は陰に溢れながら義理の詞正しく、豫ての御本望、妾まで嬉しう存じま

歸らうかと一丁足後へ、ドツコイと一二町進む内、むら／＼と其聲聞き度なつて身體の向を思はすくるりと易へる端途、道傍の石地藏を見て、奈良／＼、誤つたりと一町たらずあるく向より来る夫婦連の、何事か面白相に語らひ行くに、我もお辰と話仕度なつて心なく一間計り戻りしを、愚なりと悟つて半町歩めば、我しらす迷に三間もどり、十足あるけば四足戻りて、果は片足進みて片足戻る程のなかしさ。自分ながら譯も分らず、名物栗の強飯賣家の牀儿に腰掛けてまづ／＼と案じ始めけるが、箸木は山の中に胸の中にも、有無分明に定まらず、此處は言文一致家に頼みまし。

下 若木三寸で蝶蟻に害ふ

世の中に病てふ者なかりせば男心のやさしかるまじ。髭先のはれあがりたる當世才子、高慢の鼻を、つまみ眼鏡ゆゑしく、父母干渉の弊害を説きまくりて御異見の口に封鎖付玉ひしを、一日粗造のブランデイに腸加答兒起して閉口頓首の折柄、古風の思付、氣に入らぬか知らぬが片栗湯拵へた、食べて見る氣はないかとの御介抱有難く、へこたれたる腹に母の愛情を呑んで知り、是より三十錢の安西洋料理食ふ時も

ケーキ丈はボツケツトに入れて土産となす様にもなる者ぞ、ゆめ／＼妙なる天の配劑に不足云ふべからず、と或人仰せられしは尤なりけり。殊運馬籠に寒あたりして熱となり、旅路の心細く二日許り苦む所へ、吉兵衛とお辰連れ來り、様々の骨折り、病のよき沙を見計らひて駕籠安泰に龜屋へ引取り、夜の間に寝ず美人の看病、葺醫者の薬も瑠璃光藥師より尊き善女の手に持たせ玉へる茶碗にて吞まざるれば何利かざるべき、追々快方に赴き、初めてお辰は我身の爲にあらゆる神々に色々の禁物までして平癒せしめ玉へと禱りし事まで知りて涙湧く程嬉しく、一ト月あまりに衰へこそしたれ、床を離れ其親義濟みし後、殊運思ひ切つてお辰の手を取り一間の中に入り、何事かを長らく語りひけん、出る時女の耳の根紅かりし。其翌日男眞面目に媒妁を頼めば、吉兵衛笑つて、牛の轡と老人の云ふ事、どうちや／＼と云ひさして、元より其支度大方は出来たり、善は急いで今宵にすべし、不思議の因縁でおれの養女分にして嫁入らずればおれも一トつ善い功德をする事ぞ、とホク／＼喜び、忽ち下女下男に、ソレ膳を出せ、椀を出せ、アノ鉢子を出せ、なんだ貴様は蝶の折り様を知らぬかと甥子まで叱り飛し

て騒ぐは川舎氣質の義に進む所なり、かゝる中へ一人の男來りてお辰様にと手紙を渡すを、見ると齊しくお辰忙々しく其男に連立たて一寸と出でしが其儘戻らず、晩方になりて時刻も來るに吉兵衛焦つて八方を駈廻り探索すれば、同業の方に宿り居し若き男と共に立去りしよし。牛の轡爰に外れてモウともギウとも云ふべき言葉なく、何と殊運に云ひ譯せん、さりとて淫猥なる行はお辰に限りて無かりし者と蜘蛛に思ひ届する時、先程の男來りて再渡す包物、ひらきて見れば、一筆啓上、仕候未だ御意を得ず候へ共お辰様身の上につき御厚情相掛られし事承り及びあり難く奉存候さて今日貴殿御計にてお辰様婚姻取結ばせられ候由驚入申候仔細のあり御辰様儀婚姻には私方故障御座候故從來の御禮旁罷り出で相止申べくとも存候へ共如何にも場合切迫致し居り且はお辰様心底によりては私一存にも參り筆候様の儀に至り候ては迷意に付甚だ唐突不敬なれども實はお辰様を贖し申し此婚姻相延申候やう決行致し候尙又近日參上仕入り入込たる御話し委細申上べき心得に候へ共差當り先日七藏に渡され候金壹百圓及び御禮の印までに金百圓進上し置き候間御受納下され度候

を申しますが姿の見えぬは御立なされたか。ナ
ニ奥の座敷に。左様なら一寸、と革囊さげて行
きかれば、亭主案内するを、堅く無用と止め
ながら御免なされと唐紙開きて初対面の挨拶さ
り、お辰素性のあらまし、岩沼子爵の昔今を語
り、先頃よりの禮厚く演べて、子爵より禮の餽
り物数々、金子二百圓、代筆ならぬ謝狀、お辰
が手紙を置列べてひたすら低頭平身すれば、珠
運少しむつとなり、文丈々受取りて其他には手
も付けず、先日百兩まで其處に投出し顔しか
めて。御持歸り下され。面白からぬ御處置私
の爲た事を利を取らう爲の商法と思はれてか
片腹痛し。些許の盡力したるも岩沼令嬢の爲
にはあらず、お辰いとしと思うてばかりの事、
夫より段々馴染につけ、縁あればこそ力にもな
りなられて互に嬉敷心底打明け、荷物の多きさ
へ厭ふ旅路の空に婚禮造して女房に持たうとい
ふ間際になりて突然に引摺ひ、人の戀を夢にし
て鏡に食はせよといふ様な情なきなされ方。是
はどうした譯と二三日は氣拔する程恨めしくは
存じたれど、只今承れば御親子の間柄、大切
の娘御を私風情の賤き者に嫁入らせてはと、御
家従のあなたが御心配なすつて連行かれたも御
道理。決して私めが階上に岩沼子爵の御令嬢

かどうのかうのとは申ませぬから、金圓品物は
屹度御持歸り下され。併しまさしく夫婦約束
までしたあの花漬賣は、心さへ變ればどうし
ても女房に持つ覺悟、十二月に御嶽の雪は消ゆ
る事もあれ此念は消えど。ア、嫌なのは岩沼令
嬢、戀しいは花漬賣、と果は取亂して男の述懐。
爰ぞ肝要、御主人の仰せ受けて來た所なり、よ
しや此戀諏訪の湖の氷より堅くとも春風のぼ
やくと説き柔らげ、凝りたる思を水に流させ、
後々の故障なき様にせでばと、田原は笑顔怪し
く作り、上唇、屢嘗めながら、それは一々至
極の御道理、さりとて人間を二つにする事は出
來ず、お辰様が再度花漬賣にならるゝ瀬も無か
るべければ、詰りあなたの無理な御望と云者、
貴所も嫌なのは岩沼令嬢と仰せられて見ると、
まさか推して子爵の婿にならうとの思召でも御
座るまいが、夫婦約束迄なかつたとて婚禮の済
んだでもなし。お辰様も今の所では貴所を戀し
がつて居らるゝ様子なれど、思想の發達せぬ生
若い者の感情、追付變つて來るには相違ない
殿様の仰せ。行末は似つかはしい御縁を求めて
何れかの貴族の若公を納めらるゝ御積り。是も
人の親の心になつて御考なされて見たら無理で
は無いと利發のあなたにはよく御了解で御座り

ませう。筒様申せばあなたとお辰様の情交を割
く様にも聞えませうが、花漬賣としてこそあな
たも約束をなされたれ、詰まる所成就覺束な
き因縁、男らしい思ひ切られたが雙方の御爲か
と存じます。併しお辰様には大恩あるあなたを
子爵も何でおろそかに思はれませう。されば是
等の餽物、親御からなさるゝは至當の事、受取
らぬと仰つたとて此儘にはならず。どうか條理
の立つ様御分別なされて、枉げても枉けても、
御受納。と舌小賢しく云逃に東京へ歸つたや
ら、其後言沙汰なし。さても浮世や、猛き虎も
樹の上なる猿には侮られて位置の懸隔を恨むら
ん。吾肩書に官爵あらば、あの田原の額に疊
の跡深々と付させ、恐懼、謹言させて、子爵に
は一目置いた挨拶させ、差詰筆殿と大切がらる
べきを、四民同等の今日とて、地下と雲上の差
ひ口惜し。珠連を安く見積つて、何百圓にもあ
れ何萬圓にもあれ、札で唇にかすがひ背打つや
うな處置、遺恨千萬、さりながら正四位何の某
とあつて佛彫刻師を筆には爲たがらぬも無理
ならぬ人情、是非もなけれど抑々佛師は光孝天
皇是忠の親王等の系に出て、定朝初めて綱位を
受け、中々賤まるべき者にあらず。西洋にては聲
なき詩の色あるを繪と云ひ、景なき繪の魂魄凝

すと、無理な笑顔も道理なれ明日知らぬ命の男、それを尙も大事にして餘りに御愛のと翫月代人手にさせず、後に廻りて元結も力なき悲しさを奥歯に嚙んできり／＼と見苦しからず結うて呉れたる許か、おのが頭にさしたる金簪まで引抜き、温みを添へて賣つてのけ、我身のまはり調度にして玉ばりし大事の／＼女房に満足させて昔の愛きを樂に語りたさの爲なりしに、情無くも死なれては、花園に牡丹廣々と麗はしき眺望も、細口の花瓶に唯二三輪の菊古流しをらしく彼が插したるを賞め賞められて二人の笑に獨見る事の面白からず。榮華を誰と共に、世も是迄、と思ひ切つて後妻を貰ひもせず。さるにても其子何處ぞと種々尋れたれど漸くそなたを里に取りたる事ある姫より、信濃の方へ行かれたといふ噂なりしと聞出したる許り。其筋の人に頼んでも何故か分らず。我外に子なければ年老る文け愈戀しく、信州にのみ三人も家従をやつて授させたるに、辛くも田原が探し出して七歳といふ惡者より其方を貰ひ受けんとしたるに、如何いふ譯か邪魔入りて、間もなくそなたは珠運とか云ふ詰らぬ男に、身を救はれたる義理づくやら龜屋の亭主の壓制やらで急に婚

禮するといふ話、一旦歸つて二度目に又丁度行き着きたる田原が聞て狼狽し、其昔我が室香に記念と遺せし歌、多分其を知つて居るならんと手紙のすゑに書きし頓智に釣り出し、それから無理に譯も碌に聞かせず此處まで連れて來たなれば、定めし驚いたであらうが、少しも恐るる事になし、龜屋の方は又々田原をやつて始末さする程に是からは岩沼子爵の立派な娘、行儀學問も追々覺えさせて天晴の婿取り、初孫の顔でも見たら、夢の中にそなたの母に逢つても云譯がある、と今からもう嬉くてならぬ。それにしても髪とりあげさせ、衣裳着かゆさすれば、先刻内々戸の隙から見たとは違つて、是程までに美しいそなたを今まで木綿布子着させて置た親の羞しさ。小間物屋も呼ばせれば追付來るであらう、櫛簪何なりと好きな取れ。着物も越後屋に望次第云付さするから遠慮なくお霜を使へ、あれはそなたの腰元なれば先刻の様に丁寧に辭儀なんぞせずとよい。芝居や名所も追迫に見せよう。舞踏會や音樂會へも少し都風が分つて來たら連れて行かうよ。書物は讀めるかえ、消息往來庭訓迄は習つたか、ア、嬉しいぞ、好々、學問も良い師を付けてさせよう。と、慈愛は盡きぬ長物語り、扱こそ珠運が望み通り、

此女善陸果報めでたくなり玉ひしが、さりとては結構づくめ、是は何とした者。

第八 如是力

上

楞嚴呪文の功も見えぬ愛慾

古風作者の書きさうな話、味噌漉提げて買物あるきせしあのお底が雲の上岩沼子爵様の愛娘と聞て吉兵衛仰天し、扱こそ神も佛も御座る世ぢやわ、因果顛倒、地ごしらへのよい所に蘿蔔は太りて、身持のよい者に運の實が、なる程に叶つた幸福と無上に有難がり嬉しがり、一も二もなく田原の云事承知して、おのが勤めて婚姻させ懸けたば忘れたやうに何とも云はず。物思はしげなる珠運の胸、聞かすとも知れた事と萬端埒明け、貧女を令嬢といはるゝ様に取計ひたる後、先日百兩突戻して、吾當世の道理は知られど此様な氣に入らぬ金受取る事大嫌也、珠運様への百兩は儘に返したれど、其人に禮もせぬ子爵から此老爺が大枚の禮貰ふは、煎豆をば疎の商で喰へと云はるゝよりも有難迷惑、御返し申します、と率直に云へば、否それは悪い合點、一酷にさう云はれずと子爵からの御志、是非御取置下され、珠運様には別に御禮

覗ふから、此奴たまためと逢出す後から諏訪法性の胃だか、粟八升も入る紙袋だかをスポリと被せられ、方角さらに分れば顔と眼玉を潑々したらば、夜具の袖に首を突込んで居たりけり。今、この世の勝類さま、チト御驕りなされ、アハ、ハ、と笑ひ轉げて其儘座敷をすべり出しが跡に却て彌寂しく、今の話にいと戀しさまさりて、其事彼事寂然と柱に凭れながら思ふうち、瞭自然とふさぐ時、あり／＼とお辰の姿、やれまてと手を伸して袖捉へんとするを、果敢なや、幻の空に消えて還るは恨許り、爰にせめては其面影現に止めんと思ひたち、龜屋の亭主に心添へられたるとは知らで自ら善き事考へ出せし様に吉兵衛に相談すれば、さて無理ならぬ望み、閑靜な一間欲しとならばお辰住居たる家尙能からん、疊さへ敷かば細工部屋にして精々一ト月位住ふには不足なるべし。ナニ話に来るは謝絶と云はるゝか、それも承知しました。それならば食事を賄ふより外に人を通はせぬやう致しますか、然し餘り牢住居の様ではないか、ム、勝手とならば仕方がないが新聞だけは節々上げませう、ハテ要らぬとは悪い合點、氣の盡きた折は是非世間の面白可笑い有様を見るがよいと、萬事を親切に世話して、珠運が笑ましく氣に戀人

の住みし跡に移るに満足せしが、困りしは立像刻む程の大きな良木なく、百方索したれど見當れば、厚き檜の大きな古板を與へぬ。

第九 如是果

上 既に佛體を作りて未得安心

勇猛精進、潔齋怠らず、南無歸命、頂禮と眞心を凝し肝膽を碎きて三拜一疊九拜一刀、刻み出せし木像あり難や三十二相圓滿の常體即佛、御利益疑なしと、盟き和尚様語られしが、さりとて淺い詮索。優鉢大王とか憍餓大王とやらに頼まれての仕事、佛師もやり損じては大變と頼に汗流れ眼に木片の飛込む構はず、恐れ惶みてこそ作りつれ、恭敬三昧の嬉しき者ならぬは、御本尊様の前の朝暮の看經には草臥を啣たれ乍ら、大黒の傍の下らぬ雑談には夜更くるをも厭ひ玉はざるにても知るべし。と許せしは、兩親を寺参りさせ置き、鬼の留守に洗濯する命ぢや、石鹼玉泡沫夢幻の世に樂をせては損と帳場の金を掴み出して御商温湯の水と流す息子なりとかや。珠運は段々と平面板に彫浮ぶるお辰の像、元より誰に頼まれしにもあられば細工料取らんとにもあらず、唯戀しさが餘りての業、

一刀削りては暫く茫然と眼を瞑げば花流めせと嬌音を洩す口元の愛らしき工合、オ、それ／＼と影を捉へて再一ト刀、一ト驚突いては跡じさりして眺めながら、幾日の恩愛、扶けられたり扶けたり、熱に汗蒸れ垢臭き身體を嫌な様子なく優しき手して介抱し呉たる嬉しき今、風前の雲と消えて、思は、徒に都の空に馳する事悲しく、なまじ最初お辰の難を助けて此家を出でし折留められし袖思ひ切て振拂ひしならばかく迄切なる苦とはなるまじき者かと、戀ひしか恨む戀の愚痴、吾から吾を辨へ難く、恍惚とする所へ現るゝお辰の姿、眉付媚かしく生々として、晴何の情を含みてか吾與へし櫛にザツと見とれ居る美しさ、ア、此處なりと幻影を寫して又一疊、漸く甘日を越えて最初の意匠誤らず、花漬賣の時の襦袢をも着せれば子爵令嬢の錦をも着せず、梅桃櫻菊色々の花綴衣、麗しく引纏はせたる全身像、惚れた眼からは觀音の化身かとも見れば誰に遠慮なく後光輪まで付けて、天女の如く見事に出来上り、吾ながら満足して眷々とながめ暮せしが、其夜の夢に逢瀬常より嬉しく胸あり丈ケの口説濃やかに。戀知らざりし珠運を煩惱の深水へ導きしが憎しと云へば、可愛がられて喜ぶは淺し、方様に口惜い程憎まれてこ

れるを彫像と云ふ程なむ技を爲す吾心ばかりは
ミケランジェロにもやばか劣るべき、假令令嬢
の夫たるとも何の不都合あるべき、とは云へ、
今爰に角立て何の益なし、残念や無念や。と痛
癢の牙は噛めども食付く所なければ、尙一段の
憤悶を増して、果は腑甲斐なき此身惜からず、
エ、木曾川の逆巻水に命を洗つてお辰見ざりし
前に生れかばりたしと血相變る夜半もありし。

下 化城諷品の諫も聴ぬ執着

瘦せたりや、病氣揚句を戀に責められ、
悲に絞られて、此身細々と心引立たず。浮藻
足なからむ泥沼の深水にはまり、又は露多き苔
徑をあゆむに山蛭ひいやりと襟に落つるなど怪
しき夢ばかり見て覺際胸あしく、日の光さへ此
頃は薄うなつたかと疑ふまで天地を我につれな
き者の様恨む珠連、旅路にかりそめの長居、最
早三月近くなるにも心付かれ、まして奈良へ
と日課十里の行脚どころか、家内をあるく勇氣
さへなく、晝は轉寢勝に時々怪しからぬ、囁語
しながら、人の顔見ては戯談一つ云はず、に
やりともせず。世は漸く春めきて青空を渡る風
長閑に、樹々の梢、雪の衣脱ぎ捨て、家々の垂
米いつの間にか失せ、軒傳ふ雪絶間なく、白い

者處に消えて、南向の墓屋根は去年の顔を今年
初めて露せば、霞む眼の老も、やれ懐かしかつ
たと喜び、水は温み下草は萌えた、鷹はまだ出
ぬか、雉子はとうだと、終に若鮎の噂にまで先走
りて、若い者は駒と共に元氣付きて来る中に、
さりとはあるまじき鬱々様。此跡がぐわらり
と早變りして、さても、和御寮は踊る振が見
たいか、踊る振が見たくば、水曾路に御座れの
など狂亂の大陽氣にでも成られまい者でもなし
と龜屋の爺心配し、泣くな泣きやるな浮世は車
大八の片輪田の中に踏込んだ様にちつとして、
くよくよして居るよりは、外をあるいて見たら
又どんな女に廻り合ふかもしれぬ、目印の柳の
下で平常魚は釣れぬ代り、思ひよらぬ蛤の吸
物から真珠を拾ひ出すと云ふ諺があるわ、腹
を廣く持て、コレ若いの、戀は他にもある者を。
と詞をかしく、元頭の腦漿から天保度の浮氣論
主意書といふ所を引抽き、微の生えた洒落を腹
斗に添へて度々進呈すれど、少しも取り容れず、
隨分面白く異見を饒舌つても、却つて珠連が溜
息の合の手如くなるに、是では行かぬと本調
子整々堂々、眞面目に理窟しんなり諄々と説諭
すれば、不思議やさしも温順の人、何にじれて
か大薩摩ばりばりと語氣烈しく、要らざる御心

配無用なり、うるさし、と一トまくりによりつ
けられ、敗走せしが、關はず置けば當世流行ら
ぬ戀の病になるは必定、如何にかして助けてや
りたいがハテ難物ぢや、それとも、經帷子で
吾家を出立するやうにならぬ内追拂はうか、さ
りとは忍び難し、なまじお辰と姫姻を勧めな
かつたら兎も角も、我日から事仕出した上は我
分別で結局を付けねば吉兵衛も男ならずと工夫
したるは、めでたき氣象ぞかし。年ばとるべき
もの、流石古兵衛の斥候、虚實の見所誤らず、畢
竟手に仕業なければこそ餘計な心が働きて苦む
者なるべしと考へつき、或日珠連に向つて、此
日本一果報男め、聞玉へ、我昨夜の夢に、金襴
立派なる御殿の中、眼もあやなる美しき衣裳着
たる御姫様床の間に向つて何やらせらるゝ其鬘
付襟足のしほらしさ、後からかぶりついてやり
たき程、もう二十年若くば唯ば置きぬ品物め、
と腰は曲つても色に忍び足、そろ／＼と伺ひよ
り、縁側に片手つきてそつと横顔拜めば、驚たり
お辰、花漬實に百倍の綺麗をなして殊更憂か含
む工合凄味あるに總毛立ながら尙能くそこら見
廻せば、床に掛かりたる一軸誰あらうそなたの
姿繪故、少し妬くなつて一念の無明萌す途端、
縁の下から顯れ出たる八百八狐付添て己の踵な

諦らめて又候や修業に行て、天晴名人となられ、
 假初ながら知合となつた爺の耳へもあなたの良
 い評判を開かせて貰ひ度い。然し何もあなたな
 追立てる譯ではないが、昨日もチラリと窓から
 覗けば、像ももう見事に出来た様子、此上長く
 此地に居られても詰りあなたの徳にもならず
 と、お辰憎くなるに付けてお前可愛く、眞から
 底から正直におまへ、ドツコイあなたの行末に
 も良い様、昨夕馳と考へて見たが、何でも詰ら
 ぬ戀を商賣道具の一刀に斬て捨、横道入らずに
 奈良へでも西洋へでも行かれた方がよい。婚禮
 なぞ勧めたは爺が一生の誤り、外に悪い事仕た
 覺はないが、是が罪になつて地獄の鐵札にでも
 書かれはせぬかと、今朝も佛様に朝茶上る時懺
 悔しましたから、爺が勧めて爺が廢せといふは、
 鶴竿握らせて殺生を禁する様な者で、眞に云憎
 い意見なれど、此を我慢して謝罪がてら正直に
 お辰めを思ひ切れと云ふこと、今度こそはま
 がつた理窟ではない。が、人間は活物、杓子定
 規の理窟で平押には行かず、人情とか何とか中
 中むづかしい者があつて、遠くも無い寺參して
 御先祖様の墓に櫛一束手向くる易さより孫娘に
 友禪を買つて着せる苦しい方が却て仕易いから不
 思議だ。損徳を算盤ではじき出したら、珠運が

一身二一添作の五も六もなく、出立が徳と極
 であらうが、人情の秤目に懸ては、魂の分銅次
 第、三五が十八にもなつて、揚屋酒一猪口が弗
 箱より重く、色には目なし無二無三、身代の釣
 合減茶苦茶にする男も世に多いわ。おまへの、
 イヤ、あなたの迷も矢張人情のそこであな
 合點の行く様、年の功といふ眼鏡をかけてよく
 よく曲者の戀の正體を見つけた所を話しまし
 て、お辰めを思ひ切らせませう。先第一に何を
 可愛がつて誰を慕ふのやら、調べて見ると餘程
 なかしな者。爺の考では恐らく女に溺れる男
 も、男に眩む女もなし、皆々手製の影法師に惚
 れるらしい。普通の人の戀の初藁、梅花の匂ふ
 んとしたに振向けば柳のとりなり玉の顔、さて
 も美人と感心した所では、西行も凡夫も異りは
 なけれど、白痴は其女の影を自分の睛の底に仕
 舞込で忘れず。それから因縁あれば兩三度も落
 合ひ、挨拶の一つも、云はるより影法師殿段
 段堅くなつて、愛敬詞を執着の耳の奥で繰り返
 し玉ひ、尙因縁深ければ冗談のやりとり親切の
 受授、男は一寸行くにも新板小説の一冊も土産
 にやれば、女は、夏の夕陽の僧や烈しくて御著
 う御座りましたと、岐阜團扇に風を送り、求
 水に手拭を絞り呉れるまでになつては、あり難

さ嬉しさ、御馳走の瓜と共に甘い事胃の肺に染
 渡り、さあ堪らぬ影法師殿にむくく、と魂入
 り、働き出し玉ふ御容貌は百三十二相も揃ひ、
 御聲は鶯に美音錠飲ませたよりまだ清く、御
 心もに廣大無暗に拙者を可愛がつて下さる結構
 盡め故堪忍ならずと、車な横に押し親父を勘當
 しても女房に持つ覺悟極めて、さて目出度婚禮
 して見ると自分の妄想ほど眞物は面白からず、
 領脚が坊主で、乳の下に焼芋の焦げた様の痣あ
 らはれ、然も紙屑屋とさもしき議論致されては
 意氣な聲も聞たなく、印付の花合せ、負けて
 も平氣なるには大様なる御心却つて迷惑、どう
 して此様な雌を配偶にしたかと後悔するが天下
 半分の大切。眞實を云へば一尺の物差が二尺の
 影となつて映る通り、自分の心といふ燈から、
 左程にもなき女の影を天人ちやと思ひなして、
 戀も恨もあるもの。お辰めとても其如く、おま
 への心から拵へた影法師に、おまへが惚れて居
 る許り、お辰の像に後光まで付けた所では、天
 晴女菩薩とも信仰して居るゝか知られど、影
 法師ちや。お辰めばそんな氣高く優美な女
 ならずと、此爺も今日悟つて憎くなつた。迷ふ
 な、爰にある新聞を讀め。と初は丁寧後は
 粗放の詞づかひ、散々にこなされて。おのれ爺

そ誓文移り氣ならぬ眞實な命打込んで御見せ申
たけれ。扱は迷惑一生可愛がつて居様と思ふ男
に。アレ嘘、後先揃はぬ御言葉どうでも殿御は
口上手と、締りなく睨んで打つ眞似にちよいと
あぐる、纖麗な手首、緊りと捉へて柔かに握
りながら、打たるゝ程憎まれてこそ誓文掛け
て移り氣ならぬ眞實なと早速の鸚鵡返し、流石
に可笑しくお辰笑ひかけて、身を縮め聲低く。
此手を。放さぬが悪いか。ハイ。これはゝ大
きに失禮と其儘放してびぞる眞面目顔、心配
相に横から覗き込めば、見られてすまし難く其
眼を邪見に蓋せんとする平手、それを握りて。
放さぬが悪いかと男詞。後は協音の笑許り残る
陸じき中に娘々と子爵の鐘聲。目覺むれば昨宵
明放した恩を掠めて飛ぶ鳩、憎や彼奴が鳴いた
のかと腹立しさに振向く途端、彫像のお辰夢中
の人には遙劣りて身を掩ふ數々の花うるさく、
何處の唐草の精靈かと嫌になつたる心には惡口
も浮み來るに、今は何を着すべしとも思ひ出せ
ず、工夫鍊りゝ刀を礪きぬ。

下 堅く妄想を捏して自覺妙諦

腕を隠せし花一輪削り二輪削り、自己が意匠
の飾を捨て人の天真の美を露はさんと勤めたる

甲斐ありて、なまじ着せたる花衣脱がするだけ
面白し。終に肩のあたり頸筋のあたり、梅も櫻
も此君の肉付の美しさを蔽ひて誇るべき程の美
しさあるべきや、と截ち落し切り落し、むつち
りとして愛らしき乳首、是を隠す菊の花、香の
無き癖に小癢なりきと刀忙しく是も取つて拂
ひ、可笑や珠連自ら爲たる業をお辰の仇が爲た
る事の様に憎み、今刻み出す裸體も想像の一塊
なるを實在の様に思へば、愈々昨日は愚なり。
玉の上に泥繪具彩りしと何が何やら獨り後悔
愧して、聖書の中へ山水天狗樂書したる兒童が
日曜の朝字消謬議に氣をあせる如く、周章狼狽
一生懸命、刀は手を離れず、手は刀を放さず必死
と成て夢我夢中、きらめく刃は金剛石の燈下に
轉ぶ光きらゝ、截切る音は、空駆くる矢羽の
風を剪る如く、一足退つて配合を見糺す時は琴
の絲斷えて餘韻のある如く、心糾々、氣昂々、
抑幾年の學びたる力一杯鍛へたる腕一杯の經驗
修鍊、渦まき起つて沸々と、今拳頭に迸り、
倦むも疲も忘れ果て、心は牙に牙渡る不亂不動
の精進波羅密、骨をも休めず、筋をも緩めず、
湧くや額に玉の汗、去りも敢へざる不退轉、耳
に世界の音も無く饑も渴も顧す、自然と不惜
身命の大勇猛には無礙無所畏、切屑拂ふ熱き息、

吹き掛け吹込む一念の誠を注ぐ眼の光り、凄ま
じきまで凝り詰むれば、爰に假相の花衣、幻翳
空華解脱して、深入無際成就一切、莊嚴端麗有
難き實相美妙の風流佛、仰ぎて珠連はよろゝ
と幾足後へ後退、ドツカと坐して飛散りし花を
捻りつ微笑するを、寸善尺魔の三界は猶如火宅
や、珠運様、珠運様と呼ぶ聲戸口に忙し。

第十 如是本末究竟等

上 迷迷迷、迷は唯識所變ゆゑ凡

下婢が是非御來臨なされといふに盜まるべき
者なき破屋の氣樂さ、其儘龜屋へ行けば、吉兵衛
待兼顔に挨拶して奥の一間へ導き。扱珠運様、
あなたの逗留も既に長い事、あれ程有りし雪も
大抵は消えて仕舞ひました。此頃の天氣の快さ、
旅路もさのみ苦しうはなし。其道勉強の爲に諸
國行脚なさるゝ身で、今の時候にくすぶりて許
り居らるゝは損といふ者、それも是も承知せぬ
では無からうが若い人の癖とてあのお辰に心を
奪はれ、然も取殘された恨はなく、その木像ま
で刻むと云ふは戀に親切で世間に疎い唐土の天
子様が反魂香燭かれた様な白痴と惡口叩くもお
まへの爲な思ふから。實はお辰めに逢はぬ昔と

て、晝は御恩賜頭に挿しかざせば、我爲の玉の冠、かりそめの立居にも氣を付けて落ちるな厭ひ、夜は針箱の底深く藏めて枕近く置きながら幾度か又開けて見て漸く睡る事、何の爲とは妾も知らず。殊更其日叔父の非道勿體なき惡口許り、是も妾め故思はぬ不快を耳に入れ玉ふと一々胸先に痛く、さし詰むる瘡押へて御顔打守りしに、暢やかなる御氣象、咎め立もし玉はざるのみか、何の苦もなくさらりと埒あき、重くの御恩、荷うて餘る甲斐なき身、せめて肩揉め脚擦れとでも使ひ玉はゞまだしも、却て口きき玉ふにも物柔かく、御手水の温湯縁側に持て参り、楊枝の房少し撈りて、鹽一ト小皿と共に塗盆に載せ出す僅許の事をさへ、我夙起の癖故に汝までを夙起さして、尙寒き朝風につれなく袖をなぶらす痛ばしさと、と人を護ふ御言葉、眞ぞ人間五十年君に任せて露情からず。眞實あり丈智慧ありたけ盡して、御恩を報ぜんとするに付けて、慕はしさも一入まさり、心といふ者一つ新に添ひたる様に、今迄は開はざりし形容、いつか繕ふ氣になつて、髪の様どうしたら譽められうかと鏡に對つて小聲に問ひ、或る晩の湯上り、恥しながらソツと薄化粧して帷々座敷に出しが、笑片頬に見られし御眼元何やら存

やうに覺えて、人知らずカツと上氣せしも、單に身嗜許にはあらず。勿體なけれど内々には可愛がられても見たき願ひ、悟つてか吉兵衛様の貴下との問答。婚禮せよ、せねとの争ひ。不圖立聞して、魂魄ゆら／＼と足定らず、其儘其處を逃出し、人なき柴部屋に夢の如く入ると等しく、せぐりくる涙、あなた程の方の女房とは、我身の爲を思はれてながら、吉兵衛様の無禮過ぎた詞恨めしく、水仕女なりともして一生御傍に居られさへすれば願望は足る者を、餘計な世話、妾からでも言はせたるやうに聞取られて疎まれなば、取り返しのならぬ曉、辰は何になつて何に終るべきと悲み、珠運様も珠運様餘りにすげなき御言葉、小兒の提つた小雀を放して違つた位に辰を思はるゝか知られどと泣きしが、貴下はそれより黙々で龜屋を御立なされしに、千日苧り溜めし草を一日に焼いた様な心地して、尼にでもなるより外なき身の木を歎きしに、馬籠に御病氣と聞く途端、アツと驚く傍に愚な心からは看病するを樂しく、御介抱申したる甲斐ありて今日の御床上、芽出度は芽出度けれど又もや此儘御立かと先刻も臺所で思ひ届して居たに、吉兵衛様御内儀が、珠運様との縁續ぎ度くば其人様の髪一筋知れぬ様に抜て、おま

への髪と確と結び合はせ、急々如律令と唱へて谷川に流し捨てるがよいとの事。憎や年寄の癖に我を騙らるゝとは知りながら、貴君の御足の止度さ故に良い事教へられし様覺えて馬鹿氣た呪も、仕て見ようかととも惑ふ程小さき胸の苦しく、捨てるゝば此身の不束故か、此心の淺き故かと獨り悔しう惱んで居りましたにあり難き今の仰せ、神様も御照覽あれ、辰めが一生はあなたに。と熱き涙の吾が衣を透せば、そもや、嘘なるべきか。新聞こそ當にならぬ者なれ。其を眞にして信ある女房な疑ひしは、我ながらあさまし。とは思ふものゝ形なき事を記すべしとも思へず、見れば葉平侯爵とやら、位貴く、姿うるはしく、才いみじきよし、エ、姉ましや、我位なく、姿美しからず、才も亦鈍ければ、較べられては敵手にあらず。扱こそ子爵が詞通り、思想も發達せぬ生若い者の感情、都風の輕薄に流れて變りしに相違なきか、と頻に迷ひ沈みけるが、思ひかてや一聲烈しく。今ぞ知たり移ろひ易き女心、我を侯爵に見替へ、汝一人の榮華を誇る。情なき仰せ、此辰が。アツと驚き振仰向けば、折柄日は傾き掛つて夕榮の空のみ外に明るく、屋の内靜かに、淋し

め、えせ物知の戀の講釋、いとし女房をお辰めと呼捨片腹痛しと呪みながら、其事の返辭はせず、昨日頼み置きし胡粉出来て居るかと、刷毛諸共に引挽ぐやうに受取り、新聞懷中して止むるをきかず突と立て疊ざりあらく、馴れし破屋に斷戻りぬるが、儼然として長閑に立る風流佛を見るより怒も収まり、何ばさておき色合程よく假に塗上て、柱にもたれ安坐して暫く眺めたるこそ思なれ。吉兵衛の詞氣になりて聞く新聞、岩沼令嬢と業平侯爵と題せる所なふと讀せば、深山の美玉都門に入てより三千の玳瑁に顔色なからしめたる評判噴々たりし當代の佳人岩沼令嬢には幾多の公子豪商熱血を頭腦に潮して其一顰一笑を得んと欲せしが豫て今業平と世評ある某侯爵は終に子爵の許諾を経て近々結婚せらるゝよし侯爵に英敏閑雅今業平の稱空しかざらる好男子なるは人の知る所なれば令嬢の艶福多い哉侯爵の艶福も亦多い哉艶福萬歳羨望の至に勝へずと見るゝ面色赤くなり青くなり、新聞紙引裂捨て、何處ともなく打付けたり。

下 戀戀戀、戀は金剛不壞なるが聖

虚言といふ者誰吐きそめて正直は馬鹿の如く、眞實は問拔の様に扱はるゝ事あさましき世

ぞかし。男女の間變らじと一言交さば一生變るまじきは固よりなるを、小賢しき祈誓三昧、誠少き命毛に情は薄き墨含ませて、文句を飾り色めかす腹の中慨かばしと昔の人の云ひたるが、夫も牛王を血に汚し神を證人とせしはまぢゆかし所ありしに、近來は熊野を茶にして罰を恐れず、金銀を命と大切にして、一金千兩也右借用仕候段眞正なりと本式の證文遣り置き、變心の曉は是が口を利きて必ず取立らるべしと汚き小判を枷に約束を堅めけると、或書に見えしが、是も烏賊の墨で文字書き、龜の尿を印肉に仕懸くるなど巧み出すより廢れて、當時は手早く、女は男の公債證書を吾名にして取り置、男は女の親を人質にして召使ふよし。亭主持たば理學士、文學士漬が利く、女房持たば音樂師、畫工、産婆三割得ぞ、ならば美人局、板の間持ぎ等の業出來て、然も英佛の語に長じ、交際上手で、エンゲージに托付華族の若様の金の指環一日に五六位取る程の者望むやうな世界なれば、汝珠運能々用心して人に欺かれぬ様すべしと師の教訓されしを、何の惡口なと冷笑ひしなるほど、我正直に過ぎて愚なりし。お辰を女菩薩と思ひしは第一の過り、折疵を隠して刀には極を彫るものあり、根性が腐つて虚言美しく、

田原が持て來た手紙にも、御なつかしさ少時も忘れず何れ近き中父様に申し上やがて朝夕御前様御傍に居らるゝやう神かけて祈り居りなどと我を嬉しがらせし事憎しと、恨の眼尻鏡く、柱にもたれて身は力なく、下げたる頭を少し擧げて脱むに、浮世のいざこざ知らぬ顔の彫像寛々として大空に月の澄める如く佇む氣高き、見から我胸の疑惑差しく、ホツと息吐き、ア、誤てり、是程に麗はしきお辰、何とてさもしき心もつべき、去りし日龜屋の奥座敷に一生の大事と我も彼も浮きたる言葉なく、互に飾らず疑はず固めし約束、假令天飛ぶ雷が今落つればとて二人が中が引裂かれじと契りし者も、縦や子爵の威權烈しく他し筆がれ定む共、我の命は彼にまかせ、お辰が命は珠運貫ひたれば、何の命何の身體あつて侯爵に添ふべきや。然も其時、身を我に投懸て、艶やかなる前髪惜氣もなく我膝に押付、動氣可愛らしく泣き俯しながら、拙き妾めを思ひ込まれて其程迄になさげ厚き仰せ、冥加に餘りてありがたしと嬉しと此喜び申すべく詞知らぬ恩の口惜し。忘れもせざる何日ぞやの朝、見所もなき櫛に数々の花彫付て賜はりし折より、柔しき御心ゆかししく思ひ初、御小刀の跡匂ふ梅櫻、花瓣一片も缺かじと大事にし

き汝に未練残すべき、其生白けたる素首見も穢はしと、身動きあらく後向になれば、ふと泣く聲して、それまでに疑はれ疎まれたる身の生甲斐なし、とてもの方様の手に惜からぬ命捨てたし、と云ふは、正しく木像也。あゝ怪しや、扱ば一念の戀を凝して、作り出し、お底の像に、我魂の入たるか、よしと我身の妄執の憑り移りたる者にもせよ、今は恩愛切つて捨て、迷はぬ初に立歸る珠運に、妨なす妖怪、いでいで佛師が腕の牙、戀も未練も段々に切捨くれんと突立て、右の手高く振上げし鉈には鐵をも碎くべきが、氣高く優しき情溢るゝ許に湛ふる姿、さても水々として柔かさうな裸身、斬らば熱き血も、迷りなんな、どうまあ邪見に鬼たくし刃の酷くあてらるべき。恨も憎も火上の水、思はず珠運は鉈取落して、戀の叶はず思の切れぬを流石男の男立き、一聲呑んで身をもがき、其儘ドウと臥す途端がタリと何かの倒るゝ音して天より出でしか地より湧きしか、玉の腕は温く我頸筋にからまりて、雲の鬢の毛匂やかに顔を摩るなハツと驚き、急しく見れば、有し昔に其儘の。お辰かと珠運も抱しめて額に唇。彫像が動いたのやら、女が來たのやら、問はひ拙く語らば遅し。

團圓 諸法實相

歸依佛の御利益眼前にあり

戀に必ず、必ず感應ありて、一念の誠御心に協ひ、珠運は自か歸依佛の來迎に辱なくも扱ひとられて、お辰と共に手を携へ肩を駢べ悠々と雲の上に行きし後には白薔薇香薰じて、吉兵衛を初め一村の老幼拜出度とさぐめく聲は天鼓を撃つ如く、七藏がゆがみたる耳を貫げば是も我儂の角を落して黒山の鬼窟を出で、發心勇ましく田原と共に左右の御前立となりぬ。

其後光輪美しく白雲に駕して所々に見ゆる者あり。或紳士の拜まれたるは天鷲絨の洋服裳長く着玉ひて駝鳥の羽寶冠に鮮やかなりしに、某貴族の見られしは、白標を召して錦の御帶金色赫突たりしとかや。夫に引變へ、破襦袢着て藁草履はき、腰に利鎌さしたるを農夫は拜み、阿波縮の浴衣、綿八反の帶、洋銀の簪位の御姿を見しは小商人にて、風寒き北海道にては、鱧の鱗怪しく光るとんざ布子、浪さやぐ佐渡には、色も定かならぬさき織を着て、漁師共の眼にあはれ玉ひけるが、葉平侯爵も程經て踵小さき靴をはき、派手なりボンの飾りまばゆき服を召

されたるに値偶せられるよし。是皆一切經にもなき一體の風流佛、珠運が刻みたると同じ者の千差萬別の化身にして少しも相違なければ、拜みし者誰も彼も一代の守本尊となし、信仰篤き時は、子孫繁昌家内和睦、御利益疑なく、假令少々御本尊様を恨めしき様に思ふ事ありとも、珠運の如くそれを火上の水となす者には固より持前の佛性を出し玉ひて愛護の御誓願空しからず、若又過つてマホメツト宗モルモル宗なその木偶土像などに近づく時は、現當二世の御罰あらたかにして、光輪を火輪となし一家をも魂魄をも焼き滅ぼし玉ふとかや。あながしこ穴賢。

(明治二十二年作)

氣に立つ彫像許り。さりとては忌々し、一心亂れてあれかこれかの二途に別れ、お辰が聲を耳に聞きしか、吉兵衛の意見ひし／＼と中りて、残念や、妄想の影法師に馬鹿にされ有りもせぬ聲まで聞きし愚さ、箇程までに迷はせたるお辰め、汝も浮世の潮に漂ふ浮萍のやうな定なき女と知らで天上の菩薩と誤り、勿體なき光輪まで付けたる事口惜し。何處の業平なり癡病なり、勝手に縁組み、勝手に樂め。

あまりの御言葉、定めなきとはあなたの御心。あらし不思議、慥に其聲、是もまだ醒めの無明の夢かと、眼を擦つて見れば、しよんぼりとせし像、耳を澄ませば豫て知る縦の木の蔭あたりに子供の集りて鞠つくか、風の持て来る數へ唄、一寸百突で渡いた受取つた／＼一つでは乳首啣へて二つでは乳首離いて三つでは親の寢間を離れて四つには絢り絲より初め五つでは絲をとりそめ六つでこる機織りそめて

と苦勞知らぬ高調子、無心の口々長閑に、拍子取り連れて、歌は人の作ながら聲は天の鎮美しく、慾は百つて還さうより他なく、恨はつき損れた時、罪も報も共に忘れて、戀と無常はまだ無き世界の樂しさ、羨しく、噫無心こそ尊

けれ、昔は我も何しら絲の清きばかりの一筋なりしに、果敢なくも嬉しいと云ふ事身に染初めしより、纏て辛苦の結ばれ解ぬ濡亭の纏の物思ひ、其色嫌よと、眼を睨げば、生憎にお辰の面影あり／＼と、涙さしぐみて、分疏したき風情、何處に憎い所なし。なる程定めなきとはあなたの御心、新聞一枚に堅き約束を反故となして怒り玉ふか、と啣たれて見れば無理なられど、子爵の許に行きてより文は僅に町原が一度持て來りし許り、此方から遣りし度々の消息、初は親子再會の祝、中頃は振残されし啣言、人には聞かせ難き程差しい文段までも、筆とれば其人の耳に付て話する様な心地して我しらす愚にも、獨居の恨を數ふる夜半の鐘はつちからで、臘氣ながら逢瀬うれしき通路を堰く鷄めを夢の名残の本意なきに憎う存じ候など書きて猶足らず、再書細々と、色好み深き都の人々を幾人か迷はせ玉ふらん御器量の美しさ、却つて心配の種子にて我をも其等の浮たる人々と同じ様に思し召らんかと案じ、候ては實に／＼頼み薄く口惜う覺えて、あはれ歳月の早く立てかし、御面影の變りたる時にこそ淺墓ならぬ我戀のかはらぬものなるを願したけれと、無理なる願をも神前に歎き聞え候と、愚痴の數々まで記して丈夫

さうな狀袋を擇み、封じ日油斷なく、幾度か打かへし／＼見て、印紙正しく張り付、漸く差し出したるに受取たと許の返辭もよこさず、今日は明日はと待つ郵便の空軋なる不實の仕方。それは他し婿がれ取らせんとて父上の皆爲されし事。又しても妄想が我を裏切して迷はする聲憎しと、頭を上げば風流佛悟り濟した顔、外には清水の三本柳の、一羽の雀が鷹に取られた、チヤポ／＼一寸百つて渡いた／＼。の他聲もなし。愈々影法師の仕業に定まつたるか、エ、腹立し、我最早すつきりと思ひ斷ちて煩惱愛執一切棄つべしと、胸には決定しながら、尙一分の未練残りにて、可愛ければこそ睨みつむる形像。此時雲收まり、日は没りて東窓の部屋の中や、暗く、都ての物薄墨色になつて、暮残りたるお辰白き肌浮出づる如く、活々とした姿、臘月夜に眞の人を見る様に、呼ばへ答もなすべきありさま、我が作りたる者なれど飽まで溺れ切たる珠運、ゾツと總身の毛も立て呼吸をも忘れ居たりしが、猛然として思ひ續せば、凝たる瞳キラリと動く機會に面色忽ち變り。エイ這顔の美しさに迷ふ物かは、針ほども心に面白き所あらば命さへ呉てやる珠運も何の操な

地のふるき人にも問ひ、目貫、弁、小柄、縁、頭など商ふ人にも質し候處、誰も知るもの無く、數年をあたに過し候ひしに不思議にも此頃、基敵に致し候老人、むかしは物數寄をも隨分盡し候士分の者の果に候が、かつて若き折聞き込み居り候よしにて事こまかに話し聞かせくれ申候。右老人は、其頃出入致させ候刀屋美濃屋と申候。店の老番にて才兵衛と申候ひし者より聞きし由にて、其才兵衛相談り候は、まことに面白く、耳に残り候によりて、今に忘れもせずおぼえ居り候と申し候。もつとも信俊作の目貫も其物語り餘りあはれに候ひしにより右才兵衛より買ひ取り、一時は老人所藏致し候ひし旨に御座候。廢刀後賣拂ひ候ため今は持ち居らず残念との事に候。烏金臺に金、銀、象嵌入り候虎にて、至つて美しかりしと申候。たゞし銘は信俊とこれあり、信時とはこれ無く、御たづね相成り候信時とは同人なりや否やは存ぜず、才兵衛よりも信俊といふ人の上として一條の物がたり承ばりしと申すことに候。才兵衛は何人より聞き知り居り候や、それは別に尋れも致さず済ませ候ひしとの事、これは少々遺りなしき義に候が、如何とも致しがたく候。随分商估は、時によりて、いつぱりなも構へ候もの

故、自然右才兵衛出まかせを申候歟とも疑はれ候が、全く跡も無き事を、わづかなる物買らんために、長々し物語るべくも候はれば、聞き取り候、其儘を談り候ならんと老人の説に候。よつて此方にても老人物語りのまゝを記しつけ申候。事實のたしかなるところは、猶後の考證を俟つべき事勿論に候。才兵衛は、なかなか辯舌よろしく、世なれきつたる者なりしと老人の噂に候へば、假令ことごとく虚構に出でずとは致すとも、潤色のあるべき事は、勿論と存し申候。人去り時過ぎて、眞實知るべからず、巫言現談、古人を誣ふるのみとして御聞き取りあり度候。

三

右老人物語り申候。才兵衛物語により候へば、信俊は安堂平七と呼び候ものにて、何者の子なるや定かならず、されど其母貞恵と申し法體致し居り候ものゝ人品もまことに宜敷、平七ならびに妹おとしと申候も、いやしからぬ立振舞に、むかし床敷相見え申、當時の人皆、いづれ平七父は京の出にて、歴々に召し使はれ候青侍にても候ものゝ、浪人致したる果か、と噂致し候ひしとの事に候。平七は母、妹と三人暮

しにて、下女も使はず、至つて小體に朝夕を送り居り、妹に炊事致させ候へば母に絶對に致し貰ひ候といふ態にて、其爲少々嫁入過ぐるまで、左して醜からぬ妹を家に置き候氣味も候かと見え候。勿論これは得るもの少きよりの事に候。誰の弟子といふことも無く自然に慰み彫より本職に相成り候平七、年二十五と申すには、大分隨前よろしく、彼是と取難され候ひしなれば、世間並の職人かたぎに候ば、取れる時取るべしとの所存にて、少々は出来損じ候ものをも金錢に代ふべき習ひなるに所謂名人かたぎにて心にすまぬ細工は、いくらも自ら鐵鎚にてたゞき潰し打棄て申候。ほどの氣象に候故、金錢にのみは眼をくれ不申、随つて平七より細工宜しからざるものにて、下女内弟子など使ひ、豊に身過ぎ致し候もの有之候に、右の如く質素に、身のまはりも見苦しからずと申すばかりにて日を送り候由、其代り、それだけに平七作は人の用ひ宜敷、年にくらべては似合はしからず名譽をも得候。名古屋は人氣京都のやうにも江戸のやうにも有之候土地なれば、茶の會、俳諧など風雅なることも行はれ、歌舞吹簫を喜び、綺麗花體を競ふ江戸の奢りの風も致し候とこみなる間、刀小道具屋も随分有之いづれも商賣繁昌

風流魔

信時、安堂氏、平七と稱す。尾張名古屋大津町の住人なり、赤銅地磨高象嵌むく入など甚見事にして結構なる事蜀錦にまされり、人あらそひて是なとめ、たのみ來る人門前に市をなすがごとし、生得一癖あるをのこにて、これといとひ、のがれて京師に遊び、終に其名をかくせり、其作物たま／＼に出れば、價必ず貴し、最も惜むべきは此人なり。

これは大阪の人にて、鐔、目貫、筭、小柄などの鑑定に長けたる稲葉通龍といへるが、天明年間に著はし、書の中に記し置ける文なり。

またある書には、信時といふ名、信俊とありて、此人おの技のおもふ如くに上達せざるな根み憤りて、舌を噛み死せり、と記しあり。

少しく他に思ふ節ありて、藝工の事に關したる書を涉獵せしおのれば、其人の上をあはれとおもひ、如何にして自ら晦まし、或は自ら死せりと傳へらるゝまでに末路を善くせざりしかと

疑ひ且つ傷みて、若し其人の事蹟の、其人住みし地には傳はる事もやと、我が友にして物のあはれもよく辨へたる名古屋の亡是子といへるに書を與へ、心長く待たんほどに、心長く問ひ糾して事こまかに知らせ越すやう云ひ遣りたり。

友のもとよりは、云ひ越されたるむれば心得たり、長き間にばさぐりたゞして其人の上を及ぶべきだけは委しく告げんほどに、よく心長く待ち給へ、我もさる事をさぐり出さん事を好くものなれば、いつかは必ず事のさまを知り得てごまやかに申送る時あるべし、と答へおこしぬ。

さて其後、一月過ぐれども、友の許より、何のたよりも無く、二月経れども猶おとづれ無く、今日は、明日はと、そなたの天よりの文のみ待つ日數かきなりて、百日といふに至れば、猶いまだたよりを得ざるに、心いらちて、いつぞや頼みたりしことは如何に、少しの聞き出したる事も無くや、などと催促の狀を遣はしければ、其返書には、心長く待ち給へとくれ／＼も云ひ置きしはこの事なり、左ばかり急にもとめ給

はゞ自ら此地に來りて問ひ糺し給へ、君みづからさぐり給ふともかゝる事は、しらべ出し得べくもあらぬものなり、とのみ云ひて、其事は少しも記さざりき。

かゝる事二三度におよびて後は、おのれも少し心倦みて、年も百年あまり前の事なり、人も名高き功業を世に遺したるといふ方にもあらねば、其事蹟も派びて尋ぬる由無きなるべし、と思ひ捨つるとは無しに思ひ捨て、月日を過ごし來つ、いつとなく信俊又は信時の名をも忘れ果てけるに、近き頃になりて、彼の亡是子をもとよりかつて君のたづね越したまひたる人の事おぼはず詳しく知り得たれば、近き中に長き文に書き綴りて送るべし、其冊子肩かん折をたのしみて待ちたまへと云ひ越したり。

今は信時信俊をも忘れんとまでしたるおのれも、これに新しく心動きて、其狀來ん日を指折り數へ待ちけるに、今日といふ今日に其狀とおぼしきもの名古屋より届きたり。封じ日解く手さへ、其のはたらき鈍き心地して、急ぎ其文を開き見るに、果して其文は其事をなしたるなり。

二
かれて御尋ねの安堂平七の事、いろ／＼と上

は、仲に人を立て、表向き如何やうにも申請ふべきなれどなどと思ふに叶はぬ世をくやみ申候。鶴屋方には、娘の平七に優しく致し候な、たゞ商賣に取りて疎略に致しては叶ふまじき人を大切に致し候とのみ存じ込み候て更に心づかず、却て娘をば親孝行の心篤きより親の所存に倣ひたるものと思ひ居り、いろ／＼平七が事といへば我が物のやうにして娘の骨折り候を喜び居り候ほどの事に候。

四

鶴屋娘お濱と平七との間いやらしき事は無く過ぎ候へど、場合は日増に深く相成り、平七母貞恵、妹お歳の眼にも見え候ほどに及べば、鶴屋の召使のものゝ中にもお濱幼年の折より付添ひ居れる年増の婢などは疾より心づきたること勿論に候。されど平七母ならびに妹は、心に秘めたるまゝ兎角を云ふべくも無く、またお濱付添ひの婢は、おのがかしづける人の意を迎ふるをのみに他に忠にして且はおのれに利ある事、と思ひこめる世間普通の考のほかに考も有たぬものなれば、ひたすらお濱の欲するところを成さしめんとするのみ、なか／＼お濱が胸中の秘を許きて鶴屋夫婦に訴ふるごときこととな

すべくもあらず。さればお濱平七が間の相思の情は何人にも擾亂さるゝこと無く穩やかに生ひ伸び行くこと、譬へば翠の山の四方を取囲みたる中の風軟らかに吹き水緩く流るゝ仙郷ともいふべき地に生ひ立てる桃なんどの、憂きこと知らぬに咲きほころが如く、他日の風雨はいざ知らず今はまことに樂しげによそめ羨ましくも見え候。平七がおのが技に執念深きは、疑ひも無くお濱をして平七を恩慕崇拜せしめたる一つのかどにて、お濱は我が家の業體づから何時と無く古の名ある彫師なんどを甚く尊び敬ひ、慕はしきものに思ひ居たるより、平七が技倆を異口同音に人々の褒め稱ふるを聞き、また平七が金錢の爲のみにせざるところの所謂名人氣質なる行狀を見、またそのおのが技に執心深きこと、古名人の心掛もかくやありけんと思はるゝほどなるを見て、終に平七を古名人同様に思ひ做すに至りたるとおぼしく候。かゝるありさまなれば、お濱は、平七が自らおのが技の上達せんことを希ふと等しく、よそながらおのれもまた満腹の誠をもて平七が技の上達せんことを祈り、平七が平生古名人の佳作を見ることに『やに型』といふものを爲りて其佳作のおもかげを寫し置きて参考に資する料と貯へ置くを見及び、鑑き

手の雪と白くして一點の汚だに厭はるゝをも願みず、おのれが家には商品として随分多く佳作の出入するあるを以て、平七がために自ら幾多の古名人が佳作のおもかげを寫し取らんと企てたるほどに候。知る人は知り給ふべし、やに型といふは、松脂と、砥の粉の類の地の粉といふものと、灰墨と、燈油とを合して成るものにて、秋毫の微に至るまでも原品と差ふことなく模さんとするには是非此一種の混製品を要する事に候。此一種の黒き泥やうのものありて、さてまた稻荷山の土さへあれば模品は出来るものに候が、かやうに云へば甚だ易き事のやうに聞ゆれど、實際各種のものを羽二重漉にして混合するなど美しく娘の爲ることゝしては似合はしからず、灰墨を扱ふことなれば繊細なる手さきを眞黒にして、甲斐々々にしげに働けるなど、まことに戀の情の底に燃ゆればこそ候。かくの如くにして佳作の模を造り、参考の資にとて與へ呉れ候色美しく心優しき鶴屋が娘に對して、平七が愛憐の情に堪へざるは當り前ともいふべきは、平七が平生おのが技に執心深きだけ一ト入なるべき事言ふまでも無き譯に候。こゝに戀の神は即ち技の神となり候。平七は愈々おの

致し候中に、其當時は、鶴屋定阿彌藤屋藤兵衛此二軒とりわけ宜き店に候ところ、鶴屋方は平七評判相立たる頃よりの馴染にて、平七なば扱ひ方宜敷致し遣はし候により、其含みも有之候て、賤平七事自分の評判宜敷なりて諸方より頼みまゐり候ても頼と應ぜず、自作は鶴屋方にのみ遣はし候。これがため鶴屋は、平七評判日に日に募り、江戸にても數寄者の間に平七が細工求めたき旨申さるゝ仁出来、京大阪へも其名廣まり候につけ、店の名も知られ、自然其他に利得も加はり、段々仕合はせを得候間、藤屋藤兵衛は、左らぬに商賈忌み敵の仲、口惜く存じ申、何卒して平七細工を我が方に取らんと、一日丁寧なる進物持参の上、言葉盡して、さまふに申し口説き候處、平七は平にことわり申候。藤兵衛も折角頼み候處聞き入れ呉ざるに心外とは存じながら是非に及ばず、其後其ま、打過ぎ候て、自分店得意先より平七作の目貫など註文出で候時は、鶴屋に頭を下げ候て、其手より平七作を貰ひ受け候事に致し候。かくて程經て、平七二十七歳の春頃は、末にはむかしの宗現、東雨などの如く、やがて一風一派を起すにも立至るべくやとの評判喧しく、弟子にならんなど申者も少からず、名古屋の名

物男に相成り候し平七母は、前々より早く相當なる嫁を迎へ、初孫の顔も見たくと度々申し、また平七に俳諧相教へ候素朗と申す暫間かたぎの男も、彼是とふさはしき縁談申入れたる事もありなれど、堅くるしき性分の男にて、兎角俗に申す偏屈といふ氣味合も聊有之候より、何處の娘ば美しく、其處の娘は利發なりなど申聞かせ候ても一圓合點仕る様子も無く、頼と取り合ひ申さず、自然のびくになり居り候さればとて、宮通ひ致すやうの事も無く、酒の友も無きまゝ浮きたる事も覺えず年を過し候。男振りの悪からず、人品も立上り、家こそ富まれ名譽も取りたる男なり、身持ちも宜敷、火にも盜賊にも奪はれぬ身の寶を持ち、むづかしき家族も無き事なれば、案の外に敷銀付きたる良き女なも迎へ得るべきに、其様な談合は有りながら其様な事は無くて打過ぎ候ば、一は氣象偏屈なるためも候べけれど、一は鶴屋定阿彌方にお濱と申す年頃の娘これあり候て疾より平七に數々深切を盡し、平七もまた憎からずおもひ居り候ために候。お濱は定阿彌夫婦の大の秘藏にて女の諸藝にも拙からず、氣立も柔和に、美しさは百人の女の中に立ちても第三第四とは下るまじきほどの女にて、商家とは云へ豊富な

る家に生ひたちたるなれば、心の持ちかたも賤しからず、口頃平七を父母はじめ一家のものゝ宜敷噂致し候を耳にし、又自身平七の人柄を見及び、何時と無く慕はしき人と思ひ染み候由にて、別に際立ちたる事ありて夫より思ひつき候。とには無之、平七方の註文の品の催促など鶴屋方にて致さればならぬ節は、平七を大切に致し候より店の者なぞ遣はし候て癩癩の平七に腹立たせ候ては宜しからずと、定阿彌仲進一を遣はし候習例のところ、進一他出の折などは、心やすき間柄とて、小者相添へ、娘を使者に立て候事度々の事に有之、自然右様の場合より、お濱平七相互に物いひ交すことの數も重なり、勿論平七母妹も居り候狭き家の事なれば、いやらしき事などは夢にも無く候へど、互に、つい通りの人に對ひ候やうにもおぼえず、次第々々になつかしく存じ候に立到りたる譯に候。裏に、是の如き事さへ候なれば、平七が他の人々の需求にはすべて應ぜず、立派なる彫師の格はありながら外見には鶴屋抱への職人の如くなる有様にて満足いたし候も無理なき事に候。忍ぶとすれどあらばるゝは戀の常にて、平七母は、鶴屋娘の我が憎に深切にいたし候を見て、平七妹とも内々申語らひ、鶴屋身代今少し宜しからず候

後藤氏に金乗といふ人ありて年猶若く技倆も
 さまざまにあらねど、名門に生れたる徳とて世
 人の用ゐるも大方ならず。其人伊勢の大廟に詣り
 旁々京阪を遊覽せんとの思ひ立をもつて、公邊
 をよきほどに取り繕ひ、忍びやかに用人の遠藤
 二平以下三人を引きつれ、道中帥といひて其
 頃は旅行中の嚮導と保護とを任とするものあり
 し其道中帥代りに相成るべしとして自ら申出でた
 る江戸の刀小道具屋備前屋宗古といふものを先
 立として江戸を出發し、ゆる／＼東海道を遊び
 行きて宮より尾州名古屋に立寄りたるは、圖ら
 ずも平七の身邊に冷き風の吹き初となり申候。
 宗古といふものゝ自ら好んで金乗に従ひたるは
 勿論後藤氏の歡心を得んことを欲する念の熾ん
 なるよりの事にて、世馴れざる大名風の金乗に
 自己の力によりて種々の愉快を與へ、其十分な
 る歡心を得置きて徐ろに自ら利せんとする事な
 れば、道中一切の費用も殆ど皆自己の手より出
 すを辭せず、たゞ金乗が興味を感ずることの多
 からざらんをのみ懼れたる程なりければ、金乗
 が宗古を二無きものに思ひたらんは云ふまでも
 無き事に候。宗古は三都に聞えたる商人にて、
 極めて愚ならぬものなれば、一方には少からぬ
 金銭を費して、東海道を行く／＼金乗が歡心な

收めながら、一方には神輿を擁して威を揮ひし
 山法師の如く、至るところの驛の同業者を訪ひ
 て自己の勢力を示し、今後愈々商業上備前屋
 宗古なる者に依り憑むことの利益多かるべきこ
 とを各同業者に解せしめて、而して自己に利益
 ある各般の約束を取結びつゝ、東海道を行く行
 く自己の商業を擴張し鞏固に行きたりしは、
 まことに恐るべき才氣の男なりしと思はれ候。
 是の如くにして金乗一行の宮にさしかり候
 處、宮は葺爾たる小市論するに足らねど名古屋
 は江戸より京に至る間に於て二無かるべき大市
 なれば、所謂東海道にはあらねど、少許の道
 を町續きに入り込むのみの事なれば遊興多かる
 べき名古屋に一二泊し給ふべしとの宗古が言葉
 は直に金乗を名古屋に導き入れ候。これ名古屋
 は商業上大切なところにて、宗古に取りて
 は最も必要な地なるが故にて候。鶴屋定阿彌、
 藤屋藤兵衛二人は思ひ寄らぬ貴賓と大賈との來
 遊に會ひ、默視すべくもあらぬこと勿論に候。
 藤屋は平生鶴屋を凌がんとするの念盛んなれ
 ば、及ぶ限りの力を盡して宗古に媚び、金乗の
 從者に媚び、用人に媚び、而して盛衰を張り歌
 舞を演じて一行を款待し、金乗の臨席を得たる
 を悦び、其酒杯を得たるを悦び、宗古が甘言を

悦び申候。鶴屋方にては備前屋とは從來多少
 の取引もあり、且ば安堂平七を自分方抱への職
 人の如くにして獨り占めの利を得居る以上は、
 愈々平七評判を宜敷するに従ひ利得多き譯故、
 幸の折柄、宗古如き力ある商人を取り込み、
 世間へよしなに吹聴し貫ひ度、また幸に金乗の
 一ト言をも得ば平七の名譽自分店の得との考へ
 より、藤屋に劣らぬ響應の支度と云ふに、か
 かる事には物馴れたる俳諧師素朗といふを頼み
 て一切を任せ、いよく明日は鶴屋が前津の下
 屋敷にて、藤屋が響應とは殊さら引違へて、わ
 びたる中に十分の奢侈を含ませ、江戸の人の腹
 を割るべき底いたりの馳走をせんと手筈一々抜
 日無く定まり候。素朗趣向には、先づ座敷の飾
 りつけ庭のかゝり露地のさまでそれ／＼一ト
 風情あらせ、茶事の間に物蔭にて名古屋の一つ
 振りの法師共に三曲をわざと忍びて奏でさせ、
 さて一ト通りの茶終りて後段といふ時、随分飲
 食に景氣引立つべき趣向を見せ、酒八九分に廻
 りし潮先何と無しに鶴屋娘が演を綺麗びやかに
 出で立たせて席に出し、安堂平七をもそこに現
 げさせ、自分と共にまた長からぬ曲を三人し
 て演ぜんに、酔眼に女を見ることにたり、先刻
 に巧みなを聞きて何者ならんと思へる奥句の

が技にさへ心を寄すれば愈々お濱が愛を得、お濱はまた愈々其戀人をして歩みを技藝の路の上に進めしめんことを祈りさへすれば愈々平七が愛を得るといふ場合に立至り候。愛情は技藝を鞭ち、技藝は愛情を激まし、平七は溢るゝばかりなる満てる悦喜を胸の奥底に湛へつゝ、燃え立つばかりの熾んなる勇氣を血の中に漲らして、吸ひ込まるゝやうなる技藝のおもしろみの中に身を没しながら製作に従事いたし候。其作は愈々精しく且つ愈々美ばしく、見るものをしめて凝視め居る間にうつとりと見惚れしむる程のもの三つ四つならず出来候。評判は非常に高まり、一作一作ごとに段々宜しく相成り、此分にては恐ろしき名人にも相成るべくと人々申囃し候が、中にはまた人を褒むることの嫌ひなる男の、かやうなる作者は中折れするものなり、今に見られよなどと、嫉妬心よりして惡ざまに申しなすものも出づるほどに候ひしと申候。平七評判かくの如きにつけ、鶴屋方にて平七を大切に致し候は一倍にて、これは利得づくにて候が、今はたゞ平七が鶴屋の手を離れ去らんことなのみ氣づかひ居り候。前述の如き事のさまなれば、平七に於ては勿論自己が名の揚がりたいばとて自ら思ひあがりして鶴屋の手を離れ

自立して高く標置せんなどいふ考は更に無く候が、たゞこゝに彼の藤屋藤兵衛のみは平七が名の高まるにつれて鶴屋の利の大なるを見、心ひそかに面白からず思ひ暮らし居り候。

五

軟かにして暖い風のみは長く吹き續かず、好もしき月日は却つて短きものに候が人の世の常に候へば、平七も穩かにして樂しき運命の中にのみは朝夕を過ごすことを得ず、冷き風に吹かるべき時に差しかゝり候と申すは思ひもかけざる人の名古屋に來り候より起り候事に候。彫金一遣は御承知の如くさまゝの流派これあり候が、其中に於て最も勢威ありて榮え候は後藤氏の系に御座候。これは先祖祖傳以來十數代連綿として好き地位を占めたる積年の勢威により、また支流門末に幾許の名工妙手を出したる徳により、且ば公にも輕からず用あられたるため、世人の後藤氏一系を信すること一方ならざるのみならず、鎗盤を手にするものゝ尊むことも實に一方ならざることにて、斯道の棟梁と仰ぎ敬ひ居り候。まして刀劔小柄目貫道具類を扱ふ商人輩の如きは、身分の相違もこれあり利害の關係もこれあれば、後藤氏のためには如

何なることをなさんをも厭はざるまでに崇め尊み候。身分の相違とは士分と素町人との相違に候。利害の關係とは、後藤氏先人の作品なることを證する折紙といふ者の有無は其品の價の高下を生ずるに、所謂折紙といふものは徳乘以來後藤氏より出すところのものにて、天下に只後藤氏のみ其特權を有するなればに候。勿論後藤氏を外にしても鑿工には奈良氏あり横谷氏あり土屋氏あり濱野氏あり、名工の一世に重んぜられて一流の源をなせしもの無きにはあられど、後藤氏といへば其の勢威特別にして、衆星も光なきにあらねど月の明らかなるには比べがたきありさまに候。されば後藤氏は地位と名譽と利益とな俗世界と技藝界とに跨がりて占め、一門一族各處に相應の勢力を有して繁榮し、本末宗支相助けて拔くべからず動かすべからざる形勢をなし居り候。後藤氏の榮斯の如くなれば、縱ひ意地強きものなどは心中に不平を抱くことありとも、口へ出して後藤氏を惡くいふ如きことをする者無く、たゞ々々唯伏なれしとするのみなれば、まして大抵の工人の如きは、萬々一にも自己が製作の後藤氏の眼に觸れて一片賞讃の辭を得んことを畢生の名譽として望むほどの事に候。

平七は大に憤り、町人にせよ由緒ある家の娘を
 強ひて我が慰みものになんなどとは悪き申候な
 り、家柄を言ひ立てなば日本神國のもの誰か神
 の御末にあらずらむ、先祖が好き折に生れ出で
 てたまへ一道の祖となりたればとて其子孫を
 世の珍重するだに過分なるに、我から思上りて
 我儘をいふ事奇怪なり、されど鬱元につく世の
 慣例なれば、關東へ下りて奉公し給はんも誰か
 悪しといふべき、見るかげ無き自己如きは過め
 んともせず遮らんと云はれば心のまゝにした
 まへと、ひとりごとを云ひ候故、娘も愛ひ憤
 りて、露も父のいふところを取り用ひす候。鶴
 屋も娘の剛情に弱り候て、自然宗古への返辭明
 らかに致し難く困却したる折柄、後藤家の用人
 遠藤二平新に來りて宗古が遲滞を責め、且又鶴
 屋に逼り候故、定阿彌進退殆ど窮し、悴進一の
 言を用ゐて明らかに斷り切らんと一度は考へ
 しが、今更左様致し候ば、宗古の恨も惡敵、又
 返報も推測らるゝ事故、一日一日と酒食金錢を
 以て遠藤を紛らかし置き候其中、お濱の平七に
 心を寄せ候事情も明らかに相分り、愈々親心の
 遺溺無く苦み候。遠藤は主人の命を以て來り居
 り候ものゝ、所謂用人根性にて金錢さへ得れば
 主人の都合は差して省みざるものなれば、鶴屋

方の事の運のつかずして日を経るを却つて自己
 に利得ありとして悦ぶ方なれど、宗古は遠藤の
 如き難爾たる者なれば、定阿彌も宗古に對し
 ては曖昧の言語を以て纏繞し置くことを得ず、
 遂に打明けて事情を述べ、其智に依るかたを得
 策と考へ、一日有りのまゝを語りければ、宗古
 は打笑ひ、那家の娘も得て我が儘を言ふものな
 り、一々取り上げんには親といふものは世にあ
 る甲斐もあるべからず、談の様によりて考ふる
 に不行跡のありしといふにもあられば、其許娘
 と平七との間を引き裂くとも惡念の事あるべか
 らず、心配はすべて夢の如くなるべし、一年も
 後は其許必らず初孫の面を見ることを得べく、
 其時此宗古を恩人として三拜したまふべきこと鏡
 にかけて見るごとし、平七とやちん喪職人、如
 何に思へばとて指もさし得るものにはあらず、
 殊に金衆殿は奥方去年亡せたまひて、今は猶定
 まれる奥方も無きにより、お濱殿御奉公といふ
 ものゝ其實其許は後藤家の岳父とならるゝに同
 じければ、娘の意に従はるゝにして、喪職人
 を婿にせらるゝと其利執をや、推して見給へ
 かし。また口へ出してはもとより得云はざるべ
 きほどの喪職人の恨怨を受くると、後藤家より
 睨まれ、此宗古よりも面白からず思はるゝと、

その損いづれが大なると思はるゝや、この二
 つのかどを以て娘御を矢管がけに責め給はんに
 は、發明なるべき娘御の泣くゝその許の意に
 従はんは必定なり、我が子に好まぬことを強ひ
 るは親の心よりは悲しきことなれど、年ゆかめ
 ものゝ好ましと思ふも好ましからずとおもふも
 頼みにはならず、やがて移りかはるものなれば、
 年若きものゝ泣きも笑ひも斟酌するには及ば
 ず、かほどのことを心得たまはざるべきその許
 にはあらずるべけれど、兒の愛に惹かされては
 分別も暗くなりたまひたるなるべしと、たくみ
 に説きつけ候。定阿彌はこれによりて愈々無理
 壓しに仕ても娘を關東へ遣らんとかんがへつ
 き、まことに後藤氏に妻女も無きことなれば、宗
 古が言に従ひたる方、娘のためにも行末よろし
 と覺悟の胸をかため、何とあつても關東へ行か
 ずでは叶はざるやうに娘を喚びつけて説き聴かせ
 候。家のため父のため、我が身の剛情を書ひ徹
 さんには非常の不利の來るべしとのことに孝心
 深くお濱は一方ならず痛心をせしが、遂に健氣
 にも我が私のおもひを棄てゝ家のため父のため
 江戸表へ下るべきに心を決め候。其日以後の面
 會と我が心を思ひしめつゝ平七を訪ひ候。平七
 は素朗といふものゝ口より種々の事情を聞き知

興のはすみなり、必らず喝采の聲は義理にも掛かるべし、左すれば其圖に乗つて平七は如何様の幸運を得べきやも知れず、幸ひ平七が尺八を吹き、我が三絃弾くも都合よし、時の模様次第平七をばこれ／＼のものなれば、何分よろしく願ひますと云はんには、世にいふ「はめ」にかゝつて何のやうに最良にして呉れようも知れず、宗古も平七が腕は知つたることなり、悪くは云はじ、ほめられぬにしても損は無し、下々には論無し、黄色なものさへ遣はせば済むべしとのことなり。鶴屋亭主は娘自慢なり平七に箔をつけたきなり、二々道かけて思へるところを素朗に見透されて、圖星といふところを持出されたる事なれば悦ぶこと限り無く、みづから娘を説き、平七に説きて、かく／＼せよ、かく／＼し給へ、と云ひけるに、娘は親のいふ事とて辭むべきやう無ければ直に其言葉に従ひ、平七は聊か悦ばざりしが定阿彌が頼むやうにして云ふに素氣無くも辭みかね、しる／＼承諾致し候はかくて其日素朗の考へ通り凡ての事は行はれ、後段に至りてお濱平七素朗三人の合奏も濟み、はや寛きたる席の事とて喝采の聲も期したる如くに起り候。お濱の珍重されし事は非常に候。金乗はや、放心の態にてお濱に見惚れ候か、宗古は如

才無く若き人の笛を褒め候ひけるより、我が娘を褒め囃されて嬉しさに面を紅くしたる定阿彌も心に掛けたる事は忘れず、こゝぞと半ば宗古に對ひ、半ば夫となく金乗に對ひて、此仁は御聞及びもござりませうが安堂平七殿と申されまする、といひかけゝるに、酒には酔ひたり放心はしたり、且又全く安堂平七が名は知り居らざりし事とて、金乗心無くも、安堂平七と云ふは何をする人、と宗古に尋ね候。餘り粗忽なるものいひなりし故宗古も氣の毒に思ひ、當時名高き腕利でござりまする、と袂を牽きながら言疾に申しけるに、フム腕利といへば町彫に其様な人もあつたかの、つひぞ聞かなんだ、といひながら平七の面を視候。年若く心脆き平七、何をすると云はれしただけにても十分胸痛く覺えしに、又町彫に其様な人もあつたかのと塵芥の如くあしらはれて、席にも堪へぬ苦しさを覺え、何故斯る席へ出し事ぞと悔み悶え候。鶴屋も之には少々驚き、宗古も少々間のわるき思ひを致し候が、平七の穩やかに濟ませてよき程に退き去りし爲め、事無く其日は果て申候。

六

貴賓も大買も満足して名古屋を去り、藤屋も

鶴屋も満足して二人を送ら候後、程歷て宗古のみ突然として鶴屋をおとづれ候。定阿彌は何事とも思ひ寄らねばまづ宗古を奥まりたる室に請じて寒暖の挨拶などするに、宗古は満面に笑を湛へて、御悦ばしき事の候、後藤氏其許の娘を執心に及ばれ、京阪遊覧の中、數多色ある女をも見られたるに眼移りし給はて、切に其許の娘御の事をのみ云ひ出でたまふ、これに因つて我宜しきやうに取計らひ、江戸表御屋敷へ其許娘御を件なひまゐらすべき旨を申し、御歸るさの伊勢路より立別れてまゐりたるなり、其許の福は羨むべし、疾く我が云ふところに付きて娘御を御奉公に出さるべし、といふ。これには定阿彌も驚きて即答に及びかねしが、願うて得がたき幸を若し強ひて拒まば思ひ設けぬ禍を受けぬにしも限らぬを、何ぞいたづらに躊躇ふべきとの、宗古が詞に定阿彌はほと／＼心を定めたりと申候。きりながら縁邊の事なれば、妻娘をも呼びて一應此事を申聞かせしに、娘は第一平七が事を心の底深く思ひ居れば、父の辭に従ふべきやう無く、父の傍を遠く離るゝ事の厭はしといふを口實として、江戸へ遙に奉公せん如きは思ひも寄らずと泣き叫びて申し取り、且つ隙を見て平七方へまゐり、右始終を語りければ、

七

平七信俊はかくして運命の神に愚弄せられ、お演は人世の勢利の犠牲にせられたりたり。其後の事は悲酸、又悲酸、多く語ることも好ましからぬ事に候が、平七が不幸に沈み行きたる層一層のありさまの、よく順序立ちて而も道理ある次第は恰も巧みな作り物語の如くなれば、聊かこゝにその最後に至る迄の道行を述べべく候。前にも申せし如く平七と鶴屋との間を、藤屋藤兵衛の指圖によりて俳諧師素朗といふもの不快にせん不快にせん隙さへあれば譏言を逞くしたるは、畢竟鶴屋とさへ疎々しく相成らば自然平七が藤屋と親しきに至るべきは觀易き勢にて、然すれば平七が作品は藤屋の手に落ちて藤屋の商品となるべき譯に候。これによりて藤屋が鶴屋と平七との間を裂かんと力めたるは一日にあらざるに、時は來り機は熟して鶴屋は強ひて我が娘を東に去らしめたるより、痛く平七は自ら樂まず、鶴屋の名を聞くにだに不快しとせざるに至りければ、こゝなりと素朗は平七に媚びて鶴屋を罵り、平生陽に尊みて陰に役し、不當の利をば卿の技倆に藉りて獲ながら實は卿を我が肆の職人なんどの如く世間に吹聴し

居たる鶴屋の振舞を心あるもの、憎まぬは無かりしなどと、虚實ともに散々に鶴屋を云ひ做せしかば、さなきだに鶴屋が勢利にのみ就きて、年來の關係ある自己をば塵芥の如く見做し、又人の親らしくも無く我が娘のお濱に無慈悲にして一點も情を汲まざる其心事を惡み斥け居たる平七・素朗が毒舌に簸蕩せられて益々鶴屋を惡むの念甚敷、利を主とするは買人の常とは云ひながら餘りなる仕方と、お濱戀しきにつけては其親怨めしく、後藤憎きにつけてはまた定阿彌忌々しく、明け暮れ鬱々として口にくそ出され失望落膽の境に遺溺なきおもひを狂ひ立たせ居たるが、お濱は既に嚴重なる監護の下に東へ送られ、備前屋宗古等は影も無く、定阿彌もお濱と共に東行せしむ、未だ歸られれば、平七が手中の明珠を逸したるやうに思ひて惘然として日を送るも無理ならぬ事に候。藤屋は既に平七が鶴屋に對する怨よりおれの方に同情を得たらんとおもひたるに、平七は鶴屋を惡むことば惡みたれど鶴屋を惡むと共に、おれの職業をも等閑に付してまた顧みざるに至り、鎚を手にせんとし鑿を手にせんとせず、たゞ沈思して時に長太息するのみの人となりたれば、さらに平七が作品を得るの場合も無く、いたづらに素

朗をしてむなく婦を舞はせしめたるに止まらんとするの狀態に陥りたり。されど藤屋藤兵衛は賢からぬ男にあらざれば、平七が技倆に於ても人物に於ても一轉歩して上進すべき機は實にかゝる失意の場合に存し、また一轉歩して惡路に墮落し、救ふべからざるの悲境に沈淪するも實に又かゝる場合にあることを知るが故に、平七を激して奮發せしめ、其技術を進ましめ、其人物を高からしめんと工夫すること甚だ切に、これを以ておのれは利益と名譽とを得んと計れり。一日藤兵衛は自ら平七を訪ひて、目のあたりに鶴屋が技倆あるの士を遇するの道に於て足らざるところありしか慨さ、恭く平七に自己が同情を寄せ居る事を十分に表したる後、後藤氏が祖先の餘光によりて今日猗彫金の道に於て好位地を占め居る事の故無き事を主張し、而して繼つて後藤氏の先祖以來名工巧手の續出して做し出したる功績の甚だ大なるを説き、今の後藤氏の取るに足らざればとて、其祖先等の遺したる光の他の者に掩はれざる限りは、世に好位地を占めて殆ど龍斷の利を獲るも咎むべからざるに似たりと辯じて痛く平七を激したり。平七は近來後藤氏の名を聞くに思はしと思へるに、今おのれに少からぬ同情を寄せ居ると見ゆ

り居りしが、素朗といへる男は藤屋にも出入致せるより、丁度此頃藤屋の依頼を受けて平七と鶴屋との間を割くべきやう骨折らんと心掛けたる事として、盡く平七をして鶴屋亭主の無情を憤らしむべきやう様々の事を云ひちらしたりければ、お濱心中の曲折をも聴き取るに及ばずして、とても瘦職人の我等なれば浮世の事は知るべくも無く、暗き谷の底になりと怠り寝に寝て一生を過ぐすべし、世に榮ゆる人の關東へ行かるゝとも九州へ行かるゝとも知る事にはあらず、と平七は恨みひぞりて取り合はず。平七妹、母も同じく素朗の毒言を聞きたる事なれば、お濱を榮華の襪元にのみ就くところの女と心の中に賤みて取り合はれば、こゝにお濱は、父に對ひて一度定めし覺悟をまた翻へし、平七に對ひて新におのれの眞情を打ち出し、今は我が身をば如何にせば我が世に活くる甲斐のあるべき歟をも知らず、如何になりとも君がさし圖のまゝになり、我が心のまこととを、身を棄てゝ君の知るべくば身を棄つべし、また我が心のまこととを、親に背きて君の知るべくば親にも背くべし、兎にも角にも君が仰するまゝに身をなすべければ如何やうにも君が御心まかせに教を賜へ、と言ひ出したり。折柄平七が母並に妹は

二人をして憚る所無く物語りするの便を得せしめんがため特に席を避けて外出したりければ、一室の中はたゞ平七とお濱とのみなりき。かゝる際にかゝる機會を若き男女に得せしむるはいと危きことにて、危険なる相談は數々かゝる時に成り、危険なる結果は數々かゝる場合に生ずるものなり。平七は劇しくお濱を一旦は怨みしものゝ、斯くお濱に云ひ出でられては殆ど自ら處すべき道を知らず、愚にも極む當惑したり。たゞに一個の男兒としては、勿論おのれに情を寄せたる女を見棄つべくもあらねば、一體の事の末は野となれ山となれお濱と共に奔りて、薪伐るべき林の中、魚漁るべき海の隈にも家を構へて身を潜むべきか、乃至は腕相糾ひ眼相照らして甘んじて相對して死するか、二つに一つを取るべきなれど、平七はたゞに一個の男兒としてのみおのれを見ること能はず、人の子なり、人の兄なり、おのれ分別無き行爲を爲して母を苦め妹を苦むることを敢てせんは、人の子、人の兄としては爲し難きことなれば、さてお濱がかく身を委れて我が言に任せんといふに至つては、平七絶體絶命の地に陥り、若し我が身二つあらんには、一方には母妹を養ひ、一方にはお濱と共に奔りし又は

死にもせんと思ふのみ、答ふべきところを知らず茫然と力無き眼を強て睜開して可憐なお濱を視れば、お濱もまた口には男のために親を顧みざらんとこそ云ひたれ、良心の責め鼓の音胸の底に轟き渡りて、不孝の女たらん其咎の怖ろしきを覺ゆること切なるまゝ、同じく茫然として力無き眼を強て舉げて福相無き我が情人を視るのみ。二人語絶え氣塞つて一室の中風も動かず、正直にして美しき悲しみの何時如何にして終るべしとも無き時、けたましき物音して人の來るけばひしければ二人ともに我にかへりて、誰ぞと見るに鶴屋が店の者にて、定阿彌が命を受けて兎角の論なくお濱を伴ひ歸らんと特に來りしなり。お濱平七は談も半なり、事に落着は猶つかぬなり、お濱は主人筋の威を以て、平七は平生尊敬せられ居る習を以て、壓しつけわざに其男を立歸らしめんとしけるが、男は豫め思ひ設けてお濱を迎ひに來りたるなれば屈すべくもあらず、遂に強ひてお濱を伴ひて鶴屋に歸りたり。平七が其時の心の中如何なりけむ推測るに餘りありといふべし。程經て平七が母と妹との立歸りたる時はたゞ閑室に平七の呻き轉び居るを見たりといふ事に候。

むるまゝ、病ばいよゝゝ募りて殆ど盲目同様となり、やがて眞の盲目となり、憐むべき技術家は日月の光の惠寵に洩るゝ人となり果て申候。こゝに至つて平七はばや全く世に願望を絶つべき場に臨み候が、生憎に後藤氏の祖先等が英靈底の手腕によつて成されたる佳作の各種は猶技術上の烈々たる光輝を放つて常に此の盲目技術家の眼前に現はれ居り候。盲目技術家は暗々たる天地の間にたゞ我が戀の敵たる後藤氏の祖先等が放てるゝところの光輝のみ眼にして、心はこれがために燃え立たしめられ、血はこれがために沸え立たしめられ候。時あつて後藤氏の祖先等が佳作の獅子の暗黒の空に躍り、又時あつて其龍は暗黒の空に躍り、而して各々其爛たる技術上の光を放つて誇るが如くに縦横すれば、無限の感情を以て平七は之を打護り候が、末には戀人の姿の想像に浮ぶと同時に、或は獅子あらばれ或は龍あらばるゝに至り、また或は獅子或は龍を眼前に認むると同時におのづからお濱の姿を認むるに至つて、平七終にみづから此世に長く生くべくもあらぬを感ずるに至りたる或日の事、妹お歳は他人に囁まれたる衣服の裁縫成りたるを以て其を肩げんと外出したる夕暮方、忽然としてお濱の聲は訪づるゝ人稀に

なりたる平七が家の戸口に聞え候。さりながらお濱のこゝに來べくもあらすと思ひ留めて答へせざりしが、お濱の遂に得堪へて入り來り取り縛るに及び、平七は初めてお濱が東の都を脱し去り、辛苦してこゝに來りしを知り、お濱はまた望ありし俊秀の平七を、おのれの故を以て盲目となるに至らしめし由を知り、天道の是非を一夢に委して、未生の以前に二人共に歸らんことを決定し、二人相對して業苦の根本たる二堆の血肉團を荒れたる一室に横へ畢り候。以上は平七一生の始末に候。

萌えて秀でざるものより、秀でゝ實らざるものあり、才人美女多くは薄命、既に此才を愛す、誰か彼の天を恨まざるものあらんや、噫。

(明治三十一年八月作)

其藤屋が、猶後藤氏を争ひがたきものゝやうに云ひ做すを聞きては愈々いまゝしさに堪へず、後藤氏の祖先に何程の技倆ありたれば左までには世に尊まるゝぞや、と怒りける。これを見て取りたる藤屋は時こそ至りたれと、猶言葉をおだやかにして、全く他の人々後藤氏の祖先等ほどの技無ければ如何とすべからず、かりに今すぐれたる技倆ある人の出で、其人の作品と後藤氏の祖先等の作品と比べて今人の作後藤氏の祖先等の作品を凌ぐに至らんには誰かまた好んで後藤氏を説くものあらんや、たとへば君の作にして古の祐乗、乘眞、徳乗等の作を凌がば、やがて人の後藤氏を説くもの無きに至らん、たゞ世に骨無き人は多く、膽有る人は稀なれば、後藤氏の光を掩はんなどいふ事は、夢にもおもふもの無く、後藤氏に對して叛旗を翻へすはさて置き、わづかに後藤氏の光を借りて自ら銜燿せんと欲するものゝみなり、直言するをゆるしたまは申すべきが、君を過ぐる日後藤氏に見えしめたりし鶴屋が意は、一言なりと後藤氏が君を賞さば君の身に黄金の箔の光りを添ふ道理として其聲のかゝらん事を私に希望したる事なり、世の勢、皆かくの如し、後藤氏の長へに世にはびこらんも怪むに足る無し、と

述べければ、平七は勃然として、鶴屋がおのれを後藤某の面前に坐せしめし當時の意中を料り知るや否や非常に嚇怒し、羞惡の念に堪へずして面色を變じ、誰かまた後藤氏の祖先等を凌ぐ能はずと云はんや、人はいざ知らず我は誓つて後藤氏が祖先等の光輝を奪はむ、祐乗等もまた鬼にあらす俤にあらす、汗を揮ひ涙を揮ひ、精を積み神を注いで而して後始めて得るところありて、所謂一家の手法を成せるのみ、別に企て及ぶべからざるころあるにあらず、われ後藤氏が祖先等の光を奪ふ能はずんばまた鑿鑿の手にせざらん、と非常に激昂したる平七は火を吐かんばかりに奮ひ立ちたり。之を見て藤屋は大に悦びて、其必ず成功する時あるべきを述べ、燃えたちたる技術家を煽動して歸りぬ。是より平七は自ら技術三昧に入りて戀の破れの苦惱を忘れ、而して後藤氏の祖先等が光輝を奪ふべきほどの技術の光輝を自己に具せんことを望みしが、悲むべきは戀の敗れの苦惱を如何にしても忘るゝ能はず、従つて心二途にわたりて専念なる事を得ず、またお濱が緩密なる注意と温き愛情とによつて造りくれたる後藤氏の祖先等が名作の面影なる彼のヤニガタ模品を見ることに、各種の名作が放つところの技術の光輝は烈しく

平七が眼を刺して、平七が心を一刻も平らかならしめず、たゞ後藤氏に對して平らかなる能はざる事情を有する身にて、我が情人の手によつて與へられたる模品に對し、其原作が有せる光輝に射られて、而して己が意いたづらに高くして腕遠く及ばざるを感ずる時の平七が心中、實に憐むべきも亦甚しく候。かくて日々送る中老病を以て平七母は歿し、平七が家の貧は一時に歩を進め候。されど猶平七は後藤氏の祖先等が佳作の模品に對して、盡日怪光を放つところの恐ろしき眼を睜けて打眺むるのみ、別に自己の作を出して衣食の資を取る事を敢てせれば、貧は愈々貧に立至りしが更に之を意とせず、終に妹のお歳が針仕事の微なる収入の中に平七も衣食するに至りたり。鶴屋の消息は聞くところ無く、定阿彌との往來は絶えたり、お濱は如何にせしや知るべからず、世人はまた平七の名をいふものも無く、冷やかにして氷の如き世の態は、甚くお歳をして世を怨ましむるに至りたれど、却て平七は表面晏然たるものゝ如く、例に依つて跪坐してオシツクエの傍に日を送りしが、其結果は微細のものに絶えず眼を注ぎて睨め暮らしたる爲にや、眼の病を得るに至りぬ。されど病める眼を猶睜開きて例の模品を睨み詰

な様若し堪忍強く少時の難澁を忍びれるなら
 一層勾配の烈しき代り頂上へ達する近道を行き
 ませうかと尋られ。エーまの皮さう仕ようと
 決斷し、又登る一里餘り、樅の木柵の木タモの木
 ドロの木唐松など生ひ茂りて蔭暗く、此山の本
 名木叢時の名は體をあらはして森々と物凄く、
 梢を渡る風に露ばら／＼と領に落ち、顔を撲つ
 空翠は引く息に伴なつて胸惡し。雪に記せる兎
 鹿の足跡漸く減りて、耳に音信し鳥の聲も次第
 次第に絶え、身は攀ち登るの苦しさに汗ばみな
 がら心を掩ひし五慾の塵衣は一枚一枚剥るゝ如
 く、昨日の榮華縱横無盡に神通を逞しくせし第
 六護魔王は眷屬味方を失ひて薄ら淋しく、何と
 いふ事はなけれど世界よりの落武者となつた
 様に心腹せられて、人間老衰の喘五官半死して
 最期に近よりたらん時此境界に似通ふ者あらば
 何程なさけなく如何程力弱く如何程頼み少なき
 者ならん乎とぞ悲しく思ふ時、岩を透すま
 で鏡き鳥の聲眞黒の梢より射出され、ギョツと
 して頸を縮むる途端眼にはくら／＼と湧き亂る
 る唐草様の者見えし。是にてお別れ申します、此
 處兩國の境界即ち頂上也。是より左り手左り手
 と谷を傳ひ下らるれば一つの沼あり、其沼の左
 をまたまた下らるれば片科川の水源、是ぞ坂東

太郎と後に呼べるゝ、それに傍て行れなば温泉
 湧き出る小川村といふに着べし、此處より其林
 まてまだ四里餘少しも人家なし、能々氣を注げ
 て迷はぬ様致されよ、さらばと案内者の云ふに
 又一段の淋しさを増し、今朝の似非勇氣挫け果
 て茫然と見下すに曇り空の日の光り力なく、常
 は見ゆると聞し會津の方の山々も雲がくれて見
 えす、流石に足の爪先付む間に冷を覺えける。
 案内者に別かれて獨り下る覺束なさ。雪省な
 れば滑り／＼、薄ら氷に向臨疵つき、岩角に頬を
 擦り、雪流に埋められし木の枝に衣を裂き、行
 けども行けども迷うたりや沼の邊りに出ず。樺
 の木折りに火を燒き、あたりながら燒飯を取り
 出して食ふに木屑を嚙様にて甘かられど飯を凌
 ぎたれば色々方角を考へ正して進む。元より時
 計も持たぬなれば時刻分らず、頼りと氣を焦る
 中ほの暗くなつて來たれば、是れは大變、又々
 曾て荒山に行き着きたる時のやうになりては叶
 はじと急ぐ程に沼のほとりに來たり。嬉しやと
 思へば日は冬の沒り易く、雪は最早無けれど否
 の底は切れて足は痛し。折ふしアツリと杵の紐
 されて悲しと道の邊に坐りて夫を繕ひ繋がん
 するに、アツ燈の光り幽に動ぐを見付、嬉しや
 嬉しやとたどり行けば、丸木の掘立柱、笹葺き

の屋根したる小家、尙雷の堅き山櫻の大木の根
 方に立り。所からとて時候のかくも變る者ぞと
 驚かれぬ。萩の垣結ぶ丈の事もせずして枝折戸
 の面倒も嫌へるにや、家の榎手に頼一間計りの
 小河流るればかけひして水呼ぶ世話も要らぬと
 見えたり。此様にしても世は渡らるゝ者と有り
 がたく、尙近く寄て火の沸るゝ戸の際に立ち、中
 禪寺の湯元より峠越して道に迷ひし者盡く疲
 れ果て、殊さら夜になりて難儀いたしますが小
 川村まではまだどれ程の道法でござりますか。
 且は雪香を切らして歩み難く困りますに草鞋一
 足御譲り下さるまいかと云へば。それはお氣の
 毒な事小川まではもう二十町ばかり川に添うて
 行かれさへすれば間違ひなし、お履物をお切ら
 しなされては眞に御難儀ならんが生憎草鞋一足
 もない事取かし、然し私しのばき捨の草履にて
 も宜しくば參らせませうと云ふは不思議や、な
 まめかかしき女の聲、かゝる山中に似合しからず。
 されど是も獵師か何ぞの娘ならん、唯弱りたる
 は足の裏痛み憫みて右の小指左りの拇指は生爪
 まで剥がしたれば是より二十町到底あるけず、
 出来る事なら一夜の宿を頼まんと。眞に申し兼
 れたれど小川まで二十町と承はりては疲れた
 る身の中々に歩み難く、痛所さへあれば惘然と

對

髑

體

一

旅は道遠の味は知らねど世は情ある女の事々
但しどこやらに怖い所あり
難い所

我元來洒落といふ事を知らず數寄と唱ふる者にもあらで唯ふら／＼と五尺の殻を負ふ蝸牛の浮かれ心止み難く東西南北に這ひまはりて覺束なき角頭の眼に力の及ぶだけの世を見たく、いざさらば當世江口の君の宿假さす宇治の華族様香煎湯一杯を惜み玉ふとも關はじよ、里遠し露と寝ん草まぐらとは一歳陸奥の獨り旅夜更て野末に疲れたる時の吟、それより露伴と戒名して頓て腕くも下枝を落なば、摺附木となりて成佛する大木の蔭小暗き近邊に何の功をも爲さざる苔の碧みを添へん丈の願ひにて、囁語にばかり滴水とく／＼試みに浮世そゝがばやと果敢なき體上、是れ無分別なる妄想の置所、我から呆るゝほど定まらぬ魂魄宇宙に彷徨し三十年來、自ら笑ふ一生、定力なく行藏多くは業風に吹ると古人の遺されし金句に、歳の市立つ冬の半夜、

蝙蝠鷹々夏の夕暮などは膽を冷し骨を狭く感じを起す事もありしが三日坊主の一時精進、後はゆつたりのつたりにて、丁度明治二十二年四月の頃は中禪寺の奥、白根が獄の下、湯の湖のほとりの客舎に五日井への修業を兼て病痾を養ひ居たりしに、有難き温泉の功、忽ち平癒するや否、丈夫素より存す衝天の氣などいきり出して元來し道を歸るを嫌ひ、御亭主是から先へ行く道は無いかと問へば、どうも此處は行留りの山の中、見らるゝ通り前は前白根奥白根雲の上に頭を出して居る始末、登山は夏さへ六かし、其續き横手の方は魂精峠と俗に呼ぶ木叢峠、此頂上は上野下野兩國の境界、山々折り累なりて當方より越る六里の間に暖湯飲むべき家もなし、殊更時候大分違ひて、大澤徳次良あたりは、野州の名花八汐の眞盛りなれど此近邊はそれもまだ咲かず、況して峠は一面の雪五尺六尺谷間には積り居りて道も碌には知れず、今年になつてから越した人は指の數に足らぬ位、到底遊び半分なぞに行かるべき地にあらず、御客様是非

もなし中禪寺までお戻りあつて足尾とか庚申山とか里近き孫山でも見物致されよとの言葉。おのれ我を都會育ちの柔弱者と侮つたりや、其儀ならば旋毛曲りの根性天の邪鬼の意氣地見せつけ呉れんと詰らぬ事に偽勢張り、股引もなき細歸踏みはだけて、其時何程の事あらん焼飯作れ草鞋買つて來よ、少しばかり難儀でも同じ道を歸るより面白からう、鼻歌を山の神に聞せて越ん。さて／＼途方もない事、雪香ならでは中々凍ゆべし、強てとならば國境まで案内者儼はるべし、然し名産の肉菰奪取つて賢薬にでもせんとの御思召ならば時節悪し、酔興は要らぬ者と昔時よりの數もあるものを。面倒な事愚圖々々せずと我云ふ通りにせよ、案内者は儼ふべし雪香も買ふべしと罵りて裙其の儘にグイと端折り、査しつかりと穿き締め、身の丈六尺許りの樵夫か案内者として心いさましく登りける。四五町ばかり來て見れば成程人は嘘つかぬ者、一面の雪表面は凍りて下は柔なり、段々と登り行く勾配急になり屢々滑るに少し萎みて、見れば案内者は狼の毛皮の沓はきて鐵雪橇に踏答へ悠々と歩む憎さ。負じと我も息張りを追付ば其大男ふりかへりて。此通りの雪なれば道も何もある譯では無ければ谷を傳はりて行くだけの分、あ

口惜く問出づる詞を知らず、様々考ふる中女は縋ひ縋ひ了りて其まゝ疊み置き、爐の傍に來て我としむかひ笑まし氣に。若き御方の何故の御旅行か知れど定めし面白き事もござりましたらうにチトお聞かせなされと、却つて向うより切り掛けられ。イヤ〜我等凡夫の癖に山あるきは好なれど歌の一つも讀み得れば面白き所あつてもお話し申す言葉拙し、お前様こそ見受る所御風流の御生活、由緒あるお方とは先程より思ひましたがさりとては盛りの御身を無殘の山住み、如何なる仔細か御話しなされてよき事ならば。ホ、中々の事賤の女に何の由緒のありませう、唯妾しは妙と申す氣輕者去歲より此處に移りしばかり、おまへ様は。露伴と名乗る氣輕者、扱は氣輕と云はるゝか。如何にも。何の上の氣輕。我は何とも知らず山に浮かれ水に浮かざるゝだけの氣輕、おまへ様は。浮世を厭ふだけの氣輕。ハテ怪しからぬ、浮世を眞誠に厭ひ玉ひなば御頭をもごつそりと剃り丸め玉ひ、墨染の衣に御身をやつされ、朝は山路に花を採り夕は溪川に關伽を汲みて供ぜられ、看經念佛の勤めあるべきに珠數さへ持ち玉はざる許りか、昔しの人ほ美しき面に梵鐵當たるさへあるに、お前様は誰に見よとての黒髪、油こそ無けれし

なやかに、友仙の御下着紅こそなけれ仇めかしく色作らせらるゝ事疑はし、世を疎み玉ふとは許り、深く云ひ替せし殿御を恨むる筋の有るかなどにて口舌の餘り強玉うての山籠り、思はせぶりの初紅葉あきぐちから濃うなるといふ色手管、是は失禮圖に乘て饒舌りました。アラ此人の口の惜さ、其様な浮たる事にはあらず全く世をば避け厭ひて。マザ〜とした御戲談、さらば世を厭ふとは如何なる譯と押返して問ば。要らぬ事尋れて可憐夜の更なるに御休みなされと身を起して戸棚より出すは綿まづしき瘦せ蒲團かと思ひの外、緋綴子の蒲團、淺黄綸子の搔卷紅羽二重の裏付けて鷹虎の襟、驚かるゝ贅澤。サア御寢なれと我を押やりて、小屏風立てまばすに是非なく話した中途にして。然らばお先へ御免蒙ると横になれば、蓬萊の夢見さうな雲鶴の錦の丸枕に茶を詰めあるやゆかしき香、鼻の頭に立つ不審、どうも眠られゝばこそ、ソツと屏風の外を覗けば爐の傍に尙端然と坐して何やらを讀み居る美しき人形の様なり。一時間も經ど我は尙寢られれば又覗くに矢張動かず、二時間も過ぎて又何ふに女は元の通り、眞夜中頃にも心猶訝えて後先揃はぬ此家の始末を考へながら又覗けば頻りと火箸もて灰掻き起し居れど柴木最早

盡きて爐の暖ならず、木叢峠の麓なれば流石に寒氣を覺えてや、獨り言に温泉にでも入らんと云ひ捨て、湯殿の方へ行きたるが少時して歸れば爐の火は全く細々となりしに尙其傍に端然と坐りたる様、何の用ありとも見えす、全く寢るべき夜具なき故と知れたれば、我男の身として自分ばかり暖まり居るをさもしき様に思ひなし、今暇さめたる振して突と起出れば。御手水かと案内するに連れ、用たして戻りがけ心付たる顔して。お妙さままだおよすか。ハイ。誰人か待るゝ懸か知られど大分夜も更けましたらうに。ホ、御調戲なさらずと能うおやすみなされ。イヤ違ひましたら搜重にもお詫をしますが、お獨り住の御様子、其處へ推して一泊を願ひましたれば御臥床を奪ひましたかとも危ぶみます、若し萬一左様なれば我等こそ男の身、野宿の覺もござれば柱に憑れて眠る一夜位苦にもならざれ、お前様さうして居られては心苦し、寢温もりの残りしは氣味あしくも思しめさんがどうかお休みなされと云へば顔少し赤め。御言葉の通り眞に夜具一揃より持たざれどおとめ申したる時より妾しは斯うして夜を明して大事なと思ひ定めましたれば御構ひなく。それではどうも。さう仰しやらずと。我らが困ります。妾しが困り

思し召て一夜の宿りを許したまへ。それは思ひも寄りぬ事、女子ばかりなればと云ひながら板戸引き開け身體を半分出す女年は二十四五なるべし、後面に燈を負ひて後光さす天女の如く其色の皎々其眼のばつちりとしたる、其肩つきの長く柔和なる、其口元の小さく締まりたる、其髪の今日洗ひたる乎と覺えて結もせず後に投げ掛けて末の方を引裂きたる白紙にて一寸纏めたる毛のふさふさとしてくれざる美しさは人にあらず。おのれ妖怪かと三足ほど退つて覗へば女も我なつくんと見て。傷ましやお前様の風情御足のあちこち怪我なされしか紅き者も見ゆるに御袖も草木に障へられてか綻び切れ、御顔色もいたく衰へ苦し氣に居らせらるゝに成程是より小川まで僅かの道なれど行き憊み玉ふべし、留め難き所なれども世捨人にもあらぬ御方に假の宿りに心止むなとも申し難ければ枉げて一夜を明させ申すべし、強くお斷絶り申すもつらし、いざ爰に御腰かけられよ、御洗足の湯持ちて參らんと云はれて氣味の悪るゝ。今更逃出さんも流石なれば持前のつう／＼しく腰打掛けて有難しと禮いふ中、小桶に熱き湯汲み來りて甲斐々々しく洗ひくれんとするを。是は恐れ入り升ナニ自分で濯ぎます。イエー御遠慮なし

にサア御足をお伸ばしあそばせと問答する暇に指の股の泥まで綺麗に落ちて臺の上にあがり、丁寧に挨拶すれば、女莞爾と笑ひながら。山中なれば御馳走も出来ねど幸ひ小川村と同じ脈の温泉の背戸の方に湧き居れば一風呂御遣入りあつて一日の疲勞をお休めなされ、サア此方へござれ御背中を流しませうか。ハテ狐にでも誑さるゝではないかと内々危ぶみ居る我手を取る様にして。湯殿へと申しても片庇廂雨簾を凌ぐばかりいふせけれど、湯は天然の温泉まことに能く暖まりますといふ口上嘘らしくなく、底まで見え透く清き湯槽、大事なからうと這入れば無類の心持遙に湯元より結構、晝間のつらかりしも忘れ悠々と揚つて来るを待ち付けて。女御召憊うはござりませうが御着物の綻びを縫うてあげます間はなと後より引きかけて呉れるは、ぼてつかぬフラネルの浴衣に重れたる黒出八丈の綿入れ、女物なれば丈ありてユキ無く兩手のぬつと出るは可笑けれど深切かたじけなし、餘程ふしぎな取り扱ひ、どうした運ならんと怪みながら少し煙にまかれて。ハイハイ是はどうも恐縮、御帯にも岩角の苔が付いて居りますれば可笑くとも之をと笑ひながら出すは緋縮緬のしこき。ハイ／＼と帯にして是も大方藤壺か知

れぬと觀念し、座敷へ来て居簾裏の傍に坐る肩へ羽折り呉るゝは八反の鼠小辮慶のれんれこ。湯覺をなされて若しお風邪でも召ては何處ぞのお方に済みませぬと味な口き、どん／＼と柴折くべ自在にかけし銅の沸き立つを取り下して定めし御空腹でござんしたらう、サア御膳も出来ましたがお氣の毒なば麥飯、暖かい丈を取り柄に山家の不自由をお許しなされ、と取り出す蝶足の膳、盛て呉るゝ山獨活の味噌汁香氣施に溢る。禮云ひながら我は甘く食へば女も。妾も御一緒に片付けて仕まひましかと最と無造作に喰ふに膳なく、椀を爐縁に置んとして流石に馴すやたゆたふな。此膳をお用ゐなされと突やれば。そんならおとり膳とやらに。オホ、御免なされと顔も赤めす、宵よりの所業一々合點の行かぬ事どものみなり。さて飯も了りたれば女は我に關はず、手ばしこく膳椀と片付けて火影ゆらぐ行燈の下に坐り、我衣物の綻びを綴くる様、十年も連添たる女房の様に見榮も色氣もなく仕こなす不思議さ。さりとては何物ならん、世を捨てたる女かと見れば黒髪匂やかにして尼にもあらず、世を捨てざる女かと見れば此容色を問ふ人もなき深山の獨り住訝かしく、何にせよ口不調法なる我

二

色仕樹生命危ふき鬼一口と
逃げてまはりし臆病もの
仔細うけたまはれば仔細な
き事

年は今色の盛り、春の花咲き亂れたる様に美
しき婦人と一ツ屋の中に居るさへ、我柳下惠に
及ぶべくもあらぬ身の氣味悪し。然しながら何
千萬人浮世男の口喧しく我を罵り責むるとも、
鐵牛角上の蚊ほども思はぬ瘦我慢の強ければ
こそ此家に止まりて此女とさしむかひに食もた
べたれ談話も仕たれ。素より人間の批判取沙汰
何とも思はざる我も天道の見る前に山中ならば
とて見す知らずの女と同衾する事恥かし。否々
同衾する事少し恥かしからぬにせよ、其家ら
かき肌近く、僅に衣服幾重かを隔て、身の内の温
暖みの互に通ふまで密接合ひて我眠らるべきに
あらず。共に寐よとの言葉かけられし丈にてさ
へ身内顫き慄へ、我舌忽ち乾き、我心かきむし
らるゝ如く、幾年の修行少しの役にたらず、も
だゝと上氣して今遺慾の文一通り口の中に唱
へたりしまでは思慮分別の湧く間なく、正直の
所は胸の中に一點の主意なくなり、婆子焼庵の
公案ひれくりし昔時のやうにはあらざりし。況
や此美しき婦人と咎め手の無きかゝる山奥の庵

中に眠らば中々以て、枯木寒岩に憑る三冬暖氣
なしといふ工合に意を斂めて寂然と濟まし居ら
るべしとは思へず、美人今夜若し我に約さば枯
楊春老いて更に穉を生ぜんとは紫野の大徳一休
様さへ白狀されし眞實の所、大俗の我等賢人顔
したりとて危い哉く、婦女の居ぬ山蔭ならば
羅漢と均しく悟り切ても居らるべし、白い脛見
ては通を得し仙人でも雲の臺を踏外して落ちた
る話あり。若も久米殿其女と同衾したら多分は
底の無い地獄の奥深く墮落せん事必定なり。我
今此美しくし心おしげな女と一つ搔卷掛けて枕
をならべ、仔細なく一夜を明さんとするとも背
合せでは肩寒し山里の夜風透間洩りて一しほ寒
ければと我肩に夜着品よく着せ掛けて此方お向
きなされそれで兩人の間に風が入りてと云は
れては愈々むづかし。あの軟やかなる鬢の毛我
頬を撫でて、花のやうな顔我鼻の先にありては
尙々むづかし。玉の腕何處にか置きなん乳首何
處にか去らん。扱は愈々大事なり、女猶抱て寐
しと同じ心にて我眠らるべきか。叱。若しや夜
着の内人の見ぬ所身動きに衣引まくれて肉置程
良き女の足先腿後など我毛臚に觸らば是こそ。
喝。生死一機に迫る一大事。素より道力堅固な
らず、戒行常に破れ居る凡夫の我、あさましき

心は起さるるにもせよ長閑なる夢は結び難し。
且ば此女眞實に人間か狐狸か、先程よりの處置
一々合點ゆかず。よしや狐狸にもせよ妖怪にも
せよ、人間の形をなし、人間の言葉を交ゆる上
は人間と見るに至當、其人間と共に眠らん事人
間の道理にあるまじき事なり。人間普通の道理
にあるまじき事を恥らふ様子もなく我に逼る女
め、妖怪と見るも又至當なり。妖怪に向つて我
何を言はん。小人は謹慎の禮を以て來り惡魔は
親切の情を以て誘ふ。扱こそゝござんなれ惡
魔め、鐵拳は模糊たる人情を存せず眞向より打
て下して露伴が力量の恐ろしきを知らせて呉れ
んか。噫それも頼み薄し、我不動明王ほどの強
き者にもあらねど、魔は却て摩訶修羅の力を持
るかも知れず、毛を吹き疵を求め草を打て蛇に
會ふは拙き上の拙き事ぞかし。如何に答へん何
と爲んア、思ひ付いたり、昔時は芭蕉も女に袖
を捉へられし事あるに彼默然として動かす、女
終に去らんとする時芭蕉却つて女の袂を捉へ、
こちら向け我も淋しき秋の暮と一句の引導渡せ
しよし小耳に挟んで聞覺えたり。我又好ししく
芭蕉をまなんで默然たらん許りと漸く一心を決
し、胸中には九想の觀を凝らしながら乾坤を坐
斷する夢ひ逞しく兀然と座着すれば女はもどか

ます。マアお前様御臥みなされ。マア、あな
た御寝なれ。其では際限なし、我等男でござる。
瘦我慢致して是より御暇申す、女性に難儀させ
て我心よく眠らば、一生の瑕璣後日朋友の手前
も恥かしく、夜道まだ、樂な事なり。それ程ま
でに仰せらるゝを背き難し、あなたに夜道歩行
せましては、妾の心遣ひ皆空となる事なれば、御
言葉には従ひませうが、それではあなたに寢床
暖めて頂いた様な者、のめ、と其にくるまつ
てあなたを火もなき爐の傍に丸震として、假令
は妾し夢に戀人に逢ふとも面白からず、妙も女
でござんす、妾し一生の瑕璣持佛の手前ばづか
しく、どうしてもあなたを能うお臥ませ申さで
は。其様に言葉廻されてはどうして良いやら
譯が分らず、無骨者の我等閉口しますに。ホ、閉
口なされたら温順く妾しの云ふ事を聞てお臥み
あれ。イヤイヤ拙者の申す通りになされ。マア頑
固に剛情を張られずとも、頑固でも何でも拙者
の申す事聞かるゝがよい。ハイハイ到底あなた
の頑固には叶ひませぬからあなたの申さるゝ通
りに致しませう。ホ、ホ、まあ怖い顔をして。
怖い顔は生れ付です。怒られたの。イエ御厚意に
向つて何の怒りませう、唯少し眞面目になつた
許り。ホ、可愛らしい眞面目に。ハイ眞面目に。

妾し眞面目に申しませう、サア露伴様。何。殿
御の仰しやる事さへ通れば女子の云ふ事は通ら
ずともよいと思はるゝか。何。御自分の御言葉だ
けを無理やりに心弱く妾しに承知させて妾しの
眞實には露かゝらぬと踏らしうおつしやるか。
知らん。知らんとは御卑怯な、サア此方へござれ
御一緒に臥みませう、妾しあなたに御言葉を
立てますればあなたとて妾しの一言を立てて下
さつたとて御身體の解くるでもあるまい汚るゝ
でもござるまいに何故さう堅うなつて四角ばつ
てばかり居らるゝか、エ、野暮らしいと柔かな
手に我手を取りて臂も動かさず平氣に引立てん
とする其美しさ恐ろしさ、我膽も凍るばかり慄
然として眼を瞑ぎ唇を咬み切め、心の中に「孽
海茫茫たり首惡色慾に如くは無く塵實擾々たり
犯し易きは惟邪淫あり抜山蓋世の雄此に坐して
身を亡ぼし國を喪ひ、繡口錦心の士茲に因りて
節を取り名を墜す、始は一念の差たり遂に畢世
贖ふ莫きを致す、何ぞ乃ち淫風目に熾んにして
天理論亡するや當に悲むべく當に慄むべきの行
を以て反て計を得たりとなし而して衆怒衆蔑の
事情として差を知らず淫詞を刊し麗色を談じ、
目ば道左の嬌姿に注ぎ腸は簾中の窈窕に斷け、
或は貞節、或は淑徳、嘉すべく敬すべきを遂に計

誘して完行なからしめ、若くは婢女、若くは僕
妾、憫むべく憐むべきに竟に勢逼して終身を玷
すを致し、既に親族をして羞を含ましめ、猶子孫
をして垢を蒙らしむ、總て心昏く氣濁り賢達さ
かり佞親しむに由る、豈知らんや天地容し難く
神人震怒し、或は妻女酬償し、或は子孫受報す、
絶嗣の墳墓は好色の狂徒にあらざるなく、妓女
の祖宗は盡く是れ食花の浪子なり、富むべき者
は玉樓に簾を創られ、貴かるべき者も金榜に名
を除かる、管杖徒流大辟生ては五等の刑に遣ひ
地獄餓鬼畜生没しては三途の苦を受く、従前の
恩愛此に至つて空と成り、昔日の風流而も今安
にか在る、其後悔以て従ふなからんよりは蚤く
思つて犯す勿きに胡れぞ、謹て青年の佳士、黃卷
の名流に勸む覺悟の心を發し色魔の障を破らん
事を、芙蓉の白面は帶肉の骷髏に過ぎず、美艷紅
妝乃ち是れ殺人の利刀なり、縦ひ花の如く玉の
如くの貌に對しても常に姉の如く妹の如くする
の心を存して未行者は失足を防ぐべく已行者は
移て早く回頭せよ、更に望む、展轉流通し迭に相
化導し、必らず在々齊しく覺路に歸し人々共に
迷津を出しめば首惡既に除き萬邪自ら消し、靈
臺滞りなく世榮達きに垂れん矣」とうろ保えの
文帝渴慾文を唱へける我見地の低き鄙しさ。

の閃めく陰に隠現する女神、とても其氣高き美しき人間の繪師まだ是に似た者も書きたる例しあらざるべし。

荆茨の中に鹿は置きたく無く、鶴は老松の梢にあらせし、目ざましき者尊きもの可愛きもの美しくしき者、皆其所を得させたきは我人の情ならんと思ふ我、あはれ、駿馬は勇士に伴なはせたく、名花の園に蝴蝶は眠らせたし、或歳我旅せし時旅宿の下司洒掃除の時懷中より日本政記一冊落せしを見て心掛ありながら空しく人に僕仕居る其男の口惜き如何ならんと涙ぐみたる事ありし、夫にもまして此女天晴の姿貌むざむざと深山の谷間に埋れ木の花も咲かせず朽果る通り扱も氣の毒。美人所を得ずして樗火に燵ほり草の屋に終るとはなさけなき天道の爲されかた。男兒時を得れば滄海に入ると同じく、既に見識ありて俗情に遠く風流を解して仙境に近づき居る此女、浮世の塵を厭ひて山中に終らん所存か、ざりとては又女の癖に男めきたる憎さよ。女の女らしからざる男の男らしからざる。共に天然の道に背きて醜き事の頂上なり。さりながら女の女らしからずして神らしき、男の男らしからずして神らしき共に尊き頂上ぞかし。今此女の言ふ所最早女らしからず、女

の口より初めて逢ひし我を抱て寐など中々以て言へた事ならざるに。然も乳母が幼稚人を抱て寐る如く我を抱て寐んと云ひし事若し虚誕ならずば此女は女の男めきたるならで神らしき方に近づきたる方外の女なり。然し我凡夫の眼より見れば此女の斯く尊と氣ならんより、良き配偶を得て市井の間に美しき一家を爲したらんこそ望ましかれと思ふに。又闕れば、端然とせし御有様愈々凡界の女の、戀に病み衣服に苦勞し珊瑚の根掛の珊瑚の櫛のと慾にざわつく儚にあらす、御眼の中の清しきは紛紜たる世事を御胸の中に留め玉はざるをあらはし、御顔色のあざやかに艶々しきは充分今の境界に満足して何の苦しく覺さるゝ事なきを示めて、且は御口元の締りたるにぞ理非を判め玉ふ智慧敏く居玉ふを知られける、不思議不思議。

餘りの不思議に堪へかて我いと丁寧に眞實を籠めて言葉緩く。先程も伺ひたれど歳若きおまへ様の尼にもあらでの山籠り、如何にも不思議に存ぜらるゝも、一ツは美しき御容貌しき御心根持玉ひながら無修や、猪狼の跡多き地に潛み玉ふを慨かはしく存するよりなり、斯く山住し玉ふ其譯苦しからずば一通り御聞かせ下されたしと問へば女ホ、と笑ひながら、此頃

うるさく世間に流行とか聞きし小説にでも書玉はん御丁見か、よし小説には書かざるにせよ、話し土産と都の人に贈らし歸らん御丁見なるべし、恥かしき身の上明して云ふ迄もなければ、若し人ありて妾の身の上話を聞き、一點あはれと思ふ人あらば嬉しき事の限りなり、いで恥を忘れて恥かしき身の上語り申すべし。縁外の縁に引かれて或は泣き或は笑ひし夫も昔の夢の跡、懺悔は戀の終りと悟りて今何をか慙し申すべきと云ひつゝ梧を添へたりけり。

三 聞けば聞く程筋のわからぬ戀路のはじめと悟りの終り

能々たゞして見れば世間に多い事

其時お妙は長江を渡る風輕く雲を吹ておぼろにかすむ春の夜の月大空に漂ふ様に満面の神彩生々と然も柔しく、藍田を罩むる霞あまたゝかに草を蒸してはやりはやりと光り和らぐ玉に陽炎立つ如く兩眼の流光ちらちらと且嬉し氣に。聞いて玉はれ露作襟、妾幼少より東京に生長て父母まづしからず、家計ゆたかなるにまかせて、露が薄の頭簪に何ぞと問ひし頃は蝶と愛られ、風を繡緞の振袖に厭ひし頃は花といつくしまれ、浮世に樂み長閑なりし年立ち暮れて冬

しがりて握りし手を尙強く握りしめ。サア露伴様何考へて居らるゝ此方へ」と引立つる。引かれし南無三引かれては満身力を籠めれば。此方へ「サア此方へござんせ、さりとては頑固な御方。山に浮かれ水に浮かれたまふ氣輕には似ず尻の重さと、戯言云ひ尙引立つる。大事大事、此妖魔めに一步を轉ぜられては一步地獄に近づく」と齒を噛み切り身を堅くするに尙悠然と女は引く。引かれしと張る力弱くよろゝと引立てられて最早叶はず、ワツと呼びて手を握りはらひ逃出せば女追ひ絶りて我袖をとらへ。ホ、と笑ひながら扱は笑しな妖怪變化の者かと思はれて夫程までに厭がるゝなるべし。ホ、ホホ今少し膽太く心強きお方ならんと存じての親切仇となり却つてお胸を騒がしたる罪深し。眞誠笑しは妖怪變化にもあらず、浮世を捨し身にあさましき慾に迷ふにもあらず、鬼にも角にも同衾せんとは強ひて申さじ、今より夜道あるかせ申さば亭主振り餘りに拙く、悔み限りなし、先づ「坐り玉へ」と止むるを、我又無下に振り切るも恐ろしく、爐の向うに坐れば、女は鉈取り出し立上るに我又タビクリとするを見てホ、と笑ひ草履つゝ掛けて戸の外に出で、丁々と響かする木を伐る雪。

生木なりと焼かんとて薪取りに外へ出でしぞと悟れば、漸く安堵して我つゝいて外に出で、焚し木を取り玉ふならば男の事我助力致さんと鉈借り受け、そこの雜木切り倒して一ト抱へだけ家の内に投込み、戸口確りと風を遮さり、對ひ坐れば女は火を揺起して僅に焚し初め頓て漸く焚え立ち暖氣満るを見て。此通り爐に火もあり、妾は愈々獨り起居る事づからればサア露伴様ゆつくりと御やすみなされ、決して再び不束な妾御一緒にとは申さず、ホ、ホ、膽の小さい御容様に可惜御氣をもませ申ましたは妾があやまりました、御心配なしに獨りでおやすみなされまし。イヤ先刻も申せし通りおまへ様おやすみなされ。ホ、ホ、又剛情を張らるゝか、夫ならば御一緒に。夫は御免蒙りたし大俗凡夫の我等おまへ様のやうな美しい方と一緒に寐るは小人罪なし玉を抱いて罪ありの金言まのあたり。オホ、ホ、おなぶりなさるゝな何の妾が厭なればこそ其様に御逃なさるゝなれ、嫉ばれては今更是非もなけれど眞實妾の了見では夜風寒き山中何の御馳走申す風情もなければ、其むかし乳母があなたを抱いて寐かして進た時の様にあなたを緊手と抱て妾の懷中で暖めて進ようばかりの親切、妾も佛菩薩の見玉ふ前に決し

て淫りがばしき念は露もつにあらず、あなたとて一箇の大丈夫初て逢て抱いて寢た女位に心を動かす様な弱いお方ではあるまいと存じたに御卑怯千萬未練の御性根、今の御一言御戯談ならすば玉を抱かざる前も小人は小人なる通り妾と同衾し玉はずとも既に罪ある助僧の御方ホ、是は失禮、兎も角もあなたの御自由になされ妾は亭主の身で獨り寝る事致し難しいといふ。我呆れて明きし口閉ざ得ず、茫然と此女の言葉を開きつくゝ考ふるに人の世の毀譽褒貶に心に留めざるのみか、眼前の我をさへ見て三歳の小兒の如く取り扱ひ、然も悠々として胸中別に春ある悟り開けし大智識のやうなるに益々不審暗れす。ハテ何物の子ならん何物の變化ならん、尋常の婦女とは思へず、抑々如何なる履歴ありて斯く可憎しき容貌和しき心持ちながら山中には引籠りけん、當世の小僧か佛か祇王か祇女か、それとも全く妖魔かとそゝる恐ろしく。さらばおまへ様はおまへ様の御自由、我等は我等の自由として我は此爐前に一夜明すつもり。妾も爐の前あなたに向う座に一夜明して苦しからず却つて心安し。と斯に一切談しの埒明けば、我大きに安堵して穴のあく程女の頭上より全體を覗るに一點の疵なき玉のやうに折から燃ゆる火炎

天地も薄黒く見え花は咲いても萎れたる我、鳥は歌うても默然たる我、皎々と澄む月に對つても濁り水の我には影清く宿らず、陰々濛々と寝て起きて食うて少しも何の業なさず、身をじだらくの吾儘にまかせ、神を恨み佛を恨み人を恨み天地を恨みて悶え苦しむ一念増長するばかり、遂には神を憤り佛を憤り今世に若し正體在さば針の先で衝てやりたきまでに心廻り來りて、道理を見れば何の燈心の繩張り、道理も更に恐しからず、人情を察れば高が氷柱に彩色の一時人情も夢うれしからず、胸中に霜雪寒く残りて慘らしき觀念絶ゆる間なくありしが或日の事立派なる蠟塗人車我家の門に着きて髯毛うるはしき官員風の男案内を請ふに名刺を見れば何某局長奏任一等の御方當世の利物と評判ある人なれば我後見ともなりて家事萬端取り暗なひし老僕出でて御用の筋を何ぞと承まるに。唐突の參上甚だ失禮なれど傳手の無きまゝ是非なく直ちに申し入れます、付かぬ事を御聞申すが當家の御主人御年頃なるに未だ何方とも縁談の御約束なきや、實は拙者舊藩主の若殿見ゆ戀にあぐれ玉ひて是非に所望いたされ居る譯、と申した計りにては御分りあるまじきが、今年の春若殿郊外の散歩せられし折或る墓地を通りか

られ、不圖乞食の話しが聞かれば、今歸つたあの娘、器量美しい計りが孝心のいちらしさ見えて母親の墓の前に蹲踞りたるまゝ動き得ず、涙は雨のふる程泣て、若い身にも似ず、生命惜かられば早く母親の御傍に行たしとの述懐、何と今時珍らしい氣立の女ではないかと一人が云ふを又一人がひきとつて、貴様今日初めて彼娘に氣が付いたか、あれは毎月の事、去年の何月なりしか彼娘の母の此處に葬られてから毎月の命日怠る事なく此處に來てあの通りの悲歎、他所で見ても可愛想なありさま、殊更今日などは顔も大分瘦せて血色も悪し、大方家に居ても始終泣いてばかり居る事であらうかとの噂、耳に入るより若殿ッツとし玉ひて語られし涙が一滴、是ぞ戀の水上思ひの泉ゆめ／＼浮きたる御心にあらず、戀が爲せる探索其後御名前前御住所まで何時の間にか聞知り玉ひ、ます／＼焦れて遂に父上の許しを乞はれ、父君の御依頼によりて兎も角も拙者中にたち周旋の勞を取るべく今日態々參上したり、内々承まれば未だ何方とも御縁談きまりたるにもあらぬよし、何と此話し能く御考へ下さるまいか、媒人口た／＼でばなけれど拙者舊藩主の御嫡子、爵位財産は世間の沙汰でも御存じなるべし、殊に先年獨逸國に

留學せられて學位まである若殿、華族間にて行末望みのある方、全く浮きたる戯れ言大名氣質の吾儘なる縁談申し入るにあらず、四民同等の今日實以て後々は侯爵夫人と我等もあがめ申すべき所存、戀のはじまりの次第を考へられても成るべくは色よきお返事を玉はりたしとて歸りたる後、老僕は躍り上りて喜び、平常皺びたる顔の其時は光りななし我に向ひて縁組承知せよと説きすゝむるに。我一度はやんごとなき人に戀れたりと聞てカツと上氣し、又一度は是も男の例の一時の熱やがては褪める色好みの心鄙しと蔑視み、又一度は母の書遣思ひ出して忽に身ぶるひを生じ、厭々々々縁談など聞く耳もたずと強く云へば老僕は驚き、是ほど結構な縁談いやと云はるゝは片腹痛しと理をせめ言葉盡して我を諫むれど少しも動かれば是非なく謝絶申して、情知らぬ者どもと諺言さるゝを厭はざりし。されども我其時より何となく二心になりて然程むこくは男を嫌はず、むこかりし心いつしか和らぎて髪かたちをも治むるやうになりしが、三月ほど経て又彼何某局長見えられ、我後見に向ひて、過し日の話し纏まらぬ以來流石活潑に聴明に渡らせ玉ひし若殿御動靜ガラリと變り玉ひ外、出もし玉はず、書見もし玉はず、花にも月

を送り春を迎ふる度毎、買つて貰ふ羽子板と共に春丈段々と大きくなりしが、十四の秋父様圖らず卒れ玉ひしより悲しき遺る方なく、芝居見る外には泣きたるためし少なき身もひたすらに涙もろくなり、果敢なき野邊に一條の煙りを觀じて後は三度の御膳に向ふたに、父上の平常坐り玉ひし所むなく明きて完全たる前齒の一本抜けたる如くしよんばりと、母様ばかり、心淋しく箸持つ方も衰へ玉ひたるやうに召上りながら我が母様を見て悲しむと同じく母様も我を顧み玉ひて、御胸痞へたるや御飯の量少なく白湯のみいたづらに飲して私に喉の潤ひさし玉ふに我口中の者の味いつしか消えて奥齒咬みしめしまゝに聞く事難かりし。われそれより自然と垂籠り勝に日か費やし、平素好きたる三味の色絲彈き鳴さむとせす、琴の師匠にも忌中の休課したる儘遠ざかりて、母様が持玉ひし草紙くさんゝに馴れ泥み、有る事無き事がきつられる冊子の中に幽なる樂みなせしが、終に癖となりて彼は見盡せし後は薄雪生吉伊勢竹取或ば求め或は借りて三年の中に解らぬながら源氏狭衣にまで讀み至り、其間つくづく人情の濃き薄きを考へ世の眞實虛妄を覺え、むかしより男といふ者のあさましく、意一時なさけ一時思

ひ込み強けれど辛防弱く、逢ふを悦べど別れを悲しまず、媚めかしく佞らへるをかしき女を好み、戀を榮華のわざくれ三昧、犬猫の色美しきを愛る様に女の髮容よきを愛る者なるなさと、我縁もなき男なれど源氏業平の如き戯け者を憎く思ふ事深く、嫉妬するにもあられど其戯け者に迷ひ焦れし種々の女どもを齒痒き馬鹿と心の内に思ひけるが、十八の年母様もまた老の病危ふくなり玉ひ、兄弟もなき身の氣弱く朝に晩に腹中に泣ながら神佛を頼み御介抱申せし甲斐なき、我亡き後は是を見て一生の身の程を知れと行水に散り浮く花を青貝摺りせし黒漆の小箱を與へられしまゝの御往生、悲しともつらしとも言ふ言葉な知らぬ歎き。漸く御葬式済して後、彼小箱を開き見れば何時の間に認め置かれしや一通の御書置、是ほどまでに我を可愛う思ひめされしありがたさと先づ涙こぼれながら讀み見れば、噫其時の心持今思ひ出しても惘然とする程、恐しさ口惜しさ悲しさ情無さ味氣無さ胸悪さあさましさと心細さ、厭といふ厭な心持一時に込上て水水全身に打かけられたる如く、又猛火に眉毛焼かる、如く冷汗脇の下に湧きて身ぶるひ止め得ず、氣も暗く眼も暗くゆら／＼とゆら／＼玉緒絶果んばかりなりしが夫より愈々浮

世を厭ひて。イヤ御話しの中途ですが其黒漆の小箱の中の文に記しありし事如何なればそれほどまでにお前様を驚ろかせしか。マア御聞きなされ其文に記しありし事をわたくしの口から申すもつらし、扱も我年は十九の春を迎へて空に更行ば親類のやうに親達と交際し誰彼、我を嫁にせん、我婿を世話せんといひ来るを早くもあさましき人情の詐り、盛りは十年の色、用は一時の財貨にひかれての申し込と猜して、一々きびしく家の僕に謝絶せ、ひたすら母を慕ひまらせ、あはれ此身の朽ちよかし靈魂のみとなりて母様の御傍近く行かんものとあせり、つく／＼生命も惜からず、世間に何の樂みなく、讀耽りし数々の草紙も打つて又見ず、男と面を合すさへ忌み嫌ふ様になりて、蓮葉なる下女共が年若く美しき供儼なぞの噂まで苦々しく覺えければ、自然と自分髪に油の香も止めず櫛の齒を入れ髪に恰好氣にするまでもなし、ましてや前差に鬘甲の斑の詮議根掛に鹿の子の色のよしあしなど問ひもせず質しもせず、紅脂白粉はまるで忘れつ、帯に苦勞をせしむかし下駄に鼻緒を苦勞せしもむかし、羽織の色がどうであらうと着物の取合せどうであらうと一切女のたしなみを捨て、おもしろからぬ心中常に涙を湛へて

に跟て病室に入りける。見るに瘦枯れ玉ひたる御ありさま今とりつめて危かりしを呼生られて母君の顔見玉ひ、さめくゝ泣かるゝ痛ばしさ、是も誰故、我故と思へば、没體なく消えも入りたきな夫人に推し出されて若殿の御側近く参り、我を忘れて涙つゝみ切れず御手を取りしまゝ何の理由とは知らず泣伏せば、若殿も涙ながら我を見玉ひて御言葉はなく、握られし手に微弱き力を籠めて我身に幽玄なる働きを與へられしまゝ、其儘我は絶えて夢の如くなりしが其後呼生されたれど若殿は遂に蘇生らせ玉はず、我は身も世にあられず立歸へりてより後其人をのみ思ひてなまじひに生残りしを口惜くすゝ天地を恨み憤りて狂亂となり、七日の夜獨り吾家の持佛の前に看經したる時、朦朧とあらはれ玉ひし御姿のあとを慕ひて脱出て何處ともしらず迷ひあるく眼には幻影のみ見て實在の物を見ず、あさましく狂うて此山中に我しらず來りしが圖らず道徳高き法師に遇ひ奉り一念發起して坐禪の庵を此處に引むすびばかり、溪の水嵩増して春を知り峰の木の葉の飄つて冬を悟る住居、閑寂の中に群妙を觀じて頭を廻らし浮世を見れば皆おもしろき人さま、慘酷かりし昔時の胸の水碎けて東風吹く空に絲遊のあるか

なきかの身もおもしろく、佛も可愛く凡夫も可愛くお前様も眞に可愛し、天地に一つも憎きものなく樹の間に集くふ鳥も可愛く土に穴する狐も可愛し、心華開發して十方世界薫しくおもしろき唯識の妙理味ひ更に濃く、泥水相分れて清淨に澄めば天上の月宿る瓔珞經のおもむきを得て愈々面白し、我をあはれと人が云ふもおもしろく我を厭ふといふもをかし、お前様も可愛しと思うたればこそ抱いて寝てといひしに厭がられしは愈々をかし、昔時は我死ぬほど人に戀はれてもつらくあたり、今は我死ぬほど人に厭がられても可愛し、一心の變化同じ天地を恨みもし樂みもすることゝをかしけれと長々しく語りつくせど更に我其故を悟らず。もし／＼お妙さま其話の中の骨となりし行水に散り浮く花の青貝摺せし黒塗の小箱の中の遺書は何事なりしか其を聞かでは話分らず。ハテ野暮らしい其を聞く様では貴君もまだ人情しらず、其書置讀んで後慘くなりしといへば云はずと知れし事、世を捨てよといふ教訓、浮世を捨てねばならぬ譯をかきしるせしに極つた事。怪しからぬ事浮世を捨てねばならぬ譯なし。イヤ／＼妾等一類の人間是非とも浮世を捨てねばならぬ事浮世を捨てねば安心の道おぼかなし、さればこそ初は神をも

佛をも恨みし也。扱も分らぬ話。イエ／＼能く分かつた話、深山の中にたれ死せずばならぬ妾等の身の上、浮世の人は眼くらく、種々のあはれを悟りながら、情なき妾等の身の上には月日も全く暗く花鳥も全くおもしろからぬを知らず、されば彼若殿に我身を早く任せざりしも若殿の子孫をして我如くあさましからしめざらんと眞實の心、其時の苦しき推量したまへ、と沈みたる調子に答へながら急に語氣が變て、ホ、ホ、おもしろからぬ長話最早やめに致しませう、言ふもうるさく語るも盡じ、戀と恨みは隣り同志、これまで／＼これまでなりやと縁言もと云さして又樽を添ふる容顏の美麗さ、水晶屈原の醒めたる色ならで瑪瑙漏明の酔へるがごときありさまなり。頓て又かすかに我を見て、あら本意なき夜の短うて可憐明放れなば假初ながらの縁も是まで、君は片科川に浮く花、香は急流に伴つて十里を飛ぶ速やかに、我は其川の岸に立つ柳、影は水底に沈んで一步を動き難し、逢ての喜び別離のつらき戯けし戀の後朝ばかりにあらずといふ。時しもあれ朝日紅々とさし登て家も人も雲霧と消え、枯れ残りたる去歳の萱薄の中に雪杳の紐續きかけしまゝ我たゞ一人にして足下に白燭燐一つ。さても昨夜は法外の小

にも嘆嘆の御聲ばかり、望みは絶えし此世に絶ぬ玉の緒のあるは悲しき事の限りぞ、あるに甲斐なき生命誰が爲にかながらへんなどと唧ち玉ひて次第々に三度の御食すます、晝はうとうと眠り玉ひて夜は寢難に輾轉玉ふ、あはれとは是なりと思ひて御付の者慰さめあはれせ、愚とはそれなりとさとして父君叱り玉へど唯々消なば消ぬべし露の身の散りなば人のあはれとや見ん、つれなき人の恨めしからでうとまれし我こそうとまし、とくとく捨てばや生命と朝夕の獨り言、聞かれて母君の堪へ玉はず再度拙者を召して此御使ひ、何卒よろしく御推諒ありて、御不足の廉あらば御遠慮なく申さるべし一々御指揮に隨ひ申すべければ此戀成就する様と情を盡し道理を責めての話し、其時我ふすま越しに聞て思はず泣きしが、老僕が我に向ひて返事相談する時には又彼母上が残り玉ひし書置の事思ひ出して唯々つれなく、縁を結ぶは厭なりと云ひ切つて数多の人に憎まるゝを關はざりし。此度は最早思ひ切て来るまじと思ひしに又一月ほどたち、彼人來りて、若殿終に浮世をあぢきなく思はれしあまりうつらうつらと病ひの床に打臥され其後枕上らず、療治の詮方もなく父君母君今は共に最愛の御嫡子に引かされて心よわく、共に

御心配のありさま餘所に見るさへ痛まし、願はくは思ひ返してよき返事聞せ玉ふようとりなし玉はれ、是は若殿御病床の中に書捨てられし反故ながら戀の切なる事あらはれて隠れず、せめては是なだに見せまゐらせて少しはあはれを汲まるゝたよりともなれかしと持ちて参りしなり、又是は若殿いまだ御病氣になり玉はざりし前の寫眞なるが最も併せてまゐらすべし、御返事は明日また伺ひに上るべし、且は又其折御返事は如何にもあれ、若殿が生命かけてまで戀れし方の寫眞一枚玉はりたしと云殘して歸りければ老僕又我に色々説諭し是非に此縁結ばれぬ、淺からぬ因縁なるべしなど泣いて勸むれど我剛情に承知せれば少しは怒りて立去りしあとに残せし寫眞、見るに氣高く美しき御顔ばせ、いとしさも生じたるばかりり短冊に筆も歩み健ならすして

燈し火も暗うなりゆく夜半の床にこゝろきえんゝ人をしぞ思ふと覺束なく記されたるを見て吾魂魄もゆら／＼となりしが母君の遺書思ひ出して又かゝる貴人に近づくべきにもあらずと、翌日も酷く返事させ寫眞も送らず、かくて十日程過ぎて吾家の門に慌だしく車を寄せて彼官員轉ぶ如く走せ入り

眼付さへ常とは變りて涙ぐみながらつれなき此處の戀れ人め、今日は是非々々兎角の返事に及ばず即第まで來られん若殿生命今宵も過ぎずと醫師の鑑定、父君母君我等までの數き察しても玉はれ殊に今朝若殿の口すさまじし一首眠はれし身はうきものと知りながら尙捨てがたき……

と後の一句を残して血を吐かれし御ありさま、肺病もつまりは戀故よしや女は鬼なりと箇程まで思はれてまだつらく當るべきやと、半分は恨み半分は怒りて我を引立行かんとするに、我は又身を切らるゝより切なけれど愈々剛情に行かじといふなりしも、亦車の音して御付の人を後になし、容儀繕るひ玉ふこともなく馳せ入れられし上品の夫人、氣も半亂に。お妙さまとはあなたか、我が子が今臨終の際一目おまへ様を見たと利かぬ舌を無理に動かしての望み、此通り手を合はして願ひます是非に來てと侯爵夫人ともいはるゝ尊とき人に拜まれて、心は洪水に漂よはされたるごとく、うろ／＼するを無理に引立られ車の上も夢路をたどるやうにて立派なる御邸の中に入れば、人々聲を限りに呼ぶ響き、早や切々と悲み泣く女の聲も聞ゆるに、夫人は慌てゝ幾間を通り過玉へば我も煙にまかれ其跡

奇男兒

命は高が五十年、着婆と扁鵲を左右に従へ、朝鮮人夢を朝夕の惣菜となし、地黄丸を茶請にして養生一遍に過したとて仙人になれぬのは知れた事。それに何ぞや當世の武士戦亂の心得を忘れ、鉾を枕に霜寒き荒野に伏したる先祖の苦勞を思ひやりもせて、蒲團ゆたかに夢を結びながら釣夜具の輕きを羨む僧上、僧さも僧し。死と云者の覺悟を粗略にし義といふ者の甘味を曉らす。萬事に付いての臆病三昧、花の下に小歌うたうて扇拍子の圖に乗り、蜂に驚きて逃出す見苦しき。大小差しながら小さき蟲にまで恐れをなし、駈て轉んで膝頭すりむき、痛いぞとソレ袂糞をとの詮議聞さへ耳の汚れなり。大凡男兒と生れてはよしや智慧に疎く辯舌巧ならずとも是れ恥にあらず。命を偷みて美酒に打つや舌つゞみ、ぼんとして暮らす春夏秋冬、四季の詠めと寵愛の美女に骨髓の元氣を奪はれ、すがれて後は取るには足らぬ阿彌陀佛に詔らひ、ト

ドの詰りは役立たぬ往生、是れ男兒の大恥辱なり。此様な奴は死ぬにあらで腐るなり。疊の上の腐れ死なり。噫口惜しや、天下の男兒、生な武勇の神國に享ながら太平の文弱に流れ、魂魄の居所を失ひ、争そつて腐れ死を冀ふ保養論、兩刀は紙捲て鞘走るを止め、矢竹は徒らに掛物を懸けるに用ひ、若い者二人寄れば好色本の評判、遺恨千萬肚腸の沸る風俗ぞかし。我前髪の頃よりして赤櫻の木太刀に手の内を鍛へ、鞍擦に龜の尾の肉を破りしは抑々何の爲ぞや、八幡大菩薩も照寛あれ、人も知らぬ腐れ死深山の菌同然には終るまじき爲なり。然るを忌々しき、流行のありさま、人々却つて我を無粹と罵り野暮と嘲り變物と笑ふ、言語道斷最早堪忍なり難し。風なき空には蜘蛛巢に誇り事なき世には小人巧を弄す、我折れ喜鯛の用られざるも道理なれ。我又かりそめにも進物の數々に添へて御辭誼の頭を御家老の前に下ぐるを快しとせず、安坐組みての色話、鯉錦に箸を共にする朋友の間の無禮講に加はるを嫌ふ。ましてや腐れ死な

願ふ情輩肩を列べて君前に伺候すること菌切の出るまで残念心外此上なし。聞けば此頃淺野内匠頭殿、殿中に於て吉良上野介殿に刃傷に及ばれ、鬱憤散ぜられす其まゝ切腹仰付けられしよし。然るに家老大石を初め其他の武士一人も主君の爲に修羅の妄執を晴させ奉らんとする者なく、赤穂の城をも靜穩に明渡し、分配金に懷中を暖め安閑として浮浪人の氣樂さを喜び居るとの話を愈々天下の武士一統取るに足らず、皆々腐れ死を望むと見えたり、深山の菌同然と覺えたり。つら／＼眼を放つて觀るに第一上は御家老より下は足輕に至るまで、我主君には仕へながら皆是菌武士なり。我大丈夫喜鯛と呼ばるゝ男兒、菌武士の中に交る事一生の恥辱、末世の名汚し、先祖の位牌に向つて額に汗のにじむ譯なれば思ひ切て食祿返上申し、菌武士の仲間を逃れん。幸ひ妻子の足手纏なく、父母は極樂に在せば飄然として浪人となるとも不都合更になし。大空の下大地の上を悠々寛々と自在に大股に歩み、老木の蔭古寺の中に六尺の體胖に安々と眠り、言ひたき事を言ひ飛ばし、爲したき事を勝手になし、飽迄武士道の本意を其まゝに露出し、誰に遠慮も會釋もなく喜鯛が持つて生れた儘に、喜怒哀樂を隠す事なく、木綿

説を野宿の伽として面白かりし、例言言葉は無くとも吾伽を爲せし體は故にこそ淋しからざりし、是も亦有縁の亡者、形の小さきは必らず女なるべし、女の身にて此處にのたれ死、申ふ人さへ無きはあはれ深しと其體をなうづめ締め、合掌して南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛、お蔭さまで昨夜は面白うござりましたと禮をのべ、段々川邊を下り小川村に來り温泉宿に入りて、此山奥に入りしまゝ出て來ざりし人なかりしやと問へば亭主けり顔して暫く考へ。不思議の事を問はるゝものかな、オ、去年の事なりしが乞食の女あさましく狂ひゝて山深くの方へ入りし事ありしが日光の方へは行かざりしよし、何處へ行きしかと今に其噂あり、それを尋ねらるゝかと云に。それ、其女の様子知るだけ詳しく語れと逼れば老父苦い顔して我をテロ／＼見ながら。年は大凡二十七、八、何處の者とも分らず、色目も見えぬほど汚れ垢付たる襦袢を破れ笠を負ひ掛け足には履物もなく竹の杖によわよわとすがり、話さへ忌はしきありさま總身の色黒赤く、處々に紫かりて怪しく光りあり、手足の指生姜の根のやうに屈みて筋もなきまで膨れ、殊更左の足の指は僅に三本だけ残り、其一本の太さ常の人の二本よりありて其續きむつ

くりと甲までふくらみ、右の足の指の尖せし痕微かに見え、右の手の小指骨もなき如く柔らかさうに縮みながら水を持つて氣味おしく大きな蠶の如なり、左の手は指あらかた落ちて拳頭づんぐりと丸く、顔は愈々恐ろしく銅の獅子半は熔りけたるに似て眉の毛盡く脱け、額一體に凸く張り出して處々凹みたる穴あり、其穴の所の色は褪めた紫の上に溝泥を薄くなすり付けたるよりまだ汚なく、黄色を帯びて鼠色に牡蠣の腐りて流るゝ如き濃汁テク／＼溢れ其濃汁に掩はれぬ所は赤子の舌の如き紅き肉醜らしく露はれ、鼻柱坎け欠て其處にも濃汁をしたゝゝか溢へ、上唇溶け去りて粗なる齒の黄ばみたると瘦せ白みたる齒齦と互に照り合ひてさまざまじく暴露れ、口の右の方段々と爛れ流れたるより頬の半まで引さけて奥齒人を覗まゆる様に見え透き、髪の毛都て亡ければ朱塗の賓頭盧幾年か擦り摩られて減りたる如く妙に光りを放ち、今にも潰え破れんとする熟柿の如く艶やかなるそれさへ見るにいづせきに、右の眼腐り捨てりて是にも膿乾かす、左の眼の下瞼まくれて血の筋あり／＼と紅く見ゆる程裏反り、白眼黄く灰色に曇り、黒眼薄黃色にどんよりとして眼球半は飛出で、人をも神をも佛をも逆目に睨

む瞳子急には動かさず、時々ホツと吐く息に満腔の毒を吐くかと覺えて犬も鳥も逃避ける、況て人間は一目見るより胸惡くなり、其惡き臭を飯食ふ折に思ひ出しては味喰汁を甘くは吸ひ得ず、膿汁を思ひ出しては珍重せし鹽辛を捨てける。されば誰も彼も握り飯與ふる丈の慈悲もせず、其女の爲す儘に任せしに彼呂律たしかならぬ歌のやうなる者あはれに唸るを聞けば、世に捨てられて世を捨て、叱々と覺束なく細々と繰り返しては喘はしく、ハツタと空を睨みて竹杖ふりあげ道傍の石とも云はす樹とも云はす打叩きては狂ひ廻り、狂ひ躍ては打叩き瞋恚の炎に心を焦き、狂ひ狂ひて行方しれず。

對體の後に書す

莊子が記せし體は太平樂をぬかせば韓湘が歎ぜし骷體は端唄に歌はれけるそれは可笑きに、小町のしやれかうべは眼の療治を公家様に頼み天狗の骸骨は鼻で奇人の鑑定に逢ひたる是も洒落たり、我一夜の伽にせし體はなかしからず洒落す、無理にをかしく洒落させて不幸者を相手に獨り茶番、とにもかくにも枯骨に向つて劍擺を撫する嘲りはまぬかれざるべし。

(明治二十二年十二月作)

御方、主と呼ばれ家來と呼び給ひ領主と仰がれ領内の民と愛で給ひしは淺からぬ因縁あればこそ、然るに一朝の怒りに身を忘れ家來を忘れ領内の町人百姓を忘れ給ひて殿中の刃傷、一徹短慮の御過誤とは申せ、能々忍ばれぬ鬱憤の爲なるべし。イヤ、中々一朝の怒りに大名たる者領主たる者其領内の民百姓まで忘れらるべき者にはあらず、吉良殿は賄賂進物を目的に公儀の役目を玩弄びしといふ取沙汰、まこと然らば我内匠頭たりとも斬つて捨ててに容赦はせじ。一人を斬つて天下の弊風改まらば領内の百姓偶然ながら顧みるに違なし、扱は内匠頭殿小人を憎み給ふ御心強く、思ひ兼ねての御刃傷と覺ゆるに、幾千の家士辱なくも食祿を賜はり、暖かに着て豊かに食ひし恩を忘れ、主君の御胸中を察し申し御遺恨を雪ぎ奉らんとはせず、腐れ死を冀ふ命惜み、己が主人を犬死させ、然も世間に短氣者よ狂者よと風評せられて恥とも知らず、のめくくと高が五十年の命を終らん所存、蟲睡の走る奴原なりと頃は元祿十四年の秋老いて冬の初つ方、旅籠屋の二階につくく吐きし長大息。頓て此處を後にして大阪に出て京に登り、暫らく足を留めたるに、自然と露はるゝ俵氣をたのみに、其事彼事喜劍のさびきな

力にする者あるより、後へは引かぬ何時にても死申候男兒、何日しか俵者と尊まれしが其翌年の事、或日不圖東山をそゝろ歩行せしに、身装容貌立派なる武士酒に亂れて苦しくも幫間末社に助けられ、素人にはあらぬ女どもと諸共に打どよめきて通り過るに撞着ひ。是れ大盡と呼ばれるゝ取られん坊の阿呆なるべしとさげすみながら道傍の下司に彼れはと問へば。御存じ無か當世の大盡、粹名は有喜様、眞實の御名は大石内藏の助殿とて元は赤穂の御家老、近頃は山科に閑居なされて折節の御遊興、一力の亭主が大分の爲になる御客と聞くより喜劍は後影睨み附けて、ムー彼が大石。左様々々。ムー彼が赤穂。左様々々。ムー彼が赤穂の家老。左様々々。ムー彼が内匠頭殿の一家來。如何にも。ムーウ、有喜と名乗つて彼意か。ヘイ、腐れ死の仲間だな。へ、一。苗武士の第一だな。ムーウツと睨み詰める此時、有喜が姿は見えずならんとするに、男摩ひ鋭く、待て一ツ。

三

岩も裂くべき乳虎の聲おそろしく呼び留めながら、摩利支天其處退けといふ威勢に駈出せし喜劍。そゝけ髪を空に燃えさせ、鬼鬘に風を生じて宙を飛び足何時しか草履を捨て、追ひ來れば、アレと驚く女これはと周章る男。有喜様御早う此方へござれ、狼藉者がと云ふ間もなく近近と逼りて何も言はず、突然大石の左に立列んで歩行んとすれば「芝垣、のふさて、犬の空吠の」と舌の纏れ綾なく拍子曖昧に歌ひながらよろゝと危ふき千鳥足。ゲーツと酔を吐き轉けかゝりつゝ喜劍の顔を一眼視しまゝ其左に出て、「のふさて月ばみせ者」と歌ひつゞけ、何喰はぬ様子、此方も兩眼白くしてジロリと睨み急に會釋して。我は喜劍と申す粗忽の浪人、無遠慮は九州男兒の常と御ゆるしなされ、唐突なれど只今途中にて、承ばれば貴所様は有喜大盡と呼ばせらるゝ粹の本尊色道の長者、柔弱のイヤ柔和忍辱やさしき戀の山分登られし大先達よし、付いては折入て願望あり、恥かしながら我等無骨者鴨河の水に磨かれし美人を知らず、赤前垂の女に詞を交せし事なく、三十になつて未だ色酒の味何程の甘みあるといふ譯をしらす、是れも御縁なり有喜様有喜様否だと野暮な申さるゝ方でもござるまい、我等と御一同に御馴染の一方で一獻汲んで玉はるまいか、貴所様に我手引せられて揚屋酒の味何程甘きものと悟らば大悦至極、是非に是非に。と天地を憚か

巻長柄の一刀ばかりを友として義侠の肝膽を鍊り磨かば、是程面白き事やあるべきと、己が殿様御代替りの頃御暇を頼ひ捨て、知人には挨拶も面倒とてせず、大編笠をかつぎのろく／＼と薩摩國を出立しける、其風姿別に異りたる所もなく尋常一様なり。此男身の丈六尺を越え筋骨太く逞しく、顔渡せて鼻高く肩あらく眼の中あやしく光り輝き、すまじき様なるのみか、腰にさしたる例の一刀、中身は村正が九十九本の作中の業物、然も朱鞘に黒漆もて筆太に、

何時にても死申候

二

元祿の頃は未だ柔弱に流れたるといふ程の世にはあらず。然るを柔弱に流れたりと憤る喜劍の性質の烈しさ、事を決するば元來纏を截るが如しと五斗米を取て投げ捨て、仕を辭して故郷を去り心を磨く旅路の空。吹けや風、吹かば石を轉ばすまで、降れや雨、降らば馬背を分るまで、烈風烈雨吹くとも降るとも撓むまじ何時にても死申し候男兒一匹、熊本の御城見上げて鬼將軍に時代違ひて逢はざるを恨み、櫛田の神前を過ぎて菊池が勤王の剛の者なりしを歎に、

遍歴する所昔の人の勇猛に勵み當世の苗武士

に商拜く、遂に九州を出て赤間ヶ關中國路にさしかり、平家没落の跡に能登守教經越中前司盛俊新中納言知盛らが遺恨を弔ひ、懷舊の涙を古豪傑の幻影に濺ぎ、思はずも腕を扼して凝視るや浪の上、我若し在らば其時宗盛を斬つて臆病を罵り、三軍の士氣を激し、直ちに此の腹かつ割き破り肚腸引き出して船板に擲き付け、勇士が血を以て柔弱の惡風を洗ひ呉れん者をと息巻き嗥り狂ひける。かくて段々日を重ね月を越え播州赤穂の城下に来りけるが、見渡す町々うら淋しく、商賈衰へて商人の店前天秤の響き寒く、行交ふ人影まばらに空家多く、殿様今年の春の花と散り失せ給ひしより御家は滅亡し、諸士思ひ／＼に退轉爲し果て、榮える者は、道傍の草計り、堀と云ひ石垣と云ひ姿は其まゝ、嚴めしく残りながら、門と云ひ櫓と云ひ形は少しも變らねど、主なき城の活氣失せて他國の城下に比ぶる時何となく打しめり、供廻り勇ましく良馬に鞭をあてゝ馳する侍をも見掛す、流行模様の伊達小袖伽羅の香ゆかしく色作らせてそれを自慢に連れあるく娘天狗の老人もなし。昨日今日の切迫、小切一つも空には買はれば呉服屋も不景氣に泣きて手前物ながら染暖簾を新しうする勢掛け、道具屋は一時利潤けて踏倒し買せ

し結構の者どもを京大阪に賣りしはよけれど、嵩張し者を持餘し、黒塗に金紋見事なる耳盞僅に百五十文で未だに賣れずと唧つ。下様の者は哀れも一しほ深く、生計の種を失ひ職業の道に迷ひ、是では立たぬ何處へなりと行きて餓口の便りに有付くべしと思ひながら妻子ある身の自由利かで悶えつゝ日を送れば、日の付所は儉約々々、母さん飢買つてとせがむ兒童を酷らしう邪見にも贅澤なと呵る親の心のあぢきなさ、其隣りの家には飼猫に鯉節かけてやりしとて老婆は無算用なと罵る亭主の聲、聞けば皆道理より出る無理、貧がさせる無慈悲そかし。されば一體に寂れたる赤穂の朝ぼらけ、鳴て渡る雀少なく、鶉の聲も細々と弱く、夜は軒下に乳を戀ふ狗の子の呻り聲悲しきを餘所にして餌索食る母狗の姿瘦せつらん、さて、骨立ちめらん有様閑にも見ゆる無情の景色。流石の喜劍も涙に脆きは武士道の裏。人界の榮枯盛衰はかなきを觀じ、ア、何萬石の御城下かくまでに衰ふるものか、眼の前に見る町人百姓の慨き、何の因縁なき他國者の我すら傷ましきに、内匠頭殿草葉の蔭より見られなば何程悲しう口惜う覺さるべき。殊更名君の聞え高く、御年若には渡らせられながら、家來を大事に民をいつくしまれし

をなす一座の男女、一人逃げ二人逃げて残るは唯大石と床の間に置物の達摩ばかり、坐禪堂の寂寞とした様な體裁、言葉は絶えて醉眼チヨロチヨロと間拔に此方を見る其顔を居丈高になツて視下す喜劇。コレ内藏の助、アイヤ元は淺野内匠頭殿國家老の大石殿、無骨者の我色酒の味少しも甘からず却ツて苦々し、其れを貴殿は甘いと思されてか、聞けば毎々の御遊興、一向合點參らず、武士は相身互ひ、何故に甘い者が、御面倒ながら御講釋下され、是非御講釋下され、心おろかなる薩摩生れの我、露程も分り申さず、イザ御講釋承たまはり申さん、其譯委細に御話しあれ。ヤレむづかしい御註文譯も絲瓜もあつた段ではなし、唯何となく拙者は甘いと思ふ許りの事、講釋なんぞは中々以て、ハ、ハ、夢喰ふ蟲の好々とやら申す譯でもござらうかの、何にいたせ、さう堅くるしう出られては恐縮々々頓首再拜、月日も丸う御光りあるに角張つては御話も湧えませぬ、膝くつるげて最う一獻御汲みあれ、まんざら苦い譯もござるまい。イヤ／＼苦うござる、確に苦うござる、我苦いと申すは貴殿の言葉の様に酸味なる譯にあらず、語ッて聞せんよく聞け、ナニ、よく聞かれ、酒は元より酒の味、何處で飲んで變る

筈なけれど歌人の飲み様あり、百姓は百姓町人は町人の飲み様あり。白雲の棚引方を心あてて行脚の杖を曳く山の奥、里は遠く人に見えず、爪の先まで満ちた全身の風流、天地に對してにツこり喜ぶ此時、酒を飲まうが水の如く淡く、水を掬ばうが酒の如くなかし、どちらにしても嬉しや花の香が纏ふたと自得する所、是れ歌人の飲み様なるべく、種蒔の頃より幾日の苦勞、雨にも転がり風にも耕やし、深田の蛙に惱み惡蝗の來るに泣き、向う鴈の毛のなくなるまで働き、足踵に龜裂を厭ふ間なく、漸く收穫を濟して一年の務めを終り、家内喜び合ひて鎮守に捧ぐる田舎酒、其れをやがて頂戴する一盞よしや薄くと微醺と酔うて樂々と睡るところ、農夫の飲み様ならん。商人は朝夕心の油斷なく、一文の利潤にも頻を三度下げ、半錢の出入にも勘定怠たらず、起るより寝るまで毎日々々胸算用止む間なき相場の高低人氣の善悪、一寸の罅隙ない程辛配して僅に年の暮れ、棚下しの夜深く、先は何貫何百目の利得と喜んで、平日は酒を強く嫌ひし女房が笑顔作りて勸る一杯、是れ本統の飲み様なるべし。武士の飲み様を何と心得らるか大石殿、武士たる者の飲んで甘しとする酒、よもや此の席の色酒には

あるまじ。兩軍入り亂れての戦ひ、桶破るれど後へは引かず鉾折るゝとも背面は見せず、貝鐘亂調子に雲を驚かし、太鼓の音唖喊の聲野に漲り山を動かす時、肉は元より泥ともなれ、骨は元より灰ともなれ、命は風前の塵とも飛べ、君の爲國の爲め義といふ一字を奥齒に咬みて、斬らば刃金の續く丈、撃たば鐵砲の筒の火となるまで、進んで死すとも逃げては生きず、生死の關頭を乗り越して後天晴男らしき功名立て、大將の御前に呼出され、三軍の勇士が眼前にて、敵將の首を看に、賜はりたる大盃を仰ぎ、飲み盡す一斗の酒、是れ武士たる者の飲み様なり。若又運拙く戦場の塵土となると、生前義に依つて天地を欺かす、花々しく打死せば本より大丈夫の本望、死して後百世の知己が地に濺ぎ餐る酒、幽鬼の中より快よく飲む是れ又武士の飲み様なり。此外に武士たる者の酒を飲むべき所ありとも覺えず、飲んで甘しといふべき所ありとも覺えず、太平の世無事の時に當りて、武士は唯々義を磨き力を養ふべき筈にて、猥りに酒など嗜むべきにあらず。但し世間に小人といふ者ありて小人の酒の飲み様あり。喜劇詳しく知らざれども農夫にもあれ商人にもあれ武士にもあれ其本分の據處を忘れ、肉塊の醜物を美女と

らの大層高く、投出した様に述べ立つれば。ハ
テサテ堅いわく、さりとておもしろい御頼み
否とは申さず、粹と呼ばれては有喜も面目、指
先を痛うして習った小鼓の一手、太夫より外の
者には知らせざりし隠し藝の秘曲までを御者に
添へて、こゝろ御付合申したけれど、ゲーツ何
がさて酒に敵と責められて、ハハ、思ふお的に
強られて、イヤ失禮々々、此通りの始末、たわ
いはない足取り、生酔の本性違はぬ臆病者、若
し初対面から不敬でもあつてはとの懸念、ゲー
ツ、幸ひ、ゲーツ、幸ひ彼所に行くは、ア、喉
が乾いた、ゲーツ、棧ではないか、来い。
へい。是は跳出しの棧と申す器用な奴、お
供に連れられ、は萬事如才のない男、我等は今
日だけは御ゆるしあれ、喜撰様さらば、何れ又
の日、御住居は宇治か、近い内此方から御迎へ
に参じませう、コレ棧御大切に響應申せと云ひ
捨てよるゝと一禮し行かんとするに、ウロ付
くは末社の棧、其頭をいきなりに擲り飛ばして。
己れは何處、中に入るべき奴にあらず、退け、
やれ、有喜様、我末社には頭を下げて頼まず、
御浪人の貴所様、武士分の貴殿に揚屋酒の甘さ
を教へて貰ひたき心底、枉ても御同道下され、
御同道相成らずと仰せらるゝか。ア、扱怖い御

權幕、マア、靜に、宜しい宜しい、御同道申
します、棧を擲られたで我等まで冷りと致した、
御手荒い事はよして給はれ、小さい膽が一段と
縮みます、異議なく御同道申します、といふ内
に此處は、一力、ござれや此方へと入りかゝれ
ば、噓飛で出て、有喜様ようこそ、是は又けう
とい御連様御草履も召さず、ソレ喜御洗足
を、野郎早く拭けと、差出す足泥だらけに強ら
し。若い者呆れながら綺麗に埃塵も止めず洗ひ
了るを待兼ね、大欠伸一つして二十疊の廣間に
通る、其跡へ跳出しの棧頭抑へて泣きながら來
り。てんと地ならぬ今日の仕儀と云へば亭主笑ッ
て、金持の役家に付文されたか。イヤ宜ッて堪
らぬではなし、痛くて堪らぬ。病犬の足踏んで
食付かれたか。中々以て粗忽はせぬ男、有喜様
が今連れて上られたをかしな人様にあたまた打れ
て。ハ、ハ貴様の眼玉はびいどろ細工ぢや、彼
れは氣が付かぬが新手に加はった末社、先刻か
らの話しも聞たが皆な巧んでの狂言、貴様達を
騙り者にせられたのぢや。御亭主勸進ひ致さる
るな、彼れは儘に此間米雀の通りで梵字九郎と
いふ暴れ者を取つて抑へた噂高の薩摩の浪人、
したゝか者の喜劔ぢやぞ、有喜様も爲う事なし
に連られた譯、座敷も中々むづかしがるべし。

ヤレヤレ其れは大變、粗略にして怒られてもし
ては屋臺骨の挫ける騒ぎ、噓殿聞いたか、ぬか
るな、怒られた、御機嫌能う取つてソツと歸す
が上分別、女も有丈狩り盡して座敷へやれ俠
客に振りかける土砂は女に限るわ、ソレソレ誰
を呼べ彼を呼べ、エー周章るな、微爛持ッて行
て阿らるゝなと亭主の心配、算盤に三本指使ふ
よりまだ急しく働きまれば、座敷は忽ち天の
美録の鬱金香、湧くや琥珀の杯に、満々と湛
へ、山河の粹を抜きし肴數々、生作りはぎやま
んの和蘭陀皿に跳り、口取は蒔繪の重に堆し。
頓で起る撥の音、耳を洗ふ美音、仙女の音楽、
舞ふや美人の袖の雪、燃えたつ緋縮緬の脚布ビ
ラリパツとした所に、千雨々々と打込んだ響め
言葉、どツと囁き末社の騒ぎ、それか餘所に聞て
今まで無言なりし喜劔、顔色を正し。有喜様色
酒の味此處等でごさるか。さればさ、と微笑な
がら答ふるを聞くといとしく、左の手に持ちし
五合入りの大盃ぐいと飲み乾して疊に打付け、
奔雷の如き大音聲に。我少しも甘く覺えず、此
酒苦し、色酒苦し、苦々し。

四

揚屋酒甘くないと一呵せし喜劔の勇氣に慥れ

へす謹慎なさは女々しけれどもまだしもの事。

然るに有るまじき遊興酒宴に耽り、小人淫婦を相手に浮かれ暮らす事、言語に絶たる一生の大不覺ではないか。喜劔に對して言譯は其れにても許すべし闇處に對し冥土の主人に對し何と言譯する積の所存か。サア言譯有か。見事立派に言譯なくば已れば浪人の面汚し、風上にとも風下にも置べき奴にはあらず。言へ、言へ、其言譯言ッて見よと通れば大石懷へ出し、面色土の如く。コレハ、コレハ、ソレハ、アノ中々以て見事の言譯申し御相手に成申す程の所存は御座なく、全くは、實は、内々は、拙者生れ付いての弱蟲、仇討など劔呑な事は出来ませず、殉死も致さうかと存じたれど、實は妻子も不憫なり、又内々、腹を切るは嘔痛からう苦しからうと存じて思ひ止まりし次第、出家も思切りかれて、ツイ、其儘に暮しました譯、然し主人命日だけは精進致しまする、酒宴遊興は所在なさの退屈より、ホンの少々ばかり。駄れ、ヤイ輕石、祿盗人とはおのれのこと、追腹切るに痛からうとは何の謔言、犬武士とは汝れのこと、畜生々々、人間の皮かぶりて兩刀さしたる畜生武士、畜生と言はれても言句はあるまい。ハイどうも恐れ入りました、畜生と仰しやれば畜生で。馬鹿め、下らぬ事を

言ふな、畜生も畜生、腰拔畜生、畜生ならば這て歩行け。ハイ。這はぬか、這へ、其處を這へ、這はれば人間、一睡の無禮な人間ならば許さぬぞ。ヘイ、這ひます這ひますと這ひまはる良雄。喜劔は飽まて憤り、ヤイ武士の皮かぶり畜生、畜生ならば是を食へと云ひさし、眞黒に毛の生えたる蹄を衣引きまくりてさしいだし、足の甲に魚膽載せて大石の鼻の先に突付るを内蔵の助這ひながら有難しと喰ふ途端下顎したたかに蹴付てズイと立ち外戸に走り出でしが、東西南北早くも其影なし。

六

散々に有喜を罵りし喜劔、其後關東に來り奥州に遊びしが評判空を飛びて、十二月十四日の雪の夜、赤穂の浪人四十七名吉良殿邸宅に亂入なし、先君の遺恨を雪きて首尾よく本望を遂げ、御首級を先君墓前に供し、潔く公儀に罪を待つよし、扱も當世武士の本尊ぢや、末世の武士の大先達ぢやとの話。喜劔の耳朶に打かるや、さては彼大石殿、ア、輕石と我罵りし大石殿が、畜生と我罵りし大石殿が、エ、心外過少たり、我脚に載せて出せし魚膽を這ながら食はれし大石殿が其四十七人の頭領なりしか、ウ、宜しッ、

今更悔んで甲斐なし、喜劔は大丈夫、泣きもせず歎じもせじ、我は私の覺悟ありと、例の長柄の一刀其儘腰にして、悠然と道を急がす、春日の旅路長く、江戸に入れば今日二月四日義士一統切腹仰せ付られたりと聞いて、喜劔再び物言はず、爲す事もなく日を送りけるが或夜泉岳寺に入り、大石が墓前に端坐し、一通の遺書残す事もなく、朱鞘に記せし何時にても死申候丈の遺品に、腹割割きて音もなく死したる後は松杉暗く月光弱し、二百年の春の夜毎。

(明治二十二年十一月作)

稱へ、心を狂はず三味線の調子に浮かれ、淫猥の唱歌を婀娜とよび艶氣ありと喜び、贅澤を料理に盡し、歡喜の天上に登り濟した顔付して、白粉の香の醜態き女に酌させ、眼前の榮華に誇るよし。如何に大石、我今日色酒の味どれ程の甘みあらんと来て見れば、是れ男兒の飲むべき酒にあらず、甘き酒にあらず。飲んで見て確に甘からず、然も苦々しき酒なり、酒と女に腐れ死する奴原の飲むべき酒なり、齒武士の飲むべき酒なり、小人の酒の飲み様なり。甘しといふ汝は小人なる事決まれり。大石などと立派なる苗字名乗らす事片腹痛し、輕石が相當、浮とは自分ながら能く付けた、大石の輕石の浮足武士め、肚腸なしの蟹武士、骨無しの水母武士め、兩刀は差したなりの田樂武士め、俯伏たは汝れも人らしく恥辱を知たか、近く進め、無益けれど喜劍が言ひただけ言つて聞かす事あり、輕石め浮めと罵るを答へもせず俯伏居る内藏の助、立上りて覗けば何時しかたわいなく、酔ひて其儘に睡り轉けたり。流石の喜劍采果て、元の座に返り、默然として天を仰ぎ、心無く行く雲に瞪入りしまゝ少時して、兩眼に湧出る涙熱雨を降らす心中如何なりけん。今迄は四隣を驚ろかす聲勇壯なりしに引かへ、其音あはれに

鐘を帯びて、ア、情無し。

五

ア、情無い天下の氣運、太平の餘弊とは云ひながら苟くも兩刀を腰にして武士たる者、殊更一國一城の主に見送られて留守を預りし程の武士たる大石が、假令浪人したりとて此態は何事ぞ、色茶屋の酒に性根を腐らし席にも堪へて酔ひ潰れたる見苦しさ、我眼の玉に此様な卑劣の影を寫せし事あきなしとも口惜しとも言ふべき言葉を知らす。神國の風俗義に勇む人心、それも泥びて天下一統驕奢、魂破と頼む刀脇差に呆け切たる飾りを付け、黄金の日貫に見難き程の巧者な毛彫り、赤銅の四分の一と縁頭にまで贅澤の詮議、其癖目釘に蟲の喰しを氣付かず、鋼鍛への善惡を擇ばず、治に居て亂を忘るゝ奴原ばかり跋扈る世の行末思ひやらるゝ慨かはしさ。皮肉強く男兒と生れながら年も若きに絹布を纏ひて、婦女年寄の着るべき者を奪ひ、役にも立たぬ髪のかき様諸の點取りに氣を採む野郎共、之にて武士ならば百姓町人の米を喰ふ鼠と同然、武士は世界の油蟲なり。我幼少の頃毎夜父上の物語られしを聞きしに、鷹は飢ゆとも落穂を拾はず、獅子は瘦せても象を搏つ、武士

たる男兒は浪人しても利には走らず、倒れ死すとも義を見て勇めと仰せられし言葉、今尙ほ耳に染み髓に徹して忘れず。本より眞正の男兒此の如くなるべきに、云甲斐なき當世の風儀、餘所の事ながら赤穂浪人の意氣地無さ、且は國家老の大石の此の體、内匠頭殿の最期嘯や御無念なりつらんと思へば思へば、兩腕の筋むす痒くなる始末と歎ぜし喜劍。忍び難て情勢烈しく。ヤイ内藏の助。と叫べばむくゝと起きて寢惚眼こすりく。ヤ是は失禮、思はずも泥醉致し前後不覺、喜劍様御ゆるしあれ。ム、免してやる、一醉の不覺はゆるしてやるが一生の不覺はゆるして呉れと内藏に頼むか、ヤイ齒武士其方主人内匠頭殿遺恨を吞んで黄泉に赴かれたるに其方食祿深山頂戴したる家老の身分にてありながら君父の讐は俱に天を戴かすといへる武士道の心得を忘れ復讐の所存少しもなきは一生の不覺でないか。ヤイ輕石。よしや主人非命に死したるは公儀の裁許なれば復讐かりなきにあらずと思はば、何とて追腹殉死せざる、是れ一生の不覺でないか。又追腹殉死せざるとも身を桑門に委ね念佛三昧に主人後世を弔ひ申さば臆病ながらまだしもの事、又は如何なる山陰にも忍び、扉を閉ちて浮世の交りを爲さず、二君に仕

なぞと、勿體なくも陰言仕り、のつべりとした吳服屋のむすこ殿を、おひらの長芋といへば愛敬もあるに、雨上りの蚯蚓なぞと、冥利も恐ろしき惡口申し、品定めせらるゝ身でありながら、三人寄ればかしましき客の評判。あの男は臆毛が長うて、その人は片ふくばが氣にくはねなんど、伊勢屋の後家が十軒店ひやかすやうな贅澤いふも、土地のせゐとて憎む者なければ、自然自由の足るまゝ、氣風段々かはりて男の如く成行き、弱きを扶け強きに屈せぬ意地増長して初めは左程にも思はざりし方様に、ちよいとした意地張より、嘘からでたまことな盡し、惚れた證據をどうかこかいなと、シレて筆をかむやうになれば、御文も石版摺のきまり文句にあらず、當世言文一致寫し得てあり難き事なれど、可愛がられるも運のつき、可愛がるも運のつき末、歳の暮はお互に苦勞の山分け、賣り土藏の札なゝめに口惜しけれど張つたと見得を捨て、の男の談に、こなたも證文の紙をあたらしくしたと、答ふるほど色氣をはなれては戀はさめぬものぞかし。とゞのつまり方様は行方しれず、我身は借金とまくらたこ段々大きくなりて、最早通人にも甘い言葉はかけられず、全盛も一時の夢とすきて、度々の鞍替なさけなき事や。提

灯に名を輝かして、山出した書生に、あのプロを見い、巡查が護衛しちよるわと云はせし者が、籠の中のきりふゝす同様小格子につかまるまで零落ては、鐵の火箸の一度まがりては中々なほらぬごとく物に類をもつて長じて、横道の横町に這入りこみ、てこでも動かぬ大惡魔となりぬ。されど世すて人さへ病にふしては故郷を思つて茶漬一杯食ひたがられしためしもあるに、ましてや女の惡魔とはなりて、惣花のびら毎晩かゝりて、胸わるき内證に笑ひ顔させし昔を忍びては、あぶれし夜の一時二時頃なみだぐむ事のなからんや。今日は夕方から雨あがりたれどひやかしも少なく、つくく往來を眺むる所へ通りかゝる男、竹の子笠の破れたる頂き、性のなくなつた帆布綿のぼろ／＼したるな身に纏ひ、らおのすげかへとよびもせず荷をかつぐ力もなげに、たゞとあるくあはれさ。よびとめてすげかへをたのみ、仕事する所を見れば見る程見すばらしきなりふり。此男とてむかしは羅宇のすげかへにもあるまじ、水の出花の若盛りには戀の九つばし子のぼりつめて、情のなまいきな事をしたる時もあるべしと思はす歎息する折から出來ましたとさしただす煙管手にとつて、鳥目渡すとん顔をあはせし一刹那、

八萬四千の毛孔いまだちて、息もつけず其まべつたりと尻もちつき、オヤとも云ひ切らぬ中さしこむ瘰。男は見るまでもなく荷を捨て、最早二三町ばかり去りしなるべし。

二 世はからくりの變化早し

水を買つて飲む東京ッ子の水の出花、何れ金銭を湯水とつかふかはりに、何處となく濺拔して田舎の苗代水あびた人とはちがふものなりなぞとおのれを高ぶり、ナンダ親父が懲治檻入を願ふと、笑はせやがるチヨウザ／＼アハ、と馬鹿にながら、矢張親のすれかじる商、二錢出して花王散でみがくこと片腹痛しと、福德屋徳兵衛大きにあつくなりて、さんまたの如き筋を額にあらはし、日蓮宗だけに帝釋天をあざむく許りおそろしきけんまくにて、此度は女房のとりにしもいれず、少しは錢のきれ目に浮世の鹽風でも食つて來いと、可愛き息子を勸當は出來れど、まづは追ひ出しけるに引かへ、母親はつまり無益となるにも氣が付かず大札幾枚かを宋裏の仁に袖から袖へうつし、暫時辛抱して時節をまつがよいぞや、改心のしるしさへ見えたなら何とか言なしてよびかへす程に遠くへは行くなと、一粒千金の涙に煉りまぜて玉はる乳

一の上

後悔の胸元にたつ矢

吸ひつけ煙草がのろけの口火となりて、中頃は火の事、末は角やしきもけふりと消えて仕まひ、是はとさとのりの開くる時分は、一切灰となりて、お舍利の一つも残らぬが、大盡の身のはてぞかし。廊の夜學に勉強出精、さりとては用もなきいたり穿鑿、庄司甚内が開闢よりこのかた、たそや行燈の起原から、玉屋の土臺石が何處に残つてあるといふ事まで取調べて、四書大全はのぞきもせれど色道大全の無きを恨み、観音經ひとつしられど、洒落本一切藏を讀盡して、あつばれ斯道の大博士、天明風をよるこびて、親の付けられし名を嫌ひ、魯休と表徳を自分さめして、三四年は人にも嬉しがられる程の伊達あそび、如心齋張のひれつた煙管をやに下りに唾へ、緞子の蒲團の臺座にむだ如來とかしづかれ、ばいをやりしも今はむかし。パツパとまきちらせし金銀の後光失せて、茶屋もふさがり、親類には見放され、先祖の佛壇まで賣つて

のけた罰當り、ボツ／＼とした腫物段々烈しくなり、藥餌も充分とは行かず、看病人もなし、くされかゝつた古だゝみの上に、死ぬをまつばかりのありさまとなりたるが、一念爰に發起して、懺悔に罪もほろびたるが、慈善家の露の恵みに生返りて、身體はどうやら持ち直したれど、はきはきとしたる事も出来れば、毎日毎日らおのすげかへとよびながら、昔は桐火桶に香たどんいけさせた身が、罌丸火鉢に文久の炭團を大事にいけて、臘虎の襟つけた二重とんびより重き物かけた事なき撫で肩に擔いであるくつらさ。アーツ、腐りあふたるふたりの中は、はなれまゐとの骨がらみ、とあの慈齋坊主が歌つたのを其時は笑つたが、前兆となつての此苦み、三十にもならぬに意氣地のない商賣と男泣になく折もありけるが或日の事小雨ふりて、ひるは一丈も取れず、豆腐のからさへ買ふ事なれば弱り居りしが夕方になりて雲足きたるに嬉しやと荷をかついで出はしたれど、一本も仕事せぬうち日は暮れたり、是非もなし大門這入らば少

しにはならんと、だん／＼ふし見町へさしかゝりたるが、流石に三味線の音もまだひるめし食はぬ腹に響きてはおもしろからず、もしや知り人にも逢はむかと心應して、自然首を俛ながら夢路たどるごとく兩側を眼にも觸れず爲るとはなしに忍び足して行く時に、いづくよりか、かんばんしりたる聲にて。らおやさんと呼ばれし途端の一刹那。總身の血は一時に顔へのぼりて、はげしき動悸に息を内へ急に吸ひながら頭はぶるぶるとふるへ、奥齒かみしめて眼をふさぎ是非の分別もなく。昔は、ア、。

一の下

零落の袖にあまる涙

芝居淨瑠璃で苦界に沈む者を、孝女のやうに仕なす故、是に見なれ聞きなれたる無學の少女等、左程の恥とも思はず、身を賣るも多くらんなれども、まことに傾城となりて孝行ならば、殺生禁斷の御蔭に網をいれて、親に鯉の濃汁をすゝめるも、罪とはならぬ筈なり。それも難衣さんと廓名よばれて、直に返辭の出ざりし程は、しほらしくあはれる所もありけれど、田舎客にしのぎ二三折られてからは根性圖太くなり玉ひて、忍び通ひし玉ふ奏任官のなにがし様を黠黒の大將といへばまだしも、舶來の鍾馗

こびて。是はいらぬもの、そなたにやると、羽織煙草入時計と共に懷中物其まゝなげ與へ常閑亭にゆきける心の内、かうと思ひ定めても身もだえするほどくるしく。小丹いつもの如くきたりて氣もつかすいそゝよるこぶ顔の笑窪の居どころは昨日にかはられど、見るからかなしく、何となく座敷浮きたゝす。此世の思ひ出是ではと小丹が中よしの藝者ありたけよびつくして、花々しきさわざに夜はふけたり。昔は粹ぞと聞きし寐よとの鐘も今日は命を一ツ一ツきざむひきとかなしく、肴後もすでにつきて世はなにか焼鯛の骨ばかり残るに仇野のおもかげ忍ばれて、言葉なく座をたち、よろゝとするあしもと、あふしとたすけられて花筵の上に横はれば、鯨の枕を早速にすゝむる利發さ。しどけなき細帯姿なやかに、深草形の團扇に香水ふりかけて持手もたゆく、芭蕉葉のしなへる様に、冷風を送りて玉はる心づくし、かゝる程の才子が親をすて名を棄るも爰に打込んでなりと、ぞつこんうれしくはあれど、三年からの長き馴染にいらぬ事の客あしらひは恨ちやと袂を抑へてすねれば。なまけなき御言葉、人に媚ること知つた小丹にあらずと腹立顔の眼付に戀をするどくして、其手はやさしく猶腋の下あふぐに

は、列子の魂ならでも有頂天外に飛ぶべし。かなるは有難き骨にしてみても其まゝ引きよせ、涙ながらに勘當の始末をかたれば大に驚く様子に眞實いよく見えて今はかくすまでもなく、胸の中を明すに、身を顛はして。それも誰故わたりし故なれば可愛い方様を先立て、おめくとして居られませうか、かてての約束もあるものを爰になりてかばる女にあらず、さりとて見苦しき死さま後の笑ひもはづかしければ、あすの夜はよく／＼身支度して、いつぞや潮干に御供したなりは橋も永代ぢやわれらが中も永代ぢやとさゝやかれし橋より引汐を見はからひ、心よく大海の水屑となるべしといふを抑へ。誰に見榮わして死やうを擇ぶことぞ、幸と手にいれしモルヒネといふ物、爰にある酔ざめの水にときて飲むべしと、ふところより粉薬とり出しコップにはたたくを見たる小丹が一利那。アツ、ト仰天して蚊屋まくりもあへず、人殺し、とさげびながら階子の踏みどをしらすころげ落ちるを見たる一利那。ア、まよふた、心底かくの如き女とも知らず、尊き両親にお世話やかせてまつりて、自ら大きな馬鹿となりしこと口惜けれど、かくては猶ほ／＼生きて居るべき面もなしと、愈々無分別にコップ仰げは何ともしらず烈しき味舌

をさして正氣にかへる一利那。ホツ、ホツ苦しい苦しい死ぬばいいやだ、と思ふ所へ内儀飛んで来り、コップ打ちおとし水も醫者よとうろたへ喚ぶ聲に應じて駈け上りたるは宵より他座敷に居られし客。番頭と母親なりとかなるは認し一利那、早く死たいたもがくをじろりとにらみて女客は内儀をよび、此男わたくしのせがれなれば、此上の御難儀も御氣の毒引とりて歸ります、御蔭さまで、多分あの世の者でせうと中々少しも騒がず、あてつけられしとたんの一利那、内儀は穴にも入りたしと流石をそれしやも野菜かたぎに敵はず。番頭自ら車を招びきたれば無理やりにかゝるを載せて家に歸りゆく。道すがら十二三分もたちて坐り心に覺えある吾部屋になげこまれし狂氣男は胸元段々すゞしくなる許りにて死ぬべしと思へず、狐の落ちたるやうにてぼんやりとしたる時、欲庵ひとり狐鼠々々ときたり。コン若旦那、御戲談では御座らぬ、情死なぞはよし玉へよし玉へ、明治の艶女郎は下さらぬでは御座らぬか、愚老さしあげたる薬は實は梅酸と申すもの、毒にならう筈なし、今日御別れ申してから直に此方へまゐり、有體に申しあげたれば、おふくろさまば。それほど迷うたる愚かさを今夜氣がついて悟るべしと、殊の外の

酔ほどあまき御教訓を、吞込んで合點はしても
すぐと尻ねけ、あゝ勿體なき事や。古代ざらさ
の緒すげた駒下駄を單足袋はいた足につゝかけ
て、吾家のうら口より出ると直に、みつの車に
のりのみち、火宅の門をやいでぬらんと葵の上
を小聲に漣がりうたひゆくしるより。イヨか
をる大將婆婆以來でけしたな、竹布のおめしに
唐紹の御羽織、金からかばのお煙草入に珊瑚の
緒の野暮にぐつと赤いのが透て見るなぞはど
うも妙でけすな、是を敷こしのからすうりに噓
ふかネ、光琳にもない圖だ。饒舌な〜唾珠
がはれて霧のやうだ、それに日光がうつるから
口のまはりに虹が出て居るは。ヤ、是ばすさま
じい、慾庵閉口致しやす、時にいづこへハ、
ア黙つて居らしやるところが失禮ながら直打で
げす、心得て居りやす、流石は慾庵だと天保
の三枚位下すつてもよい、所でげせうなんと、
夏だけに煽りたて、連だちて常閑亭に入れば、
譯もなき酒にやがて鼠なきをささぶれにして、
曰くつきの小丹猫も來臨あれば論はなし論はな
し。慾庵は内儀のさりやくに迫放されて、跡は
席をかへて二階の四疊半の小座敷。燈火つくる
までもなしと、さし上る月影を小盃にうかべ
て、ふたりきりのやりとり、正宗も今うまくな

りて、そなたの耳に異な香ひがするやうちやと、
曾呂利の洒落を換骨奪胎も笑ひをふくんでの小
聲、むつまじきを軒の風鈴心ありてれたむか、
ちん〜と鳴りしにハツと驚かれしこそなかし
けれ。かゝるは勘當されしを欠伸にも出さず、
夜ふくる頃歸りて友達の家にとまりぬ。むかし
よりかゝる男をきらはんと思比須様の誓文にて
もあることか、かゝるは母親より玉ばりしも三
日四日に残り少くなりておもしろからず。昨宵
の口うらでは小丹も抱へられの自由なり難き身
なれば、われを過す程の働きとてならざる様子、
談合したとてよき分別の何があるべき。安東京
に生れながら田舎の親類にたよりて草のいされ
くさき野中にすむも残念なれば、いつその事慾
庵方にてモルヒネを貰ひうけ、跡にのこして歎
きさするも罪なれば、小丹もろともあの世にう
つりて、極樂の新道に色道指南の學校でもひら
くべしと、途徹もなき考を起し慾庵方へたづね
行けば、是は大將あり難し、かゝる癖のやどへ
雨もふらぬに道灌さまかや、酒はなけれど山吹
色、お茶でもあがれとちやほやして、あたらしき
時にさへ三錢もせぬ鉋屑あみし敷物のちりをは
らへば、其まゝ坐り、用もなき話二ツ三ツして
のち聲をひそめ。さて内々にて折入つてたのみ

あり、なんと聞きいれ玉はざるか。と推し玉ふ
にも及ばず、慾庵が首めされても苦しうは御座
らぬ。イヤ、冗談ではなしほんの事。さればほ
んの事、なんのいなやを申しませう。是は早速
あり難し。然らば御羽織頂戴、羽織もやらう。
煙草入頂戴。よし〜それもやらう。お時計も。
ア、うるさいそれもやるが、たのみといふは。
あの子を一杯反問苦肉の計略でかきのめさんと
するに付いては、山本勘助軍師になれといふの
でげせう。そんな事なら貴老にはたのまぬが、
御商賣から譯もなき事、モルヒネを少しといは
れて慾庵眞青になり、がたがた顫へる膝を兩手
にてしつかり押へながら。ソ、ソ、ソレハいけま
せん、若旦那それは閉口チト恐れ入ります、願
ひさげにしませう。イヤさうばぬけさせない、
コレ慾庵、たとひ親しき中なればとて人命に關
する毒藥の話をした上ばできぬとて唯はおか
ぬと、此方は血相かへてつめよする勢。すさま
じ。噫是非もなしと思案して、慾庵火入の灰の
上に、さらばモルヒネを參らすべけれど、此事
口外堅く御無用と書きて、駈とうなづくを見す
まし、しとやかに座をたち奥に入りて白き粉を
厚き紙につゝみてもち來り、酒に合して用ひる
が一番廻り早しと耳こすりすれば、かゝるよろ

ど、れたりはふうれより美しき爲か、弱き爲か、ふうれの如く威の強くして親み難き所あらぬ爲か、それとも自分の氣風に似たる所の多き爲か、相性とかいふものゝ爲か、何となくれたりには言葉をかはず數も多く、笑顔を見ずる事も多く、さりとてふうれをゆめ／＼おろそかにするにあらざりけり。或時縷々加は野葡萄採らんとて、栗のあま皮にて編みたるかますを小脇にして、廣き野の中を歩みゆきけるに、ひとつの蝶の飛び行くを追ひながら少女心の何氣なく青空打仰ぎて、ふたあし三足四足めに何かの絲にさばるや否、弦音がきて一つの矢左の拳に發矢と立つたる一刹那、無念無想に「カムイ」とひと聲叫びも了らぬ所へ、左右一齊駈け來りし、れたりは見たる一刹那、あつとばかりに氣絶しつゝ、ふうれは見たる一刹那、きらめく電光とびちる紅。

(マキリとは、腰刀、義○ユーカリとは淨瑠璃の如きもの。○神、カムイといふ)

三の下 戀に地獄も極樂もあり

夢ともうつとも分らず左の手の痛さに眼を細くひらきて見れば、涙を浮べながらほの暗き燈火のかげにうづくまりたるふうれ。さては此

人のなまきけに附子の毒の廻らぬうち、拳を切つてはなされしだけに、命はとりとめたりと思ふに、あり難きは透間も山下しの風と共に身にしてみて、分別あきらかに決断はやく男らしき氣性なことに慕はしく、口にこそいひだされ、心には癡人となりしを厭はれずば、石狩川の末遠く、後志岳のこしなへに、此人の露のなまきに霑ふべし、いふや嫌はれたればとて、何しによそになびくべき、せめては犬になりても根本大事の方様の門邊を去らじと神かけて誓ひけるが、姥白合のくす片栗の花と食事にまで、毒にならぬ物を選択びて、親切の介抱、そのみか四里ほど隔りて、「タランホナイ」といふ所一面に生ひ重りたるタランゴの刺恐ろしきまで烈しきあたり切疵に妙なる温泉湧を汲取り來て毎日々々疵口を洗うて玉ばるまごころ、しんぞうれしさに苦痛も早く忘れて、一月許りに癡人とはなりたれど、平癒したる折ふし、ふうれも居らねば退屈の手すぎに、「モツクリ」にても鳴らさんと起上り、取りあげて右の指にもち唇に當がひはしたれど、あらなまきけなや控への絲などの手にて持たんと、思はずそつとして其時の事を考ふれば、考ふる程口惜しく、これも誰故あのなまきかしきアマツボをしかけたるれ

たり故と腹だたしくはあれど、我身を見て氣絶したるは、あはれ深き事なり、それにしても其儘死にしか助けられしかと、女氣のいと細く何となく涙ささるゝも無理ならず。凡そ生とし生けるものは、跛足にもあれ癩病にもあれそれにさへ可愛がられて、何の憎かるべき。況てや憎からぬ男に慕はれし縷々加も、やさしき戀の道知り情知り、よろ／＼とあゆみいでて、夕暮の露軒端にけぶられたりの家近く佇みて、内の様子を覗へば、ひっそりとして火も見えず、人の氣もなき静さ。さてははかなく我爲に世を終られしかと身の毛よだちて、かゝる心あつき人と共にひとつ野邊に終りしならば、命もさらに惜からざりしものを、思ひ切つては去り難く、少時そこに立居れば、

「あちきなや、みとせごし、朝な夕な晝に夜に、覺めては思ひ思ひ餘りつゝ、いれては夢に夢見絶えせず、戀にし人を、慕ひし人を、その思ひの、おもひもかけず、其夢の、ゆめにも知らず、しらきのまゆみ、附子の毒の矢、とどむるひまもなまきけなや、救はんとする心つかの間、射たりし罪に、身をせめて死なばまだしも、身を恥て死なばまだしも、淺夢が露と消えもすべきを、逢が塵

およろこび、サア是で大かた小丹の腹も浮世の人情のあさましき所もおわかりになりましたらん、實は愚老も其罪かゝらず、さきほどあなた御出の時倍りて急に善人となりたれば眞面目に御異見申します、ア、何事も夢々、是からは夢でなく實體に御孝行なされと云捨てに逃るを見て、流るゝ汗顔に止まらぬ折も折とて、疊さばりあらあらしき足音は親父さま。青二才の死ぞこなひめ、眼がさめてか、と一喝せられしとたんの一刹那、眞から底から恐縮して重々恐れ入ましたと云ふを生聲にして生れかばり、其翌日より眞黒になりてかせぐ商賣に油斷なく、人の噂に小丹は餘所の阿房のながめとなりしと聞くにつけ瘡言にも一本目とうたひしは前の世の事、今は一番目には親の恩といふやうになりければ、福德屋ますゝ福德圓滿して、一年程にかゝるが出精の效も見え、自然肩身ひろく世を渡りける。

三の上 刀の上で戀のあらそひ

我身ふたつとなすよしもなきに困りて、命を溪川の水泡とせしはあはれ深きむかし語、是は我身をふたつにせられし、おそろしくさまじく、みいちゃんばあちゃん丹次郎艶次郎

の思ひも寄らぬ戀あらそひ。心猛き蝦夷が島人の中に麗多理といふ男。髭もうすくしなやかにて、顔の色白く唇うつくしく、氣性までやさしく笑ふにも聲は出さず、口元で云ふにいれぬ愛嬌をこぼし、背力はなけれど智慧ありて「アマツボ」といふ物を工夫し、八千草生ひ繁る原の中に弓を張りて隠し置き、それより絲をひきて狐兎などはに觸るれば、はじきのばたきにて毒矢飛び走り、直に仕留める様装置をなし、又は「シュリー」の木を削りて長きほこを作り、鮑を取るに水に入らずともすむ事を考へなどして、よろづかしければ、村中にも可愛がられるが、此男戀にはよき智慧も出ず、鎌々加といへる少女の爲には、三年ほど以前より思ひをばこび、意を通はして苦しめども、いまだによき返辭ひとつだに得ぬも道理。鎌々加は眼の中すばしく、髪の毛つややかに薄紅の頬の色元氣を現はし、あつさりとした手首のほりものに風流を示して、それのみか聲の清きこと「ユカリ」を歌はれては、檻の中に飼はれたる熊も泣くべき程なれば、言ひ寄る者も多きうちにも、風連といふは身の長六尺に餘り、さびたる針の如き毛、惣身に生ひて、鷲のやうな兩眼鋭くどく光り、桃の如くふしくれたちたる

兩腕の力量どれほどと云ふことをしらす。一尺五寸あまりの刀を始終腰にさして「大マキリ」と紳名よばれし男、年中まじめにてめつたに笑はず、喜ぶ時には天地にひびく高笑すれど、自分には聲の高きに心づかざる如く、すべて小刀細工の面倒なることを嫌へども、義理に暗からず、俠氣強く喧嘩争闘にひけを取りたる事なれば、村中に尊敬せられると、戀には大力も用る所なく、是も三年ばかり前より鎌々加に向つては、平常雷の如く大いなる聲も低くし、朴訥粗傲の氣を抑へて親切に誠を盡しける。されば鎌々加はいづれもなびき難く、左に依らんとすれば右の心根ふびんにて、此に従はんとすれば彼の恨も思ひやられ、麗多理のやさしきはいとしけれど、風連もやさしからずとは云ひ難く、ふうれのたのもしげなるは嬉しけれど、れたりもたのもしからぬにはあらず。女の一生をまかせんには、智慧ありとも智慧なくとも、勇氣ありとも勇氣なくとも、夫等を擇んでとるべきものにあらねば、まして容貌の醜美顔色の白赤に關るべきにあらずと、道理の上より考へて、さてそれらなば別物とりのけ置き、つくづくふたりの心の誠を競ふるに、まさりおとりのさらに見えれば、殆ど當惑するのみなれ

して、漸く此春こしらへた銀の「シドキ」も
 今ばあだ、残らずこゝに取り揃へ、綾々加
 の紋のいたやの葉を、印して置いたはせめ
 ての記念、黒漆のあの太刀一ふり、鐵鋸六
 枚弓三張は綾々加の命なとりとめて呉れた
 恩あるふうれ殿への遺品にして、千日足ら
 すの戀を夢。ア、何につけ彼につけて、夢
 になりとももう一度、綾々加に逢ひたいも
 のだな。エ、迷ふまいれたりば男子、男
 子らしく死んでも見たいが、それにしても
 「シャモ」には文字といふものあるなれば、
 かゝる時にも心をあらはす頼りとなれど。
 「アイノ」の悲しさ口惜しさ。切なき思の萬
 分一いひ置く事さへ叶はぬか。」
 と齒がみの音の物凄く、綾々加は思はず小窓よ
 り首さしこみて覗へば、折から山風吹きあれて、
 月の光りもさし添ひつ、おぼろげながら見え
 るに、れたりば肉け、頬瘦せて、眼くぼみ鼻高
 く、白き面の青きまで、すき透る如きおそろし
 さ。我身の爲にかくまでかと、満身水に溺るる
 心地して、言葉も出でず慄ひ居るとも知らざれ
 ば、れたりば浮世の名残の一盞、汲みて浮世の名
 残の一曲とや思ひけん、大きなる椀にて酒が水
 か、鯁の油か何やら呑みつゝ「カー」引よせて、

「恨みある世も恨みじ、戀しき人をも戀は
 じ。恨むとも、世はいざしらふの鷹の、飛
 びて影さへ見えなくに、戀ふるとも人ば、
 あゝあら駒の、行くての道も知れぬものよ。
 とはいへ恨めしの世や、戀しき人や。」
 と歌ひすまして三たび嘯き、さても忘れたり此
 「カー」も、綾々加に譲らで誰にゆづるべきと、
 戀に印付けつゝ立上りて何とも知らず怪しき
 物とり出し、呑さしの椀の中へ落しつゝ、座を正
 しくして今や仰き呑んとするとたんの一刹那。
 入口の垂れむしる上ぐる間遅しと駈ける綾々
 加、椀もつ手をはたとたきて、其まゝ膝に泣
 き倒れたる此時れたりが一刹那、思ひも言葉も
 なみだなるべし。かゝる所へのそりゝと足音
 ゆたかに入り来るふうれを、眼早く綾々加は認
 めし一刹那、いづれにもいつはりならぬ綾々加
 の心を見玉へやと、溢れ残りたる毒酒を取るを
 ふうれば見たる一刹那、椀を奪ひて言葉せばし
 く。ふたりは夫婦ふ、ふうればふたりの兄弟よ、
 と叫びしとたんの一刹那、喜憂忽ち所を換へ、
 戀は萬歳萬々歳、愛も萬歳萬々歳。ふたりは何
 の言葉もなく、左右の手にすがりつきて、三人
 一團となりし時、ふうれば靜に笑ひながら、三
 人生きたかハ、ハ、と、其響は今に残りぬ。

(モツクリとは「びやぼん」の如き物○水鳥の骨の鐵とは
 「シカベ」といふ鳥の脚の骨を失らして用ゐればなり)ア
 イノには文字といふべき程のものはないけれど其人の所有
 なぞを證する爲には、鳥の足木の葉なぞの印を彫り付け
 などすることあり○シドキはみすますらんと白石作
 生の説ありしと覺ゆ。女子の胸飾りなり○カーは紅藥器
 なり)
 或人評して曰く、「ふうれは人情に遠し、世
 にかくの如き者あらむやと。予叱して曰く、
 人情一ならず、汝の盡す所にあらず、指を
 以て海を量り、指盡て水斯に盡きたりとなす
 なかれ。

(明治二十二年五月作)

となりもすべきを、露の玉の緒とり止て、
塵の命の尙残り、思ひもわかず、夢もむす
ばず、常盤になやむくるしさを、誰にか告
げん神ならで、誰かは知らん神ならで。あ
あ。まがみすむてふあら山の、奥に狩する
折とても、妻戀ふ鹿をば汝もまた、同じ心
や有つらんと、獵矢放たす。あら海の磯に
すなどる時とても、妹よぶ瀬をば汝もまた、
ひとつ思ひになくらめと、鰯をどめつ。
これにつけ彼につけ、事につけ物につけ、
おろそかならず我はありしに、千早ぶる神
はれたりを責め玉ふか。さばへなす神はれ
たりを憎み玉ふか。あゝ。山鳥の尾の矢羽
の、風きり早み、水鳥の骨のやじりの勢
するどく、いひも得ず、譬へもしらず、い
としき妹の雪じろの、左手の指に立ちたる
は、あゝ立ちたるは、見るに眼もくれ、
胸も躍りぬ。うらめしや。口惜しや。縷々
加と見すは眼もたしかにて、縷々加と知ら
ずは胸も跳らず、天飛ぶ星の如く、空はし
るいなづまの如く、「マキリ」引抜き手首斬
りつ、毒も吸ふべく疵もなめんに、あゝは
づかし。悲し、あゝ。昔の根の長き年にも、
彼人なのみ彼人なのみ、思ひける胸なれば、

蘆の節のみじかき夢にも、彼人なのみ彼人
なのみ見ける眼なれば、其眼もくれ、其胸
も跳り、絶入りしこそ、甲斐なかりけれ。
うらみなれ。
と途切々々に、歌ふにもなく吟ずるにもなく、
唸るに細き聲音、弱りて調子のもつれ舌の亂れ、
たゞ事とは聞えず、縷々加はとゞまらぬ涙「ア
ツシ」のせまき袖にあまりて、あゝ「アマツボ」
に觸れしは我身の不運、此人のとがにはあらざ
りし。殊さら其時我身を救はれし大恩あるふう
れ殿ばかり情深きにはあらさず、思ひあまりて氣
絶までせられしれたり殿の心の内、汲みて見れ
ばいづれに愚はなし。此世に彼人と逢ひ彼世に
此の人と逢はば、いかに嬉しかるべきを、いか
なる怪しきえにしにて、かくまで切なるふたり
に同じ世にて思はるゝ事よ。とてもかくてもひ
とりにばよしや従ふべきもひとりにば中々背き
難く、二人をひとつになす事も出来れば、我身
をふたつになす事もならず、女の身として心驚
き人に慕はるゝ程、嬉しく尊き事はなきに、か
くては悲しくつらき限りなれど、それも今は是
までなり。ふたりが爲に身を捨て、思ひ分け難
き我心の誠なあらはすべけれど、あさくも思ひ
きはめて行かんとする時又も内にて悲哀の聲に

ふさ／＼と垂れたる黒髪をひきもどされつ、ふ
たあし三足後歸りて聞けば、
「ア、命も最早いらぬもの、戀しい縷々加の
看病をしよう」とすれば、戀のかたきのあの
ふうれが、貴様ば縷々加を殺した奴、縷々
加はおれが助けたからは、貴様に看病は頼
まない。是非ないとはいへ縷々加の手首を
おれが手首を斬るよりも、苦しい思ひを堪
忍して、切つたも元は貴様からだと強く恨
むもあゝ矢張戀の意地。無理でばなけれど
此儘に、どうしておれが居られよう。と、
いつてふうれを恨みやうもなければ、おの
れが罪に身をせて、身欠一本水一滴も、
喉に通らぬ悲しさも、あゝもうこれで三十
日、せめて一言生きある中に、戀しい縷々
加の唇から、やさしい言葉を受けたなら、
死ぬにも榮のある事だが、エ、エ、そ
れも思ふまい。おれの矢先で命まですでに
危くした人が、笑顔を見せる筈もなければ、
言葉は尙更の事、何樂みに今日までは、生
きて居たやらが身が分らぬ。オ、さうさ
う。金毛の熊の皮五枚、臘虎一枚、額一枚、
それにまたもしや縷々加とおれの中に、嬉
しい事が出来たなら、餓らうと思つて苦辛

惜しい事に去年でござつたら斯る浦里も眼前の御利益、菩薩の御陰で賑やかな丑歳の群集、房州一圓御詠歌うたふ聲雲に響き、女同志の仇めかしき鼠甲斐絹の脚絆白地の手拭、花簪の虚空に連なりて五人七人組をなし、札所廻りせし有様を御眼にかけようものを、此頃の淋しき所だけ見て安房は物憂きなどと東京へ歸りて噂し玉ふな、其代り海魚の新しいのに充分御馳走の心を盡しました積り、料理方は下手でもそれは邊國の常とおゆるしなされ、昔し私が江戸へ行た時目黒へ参つて其節食つた肴には勝つて居ると毎度東京から見える御客様には威張ります、ハ、ハ、ハ、イヤ御疲れでござりませうに長話し致しました、ホイ先程は御茶代を、ありがたうございました、御禮申すをツイ忘れて御免なされ、御火はございますか、左様ならお休みなされ、唯今婢どもに御床を延させませうと無暗に頭を疊に打付けるやうな辭宜しう立たんとするを呼んで。親爺殿、國自慢の話は面白いが、何と美人も定めし此邊にあるべし、那古寺参りは假の名まことば正眞の美人を拜みたく願ひにて長の年月東京中を捜しあるいた揚句、思ひたッて今朝此方へ来る船に乗りし我等、此村に居るだけの美女の品定め聞きたしと云へば元頭

を指あらき手にて撫でつゝ。是はまた怪しからぬ御尋ね、わたくし最少し年若くば、漁師たらしの流れ女何處の汁粉屋に澁皮のむけた奴ありとか何とか申して御連れ申し、お前様を船にして色酒の海に乗り出すといふ事もあれど、息子持つて今其様の儀は正直の所、厭になりまして、御教へ申したとお慰さみになる程の女がかる地に在る筈なし、堅い家の娘子供にも東京知つた人に女でござ候と見せなきはなし、あまり國自慢いたした返報かは知りませぬが是れは恐れいりました、邊鄙で美人の詮索お前様も無粹ではござらぬか。イヤ、邊鄙で美人なしとは暗い、暗い、隠すな親爺殿、美人に付ては歴史地理生理心理、オホンオホンの哲學までを調べた我に向つて隠すは野暮なり、野州鹽原は那須野の裾の片里なれど名妓高尾は其地より出で、周防の宝積の傾城は書寫の性空を泣かしめたり、又ば下總眞間の手古奈又は奥州白石の孝女皆邊鄙に出で其名高し、昔時を譬喩に引かざるも越後は北海の波打つ國にて然も女の肌よろしく、津輕は率土の濱邊なるさへ面の清き女を出す、鳥も通はぬ八丈が島女は黒髪うつくしく、長門の女の聲うつくしく、名古屋女は尻肥えたりと馬琴には書かれたれど顔色櫻の花をあざむ

き飽くまで物柔らかき所あり、それにも増して伊勢女、舌の薄くて能く饒舌るは疵ながら小機轉利て利發とは人も許すぞかし、南は琉球北は蝦夷水を渉つて千島の果まで大凡日本の領内に美人のあらぬ道理なし、唯其中に我正眞極粹の美人を見たき大願、さればこそ朋友の誰彼が新橋の藝妓柳橋の別嬪芳原洲崎の野花瑠柳、假りにも美と噂する者皆見て廻はつて美人とは思ひながら未だ正眞極粹の美人とは感服せず、美嬌揃と名の高き何々館の舞姫何々學校の生徒、白玉を藥研で粉にして羽二重澁にした揚句に月の雫で担て作つたやうな綺麗な女はあれど正眞極粹の美人と惚れる程のは無し、扱もなさない事我一生他の望みはなけれど此大願唯一つ未だに通らず、終に此地に迷ひ來りしに邊鄙故美人なしとは餘りすぎなき言葉、正眞の美人は無いかも知れぬが唯の美人の無き筈なし、たゞの美人の其中に正眞の美人なしとに限らず、天女も羽衣服で一服やりさうな此浦の景色、もしや其子でも無いか、とまくしたて、問ひかくれば親爺おどろいて。中々もつて、中々もつて。

中の巻 (下)

三十二相八十種好圓滿具足したる美形は、房

眞

美

人

上の巻

廢娼論あるなしに關はらず、見るは無錢、安いの頂上は是れ。芳原洲崎の美形、よしや赭熊は背越しのにもせよ、毎晩々々白粉に工手間を厭はず、口紅を玉蟲色に光らして綺麗に作りたて、衣裳物好に着こなし玉ひ、然も血の通ひ居るに人形よりチャンと坐り、蕎麥屋の香味箱のやうな煙草盆を前に控たる御姿、安本龜八の作も及ばず、芳年が筆を其まゝの活人畫、見事々とほめて通らばむづかしい理窟はなし。傾城と正宗拜見するに限る、手を觸れたらば命なるべしと、夕鴉待乳山に急ぐ頃又は辨天町に暮の星ちらつき出す時分より常に眼だけの樂みを悦びし男、晝は山の手に學校通ひし玉ふ束髪の令嬢、朝は天神の境内に寝ぐせつきたる髪をかしき楊弓場の女までを見てあるき、一年三百六十五日間があるとも休むことなく、雨降れば車の母衣の内ぞゆかしきと尋ねまはり、雪ふればお高祖頭巾の顔隠せし人じらしめ、尙さら忍ばるゝと

彷徨き、親の讐を捜すほどの苦心、神田上水で産湯つかひし以來三十何歳口惜しい哉いまだ正眞の美人を見出さず、さりとて厭なるもなければ是ぞと一身の魂魄を裸投にしたき程のも無かりし。今日も無益に下駄の齒を耗らして、さしかる永代橋それを渡らず後戻りして、雲片島折から蒸氣船宿の男ども聲高く人を呼ぶを聞けば、房州行き今出發との事。忽ち思ひ立つて行ばや藻汐草焼く浦々、海士にも戀知り、人を松風の昔譚も有りしぞかしと涙に浮かれ心、早切符を買うて魚の香のする船中は一夢、勝山と叫ばれて名高き太夫かと思ふに傾城島の近く浮島の此方なる港なりしは可笑し。尙ほ此處には上らず、鬼が崎を廻りてハツ島井戸島猪野瀬島、多田良が不動の端を過れば景色一しほ、船形川名、那古は殊更良き眺望、親世音の居玉ふ所、ありがたさに端舟を便り砂濱に下りたち、最早氣を付けるとも知らずや、油氣もなくそつけたる髪、濡り含む洋風に飄らせて、裾小高く着たる木綿布子の袖長からず赤黒き手足太く如龜り

と出でしあさましさ、御顔は却って醜くもあらねど是がそもや女かと悲し。宿引達の取る袂を拂ひ町を通れば、鮮やかなる小鯛べらなど様様の小魚竹籠に熊笹の緑りを添へて納れ、細かがり手ばしつこく積出しの支度念がしき魚問屋の店に居る姫、眼鼻立バラリとして年ば片手を三度振る程のおぼこなるに、都はづかしき島田の恰好上品な心憎く、掛けたる葛引さりとは仔細らしと思ふ内、海棠の蕾の口を開きて、喉の穴に傾く日の光りの差し込むを、關はず長々と欠伸したるに吹き出すまで可笑しく、立去りし途の横町より馳せ出でし女、顔見る間なく擦れ違つて後よりむけば小股の足の運び無器用ならず、腰付感心とほめけるが、頓て裾のまつばるを五月蠅と思ひけん、尻端折つて握み絞りの脚布、あらばれ渡る雪じろのふくら唇に興さめぬ。此土地の美人、宿の亭主に品定めさせて後の探索と何某屋に入りける酔興の御客様一名、宿帳に職業何と記すべきか。

中の巻 (上)

風呂敷包一つ持たぬ旅、宿の亭主に怪しまれながら那古寺參詣と殊勝らしく云へば、町合人の淳樸なる心より、それはお若いに御奇特な、

んとす。此中是非とも眞美人出さるべからず、眞美人を下界に賜はりたし。眞美人請求の主意は是の如し。

右の通りの理由御辯駁あらばよし、左もなくば早速美人を御製造ありたく候。萬一御答もなく御製造も無ければ決闘仕るべく候。

也頓首
觀世音菩薩殿
天帝殿

下の巻 (上)

堂々たる潮の音肝に答へて寒く、岩を噛む波の齒はバツタリと碎けて水晶の玉なす雨。坤軸も動ぐほどの勢い凄まじき外海の片ほとりを、心弱く氣細々とあゆみゆくに足元危く、寄せ来る雄波は陽に響き雄波は陰に鳴り、沖は眞黒の闇夜を欺むく空や水や見分けられぬ恐ろしさ、跋難陀龍王暴れ立ち玉ひたるかと覺えて流石好色の男も女どころの詮議にあらず、よしや龍女がお前様に惚れましてエンターシいたしたく此方からは如意寶珠あげます程にお前様からは寒冷紗のハンケチなりと下されといふやうな甘い事云て來ても恐縮閉口すべき有様。泣きさうになつて磯邊を迫る眼前を遮る大きな岩組、千

年の苦着く、薄貝充分に付きて滑らかにもあり峻しくもあるを如何にもし難く、涉り登れば少しく平地にて向うよりも今攀來りし人、何處やらに見覚えある心地して然も其名思ひ出せず躊躇うちに先より聲かけられ、是は珍らしい所でお眼に懸りましたと挨拶すれば、イヤ珍らしい所でもない、頃日は始終此近邊に住ひ居ります、貴君はいつも御健勝で相變らず美人探索なされますか、未だに正眞の美人見付りませぬかな。御存知の通り頻りと苦慮いたして珠名の郷まで捜しあるき、御覧の如き儘哉、残念ながら照に入りませぬ。ヤレヤレお眼の悪いお方ではござらぬか、もう大抵正眞の美人も分りさうなものでござるが、笑止千萬お氣の毒な事でござる。如何にも仰せらるゝ如く自分ながら氣の毒な位な譯、夫故昨夜も業を拂して觀世音菩薩めと天帝めに何故美人を娑婆世界に出さぬかと劍突を喰せてやりました、其文章を一枚は焼いて一枚は海に沈めましたが、何に致せ仕儀によつては決闘とまで洒落ました事故天帝も觀音も迂闊には返辭が出来ぬと見えて何とも音沙汰なしで辯駁論でも工夫して居ると見えます。ハ、ハ、夫は途方もない事、天帝殿もチト御迷惑、人の病氣を頭痛に病まで、下界の事を痴氣に病んで居ら

るゝかも知れぬ、貴殿も又美人探索で夫程までに上氣されしは近頃風流に過ぎた話、それで又美人が見付からぬとは能々の眼の鈍い方。コレコレ鈍いゝと云はるは心外、實際正眞極粹の美人ありて見付けぬならば眼が鈍いとも申さるべし、我等随分熊鷹眼になつても無い者は見出されず、鈍いと云はるゝからは正眞の美人何處ぞにござるか。ハ、ハ、鈍いというたで御立腹は可笑、天帝へ決闘狀は尙笑ふに堪へた話。雲の梯橋魯般が作つた昔は知らず、風船に乗つて天の河原の果し合、さりとてはヘルネと思ひ付くまい癡けた頂上、其様になつた考をせずと眼の塵を拂つて能く見られよ、正眞極粹の美人だらけの世界といつても良き程也。然し念の爲に教へて進べし、此國富山は名高き所、明朝早く山奥に分入りて尋ねられよ、必定正眞の美人を見るべし、但し貴殿眼玉鈍く、殊に馴れざる山中、樹の根に岩角に生爪刺して足の痛さに泣面も忍ばるれば、是非共宿の亭主を頼むがよし、と言葉の終る途端、金光天より墜ちて靈香薫じ、有りし御姿、それは夢かや現に消えて、雲の彼方に白鸚哥の聲、さては觀世音大慈大悲大菩薩我をあはれみ正眞の美人が在所告げられしありがたき、一々御夢想に従ふべし、と亭

州の磯と云ばす山と云はす搜しあるいた所で觀音様より他にござるまい、さりとは無理な御尋問、と宿の親爺言逃にして其座を滑り出れば、面影らせし彼男下女が敷きて行く夜具の中にも入らず、惘然と考へ居たるが頓て膝を打ッて息巻き、汝れ房州に幅を利す三十三所の觀音め、此國の善男善女が供養する御茶湯御洗米に生命を續きながら美人を生れさせざる不届者、設欲求女便生端正有相之女と普門品第二十五に説かれたるは汝れの虚言が不都合千萬、今さら實の所は神通力もござなくと逃るとも用捨はせじ、マツタ天帝といふ正體不明の奴め、人間界に大きな顔して親方風を吹せながら、春は煙草のけむりを鼻から出して空長閑に霞ませ、夏は午睡の斯かしましく雷鳴はためかせる位とは何事ぞ、少しは骨折して京の人形師今月の姉様作りに負けぬやうに天晴天然美術の靈妙をあらはして滅法素敵の美人を製造るが可いではないか、當世人間のみならで神佛まで無性となり怠け者となつて怪しからぬ事、昔時よりは何によらず御利生すくなきよし、忌々しき阿呆菩薩馬鹿天帝、我れい文を作ッて之れを責めんと取り出す懷中紙に鉛筆をきしらせて

拜啓仕つり候未だ御めもじは致されど先

祖共よりの申し傳にて御名前には承知仕り居候、私儀は数年前より正眞純粹の美人を拜みたき大願相立居り候事定めし神佛は見透しの御眼にて御承知あるべし然る所いまだに其望を遂す残念遺恨の至りに候、左に趣意書認め候間其趣意よく御考への上に御辯駁あらば兎も角もなれど若し御辯駁なきに於いては閉口致されたる證據として早速極々飛切の眞美人急ごしらへに御製造なされて私しの眼の前にぶらつかせらるべく候。

眞美人請求趣意書

獅子一たび叫べば百獸やかましき喧嘩を止め、鳳凰輕く舞へば群鳥うるさく嘴を鳴らさず。されば、やかましき浮世うるさき人間界にも豪傑欲しく美人ありたし、殊に明治の聖代に無くて叶はぬ豪傑は既に朝に充ち野に溢れたれば敢て言さるも美人は未だ京に生れ鄙に出です。私に思ふに豪傑尊しといへど人の氣を奪ッて人の心を奪ふ能はず、君子高しといへども人の感を動かして人の感を動かす能はず、詩仙清しといへども人の情を和らげて人の癖を和らぐるあたはず。唯夫れ田夫野人も正眞純粹の美人

に對はゞ氣は心と共に奪ひ取られて激越の氣、執拗の心なくなり、感は慾と共に動かし去られて醜を恥ぢる感、美を欲する慾湧き起り、情は癖と共に和らげ丁られて慘烈の情、固陋の癖消え潰ゆ。眞に美といふ一點火は活火にして洞然と無始劫來の渣滓を燒き盡すものなるべし。惟んみれば佛如來は三十二相を具へたるにあらず、三十二相を具へたるものは是れ却ッて佛如來なり、眞美人は是れ佛同體なり、あはれ明治の聖代眞美人天より降らば一字不説の大説法音頑石の耳にも入り、六種震動の大震動響虚空の蟲にも知られて大俗凡夫忽ち佛前不存魔の理に準じて生ながら淨土に行き、惡因毒緣即ち猛火焚塵の有様の如く消え去りて、下風長なへに薫り餘韻常に存し、婆娑即寂光土日本は極樂ならんに、何を惜みて菩薩は美人を降さざる、何を顧みて天帝は美人を出さざる。かるが故に豕の如く鼠の如き女ます／＼蔓り、家鴨の如く啄木鳥の如き女態々時を待たり。其れ淫心か起さしむる者は必ず淫婦にして魔縁を生ぜしむる者は必ず魔屬なり。魔屬淫婦魔を驅け梁に跳る、大俗の我等迷海に溺れ苦原に彷徨

辻
淨
瑠
璃

第一

大寒小寒山から小僧が泣いて來たと、水涕垂らしながら、兒童の歌ふ此頃、烈しき北風に懼れをなして草庵に閉ぢ籠り、冬は兎角餅でも焼きたつ書見の事と、隠者くさい思案から其碩が禁短氣西鶴が俗つれ、頭陀物語綴白裘新集すつと飛んで甄正論と彼此讀み散らせど別に面白くもなし。え、爐の傍にへばり付いて居るやうな卑弱な料簡で何の好いことあるべき、今の若さに妻細るやうでは第一産神様に濟まず、又隣家の頑固爺に、當世の青年は杖をつき眼鏡をかけ、帽子を被り襷巻手袋迄するやうな弱蟲、扱も役にたつぬと、日頃から罵られし手前もあるにひとしほ恥かし。外へ出よ。犬も歩行れば棒にはあたらず、家へのみ引込んで居て夢の如きものを書く分では筆にも汚えた味は出まじ。當は無れど其所等其邊がらついて街頭の狀態杯眼に止め置かば少しは益もあるべく、僥倖にして何か興ある話を聞かぬとも限らば炭火をい

ぢつて怠りがちに一日を費すよりは増しと決斷し、下駄つゝかけて飄然と飛出せば寒さも左程苦にならず。上野を過ぐる途すがら美術學校の屋根を眺めて彼堂中より必ずや大作家いでむと將來を頼もしがり、音樂學校の庭樹に鳴く禽の聲聞いて汝も歌へや君が代々と微笑み、動物園前猛獸の末路を弔し、大佛の下通つて貴殿も頓て破壊されむと申しける。三橋より南は例ながら五尺ばかりの大きな者の爲やらぞろ／＼わやわや東奔西走いそかしさうなる中に又、大きな肩掛で全身を包み御高祖頭巾しならしく被つて悠々と我意見ふ顔に歩く曲者あり、寫眞屋の前に立ちばだかつて傾城の俤に見ながら、忽然として大喝一聲此奴だと叫ぶ書生あり、御家はますます御繁昌何とやらいふ文句を料理屋毎に云うて孔方貫つて行く男あり、露店で眞黒になりし大黒様の木像の價の論をして居る方あり、廣小路の角で鐵道馬車が軌道より外れしを面白がつて見つむる先生あり、種々様々の動靜をかくしく、感に堪へて迂濶り歩む背後から我肩を輕

く叩いて、那方へ行き玉ふといふは叫雲老。是はしばらく御無沙汰しました、小生は素より何處と目的をつけて道を辿るやうな窮屈は嫌ひ、たゞ散歩と出掛けたるばかりでござるが。それなれば愚老と同伴に半日潰し玉へ。半日潰すはよけれど行先は。愚老は素より目的なしに野良犬といふ格で歩行ものならず、サア安心して來玉へとすゝめられ、話し敵を得たるを幸福は二人立並んで根岸の御隠居様が俚歌の囃、千駄木に化物あるといふ評、綿連尼が往生せし事、馬鹿只食うて月を見る風雅、夫婦茶碗の説など彼此語り合ふ中、草臥れたればと車を僦うて到りし先は深川猿江の慈眼寺なり。叫雲老々々々、途徼もない詰らぬところへ人を連れて來られしものかな、但し此寺の住持が天狗俳諧の一卷もやらうといふ人物でもあるか、精進料理でもおこころいふ人物でもあるのか、乃至寶物に小野小乙に心得て居るといふのか、乃至寶物に小野小町が這ひ捨ての糠袋、業平朝臣が召し古しの丹前といふやうなもののあるかと問へども、一向關はず、さつさと卵塔場の方に行くにぞ、さては例の掃墓癖に釣られたかと口惜しくは思へど、今さら忌々しがつたところで初まらねば、抑何人の墓かと後より往きて視へば道仁墓と讀まれり。はて名も知らぬ人、道仁とは何處の馬

主呼寄せ此事語れば半信半疑、思ひ定めし返答しかねるを無理に承知させて夜深を關はず、明日の朝の間に合機と出立せたる後、又睡られ、ばこそ報恩のため普門品誦して、又誦して。

下の巻 (下)

慾氣は髪のと共にぬけし元頭の田舎親爺も嬉しがるものを、幾枚か握ませて、富山の奥深く狭霧籠る中へ尋ね入らせし後は、空を見やり町を見やり足つまだて返事をまつ身の戀にはあらで肝を煎るの思ひ、漸く其日の暮れかゝりて相州の方の雲だけ美しく残る頃、亭主歸り来れば草鞋ぬぐ間も待遠しく、首尾は如何、眞美人に逢はれたか、觀音大士よもや嘘はつかれまじ、定めし極々飛切の上物に撞見たるべし、其のありさま話して聞かせよ、はやくくんとせりたてながら顔さし覗きて少し安心し、内々御夢想きツと當りしなるべしと心のうちに満足すれば、親爺も莞爾つきて、端折りし裾を下し、塵を拂つて座敷に通り、高慢の鼻の頭あぶらぎらせて、房州の觀音様御利益は現前、争はれぬ今日の仕儀不可思議の隨一、急込すと御聞きなされ。急込はせぬが早く話して。話します、昨夜遅く出ましてから知ツた道ながら黒闇おそ

ろしく二里三里四里行きてさし登る日に力を増し富山に迫りつきしが、元來小山の事、馬琴が書いたとて東京の御客さまは平常大した山の様に思はれど、實は高の知れた所なれば何處を奥とも當なしに唯々道のない邊りに踏込みたるが、ひと叢茂りし木立の間を縫うて進む眼前に忽ち現はれし美人、歩行ぶりたふたと衣にも堪へざる御ありさま、御顔はせば綺麗とも清しとも云難きほど、浮世の惡風に未だ吹き晒されざる天然の美、愛敬申すまでなく充分の風流、凡俗の我等を動かして年は寄りても心に皺は寄らず、思はず、知らずむらゝと昔時の我になりて、ツカ／＼と御前に近づけど少しも騒ぎ玉はず優なる御眼つき麗はしく我を見て物言はず笑玉ひしありがたさ、満身春風に吹かれて魂霞の上にゆらぎ、夢中の如くいきなり御袂なとらへれば、又にく／＼と笑ひ玉ふ、最早堪忍なり難く抱きあげまゐらせ、上氣したるに言葉はなく艶まばらなるをも忘れて我頬を綿より柔らかく玉より滑々とし御頬に押付け申せ玉はれ、聞くさへつらき所、若い者を前に置てもだ／＼とするやうな話しはやめて其後は、マア／＼黙つてきかれ頬擦りまでして後

尙堪らず、自々とし御顔を吸へば。コレ／＼愈々怪しからぬ話し、それより早く其女の名前住家を知らせて呉れ。急込では困ります。扱其女の名前は早く。御まちなされ人間の女らしくなく天女のやうな其女の住家名前は。焦すな／＼早く。其眞美人の名前住家は。觀世音が教へられし其眞美人の名前住家は、何と何と。されば老夫も其を尋ねたれば御答もな／＼、腰のあたりを指さし玉ふ、見れば金色の札に彫り付たる文字鮮やかに、富山の奥何かし村樵夫何某の娘お何。明治十九年生れ。ナアル程。………、ナアル程、それが眞美人、其程の齡の女が、三歳四歳の女が。

(明治二十三年一月作)

故、生意氣盛りの何分別なく女にちやほや云はるゝを半分は羞かしく半分は嬉しく思つて、職人に連れ行かれしが抑々病付、可愛がられて堪らばこそ祇園の花に蝶と狂ひ島原の月に夜烏と浮れあるき、或は石垣の懸に崩れ北野の小路に迷ひ入りて始末はなかりき。酒飲つて三絃弾かせて、歌はせて、舞はせて、唯其まゝに笑つて過ごさるゝは無心も聞いて下さる好き大盡様、其次の御客は酒飲ませて三絃弾き玉ひて、歌ひ玉ひて、舞ひ玉ふものと左る火事めが申せしよし。思ふに世間の男ども、猪口を巧者に持ち吸付煙草を不器用ながら受取る頃には、調子外れの聲でも一節唸り、甲乙所は違ひながらぼつんぼつんと響かせるやうなるものなるが、其等は皆本大盡をば知らざるならむか。素より萬事に曉き虎吉、不圖せし事より淨瑠璃を學びはじめぬ。

第三

凝つては損徳の思案に及ばず、將棋さし親の死目に逢はぬとは昔時の穿ち、圍碁に魂魄を奪はれて此處一瞬に萬金を攫めといふ電報を左りの手に握つたまゝ、可惜鼻の先へ來た大利潤を見ずに仕舞つた相場師ありしは近頃の事なり。茶道に耽つて江戸から飛脚を宇治の三の橋間まで

走らせ、古物に溺れて阿房宮建立し時のものぢやと鉤屑を大切に、最少高じたるは釣魚がため惜かりし命さへ短うし、天魔の禪を修めた生悟りより如意を捻りながら、貴様も俗過ぎるよ靈照女の眞似位して笨でも作れと娘を叱り飛ばして襷善の半襟掛ようといふ齡の女に掛絡を引被せる類、随分惡事とはまさかに評し難けれど善とも妙とも褒めにくし。平常から負けぬ氣の虎吉淨瑠璃にはまりて日を暮すも夜を更すも唯々喰る三昧なれば、其ではならぬと母親異見すれども一向用ひず。お母様黙つて御聞なされ、女童子の知ることならずと怪しい聲出しての挨拶。あゝ扱困つた癖のついたもの何かして止めさせたしと種々道理を説いて、商賣の障りになると戒め、腕が今一層といふところで鈍ると勵し、妾が頼むほどに廢して呉れと、諫むれば諫むるだけ適藥は病が嫌ひ、親切は癩の蟲が仇と思ひ、家で歌うて悪いなら他所で語りませうと外へ飛出し、母の千分一も信實無き奴等に、彼御喉の好い事はと褒められける。女に可愛がらるゝは男の男らしく立派なるより女らしくて柔和なるところにあり。見渡せば世上一體色男といふもの多きは男らしからず、衣服の好み、美さ、舉動のしとやかさ、言語のや

はらかさ、假聲の巧なる、歌ふ節の細かく、聲の艶ある、舞ふ手の纖麗に、眼の利く、小料理の一つも出来る、仕立物の裁やうなど心得たる、假名文字見事に書くなどいふところに詰らぬ女は惚れるものにて、一飯に斗米肉十斤の質の豪傑肌にはまづ、變り物ならでは色眼一つ呉れず、されば普通の女に何とか彼とか噂さるゝ點は男の本來から見ては一向價値の無き場所故其價値の無き場所多く有たる男に碌な奴無し。可愛がられて身の語りとは未だ足らぬ詮議、眞實は可愛がらるゝが身の不祥なるべし。素より美男の虎吉然なくとも顔の皮を甘がつて喰ふ女には、彼の紅つたやうな唇嚙取つて見たしと思ひ付るゝ上に、慄然さするほど巧く語る淨瑠璃の障りは幾多の艶罪の種となり、清水寺の鐘の音に昨夕の亂醉を悔いて感宵は妻曉天は他人の懷中に現なく寝たりしは恥かしかりしと厭氣立つ無明の夢の覺醒、急に歸らむとすれば、アレ我家の虎さまを歸してはならぬと太夫が焦躁、彼女を見殺しになさる氣かと妓を指さして亭主までが持たするに、無常迅速を報する響も空に消ゆる頃ば又凡夫となりて流連した朝の小鍋立て、母親には此やうな甘いものは調れぬかして我に食させて下さりし事は無しと白痴を極めし

骨かといへば叫雲此方向いて、酷い事をいふ男哉。君子でこそ無けり才氣爛漫の騎物をとらへて馬骨とは罰當り、小説冥利も大抵盡くべし。それほど面白く履歷ある人か。有るともく一條語つてまづ聞かせようほどに聞玉へ、然し此處は寒し何處ぞ暖かい家で、と其邊を尋れて、ゆかり式部が新宅に押込めば寫しかけたる祇空の句選を捨て、愛想を撒く。我は唯早く談れと叫雲を責むれば式部は何かは知らずに、叫雲さまお譚しなされ。

第二

話せ、物語れと云はれて叫雲仔細らしく天目取り上げ、濃茶に喉を濕し、中々安うは賣れぬ話、下凡小説家が聞かば長々と書きさうな事なれど先ざつと面白い所だけ摘出して話さむと我を尻目にかけて説き出しぬ。友禪染清水焼西陣織、乃至天の生せる美術品とも申すべき綺麗な姐様達ばかりが京都の産物か、まだまだ其他にも數へきれぬほどの多くの物の出来るは流石に桓武以來玉城と定まりしところだけの事あるなり。今も名は残りに其京都の三條に釜の座通りと呼ばるゝ地は、昔時より釜師其處に住みて名譽の釜をも數々鑄出せしところなるが、現時

より百年近き前方、産聲を其邊りの然も有名の釜師が家で揚げし男あり。容顏清らかに、つんと通し鼻筋おのづから尋常のものなを凌ぎ越ししもすべき相形なれば父母悦喜の眉を動かして通稱は彌三右衛門法體しては道也と號し尙又技藝累代に秀づる時は道仁と名乗る事我が西村家の家範なれど、千里獨歩と此兒の行末を祝ひて幼稚中は虎吉と呼ばむと決定し、それよりは虎ふ虎ふにて生育られぬ。運は素より善惡の影ばかり追ふ者にはあらで、虎吉漸く是より徐々と家の職を見習ひ型の作りやう鐵の湧しやう色上の爲様など覚えむとする頃に臨み、不幸福にも親の彌三右衛門に先立れしが、母は女ながらも氣象勝ちたれば、吾夫が亡ならしは何程悲しみて追付くことにあらず、但口惜しきは元祿以來連綿と續きたる我家の職業茲にて中絶せんことなり、親の欲目かば知られ何をさせても器用なる虎吉を何にかして守立て、寛文に名を鳴し玉ひし道仁様と並ぶことの成るやうに仕度しと思案して、其後は女の似合しかられど自ら長となつて註文帳仕入帳の締結りも覺束ないながら遣つて退けるまでの覺悟で商賣も休まず、一方には流れ渡りの鑄物職人、品行は兎も角たゞ技の精きものを選び、主人の方から頭を下げる

ほどに機嫌を取り、少しは無理も通してやつて我家に足を留め、ひたすら虎吉に其道を習はせける。強いやうに見えても弱いものは女と昔時から定つて、亭主を尻に敷くほどの姫も随分直泣くものなり。況して戀しき我夫の遺身と見る祇藏子に向つては心な鬼と嚴しく持つても中々菩薩より甘い所はあるべし、虎吉母の手一つに生長されて怖い人を頭に戴かれれば萬端思ふまゝといふまでにはいたらぬも大抵は我意を通して世間普通の部屋住株の若いものよりは自由を利かせ、齡に増たる行狀もありしが、然りとて職業の爲すべきを爲さずに意け遊ぶにもあらず、根が聰明なれば前髪落す頃には何處へ出ても人に壓されぬ腕前となり、殊更鑄くことには格別の妙を得て老巧の者をさへ凌ぐ位と仲間内の評判を取りしが、杵すたりと風情好く高く、眼の中涼しく愛嬌ありて、顔の色白玉の如きに覆としたる口元、あざやかなる紅唇、それに加へて言語舉動の野暮ならぬには、自分から浮たこと求めずとも周圍の娘子供が打捨つて置くものならず、わざと廻り道して西村が家の前を結立の髪より伽羅の油の香はじかせながら通り過ぎしなに横眼で虎吉を覗み、顔合してハツと頬赤くなし足早に去る連葉の御嬢様も有るほど

もきと思ふばかり、虎吉が是聞いたらまさかに
淨瑠璃もかたるまい、よもや巫山戯てばかりも
居まいに、我子の虎吉は疾くに亡せて狗か狸か
其代りになり、猶も妾等に愛目を見せ西村の家
を辱しむるに相違なし、虎吉が狗か、狗なら疾
く去れ、虎吉ならば云ふ事ありと、慄へて詰る
母を茶にして、ワン、と一聲戸外へ飛び出し、
二日歸らず三日かへらず。

第五

大家の主人は却つて中位の生計立つる者より
は、萬般質素に身を持ち、勉強に心を働かせれ
ば僕婢の輩の見侮りて、且那の真似の美味詮議
怠惰算段は皆暖簾を傷つけ基礎を崩す、根本抜
取り難き不幸の萌なり。虎吉の亂行に大柱傾
き初めたれば、職人共も各々好きな事して遊ぶに
は若じと身勝手な盡せし上ばりと逃げ散りし
跡は恰も椽腐ちて崩落し如く、女房と母親の
みは去るべきところなければ内部は残り居れど
夫とても今や頼れむとする古壁の僅に立てるに
異ならぬ可傷さ。得意客は減るばかり借金ば殖
るばかり、要領して痛い目させられぬやう氣を
つけねば彼家には手を負はせらるべしと賢しい
商人には疾に見らるゝ始末となつては世にある

も悲きものなり。されども一向平氣の平左か但
しは自暴も手傳うてか、虎吉益々驕慢の鼻高き
淨瑠璃天狗、譯も知らぬ長閑な人達に褒めらる
るを好い事にして遊びあるき、洲の立つた小袖
に恥ぢぬ心あさましく、彼容態はと昔時覺えし
者どもに蔭口云はるゝを耳に入ても知らぬふり
豪然と粹がつた情りから、野暮が何を云ふ、話
せぬ、フンと見下して濟しける。此心入では母
が教訓を蚊ほどにおもはぬも無理ならず、女房
は彼此の物思長じてといふにはあらねど不圖
せし病氣に辛配の加勢強く、不自由の中故醫藥
もとゝかぬ勝、殊更お道の行末母様の現在いづ
れか見ても頼母しいは無きに唯さへ窄き胸の内
かき亂されて安き事なければ枕に付きし頭の快
よう上らう筈はなし。段々と重り行きて身も心
も日に衰ふる様見る母の切なさ、それを
何とおもはぬ虎吉の酷さ。遂に病人はお道に
魂を残して極樂か地獄か知れぬ所へ誘ふ風に連
れられける。

煤けし行燈に豆の如く火影ゆらぎ、逆屏風は
現世彼世を限る寂寥しき夜の景色、あゝ舊のや
うにあらば誰彼も親切見せ顔に尋ね呉れて、通
夜も少しは賑やかに、又紛るゝ節もあるべけれ
ど、今日此頃のあぢきなき乳をもとめて母親母

様とまだ頑足はない孫のむづかり泣くをも賺すに
甘き菓子さへ無し、忤めが料簡はどうした事か
連も分からず、行先短かき老の妾ひとり残つて、
責てもの話し相手なりし嫁に先だたれ、何か樂
しみに長生べきと老母の述懐無理ならぬを、他
人の察して氣の毒がらぬにはあらねど好誼ある
同商賣の者も虎吉に愛想つかして西村が家に全
て手出しはせず、泣く／＼何を賣り彼を賣つて
形ばかりの式を整へ野邊の送りかなす時、往來
のもの指さし笑つて、あれが道也の家から出す
葬式かと惡口云ふやう母の耳には聞えたりける
が、流石の虎吉も苦勞のみ爲せぬいたる女房を
何一つ是といふ快樂も得させずに冥土へやると
は男の根性として口惜しく、腹の中では囁ゆる
して呉れと念ずる聲の、外へあらはれては猶淨
瑠璃じみたる稱名なりし。それより虎吉發心し
て、可愛や此兒が彼女の形見かとお道を抱きし
めて共寝の床の中餘念なき寝顔におもはす涙ぐ
むこともあり、随分我が兒をいとしがりて母に
も和しくなり、急に堅氣の拵きをする氣になつ
て、久しく眼も呉れざりし仕事場へ行き見れば、
無残や是が釜の座の釜師が家か、溜増もなけれ
ば金棒もなし、閑伽倻は地上に腐て、型にする
土砂無茶苦茶に亂れ、爐も竈も埒なく壊れた

評をなしぬ。淨瑠璃と美男と町人ながら家柄好きと才氣勝れたると三つも四つも拍子揃たる虎吉、あそべば揚屋の婆さまでにもてはやされ、素人淨瑠璃の會に出づれば、ソレ道也の虎さまが見ゆると堅氣の家の娘子供騒ぎ集つて、昨夕の風呂で襟袋の用ひやう少かりしを私に氣にするもあるほど珍重さるゝにぞ、面白いは當人、辛勞するは母親、せめて虎が少しは可愛がる程の女を嫁にせばと、若い者持つたる母親の、心は同じ四十五十の人が却て好色の男より往來の新造に眼を注ぐものなり。漸く然るところより可成りの娘を見出して目出度婚禮さすれば流石に暫時は家を外にもせて謹みけるが、頓てはまた例の通り狂ひはじめぬ。或女申しけるは婚禮してより百日の間のやうに一生あつかはれたしと。又或男申しけるは我枕紙を心付けて取り替へくれば頃のやうに一生あつかはれたしと。ともに可笑しき道理あれど男が先は悪かるべきか、お道といふ兒まで出来て虎吉今日も唸りやます。

第四

虎吉亂行ますゝ烈しく、品物の註文を度外にし約束の仕事なども等閑にする事何ともおぼす、萬般投げ遣りにして家を外の遊戯三昧、此

調子では西村の家も潰れむと怒りまじりに泣て責むるは母親、何か職業だけは爲さつての上に那處の増花になと御心を寄せ那處の會になと行きておもふ存分に御かたりなされて下されと恨み交りに口説は女房、ハ、辛配しやるな世は我儘に消光のが徳ぢや、其様な狭少した考へを持つたとて壽命は短くなるか知られど財産の増長るとは受取り難し、我は私の料簡あつて爲る蕩樂、厭と思は、勝手爲よ、と酒の氣を噴きながら女房を頭ごなしにして母に向ひ、御苦勞なさるは御身の毒、球數でも腕首に掛け長閑に孫と同伴に御寺参りでもなされた方が宜しうござります、ナニ飄箏は水に沈まず、虎吉男一定袖乞にはなりませぬから御安心と打笑つてツイと月外へ走り出でむとすれば、父様を留めよと未だ三歳ばかりのお道を抱たまゝ女房が、此可愛さがお前には何と見ゆると腹の中で啗ちながら眼の前にはさしつくる我兒。僧い事はさらに無ければど、え、五月蠅邪魔なと拂つて行く。拂はれて夢動けば娘はワツと泣く、あまりに酷い邪見なと女房が胸は躍る。虎吉其處へ坐れ、と忍かれたる母の聲厳しきに流石の男も黙つて坐る其顔つくく、眺めて、ア、汝は正眞の我子の虎吉か、老婆の眼に覺束なければ嫁女よく見て呉れ、此

奴がアノ妾の前に佛頂面して居る此奴が確に妾の子の虎吉か、嫁女そなたが夫の虎吉か、どうも婆には然おもはれぬ、此奴は何處その狗でなあらう。虎吉ならば最々義理も人情も能く諦めて家代々の商賣怠らず、女房にも和しく、我子にも外へ出での歸りには菓子の一袋ぐらゐ買つて来る慈愛はある筈、口巧者に母をやりこめ、無情愛に女房を扱ひ、然も我子を五月蠅といふやうな無法者、御先祖さまからの業を衰微させ、京都で何軒と云へば取りも直さず日本で何軒といふ西村家を油の絶えた燈籠のやうに淋しいものとし、やれ道也が家では大轡吹いて居た事此頃無い、それ彌三の工場には型にする土もあるまい、哀れや笑止や、大西、釜九、釜安、笹田と並んで釜の座では五本の指の然も大きいところに數へられし彼の名家も虎吉の淨瑠璃で喰り潰されて仕舞ふか、そりや聞えませぬ虎吉さまなどと同業の若いものなぞが蔑視んで爲る風評が汝の耳には入らぬか、入つても口惜しうは無い、汝の不體裁ひとつより職人どもはおもひの道具を盗み、生鐵かこかし、色々の綾をした揚句は逃げて行て其限り、何を何う爲やうにも妾は年老つたり、嫁は若し、女二人の甲斐なさば心の半分手足動かす、唯やき

やくざものながら杖と頼みし虎吉に出て行かれ、後に残りし母の氣苦勞、それを察して甘くしては我等の額が干ると米屋薪屋其他の者の嚴しき催促も先は商賣なれば無理ならねど、少時主人の歸るまで許してとお道を賺す片手に切なき言譯、何にも知ぬお道が、婆様父様には肩を搖ぶりて問ふ笑止さ。さらぬだに涙もろき老嫗の、貞淑き嫁には死別れ、一人子には生別れ、父母あらねばひとしほ呢き孫娘に満足するほどは菓子も與り得て物さびしく世を味氣無う消光す悲しさに、身體も一段おとろへ、眼は有邪無邪の霞に鎖され、耳は屈託の心に聳かゝりて、朝夕の起居にも梓の弓の腰弱く、堅きもの嚙でや吾齒の意氣地なき却つて稚兒に劣る位なれ

ば、折節はたゞお道だきしめて、過越し方をおもひ出し、昔時ならば西村が家の一粒種、花と愛されて金鈴に護られ、蝶と寵しまれて見す知らずのものにも珍重され、出入の男女に我家の闕跨ぐことに是は詰らぬ品なれどお嬢様へと陶器人形芥子人形坊様ごつこの針箱錦臺酒盛道具お茶道具など色々持つて来て機嫌取るべきに、不運なところへ生れあはせて、玩弄品も思はしき首拔人形とは情なし、重々の不埒に身を恥入り他國の土から黄金利けて歸るつもりの出奔か、但しは猶も此世を夢うつまか分かす暮して我儘一杯にやり通す氣の、京都に居れば西に支へ東に障りて面白からぬより寧ろ關係なき場所へ出た上充分に亂暴せむ積りの逃亡か知られど、懷中に重寶な物の有うでもなきに何程若い元氣に委すればとて知客も居ざるべき旅路の空では、一碗の食半夜の宿りにも困却るは知れた事、ア何處に如何いふ考慮をもつて今頃は漂泊あるき居るかと自分の身は厭はすに、悴を氣遣ふ母の慈悲尊し。聰明の虎吉留守の間には程老母の辛配さるゝと思遣らぬではあるまじけれど、胸中に充てる萬丈の銳氣妙に外れて、人情も義理もとんと關はく、大津草津を経て春の末つ方、長たく日を悠々と歩行て眼あたらしき山の眺め

を煙草で貰し、風情ある水の姿に面白や山水に
盃を浮べては流にひかるゝ曲水のと戯れ、石
灰採る石部、藤細工の水口、相の土山も膝栗毛の
馬で過ぎ鈴鹿を下り坂の我身の運と冷笑つて、
關龜山庄野右藥師四日市、こゝで鑑三文くな
りしが可笑や、是からが虎吉の舞臺ぢや、跳よ
うと睡ようと青天井に土席、戸障子なしの大世
界、御見物は天下の人々、拙い狂言をいたせば
彼奴は馬鹿と御笑ひなさる、凄じことかすれば
惡黨と云はるゝ粹をやれば濡事師、ゆすりなす
れば無賴漢、滑稽れば巫山戯た男、金を奪れば盜
賊、人を殺せば兇狀持、何にてもなれるが面白
し、アハ、ハ、ハ、ハ、此處で西村虎吉何役を爲た
しのか、さしづめ盜賊人殺し無賴漢は爲るに難
作なけれど餘り寝た業でもなし、濡事師は此
ぼう／＼とした鬚垢付たる鬚髪では追付かず、
よしよし、一番思ひきつて身を落し、お貰ひな
どにもなるも一興、アハ、ハ、ハ、此所虎吉乞食と
ります随分喝采して遣つて下されと飽迄こちれ
し根性から日前の恥辱にも萎まず、聲張り上げ
て、鶴の脛長しといへども之を切らばと道理ら
しいことな人の門に立つて一錢二錢の合力乞ふ
ため喰るあさまじさ。流石に存外やりにくきは
乞食と、最初は腋の下に汗流せしが、慣るれば

り。えゝ癩癧に陥ると腹立ちまざれ折角芽させし辛防氣を挫いて、正業の事せんとすれば手のつけどころなきまゝ、例の通り自墮落地獄へ墮つる道に走り込み、居酒に腸肚の熱を洗つて何處かの石の上か樹の下を居所となし、掌を拍ち膝をたゝいて、同向せうとてお姿を繪には書かせはせぬものを、と其聲七情の外より出たり。

第六

虎吉今年二十六といふ時、遣ひ盡して二歩も残さず、名家の財産も聲譽も囓哩骨散と做了り、ばら緒の雲駄も裏金の無くなつた奴を穿くやうになつては、男振り下りて左程には人にも面白がられず、自分も可笑かられば、其邊の男たち義理あしき借金もあり旁往來さへ仰向いて通りにくき始末、さりとて少しも萎るではなけれど自然肩身の狭さが口惜しく、家に居ても外に居ても妙ならず思ふ折ふしは聲張りあげて道行を語る勇氣たゆみ、お道の世話焼いて白髮交りの鬢薄き母が苦勞せらるゝを見ては、噫我も彼如く汚いし、ばゝの厄介まで掛け申し、走れば轉ぶな眠れば風邪ひくな機嫌わるければオ、此婆を打つほどに堪忍してと勿體なくも自らの額を自らの手で打て見せ玉ふやうにして育てら

れしものなるに、一人で大きうなりしと云はぬばかりの顔して勝手放埒に理窟の尾鰭を付け、信實の御意見を取消し散々あべれちらして今此ありさま、實を吐けば合さるべき面皮は無い、えゝ此我かどうして呉れむ、と身を跳く事もあり、寝られぬ夜半には罪なきお道が寝顔を薄暗い行燈の光線に眺めて、夫より夫と、亡き妻の我に飽くまで貞淑かりし事、不行跡に腹立玉ふ母を有め無法狼藉の我を諫めし事、陽には無いものを有るやうにして母の氣を休め、陰にはたつた一枚残りし櫛まで賣つて我が或拂ひをなして呉れし事など思ひつゞけ、何故彼女には其頃彼様酷かりしか我が悪かつた許して呉れと此世に居る人に向ふ如く分疏やら謝罪やら心中でする事もありけるが、人間は異もの哉、忽ち又料簡變りて、フ、愚なり愚也。悔むとば白痴のする大詰、何の神も佛も傾城も同じものぢや、白痴が紋目に實意を盡して、是で可愛がらるゝは大詰合と極て居るゝと老人が善根植に奉納金して極樂へ行かるゝと悦喜すると少しも變つた理窟はなし、善も惡もあるものが義理も飄々も入るものか、仁義禮信因果應報そんな教に縛らるゝは、一々慇懃にしかつべらしく拙者は肥後の熊本加藤清正公家來金石新五左衛門と申す以後よろし

く御見知り置かれてと仲居に挨拶して女郎買するやうなもの、何のゝ、人の身は行水が一夜泊りの薄氷ぢや解けて死んでの後はそれまで、爲たいこととして死ぬがよいは、めそゝとした考へ持つて、夫孝行にそれでは外れる、夫人情に足では背くと、生きた魚に指尺あてるやうな面倒をやつたとて鰯が鯨に出世もしまい、やれやれ、若い時が二度あるか、齡を老てば身を輕業の面白い藝に骨が折れむ、蕩藥の底か抜かては譯知りには成れぬ、譯知りになりたいでもないが蕩藥の突當りまで行かずに中途で歸るは行潦涉り半にして後戻りする螻蛄のやうな意氣地なしぢや、我虎吉惡徒とは云はるゝか知らず意氣地なしになるは厭也と、天魔骨髄に宿つて持たする惡念が、ぶらゝと遊び居る身を煽つて。行けや關東、好男の巢、江戸兒の腸を四日市の景氣に觀て、伊達を競ふ芳原に、霞餅はつゝ嚙みながら小猪口の酒ちびゝ、飲む京都生れの眼を醒まして來ればをかしからず、三方四方八方ふさがりの中に愚圖々々して居て思案なげ首、母を見ては傷み、お道を見ては鬱陶でばかり居るとも何の面白い事あらむや、東海道五十三次、何の宿の棹鼻に小判千兩拾うた方にあげますと書いて捨置く大盡の氣狂があるかも知れず、

て出窓一つ、腰丈の萩垣結びまはしたる仔細らしき住居あり。如何なる人の隠家か、若し此邊の大盡の隠居などならば無益なれど、一寸すれた男などの主人にてあらば幸福と、其窓の下に立つてかたり出す聲は昔時ながらの美音なり。

第九

小窓の障子さらりと開く響きに手の内呉るゝかと虎吉仰向けは、僧や人じらしな、忙たゞしげにびつしやり締切つて其後音なく、今西山に隠れむとする夕陽の光線空飛ぶ鴉を射るばかり。えゝ忌々しと獨言ながら不興氣に其處を見捨てゝ東方へ東方へと疲れ足を引摺れば、雨ざらしとなつて日に乾きし街道の馬の糞一歩ごとに舞ひ起り、足袋、脚絆もなき臍にぶつかる心悪さ。備後の疊さへ、座蒲團なくては坐ざりしを又無益の感じを起し、大分弱い音を吐くやうになつたと例の自分で自分を冷笑ひ、今宵宿假の途も何處までといふ心算もなしにぶらぶらと行く後面より、もしくと呼ぶ女の聲、不思議と頭を回らせば、あの淨瑠璃を語られしは此方様かと兩頬ふくれて赤き下女體のものゝ尋ねるを、扱も妙なとばおもひながら如何にも我なりと答ふるを聞きて、懷中より小さき袂紗

包を取り出し、何かは知らず、誰よりも告げず突然手渡しして逃るが如く馳せ去りぬ。是はそも／＼どうした事と虎吉奇異の思をなし、マア御待ちなさい一體其方はと追駈けて問へど、既に遠く隔たりて姿は並樹の松、潮暗うなりゆくあたりに見えずなりけるにぞ、若しくは此頃の我が胸の亂れ、麻と縫るゝ隙に乘じて狐狸どもの惡戯するかと一度は疑ひしが、手に残りしものはこそ分明らかに種子なれと押開いて見るに上包みは反故紙、中には揺集めたる金銀二兩ほど、仔細なくては叶はじと案するにも全然便なし。折しも吹く風紙を煽つて手の中より飛ばせむとするに、それを取りとむる途端、心づけばあ怪し自分が筆の痕ありありと、御室の百姓甚作が娘より付けられし艶書に答へしものなり。二十二三は男の顔の光りまさる頃とて其時分は彼よりも此よりも五月蠅まで付文され、嬉しき御返しなくば寧ろ生きては居りませぬ覺悟のほどあればと御察し玉はりたくなきさま／＼に口説かれし中にも、筆の運び器用に墨の香あつて文章誠實を籠め、生命といふ字を三四十も書いて遣こせしは或時雨宿りせしからの因縁より往來で逢ても默禮するだけに儼然合ひし甚作爺が娘、年は片手を三度ふるほどの可愛らしい

奴なりしに性來ませた質とて、我になづみ深く、嵯峨へ行た戻り道一寸煙草の火を假るばかりの爲に我が彼家を音信し折、爺は餘所へ用足しにまゐりましたが直歸つてさんじませうに少時おあそびなすつて居らつしやれと、繰りかけた綿をすてゝ、くりぬきの煙草盆熾みたる番茶、あよい物がござんしたと甘千の柿五ツ六ツを撥合はせ塗りの盆にのせて、馳走氣に、出すも面取氣なる態度愛らしきまゝ一ツ二ツ戲談口きいて驪れば顔に氣させて後面向きになつて、其癖我を横眼にちらちら、肩付しをらしく色白にして商並びよき口元に鬚の寄る愛度なさは島原の太夫にもなき風情、我も憎からずおもて、藪にも功の者葛屋の中に生命取はあり、と心の中であれしが其後しばしばの付文、年に合はせては小瘡なるが却つておもしろく、よき返事してやりしが、逢ふ機会なくして仇に過す中、何處へ行きしか姿も見えず親子とも他所へ移つたと聞しに、扱は遠き此處邊に住家を定めしか。我は諸方の戀に忙がしくて忘れ居たりしが、それそれそれなり、然も此文は其時の返事なりしと徐に昔時を忍ぶ身の今の様悲しく、先刻の窓の中から此容應見て呉れたかと着物の肩を撫で憐然としつゝ、尙眼を其文の上に注げば、裏に走

見榮は無くなりて破れ布子に笠一ツ、京の揚屋で去る太夫に肩揉ませし身が、與どころか草鞋さへ無くて歌ひくへに海道下りななしける。木片枕に頭を載せて蚤が伽する瘡蒲團の中、木賃宿で見し夢聞きたし。

第八

落魄で頭髮に街道の塵埃を浴び、袖で水漬を拭ふ時人の交際の偽りも眞實も知れ、世といふものの味も香料無の正銘なるところが分る也。虎吉生付いて發明の男なれば、疾より人間は嘘つきちやと諦らめ、人間は盜賊ちやと悟り、人間は饑饉ものちやと觀て取り、人間は酒宴遊興が好きちやと心得、人間は助けぢやと承知して、慈悲義理立ては素より上皮的彩色、本来自分勝手ばかりとは知りたれど、まさかにはほど仁情ない世とは思はざりしに、今日此頃萬人が賤しむ境界に墮落して、今迄はまだ／＼買ひ被つて居たり、心積りに積つたよりは十倍も百倍もさもしきものば人なりと忌々しがりける。蜜柑は尻より腐り好漢は口より惡りて、流石好い顔と色里の者たちにてたられし其頃は去る西國筋の侍士と銀杏屋の金葉太夫を引張り合つた意氣地に、或時は非貴ひたじイヤ進られませぬと争ひ

の果、太鼓の雨七を使者として、達て此方に心を寄せ居る太夫欲しくば長い刀を虚榮には佩されまじ、随分刃の下から戀をなさるべく、御敵には御不足か知られど町人も男一匹、八幡かけて我が袖の屏風の中なる女を其方に進げますには普通の事では厭でござれば、我等が首を鬨斗に致して遊ずるか、乃至太夫が徒然を慰むる手毬と貴殿の御首を致すかの後にて埒明け申すべし、但し金錢の沙汰ならば丸山の樹木有る限りに残らず小判の花を咲せらるゝとも其には我意を枉げ難し、と一廓の者を驚かせし廣言を吐いた身が、今は駿府の町はづれに來かゝる時蕎麥切の香り芬と鼻を撲つに心を動かされ、ア、日外卵の丸の半平が桔梗屋の二階で跳れて躍つて首の骨を引きちがへしを氣の毒と、又躍りの出來るやうになるまでの間此品を頸骨の支柱にせよと銀の延煙管太鼓の撥程ある奴を呉れてやりし禮心か、快癒つての後我と太夫と小女の鶴次龜次を相手に、うんすう歌留多の黒劔を抜にして飲み疲れの心地あしきまゝ唯しめやかに遊び居たるところへ、田舎出の噺が打ちました蕎麥、私しが製造ました香料、太夫様への寸思を御味はひ下されと可笑き岡持より取り出したるものを見しに、蕎麥は常と變らいで、香料は京に珍らしき

淺草海苔、紅葉おろし、黄白別々に練の如くせし鶏卵、美事や珍しやと小女たち面白がつて我もなまじひに山葵と上めかきざるを棄めてやりなましつゝ喰ひし其味今に忘れずと、腹の空りしより思ひ起す事も鄙劣く、外から評すれば狗なり豕なり、乞食の噺語に鮑の腸蒲鉾が食ひたしといふ類なるべし。段々と東へ下りて佐夜の中、山を七八日前に越し、宇津の山もいつか過ぎ、名所古跡中々たづねず、現か夢とのかゝりぬれば日にまし鄙屈き根性つりの、最初のえせ勇氣夜々に衰へ行くも、一つは全く口に追はれて餓のために餓き渴のために考ふる畜生と餘計は變らぬ境界に在る故か、沼津の町を通りすがら例の如く錢くれさうな家々の前にたちて、悲しきが骨の情死物を語るに、生憎露のなまけさへ掛けてくるゝものなく、自分ながら枕久伊左衛門の昔時に比べて少し悲しく、御無用と斷られし彼聲は母様に能く似たと思ふ途端、胸中に不幸を責むる猛火忽ち發し、お道を案する黒雲忽ち起り、よろ／＼と倒れかゝりしが又それを、えゝ役體なと我慢の暴風で吹き拂つて、何か如何なるものかと扱も怪しき魔見に任せ、尙もうそうそと歩行進む向うに、ひしぎ竹を網代にしたる下見、藁葺屋根小綺麗に表の方は家の横を見せ

を飽くとして、オイお富イサお富さま御新造様と與三もどきに聲をかけ胡坐かいて昔時を語り、今夜は此處へ寝てやらう、あまり惡うもあるまい、と太平樂の巻物を擲いて遣らうか。それも考へて見れば此方が無理、まことは襦袢さげたる今の我を見捨て、黙つても済むべきところを親切に下女走らせて才覺なるだけの金を贈りし志操がたじけないと有難がつても良い譯なり。然し厭なり厭なり、腹が背に引粘くほど餓ゑても此様な金で物を食ふは蟲が嫌ひ、我が文は鼻涕をかんで捨るばかり、此金は返すばかりと、貧の僻がさせしか乞食になつてもまだ残る白惚がさせしか、生得の意地がさせしか、何故か分らぬ決心して後戻りなし、人類知れぬ夕暮時、彼窓の下に立つて。おもしろからぬ此金、釘の代りに鐵漿壺へでも入れよと冷笑ひながら、一握にして障子を目當にばらりと打込み、三四町一散走りに走り、空囀げば五日の月白く風軟かに胸にあたるを怪しき片頬の笑みに賞して、冠古けれども否には屢かす、大盡は腐つても、フン、ハ、ハ、暫間にはなるか知れぬが。

第十一

人が持てば我の敵となり我が持てば無類の忠

臣となる泉布といふものを、竊に障るからとて親切も無になし投返したる虎吉、館まで皮肉の料簡にまかせて、外面は悠々腹の中はもしやくしやとしながら、其夜は空たる葭簀茶屋に寝轉ぶも、悲しや蒲團なし搔卷なし、三更の鐘の音眠り難き耳を貰いて、蜂の如く起り輪の如く旋る妄想制止得ず、足踏み伸ばすは寒ければ、主なき大の路傍に臥せるやうに、我と我が兩膝を抱いて丸くなりつゝ、親の事子の事、今日逢ひし女の事、さては嬉しかりし事可笑かりし事、此後の事などおもひつゞくるに果しなく、身か悶えて眼ばかり瞑る中朝日紅々とさし登り群雀餌をあさり啼く聲に、寢て見ぬ夢の續きを追うて又々ぶらりと歩行き、わづかに一文二文を貰ひ溜めては商にも堪へぬ食を生命つなぐと云ふ形ばかりに得て其日を過しぬ。かくて東都に向ひ進むほどに、或時は常の人が好いお濕りでございますと挨拶し合ふ雨にそぼぬれて理無く天道を恨み、濡れた着物を身體の暖氣で乾すことを覺え、或時は烈しき日に照りつけられて背後の風の跋扈るを慨き、適にけ兒童等に乞食や乞食やと囁かれて役たゝぬ修羅を燃し、種々の辛苦ありたけ咎め盡して漸く江戸につきしは卯の花降り過ぎて、不如歸と喚ぶ鳥も少くなりし頃、

錢無しで爲し道中に家外の日數を食ひしより五月の末となりけるが江戸とて猫の尾より小判の落つる土地でもなければ、さしづめ何か爲では飯さへ得難く、虎吉別に知る人のあるにもあらざれば、流石に心を傷めて弱り居る眼に、一トしほ驚かると品川以北の賑ひ、往來の男女いそがしげに足の運びも疾早く、田町通り神明前芝口あたり辻輿の掛聲勇ましく、何となく京大阪とは違つて活氣ある家々の店付、まことに上方者の夢にも思へざる繁華、此土地でこそ男なら一と骨折つて自分の器量を試むべけれ、六十餘州の粹をあつめし此都でこそ我西村虎吉が滿腹の奇氣を吐きて縱横に働き、關東男兒の眼を抜いて呉れずば面白からず、今までは招鉢の底のやうなる京都に居て、何の浮世は何うでも渡れると茶にして居たりしが、大都に來て見れば微力は微力だけの力齧出されば追付かぬものと悟りたり、愚圖々々して居るものあらば骨迄喰てやらむといふやうな江戸ツ子の眼睛恐ろしく、虎吉も從來のやうに自墮落の身の持ちやうして居られず、土を喰てなりと一ト旗揚げすは何面目に日本橋を越えむ、よし、少時此地の人情風俗を觀て其後何なりと爲て上方贅六と賤しまるゝ者の中にも男兒はありと誇つて呉れむと腕

り書はたしかに女の文字

むかしを忘れ候はれば今の御姿に戀しさを
忘れはいたさぬ妾が身の今は妾が身の昔時
とは異なりたるのみ口惜しうは候へど何事
も丸くはまとまりかぬる前の世の定めかと
あきらめながら尙方様のおいとをしさにか
くばかり

として歌も無きが眞誠なりける。

第十

縁は知れぬもの、どういふ譯でか彼娘故郷を
離れてかゝる土地に有福らしい暮しをなし、ち
んと済まして居る事不思議なり、もとより天性
伶俐者、手跡は遊藝の無き代りに見事にて女一
通りのたしなみあり、顔付も桃の花めき中つ
たるとにはあらで梨の花のやうに淋しき中つ
きりとせし趣き憎からず、随分人の手折りたが
る枝頭の春色なりしが、駿州あたりに根ぐるみ
移しかへられてあるとは思はざりし。それに
けても尾羽うち枯らせし我姿を何と見しや、む
かしの好みに呉れしは重寶のものながら大の男
が小女郎より金錢貰ふは常の人同士なら兎も角
も文一ツなりと通はせし中にては口惜し。殊さ
ら我が遣りし艷書に包みて此金よこせし女の心

中は、二兩が三兩の端金に昔時の話を消して
一切を夢にせよとばかりか、然なくば戀のまこ
とを此様なものに代へてなるべし。え、厭なり
厭なり、我彼女に何うの斯うのといふ、未練ら
しい考へをもつにもあらず、又彼女の處置を憎
しいといふにあらず、呉れし金を辱かしむる
ものとおもはず、我を可愛う思ふよりの事と
もせず我一切彼やうな雌豕を度外に置いて、而
して厭なり厭なり、おもへば口惜し西村虎吉と
もいはるゝ好漢が、契りたるにもあざる女風
情より金貰ふとは。又假令知らざりしにもせよ
艷書のやりとりなどせし女の家の窓下になつて
一文二文の合力受けようために一節語りしは扱
もあさまし。其前去る後家よりは身摺の椅子の
香木貰ひしことあり、或る藝妓よりは紋山蘭の
長胴着貰ひしことあり、羽織の御裏にして御召
し下さるは妾一生の悦びなりと某の娘より小形
の緋珍の丸帯貰ひしこともあり、そろゝ懷中
淋しくなりて仲居の顔も最初ほどは艶を見せざ
るやうなりし時、我が枕頭に抛り出し置きし空
財囊の中に千歳屋の初人が金十五兩そつと入れ
て呉れしを其まゝ取て歸て翌夜行きし折、其方
に良い土産をやらうと玳瑁の櫛、斧、値段にして
何十兩ばかりがものを與へしこともありしが、

口惜しや今は戀も人情も無しにしての論で僅二
兩の金を貰つたまゝ何と返報の爲やうもない身
の上、僻み根性が知られど何となく我が氣性で
は此黃白彼女の横面にたゞきつけて、縁なき衆
生の囊錢は返すと云つてやりたい心持ちのせら
るゝが、思ふに任せぬ念さ、瘦せても枯れても
乞食同様になつても虎吉は虎吉、猫にはならず、
山海の珍味も鮑貝に盛つて出されて誰か食ふべ
き、白紙にくるみて呉れたらば隠分頭を丁寧に
さげて受取るべき此金も我返しにの艷書に包みて
遣されしはかへすゝ思々し。生れてより以來
幾通か種々の女にやりし我文、皆錦の袋へ麝香
と共に納められ、温かい肌につけられて居べき
に非人の手を経た事もあるか知れぬ世間通用の
汚ない者の包み紙とせられしは遺恨骨に徹て厭
なり、噫厭なり思々し、今日の我が身が厭になつ
たり、虎吉に愛想が盡きたり、此金此文ぐるみ我
身を溝の中になど打捨遣たし、さりとて今宵此
金あれば蒲團にもありつき、久しぶりで一盃湯
き切つたる咽に注ぐことも出来るべけれど、之
を捨てゝば、草叢の中に犬の如く寝るより他な
し、えゝ癩癩に墜る、どうして呉れう。察するに
彼女は今魚臭い間屋か、濃染た葉茶屋の亭主か
に養はれて此地に居るに相違ない。いつそ根性

面ぢやに。

第十三

一に板額二に巴三にさらしな勇婦傳、でろんでろんと錫杖の頭をふりながら葭簀張りの中で祭文讀りの唸るを、其隣りでは打消すやうな大聲で、是は奥州岩鷺山の麓の大蛇取りの娘、親の因果が子に報い七歳八歳から長蟲を玩弄にするが癖でと蛇遣ひの口上騒がしく、其他足藝やら血塊やら賤しき怪しき見世もの、立並びてそれ相應の客を引く間には、稻荷餅の黒みたるを賣る屋臺店、切餅を片傍に積みて焙盤の上に土瓶敷ほどの大福を食嵩ありと示し類に列べたる店、唐黍團子、はじけ豆、お化の飛出す吹矢、皆折助守り兒など碌でないもの達が榮耀に備はる久保町の原の盡頭に、破れ三味線抱へて其節悲しく、あの二階で弾く三味線は何時ぞや主が居續けにと、何やら餘所の身の上を歌ふらしうもなく哀げに聲絞る中婆あり、夫よりすつと離れて山庄太夫の視機關の傍で、すつきりと突立ちながら小さき書をもち、春は花咲く青山邊でと鈴木主水が浮話を讀賣りする男、編笠に顔は知れぬ鼻の高い丈は見ゆる事可笑く、是も粹のととの詰り藝が身を助くる不幸者なる

べしと、萬人評して通る道の遙末に、筵一枚布いて殊勝らしく其上に危坐り、垢づき破れて地の色見えす、泥と汗に染つたる浴衣一つ衣て流石に恥は忘れぬか面を隠す淺葱手拭、吉原冠りも氣の毒な姿なり。虎吉と云はれし男も斯うなつては風雅過ぎると、尙抜けきらぬ驕慢心より腹に十分の餅みを持って、人を人ともおぼはず三味線無しで得々と語る淨瑠璃も氣の向き次第口から出次第、めつば彌八種が島の六狸の角兵衛土地の狩人三人連親父の死屍に糞打着せてと、神も恐れず法も恐れず誰はとからぬ聲裏々しければ、耳の開たる江戸兒ども、是はと立とどまりて、大道には惜しき藝、彼の出来る咽をもつて何故砂塗れになり炎天に曝さるゝ事か、天晴寄席に出たなら相應の最辰も着くべく、呂の聲の妙いところで随分感に堪へさする事も成るべきにと不審を立つる位に譽められける。然れば日々其の貴も少なからず、夕暮は何程かを懷中にして歸ると直に、酒なり酒なり。茶漬を下物にして五郎八茶碗に一二杯、酔へば好い夢でも見ようかと自分を馬鹿にした獨語の揚句はこりりと轉がつて徳利と共に寝するばかり。翌朝は又久保町に坐り込み、馴るれば愈々巧者に、忠臣藏やら二十四孝と數無きものを繰り返し／＼

て僅少づつ投らるゝ錢振き集め、歸れば又酒に酔うて、寝て、可憎血を蚊に振舞ひける。人間は財産あれば大抵君子らしく、自然と色にも酒にも狂て品行よきが常なり、落日になりては自暴自棄より、我を無茶苦茶に酔くあしらひ、一時の酔に平生の不快をまざらさむと、引き窓の車にしたる錢まで取りて猪口の中に打込むものなり。思へば己が智慧を振ひ我が肉を殺いで、自分本來の心を醒く間だけ欺すに過ぎず、愚とも淺ましとも云はむやうなけれど、虎吉も此境界に墮落してより左程には嗜ざりし酒を離れ難きまで親むやうなり、量も進みて益々さうしき行ひに狎れ、人間の皮は被れど眞實の狸々か狒狒の如く獸類に近い生活様して、此末は地獄に飛び込むより外はなくなる方もなきまで最底の運に逼りしが、天道人を殺し玉はす世は七度の幸福を一代に與ふるもの。須達長者が一貧一富の昔譚、虛誕ならで、或日虎吉例の通り久保町に居て素話をなしけるに、折しも眞夏の日光往來の砂を射て、小石も火炎を吐くほど暑き六月の初め、往復の人も皆涼傘さしながら、尙歩行は苦しいと云ふ頃なれば誰一人の聴き手も無く自分も大に弱りしまゝ、逆も好い日には今日は逢へじ、朝の内得たるだけを持つて歸るべしと

をさすつて、奮ひ起ちては起つても一文なしの懷中・ア、西村虎吉二十六歳の夏初めて江戸の繁華を見たり、其時一文なしなりし、是だけを覺え置きて老後の茶話として呉れむ、扨も面白し明日よりは、否今日よりは何を爲む、フ、矢張り乞食よ、是は妙々當分乞食で澤山なり、ハ、。

第十二

何か爲出さむと念願は立てても知り合ひの人なき他國では誰か親切に相談相手とならむ。我等は我等の騙て歩行て我等の腕で生計を立てする、御前様は御前様の勝手に何なりと爲さる、我等の知つたことではござりませぬと斷らるゝは極り切たこと、一つには其を察し抜き一つには性來他人に易く頭を下ぐるが嫌ひなるより虎吉は、同じ言葉使ふものを便りて身の安堵を少後頼むといふやうな事もせず、乞食ぢや乞食ぢや、是まで落魄て居る上は大丈夫此下位になる心配はなしと、濟したものにて芝新網の乞者の宿に入りける。其頃新網と云へば現時の如くにはあらで家並も不體裁に、柱の力抜けて腐りかゝりたる小家或は起伏りて波打てる屋根の長屋など建續き、見る眼もいぶせき右左の状態、鴨居鴨居に雜巾のかゝつたらしい家一つも

無く、狗のせし汚きもの往來に煙を立つれど引窓より飯焼く煙豊かに登らす、住む者の大抵は願人坊主、船持たすの雇はれ木夫、朝々良き町を駆けて廻り當もの考へものとならぬこと饒舌の奴、毎日脚布を泥水浸しにして釣の餌探る鼻などにて、御園判斷、行者、按摩取りの類も交り、唯がやゝと朝夕は口小言、物争ひ、惡體、ひざり言、何處の娘の尻付は甘さうだ、汝の所の宿六の鼻は大い御樂しみとか、顔さへ合せば男女共に憚りかなりなく淫猥極まつたる大口きいてげらげらと笑ひ、その外には引かけて寝る茶碗酒を樂みに暮す淺猿しの境界。虎吉は心からとて此所に流れつきしが、流石に未だ此様の仲間に入たる覺えなく、道中で充分辛い目は見たれど、云へば術の使へぬ仙人同然、襤褸を纏ひ粗食はしても姿の割には心下鄙す、富貴に育つただけの香りを持つて居れば、賤しい者たちは人を察る眼早く、昔時を尋れて、交友になる初めに懺悔を聞かうぞ、何うして江戸へ下つたか、何れ娼妓狂ひの果であらうが手に有る能はないか、明日から何をするつもりか、生ぬるこい上方風の考へでは鰐魚が羽で飛ぶやうな活氣盛んの御江戸には足一つ休めることはならぬと云ふ。何程無慚の虎吉も由緒正しき家の

筋まで名乗るは先祖に恥かし、自分も手柄ならぬこと語るが好では無ければ口から出まかせに。我は京都の鑄掛職人、最初は随分實體に持いて居たりしが銅の尻つくろふよりは女の尻追ふが面白いと、不圖した場合から魂魄の居所を變へ、胸の天秤を色にかしがせて、或女へ頗る情愛をはんだと流しかけ、戀を堅めの金の工夫も末は無理して底抜け穴につきこめば、親父藥罐あたまたから湯氣をたふせて以ての外とする異見は松脂の燐けたほど煙つたけれど、可愛い女の笑窪の増壺にとろけた身は、發つた火より大あつて親にはかまはず、彼奴が大方まつ炭とおもへば篝爐の向ふ板がおいでくの手まねきするやうで中々堪らず、行かずに居られず、行け／＼ヤットコせいと通詰め、水も漏さぬ中と喜んだ夢の間、懷中の都合叶はなくなつた曉には白鐵の剥けた銅鍋とおなじく詰らなくなつて此方へ逃亡、懺悔はさつと此様な者、手に能はあれど鑄掛ぐらゐ厭なものなし、幸ひ少しは淨瑠璃を語ればそれで如何か爲たきつもと陳たつれば皆々驚嘆して、たゞの話しさへ淨瑠璃じみて可笑しかりし、鑄掛が厭なら爲るには及ばじ、明日からは筵一つ持つて久保町の原に出ればそれで済むことなり、筵一枚の工

げ頭を下げて人の氣を取らむには萬人に愛されむこと少しも苦なし。然し今までは兎角人と角交際のやうな風で年を經しが、是からは丸く丸くと消く世を渡り、飽迄伶俐に立ち廻つて見るべしと急に意を轉すや否や、席を蹴つて猛然に起ち絶えて久しく剃刀あてざる顔の髭髯を剃り、湯に入つて塵垢を洗ひ、爪まで剪みて、錢二百文で立派な帷子を借り着し、同じく借りたる博多の帶をきうとしめ、衣紋を繕ひ、ちやんとして歸宅れば、宿の者たち吃驚して、イヨ色男になつたな、氣は確か虎吉、其姿は何した譯か、ア、見違へるほど美しい男振り、衣物の着こなしも何處やらに巧いところあつて、天晴本大盡さまぢや、男妾の眼見えにでも行くのかと、群蛙うるさく問ひかゝれど、昨日の今日、僅一日の間に料簡變つたる虎吉、返答も厭といふ顔して、皆喜悅んで呉れ、出世の端緒は今夜把める筈、楽しみにして待つて居や、頓で馳走べし。

第十五

福は驚いたる鹿のやうに突然飛び來つて人の胸に撞着ることあり、思ひまうけぬ財を拾ひ、庭前の石の中から金剛石を獲る類は其鹿に出逢ひたるなれど、又或時は福といふ奴、鳳凰の梧桐

の樹ある所を求めて下り來る如き場合もあり、寅に起き子に臥し家業油斷なく働いて後幸運になるは丁度梧桐を實生から生育て鳳凰の御宿したやうなもの、結構はより上は無し、虎吉は不思議にも打頭の福の風を迎へて此奴取り耽らじと、充分に男振りをあらため、衣服も見苦しからぬやう爲して、愛宕の山蔭に日の没るを待ち兼ね、毛利様裏門と心ざして歩みを運ぶ腹の中、何でも此所を妙く遣つて今までの境界を抜け出で、再度壘の上に坐る身となればおもしろからず、臨機應變に我が才を使ひ、先づ第一に殿様に可愛がられて其後は何程も仕様あるべし、今宵こそ大切なれ大切なれ、確と性根を据ゑて拙のなきやう取りまはし、善惡虛實關ふところにあられば世に珍らしきものと我を名乗りて一杯も二杯も三杯も食はせ奉つり、猫をかぶりて御膝の上に這ひ上らむ。フ、フ、斑は美しうても虎は臀の下に敷かれ、能は無くても猫は膝の上に乗るが人間の常例、五重の塔の頂點に達するは翼の利く鳥と其鳥の羽に着いてる蟲ぢや、白癡た奴等が慷慨憤怒して愚な理窟を拈つても昔時から極つて居る情態は其通り、虎吉も此時は一番猫になつて我を折り、正直三昧に鈍閑な出世を願うて居る可愛さうな野暮どもを冷笑つて

呉れむと、才のみ鋭き男の今當方を攫まむとするに臨みて懐ける考案恐ろしく、頓て其御屋敷に到りて丁寧小腰屈め、此方へ參れば分るの由にて參りし藝人、漠然したる事なれど御含みもあらば御取次下されと口上に贅言なく門番に尋ねれば、豫て汚穢くるしき者來れば斯く斯くせよとの命令を受け居たる門番も、見たるところ人品鄙しからぬどころか極めて立派に、衣服も粗末ならで言語殊更判然したる虎吉を見ても急に其ぞとは思ひ得ざりしが、少時して扱は此男と合點し、氣を呑まれたるより挨拶も鄭重に、一寸御待ちなされ、と云ひ捨て、門内那處かへ行きしが、前方久保町にて見し侍の出來りて、我案内して得さすべし、此方へ來よ我に跟け、と云はる、儘虎吉驚く會釋なし、其人に導かれて邸内を歩み、段々奥深く入りし末枝折戸を過ぐれば、傾しも夏の盛りとて鬱鬱たる樹木の繁り味しく、築山の狀も古びありて捨石の配り凡ならず、泉水冷しげに清く涉せる石橋に苔あるも愛たし。折柄十二日の月東方の木の間より和しく光りを放てば、打水の恵みを受けたる草の葉に露の玉きらめきて、其邊吹く風軟らかに十分の心地快さを人に與ふれど、あさましや虎吉いよ、名利の火炎を肚裏に強め、好景も眼

身を起さむとする時、三人ばかり向うより歩み来るものある様子に若しや與るかと近江源氏を好い加減の面白きところより、主を誰とも人目せく陣笠まぶかに篝火が男出立の半弓にと語り出せば、思ふ通りに我前に立止まるにぞ、占たりと汚ない腹中で喜びながら、密と上眼で人物を覗かへば、上布の御衣服、細の羽織、燦塗の鞘を尋常にして何う見ても身分あるべき人柄出立、後の二人も同じ衣服なれど控へ日なるは家來なるべし。敏慧く察して、咽を惜まず語りつゝくるに、何時まで立てども三人ともに身動きさへせず、聞惚れたるや錢呉るゝ事も忘れて。

第十四

微行笠を透して焼くが如き太陽の熱さに耐へずや、彼武士は飄然と立ち去りければ、虎吉ばかりとして、えゝ忌々しく小粒の一つも呉れるとおもへばこそ此方も辛いな我慢して語りたれ、散散聞いて無錢でして仕舞ふとは興のさめた奴と獨り胸の中で罵りしが、道なら一町が一町半も歩きたる頃一人の若侍土取で返し、白紙の掛りを投げて去れば、有難し何程かと、早速開けて見るに一分銀なり。是は飲めると舌打して急に席を巻き收め、勢よく歸りける心さもし。適々得

たる重寶なもの何して遣はれず有るべき、忽ち酒肴を其にてとゝのへ、朝夕顔合すものたちと共に飲みほこつて、高く笑ひ低く語し、明日も運よく今日のやうな客の見えたらば又馳走すべし、權も八も我がために淨瑠璃繁昌を祈れと戯むるれば、久保町あらむ限り虎吉太夫毎日額一つだけ掛けますやうに山王様御頼み申す、山王様は唯すが御好と下らぬことを酔より騒ぎちらす智慧のなさ。噫、我も落魄たり、一分銀一つ得るやうにと祈らるゝほどなり下りしか、然も山王様は唯すが御好と血鉢たゞきたつる如き愚物どもと膝を交へて酒呑むこと、思へば情無し、噫、噫、厭になつたり乞食も既う厭になつたり、と人知れぬ嘆息に酒も美味からず、其夜は眠り難く、数々寝返り打ちて行末を案じつつ、明くれば又例の大道に坐して唸りける。若や昨日の隠居の來すやと心を慾に張て待つ中、今日は若侍一人を連れ來たりて又長々と立聞きに耳を傾ぶけ、頓て去たる後より彼若侍小尻りに戻つて又額一つ。もう是丈貰つたれば端錢は要すと宿に歸りながら、思へば何も不審な老父、身分は何か分られど定めし相應に祿取る人の隠居なるべし。淨瑠璃が好にて我が藝の氣に叶ひたるより錢呉るゝには相違なかるべきが、地上

に坐せる我等風情に一分とば寛大過ぎたり。世には變つた者もあればあるものと考へ、其目もそれを酒にして自墮落に休みけるが、其又翌日も彼老人少時立止まるにぞ、是は察するところ我が淨瑠璃聞くため殊更に炎暑を厭はず出て來るならむか、然りとては有難い御客さま、御機嫌取り損じては冥利惡しと、一段力を入れて語れば、老人耳を澄す様子、此の圖はづさじと虎吉十分妙くやれば、例の通り一歩くれしが上に、虎吉が耳柔引張つて若侍は周囲の人を忍び聲に、今夜毛利讃岐様御裏門へ來るべし、其方には好い事なり、と云ひ捨て、行く。虎吉手を拍つて躍り上り、讀めたりと、扱は彼老人は必ず讃岐様御隠居なるべし。我が運開けかると瑞相か、大道に居て貴人の知を得るなどは是ほどおもしろいことなし、一番此處を巧くやつて大名に取り入り、虱の這ふ襦袢着物を脱ぎ代ふべきか、乞食も飽きたれば今度は二本差の中に徘徊し、おもふまゝの勝手を成るだけ爲て見むか、面白し、高が知れたる田舎武士の機嫌取るに六かしい事あらむや、女たらしには骨の折るゝ筋もあるべけれど、腕様の掌の中に丸める位の手品何の造作もなし、我虎吉平常人を人ともおもはざる男、それが自らを人とも思はず膝を枉

に御恥かしい事許り、親の仇を捜るため淨瑠璃語と身を扮し、利味に覺えある一刀を三味線の棹に藏し、などいふ筋ならば見事威張つて如斯の仔細と言上致すべけれど、根が町人の私と此所まで口任せに饒舌の中に如何我が上を云ふべきといふ事大抵巧らみたる敏捷さ憎いほどの伶俐者なり。何から申してよいやら分られど懺悔一ト通り御聞き下され、わたくしとても生聲からして、入りにけるを喰りだしたでもなし、又元からの藝人の家に出たものでもござりませす、先祖の名は流石此處して申し憎ければ御免蒙りまするが、町人ながら少しは由緒ある家に生れまして二十一まで相應に家業も勵み、今申せば空力味なれど、職業に掛けては我が住める京都はおるか江戸大阪の者等にも後れば取らぬつもり、それより慢心して天狗に憑れ、忽ち職を打捨て、口頃好な淨瑠璃にはまり込み、頻りと喰つて箸持つ暇もでん／＼のおもしろさを忘れませぬ位と、ところで惡魔は一人來ぬもの、私に憑たる天狗めが連れて來ましたはそれはそれは滅法無暗に美しいお女郎蜘蛛、それ蜘蛛と云つて男に飛つきしは昔時の手取り、それにも増して其女郎蜘蛛手管の掛糸荒れたる駒をも繋ぐほど緊乎と、此わたくしめを掬めつけ離しませ

れば、遂明かゝつて母にも不孝の數を盡し、女房にも苦勞のありたけ仕盡させましたる揚句、ひとりの娘を置いて女房の病死にます／＼心狂ひ、亂行の有る限りして、金銀無くなり、是はと心付きたる時は丁度揚屋の二階で太夫に好い恥かかせられし時、ア、遅時の後悔が恨めしいと身か悶えても追付かず、天狗も蜘蛛も我を見捨て、味方の無い心細いところを覗ひ借金取りの鬼といふ奴烈しく責めくるに敵しかれ、いつそ女ばかりなら斯くもあるまじ、と勿體ない事なれど母様イヤ母を置きざりにいたして雲か當に繁華な江戸に來たらば好き事と、來は來ても知り人のあるではなし、座敷で覺えた淨瑠璃を地の上で語つて僅かに口を飼ふ因果もの、親子の情愛逼つた者を語り得ぬも昨日此頃、持た氣象の鼻強きが萎むで、つく／＼と浮世の鹽を舐めましてから、噫もう詳しい話は御ゆるし下され、と初は可笑く末は理に落ちて終れば、殿は堪らずや自ら御聲かけさせ玉ひ、其趣になつて先祖の名を包み家業を明さるるは殊勝なり、隠すに及ばず語れ、と云はるゝに、虎吉恐れず聲を急にして、厭でござります、御ゆるし下され、淨瑠璃は語つて今日の營業にいたしまするが先祖の名などは賣りませぬ、御免下され、厭でござります。

第十七

憎いものは學問を鼻にかけて口頭に竹取狭衣などいふ物語り書、月清拾玉の類の歌書の中なる詞を弄する女、床しいものは指つきをしならしく聲清く、然も優れし伎有りながら能を包みて輕々しくは歌さへ歌はざる男と誰か言ひし。都て見付のばつとしてけや／＼しきは碌なものならず、間口の狭き家却つて奥行の廣いが世の恆なれば、虎吉毛利侯の御隠居が間に答へて最初より氏素性を高慢らしく名乗りたらむには左程御意にも叶はざりしなるべけれど、手強き一言無遠慮に打放して、淨瑠璃は賣りもすべし、先祖の名を申して御慰みにするは厭なりと云ふたるに、ます／＼見どころあるものと床しかられ、達て名を尋ね職業をきゝ玉へば、最早是ほど焦躁さば徐々眞實を吐ても好し、フン持せぶりて人を釣り寄せし末我が壺へ取り込む工夫に以前は我も掛られし事ありしと例の通り自分を冷視つゝ、度々の御言葉背くは恐れ多ければ是非なく詰らぬ恥を先祖にかけます、と申しても大職冠とか清和源氏とかいふやうな大したものではござりませぬ、實は御存知あるかも知れぬ釜師の道仁が末、私の名は虎吉と申します

に止めずして腰を照す燈籠の下をよぎり、教への踏石を傳ひ、奥殿と覺しきところの縁前に到りぬ。銀燭内に輝きよて絹張りの團扇に殿を燦々女中の頭に頂ける簪甲の何やらが光りなど薄薄と檐の翠簾に洩り見え、茶を奉じ菓を薦むる人の起居に衣の鳴る音も幽微ながら聞ゆるほど離れたる平めの石の上に坐して額付け、涼み臺様のものを持ち來りて若侍が此上に乗れとの指揮。かしこまりて軒外に据られし其臺に坐し、頭を低うして命を待つ中、支度よろしくは語り出せと取次の小豎の云ふを、云ふにや及ぶ、聞いて呉れ我が喉の妙音を、此屋敷御奥に何人か淨瑠璃の心得あるもの有るか知られど、氣の毒ながら先祖代々の業を捨て家を潰し乞食になるまで身を打込んで喰ふものは有るまじ、高の知れたる奴等が耳の孔に本場の上方で覺えた一ト節聞かせて骨を蕩けさせ髪を動かせ呉れむ、と自ら慢じながら大の得意の二十四孝を誰憚らず傲然と例の素語り。

第十六

虎吉鍛錬あまりある喉より、一腔に限り切たる氣を惜氣なく吐き出し、唯一つの扇子に拍子を取りて軽く上げ重く沈むる聲自在に、屈して

は暢し縱つては収むる節舞の妙を盡せば、聴く者残らず恍惚として一個の美人面前にあるが如きなおばえ、俯して歎じ起つて悶ゆる状態、恨んで泣き悲しんで狂ふ姿勢をありと見る心地して、頭簪の花動き衣裾の長く曳けるしどけ衣服風俗眼の前に立ち、そよと吹く風の中にも名木の香りあるかと疑ひつ、冬なられども月影連波に碎くる様に氷の色をおもひ寄せて御庭の池に諏訪の湖の景色を忍びける。一段畢れば騒がしくそこは褒めたる翠簾の内もさめきわたりて一同歎賞し止まず。殿も御機嫌麗はしく縁近く乗り出し玉ひて、大儀々々面白し、と有難き仰せに、虎吉占めたりと冷やかに腹で笑つて、尙一段と所望もあれかしなど靜に待つところへ、一人の御扨従命を受けて立ち出で、殿の御尋ねなるぞ、謹しみて御返答申せ。如何に其方それ丈の技を持ちながら何とて大道に坐し、足藝豆蔵の儕輩と列びて久保町の砂埃には埋もれしぞ。元來の藝人にて一度は相應にせしも、色戀の沙汰などにて良からぬ事をなし、師匠の破門仲間、義絶といふやうなる目に逢ひ、世に立交ること難くて其如く落魄しか。但しは全く素人の好より身を下して乞食同様になりしか。今日見れば起居動作見どころありて、人品も辻

淨瑠璃語るべきものには過ぎたり、仔細なくては叶はじ、其迄になりしには、苦しかられば其方名を初め履歴のあらまし包まず語れ、定めし種類の面白き事もあらむとの御意なり。潤達大氣に涉らせ玉ふ殿の殊に無禮は少時許さむと仰せらるゝなれば随分氣詰りなく、有しが儘に其所にて自ら身の上を語れと、問はれて虎吉何隠すべき、對手の三昧に協ふか協はぬかは天運次第、此方の語るは此方の勝手、思ふさまに我が身の上を話すとも我が身の上の事なれば誰が何と云はむ、よしと思案して頭を下げ、飽まで無遠慮の調子に機轉を打たせて、一々ありがたい御言葉なれど我等風情に是といふ履歴など有らう筈はなし、問はるゝ御方がチト野暮といふもの、然し折角の御尋ねに答へぬも生意氣に外見を作つて初會に媚妓が年を白狀のやうで可笑がらればざつと申しあげますが、殿様育ちの上の方方は兎角我儘もので居らつしやるよし、能く下々で御噂申します、我等話しの途中で、怪しからぬ奴め人の前にて惚氣を申すか、惚氣の受質に手習鑑残らず語れなど仰せあつては甚だ恐縮の至りなれば前もつて御斷り致して置きますと、斯う前口上を長々しく申すと何か大層おもしろさうに思はるゝか存じませぬが實は誠

を養ふ無事退屈の春の日秋の夜の伽ともなし呉れむと、今しも道仁が作の笠を見て面を赤くせし虎吉の風情に可愛さ優り。笑止や虎吉、不羈の汝も是を見てはそる胸苦しがるべし、其方は當時那處に宿を定め居る、何芝の新網とか、新網といへば願人坊主などが巢にて普通の者の居るべきところならず、廢めよ廢めよ、其様な場所に居るは廢めよ、聞けば母もあり娘もあるよし、何程無頓着の其方なればとて、故郷を思ひ寐の夢破れし曉天など、虛空に消えし涕を忍びては悲しきことも口惜き事もあるべし、我好きやうにして取らすべければ直様母と娘とを呼び迎へ、明日よりは久保町に出ることも止めて我が膝下に事へよ、長屋を與ふべければ其所に住みて、僻みたる考へを捨て母子睦まじく暮し、今まで爲ざりし孝行も少しは爲て見よ、眞實の道な進らば又從來の汝が知らざりし心地快さを見出す事もあるべし、と忝けない御言葉、何云うてござる其様事心得ぬ水兒ではなしと笑ひながら、目前の利益取らぬ損と有り難き旨御答へ申して引き返りぬ。其後は御長家の片隅に起臥も安らげく、再び饑渴に苦しむことも無くて、朝夕殿の御機嫌取り、素より遊藝のあらましに通じ人情の急所を承知し居る虎吉、爲ること都て

御意に入らぬは無く、例の通り語る淨瑠璃は云ふまでもなし、其他花をあつかへば、池の坊が腕をあらはし、茶をたつれば千家遠州が法立まで心得て、天圓地方横鱗、縦鱗の花短に詳しく、手前飾り付花月且坐廻花茶歌舞伎唐物點何暗きことなし。詩歌には左まで深かられど木に竹の挨拶もせず、連俳の道も大概は知りて宗祇の姿高き其角の打興に鋭き趣味を學び、狂歌は卜養油煙齋が流れた汲み、川柳語呂は天稟の奇才に任せ、云ひ出る秀逸人の耳を驚かせ、日にく龍愛をうけて二なき者と思はれ、雨にも晴にも虎吉なくてはなかしからずと御傍を離されず。されば伶俐の虎吉此圖を外してはならずと、ますます才氣を鼓して八方に眼はしか利かせ、諸士女中にまで出来るだけの愛嬌を振撒き、己が名も虎吉は妙ならねばと何時しか道也と改め、飽まで暫間氣質になり濟し、機嫌取られて覺えたる調子に今は人の機嫌を取りける。此あたり有様は人に上手つかつたことなき叫雲詠すに由なれば、好いかげんに察し玉へ道也が事は暫らく措き虎吉出奔の後に残されし母とお道は頼るものなれば松に離れし娘黨の力無く、生命あるといふばかりに微く日を送り居る憫然さ。流石に無慈悲の甲冑を被て世を押し廻す

金貨も、主人居らすなりしに老人を酷く責められたとて得るところもなく、一つには氣の毒さもあれば自然嗟り立つて催促することもなきに外より窮しめらるゝことはまづ免かれたやうなれど、悲しきは内よりせがむ饑渴紛らし難く、老眼の覺えなくも細き生活立てむとの針仕事、貧苦の中に智慧付き早きお道が、祖母様姿が明い眼で針の孔通して進ようと、しだらなく絲先を拵りて手助けせむとするいちらしさ、何も彼も涙なり。オ、お道や、よう云うて呉れた、汝に半分汝の父が似たらば如斯いふ態にはなるまいに、え、それは悔んでも及ばず、唯だ此兒が母に似て穩和しく孝行する所を虎吉に見せたと、誰にいふやら知れぬ愚癡も毎日、果は役たゝぬ物案じながら徒らに我子は何處にと天空を眺めて心の奥の間に我が心を迷ひ入らせけるが、夏もやゝ過ぎて七月祭りの支度など幼き兒ある家にては爲る頃、ア、秋風も頗て吹いて來うにと、油煙餘所の庭樹の梢に鳴て残りの暑まだ退かれど辛配より胸先の冷きをおぼゆる夕暮、西村さまは此方か、と見知らぬ男の尋れ來りぬ。

第十九

蓬生の宿に音信るゝは誰ぞ、またしても邪慳

るが虎どころか鼠にも劣つた奴、京都の釜座で三とは下らぬ家を喰ひつづけて今更お恥かしい次第、蕩樂の夢さめて後はどうかして舊の十分一にも回復したくばおもへど。及ばぬ事の口惜しく、せめては後に残せし母に不幸の訃の形ばかりの事も出来たらば、夫を機會に再び霞立つ東山の春景色を何は無くとも親子揃うて眺めるやうに歸京たきば山々、未練らしい男らしいないと仰せらるゝか知れませれど、往來に居て語る中にも、緋鹿子の帶止美しう結び下げて通る女の兒を見ては内々我が子をおもひ出して、惘然な者や、我如き阿呆を親に持つて嘸かし肩身狭く友達の間にも押張つては遊嬉なるべしと藪にも露、鬼のやうなわたくしも泣く折の無いではござりませぬ、されど持つて生れた根性の奇怪きは治らず、物事を苦にするといふは大嫌ひ、有れば有る時、無ければ無い時、酒も既う厭、女も既う厭、そんなものを面白がつたは唐人笛蓼葉の蛙など玩弄つた時代の話し、今では何も彼も面白からぬ代り何も彼も面白くて、大道の砂塗れも殿様の御思ひなさるほどは苦しいものでござりませぬ、腹の減るのも随分妙、風の攻むるも随分妙と一切を妙ごかしにこかし倒せば、おもらひの宿も鴨川添の茶屋が二階も同

じ事、石の上も樹の下も金殿玉樓と變らずと、悟つて見なくても此様な癖は貧から起りまする牽強附會、芭蕉とやら西行とやらいふへケタレも多分此點等の合點を歌俳諧に詠んだ奴に過ぎまいと垢と共に生じた風雅氣取りで、實の最底か申せば自分の罪を塗り潰し、壓し伏せ、今日を送りまする、ハ、懺悔話しがチトしゆみました、御許しなさつて下され、と低頭平身、流石に少し萎氣たる様子。殿は暫ら打案じ坐せしが、扱は寛文に名を響かせし道仁が末か、如何に其方まことに釜師の道仁が末道也が家の者なるか、さらば其釜釜の鑑定確に成るべしとの御意。若年の不鍛錬者なれど鑑定位は失禮ながら間玉ふに及ばず朝食前でござりまする。オ、いさぎよき言葉、英齋釜を持ち來り彼に鑑定させて見よと云はるゝに、是は愈々面白し、我が能をあらはすべき時節到來、何のやうな品でも持つて來よ、一々目利して呉れむと思ふところへ茶道坊主の英齋五ツ六ツの釜持出せば、素より馴れたる商賣技、手に取る間もなく、是は與治郎、是こそは喜ぶ人の世に多き寒雄釜、此模様の下晝は儘に雪舟筑紫に居たる時にものせし葦屋釜とて結構な御品と、鑑定毫末も誤たす英齋尙も種々の事問ひ掛くれば、應對流るゝこ

第十八

とく悠々と辯じ去る鑄物の次第、ソウ型、蠟型の區別、艶、強み、肌、性の事由、或は野州の佐野が天明と俗に呼ばるゝも釜師の天明より名の付きたる話しなど四方八方に飛んで淀みなく答ふれば、默然と聞き居たまひし殿は手拍つて歎じ玉ひ、天晴々々、若やと疑ひて問ひ試みさせしに厭ひもなく道也が家の筋なるべし、虎吉之を見よ、汝は久保町の原に坐したるが此は我傍に用へるものぞ、と御風爐の釜か英齋して視させ玉ふ。何かと見ればアツ我が家の先祖道仁が作物、流石の男も恥に激して一肚の熱血矢の如く面をつきあがりぬ。

人間は自分の釣つた魚を美味がり、我が畠に出來し茲に衰むるもの、讃岐の守御隠居は御微行の折節、眼に止め玉ひし男の、話を聞けば聞くほど面白くて然も素性卑しからず、氣前に可笑きところあるを最と嬉しく、腹の中で我が眼識はえらいものぢや、大道に捨つて居たりし是程の美玉を我下知の知ありし故にこそ拾ひ出せしなれと誇り玉ひて、半ば迷悞めいたる身の上ものがたりに一入あはれを催され、よし、此奴を塵埃の中より抜き、相應の地を得させ、老

口あらば扯裂き破つてやりたいに、道也といふ男百里隔つたところで母が如斯泣くとは知らざるなるべし。お道は何も辨へざれば祖母様早う父様のところに行かうよとせがむばかり、遂に秋風ひやかに梧桐の葉に渡る頃、通天の楓樹まだ爪先に紅さぬ内、東都の方へと心ざす同行二人。

第二十

百二十里の道中、雲助に厭な事も云ひかけられしして、橋、坂、峠、磯邊、渡船に怪我過失もなく、老婆と子供と唯二人、見知り越の左る織屋の手代が主人用にて江戸に下るを頼りにして足弱の歩取らればと馬を就ふ晴の日、奥に揺らるゝ雨の朝、いと安らかに毛利讃岐様御長家に着きける。久しぶりといふ程にもあらず、面を見ざることも數月に過ぎれど、其間の互ひの苦勞に三四年も逢はざるやう思はれて懐きに得堪す、何から話さうやら、話は澤山胸にありながら、我が口の其を云ひ出すこと知らぬかと疑はれて少時は雙方ともに眼の濕むばかり、頓て話し出せば彼の事此の事、それに續かり是に關はりたる種々の物語り盡さず。面やつれなされしと母をいたれば、大さう老たと子をあはれ

む親子の眞情、お道の大人しうなつたを褒めてやつて下さいといふ傍より、父様も餘所へ行つては厭と膝に凭れかゝつて甘ゆる娘、謝罪やら懺悔やら教訓やら、留守の間の苦しかりしこと、旅に居て困りし事、取り交せて憂を語るも今は楽しく、水入らずの間とて三人頭をあつめ睦まじう圍居する部屋の中、和氣霽々として福神も此所に居たまふべし。かゝる際にも老人は涙もろくて、其方が心を饒して柔和なり、此様に嬉しく親子居ならぶ様を嫁女に見せしと返へらぬこと云ひ出して母は泣きけるが、是より流石の虎吉も心平穩になり、舊時の如くは暴れずにお道ばかりを可憐がりて暮しぬ。殿は大道より拾ひ上げたる自分の鑒識あやまらざるに誇り玉ひて御自慢の鼻高く、古來賢主が日備取りの中より良士を擧げ、山の奥より智者を呼び出して野に遺賢なきを期するに事は異れど、我は久保町に道也を得たり、彼輔弼の能經綸の才なしといへども太平の頌を歌はせて無事の日の加をさするに比上なき人物、惜しくも才氣爛漫の男空しく風塵の中に埋もれむとせしを救ひ取りて、驥足伸びるといふ程ならずとも、其器に應じたる地位を得させしは天晴の我が手柄、何うちや三太夫道也を見出せし我が眼利はえら

からうとの御意に近臣等平身低頭して、御上の御眼利には恐れ入りました、實以て道也ごときは得難き男、珍らしい者を御見出しになりましたと一つは追従一つは道也が上手つかふに吞まれて褒めたつれば殿はますゝ悦に入り玉ひて當主の讃岐守殿に御面會ありし節、余は近頃儀様簡様の面白き奴を得たが遊藝十八番に精通せるが上に、氣象快活實に不思議の怪物なりと仰あれば、其奴見たしとの御望み、素より見せたきが山々の御隠居、早速呼び出し玉ひて其座を取持たしめらるゝに、敏捷伶俐の道也が爲る事に批點の有らうやうなし。當主の讃岐守殊には齡の若く御座すだけ、一入奥に玉ひ、それより御本家の毛利大膳大夫へ御話し傳になれば、又其奴見たしとの御意。逢つて見玉へば面白きに、それよりそれと御噂あり、薩州太守島津隆庵守にまで道也は召されぬ。されば虎吉何方へ行きても當意即妙の機轉巧く取り廻すに、武骨武士ばかり相手にし居玉ふ殿様達、粹の上りの道也に轉がされては田舎料理食ひ付けた口の八百膳の珍産に逢ひたるごとく其味忘れかれ道也々々と珍重がり玉ふにぞ、今は讃州侯が御隠居さまばかりの傍には居らで毛利島津と其處等中の御邸を廻りあるきける。

(明治二十四年春作)

の債鬼が、たゞしは舊時の知己か、債鬼ならばまだしも與られぬものは與られぬなれば其で濟べけれど、若も殊更に舊時の我家を知りしものなどの訪ひ來しならば、妾が罪にこそあられる薩もなく微祿して、釜の座の工業場も人手に渡し、所有は恥と云ばかりなる此荒舎の風情を人の眼に入るゝことの口惜しと、追手を恐るゝものゝ風の香樹の果の墮つる響にも驚く如く、然らぬ事にも心弱き女性の貧に萎縮たる此頃、どきりと波を胸に打して、西村は此方でござりまするが年寄と子供ばかり、主人は他行致して留守でござりまする、御前様は何方から御來臨になりましたと、と既逃口を一方開置いて問ひ返せば、男は氣の毒なる顔して、いや御心配なものではございませぬ、我等は毛利讃岐さま定御用の飛脚屋が手代、御江戸御屋敷内の西村さまよりの御書狀と金子五兩此方へまゐりましたれば御届け申します、御あらためなされて御受取つかはされませ、中々御宅が知れ憎うて随分たづねあぐみましたが先々知れて好うござりましたといふに、婆々は不審して、御江戸の毛利様御家中には未知つたものばござりませぬ、西村といふ苗字外にも澤山ありますれば間違でござりませうと押返す。いえ、確に此方様に相違な

し、釜の座の西村さまといふは他にある筈はなればとの言葉に、眼鏡取り出して手紙の封じ袋に書いたる字を見れば、これは、微のやうな手に筆もたして妾が手摺り添へ、いろはにほへとちりぬると手習初めさせし其時の虎が筆行どこやに残りて、宛名と出し人の名讀むまでもなく慙ひし我が子の音信なれば、夢のやうな嬉しさに心魂漂蕩いて、道や道や道よ、父様、道よ此所へ來よ、父様のところからお手紙が來た嬉しいか嬉しいかと頑是なきものを把へてたわいない事を云ひける。漸くして鍛だらけの紙を伸し受取したため、金子と書狀を取りて男の歸ると其の儘、人間は正直なもの哉、昨今の場合慥へ付くほど欲しき金子なれど其には眼もくれずしとお道を膝下へ引き寄せながら、忙たしく封じ目扯きさいて我が子の手紙を讀むに、まづ無言の家出をはじめ前々の不孝を謝て、其後さまの苦勞を仕盡せし揚句辻に坐つて淨瑠璃かたるまでになりしが、夫も是も皆母様の罰があたりしことゝ先非か悔み身を責る中、御仁慈ふかき毛利様御隠居様に見出され、今は常に御傍に侍りて御機嫌取るばかりの樂な勤めには過ぎたる御引立を蒙り、御長屋の隅に不自由なく生活せば、是より心入れ替へ今ま

での不孝の謝罪に、如何様にもして安樂に御養ひ申すべければ、此書狀着次第、御道中は確實なる男を雇ひて御供につけられ、お道とも江戸へ御下りなされたく、路用として此金子は御送りまをしまするが、本來は小子お迎へに出るべき筈なれど殿様離し玉はれば心に任せずとの文意。母は見るより涙にくれて、あゝ有難し、日頃倍する嗟嘆の如來さま虎吉を守り玉うて下されしか、今の身は結構すぎた事なれど、それにしても辻淨瑠璃語りとまでなり下りたる間の苦勞おもひやられて悲し、不孝をしたは憎けれど、憎いとして此母の罰があたれと此母は神にも佛にも願ひはせず、無言の家出をあまりなる無法と其時は怒りたれど、怒つても我が貧を苦にするよりは其無法者を氣づかつて風邪はひかぬか暑氣にあたりはせぬかと苦にしたものを、可憫や不行狀の報を人は與へれど自ら取りて、幾干の辛い思ひをせしが上に、自分の胸板へ自分の心が有ち居る熱鐵の印文「苦しみは罪の報い」といふを烙捺て、夫も是も皆母の罰が當りしと、悟れば悟るだけ深く食ひ込む苦を受けしかのええ可哀な奴め、南無大慈悲釋迦牟尼如來彼兒めを助け玉へ。と吉につけ凶につけ、子をおもふ母の眞誠おろかしきやうなれど其な愚癡と申す

自慢の讃岐様の御隠居が言葉に付き、それより毛利の御本家に取り入り、今ほ切に薩摩様に愛さるゝものゝ、落魄て再び乞食になるとも其味は既おぼえて居れば是しきの身分を失うたとして指の爪を鉄み取られたほどにも思はれば、榮なり、榮なり、随分思ひ切たこととして假令に宰相公に戯れかゝることも能すべし、よしや富士が根に心け置かすとも、掘金の井の底に身もあるものと覺悟して武藏野のはらを廣く持てば、南無や亞米利加大明神俄羅斯亞大權現現世を願亂して日本をわや／＼と騒がし玉へ、遣り損れたらそれまで、失敗ても例の平氣なれば、閑雲に何でも爲て紀律の紊れかゝつた世界に我が功をあらはさしめ玉へと、私に事あれかし事あれかし、臨機應變當にはならぬながら我才ふるはんと不敵の望みを抱きつゝ、猶まめやかに御機嫌取り怠らざる鼻の頭へ、來たりや妙々こぼれ幸運、平素の如く御傍去らずに今昔の可笑話など申して御伽する時、何かの端より島津侯が、汝も知るごとく此頃漸く世は驕がしく、彼方の堅め此方の守りと戒嚴怠慢なき折から、武器もそれぞれ要ることとなるが、他の物は皆能く成れど、唯大砲の鑄造のみは我引き受けてといふものなし、汝は素は名譽の鎗師が家に生れて鑄物師鍛

治にも知り合多からむが、誰か進で擔當べき者を知らざるか、平安の日は要らぬ大砲の事故腕に經驗ある者も無かるべく、隨分困難くもあるべけれどと、半分云はせ奉つらず、蒼鷺鶴を認めて羽風烈しく追ふ如く、道也頭をあけて微笑ひながら、そんな事造作は無し、餘人に御委任あるまでもなく、此道也一切引受けて見事鑄造いたすべし、爲する人あらば鷹島の鳥居でも鑄つて成らざることはなきに、何の鐵砲なぞ、はゞかりながら朝食前なり。

第二

知らざるを知らずと爲るは馬鹿正直の古代漢、餘り智慧の有る話しならず、心得ぬ事まで心得たりといふが常意即妙といふもの、誰か太平の中に生れて思はしき武器の製法など習うて居む、道也不器用ながら敷を搜して尺八を調作へ、姫小松を拈くりて美人の似顔を刻むぐらゐは能すべけれど、鐵砲を鑄るは中々おもひも寄らぬ業、さりながら西村の家に於て鑄物は充分爲覺えたれば工夫を廻らして成らぬ筈はあるまじ、此様な事に取つてかゝれば面白からず、我引受けて爲て見すべし、歌は畢竟難題に詠み出づるが可笑く、池水半凍るといふに氷れるほど

の氷らざるらむと遣つて退けしこそ後京極の腕なれ、事業は到底困難いところに甘味あり。胡桃を食ふに殼を割るの面倒を厭ふことは。我虎吉自ら跨れる度胸の好きを此所等て役に立てずば、一生五六十一年枉げて好い度胸を肋と名の付いた庫藏の中に仕舞ひ殺すべく、さりとは少々膽玉に氣の毒の至りなれば。と島津侯御前にて鐵砲鑄るなどは朝飯前と云ひ放したるに思ふ通りの御意あつて、左らば次に申し付る間、度誤りなく仕果すべしとの御言葉。成るか成ぬかは明日の語ぢや、眼前の命令有難くも結構なるを御請爲いではと謹しんで御承なし、引退りたるは先刻の事。然し想へば流石に些心計なけれど、是ればばかりか先途の暗きは。浮世萬端一寸先に眼は届かぬが唯衝突つたところに勝負あり、手早く取り廻し、心柄く分別すれば論は無し。何にかして此御用首尾よく済ますずば道也も男兒ならず、名を起し家を成し、人らしき體面を備ふるやうになるは此時にあり。從來の如くたゞ御機嫌取りにては酒を君前に賜はるとき、鳳鸞龍髓を下物に金銀兎觥を手にするも畢竟嬉しからず、僅に地上の乞食たらざるも遂に席上の乞食たるをまぬかれぬ口惜しさ。よし勇を鼓する一番 結間亞流の身を清めて一廉の者

寢耳鐵砲

第一

お空に雲迷はず、時津風おだやかに吹て萬民
太平を樂しみ、上下和睦の交際ぶり、武士も肩
衣の鯨を抜いて、肘を怒らせずに坐る四疊半の
裏、こぼれ梅の香合はたしか利休でござらう、
イヤ宗室から出まうたものと、論をしてさへ風
雅なりしが世間一體其頃のありさま。鎗長刀は
承塵より下りず、村正月山も鞘の中に限りて、
甲櫃の蓋は土用干の時より他は明らるゝことな
く、弓の役に立つは田の畔の案山子に持たれて
ばかり、戦争などといふ恐いものは演劇場で見
るのみなれば六十餘州の人氣柔和にして治まれ
る御代のめでたさ、關の戸鎖さで通はむと爺の
小謔うたふ聲ゆたかに、舞ふ袖の伽羅香りて若
衆が習ふ亂舞美しく、さるからに文弱の氣風世
を蔽ひて、三河武士もハッ橋の詮議に業平の音
時を忍び、西國奴も不知火の筑紫と和しげな事
を云ひ、天下おしなべて腐腸の薬に酔はさるれ
ば、詩歌管絃香插花茶の湯に春の日秋の夜は足

らずとして遊び暮し戯むれ明せしが、嘉永三年、
四年と引つゞきて江戸の大火、五年の七月は加
茂川の洪水に京都の士民三條五條の大橋落ちた
るを驚き、八月またしても其假橋さへ流れたる
にぞ是吉兆にはあらずと聞くもの肩を擧めける
が、明て六年の夏六月、四海浪靜かなる中へ思
ひも寄らぬアメリカ加軍艦八重の鹽路を乗つ切つ
て浦賀の港に着きしより急に世間騒がしくな
り、そののみならず、其月十二日、時の將軍憤
徳院様曉天の星と没れ玉ひたるに、唯さへ洵々
たる人々の心は恐懼驚怖の暴風に煽られて安堵
ところなく、目釘竹の蠹蝕をあらため、絨絲の
斷れたるを繕ふなど武士は戦争でも今起るやう
に周章で準備すれば、公儀にても品川の海に臺
場を築き、沿海警備を諸侯に命するなど狼狽た
る傾向あり。當今から想へば馬鹿らしけれど外
國の事情は露下らざる其の頃、眼の球碧く髪の
毛赤く縮れたる人を見れば、缺舌の蠻夷神洲を
覬覦しに來たかと疑猜ひ憤りて動もすれば刀
の柄を撫し、空威張りに威張るが常なりし位故譯

もなしに貴賤騒ぎ立つて、自然黒船を敵手に戦
ふことあらむには我功名すべしと勝氣のものは
亂をよろこび、願くは神風彼等を追ひ返し玉へ
と穩和きものは無事を祈る人さまざまの料簡は
異なれどいづれも優長に遊び居ること平日の如
きは無し。道也は素より心機靈活の妖物、治世
結構、遊んで暮さむ、亂世妙なり、何かして呉
れむ、といふ肌合の男なれば時勢漸く變り行き、
上下の景狀稍動き立つて見て、面白し、我西
村虎吉自ら特める男振、時宜に合するも合せざ
るも關ふことにはあらねど大名の幫間で終るも
厭なり、一度は皮肉にねぢくれし考より乞食
になつてさへ平氣の平左で、世は我儘に送るが
好いば、何を苦しんで營々と朝三暮四の飯桶の
中に男兒の魂魄を打込まむ、身體は初から誰様
かよりの借物物、御用とある時返済申すばかり
の骨肉血脈、それに面倒な義理ちや絲瓜ちやと
下らぬ袋を被せて頭を下げ腰を折り、利を圖つ
ては腦味噌を煮沸し、害を畏れては氣を揉むこ
との要るものか、好た業して五十年を洒落飛す
には如じと思ひし程の我、其後分別が効を經た
か年齢が料簡を老させたか、酔興の蚯蚓のやう
に天日に曝されて大地の上にたれ死も可笑か
らずと、縁に引かれ親切に絆され、一つは又オ

天女を得たる漁夫を羨まざりしが、今は荒事の
木佛のやうに、色も無く艶も無く佳晨良夜を過
すを趣あり情ありと花神月娥は云ふまじと、
故きを夢みて新しきを思ふ癡心到底人去り難き
なるべし。扱も道也は島津侯の愛を得てより芝
の田町に立派なる邸を有ち、多数の男女を召使
へば威勢をさく人を凌ぎて自然又これに取り
入り身を立てむとする者も附随ひ、賄賂を用ゐ
て歸物所御用承はらむと圖るも多く、天晴驛の
利くものとなりぬ。元來虎吉伶俐の曲者、鐵砲
鑄造に幾多の工夫を凝せしも、自らするは設計
ばかり、金を惜まず川口佐野處々より腕に覺え
のある歸物職人を呼び集めて夫々指揮し、一毫
の抜目なく巡檢督促で恩威烈しく行ひ、賞罰嚴
しく施しけるが、職人の習性として懷中に錢あれ
ば酒引かけて酔うての無分別、南濱に飛び北里
に走り込み、明くれば後悔して不首尾を歎き、
或は少しばかりの事に氣負肌たゆまぬを自慢
し、眼付を變へて兎角口論喧嘩などするを、酸
も甘いも嚙み分けたる道也、五分も透さずあつ
かふより、此様な理知りな親方に持ったは我等
が仕合せ、此人の爲に力齧出して働かではと一
人の料簡は十人百人の料簡、皆々必死と勤むる
にぞ、仕事も抄取り細工も美しく、出張檢分の

役人も満足すれば殿は殊更、我が眼は遣はす可
愛奴出来たりと御褒美の言葉ひとしほ深
し。道也が母は日に増し家の運伸び行き今は却
つて京の釜の座に居て名家と稱へられし頃より
も盛んに暮すを充分に悦びて、唯此上は身を慎
めかし、不行跡なきやうにせよかし、再び四五
年前の淺ましき心になるな、くれなゝ人も人ば
威勢よき時魔に魅入るものなれば大切をとり
て輕はずみすな、驕る心出すなと教へ諭す胸の
中、早く良き縁にまかせて身を堅めさせしと
祈るなるべし。されど飽まで我意のほかに知ら
ぬ道也、母の訓教を餘所にし、自由足るまゝの
養澤、私に柳媚び花笑ふの廓に浮れ出して、得
意の義太夫語り出し、喝采の聲を明眸皓齒の妖
物より受けける。

第四

衣食足りて蕩樂起るが世間一般の人の身の
上、賢人殿此に御氣が注げぬか、と叫雲曾て四
角張つた書を讀みし時冷笑ひしが、男は女ほど
外見張られどもまんざら破れ布子にくたゝ
帶、幘鼻褌も眞黒なを締めて居ては寄鴉の梳盛
も未だなかしからず、いっそ不味公が極め相場
千兩の鮫鯨を鍋にして、白魚の小骨も抜いて食

ひさうな澄した女めが箸を其中に突込ませてや
りたしなどいふ事は考へぬながら、黒羽二重の
小袖上げて、縮緬の羽織は紫色の太紐ゆたかに、
黄無垢の胴着、献上の帯、一切身の周り輝しから
すなりては、自然其上の榮耀に、楊貴妃を小間
使に、虞美人は庭の草むしり、飛燕合徳に肩腰
揉ませ、祇王祇女虎少將小町衣通お七お染お
半お園三勝小春有りとあらゆる美人どもを赤裸
にして千疊敷に敷きつめの軟玉蒲團と名け、其
中でおもふさまふんぞり返りて欠伸すること
も、成るならば爲べしと成ぬれ餘計な取り越し
妄想、夢をうつゝに見て居るが愚物の常なり。
道也鐵砲の御用達してより權勢日に添ひ金銀流
るゝが如く手に入れば、初の中こそ神妙に工業
ばかりに心を委ねたれ、頓ては街道下りの苦し
かりしも咽元過ぎて忘れ果て、悴つて来る財の
悴つて出るに任せ、關係ある藩士の武左等を甘
く文なす機嫌取りがてらの同伴遊び、其頃は流
行し目黒の橋和屋、深川の平清、鮫洲の川崎屋、
久保町の賣茶、神明の車屋、金杉の松本、三田
のての字、赤羽の丹波屋、古川の狐と江戸南方
其所等中を浮れ歩き、酔ひてくづれては獨り神
明前の千木箱のやうな可愛らしき家にもぐり込
む時もあり、大勢の駕輿を連れられ馳せて泉夫の

となるべしと意を決すれば、昨日は家に歸ると共に、慇懃たる癡態掬すべきお道が楓葉のやうな手をつきて父様御歸りと挨拶するに満身の愛情か傾ぶけ盡して餘念なかりしも、今日は眼さへかけず、母にも仔細は語らで、腕掛きて思案に耽れば、なまじいに柔しき言葉かくる母を却つて五月蝭く思ひつゝ、心は百二十里を馳せて釜の座の職工場の景色を忍び、魂は五六年前の現をたどりとて扇風器より渦巻き出る風、冷々たる頑鐵塊、炎々たる大猛火、紫の煙りを吐く血紅の溶鐵、鑄型に注ぎ込む途端に沸々爆々たる響き、流星の如く輝きて飛ぶ鐵の火花など見る如く聞くごとく目前に起り来るに、尙氣を鎮めて紛々たる想像を抑へ、左すべし右すべし、此所は斯うせでは叶はじ、其所を彼様して爲すべし、オ、工夫の要るは此所にも其所にもあらで彼所にあり、えゝ其を如何して呉れむ、えゝえゝ尙むづかしきところのありしと、鬼才を逞しくして八方の難關を透過し去らむと勵みぬ。親は名利に一身を没して今しも人情を爐中に打込み、一にも二にも鑄物三昧、文火武火、硬水柔水、送る風に抽く風、煤型に傾型、鉛ほどの小事に縝密周到の考案を費やすとも知らぬが佛の罪なき童心お道は何氣なく歩き來りて、父様小

兒が祖母様に教へていたゞいて縫うた此柿、好う出来ましたる見て下されと、云へど少しも應答なきに尙傍にすりよつて、父様々々見て下されと其柿鼻の先へ差付くるお道を突退けて、思はず知らず大喝一聲、えゝ工場に來て邪魔するなと罵れば、老母何事と飛んで出て、さつぱり譯は分らざりし。斯て道也は遂に薩摩侯の命を受け、昨日の久保町原の辻淨瑠璃語り、今日の鐵砲鑄造師、芝の田町に廣く屋敷を賜はりて大きな工場を取り設け、艶物語りて細めし聲を職人使ふ叱咤の聲となしぬ。

第三

千箇の事、齊しく集る枕頭邊、片刻忽ち周る三四歳、如何ぞ只説かむ夜年の如しと、總て眠を成さざるが爲なり、睡り着するを求む、須らく待つべし四更の天、一枕朦朧猶いまだ醒めず、相思縋に斷じ又誰か連ぬ、夢は作す藕絲の牽くを。とは那邊の詞客が吟破せし人情の眞髓ぞ、寐られず寐られず寐られず、寐てか覺てか見し夢幻影の中、生鐵を溶かして一心生命打込み禁裏へ納めんと大事の釜を鑄にかゝり、今や型の内へ注ぎ込まうとする時、見れば熱鐵は金色の光りを放つて常のやうには紅からず、是はと

晴を定むるに慥に黄金となつて溶け居るにぞ、嬉しや此品あらば彼奴に逢はるゝと沸返りたる中に兩手さし入れて抱ふと其まゝ小判に化くるを懷中になし、工場飛びのけ辻駕に乗り、通ひ馴れたる朱街道と分らぬ鼻唄歌ふかとおもへば此所は久保町原、我前に立開の人伽羅の香をさするに不痛して見仰る拍子、顔合して淺間しや此御姿は涙の時雨ばら／＼と灑しかけ首筋に雪白の腕からみつ、歎歎しつ悲しみ恨む聲は、初金葉中頃初人それより沼津で見し女三條の柳屋が娘のお糸、御幸町の金貨が家のお菊、吳服屋のお紺、染屋のお紺、又戻つて舞妓の玉菊、東歌の師匠の鶴文字、柔和家の松鶴太夫と變り／＼し末は鐵杵れし母人の異見、堪らず逃げ出す後面より恐ろしき音して虚空に響き渡り飛び來る大砲玉、アツと呼びながら地に倒るゝを介抱するお道、父様々々と呼び起されて眼を開けば有明の燈火眠さうに残り、風さへ死せる曉天方の靜かさ、胸を撫て徐に懷ふ舊時の態、あゝ心神亂れ五臟疲れしより下らぬ事か夢に見しと打笑ひこそすれ、腹の極々底の方では昔時は面白く飲み狂ひ歌ひ騒ぎて、春の曙は露香はしき花の梢く／＼りて彩霞に酔ふの鶯となり、夏の夕は月搖りこぼす松蔭に舟を維きて

我大江山の童子にはあらず、おぼく風の此様なもので心飽かずと腹中に冷笑ひながら二ツ三ツ和しき言葉を掛くるにも、年齢をきき生れ故郷尋るやうな初心なことはせず。此道也こそ女殺しなるべけれど相手も腹中で冷笑ふか、果敢しき應答だにせず、女殺しと鬼殺しと談話途切れて舌鋒犀利いまだ交はらず、行燈朦朧として一場可笑からざること傍目から評しなば、はて可笑しや。

第六

何故そのやうに生返事ばかりして我をどうでもあれがしに扱ふか、むづかしい事はひれられど少しは人の話しにも身を入れて聞くべし、但しは汝に假す耳持たず、是は餘所の其様と口説詰開きの時にばかり用立つものと済した料簡きめて是れが天職を暫く許し置くかと、淡紅の色美しき耳朶を引張りて廻れば、お萬ちやつと身を縮めて、悪戯は廢し給へ嬉しうはおもはず、怖やく其上手つかふ口前で幾人を迷はせ玉ひし、今宵あたりも王在さる枕にとりつきて昨夕の虚言を恨み泣く女たしかに此近所のみにて三四人はあるべきに櫻海棠の花を捨てて心多い蛱蝶の憎くや艶もない梨の花を片時の翼休めば

かりに廻るやうな御わさくれ、もとより御前様は誰にも彼にも其の當座を喜悅せんための捨言葉、寒暖時候の挨拶とおなじことに愛嬌を振り巻かるゝか知られど罪になりますぞ、執着し易き女への空情はお萬なればこそ、憚りながら、何とも思はれ、先刻より何を云ひ玉ひし、一言二言は心締め居る姿さへ微笑るゝやうな甘い辭の聞えしが、御前様のやうな隠れない悪性男を相手にして、餘人は知らず羨は眞面目に應接するは厭なり、口きくが厭なり、談話聞くが厭なり、諄々と餘計なこと仰せられずと、御酒も大分過ぎて居玉ふに、身動きなどせずおとなしく休みたまへ御身の藥なり、酔醒めて介抱はして上ぐるほどに好き乳母に抱かれしとおもうて一夜を氣樂に明し玉へと三十男兒を二歳のやうにとりなし、見事に取つて投げた言ひ分。小面の憎い處置する奴、それに指を御へて引込まうかとますゝ圖に乗り、アイ、乳母の云ふ通り坊はおとなしく寐寐すると、乳の邊を探らんとすれば、女突と立つて、何ういへば斯いふ惡徒め勝手に獨り寐の夢の中で巫山戯たまれせよ、ホ、是は御免なされ、御緩りと御煙草でも召上れと云ひ捨て、悠々と去る風情、泰然拂つて憎いほど美し。流星の道也あきれ果しが忽ちにお

もひ返し、此位の女に意を擲されて一夜睡られざるなどは昔時に經驗あり、我此手段を食つて彼を思ひ是を想ひ、心は蜘蛛手に馳り、魂魄十文字に焦れ荒れ、痼癖、疑念、迷亂、腹立、考慮より自然其女の貌ばかり眼の前に立つて眼臉は合すれど夢を成さざりし事ありしが、ハ、ハ、笑ふに堪たる若い時の恩さ、今好い辭をして何で釣らるべきや、頼光の手も此様なものか、粹の皮の虎さまに向つて慮外な仕掛する奴、少しは根性に可愛らしく姿形に見どころあれど生意氣なが嬉しくて憎し、廢せゝ無益な事おもふまじ、快く一睡して海原の果より出る明日の旭日を拜むべしと夜具引き被ぎて眠りけり。貴方に聞きたい事があると、妹女郎のお京が客の近藤を捕へてお萬が詮議。薩摩武士何知るべき、問はるゝまゝに何か語れば、貴方は實のあの方頼母しやお京様およろこびと云捨て去るお萬。これ位の愛嬌にも近藤はよろこびぬ。人は色々迷ふもの哉。

第七

品川楊枝、南品あやつり、遊里會談、もみぢがり、南門鼠がへし、初咄し、紫鹿子など見ても知れかし其品川のありさま、すべて殺

掛聲を高輪の岸打浪音に應さする時もありしが、頃しも秋の最中一天澄み渡りて迷つた雲なく人の氣も爽快しき空合、花は無くも霜といふ世話焼きが爪紅さしてやつて美しい樹々の相に、鳴く小禽の歌清く、誰が家か知らぬ垣の内から外に面出して我が味熟せり此艶を見よと誇るやうなる葉實麗はしく、菊は咲いても咲かないでも淋しい風まだ吹きあられず、日光尙充分に暖な好時節、飲まう、御供いたしませうと未の刻より田町を出たる四五人づれ、神明邊の料理屋に上れば、見知つた顔の婢道也を見るより合點して誰さん彼さんといふを、いや我ばかり親識の妓に來れて飛んだ色男になりすましては、後で新納様に拳に負けた時のしつべいが恐ろしと一番身分の下りし武士の顔を見て戴るゝ横合より、ハ、新納殿はいかい怪氣家と見えると笑ふは近藤、然らば貴殿達も身共も知らぬ奴等を招ぶは宜けれど而したら女子等皆身共の傍にばかりこびり付くであらうが其が氣の毒。ハ、東郷様えらいことを仰しやりますな、柿さんそれでは此旦那さまの御傍にこびり付くやうな氣の毒がらせるやうな新顔といふ。一座大笑ひに哄然て、それ獻する、頂く、お改めと何か埒なく、遣らう、貰はう、喰へ、飲めぬ

かと漸く亂れ、中の悪い父子が寺參りするやうに三絃と離れ、の歌は天井の鼠を追拂ふの功ありと誇る。羽織裏返し被り、煙草盆二つを獅子の上顎下顎に見立てべくくさせる馬鹿踊りは、疫病風邪を祓ふにやと評す。亂暴狼藉滅茶滅茶の果は、南蠻征伐よろしかるべし、それ、拙者の刀を貴殿さしては困る、さう慌てゝはいけぬ、又引かへて東郷氏妙に泰然て居て何を唸つてござる、おこじやう、あれ見やんせさくらじま、すだんばあから月がはつでだ、やれさて其様な歌は朗詠集にもござるまいと汝一句我一笑、分らず騒ぎてお立ちくんと千鳥足、そなたさへすり此方さへ退り、意氣地も禮も無くなつて品川へ飛ばす駕籠、お先眞暗、暮れて天には星影薄し。

第五

土地に名ある相模屋の大座敷に、眩耀きまで點しつられたる銀燭は色慾の炎の恐れ氣もなく立たせ、心魂の調子を狂はする三絃の音耳を聳し、仇めかしき唱歌の聲分別を埋むる賑やかさ、孔子も座に在らば辟易して逃げ出し、茶船に乗つて海に浮けむかと歎息し玉ふべし。眼中あやしき幣間、根性磨れ切つたる藝妓ども、いづれ

も廊の習ひとして、仁義立するゝ唐偏朴と笑ひ、惡遊戯するゝ洒落れたりと責め、賢者か愚と賤み、下らぬ錢つかふ者を阿彌陀より有難しとする、冠履顛倒を當然と心得居る惡魔めらに道也が一連とりまかれて得々と戯れちらし、酔うてますゝ受くる酒杯に邪淫妄語の濁水を汲むで煩惱逢執の惡木に漉漉き、癡氣を盡して各々綿のやうになり、果はお危なうござりますると肩にかけられ六曲屏中に葬送せられぬ。道也は流石に場馴たる曲者、且は亭主分なれば潰れるまでには酔はず、同伴を納めて靜かに退くに此夜の敵姐初めてにして豫て聞く譯名は頼光、仔細を糾せば鬼をも殺すといふ有名のお萬なり。噂されてこそ四天王でも隨者にしさうなれ御顔を拜めば眉目やかに口元しをらしく眼涼しき、しつとりした女、品川には珍らしく萬般内端にて立居騒がしからず、他家の女の、廊下に足音遠慮なく障子がたびしと開け閉し、襖の蔭で此酢もじは甘い不味いのと下卑た事いふ質とは全で變りて、天然の品格高く、愛嬌少し缺けたれどすげなしといふにはあらで言語初々しく、姿か響へばすつきりとした風情、一枚の白牡丹碧玉瓶裏に插されたる如く、是れで鬼も殺す手管あるか、なんのゝ鬼が自分で死ぬるなるべし、

うて男の身に付け居る内は魂魄の幾分かを體に其品に食はれて中々忘るゝなどいふこと難く、又酒にでも酔うたる時は忽ち此狼めに仕てやらるゝが常體なるに、殊更所謂あるらしきお萬が處置、趣味も無下に鄙しからざる思ひ付の袖の内、松葉は御げんを待つとの辻占、曉らぬでは無くて一向關はざる虎吉、其癖に厭ぢや彼様な小利口な女は嫌ぢやといふにもあらず、唯前の夜の行き掛り、當りのつかぬほど稀有にて今までに覺えなきはぐらかされやう、是非とも二度めの本勝負、乙の矢放つて我腕の功名見たきところなれど、此盤頭があるため厭になりたりといふは、此品に釣られて行きしになつては追風にばかり船を出したがる舟子のやうにて餘り興なく、寧ろ此品なくば、見事に屈せられたるまゝに指衝へ引込むこと口惜しく、頼光にせよ金時にせよ其儘置くべきかと打つてかゝらむものを、散々我を颯りて骨なし皮なし役體なし三歳足腰立ち玉はぬ蛭子同然に扱ひしほどの曲者が、濫い手ばかりでは御意に入らじ、少し甘味も嘗めさせ呉れむとの此品が知られど、此所の手に乗つて行かば又々烈しく嘲才坊にさるゝか、但しはべつたりと濃く庄屋様敷しの待遇に逢ふは必定、何方にしても初會きり二度とは來

ずと我を見透して、意地になつて通はせる手と、惚けさせて浮かれ寄らせる手と兩天秤に我を掛けし技量おもしろし、女め中々味をやる、然し又求めずとも縁あらば逢ふ時あるべし、此方から足を運んで向うのおもふ壺に果敢なき夢見る章魚となるはまあ、虎吉の爲ることとなしと、實はお萬を重く見過きたるよりの分別、重く見過きたるは畢竟惚れたる慾日の沙汰なれど可笑きは當人、少しも己が心の既戀に曇りたりとは氣づかずに居ける。夫に引變へお萬は朝に泣て武夫を送り、夕は笑つて商估を迎ふる傾城の身、色を金に替へ媚に人々賣々川竹の流れに浮萍あちらこちらの岸に咲く花の顔こそ美しけれ心は自然濁りに染みて、廓の習慣の虚榮を張り、全盛を競ひ、誰には劣じ彼には勝たせじ、妾朋輩の後に付いて内所の佛頂面見るは厭なり、成らば惣花うつ客毎夜取りて新造遣手若いものにも始終頭下けさせて此里出るまでは暮さむと、性來の負くる嫌より氣の張り強ければ、萬般かしこく人を縛なして太郎兵衛が田地を泰舟一刻の間に失させ、次郎殿が持船何般かを戀の海の水泡と消えさせ、百姓町人武士僧侶達ふほどのもの逃れぬ情の綱打かけて組板の上の肉となしけるが、今まで遂に生命其様へと契りし

男も無きばかりか、愛らしきとさへ思ひたることもなく、唯一概に男は馬鹿ぢやと輕蔑て、其癖習慣とは云へ仕なせぶりしなやかに巧く眞實めかし、濡れ一道の虚々實々、此所を推せば斯くなり彼所を引けば彼様なりといふ人情の機關吞み込むた魂膽手管、頼光とさへ仇名に呼ばれながら、未だく眞實の戀知らずなりしに、善く泳ぐものゝ溺るゝこと虚妄ならず、何した機か道也を見て後物思ひ、逢うた時は左迄とは思はざりしに、歸つて再び顔見せざるに、憎いやうな、床しいやうな、今更我が無禮なりしが恥かしいやうな、斯もせず彼もせざりしが口惜しいやうな、つひでない心地して、其折の茶屋の鳴來し時、過般の方様は御見えなさらぬかと、二度聞いて、是はまた平日に似合はす御親切な御尋ね、と笑はれたも口惜しい焦つたい一つなり。

第九

心に懸るもの、背後の品評、我が思ひの通ぜざる。嬉しきもの、背後にて褒められたる、我が胸を他の汲み付り呉れたる。腹の立つもの、背後にて惡様に云はれたる、深き思ひあるを他の知らず顔に振舞ふ。是等誰しも覺えあきて聖人君子もまぬかれがたきところなるべし。新編

伐にして朝夕馬の鈴の音雲助の大聲を聞馴るればにや、自然妓子共も沈静とした態度なく、宵は夫夜明は他所の人と待遇が遊君傾城の習慣とて、特別此里はあさましく情薄く、引分れ行く衣々の唧もあつさり、昨日はいざ踏み躪らむ五十何驛と勇んで草鞋穿く男を送り、今日は江戸入りちや此驛よりは既う一里少しと悦んで立つ人を送るより、客にも再顧の心なきは常なれば、其冷淡な呑込んで、御歸り合點それ御履物と却つて推出すやうな風こそあれ、階下りながら、又御來臨あれ忘れぬ様に二の腕を一す捻りて後髪を手繰ほどのことするも少し。既御殿山の樹間より群鳥飛んで出で何處やらの鐘の音清みて東雲の空に響き渡り、北風眞に受け木更津へようそろと出帆舟の運轉手船頭が諸ふ聲微かに落つる枕頭、ぐつすり寢たる道也眼を開けば何時の間にか來し、添臥したるお萬冷笑ひ。誰様と夢に逢ひ玉ひて、何程か揺り起せしに少しも覺めず、必死と眠りを貪つて居たまひし、尙も續きを見たいとてか其眠さうな御顔はと切込むを打消し。え、五月蠅こといふな、畢竟は弱蟲の我、餘り面倒しかけるれば叶はで逃る許り、顔あはせたまは昨夜が初めてなるに馴馴しげに持つて來る文句受取るは厭なり、汝の

言葉など眞に受けて一々返答するは馬鹿らしと憎態口きながら柔しき笑ひを見せ、少しひそつて昨夜の處置を打設め恨むだやうな嘲つたやうな裏に情のあるやうな云ひ分。どうで御前様の達者な舌鋒には叶ひませぬ、昨夜の様に又逃げて行きませうかと云はば勝手にしやれと酷いこと宣ふべし、此處は何と申してよいやら教へて下されし、ハ、さればさ、白髪が生える頃まで篤と勘考してまゐつて諛妄語のないところを申しませうか。も少と早く。さらば分別の出時、四十になつた頃。も少と早く。無分別の出時、付煙草の二三服も貰つてからといへばお萬急に調子を變へて。坊ばよくだゝを担、御眠覺の御菓子に足やろかと一服點火て遞與して、おとなしくしやと拾言葉、今度こそ愈々綺麗に愚にされたれば、随分男自慢腕自慢の虎吉も押へた雄子にすりわけられし心地して、流石にたゞの戲言ならず、忌々しきといふ感情を眞に動かし、立つて退かむとする女引轉かし、當意即妙、此所は何と申してよいやら教へて下され。ホ、鸚鵡の生靈にでも取り付かれたかへ、と尙茶にするを、強い顔して打つて掛るまれしつ、此美しい鸚鵡めに惱まれて、と癡話狂ひ今賦の乗掛る室外より、楊枝つかひながら逍遙してか、近藤

の聲無器用に。オイ、と呼び掛くる途端、障子ががりりと、轉ぶが如くお萬走り出て吃驚する近藤が胸倉を捕り、貴方が悪い、彼様な怖い方を妾にあてがうてと、こづき廻せば薩摩半人に譯は分らずまごゝなす内お萬いづれへか去りぬ。おもへば近藤はお萬が臣下とされける。日高くなりては各々別な情で歸るさの道すがら新納の獨り惚けるも可笑く、近藤が何か知らずに道也を驚るも再度の遊びの種子なり。かくて武左等に別れ家に歸りて道也衣服着替る時不圖心付けば、左りの袂の其裏に縫つてありたり銀插頭。

第八

誰か此やうな淺薄な事を相思の種子として、それに心を離し難く只迷ひに迷ふものか、と道也銀釵を取り捨てんとしたれど、人の見て由なき疑念を掛け仇口きかむを懼り、密と小机の抽斗に仕舞ひ置きて、知らぬが如く身をもちけるこそ殊勝なれ。大凡諸譯入り組んだる色里の女どもの物品を餓ること恐ろしき手管の一ツに決して無主意にはあらず、是な情の送り狼や或老人の評せられし道理、手拭一筋なり、伽羅一片なり、乃至象牙の小楊枝一本なり、貰

天晴の身分、錢座もおなじくその預りなれば人皆勢利に走る世の習ひとて喋々しく管待されたるものなりける。朱座の佐藤も其類にて又一廉の分限者、派手々々しき生活に萬人の眼をそばだてさせ、殊には普通の商估とも違つたる格を有る家の事故おのづから重く取り扱はるゝ身分のものなりしが、俄仕出しにこそあれ西村道也が風評目覺ましく、且は爲ることも似寄つたる業體、此は公儀の御用達のやうなもの、彼は薩摩様御用達のやうな者なれば、何時しか同じ流れの相親しみて、折ふしは行き通ひしけるに、道也は又世路の辛酸人情の向背を心得たる男、己が孤立を助けて地位あやふからざるやうにせむには家柄良く身代確固したる者等に交際ひ置くこと肝要なりと思ふより、話頭をも成るべく新しく面白くし、且は自分の才氣と爽快したる性質を呑み込ませ、事あらむ時の補助とせむと仕掛けて、萬般拙いことの無いやうにすれば、老人の佐藤悉皆手の上に乗せられ、律義頑固の心より道也は當世に珍らしき才物と蔭にてまでも評し、少しは其様の男と我が交りの深きを他人に誇るやうな氣味もありける。久しく御無沙汰いたしましたれば御詫がたら且は御閑暇にも御座らば色々の御話伺ひたうて参りましたと

堅い挨拶するな、イヤ左様眞面目に御挨拶なされては小生こそ御無沙汰の謝罪を致さればなりませぬ、今日は宜こそ御來駕下されました、幸ひの閑暇でござりますれば御緩りと御話し下されと言ひつゝ、それ御茶それ御菓子と慇懃にもてなして、別の座敷に近藤がばくりくゝと退屈な顔を煙草の煙りに埋め居るは忘れし如く最と長閑にも、先日御話しの俊頼卿の色紙は古筆が如何ななしましたか、小生此頃手に入れましたる子昂が駿馬の一軸唯今御目にかけませうほどに何うか御鑑定くだされたなど悠長な事を老人相手に語り居る、彼方の室では智慧のない近藤、齧結つた達磨のやうに寂然と危坐して、初めは床の花を眺め、置物の獅子を睨み、中頃は襖障子を見廻し、譯も無く身邊を飛ぶ蟬を捕へたりなど下らぬ眞似した揚句は、火鉢の灰を綺麗に平均して見たり、火を埋めたり、掘出したり、鼻糞をつたり、顎を撫でたりしつゝ、此類穢の二日目に丁度遊びに行きしが拙者の顎なばりくして居て山葵卸しに似て居るなどと彼奴が申したによつて其後は丁寧に毎日剃らせて此通り滑して居るなどと詰らぬ事を想ひ、ア、道也め一寸というて何時まで出て來ぬのぢやと急驟て癩癩を起しかゝる時もある、又道也の方で

は頻りに佐藤と靜かに應對し居る時もある、新納様が御來臨になりましたと取次の言ふにぞ、えゝ近藤ひとりでさへ邪魔におもふところへと腹では厭ながら佐藤に會釋し、少時御免を蒙りまする、まあくどうか今日は御ゆるりと言ひ捨て新納の方へ挨拶に行かむとすれば遠慮深きは餘の功、近藤とは違つて察しよく、いや我等は何の要事もなき身、いづれまた伺ひませうほどに今日は是で御暇といたしませう。それでは何うも餘り失禮で。いやゝ御關ひなさるな、然し今日は實に我等も最少し御話し致したいところなれば斯う願ひたし、來る二十日は我等極々の閑でござれば夕景より何卒御遊び下され、粗末なる御茶さし上げたたく且は御高談も伺ひたければと、豫ての考へにはあらざれど其場に浮びたる分別、中座にして歸るは自分も主人も面白からぬものなれば其を不好からぬやう爲すため思ひついたる招待。是はまことに有難い仕合せ、然らば當日は萬用さしくりまして御言葉に甘えまして是非參上いたしませう、今日の所は幾重にも御高免、と漸く送り返して、來て見れば新納熟柿の如くなり居て。道也行かう行かう、汝は怪しからぬ罪人ぢや、委細近藤から聞いて知つて居るぞ、さあ行けさあ行けと號

近藤など過ぎし夜の面白さ忘れかれ、袖の移り香に床しいこと思出しては堪らぬと互ひに戯むれ合ひて、何気なく道也を連れず二人打揃ひ行けば、お萬それとみるより近藤を捕へて散々毒づき。何とて御友達甲斐もなく、虎様を連れて来ては下さらぬぞ、今宵は飽迄も貴公の御座敷の邪魔して邪魔してお園さまにはお氣の毒なれど頼母數ない御方ないぢめれば氣が済まぬ、お園さまの身になつても考へて見たまへ若しも今宵先日御連中残らす揃うて御來臨の中に貴公ばかり抜けて居玉は、何れほど口惜しうおぼるゝことか、お園さま然様ではござりませぬか、何うして他の方を其儘置きませう、屹度お袖さまお梅さま若しくは妾の御客さまなりを恨みに思つて存分責めさいなんで上ぐべし、それも察せず虎さまを出し抜いて御來臨なさるやうな貴公、戀には連が邪魔と濟して居らるゝか知りませぬが餘りに其では酷い御心意氣、お園さまは御嬉しからうがと言へば、お園までが此方の身方にはならで。いえ、嬉しうも何ともなし、友達に人情の薄い方に實のあつた例なし、近藤様のやうな人が多分奥様に隠して私と一人で面白い芝居を見に行き、美味いものを模の蔭でこそと賞翫する質で居らせ

らるべし、ホ、此様な方は妾は犬の嫌ひ、お萬さま二人で手ひどく容赦なし未練氣なしに責めたてゝ進りましょと、猪口を下にも置き得ず酒を飲むでも終ひ得ずまじくと手持無沙汰に聞き居たる近藤の肩を突けば、腹の減つた鍾道のやうに頑固無骨の男開口して妻け返り、全く惡意あつて虎吉を連れて來なかつたでは無しと問拔の云ひ譯を爲しけるが、其夜は酒宴も道也居れば賑やかならず、冴々とした遊びもならねば素より温平として味ある巧者な事の出來べき柄にもあらざるより何となく下らぬ光景に時を移し、曉天の鐘に急かれて馬鹿な面を歸路の海風に吹かれける。世の真相を知らざる人と知れる人と何れが良いか、世の眞狀吞み込むで委細合點つかまつり、他の行狀言語の裏の裏底の底まで承知いたし、弘法大師は入定して忍冬賣りとなりし、日蓮大菩薩は鈴細工の刀を三段に折つたりし、平田篤胤は筑波山の圍ひものより神宇の日文を貰ひし、聖者も學者も其様なものでござるわ、何時往生するとか天の迎ひに引取らるるとかいうて其通り死んだ古人は皆毒藥を御自服なされたものでござるは、仁義だてして強がつた忠臣孝子は皆偏人癡物、恭將桃好きで女房子をも寵はぬ白痴と同じ事とござるわ、人間

の眞實に好きなのは色食ばかり、釋迦も孔子も與太郎甚六と澤山の違ひは無いに極まつた道理、論は要らず生命五十年面白くして遊ぶには若かじといふ奴等あまり良い男でなければ、又何にも知らずに、長いものに巻かれたいものに呑まれて馬鹿正直一方自分ばかり心付かれど自然好物の踏臺となり山師の御先に使はるゝ人もあまり良からず、道也などは世間大方心得た曲物、さればお萬が心を思ひ過しに汲みて誤りしが、可笑きは近藤、お萬に使役れて閑を伺ひ道也を音問れ、コレ道也其方が爲に我は恐しい目に逢つたり随分此所は奢つて貰つても良いところなれど、無錢でも話さればならず、聞くべし此様いう譯なりと、一部始終を物語り、彼奴が餘程迷うたる様子、此罪作りめと、是丈の言葉は近頃覺えしなりけり。道也は腹に可笑がりながら好い加減に、さらば此次には是非お同伴いたすべし、小生のやうな男が流行つてまゐりましたと見えます、と戯れける所へ、朱座の佐藤様が御來臨になりました。

第十

金座の後藤といへば其頃は誰知らぬものな、威勢さながら大名のやうにて町人ながらも

やうなれど實は連鎖の環の一つ一つ離れ居て又連なり居るとおなじく、譬へば所見たつぶりの色眼使はれて可愛しと感じたる一時の情は其丈の環一つなれど、其環に掛りて又次の感の環はあり、又其次の次もありて戀と名の付いた一條の長鎖を成し、其連鎖中々斷れず五十年も續らば未遂ぐる戀といふべく、僅に一月半月にて絶ゆるならば浮氣といふべきなれど、假令浮氣にもせよ可愛と思うたる感じ一つ起らば直に夫限では消えぬもの、快心ことのみならず胸惡なこと忌々しいことも其通り。道也忌々しさに廢ばせ好い廓通ひして、行けば振られ、振らるれば忌忌しくて又行きつ、段々逆縁の連鎖の長き線を靈臺に曳きて愈々止み難く、騎虎の勢に我身我心の自由にならで、馬鹿々々しければ廢めむとおもふ事も無きにはあらねど自分の癪癢に追はれて、酒に亂れし夕暮も茶に淋しき黄昏も行かざることに無し。木造の辨天にさへ是程足を運ばず利益の無い筈はなかるべきにお萬の執拗なは、何うした機會から斯う酷くなりしか遂に和しい言葉さへ掛けて呉れず、戀にはあらで虎吉益々忘れかれ、今宵も相模屋の奥二階で思ふ敵ば座に無けれどお園始め誰彼相手に可笑く飲みて坊者等の眠氣なるをそれ眼覺せ是を見よと、

懷中紙取り出し、福祿壽星沙門など切抜いてやれば、今年十一利發者のお蝶が手の甲に立せて躍らするを、出来たと譽めて、さあ是からは愛度氣ない藝盡しといふに、御褒美は何と先廿えながら、鳥さしの影を換骨脱胎の不破名古屋假名括めて兩手の働きに二人の姿を障子に現したる藝妓のお吉。蜜柑を兩輪違に切り損じて笑はれたる分別顔の二助。我等藝に道具は要らずと高慢しながら猫のいがみ合ひを真似たる聲おそろしく一座を驚かす若いものゝ清吉。口笛で黒髪を歌うたるお箱婆。負けるものと箸を杖に、猪口を笠に、石堂丸大出来のお仙女郎。徳利を尺八の眞似と見せて虚無僧でするかとおもへば又候食ひ拔の二助めが何の事もなく一陶飲むで仕舞うて、斟し呑も藝でござる、とは汚ない汚ない、妾のは綺麗事と遣手が顔中に四本の煙草管を野田の藤とぶら下げれば、哄然と笑つて皆皆可笑がりけるが、既よしと止めて虎吉何か云出しさうなり。

第十三

既う廢し／＼と笑ひ騒げる皆を制すれば、群衆の一聲に靜まつて、彼方へ行けと云はるゝまゝに引退り行く中、お園ばかりを少時と呼び留め、我最早今宵は歸るべき間今少しの内閣話などして遊び玉へ、茶を飲むにも獨りは餘り興なければと、平日に似ぬ淋しい言葉を聞きも終らず、此夜更の御歸り道、潮風肌を騒しう當らば御身の毒なるべし、想ひ遣るさへ醒際の駕籠の中寒さうで綿毛立つ程、可厭々々、お歸りなされては厭なり、妾も丁度今宵は面倒な御荷物も持たれば邪魔にされて追ひ出さるゝまではお相手すべし、それにしてもお萬様は何をして居らるゝことかと、立つて喚びに往きにかゝるを。まあ打捨つて置くがよし、厭なればこそ少も我傍には寄り付かざれ、其を強ては此上猶厭がらるゝべければ、此方の厚意の世話は嬉しいが彼女に彼女の自由になさせて置くべし。虚言を御吐なされ、御前様を誰が厭がつて済むべき、お萬様萬々一御前様などを倉略におもはば男冥利に盡きて雁鴎鼻缺の醜男に七代女房とさるべし、惚れて／＼惚れきつて、恥かしく氣まりの惡さに陰では御前様の事ばかりおもひながら面前へ押直るが難く、此所へ来るのをばにかむで居る娘らしい料簡、妾ならば突然襟首にしがみ付いて、雷が鳴らうと津波が寄せやうと此人は離さぬと思ふさま汝を窘めて遣ると、ゐなれど、木だ何いうても年の若さに意氣地の無い處置、其

き立れば、さあ来た又来た貴公も御來臨か、近藤さまも御來臨になつて居ります、是は誰でも無賃でも行かではならぬところ、駄いで御笑ひなされうと儘よ、道也随件いたしませう、と酸漠には逆らはず、欠伸の涙を拭き居たる近藤に、御退屈さま其代り勢揃ひ斯の如しと新納を引合はせて三人景氣よく、轎は宙を飛んで乗込む香國百花城、扱も才子の胸の中おいそがしい事。

第十一

そもく口説は偽りなり、大盡すたれて仁義だての詰め開きありと粹めが申したりき。眞實の戀には色道四十八手心得たものも手の無くなるが常、假令戀といふほどにはならずも可愛らしとおもふ人には智慧も力も呑まれて仕舞ひ、其前で己が伎倆をあらはし難きこと譬へば名醫も我兒の病氣には藥劑與りにくきが如し。何うした事かお萬傾城にあるまじき戀に身を食はれて心弱くなり、今日こそは定めし道也を散々に搔きのめさむと玉の腕に縋りを掛け言葉の針先するどく男の骨髓を衝き動かしにかゝるならむと近藤新納の豫想にも似ず唯温雅しき生娘のやうに一座をも遮つては取りさばかで、肩の間のびやかに口元のあたり嬉しさを見せたるばか

り、宛然遊廓の者にあらぬ態度舉動、是が前の夜は我を責みし女かと近藤不審を起し、横眼に道也を視れば是は何の變りたる様子なく、殊に打興じて酒に狂ひ三絃に浮れ、酔くも眼中に女を容れざるやうなり。頗て座敷も退て各々別れ別の間の中、新納は夢に櫻島の枇杷や齧らむ、近藤は囁語に天福の音をや立らむ。道也ころりと横になつて優雅な風をこそ示せ、腹には此しれものめ、何とでも仕掛けよとおもへば自然冗談口もきかさず話しと途切れたるに女もまた冒頭の一句に舌鋒千鈞の石より重くて、白け渡りたる此場の始末何とつくべきか分らざる折ふし、屏風の外にて簞笥の鈺の鳴る音するは、他の嫖客の獨り寐を怒りて喧ましき事かاند云ひ出したるを一寸行て宥めてと此方の嫖客に知らせざるやう知らする新造の機轉なれど、其様な事は十六七の頃より承知の虎標、熊と皮肉に何か音のしたやうなと半可を云へば此耳には聞えませんだと濟して後はまた言葉なし。堪りかれてか外よりお萬を呼び出しにかゝればお萬ついと立て少時して歸り来る間、道也既に眠りついで埒なし。是はまあ何うしたものだ。夜を晝の廓も丑の鐘陰々と響き渡る頃物音なくなり、鼠の皿小鉢にかゝるのみ齒かに聞えて

第十二

遙なる按摩の笛も消え行く淋しさ、遠州行轡ぼんやりと枕を照し煙草盆の火入の灰も冷たうなりし時分、喉の渴きに不圖眼をさませば酔くも道也無人島の王様なり。流石に少し忌々しき心地するを窺かれんと夜具引被つて、匂にある通り他家に寝て寢そびれし夜の長さを今宵知るとかと自ら笑ひつゝ又眠りけるが、曉方起るに又一人なり、然も歸り際荷情なく、聲ばかりして送つても出ず。是に痾癰起つて追掛々々二夜三夜通へども益々情なく、譯の分らぬ事なりけり。振られて振り捨てられて、散々情なく等待されて、虎舌痾癰の募るに達れお萬が面影忘れ難くなり行き、男の意地とて此儘に止めむことおもひも寄らず、切りと通へば、新納近藤は譯も知らずに、夫りやこそ道也も戀には脆くて頼光が酒盃の中に盛り込まれ見事兇でと殺されたりと痛事可笑しく、えゝ忌々しと、他人の談話さへ痛からぬ腹探らるゝより瘡に觸つて粹には似ず焦れけるが、人間の忘れ難きは快心ことと胸惡きことなり、可愛き奴と忌々しき奴なら一つは順に働く情の連續、一つは逆に働く情の連續、情といふ者其時限りに起り其場だけに滅するものゝ

外に出た事云ひかけられてお園何と返辭に苦しむも道理、大森の源七といふ素封家お萬が長き馴染客にて身請の相談いづはりならず、然も彼方の座錦にて、今長唄の御自慢聲張上げて、安宅を歌はるゝあれゝ彼人様ちやものを。

第十四

生意氣な、半可な、憎いやうな、皮肉な、情の深いやうな、虚實不分明の言葉は鋭い舌で演べたてられ、お園底の底意を汲みかれて返辭に苦み、唯茫然と道也の顔見詰めしまゝ黙つて居れば、虎吉もまた二の句は吐かで寂然と吸掛けし煙草を空に灰となしけるが、何時までたちてもお園答なきに、道也は俯伏いて曇り聲靜かに。我今までの處置盡すて穏和しければ諷か酒落かと思はるゝも無理なられど、さりとては情なし、假初にも男が異な事云ひ出して唯それな一座の笑ひばかりに爲すべき歟、汝までに我實情なき半可と見られては殆ど立つ瀬なけれど、返辭さへ爲て呉ねばつくゝ見限りたるものなるべし、半可には相違なけれど半可が迷はぬとは極らず、嗚呼我が言葉を聞かぬ耳に納れむとせしは悪かりし、然し思うても見て呉れ、成程最初は我も随分無理を理に通したしと思ひし

が、今は自分が責められて戀とも戀はぬとも分らぬ境界に落込み、寢ては夢覺めては現と昔の人の云うた言の諺でないといふ事此頃知りて唯朝夕に忘れ難きは彼女、厭はるゝ身の斯うでも無かつたら厭はるゝ事もあるまいと、虎吉が虎吉を惡むほど迷ひしは少しは残念のやうな心地がして、折節は、えゝ人われに難面ければ我また人に難面く爲し、村田屋へなり何處へなり此處の近くへ押上つて面當充分にして呉れうなど馬鹿な考へも何處からか起ることもあれど、又矢張り未練に引れて通ひ来る足の先餘所へは向かず此處へばかり、大凡幾度來たか知れれば餘り人の見る日も口惜しいと腹でおもふ事の無いではなけれど、其見榮も恥も無くなつたは、お園様、愚癡めいた此様な事ならべたも今までは覺えなく、又性來くさゝした事は大的きらひなるに、變つた男になつたも誰が爲、さあ是程に迷つたを自分で快よう忘れやうばかり、思ひ切らうばかり、否せめては我が心の眞實の萬分の一をあらばさむばかりに頼むことを、耳つぶして聞いて居らるゝは些情無き過るやうなと、天晴釋迦が來ても茶にしさうな利發男が愚に返りての繰言、眼には怪しき水を湛へたるにお園も動かされて。まあゝお待ちなされ聞け

ば聞くほど御前様がいとしくなつて情の分らぬお萬様が憎い、萬事分り切つて居らるゝ御前様に夫程にまでおもはれて知らぬ顔の良う出來たもの、おまちなされゝお前様は綺麗な事を仰しやれど餘所に聞く妾がそれを左様と唯仲に立つことは出來ませぬ、今お萬様を引張つて來ませうほどにと立にかゝる。いや連れて來ようとして來はすまじ。來なければ力づくでも引張つて來てと急性がさつた女、障子からりびつしやり、廊下行く草履の音さへ忙しく、お萬を呼び出して、突然何故に虎様の座敷には行かれぬと囁みつくやうに云へばお萬吃驚りして躊躇ふところへ。お萬さま汝は好い度胸、あのやうなお方を袖にして能くも商賣の出來るもの、妾は此年になるまで其様の好い譯して身の立つ法を知りませぬ、少し教へていたゞきたいの、今も今とて虎さまの話を聞けば聞くほど、日頃仲の好い御前なれど憎うなつて堪らぬ、さあゝ澤山聞いて貰ふ話があるほどに妾の部屋まで一寸來て下されと、酒には酔うたり心安立、妹を叱るかなんぞのやうに厭味交りの毒口きいて手を引き立てつ無理無禮、短兵急に引き込めば、迷惑さうに連れられながら。左様云はるゝは無理なられど是には段々譯あることなり。

所をまた察して可愛がつて御遣りなされても罪にはなるまいに、今のやうな癖みは仰しやらぬものなり。ハ、嬉しがらせば餘り野暮に聞かせるものでなし、汝の言葉は正實にして若し喚んでもお萬來ざる時、憎いお園めが餘計な誠なつて我の心を玩弄物にし居つたな、恨ば覺えて居し出世の時に怪を付けて立身の階子踏み損れさせて呉れむなど悪い噂でも下らなく我が口に吹き立てられなば、互ひに妙ならざるむに、其様な事は置いて斯う心安く交際ひし甲斐には眞實を話して呉れ、愈々お萬は大森の源七といふに明日か明後日は請出されて御新造様と侍がる身となるに相談極つたか、仲好い同士知らぬ筈はあるまじ、さあ此虎吉、女と見て汝に頼むほどに悉皆隠さず話して呉れ、どうやら敵役じみた云草なり又其を聞ても何の要らぬ事のやうなれど、我も男なり酷く振り付けられたればとて満更憎いとおもうて今までは通つて来れば、お萬が出世をこそ悦べ何うの斯うのと厭味を云ひたきにはあらず、といふのも灰汁の抜けない臺詞で矢張意味が知られど、そも／＼の初めより随分雨に濡れ風に吹かれて、星暗く雲亂るゝ夕、息白み霜滿るの曉天、迷うて通ひ、悄然で歸りしも幾度か、遂に一度の和しい言葉さへかけら

れず、つく／＼思ひ廻して、嗚呼最う厭がらるる面を厚皮にも五月蠅く見せに行くには當らす、前の世の敵同士でもあるか能々の因果で嫌はれれば嫌はるゝほど逢ひたいとは何ういふものか、初手逢うた時に異な機會から氣障を云ふて、夫から怪しくこぢれた縁、到底面白うなるは望みなければ責めて快よく酒吞み交すぐらゐの事は成らうとおもふに、来れば来るほど段々不味うなつて、然も大森の源七といふ深間の有つて我等は鳳凰の傍の旅鳥と見るゝといふことまで聞いたれば、是非に思ひ切らではと自分で自分を叱つたことの無いではなけれど、憶ふより尙それに惹かれて又今宵も厭がられに來た仕誼、幸福に汝達が和しうして呉るれば少しは慰むやうなものゝ、今の如くに、我を慰めむとの親切ながら嬉しがらせを云はれては又却つて迷ひが強うなつて悲しいやうな心地がする、というたら男兒らしくも無い阿呆なと笑はれるか知らぬが迷へば此様なもの、少しは察して呉れ、ハ、我ながら餘り愚癡になつたが然し最うお萬が大森に行つて仕舞へば泣いても笑つても是つ切り、さあお園様後では澤山我等の馬鹿さを笑つて貰はう程に愈々お萬が大森に行くに極つたか其日は何時か教へて呉れ、今夜も彼方の座鋪

に來て居るに儘に其源七といふ浦山しい果報男であらうが、それを聞いて何にするとおの思ふか知らむが、さあ此所が後で澤山馬鹿さを笑つて呉れといふところ、全くお萬目出度く請出さるゝに極まらば、勿論此後は顔見る事も物いふ事もならぬに唯是なりに止むでは我寢覺あしく、不仕合せの仕合せには共寢の夢結んだこともなく、殊には其が又源七殿とやらへはお萬が心の證據の一つなれば我其源七殿に逢ふに仔細はなきにより、彼女が其情人に面合せて我が初めよりの恥を語り、お萬が我に難きも其人に厚かりし故と天晴泥の中に居て濁りに染まざる心立の美しいをあらはし、且又我お萬が身元になつて嫁入道具も見ともなく無い丈はして遣り、責めては今まで幾度かお萬に厭な思ひさせし罪も混し、我が眞底我慾を捨て唯々可愛者の爲ばかり計るところも顯したき願ひ、そして此戀さりと止れど少しは思ひ切りも良かるべしとの考へ、お萬とは仲の極々好い汝に其事云ふは直接では聞いても呉れまじ話すも難しとおもへばなり、さあ後で馬鹿さは笑つて呉れ、源七とやらが方へお萬行くにきまりしならば其通り正直に色氣なく話して呉れ、源七居るなら隠さず

遂ぞ爲たことなき苦勞といふものゝ味を覺えた
 知れぬに人の氣も知らぬ顔勃然とさせて不機
 嫌に御歸なされては何處に妾の立つ瀬のあらう
 ぞ、今までの處置振り随分小癢の女めと御怒り
 なさるゝは御道理ながら夫には云ひにくき譯あ
 りて態と、然も自分で自分の氣を傷めながら皆
 態とせしこと、其苦しみも察して下されいで粹
 ほどにも無い御前様が御園さまに云はれしは何
 事、染々と話し爲たこともない方に身を浮べせ
 る支度して貰ふほど意氣地なし肚腸なしの女と
 妾を見られてか、よしや妾の胸は御存知無いに
 もせよ萬といふは馬鹿な奴にて我を振つて振
 り通せし先の見えぬ女と方様に思れなば未だし
 も、枕も交さぬ人の世話な良い氣になつて受る
 やうなものと思ひ召されたが餘りといへば無念
 で堪りませぬ、左様なさけない者に見られては
 既う一か撥か何うで此の様な蓮葉の妾に長う御
 目かけては下さるまいが、まあ正直に有丈けの
 胸の中聞いて頂いた上にて綺麗さつぱり御愛想
 づかしなら御愛想づかしを男らしう云つて貰ひ
 ましよ、大森の小森のと乙に搦むだ驚嘆すち
 りもぢりした御言葉で宥めらるゝは、大人氣な
 し、但しは斯う粗傲に打出したを、淺間しい賤
 しい流石に品川は下卑た風情と厭はれて逃げら

るゝかは知りませぬが、斯う切り出されて御逃
 げなされては些男振りが下りませうかと夫が御
 氣の毒でなりませぬ、さあ御歸りなら御歸りな
 されと初めて吹き出す本音靜かに烈しく、一正
 一奇の物云ひ振り侮り難きに、清しき眼のちい
 とと活々と氣の張りを含めば瞳の光り一しほ麗
 はしく、絹絲のやうな鬢の後れ毛ほつと紅くな
 りし顔にかゝりて婀娜めかしき趣き餘りある姿
 今更憎からず、お園に撞き倒されしまゝ起きた
 れば居すまひ自然崩れたる道也が裾の端を膝の
 下に引布きて其癖男に脊中向けつゝ、つんと濟
 せし容態に脆ものなら謝罪で降伏すべきなれ
 ど、此方もさる者。男振りは此位下つたれば此上
 の心配は無用なり、又そもゝの逢ひ初めより
 遂ぞ爲た事の無い苦勞を爲たとか、それはいか
 い御造作な事嬉しうも何ともなし、散々に闘ら
 れし上今となつての殺し文句、いつそ難面けれ
 ば難面いで是が性の合はねとでもいふものかと
 諦めもすべけれど世辭が愛嬌が左様いふ事云は
 れては腹が立つ、氣の毒ながら其様な臺詞は餘
 人に賣つて嬉しがらせよ、眞實より出し我言葉
 眞から底から汝の氣合を面白う思うたが此方の
 迷ひで酷うされても、悪い心持ばかりはせねば戀
 に餘りて汝の爲ばかりにお園へ話したことをす

ぢりもぢりした厭味と聞かるゝほどに此我を輕
 蔑むで見られたは無念なれども仕方なく、一つ
 は却つて枕を交さぬ人の世話な良い氣になつて
 受るやうの容つたれた根性は持たぬと判然いう
 た其根性に可愛さが勝つて見捨かれ一旦思ひ切
 った煩惱も亦起つては來れど、此所引きとめて
 の御愛想が氣に食はぬ、愈も醒めた興も盡きた、
 己が面の美しさに絆されて今まで通つては來ぬ
 は、可笑くも無い、高尾薄雲とて這面に何餘の
 價があつたか、既うゝ何も彼も知らぬ、左様
 ならば随分御健勝で首可愛がる客衆をたらしや
 と、すいと立つ。遣らぬと留むる。ところへ慌
 ただしく源さまが御歸りなさるというて困りま
 すと呼びに來れば、お萬柳眉を動かして、彼
 なのも勝手に歸して仕舞へ、と罵しり飛しなが
 ら堰き来る口惜涙はらりと注ぐ道也が袖の上。

第十七

大森の源七空巢に獨り居の鳥となつて鶉を尖
 らせ、お萬何處へ行つた油買ひにか茶買ひにか、
 と悪い洒落を吐けば機嫌取られて若い者又け
 たたましくお萬様と呼びに來るを、夫どころで
 は無しと捨てゝ置いて道也を取り留めむと急れ
 ば、髪も亂れ氣も亂れ身嗜みさへ關ふに間なく

第十五

女は和しさが持前ながら、路花塙柳の色を漁る客等の冷き心と、黄金白銀の利を貪る抱へ主が燃る慾との二ツに内外より責め立てられては、水火に鍊られし鐵の如く折ることも曲らぬ根性に大抵の者は化するが遊廓の常態、お園とても生れ立より莫連にはあらざるべく、十二三の齡頃は一寸した事にも兩耳紅くして袖を屏風に羞かしさを隠す娘の風情の無いでは無かりしならむに、身は泥に喝々魚となつて、満面穢汚に慣るれば、自然恥に萎まず見榮に關はぬおぼすれと變じ、有つて生れた氣質の中の悪いところばかり培養を得るより増長して、我儘烈しく我意のみ通したがかり、邪も非も論ぜず斯うとおもうた事を斯うさせずには置かぬ女と他にも云はれ自分にも許して、道也が泣言につくく憐れを催せしより、急にお萬を引捕へ、尾に尾つけて虎吉が情の深き事、確乎とした料簡ある男なる事、戀には脆くて迷ひは粹だけに切なる事、迷ひはしながら無法はせざる事、自己の爲よりは他の爲おもふ事、それほどの戀に到底不成と見て綺麗に忘れむと悲しくも考へ定し事など半時も述べ立て。さあ是をお前は何うする所存

か、左様ならば左様と濟まして居らるゝ覺悟か、源七様も男振り好く、少し悪いところは見ゆれど立派な大盡、きりとて彼方にお前が打込んで他の客は末無の川ともなれ此方は夫等の云ふことと聞く耳なし山、登りつめたが其方の不運と胸を据るほどに素人らしく、大昔の傾城らしく、頼光とも譚々負うたお前が惚れてはまさかに居まいに、虎様をまあ何するつもりか。勿論ちらりと聞いた身請の相談、眞實また足を抜いて大森に行く氣ならばお前も餘り意氣地なし、何故行きかけの駄賃名残りの一調べに虎様を甘く緩なして、他所に移されし名木の後まで香を慕はるゝといふやうには爲ぬ、日頃は妾より年こそ下なれ智恵賢しうて抜目ないに右も左りも見えぬ仕方、好い客がつけば慢心がついて其様なりしか知られど、人を酷くして好くは酬つて来まい、妾なればこそ虎様の話しを聞てもまだ／＼お前を品目にして思へ仲の悪い人かなんどもに聞かれたら何のやうにお前を悪くいふ事が、随分妾をお前の向うへ廻しても恥のかゝせやうな知つて居るが、一體はから何とする考へか、つくづく氣が知れぬと話す最中に、お萬様／＼と呼びに来る。二度三度今行くと追返へして又五月蟬呼びに来るな。えゝ面倒な、耳は持つて居る

第十六

一度聞けば分ると又追ひ返して、膝を進め。然しまあお園様斯ういふ譯を聞いて下され、と云はむとする口を止め、宜い妾に云ふには及ばず、今歸るというて居る彼方へ行つてから云ひ玉へと無理に引きすり虎吉が間に連れ込めば道也今しも羽織引か立出むとするところ、お園か見るよりお萬には眼も掛けいで、お園様御親切に有難し、御禮はいづれ爲る時あるべしと莞爾やかに笑ひながら二人の傍をすつと、塵抜け。今宵は更けたり、最一度は来るものと利變な人に踏まれた通り又来るものとして歸るべしと、苦い事云ひ捨て行かむとする袖離さじと絶るお萬。えゝ氣障な演劇をするなと振り拂はむとする道也、お園素早く、此男めも強過る、と力任せに虎吉を突轉がして襖しめ切り去りにける。

妾の所思少しも聞かずして遂に歸らむとは餘り情ない御心、云ひたい事は胸にあれどそれほど厭に思ひ玉はゞ到底耳なば貸したまはじ、ても奴も酷い爲され方、今まで幾千の心盡しか皆蟹餅にさせて蔭で笑ひ玉はむ御料簡かは知られど皮肉さも程々になされ、御前様に逢ひ初めの發端より、何の位思案に思案し分別に分別して、

れては恥かしいか無言で拜む眞似するな。其手
つきは其方の御本尊様に向つてなさいいと又一
ッ颯つて座を外すこそ粹なれ。後は無意氣の風
も通さぬ室中の密語、絮々又喃喃々、汝一句我一
言、打解けたるかとおもへば左はなくて、涙
交りに恨みを吐くお萬、まあ能く聞いて下され
虎様、今は残さず胸打ち明けて妾の内兜見透か
されうと關はす見榮を捨てゝ話す所思聞ての上
で打つとも蹴るともして下され、お氣に觸ると
ころも有らうし小癢な眞似をしたと御輕蔑のほ
ども口惜しけれど御は既に無益、表面の滑こい
ことばかり云うたとて妾も初らず御前様も茶に
さるゝのみなるべければ、持前の無遠慮にまか
せて眞實を云うて仕舞ひませうなら、一體初
御見の時から何うしたのか慮外ながら迷ひま
したと、斯う申したら曲の無い虚言をつく奴、
棕島も左様いはれては眞に受けまいと仰しやる
か知られど、緯を木綿にして經を絹にするやう
な面倒をして文句に艶を付ける事無し of 實のと
ころ、さあ其迷うたが妾の不覺、一人が好いと譽
むる者、萬人好かぬ筈なければ右にも左にも何
所にも彼所にも御前様を引止むる人のあるは知
れたこと、殊には此廓の中にも此家へばかり
では無く彼此へ御來臨なされて、櫛子につかま

り袖ふり敷く佐用姫を幾人か御こしらへなされ
たも知れてゐれば、妾も亦君が一夜の投の情に
空悦びして夫限後は捨てらるゝか、いつそ夫な
らなまじひに和しくさるゝより初手から酷うし
て頂かば下らぬ苦勞をする事もあるまじ、末と
げぬ戀は女の恥辱とやら、憂き身は川竹の流れ
にこそ寄すれ心までは賣らずして生野暮で居た
妾、及びもつかぬに迷ひを取つて自分の後悔人
の笑を招くやうではと覺悟せしより彼様に御前
様をば爲しものゝ又未練が起つて袖の内の惡戯
御存知ない筈はなし、ところを知らぬ顔なされ
て御連衆の見えし時にも御見えなさらず、何う
いふ譯かと段々考へ碎いて、彼品が却つて小癢
と御思ひの種になりしに相違なしと氣が付きし
が、其時に其儘に止み難くなり、諦め切つた筈
の怒が強くなつて是非とも御眼もじの爲度さに
勿體なけれど御連衆を頼み、來ていたゞいて嬉
しいやうなものゝ、いや、逆も長う來て下さる
方にあらす呼び遂げらるゝ容貌も腕もない妾、
商賈と慥らば何事も無けれど兎角出勝の迷ひ増
長させてはと彼夜も彼様に就て御歸し申した後
では我身で我身の知れぬほど御前様の事に心を
取られ、御來臨なされて欲しいやうな、御來臨
なされず欲しいやうな、心もしやくしやのとこ

ろへ圖らずの御來臨、嬉しく怖く怪しく是は何
して好いものと無い智慧で判斷するに、妾の心
無い處置を可笑がられての御來臨に相違なく、
若しも此方が我折つて甘ゆるかなんぞせば直に
冷笑うて其限足を向けられざるべき様子が瞭然
と愚な眼にも見えた途端、此所なり怒るなら御
怒りなされ打つなら打つて下され、今宵も情無
く御歸し申さば明日の夜も必ず御顔見せて下さ
らむと、御免なされ、高を括つて愛想なく御歸
し申したば手柄のやうなれど、追駈けて毎夜の
御運びに益々怖くなり氣味惡くなり、眞實明さ
ば其限りとおもふに戀がこちれて怪しなもの
化り、一夜々々と送りはしたれど終局の付け方
の無いに、御笑ひなさるな、智慧も分別もなく
なつた今宵、足らぬ心の一トしほ迷ひに足らず
なつたを其儘有體にいふより外は無いと意氣地
のない恥かしさも忘れて大概申せば此通り、大
森の源七ぞホ、罪では有つたれど濟まぬこと
ではあつたれど御前様を引止むる逆手に使つた
ばかり、今の先可愛想に追ひ返して仕舞ひまし
たが定めし妾を時で死れとでも祈つて居るでせ
うに、さあ虎様、御前様は妾を綺麗に源七へ世
話して退かむと云はれしよし、左様せずとも妾
に是程弱い音吐かせて、此所で彼をかしうな

息はすまするばかりのところへお園來りて、お萬さま彼方のお客を何なとして片付け玉へ、虎さまは我あづかつたれば歸すことでは無しといふに、嬉しやお園さま頼みますと言葉を残し出口の鴨居踏みかけ振り頼りさま一眼男の顔見て無量の思ひを此方に置きながら身は小足早に彼方の座敷に行く心の中のむしやゝと搔亂れしも知らざる源七。これお萬髪がほどけて見苦しい、其態は何し事か顔も上氣に火の粉が散つて居る、眼の周圍の様子といひ動悸の烈しい様子といひ汝喧嘩でも爲て來たか、他所の口説の餘りの顔見たくない見ともない、鏡に向つて、眉刷毛把つて白粉でも塗して出直せ、と野暮が地體の惡まれ口。ホ、ほどけた髪を幸ひに妾は洗うて結立を誰かに見せうと思つたに、其様な事仰しやらすとア、息がきれて苦し、一杯ついで下され、と左の手は身と共に男の膝へ靠かけ右に猪口持つ早速の應對、流石は鬼も殺すべき女の機轉に源七煙に巻れかゝりしが、えゝ無禮過た云ひ分飲みたくば道也とやら銅壺とやらの傍へ行く飲めと、解けぬ惺り姫姑の交りし一言を、石佛の頭蚊の喰つたほどには思はぬお萬。早くも今宵此奴を突出して捨つる覺悟極めたれば、鼻の先にフンと笑つて、酌が面倒なら

頼みませぬだけ、可愛男の前では恥かしうて能う飲めませれば、此所で氣づまりなしに手酌も却つて面白い三月時分の山遊び、獨りて氣樂に瓢箪の底を叩くやうな風情があるものと、茶碗に注いで一口に吸ひ盡す恐ろしさ。ハ、云譯が無さに酔うて誤魔化す積りか知らぬが謝罪たなら謝罪つたでよし、強うは咎め立てぬものを負惜みの氣性から由ない無理酒して身體を悪うしては汝自分よりまづ此に濟むまいぞ、可愛男とやら味なことをいふが、彼虎吉めが厭で厭で堪らねば何卒毎夜に來て下され客の無うては自然好かぬ奴にも酒杯の一ツくらゐ貰はればならぬ辛さ、と染々頼むだは誰であつたか、頼まれて約束かゝさゞりし信實もものは誰なりしか、氣に觸つたら堪忍して呉れ、餘計な儲言をいうて怒らせたら我が惡かりし、と飽まで惚く折れたる言草、お萬くつゝと笑ひ出し。謝罪りました謝罪りました、餘り罪の深さに懺悔して進じませうか、御前様も人が好過ぎる、妾の白狀きいて些はからは下帯を堅う締めて用心し玉へ、白惚が強いと他の惚れたやうに見ゆるものなり、ホ、御氣の毒様なれど無理酒して身に當つても叱つて呉る人は他にあり、御前様に御苦勞は掛けず、謝罪つて白狀するなれば腹も立はなさる

まい、眞實御前様は可愛うも呼び逃げたくも何ともなし、釣つたば此方の腕の利、釣られたば其方の御料筒の鈍いから、笑止や入用あつて少し時色男仕立にしたは妾の胸にある魂膽、圖に乗て居らるゝは御不覺といふもの、さあもう用は濟みたれば何時なりともお歸りあれ、御前様も妾のために大分學問なされたらうに欺されたといふことだけを悟り得にして以來色沙汰御無用になされと、すつかり云はれて赤くなり青くなり唇咬むで怒る男、何して吳うと探りしむる長煙管おもはす振上げ打たむとする時、愚癡も出る筈男ぢやものをと、女といふべきを男に變へて微音に唸る憎々しさ。おのれ其體骨碎きさぎつて遣らむとは思へど愚癡の所業の恥かしさに無言で立つて煙管投げ捨て悄然として歸り行く源七を、見上げた男と後に評せしは天晴お萬の見識なりけり。

第十八

源七を追ひ返して目の上の瘤除きし心地のお萬忙がはしく來て見れば、お萬様餘程御禮を受ければならず、我儘兒を預かりて扱も世話の焼けた事でありし、澤山妾に御恩返しを頼みますぞ、と戲言いふお園、曲者も心に在る弱身を翻ら

なる趣味を爲して水の上に散り浮ける様うつくしく、風流自在と感ぜられしと語り傳ふれば、區々たる法式立は本より無より出でたる差別相、心風雅なれば法式を使ひ心無風雅なれば法式に縛さるゝとは某宗匠の至言なり。近き頃も左る家の嬢嬢親しき友どち男女交交て招かれし折、園の梅の落ちたる花のいと見事なるを金箔押したる舞扇の古きに受けて其日の花とせられしに、扱も優なる御心、花を愛みて散りにしものまでを取上げられし當意即妙の御胸の活作用、あはれ情深く才かしこき亭主かなと皆々褒めそやせしが、客の中の一人これより思ひなづみて詩興ある戀とはなりぬ。是れ破格ながら流石に風流は十分の事なるに、何處かの愚漢、話に聞いて我も愛められむと、殊更に金扇貰ひ求め、戶外通る花屋より椿を得てまだ能く咲かぬものをいくむしり取りて、風雅は是ぢや見よや人々と誇りしが、前のは咲き亂れたる紋りの大輪、眼も覺むる程のなりければこそ妙なりければ是は乙女の色薄く然も蕾の事なれば少しも見立のあらばこそ、其上何かせし機會に轉け易き蕾のころゝと扇より落ちしに一座却つて哄と笑ひしとか。閑話休題。朱座の佐藤は別に風雅の人にもあらず高く塵表に出でたるといふにも

あらねど、茶は其頃の交際道具、自然あらまし心得たれば道也を招て饗應けるなり。既に懷石に一獻をすゝむることも済み、釜の煮茶松風に通へば靜に點する一碗の香茗、俗物揃ひの主客も少時は互ひに威儀正しかりしが、終りに虎吉歸らむとする時、佐藤引き止めて、物語もまだ盡きれば打寛きて今少し、ならば御一泊願ひたし山崎の宗鑑のやうなことは申さずと笑へば、内内は夜もまだ更けぬを幸にして品川へなど行かむとおもひし道也迷惑なれど振り切りかれつ、さらば御厚意に甘えてと止まるにぞ佐藤よろこび、また酒を呼び下物を呼び色々の雑談に興も加はる頃、豫れてより娘自慢に戯の寄つた鼻を高うせる佐藤、何の御馳走もなくて心苦しけれど御慈意甲斐に御許しなされ、唯此老父が疎略ならぬ心ばかりに掛ければとも不束なる娘の琴の一手、御聞苦しうは御座りませうなれど我等の誠實だけを汲みて御き下されと眞底は天狗の云ひ草、是はまた一段とあり難し、聞くほどの耳は小生持たれど是非に伺ひたし、と答へて罪なき老人を喜ばせける。

第二十一

春の花と容顏の美はしかりしは往時、今は秋

の霜白き髪を小さな丸髻につかれて挿頭も目立たぬ作り、流石に年老れば眼は残月の煙りにつつまれしやうなれど若い時の姿がもはるゝ身の舉動閑雅に、枯れても柳の腰付、舊は良いなるべき清らかなる婆の後に、ついで少し俯向ながら入り來りしは是ぞ御自慢の御娘御と道也ひそかに覗へば、曙染の振袖ばつと美麗く、何か知られど砂香無暗に薰じて一室に渦巻くこと可笑し。母娘おとなしく座に付くとき佐藤引合すれば彼此たがひの挨拶慇懃に。わざ／＼御招き申して何の風情もなく、誠に失禮なれど唯御かけ構ひなく御心安う緩々と御談し下されまし、御遠慮のいらぬばかりか拙宅の御馳走と思し召しあそばして下されませ。いやもう充分あつき御もてなしに預かり眞にあり難うござりまする、と世辭愛想と名を被つた諷の吐き合ひ殊勝らしい中にも、色を好むといふ眞實は有つて、見る目するどく働かするに、母の陰に小さくなり居る娘、年は十七八、九とは躊躇まじき容態。眉濃からず疎ならず、頬の色あざやかに愛嬌笑窪折節よつて蝶も迷ふべき海棠の蕾の唇紅く口元に何とも云はれぬ好きところあり。父に促されて婢か持て來し箏の琴に對はむと默禮する途端、烏羽玉の黒髪見事に結うたる島田髻にか

いと退かるゝならば御前様の恥にはあらず、人に
是程苦勞させ罪を作らせ恥を語らせ女振りを
安くさせ、退くならお退きなされお退きなされ、
御前様の爲に見事下らぬものとなつても妾は露
關ひませぬ、相模屋のお萬を是々故に厭なら厭
と誰にでも御話しなされ、と云ひ放す。厭なり相
模屋のお萬といふものに聞いたほどでもなし
其勝氣で愈々厭になつたり、と罵る虎吉を、能う
云はれたとお萬しがみついて引き倒す外よりお
園道也好い兒だ寢れしな、おむつまじく。

第十九

意地と戀とが鳥糞のやうに搦みあつて散々に
纏れし揚句、解けて寢た夜の明るは早く、鶏の
聲こそ聞えざれ鐘の音東雲の天に響けば一睡の
夢いまだ圓ならざるに虎吉驚き醒めて、お萬が
利かす小機轉の熱茶に昨夕の酒の香尙残るかと
疑はるゝ口中を清め、又の逢ふ瀬約束していざ
歸らむと立上る前面から撲抱やうに兩手男の頭
にかけ、羽織の襟が折れて居ると治しながら其
手を退く時わざと左りの鬢をほつして、あれ御
免なされと微かな聲で詫言し、右から背面へ周
り、我が品川（或る形の櫛の名なり）で撫でつ
けて與る其氣の長さ、道也も間拔けに羽織の紐

なぞひねくり居る惚け姿、餘所から見たらば天
晴白痴の寄り合ひなるべし。時刻移りて段々明
るくなり行けば、戯事は好い程にすべし、斯して
は居られず、今夜は是非なし、明晩は必ず來む
に夫迄預けて置くべしと云へば、其今夜來玉は
ざるが邪見といふもの、奥様も無い御身體の誰
を憚かつて人をじらし玉ふか憎うてならぬとつ
れらむとするを避けながら、左様云れては好い
面の皮、約束なれば詮方なけれど可笑くもない
梅千爺の茶に招かれ、四疊半で足の痺れを我慢
せればならぬのぢやに惡う取られて堪つたこと
ではなし、少しは人の辛防するつらさも察して
見よ。ホ、其やうな厭な事辛防なるところな
見れば其老父さまは然ることなれど美麗い嬢様
のあるかなどにて穩和ぶつて居らるゝのかと又
打ちにかゝる。えゝ恐しい先ぐりする人怖や
と逃げむとする袂捕らへ、何時の間にか持つて
來し小さな人形の綺麗な衣服着たるを突付け。
それならばそれでそれは許して進る其代りに妾
の頼み聞いて下され。何か少しも分らぬ事はか
りいふ人、して其人形はまあ何したもの、と怪訝
顔。お了解はなさるまいが、ホ、御前様に頼
むで是を可愛人に届けて貰ひたく、妾が丹誠し
て製らへた此衣服随分好く出來たつもり譽めて

下され。ハ、何の詰らぬ、人形の御傅役とは
有難い役目仰せ付つたもの、然して誰に渡せと
いふのか。御前様途中で御もとめになつた積り
か何かにて、あばれものゝ父様が、留守おとな
しう爲て居らるゝお道さまにと云はれて。汝は
お道を何して知つた、と忙はしく問へば。何の
知らぬ答はなし、御氣もじまなれど思込んだ
妾が魂魂田町の御宅の屋棟まで抜けて行つた事
あつて飼猫の尾の長いといふ事までも知つて知
つて知りぬいて居りますと笑ひける。
歸宅つて彼此する間に頓て暮方となれば彼の
佐藤が家尋れにと立行きぬ。

第二十

如何なる座敷が茶には宜しきと或人の問ひけ
るに、利休答へて、埋木繼木の多き室こそ面白
けれと云ひしよし。之を思ふに茶の湯は玉の薨
朱の門豪華をもつて人に誇り我も樂むものには
あらで土階茅茨の風情を縁につくろひ、柱も根
繼して死節の抜出でたるを埋めたらむほどの物
數寄を賞するなるべし。又太閤の宗易めな困ら
し呉れむとて、黄金の平めなる大鉢に紅梅一枝
を添へ、花仕つれと仰ありしに、利休躊躇こと
なく造手に枝をしきければ蕾も咲けるも自然

柳は父様は粹ぢやと腹に嬉しがり。父も彼様に申しますれば行届かぬ勝なれど今宵は何うか御泊りあそばせ、サア御熱いのを今一ツ、と生娘にはませた口上に利發あらはるゝも憎からず、道也是非なく又飲みて終に泊けるが、後にて老人自己を悔いぬ。

戀といふいたづらものが世にありて多くの人を迷はせにけると古歌にあるか無きかは知られど、有つて然るべき世間一統の状態、今に其通りなり。お柳元來春の海に鷗眠るといふべき平和なる心もつて居りしに、其の後秋水に迷へる魚となつて、或る夜の囁語に、其の抱へ帶此方へと、あり／＼語ればお傍去らずの乳母驚きて何事と問へど埒なし、知らぬ知らぬ。

虎吉お萬に馴みてより雨の音を駕籠に聞き、風吹きたつる塵埃を町通りで浴び、通うて通うて夢のやうに日を送りしが、忽然として薩摩より御用召、は何ぢや。

第二十三

薩摩様よりの御用召何事かと道也思ひながら其儘には捨置かれず、衣服あらためて出頭すれば、案ぜしよりは易きどころか考へも掛けざりし幸福、日頃諸役人へ進物に氣前を見せ交際の

遊興に可笑くも無い事を笑ひつゝ褒めつ抜目なく取り入りしだけの利は今見えて、此度姫君(後天璋院)將軍家へ入奥につき御支度の御道具数々の銀器鑄方一切其方へ御用仰せ付らるゝ間諸事意を用ゐて勤むべしとの事なり。有り難き仕合せ委細かしこまりました粉骨碎身随分出精いたすべしと一も二もなく御請申し家に歸りて、斯る話しは母に聞せける。

此所一番踏張つて利潤を見るべき時ぞ、迂闊に品川通ひなどして職業に精を入れいでば愚物と批判を受くべし、我道也、色に性根を失ひ魂魄を奈良濱にしては一大事、お萬が笑顔はそれそれそこに見ゆるとも刮と睨み倒して與らむ、何の、男兒遊び戯れてのみ日を送るべきや、と覺悟したは良いやうなものながら、名利の犠牲と情婦を爲したる舉動、此男に迷うた女可憫と誰しも思ふべし。其頃天下漸く動亂の萌芽あり、徳川の源や濁り初めたれど未だ甚しきに至らざれば、上下おしなべて華奢風流の物數寄に閑な心を用ひ居る中、まして是は人間一生の大禮を人間の頂上ともいはるべき人の行ひ玉ふに準備の粗略なる筈なく、美しが上にも美かれ精巧なるが上にも精巧なれ、贅澤は仕三昧、入用關ひなしとの命令、心得たりと心匠機敏の道也が

請合ひたるなれば、舍嗽手水の器物より香爐置物の類まで皆おもしろく鑄成たり。素よりさるもの、地金にて利潤取り、細工にて利潤取り、長持にて擔ぎ込むほど利潤しも無理ならず、上つ方の事は萬般寛濶なるを可とせしが其頃の風俗、將軍は一日に何石の飯を喰ふと迄定まりし世界なれば、一の者を十にして取り、十を一にして獻るが下手の者の習慣なりけり。されば道也日々慾に急がしく、流石に夜遊も疲れては爲し得ず、品川通を夢にもせざれば、母は毎日眞面目に働くを傍目より嬉しがりて、定めし氣骨の此頃はひとしほ折るゝ事ならむ、我が手料理の甘くは出来れど汝の勞を慰む爲、一つは不自由なき今にも昔時忘れざるため久しぶりて我が取りし庖丁、さあ今宵は是を下物に快う飲んで書の草臥を休むべし、いやらしい手付して徳利を持はせぬお道に酌さするも亦變つたる味のあらうに少しは家内の趣味を楽しみてみよと母の慈悲尊とし。人の氣持は身持なり、と人生を洞察したやうな事を或人云ひしが、實に身の持ちやうにて、氣持は變るもの、放蕩無賴の男兒も山寺に夜寝ては後生願ふ心の少しは起り、婉淑かりし女子も淫肆に落ちては長く柔和ならず、道也少時名利の心より自己を抑へて職

けし大根注連のやうな金絲ゆらりと動きて、萬物を美しく見する蠟燭の光り水照りのする櫛の春に宿りたる様人の心なときめかせぬ。頓て一二三四五六七八九十斗爲金までの調子あはせて琴甲かけし雪白の指しなやかに弾け出す爪音やさしく、生田流の身構へ正せば、現れにける二重の顔孩兒のやうにて可愛らし。花前に蝶舞ふ御手つき、柳上に鶯鳴く御聲音、あら心無の春雨やと歌ひ玉ふ風情には正眞の熊野現前すとも及ばざるべし。道もおもはす興に入りて廻りに舉ぐる酒杯の数を重ねれば發し來る醉に乗り、曲の終るを宗盛ほどに惜みて稱讃の詞を盡すにぞ、佐藤も我娘褒めらるゝことの嬉しく、只管獻酬を辭せざるほどに舌もしどるもどるとなりける。甚だ恐縮なれど餘りの面白さに御無禮は御免、尙一曲御所望といふ道也、娘今までは控へ目にのみして確と見ざりし男の顔を此時見るに何の天魔か因縁の紅絲を牽きしや、鼻高く用秀で才氣面に溢れたる扱も好い好い、好い殿御と思ふより胸どつと跳りて言葉も出さず下向きたり。佐藤は娘の方一寸見て意氣揚々と、時に道也氏遠慮はお互ひに無しとして豫て噂にのみ承はり及ぶ貴殿の淨瑠璃、苦しからず一段おきかせ下されまいか、御所望の娘の等其代り

には何十番なり乃至は夜を徹してなりと御聞に入るべしと、分別の坂を越えた身ながら酒に後戻りして若い事を云へば、此方も酔うたり素より好なり、何のそれは御易いこと小生御嬢様の筆の後に出ては花の後の枯木少しは口惜いやうなれど是非尙一曲伺ひたければ其爲に小生の喉破れようとも厭はしからず、いで、拜聴と猪口を獻せば佐藤受けながら笑坪に入り、悦喜に口端の皺深めて、此度は手ものなとの指揮、否みかれて又奏するは何の祕曲ぞ、唯聞く憂々緒々として鳴るかと思へば淙々潺々として響き、一絃長く音する時石室に金鈴落ち、數絃共に聲ある時は紫雲に鶴亂れ咲く如く、左手の絲を壓し絲を放るすは忽ち賓鴻の塵を荷むが如く、忽ち流水を柳摩るが如し、右の手勢の千變萬化は幽禽啄木、神龍出水、急なるは電光雲を縫ひ緩かなるは暮煙風に送らるゝ姿、輕くして數々彈するは水に點する蜻蜓、靜にして長く撫するは翎を梳くの彩鳳、御自慢無理ならず面白し。

第二十二

娘の琴終れば、サア、何卒一段御聞かせ下されと、佐藤の求むるに、今さらの心地して躊

躇しが、偶傲の男少しも萎まず、三味は無けれど膝を叩て覺えある咽より語り出す心中もの、段々語りて、無常の風に縮緬のといふあたりになりし時は何時しか自分ひとりの樂座に入あるも忘れ果て、我興に入れば他も面白がり、殊更娘は恍惚と聞き惚ける。あゝ扱も何處で御修行なされしか、さりとては好い御聲、節まはしと申し氣合と申し、今迄幾度網品も聞きましてが今日ほど憐れに情深う真におもしろう思うたことはござりませぬ、有難しく、老夫のみならす娘まで幸福に拜聴しましたと、額に手を當て恐惶がれば、御賞讃に預かつては却つて取入りまする、時に夜も大分更けました様子、御厚待に甘えて思はずの長座はなほだ失禮いたしまして、いづれ御禮は他日あらためて申し上る事として勝手ヶ間敷けれど今夜は是にて御免蒙りますと歸り支度にかゝるを、生酔の佐藤飲みかけし猪口下に置きながら慌て、マア、と引止め、是はしたり貴殿歸られては老生の酒の香が抜けるといふもの、逆もの事に御消りなさると極めて尙少時、コレ御止め中さぬかとおとなしく坐り居る娘に日注すれば、先刻より何か物云ひかけて、返されて、愛嬌を此方より遣つて、其返しに和しい笑顔を見せて貰ひたく思ひしお

打明けては下さりませぬなど餘舌立てし末は、是所ぞ忠義の立どころと餘計な骨折り甲斐甲斐しく、内々は何品か貰ひし嬉しき、慾まじりに働いて、道也が家の有様より品川通ひするに云ふことまで聞出せば、それより先はまた自分の甥を遣つて、お萬が道也の來ざるに辛抱し居る事、日文つくる事、道也は唯まじめに働き居る事など葉も根も残さず聞き知つたれば、さあお嬢様斯くかうしてかうお書きなされ、文與る役はわたくしと下らぬ指圖まで爲しが、西村が家に相槌打たすべきものなく、然も律義なる母の邪魔ありて、品川よりの文は三度一度は目に入りても道也も獨身なり、相手は色を賣るもの、それに迷ふやうな未熟なる年でも無しと安心して、虎吉に品川よりの文なりとて自ら渡さるゝやうなる大腹中ながら、素人の娘などよりの文と知り玉は素より黙つて焼捨らるるが上に長く後々心な付らるべし、然しては此態埒明かずと愚人ならでは持たぬ智慧賢く圖りしが、道也さるもの返辭に及ばず、却つて其夜は品川にて、あゝ好う來て下されしと云はれける。

第二十五

命を論すれば月下の螢の僅か樹間に光るは

ど、身を比べれば夜半の電の瞬時戸隙を覗ふ如き果敢な人の上、喜怒哀樂も何かあらむ、道也が母は木杵の吹きめくる頃より起居もの憂くおぼえそめ、是といふ煩らばしきところもなけれど、自然老體の衰ふるを支へ難く、福壽草咲き梅匂ふ一陽來復の時となりても次第に弱るばかりなりしが、終に一點水に散るの花と共に品行を盡めお道を可愛かりて育てよ汝のために苦勞し死に死したる妻の片見で粗略にすなとの遺言残して彼世へ行きたる心の中、まだ「道也を氣遣へるなるべし。放逸無慚と云へば云へ眼明かに耳聴き虎吉情無き筈の無ければ、流石に謹みて忌服を守りけるが、酒を廢せば心荒まず色を漁らざれば情正しく動きて、我今既に三十男、いつまで息子風のいたづらにばかり耽らむや、母亡なりて從來の如くにては叶はじ、お萬は可憫なれど泥水に漬りし身の詮なし、お柳が數々の附文に返事やらざりしは佐藤への義理をおもて清淨なる娘に疵つけじとなり、彼女を可愛からず思へる事かは、好し、我安に品行を改めて普通の男一匹になり済し、今までの亂行一切廢さむと、幾度か思ひ定めて變らむと昔時の人の看破せし心をおぼつかなくも極めつつ、人を頼みて朱座へ娘貰ひたきよし云ひ込み

けるに、所思は格別なもの、怪しからぬ事いふ奴かな、今は諸大名御用達して、聞けば又此頃は琉球國より薩摩様へ奉る錫の検査役迄も勤め、威勢日増に盛んになるよしなれど根を推して組せは久保町の原の辻淨瑠璃語り、我假初にも辻に坐りし奴と縁を結び、大切の娘を大道の砂浴びたる乞食同様なもの妻となし、それに父様と呼ばれて堪へらるべきや、成程才氣逞ましく何事にまれ、遣つて退ける腕あり氣象あるは頼母しけれど、我其様な男を愛こそそれ尊みはせず、殊に一門の者たちは能く我ほどに才をも愛せず唯家筋の詮議のみ喧ましうする中、何とて筋目正しき我家と辻に坐りしものとを續ぎ合する事承知すべきや、又道也も道也なり、餘りといへば身のほどを知らず、昨日此頃の出來分限の際として連綿と榮え續きし舊家の我がところへ婚儀申し込むとは怪しからず、言語道斷もつての外の奴なり、道也に云ひ傳へよ我が娘は辻淨瑠璃かたりには縁組せ難しと短慮一徹な云ひ分、娘の心親は知らず、聞かばお柳が恨むべし、中に立ちしものも餘りなる云ひ草に少しは劫を衰して膠氣なく道也に此事語れば、烈火の如く怒り立ちしが、怒るは野暮なり、向うは分らずやの老父、相手に不足なり、然し餘りと

業にのみ身を委れ、母の親切娘の愛度氣のなさばかりに朝夕見れば自然氣持も例の如くは僻ま
す、悠々と長閑なる樂みの忙しき中に在るを覺
えてお萬よりの文は矢より烈しく來れど後は明
けても見す過ぎける心の中酷し、今日は職人な
ども饗應さむと下に柔しき男の酒肴を調へ、無
禮は關はず皆々充分に飲み食ひて明日は又能う
働いて呉れと云ひつゝ自分も打交りて飲みしに
思ひの外酔うたれば、早く睡らむとする時、例
の文を母に手づから取りつがれて面目なく其儘
打捨てしが、母去りて後、機一轉、何を下らぬ
事書いてあるかと明けて見しが此所等に禍福の
種ばあり、お萬方よりかと上封じの様子に見え
ながら中は違つて、何所より、あら不思議讓座
の娘よりなりし。

第二十四

憎からずおもひし女よりの附文嬉しからぬ筈
なし、然るにても戀は人に智慧を付るとは眞實
なり、何して堅い家の娘が我とお萬との間を知
りしが上に此策略を爲し事ぞ、それにしても筆
の運びの美しさ、散し書きの假名文字のび／＼
として且能く坐り、文句に初心らしいところの
折ふし見えながら又却々其れが戀に手練の者に

さへ出来ざるべき床しさを持ちて虚偽ならぬ眞
心の人を動かす文章、先度より幾通か呈し文を
唯の一度の御返しさへ玉ばらざるは餘りと申せ
ば御情無く存じあげまらざ候、情無は世に生
らじとおもふ身の生命定めに恥かはしき事の限
り申し出して蓮葉なるものと輕輕の程をも顧
ふ暇なき切なる心根ふびんと御さつしなど書き
籠めたる所思、終には言葉の盡きてか生命とい
ふ字ばかり多し、見れば見るに従つて可憐らし
き節のあらはるゝに、道也戀には馴れて、まだ
京都に居し頃幾人かより様々の文もらひ、蚯蚓
流の筆勢ふるひたる、蝸牛の轉けたやうなる、
ゑの字といふ字と、或はすの字としの字、くわと
かと、へとゑと、無暗に用ひ違へたる、厭らし
き端唄文句を繼ぎ合せたる、麝香くさき香を含
ませたる、癩癩まじりの走り書電光のやうなる、
下らぬ言葉のみ水筒引きたる如く止途なく連れ
たる等飽くほど見たりしが、お柳が文ほど心の
清き忍ばれて情のしつとりと籠りたるを見しこ
となく、扱も氏あり育ちあるものは格別、何程品
高きやうに見えても祇園島原乃至江戸品川にも
是に及ぶべき文書き得るものあらじ、殊には琴
の妙を得たるに胸の機關まづからぬは知れた
り、容貌は千人が千人はめちざるべきなり、性

質は分られど親に似たならば正直温順、別段曲
みては居るまじ、此文だけで云へば可愛き心根
論は無し直に色よき返事して遣らむと、徳を思
はす行狀に關はざる畜生の判斷恐ろしく、急に
今までお萬が文とのみおもひたれば搔遣り捨て
たりし文尋れて讀む根情、まだ醒めぬかまだ醒
めぬか、果敢なき色に迷ふ夢は。
何事も半なるは有難からず、鶏卵ばかりは半
熟がよい可知られど鰻の牛焼と野郎の牛通がる
是皆結構なものでは無し、生酔よりは却つて醒
者の眞面目が好く生意氣よりは野暮がよし、朱
座の娘が傍去らず、我身の乳で育てたる呱呱の
昔時より今歩行くにも品つくるほど成人したる
まで附き従へるお銀といふ婆、不親切ものであ
らば好からんものを牛といふ字の頭につく忠義
立、お柳が此頃物おもはし氣に鬱々として、他
が物を云ふにも返事うとく、其癖人なき部屋に
ては何事か獨言などする風情のあやしきに氣遣
ひ、自分の身の十六七頃、おもへば可笑き事の
ありてそれより苦といふもの悟つた往時に引き
くらべ、淨瑠璃にある形の通り、此乳母にお隠
しなさるがお恨めしい、龜の甲より年の效御相
談かけられたなら及ばぬ智慧も出しませうに、
何故水臭く他人あしらひ、これ乳母かう／＼と

身の及ばぬ高峯の花に心惱ますとは分際を知らざることゝつく／＼おもひあきらめて彼お返しを上げたる譯、目上の計さるゝことの行末めてたからう筈はなれば、何と仰せらるゝとも我等は我等の覺悟がござりまする、さあ時經ては御宅のおもはくも憚りあり、機嫌直して泣顔な父様に怪まれぬやうおかへりあれ、と涙か拭うてやる手を抑へ、妾は身をも厭はぬに、御前様は行末のめでたためたなくないなどを御心配なさるお心根、あまりお情薄いといふもの、お言葉ほどに和しうないお胸の中が透いて見えまする、お萬さまとやらと御前様は末長うお睦まじう御暮しなされ、とても野暮らしうて戀の諸譯も知らぬ妾、御心無い無理なられど、一旦思ひつめてそれを思ひかへすといふやうな事に野暮な妾には出來ず、此儘何れの川へなり山へなり身をかくして、彼世から行末めでたく榮え玉ふ御様子を拜みませうと氣相かへて立上らむとすれば、次の間よりは動靜に驚きて慌てて出づる乳母、袂を把へて引とむる道也、上手の機靜に明けて立いつづるは内儀づくりの丸簪姿、剃立眉の跡青く美しいお萬、互ひに顔を見合せて言葉無き中にもお柳が涙に脆く、お萬を見るより岸破と伏して道也が膝の上に解けし

鹿子の紅亂るゝ風情、一座のをさまり付きかぬところへ、朱座の佐藤さまより佐官の甚藏御手代の助七さまの御二人急き込めて見えられました。

第二十七

魚肉は堅いが好いとばかり覺えてあいなめを怪しいと思ふやうな一方氣の唐偏朴、朱座の佐藤は何より大切の娘お柳が朝より出て乳母とも何處へか見えすなり、殊更隨伴の僕一人小坊主一人は途中にてまかれしと聞き、是大變なり、よもや品行正しき我が娘が従者をまいて捨てたるにばあらざるべきが人群の中にてはぐれたるなるべし、それにしても琴の師匠の許へ行く筈のものが其方へも行かすといへば何處に何をして居るやらむ、それ探せと家中のものを四方へ出せど影も無く、正午過ぎても尙戻らざるに愈愈氣を揉み、出入りのもので狩りあつめて八方心當りを尋ねさせけるが、中に小機轉のきいたる佐官の甚藏、當世娘が姿かくすは云はずと知れしと、親は娘よりも大抵馬鹿なり、御宅へ出入するものゝ中にて男振よく一寸女惚れのしさうな奴は誰と聞けば、道具屋の勝治は菩薩顔にて不良いこと出來さうもなし、旦那様の俳諧

の御友達の靜庵は最早齡が齡なればそれでも無かるべし、小間物納むる才造随分いなせにて女の好くべき風情ながら少し活潑し過て品格のよい事好きな御嬢様には向かざるべし、歌の宗匠寧齋は塵氣無き面魂、罪の薄い惡戯は爲るかも知れど惡事働く柄でなし、仕事師の竹三、彼はめ組の幅利けなり音羽屋風の身體つきなり、あゝいふ質が兎角藝妓屋などへもぐりて炬燵の向う座へ直り、聞くに面白く梅見舟英對談語なぞ讀んで遣るといふ伶俐を働くなれば、彼奴ちや／＼と鑑定か付けて尋ねしに竹三は枕頭に水吞を置たまゝ長閑に書展して居るを、疑つたは濟まざりし、薪炭の御用うけたまはり石屋の元六は金三兩で色三文目を買ふ男、まさか彼ではあるまじけれど、其所等中詮議した末道也方に來て見れば、案の定此所なり。死ぬの生きるの尼になるのと泣き悶ゆるお柳を、まづ／＼それほどに思はれなば甚藏一番死身になりて旦那様に何とか取りなし御嬢様の御望み叶ふやうに計らひますれば、左に右一旦は御歸宅と宥め職せど、厭と冠りを振りの袖、模様菊に置く露の涙に咽ぶのみなれば、甚藏きつと案じ出して、然らば御宅へと申すまじ、なれども此儘此方に居らるゝ譯にもまゐるまいなれば、汚け

いへば小腹の立つ返答、蟲の有るもの指を嚙へては引込み難し。汝見よ今窘めて遣らむと、折角素直になりし了簡此逆境に忽ち振て、意氣込強く筆を走らし、お柳が許へ初めの返書、未遂げぬ戀爲るは厭なり、其仔細は斯くと仔細つまます云ひ送り、所詮君をおもふも甲斐なれば我は男らしうおもひ切るべきに、父上の御言葉に従ひ玉へ、辻淨瑠璃かたりし身のおよびなき思ひに疲れしは好き白痴にて候ひしと書きとめたる毒言、めでたもなくかしこも無くして乳母が許へ人傳に遣り置き、其夜直に品川に飛んで、突然身請の相談力士櫻樹を根拔にするやうな風情、夢の如くなりてうろ／＼するお萬を引獲ひ、翌る日は廓を離別の酒宴賑はしく、顔おぼえぬものによめて目出度がられて歸宅れば留守に女客、誰ぞ、朱座の娘に乳母なり、攫も亂脈な事よ。

第二十六

言葉多きは品少きが常ながら全で言葉なきに道也も困り切り、何としたものと百方問ひ慰むれど、お柳紅顔を袖屏風に隠して忍び音に泣くばかり、千縷の髪恨みに亂れ戀に縋れ、身のとりにしもしどけなく、云はむとしては云ひか

れつ、唯罪も無い袂を嚙むに、牛忠義の乳母堪へず横合よりそゝり出で。お嬢様さうお氣の弱いことではなりませぬ、さあ思ふ存分何となりと仰りませ、婢は少時あちらへと座を外さむとすれば、あゝこれ乳母、汝に往れてはならぬと引き留る初々しさ、深窓に世間の雨風知らず生育し鉢植の小竹斯も弱いものかとひとしほ可愛くなつて乳母は座に残れど、さてまた唇を動かされてもぢ／＼と爲てのみ居らるゝ有様のものどかしく、つかう／＼と切り出して仕舞へば譯の無い事とおもひながら、まさか他戀に代りて男に所思迄述べ立つことも成られば、自分までが兩手を組みたり解したり、埒も無い眞似して時を移せしが斯くては萬劫果じと、私と次の間へ外せば、道也も涙こぼす人形の守り仕兼、何とかして話の緒を得むと傍にすり寄り、さう泣てのみ居られては何とも譯分らず、御從者もわづかお乳母ひとりにて、入しつたことさへなき我家へ急にお來臨なりしは何といふ譯、何も御遠慮はなしお話しなされと堅う出られて、ます／＼口は開きかれしが、此所云ひきらはばと漸く頭をもたげ、さりととはつれない仰りやう、幾度か恥かしき文さし上げしに御返事なく、たまたま昨日はじめての御返し、嬉しや

と讀で見れば思ふことは空、不束な妾なれば嫌はれしは御道理、また乳母の話して聞きますればお萬さまとやら深い御意に入りのあるさうな、どうせ及びもない雲に棧橋の妾の願ひ月の桂を下界のものが折り取らうといふやうな話し、いつそ、御返事もなくばまた、あきらめてあきらめて尼になりとも身をなして行末の心に穢いもの持たず一生を送りませうに、どうやら諦めを悪うなさるやうな御文中の心、父が何のやうな事申せしかば全く知りませぬが、妾には露かまひ無き事、眞實御言葉が虚偽でなくば、水仕業してなりと、此家に置いていたゞきたい願ひ、家を出る時より何で歸らぬ所存、またふたゝび父母の顔も見え覺悟、お言葉によつては淵川に身を捨つる方が増しとおもひ定めてまゐりました、是ほどおもふ妾の心を少しはお察しなされと後はまた泣きに泣いて、たわいなし。それまで云はるゝは嬉しさの限りなれど、御前様の御父様と全で知らずは兎も角も、見知り越どころか親しくお交際申せし中にて、假令二人は相思ふとも垣を越え隙を覗ふ非禮の契りはなし難し、されば正しく戀を運ばせ人をもつてお前様と申し込みしに腹の立つほどの酷い御あいさつ、成程落魄一度は辻で淨瑠璃語りしやうな

では無し、何を何のやうに汝が云はうとも一旦
おもひ込みたる上はおもひ返す妾で無ければ、
我儘もとの御腹立で御父様に捨てられたらそ
れまで、又道にさまに見限られたらそれもそれ
まで、どうで我身を捨てものにして家を出しか
らは、尼になるも厭はず身を淵川に捨つるも厭
はず、男に嫁れうは死ぬるばかり、死ぬる
といふことをおぼえて居れば怖い事も何もな
し、再度餘計な口利かすと汝が請合うたけ
の運びを早くつけて欲しと、何その果には死ぬ
といふ言葉を持ち出され、娘氣とは云へ扱わが
まゝなと弱りながら、其儘にもしかぬれば、
朱座に到りて有體に包ます物語り、とても思ひ
直しば爲玉はざる決心の御様子、此上は是非な
し、あらためて表だち、それの御儀式を
踏み、確とした媒妁をもつて道也さま方へ御
嫁入らせらるゝが双方疵つかずに済むと申す
ものと自分が考へを付け加へて話せば、銀の延
煙管で破るゝほど烈しく唾壺をばたき、黙れ甚
藏餘計なことといふな、我儘をいへばとて決心を
したればとて、我が娘は我が娘なり、我が娘の
過つたる考へを改めさせることの出来ずして親
といふもの立つべきや、お柳が何と云へばと
て早く此所へ連れ来よ、思ふさま折檻して骨身

の碎くるほど打ち擲いてなりと増長したる巫山
戯た性根を矯め直してやらむ、年も行かぬ癖に
憎き云ひ分、おもふ男に添はれずば生命を淵川
の魚に呉れむなどといふは、生命を餌にして親
を釣り身を質にして親を脅かす不孝の骨頂よし
親に背いても道也に添ひたくば自ら死なせるに
は及ばず我が其命とりあげて、魂魄ばかり好た
男の傍に行かしてやらむ、連れて来よ、何あつ
ても馬糞の塵浴びて大道に坐り破れ扇で膝拍子
など取りし野郎に娘を呉れ、それに連る縁者と
なつて清き我家に汚點を蒙らすことは出来難
しと散々の不興、二の句云ひ出すべきところは
無くて餘りとおもひながら佐官の甚藏家に逃
歸り、引き繕うて不首尾の段々をお柳に傳へ、
今は仕方なければ少時御宅へ御歸りあつて御身
を謹み、御父様の御機嫌なほりし頃を見計ひ、
御母様よりあらためて願うていたゞき給ふが上
分別、急いて事を仕損じては折角の御苦勞みな
仇となりて口惜しい始末になりませうぞ、浮瑠
璃の文句ではなけれど、辛防一つが大切せやと
賺せど中々承引せず、それを無理に欺し賺して
甚藏引添ひ、佐藤が家に行けば、泣き伏すお柳
を見るより老人、入歯咬み絞りて身を慄はせ。
ふてくさりの淫婦め改心したか、甘くすれば付

け上りて忍び合ひこそせざれ文を通はし心を語
り親の許さぬ男選み、何の今川に其様な事せ
よと教へある、何の女大學に其様な事をすゝめ
ある、それ見よ返事なるまいがの、辻浮瑠璃
語り風情に思ひをかくるとは口惜いほど淺間し
い奴め、恥度心を入れ替へよ、此間までは其様に
浮いた性根はもたざりに、一時の迷ひ今醒ま
せばよし、必ずともに思ひ切れと罵る下より、
恨めし氣に顔をあげて、浮いた心からとはお恨
めしい御言葉、厭、厭、厭、どうあつても道也
様をおもひ切ることば厭でござんす。汝憎い奴
親の言葉を背いてもといふか。さあ父様の御言
葉背きたい事はござんせれど。道也めに添ひた
いといふか。と席をにじり出して烈しく問ふに
覺悟きはめしお柳びくともせず、ハイと確然云
ひ切れば勃然として親父躍り上り、淫婦め、子
でなし親でなし、汝の如き汚き奴、系統の中に
は置き難き子を持つたるは我が恥なり、何處へ
なりと失せて行け、と言語の脇差するり引抜け
ば宙をひらめく刃は電光、あばれ電光の消えや
すき人の生命。

第二十九

打つぞとて上ぐる杖もて逃げよとの情を親は

れど小生宅に少時御在なされ、其中には此方様の御話し、旦那様の御考へも覗つて何とか結局を付けませう、悪うは決していたしませぬ、さあ泣いてばかりでは埒明かす是非に此所は私めに御委せなされたが良うござりますと、無理無體に引抱へ、自分が家の櫻田さして歸れば乳母も茫然となりながら眼で行く、後は暴風雨の過ぎたる庭、愀氣の火炎胸に燃えて五體焼くが如き心地のするはお萬、手持無沙汰にて弱り返る道也の腹の中、既や大抵の譯分るお道の手前、召使ひの者の手前、お萬が手前、暫時白けて困ぜしが、何是しきの事に委むべきやと、濟まし返つて居る風情憎さも憎しとお萬、我が身の賤しきを知れば、云ひたき事は山と積み、泉と湧けど、流に居しものゝ蓮葉なりと見下げられむを氣遣ふと、氣象烈しき道也の心に逆ば、折角これまでに成りし仲も何時粉砕になりて、我は我の勝手にする汝は汝の勝手にせと突出さるるか知れぬを恐れ、何事も見す聞かざるやうに身を持つて當り觸らすお道をひたすら可愛がる利發さも眞實は我が持てる弱點と、男に捨てられじとの弱點より出し智慧、廓名呼ばれて新造若俊に頭下げさせしほどこそ良けれど、堅氣になりてからの傾城の心の中、書ける筆持つた人

骨髓を扶けてあらはさは是程情ないものなしと萬人可憫におもふべし。云はゞ我が子の分のやうなものゝお道にまで様を付けて呼で、頼光と譯名負うた位の腕力の腕今は力なく、お、好い髪の毛黒うて素直で艶々しい妾が蝶々鬘に美しう結うて綺麗な切かけて上げましょと少い娘の機嫌を取りつ、結うてやつて合はせ鏡に姿を見せ、喜ばれて自分も喜び、父様お萬様にこれ此通りと頭もつて行て見すお道が、あゝ美しい姉様になつたぞと褒める父の言葉に莞爾とする笑顔の愛らしき。漸く此程の事を樂みに日を送りけるが、可愛がれば慕はるゝ道理、一夜戯れに同衾せしより、寢るにさへお萬さま／＼と馴睦むお道、これも母なく婆様も無き女の兒の心細さよりとおもふにひとしほ可憐深くなりて少時する中には道也は怖うてお道は可愛きものになりぬ。唯明暮氣にかゝるは朱座の娘の如何せしやう。

第二十八

小兒の話しも其身になつて聞けば道理なところあるものゝ、ましてや氣狂にも白痴にもあらざるお柳が生命を無いものにしての戀、段々話しを手繰りて御胸の中を覗つて見れば、何うか此

戀成就させたいやうな氣になれど、安請合に悪うは計ひまなすまじと云ひしは唯其場きりの考へ、まことは御嬢様を説得して御宅に歸したきが山々なれば、道也様の許には歴然とした奥様の在り、如何ほどお思ひ玉ふとも對手が水臭ければ面白からず、御覽にもなりしならんが眉とつて鐵漿つけた美しい婦人の見えしは、よしや眞の正室ならずとも御妾かなんとなるべし、其様な事して居らるゝ男を慕ひ玉ふとはあまり聞えぬ御了見、對手が此方を袖にすれば此方も此方の分別を立て、彼等を見返してやらむと、道也よりは百倍も容貌のよく勝れたるを御亭主に御持ちなさうといふ思し召には何故なり玉ばぬか、世に道也ばかり男ではあるまじと水をさして見ても、いつかな。甚藏や其様なこといふものではないし、男は世に多くとも女の身として幾人を行末かけて頼まうとおもへるもので、假令は汝の言葉に従ひ、心の中に夫とおもうた道也さまを思ひさり他所へ妾が縁付かうとも、灯火暗く雨窓を撲つ夕など、妾の心が妾の身に問ひかけたら何と答へよう、又奥様のありといへど彼はたしか品川でお萬さまというた傾城、道也さまの深い御馴染とは聞いたれどまさかに奥様になさるゝやうな不見識なさるゝ道也さま

りの手の方で縫ふ心持になされさへすれば自然好う運びますなど座しく遊び居るところへ、しかつめらしい男の來て旦那様に直々御話し致したいとのよし、何事かと氣になりて密と開けば、南無三朱座の娘の話なり。

第三十

悪事が悪事で成果つた例ありや、大抵悪事も道理の表皮を被り禮義の裝飾付けて成就するもの、不義を遂ぐるには義を以てし不善を濟すには善を粧ふが分別ある惡黨の爲る事、甚藏は惡氣あるにあらねどお柳を最情と思ふより自然文字無きものの理非に暗うなりて只管道也に添はせんとのみ計り、知れるものを媒妁に頼みて自己親元になり、愈々西村へ戀にあぐられ魂魄ふらふらとなりし娘を縁付る相談と、のへけるが、此事聞いて前後の様子考ふれば考ふる程詰らぬばお萬、人の無情は恨みて無益なれど餘りなる仕方薄腹の立つ忌々しさ、根引されしは嬉しやうなものの何程威勢ある朱座の娘なればとて、又若くて美麗ければとて、親の許さぬ不義した同然なるお柳を表だちて厳しく例々此家の花嫁御と迎ふる男の心は、秋の天と共に變り易きが常なるにもせよ、さりとは我儘過ぎた

り、素より汚れたる此身を正室と定められざるは露口惜うあらねど眞實儀式ふみて正しう迎へらるゝ嫁御にならば、下ぐる事嫌ひな頭をも下げ、奥様と尊とみて其人を待遇ふべきが、我身も好きつ好かれつよりして此家に来り其人も戀の我儘よりして此家に来むといふ譯、いづれに正邪の差異も無く曲直の區別もあるまじきに片手落ちの裁判つけて、我なば山の端に傾く月の消ゆるとも没るとも隨意と見放し、彼娘をば海原より昇る日のやうに愛度おもはるゝが味氣無し、儀式して歸が尊くて儀式なしに入り込むが鄙しいか、儀式に何程の價のあるものか知られど、三々九度の盃は一夜の情あきなふ傾城とて初見の客には其形を學ぶものぞかし、女蝶男蝶を銚子にとまらせ、巻き壽留女よる昆布家内喜多留と下らぬ名を珍重して地口行燈の贊のやうな戲事を眞面目がり、胴聲出して高砂歌ふ禮式さへすれば、夫で女は御内實様になり男は好い殿様になれる事が可笑や、妾無器用ながら婚禮の席に人形くさく坐るなどは引附するより造作なく仕て見すべし、お柳と云ふが佐官を親元にして奥様にならるゝ者なら妾は大工の棟梁なり屋根屋の親方なりを頼むに造作なし、ええ頼母しからぬ男と一方に思ひを走らせては持

つた煙草管を投ぐるにも暴く、痾瘻を起して嗚呼彼儘に振り通したら好かりしなと悔みけるが、其所は戀の海の波に採まれ霧に迷ひし經驗ある者の分別愚ならず、吃度心付いて機知見はからひ、晩酌の揚句の道也に向つて、愈々お柳様をお迎へなざるゝも近い中のよし、扱御めであうござりますると二の句か急には出させぬ冒頭を置き、脇座に下らせらるゝ妾の胸の中、随分貴郎を喰ひ殺したいほど正直のところ口惜しうはおもひますれど、何事も底の底まで察しぬいて下さる貴郎に野暮らしう改めて愚癡な申すでもなしと安心して、唯此末尙御見捨てないやう、假令ば芳野の花に御心を移さるゝとも折節は老木の松蔭に一時の雨の間休みし事を思ひ出して下さるやう願ふばかり、何うとも貴郎に委せし身なれば、それは夫で宜しとして爰に一ツ御願ひ申したい事の御座りますが、何と花嫁様迎へらるゝ御日出度さに免じて御許しなされては下さりませぬかと云ふに、氣味の惡けれど平穩く身を下して云ふ可愛さもありて、左様出られては打明ての話し其方には少し義理惡けれど、是も行き掛り堪忍せよ、然しお柳を入れたればとて彼娘は小兒、此解趣つた奴を何の呆漢が餘所にすべきと引き寄せれば、あれ折角汲ん

子に示しけり。烈火と怒りし佐藤拔きは抜いた
る刀ながら何しに可愛娘の血を来なす刃にぬり
て、蝶花と育てしものを無残の風に夢と失せさ
せたかるべき。飛んで出でたる妻、甚蔵、二人
で止むるに任せて勘當するのは堪忍せしが、我
娘なれども我に背いて飽迄で道也に添はむとい
ふお柳憎く、不孝ものめと睨つけ、足あらく疊
を蹴立て奥に入りける。母は甚蔵に突詰めたる
我娘の何のやうな事爲うと知れば氣を注けよ
と眼くばせし置き忙がしげに奥に入りて、連も
あの様子では生命を捨てようともおもひ返しは
爲さるしければ今は詮方なし、此上いろく
諫めたればとて無益に極つたものを繰り返すも
可笑からず、つまりは何處に遣るも同じ事故、
成程身分を詮議すれば少し言分はあるものゝ西
村家として現今は立派でこそなければ恥しい家では
なし、いっそお柳が心にまかせて嫁入らしたか
上分別 たつて成らぬと壓制したところで當人が
長く強情を張らば甲斐なく、若し又一筋氣より
如何な事仕出來さうも知れず、其時になつて夫
程のことならば思ひ通りにしてやらうものをと
悔む例は世間に幾許もあり、氣強いばかりが良
い親ではなし、一旦の御立腹は然る事なれど不
義淫行したといふでもなし、あれ彼通りいちら

しく泣いてばかり居る姿が御眼に映りても不憫
といふ心持にはおなりなされぬか、大切に大切
にして成長した彼娘を、假令が成しの御教訓に
せよ勘當し切つて仕舞はむとは何たる情無い
御心、貴郎一人の娘で妾には娘で無いお柳で
ござりまするか、黙つて居らるゝは御不承知な
のかも知りませぬが、顔も暫時でやつれしやう
見え眼の下も愁ひに黒むまで泣き悲しむお柳
を、無理往生に納得させて戀を無いものにとは
餘り人情の分らな過ぎる話し、常譽らるれば自
然親の好いといふものに心を寄せた娘、何故ま
た夫程に道也様を疎まるゝものなれば初手は頗
りに當世の才物ちや俊れた人ちやと妾等の耳に
も入るほど褒められし、又辻に坐つての塵埃に
塗れてのと仰なれど、男は夫で廢りになるもの
か、お柳の最良して考へて見れば、其御身分に
一旦はなられて而して今の御身分になられしは
褒むるとも謙すにはあたらざる筈、どうでも斯
うなつては綺麗にお柳を遣るより外に良い分別
はないとおもはれまするし、又妾もお柳とも
ども御丁見を變ていたゞきたう願ひますると、
娘に迷ふ親心うつゝなく胸一杯の所存を云へ
ば。黙れゝ怪しからぬ事をいふ奴かな、其や
うに甘い根性の汝が教育たる故、あのやうな不

屑、告ずして走る淫行しての今を尙庇護ふとは
言語道斷、お柳といふ名を聞くさへ親を辱しめ
家風を墜せし奴と腹が沸えてならぬ、よしゝ
彼奴が根性は腐りたり、我何あつても道也風情
と縁に續がるは先祖、知己に對しても口惜しく
忌々しければ、達て了見仕變へざる娘、今より
勘當す、縁切る、親と云うて貰ふまい、子とは
おもはじ、早々追ひ出せ、汝も二度彼娘めが事
口を出して我が氣持を悪くせば此家には置かじ
と、門閥草子廉恥重する昔時氣質の一微氣、素
げなく云ひ放たれて取りつく島なく、女房是非
なく夫に隠し、幾包みの金甚蔵に私とやりて、
なまじひに見ず見せぬ顔、母子の分れの涙を吞
むで、縁はきれども切りきれぬ系統の恩愛、丈
夫にあれと心に念じ、襖の隙より一寸のぞきて、
えゝ未練と自己を叱るあぢきなさ。居れば居る
だけ互ひに惡しと甚蔵は引立つれば、今更我家
の門出るが厭なやうな氣はしなからお柳は夢路
を辿つて甚蔵が家に。
出入の何某が呉れしお道が最愛の人形に、衣
物作つてやらむと縮緬の小切取出し、お萬手傳
うて裁縫教へながらの慰み、お道さま待針の打
ちやうがそれでは違ひます、針を左様握むで
は成りませぬ、おゝ御巧者な其様になされて左

間にお萬が顔は小皺見とも無き健を寄せ、お柳が肌は羽二重稍すがれて、自己も心其往時のやうに活潑々と働かず、前途に至大壯旺の希望あるにあらば、幾度繰り返しても同じ浮世の榮華つひに面白からずなるまゝ餘生を味氣無く感じて、流石放恣の男も年齢が持たする思案とは云へ、少しは後生氣の出でけるこそ不思議なれ。

春風楊柳に渡りて庭前の拾石の根方に小草燃ゆる頃、日の稍長きにお柳は悠然として何心なく蜂の飛び燕の舞ふ後園の景色など眺め居りしが、不圖想ひやる京都大阪の春色が、かれて寝物語りに霞籠むる東山雪滿つる花の嵐山が模様を開き知りて、是非一度は行きて見んと思ひしが、つい其事にも及ばず過ぎしに、今しも花は笑ひ風は暖かならんとする好時節に端無く遊思を動かされて、其日遣也に打向ひ、上方一見所望のよし云ひ出づれば、折柄閑暇のあるを幸ひ、自己も故郷に錦着て一度は歸り、往時我をば見下げたる奴等の眼を驚かして遣りたき願ひのあれば、早速に承知して曆を繰り日取を考へ、不在中の萬事をお萬に任せて旅の準備も等閑ならず、成るべく身の周圍を飾り立て、美しう思ひきつて華麗にせよとお柳お道に吩咐け、供の男、荷

幸領、手代、小間使の小婦まで引き連れ、いよいよ出立といふ日、お萬をはじめ甚蔵其他出入の者どもに送られ、川崎屋の廣座敷で發途を祝ふ酒宴賑やかにせし後、同勢十人ばかり駕輿をつられてどや／＼と立ち出で、勢よく京都を見當に上り行けば、道行くものどもだが眼を側で、全盛の旅行かなと羨ましがらぬは無し。錢が爲す事とは云へ、お柳もお道も知られど同じ此街道を嘗て下りし時は道也一碗の飯一杯の茶さへ甘くは飲み喫ひし得ず、馬輿に乗りて大道の眞中に寛にあゆむ人を見ては破れ草履の襪褌衣服、宿引にさへ輕しめらるゝ我に比べて無益の業を湧せしが、今は其に引き變へて泊り泊りの旅籠屋にても、他の客を逐ひ出してなりと一番好い座敷に請じ入れられ、亭主に平駒の如なつて叩頭せられ、雨の日は輿に晴の日は馬に徒歩に眼に入る青山流水を許し言語風俗を同伴の者と可笑がりなどしながら、昨日は六里今日は五里と、急ぐ事なく遊び歩行く愉快さ、獨り心中に往時を思つては今は喜び、高慢心の満足に肚の裏を温めて、箱根山も平かに越え三島も事無く過ぎ、沼津にさしかゝる時我に金呉れし女ありしを憶ひ起して、若し今も居らば面會はして此態を見せつけ與らんものと下らぬ意を動か

せしが輿をといむることもあらで終りぬ。かくて日數経るまゝ花漸く散り青葉軟風に點つ頃久しぶりにて我が幼時馴染の土地に着きけるがあらかじめ從僕を走らせて舊時知れる加茂川傍の最好き某亭といへる貸席に其意を得させ置きたれば、其家の主人を初め古き顔の甲妓乙妓、其に附いて來りし知らぬ顔の美しいのにまで迎へられて賑はひさめきたつて、先は目出度く安着の大酒宴、おめでたいことでござる御目出度ござりまする好う御歸りなされました夢のやうでござりまする盡きぬ御縁でまた御眼にかゝれまして此様な嬉しいことはござりませぬと四方八方より目出度づくめに賀ひ祝はれて道也欣欣揚々と上座にすわり、そゞろに若い時の放埒無法の所業など語り出で、其夜は夜、一夜騒ぎあかしける。かくなれば勢利に媚びる世の習として、西村の虎さまが如是々々の身分になられて故郷へ花を飾り、嬢様令室御家來まで引き連れて見えられたさうな、何でも一ト器量なる人であつたが大い出世をされた事のと、彼所でも此所でもの噂貸した金の取れぬを怒つたまゝにせしものまでが其様な事は忘れたやうにして進物を持ち祝儀を云ひに行くほどなれば、顔知つたほどの者は皆追從を陳べに、落ち柿の傍へ蟻の

で酔醒しに奉ようとす御茶が翻れまするはと
笑つて、其御願ひといふも妾の爲ばかりでは無
く、お道様の爲やら貴郎の爲やら、又斯申して
は皮肉ないふやうなれどお柳様の爲にもなる
事、お柳さまの方から云うて見れば、可愛い何
處やらの男のところへ生命掛でやうやく来て見
れば、云はゞ戀の仇の姿もあり、生さぬ兄のお
道様もあり、素より御道様を何とおもひもな
さるまじく大切に爲さるべきが、結局貴郎と
の間の鑑ではなくて勿體ないながら贅らぬ瘤
と通じぬ御了簡からなら見るべきもの、それ
これ二人此家に在つては、了りきつた方なら尙
お柳さまの御氣骨も餘計に折れようといふ譯、
又お道さまから云へば今までは眼上はお父様ひ
とり、妾があつても乳母同様に氣安うおもつて
萬やお萬やと遊び相手にもなさり、随分わやく
も遠慮なしに仰せらるゝものゝ、お柳さま御座
つては和しいにせよ御母様と尊みて夫丈の事も
なさられはならず、殊更發明で居らるゝ故に朝
夕、出入、いくらか可愛らしいお胸の中に御心
遣もなさるべく、又お柳さまにお目度事でも出
來なば一入なるべし、貴郎は罪ばかり作つて居
らるゝ悪性もので居らるれば、ホ、三方四方
に巧い辭ふりまくに少し御苦勞なりとも御自業

御自得、も貴郎な庇護ふには及ばれど、妾が一
ツ家にありて始終御傍を離れぬが故餘計そのた
めお柳さまに上手を使はるゝかと思へば其餘計
が氣障で堪らず御氣の毒でたまりませぬ、妾は
元來女なれば僻みもあり嫉妬も強うござります
るが、ホ、起きて居る中は貴郎に負て格氣の
角も隠して居り邪見の牙も咬み鳴らさず、此通
り素直で和しくて謹慎深くて、男が他所の娘に
心を掛けたか、左様か、他所の娘が我が大切の
人を奪りにかゝつたか、成程と、御心よし佛
性、實の名は馬鹿になつても居りまするが其代
り轉寢の夢の中では、毒蛇に髪の毛がなつて火
輪に兩眼が化し、お柳様に取て掛らうも知れま
せぬ程に、斯して下され、何處へなりと烏瓜垣
に淋しくからみ夕顔ものぐさ背戸に生え廻り
たる家でも宜しければ、一軒別にもとめて、其
所に妾と最愛うてならぬお道さまを住まはせ
て下さい、而して月明き夜のそゝる歩行などな
されし折は、妾をば兎も角も、妾に育てられて
何のやうに智慧ついて行かるゝか何れほど美し
うなつて行かるゝかお道さまをば見に来て下さ
れ、眞實昨夜は一夜眠らず、無い智慧うるうて
考へ出した此願ひ、妾の申すこと無理でなくば
好しと云うて、と初可笑く末あばれに中頃は殺

人の針を含める例の物云ひぶり、殊更修理立つ
た人情の亂麻を整ふるは流石に馴れたものなれ
ば、了つたゝ我は汝にあやまるぞと道也笑つ
て、十町と隔らぬところに小意氣な家整澤まか
せに作りてお萬お道を住はせける間も無く、縁
を定むの日を選び、釣臺長持小道具美々敷も母
が陰から助けての業、お柳甚蔵を親にして田町
の家に乗り込みしが、其夜の夢に道也は何を見
しことやら。

第三十一

衣たきものは吳綾蜀錦なりとも好むがまゝに
着ることを得、食ひたきものは天鷲の肉鳳凰の
卵といへど註文次第なるべき道也が今の身の
上、囊中自ら神通力ありて加之出雲の神様の御
最原にあづかり、朝夕は海棠三分開くといふや
うなお柳にかしづかれ、折節は蠟月梨花が照ら
すとも擬ふべきお萬に機嫌とらせて、愚物が羨
む歡樂を極めたるが、君子は樂んでますゝ、徳
にすゝみ小人は樂んで漸く神を喪る世の常例、
春を笑語の聲裡に消し去り秋を登臨の快事に費
したる中、歳月は絹絲の火に燃ゆるより速く經
ちて、鏡中の紅顔をといむべき力もなければ鬢
邊の白髪は憎めども多くなり行き、瞬くほどの

違つては居らぬかの、我等の考へでは皆揃うたを幸ひに道也殿を招くよしな浮珠殿に話し、皆で頼うて浮珠殿に主人になつて貰ふが可いかとおもふ、客は當世の才物ちやに主人が我等では少し先方でも面白くないか知れぬ、浮珠とのが主人ならば彼人は當時天下一の鑄物師ぢやる、假令は道也何程技術をあげたればとて器量では知らぬこの技術では浮珠殿に敵ふまいなれば、我等も浮珠殿を主人にてならば西村の前に首ばかり下げて居らいても濟むこと、少しは此方も脊骨を真直にして力めるといふもの、何と此分別間違ひではあるまいと陳べたつたは、聞けば成程無理でなし。是は好い案じつき、我等の心付かなかつたが手拔であつたと衆口同音の評定にて、よしさらば直に浮珠殿かたに行くべしと彼老夫を先に立て大西の家をたゞき、仔細一々演べ立てば、浮珠額を撫で、綺麗に元けたる頭顱に及ばし、齡こそ老たれ未だ水光りのする眼の尻に愛嬌の皺を寄せながら袖無し羽織脱ぎすて、厚織の座蒲團の上に何時の間にか整然坐りこみ、さて莞爾と笑を含み、折角の御頼みなれど浮珠は其主人になることは謝絶り申しませう、皆様の中に何人なりと主人役をなさるゝが宜しからうと思ひまする、他の事は随分何に

ても御頼みとあれば辭きませぬが此度の催しにだけは御免を蒙りたうござりまする、少し考へるところのありますればと、何時も皆の相談を打ち消したことの無い結構な老爺様の何日になり承諾、さりとは不思議と彼理窟爺さゝみ出で、御承知下さらぬは皆の仕やうといふことの筋道に間違つた譯でもござりましての故か、若し此催し悪いとならば唯一人御前様の御言葉に背くものなければ皆廢めまする、御承知下さらぬには仔細なくては叶ひますまい、少し御考へなさんとこのありてとならば何卒それを御聞かせなされていたゞきたし、御前様の聲一つで我等燕のやうに喧しう長う相談いたして埒明かぬことさへ決定つて終ふが常でござりますればと問ひ掛くるを、片手ふつて打ち消し、皆の催しを間違うて居るの悪いのといふ譯では更にない。それならば主人役つとめては何故下さらぬ。それは少し考へがある故。さあ其考へといふを御聞かせなされて下さつたとて好ではござりませぬか。左様老夫を責めらるれば仕方がない故御話したすが決して悪うとつて此浮珠が年甲斐もなく、人の好事に邪魔を入れるの皆様方の催しに批を點つのおもて下さるな、考へといふは他でも無いが職人といふものは商人

のやうな氣をもつて居るべきものとはおもしろぬ。また此浮珠は數なられども何處までも金の座の釜師ぢやと自分を定めて居つて半分は細工人半分は徳徳詮義の商人といふやうなものにはならぬ丁見、馬鹿とは云はるゝか知られど溜増を引提げ烙鐵を放撒るより他のことは何も知らず又知りたくもない。地を好くせう色を好く出さうの他には願ひもなく又願ひたくもない。各位は何とおもはるゝか我は此齡まで是が細工で天下の米の飯を食ひ潰して行くものゝ有つべき心得ぢやと若い時親父に教へられたまゝを爲て來て居るが、段々老込んで來て此二年三年はめつきり此心得が技術を磨くには大切のことぢやと身に浸みて覺え込んで來ました。大凡御武家様にもよらず御出家様にも限らず農夫衆商人衆皆それゝに其道について一分の意地といふものを立てれば濟まぬが世間の習ひ、武家は武家の立つべき意地出家は出家の立つべき意地があると同じく、身分は鄙しい職人風情でも職人は職人の意氣地を立てねばならぬ、浮珠は老耄ても先祖にも近い人にも名を知られた人を家筋に有つて居て何として此意地を捨てらるべき、假令は明日が飯に事缺くやうなればとて佳いもの作らうゝといふ意氣地を捨てゝば世に立たぬ

寄るごとく群りあつりけるを、道也は腹で冷
笑ひながら皆其等にも悦ばるゝやう仕向けつ、
扱お柳お道等を其等の奴に取り巻かせて所々の
見物などさせたが、自己は一通の案内狀もた
せて大西はじめ釜九釜安なんどいへる釜の座の
同職業のものに従僕をつかはし、明日丸山の某
阿彌方に御いで下さるべく今昔の御話も伺ひた
く又いたしたく、永年の御疎音を謝罪がてら既
往の交際を此後長く續いていたゞきたき願ひな
ればと云ひ込みたるに其日になりて我を争ひき
たる人々大抵揃ひけれど、昔時より我家が彼家
かと重く取られし大西の淨珠ばかり見えす。今
や來ると心煎られは爲ながら待つに時經てど影
もなし、もはや遅くとも來るべき筈なるにと少
し緇癢さへ起るところへ、淨珠様方より御使价
の來りて是を西村様へと云ひ捨てに置いてまゐ
りましたと婢が取り次いで出す書狀、此方より
遣りしは紙も無下なるものは用はず、薄墨を不
敬なればと嫌ひて書體も無作法ならず謹みて書
き送りしに、これは又失禮きはまる書狀、半切へ
濃かぬ墨にて飛白筆だらけの無造作な書き様
なる上、文句もあまりの無味さ、足痛ありて歩
行叶はず參上いたし難しとは何事ぞや、足が痛
めばとて駕籠もあるべし馬もあるべし、我を何

と見下げてか此様な仕方、覺えて居ゐと惱り
たるが、淨珠座にあられば暗唾もならず、惱つ
て見ても甲斐なきに、憤然として怒火腔に充て
ど押隠して知らぬ顔をつくるひ、釜九釜安等が
前に出で、豫て準備の饗應等閑ならず、京都を
出し後の話し、毛利侯に見出されし話し、島津
の殿様に用ゐられて大砲鑄造の御用つとめし話
し、將軍家へ姫君入興について御嫁入り御支度
の諸御道具鑄物一切を自分承はりし事など一
物語れば、固より腹に見識なく根に學問なき
鑄物師とも異口同音に道也を賞讃たゞへ、其立
身を羨むのみなるにぞ少しは是に慰みて、心の
不平も癒しける。

釜の座の鑄物師ども道也に充分饗應されて、
各自丁寧親切に接待はれしに心悦び、且は其
立身出世を羨ましくもおもひ、又道也に近づき
置かば好き事も或はあらんと鄙き念をも底に含
みて、二人三人打ち寄りて相談するやう、馳走を
受けたばかりにて其儘では濟まされまじ、一體
を云へば此方の者等が彼方より先に祝ひて然る
べかりしところ、同じ釜の座の鑄物師の中の一
人が他郷へ出て立派になりしは取もなほさず釜
の座の名譽といふもの、道也は畢竟京都の釜師
の肩身を江戸にまで廣くせし才物、鑄物師も多

かるべき京都に出て上方仕込みの腕を揮ひしは
其往時の放埒不品行の罪を消して餘りあるとい
ふものなれば、我等申し合せて先日の禮謝がて
ら盛んなる酒宴を催し、皆幾干かづ集錢して
道也を招き取かしからぬ饗應をなすは如何に。
道理々々、左様なくては我等餘りに甲斐性なき
者と見られむ、是非とも其催しかなすべしと誰
も彼も同意して遂に彼日出會せしもの皆不承知
なく、いよく何所かへ道也を招くことに定ま
りしが、中に分別自慢の爺一人ありて日頃何の
相談にも異な理窟を拈り出し、たまゝ我が云
ひしことの取りあげらるれば鬼の首でも獲しや
うに悦ぶ質なるが少時考へて、高慢氣に、然し
と云ひ出しながら首を傾げて上眼をつかへば、
又何か云ふかと皆々振り顧みるに、爺仔細らし
く腕を組み、皆の衆の相談を破すではないが一
ッ考へてもらひたいは淨珠殿の事なり、彼人先
日は來り會せられざりしが其は何か都合のあり
てなりしなるべし、道也殿よりは無論招ばれた
事ならんが、皆も知るとはり當時釜の座の者等
の中で技倆といひ家柄といひ年輩といひ我等
が無論頭上に載せて何事も今まで相談して來た
が間違つた事ではない。然るに其淨珠殿が先日
見えなかつたとて此相談から彼人を除くとは間

上篇

元氣よかりし雲雀の聲、入り相の鐘に收まりて、春の日の暮れ方しづかに、柳の蔭より段々暗うなりゆけば、頓ては小流れの傍の白鷺、獨ばかりを染め抜いて、地の塵に見せぬほどの月の光り柔らかに世界を罩め、霞みわたる鎮守の杉の森、庄屋殿が背戸の竹藪、そよりともしで諸鳥夢にあたまる夕べの景色、風流知らぬ男も、さも心持好さうに眺めて、銜へ煙管のけぶり長閑なれば、喚ば晝休みに一寸摘んで置きし土筆煮て、我が手柄を、疲れたる夫の膳に薦めんと、いそがしい中にも、背面から廻りて蹠み居る肩越しに首を出す我子に、これか乳房を見せ共ニ笑ふ風情、極樂は此處より遠かじと思はるゝ田舎に、ざりとては村はづれの一軒屋、柱よろけて屋根の葦大分黒く、然も去年の冬は何として凌ぎしぞ、あら打ちの壁土あらかた崩れ落ちて、今それより洩るゝ問答の語氣ゆたかならず、痾ばしりたる女の聲も蓮葉に。まだ欲

しいと云はるゝか、其大きい腹も身の内大概にせらるゝがよし、わたしの足はもう酔つたれば、厭なりいやなり、歩行は厭なり、それに錢でも持つて行くことか、何時も拂ひをわろくして置いて、借りて来るゆる向うは商賣でも碌な顔せず、先刻もたつた二合ばかりと、三合と云ひたるところを、弱身あれば此方から遠慮して出たのに、あの伴頭め、酔を管めたやうなむづかしい容體をして、此三十日は確かに勘定すまして下さる當がござるか、三月も前の分がまだ其儘になつて居る始末、しかと御請け合ひ下さらずば、上げ憎うござると鹿爪らしい切り口上、此の禿頭め、人の運は一寸さきも知れぬものを、行く末を見た風な云ひ草、あてがござるか無いかと、能く／＼さげすんだ言葉、なんの地酒ぐらゐ、よしや一石二石借りになつたとて、蛙の居る溝の水を産湯にあび、藁筵の上で這ひ這ひ稽古して育つたおのれら土百姓に見くびらるべき罪はもたず、齒糞一ぱいの口をして小癪なこと云ふな、と一本やり込めてやりたかつた所

なりしが、さうしては今夜飲めすと、蟲を杉の香に殺し、くやしいのを耐へ、無理に御世辭笑ひをあんな奴に振りかけて遣つて、ほんに先月はお氣の毒な事しました、實は地金の廉いのを餘分に買ひ込みましたため、お拂ひ申すことが出来なくなりましたことにどうも、其代り今度は御紙や鏝など色々と註文を受けて居りますれば、間違ひなく先々のも一どきに御勘定いたしませうと、仕事も無いに眞赤な誼を一寸こしらへて甘く欺して來た仕直なれば、又行くのはわたしは厭なり、飲みたくは御自身で白丁さげてお出なされ、あまり氣の利いたものではなし、わたしはもう澤山、何、おれはまだ酔はぬとお云ひのか、成程半分の餘はわたしが飲んで仕舞ひました、それで悪いのならば、あやまつて、ア、眠たし、おわび申して寝ませう、夜は短し、愚圖々々せずと殿様もおやすみなされ、フ、えゝまだ何を五月蠅く小言云はるゝか、親切な人なら、わたしに裏の清水一杯汲んで持つて來て、酔ひ覺めの甘露をすゝめるほどの事は、働きの無い腕でも成りさうな者なに、何處の國に男が酒飲ませてと女房をせがむ、とのあるものぞ、オヤ、御叱りでは恐れ入ります、お叱りは恐ろしい事、イエどう致して、殿様を馬鹿にな

覺悟、道也殿の出世を我とても見知り越しの仲
で目出度がらぬではなけれど其を仰々しく嬉し
がらぬも淨珠は淨珠の意氣地を有つて居ればの
ためなり、若も道也殿彼様に恐しう立身をされ
ずとも、又よしや何所の山里で小な篝爐一ツし
か無いやうな微祿な生活様して居らるゝとも、
何か佳い物を鑄かれしとか類すくなき妙作を仕
上げられしとか聞かば、其時はわざ／＼招かれ
ずとも我は我の意地で百里なりと二百里なりと
尋ね行き、嗚呼嬉しい手柄を好う斯道のために
爲て下された、同じ釜の座から汝のやうな技倆
の人の出たは顔知り合つた我までの名譽と何の
やうにか目出度がり嬉しがり、腰は弱くなつて
も此老父一番先に立つて眞底から骨折りを勞ひ
功名を悦び合ふ酒宴も開かうなれど、道也殿を
蔑視めるでは無いが立身は爲されても我には左
程嬉しうない出世はされても此意地張りの老父
には目出度も左程おぼれぬ輕薄追従をならべ
て御目出度ござる御悦び申しますと頭を下げ手
をついて心にもないことを云ふは此淨珠には生
命になつて居る職人の意地といふものが有つて
出来ませぬ。それ故に氣の毒なれど先日せんじつの會に
も出ず、今日各位に勧められても主人になるこ
とは御謝絶申します、あゝ情無い彼程の氣象な

リ才智なり有つて居られながら道也殿は此我に
茶一杯馳走させらるゝだけの事がまだ今までに
は出来て居らぬやうな、おと思はす餘計なこと
まで饒舌ました、此事道也様には御洩し御無用
でござりますると述懐まじりの一ト風の見識あ
る談話聞いて皆の者合點し合ひ、道也を饗應す
相談は已みけるが、この事いつとなく耳に入つ
て、道也一生これを思ひいづることに齒を噛み
恨み惱みける。

長々しきものがたりに叫雲やゝ疲れて漸く終
れば、ゆかり式部が一服の茶を奉するに喉を潤
し、後は主客おもひ／＼の雑話にわたりて日暮
るゝころ我叫雲と共に歸りぬ。

(明治二十四年夏作)

摩次第に細く、男は却つて興に乗ずる故か氣も大きく聲も高くなり、くらしを苦にするお蘭の話した打ち消して、ハ、ハ、と奥底なく笑ひ、天井の一番遠き隅へ酔を吹きかけつゝ。其様にくよく／＼せずとも居れ、思ふ同志かうして暮せば、下物は鹽からき香の物ばかりでも我は嬉し、さきのやうにそなたに怒られさへせれば貧乏も左程に悲しからず、蒲團は無くとも十布の菅蓆、きみなな／＼ふにわれ三布にと、江戸を出る前そなたも元氣よく、陸奥の果てへなりと連れて退いて下され、憂さもつらさも厭ひませぬ、と小歌まじりに我に云うたではないか、と女の頬をちよいと突く。其指先を捕らへて痛くもないほど嚙んで突つげなし、およしなされ、わるさなさるゝな、そんな手であどけなく悦びしは浮氣で逢つた昔、可笑しくもなし、女房なればこそ心配して、世帯じみた野暮の話しも酔に出て來て爲るものを、と尻目づかひに力を入れてツンとしながら睨めば、男は頭を掻き／＼。さう云はれては面目なし、縁とは云へ夫婦になつてから亭主のくせに帯ひとすぢ買つて遣ることもならず、實は能く愛想をつかさずに居て呉れるが、若しや見限られはせまいかと、此太い腹の中でひや／＼することも間々あるが、我として一生か

うでもあるまじ、又よゝ運の芽が萌えて。サア其運の芽の萌えるのが此儘では些覺束なけれど、何ぞ樂しみにするの的がありますか、と推されて男は少し行きつまりしが、ハ、ハ、ハ、と笑つて、マア飲みやれ、と猪口をわたし、丁寧に注いでやり、扱昂然と身を反らして。別に變つた目當もなければ、かう見ても此の正藏は當時天下に第一と云はるゝ武藏守正光殿が教を受けた、かたじけなくも、天の麻比止都禰の命の流れを汲んで、腕は十二の春より鍛へ、四方詰め、三枚張り、二枚張り、いづれも會得し、つかれ、上わかし、伸べ鏢かしの呼吸を心得、陰陽大事の焼刃渡し、甚深秘密の湯加減まで確と骨髓に刻み付けて忘れず、棒劔、五分ぞり、八分反りの次第より、ひら作り、菖蒲づくり、冠り落しの色々まで宙に覺えて、短劔長劔作るに成らずといふ事なし、かくあさましく零落れながら高慢すると思ふか知られど、恐らく日本六十餘州の刀鍛工、見渡した處我が上に立たすべきものも無し、道にたづさばりし先後こそあれ、我が朋輩弟子を我眼にて擇み取りにして相槌となし、一心こめて打つて上ぐるならば、師匠が作にも劣らざるのみかは、虎徹繁慶をもをさ／＼凌ぎ、天晴れ末代に傳はるべき寶劔をも成し

得べしとは日頃此胸の中に蟠まれり、されど悲しきは世にまことの眼をもてる武士は少く、正宗といへば鑑下の腐りたるをも千兩に買ふものあれど、名もなき鍛工の作といへば、五十年の生命を僅か二尺たらずに縮めて鍛へ成したる利刀にも、十匁の銀を惜むが常なり、然しわれ此腕に覺えあれば何日かは名をあげ家を起す時來るべし、といふにつく／＼聞き惚れ居たりし女房滿面に笑みを含みて。名もあがり家も富まば何程嬉しからうぞ、其時わたしを我儘者として捨て玉ふな、忘れもせぬ去年の春、私が迷うたが無理だつたか、え、此の憎い男め、と、お蘭がさす猪口を正藏手ごとに握りて。何の捨てゝ好い者か此の我儘者をと、あとばかりつそりして、ゆる／＼わたり來る遠寺の鐘の音低き軒を繞り、眠さうなお月さま桔槔のあがれる端に憩ひ玉ふ。

中篇

むく／＼と肥りて大きな白狗を供になし、銀ぐさり御自慢の淀屋橋が二ツ提げを腰にぶらつかせて、兩手を背後に組んだまゝ。正藏殿能く精が出ます、と聲をかけて、のそり入り來る五十以上の爺を、お蘭見るより亭主の返答を

どは致しませぬ、まことに能く才覚のお廻りなさる、智慧のお有りなさる、貧乏にはおなりなさらぬ、奥方の衣類櫛簪を質にはおいれさせなさらぬ、結構な股様をどういたして馬鹿などには少しも致しませぬ、昨日此頃の様に苦しからぬ世をわたり、將軍さまの御餐を吹く風が通ふ江戸の町で大きうなつたわたしが、かゝる草深き片里の酒屋の奉公人などに易く取扱はれぬのも、皆殿様のお蔭なれば中々ありがたく思うて居ります。と見事に饒舌つて退けて、がちと爐ぶちをばたき、何の詰つてある煙管の腸ぞ、鈍なものめが、役たゝすと抛り出せば、今までおとなしかりし亭主の聲少し太く。酒買ひに行くが厭なはいやでよし。我に突きかゝつて来るには及ばず、恨みがましい文句は、云はば互にあり、我もおのれ故にはもう一年で天晴れ師匠様より許しを受け、立派な刀鍛工になるべかりしに、ついた事よりおのれに引かれて、あの武藏守正光殿に精の初中終の吹き様から教へて戴きし大恩を餘所にし、共に逃亡して故郷へ歸つたれば、一徹な親父様の承知なされず、師匠の家の敷居内へ足踏みのならぬやうな事して來たもの、我屋の鴨居の下はくぐらせじ、其女と別れて武藏の守殿に詫が叶たうらば兎も

角、左なくば勘當と云はれし其時、おのれも覺えて居やうが、おのれの涙ぐんだ眼と、我眼と見合せてふびんさ堪らず、勿體なかつたが親父様に背を見せ、二人手を引き合つてそれから此所に落ちて着いた者の、好い仕事はなし、口惜しいけれど農具鍛冶となりさがつて此通り、おのれが叔母の家を出る折、浚つてきたと云うた金も衣類も皆無くなつたのがおのれは腹立ちながら、師匠様親父様に逢ふ事ならぬのが我もなさない、ア、もう今夜は酒は飲むとも甘くもあるまじ、愚癡は五分々々、云ふも詮なき業はやめて我も寝るべし。と妻に怒りし言葉の末脆く、遂には獨り言をほに立ち上りて、みづから月締りせんと、貧すれば是も不如意の雨戸がらがら引き寄せしが、歸りさまにいきたなく臥したる女を見て思はず呪め付けしや、おのれめに迷うて、と口の内につぶやきける。されど情ばかりで義の無い出来合ひの夫婦中、濃いだけ互に許せし勝手より、いさくさが出て一悶着、済んでは又も情ばかり残るか、お蘭、お蘭とやさしう呼びて、寐びえするなと何やら掛けてやる様子、其時女房いきなり飛び起きて閉めし戸を瓦落り明けしまし、駈け出す姿しどけなく、衣裾ほらく、臍白し。

少時して片手に徳利さげながら片手に棧とつて、小草の露の珠を踏み分け、惜氣もなくおぼろ月に美しき面を見せつゝ戻り來しお蘭、我家を一寸覗いて後、足を清めて靜かに上り、ぼんやり考へ居たる男と爐をばさみて坐りぬ。酒あたまるを待つ間長々と、此は啞、彼は盲目の中淋しかりしが、頓て鐵瓶より小壺引き抽き、一盞飲んで見て、お蘭其猪口を直に男の手に載せ。サアお烟も丁度よし、心よくあがつて下され、さつきのいさくさはわたしが負けましたれば、あの元頭を骨折つて口説き落し、漸くこれだけ又取つて來ましたを、ホ、ホ、ほめてやつて、堪忍して下され、あやまりますに、機嫌直して笑うて仕舞うて下され、まあお重れ、と折れて出て、惚れた女が侑むるにたわいなく、受けて、受けて、遣つて、貰つて、又遣して、強ひて重れさせて、すけてやつて、双方酔うてゆつたりして、見れば女房が水婆の少しく亂れたるも可愛らしく、亭主がでつぷり肥え居て、しかも常から愛嬌ある顔の、眼のちいさく、と涼やかな今、ひとしほ憎からず、夫婦互に陸まじく語らへば、妙なもの哉、心やはらきたる女の

しい時は、思はず髪をむしつて惡口を壁にたたきつけるほどの日もあれど、それでも怒らず大やうにやさしく扱はれては、又急にむらゝと可愛くなつて、我血を吸はれ我肉を剥がるゝと此人には惜しからずとおもふ夜もあり、それかとおもへば何事か云はれし時など忽ち厭になつて、瘡に障つて、譯もなく腹が立つて、我が眼の前に其人の見えて居るのが忌々しく、我が眼をつぶして仕舞ふか其人を灰にして仕舞ふか、どちらかにして仕舞ひたき様な心持ちする折節は、我罪を責むるのか其人を恨むのかも分らずに苦しくてたまらず、其中いつも瘡が起つて足元より寒風ぞつぞと立ち、胸は暫時に厚氷りに閉ぢつめられて動と倒れて黒闇の底なし井戸に身を逆しまに落ち入るやうな切なさ、しつかりせよと云はれ、漸く心附でばんやり其人の顔を見る時は、ア、前の世の敵同士でゝもある事かと氣味の悪い事たとへ難き瘡のあと、今考へ出しても厭なり、好いた男と共に住みて貧乏するのみか此のくるしみ、これも若しや添ひ遂げられぬ行く末のしるしかとおもひまはせば、惡縁を結びし初め恨めし、えゝほとゝゝ此我をだましてかゝる運に沈ませし我身の昔が恨めしくつてと、ぐたりとせし身のいつか堅くなり、

左の手を強く取りしほつて、顚埋めし着物の襟か頼き嚙めば折から風に烟つて舞ひ込む霧雨、細き首筋にひやり。
硫黄の毒の煙り、眼に浸み喉に立ちて苦しきを、空中で拂ひ返けんとするに、掴める者ならねば我が手の力の及ばざるが口惜しき如く、思ひに薰べられ、迷ひに焦がされてお蘭をせろに悲しく、貧家によき名のは是ればかりの自在鍵より藥罐をおろし、いたづらに湯を我男の湯呑みに注ぎて、一口飲めば、これさへ心よきほどは熱からず、水に近きが業腹なり。
溜め息一つ色々の恨みに長く、やがて火箸を取つて何心なく灰に埋めし爐の火をかき起せば、豆のやうに小ささが五つ六つ、ちつと見る間に瘦せ行きてそれも遂に果敢なし。えゝ忌々しと譯もなくかき廻し、末は火箸を投げすて、ぐるりと横を向く途端、見つけたる麥苗の間を庄屋と共に此方へ来る夫。應、歸つて來られしか、用は何事なりしか、早く聞きたきに、あの歩行きやうの大やうで遅いのが齒痒し。我家を見たら駆けて戻つて女房歸つたと飛び込んでもよささうな、あの年寄の庄屋にまで後れて、アレ霧雨の今晴れて、悦んで出て來た蝶々が、肩にとまるやうな薄のろい歩行ぶりは何事で、

人が淋しがつて待て居るも察せず、と思ふ内眉明らかに知るゝほど近くなれば、草履つゝかけて四五間走り出で、我が男へは眼ばかり遣つて言葉は庄屋に。好う早くお歸りになりました、道がわるくて定めし御こまりで、と例の早口に話しかくるを、今日中は中々皆まで聞いては居す、庄屋は乾枯びた顔に笑窪を作りながら。コレ姉御、魂消なさるゝな、實は其、其、實は其實は其大變で、えらいもので、青緞では無いばうで黄色のばうで、何にせよめでたしでござる、正藏殿は良い男でござる、首つ玉にかじり付いて替めてやりなされ、ハッハ、是は嬉しからう、ハ、好いの、左様なら又明日見舞ひます、と一人嬉しがつて無性に手を振り、一つ所に立ちとどまり、虚空を足で幾度か踏みながら、辻棲の合はぬ事云うて、庄屋はいそゝと歸るに引き替へ、亭主は屈託に頭重き様子、女房が心は何しら雲につゝまれて中有に。
* * * * *

何が心配になつて其様に浮かぬ顔せらるゝかと屢々女房に問はれて、是が苦勞の重荷と、ごろり、懷中より二十五兩つゝみ二つ投げ出せば、お蘭眼を丸くして急に手に取り上げ。如何な事、

横から奪つて、うすべりの塵埃をはたき。マア且那樣はへおいでなされ、其處は火が飛びます、火いちりの仕事場はまことに危なうござりまして、サアお構ひなくすつとこちらへ御通りなすつて、と下には置かす口早に饒舌れば。ハア姉御の世辭は甘いものでござる、どうしても江戸の衆は違ひます、村一番の愛想よしだと若い者達がほめるが、實は其無理でない、と無遠慮な評はしながらも、向う鐘の小僧が歳を過ぎて茶の間に上つてから、女房が汲んで出す麥湯を戴いて飲むさま流石屋上の禮儀正し。其間に亭主爐前を立ち手を洗つて來り、丁寧に時候の挨拶すれば、唯はいくゝと受け應へばかりして、さして膝の上に指の股ひろげて載せ居たりし手を少し後へ引き、言葉をあため、今日わざ／＼まゐつたは外でもなし、實は其、此村の鍛冶を同道して明日御城下の御家老様の御宅まで來いとお知らせが來たなれば、實は、何事かと魂消たが、實は其、おたがひに實は惡黨ではなし、實は又、あしき事にはあらざれば當人ももと安堵してまかり越せとの、實は有り難い事故、實はさつぱり譯が分らぬが、實は其、正藏殿、萬一そなた兎狀持ちでもあるなら、實は大變なれど、そなたはまこと、實は善人、實は其、

少し不料簡で、實は其近所の娘とれんごろし合つて駈落をして來たといふだけの事とおもつて居る、しかしそなた、實は又、ほかに又不義密通ではありはせまいかと疑ひもしたが、それがあらはれたにしては御家老の所へ呼び寄せられるが變なり、實は又今の殿様は結構な有り難い殿様で、下々の事をどういふものか詳しく御存知で、孝子貞女などは此村でばかりも三人呼び出されて青緋を賜はつた位なれば、そなたも何か良い事のあるではないかとおもふが、實は其、親に勘當を受けて居る孝子もなし、又そなたの女房は他人に向へば東風でそなたには西風だといふ噂なれば、實は、姉御耳をつぶして居て下され、實は其、たしかに御ほめにあづかるほどの貞女でもあらずと考へられるが、兎も角も明日は我等と共に城下に行きませう、他へ出ることはなりませぬぞ、仔細の分るまでは我等も、實は其、心配でならねど、御上の御用は謹みてする我等故、實は其、知らせに來たので、實は其、實は其、エ、實は其、用はこれだけなりし、さらば明朝、と云ひ捨て一禮し、犬に送られ導かれて歸り行くうしろ影、小僧は見送りにて指さしながら、ハ、ハ、ハ、あの附け鰯が日に

餘計な苦勞かけたかと、自分で自分の昔しが悔

薬葺屋根に音もせで降る春の雨も枝に知られて一ト際しなへる山吹の花折り／＼は水に點頭くを、障子明け放して身を行書の足のやうにたわいなく柱へ憑れながら眺め遣りつゝのあゝ、あれも小本讀み倦きた眼を移して我が庭の隅に咲き居しを見付け出せしときのほうが綺麗なりし、其の頃は苦勞といふは身だしなみばかり、湯で逢つてさへ近所の同じ歳恰好の娘たちに、お蘭さまのおぐしのいつも御見事なとほめられしほどなりしが、今はそれが鏡へも向はずぐるぐると束れて、差し櫛もすき透るものばた／＼一枚も持たず、じめ／＼する此天氣に濕氣たる着物一枚とは何といふさまぞや、叔母さまの云ふ事きいて表具師の所へ嫁入りせしならばかうなるまじきに、其男めの濡れ紙のやうにしくなしたるを蟲が嫌ひ、一つにはつい馴れそめし今の人の大やうなるが骨に浸みて可愛らしく、後先も見ず、雲をあてに逃げてからは悲しい目ばかり、それもよけれど一緒に暮らして見れば大やうが大やう過ぎて心の働きが鈍い殿様、ほんにどうして此やうな野呂間に惚れて叔母様に

親父様の勘當もゆるしてもらひ、天下晴れての戀中と古い友達に羨ませて萬年も楽しく、ホ、ホ殿様御臺まで中よく暮らすばかり、ア、行末が見ゆるやうな、と眼を細くして、うとくとしかけ。ア、かうして居る間に眠る、わたしは今とろくろと溶けて行くやうな好い心持、と甘ゆる物云ひの情濃くなづまれて、肉躍るほど可愛きにつけ悲しみ深く、え、無懣、何として我が腹中の苦しさを告げて、まづい事を此しをらしい耳に入れらるべきや、と思はずホロリと落す涙、頬にかゝれば女房飛び起きて男にしがみつき、しげく顔打ちまもり、此方の人の隠しだては恨めし、先刻よりの様子と云ひ、今の一ト雫は何處から出し熱いものぞ、心の底を何故女房には打明けられぬ、おまへのふところに此生命を投げ込んで居るわたしに餘所々々しいはあまり酷し、云うて聞かされたとして善惡ともに後へ退かうやうな未練な惚れやうはせぬ女とはまだ思つて居られざりしかと、纖かな身體を打ちまかせて口説き立つに、亭主ますます堪へられず力任せに抱きしめて聲曇らせ、お蘭お蘭、ゆるして呉れ、悪い事は皆我に在り、云ひ出しかれて居たれども云では叶はぬ仕儀、一ト通り聞いて我をそなたの思ふ存分に

せよ。實は今日殿様よりの御言葉をうけて我が命は最早斷えたり。仔細は語るさへ恥かしきなれど、十日ばかり以前の夜、そなたに向つて我が云ひし事のどうしてか残らず殿様の耳に入りしと見え、我を天晴れの鍛冶と思ひ込まれての御恩命あり難いは山々なれど、悲しいには此腕が鈍くて、中々師匠を凌ぐほどの銘作の出来やう筈なく、御辭退申さうと思つても過ぎし夜の大言を知つて居らるれば云ひ誤けの無きに苦しみ居し内、庄屋めが御請けして仕舞つたれば其れを云ひ崩すだけの智慧は尙々出でず、ぐづぐづと大金まで頂戴して來たものゝ、歸る道すがらも夢路を辿つて、草も木も眼には見えす、所詮良きものを作り出されば大金迄戴きて置きて御上をいつはる罪重きお咎めに逢ふは必定、又今さら我が腕前を有り體に申し上るとも御上に虚言せしやう取りなされるれば是も御咎めを受くるは知れし事、腕さへおぼえあらば嬉しよろこんで随分と念を入れ鍛ひ成すべけれど、コレどうか計して呉れ、まことは先の夜そなたに云ひしは、惡い氣でせしにはあらねど、そなたの心をやすめやうばかりに不圖出來心でつい口走りし譯、元來は我鍛冶の道には十年の餘もたづさはつて精を惜まず勵み習ひ、法はあらかた知

たれど、性得不束にてとても天下に名ある鍛冶たちの中に出づべき程には至らず、よしや一念を籠めて作るとも人の眼はあざむき難き鏡、忽ち見あらはされて尙さら重き罰を受くべしと思へば、如何にともし仕方なし、此上は頂戴せし金を封のまゝ残し置き、云ひ譯の書き置きをして出奔するより外はなし、御慈悲深き殿様に對しても、御家老様に對しても、庄屋殿に對しても、そなたに對しても、合はすべき顔もなく出すべき言葉も知らず、自分ながら腑甲斐なき身を口惜くは思へど、正直のところは此始末、定めし愛想もこそ盡きたるなるべし、されどそなたに見ばなされたりとも、それを恨める身ではなしと、つくづく我が愚を悟りたれば、我をすてて働きのある男をば見たて、行末長く榮えて呉れるがまだしも望みなり。さもあれば我は此世をやめて、山寺の坊主とも雲水の修行者ともなるべし、くれぐれもそなたに好い加減の事を云ひし罪は此苦しみめにめんじてゆるして呉れよ、と涙ながらに長々しく語り終れば、お蘭は赤くなり青くなり聞き居しが此時常にかへりて。なんの、水臭い、別れ話しはやめて下され、誰が男を坊主にさせてよいものか、聞けば皆殿様が餘計なお世話、此處ばかりも日は照らす、手を

大金を粗忽にするとは勿體なし、然し餘りに不思議で肝が潰るゝ、マア是はどうして持つて歸られし、と膝すりよすれば。聞て呉れ、今日庄屋殿と一所に御家老さまの御屋敷に上つたれば、少時待たせられて、足のしびれを忍ぶ内、やがて恐れ入つた事には立派な御座敷へ侍に案内されて通り、直々に一つ間で御目にかゝつて御用を伺へば、御家老様とは仁體よき中年の御方、御聲やさしく、日本一の刀鍛冶正藏とは其方かとの御尋ね、吃驚して疊に頭を埋め、正藏とは全く私の名なれど果敢なき鍛冶、中日本一など申すにはござなく、それはお人違ひなるべしと申したるに。コレあなたばなぜ其様に弱い事云はれし。イヤ、マア黙つて居よ。イヤ、辭退には及ばず、其方が業の當世に勝れて虎徹繁慶にもまさるべしといふ事まで告るものあつて残らず御上にも御存知なり、扱わざわさ呼び寄せしも餘の儀にあらず、上の御意なれば確とうけたまはれ、と云はれて、惣身に汗かきながら愈々恐れ入つて伺へば、我が領内にそれほどの名工あるを知らず、むざ／＼と零落れさせしは残念なりし、急ぎ其者に命じて一ト振の新刀を作り出させよ、其れを功として取り立て得さすべしとの有り難き殿の御覺召なり、

されども其方まづしくして、向う鎧にも仕事ある時だけあやしき近所の小僧を雇ひ居るといふことまで明白なれば、我に一切其方の都合よきやう取扱からひ得さすべしとの残る方なき仰せなり、其方が相鎧に欲しきものゝ名を指せば直ちに此方より人をつかはし、江戸よりなりとも京よりなりとも掛け合つて迎ひ取るべし、又色々の入費もかゝるべければ、貧賤の其方迷惑ならむと即ち假りに五十兩下し置かるゝなり、尙日限百二十日を期して天晴れ業物を鍛ひ成すに於ては、十分の御褒美あるべき故、恥と覺悟いたし粗忽なきやう勵むべしとの御云ひ渡し。又庄屋に向はれては、正藏儀は大切の上の御用を勤むるもの故、其方十分に心付け便宜を與ふべし、事首尾よく成就せば其方には勿論御褒美あるべしとの云ひ渡し。我は何とも云はぬ間に、あの庄屋めが一切我に代りて御受け申して歸つて來た夢みたやうな話し、と始終を語れば、お蘭が眼の周り、眉、口元、兩の頬、悦びの潮さして愛嬌の光り照りまされ、ひた／＼と男に寄り近づき、くづれさうに無言で笑つて、堪へられずや、いきなり男の肩を突きこかし。是が何の苦勞、人を、人をちらして嬉しい話を心配させながら聞かせて、こんなところで際どく女を騙る、

ホ、性惡な眞似をなさるゝ、と額越しに睨む眼の中色氣するどく、正藏花の香に酔へる鳥となつて、後の聲を出しかねる間に、女は金を神棚へあげて、勿論の事祝ひ酒買ひに戸外へ。

* * * * *

嬉しさを汲んで飲む喜び酒の廻り早く、少し亂れて膝の見ゆるも知らず前へすり出し、暗くなる燈火の心を著でかきたて、ホ、愈々運の開くる時節か此丁字頭の大きき、と云へど亭主は見やりもせず默然たり。わたしは最早これほど酔うたに、どうしたものぞ其眞面目さは、心持でもわるいなら薬買つてまゐりませうか、それともたゞ草臥れてなら横になり玉へ、腰なと叩くべし、と傍近く來て日頃には似ずやさしくさるゝも却つて今宵はつらく思ふ正藏、冷めたくなりし猪口を取り、女の頭に左りの手をかけながらぐつと飲み乾して。心配するな、どうもせず、といへば、お蘭其まゝ男の膝に我が頭を横にして載せつゝ片手で酒をついでやり、ア、江戸を出てから初めて伸び／＼と氣が晴れて胸の痞へも下つたやうな、是れからばたゞ叔母様を、立派になつてから二人揃つて尋ねて驚かせ、むかしなわびて綺麗に許しを受け、又おまへの

六腑は有りがた涙の湯氣に煮ゆれど、口惜し口惜し、山海の御恵みに酬ゆる鶉の毛ばかりの業もできず。え、我は此儘に死れる筈のものか死ねぬ筈のものが、白癡にもせよ阿呆にもせよ、男一匹腕二本、片輪に親が生んで下さりし満足の此の男の姿をもつて、恩義知らずの畜生と成濟まし、刀は作れませぬとは誰の口をかりて云ひ得べきや。ア、なされなし、云ひ甲斐なき我、天にも地にも見放されて此世に六尺に足らぬ身體のやり所なし。是も何故、眼が覺めて見れば恨めしき一念の迷ひより、お蘭といふ鎗に性根の鐵を食はれて、昨日までも昨夕までも腐れ合つて居しためなり。置きざりにせられて憎きは憎けれど、あれの憎いより尙憎きはむかし我、師匠様に背きし過ち、親父様を惱ませし罪で、今又我が其通りな目に逢うて苦しめらるゝは是非もない廻り合はせと、運はあきらめもすべけれど自分の咎はあきらめられず。叱、何がよくて我心に泥を入れしあの女めが可愛かりし、何がよくて我を自滅の黒闇に引落せしあの惡魔めと逃亡したりし。何が、何がかりし叱、我齒で食ひ取つて捨たきやうな懦弱の所行悔んでも及ばれど、若し我が横道へ入らず眞面目に業一方をつとめて居たりしならば、かゝる

時には多くの弟子の中にも取り分け我を最良にして下されし師匠様に、も相鑑を頼みて、十分勇みすゝみ見事に鍛ひあげんものを、悲しいには明日か明後日來るべき古朋輩にも業前劣つて、然もおのれは墮落者とさげすまるべければ、何を楯にしてのめ、此面を合さむ。假令は惜しからぬ我餘命を犠牲にして諸天善神に捧げ、一心のまこと凝らし精氣を竭し、我が肝膽を小わかし大わかし烈火に焦がし、三萬二千七百六十八度の鎚に打つて打つて鍛ひに鍛ひあぐるとも、え、え、此汚れたる我が祈願は神も取り上げ玉ふまじ、應護の力も假し玉ふまじ。え、絶體、絶命、粉になつて飛べ我が五體、烟りと失せよ我が一命。神にも佛にもよりすがべき望みの緒絶えて、頼み奉るべき木蔭は我が罪に雨漏り、蒙るべき大慈の光も我が罪の黒雲が遮つて届かず。死れ、死れ、殺せ、殺せ疾く、虚空の風が毒となつて罪深き此我をせめては早く殺せ、殺して我を、と懺悔に絞る血の涙、遺恨きらす牙の音、唇いつか嚙み裂かれて青みたる顔の頸に引く紅ひとすぢ酷し。

吐く息苦惱に重く、膝ぐみ緊平として諸肌推

しくつろげ、便々たる我腹を左りの手にて二三度撫でながら得もの取て觀念の眼を潤と開き、いで今突き立てんとする途端、見れば手にせしは庄屋殿にもぎ放されし鎌也。不覺不覺、死ぬ事はならず、死れるべき義理か。我をあはれみて金まで假されし恩を仇にし、死なんとなせしは不覺なりし。さりとて此ま長らふべき我ならず。刀を作らんか、口惜しや我腕は鈍し。作らざるべきか、一刻も生きては居られず。さては死ぬべきか、死は易けれど死すとも濟むべき云ひわけにはならず。所詮刀を作り出す外、どう考へても我が爲すべき道はなし。作つて見むか、作るとも無益は知れし事なり。作らずには居られず、作るべきか作るべきか、ア、覺束なし。作らざるべきか作らざるべきか、作らずには矢張居られず。とても作らずには居られず、作つて見むか、作るべきか、作ると決心なすべきか。作らば萬一よきものか成し得るかも知らず。イヤ、萬一はあてにはならず。さらば作らざるべきか。如何にするとも作らずに濟むべき理なし。作ると決心すべきか、必死と作るべきか、是非に勝れし業物を作り出さんと覺悟すべきか。覺悟すべきか。應、最早はれより外に何あるべきや、作れ、作れ、作るべし。當代第一の

引き合つて逃るに造作はなし、なんのく、女房に亭主が云ひ譯には及ばず、ホ、氣を大きくして、最少しお飲みなされ、あとの話しは酒にあたたまつて寝てからと、膳の太い女かな、立上つて戸締りをし來て座について、又一盃仰ぎ。え、お星様の落ちたを見て薄ら寒くなつた、チヨツ、何が何様したつて、何様なるもので、ホ、惚れたが弱身で負けて道る。

下 篇

お日さまが是ほど高くなつたにまだ寝て居るか、昨夕は定めし嚙に可愛がられて、今朝は遅からうと遠慮して來たに、是は又あまりな、と獨り言しながら庄屋立ち止りて、コソ／＼と戸を敲けば、正藏吃驚して眼をさまし、見れば、怪しや、お蘭、お蘭、用足しに行たではないか、居ぬか、南無三逃げたか、アツ、え、五十兩引き渡つたか、是はとばかり魂魄忽ち碎け散つて、身は徒らに立ち上り臥しまるび、我が手で我胸をかき破り、頓ては墨に喰ひ付いて忍びて洩らす悲鳴の聲、唯事ならずと脊戸を蹴ばなし庄屋は躍り入つて。正藏殿、何事でござる、正藏殿、正藏殿、や庄屋様か、といきなり飛び起きて仕事場へ駈け下り、まだ柄もあらぬ鎌取つて突き

たてんとする意氣込はげしく、既に危ふきを追ひすがつて年寄りの一生懸命に、ま、ま、待て、と漸くもぎ放せば、死なでとは血眼になつて又我頭を鐵砧に打付けんとまがく。あぶない、待て、白癡め、御上御用を務むる庄屋が待てといふに待たぬか、と争へぬ一言に云ひ込められ、五體を土間に投げうつて、泣くに聲さへあらばこそ、仔細を語れと云はれて唯わづかに指さす行燈ながむるに、老眼の及ばれば近よりて見るに、思へば思ふほど臍甲斐無いかまへには恨み多ければ五十兩は其代りに貰うて行くとし炭の跡うすし。讀めたり／＼、五十兩嚙に奪られて逃げられたため仕事がならず、それ故、實は其、死なうとするか、よし／＼、五十兩はきつと此庄屋が御上への忠義と思つて立て替ふべし、決して短氣してはなりませぬぞ、實は間男もあるまいが、餘て其、實は其、女ッふりは甘さうだが、實は其、あんまり利口過ぎて、色氣過ぎて、お上の御用つとめる庄屋は、實は其、好かすに居たが憎い女め、然し出来合ひの夫婦は、實は其、大體かういふ末のもの故、實は其、是であきらめるが後學のためとなつて却つて結構でムる、日本一の鍛冶を是しきの事にむざ／＼殺しては、實は其、御上へ此庄屋が濟まぬ、そなた

が死ねば、實は其おれが越度、おれを困らせてもかまはずと急ぎ込むそなたの料簡は、實は其、少し間違つて居る、きつと狼狽せず待て待て、と入れ歯かみ／＼堅くとぐめられて、死ねに所なく生くるに道なく。一切我身は誰のものが分らず。

* * * * *

投げ込むやうにして又五十兩の金は庄屋殿より贈られたり、我腕は鈍し、刀はうたればならず。ア、如何にしても我腕の鈍きが無念なり、おもへば／＼かゝる果敢なき葛家に人間らしくもなく唯お日さまの光りを偷みて御簾など僅に作り、露の命をつなぎ居し見るかげもなき此蟲のやうな我を、尊き御心にかけられてわざ／＼あり難き殿様の御意、離れまいぞと連れ添ひし女にさへ見かざられて、古草履より易く捨てられしほどの蟲に劣りし此我を、御領内の民の數の中に入れておぼしめし下さるさへ勿體なきに、然も技倆を試して取りたてやらんとは何處まで厚きおなさけぞ、それに何ぞや先きには浅問しくも迷惑なりと鄙しき心の内にて思つたる我、能く其時に罰が當つて血反吐をばかざりし、考へれば今かたじけなさ骨に徹して五臓

リ切先まで切先より又手元まで、眸を凝らして
 見玉ふに、肌濃やかに光り和らぎ、地の色秋の
 空を湛へて如何にも青く澄み渡り、麦あざや
 かに匂ひ深く、刃は一條の霜白く冴えて爽やかな
 る銚子先き眼もあやに、珠をも貫くべき風情、
 つく／＼眺めて居玉へば、刀上雲湧き潮亂れ
 て、忽ち春の雪の烏毛にちらつき、又星影の水
 底にゆらぐ如きもの、あらはれ來り霞み去り、
 生けるに等しき有様は、もしくは神龍の化して
 成れるにはあらずやと怪しまるゝまでの希代の
 妙作、流石に心を奪はれて言葉もなく茫然と醉
 心地にて居玉ひしが、頓て右の手に持玉ひし儘
 乗り出して殿。正藏、よくぞ作りし、美しさは
 十分の作なり、されど美し過ぎて覺束なし、切
 れ味は如何に、と云はるゝや否、次の語を何い
 ださせ参らすべき、正藏我を忘れて勃然と御縁
 の上に躍り上りて仁王立ちに突立ばかり、便
 便たる腹を丁とたたきて。切れ、是れを、たし
 かに二つになつて見せむ。

(明治二十三年作)

一刀を打つてあぐべし、古今無双の良刀を鍛ひ出すべし。我折れ、かたじけなくも御んなさけ厚き仁君の恩命を頭に戴き、御家老様庄屋様がやさしき親切な身に締め、十餘年來師匠様が胸より我胸へ吹き込で下されし教の爲に、鈍いながらも勁くなりし此腕をふるつてあはれ魂魄を金輪際生え抜きの鐵砧と据ゑ堅め、陽の鎧には恩に酬はん陰の鎧には義に背かじと齒をくひしばつて力を籠め打ち、未練の思ひは横に切り目、卑怯の心は縦に切り目の整を入れ、折ては返し割ては合はせ、十五度鍛つて四を一に鍊りつゝめて、満身の熱血を地金と丸め、無垢の一念を刃金と乗せ、此腹中の猛火熾んに幾度か爍したて爍したてゝ結び付け、水打ち銚透し謹み、油断なく、刃土を削つて扱其後こそ一期の大事の焼刃わたし、湯玉を跳らす誠の涙に唯願ひ奉るは神力の加護、假令此身は即座に生命召さるるとも露惜しからず名利のために祈るにはあらざれば、あはれみ玉へ神も佛も。斯くして湯加減誤まりなく一刀成就するものならば、よもや世の中の慾に使はれ譽れを望みて打つ鍛冶が作には劣るまじ。天國天の座神息が昔しは知られど、云ひ傳へたる村正が話し、近くは助弘が新刀正宗と呼ばれたるも、皆一心の眞實を天晴れ

打つて出せしのみ。えい、今まではおろかなりし、小島小狐鬼切り鬘切り、抑々何者が作りしぞや、夜叉にもあらじ菩薩にもあらじ。我も同じき人の身を受け、指も十本揃つたり、背骨もまがらず確乎とせり。死なじ死なじ、あだには死なじ。よし、神國に男と生れて蟲の如くに死すべきや。と、心機一轉、變る顔色、眼中憤りの朱にかがやき、逆立つ鬘髪は燃え上がる黒煙り、天も焼くべし焦がすべし。

* * * * *

稲荷山の土、播州の鐵、是はと庄屋が驚くほど取り寄せて、不淨な拂ふ注連繩家の周りに張り詰め、其後は正藏釘一本小刀一挺人の頼みを受けて、一向に刀ばかり作つては捨て、作つては捨て、自分は勿論、相槌の男共なも如何に説きしや戸外へも出さず、百二十日忽ち過ぎて殿より催促の使者來れば、何とぞお待ち下さるべし、左なくば我氣に入らぬ作に我銘打つて差土ぐるよりは腹掻き破つて死すべしとの口上、役人驚き色々云へどもさらに聞き入れれば是非なし。殿も終には正藏が云ふところ、詰りは我が命を大切におもつてなれば、他の頼みを受けざるに於ては其まゝに許し置くべし、と仰せらる

れば、果るゝは庄屋ばかり。されども是も、常に晨は早くより鎧の音曉天の星に響かせて、夏過ぎ秋去るも休むといふ事なく、正藏の勵み居るに免じて、後は其まゝに許し置きける。斯くて後は、氷と水の名を變じて堅く、案山子の鳥にとまらるゝ冬となつても、落葉のひるがへる風の中に、此村はびえ渡る鎧の聲を聞き、煙やく煙り空に横折れて、霞の隙にあそぶ遊絲の長閑なる春が來ても、妻呼ぶ雄子の外の音ありて、帷子時も袴時も、雲をつらぬき月を落す響きに人々見足らぬ夢を驚かされしが、三年またたく間にたちて、或日白狗頻りに吠ゆる時、何事と庄屋出て見れば、清き顔に十分の活氣を含みて家の前に立てる髮髯ぼう／＼たる男。久しや正藏殿。

* * * * *

樹木縁り深く築山泉水見事なる御庭先に、庄屋より又少し後に正藏恐れ入つてかしこまり、固睡を飲みながら唯何となく涙ぐんで控へたり。並み居る諸士齊々たる中に悠然と坐し玉ひし殿、今近侍がとりつぎて參らす一刀の鞘靜かに拂ひ玉へば、忽ち電光一閃鎧子先より走つて天晴れ業物見るさへまばゆし。尙能く鎧元よ

と笑ひぬ。成程僅に三十里四十里の間か乗り合せてたる汽車の中でさへ、世に馴れ親なぬ我が胸の底の香のおのづから洩れて、心に何の毒は無けれども愛想氣無き素振りには人の情みを斯くまでも惹くか、今さら初めて知つた譯では無けれど、如何にもこれでは何をして世に用ひらるゝことなどの出来さうにも無い筈、嗚呼我ながら能くぞ何も彼も思ひ切つて、仕たい三昧と賢くも定めけるよ、世に色氣無ければ何と云はれても氣は安し、雲は來り雲は去りて調戲へど彼の山は動かす、先刻も青々、今も青々、人は笑ひ人は譏つても自分は自分、高が一つ車に乗り合はせし間の事、下りて仕舞へばそれまでと濟まして、何處までも掘蟲の猶の事人と言はず、やがて箱根の山過ぎて沼津、折から變り易き初秋の空、天半に早風起つて吹き拂ひたる雲の隙間に、思ひ設けぬ富士が根の高々と現はるれば、これは大なる拾ひものと其の美しさに嬉しさ堪らず、此の麓路二三日歩かんと忽ちにして汽車を下りぬ。

山は白雲の上に見てこそめでたけれ、和歌の浦の眺めが善きとて水底に潛つて見るものは無けれど、富士は役の小角以來疲勞れるが好物の大癡漢年々に絶えず、あたら名山を泥草鞋の下

にして、おのが分別の低きには氣がつかいで、來て見れば左程でも無しなると證話を云へるも可笑と、すべて人とは心の行き方の違ふト川は、たゞ麓路の東海道を三日ばかり歩きけるが、それも、飽きて別るゝよりはと、猶八葉蓮華の姿の残り惜と思ふ時、また汽車に乗りて、何といふ的あるにはあらねど先づ心ざしたる西の方に走り、幾日馴染みし駿河の山の出來し其の夜に成りしといふ琵琶の湖邊、石山の秋の色見たくて大津に下りぬ。

三

昨日は五十四帖にやさしき女が心の色を染めし石山の其の月夜を見て、今朝は洒落たる翁が五七五文字に魂魄の寂を籠めたりし國分山の、其の秋のあかつき、とくゝの清水に自炊のわびしさを思ひやりなどして、大津も一夜泊れば琵琶の湖の水光四明が嶽の山色も身に染みて足れり、いでこれよりは汽車を假るまでも無し、逢坂の關路の跡履みて京都へと出でんとしけるが、夜半の涼風に我知らぬ寝冷の腹溢りて、獨り何やら丸など服す間に晝は過ぎぬ。軈て心地は全く常に復りしも猶山路を京へ行かん力無く、錢を吝みてにはあらねど長途の旅をせんつ

もりの奢侈を厭ひて、たゞ雨簾を凌がんばかりに宿りしいぶせき旅宿に嬉しからねど今宵もまた假枕の夢を結ぶに決めしト川、たゞ夕暮まで午睡に費さんとも智慧無しと、當も無きでゐるあるきに町を西北へと通り過ぎて、大津も出外れんとする近く、家並もやうやくに悪く、店つきさびれて、唯さへ悲しき秋の夕な襦袢被たる小兒、徳利買の酒提げて歸る後姿、肋骨見えたる瘦狗の長々と路傍に寝て居るなど、いづくも同じ境末のあはれさを現せり。辛崎の松を見に行くでも無し、湖はまだ明るくとも既暮近し、これまでなりと歸らんとする時、ふと一軒の古道具屋の眼に留まりたり。金物の三四ヶ所剥脱れたる痕見苦しき古箏、古鏡臺、古火鉢、皿、鉢、井龍などの着いたる可厭な贗ひ物の古銅の花生、鶴頸の瓢箪、古茄子が潰れたかと思ふ煙草入、ひすばり返つて板のやうに堅さうな革の古靴、絛の五六本切れて付いて居る間づまりの琴、中は何か知らず煤けた龜祠、鈴の様な色した馬鹿太い古煙草管、一として碌なもの無き田舎の骨董屋の、主人の瘦顔の頤骨尖つて、羽子板に目鼻付けたやうなるが、もはや店を鎖して仕舞ふ支度なるべし、腹の減つた眼の中勢力無く、そろ／＼と何や彼や片づけ居るなり。嫌

土 偶 木 偶

旅衣、今日思ひ立つてにはあらず、三年も四年も前より、我が性分のなかく扱れたるに、我から鑑定を付けて、いつまで都に居たればとて、我が如き當世に背ける男の、とても立身出世して、人並に一軒の主人顔するやうなることは、朝顔の蔓に蕃瓜の生る法はあれ、間違つても出来る道理無し、所詮は華美嫌ひの淋しい事好き、氣位のみ高くて薄間拔の身の、車の轟き人の愛音忙しき都に居てまごつくだけが、塵埃の被き損、夫よりは灘渡る蝶の羽の危くとも、空吹く風に任せて飛び、潮に漂ふ浮木に宿つて憩ふやうに、千里の山河に嘯きあるきて、身は雲煙の定め無く、心は風雅の寂しみに遊び、いよく進退究まらん其の夕には、それまでの運なり生命なりとあきらむべしと、幾度か幾度か思ひ思ひしが、流石に棄てんとすれば手馴れしものは古扇も惜まるゝ道理、何處やらに猶後髪の手を、既るゝ未練ありて、一日一日と過し來りしが、既

に親より譲られし小さき地所住家だけを孝行氣の有るまゝ、破羽織を世話焼婆にでも押付くる様に人に預けし外は、何と彼も賣つて仕舞つて、肩の杓を下せし積りの、身は輕々と、主なし親なし役目無しの、頭の上には茶色帽子一つ、小鞆、洋傘これで旅人、脚絆草鞋までにも及ばぬ開けたる世のあり難さ、おもしろや山水に咽を潤して渴を醫し、松が根枕夢にさぐんざの聲を聞くも是よりと、年久しく住まひたる麻布の町を立つて、年齢は疎な髭髯もやゝ硬なる三十ばかりの男、日ごろ偏屈の友無し妻無し、思ふ人無し、ト川玄一郎たつた一人、影法師も見えず、さうきよて秋立つ風に、杖を振つて飄然と遂に出でぬ。馴染みし都に左様ならとも云はず、八百八町への挨拶には撒水冷ゆる停車場での噴嚏一つ。

走り飛ぶ汽車の中には何程やきもきと物と思

二

へばとて、手も脚も箱から外へは届くこと無ければ、夢に出ず力瘤、何の益にも立たぬむだ思といふもの、せめてはベンチに腰掛くる間だけでも、見る間に變り行く窓外の景色、結構な繪巻物に眼を込らせて行くやうなる此の面白さか味はふべきにと、喧ましき世間話を煩さがりてト川は耳を塞ぐに、猶募る乗合の雑談、株の上り下りを甲高聲が論ずれば、米作の善惡を胸臆聲が語る、それにも交る婆様のくどく、海老茶のべちやべちや、あちらで赤子泣き、こちらでは新聞を読む、人さまの三等列車中にも仔細らしきが田の面を見めぐらして、今年は雨多かりし濕氣年の事ゆゑ、靴は屹度澤山に出来て、家鴨の豊年には違無けれど、彼の通り稻の頭も垂れて下向いて居れば、半作以上は受合ひまする、あれが蒲穂のやうにピンと上向いて立つて居るやうでは、それこそ大變でございするがといふ。其尾に従ひて輕薄らしい聲が、へ、エ、左様いふ者でございしますか、それでは先づ有りがたい、して見れば何と同じこと、人間も悪くツンとして頭の高い奴に確なものば無いものでございしますと、人々の中に挟まりて坐りながら、誰にも彼にも相手にならず、窓の外ばかり見てゐる玄一に中てゝ云へば、皆々一時に左様左様

たれにも抑へらるゝことは無いと思ひ候。たれも私の味方は無く、お捨さんは、おまへの身のためゆゑ、いやでもあの人について行けと云ひ候。おためごかしが憎らしく候。あの人を爲ばかりを考へる人と思ひ、あいそが盡き候。お町さんは今さら澤山世話になり候あの人に無理を云ひて我がまゝを致しては冥利が悪く義理人情にかけると思、やはり、いやでもあの人について行けと云ひ候。いゝ人で無理は云はない人候。たゞ私がどの位御前様を思つて居るのか、解らぬ人といやになりて、悲しくなり候。あんな良い人さへ私の味方はして呉れず候。皆々は情無い悪口を申、影も見えぬ、御前様の事を、いろ／＼に誹り、何でも彼でも彼の人に就いて行けと云ひ候。くやくしく泣くばかりに候。目上は餘り勝手を云ひ候ゆゑ、いつそ何とも思はず候が、私が思ひきつた事をすればお芳を女一人に仕てやる事が出来なくなるそれが心にかゝり候。お前様には悪く思はれ、皆々には馬鹿の無分別の義理知らずのと云はれ候。お芳にも恨まれることと思ひ候。これも私の不束に生れつきたる故とあきらめ候。たゞ御前様に悪く思はれ候が、一番辛く候。旅の用意と申し、柳行李を親父が買つて参り、此の部屋に置き候。

それを見ると胸が痛くなり候。とてもなともしは二度まゐらす、なと／＼の旅今年の旅、あゝ變りてはたものと悲しく候。二人で見たる若草山のあの長閑な景色が眼について居てならす候。あの時山の上より玉をころがし候。其の折、心に思ひ候一つの輪の中を玉がぬけ候はゞお前様と一處になれる、ぬけ無ければ叶はぬと思ひ、内々行末を占ひ候ところ、思ふ輪の中を球がくぐらす、大變情無く思ひ候。それならば來年はと、又ためし候にやはりくぐらす、再來年はと又ためし候に又やはり通らず、其次の年は、其の次の年はと、無暗に球を轉がし候て、お前様に不思議がられ、なかしがられ其譯をきかれ候。どうしても黙つて居て言はずに済まし候、それが皆中りて、このやうな事になる知らせであつたかと、思ひ出しては泣くのに候。なんにも申事は無く候。御酒を深くあがるのを御禁めなされて下されさへすれば、嬉しく候。又私を悪く思つて下されないやうになりさへ致せば嬉しく候。きつとあとでは私を憐れと思つて下さる事と思ひ候。御壽命千萬年も御榮えなされ度、美しく、よい奥様を御持ちの様に琵琶の湖の底より一心に祈りてあげまゐらせ候。私の此世の一番終ひにはお前様に胸に思つ

て亡くなり候。若しお前様御壽命萬々年の時、一寸の間ほど私の上を御思ひ出し下さらば、何より／＼御嬉しく思ひまゐらすべく、其よりほかに。大きな文字は酸漿ほど大きく、小さな假名は針で書きしやうに小さく、錯落として書けるを讀みて行く間に、日はいよ／＼暮れて闇は家の奥より廣がり、一字を讀み終れば一字は消えて滅し、下川が終に讀み終りし時、眼をそれより離せば再びは復見えずなりたり。

六

後前の事情の何といふことも分らず、又其の何といふものより何といふ人に贈りたる文といふことも知らず、全く關係無き身の、たゞ何と無く眼について之を手に取り、たゞ何と無く心止まつて之を讀みたるまでなれども、讀み行く中に又何となく鳥肌立つやうなる心地して、名も知らず顔も知らず歸も知られば、まして其の氣性なども知らずやう無き此の文の書手の某といふ女な、不思議にも昔の／＼何時の日にか、遠い／＼何處にてか會ひて知り居るやう思はれ、他人事と冷やかに打棄てゝ仕舞ひ難い感じのするに、玄一はおのが胸の底を何かは知らず今までに覺えぬ異な情に満たされて、呀、む

ひといふにはあらねども、さして書畫を好むといふにもあらぬ下川なれど、丁度其店の眞中に當りて、宙に吊り下げられたる横幅の茶室掛ほどなるが、中は兎にかく表装は女物の長襦袢など用ひたりとおぼしく、紅やら緑色やら緑色やらの種々の色のちら／＼見えて、疑ひも無き友禪染の、昔思はれて艶に媚かしきが、幾日さらされて道路の塵埃に古され果てし今日ぞや、夕暮淋しく闇通る今渡る秋風の煽りに、ぶらぶらアリと吹き動かされて欄げに廻り居れるを見て、何と無く云ひ知らぬ哀れさをおぼえ、引き付けらるゝが如く其の店に近きぬ。

四

浮世繪の表装には、色絲美しき刺繡帛など、やゝもすれば用ひらるゝ習なれども近づいて見れば、是は如何なる事、それにはあらで、畫にあらす歌にあらず俳諧にあらずして、理由は何か知られど細々と書きたる文藪とはたゞ一目に知れ渡りぬ。女筆のしどろもどろと何を書きけるぞと猶よく見るに、書出しの詞も無ければ結びの芽出度かしくも無く、もとより我が名他の名も無くして、正しく長き文の後前失せたるものなり。如何なる人の書きし如何なる事情ある文な

れば、斯くは特地爲たる表具まで仕たるかと、我には關係無きことなれど風帶の目に止まりしより心惹かされて、何の氣も無くたゞ梗概を讀み取らんとするに、薄墨の筆の跡定かならぬ上を、暮れかゝりたる日のばや力無く、しかも秋風の吹くにつけて一本薄の搖めいて止まぬが如く其軸の動き動けば、眼も及ばず心も及ばずして見て取り難く、中々讀み續けて解せんやうなど有るべくも無し。客無き店に人影を得て、亭主竊に横眼を使ひながら猶去り氣無く其邊を取片付け居るに、もとより買ふ心算は無くて素見す料簡の、少しは氣の毒ならぬにあられど、これこれ一寸其の軸を取つて見せて、と云へば、忽ち取つて遞與して、淋しい顔にまた淋しい笑を浮め、御廉いものでございます。御道樂を遊ばしまして、といふ。賣買にしさうも無き物に、お廉いものとの一言何と無く味氣無く惘然に聞えたけれど何と籠耳に聞き流して、汚れる店頭に桃尻して腰を掛け、日は一寸一寸に暗くなりて人通り薄るゝ黄昏時、孤影しよんぼりと福相無き客は、今こそ道具屋の店晒し、明日は屑屋の鐵砲床にも入り兼ねまじき得知れぬ一軸、いづれば不幸の人の不幸の記念らしきものを讀みはじめぬ。

たゞ／＼しき筆の運びば、女なれば然もあるべし。文章は意の餘り有るに言葉もおのづから湧き上りてか、不束ながら能く通りたり。されど處々に讀み兼ねる文字あれば、下川しげ／＼首を括りしが、讀めぬは讀めぬとして、さて一通り讀み了りたる時、亭主は例の淋しい顔にまた淋しい笑を浮め、御廉いものでございます、御道樂を遊ばしまして、と同じ事を繰り返し、己が言葉を己から疑ふやうに、ヒエ、ヒエ、ヒエ、ヒエと變な聲して笑つたるその顔今は薄暗くなつて、小鼻の周り、口の周圍の凹めるところに夜の色上り、暮れんとしても猶點燈を客める格窗面に陰氣深く、此の亭主、此の客、此の時、此の軸、いづこに一つ陽氣なるものも無きに、逢魔が時は今ぞと告ぐる三井寺の鐘の音、大湖の氣に響きて深きに潛める龍王を覺ますかと凄じく忽ちにごゝんと起つて空に涙なして響きぬ。

五

いやと申すきりで、らち明くやうなる人では無く、蜘蛛のすのやうなる人に候、此方が負けてどうしても長崎へ連れて行かるゝわけになり候。それでも死ねば行かすには濟み候。死ねば

も無き不景氣のべそかき面の、今や闇のうちに埋まり行くやうなるに投げ付くるがごとく與へて、一軸を此方へ引牽りざま、面白くも無き店前を去れば、奥に居たる女房なんぞに物語るやう、やれ／＼、とう／＼九十九人めに賣りつけた、此處の人では無い、あの人は他處の人らしいが、あんな不縁起な軸は鶴龜鶴龜、もう歸つて来るな、と主人のひそめきて云ふ聲背後より聞えて、後ばかりことりと店を戸締りする音、秋の日全く暮れて町は静かなり。

八

九十九人めでも百人めでも關ふことは無し、買はなかつた男共が伶俐ならば此の乃公が馬鹿ぢやまで、此軸一つ買はずに済ませばとて何も急に賢くなる譯でも無ければどうせ餘り小智慧の廻る方でも無い自分の事、變な物数寄のやうに後指さして云はれても、仕たい事は仕て見るが得、高が何程でも無い物も、一度讀みて見て、其後の處置は、寺へ納めても人に與つても何様にでもする道は有るべし、と拗れ者の卜川、小惡らしき道具屋が蔭口を尻に聞かせて、すたすたと旅宿に歸りぬ。

鐵葉骨の紙蓋汚れし洋燈貧しげに、煤けたる

天井低き六疊の一室、卜川また今さらに彼の軸をひろげて繰り返し繰り返し初より終まで讀む中に、おほよその事情はおぼろげながら解り、此の文の書者は堅氣の娘ならで、浮萍の寄る邊を定めぬものにはありながら、其中心合ひて二世もと云ひ交したる中の男ありて此の文は即ちたしかに其男に送りたるなり。文面を讀み味ひて考ふるに、他に財あり力ある一人の男ありて執念く其の女に付き纏はり、終に己が遠き國に赴くに當りて女を連れ行かんと強ひ、女の目上のものなどを吾が意に従はせ、さて遠國に行きては思ふ男と逢瀬の絶えんことを悲みて肯ばざる女に、恩義の枷掛けて緊しく迫り迫るより、女は思ひ詰めて我から死なんととして、細々と男に我が胸の中を訴へたりと覺しく、靜かに思ひ遣れば其の心の奥あはれに、癡かといへば癡なれども生命掛けて迷ひ入りたる女氣の一筋なるも、淺墓なるやうにて却つてまた悲しむべければ、幾度と無く讀むうちをぐるに心を奪られて、秋の夜のや、更け行き、隣室の人の歎微かに、樓下の物洗ふ音、話し聲などもおのづと止む時、凝然と其の女の上を思ひ遣れる餘り、卜川我知らず涙をさへ催しけるが、いつまで斯くてもと其を巻き收むるに、今までは心付かざりし軸の

裏に筆の痕細く數行の文字あり。さては此文を受けし人の斯く表装などしたる曉、何事をか記せるなるべし。讀みて見んと、巻き終ひかけたる者を復開かんとする折しも、呀といふ人の聲、大變々々の金切聲、けたましき寢音、物音、戸障子の倒るゝ音、猶怪しきは火の燃ゆる響、これはと驚く時、火事だ火事だ、との叫びに、洋燈など覆せしかと胸を騒がす間も無く、一間の襖を押し倒して隣室の男の轉ぶが如く入り來りて窓より他には出口無き突當りの此の室の其窓より免れ出でんとして慌てもがくなり。人の室に踏み込みし無作法な告めも敢へずして倒れたる襖のあとより見通し見れば、火は既樓下に満ち／＼たるにや、上り下りの階段のところより黒煙は此方を指して襲ひかゝるにぞ、こればと卜川も我が生命の沙汰なるに驚き、一軸を手にしたるまゝ彼の男に續いて窓より屋根へ。

九

逃ぐるよりば疾く火の香の追ひ來るに心慌て、夢に惡鬼に驅り立てらるゝ思ひて、遮に無に我が前に出でたる男の後を慕ひ、足元暗き屋根傳ひの危く、辛くして渡れる隣家の廂より、幸ひ軒近く生ひたる庭松を手寄りに、漸く其庭

かしのむかしの或年の或日、他の人では無かりし今見て居る此の我が身が受取りしものを、と思ひしが、忽ちハツと我に復りて、えゝ馬鹿馬鹿しい、夢でも見ば仕まひし、何を下らぬ事、と自ら嘲る時、何様でございませう、御覽なすつたのも何かの御縁でございませうから、御購得なすつて下さいまし、御廉く致します、御道樂をなさつて、又其癪に障る「御廉く致します」を亭主の繰り返しぬ。

旅先に用無き掛物買つて、何になるでも無いに知れきつたる事なり、特に普通の書畫などならば兎に角、寺へでも納めるほかは無き此のやうなものを買つて何とすべきと思はぬにはあれど、何となく心の猶惹かされ、も少し能く讀みて味ひたき思ふするに日の暮れたるが残りなしく、無錢ほどに廉くば、明日は遺留にするとも捨てるともの事、今夜の旅窓の燈の下に緩りとも讀んで見度く、讀みたき書の、廉くば買つても見たきやうする心地し、且ば仕舞ひかけの店を妨けて亭主に居たり立つたりさせたるも氣の毒ならぬにあらで、亭主の手に我が手の軸を渡しながら多少錢で、と問へば御購求なすつて下さいますか、眞實に、と問ひ返す。變なことな云ふもの哉と今更亭主の薄寒けなる顔な

七

見ながら、唯、と云へば、例の淋しい顔に異な笑を含んで、それならば御思召次第で宜しうございませう。何錢にでも購つてさへ頂きますれば、と商人には有るまじき馬鹿な辭なり。

呆れて言葉無き客の様子を見て取つて、商賣を致して居りまして此の様なことを申してはなかしうございませうが、眞實に何程でも宜しいのでございませう。實は、中は何か分りませんけれども表装が面白いので、相應な仕入に仲間から引取つてあるつたのでございませうが、商賣を始めましてから此様な貨物を手掛けたことはございせん。一寸ふりかへつて見る方立止まつて見る方手に取つて詳しく御覽になる方、それから直を聞いてそれなりけりになる方は有つても、終に負けろ負かりませぬといふ直の押引までを爲さつた方の有つたことが無くつて、いつでもいつでも御素見ばかり、たまに凝然と御覽なさるかと思へば頓て飄然と逝つて御仕舞ひになるので、中に何様なことが書いて有つて人様が御買ひなさらないか知りませぬが、後には店へ御客様が御立ちになつて、これへ目を御留めなさるのを見れば落膽して仕舞つて、あゝ

またこれの御客様かと、御客様を勿體無い、不吉な御方のやうに思ふやうになりました位でございませう。でございませうからいくらにでも御取りなすつてさへ下されば有り難いのでございまして、はい、へ、へ、い、何もこれを胡散な物の、祟が憑て居るの何のといふそんな開け無い下らない事と思つて居るのぢやあございませうが、さういふ譯なので既餘程前から、直さへ御付なさる方が有つたら、何ほどでも差上ようと思つて居りましたのでございませうから、正直に慾は申ません、御取りなすつてさへ下されば、直は御見計り次第で、と言譯がましく言ふ言葉のはしくに、これを薄氣味の悪い物か何そのやうに思つて、いくらにでも仕て人に押し付け、代は己が懷中へ、物は西の海へさらりと厄拂ひしたき様な意の見え透き、偏屈なる田舎氣質の暮れては店を閉める習ひの故とは云ひながら、燈火さへ出し吝みし譯も分りて、何と無く、忌々しく、事情は知らず、世辭や戯談に捨てらるべきにはあらぬ生命といふもの掛け書きたる此の文の書者に氣の毒さ堪らぬやうの心地のする一面には、また鄙吝の主人に對つて不平餘りての慥聲、そんなら此額だけ遣る、不足はあるまいと小札一枚を男兒らしい血の氣

けれども、其他のものにはどんな呪文を唱へても今は爲れさうも無き身を如何にせんと考へしが、苦しい時には風鈴の一文まで思ひ出す譬喩の通り、當にはならねど京都に聊か知つたものの有ることを思ひ出し、白晝は歩けぬ此の醜態の、夜にかゝるこそ幸ひ、不知案内の路の難儀にはあれど、此地より京までは何程も無し、今より道を拾はば明方には京に入るべし、兎に角に拂曉早く、人を尋ねて見て、方になつて呉れずばそれまでの事、其の時はまた其の時の分別あるべしと心細き分別を仕出し、下火になりし火の方を、たゞ彼の僅少のぼや／＼といふものに此様な目に逢ふと恨みて一ト目見たりしまゝ、思ひ切つて見棄てゝ、書間繪圖で見しと人の話に聞きしとのほかには心の中に手搜りせう的も無き路を、盲人さへ上る道なれば知れぬことは有るまじと、おほよそに考へて、京都の方へと歩きぬ。棄てゝも仕方無しと彼の軸ば手にして、何の因果やら猶仲の好く。

山路へ分け入りて左右漸や窄く、東海道にしてこんなところの有りさうにも無く思はるゝやうな所にさしかゝりしが、知らぬ道の夜歩き、間違は有りうちの事、何の道にせよ方角さへ過らずば左して苦にするにも當らぬ始末になるべしと、少し自棄氣味の心は強く、西へ／＼と進む中に、天の色何時か大きに變りて雲全く鎖し果てたるに墨より黒くなり、一寸前に牛が居るやら見えす闇は濃くなつて、路いよ／＼狭く、兩側通つて風も下さぬところに掛りたり。人の聲無く、火の光無く、蟲の音も無く、鳥の身じろきも聞えず、冥土にありと開ける黒闇道といふも若くは此様な所かと思ひやられて、たゞ兩脚の裏の感覚ばかりに、雲の中を歩けるでも無ければ他の世界の中を歩けるでも無く、たしかに此の世の中の何處かの國の何處かの山中を歩けるを知るのみなる折柄、忽然として前途に當つて其の眞黒なる闇の中に、しより、しよりと一歩徒跣の登音あり。流石それ者の玄一も愕然として驚きしが、氣の所爲にておのが登音の返響を聞きしかと思ふに然にもあらず、よく／＼聞けば其の登音は小さくして、正しく女の登音の如く、しかも、一ト歩一ト歩に我が方へ近づくき来て、白晝なら面の黒子も既見えさうなほど、それ、それ、我を距る三間、二間、一間、半間の間に來れりと、思ふ間も無く、我が胸さきに、冷りと觸れたるは、縫に若かるべき女の頭髮、ハツと此方も驚けば彼方も飛び退き、双方登音絶えて色も無く香も無く、天地たゞ／＼闇のあ

るばかりなり。

十一

急ぎ歩の身體つき自から前屈みになりて駈け來りし女の我に衝突りしとは早くも合點したれども、餘りの驚きに氣息の詰まりたるやうの思ひして頓には言葉さへ出し得ず、如何なる差し逼りたる事のありて如何なる人の、男の我すら氣味好くは思はざるかゝる夜道の闇を冒して走るか、と、彼方を何者とも測り兼ねるより恐ろしさもまた今更に後より増し、腰を低くし頭を下げて天に透しつ覗ふに、折節の雲暗くして漆の如く黒く、那邊を天地の境とさへも見分かざる程なれば、況して何一つ眼に映らう様も無く、たゞ僅に人の呼吸のはずめるが有るが無きかに聞えて、其處の闇に我に衝突りし人の潜めりと知らるゝのみ。

此方も動かす、彼方も動かす、我ももの言はれば、彼ももの言はず、互に對者を測り兼ねて胸安からず思ひ疑ひしが、彼方は已むを得ず思ひ決めてか、何卒御免遊ばしまして、……とリ急いで居りましたので飛んだ失禮をいたしました、と泣かぬばかりの語氣に逼りきつたる心の眞實を現し、思ひ入つて打詫びたる其の聲玉の

へはるやうに降りて、吻と氣息を吐ける時、振反つて見れば、早や我が出たる窓は火の粉に明るく、人々の立騒ぐ聲々、物運ぶ音がやがやと一つになりて、何を云ふやら罵るやら分りさうにせず、見る／＼燃え抜けたる火の勢威花やかに、雲重なる暗き空を焼きたる末は梨子地に蒔繪すれば、ト川はたゞ呆氣に取られて逃げ延びしが、ハツと心付けば南無三手荷物を置き遺れたり、引返して取出さんにも最早火の中、えゝ間拔な事を仕て退けたと悔んでも追付かず、空しく未練の情の茫然と其方を見るところへ、手簀笥一つを肩にして夢中になつて駈け來りし男に、厭といふほど衝觸られて、而もえゝ頓疑氣め、何を邪魔なところに突立つて居る稀代な奴ぢや、と烈しく罵り飛ばされ、無理ならずとは思ひながらも差當つて忌々しく、濫々動き出さんとするところへ、今度は二人して奴簀笥一つを手搔きにして來れる先立の方の男、それ退いた退いた、退いたツといふに邪魔な奴ぢナ、と云ひさま猿臂を伸ばして手荒く突き退けたり。此方は氣の抜け、先方は氣の脹つたる所として争ふことも叶はぬ間に彼方は去る、後へ續いて人々の往來亂れ、長火鉢擔いで行くものあれば、味噌瓶さし上げて通るもあり、嬰

兒を忘れて猫兒を抱き、葛籠を遺して飯杓子一つ大切な氣に持つて出るなどもあり。自他共に埒無く慌て狂ひて混雜し、何かは知らずこたつくに、ト川はたゞ泥に喘ぐ鮎の心地して、突飛ばされつ罵られつ胡亂がられつせし末、我からさうするとも無く其處を退きて、やゝ人氣少き方に行き願みれば火は猶止まず、どし／＼と燃え居りて、逃げる者、消さんとするもの、こゝろに騒げり。手荷物持つて出ざりしは愚なりしが、失くしたりとて左まで悔むにも足らず、それさへ思ひ切つて諦らむれば身は心安き旅空、類焼に會ひても苦にはならず、四郎兵衛が座敷を出て九郎兵衛が座敷に移る迄の事、宿錢さへ出せば時の間に普請の出来るも同じ事、何程でも座敷は有れば氣にすることも無しと獨り笑ひしが、無益の傲慢の鼻は忽ちに至みて、これは如何な事、何處に振り落せしやら、懷中の物の影も形も無し。奪られしは、奪られしと思へず、遣せしか、遣せしと思はれど、全く一時の顛倒に度を失ひて、彼の室を窓より出で、此町まで逃げし間に、掏られしか遺失せしかに決まつたり。手荷物は焼く、財囊は無くす、重荷に小付の帽子まで置いて來て、着のみ着のみ風呂敷一つ持たず、有つて益無き怪しき掛物ばかり

を、彼時手にしたりしまゝ今に持ち居て、尺八ならば乞食になりかゝりの此折柄、差當つてぼろぼろと滅多吹きに吹いて合力を乞ふ便にもすべきに、それにもならぬ馬鹿なをかしな物と馬鹿なをかしな男一人と、それ悲しい風が雲間に光る彼の星から吹いて來て衣薄き人の裾に冷こく、しつとり降りる露言はず帽子無し頭の黴る秋の夜中に、縁は異なもの、手を執り合つての道行。

十

ひれくれし覺悟の臍を固めて、風雅の疲意地を張り、自然何様にかなるべき時の來らば何様にかなる分の事と済まして居たりしが、餘り早く何様にかなる時が來て、ト川泣くにも泣かれぬ異な心持し、文無し、帽無し、知己無し、手の中には九十九人の中九十八人までが買はうといふ氣にならざりし變な一軸を持つて、地に秋ある其冷を踏む慣れた徒跣のひよろけ腰をかし、うそり、うそりと大津の町外を歩きつゝ、これからの我が身を何とせんと思ひわづらひたり。

旅宿の主人を捉へて兎角云ひたりとて何にもなるまじく、乞食には打棄つて置いてゐるべ

では貴方……と、双方今や別れんとする時、闇に忽ち鐘聲の冷笑。フ、いけないう、お照さん、いくら伶俐を遣つても、もう取捉まへに來た此善次が前刻から、此處へ來かつて、虚言を吐いて頂きたいと申すのでございませうから誠に相済みませんけれども云つた彼處から後け、悉皆忍んで聞いて居たのだよ。フ、驅け出した者を追掛けるのに提灯を點けちやあつたのが汝の不運だ。さあ温順しく乃公に連れられて歸りなせえ、いくら情夫の處へ突走る一心だからつて、可哀想にそんな豆腐見たやうな足で嘔痛かつたらう。もう逃げる事もどう仕やうも全然叶やあ仕無えわ、さあ乃公が負つて遣らう、おとなしく歸りなせえ。悪いことは云はれえわ、逃げるなら逃げて見なだよ。と追手の男なるべし、落着き拂つて云つたる其の言葉は一々、卜川の耳には憎くも憎く聞えたり。

十三

我に人並勝れたる臂力さへあらば、憎ざげなるこの男を驚掴みに掴み挫きて其の間に倒れむべき女をば逃れさせて遣りたきにと、とても叶はぬ事を思ひながら、手も出せず口も出せぬ身

の如何ともしがたく、目のあたり優しき鳩の巢に捕らるゝを見過す辛さに、卜川今までに覺えぬ不快の心地して、居るに居られず行くに行かれぬ氣持、何とか爲たしと悶え迷ふ間に、身動きさせざりし女は屹と思ひ定めてや、逃るゝだけは逃れて見んとの意か言葉も無くて駆け出した。ひた／＼といふ聲彼方に去りて三間四間距たれると思ふ時。もういけ無えお照さん、斷念の悪い、逃るゝといつて逃がすものでは無い。と云ひながら追ひ縋らんとする男を、汝、憎い奴、木の根が岩角にでも躓けかしと念するに、木の根にも岩角にも躓かずして、男は道中に突立つたる我に衝當りさま、え、頓癡氣めと腹立聲烈しく、我横顔を一撲ち撲つて走り去らんとしたり。さらでも煩悶したる矢先を且つ罵られ且つ撲たれては、鐵に打たれて飛ぶ石の火の、心からとも無く我を忘れて激したる卜川、失敬な、と云ひさま闇を探つた手先に、幸にして觸れたる袖を引捉へてぐつと引戻せば、びりりと袖は裂け男は踰跟しが、野郎何をするといふ聲と共に沒義道の拳が我が頭に落ち肩に落ちたり。今は理窟も無し、此方も無茶になりて、打たるれば打ち返す、捻ぢらるれば捻ぢ返す、氣息と腕節の續く限りと争ひ闘ひしが、あはれ

此の間に少しでも遠く逃げ伸びよと、其の忙しき間にも念じつゝ苦しさを堪へて捻ぢ合ひぬ。もとより強からぬ男の、初めの中こそ四分六分にも争ひ得たれ、聴て氣息は疲れ腕は痠えて腕くも組み敷かれ、無念と空を蹴てもがき廻れども其の甲斐は無く、野郎一時殺した、些の間死んで居る、醜態を見る。と云ひさま、じりじりと咽喉を締められ、何汝等に殺さるべきかと、呟と耐へ／＼しが、氣はいつしに遠くなりて、夢に溪底へ落ち行く心地、うつとりとなりて其後はおぼえず。

晩天の風に夜明を知つたる思ひて、我にもあらず、ふと眼覺むれば、闇は猶闇にして一尺前も分られど、人ありて、我を介抱せるさまなり。咽喉のあたりの悶へて何となく苦しきに、呼とばかりや、冷き痰を吐けば、それより心やうやく明るくなつて、はじめて一たび締め殺されし身の今蘇生りしを悟り、これは、と今更に又驚けば、あゝ、有難い、御氣がついて下さいましたか、しつかりなすつて下さいまし、と我が耳近く云へる聲の美しきは正しく前刻の婦人なり。

十四

身體の甲所乙所は猶痛みあり、精神も猶暗き

如く美しく、人品の悪からず、年齢の若きも、大概想ひ遣らるれば、ト川は又今更に愕然として一層驚き怪しみ、ど、どう致しまして、粗忽は御互様でございします、御謝罪では却つて恐れ入ります、別に何處も御傷めなさりなどはなさいませんでしたか、と平日にも似ず物憂しく挨拶して、善惡ともに事を生ずるを避けんとしたり。

ハイ、御親切様に有り難うございします。別に何處も傷めは致しませんから御心配なさいませんで、……と云ふを開き捨てにして、闇夜の此の女恐ろしく、それはまあ宜うございしました、御氣を付けなすつて、……どうも失禮いたしました、左様なら、と云ひさま摺れ違つてト川一二間行き過ぐれば、女は沈黙つて猶身動きもせざる様子なりしが、やがてト川を追ひ縋り氣味に、幾歩か歩みを移しながらに、もし、……、といと切無げに背面より呼び掛けたる、其聲悲みを帯びて闇に物寂しく、玄一領許より冷水を浴びたる思ひしたり。

十二

恐ろしきとて流石に走つても逃げられず、がくつく脚を踏み締めて立留り、いや／＼ながら振返つて、何か御用で、と云へば、女は四五歩

我が方に近づいて、まことに無類な失禮なものと御見下げでもございませうが、よく／＼悲しい突き詰めた事がございまして此様な大膽の眞似も致しますものでございします、どうかよくよくの事と御思召まして助けて遣ると御思ひなすつて妾の御願を御聞き下さいませんか、貴郎を御親切な御方様と御見込み申しまして御願ひ申すのでございします。御見えにはなりますまいが此通り掌を合はせて御願ひ申して居るのでございします、と悲しげに述ぶ聲の調子に虚偽ならぬさまは知れたり。さればとて平常ならぬ夜道をするやうなる女の何事を云ひ出づるか譯も分らぬにおいそれとは云へす。いや、餘り親切な男と御思ひでは些違ひますが……と色氣の無い挨拶を加へ之と爲て、どんなことを云ひ出すかと、半分は逃腰に構へれば、其御返辭で失禮ながら猶の事實直で居らつしやる御方と存じます、決して澤山御迷惑を掛けやうな事ではございません。たゞ此丈の事でございします。これから前途段々と貴方様の御出でなさいます御道筋で、萬一妾を追ひ掛けて参るやうなものもございまして、其人に御行合ひなされました時は自然如是々々の者を見無かつたかなんぞと申す事を御聞かれなさいましたらば、

何卒御慈悲に御方便の御計ひでもつて、いやそんなものは似よつたものも見かけ無かつたのと、斯う仰あつて頂きたいのでございします。虚言を吐いていたいきたいと申すのでございしますから誠に相済みませんけれども、切無い譯がございまして或處まで逃げて参るのでございします。よくよくの譯があつての事と何卒御推量下さいまして、助けて遣るとおぼしめしまして、無理な御願ひではございします何卒々々、……と、染々と云ふ。其程の事ならば無造作の譯、もとより窮鳥の行くへを獵師に教へる程の情知らずになれぬ我が性分と、ト川快く合點して、宜しい御安心なさい悉皆解りました、何様いふ譯かは存じませんが、よく／＼の事があつてとは御推量いたしますから、御不利益になることは屹度申しません。宜い加減の事を云つて、引返すか横へ送れるか、いづれにしても跡を慕はぬやうには仕て進げませう。と頼もしげに云へば、御恩は忘れません。有り難うございします、どうかそれでは宜しく、と云ふ。請合ひました、此の梶原が、屹度宜い加減に誤魔化してあげます、氣を付けておいでなさい。といふ。あゝ、有りがたうございします、何様かそれでは……よろしい、御安心なさい。有り難うございします、それ

申上げたいと存じて居りましたが、妾がこんな
 狀で夜夜中歩いて居るのではございますし、身
 狀も知れない、どんな者かとお疑ひも有らうか
 と存じまして、申上げるに申上げ兼ねて居りま
 したのでございます。何地へ御出になるのか存
 じませんけれども二生の御願ひでございます、
 何卒妾の参るところまで御出下さいませんか。
 もう此からは道程も幾干もございませぬし、人
 も澤山は居りませぬ、至つて御心置の無い妾
 の宅同様なところでございますから。と掌を合
 せぬばかりに女の云ふに後へは退き難く、どう
 せ滅茶苦茶になりし、今の我が身、右へ行つて
 も左へ行つても畢竟同じこと、別れる曉には
 掬飯の三つ位は貰へぬことも有るまじきなれ
 ば、京の我が友を尋ねんは其からにして遅から
 す。とても餘計な事に手出し仕て咽喉まで締め
 られたるほどの馬鹿を見し上へ、親切を中途で
 捨てずに、最終の處まで行つて吉凶の底を見届
 けて分れんと覺悟を定めたる土川、私は御話に
 ならない馬鹿げた風來人で、妙な機會に逢つた
 末、京都を志して行くのでございませぬが、さ
 して急ぐといふでも無い宙にぶらりの身ですか
 ら、宜うございます、送つて行つてあげませう。
 あんな強い奴には敵ひませぬけれども、犬おど

し位にはなりませう。と氣輕に答ふれば女は嬉
 し悦びて、いそ／＼と勇み立てるさまは闇にも
 猜し知られたり。
 四圍靜なる闇の中の物語りは、何人が聞かう
 も知れぬに、二人とも身に懨りたれば更に口さ
 へ利かす、黙々としてたゞ進み行くに、女後ろ
 れば男待ち合せ、男路を疑へば女導き知らず、
 相互の情の温かさば見えぬにも見ゆるが如く、
 いつしか半里餘りを過ぎしが、こゝは何處やら
 ん、だら／＼としたる坂を下りきつたところ
 に水の光り仄見えて、たしかに大湖のほとりと
 思はるゝところに立出でぬ。大津かとおもふに
 家無く人氣無れば正に然にはあらず。岸に寄る
 連の音びちやりびちやりと幽に響きて、松幾
 本のばら／＼と生ひたる砂地の果てに一構への
 大きな孤家ありて、其家に隙洩る燈の光り
 戀しくも見えたり。女はやがて其家に立ち寄り
 てほと／＼と戸をたたくきつ、信さん、信さん、
 と召使などを呼ぶやうなる語氣に呼べば、三聲
 目にハイと答へたる聲は爽やかに若く、十四か
 十五の男の兒と聞えたり。

十六

雨戸繰り明くる音、それより下駄の響、幾ほ

ども無き石傳ひに、片開きの門の扉押し開けて、
 大變に遅く御出、と云ひながら、片手の燈火に
 二人の様子を見て、ま、何様なされましたの、
 と驚けるは、今の爽やかなる聲の主なるべし、
 賢きは桃花の面にあらはれて、眼涼しく眉鮮か
 なる少年なり。何様したの、斯様したの、段ど
 ころでは無いの、まあ後で緩りと譯は話すとも
 仕ようが、いろ／＼切羽詰つた事があつて、夢
 中になつて駆け出して來たので、それからお前、
 途中でもつて此御方に一ト通りでない御世話な
 受けたやうな譯なの、妾はい／＼から此御方を汝
 善く御介抱してネ。と口早に語りつゝ勝手は知
 りきつたるにや、振返りて自ら門を鎖して、お
 のれば水口の方なるべき彼方に去つたり。
 玄一導がるゝまゝ、小童に従ひて玄關にかゝれ
 ば、一間の三和土の履底塵も無く清らに、土に
 塗れ露にしほたれし身の腰を下しかぬるばかり
 澤やかに拭き込みし檜の上り縁、家はすべて小
 なれども纖巧に物敷寄せり。洗足の水を待つ間
 程無く小盥に温湯を持ち來りて、さあ其處に御
 掛けになりて御足を御伸ばしなされまし、と甲
 斐甲斐しく早音が足首を捉へて洗ふ。いやそれ
 には及ばず、自分でいたします、といふ間に指
 の股の泥まで清潔にされて仕舞ひ、どうも済み

ところあるが如くなれども弱蟲ながら男兒は男兒なり、ト川自から強ひて何氣無く粧ひ、いやもう大丈夫でございます、咽喉を締められたばかりです、ハ、ハ、ハ、此方は柔道も相撲も何も知らんで弱くて、ハ、ハ、ハ、と事も無げに打笑ひけるが、笑ひ聲の後に力無く、しかも調子を外れたるに、心身共に常に復らざるは見えたり。飛んでも無い御災難な妾の事から御掛け申しまして、ほんとももう何共御話の致し様もございません、御氣が御付きなすつて下すつたので、まあ胸と致しましたやうなもの、別に御怪我などはございせんか、心配でなりません。と憂はしげに優しく云ひ呉るゝに痛くても痛いとは云へず。幸ひ何處も傷めはしませんでしたから御安心なすつて下さい、そして貴女はどうなすつて此處に御坐で、それから又彼の男は何様しました。と差當つて不審すれば、ハイ、彼の妾を追つて参つたものは巧く遣り過しました、最初妾が逃げられるだけと存じまして夢中になつて逃げ出しますと貴方と彼男との御争闘で、ういませう、何様致しませうと存じまして女の手で手出しは出来ませず、又縦や逃げましたところでは追はれる段になりますれば逃げ果せることも難しいと思ひましたし、逃がして遣ら

うとの御親切な思召から彼男を支へて脊力づくでまで争つて下さる貴方様が若し萬一何様いふ目に御逢ひなさうかも知れぬのを全然餘所にして、自分さへ宜ければと逃げて参り兼ねましたので、ふいと思ひ付きまして悄然と路の傍に屈んで小さくなつて居りまして貴方様と彼男と組んづ解れつして争つて居らつしやるのを、一町足らず離れたところからどき／＼しながら覗つて居りました。其中彼男めが憎らしい高言を申しまして立上りました様子なので、ハツと貴方様の御身の上を氣遣ひましてどつきり致しました、が、猶の事出ることにはならぬ機會でございしますから、たゞ神様ばかり御頼み申しまして知れないやうに潛んで居りますと、えゝ下らなれぬ邪魔の所爲で折角捕へたものを逃がした、女の足でも大分逃げたらう、思々しいと、獨語を云ひながら妾の居ります前を闇は有難いもので、毫も氣が付かずに早速と束の方へ走つて行つて仕舞ひました。巧く遣り過して仕舞ひましたので大きに安心いたしました、それから此處へ戻つて参つて御介抱致しましたのですが、一念が居きまして何より嬉しうございます、ほんたうにもう別に此といふ御傷所などはございせんかといふ。それにて一切の合點は行きたれど、

露降る闇の天地寂しく、我は錢無く力無く、人ばかり憂あり、是からさきは何となすべき。

十五

濟むも濟まぬも有りません、たゞ私が弱かつたので甚い目に逢つたといふだけの事でして、私さへ強かつたら何でも無い事だつたのです、道理を立て、云へば斯うして御介抱を受けた御禮から申さなければなりません、濟んで仕舞つたことは何方にしても宜いとして頂きたいと思ひます。それはさうとして貴女はうまく彼の男を撒いて御仕舞ひなすつたのは御手柄でしたが、これから猶且御一人でもつて御志しになるところまで御出の御心算ですか。兎角役に立たぬ弱蟲ではありまするが御出になる所まで送つて進げたいやうの心持も致しますけれど、と後は我腹の中の都合の悪さに云ひ渡す時、まことにまことに申し兼ねましたことではございませう、さう願へましたらどんなにか御嬉しうございませう、御蔭で危いところを逃れましたのでございしますのに、御禮も申さず此儘御別れ申しましては、どうも心が濟みませんので、御無理を願つても、妾の参るところまで御伴を致して、責では言葉だけで、整然と御禮を

の内に快き春は来りぬ。

十七

夜は静なり、何時なるや知るべからず、燈火幽にして秋氣水の如く、人語全く絶えてたゞ微に火の燃ゆる音のみを聞く。湯槽の中に風み居て、ト川つくぐと今日の我が上を思ふに、我が資性の思に近くして今の世の伶俐漢にあらぬは豫て自らも知り居たるが餘りといへば賢からぬに我から愛想も盡さる心地し、縦ひ其の情は切なるにせよ憐むべきにせよ、何になるべくもあらぬ異しき一軸をば、しかも年來持ち傳へし應舉も無村も賣つて仕舞つて何も彼も思ひ棄てたる後旅路に上りし身の物好にも買ひ取りたるそれさへあるに、其軸に氣を奪られ居たればとて俄然の出火に携ふべきものも携へずたゞ、其の一軸を手にしたるまゝふらふと出でたりし愚さ。猶また其より能くも知らぬ道を夜掛けて歩みし心無さ。京都に至りて果して何様落着くことと成るべきや否やさへも覺束無きに、其をもまた餘所にして途中にて出會ひしことより思はぬ傍路に外れて、此地は何處か、主人は如何なる人か何か分らぬところに來り、此の物淋しき夜深を、此の微温き湯に浸りて益無く物を思ふ愚

さ。あゝ愚にして迂なる男も世に少くはあらざるべけれど、今日の此の玄一のやうに斯様も愚にして迂なる男のまたと世に在るべきか、思へば思へばよく／＼の間拔大駭愚に生れつゝたる我、とても此の汽車の駛り、電車の駛り、電話電信の忙がしく、人間皆慾に鋭くして空飛ぶ天狗の中着も切り兼ねまじき世の中には、なかなか立ち交るべくも無い身とは自分でも思ひ諦めて、どうせ一生は我が天栗のまゝに拗れて済まして仕舞はんと思ひたれども、まさかには程の馬鹿々々しい男とは自分でも思はざりしが、さてもさても大間拔大駭愚、此微温い湯を出てからの今夜は此家に寢るにしても、明けての明日、それから明後日、身に着いたものは腐つた様な衣服一つ、譯の分らぬ書簡の軸一つ、知つたものにでも會はずば此先何様なるといふ我が身の上か。それも是も由無き文の面に我が情を動かして、我には關はりもせぬ事をば哀れに思ひしよりの事。と流石に我が普通はづれたる愚さを自ら省みて、差當つての明日明後日の頼み無さを思ひ遣る時、戸を開きて小嬢は面を出し、疊みたる衣を置き、此衣を御召しになりますやうに、と云ひつゝ服を着て衣を丸めて持ち去りぬ。汗も垢も一ト通り流し果てゝ、小嬢の置きて行

きし裕に白地の單衣の清けなるが重れられしな着れば、秋の夜の涼しきに浴後の肌心地好く、疲勞も全く忘れて生還りたる様の思ひしつ、此度ば自ら路次行燈を取りて、彼の芙蓉の花の點點と白きが挟む小徑を行くに、鳴くば何蟲ぞ、降霜近き節を悲しむ絲の如く細き聲すがれて斷えつ續きつ哀れに、灯の光り冷やかに露濕る行手を照らして淋しく、有るか無きかの風のそよ吹くが中に、何處よりか木犀の花の香の間に流れて薰り來れり。爾時ト川は怡然として、何の故とも無く我知らずに應我が手づから植し銀の木犀の、今歳も時來つて秋に匂ふと満足せしが、俄然として心付けば此處は是初めて來しところにして、闇の木犀の銀なりや金なりやを、もとより中々我が知るべくも無きにと思ふや否や我から我を疑ひて、今宵はなど如是道理無き感じのみするやと、自ら我が心を引締めたり。

十八

浴後の心地ゆたかに座に着けば、女は先づ靜に茶を薦め乍ら、御風を召さぬやうにと云ひ、小嬢は背後より黙つて羽織を被せ掛け呉るゝなど、すべて十年も主と仰げる人を取扱ふやうに何の隔て意も無く、親切に温かく待遇ひ呉るれ

ませぬを云ひ續くる中、小童は盥を持つて外に去り、引違へて彼の女は奥の方より立出で、此方へと案内す。縁無し六疊の茶がよりたる小座敷、茶の砂壁、片木の網代天井、花欄の床柱の淺床に掛軸は無く、たゞ丈低き花桶のみ据ゑて、芒かるかや女郎花など、何といふことも無く取り繕はで投げ入れたる、小窓に近く胡麻竹の脚の忌味なき小机の置かれたる、一々玄一の心に厭ならずおぼえて、驕らず俗ならず面白く住みなせる此家の主人を如何なる人ならんと思ひ乍ら、洋燈も露出しならぬが嬉しき雪洞付きたる菊燈臺の柔らかなき火光の下に、あらためて先刻よりの禮を述ぶる女を始めて熟く見れば、髪は今みづから急に束れたるなるべし、猶ほつれ散りたれ共、雪とおのづから白き面は磨かすして美しく、細き地藏眉、脩き菩薩眼、下りの長き品格好き鼻つき、何處に難の打ちどころもなき面長の美人なるが、何と無く陰氣に哀れ氣なる色見えて、ことさら小鼻より口のあたり掛けての、いと淋しき顔つきは、はて那處でかじに見たことのあるやうなと、思ふより俄に陰風身に染みる心地して、思はず知らず慄然と鳥肌立ちたり。是は心得ぬ怪しき事かな、かゝる人をば知るべくも無き身の、氣の迷ひといふは

此の事なるべしと、一度はト川思ひ返したれども、視れば視るほど何様しても記憶あるやうなるに、強ひて自分より理解を付けて、さては繪にて見しか、影像なんぞにて此人に能く有たる容貌を見し事のありしな、現の人のやうに思ひ解めて斯様に疑ふなるべしと、やう／＼に考へて考へ解きしが、其の間自己が屈託にかゝつて何を云はれしやらも能くおぼえず。夜露が深うございましたので、御氣味悪うございしましたらう。と云へる言葉の末を僅に聞きはつて、どうも夜道の事で仕方が有りませぬが、私はまた汗さへかいたので衣領も袂もべつとりになつて、と云はでもの事を正直に云つたるも可笑しく、何時受取りしやら吾が前に茶碗を取り居たるを今になりて氣づきて一口口吸れば既呑頃を過ぎ居りて微温になり居たるもなかしかりき。やがて賢げなる彼の小童は女の背後に來りて、今日は大方お歸りかと思つて風呂をたきましたが、まだ仕合に然程も冷えて居りませんので、今しがた一ト焼ばや／＼と燃やしましたら、もう好い加減に沸いてまゐりました。御入りになるやうに仰あつては、といふ。それは丁度好いところ、御氣味悪くて居らつしやいませうに、一ト風呂お浴びなさいまし、御身體もさつげ

りとなさつて、御心持も快く、御つかれもとれませう、と女の勧むるに辭まう氣はせず。今宵は到底此家の世話になる心算に胸の中を定めたれば、人の好意に遠慮は要らぬ我慢と、それは有り難し、何よりの御馳走と素直に出れば、小童は路次行燈を取りて外に出で先に立つ。直されし庭下駄穿きて、繪心に石の置かれし狭き小路を行けば、たゞ足下だけの光りの歩むに隨つて照らし出すところ、道を挟んで植ゑられたる幾株の芙蓉の人を埋めんとするまでに育ちて、夜に萎める白き花の暗きに著きが、我が袖袂に觸れんとする風情、おもはずも面白しと微笑みつゝ、後庭とおぼしきところの片隅に隠れて立てる二坪程の湯殿に入れば、二疊の脱衣場、二疊の流し、簀の子天井、小き角風呂、褒むべきところは無けれどもすべて清らにして心地よし。灯を置きて小童は去りぬ。ト川獨り汗に朽ち露に濡りたる衣を脱ぎて、身をしめして湯槽に入るに、入りて見て驚きたる湯の案外に微温さ。出でなば却つて風邪も引くべき肌寒きに、少しは此儘に温もり得るか、是非無く屈み居れば、彼の小童の外の方に於て燃やし居るなるべし、しきりにぼう／＼と火の燃ゆる音して、狭き風呂の事とて見る／＼沸き來り、やうやう身

十九

問を以て答と爲せば答へて答へざるなり、答を得て間に等しければ問ひて問はざるなり。漢たる小僮が答にト川は茫然となりしが、さもさも知つて居たる事を態とでも問ひしやうに、貴下の御存知の通りでと打任せて云はれて見れば、何と無く自分が知つて居たものゝやうなる氣も仕て、此處の何地なるかも、女の人となりも名も歸も、此の小僮の名も氣心も、元來は何も彼も残らず覺えきつて居しな、たまゝ大熱の病に罹りて一度忘れ果てし後、やうやく其の熱の褪め際の今、朦朧と昔の記憶の有るには有りと感じながら、猶明晰とは何一つ思ひ浮め得ぬが如き心地の爲つ。霧の中の花、香を知つて色を知らず、樹隠れの禽、聲を聞いて姿を見ざるの思ひあるに、我から我を疑ひて黙々として唯酒杯を重ねたり。一二言の答、答に轉ぜられては問の鍵既に奪はれて徒に袂篋の封鎖を存するのみなれど、七八分の酔、酔に蒸されては心の鏡更に霞みて物影の有無を定かにせず。知つたか知らぬかも其儘にして、腔中に春燃ゆる酒の力の奇しきに任せ。何、知らずと思ひて我が問ふものなば、君が既に知れる通りなりとや。

おもしろし。云はるれば實に知りしやうの氣もするなり。七世の孫にも逢はずして濱に立ちたる浦島が、長の睡りの今醒めて我を疑ふ百合若か、此のト川の夢みるか、人の我をば夢みるか、今宵の事など斯く異しき。酔ひて興じて思ふならねど、昨日の雲は夕暮の今日の空には影も無し、有りしとおもふは思ひのみ。今日の雲また曉の明日の空には影も無からん、有りとおもふも思ひのみ。天にも地にも本は無きもの何を結んで雲となる、雲にも似たる此の人間の、過ぎし昔の離合聚散悲喜哀歡のそれ／＼を、すべて皆有りしとや云はん、無かりしとや云はん。有りしも無かりしが如く、無かりしも有りしが如く、其の事まことは有無の相を離れて、此の思たゞ有無の觀をなすまでなり。人を我が知り居りしやうの思ひのすれば、我も何處でか人を知り居りしかも知らず。人の我をば知り居りしやうに云ふなれば、人も何處でか我を知り居りしかも知らず。昨日の雲は今日の思ひにあるのみ、伏屋の葺木、夢野の鹿、眞妄虛實糾すまでも無し。と酔郷の天は廣く地は厚くして氣象ゆたかに、其の無理を玩びても理に蹟くこと無く、ト川は二十三のあどけ無き少女の紛れたる絲を解きかれて、其儘にしてくる／＼と丸めて懷中

に納むるやうに、わからぬ事をわからぬまゝにして今は苦にもせず、湧き騰る酒氣を吹いて長閑に嘯きつ、おのが好める詩なんどを竊に吟じも出さんとする時、彼の女はおもむるに座に現はれ來り。湯上りの面、薄花櫻の色美しく、蘭湯既に迫れる憂ひを洗ひ去つて、芳心おのづから暢びやかに寛ろぎを含める歟、星眸朱脣いさいきとして嫣然と聊か笑まひつ、何事か童子の耳近く嘯きたるは、猶酒を持ち來れとの事にやあるべき、やがて童子は立つて彼方に去り、女は代りて席を進みたり。ト川は醉既に十分に近からんとすれば、さして食り飲まんとはせざれども、酒興今盛んにして、しかも女の口數きかで煩さからず勸むる親切の扱ひおのづから我が思ふ壺に中りて、飲まざらんと欲する時は酒を送らず、飲まんと欲する時は杯を空しうせず、心も言はず眼も語らぬに恰も皆我が意をば知れるが如くなるにぞ、妻持ちし覺えは更に無けれども、十年も添ひ馴染みたる妻といふものに、長途の旅を終へて歸れる夜の小酒盛に痒き處に手の届く優しき扱ひをさるゝも斯くやと心よく、一杯一杯思はず量を過して終に十二分に及べば、殊に宵よりの疲れはあり旁々、福々しき人ならば玉山將に頽れんとすとも云ふべきを、

ば、年は取りても世なれぬト川は辭せん言葉な
さへ知らず、たゞ唯々と爲るゝまゝになりて、
心に其の好意を深く謝するのみ。夜も更けまし
たし、物欲しいやうな御心持もなさいませうか
と存しまして、何も御座いませんけれど、眞の
御疲勞休めだけに御一盡あがつて頂きたくつ
て、たゞ御笑ひなすつてはいけませんよ、ほん
とに何も無いのですから、心ばつかり有つても
御下物は根から御座いません可厭な田舎で、と
女は羞を含みながら自ら膳を薦む。肚裏はまこ
とに空きたり、酒は欲しき夜なり、ト川自己を
欺きて空辭退も爲し得ず、有りのまゝに、有難し
と悦び聞えて酒盞を手によれば、彼の小嬢は座
を進みて謹まやかに酌をす。下物に滋味無しと
いへども、夜好し家好し、燈前の佳人親切餘り
ありて、座傍の小嬢よく心利きたれば、山出女
が突き付け膳の味も無く飯食ひ、我が影相手に
手酌の酒の冷勝なるを飲むといふやうに我が世
淋しく送り來しト川は、亂山殘雪の間を過ぎて
芳草春風の野に出でし思、杯を衝む幾回なら
ずして心既に暢び、陶然として酔に入るを覺え
しが、自己もまた入浴するとなるべし、少時
して女は一寸會釋して去り、小嬢のみ應答明晰
と我が相手して酒を侑む。玄一悠然と我が家に

在るよりも嬉しき心地して飲みながら、偶然心
づけば膳の上のものに一つも火氣無く、平鰯の
鱠は柚の香微にして旨く、胡桃味噌添へたる皮
引獨活、へぎ梨、缺き栢榴、山葡萄に氷糖かけ
たるなど、或は見る目の快く、或は俗びてな
かしけれども、皆ないづれも冷やかにして些少
も温熱なし。夜の更けたればとて一種位は暖か
きものもあるべきをと思へば想ふほど聊か不
思議立ちて、山深き石室に、火を嫌ふとかいふ
山精の響應にても受くるやうの心地しつ、既の
事に小嬢をとらへて尋ねんとしたりしが、いや
いや馴染も無きに口腹の事を語るは早しきに過
ぎて禮無し、まさかに庖厨に火無きにはあるま
じけれども、温かきものを設け得ざればこそ斯
様は仕たるならん、問ひて顔を赧めさせんは心
無き業なるべしと思ひ返し、たゞ黙々として一
飲一啄するに、小嬢は笑作りながら巧に酒を強
ひて、何も召上るやうな物が無いばかりで無
く、温暖いものが何一つ無くて、山の猿かなん
か御饗應をするやうでございしますが、せめて
先御酒なりと熱いのを飲みまして、といふ。他
の意を我も猜し得ることあれば、我が意を他の
知るも怪しうばあらねど、此の一言にト川底氣
味悪く驚かされしが、偶然の挨拶の我が思念に

中たりしまでなるべしと思ひ解きて心に掛け
す。いや種々御馳走で大層過しました。冷たい
もの揃ひも湯上りには有り難い位、小生は何と
も思ひませぬ、苦にもして下さいませ。鯛の
取れぬ濱へ泊り合はすのも、鹿の取れた山に宿
借りるのも、悉皆自分の持つた運の圖の知つた
ことで、今夜不思議に斯様いふ御厄介になるの
も、小生の一生の予定の中に斯様いふことが有
るやうに出来て居る故だと思つて居ます。ハ、
ハ、何、暖かいもの、無い位が、何程の事だと思
ふ事偽り無しに今宵の感じを交せて答ふれば、
小嬢は其の意をば解き得しや否や知らず、但微
微として聊か笑を含めり。其は兎に角に何様で
も好しとして、此家の主人は如何なる人なりや、
彼の女は又何者ぞ、ほと／＼此家の主人の妻と
もいふべきほどの深き語らひをなせる仲の女と
は察せらるれど、問はざれば未だ其の眞を知ら
ず、試みに小嬢に問はんと、不審さに堪へずし
て酒盞を措き、其の事よりは先づ此家の御主人
は、何様いふ方で、と眞顔になつて問へば、小
嬢は心底より可笑氣に笑ひ出して、そのやうな
事は私が申さないでも、貴下の御存知の通り
で違は御座いませぬ、とト川には更に解らぬ捉
へ處も無き挨拶なり。

月日にあなたの心を籠めて書いた文を眼に見やうも知れぬ。其の時は屹度餘所に見ては通りますまい。やつぱり此の文殻に見入つたやうに思ひきつて馬鹿になつて遠慮も無く見入つて、そしてまたそれが爲に馬鹿な目に逢つても、未練らしく悪びれて悔むやうな事は爲すまい、と云へば、女は物淋しく力無く笑つて、何様ぞ然様いふこともありましたら然様いふやうに願ひませう、今宵限りで又とは御目にかゝらないやうな事になりまして、若し然様いふ事がございましては若の下から何の位か御嬉しく存じまして、生れかはつてさへ居らずば夢枕になりと立つて、屹度御禮を申しませう、と戯れとも聞えぬ五音の調子しみくと語る時、何處とも無く夜風冷やかに渡りて、燈火薄暗く、ふつと瞬きたり。ハ、ハ、ハ、いよ／＼おもしろい。氣に入つた事を仰ある。有る無し分らぬ彼の世へ行つても、此の世の者に會へる事と思つて、そして會ふつもりで御いでになると見えまするな。しかし燈火が消えればたゞ闇になるのに、命が盡きて何が残りませう。と悟り顔する鼻の先を冷たい風のまたそつと吹き、燈火がすかに搖ぎ息ついて光りの隈を見する、其の仄暗さの内より弱々と、それは御道理には聞えますけれど、

風は燈火を吹消しても油を吹き消しませず、氷は晝に解けて無くなつても水は残つて居ります、火の縁に觸れれば燈火はまた照り、寒さの縁に遇へば氷はまた結びます。生命が盡きましても念が散らなければ、燒き盡された冬野の芒が、何處にも見え無いやうになつても、やさしい春の雨にあつては、そつと土から芽を出すやうに、やさしい縁の力に引かれては其の凝り詰めた一念が此の世に影を見せも仕ませう。かうして御眼にかゝつて居る此の私の身が、影のみ人の眼に見える其の最初の幻ながら迷つて此の世に出て居るので御座いましたら何様なさいいます。ホ、ホ、ホ、と幽に笑はれて、玄一怪しみの眼を張りつゝ、何其の様な事がと云ひ消したりしが、既に酒に酔ひ、又不思議さに酔ひて、心飄々として自ら主とする無く、二の句を續ぎ得て女の面を打護れば、女は又小さくホ、と笑ひて、イエ／＼、そればかりではございません、復蛸が蟬になり、御蠶様が蛾になるぢやございませんか。彼の世の念が此の世へ出ますか、此の世の念が彼の世へ残りますか、それは妾には分りませんけれども、妾の後にまたまた妾が生まれ、貴郎の前にまたまた貴郎が有つて、蟬が復蛸を知らず、お蠶様が蛾を知らないやうに、自分では前の世も後の世も知らずに居ても、なさげはなさげ、仇は仇、それ／＼の縁に獨まり念を引いて生れるものと思ひます。貴郎の今夜御逢ひになつたやうな事は矢張りあなただの前の世にも御有りなすつて、妾の今夜逢ひましたやうな事も矢張り妾の前の世にも有りましてらしい氣が仕ます。其の御話しの人にも文も、ほんとは貴郎が今日はじめて御覽になつた譯なのでは無いので、いつかの昔に御覽になつた御覚えがあるのではありますまいかと、妾には何様も思へてなりません。妾が今燭してあげた其儘の御茶の味を、貴郎は若や何處かであがつて知つておいで／＼は有りませんか、妾は貴郎が其の御茶を召上げる御口つきなり御手つきを存じて居りましたやうな氣がいたします。あの小童は若しや貴郎の御召使ひで、此のやうな家に若しや貴郎の御住ひになつたやうのお覚えが有りは仕ませぬか。銀の木犀の香の流れる闇、灯りの光りの下に／＼と白い花、どうも御覚えが有りさうな氣が仕てなりませぬ。と云はれて悚然と總身の毛孔立ち、思はず女を確と見んとすれば、いづより吹き入るか陰風さつと渡つて、襟にも懷にも水を挿し込まるゝ心地し、燈火息つくが如く搖ぎ瞬いて、明るさの中に暗さ

貧骨羅せて悲しく、肩に肉無き男の、臂へば立ち枯れの朽木の春の賦雨に重みの付きて今や危く倒れんとするが如くに酔ひ、酔眼まぶしく燈火のあたりを見ながら、ヤ有り難い、もう宜い、もう宜い、飲むだけ飲んだので酒はもう足りた、ア、好い心持だ、實に好い心持だ、エ、イ、とここで、我酔うて眠らんと欲す卿去る可したテ。オット、これは云ひそこなひ、失敬々々、いろいろのもてなしで大満足いたしました。何様かもうこれで御納めを願ひまして御休み下さいますやうに、と斯う申す筈のところを、ついで金を出して仕舞ひました。ハ、ハ、と元氣に笑へばホ、と優しく受けて、御疲れでございませうから御道理ではございますが、まだ御宜いしではございませんか。オヤ、頭を御振りなさる。ホ、ハ、では御食事な。それも御厭となら、では御茶の熱いのなあげまして、そして御緩りと御休みなさるやうに致して進ませませう。まだ碌に御話も伺ひませんし、又此方からも申し上げませんが、伺ひたい事も申し上げたい事も澤山御座いますのに、と云ひ、杯盤を小器用に取り片付くれば、小僮は何時か茶道具をもて來りて、引換へて其處を靜かに引き行く。ト川醉ひても本性は違はず、言の縁に導かれて又物の

間ひなく、左様仰あれば御話し仕たい事も御聞き申したい事もあるで。しかし、私の方の事は御話しする價值も無い事、ハ、ハ、土の中の蚯蚓の一代記は矢張り土づくめで、馬鹿な男の身の上話しは矢張り馬鹿な話しかかり、たゞ此の軸を買つて見入つて居たために、不意の失火に逢つて、馬鹿な目を見た果が夜道を歩いたので、それから残らず御存知の通り。それよりも御尋ね仕たいのはあなたの御上の事で。と薦め呉れし熱き茶をひと吹き吹いて飲みながら眞面目に云へば、女はト川の面をちつと眺め入つて、沈みたる語氣の怪しくもたゞならず、いゝちやあ御座いませんか、馬鹿な方が。ネエ、利口な人ばかりで目を突く世の中にやあ、馬鹿の方が何様も、妾なんぞは有難くてなりません。妾も何様か斯様か馬鹿になりましたつもり、どうぞ其の馬鹿の御仲間に入れて頂きたいと思ひます。と世を恨めるか抑も人を恨むか、其の言ふところ殺げて扱れたり。ハ、ハ、道理も付け方、物も云ひ様、馬鹿も尊いかに知れぬけれども、分らぬ女の文藝に見入つて、迂濶り仕て無けなしの懷中を煙に仕て仕舞ふなどは、ハ、ハ、馬鹿も大抵ぢや無い、行止まりの方で、と冷やかに自ら嘲るト川なば、俯向きて聞き居し女はそつと

頭を擧げて、身につまさるゝ節などの有りてか、曇る眼に悲むが如く又傷むが如く視て、マア其の様に酷らしく仰やらすともでございませう。分らぬ女の文藝と仰やいまするが、わたしくしも女、其の人も女、涙ににじむ薄墨に、文字を書くとも思へばこそ、心を絞つて紙に捺した苦しい覚えが、妾にも有りますれば、人も何のやうにか苦しい心の文を、生死の瀬戸で書きも仕ましたらう。文藝は云はば反故紙でも、人の心の香り、魂魄の影。見入つた貴下、見入られた文、見入るものには見入るわけ、見入られるものには見入られるわけがあつて、鐵と磁石が引いて引かるゝ免れぬ縁が有るのでせうものを。焼ければ煙、置けば紙、浮世の人が承知して紙幣と許して紙幣になる其の様なものを焼いたとて、御悔みなさるのには御情無いやうでございます。といふ。言葉に艶は無いけれども其の情まことに味はふ可ければ、ト川は嬉し悦びて笑み傾きつゝ、酒氣忽に勃發するを覺え、遠慮もいつか忘れたる心易だてに、おもしろい、左様いふやうに云つて貰ふと私は助かるが、ハ、ハ、あなたも中々立派な馬鹿で居らつしやる。わたしくしも女、其の人も女と仰つたのが失禮ながら有難い。若し又いつく如何なる里で、いつの

聲に、扱は如何ばかり寢忘れやしけむと驚きて
 飛び立てば、日の光り燦として我が眼を射り、
 曉風冷やかに颯と我が面を吹く。是はと再び驚
 きて四邊を見廻すに、有りし臥床も無く家も
 無くして、身はとある農家の籬の外なる松七八
 本並べるが中の其の一ト木の下に寝たりしと思
 しく、彼の怪しき一軸は枕とや爲し松の根方に
 あり。たゞ驚くべし我が傍近く凝々然として寢
 なるが如くに立てる二十歳ばかりの女の、袖窄
 き紺の匭衣被たる姿は正しく農家の娘と見えな
 がら、眼鼻立より姿形まで一厘一毫違はず昨
 夜見し女な其の儘なるが、物言はんとして物言
 はず、しきりに我を見詰めたり。夢か、夢なり
 しか、解くべからず判すべからず。餘りの不思
 議さにト川も呆れて、びたすら女を訝り視れば、
 女もト川をつくんと猶視る。彼も語らず此も
 言はず、土偶木偶相對する間に、朱冠いかめし
 く垂尾優しき地鶏の美しきが何時か歩み來て、
 聲朗らかに高く唱ひたり。ト川はこれにハツト
 氣の轉じて、凝らせる踵を一寸そらしつ、聽て
 物尋ねんと慇懃に會釋して、女の方へ一步二步
 進めば、女は其の時微笑として笑を含み、嫣然
 として一ト目男を見たりしが、其の儘身を轉じ
 踵を返して、藁草履の歩み安らかに家の内に隠

れ入りぬ。
 ト川後を慕ひて物問はんと思はざりしにはあ
 られど、若き女の事なれば心咎めの仕て躊躇ふ
 時、野ら仕事にととなるべし老いたる農夫の、
 恰も我が傍を通りかゝれば、呼び止めて先づ此
 處は何といふ處と問へば、滋賀の里の北はづれ
 といふ。大津からは何程のところと問へば、此
 處から村を過ぎて南へ行けば南滋賀、それから
 次々に錦織、小浜、山上、別所村、別所の其次
 が大津でといふ。扱は大津には幾程も離れぬと
 ころなりと愈々驚き迷ひ、今此處にて見受けた
 る二十歳ばかりの美しき人は此の家の娘らしき
 が、と思ひ切つて尋ねれば、老夫は怪しく笑ひ
 ながらじろくんと玄一を見つ、やがてつか／＼
 と耳近く寄つて、お前さん迂潤りした事を思つ
 てはいけませぬ、他所の人らしいから教へて進
 じまするが、あれば此處の娘で啞で聲、物解り
 の宜い利發な好い子だが、何にしる片輪なので
 誰も貰ひ人の無い餘され者、無駄な事を思うて
 脊負ひ込んだら損になりますといふ。重れ重れ
 の意外に又驚く時、女は家を出て、此方へ歩み
 來れば、惡口云ひし老夫は知らぬ顔してすたす
 たと去りぬ。見れば見る程昨夜の女な其の儘な
 るに、不思議さに堪へぬ餘り怖しきのやうの思

ひもしつ、それにしても斯く醜からず生れつ
 きながら、口惜しき不具とはと、油然として怒み
 衰しむ念の湧くまゝ、其の面を視やれば、女は
 突然に我が近くに來り、片手には此方に來よと
 手眞似して示しながら、ア、と啞兒聲を出し
 て片手には袖を引く。何事かと怪みながらふと
 見れば左りの無名指に、所も所、色も色、寸分
 違はぬ黒子一つ、あり／＼と昨夜の女の指に見
 しが如くに有り。ト川愕然と驚き怪然と隠えて、
 殆ど倒れんとせしが辛くも自ら支へて、引かる
 るがまゝに其の家に入れば、籬の外に地に臥し
 て一ト夜寢し我を憐むとの意にや、物姿る煙り
 の白く、其の香の立つて、一家族團欒と暖かけ
 んと食事せるが中に、膳を備へて我にも食を施さ
 んとするなりけり。

土偶木偶の後に書す

ト川玄一旅中に啞美人を得て妻とし、復歸つ
 て東京に住み、君平枋得を學んで生を營みしが、
 今を距る三年、一日忽然として夫妻相伴なひて
 家を捨て、終に其往く所を知らず。ト川夫妻を
 知れるものの曰く、玄一時に其妻を指さして語
 るらく、吾が妻は前世に於て我が爲に情に死し、

の浪の打ちしければ、一明一暗半顯半隠、其處に其の人ありとは見えながら、定かならざる陽炎の眼にも溜まらずらゝと、たゞ望む可く就くべからず寄らば消ゆべく立つが如くに、朦朧として悄然と坐れる姿いぢらしく、面もいつか色褪めて、音無き雨に梨花青も其の曉の淋しき風情、眼鼻立より頭つき肩つき、坐り姿勢、髮辮まで、オ、いとほしの吾が妻よ、吾が妻なりし妻なりし、浮世の善惡に隔てられ、意中の人を世に晴れて妻と呼ぶ日もあらずして別れわかれし其の後の、心淋しく味氣無き月日積りて幾歳ぞ、思へば遠く長かりし。思ひを琵琶の湖の深さに争ひ、我ゆゑに水に死にしと聞きたしが、幸に猶世に在りて、よくぞ我が家を尋ね呉れたる。問ひもし語りもしたき事の胸に問へて山とあるに、何から云はん先づ此方寄れ、と過めかれたる懐かし涙、思はず手も取らんとせしが、愕然として我に復れば。此は何事ぞ、夢みるか、道理無き思ひ、道理無き事、正しく初めて會ひし人なば何として斯くば思ひたるぞ、醉に心の亂れしか、我はもとより妻も無く、又今日までは戀もせず、色には染めぬ白布のいさぎよくのみ世を経しに、底はづかしき今の心地や。卜川玄一愚なれども、始めて會ひし

人に對ひて、思ふまじき事を我知らずと思ひたるは抑何たる事ぞ。前生後生前世後世、誠に有りは有るにせよ、隔生即忘と聞く時は自ら知らんやうも無きに、果敢無くも女の言葉に惹かされて、怪しくも物狂はしき思ひをなししよ。世に人の心を知る術を能くするものゝ有りと聞く。或ば此の人其の術を得て、我に戯れ物言ふか。と強ひて我から我を叱つて、心機一轉、疑ひの目眦冷やかにそつと見やりぬ。女は其意を疾くも悟りてか、恨めしげに少時言葉無く玄一を見しが、まだ御解りにはなりませぬか、鏡の中の影に逢つて疑つて見ても他所の人では有りません。おのづと心に映つて出た事を、強ひて他所にはなさらないでも、それを鏡の中の御自分の影に知らない顔になさるつれなさ。二世の思を細かくしき聞いて戴く暇も無く、あれもう何處やらで鶏の鳴く聲。定めし御疲れてございませう、小嬢に御床は展べさせてございませう、只今御案内致させませう。たゞ御話の縁に引かれて、いろ／＼御話し申しましたことも、じろしの無い事は諺にも思召しましたやうが、これを御覽なさいまし、私の左の無名指の、指輪の下に當るところに、小さな黒子が一つ御座いまするが、指に黒子の有ることは少いもの

と云ひまする。若しも私が生れ代つたなら、此の指の此處に此のしるしを持つて、屹度あなた御眼にかゝりませう。此の世で辛い恐ろしい思ひを仕盡して、果敢無く死んだ憐れな身に、せめて後生が無くて何となりませう。其の文に見入つて御仕舞ひになつたやうな情の深い貴郎が、二世の事をほんとになさらないやうな淺まな事は屹度御有りなさらないと思ひます。心ばかりは暖かても夜の物は薄く、小さい家は冷え勝て、いぶせく御思召すとも何様か御緩りと御休み下さいまし。明けまして又心のゆたかに、有り餘る色々の事を聞いて戴きませう。と云ひ終りて心深く禮をする時、小嬢は來りて此方へといふ。玄一も儼然ならず明日を契りて、其の挨拶を聞きさまに莞爾と笑へる、女は心底よりの嬉しげの顔を後に、引き別れて獨り別室に到りぬ。睡らぬ先より既に夢みるが如く、宵よりのさま／＼の思ひにいたく疲れたる卜川は、小燈光りおだやかに枕上を照して、軽く清らかなる小夜着の秋に、快き清楚の一室の中に靜かに睡り入りぬ。

二十

もし／＼と揺り起し呉る、彼の女の

運

命

世おのづから数といふもの有りや。有りといへば有るが如く、無しと爲せば無きにも似たり。洪水天に滔るも、禹の功これを治め、大旱地に焦せども、湯の徳これを濟へば、數有るが如くにして、而も數無きが如し。秦の始皇帝、天下を一にして尊號を稱す、威儀まことに當る可からず。然れども水神ありて華陰の夜に現はれ、璧を使者に託して、今年祖龍死せんと曰へば、果して始皇やがて沙丘に崩せり。唐の玄宗、開元は三十年の太平を享け、天寶は十四年の華者をはしりて、然れども開元の盛時に當りて、一行阿闍梨、陛下萬里に行幸して、聖祚疆無からんと奏したりしかば、心得がたきことを白すよとおぼされしが、安祿山の亂起りて、天寶十五年蜀に入りたまふに及び、萬里橋にさしかりて置然として悟り玉へりとなり。此等を思へば、數無きに似たれども、而も數有るに似たり。定命錄、續定命錄、前定錄、感定錄等、小説野乘の記するところを見れば、吉凶禍福は、皆定數ありて飲啄笑哭も、悉く天意に因るかと

疑はる。されど紛々たる雜書、何ぞ信するに足らん。假令數ありとするも、測り難きは數なり。測り難きの數を畏れて、巫覡卜相の徒の前に首を俯せんよりは、知る可きの道に従ひて、古聖前賢の教の下に心を安くせんには如かじ。かつや人の常情、敗れたる者は天の命を稱して數じ、成れる者は己の力を説きて誇る。二者共に陋とすべし。事敗れて之を吾が徳の足らざるに歸し、功成つて之を數の定まる有るに委れなば、其人僞らずして眞、其器小ならずして偉なりといふべし。先哲曰く、知る者は言はず、言ふ者は知らずと。數を言ふ者は數を知らずして、數を言はざる者或は能く數を知らん。古より今に至るまで、成敗の跡、禍福の運、人をして思ふ潛めしめ數を發せしむるに足るもの固より多し。されども人の奇を好むや、猶以て足れりとせず。是に於て才子は才を馳せ、妄人は妄を恣にして、空中に樓閣を築き、夢裏に悲喜を書き、意設筆綴して、烏有の談を爲る。或は微しく本づくところあり、或は全く據ると

ころ無し。小説といひ、稗史といひ、戯曲といひ、寓言といふもの即ち是なり。作者の心おもへらく、奇を極め妙を極むと。豈圖らんや造物の脚色は、綺語の奇より奇にして、狂言の妙より妙に、才子の才も敵する能はざるの巧緻あり、妄人の妄も及ぶ可からざるの贅拔あらんとは。吾が言をば信ぜざる者は、試に看よ建文永樂の事な。

我が古小説家の雄を曲亭主人馬琴と爲す。馬琴の作るころ、長篇四五種。八大傳の雄大、弓張月の壯快、皆江湖の嘯々として稱するところなるが、八大傳弓張月比して優るあるも劣らざるものを俠客傳と爲す。憾むらくは其の叙するところ、蓋し未だ十の三四を卒るに及ばずして、筆硯空しく曲亭の淨几に遺りて、主人既に逝きて白玉樓の史となり、鹿鳴草舍の翁これをつ續けるも、亦功を遂げずして死せるを以て、世其の結構の偉、輪奐の美を觀るに至らずして已みたり。然れども其の意を立て材を排する所を以て考ふるに、楠氏の孤女を假りて、南朝の爲に氣を吐かんとする、おのづから是れ一大文章たらすんば已まざるものあるをば推知するに足

怨氣鬱結して轉生して聲啞となれり。其の未だ我に遇はざるに當つては、前身既に死して猶死せざるが如く、現身既に生れて猶生れざるが如く、聞く無く言ふ無くして外に即ち昏々たるも、心は聰智は明にして内は却つて了々たりしが、我が適々吾が妻の前身の遺書を得、且つ災に遇ひて窮窮するに及んで、心自から感じて之を知り、其の神靈々として夜遊んで鬼に復り、殆ど過去世の狀を現し示して我をして感悟せしめたり。前世の事、詳しく知るべからずと雖も、蓋し吾が妻の前身は逼迫せられて堪ふる能はざるに至り、私に奔つて我を訪はんとして果す能はず、人の獲るところとなつて如何ともする能はざるに至り、終に恨を含んで自から死し、我は讐人の爲に凌辱錮罵せられて憤怨悲痛して天せるなり、因縁縷の如く、夫妻今世に相遇ふに及んでは、爾前の事、我總べて之を知り、吾が妻却つて知る無しと雖も、宿盟兩途、舊債全償するに至つて、吾が妻の聲啞漸くにして少しく治し、聰明漸くにして外發し、終に常人と異なる無きに至らんとするの勢を示せり。三世必らず有り、これを知らざるものは以て妄となし、之を驗せるものは以て眞と爲す。人々務めて道に依り情を篤くし、世をして冤死の鬼無か

らしむべきなりと。玄一の性はやゝ癡にして偏僻、其の妻は慧巧伶俐、農家の出に似ず、唯甚しく寡言なるのみ、他の異無しと。玄一の談、子ば之を鹿谷三郎に聞けり。三郎は之を根井守正に聞き、守正は之を河島民子に得、民子は之を藤沼時雄に得、時雄は屋を玄一に租賃し、直に之を玄一に聞きたりといふ。三郎今漫遊して印度に在り。其の人好んで怪を談ず。詭異幽凄人を驚かすもの少からず。玄一の事の如きは其の最も平凡なるものなり。

官と賊と交々勝敗あり。官兵漸く多く、賊勢日に蹙まるに至つて、賽兒を捕へ得、將に刑に處せんとす。賽兒怡然として懼れず。衣を剥いで之を縛し、刀を舉げて之を砍るに、刀刃入る能はざりければ、已むを得ずして復獄に下し、械枷を體に被らせ、鐵鉏もて足に繋ぎ置きけるに、俄にして皆おのづから解脫し、竟に逃れ去つて終るところを知らず。三司郡縣將校等、皆寇を失ふを以て誅せられぬ。賽兒は如何しけん其後踪跡香として知るべからず。永樂帝怒つて、およそ北京山東の尼姑は、盡く逮捕して京に上せ、嚴重に勘問し、終に天下の尼姑といふ尼姑を逮ふるに至りしが、得る能はずして止み、遂に後の史家をして、妖耶人耶、吾之を知らず、と云はしむるに至れり。

世の傳ふるところの賽兒の事既に甚だ奇、修飾を假らずして、一部稗史たり。女仙外史の作者の藉りて以て筆墨を鼓するも亦宜なり。然れども賽兒の徒、初より大志ありしにばあらず、官吏の苛虐するところとなつて而して後爆裂迸發して鐵を揚げしのみ。其の永樂帝の賽兒を索むる甚だ急なりしに考ふれば、賽兒の徒窮窮して戈を執つて立つに及び、或は建文を稱して永樂に抗するありしも亦知るべらず。永樂の時、

史に曲筆多し、今いづくにか其實を知るを得ん。永樂篡奪して功を成す、而も聰明剛毅、政を爲す甚だ精、補佐また賢良多し。こゝを以て賽兒の徒忽にして跡を潛むと雖も、若し秦末漢季の如きの世に出でしめば、陳涉張角、終に天下を動かすの事を爲すに至りたるやも知る可からず。嗚呼賽兒も亦奇女子なるかな。而して此奇女子を藉りて建文に與し永樂と争はしむ。女仙外史の奇、其の奇を求めずして而しておのづから然るあらんのみ。然りと雖も予猶謂へらく、逸田叟の脚色は假にして後纔に奇なり、造物爺爺の施爲は眞にして且更に奇なりと。

明の建文皇帝は實に太祖高皇帝に繼いで位に即きたまへり。時に洪武三十一年閏五月なり。すなはち詔して明年を建文元年としたまひぬ。御代しろしめすこと正しく五歳にわたりました。然るに廟諱を得たまふこと無く、正徳、萬曆、崇禎の間、事しばし議せられて、而も遂に行はれず、明亡び、清起りて、乾隆元年に至つて、はじめて恭愍惠皇帝といふ諱を得たまへり。其國の徳衰へ澤竭きて、内憂外患こもく逼り、滅亡に垂とする世にば、崩じ

て證られざる帝のおはす例もあれど、明の祚は其の後猶二百五十年も續きて、此時太祖の盛徳偉業炎々の威を揚げ、赫々の光を放ちて、天下萬民を悅服せしめしばかりの後なれば、かゝる不祥の事は起るべくもあらぬ時代なり。さるな其の是の如くなるに至りし所以は、天意か人爲かはいざ知らず、一波動いて萬波動き、不可思議の事の重疊連續して、其の狂瀾は四年の間の天地を震撼し、其餘瀾は萬里の外の邦國に漸浸するに及べるありしが爲ならずばあらず。

建文皇帝諱は允攸、太祖高皇帝の嫡孫なり。御父懿文太子、太祖に紹きたまふべかりしが、不幸にして世を早うしたまひぬ。太祖時に御齡六十五にわたらせ給ひければ、流石に淮西の一布衣より起つて、腰間の劍、馬上の鞭、四百餘州を十五年に斬り靡けて、遂に帝業を成せる大豪傑も、薄暮に燭を失つて荒野の旅に疲れたる心地やしけむ、堪へかれて泣き萎れたまふ。翰林學士の劉三吾、御欺はさることながら、既に皇孫のましませば何事が候ふべき、儲君と仰せ出されんには、四海心を繋ぎ奉らん、然のみは御過憂あるべからず、と白したりければ、實にもと點頭かせられて、其歳の九月、立て、皇太孫と定められたるが、即ち後に建文の帝と

るあり。惜い哉其の成らざるや。

俠客傳は女仙外史より換骨脱胎し来る。其の一部は好迷傳に藉るありと雖も、全體の女仙外史を化し來れるは掩ふ可からず。此の姑摩媛は即ち是れ彼の月君なり。月君が建文帝の爲に兵を擧ぐるの事は、姑摩媛が南朝の爲に力を致さんとするの藍本たらずんばあらず。此は是れ馬琴が腔子裏の事なりと雖も、假に馬琴にして在らしむるも、吾が言を聴かば、含笑して點頭せん。

女仙外史一百回は、清の逸田叟、呂熊、字は文兆の著すところ、康熙四十年に意を起して、四十三年秋に至りて業を卒る。其の書の體たるや、水滸傳平妖傳等に同じと雖も、立言の旨は、綱常を扶植し、忠烈を顯揚するに在りといふを以て、南安の郡守陳香泉の序、江西の廉使劉在園の評、河西の學使楊念亭の論、廣州の太守葉南田の跋を得て世に行はる。幻詭猥雜の談に、干戈弓馬の事を挿み、慷慨節義の譚に、神仙縹緲の趣を交ひ。西遊記に似て、而も其の誇誕は少しく過り、水滸傳に近くして、而も其の豪快は及ばず、三國志の如くして、而も其の殺伐は

やゝ少し。たゞ其の三者の佳致を併有して、一編の奇話を構成するところは、女仙外史の西遊水滸三國諸書に勝る所以にして、其の大體の風度は平妖傳に似たりといふべし。懣むらくは、通篇儒生の口吻多くして、説話は硬固勃率、談笑に流暢尖新のところ少きのみ。

女仙外史の名は其の實を語る。主人公月君、これを輔くるの鮑師、曼尼、公孫大娘、聶隱娘等皆女仙なり。鮑聶等の女仙はもと、古傳雜説より取り來つて彩色となすに過ぎず。而して月君は即ち山東蒲臺の妖婦唐賽兒なり。賽兒の亂をなせるは明の永樂十八年二月にして、燕王の篡奪、建文の遜位と相關するあるにあらず。建文猶死せずと雖、篡奪の事成つて既に十八春秋を経たり。賽兒何ぞ實に建文の爲に兵を擧げんや。たゞ一婦人の身を以て兵を起し城を屠り、安遠侯柳升をして征戰に勞し、都指揮衛青をして擊攘に力めしめ、都指揮劉忠をして戰歿せしめ、山東の地をして一時騷擾せしむるに至りたるもの、眞に是れ稗史の好題目なり。之に加ふるに賽兒が洞見預察の明を有し、幻怪詭秘の術を能くし、天書寶劔を得て、惠民布教の事を爲せるも、亦眞に是れ稗史の絶好資料たらずんばあらず。賽兒の實蹟既に是の如し。此を假り來

りて以て建文の位を遁れるに涙を散し、燕棟の國を奪へるに齒を切り、慷慨悲憤して以て、回天の業を爲さんとするの女英雄と爲す。女仙外史の人の愛讀耽玩を惹く所以のもの、決して渺渺にあらすして、而して又實に一篇の淋漓たる筆墨、巍峨たる結構を得る所以のもの、決して偶然にあらざるを見る。

賽兒は蒲臺府の民林三の妻、少きより佛を好み經を誦せるのみ、別に異ありしにあらず。林三死して之を郊外に葬る。賽兒墓に祭りて、回るさの路、一山の麓を經たりしに、たまゝ豪雨の後にして土崩れ石露はれたり。これを視るに石匣なりければ、就いて窺ひて遂に異書と寶劔とを得たり。賽兒これより妖術に通じ、紙を剪つて人馬となし、劔を揮つて呪祝を爲し、髪を削つて尼となり、教を里閭に布く。禱には效あり、言には驗ありければ、民翕然として之に従ひけるに、賽兒また饑者には食を與へ、凍者には衣を給し、賑濟すること多かりしより、終に追隨する者數萬に及び、尊びて佛祖と稱し、其勢甚だ洪大となれり。官之を惡みて賽兒を捕へんとするに及び、賽兒を奉ずる者輩彥果、劉俊、寶鴻等、敢然として起つて戦ひ、益都、安州、莒州、即墨、壽光等、山東諸州鼎沸し、

づく。太祖の天下を定むるや、前代の宋元傾覆の所以を考へて、宗室の孤立は、無力不競の弊源たるを思ひ、諸子を衆く四方に封じて、兵馬の權を有せしめ、以て帝室に藩屏たらしめ、京師を拱衛せしめんと欲せり。是れ亦故無きにあらず。兵馬の權、他人の手に落ち、金穀の利、一家の有たらずして、將帥外に傲り、奸邪間に私すれば、一朝事有るに際しては、都城守る能はず、宗廟祀られざるに至るべし。若し夫れ衆く諸侯を建て、分ちて子弟を王とすれば、皇族天下に滿ちて榮え、人臣勢を得るの隙無し。こゝに於て、第二子樸を秦王に封じ、藩に西安に就かしめ、第三子橢を晉王に封じ、太原府に居らしめ、第四子榘を封じて燕王となし、北平府即ち今の北京に居らしめ、第五子櫓を封じて周王となし、開封府に居らしめ、第六子楨を楚王とし、武昌に居らしめ、第七子榑を齊王とし、青州府に居らしめ、第八子梓を封じて潭王とし、長沙に居き、第九子杞を趙王とせしが、此は三歳にして薨し、藩に就くに及ばず、第十子檀を生れて二月にして魯王とし、十六歳にして藩に就かしめ、第十一子椿を封じて蜀王とし、成都に居き、第十二子柏を湘王とし、荊州府に居き、第十三子桂を代王とし、大同府に居

き、第十四子模を肅王とし、藩に甘肅府に就かしめ、第十五子植を封じて遼王とし、廣寧府に居き、第十六子櫓を慶王として寧夏に居き、第十七子權を寧王に封じ、大寧に居らしめ、第十八子樞を封じて岷王となし、第十九子榑を封じて谷王となす、谷王といふは其の居るところ宣府の上谷の地たるを以てなり、第二十子松を封じて韓王となし、開原に居らしむ、第二十一子模を灌王とし、第二十二子楹を安王とし、第二十三子榑を唐王とし、第二十四子榘を郢王とし、第二十五子榑を伊王としたり。灌王以下は、永樂に及んで藩に就きたるなれば、姑らく措きて論ぜざるも、太祖の諸子を封じて王となせるも亦多しといふべく、而して枝柯甚だ盛んにして本幹却つて弱きの勢を致せるに近しといふべし。明の制、親王は金冊金寶を授けられ、歲祿は萬石、府には官屬を置き、護衛の甲士、少き者は三千人、多き者は一萬九千人に至り、冕服車旗邸第は、天子に下ること一等、公侯大臣も伏して而して拜調す。皇族を尊くし臣下を抑ふるも亦至れりといふべし。且つ元の裔の猶存して、時に塞下に出沒するを以て、邊に接せる諸王をして、國中に專制し、三護衛の重兵を擁するを得せしめ、將を遣りて諸路の兵を徵すにも、

必ず親王に關白して乃ち發することとせり。諸王をして權を得せしむるも、亦大なりといふべし。太祖の意に謂へらく、是の如くなれば、本支相幫けて、朱氏永く昌え、威權下に移る無く、傾覆の患も生ずるに地無からんと。太祖の深智遠識は、まことに能く前代の覆轍に鑑みて、後世に長計を貽さんとせり。されど、人智は限り、天意は測り難し。豈圖らんや、太祖が熟慮遠謀して施爲せるところの者は、即ち是れ孝陵の土木だ乾かすして、北平の塵既に起り、矢石京城に兩注して、皇帝遐陬に雲遊するの因とならんとは。

太祖が諸子を封ずることの過ぎたるは、夙に之を論じて、然る可からずとなせる者あり。洪武九年といへば建文帝未だ生れざるほどの時なりき。其歲閏九月、たま／＼天文の變ありて、詔を下し直言を求められにければ、山西の葉居升といふもの、上書して第一に、分封の太だ侈れること、第二には刑を用ふる太だ繁きこと、第三には治を求むる太だ速やかなることの三條を言へり。其の分封太侈を論するに曰く、都城百雉を過ぐるは國の害なりとは、傳の文にも見えたるを、國家今や秦晉燕齊梁楚吳閩の諸國、各其地を盡して之を封じたまひ、諸王の都城宮

申す。谷氏の史に、建文帝、生れて十年にして懿文卒すとあるは、蓋し脱字にして、父君に別れ、儲位に立ちたまへる時は、正しく十六歳におはしける。資性類慧溫和、孝心深くましまして、父君の病みたまへる間、三歳に亘りて晝夜膝下を離れたまはず、薨れさせたまふに及びては、思慕の情、悲哀の涙、絶ゆる間も無くて、身も細々と瘠せ細りたまひぬ。太祖これを見たまひて、爾まことに純孝なり、たゞ子を亡びて孫を頼む老いたる我をも念はぬことあらじ、と宣ひて、過哀に身を毀らぬやう愛撫せられたりといふ。其の性質の美、推して知るべし。

はじめ太祖、太子に命じたまひて、章奏を決せしめられけるに、太子仁慈厚くおはしければ、刑獄に於て宥め輕めらるること多かりき。太子亡せたまひければ、太孫をして事に當らしめたまひけるが太孫もまた寛厚の性、おのづから徳を植ふたまふこと多く、又太祖に請ひて、通く禮經を考へ、歴代の刑法を參酌し、刑律は教を彌くる所以なれば、凡そ五倫と相渉る者は、宜しく皆法を屈して以て情を伸ぶべしとの意により、太祖の准許を得て、律の重きもの七十三條を改定しければ、天下大に喜びて徳を頌せざる無し。太祖の言に、吾は亂世を治めたれば、刑

重からざるを得ざりき、汝は平世を治むるなれば、刑おのづから當に輕うすべし、とありしも當時の事なり。明の律は太祖の武昌を平らげたる吳の元年に、李善長等の考へ設けたるを初とし、洪武六年より七年に亘りて劉惟謙等の議定するに及びて、所謂大明律成り、同じ九年胡惟庸等命を受けて釐正するところあり、又同じ十六年、二十二年の編撰を経て、終に洪武の末に至り、更定大明律三十卷大成し、天下に頒ち示されたるなり。吳の元年より茲に至るまで、日を積むこと久しく、慮を致すこと精しくして、一代の法始めて定まり、朱氏の世を終るまで、獄を決し刑を擬するの準據となりしかば、後人をして唐に視ぶれば簡嚴、而して寛厚は宋に如かざるも、其の惻隱の意に至つては、各條に散見せりと評せしめ、餘威は遠く我邦に及び、徳川期の識者をして此を研究せしめ、明治初期の新律綱領をして此に採るところあらしむるに至れり。太祖の英明にして意を民人に致せしことの深遠なるは言ふまでも無し、太子の仁、太孫の慈、亦人君の度ありて、明律因りて以て成るといふべし。既にして太祖崩じて太孫の位に即きたまふや、刑官に識したまはく、大明律は皇祖の親しく定めさせたまへるところにして、朕

に命じて細閱せしめたまへり。前代に較ぶるに往々重きを加ふ。蓋し亂國を刑するの典にして、百世通行の道にあらざる也。朕が前に改定せるところは、皇祖曰に命じて施行せしめたまへり。然れども罪の弁疑すべき者は、尙此に止まらず。それ律は大法を設け、禮は人情に順ふ。民を齊ふるに刑を以てするは禮を以てするに若かず。それ天下有司に諭し、務めて禮教を崇び、疑獄を赦し、朕が萬方と與にするを嘉ぶの意に稱はしめよと。嗚呼、既に父に孝にして、又民に慈なり。帝の性の善良なる、誰がこれを然らすとせんや。

是の如きの人にして、帝となりて位を保つを得ず、天に歸して諡を得る能はず、廟無く陵無く、西山の一抔土、封せず樹せずして終るに至る。嗚呼又奇なるかな。しかも其の因縁の糾纏錯雜して、果報の慘苦悲酸なる、而して其の影響の、或は刻毒なる、或は杳渺たる、奇も亦太甚しといふべし。

建文帝の國を遜らざるを得ざるに至れる最初の因は、太祖の諸子を封すること過當にして、地を與ふること廣く、權を附すること多きに基

明らかに皇儲となりたまへる上は、齡猶弱くとも、やがて天下の君たるべく、諸王或は功あり或は徳ありと雖も、遠からず俯首して命を奉すべきなれば、理に於ては當に之を敬すべきなり。されども諸王は秋年の威を挟み、大封の勢に藉り、且は叔父の尊きを以て、不遜の事の多かりければ、皇太孫は如何ばかり心苦しく厭はしく思ひしむたりけむ。一日東角門に坐して、侍讀の太常卿黃子澄といふものに、諸王驕慢の狀を告げ、諸叔父各大封重兵を擁し、叔父の尊きを負みて傲然として予に臨む。行末の事も如何あるべきや、これに處し、これを制するの道を問はんと曰ひたまふ。子澄名は混分宜の人、洪武十八年の試に第一を以て及第したりしより累進してこゝに至れるにて、經史に通曉せるはこれ有りと雖も、世故に練達することは未だ足らず、侍讀の身として日夕奉侍すれば、一意ただ太孫に忠ならんと欲して、かゝる例は其昔にも見えたり、但し諸王の兵多しとは申せ、もと護衛の兵にして纔に身づから守るに足るのみなり、何程の事かあらん、漢の七國を削るや、七國叛きたれども、間も無く平定したり、六師一たび臨まば、誰か能く之を支へん、もとより大小の勢、順逆の理、おのづから然るもの有るな

り、御心安く思召せと、七國の古を引きて對ふれば、太孫は子澄が答を、げに道理なりと信じたまひぬ。太孫猶齡若く、子澄未だ世に老いず、片時の談、七國の論、何ぞ圖らん他日山崩れ海湧くの大事を生ぜんとは。太祖の病は洪武三十一年五月に起りて、同閏五月西宮に崩す。其遺詔こそは感すべく考ふべきこと多けれ。山戰野戰又は水戰、幾度と無く畏るべき危險の境を冒して、無産無官又無家、何等の恃むべきなも有たぬ孤獨の身を振ひ、終に天下を一統し、四海に君臨し、心を盡して世を治め、慮を竭して民を濟ひ、而して禮を尙び學を重んじ、百忙の中、手に書を極めず、孔子の教を篤信し、子は誠に萬世の師なりと稱して、衷心より之を尊び仰ぎ、施政の大綱、必ず此に依據し、又蚤歳にして佛理に通じ、内典を知るも、梁の武帝の如く淫溺せず、又老子を愛し、恬靜を喜び、自から道德經註二卷を撰し、解縉をして、上疏の中に、學の純ならざるを譏らしむるに至りたるも、漢の武帝の如く神仙を好尚せず、嘗て宋濂に謂つて、人君能く心を清くし欲を寡くし、民をして田里に安んじ、衣食に足り、照々皞々として自ら知らざらしめば、是れ即ち神仙なりと曰ひ、詩文を善くして、文集五

十卷、詩集五卷を著せるも、詹同等文章を論じては、文ばたゞ誠意溢出するを尙ぶと爲し、又洪武六年九月には、詔して公文に對偶文辭を用ゐるを禁じ、無益の彫刻藻繪を事とするを過めたるが如き、まことに通ずること博くして拘へらるゝこと少く、文武を兼ねて有し、智勇を併せて備へ、體驗心證皆當みて深き一大偉人たる此の明の太祖、開天行道肇紀立極大聖至神仁文義武俊德成功高皇帝の諡號に負かざる朱元璋、字は國瑞の世を辭して、其身は地に入り、其神は空に歸せんとするに臨みて、言ふところ如何。一鳥の微なるだに、死せんとするや其聲人を動かすこと云はすや。太祖の遺詔感す可く考ふ可きもの無からんや。遺詔に曰く、朕皇天の命を受けて、大任に世に膺ること、三十有一年なり、憂危心に積み、日に勤めて怠らず、専ら民に益あらんことを志しき。奈何せん寒微より起りて、古人の博智無く、善を好し惡を惡むこと及ばざること多し。今年七十有一、筋力衰微し、朝夕危懼す、慮るに終らざることを恐るのみ。今萬物自然の理を得、其れ奚んぞ哀念かこれ有らん。皇太孫允炆、仁明孝友にして、天下心を歸す、宜しく大位に登るべし。中外文武臣僚、心を同じうして輔弼し、以て吾が民を福せよ。

室の制、廣狹大小、天子の都に亞ぎ、之に賜ふに甲兵衛士の盛なるを以てしたまへり。臣ひそかに恐る、數世の後は尾大掉はす、然して後に之が地を削りて之が權を奪はゞ、則ち其の怨を起すこと、漢の七國、晉の諸王の如くならん。然らざれば則ち險を恃みて衡を爭ひ、然らざれば則ち衆を擁して入朝し、甚しければ則ち間に緣りて而して起たんに、之を防ぐも及ぶ無からん。孝景皇帝は漢の高帝の孫也、七國の王は皆景帝の同宗父兄弟子孫なり。然るに當時一たび其地を削れば則ち兵を構へて西に向へり。晉の諸王は、皆武帝の親子孫なり、然るに世を易ふるの後は迭に兵を擁して、以て皇帝を危くせり。昔は賈誼漢の文帝に勸めて、禍を未萌に防ぐの道を白せり。願はくは今先づ諸王の都邑の制を節し、其の衛兵を減じ、其の疆里を限りたまへと。居升の言はおのづから理あり、しかも太祖は太祖の慮あり、其の説くところ、正に太祖の思へるところに反すれば、太祖甚だ喜びすして、居升を獄中に終るに至らしめ給ひぬ。居升の上書の後二十餘年、太祖崩じて建文帝立ちたまふに及び、居升の言、不幸にして驗ありて、漢の七國の喻、眼のあたりの事となるぞ是非無き。

七國の事、七國の事、嗚呼是れ何ぞ明室と因

緣の深きや。葉居升の上書の出づるに先だつこ九年、洪武元年十一月の事なりき、太祖宮中に大本堂といふを建てたまひ、古今の圖書を充て、儒臣をして太子および諸王に教授せしめらる。起居注の魏觀字は相山といふもの、太子に侍して書を説きけるが、一日太祖太子に問ひて近ごろ儒臣經史の何事を講ぜるかとありけるに、太子、昨日は漢書の七國漢に叛ける事を講じ聞せたりと答へ白す。それより談は其事の上になつて、太祖、その曲直は孰に在りやと問ふ。太子、曲は七國に在りと承りぬと對ふ。時に太祖肯ぜずして、否、其は講官の偏説なり。景帝太子たりし時、博局を投じて吳王の世子を殺したることあり、帝となるに及びて、晁錯の説を聽きて、諸侯の封を削りたり、七國の變は實に此に由る。諸子の爲に此事を講せんには、藩王たるものは、上は天子を尊み、下は百姓を撫し、國家の藩輔となりて、天下の公法を提す無かれと言ふべきなり、此の如くなれば則ち太子たるものは、九族を敦睦し、親しきを親しむの恩を隆んにすることを知り、諸子たるものは、王室を夾翼し、君臣の義を盡すことを知らん、と評論したりとなり。此の太祖の言は、正に是れ太祖が胸中の秘を發せるにて、夙より此意ありたればこそ、其より二年ほどにして、洪武三年に、楸、桐、棗、櫟、樟、梓、檀、杞の九子を封じて、秦晉燕周等に王とし、其甚しきは、生れて甫めて二歳、或は生れて僅に二ヶ月のものをすら藩王とし、次いで洪武十一年、同二十四年の二回、幼弱の諸子をも封じたるなれ、而して又夙より此意ありたればこそ、葉居升が上言に深怒して、これを獄死せしむるまでにいたるなれ。しかも太祖が懿文太子に、七國反漢の事を諭したりし時は、建文帝未だ生れず、明の國號はじめて立ちしのみ。然るに何ぞ圖らん此の後徳成功の太祖が熱慮遠謀して、斯ばかり思ひしことの、其身死すると共に直に禍端亂階となりて、懿文の子の允熈、七國反漢の古を今にして窘まんとば、不世出の英雄朱元璋も、命といひ數といふものゝ前には、たゞ是一片の落葉秋風に舞ふが如きのみ。

七國の事、七國の事、嗚呼何ぞ明室と因縁の深きや。洪武二十五年九月、懿文太子の後を承けて其御子允熈皇太孫の位に即かせたまふ。繼紹の運まきには是の如くなるべきが上に、下は四海の心を繋ぐところなり、上は一人の命を宣したまふところなり、天下皆喜びて、皇室萬福と慶賀したり。太孫既に立ちて皇太孫となり、

民は哭臨三日にして服を釋き、嫁娶を妨ぐる勿れ、と云へる、何ぞ儉素にして仁恕なる。文帝の如くせよとは、金玉を用ふる勿れとなり。孝陵の山川は其の故に因れとは、土木を起す勿れとなり。嫁娶を妨ぐる勿れとは、民をして福あらしめんとす。諸王は國中に臨きて、京に至るを得る勿かれ。と云へるは、蓋し其意諸王其の封を去りて京に至らば、前代の遺孽、邊土の黠豪等、或は虚に乗じて事を舉ぐるあらば、星火も延焼して、燎原の勢を成すに至らんことを虞るゝに似たり。此も亦愛民愛世の念、おのづから此に至るといふべし。太祖の遺詔、嗚呼、何ぞ人を感ぜしむるの多きや。

然りと雖も、太祖の遺詔、考ふ可きも亦多し。皇太孫允熲、天下心を歸す、宜しく大位に登るべし、と云へるは、何ぞや。既に立つて皇太孫となる。遺詔無しと雖も、當に大位に登るべきのみ。特に大位に登るべしといふは、朝野の間、或は皇太孫の大位に登らざらんことを欲する者あり、太孫の年少く勇乏しき、自ら謙讓して諸王の中の材雄に略大なる者に位を遷らんことを欲する者ありしが如きをも猜せしむ。仁明孝友、

天下心を歸す、と云へるは、何ぞや。明の世を治むる、纔に三十一年、元の裔猶未だ滅びず、中國に在るもの無しと雖も、漠北に、塞西に、遼南に、元の同種の廣大の地域を有して躊躇するもの存し、太祖崩じて後二十餘年にして猶大に興和に寇するあり。國外の情是の如し。而して城内の事、また英主の世を御せんことを幸とせずんばあらず。仁明孝友は固より尙ぶべしと雖も、時勢の要するところ、實は雄材大略なり。仁明孝友、天下心を歸するといふと雖も、或は恐る、天下を十にして其の心を歸する者七八に過ぎざらんことを。中外文武臣僚、心を同じうして輔祐し、以て吾が民を福せよ、といへるは、文武臣僚の中、心を同じうせざる者ある有る耶、非耶。諸王は國中に歎きて京に至るを得る無かれ、と云へるは、何ぞや。諸王の其封國を空しうして奸慝の乘するところとならんことを虞るといふも、諸王の臣、豈一時を託するに足る者無からんや。子の父の罪に趨るは、おのづからは是れ情なり、是れ理なり、禮にあらず道にあらずと爲さんや。諸王をして罪に會せざらしむる詔は、果して是れ太祖の言に出づるか、太祖にして此詔を遺すとせば、太祖ひそ

かに其の斥けて聴かざりし葉居升の言の、諸王衆を擁して入朝し、甚しければ則ち間に緣りて起たんに、之を防ぐも及ぶ無き也、と云へるを思へるにあらざる無きを得んや。嗚呼子にして父の葬に會するを得ず、父の意なりと謂ふといへるも、子よりして論すれば、父の子を待つも亦疎にして薄きの憾無くんばあらざらんとす。詔或は時勢に中らんと。而も實に人情に遠いかな。凡そ施爲命令謀國言語を論ぜず、其の人情に遠きこと甚しきものば、意は善なるも、理は正しきも、計は中なるも、見は徹するも、必らず弊を生じ凶を招くものなり。太祖の詔、可なることは即ち可なり、人情には遠し。これより先に洪武十五年高皇后の崩するや、秦王晉王燕王等皆國に在り、然れども諸王喪に奔りて京に至り、禮を卒へて還れり。太祖の崩ぜると、其後の崩ぜると、天下の情勢に關すること異なりと雖も、母の喪には奔りて従ふを得て、父の葬には入りて會するを得ざらしむ。此も亦人を強ひて人情に遠きを爲さしむるものなり。太祖の詔、まことに人情に遠し。豈弊を生じ凶を致す無からんや。果して事端は先づこゝに發したり。崩を聞いて諸王は京に入らんとし、燕王は將に淮安に至らんとせるに當りて、齊泰は帝に言し、人

葬祭の儀は、一に漢の文帝の如くにして異にする勿れ。天下に布告して、朕が意を知らしめよ。孝陵の山川は、其の故に因りて改むる勿れ。天下の臣民は、哭臨する三日にして、皆服を釋き、嫁娶を妨ぐるなけれ。諸王は國中に臨きて、京師に至る母れ。諸の令の中に在らざる者は、此令を推して事に從へと。

嗚呼、何ぞ其言の人を感ぜしむること多きや。大任に膺ること、三十一年、憂危心に積み、日に勤めて怠らず、専ら民に益あらんことを志しき。と云へるは、眞に是れ帝王の言にして、堂々正大の氣象、讒々仁恕の襟懷、百歳の下人をして欽仰せしむるに足るものあり。奈何せん寒微より起りて、智淺く德寡し、といへるは、謙遜の態度を取り、反求の工夫に切に、諱まず飾らざる、誠に美とすべし。今年七十有一、死且夕に在り、といへるは、英雄も亦大限の漸く逼るを如何とする無き者。而して、今萬物自然の理を得、其れ奚にぞ哀念かこれ有らん。と云へる、流石に孔孟佛老の教に於て得るところあるの言なり。死後に英雄多く、死前に豪傑少きは、世間の常態なるが、太祖は是れ眞豪傑、生きて長春不老の寔想を懷かず、死して萬物自然の數理に安んぜんとす。從容として逼らず、

晏如として惕れず、偉なる哉、偉なる哉。皇太孫允攸、宜しく大位に登るべし。と云へるは、一言や鐵の鑄られたるが如し、衆論の絲の紛るるを防ぐ。これより前、太孫の儲位に即くや、太祖太孫を愛せざるにあらずと雖も、太孫の人となり仁孝聰穎にして、學を好み書を讀むことはこれ有り、然も勇壯果決の意氣は甚だ缺く。此を以て太祖の詩を賦せしむることに、其詩婉美柔弱、豪壯瑰偉の處無く、太祖多く喜ばず。一日太孫をして詞句の屬對をなさしめしに、大旨に稱はず、復び以て燕王様に命ぜられけるに、燕王の語は乃ち住なりけり。燕王は太祖の第四子、容貌偉にして髭髯美はしく、智勇あり、大略あり、誠に推して人に任じ、太祖に肖たること多かりしかば、太祖も此を悦び、人も或は意を寄するものありたり。此に於て太祖密に儲位を易へんとするに意有りしが、劉三吾之を阻みたり。三吾は名は如孫、元の遺臣なりしが、博學にして、文を善くしたりければ、洪武十八年召されて出で、仕へぬ。時に年七十三。當時汪叔、朱善と與に、世稱して三老と爲す。人となり慷慨にして城府を設けず、自ら號して坦坦翁といへるにも、其の風格は推知すべし。坦坦翁、生平實に坦坦、文章學術を以て太祖に仕

へ、禮儀の制、選舉の法を定むるの議に與りて定むる所多く、帝の洪範の注成るや、命を承けて序を爲り、敎修の書、省躬錄、書傳要義、禮制集要等の編撰總裁となり、居然たる一宿儒を以て、朝野の重んずるところたり。而して大節に臨むに至りては、屹として奪ふ可からず。懿文太子の薨するや、身を挺んで、皇孫は世嫡なり、大統を承けたまはんこと、禮也。と云ひて、内外の疑懼を定め、太孫を立て、儲君となせし者は、實に此の劉三吾たりしなり。三吾太祖の意を知るや、何ぞ言無からむ。乃ち曰く、若し燕王を立て給はば秦王晉王か何の地に置き給はむと。秦王檣、晉王桐は、皆燕王の兄たり。孫を廢して子を立つるだに、定まりたるを覆すなり、まして兄を越して弟を君とするは序が亂るなり、世豈事無くして已まんや、との意は言外に明かなりければ、太祖も英明絶倫の主なり、言下に非を悟りて、其事止みけるなり。是の如き事もありなければ、太祖みづから崩後の動搖を防ぎ、暗中の飛躍を遏めて、特に嚴しく皇太孫允攸宜しく大位に登るべしと、詔か遣されたるなるべし。太祖の治を思ふの慮も遠く、皇孫を愛するの情も篤しといふ可し。葬祭の儀は、漢の文帝の如くせよ、と云へる、天下の臣

戒む。相戒むるや何ぞ疎隔せざらん。疎隔し、
 睽離す。而して帝の爲に密に圖るものあり、諸
 王の爲に私に謀るものあり、況んや藩王を以て
 天子たらんとするものあり、王を以て皇となさ
 んとするものあるに於てをや。事遂に決裂せず
 んば止まざるものもある也。

帝の爲に密に圖る者をは誰となす。曰く、黃
 子澄となし、齊泰となす。子澄は既に記しぬ。
 齊泰は深水の人、洪武十七年より漸く世に出づ。
 建文帝位に即きたまふに及び、子澄と與に帝の
 信賴するところとなりて、國政に參す。諸王の
 入京會葬を遏めたる時の如き、諸王は皆謂へ
 らく、泰皇考の詔を矯めて骨肉を問つと。泰

の諸王の僧むところとなれる、知る可し。

諸王の爲に私に謀る者を誰となす。曰く、諸
 王の雄な燕王となす。燕王の傳に、僧道衍あり、
 道衍は僧たりと雖も、灰心滅智の羅漢にあらず
 して、却つて是れ好謀善算の人なり。洪武二十
 八年、初めて諸王の封國に就く時、道衍躬か
 ら薦めて燕王の傳とならんとし、謂つて曰く、
 大王臣をして侍するを得せしめたまはば、一白
 帽を奉りて大王がために戴かしめんと。王上
 に白を冠すれば、其文は皇なり。儲位明らかに
 定まりて、太祖未だ崩ぜざるの時だに、是の如

きの怪僧ありて、燕王が爲に白帽を奉らんと
 し、而して燕王是の如きの怪僧を延いて帷幙の
 中に居く。燕王の心胸もとより清からず、道衍
 の爪甲も毒ありといふべし。道衍燕邸に至るに
 及んで袁珙を王に薦む。袁珙は字は廷玉、鄞の
 人にして、此亦一種の異人なり。嘗て海外に遊
 んで、人を相するの術を別古崖といふものに受
 く。仰いで皎日を視て、目盡く眩して後、赤
 豆黑豆の暗室中に布いて之を辨じ、又五色の縷
 を窓外に懸け、月に映じて其色を別つて詠つこ
 と無く、然して後に人を相す。其法は夜中を以
 て兩炬を燃し、人の形狀氣色を視て、參するに
 生年月日を以てするに、百に一謬無く、元末よ
 り既に名を天下に馳せたり。其の道衍と識るに
 及びたるは、道衍が嵩山寺に在りし時にあり。
 袁珙道衍が相をつくんと觀て、是れ何ぞ異僧
 なるや、目ば三角あり、形は病虎の如し。性必
 らず殺を嗜まん。劉秉忠の流なりと。劉秉忠は
 學内外を兼ね、識三才を綜ぶ、釋氏より起つて
 元主を助け、九州を混一し、四海を併合す。元
 の天下を得る、もとより其の兵力に賴ると雖も、
 成功の速疾なるもの、劉の揮擡の宜しきを得る
 に因るもの亦鮮からず、秉忠は實に奇偉卓犖の
 僧なり。道衍秉忠の流なりとなさる、まさに

れ癢處に爬着するもの。是れより二人、友とし
 善し。道衍の珙を燕王に薦むるに當りてや、燕
 王先づ使者をして珙と與に酒肆に飲ましめ、王
 みづから衛士の儀表堂々たるもの九人に雜ば
 り、おのれ亦衛士の服を服し、弓矢を執りて肆
 中に飲む。珙一見して即ち趨つて燕王の前に拜
 して曰く、殿下何ぞ身を輕んじて此に至りたま
 へると。燕王等笑つて曰く、吾輩皆護衛の士な
 りと。珙頭を掉つて是とせず。こゝに於て王起
 つて入り、珙を宮中に延きて詳に相せしむ。珙
 諦視すること良久しうして曰く、殿下は龍行虎
 歩したまひ、日角天に插む、まことに異日太
 平の天子におはします。御年四十にして、御幾
 臍を過ぎさせたまふに及ばせたまはば、大寶位
 に登らせたまはんこと疑あるべからず。と白
 す。又燕府の將校官屬を相せしめたまふに珙
 一々指點して曰く、某は公たるべし、某は侯た
 るべし、某は將軍たるべし、某は貴官たるべし
 と。燕王語の洩れんこと慮り、陽に斥けて通
 州に至らしめ、舟路密に召して邸に入る。道衍
 は北平の慶壽寺に在り、珙は燕府に在り、燕王
 と三人、時々人を辟けて語る。知らず其の語
 ところのもの何ぞや。珙は柳莊居士と號す。時
 に年蓋し七十に近し。抑亦何の欲するところあ

をして勅を賚らして國に還らしめぬ。燕王は首として諸王は皆悦ばず、これ尙書齊泰の疎聞するなりと謂ひぬ。建文帝は位に即きて劈頭第一に諸王をして悦ばざらしめぬ。諸王は帝の叔父なり。尊族なり、封土を有し、兵馬民財を有せる也。諸王にして悦ばざるときは、宗家の枝柯、皇室の藩屏たるも何かあらん。嗚呼、これ罪齊泰にあるか、建文帝にあるか、抑又遺詔にあるか、諸王にあるか、之を知らざる也。又驪つて思ふに、太祖の遺詔に、果して諸王の入臨を止むる語ありしや否や。或は疑ふ、太祖の人情に通じ、世故に熟せる、まさに是の如きの詔を遺さざるべし。若し太祖にして果して登遐の日に際して諸王の葬に會するを欲せざらば、平生無事從容の日、又ば諸王の京を退きて封に就くの時、於て親して諸王に意を諭すべきなり。然らば諸王も亦發駕奔喪の際に於て、半途にして擁遏せらるゝの不快事に會ふ無く、各々其封に於て哭臨して、他を責むるが如きこと無かるべきのみ。太祖の智にして事此に出でず、詔を遺して諸王の情を屈するは解す可からず。人の情屈すれば則ち悦ばず、悦ばざれば則ち怨を懷き他を責むるに至る。怨を懷き他を責むるに至れば、事無きを欲するも得べからず。太

祖の人情に通ざる何ぞ之を知るの明無からん。故に曰く、太祖の遺詔に、諸王の入臨を止むる者は、太祖の爲すところにあらず、疑ふらくは齊泰黃子澄の輩の假託するところならんと。齊泰の輩、もとより諸王の帝に利あらざらんことを恐る、詔を矯むるの事も、世其例に乏しからず、是の如きの事、未だ必ずしも無きを保せず、然れども是れ推測の言のみ、眞耶、僞耶、太祖の失か、失にあらざるか、齊泰の爲か、爲にあらざる耶、將又齊泰、遺詔に託して諸王の入京、會葬を遏めざる能はざるの勢の存せしか、非耶。建文永樂の間、史に曲筆多し、今新に史徵を得るあるにあらざれば、疑を存せんのみ、確に知る能はざる也。

太祖の崩ぜるは閏五月なり、諸王の入京を遏められて悦ばずして歸れるの後、六月に至つて戸部侍郎卓敬といふもの、密疏を上る。卓敬字は惟恭、書を讀んで十行俱に下ると云はれし顯悟聰敏の士、天文地理より律曆兵刑に至るまで究めざることを無く、後に成祖をして、國家士を養ふこと三十年、唯一卓敬を得たりと歎ぜしめしほどの英才なり。鯁直慷慨にして、避くる

ところ無し。嘗て制度未だ備はらずして諸王の服乘も太子に擬せるを見、太祖に直言して、嫡庶相亂り、尊卑序無くんば、何を以て天下に令せんや、と説き、太祖をして、爾の言はなり、と曰はしめたり。其の人となり知る可きなり。敬の密疏は、宗藩を裁抑して、禍根を除かんとなり。されども、帝は敬の疏を受けたまひしのみにて、報じたまはず、事竟に寢みぬ。敬の言、蓋し故無くして發せず、必らず竊に聞くところありしなり。二十餘年前の葉居升が言は、是に於て其中れるを示さんとし、七國の難は今將に發せんとす。燕王、周王、齊王、湘王、代王、岷王等、祕信相通じ、密使互に動き、穩やかならん流言ありて、朝に聞えたり。諸王と帝との間、帝は其の未だ位に即かざりしより諸王を忌憚し、諸王は其の未だ位に即かざるに當つて儲君を侮り、叔父の尊を挾んで不遜の事多かりしなり。入京、會葬を止むるの事、遺詔に出づと云ふと雖も、諸王、責を議臣に託して、而して其の奸惡を除かんと云ひ、香を孝陵に進めて、而して吾が誠實を致さんと云ふに至つては、蓋し辭柄無きにあらず。諸王は合同の勢あり、帝は孤立の狀あり。嗚呼、諸王も疑ひ帝も疑ふ。相疑ふや何ぞ陰離せざらん。帝も戒め、諸王も

にし、歳時伏臘、使問絶えず、賢者は詔を下して褒賞し、不法者は初犯は之を宥し、再犯は之を赦し、三犯改めざれば、則ち太廟に告げて、之を廢處せんに、豈服順せざる者あらんやと。帝之を然なりとは聞召したりけれども、勢既に定まりて、削奪の議を取る者のみ充滿ちたりければ、高麗の説も用ゐられて已みぬ。建文元年二月、諸王に詔りして、文武の吏士を節制し、官制を更定するを得ざらしむ。此も諸藩を抑ふるの一なりけり。夏四月、西平侯沐晟、岷王榘の不法の事を奏す。よつて其の護衛を削り、其の指揮宗麟を誅し、王を廢して庶人となす。又湘王柏の偽りて鈔を造り、及び擅に人を殺すを以て、敕を降して之を責め、兵を遣つて執へしむ。湘王もと脅力ありて氣を負ふ。曰く、吾聞く、前代の大臣の吏に下さるゝや、多く自ら引決すと、身は高皇帝の子にして、南面して王となる。豈能く僕隸の手に辱しめられて生活を求めんやと。遂に宮を圍ちて自ら焚死す。齊王榘もまた人の告ぐるところとなり。廢せられて庶人となり、代王桂もまた終に廢せられて庶人となり、大同に幽せらる。

燕王は初より朝野の注目せるところなり、且は威望材力も群を抜けるなり。又其の終に天子

たるべきを期するものも有るなり。又私に異人術士を養ひ、勇士勁卒をも蓄へ居れるなり。人々も疑ひ、己も危ぶみ、朝廷と燕と竟に兩立する能はざらんとするの勢あり。されば三十一年の秋、周王櫓の執へらるゝを見て、燕王は遂に壯士を簡みて護衛となし、極めて警戒を嚴にしたり。されども齊泰黃子澄に在りては、もとより燕王を容す能はず。たまゝ北邊に寇警ありしを機とし、防邊を名となし、燕藩の護衛の兵を調して塞を出でしめ、其の羽翼を去りて、其の咽喉を扼せんとし、乃ち工部侍郎張昇をもて北平左布政使となし、謝貴を以て都指揮使となし、燕王の動靜を察せしめ、魏國公徐輝祖、曹國公李景隆をして、謀を協せて燕を圖らしむ。建文元年正月、燕王長史葛誠をして入つて事を奏せしむ。誠、帝の爲に具に燕邸の實を告ぐ。こゝに於て誠を遣りて燕に還らしめ、内應を爲さしむ。燕王覺つて之に備ふるあり。二月に至り、燕王入覲す。皇道を行きて入り、陸に登りて拜せざる等、不敬の事ありしかば、監察御史曾鳳韶これを劾せしが、帝曰く、至親間ふ勿れと。戸部侍郎卓敬、先に書を上つて藩を抑へ禍を防がんことを言ふ。復密奏して曰く、燕王は智慮人に過ぐ、而して其の據る所の北平

は、形勝の地にして、士馬精強に、金元の由つて興るところなり、今宜しく封を南昌に徙したまふべし。然らば則ち萬一の變あるも控制し易しと。帝敬に對へたまはく、燕王は骨肉至親なり、何ぞ此に及ぶことあらんやと。敬曰く、隋文揚廣は父子にあらずやと。敬の言實に然り、揚廣は子を以てだに父を弑す。燕王の傲慢なる、何をか爲さばらん。敬の言、敦厚を缺き、帝の意、醇正に近しと雖も、世相の險惡にして人情の陰毒なる、悲む可きかな、敬の言却つて實に切なり。然れども帝默然たること良久しくして曰く、卿休せよと。三月に至つて燕王國に還る。都御史暴昭、燕邸の事を密偵して奏するあり。北平の按察使僉事の湯宗、按察使陳瑛が燕の金を受けて燕の爲に謀ることを劾するあり。よつて瑛を逮捕し、都督宗忠をして兵三萬を率ゐ、及び燕王府の護衛の精銳を忠の麾下に隸し、開平に屯して、名を邊に備ふるに藉り、都督の耿璫に命じて兵を山海關に練り、徐凱をして兵を臨清に練り、密に張昇謝貴に勅して、嚴に北平の動搖を監視せしむ。燕王此の勢を視、國に歸れるより疾に託して出でず、之を久しうして遂に疾篤しと稱し、以て一時の視聽を避けんとせり。されども水あるところ濕氣無き能はず、

つて燕王に勸めて叛せしめしや。其子忠徹の傳
ふるところの柳莊相法、今に至つて猶存し、風
鑑の津梁たり。珙と永樂帝と答問するところの
永樂百問の中、帝鑑の事を記す。相法三卷、信
ぜざるものは、目して陋書となすと雖も、盡く
斥く可からざるものあるに似たり。忠徹も家學
を傳へて當時に信ぜらる。其の著はすところ、
古今識鑑八卷ありて、明志採録す。予未だ寓目
せずと雖も、蓋し藻鑑の道を説く也。珙と忠徹
と、偕に明史方伎傳に見ゆ。珙の燕王に見ゆる
や、鬚長して臍を過ぎなば實位に登らんといふ。
燕王笑つて曰く、吾が年將に四旬ならんとす、
鬚豈能く復長ぜんやと。道衍こゝに於て金忠と
いふものを薦む。金忠も亦鄧の人なり、少くし
て書を讀み易に通ず。卒伍に編せらるゝに及び、
トを北平に賣る。ト多く奇中して、市人傳へて
以て神と爲す。燕王忠をしてトせしむ。忠トし
て卦を得て、貴きこと言ふ可からずといふ。燕
王の意漸くにして固し。忠後に仕へて兵部尙書
を以て太子監國に補せらるゝに至る。明史卷百
五十に傳あり。蓋し亦一異人なり。

帝の側には黃子澄齊泰あり、諸藩を削奪する

の意、いかでこれ無くして已まん。燕王の傍に
は僧道衍袁珙あり、祕謀を醗醸するの事、いか
でこれ無くして已まん。二者の間、既に是の如
し、風聲鶴唳、人相驚かんと欲し、劍光火影、
世漸く將に亂れんとす。諸王不穩の流言、朝に
聞ゆること頻なれば、一日帝は子澄を召したま
ひて、先生、曠昔の東角門の言を憶えたまふ
や、と仰す。子澄直ちに對へて、敢て忘れたま
さすと白す。東角門の言は、即ち子澄七國の故
事を論ぜるの語なり。子澄退いて齊泰と議す。
泰曰く、燕は重兵を握り、且素より大志あり、
當に先づ之を削るべしと。子澄が曰く、然らず、
燕は豫め備ふること久しければ、卒に圖り難
し。宜しく先づ周を取り、燕の手足を剪り、而
して後燕圖るべしと。乃ち曹國公李景隆に命じ、
兵を調して猝に河南に至り、周王櫓及び其の世
子妃嬪を執へ、爵を削りて庶人となし、之を雲
南に遷しぬ。櫓は燕王の同母弟なるを以て、帝
もかねて之を疑ひ憚り、櫓も亦異謀あり。櫓の
長史王翰といふもの、數々諫めたれど納れず、
櫓の次子汝南王有勳の變を告ぐるに及び、此事
あり。實に洪武三十一年八月にして、太祖崩じ
て後、幾千月を距らざる也。冬十一月、代王桂
暴虐民を苦むるを以て、蜀に入りて蜀王と共に

居らしむ。
諸藩漸く削奪せられんとするの明らかなる
や、十二月に至りて、前軍都督府斷事高巍書を
上りて政を論ず。巍は遼州の人、氣節を尚び
文章を能くす、材器偉ならずと雖も、性質實に
惟美、母の蕭氏に事へて孝を以て稱せられ、洪
武十七年旌表せらる。其の立言正平なるを以て
太祖の嘉納するところとなりし又一個人の好人
物なり。時に事に當る者、子澄、泰の輩より以
下、皆諸王を削るを議す。獨り巍と御史韓郁と
は説を異にす。巍の言に曰く、我が高皇帝、三
代の公に法り、羸秦の陋を洗ひ、諸王を分封し
て、四裔に藩屏たらしめたまへり。然れども之
を古制に比すれば、封境過大にして、諸王又率
驕逸不法なり。削らざれば即ち朝廷の紀綱立た
ず。之を削れば親を親むの恩を傷る。賈誼曰く、
天下の治安を欲するは、衆く諸侯を建て、其力
を少くするに若くは無しと。臣愚謂へらく、今
宜しく其意を師とすべし。晁錯が削奪の策を施
す勿れ、主父偃が推恩の令に效ふべし。西北諸
王の子弟は、東南に分封し、東南諸王の子弟は、
西北に分封し、其地を小にし、其城を大にし、
以て其力を分たば、藩王の權は、削らすして弱
からん。臣又願はくは陛下益々親親の禮を隆ん

衍は、死生禍福の岐に惑ふが如き未達の者にはあらず、膽に毛も生ひたるべき不敵の逸物なれば、さきに燕王を勸めて事を起さしめんとしける時、燕王、彼は天子なり、民心の彼に向ふな奈何、とありけるに、昂然として答へて、臣は天道を知る、何ぞ民心を論ぜん、と云ひけるほどの豪傑なり。されども風雨簷瓦を墮す、時に取つての祥とも覺えられぬを、あな喜ばしの祥兆といへるは、餘りに強言に聞えければ、燕王も堪へかれて、和尙何といふぞや、いづくにか祥兆たるを得ると、口を突いてそるぎ罵る。道衍騒がず、殿下聞しめさすや、飛龍天に在れば、従ふに風雨を以てすと申す、瓦墜ちて碎けぬ、これ黄屋に易るべきのみ、と泰然として對へければ、王も頓に眉を開いて悦び、衆將も皆どよめき立つて勇みぬ。彼邦の制、天子の屋は、草くに黄瓦を以てす、舊瓦は用無し、まさに黄なるに易るべし、といへる道衍が一語は、時に取つての活人劍、燕王宮中の士氣をして、勃然凜然、糾々然、直にまさに天下を呑まんとするの勢をなさしめぬ。

燕王は護衛指揮張玉朱能等をして壯士八百人をして入つて衛らしめぬ。矢石未だ交るに至らざるも、刀槍既に互に鳴る。都指揮使謝貴は七

衛の兵、并びに屯田の軍士を、率ゐて王城を圍み、木柵を以て端禮門等の路を斷りぬ。朝廷よりは燕王の爵を削るの詔、及び王府の官屬を逮ふべきの詔至りぬ。秋七月布政使張昇、謝貴と與に士卒を督して皆甲せしめ、燕府を圍んで、朝命により逮捕せらるべき王府の官屬を交附せんことを求む。一言の支吾あらんには、巖石鶏卵を壓するの勢を以て臨まんとするの狀を爲し、昇貴の軍の殺氣の迷るところ、箭をば放つて府内に達するものすら有りたり。燕王謀つて曰く、吾が兵は甚だ寡く、彼の軍は甚だ多し、奈何せん。朱能進んで曰く、先づ張昇謝貴を除けば、餘は能く爲す無き也と。王曰く、よし、昇貴を擒にせんと。壬申の日、王、疾癒えぬと稱し、東殿に出て、官僚の賀を受け、人をして昇と貴とを召さしむ。二人應ぜず。復内官を遣して、逮はるべき者を交附するを装ふ。二人乃ち至る。衛士甚だ衆かりしも、門者呵して之を止め、昇と貴とのみを入る。昇と貴との入るや、燕王杖を曳いて坐し、宴を賜ひ酒を行ひ、寶盤に瓜を盛つて出す。王曰く、たまふ新瓜を進むる者あり。卿等と之を嘗みんと。自ら一瓜を手にしけるが、忽にして色を作して置つて曰く、今世間の小民に、兄弟宗族、尙相互に恤ぶ、

身は天子の親屬たり、而も旦夕に其命を安んずること無し、縣官の我を待つこと此の如し、天下何事か爲す可からざらんや、と奮然として瓜を地に擲ては、護衛の軍士皆激怒して、前んで昇と貴とを擒へ、かれて朝廷に内通せる葛誠、盧振等を殿下に取つて押へたり。王こゝに於て杖を投じて起つて曰く、我何ぞ病まん、奸臣に迫らるゝ耳、とて遂に昇貴等を斬る。昇貴等の將士、二人が時を移して還らざるを見、始め疑ひ、後は覺りて、各散じ去る。王城を圍める者も、首腦已に無くなりて、手足力無く、其兵おのづから潰えたり。張昇が部下北平都指揮の彭二、憤慨已む能はず、馬を躍らして大に市中に呼ばつて曰く、燕王反せり、我に従つて朝廷の爲に力を盡すものは賞あらんと。兵千餘人を得て端禮門に殺到す。燕王の勇卒龐來興、丁勝の二人、彭二を殺しければ、其兵も亦散じぬ。此勢に乗ぜよと、張玉、朱能等、いづれも塞北に轉戦して元兵と相馳驅し、千軍萬馬の間に老い來れる者なれば、兵を率ゐて夜に乗じて突いて出で、黎明に至るまでに九つの門の其八を奪ひ、たゞ一つ下らざりし西直門をも、奸言を以て守者を散ぜしめぬ。北平既に全く燕王の手に落ちしかば、都指揮使の余瑣は、走つて居庸關を守

火あるところは爆氣無き能はず、六月に至りて燕山の護衛百戸倪諒といふもの變を上り、燕の官校于諒周鐸等の陰事を告げければ、二人は逮へられて京に至り、罪明らかにして誅せられぬ。こゝに於て事燕王に及ぶる能はず、詔ありて燕王を責む。燕王辯疏する能はざるところありけむ。伴ひて狂となり、號呼疾走して、市中の民家に酒食を奪ひ、亂語妄言、人を驚かして省みず、或は土塊に臥して、時を經れど覺めず、全く常を失へるものゝ如し。張易謝貴の二人、入りて疾を問ふに、時まさに盛夏に屬するに、王は爐を圍み、身を顛はせて、寒きこと甚しと曰ひ、宮中なさへ杖つきて行く。されば燕王まことに狂したりと謂ふ者もあり、朝廷も稍これを信ぜんとするに至りけるが、葛誠ひそかに舅と貴とに告げて、燕王の狂は、一時の急を緩くして、後日の計に便にせんまでの計に過ぎず、本より恙無きのみ、と知らせたり。たまたま燕王の護衛百戸の鄧庸といふもの、闕に詣り事を奏したりけるを、齊泰請ひて執へて鞠問しけるに、王が將に兵を舉げんとするの狀なば逐一に白したり。

貴張易をして、燕府に在りて内應を約せる長史葛誠、指揮盧振と氣脈を通ぜしめ、北平都指揮張信といふものゝ、燕王の信任するところとなるを利し、密敕を下して急に燕王を執へしむ。信は命を受けて憂懼爲すところを知らず。情誼を思へば燕王に負くに忍びず、救命を重んずれば私恩を論する能はず、進退兩難にして、行止ともに難く、左思右慮心終に決する能はれば、苦悶の色は面にもあらはれたり。信が母疑ひて、何事のあればにや、汝の深憂太息することよと詰り問ふ。信是非に及ばず、事の始末を告ぐれば、母大に驚いて曰く、不可なり、汝が父の興毎に言へり王氣燕に在りと、それ王者は死せず、燕王は汝の能く擒にするところにあらずるなり、燕王に負いて家を滅することなかと。信愈々惑ひて決せざりしに、敕使信を促すこと急なりければ、信遂に怒つて曰く、何ぞ太甚しきやと。乃ち意を決して燕邸に造る。造ること三たびすれども、燕王疑ひて而して辭し、入ることを得ず。信婦人の車に乗じ、徑ちに門に至りて見ゆることを求め、やうやく召入れらる。されども燕王猶疾を裝ひて言はず。信曰く、殿下爾したまふ無かれ、まことに事あらば當に臣に告げたまふべし。殿下もし情を以て臣に語

りたまはすば、上命あり、當に執はれに就きたまふべし、如し意あらば臣に諱みたまふ勿れと。燕王信の諷あるを見、席を下りて信を拜して曰く、我が一家を生かすものは子なりと。信つぶさに朝廷の燕を圍るの狀を告ぐ。形勢は急轉直下せり。事應は既に決裂せり。燕王は道衍を召して、將に大事を舉げんとす。

天耶、時耶、燕王の胸中颶風まさに動いて、黑雲飛ばんと欲し、張王、朱能等の猛將羣雄、眼底紫電閃いて、雷火發せんとす。燕府に舉つて殺氣陰森たるに際し、天も亦應ぜるか、時抑至れるか、颶風暴雨卒然として大に起りぬ。蓬蓬として始まり、號々として怒り、奔騰狂ぜる風は、沛然として至り、澎湃として瀉ぎ、猛打亂撃するの雨と伴つて、乾坤を震撼し、樹石を動盪しぬ。燕王の宮殿堅牢ならざるにあらずるも風雨の力大にして、高閣の簷瓦吹かれて空に飄り、素然として地に墮ちて粉碎したり。大事を舉げんとするに臨みて、これ何の兆ぞ。さすがの燕王も心に之を惡みて色慄ばず、風聲雨聲、竹折る聲、樹裂くる聲、物凄じき天地を睥睨して、慘として隻語無く、王の左右もまた肅として言はず。時に道衍少しも驚かず、あな喜ばししの祥兆や、と白す。本より此の異僧道

息を屏くも亦削奪罪責を免れざらんとす。太祖の血を承けて、英雄傑特の氣象あるもの、いづくぞ倅首して宛に服するに忍びんや。瓜を投じて怒罵するの語、其中に機關ありと雖も、又盡く偽詐のみならず、本より眞情の人に逼るに足るものあるなり。畢竟兩者各理あり。各非理ありて、争鬭則ち起り、各情なく、各眞情ありて、戰鬭則ち生ぜざるもの、今に於て誰か能く其の是非を判ぜんや。高麗の説は、敦厚悦ぶ可しと雖も、時既に晚く、卓敬の言は、明徹用ゐるに足ると雖も、勢回し難く、朝旨の酷責すると、燕師の暴起すると、實に互に已む能はざるものありしなり。是れ所謂數なるものか、非耶。

燕王の兵を起したる建文元年七月より、惠帝の國を逃りたる建文四年六月までは、烽烟劍光の史にして、今一々に之を記するに懶し。其詳を知らんとするものは、明史及び明朝紀事本末等に就きて考ふべし。今たゞ其概略と燕王惠帝の性格風采を知る可きものとを記せん。燕王もと智勇天縱、且夙に征戰に習ふ。洪武二十三年太祖の命を奉じ、諸王と共に元族を漠北に征す。秦王晉王に怯にして敢て進まず、王將軍傅友德

等を率ゐて北出し、迤都山に至り、其將乃兒不花を擒にして還る。太祖大に喜び、此より後屢屢諸將を帥ゐて出征せしむるに、毎次功ありて、威名大に振ふ。王既に兵を知り戰に慣る。加ふるに道衍ありて、機密に參し、張玉、朱能、丘福ありて爪牙と爲る。丘福は謀畫の才、張玉に及ばずと雖も、機直猛勇、深く敵陣に入りて敢戰死闘し、戰終つて功を獻するや必ず人に後る。古の大樹將軍の風あり。燕王をして、丘將軍の功に我之を知る、と歎美せしむるに至る。故に王の功臣を賞するに及びて、福其首たり、洪國公に封ぜらる。其他將士の驚惶驚怖の者も、亦甚だ少なからず。燕王の大事を擧ぐるも、蓋し胸算あるなり。燕王の張昇謝貴を斬つて叛を敢てするや、郭資を留めて北平を守らしめ、直に師を出して通州を取り、先づ薊州を定めずんば、後顧の患あらんと云へる張玉の言を用ゐ、玉をして之を略せしめ、次で夜襲して遵化を降す。此皆開平の東北の地なり。時に余瑄居庸關を守る。王曰く、居庸は險隘にして、北平の咽喉也、敵此に據るば、是れ我が背を拊つなり。急に取らざる可からずと、乃ち徐安、鍾祥等をして瑄を撃つて、懷來に走らしむ。宗忠懷來に在り、兵三萬と號す。諸將之を撃つた難んす。王曰く、

彼衆く、我寡し、然れども彼新に集まる、其心未だ一ならず、之を撃たば必らず破れんと。精兵八千を率ゐ、甲を捲き道を倍して進み、遂に戰つて克ち、忠と瑄とを獲て之を斬る。こゝに於て諸州燕に降る者多く、永平、薊州また燕に歸す。大學の都指揮卜萬、松亭關を出で、沙河に駐まり、遵化を攻めんとす。兵十萬と號し、勢や振ふ。燕王反間を放ち、萬の都將陳享、劉貞をして萬を縛し獄に下さしむ。帝黃子澄の言を用ゐ、長興侯耿炳文を大將軍とし、李堅、寧忠を副へて北伐せしめ、又安陸侯吳傑、江陰侯吳高、都督都指揮盛庸、潘忠、楊松、顧成、徐凱、李文、陳暉、平安等に命じ、諸道並び進みて、直に北平を擣かしむ。時に帝諸將士を誡めたまはく、昔蕭繹、兵を擧げて京に入らんとす、而も其下に令して曰く、一門の内自ら兵威を極むるば、不祥の極なりと。今爾將士、燕王と對撃するも、務めて此意を體して、朕をして叔父を殺すの名あらしむるなかれと。(蕭繹は梁の孝元皇帝なり、今梁書を按ずるに、此事を載せず、蓋し元帝兵を擧げて賊を誅し京に入らんことを圖る。時に河東王譽、帝に従はず。却つて帝の子方等を殺す。帝鮑泉を遣りて之を討たしめ、又王僧辯をして代つて將たらし

り、馬宣は東して勸州に走り、宋忠は開平より兵三萬を率ゐて居庸關に至りしが、敢て進まずして、退いて懷來を保ちたり。

煙は旺んにして火は遂に熾えたり、劔は抜かれて血は既に流されたり、燕王は堂々として旗を進め馬を出しぬ。天子の正朔を奉ぜず、敢て建文の年號を去つて、洪武三十二年と稱し、道衍を帷幄の謀師とし、金忠を紀善として機密に參せしめ、張玉、朱能、丘福を都指揮僉事とし、張昇部下にして内通せる李友直を布政司參議と爲し、乃ち令を下して諭して曰く、予は太祖高皇帝の子なり、今奸臣の爲に謀害せらる。祖訓に云はく、朝に正臣無く、内に奸逆あれば、必ず兵を擧げて誅討し以て君側の惡を清めよと。こゝに爾將士を率ゐて之を誅せん」とす。罪人既に得ば、周公の成王を輔くるに法とらん。爾等それ予が心を體せよと。一面には是の如くに將士に宣言し、又一面には書を帝に上りて曰く、皇考太祖高皇帝百戰して天下を定め、帝業を成し、之を萬世に傳へんとして、諸君を封建したまひ、宗社を鞏固にして、盤石の計を爲したまへり。然るに奸臣齊泰黃子澄、禍心を包藏し、檮、桀、桓、懷の五弟、數年ならずして、並びに削奪せられぬ、栢や尤憫むべし、闔室み

づから焚く。聖仁上に在り、胡也寧そ此に忍ばん。蓋陛下の心に非ず、實に奸臣の爲す所ならん。心尙未だ足らずとし、又以て臣に加ふ。臣落を燕に守ること二十餘年、實み畏れて小心に法を奉じ分に循ふ。誠に君臣の大分、骨肉の至親なるを以て、恆に思ひて慎を加ふ。而るに奸臣跋扈し、禍を無辜に加へ、臣が事を奏するの人を執へて、鑕楚刺繁し、備さに苦毒を極め、迫りて臣不軌を謀ると言はしめ、遂に宋忠、謝貴、張昇等を北平城の内外に分ち、甲馬は街衢に馳突し、鉦鼓は遠邇に喧嘩し、臣が府を圍み守る。已にして護衛の人、貴冑を執へ、始めて奸臣欺詐の謀を知りぬ。竊に念ふに臣の孝康皇帝に於けるは、同父母兄弟なり、今陛下に事ふるは天に事ふるが如きなり。譬へば大樹を伐るに、先づ附枝を剪るが如し、親藩既に滅びなば、朝廷孤立し、奸臣志を得んには、社稷危からん。臣伏して祖訓を觀るに云へることあり、朝に正臣無く、内に奸惡あらば、則ち親王兵を調して命を待ち、天子密かに諸王に詔し、鎮兵を統領して之を討平せしむと。臣謹んで俯伏して命を俟つ。と言辭を飾り、情理を綺へてぞ奏しける。道衍少きより學を好み詩を工にし、高啓を友とし善く、宋濂にも推獎され、逃虚子

集十卷を世に留めしほどの文才あるものなれば、道衍や筆を執りけん、或は又金忠の輩や詞を綴りけん、いづれにせよ、柔を外にして剛を懷き、己を護りて人を責むる、いと力ある文字なり。卒然として此書のみを讀めば、王に理ありて帝に理なく、帝に情無くして王に情あるが如く、祖靈も民意も、帝を去り王に就く可きを覺ゆ。されども擅に謝張を殺し、妄に年號を去る。何ぞ法を奉ずると云はんや。後苑に軍器を作り、密室に機謀を鍊る、これ分に循ふにあらず。君側の奸を掃はん」とすと云ふと雖も、詔無くして兵を起し、威を恣にして地を掠む。其辭は則ち可なるも、其實は則ち非なり。翻つて思ふに齊泰黃子澄の輩の、必ず諸王を削奪せんとするも、亦理に於て缺け、情に於て薄し。夫れ諸王を重封せるは、太祖の意に出づ。諸王未だ必ずしも叛せざるに、先づ諸王を削奪せんとするの意を懷いて諸王に臨むは、上は太祖の意を壞り、下は宗室の親を破るなり。三年父の志を改めざるは、孝といふべし。太祖崩じて、抔土未だ乾かず、直に其意を破り、諸王を削奪せんとするは、是れ理に於て缺け情に於て薄きものにあらずして何ぞや。齊黃の輩の爲さんとするところは是の如くなれば、燕王等手を袖にし

戮を少くすることゝ勸め、宦官を盛にするこ
とを諫め、洪武十五年、太祖日本懷良王の書に激
して之を討たんとせるを止め、懷良王、明史に
良懷に作るは蓋し誤也。懷良王は、後醍醐
帝の皇子、延元三年、征西大將軍に任じ、筑紫
を鎮撫す。菊池武光等之に従ひ、興國より正平
に及び、勢威大に振る。明の太祖の邊海毎に和
寇に擾さるゝを怒りて洪武十四年、日本を征せ
んとするを以て威嚇するや、王答ふるに書を以
てす。其略に曰く、乾坤は浩蕩たり、一主の獨
權にあらず、宇宙は寬洪なり、諸邦を作して以
て分守す。蓋し天下は天下の天下にして、一人
の天下にあらずる也。吾聞く、天朝職を興す
の策ありと、小邦亦敵を禦ぐの圖あり。豈、肯
て途に跪いて之を奉ぜんや。之に順ふも未だ
其生を必せず、之に違ふも未だ其死を必せず、
相逢ふ賀蘭山前、聊以て博戯せん、吾何をか
懼れんやと。太祖書を得て惱むること甚だしく、
眞に兵を加へんとするの意を起したるなり。洪
武十四年は我が南朝弘和元年に當る。時に王既
に今川了俊の爲に壓迫せられて衰勢に陥り、征
西將軍の職を後村上帝の皇子良成王に譲り、筑
後矢部に閑居し、讀經禮佛を事として、兵政の
務を執りたまはず、年代顛歸するに似たり。

然れども王と明との交渉は夙に正平の末より起
りしことなれば、王の甚斷を以て答書ありしな
らん。此事我が國に史料全く缺け、大日本史も
亦載せずと雖も、彼の史にして彼の威を損ずる
の事を記す、決して無根の浮譚にあらず。一個
優秀の風格、多く得可からざるの人なり。洪武
十七年、疾を得て死するや、太祖親しく文を爲
りて祭を致し、岐陽王に追封し、武靖と諡し、
太廟に配享したり。景隆は是の如き人の長子に
して、其父の蓋世の武勳と、帝室の親眷との關
係よりして、齊黃の薦むるところ、建文の任ず
るところとなりて、五十萬の大軍を統ぶるには
至りしなり。景隆は長身にして眉目疎秀、雍容
都雅、顧盼倜儻、率爾に之を望めば大人物の如く
なりしかば、屢々出で、軍を湖廣陝西河南に練
り、左軍都督府事となりたるほかには、爲すと
ころも無く、其功としては周王を執へしの方に
過ぎざれど、帝をばじめ大臣等これを大器とし
たりしならん。然れども虎皮にして羊質、所謂
治世の好將軍にして、戦場の眞豪傑にあらず、
血を蹊み刎み擲ひて進み、創を裏み齒を切つ
て闘ふが如き經驗は、未だ曾て積まざりしなれ
ば、燕王の笑つて評せしもの、實に其眞を得た
りしなり。

李景隆は大兵を率ゐて燕王を伐たんと北上
す。帝は猶北方憂ふるに足らずとして意を文治
に専らにし、儒臣方孝孺等と周官の法度ヲ討論
して日を送る。此間に於て監察御史韓郁(韓郁
或は康郁に作る)といふもの時事を憂ひて疏を
上りぬ。其意、黃子澄齊泰を非として、殘
酷の監儒となし、諸王は太祖の遺體なり、孝康
の手足なりとなし、之を待つことの厚からずし
て、周王湘王代王齊王をして不幸ならしめたる
は、朝廷の爲に計る者の過にして、是れ則ち
朝廷激して之を變せしめたるなりと爲し、諺に
曰く、親者之を割けども斷たず、疎者之を續げ
ども堅からずと、是殊に理有る也となし、燕の
兵を擧ぐるに及びて、財を靡し兵を損して而し
て功無きものは國に謀臣無きに近しとなし、願
はくは齊王を釋し、湘王を封じ、周王を京師に
還し、諸王世子をして書を持し燕に勸め、干戈
を罷め、親戚を敦うしたまへ、然らずんば臣愚
おもへらく十年を待たずして必ず噬臍の悔あら
ん、といふに在り。其の論、蘇倫を敦くし、動
亂を鎮めんといふは可なり、齊泰黃子澄を非と
するも可なり、たゞ時既に去り、勢既に成るの
後に於て、此言あるも、嗚呼亦晚かりしなり。
帝遂に用ゐたまはず。

む。帝は高祖武帝の第七子にして、譽は武帝の長子にして文選の撰者たる昭明太子統の第二子なり、一門の語、譽を征するの時に當りて發するか。建文帝の仁柔の性、宋襄に近きものありといふべし。それ燕王は叔父たりと雖も、既に爵を削られて庶人たり、庶人にして兇器を弄し王師に抗す、其罪本より誅戮に當る。然るに是の如きの令を出征の將士に下す。これ適以て軍旅の銳を殺ぎ、貔貅の膽を小にするに過ぎざるのみ、智なりといふ可からず。燕王と戦ふに及びて、官軍時に或は勝つあるも、此令あるを以て、飛箭長槍、燕王を殲すに至らず。然りと雖も、小人の過や刻薄、長者の過や寛厚、帝の過を觀て帝の人となりを知るべし。

八月耿炳文等兵三十萬を率ゐて眞定に至り、徐凱は兵十萬を率ゐて河間に駐まる。炳文は老將にして、太祖創業の功臣なり。かつて張士誠に當りて、長興を守るに十年、大小數十戰、戰つて勝たざる無く、終に士誠をして志を逞しくする能はざらしめしを以て、太祖の功臣を擲列するや、炳文を以て大將軍徐達に附して一等となす。後又、北は塞を出で、元の遺族を破り、南は雲南を征して蠻を平らげ、或は陝西に、或は蜀に、旗幟の向ふ所、毎に功を成す。特に

洪武の末に至つては、元勳宿將多く凋落せるを以て、炳文は朝廷の重んずるところなり。今大兵を率ゐて北伐す、時に年六十五、樹老いて材愈堅く、將老いて軍益々固し。然れども不幸にして先鋒楊松、燕王の爲に不意を襲はれて雄縣に死し、潘忠到り援はんとして月漾橋の伏兵に執へられ、武將張保敵に降りて其の利用するところとなり、遂に濠沱河の北岸に於て、燕王及び張玉、朱能、譚淵、馬雲等の爲に大に敗れて、李堅、聿忠、顧成、劉燧を失ふに至れり。たゞ炳文の陣に執せる、大敗して而も潰えず。眞定城に入りて門を圍ちて堅く守る。燕兵勝に乗じて城を圍む三日、下す能はず。燕王も炳文が老將にして破り易からざるを知り、圍を解いて還る。

炳文の一敗は猶復すべし、帝炳文の敗を聞いて怒りて用ゐず、黃子澄の言によりて、李景隆を大將軍とし斧鉞を賜はつて炳文に代らしめたまふに至つて、大事ほとんど去りぬ。景隆は純孝の子弟、趙括の流なればなり。趙括を擧げて廉頗に代ふ。建文帝の位を保つ能はざる、兵戰上には實に此に本づく。炳文の子璠は、帝の父懿文太子の長女江都公主を妻とす。璠父の復用あられざるを憤ること甚しかりしといふ。又璠

の弟瓚、遼東の鎮守吳高、都指揮楊文と與に兵を率ゐて永平を圍み、東より北平を動かさんとしたりといふ。二子の護國の意の誠なるも知るべし。それ勝敗は兵家の常なり、蘇東坡が所謂善く突する者も日に勝つて日に敗るゝものなり。然るに一敗の故を以て、老將を退け、驕兒を擧ぐ。燕王手を拍つて笑つて、李九江は膏梁の堅子のみ、未だ嘗て兵に習ひ陣を見ず、轉ち予ふるに五十萬の衆を以てす、是自ら之を坑にする也、と云へるもの、酷語といへども當らずんばあらず。炳文を召して回らしめたる、まことに歎すべし。

景隆小字は九江、勲業あるにあらずして大將軍となれる者は何ぞや。黃子澄、齊泰の薦むるに因るも、又別に所以有るなり。景隆は李文忠の子にして、文忠は太祖の姉の子にして且つ太祖の子となりしものなり。之に加ふるに文忠は器量沈厚、學を好み經を治め、其の家居するや恂々として儒者の如く、而も甲を擧ぎ馬に騎り樂み横たへて陣に臨むや、踴厲風發、大敵に遇ひて益壯に、年十九より軍に従ひて屢々偉功を立て、創業の元勳として太祖の愛重するところとなれるのみならず、西安に水道を設けては人を利し、應天に田租を減じては民を恵み、誅

祖在天の靈も亦安んじたまはん。偷迷を執りて回らず、小勝な恃み、大義を忘れ、寡を以て衆に抗し、爲す可からざるの悖事を僥倖するを敢てしたまは、臣大王の爲に言すべきところを知らざる也。況んや、大喪の期未だ終らざるに、無辜の民驚きを受く。仁を求め國を護るの義と、逕庭あるも亦甚し。大王に朝廷を肅清するの誠意おはすとも、天下に嫡統を篡奪するの批議無きにあらず。もし幸にして大王敗れたまはすして功成りたまはば、後世の公論、大王を如何の人と謂ひ申すべきや。巍は白髮の書生、娉嫖の微命、もとより死を畏れず。洪武十七年、太祖高皇帝の御恩を蒙りて、臣が孝行を旌したまふを辱くす。巍既に孝子たり、當に忠臣たるべし。孝に死し忠に死するは巍の至願也。巍幸にして天下の爲に死し、太祖在天の靈に見ゆるを得ば、巍も亦以て愧無かるべし。巍至誠至心、直語して諫ます、尊嚴を冒瀆す、死を賜ふも悔無し、願はくは大王今に於て再思したまへ。と憚るところ無く白しける。されど燕王答へたまはれば、戮次書を上りけるが、皆效無かりけり。

巍の書、人情の純、道理の正しきところより言を立つ。知らず燕王の此に對して如何の感な

爲せるを、たゞ燕王既に兵を起し戦を開く、巍の言善しと雖も、大河既に決す、一革の支へ難きが如し。しかも巍の誠を盡し志を致す、其意と其言と、忠孝敦厚の人たるに負かず、數百歳の後、猶識む者をして惘然として感するあらしむ。巍と韓郁とは、建文の時に於て、人情の純、道理の正に據りて、言を爲せる者也。

年は新になりて建文二年となりぬ。燕は洪武三十三年と稱す。燕王は正月の酷寒に乗じて蔚州を下し、大同を攻む。景隆師を出して之を救ばんとすれば、燕王は速く居庸關より入りて北平に還り、景隆の軍、寒苦に惱み、奔命に疲れて、戦はずして自ら敗る。二月、糧盡の兵來りて燕を助く。蓋し春暖に至れば景隆の來り戦はんことを慮りて、燕王の請へるなり。春關にして、南軍勢を生じぬ。四月朔、景隆兵を德州に會す、郭英、吳傑は眞定に進みぬ。帝は巍國公徐輝祖をして、京軍三萬を帥ゐて疾馳して軍に會せしむ。景隆、郭英、吳傑等、軍六十萬を合し、百萬と號して白溝河に次す。南軍の將平安驍勇にして、嘗て燕王に従ひて塞北に戦ひ、王の兵を用ゐるの虚實を識る。先鋒となり

て燕に當り、矛を揮ひて前む。翟能父子も亦勇躍して戦ふ。二將の向ふ所、燕兵披靡す。夜、燕王、張玉を中軍に、朱能を左軍に、陳寧を右軍に、丘福を騎兵に將とし、馬歩十餘萬、黎明に畢く河を渡る。南軍の翟能父子、平安等、房寬の陣を搦いて之を破る。張玉等之を見て懼色あり。王曰く、勝負は常事のみ、日中み過ぎすして必ず諸君の爲に敵を破らんと。即ち精銳數千を麾いて敵の左翼に突入す。王の子高煦、張玉等の軍を率ゐて齊しく進む。兩軍相争ひ、一進一退す。喊聲天に震ひ、飛矢雨の如し。王の馬、三たび創を被り、三たび之を易ふ。王善く射る。射るところの箭、三箇皆盡く。乃ち劍を掲げて、衆に先だちて、敵に入り、左右奮撃す。劍鋒折れ缺けて、撃つに堪へざるに至る。翟能と相遇ふ。幾んど能の爲に及ばる。王急に走りて隙に登り、伴つて鞭を麾いて、後繼者を招くが如くして纔に免れ、而して復衆を率ゐて馳せて入る。平安善く槍刀を用ゐる、向ふ所敵無し。燕將陳寧、安の爲に斬られ、徐忠亦創を被る。高煦急を見、精騎數千を帥ゐ、前んで王と合せんとす。翟能また猛襲し、大呼して曰く、燕を滅せん。たまゝ旋風突發して、南軍の大將の大旗を折る。南軍の將卒相視て驚き動く。

景隆の炳文に代るや、燕王其の五十萬の兵を恐れずして、其の五敗兆を具せるを指摘し、我之を擒にせんのみ、と云ひ、諸將の言を用ゐずして、北平を世子に守らしめ、東に出て、遂に東の江陰侯吳高を永平より逐ひ、轉じて大寧に至りて之を抜き、寧王を擁して關に入る。景隆は燕王の大寧を攻めたるを聞き、師を帥ゐて北進し、遂に北平を圍みたり。北平の李讓、梁明等、世子を奉じて防守甚だ力むと雖も、景隆が軍衆くして、將も亦雄傑なきにあらず、都督瞿能の如き、張掖門に殺入して大に威勇を奮ひ、城殆ど破る。而も景隆の器の小なる、能の功を成すを喜ばず、大軍の至るを俟ちて俱に進めと令し、機に乗じて突至せず。是に於て守る者便を得、連夜水を汲みて城壁に灌げば、天寒くして忽ち氷結し、明日に至れば復登ることを得ざるが如きことありき。燕王は豫め景隆を吾が堅城の下に致して之を殲さんことを期せしに、景隆既に穀に入り來りぬ、何ぞ箭を放たざらんや。大寧より還りて會州に至り、五軍を立て、張王を中軍に、朱能を左軍に、李彬を右軍に、徐忠を前軍に、降將房寬を後軍に將たらしめ、漸く南下して京軍と相對したり。十一月、京軍の先鋒陳郅、河を渡りて東す。燕王兵を率ゐて

至り、河水の渡り難きを見て默禱して曰く、天若し予を助けんには、河水氷結せよと。夜に至つて氷果して合す。燕の師勇躍して進み、陣の軍を敗る。景隆の兵動く。燕王左右軍を放つて夾撃し、遂に連りに其七營を破つて景隆の營に逼る。張王等も陣を列れて進むや、城中も亦兵を出して、内外交攻む。景隆支ふる能はずして通れ、諸軍も亦根を棄て奔る。燕の諸將是に於て頓首して王の神算及ぶ可からずと賀す。王曰く、偶中のみ、諸君の言へるところに皆萬全の策なりしなりと。前には斷じて後には譲す。燕王が英雄の心を攪るも巧なりといふべし。景隆が大軍功無くして、退いて德州に屯す。黃子澄其敗を奏せざるを以て、十二月に至つて却つて景隆に太子太師を加ふ。燕王は南軍ををして苦寒に際して奔命に疲れしめんが爲に、師を出して廣昌を攻めて之を降す。前に疏を上りて、諸藩を削るを陳めたる高巍は、言用ゐられず、事遂に發して天下動亂に至りたるを慨き、書を上りて、臣願はくは燕に使して言ふところあらんと請ひ、許されて燕に至り、書を燕王に上りたり。其略に曰く、太祖升遐したまひて意はざりき大王と朝廷と隙あらんとは。臣おもへらく干戈を動かすは和解

に若かすと。願はくは死を度外に置き、親しく大王に見えん。昔周公流言を聞きては、即ち位を避けて東に居たまひき。若し大王能く首計の者を斬りたまひ、調衛の兵を解き、子孫を質にし、骨肉猜忌の疑を釋き、殘賊斷間の口を塞ぎたまはば、周公と隆なることを比すべきにはあらずや。然るを慮ぐに及ばせたまはば甲兵を興し疆宇を襲ひたまふ。されば事に任する者、口に藉くことを得て、殿下文臣を誅することを假りて實は漢の吳王の七國に倡へて晁錯を誅せんとし、に倣はんと欲したまふと申す。今大王北平に據りて數郡を取りたまふと雖も、數月以來にして、尙葦爾たる一隅の地を出づる能はず、較ぶるに天下を以てすれば、十五にして未だ其一をも有したまはず、大王の將士も、亦疲れずといはんや。それ大王の統べたまふ將士も、大約三十萬には過ぎざらん。大王と天子と、義は則ち君臣たり、親は則ち骨肉たるも、尙離れ間たりたまふ、三十萬の異姓の士、など必ずしも終身困迫して殿下の爲に死し申すべきや。巍が念ぐに至ることに大王の爲に流涕せずんばあらざる也。願はくは大王臣が言を信じ、上表謝罪し、甲を按き兵を休めたまはば、朝廷も必ず寬宥あり、天人共に悦びて、太

修築已に完く、防備も亦嚴にして破り難く、滄州の城の潰え圯ること久しくして破り易きを思ひ、之を下して庸の勢を殺さんと欲す。乃ち陽に遼東を征するを令して、徐凱をして備へざらしめ、天津より直沽に至り、俄に河に沿ひて南下するを令す。軍士猶知らず、其の東を征せんとして而して南するを疑ふ。王嚴命して疾行すること三百里、途に偵騎に遇へば、盡く之を殺し、一晝夜にして曉に比びて滄州に至る。凱の燕師の到れるを覺りし時には、北卒四面より急攻す。滄州の衆皆驚きて防ぐ能はず。張玉の肉薄して登るに及び、城遂に抜かれ、凱と程邈、俞琨、趙濟等皆獲らる。これ實に此年十月なり。

十二月、燕王河に循ひて南す。盛庸兵を出して後を襲ひしが及ばざりき。王遂に臨清に至り、館陶に屯し、次で大名府を掠め、轉じて汶上に至り、濟寧を掠めぬ。盛庸と鐵鉉とは兵を率ゐて其後を躡み、東昌に營したり。此時北軍却つて南に在り南軍却つて北に在り。北軍南軍相戦はざるを得ざるの勢成りて東昌の激戦は遂に開かれぬ。初ば官軍の先鋒孫霖、燕將朱榮、劉江の爲に敗れて走りしが、兩軍持重して、主力動かさること十日を越ゆ。燕師いよく東昌に至

るに及んで、盛庸鐵鉉牛を幸して將士を犒ひ、義を唱へ衆を勵まし、東昌の府城を背にして陣し、密に火器毒弩を列れて、肅として敵を待つたり。燕兵も勇にして毎戦毎勝す。庸の軍を見るや鼓譟して薄る。火器電の如くに發し、毒弩雨の如くに注げば、虎狼鴟梟、皆傷つて倒る。又平安の兵の至るに會ふ。庸是に於て兵を麾いて大に戦ふ。燕王精騎を率ゐて左翼を衝く。左翼動かすして入る能はず。轉じて中堅を衝く。庸陣を開いて王の入るに縱せ。急に閉ぢて厚く之を圍む。燕王衝擊甚だ力むれども出づることを得ず。殆んど其の獲るところとならんとす。朱能、周長等、王の急を見、鞭驅騎兵を縱つて庸の軍の東北角を撃つ。庸之を禦がしめ、圍や緩む。能衝いて入つて死戦して王を翼けて出づ。張玉も亦王を救はんとし、王の已に出でたるを知らず、庸の陣に突入し、縱横奮撃し、遂に惡闘して死す。官軍勝に乘じ、殘獲萬餘人、燕軍大に敗れて奔る。庸兵を縱つて之を追ひ、殺傷甚だ多し。此役や、燕王數々危し、諸將帝の詔を奉するを以て、刃を加へず。燕王も亦之を知る。王騎射尤も精し、迫ふ者王を斬るを敢てせずして、王の射て殺すところとなる多し。適々高煦、華聚等を率ゐて至り

追兵を撃退して去る。燕王張玉の死を聞きて痛哭し、諸將と語るごとに、東昌の事に及べば、曰く、張玉が失ふより、吾今に至つて寢食安からずと。涕下りて已まず。諸將も皆泣く。後功臣を賞するに及びて、張玉を第一とし、河間王に追封す。

初め燕王の師の出づるや、道衍曰く、師は行いて必ず克たん、たゞ兩日を費すのみと。東昌より還るに及びて、王多く精銳を失ひ、張玉を亡ふを以て、意稍休まんことを欲す。道衍曰く、兩日は昌也。東昌の事了る、此より全勝ならんのみと。益々士を募り勢を鼓す。建文三年二月、燕王自ら文を撰し、流涕して陣亡の將士張玉等を祭り、服するところの袍を脱して之を焚き、以て亡者に衣するの意をあらはし、曰く、其れ一絲と雖もや、以て余が心を諫れと。將士の父兄弟之を見て、皆感泣して、王の爲に死せんと欲す。燕王遂に復師を帥ゐて出づ。諸將士を諭して曰く、戦の道、死を懼る者は必ず死し、生を捐つる者は必ず生く。爾等努力せよと。三月、盛庸と夾河に遇ふ。燕將譚淵、董中峰等、南將

王これに乘じ、勁騎を以て繞つて其後に出て、突入馳撃し、高煦の騎兵と合し、翟能父子を亂軍の裏に殺す。平安は朱能と戦つて亦敗る。南將俞通淵、勝聚等皆死す。燕兵勢に乘じて營に逼り火を縱つ。急風火を扇る。是に於て南軍大に潰え、郭英等は西に奔り、景隆は南に奔る。器械輜重、皆燕の獲るところとなり、南兵の横尸百餘里に及ぶ。所在の南師、聞く者皆解體す。此戦、軍を全くして退く者、徐輝祖あるのみ。翟能、平安等、驍將無きにあらずとも、景隆凡器にして將材にあらず。燕王父子、天縱の豪雄に加ふるに、張玉、朱能、丘福等の勇烈を以てす。北軍の克ち、南軍の潰ゆる、まことに所以ある也。

山東参政鐵鉉は儒生より身を起し、嘗て疑獄を斷じて太祖の知を受け、鼎石といふ字を賜はりたる者なり。北征の師の出づるや、餉を督して景隆の軍に赴かんとしけるに、景隆の師潰えて、諸州の城堡皆風を望みて燕に下るに會ひ、臨邑に次りたるに、參軍高巍の南歸するに遇ひたり。偕に是れ文臣なりと雖も、今武事の日に當り、目前に官軍の大に敗れて、賊威の燃んに張るを見る、感憤何ぞ極まらん。巍は燕王に書を上りしも效無かりしを歎すれば、鉉は忠臣

の節に死する少きを憤る。慨世の哭、憂國の淚、二人相持して、泣然として泣きしが、乃ち酒を酌みて共に盟ひ、死を以て自ら誓ひ、濟南に趨りてこれを守りぬ。景隆は奔りて濟南に依りぬ。燕王は勝に乘じて諸將を進ましめぬ。燕兵の濟南に至るに及びて、景隆尙十餘萬の兵を有せしが、一戦に復敗られて、單騎走り去りぬ。燕師の勢愈旺んにして城を屠らんとす。鐵鉉、左都督盛庸、右都督陳暉等と力を盡して捍志を堅うして守り、日を經れども屈せず。事聞えて、鉉を山東布政司使と爲し、盛庸を大將軍と爲し、陳暉を副將軍に陞す。景隆は召還されしが、黃子澄、練子寧は之を誅せずんば何を以て宗社に謝し將士を勵まさんと云ひしも、帝卒に問ひたまはす。燕王は濟南を圍むこと三月に至り、遂に下すこと能はず。乃ち城外の諸溪の水を堰きて灌ぎ、二城の土を魚とせんとす。城中是に於て大に安んぜず。鉉曰く、懼るゝ勿れ、吾に計ありと。千人を遣りて詐りて降らしめ、燕王を迎へて城に入らしめ、豫て壯士を城上に伏せて、王の入るを俟ひて大鐵板を墜して之を撃ち、又別に伏を設けて橋を斷たしめんとす。燕王計に陥り、馬に乘じ蓋を張り、橋を渡り城に入る。大鐵板隊に下る。たゞ少しく早きに

失して、王の馬首を傷つく。王驚きて馬を易へて馳せて出づ。橋を斷たんとす。橋断たに墜し、未だ斷つて及ばずして、王竟に逸し去る。燕王幾んど死して幸に逃る。天助あるものゝ如し。王大に怒り、巨艦を以て城を撃たしむ。城壁破れんとす。鉉愈屈せず。太祖高皇帝の神牌を書して城上に懸けしむ。燕王敢て撃たしむる能はず。鉉又數々不意に出で、壯士をして燕兵を脅かさしむ。燕王憤ること甚しけれども、計の出づるところ無し。道衍書を馳せて曰く、師老いたり、請ふ暫らく北平に還りて後舉を圖りたまへと。王聞を撤して還る。鉉と盛庸等と勢に乗じて之を追ひ、遂に德州を回復し、官軍大に振ふ。鉉是に於て擢でられて兵部尙書となり、盛庸は歷城侯となりたり。

盛庸は初め耿炳文に従ひ、次で李景隆に従ひしが、洪武中より武官たりしを以て、兵馬の事に習ふ。濟南の防禦、德州の回復に、其の材を認められて、平燕將軍となり、陳暉、平安、馬導、徐眞等の上に立ち、吳傑、徐凱等と與に燕を伐つのに當りぬ。庸乃ち吳傑、平安をして西の方定州を守らしめ、徐凱をして東の方涪州に屯せしめ、自ら德州に駐まり、犄角の勢を爲して漸く燕を蹙めんとす。燕王德州の城の、

りて却つて燕王の機略威武の服するところとなり、歸つて燕王の語直にして意誠なるを奏し、皇上權好を誅し、天下の兵を散じたまはば、臣卑賤闕下に至らんと云へる燕王の語を奏す。帝方孝孺に語りたまはく、誠に崑の言の如くならば、齊黃我を誤るなりと。孝孺恐みて曰く、崑の言、燕の爲に游説するなりと。五月、吳傑、平安、兵を發して北平の糧道を斷つ。燕王、指揮武勝を遣りて、朝廷兵を罷むるを計したまひて、而して糧を絶ち北を攻めしめたまふは、前詔と背馳すと奏す。帝書を得て兵を罷むるの意あり。方孝孺に語りたまはく、燕王は孝康皇帝同産の弟なり、朕の叔父なり、吾他日宗廟神靈に見えざらんやと。孝孺曰く、兵一たび散すれば、急に聚む可からず。彼長驅して關を犯さば、何な以て之を禦がん、陛下惑ひたまふなかれと。勝を錦衣獄に下す。燕王聞て大に怒る。孝孺の言、眞に然り、而して建文帝の情、亦敦しといふべし。畢竟南北戰ふ、調停の事、復爲す能はざるの勢に在り、今に於て兵戈の慘を除かんとするも、五色の石、聖手にあらざるよりは、之を録ること難きなり。

此月燕王指揮李遠をして輕騎六千を率ゐて徐沛に詣り、南軍の資糧を焚かしむ。李遠、丘福、薛祿と策應して、能く功を收め、糧船數萬艘、糧數百萬を焚く。軍資器械、俱に燬盡となり、河水盡く熱きに至る。京師これを聞きて大に震駭す。七月、平安兵を率ゐて眞定より北平に到り、平村に營す。平村は城を距る五十里のみ。燕王の世子、危きを告ぐ。王劉江を召して策を問ふ。江乃ち兵を率ゐて淳沱を渡り、旗幟を張り、火炬を舉げ、大に軍容を壯にして安と戰ふ。安の軍敗れ、安還つて眞定に走る。方孝孺の門人林嘉猷、計をもつて燕王父子をして相疑はしめんとす。計行はれずして已む。盛庸等、大同の守將房昭に檄し、兵を引いて紫荆關に入り、保定の諸縣を略し、兵を易州の西水寨に駐め、險に據りて持久の計を爲し、北平を窺はしめんとす。燕王これを聞きて、保定失はれんには北平危しとて、遂に令を下して師を班す。八月より九月に至り、燕兵西水寨を攻め、十月眞定の援兵を破り、併せて寨を破る。房昭走りて免る。

十一月、駙馬都尉梅殷をして淮安を鎮守せしむ。殷は太祖の女の寧國公主に尙す。太祖の崩ぜんとするや、其の側に侍して顧命を受けたる者は、實に帝と殷となり。太祖顧みて殷に語りたまはく、汝老成忠信、幼主を託すべしと。誓書および遺詔を出して授けたまひ、致て天に還ふ者あらは、朕が爲に之を伐て、と言ひ訖りて崩れたまへるなり。燕の勢漸く大なるに及びて、諸將觀望するもの多し。乃ち淮南の民を募り、軍士を合して四十萬と號し、殷に命じて之を統べて、淮上に駐まり、燕師を扼せしむ。燕王これを聞き、殷に書を遣り、香を金陵に進むるを以て辭と爲す。殷答へて曰く、進香は皇考禁あり、違ふ者は孝たり、違はざる者は不孝たり、とて使者の耳鼻を割き、峻辭の語をもて斥く。燕王怒ること甚し。燕王兵を起してより既に三年、戰勝つと雖も、得るところは永平、大寧、保定にして、南軍出沒して已まず、得るもまた棄つるに至る、と多く、死傷少からず。燕王こゝに於て太息して曰く、頻年兵を用ゐ、何の時か已む可けん、まさ

莊得と戦つて死し、南軍亦莊得、楚知、張思、
等を失ふ。日暮れ、各兵を斂めて營に入る。燕
王十餘騎を以て庸の營に逼つて野宿す。天明く、
四面皆敵なり。王從容として去る。庸の諸將相
顧みて愕き眙るも、天子の詔、朕を以て叔父を
殺すの名を負はしむる勿れの語あるを以て、矢
を發すを敢てせず。此日復戰ふ。辰より未に至
つて、兩軍互に勝ち互に負く。忽にして東北
風大に起り、砂礫面を撃つ。南軍は風に逆ひ、
北軍は風に乘す。燕軍吶喊鉦鼓の聲地を振ひ、
庸の軍當る能はずして大に敗れ走る。燕王戰罷
んで營に還るに、塵土滿面、諸將も議る能はず、
語聲を聞いて王なるを覺りしといふ。王の黃埃
天に漲るの中に在つて馳驅奔突して叱咤號令せ
しの狀、察す可きなり。

吳傑、平安は、盛庸の軍を援けんとして、眞
定より兵を率ゐて出でしが、及ばざること八十
里にして庸の敗れしことを聞きて還りぬ。燕王、
眞定の攻め難きを以て、燕軍は回出して糧を
取り、營中備無しと言はしめ、傑等を誘ふ。傑
等之を信じて、遂に漳沱河に出づ。王河を渡り
流に沿ひて行くこと二十里、傑の軍と冀城に遇
ふ。實に閏三月己亥なり。翌日大に戰ふ。燕將
薛祿、奮闘甚だ力む。王驍騎を率ゐて、傑の軍
に突入し、大呼猛撃す。南軍前を飛ばす雨の如
く、王の建つところの旗、集矢蝟毛の如く、
燕軍多く傷つく。而も王猶屈せず、衝撃愈急
なり。會また暴颶起り、樹を抜き屋を飄す。
燕軍之に乘じ、傑等大に潰ゆ。燕軍追ひて眞定
城下に至り、驍將鄧繼、陳賜等を擒にし、斬首
六萬餘級、盡く軍資機械を得たり。王其の旗を
北平に送り、世子に諭して曰く、善く之を藏し、
後世をして忘る勿らしめよと。旗世子の許に至
る。時に降將顧成、座に在りて之を見る。成は
操舟を業とする者より出づ。魁岸勇偉、臂力絶
倫、滿身の花文、人を驚かして自ら異にす。太
祖に従つて、出入離れず。嘗て太祖に隨つて出
でし時、巨舟砂に膠して動かず。成即便舟を
負ひて行きしことあり。鎮江の戰に、執へら
れて縛せらるゝや、勇躍して縛を斷ち、刀を持
てる者を殺して脱歸し、直に衆を導いて城を陷
しゝことあり。勇力察す可し。後戰功を以つて
累進して將となり、蜀を征し、雲南を征し、諸
蠻を平らげ、雄名世に布く。建文元年耿炳文に
従ひて燕と戰ふ。炳文敗れて、成執へらる。燕
王自ら其縛を解いて曰く、皇考の靈、汝を以て
我に授くるなりと。因つて兵を擧ぐるの故を語
る。成感激して心を歸し、遂に世子を輔けて北

平を守る。然れども多く謀畫を致すのみにし
て、終に兵を將ゐて戰ふを肯んぜず、兵器を
賜ふも亦受けず。蓋し中年以後、書を讀んで得
るあるに因る。又一種の人なり。後、太子高熾
の群小の爲に苦めらるや、告げて曰く、殿下
は但當に誠を竭して孝愷に、華々として民を恤
みたまふべきのみ、萬事は天に在り、小人は意
を措くに足らずと。識見亦高しといふべし。成
は是の如き人なり。旗を見るや、愴然として之
を壯とし、涙下りて曰く、臣少きより軍に従ひ
て今老いたり、戰陣を歴たること多きも、未だ
嘗て此の如きを見ざるなりと。水滸傳中の人の
如き成をして此言を爲さしむ。燕王も亦惡戰し
たりといふべし。而して燕王の豪傑の心を擣る
所以のもの、實に王の此の勇往邁進、艱危を冒
して肯て避けざるの雄風にあらすんばあらざる
也。

四月、燕兵大名に次す。王、齊泰と黃子澄と
の斥けらるゝを聞き、書を上りて、吳傑、盛
庸、平安の衆を召還せられんことを乞ひ、然ら
ずんば兵を釋く能はざるを言ふ。帝大理少卿薛
嵩を遣りて、燕王及び諸將士の罪を赦して、本
國に歸らしむることを詔し、燕軍を散ぜしめて、
而して大軍を以て其後に躡かしめんとす。嵩到

燕軍の勢非にして、王の甲を解かざるもの數日なりと雖も、將士の心は一にして兵氣は善變せるに反し、南軍は再捷すと雖も、兵氣は惡變せり。天意とや云はん。時運とや云はん。燕軍の再敗せること京師に聞えければ、延臣の中に、燕今は且に北に還るべし。京師空虛なり、良將無かるべからず、と曰ふ者ありて、朝議徐輝祖を召還したまふ。輝祖已むを得ずして京に歸りければ、何福の軍の勢殺げて、單絲の紐少く、孤掌の鳴り難き狀を現はしぬ。加ふるに南軍は北軍の騎兵の馳突に備ふる爲に壘濠を掘り、壘壁を作りて營と爲すを常としければ、軍兵休息の暇少く、往々虚しく人力を耗すの憾ありて、士卒困罷退屈の情あり。燕王の軍は壘壁を爲らず、たゞ隊伍を分布し、陣を列して門と爲す。故に將士は營に至れば、即ち休息するを得、暇あれば王射獵して地勢を周覽し、禽を得れば將士に頒ち、壘を抜くことに悉く獲るところの財物を資ふ。南軍と北軍と、軍情おのづから異なることは是の如し、一は人役に就くを苦み、一は人用を爲すを樂む。彼此の差、勝敗に影響せずんばあらず。

かくて對壘日を果ゆる中、南軍に糧餉大に至るの報あり。燕王悦んで曰く、敵必ず兵を分

ちて之を護らん、其の兵分れて勢弱きに乘じなば、如何で能く支へんや、と朱榮、劉江等を遣りて、輕騎を率ゐて、餉道を截らしめ、又游騎をして樵採を妨げ擾さしむ。何福乃ち營を靈壁に移す。南軍の糧五萬、平安馬步六萬を帥めて之を護り、糧を負ふものをして中に居らしむ。燕王壯士萬人を分ちて敵の援兵を遮らしめ、子高煦をして兵を林間に伏せ、敵戰ひて疲れなば出で、撃つべしと命じ、躬づから帥を率ゐて逆へ戰ひ、騎兵を兩翼と爲す。平安軍を引いて突至し、燕兵千餘を殺し、王步軍を麾いて縱撃し、其陣を横貫し、斷つて二となし、かは、南軍遂に亂れたり。何福等此を見て安と合撃し、燕兵數千を殺して之を却けしが、高煦は南軍の罷れたるを見、林間より突出し、新銳の勢をもて打撃を加へ、王は兵を還して掩ひ撃ちたり。是に於て南軍大に敗れ、殺傷萬餘人、馬三千餘匹を奪ひ、糧餉盡く燕の師に獲らる。福等は餘衆を率ゐて營に入り、壘門を塞ぎて堅守しけるが、福此夜令を下して、明且砲聲三たびするを聞かば、圍を突いて出で、糧に淮河に就くべし、と示したり。然るに此も亦天か命か、其翌日燕軍靈壁の營を攻むるに當つて、燕兵偶然三たび砲を放つたり。南軍誤つて此を

我砲となし、争つて急に門に趨きしが、元より我が號砲ならざれば、門は塞がりたり。前者は出づることを得ず、後者は急に出でんとす。營中紛擾し、人馬滾轉す。燕兵急に之を撃つて、遂に營を破り、衝擊と包圍と共に敏捷を極む。南軍こゝに至つて大敗收む可からず。宗埏、陳性善、彭與明は死し、何福は逃れ走り、陳暉、平安、馬薄、徐眞、孫成、王貴等、皆執へらる。平安の俘となるや、燕の軍中歡呼して地を動かす。曰く、吾等此より安きを獲んと。争つて安を殺さんことを請ふ。安が數々燕兵を破り、驍將を斬る數人なりしを以てなり。燕王其の材勇を惜みて許さず、安に問ひて曰く、泥河の戰、公の馬頭がすんば、何以に我を遇せしぞと。安の曰く、殿下を刺すこと、朽を拉ぐが如くならんのみと。王太息して曰く、高皇帝、好く壯士を養ひたまへりと。勇士を選びて、安を北平に送り、世子をして善く之を視せしむ。安後永樂七年に至りて自殺す。安等を喪ひてより、南軍大に衰ふ。黃子澄、靈壁の敗を聞き、胸を撫して大慟して曰く、大事去る。吾輩萬死、國を誤るの罪を贖ふに足らずと。

五月、燕兵泗州に至る。守將周景初降る。燕の師進んで淮に至る。盛庸防ぐ能はず、戰艦皆

衡水に破りて之を擒す。燕王乃ち館陶より渡りて、東阿を攻め、汶上を攻め、沛縣を攻めて之を略し、遂に徐州に進み、城兵を威して敢て出でざらしめて南行し、三月、宿州に至り、平安が馬歩兵四萬を率ゐて追躡せるを灝河に破り、平安の麾下の番將火耳灰を得たり。此戰、火耳灰稍を執つて燕王に逼る。相距るたゞ十歩ばかり、童信射つて、其馬に中つ。馬倒れて王免れ、火耳灰獲らる。王即便火耳灰を釋し、當夜入つて宿衛せしむ。諸將これを危みて言へども、王聽かず。次いで蕭縣を略し、淮河の守兵を破る。四月、平安小河に營し、燕兵河北に據る。總兵何福奮撃して、燕將陳文を斬り、平安勇戰して燕將王眞を圍む。眞身に十餘創を被り、自ら馬上に劬め。安いよく逼りて、燕王に北坂に遇ふ。安の槩ほとん王に及ぶ。燕の番騎指揮王麒、馬を躍らせて突入し、王わづかに脱するを得たり。燕將張武惡戰して敵を却くも雖も、燕軍遂に克たず。是に於て南軍は橋南に駐まり、北軍は橋北に駐まり、相持するもの數日、南軍糧盡きて、燕を採つて食ふ。燕王曰く、南軍飢乏たり、更に一二日にして糧や集まらば破り易からずと。乃ち兵千餘を留めて橋を守らしめ、潛に軍を移し、夜半に兵を渡らしめて繞

つて敵の後に outbreak。時に徐輝祖の軍至る。甲戌日に齊眉山に戰ふ。午より酉に至りて、勝敗相當り、燕の驍將李斌死す。燕復遂に克つ能はず。南軍再捷して振ひ、燕は陳文、王眞、韓貴、李斌等を失ひ、諸將皆懼れ、燕王に説いて曰く、軍深く入りたり、晝雨連綿として、淮土濕蒸に、疾疫漸く冒さんとす。小河の東は、平野にして牛羊多く、二麥まさに熟せんとす。河を渡り地を擇み士馬を休息せしめ、隙を觀て動くべきなりと。燕王曰く、兵の事は進ありて退無し。勝形成りて而して復北に渡らば、將士體せざらんや、公等の見る所は、拘攣するのみと。乃ち命を下して曰く、北せんとする者は左せよ、北せざらんとする者は右せよと。諸將多く左に趨る。王大に怒つて曰く、公等みづから之を爲せと。此時や燕の軍の勢實に岌々乎として將に崩れんとするの危に居れり。孤軍長驅して深く敵地に入り、腹背左右、皆我が友たらざる也。北平は遠遠にして、而も本據の四圍亦皆敵たる也。燕の軍戰つて克てば則ち可、克たずんば自ら支ふる無き也。而して當面の敵たる何福は兵多くして力戰し、徐輝祖は堅實にして隙無く、平安は驍勇にして奇を出す。我軍は再戰して再挫し、猛將多く亡びて、衆心疑懼す。戰はんと

欲すれば力足らず、歸らんとすれば前功盡く廢りて、不振の形勢新に見はれんとす。將卒を強ひて戰はしめんとすれば人心の乖離、不測の變を生ずる無きを保せず。諸將爭つて左するを見て王の怒るも亦宜なりといふべし。然れども此時の勢、たゞ退かざるあるのみ、燕王の衆意を容れずして、敢然として奮戰せんと欲するもの、機を見る明確、事を斷する勇決、實に是れ豪傑の氣象、鐵石の心腸を見はせるものならずして何ぞや。時に座に朱能あり、能は服玉と共に初より王の左右の手たり。諸將の中に於て年最も少しと雖も、善戰有功、もとより人の敬服するところとなれるもの。身の長八尺、年三十五、雄毅開豁、孝友敦厚の人たり。慨然として席を立ち、劔を按じて右に趨きて曰く、諸君乞ふらくは勉めよ、昔漢高は十たび戰つて九たび敗れぬれど終に天下を有したり、今事を擧げてより連に勝を得たるに、小挫して輒歸らば、更に能く北面して人に事へんや。諸君雄豪誠實、豈退心あるべけんや、と云ひければ、諸將相見て敢て言ふものあらず、全軍の心機一轉して、生死共に王に従はんとぞ決しける。朱能後に龍州に死して、東平王に追封せらるゝに至りしもの、豈偶然ならんや。

庶人と爲ししが、諸王後皆其死を得ず。建文帝の少子、中都廣安宮に幽せられしが、後終るところを知らず。

魏國公徐輝祖、獄に下さるれども屈せず。諸武臣皆歸附すれども、輝祖始終帝を戴くの意無し。帝大に怒れども、元勳國舅たるを以て誅する能はず、爵を削つて之を私第に幽するのみ。

輝祖は開國の大功臣たる中山王徐達の子にして、雄毅誠實、父達の風骨あり。齊眉山の戦、大に盡兵を破り、前後數戰、毎に良將の名を辱めず。其姉は即ち燕王の妃にして、其弟増壽は京師に在りて常に燕の爲に國情を輸せるも、輝祖獨り毅然として正しきに據る。端嚴の倅格、敬虔の行爲、良將とのみ云はんや、有道の君子といふべきなり。

兵部尙書鐵鉉、執へられて京に至る。廷中に背立して、帝に對はず、正言して屈せず。遂に寸裂せらる。死に至りて猶罵るを以て、大鐵に油熬せらるゝに至る。參軍斷事高巍、かつて曰く、忠に死し孝に死するは、臣の願なりと。京城破れて、驛舍に縊死す。禮部尙書陳迪、刑部尙書張昭、禮部侍郎黃觀、蘇州知府姚善、翰林修譚王叔英、翰林王良、浙江按察使王良、兵部郎中譚冀、御史曾鳳韶、谷府長史劉瑄、其他數

十百人、或は屈せずして殺され、或は自死して義を全くす。齊泰、黃子澄、皆執へられ、屈せずして死す。右副都御史練子寧、縛されて闕に至る。語不遜なり。帝大に怒つて、命じて其舌を斷らしめ、曰く、吾周公の成王を輔くるに倣はんと欲するのみと。子寧手をもて舌血を探り、地上に、成王安在の四字を大書す。帝益怒りて之を磔殺し、宗族棄市せらるゝ者、一百五十一人なり。左僉都御史景清、諛りて歸附し、

復に利劍を衣中に伏せて、帝に報いんとす。八月望日、清緋衣して入る。是より先に雲臺奏す、文曲星帝座を犯す急にして色赤しと。是に於て清の獨り緋を衣るを見て之を疑ふ。朝畢る。清奮躍して駕を犯さんとす。帝左右に命じて之を收めしむ。劍を得たり。清志の遂ぐべからざるを知り、植立して大に罵る。衆其齒を抉す。且抉せられて且罵り、血を含んで直に御袍に喫く。乃ち命じて其皮を剥ぎ、長安門に繋ぎ、骨肉を碎礎す。清帝の夢に入つて劍を執つて追ひて御座を繞る。帝覺めて、清の族を赤し郷を籍し、村里も墟となるに至る。

戸部侍郎卓敬執へらる。帝曰く、爾前日諸王を裁抑す、今復我に臣たらざらんかと。敬曰く、先帝若し敬が言に依りたまはば、殿下豈此に至

るを得たまはんやと。帝怒りて之を殺さんと欲す。而も其才を憐みて獄に繋ぎ、諷するに管仲・魏徵の事を以てす。帝の意、敬を用ゐんとする也。敬たゞ涕泣して可かず。帝猶殺すに忍びず。道衍白す、虎を養ふは患を遺すのみと。帝の意遂に決す。敬刑せらるゝに臨みて、從容として嘆じて曰く、變宗親に起り、略經畫無し、敬死して餘罪ありと。神色自若たり。死して經宿して、面猶生けるが如し。三族を誅し、其家を没するに、家たゞ圖書數卷のみ。卓敬と道衍と、故より隙ありしと雖も、帝をして方孝孺を殺さざらしめんとしたりし道衍にして、帝をして敬を殺さしめんとす。敬の實用の才ありて浮文の人にあらざるを看るべし。建文の初に當りて、燕を憂ふるの諸臣、各意見を立て奏疏を上る。中に就て敬の言最も實に切なり。敬の言にして用ゐらるれば、燕王蓋し志を得ざるのみ。萬曆に至りて、御史屠叔方奏して敬の墓を表し祠を立つ。敬の著すところ、卓氏遺書五十卷、予未だ目を寓せずと雖も、管仲魏徵の事を以て諷せられしの人、其の書必ず觀る可きあらん。

卓敬を容るゝ能はざりしも、方孝孺を殺す勿

燕の獲るところとなり、野に陥れらる。燕王諸將の策を排して、直に揚州に趨く。揚州の守將王禮と弟宗と、監察御史王彬を縛して門を開いて降る。高郵、通泰、儀眞の諸城亦皆降り、北軍の艦船江上に往來し、旗鼓天を蔽ふに至る。朝廷大臣、自ら全うするの計を爲して、復立つて争はんとする者無し。方孝孺、地を割きて燕に與へ、敵の師を緩うして、東南の募兵の至るを俟たんとす。乃ち慶城郡主を遣りて和を議せしむ。郡主は燕王の從姉なり。燕王聽かずして曰く、卓考の分ちたまへる吾地も且つ保つ能はざらんとせり、何ぞ更に地を割くを望まん。ただ奸臣を得るの後、孝陵に謁せんと。六月、燕師浦子口に至る。盛庸等之を破る。帝都督食事陳瑄を遣りて舟師を率ゐて庸を援けしむるに、瑄却つて燕に降り、舟を具へて迎ふ。燕王乃ち江神を祭り、師を誓はしめて江を渡る。舳艫相衝突み、金鼓大に震ふ。盛庸等海舟に兵を列せるも、皆大に驚き愕く。燕王諸將を麾き、鼓譟して先登す。庸の師潰え、海舟皆其の得るところとなる。鎮江の守將童俊、爲す能はざるを覺りて燕に降る。帝、江上の海舟も敵の用を爲し、鎮江等諸城皆降るを聞きて、憂鬱して計を方孝孺に問ふ。孝孺民を驅りて城に入れ、諸

王をして門を守らしむ。李景隆等燕王に見えて割地の事を説くも、王應ぜず。勢よく逼る。群臣或は帝に勸むるに漸に幸するを以てするあり、或は湖湘に幸するに若かずとするあり。方孝孺堅く京を守りて勤王の師の來り援くるを待ち、事若し急ならば、車駕蜀に幸して、後舉を爲さんことを請ふ。時に齊泰は廣徳に奔り、黃子澄は蘇州に奔り、徵兵を促す。蓋し二人皆實務の才にあらず、兵を得る無し。子澄は海に航して兵を外洋に徵さんとして果さず。燕將劉保、華聚等、終に朝陽門に至り、備無きを覘ひて還りて報ず。燕王大に喜び、兵を整へて進む。金川門に至る。谷王穗と李景隆と、金川門を守る。燕兵至るに及んで、遂に門を開いて降る。魏國公徐輝祖屈せず、師を率ゐて迎へ戦ふ。克つ能はず。朝廷文武皆俱に降つて燕王を迎ふ。

史を按じて兵馬の事を記す、筆墨も亦倦みたり。燕王事を擧げてより四年、遂に其志を得たり。天意か、人望か、數か、勢か、將父理の應に然るべきものあるか。鄒公瑾等十八人、殿前に於て李景隆を辱つて幾ど死せしむるに至りしも、亦益無きのみ。帝、金川門の守を失ひし

を知りて、天を仰いで長吁し、東西に走り迷ひて、自殺せんとしたまふ。明史、恭愍惠皇帝紀に記す。宮中火起り、帝終る所た知らずと。皇后馬氏は火に赴いて死したまふ。丙寅、諸王及び文武の臣、燕王に位に即かんことを請ふ。燕王辭すること再三、諸王群臣、頓首して固く請ふ。王遂に奉天殿に詣りて、皇帝の位に即く。最より先建文中、道士ありて、途に歌つて曰く、

燕を逐ふ莫れ。
燕を逐ふ莫れ。

燕を逐へば、日に高く飛び、高く飛びて、帝畿に上らん。

是に至りて人其言の應を知りぬ。燕王今は帝たり、宮人内侍を詰りて、建文帝の所在を問ひたまふに、皆馬皇后の死したまへるところを指して應ふ。乃ち屍を燬爐中より出して、之を哭し、翰林侍讀王景を召して、葬禮まことに如何すべきと問ひたまふ。景對へて曰く、天子の禮を以てしたまふべしと。之に従ふ。

建文帝の皇考興宗孝康皇帝の廟號を去り、舊の諡に仍りて、懿文皇太子と號し、建文帝の弟吳王允熲を降して廣澤王とし、衛王允熿を懷恩王となし、除王允熙を敷憲王となし、尋て復

勳名 簡牘に照る。

身退いて 即ち長往し、

川流れて 去つて復ること無し。

住城 百年の後、

鬱々たり 盧溝の北、

松楸 煙靄 青く、

翁 仲 蕭蕭 綠なり。

強梁も 敢て犯さず、

何人か 敢て 樵牧せん

王侯の 墓累々たるも、

廢すること 草宿をも待たず、

惟公 民望に在り、

天地と 傾覆を同じうす、

斯人 作す可からず、

再拜して 還一哭す。

藏春は秉忠の號なり。盧溝は燕の城南に在り。

此詩劉文貞に傾倒すること甚だ明らかに、其の高風大業を擧げ、而して再拜一哭すといふに至る。性情行經相近し、徘徊感慨、まことに止む

能はざるものありしならん。又別に、春日劉太保の墓に謁するの七律あり。まことに思慕の切

なるを證すといふべし。東游せんとして郷中

諸友に別るゝの長詩に、

我生れて 四方の志あり、

樂ます 鄉井の中を。

茫乎たる 宇宙の内、

飄轉して 秋蓬の如し。

孰か云ふ 挾む所無しと、

歌々たるもの 吾胸に存す。

魚の深に止まるを爲すに忍びんや、

禽の籠に囚はるゝを作すを肯せんや、

三たび登ると 九たび到ると、

古徳と與に同じうせん欲す。

去年は 淮楚に客たりき。

今は往かんとす 浙水の東、

身を竦てゝ雲衢に入る、

一鶴 游 龍の如し。

笠は衝く 霏々の霧、

衣は拂ふ 颼々の風、

の句あり。身を竦てゝの句、颼爽悦ふ可し。其末に

江天 正に秋清く、

山水 亦容を改む。

沙鳥は 烟の際に白く、

嶼葉は 霜の前に紅なり、

といへる如き、常套の語なれども、また愛す可し。古徳と同じうせんと欲するは、是れ假にして、淮楚浙東に往來せるも、修行の爲なりしや

游覽の爲なりしや知る可からず。然れども、詩情も亦饒き人たりしは疑ふ可からず。詩に於ては陶淵明を推し、笠澤の舟中に陶詩を讀むの作

あり、中に淵明を學べる者を許して

應物は趣 顔合し、

子瞻は 才 當るに足る。

と韋、蘇の二士を擧げ、其他の模倣者な、

里婦 西が鞆に效ふ、

咲ふ可し 醜愈張る。

と冷笑す。又公暇に王維、孟浩然、韋應物、柳

子厚の詩を讀みて、四子か贊する詩を爲せる如

き、其の好む所の主とするところありて泛濫な

らざるを示せり。當時の詩人に於ては、高啓を

重んじ、交情また親しきものありしは、奉答に

高季迪、寄高編修、賀高啓生、子、訪高啓鍾

山、舍一屋、詩見路、雪夜讀高啓詩、等の詩

に徴して知るべく、此老の詩眼暗からざるを見

る。逃虛集十卷、續集一卷、詩精妙といふにあ

らずと雖も、時に逸氣あり。今其集に就て交友

を考ふるに、袁珙と張天師とは、最も親熟する

ところなるが如く、贈遺の什甚だ少からず。珙

と道衍とは本より互に知己たり。道衍又嘗て道

士席應真を師として陰陽術數の學を受く。因つ

て道家の旨を知り、仙趣の微に通ず。詩集卷七

れと云ひし道衍は如何の人ぞや。眇たる一山僧の身を以て、燕王を勸めて篡奪を致せしめ、定策決機、皆みづから當り、臣天命を知る、何ぞ民意を問はん、といふの豪懷を以て、天下を鼓動し簸盪し、億兆を鳥飛し獸奔せしめて憚らず、功成つて少師と呼ばれて名いはれざるに及んで、而も蓄髮を命ぜらるれども肯んぜず、邸第を賜ひ、宮人を賜はれども辭して皆受けず、冠帶して朝すれども、退けば即ち緇衣、香烟茶味、淡然として生を終り、榮國公を贈られ、葬賜はり、天子をして親づから神道碑を製するに至らしむ。又一箇の異人といふべし。魔王の如く、道人の如く、策士の如く、詩客の如く、實に袁洪の所謂異僧なり。其の詠するところの雜詩の一に曰く、

志士は 苦節を守る、
達人は 玄言に滯らんや。
苦節は 貞くす可からず、
玄言 豈其れ然らんや。
出ると處ると 固より定有り、
語るも黙するも 縁無きにあらず。
伯夷 量 何ぞ隘き、
宣尼 智 何ぞ圓なる。
所以に 古の君子、

命に安んずるを 乃ち賢と爲す。

苦節は貞くす可からずの一句、易の爻辭の節の上六に、苦節、貞くすれば凶なり、とあるに本づくとも雖も、口氣おのづからは道衍の一家言なり。況んや易の貞凶の貞は、貞固の貞にあらずして、貞卦の貞とするの説無きにあざざるや。伯夷量何ぞ隘きといふに至つては、古賢の言に據ると雖も、聖の清なる者に對して、忌憚無きも亦甚しといふべし。其の擬古の詩の一に曰く、

良辰 遇ひ難きを念ひて、
筵を開き、綺戸に當る。
會す 我が 同門の友、
言笑 一に何ぞ 賒ある。
素絃 清商を發し、
餘響 樽俎を繞る。
緩舞 吳姬 出で、
輕謳 越女 來る。
但欲ふ 客の拚醉せんことを、
觥籌 何ぞ肯て 數へむ。
流年 森馳を嘆く、
力有るも 誰か得て 阻めむ。
人生 須らく 歡樂すべし、
長に 辛苦せしむる 勿れ。

擬古の詩もとより、直に抒情の作とす可からずとも、此是れ縑を披て香を焚く佛門の人の吟ならんや。其の北固山を経て賦せる懷古の詩といふもの、今存するの詩集に見えずとも、僧宗渤一讀して、此豈釋子の語ならんや、と曰ひしといふ。北固山は宋の韓世忠兵を伏せて、大に金の兀朮を破るの處たり。其詩また想ふ可き也。劉文貞公の墓を詠するの詩は、直に自己の胸臆を據ぶ。文貞は即ち秉忠にして、袁洪の評せしが如く、道衍の燕に於けるは、秉忠の元につて功を成せる、皆相肖たり。蓋し道衍の秉忠に於けるは、岳飛が關張と比しからんとし、諸葛亮が管樂に擬したるが如く、思慕して而して倣模せるところありしなるべし。詩に曰く、

良驥 色 群に同じく、
至人 迹 俗に混す。
知己 苟も 遇はざれば、
終世 怨み 讟ます。
偉なる哉 藏春公や、
筆飄 巖谷に 樂む。
一朝 風雲 會す。
君臣 おのづから 心腹なり
大業 計 已に 成りて、

觀鏡の情無き能はざりしと雖も、道衍の扇を鼓して火を煽るにあらざれば、燕王未だ必ずしも毒烟猛燄を揚げざるなり。道衍抑又何の求むるあつて、燕王なしして決然として立たしめしや。

王の事を舉ぐるの時、道衍の年や既に六十四五、呂尙、范增、皆老いて而して後立つと雖も、圓頂黒衣の人を以て、諸行無常の教を奉じ、而して落日暮雲の時に際し、逆天非理の兵を起さしむ。嗚呼又解すべからずといふべし。若し強ひて道衍の爲に解さば、惟是れ道衍が天に稟くるの氣と、自ら負むの材と、莽々、蕩々、糾々、昂々として、屈す可からず、撓む可からず、消す可からず、抑ふ可からざる者、燕王に遇ふに當つて、蒼然として破裂し、爆然として迸發せるものといふべき耶、非耶。予其の逃虚子集を讀むに、道衍が英雄豪傑の蹟に感懐するもの多くして、佛燈梵鐘の間に幽潛するの情の少きを思はずんばあらざるなり。

道衍の人となりの古怪なる、實に一沙門を以て目す可からずと雖も、而も文を好み道の爲にするの情も、亦偽なりとなす可からず。此故に太祖實錄を重修するや、衍實に其監修を爲し、又支那ありてより以來の大編纂たる永樂大典の成れるも、衍實に解縉等と與に之を爲せるに

て、是れ皆文を好むの餘に出で、道餘錄を著し、淨土簡要錄を著し、詔上善人詠を著せるは、是れ皆道の爲にせるに出づ。史に記す。道衍晩に道餘錄を著し、頗る先儒を毀る、議者これを鄙しむ。其の故郷の長州に至るや、同産の姉を候す、姉納れず。其友王賓を訪ふ、賓も亦見えず、但遙に語つて曰く、和尙誤れり、和尙誤れりと。復往いて姉を見る、姉これを望る。道衍惘然たりと。道衍の姉、儒を奉じ佛を斥くるか、何ぞ婦女の見識に似ざるや。王賓は史に傳無しと雖も、おもふに道衍が詩を寄せしところの王達善ならむか。聲を揚げて遙語す。鄙しむも亦甚し。今道餘錄を讀むに、姉と友との道衍が薄んじて之を惡むも、亦過ぎたりといふべし。道餘錄自序に曰く、余曩に僧たりし時、元季の兵亂に値ふ。年三十に近くして、愚庵の及和尚に徑山に従つて禪學を習ふ。暇あれば内外の典籍を披閱して以て才識に資す。因つて河南の二程先生の遺書と新安の晦庵朱先生の語錄を觀る。(中略)三先生既に斯文の宗主、後學の師範たり、佛老を攘斥すといふと雖も、必ず當に理に據つて至公無私なるべし、即ち人心服せん。三先生多く佛書を探らざるに因つて佛の底蘊を知らず、一に私意を以て邪說の辭を出して、枉抑太

だ過ぎたり、世の人も心亦多く平らかならず、況んや其學を宗とする者をやと。(下略)道餘錄は乃ち程氏遺書の中の佛道を論するもの二十八條、朱子語錄の中の同二十一條を日して、極めて謬誤なりと爲し、你を逐ひ理に據つて一々剖析せるものなり。蒙成つて巾笥に藏すること年ありて後、永樂十年十一月、自序を附して公刊す。今これを讀むに、大抵繩子の常談にして、別に他の奇無し。蓋し明道、伊川、晦庵の佛を排する、皆雄論博議あるにあらず、卒然の言、偶發の語多し、而して廣く佛典を讀まざるも、亦其の免れざるところなり。故に佛を奉する者の三先生に應酬するが如き、本是辨じ易きの事たり。膽を張り日を怒らし、手を戟にし氣を壯にするを要せず。道衍の峻機險鋒を以て、徐に幾百年前の故紙に對す、縱說橫說、甚だ是れ容易なり。是れ其の觀る可き無き所以なり。而して道衍の筆舌の銳利なる、明道の言を罵つて、豈道學の君子の爲ならんやと云ひ、明道の執見僻說、委巷の曲士の若し、誠に咄ふ可き也、と云ひ、明道何ぞ乃ち自ら苦むこと此の如くなるや、と云ひ、伊川の言を許しては、此は是れ伊川みづから此說を造つて禪學者を誣ふ、伊川が良心いづくにか在る、と云ひ、管を以て天を窺

に、抱き席道士とあるもの、疑ふらくは應眞、
若くは應眞の族を悼めるならむ。張天師は道家
の棟梁なり。道衍の張を重んずるも怪むに足る
無きなり。故友に於ては最も王達善を親む。故
に其の奇王助教達善の長詩の前半、自己の感
慨行藏を叙して怠まず、道衍自傳として看る可
し。詩に曰く、

乾坤果して何物ぞ、
開闢古より有り。
世を擧つて孰か客に非ざらん、
離會豈偶なりと云はんや。
嗟予蓬蒿の人、
鄙猥林藪に匿る。
自から慚づ驚蹙の姿、
寧ろ學ばん牛馬の走るを。
吳山竊くして而して深し、
性を養ひて老朽を甘んず、
且木石と共に居りて、
氷檠と志堅く守りぬ。
人は云ふ鳳沢に栖むと、
豈同じからんや魚の罪に在るに。
藜藿我腸を充し、
衣敝れて兩肘露ばる。
憂龍高位に在り、

誰か來りて可否を問はん。
盤旋す草莽の間に、
樵牧日に相叩く。
嘯詠寒山に擬し、
惟道を以て自負す。
忍びざりき強ひて塗抹して、
乞娼びて里婦に效ふに。
山靈藏るゝことを容さず、
辟歷岡阜を破りぬ。
門を出でて天日を睹る、
行也焉にぞ肯て苟もせん、
一舉して即ち北に上れば、
親藩待つこと惟久しかりき、
天地忽ち大變して、
神龍氷湫より起る。
萬方共に忻び躍りて、
率土元后を戴く。
吾を召して南京に來らしめ、
爵賞加恩厚し。
常時天眷を荷ふ、
愛に因つて醜を知らず。(下略)
嘯詠寒山に擬するの句は、此老の行爲に照せ
ば矯飾の言に近きを覺ゆれども、若夫れ知己に
遇はずんば、強項の人、或は吳山に老朽を甘ん

じて、一生世外の衲子たりしも、また知るべから
ず。未だ遽に虚高の辭を爲すものと斷す可から
ず。たゞ道衍の性の豪雄なる、嘯詠吟哦、或は
獅子の繡毯を弄して日を消するが如くに、其身
を終ることは之有るべし。寒山子の如くに、蕭
散閑曠、塵表に逍遙して、其身を遣るゝを得可
きや否や、疑ふ可き也。憂龍高位に在りば建文
帝をいふ。山靈藏するを容さず以下數句、燕王
に召出されしをいふ。神龍氷湫より起るの句
は、燕王崛起の事をいふ。道ひ得て佳なり。愛
に因つて醜を知らずの句は、知己の恩に感じて
吾身を世に徇ふるを言へるもの、亦善く標置す
といふべし。

道衍の一生を考ふるに、其の燕を擧げて冀を
成さしめし所以のもの、榮名厚利の爲にあらざ
るが如し。而も名利の爲にせずんば、何ぞ苦ん
でか、紅血を民人に流さしめて、白幘を藩王に
戴かしめしぞ。道衍と建文帝と、深仇宿怨ある
にあらず、道衍と、燕王と、大恩至交あるにもあ
らず。實に解す可からざるある也。道衍己の偉
功によつて以て佛道の爲にすと云はんか、佛道
明朝の爲に壓迫せらるゝありしに非ざる也。燕王

孰か我が役を罷めしぞ、

使君の力なり。

孰か我が泰を活かしめしぞ、

使君の雨なり。

使君よ 去りたまふ勿れ、

我が民の父なり 母なり。

克勤の民意を得る是の如くなりしかば、事を

視ること三年にして、戸口増倍し、一郡饒足

し、男女怡々として生を樂みしといふ。克勤愚

庵と號す。宋濂に故馬庵先生方公墓銘文あり。

滔々数千言、備に其の人となり盡す。中に記

す。晚年益畏慎を加へ、晝の爲す所の事、夜

は則ち天に白す。愚庵はたゞに循吏たるのみ

ならざるなり。濂父曰く、古に謂はゆる體道成

德の人、先生誠に庶幾焉と。蓋し濂が諛墓の辭

にあらず。孝孺は此の愚庵先生第二子として生

れたり。天賦も厚く、庭訓も嚴なりしならむ。

幼にして精敏、双眸炯々として、日に書を讀む

こと寸に盈ち、文を爲すに雄邁醇深なりしかば

郷人呼んで小韓子となせりといふ。其の聰慧な

りしこと知る可し。時に宋濂一代の大儒として

太祖の優待を受け、文章德業、天下の仰望する

ところとなり、四方の學者、悉く稱して元史公

となして、姓氏を以てせず。濂字は、景濂、其

先金華の潛溪の人なるを以て潛溪と號す。太祖

濂を廷に譽めて曰く、宋景濂朕に事ふこと十九

年、未だ嘗て一言の僞あらず。一人の短を諫ら

ず、始終二無し、たゞに君子のみならず、抑

賢と謂ふ可しと。太祖の濂を視ることは是の如

し。濂の人品想ふ可き也。孝孺洪武の九年を以

て、濂に見えて弟子となる。濂時に年六十八。

孝孺を得て大に之を喜ぶ。潛溪が方生の天台に

還るを送るの詩の序に記して曰く、晩に天台の

方生希直を得たり、其の人となりや凝重にして

物に遷らず、穎銳にして以て諸を理に燭する。間

發して文を爲す、水の湧いて山の出づるが如

し。嗚呼たる百鳥の中、此の孤鳳皇を見る、い

かんぞ喜びざらんと。凝重穎銳の二句、老先生

眼裏の好學生を寫し出し來つて神有り。此の孤

鳳皇に見るといふに至つては、推想も亦至れ

り。詩十四章、其二に曰く、

念ふ 子が 初めて來りし時、

才思 蘭絲の若し。

之を抽いて 已に緒を見る、

染めて就せ 五色の衣。

其九に曰く、

須らく知るべし 九仞の山も、

功 或は 一簣に少くるを。

學は 貴ぶ 日に隨つて新なるを、

慎んで 中道に廢する勿れ。

其十に曰く、

羣經 明訓 歌たり、

白日 青天に麗る。

苟も 徒に 文辭に溺れなば、

盤礴 妍か争はんと欲するなり。

其十一に曰く、

姫も 孔も 亦何人ぞや、

顔面 了に異ならじ。

背て 徒蠶の中に墮せんや、

當に 瑚璉の器となるべし。

其終章に曰く、

明年 二三月、

羅山 花正に開かん。

高きに登りて 日に仰望し、

子が能く 重れて來るゝ遅たむ。

其才を稱し、其學を勸め、其の流れて文辭の

人とならんことを戒め、其の齊つて聖賢の域に

至らんことを求め、他日復再び大道を論ぜんこ

と欲す。潛溪が孝孺に對する 稱許も甚だ至

り、親切も深く徹するを見るに足るものあり。

嗚呼、老先生、孰か好學生を愛せざらん。好學生、

孰か老先生を慕はざらん。孝孺は其當年丁巳、

ふが如しとは夫子みづから道ふなりと云ひ、程夫子、綱鑑自任、聖人の道を傳ふる者、是の如くなる可からざる也、と云ひ、晦庵の言を難じては、朱子の癡語と云ひ、惟私意を逞しくして以て佛を誣る、と云ひ、朱子も亦怪なり、と云ひ、晦庵此の如くに心を用ゐば、市井の間の小人の争ひて販賣する者の所爲と何を以てか異ならんや、と云ひ、先賢大儒、世の尊信崇敬するところの者を愚弄嘲笑すること太だ過ぎ、其の口氣甚だ憎む可し。是れ蓋し其姉の納れず、其友の見ざるに至れる所以ならずんばあらず。道衍の言を考ふるに、大槩禪宗に依り、楞伽、楞嚴、圓覺、法華、華嚴等の經に據つて、程朱の排佛の説の非理無實なるを論するに過ぎず。然れども程朱の學、一世の士君子の奉するところたる日に於て、抗争反撃の辯を逞しくす。書に公にさるゝの時、道衍既に七十八歳、道の爲にすと曰ふと雖も、亦争を好むといふべし。此も亦道衍が莽々蕩々の氣の、已む能はずして然るもの耶、非耶。

道衍は是の如きの人なり、而して猶卓犖郎を容るゝ能はず、之を敵さんとするの帝をして之を殺さしむるに至る。素より相善からざるの私ありしに因るとは云へ、又實に卓の才の大にし

て器の偉なるを忌みたるにあらずんばあらず。道衍の忌むところとなる、卓惟恭もまた雄傑の士といふべし。

道衍の卓犖に對する、衍の詩句を假りて之を評すれば、道衍量何ぞ隘きやと云ふ可きなり。然るに道衍の方正學に對するは則ち大に異なる。方正學の燕王に於けるは、實に相容れざるものあり。燕王の師を興すや、君側の小人を掃はんとするを名として、其の目して以て事を構へ親を破り、天下を誤るとなせる者は、齊黃練方の四人なりき。齊は齊泰なり、黃は黃子澄なり、練は練子寧なり、而して方は即ち方正學なり。燕王にして功の成るや、もとより此四人を得て甘心せんとす。道衍は王の心腹なり、初よりこれを知らざるにあらず。然るに燕王の北平を發するに當り、道衍これを郊に送り、跪いて密に啓して曰く、臣願はくは託する所有らんとす。王何ぞと問ふ。衍曰く、南に方孝孺あり、學行あるを以て聞ゆ、王の旗城下に進むの日、彼必ず降らざらんも、幸に之を殺したまふ勿れ、之を殺したまへば則ち天下の讀書の種子絶えんと。燕王これを首肯す。道衍の卓犖に於ける、私情の憎嫉ありて、方孝孺に於ける、私情の愛好あるか、何ぞ其の二者に對するの厚薄あるや。

孝孺は宋濂の門下の巨珠にして、道衍と宋濂とは蓋し文字の交あり。道衍の少きや、學か好み詩を工にして、濂の推奨するところとなる。道衍豈孝孺が濂の愛重するところの弟子たるを以て深く知るところありて庇護するか、或は又孝孺の文章學術、一世の仰慕するところたるを以て、之を殺すは燕王の盛徳を傷り、天下の批議を惹く所以なるを慮りて憚るか、將又眞に天下讀書の種子の絶えんことを懼るか、抑亦孝孺の嚴厲の操履、燕王の剛邁の氣象、二者相遇は、氷塊の鐵塊と相擊ち、驚王と龍王との相闘ふが如き凄慘狠毒の光景を生ぜんことを想察して預め之を防遏せんとせるか、今皆確知する能はざるなり。

方孝孺は如何なる人ぞや、孝孺字は希直、一字は希古、寧海の人。父克勤は濟寧の知府たり。治を爲すに徳を本とし、心を苦めて民の爲にす。田野を開き、學校を興し、勤儉身を持し、敦厚人を待つ。かつて盛夏に當つて濟寧の守將、民を督して城を築かしむ。克勤曰く、民今耕耘暇あらず、何ぞ又畚鍤に堪へんと。中書省に請ひて役を罷むるを得たり。是より先き久しく旱せしが、役の罷むに及んで甘雨大に至りしかば、濟寧の民歌つて曰く、

志と爲す。此を利祿の蠶と謂ふ。耳割し口銜し、色を麗り辭を淫にし、聖賢に非ずして、而も自立し、果敢大言して、以て人に高ぶり、而して理の是非を顧みず。是を名を務むるの蠶といふ。釣據して説を成し、上古に合するを務め、先儒を毀訾し、以謂らく我に及ぶ莫き也と、更に異議を爲して、以て學者を惑はす。是を調詰の蠶といふ。道德の旨を知らず、雕飾綴緝して、以て新奇となし、齒を針し舌を刺して、以て簡古と爲し、世に於て加益するところ無し。是を文辭の蠶といふ。四者交々作りて、聖人の學亡ぶ。必ずや諸を身に本づけ、諸を政教に見はし、以て物を成す可き者は、其れ惟聖人の學乎。聖道を去つて而して循はず、而して機蠶にこれ歸す。甚しい哉惑へるや、と。孝孺の此言に照せば、鄉曉の傳ふところ、實に虚しからざる也。四箴の序の中の語に曰く、天に合して人に合せず、道に同じうして時に同じうせずと。孝孺の此言に照せば、既に其の卓然として自立し、信するところあり、安んずるところあり、潛溪先生が謂へる所の、特り立つて千古を睨み、萬象昭して昏き無しの境に入れるを看るべし。又其の克畏の箴を讀めば、あゝ皇いなる上帝、衷を人に降す、といへるより、其

の方に昏きに當つてや、恬として宜しく然るべしと謂ふも、中夜靜かに思へば夫れ豈吾が天ならんや、迺ち齋つて而して悲み、丞やかに前轍を改む、と云ひ、一念の微なるも、鬼神降監す、安しとする所に安んずる勿れ、嗜む所を嗜む勿れ、といひ、表裏交々修めて、本末一致せんとといへる如き、恰も神ヲ奉ぜざる者の如き思想感情の漂流せるを見る。父克勤の、其の爲せるところ、夜は則ち天に白したるに合せざるれば、孝孺が善良の父、方正の師、孔孟の正大純粹の教の徳光惠風に浸潤して、眞に心胸の深處よりして道を體し徳を成すの人たらんことを願へるの人たるを看るべき也。

孝孺既に文獻を末視し、孔孟の學を爲し、伊周の事に任ぜんとす。然れども其の文章亦おのづから佳、前人評して曰く、醇龐博朗、沛乎として餘有り、勃乎として樂々莫しと。又曰く、醇深雄邁と。其の一大文豪たる、世もとより定評あり、動かす可からざるなり。詩は蓋し其の心を用ゐるところにあらずと雖も、亦おのづから觀る可し。其の王仲綬感懷の韻に於ける詩の末に句あり、曰く

壯士 千載の心、
豈愛へんや 食と衣とを。

由來 海に浮ばんの志、
是れ 軒冕の姿にあらず。
人生 道を聞くは尙ぶ、
富貴 復笑爲るものぞ。

賢にして有り 陋巷の樂、
聖にして有り 西山の饑。
頤を榮る 失ふところ多し、
苦節 未だ非とす可からず。

道衍は豪傑なり、孝孺は君子なり。逃虚子は歌つて曰く、苦節貞くすべからずと。范志齊は歌つて曰く、苦節未だ非とす可からずと。逃虚子は吟じて曰く、伯夷最何ぞ隘きと。范志齊は吟じて曰く、聖にして有り西山の饑と。孝孺又其の濠陽を過ぎるの詩の中の句に吟じて曰く、之に因つて首陽を念ふ。西顧すれば清風生ずと。又乙丑中秋後二日兄に寄する詩の句に曰く、苦節伯夷を慕ふと。人異なれば情異なり、情異なれば詩異なり。道衍は僧にして、饒論又何ぞ數へんといひて、快樂主義者の如く、希直は俗にして、飲の簾に、酒の患たる、醒者をして荒み、莊者をして狂し、貴者をして賤しく、存者をして亡ばしむ、といひ、酒卮の銘には、親を浴ぐし樂を和するも、恆に斯に於てず、職を造り敗をおこすも、恆に斯に於てず、其惡に

經年執つて浦陽に潛溪に就きぬ。從學四年、業大に進んで、潛溪門下の知名の英俊、皆其の下に出で、先望胡翰も蘇伯衡も亦自ら如かすと謂ふに至れり。洪武十三年の秋、孝孺が歸省するに及び、潛溪が之を送る五十四韻の長詩あり。其引の中に記して曰く、細らかに其の進修の功を占ふに、日々に異なるありて、月々に同じからず、僅に四春秋を越ゆるのみにして而して英發光著や斯の如し、後四春秋ならしめば、則ち其の至るところ又何なるを知らず、近代を以て之を言へば、歐陽少卿、蘇長公の輩は、姑らく置きて論ぜず、自餘の諸子、之と文藝の場にく角逐せば、孰か後となり孰か先となるを知らざる也。今此説を爲す、人必ず予の過情を疑はんとす。後二十餘年にして當に其の知言にして、生を許す者の過に非ざるを信すべき也。然りと雖も予の生に許すところの者、寧ぞ獨り文のみならんやと。又曰く、予深く其の去るを惜み、爲に是詩を賦す、既に其の素行の善を揚げ、復易むるに遠大の樂を以てすと。潛溪の孝孺を愛重し獎勵すること、至れり盡せりといふべし。其時や辭を行る自在にして、意を立つる莊重、孝孺に期するに大成を以てし、必ず經世濟民の眞儒とならんことを欲す。章末に句有り、曰く、

生は乃ち 周の容刀。
生は乃ち 魯の興堵。
道眞なれば 器乃ち貴し
愛ぞ須めん 空言を用ゐるを
拳々として 務めて踐形し、
負く勿れ 七尺の身に。
敬義 以て衣と爲し、
忠信 以て冠と爲し、
慈仁 以て佩と爲し、
廉知 以て鑒と爲し、
特り立つて 千古を睨まば、
萬象 昭らかにして昏き無からむ。
此意 竟に誰か知らん、
爾が爲に 言諄々たり。
徒に 強聒ふと謂ふ勿れ、
一一 宜しく紳に書すべし。
孝孺後に至りて此詩を錄して人に視すの時、書して曰く、前輩後學を勉めしむ、愷々の意、特り文辭のみに在らず、望むらくは相與に之を勉めむと。臨海の林佑、葉見泰等、潛溪の詩に跋して、又各宋太史の期望に酬いんことを孝孺に求む、孝孺は果して潛溪に負かざりき。

孝孺の集は、其人天子の惡むところ、一世の諱むところとなりしを以て、當時絶滅に歸し、歿後六十年にして臨海の趙洪が梓に附せしより、復漸く世に傳はるを得たり。今蘇志齋集を執つて之を讀むに、蜀王が所謂正學先生の精神面目奕々とし、儼存するを覺ゆ。其の幼儀雜箴二十首を讀めば、坐、立、行、寢より、言、動、飲、食等に至る、皆道に違はざらんことを欲して、
●して實踐躬行底より徳を成さんとするの意、看取すべし。其雜銘を讀めば、冠、帶、衣、屨より、簪、鞍、轡、車等に至る、各物一々に湯の日新の銘に則りて、語を下し文を爲す。反省修養の意、看取すべし。雜箴三十八章、學箴九首、家人箴十五首、宗儀九首等を讀めば、希直の學を爲すや空言を排し、實踐を尊み、體驗心證して、而して聖賢の域に躋らんとするを看取すべし。明史に稱す、孝孺は文藝を末視し、恆に王道を明らかにし太平を致すを以て己が任と爲すとは、是鄭曉の方先生傳に本づく、眞に然り。孝孺の志すところの遠大にして、顧ふところの眞摯なる、人をして感奮せしむるものあり。雜箴の第四章に曰く、學術の微なるは、四箴之を害すればなり。箴言を文り、近事か據り、時勢を窺伺し、便に趨り隙に投じ、富貴を以て

仇家の爲に累せられて孝孺の闕下に械送せられし時、太祖其名を記したまひ居て、殊に釋されしことあるに徴しても明らかなり。孝孺の學徳漸く高くて、太祖の負十一子劉王林、孝孺を聘して世子の傅となし、尊ぶに殊禮を以てす。王の孝孺に賜ふの書に、余一日見ざれば三秋の如き有りの語あり。又王が孝孺を送るの詩に、士を問ず孔だ多し。我は希直を敬すの句あり。又其一章に

謹にして以て
卑うして以て
みつから牧し、
みつから持す。

雍容 儒雅

鸞鳳の儀あり。

とあり、又其の賜詩三首の一に

文章 金石を奏し、
矜佩 儀刑を視る。

應に世 三輔に遊ぶべし、
焉んぞ能く 一經に困せん。

の句あり。王の優遇知る可くして、孝孺の恩に答ふるに道な以てせるも、亦知るべし。王孝孺の叢書の廬に題して正學といふ。孝孺はみづから遜志齋といふ。人の正學先生といふものは、實に劉王の賜題に因るなり。

太祖崩じ、皇太孫立つに至つて、廷臣交々孝

孺を薦む。乃ち召されて翰林に入る。德望素より隆んにして、一時の倚重するところとなり、政治より學問に及ぶまで、帝の諮詢承くること殆ど間無く、翌二年文學博士となる。燕王兵を興ぐるに及び、日に召されて謀議に參し、詔檄皆孝孺の手に出づ。三年より四年に至り、孝孺甚だ煎心焦慮すと雖も、身武臣にあらず、皇師數々屈して、燕兵遂に城下に到る。金川門守を失ひて、帝みづから大内を燒きたまふに當り、孝孺伍雲等の爲に執へられて獄に下さる。

燕王 志を得て、今既に帝たり。素より孝孺の才を知り、又道術の言を聴く。乃ち孝孺を赦して之を用ゐんと欲し、待つに不死ん以てす。孝孺屈せず。よつて之を獄に繋ぎ、孝孺の弟子廖廖廖をして、利害を以て説かしむ。二人は德慶侯廖權の子なり。孝孺怒つて曰く、汝等予に従つて幾年の書を讀み、選つて義の何たるを知らざるやと。二人説く能はずして已む。帝猶孝孺を用ゐんと欲し、一日に諭を下すこと再三に及ぶ。然も終に従はず。帝即位の詔を草せんと欲す。衆臣皆孝孺を舉ぐ。乃ち召して獄より出でしむ。孝孺喪服して入り、慟哭して悲み、聲殿陛に徹す。帝みづから榻を降りて勞らひて曰く、先生勞苦する勿れ。我周公の成王

を輔けしに法らんと欲するのみと。孝孺曰く、成王いづくにか在ると。帝曰く、渠みづから焚死すと。孝孺曰く、成王即存せざんば、何ぞ成王の子か立てたまはざるやと。帝曰く、國は長君に頼る。孝孺曰く、何ぞ成王の弟を立てたまはざるや。帝曰く、これ朕が家事なり、先生はなはだ勞苦する勿れと。左右をして筆札を授けしめて、おもむるに詔して曰く、天下に詔する、先生にあらすんば不可なりと。孝孺大に數字を批して、筆地に擲つて、又大哭し、且罵り且哭して曰く、死せんには即ち死せんのみ、詔は斷じて草す可からずと。帝勃然として聲を大にして曰く、汝いづくんで能く遇に死するを得んや、たとへ死するとも、獨り九族を顧みざるやと。孝孺いよく奮つて曰く、すなはち十族なるも我か奈何にせんやと。聲甚だ厲し、帝も雄辯剛猛なり、是に於て大に怒つて、刀を以て、孝孺の口を抉らしめて、復之を獄に繋ぐ。

孝孺の宋濂溪に知らるるや、蓋し其の經統三篇と後正統論とを以てす。四篇の文、雄大にして莊嚴、其大旨、義理の正に據つて、情勢の歸を斥け、王道を尙び、霸略を卑め、天下を全有して、海内に號令する者と雖も、其道に於てせ

懲り、以て善に趨り、其儀を慎むを尙ぶ、といへり。逃虚子は佛を奉じて、而も順世外道の如く、遜志齋は儒を尊んで、而も淨行者の如し。嗚呼、何ぞ其の奇なるや。然も遜志齋も飲を解せざるにあらず。其の上巳南樓に登るの詩に曰く、

昔時 喜んで酒を飲み、
白を 舉げて 深きを辭せざりき。

茲に中歳に及んでよりこのかた、
已に復 人の斟むを畏る。

後生 ゆるがせにする所多きも、
豈識らんや 老の會臨するを。

志士は 景光を惜む、
舊に登れば 已に峯を知る。

毎に聞く 前世の事、
頗る見る 古人の心。

逝く者 まことに息ます、
將來 誰か今に嗣がむ。

百年 當に成る有るべし。
汎波 寧ぞ飲むに足らんや。

毎に憐む 伯牙の陋にして、
鍾 死して 其琴を破れるを。

自ら得るあらば 苟に傳ふるに堪へむ、
何ぞ必ずしも 知音を求めんや。

俯しては觀る 水中の鯈、
仰いでば觀る 雲際の禽。

眞樂 吾 隠さず、
欣然として 煩悩を捨てず。

前半は屈折、歡樂、學業の荒廢を致さんことを嘆じ、後半は一轉して、眞樂の自得にありて

外に待つ無きないふ。伯牙の陋として破琴を憐み、莊子を引きて不隱を譽ぐ。それ外より入る

者は、中に主たる無し、門より入る者は家珍にあらず。白を舉げて樂となす、何ぞ是れ至樂ならん。

遜志齋の詩を逃虚子の詩に比するに、風格お

のづから異にして、精神竄に殊なり。意氣の俊邁なるに至つては、互に相遜らずと雖も、正學

先生の詩は竟に是れ正學先生の詩にして、其の歸趣を考ふるに、毎に正々堂々の大道に合せん

ことな欲し、絶えて欲側詭設の言を爲さず、放逸曠達の態無し。勉學の詩二十四章の如きは、

蓋し壯時の作と雖も、其の本色なり。談詩五首の二に曰く、

世を舉つて 皆宗とす 李杜の詩を。
知らず 李杜の 更に誰を宗とせるを。

能く 風雅 無窮の意を探らば、
始めて是れ 乾坤 絶妙の詞ならん。

第二に曰く。

道德を 發揮して 乃ち文を成す、
枝葉 何を曾て 本根を離れん。

末俗 工を競ふ 繁縟の體、
千秋の精意 誰と與に論ぜん。

是れ正學先生の詩に於けるの見なり。華を斥け實を尙び、雅を愛し淫を惡む。極端の様詩詞の人の、綺麗自ら喜び、藻繪自ら憐ひ、而して其の本旨正道を逸し邪路に趨るを忘るゝが如きは、希直の斷じて取らざるところなり。希直

の父恩庵、師潛溪の見も、亦大略是の如しと雖も、希直の性の方正端嚴を好むや、おのづから

是の如くならざるを得ざるものあり、希直決して自ら欺かざる也。

孝孺の父は洪武九年を以て歿し、師は同十三年を以て歿す。洪武十五年英泥の亂を以て太祖

に見ゆ。太祖其の舉止端嚴なるを喜びて、皇孫に謂つて曰く、此莊士、當に其才を老いしめて

以て汝を輔けしめんと、四十にして又薦められて至る。太祖曰く、今孝孺を用ゐるの時に非

すと。太祖が孝孺を器重して、而も棄用せざりしは何ぞ。後人こゝに於て慮ヲ致すもの多し。

然れども此は強ひて解す可からず。太祖が孝孺を愛重せしは、前後召見の間に於て、たま／＼

俞氏を冒して、子孫繁衍し、萬曆三十七年には二百餘丁となりしこと、松江府の儒學の申文に見え、復姓を許されて、方氏また榮ゆるに至れり。廖氏二子及び門人王徐等拾骸の功また空しからず、萬曆に至つて墓碑祠堂成り、祭田及び嘯風亭等備はり、松江に求忠書院成るに及びり。世に在る正學先生の如くにして、豈後無く祠無くして泯然として滅せんや。

節に死し族を夷せらるゝの事、もと悲壯なり。是を以て後の正學先生の墓を過ぎる者、愴然として感じ、泫然として泣かざる能はず。乃ち祭帛慷慨の時、累篇積章して甚だ多きを致す。衛承芳が古風一首、中に句あり、曰く、

古來 馬を叩く者、

采薇 逸民を稱す。

明の徳 詎ぞ周に遜らん。

乃ち其の仁を成す無からんや。

と。劉秉忠を慕ふの人道衍は其の功を成して秉忠の如くなるを得、伯夷を慕ふの人方希直は其の節を成して伯夷に比せらるゝに至る。王思任二律の一に句あり、曰く、

十族 魂の 暗き月に依る有り、

九原 愧の 青燈に付する無し。

と。李維楨五律六首の中に句あり、曰く、

國破れて 心仍在り、
身危うして 舌 尙存す。

又句あり、曰く、

氣は壯なり 河山の色、
神は留まる 宇宙の身。

燕王今は燕王にあらず、僞として九五の位に在り、明年を以て改めて永樂元年と爲さんとす。而して建文皇帝は如何。燕王の言に曰く、

予始め難に遇ふ、已むを得ずして兵を以て禍を救ひ、誓つて奸惡を除き、宗社を安んじ、周公の勳を庶幾せんとす。意はざりき少主が心を亮とせず、みづから天に絶てりと。建文皇帝果して崩ぜりや否や。明史には記す、帝終る所を知らずと。又記す、或は云ふ帝地道より出で亡ぐと。又記す、瀋陽巴蜀の間、相傳ふ帝の儼たる時の往來の跡ありと。これ言を二三にするものなり。帝果して火に赴いて死せるか、抑又髪を難いで逃れたるか。明史卷一百四十三、牛景先の傳の後に、忠賢奇秘錄等の事を記して、

錄は盡し晚出附會、信するに足らず、の語を以て結び、暗に建文帝出亡、諸臣庇護の事を否定するの口氣あり。然れども卷三百四、鄭和傳に

は、成祖、惠帝の海外に亡げたるを疑ひ、之を蹤跡せんと欲し、且つ兵を異域に輝かし、中國の富強を示さんことを欲すと記せり。鄭和の始めて西洋に航せしは、燕王志を得てよりの第四年、即ち永樂三年なり。永樂三年にして猶疑ふあるは何ぞや。又給事中胡濙と内侍朱祥とが、永樂中に荒微を遍りして數年に及びしは、卷二百九十九に見ゆ。仙人張三丰を索めんとすといふか其名とすと雖も、山谷に仙を索めしむるが如き、永樂帝の聰明勇決にして豈眞に其事あらんや。得んと欲するところの者の、眞仙にあらずして、別に存するあること、知る可き也。

蓋し此時に當つて、元の餘孽猶所在に存し、漠北は論無く、西陲南裔、亦盡くは明の化に順はす。野火焼けど盡きず、春風吹いて亦生ぜんとするの勢あり。且つや天一豪傑は鐵門關邊の碣石に生じて、カザン (Kazan) 統されて後の大帝國を治めしむ。これ帖木兒 (Timur) と爲す。西人の所謂タメルラン也。帖木兒サマルカンドに據り、四方を攻略して威を振ふ甚だ大に、明に對しては貢を納ると雖も、太祖の末年に使したる傅安を留めて歸らしめず、之を要して領内諸國を展遊すること數萬里ならしめ、既に印度を掠めて、テリロを取り、波斯を襲

ざる者は、日して、正統の君主とすべからずとするに在り。秦や隋や王莽や、晋宋・齊梁や、則天や符堅や、此皆これをして天下に有せしむる數百年に臨ゆと雖も、正統とす可からずと爲す。孝孺の言に曰く、君たるに貴ぶ所の者は、豈其の天下を有するを謂はんやと。又曰く、天下を有して而も正統に比す可からざる者三、篡臣也、賊后也、夷狄也と。孝孺當後に書して曰く、予が此文を爲りてより、未だ嘗て出して以て人に示さず。人の此言を聞く者、咸予を嗤笑して以て狂と爲し、或は陰に之を誑語す。其の然りと謂ふ者は、獨り予が師太史公と、金華の胡公翰とのみと。夫れ正統變統の論、もとより史の爲にして發すと雖も、君たるに貴ぶ所の者は其の天下を有するを謂はんやと爲す、斯の如きの論を爲せるの後二十餘年にして、一朝篡奪の君に而し、其の天下に諸ぐるの詔を草せんことを逼る。嗚呼、運命遭逢も亦奇なりといふべし。孝孺又嘗て筆の銘を爲る。曰く、

妄に動けば 悔有り、
道は 悖る可からず。
汝 才ありと謂ふ勿れ、
後 萬世あり。
又嘗て紙の銘を爲る。曰く、

之を以て言を立つ、其の道を載せんを欲す。
之を以て事を記す、其の民を利せんを欲す。
之を以て教を施す、其の義ならんを欲す。
之を以て法を制す、其の仁ならんを欲す。
此等の文、蓋し少時の爲る所なり。嗚呼、運命遭逢、又何ぞ奇なるや、二十餘年の後にして、筆紙前に在り、これに臨みて詔を草すれば、富貴我を運つこと久し、これに臨みて命を拒まば、刀鋸我に加はんこと疾し。嗚呼、正學先生、こゝに於て、成王いづくに在りやと論じ、こゝに於て筆を地に擲つて哭す、父に負かす、師に負かす、天に合して人に合せず、道に同じうして時に同じうせず、藥々烈々として、屈せず拘まず、苦節伯夷を慕はんとなす。壯なる哉。

帝、孝孺の一族を收め、一人を收むる毎に輒ち孝孺に示す。孝孺顧みず。乃ち之を殺す。孝孺の妻鄭氏と諸子とは、皆先づ經死す。二女逃へられて誰か過ぐる時、相與に橋より投じて死す。季弟孝友また逮へられて將に戮せられんとす。孝孺之を日して涙下りければ、流石は正學の弟なりけり。

阿兄、何ぞ必ずしも 涙滿々たらむ、
義を取り 仁を成す 此間に在り、
華表、柱頭、千歳の後、
旅魂、舊に依りて 家山に到らん。
と吟じて戮せられぬ。母族休養清等、夷族鄭鳳吉等九族既に戮せられて、門生等まで、方氏の族として罪なれば、坐死する者およそ八百七十三人、海濱配流さるゝもの數ふ可からず、孝孺は終に聚寶門外に磔殺せられぬ。孝孺慨然、絶命の詞を爲りて戮に就く。時に年四十六、詞に曰く、

天降亂離、予孰知其由。
奸臣得計、分謀罔用、猶。
忠臣發憤、血淚交流。
以此殉君、君兮抑又何求。
嗚呼哀哉、今庶不我尤。
廖應龍は孝孺の遺骸を拾ひて聚寶門外の山上に葬りしが、二人も亦收められて戮せられ、同じ門人林嘉猷は、かつて燕王父子の間に反間の計を爲したるもの、此亦戮せられぬ。

方氏一族是の如くにして殆ど絶えしが、孝孺の幼子德宗、時に市めて九歲、寧海縣の典史魏公樞の置するところとなりて、死せざるを得、後孝孺の門人俞公允の養ふところとなり、遂に

度牒は人の家を出て僧となるとき官の可して認むる牒にて、これ無ければ僧と啼き身たるなり。三張の度牒、一には應文の名の録され、一には應能の名あり、一には應賢の名あり。袈裟、僧帽、鞋、剃刀、一々俱に備はりて、銀十錠添はり居ぬ。篋の内に朱書あり、之を讀むに、應文は東門より出で、餘は水閣御溝よりして行き、薄暮にして神樂觀の西房に會せよとあり。衆臣驚き職きて面々相看るばかり、しばらくは言ふ者も無し。やゝありて天子、數なり、と仰あり。帝の諱は允熈、應文の法號、おのづから相應するが如し。且つ明の基を開きし太祖高皇帝はもと僧にましましき。後にこそ天下の主ともなり玉ひたれ、元の順宗の至正四年年十七におはしける時は、疫病大に行はれて、御父御母兄上幼き弟皆亡せたまへるに、家貧にして棺槨の供だに爲したまふ能はず、藁葬といふ悲しくも悲しき事を取行はせ玉はんとて、仲の兄と二人してみづから遺骸を尋きて山麓に至りたまへるに、纒絶えて又如何とす能はず、仲の兄馳還つて纒を取りしといふ談だに遺りぬ。其の仲の兄も亦亡せられたれば、孤身依るところなく、遂に臯覺寺に入りて僧と爲り、食を得んが爲に合邇に至り、光岡汝穎の諸州に托鉢修行

し、三歳の間に草鞋竹笠、雲き雲水の身を過したまへりといふ。帝は太祖の皇孫と生れさせたまひて、金殿玉樓に人となりたまひたれども、如是因、如是緣、今また袈裟念珠の人たらんとす。不思議といふも餘あり。程濟即ち御意に従ひて祝髮しまゐらす。萬乘の君主金冠を墜し、剃刀の冷光翠髪を薙ぐ。悲涕何ぞ能く堪へむや。吳王の教授楊應能は、臣が名度牒に應ず、願はくは祝髮して隨ひまつらんと白す。監察御史葉布賢、臣が名は賢、應賢たるべきこと疑無しと白す。各髪を削り衣も易へて膝を披く。殿に在りしもの凡そ五六十人、痛哭して地に倒れ、俱に矢つて隨ひまつらんとをなす。帝、人多ければ得失を生ずる無きを得ず、とて應いて去らしめたまふ。御史會鳳詔、願はくは死を以て陛下に報いまつらんと云ひて退きつ、後果して燕王の召に應ぜずして自殺しぬ。諸臣大に慟きて漸く去り、帝は東門に至らせたまふ。從ふ者實に九人なり。至れば一舟の岸に在るあり、誰ぞと見るに神樂觀の道士玉昇にして、帝を見て叩頭して萬歳を稱へ、嗚呼、來らせたまへるよ、臣昨夜の夢に高皇帝の命を蒙りて、此にまゐり居たり、と申す。乃ち舟に乗じて太平門に至りたまふ。昇尊きまゐらせて觀に至れ

ば、恰も已に薄暮なりけり。陸路よりして楊應能、葉希賢等十三人同じく至る。合二十二人、兵部侍郎廖平、刑部侍郎金焦、編修趙泰、檢討程亨、按察使王良、參政蔡運、刑部郎中梁田玉、中書舍人梁良玉、梁中節、宋和、郭節、刑部司務馮灌、鍾撫、牛景先、王資、劉仲、翰林侍詔鄭洽、欽天監正王之臣、太監周恕、徐王府賓輔史彬と、楊應能、葉希賢、程濟となり。帝、今後はたゞ師弟を以て稱し、必ずしも主臣の禮に拘らざるべしと宣ふ。諸臣泣いて諾す。廖平こゝに於て人々に謂つて曰く、諸人の隨はんことを願ふは、固よりなり、但し隨行の者の多きは功無くして害あり、家室の累無くして、脊力の擧ぎ衛るに足る者、多きも五人に過ぎざるを可とせん、餘は俱に遂に應援を爲さば、可ならんと。帝も然るべしと爲したまふ。應能、應賢の二人は比丘と稱し、程濟は道人と稱して、常に左右に侍し、馮灌は馬二子と稱し、郭節は雪菴と稱し、宋和は雲門僧と稱し、趙天泰は衣葛翁と稱し、王之臣は補鍋を以て生計を爲さんとして老婦鍋と稱し、牛景先は東湖樵夫と稱し、各々姓を埋め名を變じて陰陽に隠れせんとす。帝は潭南に往きて西平侯に依らんとしたまふ。史彬これを危ぶみて止め、臣等の中の、家いさ

ひ、土耳其を征し、心ひそかに支那を窺ひ、四百餘州を席巻して、大元の遺業を復せんとするあり。永樂帝の燕王たるや、塞北に出征して、よく胡情を知る。部下の諸將もまた夷事に通ずる者多し。王の南する幕中に希騎を藏す。凡そ此等の事に徴して、永樂帝の塞外の狀勢を曉れるを知るべし。若し建文帝にして走つて城外に出で、幅強にして自大なる者に依るあらば、外敵は中國を窺ふの便を得て、義兵は邦内に起る可く、重耳一たび逃れて却つて勢を得るが如きの事あらんとす。是れ永樂帝の懼れ憂ふところたらすんばあらず。鄭和の艦を泛めて遠航し、胡濙の仙を索めて遍歴せる、密旨を衛むところあるが如し。而して又鄭は實に威を海外に示さんとし、胡は實に異を幽境に詢へるや論無し。善く射る者は雁影を重ならしめて而して射、善く謀る者は機會を復ならしめて而して謀る。一箭二雁を獲ずと雖も、一雁を失はず、一計双功を收めずと雖も、一功を得る有り。永樂帝の智、豈敢て建文を索むるを名として使を發するを爲さんや。況んや又鄭和は宦官にして、胡濙と偕にせるの朱祥も内侍たるをや。臆意察す可きあるなり。

鄭和は王景弘等と共に出て使しぬ。和の出づるや、帝、袁柳莊の子の袁忠徹をして相せしむ。忠徹曰く可なりと。和の率ゐる所の將卒二萬七千八百餘人、船長を四十四丈、廣を十八丈の者、六十二、蘇州劉家河より海に泛びて福建に至り、福建五虎門より帆を揚げて海に入る。閏三年にして、五年九月還る。建文帝の事、得る有る無し。而れども諸蕃國の使者和に隨つて朝見し、各々其方物を貢す。和又三佛齊國の酋長を俘として獻す。帝大に悦ぶ。是より建文の事に關せず、専ら國威を揚げしめんとして、再三和を出す。和の使を奉する、前後七回、其の間、或は錫蘭山(Ceylon)の王阿烈苦奈兒と戰つて之を擒にして獻じ、或は蘇門答刺(Sumatra)の前の前の僞王の子蘇幹刺と戰つて、其の妻子を併せて俘として獻じ、大に南西諸國に明の威を揚げ、遠く勿魯漢斯(Ho-nu-sa)ヘルシヤ(Malin)アフリカ?祖法兒(Denit-H-Ara-Bia)天方(Baitulah)House of Godの譯、メッカ、アラビヤ)等に至れり。明史外國傳西南方のや詳なるは、鄭和に隨行したる鞏珍の著はせる西洋華國志を採りたるに本づく歟といふ。

胡濙等もまた得る無くして已みぬ。然も張三手を索めしこと、天下の知る所たり。乃ち三丰の居りし所の武當、大和山に觀み營み、夫役する三十萬、實を費す百萬、工部侍郎郭璉、隆平侯張信等、事に當りしといふ。三丰嘗て武當の諸巖壑に遊び、此山異日必ず大に興らんといいしもの、實となつてこゝに現じたる也。

建文帝は如何にせしぞや。傳へて曰く、金川門の守を失ふや、帝自殺せんとす。翰林院編修程濟曰す、出亡したまはんには如かじと。少監王鉞跪いて進みて曰す。昔高帝升遐したまふ時、遺篋あり、大難に臨まば發くべしと宣ひぬ。謹んで奉先殿の左に收め奉れりと。羣臣口々に、疾く出すべしといふ。宦者忽にして一の紅なる篋を昇き來りぬ。視れば四圍は固むるに鐵を以てし、二鎖も亦鐵を灌ぎありて開くべくも無し。帝これを見て大に慟きたまひ、今はとて火を大内に放たせたまふ。皇后は火に赴きて死したまひぬ。此時程濟は辛くも篋を碎き得て、篋中の物を取出す。出でたる物は抑何ぞ。釋門の人ならで誰かは要すべき、大内などには有るべくも無き廢牒といふもの三張ありたり。

復進せざらん、貢を求めば帝みづから來れ
と乃ち使を發して兵を擧し、百八十萬を得、
將に發せんとしたりと。西暦千三百九十八年
は、タメルラン西帛波斯を征したりしが、其冬
明の太祖及び埃及王の死を知りたりと也。帖木
兒が意を四方に用ゐたる知る可し。然らば則ち
燕王の兵を起ししより終に位に即くに至るの
事、タメルラン之を知る久し。建文二年(1400)
よりタメルランはオットマン帝國を攻めしが、
外に在る五年にして、永樂二年(1405)サマルカ
ンドに還りぬ。カスチリヤの使と、支那の使と
を引見したるは、即ち此歳にして、其の翌年直
に馬首を東にして、争亂の餘の支那に亂入せんと
したる也。永樂帝の此報を得るや、宋晟に敕し
て儆備せしむるのみならず、備へたるあること
知りぬ可し。宋晟は好將軍なり、平羌將軍西
寧侯たり。かつて御史ありて晟の自ら專にする
ことと効しけるに、帝聽かずして曰く、人に任
する專ならざれば功を成す能はず、況んや大將
は一邊を統制す、いづくんぞ能く文法に拘らん
と。又嘗て曰く、西北の邊務は、一に以て卿に
委ぬと。其の材武稱許せらるゝ是の如し。タメ
ルランの來んとするや、帝また別に虞るゝと
ころあり。蓋し燕の兵を擧ぐるに當つて、史之

を明記せずと雖も、韃靼の兵を借りて以て功を
成せること、蔚州を圍めるの時に徴して知る可
し。建文未だ死せず、從臣の中、道衍金忠の輩
の如き策士あつて、西北の胡兵を借るあらば、
天下の事知る可からざるなり。鄭和胡濙の出づ
るある、徒爾ならんや。建文の草廬の夢、永樂
の金殿の夢、其のいづれか安くして、いづれか
安からざりしや。試に之を問はんと欲する也。
幸にしてタメルランは、千四百〇五年、即永樂
三年二月の十七日、病んでオトラル(Orkney)に
死し、二雄相下らずして御國を争するの慘禍を
禹域の民に被らしむること無くして已みぬ。

四年應文は西平侯の家に至り、止まること旬
日、五月、庵を白龍山に結びぬ。五年冬、建文
帝、難に死せる諸人を祭り、みづから文を爲り
て之を哭したまふ。朝廷帝を索むること密なれ
ば、帝深く潛みて出です。此歳傳安朝に歸る。
安の胡地を歷游する數萬里、城外に留まる始と
二十年、著す所西遊隨覽詩あり。後の好事の者
の喜び讀むところとなる。タメルランの後の、哈
里(Hari)雄志無し。使が安に伴はしめ方物を貢
す。六年、白龍庵災あり、程濟暴り聳く。七

年、建文帝、善慶里に至り、襄陽に至り、瀋に
還る。朝廷密に帝を雲南貴州の間に索む。
八年春三月、工部侍郎嚴震安南に使用するの途
にして、忽ち建文帝に雲南に遇ふ。舊臣錦衣
にして、舊帝既に布納なり。震たゞ恐懼して落
涙止まらざるあるのみ。帝、我を奈何せんとい
るぞや、と問ひたまふ。震對へて、君は御心の
まよにおはせ、臣はみづから處する有らんと申
す。人生の悲しきに堪へず有りけん、其夜驛
亭にみづから縊れて死しぬ。夏帝白龍庵に病み
たまふ。東彬、程亨、郭仁たゞく至る。三人
留まる久しくして、帝これを遣りたまひ、今後
再び來る勿れ、我安居す、心づかひすなと仰
す。帝白龍庵を捨てたまふ。此歳永樂帝は去年
丘福を漠北に失へるを以て北京を發して胡地に
入り、本雅失里(Begherli)阿魯台(Alutai)等と
戦ひて勝ち、擒孤山、流流泉の二處に銘を勒し
て還りたまふ。
九年春、白龍庵帝司の毀つところとなる。夏
建文帝瀋陽鶴慶里に至り、大害に建つ。十年
楊應能卒し、帝命賢次いで卒す。帝因つて一弟
子に納れて應恩と名づけたまふ。十一年旬に至
りて還り、十二年易數を學びたまふ。此歳永樂
帝また塞外に出で、五刻を征したまふ。皇太孫

さか足りて、且夕に備ふべき者の許に錫を留め
たまひ、緩移動したまはゞ不可無かるべしと
白す。帝もこれを理ありとしまひて、廖平・
王良・鄭洽・郭節・王資・史彬・梁良・王の七
家を、かばるゝ主とせんことに定まりぬ。翌
日舟を得て帝を史彬の家に奉ぜんとす。同乗す
るもの八人、程・葉・楊・牛・馮・宋・史なり、
餘は皆涙を揮つて別れあらず。帝は道を漂陽
に取りて、吳江の黃溪の史彬の家に至りたまふ
に、月の終を以て諸臣また漸く相聚まりて伺候
す。帝命じて各々歸省せしめたまふ。燕王位に
即きて、諸官員の職を抛つて遁去りし者の官籍
を削る。吳江の邑丞・章・德・蘇州府の命を以て
史彬が家に至り、官を奪ひ、且曰く、聞く君が
家建文皇帝をかしづくと。彬驚いて曰く、全く
其事無しと。次の日、帝、楊葉程の三人と共に
吳江を出で、舟に上りて京口に至り、六合を過
ぎ、陸路襄陽に至り、廖平が家に至りたまふに、
其後を訊ふ者ありければ、遂に意を決して雲南
に入りたまふ。

永樂元年、帝雲南の永嘉寺に留まりたまふ。
二年、雲南を出で、重慶より襄陽に抵り、また

東して、史彬の家に至りたまふ。留まりたまふ
こと三日、杭州・天台・雁蕩の遊をなして、又
雲南に歸りたまふ。

三年、重慶の大竹善慶里に至りたまふ。此年
若くは前年の事なるべし、帝金陵の諸臣慘死の
事を聞きたまひ、法然として泣きて曰く、我罪
を神明に獲たり、諸人皆我が爲にする也と、
建文帝は今は僧應文たり。心の中はいざ知ら
ず、袈裟に枯木の身を包みて、山水に白雲の跡
を逐ひ、或は草庵、或は茅店に、閑坐し漫遊し
たまへるが、靈王今は皇帝なり、萬乗の尊に居
りて、一身の安き無し。永樂元年には、建文の
兵、遼東を犯し、永平に寇し、二年には懿親と
瓦剌(Corits、西部蒙古)との相和せざる爲
に、邊患無しと雖も、三年には建文の塞下の伺
ふあり。將に此年はタメルラン大兵が起して、
道を別失八里(Catalin)に取り、甘肅よりして
亂入せんとするの事あり。甘肅は京を距る遠し
と雖も、タメルランの勇威猛勢は、太祖の時よ
りして知るところたり。永樂帝の憂慮察す可
し。此事明史には其の外國傳に、朝廷、帖木兒
の道を別失八里に假りて兵を率ゐて東するを聞
き、甘肅總兵官宋晟に敕して敵備せしむ、と
あるに過ぎず。然れども塞外の事には意を用ゐ

ること密にして、永樂八年以後、數々漠北を親
征せしほどの帝の、帖木兒東せんとするを聞き
ては、笑んぞ能く晏然たらん。太祖の洪武二十
八年、傅安等帖木兒の許に使せしめて、安等
猶未だ還らず。忽にして此報を得、死慮する無
きを得んや。帖木兒、父は答剌豈(Chagatai)元
の至元二年か以て生る。生れて跋なりしかば、惡
む者チムールレンク(Chimurenk)と呼ぶ。レンク
は跋の義の波斯語なり。タメルランの稱これに
よつて起る。人となり雄毅、兵を用ゐ政を爲す
を善くす。太祖の明の基に聞くに前後して大に
勢を得、洪武五年より後、征戰三十餘年、威
名亞非利加・歐洲巴に及ぶ。帖木兒は同教を奉
ず。明の初、同教の徒の甘肅に居る者、放つ。
同教多く帖木兒の領上に歸す。帖木兒の甘肅よ
り入らんとせるも、故ある也。永樂元年(1405)
より永樂三年に至るまで帖木兒の許に在りしク
ラワイヨ(Carai, Carian Ambassador)記す、
タメルラン、文那帝使を西班牙官使の下に座せ
しめ、吾兒たり友たる西帝の使を、隣たり無賴
の徒たる支那帝の使の下に座せしむる勿れと云
ひしと。又同時タメルラン軍營に事へしパウ
ヤ人シルトベルガル(T. Schiltberger)記す、支
那帝使進貢を求む、タメルラン怒つて曰く、吾

新蒲 柳 年々緑に、

野老 華を呑んで 哭して未だ休まず。

又嘗て貴州金竺長官司羅永菴の壁に題したまへる七律二章の如き、皆諷す可し。

其二に曰く、

楊殿を閑し罷んで 霧も蔽くに傾し。

笑つて看る 黃屋 團圓を寄す。

南來 瘴嶺 千層過に、

北望 天門 萬里遙なり。

款段 久しく忘る 飛鳳の鞞、

袈裟 新に換る 兗龍の袍。

百官 此日 知る何れの處ぞ、

唯有り 羣鳥の 早晚に朝する。

建文帝是の如くにして山青く雲白き處に無事の餘生を送り、僊人隱士の踪跡杳渺として知る可からざるが如くに身を終る可く見えしが、天意不測にして、魚は深淵に潛めども案に上るの口あり、禽は高空に翔くれども天に宿するに由無し。忽然として復宮に入るに及びたまふ。其事まことに意表に出づ。帝の同寓することの猶知し、帝の時を見ても、遂に建文帝なることを猶知し、其詩を竊み、恩恩の知州岑政のところに至り、吾は建文皇帝なりといふ。意蓋し今の朝廷また建文を弊めずして厚く之を奉ず可きをおも

へるなり。英はこれを聞きて大に驚き、盡く同寓の僧を得て之を京師に送り、飛草して以聞す。帝及び程濟も京に至るの數に在り。御史僧ふ糾すに及びて、僧曰く、年九十餘、今たゞ祖父の陵の傍に葬られんことを思ふのみと。御史、建文帝は洪武十年に生れたまひて、正統五年を距る六十四歳なるを以て、何ぞ九十歳なるを得んとて之を疑ひ、やうやく詰問して遂に其僞なるを斷す。僧實は釣州白沙里の人、楊應祥といふものなり。よつて奏して僧を死に處し、從者十二人を配流して邊を成らしめんとす。帝其中に在り。是に於て已むを得ずして其實を告げたまふ。御史また今更に大に驚きて、此事を密奏す。正統帝の御父宣宗皇帝は漢王高煦の反に會ひたまひて、幸に之を降したまひたれども、叔父の爲に兵を動すに至りたる境遇は、まことに建文帝に異なること無し。其の宣宗に紹きたまひたる天子の、建文帝に對して如何の感や爲したまへる。御史の密奏を聞召して、即ち宦官の建文帝に親しく事へたる者を召して實否を探らしめたまふ。吳亮といふものあり、建文帝に事へたり。乃ち亮をして應文の果して帝なるや否やを探らしめたまふ。亮の應文を見るや、應文たゞちに、汝は吳亮にあらずや、と云ひたまふ。亮猶然らざるを申せば、帝舊き事を語りたまひて、爾亮に非ずといふや、と仰す。亮胸塞がりて答ふる能はず、哭して地に伏す。建文帝の左の御趾には黒子ありたまひしことと思ひ出で、亮近づきて、御趾を摩し視るに、正しく其のしるし御座したりければ、懷舊の涙溢めあへず、復仰ぎ視ること能はず、退いて其由を申し、さて後自經して死にけり。こゝに事々明らかなりしかば、建文帝を迎へて西内に入れたてまつる。程濟この事を聞きて、今日臣が事終りぬとて、雲南に歸りて庵を築き、同志の徒を散じぬ。帝は宮中に在り、老佛を以て呼ばれたまひ、壽をもて終りたまひぬといふ。

女仙外史に、忠臣等名山幽谷に帝を索むるを記する、有るが如く無きが如く、實の如く虚の如く、經涉有趣の文を爲す。永樂帝極木川の崩を記する、鬼母の一句を愛くとなし、又野史を引いて、永樂帝極木川に至る、野獸の突至するに遇ひ、之を搏す、攫されてたゞ半軀を剩すのみ。歿して而して匠を殺す、其迹を浪瀝する所になりと。野獸か、鬼母か、吾之を知らず。西

九龍口に於て危難に臨む。十三年建文帝衡山に遊ばせたまふ。十四年帝程濟に命じて從亡傳を錄せしめ、みづから彼を爲らる。十五年史彬自龍庵に至る、庵を見ず。覺訝して帝を索め、終に大喜庵に遇ひ奉る。十一月帝衡山に至りたまふ、避くるある也。十六年、齡に至りたまふ。十七年始めて佛書を觀たまふ。十八年峨眉に登り、十九年粵に入り、海南諸勝に遊び、十一月還りたまふ。此歳阿魯台反す。二十年永樂帝、阿魯台を親征す。二十一年建文帝章臺山に登り、漢陽に遊び、大別山に留まりたまふ。二十二年春、建文帝東行したまひ、冬十月史彬と旅店に相遇ふ。此歳阿魯台大同に寇す。去年阿魯台を親征し、阿魯台遁れて戦はず、御空しく還る。今又塞を犯す。永樂帝また親征す。敵に遇はすして、軍食足らざるに至る。鄭路橋木川に次し、急に病みて崩す。蓋し疑ふ可きある也。永樂帝既に崩じ、建文帝猶在り、帝と史彬と客舍相遇ひ、老實良の忠臣の口より、篡國奪位の叔父の死を聞く。世事測る可からずと雖も、寵愛して宮を脱し、聲淚して舟に上るの時、いづくぞ茅店の茶後に深仇の冥土に入るを談するの今日あるを思はんや。あゝ亦奇なりといふべし。知らず應文禪師の如何の感を爲せ

るを。即ち彬と、もに江南に下り、彬の家に至り、やがて天台山に登りたまふ。仁宗の洪熙元年正月、建文帝親着人士潮音海に升し、五月山に還りたまふ。此歳仁宗また崩じて、帝を索むること、漸くに忘れらる。宣宗の宣德元年秋八月、從亡諸臣を麓前に祭りたまふ。此歳漢王高煦反す。高煦は永樂帝の子にして、仁宗の同母弟、宣德帝の叔父なり。燕王の兵を擧ぐるや、高煦父に従つて力戦す。武みづから負み、騎別を善くし、酷だ燕王に脅たり。永樂帝の儲を立つるに當つて、丘福、王寧等の武臣意を高煦に屬するものあり。高煦亦竊に戦功を恃みて期するところあり。然れども永樂帝長子を立て、高煦を漢王とす。高煦快たり。仁宗立つて其歳崩じ、仁宗の子大位に即くに及びて、遂に反す。高煦の宣德帝に於けるは、猶燕王の建文帝に於けるが如きなり。其父反して而して帝たり、高煦父の爲せることを學んで、陰謀至らざる無し。然れども事發するに至つて、帝親征して之を降す。高煦乃ち廢せられて庶人となる。移鎮樂されて逍遙城内に於るや、一日帝の之を熟視するにあふ。高煦急に立つて帝の不意に出で、一足か伸して帝を勾し地に踏せしむ。帝大に怒つて力士に命じ、

大銅缸を以て之を覆はしむ。高煦多力なりければ、缸の重き三百斤なりしも、項に缸を負ひて起つ。帝炭を缸上に稱むこと山の如くならしめて之を燃す。高煦生きながらに焦熱地獄に墮し、高煦の諸子皆死か賜ふ。燕王範を垂れて反か敢くし、身害にして志を得たりと雖も、終に域外の松木川に死し、愛子高煦は焦熱地獄に墮つ。如是果、如是報、悲む可く悼む可く、驚く可く嘆すべし。二年冬、建文帝永慶寺に宿して詩を題して曰く、杖鋤來り遊びて歲月深し、山雲水月閑吟に傍ふ。塵心消盡して、些子も無し、受けず。人間の物色の侵すな。これより帝優游自適、居然として一頭陀なり。九年史彬死し、程濟猶從ふ。帝詩を善くしたまふ。嘗て賦したまへる詩の一に曰く、宇落西南四十秋、蕭々たる白髮、已に頭に盈つ。乾坤恨あり、家いづくにか在る。江漢情無し、水おのづから流る。長樂宮中、雲氣散じ、朝元閣上、雨聲收まる。

れたで、目がさめた。
船頭あはれや 懼さず夢も 撞木が脱け

若布取りの女四人づれ、背に布籠、手

ろよろと牽かるゝやうにして出来る。

人、或は帝胡人の殺すところとなるを爲す。然らば則ち帝丘福を尤めて、而して福と其死を同じうする也。帝、勇武を負ひ、毎戰危きを冒す。榆木川の崩、蓋し明史諱みて書せざるある也。

數か、數か。紅箋の皮牒、袈裟、剃刀、噫又何ぞ奇なるや。道士の靈夢、御溝の片舟、噫又何ぞ奇なるや。吾嘗て明史を讀みて、其奇に驚き、建文帝と共に所謂數なりの語を發せんと欲す。後又道衍の傳を讀む。中に記して曰く、道衍永樂十六年死す。死に臨みて、帝言ばんと欲するところを問ふ。衍曰く、僧溥洽といふもの、驚がること久し。願ばくば之を赦したまへと。溥洽は建文帝の主幹僧なり。初め帝の南京に入るや、建文帝僧となりて遁れ去り、溥洽狀を知ると言ふものあり。或は溥洽の所に匿すと云ふあり。帝乃ち他事を以て溥洽を禁めて、而して給事中胡濙等に命じて徧く建文帝を物色せしむ。之を久しくして得ず。溥洽坐して繫がること十餘年、是に至りて帝道衍の言を以て命じて之を出さしむ。衍頓首して謝し、尋で卒すと。篋中の朱書、道士の靈夢、王鉞の言、吳亮の死と道衍の請と、溥洽の狀と、嗚呼、數たる

と數たらざると、道衍蓋し知ることあらん。而して榆木川の客死、高煦の焦死、數たると數たらざるとは、道衍袁典の輩の固より知らざるところにして、たゞ天之知ることをあらん。

堯心。如何にも名和又太郎が頼まれまゐらせな

少將。
小三郎堯心

堯心^①
ハ

少將。
其^そ

堯心。

少將。

堯心。

少將
與

堯心。

少將。

堯心。

堯心。

 $\frac{1}{2}$

5,

少將。

2

イヤ卑怯でも是非はござりませぬ。卑怯

7.

と疾辯はやべんに云ひて、

臆、
臆病者の、
腑、
腑甲斐

まする。

と自ら怖れ、且つ困じ、只

て慄へながら泣く。

ハテ、日頃ひごろにも似にぬ。とばさ

ハ、分際ぶんざいに過ぎすたる大事だいじの御

仕損ぜば一重大事故。……い

述べて、又太郎が領承致せ

情無なさけない今いまの世よのならひ、馬うまは

武士は祿にひかる、六波羅むくはらにひかる。

くば、頼たのまれまゐらせぬば

堯心けうしんが細首はそくびをて手も無くな刎はれて

の十騎二十騎、君を取り奉

寄せんには、蟲のやうな此の

にたる上に亦死にて、幾度死

ばこそ。堤は低きところより

は力の足らぬ者より破る。此

君をおもふ心に虚偽はござら

足らぬ
器量が無い
まゝで

名和又太郎を取つ

れど、強からぬ人柄、下總成田の一族
なるが、京に居りて朝に仕へしもの、
贅なれども志篤きまゝ、雑色様の勞
を取りて君に従へるなり。衣服僧俗の
間にて品格あり。

梶取。放して下さい。

舟子。捉まへて居ては仕方が無い。

堯心。イヤ、放すは易けれど、汝等の様子、勿
體無くも御舟を振棄て、逃げ失せん氣色
ゆゑ、理解を申すのぢや。

梶取。ハテ疑念深い、何の逃げませうぞ。

舟子。マ聞譯の無い、水を取りにまゐるものを。
然様は言うても水取は一人で足る、二人
はいらぬ、若者が行かば梶取は残れ。

梶取。私は食を取りにまゐります、食べる
ものが無うてはたまりませぬ、上御二人
にはまゐらせても、私共も御前様も、今
朝の料はもー……

堯心。それは解つて居るが、それ故に、代り合
つて參れといふでは無いか。

梶取。代り合つてなどゝ、そんな悠長な事を言
つてゐる間には、どんな怖い風に逢はう
も知れませぬ、危いゝゝ瀬門を乗つてゐ
る身、もう懸りゝ。

堯心。それゝ逃げう心が見ゆるは、頼むか
ら、どうぞ今少時居よ。

舟子。私などにかく御放しなされて、
梶取。私にも一寸御放しなされて。しつこいし
つこい、かならず戻つてまゐりまするに。

堯心。え、情無い其の眼色、後日の恩賞は、小
三郎堯心必ず宜きに取計らひ得さする故
……

梶取。後日の恩賞より差當つての餅、マこゝを
御放しなされといふに、

堯心。放さぬゝ。下司と云ひながら、其の
嶮しい顔して、

舟子。エ、何様せ下司根性の此方づれ
忠義も恩賞も腹が脹つての上ぢや。親
方、ほつたらかさつしやい。

梶取。と振振つて走り行く。

舟子。待てやい、おれも行く。
と堯心を突放さんと焦り、争ひ勝つて、
堯心を砂上に突倒し、
梶取。済みませんが御免なさい、生命が惜いか
ら。

梶取。と疾辯に言譯して、
と走り去る。堯心起上つて、

梶取。岩松ヤアイ。

少將。おのれ。人な手ごめにして、
と追はんとする時、船より上り來れる
六條少將忠顯卿、萎えたる装束、
冠無く、威儀整はれど人品高し。
少將。堯心、追うな、追うて甲斐無し。
堯心。ハッ。然し氣がかり、訴人などせば。
少將。イヤ。其様な惡才のあるものにはあら
ず、尋常一様の男、腹さへ服れば、些は
忠義も解るもの故御世せしが、島を出
でゝよりの憂き難難、辛さと怖さに堪兼
れしまで。是非に及ばず、捨置き候へ。
ハアッ。さりながら餘りに情無う存ず。
時運非なればとて一天の君を、此國の民
として振捨て奉るとは。
と泣く。

少將。感慨もとより道理なれども、際岐ノ判官
兄弟の如く、君に弓彎く者もあるな。
と更に慨然と、大きく歎ずれば、堯心
も亦今更に憤り恨む。
時に天漸く明るくなり、鳥の聲、海
の音のおのづから勇む。少將ハツト氣か
取直し。

少將。ア、不覺なりし、歎きて居無し。君隠
岐の島を出させ玉ひてより、出雲の判官

競射の一會濟みたる座。

名和又太郎長年

五十二三歳

長年弟鬼五郎助高

二十八歳

長年次男孫三郎基長

二十七八歳

六郎太郎義氏

二十四五歳

次郎三郎實行

四十五歳

鳥家彦七宗家

三十歳

備中守義直

三十五六歳

日野三郎義行

六十歳前後

同子息又三郎義泰

二十二三歳

名和家執事内河彦三郎義眞

四十歳前後

長年末子乙童丸

十四五歳

成田小三郎堯心

二十四五歳

若黨藤三郎近清

二十四五歳

若黨二人

若侍

基長。今日の競射の會快く濟み、近頃面白く

おぼえて候。

宗家。義直殿の今日の御ン技、誠に恐入つて候。

義直。イヤ、出来不出来は下手の常、今日ばた

またま不出来ならで、偶中を致したる

のみ。

義行。年やゝ老いては、れらひ麤くなり、若き

方々には逆も及ばず、差かしく候。

執事義眞。イヤ、日野殿は強弓長箭、御れらひ

麤くとも、いざ事あらん折は、箭風を負

はさるゝのみにても、敵はおびえ申さん。

それがし如きは、弱弓の不中、まことに

おはづかしく恐れ入り候。

義泰。内河殿の御挨拶にて、父も聊か面目を起

し候ふが。

義行。ハ、。箭風といふは、古の爲朝、今の

此莊の大殿のやうなる弓勢あつての事。

それがしごときは言ふに足らず。

助高。ではござらぬ。兄を除いては一族の中に、

及ぶものも無い御弓勢。

基長。残念ながら壯年のそれがし等の、まだま

だ掛けても及びがたきは、

義氏。御壯年の折の御鍛錬、さこそと存する。

義行。鍛錬と申せば、實行殿の矢注疾には、い

つもながら感服のほかござりませぬ。

實行。たゞ慣れたりと申す迄、御褒詞には當り

がたく、恐縮いたす。

と評論談話の此間、蔭にて猶ほ時々箭

聲鼓舞して已ます。

基長。今日の競射のよろこびに、日野殿をばじ

め方々へ、父より引出物として輕微な

ら、陸奥の鷲の羽、鎌倉鍛冶・京鍛冶の

名あるもの共が打つたる矢の根、都の細

工の射鵰・胡録、上手の割りたる鋼など

まゐらず心構へ、程なく父みづからこれへ

見えて、それ〴〵方々に申上ぐべし。誰

もある、用意の引出物持て。

ハ、ツ、と若侍、それ〴〵の物に應じ

たる足付へ、見よげにして載せたる引

出物を次第に運ぶ。

義行。いつもながら一同を、引立、勵まざるゝ

御懇の御心入。

一同。かたじけなく存じ奉る。

實行。かやうにして常々勵まし玉ればこそ、

名和一族は、末々までも三人張を變くと

世にうたはれて、肩身の廣いことござ

る。

義泰。特にこの大殿が、如何な日にも、大箭

箭の音を立てさせ玉はぬことなく、土民

までも音を聞知つて、御噂を申すは恐れ

入たる御心掛に候。

といふ時、蔭にて烈しき矢聲、箭の高

鳴す。

義泰。や、箭と申せば射場に殘つて、猶ほ勵ま

否應いはせず味方にせんには、ア、ツ、重量が足らぬ、身が軽い。老いてすがれては人たゞ悔る。あの楫取にも侮られし身の、身に負はぬ大役はとても／＼。

猶言はんとするを抑へて、

少將。イヤ／＼小三郎、其方の辯才、思慮分別、中々人の及ばぬところ。此所に餘人のあればとて、此の御ン使は其方ならでは。

堯心。イヤ／＼それがしにはとて／＼。

少將。勿論此の御ン使一大事なれば、任重くして力足らずと、辭退いたすもさることながら、今や事逼りて人少し。其方があらすば手が行かん。なれども、其方其間

は、必ず帝を守護し奉りて、屹度御安泰に御座させ申すか。

堯心。ム、それはいよく身に餘る任。

少將。然らば名和への御使致すか。

堯心。それも大役。

少將。君をばあづかり奉るか。

堯心。サア。

少將。名和へまゐるか。

堯心。サア。

兩人。サア／＼。

堯心。ウア、ツ。

と泣倒れて、満面の悲涙米雨手はしり、胸甲斐なき身の、あゝ口惜や。身は下總の成田が一族、弓矢取には生れたれど、生れついでに虚弱ゆゑ、ひそかに名利のおもひを省きて、世に競はれば、才無きを憂ひす、人と争はれば、力無きを差す、吾が世清しくとのみ過ぎ來しが、齡六十に近くして今日の此場に、はじめて

吾がオ、吾が力の足らざること、今更に、つく／＼悲しとおもひしむたり。ア情無い。名和へ行きて、おーぼーつか／＼、君の御守護も、おーぼーつか／＼。

船の方にて、船板など拍つやうの物の音す。御促しの意と悟りて、少將立上つて屹となりて、

少將。え、才力ばかりが事を成さんや。堯心ともあるものが無益の縁言閑苦しい。半生の讀書、今何の功ぞ。躊躇疑惑は大事の禁物。教諭なるぞ、名和へまゐれツ。

と罵り勵ます。

堯心。ウ、ウ、ウツ。

と少時行詰りしが、面色變つて、堯心。ハ、ツ、畏り奉る。

と受ける時、華やかに日の光さす。少將。オ、領承満足、ばやいてまゐれ。

堯心。ハツ。

と立上り行く。三四歩はやく歩みて、

又おそくなり、心猶ほ屈託して、

堯心。名和の又太郎といふ男、弟泰長は君に御ン味方、嫡子義高は六波羅方、心の底は測られぬが、

と小聲横向になつて、

堯心。説いて聽かずば、此の鰐腹、

と我知らず腹切る形

堯心。五臓六腑をたゞきつて、惡鬼となつても引きずり來うまで。

と決心。急に趨かんとして、前の舟子が捨行きし水樽に躓き、バタリと倒れ、少將と顔見合せて一散に走去る。

船唄。あらし見かけて、湊を出船、人に取れない魚取る。

第二齣 名和館

元弘三年二月二十八日。午前。

伯耆國東伯郡名和莊。

ら座上を見わたり、長年と相見て、
堯心。名和ノ又太郎殿は御身なるか。

長年。オ、又太郎長年ばそれがしなり。

堯心。嬉しや、ア、先づ安心
と、ぐたりとなる。

長年。シテ、理不盡の亂入、汝は何者。

堯心座上の大勢を見て、ア、ウ、と躊躇ひながら、偶然庭上の梅花を見て
堯心。梅を尋れて罪を得ることを忘れ、遂に入
る他人の園、
と詩を吟するやうにいひ、

堯心。さのみは皆め玉はるな。御ン名を慕ひて
まありしもの、至急の願に心急きて、思
はぬ慮外御ゆるし下され。それがしは都
方の醫師にて候。

長年。フーム、都方の醫師なりといふか。

近清。どうやら狂人にも無き様子。

と、若黨と共に襟上取りしをゆるす。

義眞。シテ、至急の願とは何事なるか。

堯心。イヤ、それは汝等には申されぬ。

近清。ナニ。

と復強く襟を取る。堯心復奮ひて、
堯心。見らるゝ如く瘡枯れたる老人、長年殿に
は恐ろしきか、雜輩の取扱ひ厳し過ぎた

り。

長年。ナント。

堯心。願はくは人々を御ン遠ざけて、大事の
物語御聞下され。

長年。ナニ、人拂して聞けといふか。フーム。

堯心。帛の姿えたるも玉を頼むことあり、人賤
しくも言高きことあり。それがしが今申
さんとする、こと地上に立つて言ふべき如
き卑陋の筋にあらず。罷り通らん、御免
あれ。

と座に上らんとす。

義眞。推參至極。

近清。控へ居れ。

と止むるを、長年却つて制して、
長年。人品骨柄、言葉の端々、聞どころ見どこ
ろ無きにあらず。何事の物語が一應聞か
む。義眞、これへ請じ上せよ。

主人の眼使に近清及び若黨は去る。
堯心。ア、御聞下さるか、有難い忝い。
と、ひよこノ、と歩みて縁へ上らんと
せしが、心弛みて復弱くなり、辛うじ
て上る。

義眞。先づこれへ。

と座を與へられても、並居る一同に氣

を吞まれ、心を置く。人々は復堯心を
怪しみ訝り、黙視して、眼ませ合ひ、
うなづき合ふ。

長年。サア、都方の醫師殿とやら、物語られよ。

無骨の田舎武士、名和又太郎、來意一通
り承らむ。

堯心愈々慙して、懷ひ戰く、

堯心。かかたじけなうはござりまするが、かり
そめならぬ大事にごされば、先づ人々を、

長年。ハ、遠ざけよと云はるゝとも、其れ
にも及ばず。皆是れ又太郎が一族縁者

又太郎徳少けれども、一族を隔つるほど
にきたなくばあらず、一族心異なれども、

又太郎をよそにするまでには冷からず。

頼み頼まるゝ一心同體に、隔を置かぬ名
和の家風。

一同此を聞いて悦び笑む。

長年。又太郎一人とおぼして物語られよ。一大

事と仰せある上は、殊さらにも一族と共
に承らん。

堯心。ム、ム。

と、當然にばあれど、便宜惡しきに、
愈々苦しみ、又太郎が言はせじとする
か聞かじとするかの底の心を測りかれ

屋敷十七ヶ所を取上げられても、而も悔まぬ忠義の武士。其の子孫として又太郎殿は、時勢とは云ひながら、物もおもはで、曲つて世に立つ屏風の繪の、花と妻子をうちながめて、ひたすらに安穩を樂まるゝや。

義行。長年も人々も勃然として怒れども、長年は自ら抑へて發せず。義行堪へず、イヤ、奇怪なる一言かな。長年殿の人品は、汝等風情の知ることならず、

宗家。風の日に竹は拂へども、直きを失はず、

義直。我は顔して忠義立し玉ふことこそ無けれ、二方二郎殿に愧ぢたまはぬ、

實行。御心掛は一族皆知る。無益の願たゝいて、

皆々。痛い目見るな。
と、たしなめる。堯心之を聞きて喜びながら、

堯心。と云はるゝとも、嫡子義高を、現に六波羅の下知につけて京上りさせ、千劔破の寄手に向はせあらすや。

義行。▲、それは。

堯心。サア、心に忠義を存じ玉は、君は孤島に潛ませ玉ひて、陪臣は天下に威を振ふ、

日月暗き今の世長閑に、何とて安逸を貪らるゝぞや。

義行。▲、それは。

堯心。サア、それでも、二方二郎に愧ぢぬか。

義行。▲、。

義泰。村上源氏の流の末か、具平親王の後裔か。

義行。▲、。

宗家。えゝ口賢きえぜ論議。

義直。かしましい、

義氏。だまりをらう。

實行。無禮の奴、だまらずば、その頰柎を、

皆々。打割呉れうす。
と、一同屹となる。堯心いよく必死の勢。

堯心。理に味きものは心屬し。打たば打てよかし、サア、名和一族のたゞし又太郎殿には何とおぼす。

と、詰寄する。長年猶ほ毅然として黙す。

堯心。何とおぼす。

と復めざり寄る。長年猶ほ默然、一族ざわつく。

長年。シツ。

と、制して、猶ほ黙々。

堯心。何とおぼす。

と、復めざり進む。長年猶ほ黙す。

堯心。家柄といひ、器量といひ、天晴たのもしげの大丈夫も、心が二途に互ればこそ、口に一言も無きことか。

と、恨めしげに考へ込み、急に弱くなりて、

堯心。それがし如きはたゞこれ匹夫の、有る甲斐もなき身なれども、つくぐ世のさま

を見、帝の御心上をおもへば、浮世の浪の荒きに漂はせたまひて、御心にもなき隠岐の島守、朝の雲には御心愁思たなびき、

夜の雨には御心涙あらそひて、口惜しく日夜を過させ玉ふに、随ふものは皆力無く、窮める魚は涸たる池を守れども、衆の

島は榮ゆる柯に集まる、と古き詩の通りの世の有様、人皆時に媚びるを知つて、

誰一人心を寄せ奉るものも無き情無さ、と、涙になり、

堯心。斯く申す堯心は、鶏を縛る力も無けれど、

帝の御心爲には身を抛つてもと存するに、二方二郎殿の血をひきし名和殿の、

て疑懼す。

年長。

鞘を拂つては刀の折るゝまで、言を出しては身の罪なばるゝまでとこそ承り候へ。たゞならず思ひ詰められし氣色故、如何なる大事か承らんと存ぜしが、吾が一族の他聞を憚り玉ふは、才學ありと見ゆる客人にも似合はず。ハ、ハ、梅の枝には南北を別つとも、春の風には東西無からん。きたなし客人。又太郎にのみ聞かせて、人々には聞かせじとおぼすほどの

堯心。

ウ、。

長年。

密事、内證事ならば、又太郎も承りたからず。人騒がせなる興がる老人、疾く席を立つて立去られよ。

此の語の中、堯心じたくと慄へながら唇を咬み居けるが、一生懸命に思ひ切つて強くなり、何か言はんとして、猶ほ應じて止まず、終に思ひきつて強くなり、

堯心。

密事、内證事の物語に、氣息を切り難を冒して何參せんや。心は低けれ雖身の爲に人を憚るならず、膽太からねば事を謀つて密ならんことを願ひばかり。隔無

き一心同體の方々とある上は、方々にも懸けて兎も角も申さん。虚弱ひがいの疥老人、もとより方々の御相手に足らず、過言ありとも御ゆるしありて、必らず末まで御聞き下されよ。

と、段々弱くなり、復急に意氣を張り、

堯心。

言を出しては身の罪なばるゝを厭はず。

申すこと御心に染まずして、生命取りたくおぼさば、申終りて後に、

と、刀を脱して長年の前に置けば、皆面を見合はす。

堯心。

此の細首を切るとも振るとも、御ン心まかせ。たゞ御聞き下されよ。

長年。

ム、ウ、無禮ありとも、言葉は盡させん。

義行。ヤ、ひがいがすな奴ながら、味をやり居る。實行。どうやら、些おもしろさうな。

助高。サア、何なりと云へ。

基長。ハテ、心得ぬ。何事ならん。

宗家。老人。逐一、皆々承ばらん。

と改まる。

堯心。ム、と、氣を張り、ぶるゝと慄へながら、

眞青になりし面を擧げて、居丈高になり、

堯心。

名和ノ又太郎殿、先以て尋れん。

長年。

ナント。

堯心。

日本神國は君臣一家、世に美はしき國の御姿。君は神代よりしておのづからに君、仁愛深うして永久に君たり。臣は根をおなじうして枝をわけし臣、讐敵屈して臣となりしならず。特に武士は源平をはじめ、皇家より出で、弓箭を取り傳ふ名和の御ン家は村上源氏とつけたまはる。勿體なくも村上天皇第六の皇子、具平親王の御ン末ならんが、

長年。

ム、。

長年。

と、軽く考へ、

如何にも客人には能つく御存じ。具平親王十一代の後胤但馬禪師行盛が孫こそ、かく申す又太郎長年にて候へ

堯心。

堯心いよ、勢を出し、

さては御ン身の祖父行盛は、承久の昔、帝に御ン味方して、鎌倉勢と戦ひし、二方二郎行明が子ならずや。

長年。ハテ、詳しく御存知、實に其の通り。

堯心。二方二郎は、北條と戦ひて、戦利あらず、

長年。救命のおもむき、長年謹んで領承仕
る。

堯心。ア、ツ、ありがたし、君御萬歳、御運開
けん、嬉しや嬉しや、かたじけない。

と、小刀を取落し、ぐたりとなつて、
腰もぬげんとす。

長年。ヤア、孫三郎基長、曳五郎助高、日野殿
はじめ一族の人々。長年は一ト筋に思ひ

きつたるぞ。人々の意見には拘はるべか
らず、異議を存ずる者は心に任さん。そ
れがしは君の御ン供申し、船上山の要害
に立籠り、天下を敵に引受けて一身を忠
義の爲に抛たん覺悟。

基長。君臣は一家、父子は同體。基長は申すま
でも候はす。

助高。兄弟同胞、死なば諸共、

義行。枝を連れ根をひく一族のやから、

實行。誰かは異議を存じ申さん。

義直。一族のほまれ、

義泰。弓箭の本懐

義行。火にも水にも、

一同。御ン供申さん。

長年。ホウ、同意の誓言、満足至極。さらば基

長・助高、いざいざ直に御迎の用意。日

野殿・實行殿、一族を催し、宗家・義眞、

小荷駄の手配。ぬかるな人々、事急なる

ぞ、獨斷專行、和合協力、心を合せて捷

きを尙ひ、守護防戰の功を成せやい。長

年も用意の間しばらく御免。成田殿物は

しうおぼさん。義眞、藤三郎に命じて湯

漬なりとも參らせよ。御免。

と、内に入る。人々も會釋して皆入る。

堯心小刀をさし、胸をさすり、安堵す

る思ひ入。引ちがへて藤三郎近清出來

り、小侍湯漬を出す。

近清。イザ成田殿召され候へ。

堯心。イヤ折角ではござれども猶ほ此の胸が塞

がつて、

近清。何と云はるム。

堯心。イヤナニ頂戴致すてござらう。

と、食ひかれながら腕を取上ぐるを道

具かはりの知らせ、蔭にて響の音響き、

乘馬高嘶す。

此の仕組にて舞臺廻る。

第三齣 大阪湊

元弘三年二月二十八日。午時。

伯耆國東伯郡大阪湊。

(すべて第一場におなじ)

千波八郎 三十歳前後

八郎從兵多勢

漁師甲乙丙丁

蛋女甲乙丙

農民甲乙丙

六條少將忠顯

名和又太郎長年

同 孫三郎基長

同 乙童

同 六郎太郎義氏

同 次郎三郎實行

鳥屋宗七宗家

同 備中守義直

日野三郎義行

同 又三郎義泰

軍兵多勢

信濃坊源盛

法師武者多勢

四十四五歳

漁師、蛋女、農民交りに七八人雜談し
居るところへ、隠岐判官が侍、千波八
郎、直垂に小具足、弓前を帶び、若侍

世を知らず顔は恨めしき。

と、慷慨悲憤、歎息のこなし、長年ハ

ッと悟りたる思入ありて、

長年。

ムーウ、此の又太郎に何とせよとて左様の事を云はるゝぞ。御ン身一個の御存念

ならば、長年左右の御答に及ばじ。御ン

身は抑々いづれより來られしぞ。願と云

はれしは一時の方便、察するところ、隠

岐の君の、

驚く。

長年。

と、驚く。

長年。

サ、隠岐の君の御ン爲に長年を説かる

堯心。

ヤ、御ン身一存の事にはよもあらじ、至急と

長年。

いひ、大事といはれし言葉の後先、語氣

眼の色・身の舉動もたゞ事ならず。いづ

く・何人より遣はされしぞ。たゞ明ら

に申され候へ。

堯心。

アツ、驚入つたる御明察。

堯心。

と、腰くだけ、

と、云ひかけつゝ、又今更に言ひ出さ

んとする事の重大なるに、じたくと

慄へ出し、

堯心。まことは、

と、おどろしなから、

堯心。

と、思ひ切つて、突と手を伸ばして前

なる小刀を取り、事破れなば腹切らん

意。弱き者にも一期の勇、儼然と立上

りて、

堯心。

六條少將忠顯卿の旨をうけ、敕・詔・承

はつて、成田小三郎堯心、これへは参り

向つたり。隠岐の帝の敕・詔・説なるぞ。

長年及一同。ハアツ。

と、仰天して席を避け、平伏する。

堯心。

名和又太郎以下、謹んでうけたまはれ

と、威儀をつくらふ。合方キツパリと

堯心。

帝・隠岐の島を脱け出させ玉ひ、海陸の

御難儀、逆臣の虎口、漸く免れさせ玉ひ

て、伯耆の大坂へ御着船あり。勿體なけ

れども、勢盛まり、御運通りぬ。かれて

名和惡四郎泰長より、兄又太郎長年が事

を聞召され居り、長年が人となりは麻呂

深く知る、又太郎は必ず頼まれなん、と

にもかくにも深く頼みおぼす、御ン迎に

まあれとの敕・詔・説なるぞ。

長年。

と、深き考に沈む。一族は眼を張り、

堯心。

猶ほ萬々一頼まれまゐらすこと叶はず

ば、摘り進らせて鎌倉への勳功にもせよ、

隠岐の判官が手にはかゝらじの御意な

り。

堯心。

と、涙涕沱と顫聲になりて言ひ終り、

サア、名和ノ又太郎長年、何とうけたま

はる。

と、事成らずんば死せんものと、小刀

を取絞る。長年少し退り、袖かき合せ、

涙を含みて、

長年。

かたじけなくも一天の君の、かほどの御

思召深き敕・詔・説を蒙りながら、弓箭取る

身のいかで仔細を申すべき。たとひ首の

血を虚空に洩らし、骨を荒野に横たへ候

とも、君の爲・國の爲・正義の爲・大丈

夫の本懐が本望とこそ存じ候へ。御心易

くおぼしめされ候へ。又太郎長年生きて

は神國の民となりぬ、死して忠義の鬼と

ならんまで。

堯心。

長年殿には、たしかに領承か。

と、撲つ。

お浪。撲つたな、聞かぬぞえ、八朔のお浪を侮らしやんすな。

と、雑兵一人を投倒しながら、漁師鱈七を見て、

お浪。これ、鱈七さん、馴染甲斐ぢや、見て

ゐることは無い、加勢さんぜ。

鱈七。おればちいつと、此の加勢は嫌ぢや。後

が怖いから逃げて行くぞ。

と、逃げ入る。

一同。とばしり食ふまい。逃げる、逃げる。

お浪。そんならわたしも。鱈七さん待たんぜ。

と、逃げて入る。此間少將と雑兵との争闘やゝばげしく立廻りて、

八郎。え、面倒な、殺しても大事ない。小鬘なり向腰なり傷を負はせて生擒れ。

と、雑兵皆々。心得ました。

と、雑兵皆々。刀を抜き、八郎雑刀を執る。少將も拔合せ、此となる。此處へ

響の音響き、名和又太郎長年、櫓の直垂、折烏帽子、小具足にて、馬に乗り、

一族の人々、鎧直垂、小具足、或は甲冑にて附添ひ、足疾に出来る。其中よ

り鬼五郎助高眞先に進み、

助高。ヤア。六條少將殿と見奉る。名和の一族御迎にまゐりたり。

少將。オ、よきところへ。身は六條忠顯なるぞ。

八郎。さてこそ者共、しつかりせよ。

助高。何推参なる千波めら。

基長。めでたき血祭り、

義泰。先づ彼奴より。

と、義泰斬つてかゝり、二、三合にして忽ち八郎を斬倒す。義行宗家義直も立廻つて雑兵を追込み、

義行。逃足疾き雑兵ばら、殺し盡して注進すな。

宗家。いで追ひかけて、

義直。討取り呉れん。

と、此三人追うて入る。是にて名和又太郎、馬より下つて沙上に跪き、少將石上に坐す。

長年。六條少將忠顯卿には初めて見参仕る。それがし名和又太郎長年、御ン使により御迎にまゐり候。よしなに執奏願ひ奉る。

少將。あら嬉しや、名和又太郎。よくぞ御ン使の旨速やかに領承せられし。王土にあ

らざるところも無けれど、長汀曲浦皆御ン敵となり、蘆荻の風にも御心を置かせ玉ふ折柄、早速の御迎に参られたる大丈

夫の心・忠義の魂、君におかせられても、御感定めし深くましますん。

長年。ハッ、恐れ入つたる御言葉にて候。シテ帝には、

少將。勿體なけれどいふせき小舟に、潮の烟ふせぐばかりの・苦影深う忍ばせ居たまふ。

長年。ハ、アッ。

と、一寸舟の方を見ればかり、能くも

見得ずして俯伏して涙になり、

九重の雲を出させ玉ひて、千里の波にやつれさせおはしまし、一天の君の御ン有様、長年が胸も閉ぢ、腸も斷えて、申す

べき言葉を存じ候はず。龍體の御疲勞も、さこそとは存じ候ふが、平場の御守護に

力に及ばず、路險しく程近かられど、要害よろしき船上山へ御ン供申上げん。事

急にして人少けれども、頼みきつたる一族召つて候。

助高。長年弟、鬼五郎助高。

基長。長年二男・孫三郎基長。

に薙刀を持たせ、從兵六七人といそがしく出來り、漁師等を見て、

千波八郎。ヤア漁師共、鎌倉の下知として隠岐に籠め置きし帝、逃げ失せたまひしよりの大騒動、隠岐判官殿の指圖により、八方に手を分けて我等が詮議する。

侍。從ふものは青公卿と雑色、手剛いものは一人も無い筈。何でも見なれぬ小船、見なれぬ姿のさういふ者があつたら引とらへるか、たゞしばだまして留めて置いて、

八郎。小波の城に居らるゝ隠岐殿が、赤埼の城の能登守殿へ注進せよ。褒美は格外澤山下さるぞ。

漁師甲。へー、見なれぬ小船。ナア鎌七。

漁師乙。さうさ、めつたなことは云へぬが、

漁師丙。聲を掛けても返辭無し、

漁師丁。あいつはどうやら、

八郎。心當りでもあるといふのか。

漁師甲。イエエナニ、分つたことぢやござりませぬが、

漁師乙。ソレ、あそこに見えるあの苦船は、

漁師丙。こゝらの船ではござりませぬ。

千波八郎。フーム。

と、船の方を見入る。

蛋女甲。お公卿様といふは見たこともなければ、

蛋女乙。さつき松蔭で逢うた好い殿御。

蛋女丙。色が白うて、氣高くて、

蛋女甲。お浪さんが好いたと云はしやつたが、

蛋女乙。何云はしやる。お岩さん、ばづかしい。

侍。てもひよんなことはいはしやるな。もしあ

の方の御難儀になつては妾しや恨ぢや。

蛋女丙。ホ、ホ、きつい御心中立ちや。そんな

ら猶ほ云はうぞエ。

蛋女甲。ホ、ホ、お岩さんは焼餅深い。水へ

もぐる商賣の身でゐながら岡惚の岡惚とは聞いたことがない。

漁師。蛋女。ハ、ハ、ホ、ホ、

たゞお涙のみ悄然とする。

侍。コレ、女共、公卿らしい男でも見かけ

たか。

と、いふ時、彼方に千鳥むら立ち鳴いて、

て、六條少將此方へ來かゝる。

蛋女丙。噂をしたら。アレあすこへ、

と、指さすを、お浪慌てゝ抑へたれど、

千波八郎目捷く見て、

千波八郎。ヤア、合點のゆかぬ衣服人品。

少將來かゝりて愕然とするところを、

八郎。ソレ、紀明せよ。

と、指圖すれば、侍、從辛ばらゝと立かゝり、

侍。何者だ、汝は。

雜兵。何者だ、名乗れ。

少將。少將頼に思ひつきて

少將。ヤ、告立は心得ず、身は都の樂人なり、

あやしきものならず。

八郎。フーム。都の樂人が何としてこゝらへ。

少將。出雲の大社へ心願ありて、參る途中の便

船の、風間を遊覽したるばつかり。

八郎。ヤア、いつぱるともたはかられうや。た

しかに六條ノ少將とは睨んだり。者共、

引くられ、斟酌いらぬ。

少將。こゝ理不盡なる田舎侍、樂人なりとて官

位あるもの、繩目の恥をやはか受けうや

八郎。六波羅の下知、隠岐の判官がさし圖、と

かう云はすな、ソレツ。

と、是より立廻りになり、少將無手に

てあしらふ。漁師蛋女皆々驚く。お浪

のみは屹となり、

お浪。一人を大勢で無體さしやるな。

と、割つて入り、さゝへる。

雜兵。えゝ邪魔な、馬鹿女め。

來り、これより苞を持行かんとするも
あり。混雜甚し。若黨藤三郎近清、
腰掛に腰かけ守り居る。農夫甲、乙、
丙、奥の方より米苞を擔ぎ來り、

農夫甲。さあ行かう。

同乙。些でも足下の明るの中にナア、

同丙。歩を伸ばせばそれだけ樂だ、サア、

同甲。サア、

と、一寸藤三郎に會釋して行過ぐ。農
夫丁、戊、又奥より來り、四苞既に載
せある車に同じく積み載せる。同己來
り、復一苞を載せる。三人して荷緒を
かけ、

同丁。もうこれだけにせう。

同戊。麓までは樂だが、

同己。さがが車ばかりからナア、

同丁。オット「荷しよひ」を忘れまいぞ。

とそこに置きありし「荷しよひ」三人
分を車につけ、これも藤三郎に會釋し
て去る。同庚黙つて一苞負ひて來り、
會釋して去る。同辛、空身にて一寸會
釋して奥へ入る。同壬、復一苞負ひて
去る。同癸大男にて二苞負ひて出來る。
其方は二苞背負つて船上山まで行ける

か。

癸。へ、力自慢の六藏と申します。山道
で無ければ三苞は背負ます。

藤三郎。強い奴ぢやナ。

癸。一苞背負つてまゐれば五百文下さる、二
苞背負つてまゐれば一貫文下りまする

ナ。

藤三郎。其通り相違無い。

癸。へ、有難い。明日は一杯飲めます。

と、會釋して去る。同一、空身にて來
り、同二、亦空身にて來り、藤三郎に、

船上山まで兵糧を運べば、一苞につき五
百文を下されまするか。

一。

藤三郎。其通り。

一。二。

と、會釋して入る。三。四。苞を擔ぎ

來り、車へ載せて去る。此間長年嫡

子義高の惣領土用松丸、乳母を後にし

て駈來り、玩具の金銀の應を振り、指

揮の眞似。

土用松丸。運べ、急げ。

乳母。若様々々、お危うございます。

と、引添ひながら氣遣ふ。藤三郎腰掛

臺を立ちて、

藤三郎。オ、若君様。ア、おのづからなる御家

の御嫡流、

乳母。おかばらしい大將様の

藤三郎。これへお上りなされて御指揮なされま

せ。

と、腰掛へ抱き轉せる。乳母擁護する。

藤三郎離れて立つ。農民等猶ほ入代り

立代り、一苞運べば五百文になるとい

ふ同じやうの臺詞いろ／＼、土用松丸、

藤三郎を見て一寸會釋しては入來り出

去る。土用松丸しきりに興じて指揮す

る。侍女奥の方より、

侍女。岩根どの。

と、乳母の名を喚びながら出來り、

オ、御乳の人殿、こゝにかいな。お奥

で若君を召させられます。サア御一緒

に御供しませう。

乳母。それでは若様、もう御奥へまゐりませう。

土用松丸。いやぢや。運べ。

と、かぶり振つて背かず、猶も應を振

つて遊ぶ。

乳母。きついきかぬ氣でいらつしやるので。

侍女。ホンニ時々はお互に困じます。

乳母。サア、若君様。

乙童。三男・乙童。

義氏。甥にて候ふ六郎太郎義氏。

實行。從弟・次郎三郎實行。

宗家。輝に・鳥屋彦七宗家。

義直。同じく・備中守義直。

義行。一族の老骨・日野三郎義行。

義泰。義行嫡子・又三郎義泰。

長年。其外すぐつて二十餘騎、骨が微塵になり

候ひても散失する者共に候はす、嚴重

に御ン付添申して龍駕を奉ぜん。御ン敵

隱岐判官清高は小浪に居り、

基長。能登ノ守清秋は赤崎に居り、

實行。一千騎二千騎の兵を從へ、

助高。遠きは三里、

義行。近きは二里、

長年。逆意の眼を見張るのみか、火急の事とて

御ン與だもとのばす候へど、疾く御ン

馬にて船上山へならせられ度候。かしこ

へさへ御着ならば、長年候ふ間は、御心

安くおぼされ候へ。イデ此上は片時も早

く、龍駕を促したてまつらん。

といふ時、ドンチャンの鳴物になる。

義行。ハテ心得ぬあの物音。疾くも知つて、敵

の寄せしか。

基長。やア、人々騒がれな。

助高。弓に矢をさし、

宗家。敵と見ば直に射白ませよ。

皆々弓に箭をさし屹となるところへ、

長年の弟、大山の衆徒信濃坊源盛、千

波八郎が兵の逃げ入りし方より長巻を

持ち、法衣に小具足、古の武藏坊の如

き姿にて、同じやうなる法師武者多勢

を率ゐる出來り、大音聲に、

源盛。名和又太郎長年が弟、大山の衆徒・信濃

坊源盛、兄が方よりの消息を受け、身

は俗塵を脱したれども、心は天恩を忘れ

まゐらせれば、經卷をさし置き、同宿

引率、御助力に参りて候。

少將。敵かと心をひやしたれば、

長年。味方なりしもよき幸先。

基長。いざ、船上山へ、

一同。御ン供申さん。

義行。馬を天下に乘出して、

實行。鎧踏張る。

と、屹となるを木の頭

義行。時に來つるぞ。ハ、ハ、ハ、

長年。ハ、ハ、ハ、

と、大きく笑ふ。

義行。ハ、ハ、ハ、

實行。ハ、ハ、ハ、

一同。ハ、ハ、ハ、

と、武者笑ひ。浪の音・松の嵐、又更に

壯なり。此模様にて、幕。

第四齣 名和館裏

元弘三年二月二十八日、

伯耆國東伯郡名和莊。

農夫多勢

藤三郎近清

長年嫡孫土用松丸

土用松丸乳母岩根

名和館奥侍女

名和執事内河義貞

舞臺名和館外裏手の體、賑やかなる鳴

物にて幕開く。農夫多勢、倉より米苞

を搬び出し、船上山へ運ぶ體、或は二

三人一ト組となりて、荷事に積み載せ、

或は一人だちにて「荷しよひ」に「苞つ

けて背負ひ去らんとするもあり、素手

にて「荷しよひ」「荷繩」のみを背にして

らず、出行かれし後は風のあと。

宗家妻。野分に残る萩桔梗、たよりなさ、力なさが、胸一べい。

基長妻。御病氣の母様を御慰めに、娘上さまの御催しの、一族水入らずの合奏もの。アの琴鼓を見るにつけ、あまりに本意ないことになり、

義高妻。却つて妾がなまじひな、事いひ出せしそのために、一トしほ悪うて母上にも、皆々様に面伏な。

長年妻。いや左様言やるにも當らぬこと。夫の不在故二人ぶりの孝行をも盡さうとの汝の思付、競射の會を幸に、妾も一つは姫殿達と女達をも、並べて見度うて呼寄せしが、大事の出来は是非も無い事。

基長妻。早う様子を聞きたいもの。

義直妻。ほんに氣の揉める、

宗家妻。事ではある。

侍女甲。それもこれも、成田とやらいふ人が来た故、

侍女乙。ひよんな事になつて、樂にした鳥家様の奥方の御鼓も聞けず、

藤三郎妻。皆様の琴・笛の御調も聞けず、

侍女甲。悔しい事でござりまする。

侍女乙。ホンに憎らしい成田づら。

長年室。コレ、失禮な、勿體ない。そのやうなことをいふものではない。

侍女甲。ハイ、ついつかりと下司の口、

侍女乙。御免しなされて下さりませ。

義真妻。それはさうと若君様をお迎に行た者が何して居るやら。え、若い者は役たため。

長年室。昨日までも今日までも、心を安く過こし來しが、今は四方に敵を持つ・油斷のな

らぬ名和の家、若し敵方に若を取られて、人質なんどにせられては、

義高妻。ホンに母上の仰やるとほり、と、ぎよつとする。

長年室。ア、菅野、其方行て、若を連れて戻りや。

義真妻。ハイ、かしこまりました。と、立つて行きかゝる時、乳母・侍女を後に、土用松丸廳をふりながら入来る。

義高妻。オ、戻りやつたか。

長年室。こゝへ、く。

土用松丸母の前にて廳を抛り出して、一寸母にまつばりて後、又廳を取つておとなしく祖母の傍に行く。

乳母。お供遅なばりまして、

侍女。御免下さりませ。

長年室。好い兒ぞ、好い兒ぞ、これを取らせうと、玩具の弓矢を與へ、餘念なく寵愛す。

乳母。奥方様へ申し上げます。只今あれにて、若君をすかしあゝらす其の折柄、

侍女。彦三郎義真殿が、

乳母。見えられてござりまする。

長年室。ナニ義真が歸りしとや。片時も早く様子を聞かん。斟酌入らぬ、これへ呼びやれ。

侍女。ハツと、立ちかゝる。下手にて、

義真。イヤお招きには及び申さぬ、只今罷出るでござらう。

と、合方になり、義真出來りて座に着き、

義真。義真一度立歸つて候。

長年室。オ、歸りしか大儀々々として大殿をばじめ人々には、

義真。さればに候。大阪の湊に帝を迎へ奉り、折柄少將忠顯卿をあやめんとせし隱岐判官が郎黨・千波八郎をば日野義泰殿が

藤三郎。御奥へ御出なされませ。

土用松丸。いやぢや〜。

と、やはりきかす。此中農民の出入次

第に少くなる。

侍女。おきゝ入が無いには、

乳母。困ります。

侍女。オ、丁度好い。あれあすこへ内河殿の御

見え。御言葉添へて頂きませう。

執事義眞命を含みて途中より歸り來

る。

藤三郎。オ、内河殿、方々は、

義眞。途中事無く船上山へ。シテ藤三郎、糧米

の手配は、

藤三郎。御指圖通に事を運ばせ、もはやあらか

た事済みでござりまする。

義眞。オ、それ聞いて安心致した。ヤ、御ン乳

母殿、夕近き風寒きに、若君様をかやう

のとこに、

乳母。御置き申さう心は無けれど、人の出つ入

りつな御面白かりにて、御指揮なさる御

眞似をなされ、

侍女。御開分なくて困り居りまする。

義眞。ハ、ハ、もう農民も皆歸ります、御奥へ

御出でありますやう。

土用松丸。ム、老人も来い。

と、魔を揮りて招きながら聞分ける。

乳母。さあ。

侍女。さあ。まありませう。

と、乳母負うて入る。土用松丸猶ほ反

顧りながら魔をふる。義眞凝然と見送

りて、

義眞。あゝ、かりそめの戯にも大將の眞似。

御ン行末もめでたかるべき舊の花の若

君に、浮世の嵐測られず、何と吹くやら

明日の空。今宵の雲は亂れ足。ア、人間

の智慧・明日を知らず。

と、歎じ、急に氣を轉じて、

えゝ、たゞ何事も神を頼みて。

と、凜として、藤三郎を顧み、

正直一路に、ナア藤三郎。

藤三郎。儲くだけ働かうばかり、

義眞。ム、よく言はれた。兵糧手配おほかた

済まば、別に大殿の御ン申付あり。サア

御奥へ。

藤三郎。ハッ、心得ました。

義眞。参れ。

と、先に立ち、奥へ入る。知らせにて

道具廻る。

第五齣 名和館奥

元弘三年二月二十八日。夜。

伯者國東伯郡名和莊。

名和又太郎長年室 四十九歳

長年婿備中守義直妻 二十六歳

長年嫡子義高妻 二十三歳

長年次男基長妻 二十歳

長年婿島家宗家妻 二十四歳

藤三郎近清妻 二十七歳

内河義眞妻 三十八歳

侍女大勢及乳母

孫三郎基長

彦三郎義眞

藤三郎近清

峰の林・雪催して禽の夢おびえ、羅の

帷・夜冷えて蘭の香恐ふる名和の館の

奥座敷、長年奥方はじめ一族の女達居

る。床の間に、琴、箏、鼓などあり。

義直妻。今日の御ン催の俄に挫けて、たちまち

起る颯風のやうに、父上も夫も方々も、

男といふ男は鎧・物具、御顔つきもたいな

長年室。ム、ウ。

と、思ひ鎮めて、
オ、彦三郎。使大儀。心得たるぞ。準備
させむ。

義高妻。ア、もしこれ待つて・母上様。心得た
るぞの御ン仰は。

長年室。泰然として、じろりと打見やり、
ハアテ、不思議の有らばこそ。

義高妻。エ、エ。

長年室。殿の仰に従はうばかりぢや。

義高妻。ヤ、此の土用松を・義貞殿に。

長年室。その通り。

と、静にいふ。

義高妻。ア、ッ、御ン情無い母上様、夫は生憎

京上り、ひとり居る身の頼無く、頼むは

母上様はッかり。それにあんまり御氣強

い、このいたいけな土用松を・自然の時は

さし殺す、其爲にとてたゞ一人、放して

やれとは曲も無い。

と、土用松丸を搔抱き泣く。

義貞。ア、ッ。其の御歎は御道理なれど、

と、いふを打かぶせて、

長年室。ホ、何言やる、何を泣きやる。義高

こゝに居合はすればとて、父の言葉には

よも違はじ。自然の時の覺悟は同一、弓
箭取る者の妻として、かゝる事・兼てより
思ひ儲けぬか。

義高妻。ハアッ。

長年室。名和の嫡子の義高が妻として、吾が子

の愛に心くらみ、生命を抛つて君に盡す

父の最期の心を亂し・夫の名をも下さう

やうな・未練不覺の・汝ではあるまい。

義高妻。ム、ウ。

長年室。たゞし義高は京上り、北條の手に付き

居れば、帝に頼まれまゐらせたる・父と夫

は背中合せ、云はゞ互に敵同士ゆゑ、夫

に従ふ女の習汝に思ふところも有る歟。

義高妻。エ、エ。

長年室。もしそれならば心任せ、長年殿の仰は

ありとも、女の道は女の道、母が許すぞ、

土用松を連れ、いづれへなりとも落ちて

行きやれ。

義高妻。イエ／＼母上の勿體無い、そのやうな

事おもひませうや。夫の孝心深い事は、

母上様もよく御存じ、世上一統の今の

習、北條の下知に付き居ればとて、祿に

率かるゝ人でもなし。帝に頼まれまゐら

せし・父上の御ン事知る上は必らず歸つ

て方々と、一緒にならうは知れた事。

長年室。オ、／＼嬉しい、よく云やつた。その
忠孝の義高が妻とあらうなら、兎角は有

るまい。若を義貞に供させよ。

義高妻。ハアッ、ハイ。ありがたい御教訓、わ。

わかりましてござりまする。

長年室。岩根、用途を。

乳母。ハアッ、ハイ。

義高妻。乳母、土用松丸、三人一緒に

なつて泣く。人々慰む。

長年室。泣きやるな／＼武士の妻、如何なる憂

目を見る日にも皆それ／＼の夫の爲、笑

顔つてつて勇ませて、男の肘を後より・

率かねが連添ふ妻の道。弓箭取る身の母

となり、女となれば、女々しきは恥、子を

持つたものは汝ばかりか、秘藏の孫を手

放する姿も心は血の涙。兼れて今日が日

知りもせば、遠く離れし子をも呼び、し

みじみ見もし見られもせん。今土用松

の別につけ、あの孝心の義高の・京上り

せし折の事、いづより名残の惜しかりし

も、蟲の知らせし事なりしか、その時別

と知らざりし事こそ今は恨なれ。

と、流石に女の子を思ふ涙たまらで泣

斬つて落し、

長年室。オ、

義眞。軍陣の血祭、手初好しと、殘卒をも悉く

殲盡して、まさに龍駕を供奉せんとする時、俄に物の具の音、人の氣勢、

長年室并皆々。ヤ、ヤ、

義眞。すは敵こそ弓に箭をばげ、見れば大山

の信濃の御房等

長年室等。オ、オ、

義眞。眞黒になつて駈け來られての御ン味方。

これに愈々勢を得て、人々勇むえいとい聲、龍駕を守護し奉つて、小浪、赤埦の敵の奴原まだ知らぬ間を、安々と船上山まで無事に御ン供。

長年室。誰彼も皆無事なりとや。

基長妻。ア、有難い、

義直妻。神の御ン加護。

義眞。ハヤ今頃は船上寺を行宮として、玉體を

安んじ奉り、東阪、西阪の屈強の土地、險阻要害に選茂木を引き、僧房打破つて搔櫓を搔き、林木を伐つて矢倉を組み、たとひ隱岐の判官が千騎二千騎、伯耆出雲の武士共が、舉つて寄するとも斬

つて拂はん用意もなく候ふべければ、

御心易うおぼしめし候へ。

長年室。して其方は又何として歸りし。

義眞。それがしは船上山の麓よりして、一ツには様子御注進の爲、又一ツには大殿の仰を含みて歸つて候。

長年室。ホウ、其の大殿の仰とは、

義眞。ハ、ッ。

とは答へても云ひ兼ねて苦しむ。

長年室。如何様の仰か、

義眞。ハ、ッ。

長年室。疾く申せ。

義眞。ハッ、船上山の登り小口、大殿それがし

を召玉ひて、我かたじけなくも敕諭を蒙り、臣子の大義、身を捨て、家を忘れ

て、頼まれまゐらせ、船上山に立籠る上は、智略勇氣の有らん限り、心を盡し、身を盡さんば勿論のことなり。さりながら、

長年室及一同。ヤ。

義眞。されば嫡子義高、今居合せずと雖も、土

用松丸は家の嫡統、館に留め置き、敵の手に取られなば、義高に取り、身に取り

て不覺なり、急ぎ船上山へ登すべし。此の身力盡きて、此の心屈せず、路究まり運覺まりし曉は、

長年室。ヤ、

義眞。弓箭取のならひ是非に及ばず、先づ土用

松を、

義高室。ヤ、

義眞。さし殺し、

長年室。ム、ッ。

義高室。と、堪へ泣き

と、堪へ泣き

乳母。ハアー。

と、泣落す。人々皆泣く。

義眞。尋常に自害を遂ぐべきぞ。

一同。ム、

義眞。汝館へ立歸り、此意傳へて土用松を受

取り、

義高妻。ム、

乳母。エ、エ。

義眞。乳母を具して登り參れッ、と、流石に猛き大殿も、露もつ星の御ン眼を、強て見開かせ玉ひての仰に候。

此の中土用松丸人々の様子にうろ／＼として母の傍に來り引添ふ。

基長。ヤ、。

義高妻。不覺なるものと思し給ふか、返すくもお恨めしい。

基長。とは申されても。

義高妻。母上の御ン供は叶はずと申さるゝや。

基長。嫂上はじめ吾が妻まで、いづくへなりとも落行きて、身たなすかり命を續がれ候へ。

義高妻。あら情無き御ン仰、七生までも御ン恨なり。思ひ切つて候。敵を待つこともあらばこそ、生命惜しとて物は申さず。岩根。館へ火を掛けやれ。

基長。ヤ、。

基長妻。落行けよとは御情無い。わらばも母上の御ン供申さん。

基長。ナント。

基長妻。それ叶はずば嫂上の。御ン供申して死出の旅。嫂上ッ。

義高妻。妹。

基長。二人共に懷劍を抜くを基長義真抑で、ム、待たれよ嫂上。

宗家妻。わらばも母上の御ン供申さん。

義直妻。わらばも母上の御ン供申さん。

義真妻。わたくしも御ン供。

乳母。わたくしも御ン供。

と、いふ時土用松丸立上つて塵を振ひ、皆船上山へ行けくといふやうに指揮する。

長年室。ホ、ホ、ホ。皆出かしやつた。土用松丸もよう出来しやつた。

基長。人々かくまで思切つたる上は、皆母上の御ン供して船上山へ上られよ。

義高妻。嬉しう候、基長殿。

基長妻。吾夫。

宗家妻。兄上。

義直妻。三人。御嬉しうござりまする。

義真。義真妻。乳母はたゞ黙禮する。

義真。此上は少しも早く。敵の寄せぬ間に見苦しき物ども取納めて、

長年室。イヤ、其の手配は既爲せられたば、

基長。恐れ入つて候。さらば直に、

義真。船上山へ、

基長。御ン上りあれ。藤三郎あるか、藤三郎と呼ぶ。下手にて、

藤三郎。ハアッ。

と、出来る。

基長。オ、藤三郎、馬にせよ車にせよ、何にせよ、

よ。人々御ン出立の便宜計らへ。

藤三郎。ハッ。

基長。さらば、義真・藤三郎はこゝに止まり、敵いよく寄せなば館を火にして、船上山へ合圖をなし敵探つて上り候へ。

義真。ハッ、御下知の趣、

藤三郎。畏まつて候。

と平伏し、藤三郎は去る。是にて時の鐘、しんみりしたる合方になり、長年室思入あつて、

長年室。馴れし館も今宵限り、

義高妻。琴のしらべの絃絶えて、

基長妻。残るはたゞの松の風、

義直妻。笛の韻代る鳥の聲。

宗家妻。鼓の音も空に消え、

義真妻。復たのまれぬ合奏曲。

基長。やがては修羅の責太鼓、

義真。打つ打たるゝ戦場の、

藤三郎妻。烈しき陰に立つ方々。

長年室。ア、此世の思出ぢや、用意の間琴なと鼓なと鳴らせよかし。

女皆々。ハアッ。

と、銘々得手の鳴物を取り、調子を合

せにかゝる。

き歎く。人々も亦一度にワツと泣きて
已ます。此間乳母は支度す。時に下手
棟の蔭にて、

基長。女々しき泣聲、耳が痒い。

と、大音にいふ。

基長妻。ヤ、あの御聲は、
女達と義眞。基長殿。

と、いふ間に基長入り來り、

基長。孫三郎基長立歸つて候。

と、母の前に平伏す。

長年室。如何に基長、何として戻りしぞ。

基長。先以て申上候ふが、首尾よく帝を船上
寺へ供奉したてまつり、要害を取切つて

嚴重の用心、事二段は落つきて候。

長年室。オ、人々も定めし本懐至極、悦ばしや
悦ばしや。

基長。さて後父上それがした召され、火急の折
柄義眞に土用松が事のみは申付けしが、

今は一段落着きたり、汝一ト度立歸りて、
館の事共宜に計へ。義眞の計らひ得べき

にもあらず、汝ならでばとの仰故に立歸
つて候。

長年室。して基長は何と計らふぞ。

基長。ハッ。船上山の合戦は、要害堅固にして

味方必死、一念の切先鋭ければ、三度四
度は奇手を敗らん。されども近國の大名
共、帝に心を寄せ奉らずば、末々の事
は不定に候。さなくとも敵勢此の館に寄
せんに、館を蹴散らされ、妻子を人に取ら
れんも心外の至り、所詮は勿體無けれど
も、母上を、

長年室。なんと。

基長。ハッ、勿體無けれども藤三郎近清に御
供申させ、いづれの寺へなり。里へなり。

御思召すまゝに、御ン忍ばせ申さん、

長年室。ホ、孫三郎よ。ホ、ホ、ホ、いや
ぢや、と申したら何としやる。

基長。ハハッ。

長年室。ハ、ハ、ホ、ホ、。

基長。ハ、ハッ。

長年室。其の計ひはいやぢや、いやぢや。

基長。ム、ハッ、ハ、ハッ。

長年室。生命保護うて呉るゝのみが親孝心か。

ホ、ホ、長年殿は然様は言はるまい。

何十年を連添うて、此期に及びて左様言
はるゝほど、心掛くは無い。妾ぢや、

それは汝のばかなき考慮、敵もし寄せな
ば館に火をかけ、劍を銜んで猛火の中に、

飛込んで死ねとば、何故・能う言はぬ。不
孝者めが。

基長。ハア、ツ、ム、。

義眞。ハ、ハッ。

基長。恐れ入り、奉る御教訓、さーりーながら、

長年室。エ、丈夫が義のため身か捨つる時、
婦が身のため生命惜まうや。敵の寄せん

までもあらばこそ、早々館に火を掛けよ。

ヤア基長、義眞、立たぬか、應じたるか。

基長。ハ、ハッ重れん、恐れ入り、奉る。斯様に
思し切らせ給ふを承り候ふ上は、父上

は何とも仰無く候へども、返すゝも心
安く存じ候。船上山へ御ン登り候へ。基
長御供仕らん。

長年室。ホ、然ぞあらん、然もあらん。平場
の陣中に婦女は忌まるれども、籠城には

婦女も交る例、年老いて甲斐無けれども
長年が妻、味方の爲に傷を包み薬を煎て

なりと、心ばかりは盡さん。

基長。ハ、ハッ。

義高妻。わらはも母上の御ン供申さん。

基長。嫂上ナント。

義高妻。夫こそ居合はされ、夫の分まで忠義を
盡さう妾の覺悟。

土用松丸立上り、無心に勇ましく塵を振る。此模様宜しく、櫓無しにて幕。

第六齣 船上山

元弘三年二月二十九日。

伯耆國東伯郡船上山。東坂。

味方兵卒多勢及び寄手兵卒多勢

内河備中守義直

鳥家彦七宗家

名和孫三郎基長

同 乙童丸

日野三郎義行

同 又三郎義泰

長年甥六郎太郎義氏

内河彦三郎義真

稻井瀬五郎三郎弘義

梶岡入道

田所五郎左衛門種直

名和又太郎長年

同 太郎長重

同 小二郎長生

信濃坊源盛

六條少將忠顯

四十歳

五十五歳

四十五歳

二十四歳

二十七歳

成田小三郎堯心

後上りの地勢、樹立の中に古りたる船上寺

大門ありて、一路これに通ず。路の右は谷

左は崖、門より内は、懷や、闊く、門より

下もまた漸く開く。門の兩袖より前へかけ

て、枝葉付きたるまゝに大木を伐倒して逆

茂木に引き、僧坊を破りて其の材を搥櫓に

極き、或は眞の搥櫓を築きならべ、矢倉を

組む。門内遠く奥の方に船上寺山門見え、

又樹の間に幕張有りて、其の蔭に旗の手見

ゆ。防禦の手薄なるを見透されじとの用意

はおろそかなれど、人足らぬ大手のさま、

おのづからにして凄壯陰慘の氣あらばる。

ドンチャンにて幕開くとこゝに、

大手守備主將孫三郎基長。甲冑、弓箭を帯

び、小高きところに床几にかゝる。

基長季弟乙童丸。華やかなる鎧、兜無し、

薄金鉢巻、猶ほ垂髪の年齢ながら、小薙刀

を引そめ、これも今日の戦に會ふ可き意

氣。

日野三郎義行。甲冑、弓箭。

義行子息又三郎義泰。甲冑、弓箭。

長年甥五郎太郎義氏。甲冑、弓箭。

鳥屋彦七宗家。甲冑、弓箭。

内河義直。甲冑、弓箭。

軍兵若干。

日野三郎以下、切株、巖石、地瘤、倒れた

る樹、或は地上等へ心々に居流れる。いづ

れも遙に名和莊の方を打見やり居る。

兵甲。アレ／＼烟はい／＼熾に、

兵乙。たしかに御館の焼けるとおぼしく、

兵丙。空を焦して猛火のいきほひ、

兵丁。道程あれどすさまじく見ゆ。

内河義直立上り、同じく之を望み、

義直。實にもの共の申すどほり、世の常民家の

燃ゆるにあらず。方角といひ、火の嵩と

いひ正しく御館に火の掛かりて、

鳥屋宗家亦立つて見、

宗家。火焰烈しく焼亡する體。

基長一同に、

内河彦三に命じ置きて、敵のい／＼寄

すると見んには、館に火をかけ相圖をせ

よと、云ひしに違はぬ彼の火の報知。こ

ざかくも敵のはや寄するよな。方々、

者共、敵は何千來るとも、初の合戦、一

大事なり、必ず必ず斬勝うぞ。

日野三郎動き出でて、

理否を知らぬ。汝等神國の姿を忘れ、一
の君を軽くし、六波羅鎌倉を重んじて、履
を冠と頂けるとも、古履・泥履・破れ履、
踏出の北條を頭に載せて、心ある者の何
時まで有るべき。無益の廣言放たんより、
過を改めて帝に仕へよ。さらすば汝等、
逆臣・朝敵、天罰・神罰、思ひ知らせ、
鐵の鎧となして呉れうす。
弘義。何を小癪な。者共、蒐れ。
入道。射て射すくめよ、物言はすな。

金鼓烈しく鳴り、萬箭亂飛す。(此のあ
たりより舞臺大に暗くなり、雨雲出た
る體)

基長。矢合せの鎧箭、
義行。かうこそ射れ。

二人の鎧矢に寄手の鎧の毛美しき武者
二人、技音と共に倒るゝを初とし、名
和方の弓勢強く、寄手多く倒れ、又、内
河義貞等が横矢思はぬ方より飛來り、
関の聲す。

弘義。横矢があるぞ、
梶岡。敵はぬ、敵はぬ。

と、稻井瀨、梶岡等大第に退き逃げ入
る。時に其後方より猛者聲烈しく、

種直。見苦しい、見苦しい。

と、隠岐判官が頼み切たる執事・田所五
郎左衛門種直、目ざましき大鎧、新し
を率ゐ、黒滋藤の弓を取り、馬上に焦
り、大音に、

種直。きたなき味方の振舞かな。ヤア／＼者共、
應せぬ面に矢は立たぬぞ、應せず射る

矢は立つものぞ、田所五郎左衛門が射さ
まを學べ。

と、一箭を放つ。名和方一人弦に應じ
て倒る。これに勢を得て寄手復盛返し
進み、種直烈しく下知す。隠岐判官打
扮立派に、騎馬にて現はる。

判官。かれ、かれ。

軍兵。軍兵一人急ぎ足にて駆付け、基長へ、
大殿のこれへ渡られ候。

山上より名和長年、黒絲絨の鎧、五枚
兜の鍬形打たるに、二十五指たる白尾
の矢、嚴物づくりの大太刀、五人張の弓
を手挟み、同じく甲冑せる太郎長重、小
二郎長生を左右に、軍兵を従へて悠然
と現はれ来る。

基長。父上は何とてこれへ御向ひ候ふか、御
前も淋しく御渡り候ふらんに。

長年。其方の防戦覺束無しとは思はれども、今
日の合戦に箭一つ射ざらんもとて、こゝ
には來りぬ。一箭射て歸らうす。見よ

彼の四方白の着着たる奴の、小賢しう振
舞ふに一箭浴せん。

種直。者共進めや。楯を繰つて突立て進め。
敵は弓彎く腕たるるめぞ。進め／＼。逆

茂木引抜け、門押破れ、切入れ、切入れ。
と、身を揉み焦りて下知する。軍兵勇
んで逆茂木際まで押進む。長年中差取
つて番ひ、よつ引て兵と射る。種直射

通されて馬よりドツと落つ。これを見
て郎等源七、楯を突掛けさせ、主人の
屍を肩に引懸げんとする。長年の二の
箭また之を射て、楯突の卒の頸の骨を
射切り、源七が肩を射、二人共に斃る。

長年。長年が弓勢は知りつらんに、是迄寄せた
るやさしき敵かな、眞向・胸板・内兜、い
づれなりとも箭坪を望まれ候へ、よもや
箭坪は違へまじ、三の箭を尋常にみあら
せんものを。

と、罵る。此時山上より俄に震動雷電
して、風雨暴び至り、寄手落膽動轉す。

長年。寄手は萎めるぞ。此圖をはづすな。前軍

笑聲の中に義眞、基長の前に到り、跪く。

基長。ヤア彦三郎、様子は如何に。

義眞。さればに候。御館に残りて敵の動靜を伺ひし中、いよく寄すると見て取りしかば、御館に火を掛け、駆け抜けまゐりつゝ、又豫ての計の如く、獵師農民の弓撃く術を知りたる者等を募り語らひ、箭束を與へて樹の間・森蔭より遠矢を射させ、味

方の手薄を知らせぬ手配。おのれは斯の如く姿をやつし、敵の目を欺き危を冒し近づき探りて歸りて候しして、敵は、

基長。敵は葦見畑にて手分をなし、西坂の方へは能登守清秋、參河守清房、佐々木佐渡前司等、其勢一千四百餘騎、はや押寄せ

て候はむ。此の大手へは隠岐判官清高、田所五郎左衛門種直以下、稻井瀨弘義・梶岡入道等、其勢二千餘騎、ひし／＼と攻上り、間も無くこれへ寄せ候はむ。たゞ手剛き奴は田所兄弟、其他は取るにも足らずと見候。

といふ時、遠寄せの鳴物になり、哄と鬨の聲す。

基長。

オ、心得たり、西坂は鬼五郎助高・信濃坊源盛等、勢多く守りたれば事も無からん。隠岐判官如きへろ／＼武者、何事かあらん、蹴散らし呉れん。者共、鬨をも合すな、靜まり返つて引付けて射よ。

ふたゝび盛に鬨の聲す。

基長。

彦三郎は行宮へまゐり、父上に、合戦只今始まり候。瞬く間に斬勝つて、宸襟を安んじ申さん、と申せ。

義眞。

ハッ、仰には候へども今始まるべき戦を、後に見んば残念至極、年老いて甲斐無しと御寶にや。義眞此儀は御敵退申し、申付けたる者共と、林間より遠箭を射て敵を有さん、御免。

と、痛聲烈しく、頭を打振り、急に下手へ走り去る。

基長。

ハ、老の一轍、道理至極。と、點頭して許し、四圍を見まはし、さらば乙童、汝まゐりて味方の瑞相、義眞が注進の趣、父上に申し、歡應を安んじ奉れ。

乙童丸。

いや、いや、いやでござる。年幼くして甲斐無しと思すにや。と、怒つて躍り上り、薙刀を烈しく振

閃かし、屹と見得。

基長。ハ、よし、さらば其方まゐれ。

と、軍兵甲に命す。甲令に従ひて奥深く駆入る。

此間に三度鬨の聲して、陣鉦太鼓繁しく近づき、寄手の先鋒稻井瀨五郎三郎弘義、加茂梶岡入道等、搦櫓を繁く雜兵等にかゝせ、

稻井瀨弘義。ヤア／＼、大手を守るは誰ぞ。六波羅の下知を負きて隠岐の君にかしづ

き、世を騒がし民をわづらはす名和一族、隠岐の君をわたして疾く降伏せよ。迷を執つて抵抗せば、分際知れたる峰の巢、蟻の巢、撲き落し、踏潰して憂目見せん。惣大將は隠岐判官、先鋒は土地の案内知つたる。かくいふ稻井瀨五郎三郎弘義、

梶岡入道。同じく加茂の梶岡入道。疾く／＼城戸を開き降伏せよ。入道役はそれがしが。慈悲の扱ひ致し呉れん。

弘義。名和の者共。

入道。弘義。いかに／＼。

と、大音に叫ぶ。是にて基長、義行など矢倉の上にあはれ。基長。おろかなり、稻井瀨、梶岡、利害を知つて

長年。

苦の下蔭に、御心細う埋もれさせ玉ひし時、よるべもなみの荒磯の御船に、御直迎にまありし長年が忠、うれしき。頼もしき忘るべからず。古き喻の・君臣を船と水との契に比せしも、つく／＼胸に浮められて、船ありと雖も水無くば、馳走心に任すべからず、鷹ありと雖も長年無くんば、望み達せんこと難かるべし。今度逆臣の難を免れしも海上の故なり、今又こも船上山なり、鷹は船なり、汝は水なり。悲しきおもひ出、嬉しき思出、はるけき行末掛けてのおもひ。君臣の契永くたがはざらん、今より汝が家の紋に、水と船とを仕るべしとて、御手づから忠顯に御教ありて、帆懸船を畫かせられて旗一流、これを賜はる。叡慮をかしこみ拜領あれ。

と、鳥家宗家に持たせし旗を長年にわたす。長年及び一族、叡旨をうけたまはる間、數々感激墮涙す。

ハ、ッ。身に餘りたる御恩寵、奥深き叡慮、一身の面目、一族の規模、子々孫々の末にかけて誓つて聖旨を忘れしめじ。長年何よりも有難く頂戴仕る。

長年。

と、旗を繙き・竿を起す。基長竿を執りて樹て、義行等皆仰き瞻て歡び勇む。あゝ勇ましくも又やさしき、恩賜の旗の紋じろしかな。基長・義行等うけたまはれ。實に君臣は船と水、あらし亂されば・水はもと平らかに、相直ければ船の行くこと疾き・本然の相こそめでたけれ。我執・我慾のあらしに吹かれて、浪の逆立つ世にはあれども、もと靜なる水の心の・誠・訴へて狂瀾なしづめ、狂ひも狂つて水・天を拍つ・陪臣政治の非違をたゞし、君民一體の御代となさでやは。進むといふも船の縁、乗切るといふも船の縁、恩賜の旗の旗を先立て、風逆らふとも潮逆らふとも、君の御申供申上げて、オウナウ、基長、仰せまでも候はず、一族・心を一ツにして、風にも進み・潮をも乗切り、海路漫々杳なりとも、目ざして行き得ぬ港も無ければ、

義泰。たとひ敵勢の雲と隔つるとも、霧と塞がるとも、

源盛。一心の磁石の鍼を正して、傍へはそれぬ眞軸走りに、

義氏。惡戰苦闘の危き瀕門もあらばあれ、乘通

し、

乙童丸。乘通り、

義直。生命の限り帆は下げず、

長重。あらゆる障礙を切つて拂つて、

宗家。禍津毘・罔象、あやかしなんど、五月蠅な

者共を、

長生。乗敷き引敷き、踏殺し捨て、

成田小三郎。直毘の神の御姿を見る、

長年。すなほに清き上つ代の・追風追波の世となして、都へめでたく還幸の御申供申し、

君の御本意遂げ奉らせん。

忠顯。願望必ず叶ふべき吉兆の今日の勝軍、

雨後に雲斷えて天さらに美しき、日本晴

のよい心地、

堯心。恩賜の印の旗の下に、

忠顯。めでたく勝鬨を擧げられよ。祝浩々々。

長年、基長、一同旗下に快然として笑み含む。

長年。勝鬨。

一同。エイ／＼オウ、エイ／＼オウ。

(大正二年夏作)

面倒なり、斬つて出でよ。

軍兵城戸を颯と開く。

乙童丸。名和ノ乙童。生年十四歳。隠岐判官。見

参せん。

と、躍り出す。

義行。

幼き人に先を蒐げられ、など阿容々々と目成り居らうや。

と、斬つて出づ。基長以下皆逆茂木を

引抜き、斬出で、雷電・風雨烈しき中

に烈しき闘。劍光・電光・叱聲・雷聲、終

に寄手を斬捲り終る。

基長。

長追無用、止まれ。向ふ敵をば切つ

ても拂へ、逃ぐるば斬るな。帝の御民で

戦は勝つたり、あゝ心地よや、御運め

でたき君の瑞相。ハ、ハ、ハ、ハ。

長年。

ハ、ハ、ハ、ハ。彦七宗家。

宗家。

ハッ。

長年。

先づ疾く此の有様を奏聞せよ。

宗家。

ハッ。

此信濃坊源盛・裏頭いかめしく、大鎧の上に佛衣、射向の袖、垂なんどに箭を負ひ、かすり疵少々、したゝか

に働きたる體、血を引きたる長巻を脇

ばさみ、堂々と奥の方より駈來り、

源盛。兄上、基長、

と呼ぶ。長年矢倉より下りて、下手よ

り出で、基長等も還り、附添ふ。

長年。オ、信濃坊、

基長。搦手西坂の戦は。

源盛。ワッハ、ハ、ハ、とかう申すまでもあら

ばこそ。

長年。ム、切勝たるよナ。

源盛。ワッハ、ハ、ハ、勿論の事。

基長。彼方も勝利、

源盛。此方も勝利、

義直。めでたし、

義氏。めでたし、

義泰。よろこばしや。

義行。かほどの小勢にて勝たる不思議ぞ。

長年。一族郎黨が覺悟の臍を堅め、思ひ切つた

りし故と云へ、これしかしながら我が

日の本の國の姿を尊みまもりて、まこと

の君を君といたゞき、臣子の道を盡した

る爲、天つ日未だ地に墜ちれば、我が神

國の神慮に叶ひて、神威の加護ありしに

疑無し。

軍兵一人駈來り、

軍兵一人駈來り、

今これへ御ン越にて候。

と、告ぐる。是にて一同體よく居直る。

六條少將忠顯。鯛衣冠束帶して、成田

小三郎、鳥家宗家、及び軍兵を従へて來

る。此時天晴れ明るなる。

忠顯。

オ、長年殿、基長殿、一族の方々皆無事

長年。

幸に神威君徳により、一族力を致すを得

忠顯。

君には戰況逐一に聞召され、御感の餘に

長年を左衛門・尉に任ぜられ、まつた基

長、助高より乙童丸まで、追つて一々御加

恩あらん御思召。

長年。

ハ、ッ、功未だ金からず。志猶ほ遂げぬ

に、天恩優渥、畏れ入り奉る。よしなに

御執事願ひまゐらす。

忠顯。

猶ほ又君の御思召寄らせに、きる日隠岐

の島を出させ玉ひてより、漫々たる海上

波濤の上に、雲にたゞよひ、霧に暮して、

浮世つめたき二月の嵐に、頼み少き一葉

の船。御ン夢寒う枕とゞろく夜の潮の淋

れば良いものと心得たる釜貞、悠然として大阪に一人占の利を見居しところ、おもひもよらず切つて出でたる他の手柄に我が肉を食はれける。仔細たづぬるに一人は新八とて京都より下り、一人は太七とて土地の生地屋が弟子、何れも新手の蓋の仕上様工夫し出して、業に粗忽なきが中にも取分け新八は唐銅を焼きて色を出すこと巧に、出来上りを見れば一葉の蓋の面、夕照の空に漂ふ雲の火を映く如くなる美しき斑の亂れて、其斑と地との間は靄然として七彩浮ぶかと疑はるゝやうなれば、人之を何時となく虹蓋と名づけて珍重する事大方ならず。されば世間受け好きもの製造へではと、問屋達一人頼み二人頼みて新八は最良にするより、他所の幸福は此方の不幸福、顧客の漸く無くなりて悲しきは貞が身の上、素より僅六軒しか無き問屋の注文、昨日と減り、今日と減り、土間の熊野炭の火も濃りて、仕事なければ貯蓄なき職人の米櫃がたつき易く、心細さは居食ひ賣り食ひ、少しばかりの衣類も一枚づつ口に入れて亡くして行く仕儀、此前途を如何なると粉になつた煙草すくひ喫みながら肩皺めて女房の間ふに、答は能くせず、溜息つくゝ思案しても、別に智慧の出るではなし、金の湧く道の付く筈もなければ、

は、畢竟我が生命は我が腕で支へるより他に分別も策も浮はず、さりとて弦の無い弓は響けぬ譬喩、問屋を離れては仕事の仕様もなく、此方から應々足を運び、泣き付くやうにして我方へも三十枚五十枚の仕事させて下されと言ひ込むに、御氣の毒ながら、先御斷りします、當世は何でも眼前變りて美麗なものならでは捌けぬが常なり、汝も新八に劣らず見事に遣つてのけるれば、三十枚五十枚はお客が御來臨なくとも此方から頼んで、三百枚五百枚も遣るべけれど、在來の質素な仕上様では其を買ふ人なければ、此方は商賈、賣れぬものを作らせる譯には行かず、それとも平生の執拗の我を折つて虹蓋作る工夫でも爲て來られしかと、我が爲に敵同様の名を聞くさへあた忌々しき新八を揚げて此方を貶し、罪もない女房子までを苦します云はゞ敵の利器虹蓋を褒められて、注文受けようの慾よりは口惜しき業腹さの痛癢が眼にあらはれて番頭を睨みつけ。虹蓋の御注文なら頼みますまい、假令仕事はあつたりとも其等は新八なり太七なりへ與つて下され、輕薄なイヤ輕薄ではござるまいが見體ばかり善い彼様な細工を爲るは私には出来ませぬ、是は大きに御邪魔いたしましたと答へて、又他所の蓋屋へ行けば、此家

でも同じ様なこといはるゝに薄腹立つて。えゝ面白からぬ世間の流行、何がよくて下らぬものを半可どもの賞美することぞと、我が不得意に人うらめしく、頭を垂れて戻る道、我家を望むにも生活の苦勞胸をついて起りぬ。

二

何の才覺もなく素手で歸らば、今日は仕事を取つて來るか内金なりと貰うて來るか、而して彼して斯してと女だけに餘計心を馳せさせ、心待ちに待つて女房が居るべきものを、無下に落膽さする切なさ、おのづから歩む足も緩くなりしが、おもひ切て内にはひれば、お歸りなされしかと極つて居し針止めて、此方へ向きかゆる女房。問屋の首尾はどうでござりました、又しても彼新八太七めに此方への注文の先なくぐられてか、妾の氣のせぬか御顔の色もどうやら冴えては見えぬか何うかなされましたかと、夫な慰むれども自分も苦勞に憂む顔、のんびりとした容姿はなくて心配さうに問ひかくる風情見る眼つらく、開かむとする口も心苦しさに塞がりて、何の得る事なしに歸つて來たと素氣なくば云ひかれ、推黙つて居る傍から、からくり鉗持つて土間で何か頑弄して居し長次

蘆の一本

つく／＼おもふに當世の若輩柔弱すぎたり、美術品といふ清潔な名に託せては春畫を古本屋で探し、文學でござると老父を遣り込めては新版小説の白粉臭いところだけ熟讀する片腹痛き、第一髪の毛を異に揃へ、裏白の足袋など穿き居る奴輩に疎なものの決して無し、と無暗に罵る男は又、日本魂これなりと狗も切れぬ仕込枕をひねくり、床しくもあらぬ血、骨、鐵、劍、雷、電なんといふ字の入つた文章をよるこぶ彼馬鹿さ加減あはれなり、まづ何よりも左の肩を昂らせて歩く氣が知れぬほと嘲らるゝ現今の風俗。那方が良いか分られど、職業持ちしものは、明治の御代となつてから以來、株とか家筋とかいふものゝ利がすなりて全く銘々の働きの勝なれば、中々無駄口など叩いて居られる世界でなしと、誰も彼も引締る根性、磨く手腕、怠慢なく其道々を勵めば聞くさへ快き談話の有り。事は明治の四年なるか、ところば日の中央、鎚

抜く船帆下す船の何時も群る大港、商賈往昔より盛んに、種々の工業もそれに準じて隆盛なる大阪、高津のほとりに釜貞といへば其府で唯一軒の鐵瓶の蓋の仕上師として知られたる家の、主人は京都の淨雪が門より出て昔時氣質の職人肌、頑固の看板と他の笑ふ畜畜なも、なんの唐人の眞似して鉄み取るにも當らずと頭上に戴き居るやうな心掛、自然技にあらはれて纖巧なものに兎も角も、作り上ぐるは皆渾厚として云ひ分なければ、關東關西兩手伸して取引する久寶寺町の井筒屋、浪花橋の釘吉、松喜、金彌なんと呼べる名高き問屋の受けも好く、註文引もきらざるにぞ、今宮藏跡二ヶ所の生地屋より送り來る蓋の轆轤目取るに朴の木炭の動き忙しく、九夏三伏の暑き日さへ土佐炭紅々と燃して、色出すために唐金を焼くや自己の顔も色づき、滴る汗を拭ひもあへず、それ焼床箸、みこ簀、ほそちや、きさげちや、からくり榎ちや、萱て燻せや酢に漬げよと、十六になる我子の長次と職人一人とな相手にして他念なく働けば、持ぐ門

には福來る道理、生計むきも先づたかに、折ふしは戶外通る魚屋呼んで何やら下物に晩食の膳の上、疲勞をやすむる一陶の酒を、媚めかしい世辭は云はれど燭のつき加減に眞情ある女房が酌で飲みて無事平穩の微醉心よく、樂寢の夢を惡鬼に魘はるゝ事もなくて済みけるが、扱、月は窓前に常住の燈をかかげず花は梢頭に不斷の香を噴かざるが實際の世の常。京都に名高き龍文堂といふ鐵瓶屋が、時勢の遷りて人の嗜好も漸く變り、無異づくりの古風型、在來りの無地、あらねなどでは假令精巧したりとて珍重がられずと察して、鐵瓶全體を恐るしき岩組のさまにつくり、或は奇怪なる草花を纏はせたるものなど鑄出して評判とりしが抑々の始まり、八角、四角、角取り、直筒切りと異形新案の詮議冗じて蓋に及ばし、厭味なき一文字、すくひは却つて用ひず、勿體くさき獨樂蓋、唐蓋、法華堂と人の目前を悦ばすことのみに掛くれば、時好に便はるゝ職人の習慣とて、我こそ珍しき思付して喝采と云はれぬ、無類の物作り出して同輩を凌ぎ呉れむと、商賈忌み敵、一ツ埒の中で競はせあふ心の駒、後を取らじ先駈したしの慾に各自油斷なかりしより、風潮といふもの露知らず、競争者も持たで正直一途、唯手堅く仕事さへ爲

けれどとは瘦我慢の強がり、出来やう筈の無きに其を明けては猶云はれず。喧ましい、女の知つたことならずと慥しめて後は無言の淋しさ、額は集めながら親子三人化石したやうなものなり。

世態の胴骨得たり顔の男が、寢たらぬ人を尊しというたる秋の夜の、長さを去歳までは左ほどとは思はざりし貞吉も、晝の仕事なきに身體疲れば、枕についてより心しきりに芥えて彼忌々しさ此困しさな我が胸に我が念で繰り返す幾千度、えゝ無益しと合はぬ臉を無理に閉ぢ、寢返り打つて女房との中に寢たる長次に背面を向け、睡らむとすれば尙睡り難く、餘計も動けざる小蒲團の中にのつそつすれば、遠寺の梵鐘の音既二時を告ぐるも癪に障り、腹は怪しう淋しうなりて心火いよゝ高ぶり、いつそ身を冷たい水の中へなと投げたいやうの氣持の爲るなぢつと堪へる切なき、復寢返り打つにも今度は寐入りたる女房に憚るごとく靜に爲る折節、閉ぢたる眼前に更紗模様に似たるものゝ見ゆる中に螢火ほどの光あらはれ、それと思ふ間に其光大きうなりて、忽然爛々たる虹蓋に化けるが早きか紫銅の斑が眼鼻をなして憎くも我を嘲り笑ふに、汝と拳を擲り上げてハット驚けば半分

はたしかに夢であつたり。惜しい事眠かけしものなら醒めずとも可かりしにと、一層悶悶たる頭の方にこそつく鼠兎、それまでが我を侮るやう思はれて何を敵といふことはなけれど怒氣心頭に發れば、取るにも足らざるものに對つて一ト聲烈しく畜生ッと呼ぶ途端。父様まだ御寐られませぬかと我が子に打込まるゝ五寸釘。可愛や睡い盛りの此子までが、くさくした辛勞に能くも眠られて矢張起きて居たことかと、其心根を察すれば我が胸元の痛くなる仕誼、氣をたゝせず休ませたさに、故と返辭もせざるだけ鬱々として、悲しい恨めしい嫉ましいの三ツの情が巴綸になつて眉間尺の花火のやうに毒煙を吐きながら頭腦の中で狂ひ廻り、順序立たぬ念慮ばかり電光の如く迅速に曲折して閃き渡る不平の暗黒界、末にはむしやくしや、滅茶々に、七情矢に驚く禽と亂れ、百八煩惱酒に集まる蚊とわめきて、脊骨の髄が烙鐵でも當てたいほどむづ痒くなり、思はず握りつむる左右の拳、指甲も掌に食い込む無念さ、えゝ此忿恨何時か霽るべき。

三

貧すれば鈍とは能く云うたもの、分別智慧は

ありながら、孔明が算盤取つても二二は四、三五は十五なれば、畢竟兵糧の不足なが負くる道理にて、知りつゝ出来した不義理の借錢に、貞吉今は日三度夜三度、焦熱、大焦熱の苦惱を受けさせられ、頭も随分廉く下げ、掌も新發智位には併せて詬びたり願つたりせしが、人情も實は損の行かぬまでの事、自己に不利益と來ては一毫も假さぬのが當世の習俗でもありまた道理でもあれば、さうくは質屋の若い者も種當い顔をせず、薪炭屋の緒面男、米屋の痰瘤爺いづれも眼玉を剥き出し青筋立てゝ、つんけんがみと咬みつかかねばかりに罵り辱り、品物は遣して呉れいで帳面の坪のみ責め立つるを、分疏は既早赤手で利かぬやうになつた曉、何と屑の動かしかたも無く、謝罪る三昧平謝罪りに謝罪つて過ごせしかど、九月十月十一月となつて二途も三途も叶はず成り、崩れかゝつた裏の竹籬に枯れて残りし朝顔の蔓をかさゝと鳴らす風の音も寒きに、破れ障子破れ袋の辛さ悲しさ、これも皆虹蓋ゆゑと齒切して、恨み憤るは朝に晩になれどよい思案は浮びもせず、有るほどの物を道具屋に屑屋に賣り盡して露の命を僅に細と維ざしが、例の米屋の因業爺が、堅いとおもうたればこそ今までに既十何圓といふものな

が、親の憂を身に引取つた眼付くやしさに。父様矢張り忌々しい虹蓋の註文で腹たゞせられ御歸りなされたかと思へる笑止さ。オ、分も分らぬ問屋の奴等め、誰も彼も虹蓋々と虹蓋が何れほど好いものゝやうに云ひくさるが癢に障れば、其註文なら新八か太七めにかづけて下され、そのやうな見てくれ許りの仕事をする我等ではござりませぬと云ひ捨てゝ歸つて来たが、汝と十七、彼等が仕事の手筋も大抵知れてあらう、世の中は齒痒いもの、千人集つても盲目ばかりの素人たち、見付きに欺されて異なものな嬉しがる馬鹿々々しさ、噫もう正直の頭に當時の神は宿りくらゐ、眞面目に働くは甚い白癡ぢや、やれゝ蓋といふ言葉なきくも厭になつたと、人知らずして發せる慍、時利ならずして懷く恨を、僅に洩す偏偏言に、きかぬ氣の長次、殊更奮を破つて花ならば是から咲かむといふ勢の年頃なれば堪へず、鎧を地にたたきつけて父にすり寄り。それは父様思慮が弱過ぎませう、商賣敵の新八太七め、何のやうなことをして彼様美しう仕上るか兄には未だ了りませぬが、彼等の仕様の父様に見え透いたならば此方でも彼様なもの仕出して、虹蓋でも雲蓋でも關つた事ではなし、彼等の鼻を明すほど美

しく美しいものを作り、奪られた問屋を奪り返し、今見る此方の憂目辛目を彼等に見せてやつたがよいではござりませぬか、今日も今日とて父様の御留守に米屋の痰瘤爺が来て色々の因業をぬかすやら、質置いて貰うた車屋の鳴が来て、母様の大切におもはるゝ髪道具を此處で切り替へて下されれば流しまするが宜しうござりまするか云ふやら、薪炭屋が来るやら、母様もあぐれ給へば皆兄が宜いほどに挨拶して、今日は問屋へ行かれしなければいづれ歸られたら若干かの金も握つて來らるべく、仕事もあるべければ其方様から催促なされずと帳面の埒残らず付けましょ、ともかくも今夜までまあ待つてと云ひまざらして追拂ひはしましたれど、おもへば此様な口惜い思をして彼處にも此方にもあやまつてばかり暮さうよりは、日頃の意地を御捨になつて虹蓋作られたがよいではござりませぬか、仕様さへ教へて下さらば、兄も怠けずに手傳ひましょと、齡にはましたる伶俐の言葉。他所の親がこれほどの子をもたば自慢にして喜びますべきが、貧が付けたる智慧とおもへば却つて智慧のあるが悲しくて、母は既腕くも破れ火鉢の蔭に泣くに、親父の貞はまた虹蓋といはる度に好い心持せず。黙れゝ汝までが虹蓋

づくめで人を侮るな、彼様なもの作るに造作はなけれど、輕薄な細工するは我も嫌ひなり、没くられた師匠の淨雪にも濟まず、新八太七の涎を嘗つて飯を食はうといふやうな剛しい考は誰の子で汝が持つ、咄、流行物は廢り易し、虹蓋も風前の虹と消えて我が細工の頃で行はるるは知れた事、これ長次聞け、細工人といふものは、各自一流の操を立てゝ、鍛冶でいはゞ備前は備前、鎌倉は鎌倉で手筋を亂さず、彫刻見ても知れ奈良の獅子と後藤の獅子とは違ふぞ、流行廢義は世の常驚くに足らず、米屋が何あらうと薪屋が何あらうと其様事に心を取られて細工の仕様替へようといふ如な卑劣な了簡持つては汝碌な奴にはならぬぞ、と散々の不機嫌。傍に聞て居る女房堪らず、又しても頑固な事ばかり、左様は云はるゝものゝ、此方の流義は此方の流義にして取つて置いて、虹蓋が出来るならば其を爲らるゝがよし、細工の流義も畢竟食はず飲まず飢死しては立つ瀬なければ、是から長次を問屋へ遣つて、新八太七の爲る通り出來しやすと受合はせ、何枚なりと取つてこさせては如何でござりまする、既夕風の身に染みて蟲の鳴く音も弱る此頃、此上に貧を重ねればと、せがむも女の無理なられど、眞實虹蓋作るに造作な

くまでも無く線香の香奥の方より洩れ来るに、ハツと驚いて、南無三三三口説かうと思つた叔母の無常かと落膽する時、亭主は眞面目に、蟲の知らしたでも申しするものか御來臨になつたは實に不思議でござりまする、御承知の通り嚴暑づくりの母がまだ百までもといふ氣勢で居りましたに昨日の晝頃より氣持の悪いというて一寸横になつたまゝ食事も仕ませれば、何様ぞなされましたかと小生も嘆も尋ねましたに、苦しいといふではなけれど唯何事も懶いゆゑ此儘に置いてくれとの事でござりました、なれどいくら丈夫というても八十を超した身體、萬一のことでもあつては大事と、醫者を招きましたところ、全くこれといふ病症のあるでは無けれど精根を悉皆用ひ盡された身體なれば、薬は進ぜるものゝ體でござらうとの診斷、吃驚しても追ひつかず、果して昨夜の零時何分油の盡きた燈火のやうに苦惱も左しては見えずに亡くなりました、御疲勞もござりませうし甚だ恐れ入りまするが手廻りかぬ中でござりまするは、葬送を今夕いたすつもりでござりまする故、其を済まして仕舞ひまする間は何角と御助力願ひまする、と云ふにさしあたつての當惑は、此方の目算のがらりと外れしのみならず御佛前へ

とさし出すべき筈のものを出さんにも一文無しの如何とも仕難き一事にて、夜船に乗つて態々参つたは斯様なことを願はむためといはむことは扱措き、貧しても根が義理堅き正路の貞吉腹中七顛八倒の思をなし、よく運にも盡きたるものかな、何と此場を濟まして可き、と我、我に問うて、我、我に究するばかりなり。

四

長次は起き出でて父の在らぬを怪しみ訝り、心元無げに父様はと問へば、答辭よりは涙を先立たして如斯々々の仔細と鼻聲で告ぐる母の談話に、口惜いとも業腹とも云ひやうの無き忌々しさの念慮に堪へず、夜逃同様に我が父を此地退かせし歟と無念餘りてばらくと逆り落つる涙の滴ぐ我が膝を我と攫んで、きりりと齒を咬みながら、これも誰故新八めがため太七めがため、憎いは二人、恨めしきは虹蓋と、恨みに恨み憤りしが、よし、我が腕はまだ幼稚くとも、一心かけて爲んことの成らぬといふ理あるべからず、磨き方より燻し方、色の出し方、仕上げ方、金屬一ト通りの扱ひ道は、大概既に合點し居れば、是より必死と思ふ積みて彼の虹蓋と同じものか乃至それよりも精きものを作り出

し、新八太七が鼻を明かせ、奪られし間屋を奪りかへさん、彼等に出て来る虹蓋の假令は祓法あるにせよ同じ手もあり脚もある我に出来ぬといふことあらむや、祓法のあらは祓法を盗みて、似而非細工の底を破り、氣の毒ながら其様なものは此方でも容易く作れるはと笑つて呉れれば腹が癒えず、父様は細工の意地とやら舊弊なことをいうて居られたれど、よしや虹蓋の眞似にせよ、我が爲るには何の仔細もある筈はなし、明日明後日歸らるゝにせよ密かに我が爲出せし曉、此事成なば、其をも廢めよとは頑固に云ひ爲給はじ、兎にも角にも新八太七が鼻柱を挫いて呉れれば、合點出來ず、父上居給はぬこそ幸なれ今より工夫にかゝり見ん、と心の中に思ひ立つて母には別に告げもせず、其より仕事場に遣ち散れる一枚二枚の疵物の蓋の地金を檢出し、色を出さんと辛苦しはじめぬ。待つ身が辛きか、待たるゝ身の思が辛きか知られど、戀にはあらで風流もなき金子の才覺について執れ辛からぬは無かるべし。貞吉まさか他への不幸の中へ無心も云ひかれ、手助してといはるゝまゝに一日二日と心ならず日を送りしが、我が不在を想ひやれば居ても立つても居られぬ心地し、場合は悪けれど堪忍出來かれて葬送も濟み

懸賞無しの定規にして居る中で貸して置いて進
ぜたものを、好いはいふ氣になつてゐるか、二月
越し三月越しになつても構はずに置かれては、
此方も商賣でござれば堪忍が出来ませぬ、段々
と御様子も知つて居りますれば無いものを出せ
と比丘尼に向つて何とやらの請求をするではご
ざらぬが、たゞ御謝ばかりでは困るではござり
ませぬか、何處を何様して何日算段が出来すか
ら其時何様して遣らうとか、何時何處から入る
的があるからとか云うて下さるなら、又それな
的にとつて待つといふこともござりますが、唯
何時來ても無いから待つては厭なことも申され
ばなりませぬ、聞けば御親類も京都には在らせ
らるゝよし、親は泣き寄りでござりますば、隨
分仰り難いは知れたことながら、其方へ工面
を御頼みなさるは堪忍が出来なさらいで此方
へ唯々待つて仰やるのは堪忍が出来なさると
は些御料簡が能過ぎませう、此方は商賣でござ
りまするは、何程長年御馴染になつて居りまし
たからとて算盤を捨てゝ商人が立つ譯にはあ
りませぬ、と深切な械に下から出たり上から出
たりして説き寄むるに、其についでといふでは
なければ、眞實何様にも斯様にも詮方盡きて、
貞吉京都の御幸町なる母方の縁者を尋ねに上り

て幾干かの合力を乞ふことに決着しけるが、大
阪より京都まで僅少の路程にはあれど、苟にも
他行することなれば、事知られなば、また他の
懸取などに唐突いて逃ぐる敷とも疑はれかれま
じき今日、あれのこれのと面倒な挨拶も要るべ
し、兎角は知られぬやう、夜舟にて行くこと好
かるべしと、長次には知らさで夫婦談合を極め
しも、情無や船賃さへ才覺に困するまで行き究
つたり、引窓の車、風鈴の舌などは疾くに亡く
なつて居る始末なれど、女房一生懸命になつて
カラクタを掻きあつめたるに、唯一本頭上に挿
して居し搔頭兒まで添へて賣つて辛くも其丈
は得たるを、渡すも涙、請取るも涙、途中能く
御氣をつけなされて。留守は苦しかるが要さへ
濟めば直歸つて来るほどに。と互ひに果敢ない
言葉を交しあひて、四日の月の影薄く向側の家
の屋根に傾く頃悄然と立出で、往時なら三十石
といふところを今の川蒸汽船に乗つて、膝隣り
の人が頻りと煙草吸ふを羨ましげに見ながら、
あゝ忌々しい、これも皆虹蓋から起つたこと、
我が才能の無い故と云ひながら長年無沙汰を
したところへ土産一ツ持たいで突然尋ねるさ
へ體裁の悪いを、何と口をきつて合力乞ひに來
たと云ひ出し得べき、あゝ口惜しい、情無い、

後に殘せし女房と長次とは如何して明日が日を
過ぎさう、おもへばおもへば同船の人にも恥かし
い我が衣服容態、と淀川の夜風の寒さより自己
が懷中の寒さに、自然と肩を窄め身を擁めて、
隅の方に踞まり居ける。まだ夜深きに船は伏見
に着きて、乗客大抵は、提灯點し連れ來る宿屋
の男に引かれ、此地に牛旅籠の泊りをする例に
従ひ、どや／＼と宿屋に入るに引替へ、宿引の
捉る袖拂つて貞吉は直に京へと霜の降りる盛りの
中を饑い腹かゝへながら歩み出し、三里を拂
曉までに京に着きて、目ざせしところに尋ね到
り、面皮を我から厚くしたつもり勇氣で漸と
其家にじり上れば、心に一物あるまゝむすむ
すとして此方の口を開きかぬるを其とも知ら
いでか先方では此方に口も開かせぬほどに、能く
そ見えました、これはまあ御珍しい、知つて御來
臨か知らいで御來臨か存じませぬが、何にせよ
偶然御來臨になつたのも不思議なことではござ
ります、唯今手紙をさし上げましたところでござ
りまする、取込でござりますれば別に御關ひま
なすことは出来ませぬが何卒御自由にして居ら
れて下さるまいとの口上。ハテナと極みなが
ら光景に心づけば、成程人もたゞ／＼と見えて、
主人の女房は挨拶にて出で來らず、何事かと聞

の汝故、なんのと思つて却つて勵むかも知らぬが、必ず成るまいものでも無けれど、先づ成らないが結局らしいに、前途の長い身を無理に困めることは不要、ちと身體をも厭ふがよい、と婦女は婦女らしい意見な和らかに説いて聞かすれど、勝氣の長次は合點せず、胸甲斐ないことを云ふものかなと云はぬばかりの輕蔑も眼付に、憤恨の光を添へて母を見かへりながら、え、情無いことを母様の云うて下さる、眞實ならば腦味噌を沸し返しても虹蓋を工夫しただすか、虹蓋よりもまだ良いものを工夫しだせ、と云うて下されて可いものを、身を厭へとは何の女らしい、危険いことを爲るでは爲し、たゞ爐の周圍にこと／＼として一日暮すだけのことに病氣も絲瓜も出るものではござりませぬ、成る成ぬは後でのごと、今から證議をするには及ばず、なんでも長次が出来して見えます、昨夜も床の中で考へ、陶器に用ふ色の藥料、または七寶などに用ゐるものを内實使つては居ぬかと思ひついたら、今日これから陶器に用ふ藥料の話だけを其邊尋れて知つた人に十分問うて見るつもり、七寶の方も其通り、假令に教へて呉れぬにせよ、意地の悪い人ばかりは居ず、根氣づよく尋れまれば何處かで相應の智慧を得ます、

母様關はず置いて下され、屹度細工の上の仇を復して御見せ申しませうと、手強く云ひ張り、一寸一毫心を外らさず。それより長次ます／＼勵みて彼の此のと氣のつきしほどのことを爲し試みずといふことなく、爲し極めずといふことなし。されど一向手がかりなければ殆ど失望落膽して、心の弱り身の弱りの二ツに盡されて病にもならむばかりになりたりしが、今一應の骨折を成さるまでも遣つて退けん、此上はたゞ新八太七が家の周圍を覗ひて、少しなりと珍しきことを聞きもし見もしせば、其を土臺に工夫を凝らさん、軍書講談で聞きしことある間者といふものゝやうに我身をなして、彼等が秘密を奪ひ取らむに、何の取づべきことあらむ、湯加減を偷みて刀鍛冶左文字の名を成せし話は父様に聞きしことあり、偷みたりとて左文字をば惡くいふ人なきのみか、却つて良工の苦心とこそ褒めて傳ふれ、我が事極めて小さくして僅に鐵瓶の蓋に過ぎねど、辛苦を辭せざる我が念は、往時の良工にも劣らじ、いざや最後の勇氣を奮ひて新八太七を何ばむと、黄昏時の薄暗き折に乘じ、又は曉天の戸を開き工場を整へそむる混雜の頃を見圖らひ、或時は通りすがりの風して日中工場の前を横眼づかひしながら二度三度往

き反りして、異りたることもやある、我が知らぬ仕事の仕様やあると意を注ぎしが、肝心肝要の色彩發揮は、奥まりたるころにてするものとおぼしく、終に一向眼に入らず、店頭にては何時もながら朴の木炭もて忙がしげに地を磨き居る者四五人のみ。これでは到底秘密を覗ふこともできずと嘆息せしが、長き日數の其中には、また眼に留まることもやと、いさゝか拂むこともなかりし。一日雪ふり寒氣凜々として膚に碇りするをも厭はず太七が家の前を何氣なき態にひて通りに、一寸ほどは既積りに猶ちらちらと雪の降りやまで、破れ足袋に雪水の浸み透れば、足の指凍りて力無く、我が下駄の商に挟まりし雪に思はず踏み反して横鼻緒をばぶツリと斷る途端に轉び倒れける。太七が家の對面の商家の男二人して雪を掻き居しが、これを見るより他の難儀を慰にして、どつとばかりに笑立つれば、笑ひ立てられて長次痛さと悲しさと口惜さにと聲せし方を覗みつつけつゝ立上るに、其顔付を可笑とてか又々哄然と笑ひ唯す二度の大なる笑ひ聲に、粗造の格子戸へベタ張りに反故を粘りつけたる戸を閉てありしががらりと開けて、何事ならむと職人一人太七の細工場より顔を出し、長次が雪に塗れしを打見てこれも

七日も過ぐると頓で、態々出京せし次第は斯様斯様と額の汗を幾度か拭きながら云ひ出せば、主人氣の毒とおもふ色を十分にあらはし、存ぜぬことゝ左様でござりましたか、幾重にも左様なれば御合力申しませう、なれど、此方でも有り餘りまするではなし、中々御満足までには致してあげますことも出来ませぬが、斯様なされませ、大阪へ御前様の歸られたとて手に覺えの職が直役に立つては無ければ、少時小生方に御留りあつて、何か別の職業を御見つけなされ、然し御留守宅も定めし御困りでござりませうなれば金子も少々は差し上げますほどに其を大阪へ御送りあつて、何ぞ御前様の職業の出来た後此方へ御喚び取りなさるとも何様ともなされては如何でござりまする、と申しまするも少し小生方に御前様を丁度嵌めるに好いやうな心當があるからでござりまする、世に深切に云ひ呉るゝに、嬉しさ身に浸みて其言葉に従ひ、貰ひし少しばかりの金子に、土を喰うてなりと今少時辛抱して呉れ、是々如是々々の次第と一缶一什を細かに書きし手紙を添へて送りけるに、女房は、今日は歸る明日は歸ると干乾にもなりかねぬ態にて首を長くし待ち居たるところへ、其手紙其金子を得て、心にも張を持ち口にも

物を納るゝことを得、漸くほと息を吐きしが、斯様なれば懸取も酷うしたところで益なしと諦めてか左までは攻め寄せれど、長次は樂な思ひもせず、夜も寐がてに工夫して、一ツ地金を磨きては焼き、焼損しては又磨き、或は線礬、或は丹礬、或は鹽、或は灰汁と、大凡金屬發彩に用ゐるほどの藥品の、幸ひ彼隅此隅に残りあるをば持出しては、分ちつ、合せつ、溶かしつ、煮つして百方千般用ひ試むれど終に似寄りしものさへ出来ず。一方にはまだ自己が身長はまだ低くして小兒としか人にも見られぬことを奇貨とし、愚童の様な態をつくるひ、新八が常に藥品買ふ鋪に至りて、新八方からまゐりましたが例の薬を下されといへば、此様な小童の深き心を懷けりとは思ひも寄らぬ薬鋪の男の、丹礬でござりまするか何氣なく答ふるを、いや其では無い、それならば線礬でござりまするか、いやそれでも無い、あゝそれならば何かゝと先方の知つたるだけを云はせてそれでも無いと云ひ切り、最後に何かと反して問はるゝ時頭を掻き、實はつい忘れしました、戻つて聞いて又來ませうと立ち去り、太七が方をも此手で搜り、若や我が知らぬ珍らしき藥品にても使用ふか、使用はゞ直ぐそれをば買うて試みむと齡に

は似合はぬ智慧まで出して、探れど遂に手がかりもなきに落膽すること一方ならず。

五

蟻の念も天まで達かは、童子の念も虹蓋の作れぬことやあるべきと長次ちつとも萎ます機ます工夫に工夫を積めども、容易に成れば、夜の睡眠さへ十分にば取らぬ勝の、疲勞は眼に見えて、顏頤の凹み著しくなり、軀骨高く露れて四十前後の大人くさい容貌と變り、起居舉動さへ何となく童子めかれ、母親早くも其と悟りて、子に憂しき胸を痛むること一方ならず。長次や、工業を遊戲の間で爲るを悪いといふでは無く、まことに結構な可いことゝは妾もおもつては居れど、此頃のやうに骨折つて身體を癩せさするまで、頼み人も無いに自分から苦むにはあたるまい、父様の御不在に汝が病氣にでもなつては此母が濟みませぬ、うすゝ様子を見れば何やら虹蓋を工夫しだして商賣敵の新八太七めが鼻明かさうとも思ひ込んだらしいが、それを悪いと云はうどころか、嗚呼頼母しいと内々は喜んでまで居れど、容易まだ何も彼も父様よりは能う知らぬ汝の腕で、如何して父様さへ成ぬものゝ成ようぞ、というたら負けぬ氣

佐 渡 ケ 島

上

雪は名物の國とて眞夏にも氷ばかりは賣らず、路の傍の柳にかくれ行く聲がなく、雪や雪と十四五なる男の兒の呼びざまをかくし走りながら賣振する越後新潟の暑き日の夕暮、大川端の少しは風も涼しかるべしと、思ふことなき身の旅の宿立出でて、夕月の影おもしろし一句もがななどと、物無き袂に、擦れ違ふ人を掴摸かと睨む世話も無く、ぶらり／＼と心ゆたかに歩おそく追遙せしが、何時しか川口近く来て、こればと海面遙に見渡せば、小きものゝやうに思ひ居し佐渡が島山、見る眼にはことのほか大く、麥藁帽子の眉庇を壓して薄墨色に、のつしりと波の上に峙てるさま、須磨明石さては和泉の堺より淡路島瞻るにも増して風情多く、秋ならば此夕さびしさの嘯かし、春ならば此眺霞に一つしほ、實に蓬萊も餘處ならじと、折柄日は没り果てたれど、餘光猶在りて明るき空のさまさへ取添へてたゞならず覺え、橋もやあらば、ち

よと渡りて、世離れし彼の美しき山美しき水、いづくに仙女の住みたまふか御尋ね申して見たきものと、そるる浮き立つて、時も時とて退く潮に沖へと潮泡のふは／＼流るゝに、あくがれ出でし我が魂の若やそれかと、疑つて見て、何を馬鹿な。

心は冷いか知らず、越の女の雪の肌、見よがしの羅衣、しかも襷さへゆたかに開けて、風取る團扇の招くが如きしな／＼。見るに媚かしと優しとは好人の眼にならでも映るべきが、越後古町鳴いて通る鳥、錢も持たずに買ふ／＼と、と松前歸りの船人らしきが笑ひ交りに唱つて行くに、島と間違へられぬ中一夜の癖へ歸れ／＼と、見物左衛門舞ひ戻つて、ほろよひの願望はやすい此國御自慢の泡盛一杯。コッパが大きかつたでぐ／＼のぐづ寝の夢に佐渡へ渡り、日野の阿新が助太刀して本間の館へ押寄せしが堀の中より現はれたる大嬢に足をからまれてアツと驚き、醒むれば蚊帳の裾から外へ毛鷲を踏み出して、子子の御化殿御中へ足二本獻上仕り

候也。

あゝ痒いかな／＼、蚊の食つて知る蚊帳の思かなどと下らぬこと思ふも甲斐無く、またうとうと夢に入りて、明くれば朝風にこゝろよく、人呼びわめく聲にぎやかなる川岸のやつさもつさも花やかなる日ざしに勇あり。今出ますのが昨夕御話の夷港行き船でござりまする、いよいよ御渡りなる御飯を直に、と急立てられて交度そこ／＼、箸も取りあへず茶漬飯、梅干口に衛む片手に割り掛にする手荷物包み、御衆と云はれてどつこい忘れたと取返すほど周章騒ぎで、やうやく船に乗込む途端、鎖鎖巻き上ぐる音の起りぬ。

來て見れば此處もたゞの土地ながら、來いと云うたとして行かれうかと、戀にも通ひ難きものにしたる離れ小島は此島かと思へば、夷子に一宿しての翌日相川に至るまでの道に見る山の景色、沼の水の色も物淋しく、那處と無く異ひたる邦のやうに、天の模様さへ感ぜられける。

相川をはかきところなり、道幅狭く人家ごちやごちやと列びて、しかも爪端下り爪端上りの町々見る目にも立派なられど、衣食の品のそれぞれば申すに及ばず、萬般の用便足りて、尋ねれば三味線の絃琴の絃もあるべく、小學校用

同じく笑ひしが、天意は實に測られず、此時長次は立上りさま圖らずも太七が工場の奥の方より、一種の異臭のいと幽かにも微吹く風に連れ立ち來りて鼻を撲つなば覺ゆるや否、たちまちハツと合點することあり、身體の痛楚なも笑はれし口惜しさを一時に忘れて、下駄を其まゝ一目散に走り出づれば、また後には笑ひの聲の一段高し。長次は狂氣の如くなりて我家へ駆け込み、宛然母の膝下に動と坐するや息せばしく、知れた、知れました、母様々々、鐵漿、鐵漿、母様、鐵漿、若い鐵漿、鐵漿ですと低聲ながら語氣亂れて埒なく云へば、母は呆れて、長次汝はまあ何様した、身體は眞白雪まぶれで、それその疊に印けた跡は、えゝまあ汚い泥足で、と云はれてクツクツ笑ひ出し、成程これは嬉しさにツイ込上げて周章しました、と云ひつゝ急に衣を拭ひ泥を拭ふいとをかし。元來金屬の細工には色彩を出すに、鐵漿をば必ず用ゐるものなれば、家々に皆貯蓄ありて、殊に古きを珍重するより、弟子は獨立するに臨みて師より少許を分ち貰ひ、そなたまた弟子に分つが例にて、百年餘りの鐵漿を有ち居る者さへ無きにあらず、貞が家にも元より傳へし鐵漿ありしが、此鐵漿の相違にて扱こそ新八太七が如き色彩發揮をする

ことを得ざりしなれ、長次一度太七の家の鐵漿の香氣を覺えしより、さまゝ工夫に工夫を積み、種々の鐵漿をば製し出して、それもと一々試むるに虹蓋通り寸毫も違はぬものをも作り得、猶一層鮮麗なるをも、又異りたる趣味あるをも種々様々に作り得しかば、間屋の仕事を此方へ取り、父をも遂に呼び戻して盛に太七新八と競争しあひて大に打勝ち、日出度利運を復し獲て親子夫婦楽しく世を經しとん。

をかしかりし。

これまでなればとのことに其處を見捨てゝ、但あるところに行けば、此處も半は洞のやうなるが、天井とも見做すべき上の方の一本隅に鐵の棒を窓格子の密きほどに組み、それより鐵のかれこれ同じき大きなが飾はれて落ち来るやう仕掛けあり。鐵格子より洩らぬ大きなは、上にて那方へか滑り行くとおぼしく、何かは知らず、がら／＼と絶間なく音して掬飯ばかりの鐵の霰降る如く落来るさまいと忙し。礦を砕く順序の一つとして片塊の大きさを揃ふることの要ありて、かゝる事も設けられたるかなと思ひながら見居けるに、空車を推し來りては、落つる礦の見る間に山なす馬鐵様のものもて掻き集めて車に充てつ、直に那處へか推し去り、また空なるを推來りては滿てるを推し去るものあり。大人には容易過ぐる業と見なされて、年の頃いづれも十五六より七八までの間の兒のみ此役に充てられたりと見え、いづれも逞しげなるが、荒業に屈し疲れたる色も見せて、筒袖の短半纏、股引に脚絆ばかりの姿凛々しく、足にはしつくり厚草鞋、額の角には捻鉢巻、少しは小面憎き歌のやうなものさへ唱うて、時々掛聲勇ましく我が勞働に機を打たせ、上より落つる

礦に溜まる間あらせじと遣つて退くる甲斐々々しさ。都ならば高が中學の體操を迷惑なものに仕て、其癖手綱ほど長い羽織の紐を自分の鬘といふところに結び据る、口ばかり強い千里の駒の幼立、學校へ行く道にも古郵券賣の店の前で道草喰うて居る位の年齢のものが、骨も粉になるべき働きぶり、さても／＼同じ日の照らし給ふ世界に、異つた人の狀態もあるものと、うつかりと立つ背後より、退いた／＼見物、と聲かけられ、ハツと驚きて見かへれば、一ト際すぐれて勢よく車を推し來れる兒の、齡は十五か但は六か、大柄なれど七とはなるまじきが、狼狽へたる我等を見て少しく笑を含みたり。癖無き髪をふりかぶりて、巴旦杏のやうに紅き頬に光を持ち、くるりとしたる愛らしき眼、一ト筆なすつた頓興の眉つき、繪に畫いた山姥の兒に魂魄を入れて見るが如くなる姿形、馬も牛も小な此島に能ぞ此様な子の生れけると人をして不思議に感ぜしめける。

中

眞野山の順徳帝の御陵拜しまゐらせんと、鐵山見物を済して後、新町に到りけるに、着きし日の夜より暴雨ふりつゞきて山騒ぎ海荒れ、戸

外へ出でんこと物好に過ぎたれば空しく宿に閉ぢ籠り、下手な句など按じて四日ばかりを過し、が、流石の暴雨もや、收まり、曉の枕には海近き舎のことゝて時化の名残の濤の音猶ど、どんと響けど、天の色瑠璃の如く晴れ、烏雀の悦喜をうたふ聲々軽く、四斗樽ほどに見ゆる日輪の、のつと出でたる美しさ。亭主やい、晴れたぞ、晴れたぞ、約束の通り。そこら案内の兒童疾く招べ、と朝餉もせぬ中から騒ぎ立ちぬ。

旅宿の主人が傭ひ呉れたる案内の兒を見れば、鐵山にて唯一ト目見しにかりなるが眼に浸み入つて忘れざる彼の金太郎なりけり。今日は如何にせしや、少し冴えざる面つき、勢無き容態、手も力なげにぶらりと下げて、眞野山から溢手の浦、それから那處へ案内しますか、別にもしろいところもありませぬ、といふ。横合より、那處まで、御客様の行かつしやるところへ先立つて行くさ、汝の骨折を偷むやうな事をなさる御客様ではないから、せい／＼骨を折つて御供せよ、と亭主の云へば、さあ出掛ませうと既のこゝと歩き出しけるが其後影何と無く淋しく、過し日とは違ひて、腐りたるやうの單衣、男兒には似合はしからぬ中形の痕がす

のならぬ新出版物美しきを飾りたる店もあり、島
人の都とおもふも無理ならず、鐵山の掛り、裁
判收税などの掛りの人か、洋服着たる髭持殿
さへちらほらと、大阪仕入の巻煙草ふかして、
異な香氣を海風吹き拂ふ空氣の中に残し行きた
まふがあり。

昔時はさき縹といふもの着たりし賤の男女、
今も猶新しき風を好み、筵ほど厚ききこは
なるを着るもあれど、大抵は上方船の積みて來
るあつし、金さくり、帆木綿などを上被りにし
て、荒排きをするものも、聊見よげに身を取倣
し、らりるれるの響あやしき言葉に相應に烈し
く使ひて幅を遣るもあれば、勢よく受答へして、
あつばれ役に立ち顔に働くもあり。

用も無き男のわざ／＼の島渡りと聞いて、ち
と合點しかれたる亭主の顔つき、しげ／＼と我
が面を覗くをかしさ。筆もつもので候との眞
面目な言譯してきかすも五月蠅く、なにさ、敦
賀待きの船待つ間新潟の宿屋に煙りかへるも智
慧がないと鐵山見にばかり一寸来たもの、明日
は案内頼みますと云へば、土地自慢の鼻の端
を既する／＼と伸ばして、此地の御山ばかりは、
新潟から思ふこと、東京からでもわざ／＼御
出になつて御覽になる價值がござりまする。

金掘の男ども、奈落にての勞働、随分危きこ
とも多く、自然土の潰え岩の飛びなどする場合、
手足を折り挫き生命を失ふことも無きにあら
ず、それを救ひ恵まむため應分の金を差出せば、
云はず語らずの見物料と其金が働いて拜見差許
さるゝ山の定規面白し。我等も心ばかりの金を
招てゝ、さて案内し呉るゝを待つに、古洋服着
たる草履ばきの役人らしきがあらはれて、最深
切に導き呉れたり。

蟻の穴といへば、それにもよし、土蜂の巢
といへばそれにもよし、地の下に道路あり市
ありと云はん。狭き軌道にころ／＼と音立て
て、泥に塗れし礫片を積みたる車の右に左に走
りて、那處より來れるか那處へ去るか知らず
眼の前を過ぐるかと思へば、猶脚の下の深き坑
より昇降器といふものにて車井の釣瓶の水をあ
ぐるやうに、したゝかなる大きな槽とやいふ
べき箱とや云ふべきものに盛られて、需猫の籠
くぐりたるが灰まみれになりし如く面とも云は
ず手足とも云はず汚れて汚れて人としも見えぬ
人の眼ばかり光れると共に山の如くの礫片の上
り來るなど、思ひの外ならんと思ひまうげざ
るにあらぬものを猶思ひのほかなりと驚かし
む。見れば底知らぬ深き穴の、下にも燭光があ

るべけれど、たゞ暗々として物恐しく、心地あ
しき陰風吹き上りて、長くは覗くをさへ誰も能
くせず、身過ぎのためなればとて地獄の廳の屋
根の上にも掘り抜きかきまじきところまで、よ
くも鶴嘴を掘り鐵槌を突込むことなり。物は試
で、横より入れる此の一層二層の坑にはまだ
婆娑遠からぬ心地するに、猶深く下りて見んと、
礦を出したる箱の空虚となりたるに入れて貰ひ
て、眞直に物の墮つる如く下れば、脈の二打

一打に四邊闇くなりて、死ぬ時は斯様もあら
うかと思はるゝ引入れらるゝやうな心持、何と
も云へたものにあらず。やがて箱のとゞまりた
る時出でて見れば此處もまた異ならず、道は木の
枝の如くに岐れて、横穴の深さ知るべからず、
聞けば此下も下の下も猶此の通りにて、素人の
見る眼には何の差違も無くて、堅坑の惣深さは
百尺二百尺にとゞまらざる由、なるほど昇降
器の通ふ穴より下方を覗けば、先の上に覗き
し通り、猶底らしく見ゆるも無きに、呆れば、
歸らんとふたゝび例の箱に乗れば、仙術を得て
雲に騎る心地、一瞬々々に明るくなる嬉しさ、
理由も無きに大罪にても赦されしやう覺えて箱
を出し時は身も軽くなりし思ふ、我ながら人間の
心の態の日に連れて變る猫の眼より速く變るが

たる横顔、枝さし出でし檜の木の梢洩る十時頃
の日の光を斜に受けて、霜に飽きたる紅き菓の
笑み破れんとするが如く澤やかに見えぬ。

那處を廻つて来たのでも無い、鐵山見物済ま
すと直に新町へは来たが彼の雨に外出もなられ
ば、今日やうやく汝の案内で心掛けた御陵参拜
も済ませたといふもの、これから阿佛塚原へ廻
つて日蓮様の故蹟、資朝卿の御墓も覽ようと思
ふばかりのこと、汝はまたどう様して鐵山から新
町へは来た、親父は山にか、母親は此方にか、
と先づ我が上を語つて、彼が上を問へば、折角
晴れたる少年が面に憂愁の色の雲また起り、あ
あ御客様は何商賣が知らぬが、遊んで毎日を過
さるゝ様子、うらやましい人もあればあるもの、
先の村長さまの家の若い旦那は、冬は鐵砲撃ち
で鴨やつぐみばかり追掛けて暮し、此頃はま
た碁ばかり打つて、退屈すれば午前まで晝寝す
る、癩癩のせゐか蠅が親の敵より嫌ひといふの
で使はれて居る私の友達の大三といふのが何時
も寝た傍で蠅を追はせられて居ますが、御客様
も家に居なされば大方そんなものでござりませ
う。それに引代へて私なんぞは譬へれば鐵砲の
玉に中つた鳥のやうなもので、同じ鳥でも傷め
られないで捕られて籠の中に美味いもので飼は

れるのもあれば、酷いめに逢ふもあると同じこ
と、うらやんでも餘所の鳥の籠の中へ入つて行
く譯にはならぬゆゑ仕方はないが、何彼が厭に
なつて仕舞ひます。私の親父は鐵山で洗ひ方を
仕て居ましたが、博奕好きで、生きて居た内か
ら家へといつては壹圓持つて来て呉れたことも
無く、母さんが髪を結ふやら裁縫をするやら、
少しばかりの田をつくる間に片時手を休めず働
くので、漸く生活を立てゝ居たところ、一昨年
親父は酒が過ぎたので卒中とやらで死に、それ
から母様も何と無く弱り、今までは春の夜の短
いのにも、殆ど二夜ばかりいらいで縫つて
苦にもならなかつたが、此頃は冬の夜の長いに
も氣が先へ疲れて捗ゆきがせず、手間はかり取
つて其癖白針なんぞを出す、と去年の暮に溜息
して私へ話すやうになつて、此春からはぶらぶ
ら病、隣家のお千代といふ私には二つ年上の娘
が母さんに裁縫を教へて貰つたので深切に介抱
して呉れる上、いろ／＼の物さへ呉れるため、
甚く困りはせぬもの、私が遊んでは居られず、
どうか金銭を取る道なと、彼方此方知つた人に
頼んで、やつと鐵山へ二月から入り、貴下が御
覽なすつた通りの事をして、あれで日に十七錢
貰ひます。其内から何彼に消えるのが九錢はか

り、精々残して十錢にはなりませぬを家へ送り、
母さんの看護を其お千代といふに頼んで、礦運
ぶ車の音の山に絶える間はあつても忘るゝ間は
無く、此方の事を何ぞにつけては氣にしながら、
勞働に追はれて、ゆつくりと考へる隙も無く其
日其日を送つて居りましたが、丁度貴下の御眼
にとまつた其夜、容體悪ければ急いで歸つて来
よとの使者、何よりさきに胸ばかりどき／＼
して相川の町も何様あるいたか知らず、土の上
を来たやう、雲の中を来たやう、途中の有様は
今考へても夢のやうで分らぬほど急ぎに急いで
歸つて見れば、二時間ばかり前に氣息を引取つ
たといふ話、隣りの一家が皆来て居て呉れたは
嬉しかつたが、お千代さんが泣いて呉れて居る
に、お千代さんの親父様は例の通りこち／＼と
堅さうな顔して、岩造は確乎とせればならぬぞ、
泣いては亡者のためにならぬ、と叱るやうに云
つて呉れたば、今だに些恨めしうございます。
それから段々近所の人たちの世話で葬式も出し
て仕舞ひましたが、悲しいことがまた一つ、そ
れで厭な心持で堪りませぬ。親が無くなつて憫
然な、岩造は性が好いに鐵山の中のものに仕て
仕舞ひたくは無い、何とか好いことで一人立の
出来るやうに仕て遣りたいと云つて下さる人も

かに有るか無きかとなりて一體に鼠色と見ゆるを着たるが、あつぱれの兒をひとしほ元氣無くみせしめぬ。

眞野の陵は海近き山の上に在り。長汀曲浦其處よりは畫の如く見えて、浪の磯近く巻きては翻るさまをかしく、水と天との果は一つになりて分ちがたきところに交はるも、此處にして見れば、花洛も那處ぞ、雲の果まで流れ來てといへる御製さへ憶ひ出されて悲しく、其昔時を忍ばるゝ藁屋のわびしきが三々五々と散りて列べるも何と無く情無き風情、涙脆き旅客の感を惹くべし。

鳥居といふもの神の社の前に立てるが常ながら、まことは墓門なるべきにや御陵近くなりて、それに同じきものと立てるを見しが、案内者の章は、わたくしはこれより入ることの出来ませぬもの、御客様御一人で参拜していらつしやりませ、と兵士の營所前に立つ如く棒立に立つて動かねば、言に従ひて我ひと参拜なし、賤の身ながら承久の過ぎしことを愚なる胸に浮めて歸り來しに、泣けるは我のみならず彼の小さき案内者も眼をしばたきて泣き居し態にて、長き睫毛の端には露の珠を一つ二つとためたり。

一天萬乗の君ともあるべき御方の處臣のためにかゝる邊土に都忘れの名も悲しき菊の花を眺めて幾年の秋を過ごし給ひし末、恨を抱きて果敢無くなり給ひしかとおもへば、何百年後の草莽の我等ながら涙も禁めあへぬこと怪しうもあらず。それも恐れ多きことなれど、此島に生れて大打ち蟬蛸釣る頃より見慣れ行きかひ慣れたらんには、御陵のかなしきを眼にすると、感概新しく今此處に涙を落さんことあるまじきなるに、齡も行かぬ土地のものゝ、打ちも擲かれもせいで泣けること不審なりと、言葉やさしく慰めて仔細を問ひながら、御舟石とかよべる舟形せる大なる石に腰かけて煙草くゆらせば、見す知らずのものにも我が上尋れられしが嬉しくてか、またせぐり來る涙を抑へ、なに、御客様の御存じのあらうことではござりませぬ、もう泣きませぬ、構うて下さりますなと、くるり背向きになりて、足近く咲ける露草の花を譯も無く捲りては投げ、また捲りては、ほいと投げたり。

鎮山に汝は居なんだか、四五日前に見かけたやうに私は思ふ、しかも其時は、うつかりひよんと佇つて居たので、退いたく見物、と威勢のよい汝の聲で叱られたと覺えて居るが、汝は

此地のものらしいに、鎮山は此地から通ひ勤めのなる近さでもなし、日數も間に無いことゆゑ、些合點が行きかれて居るが、汝で無くば、若や汝の兄でゝもあるかと問へば、振向いて我を見つ、少し笑つて、あゝ左様でござりましたか、それで解りました、どうも見たやうなとは思つたれど思ひ出せず、おほかた幼き時見た草双紙の中の人の顔に貴下に酷く肖たのであつたのかと今朝から思うて居ましたが、それで見たやうに思うた筈、ほんに見たのでござりました。私は鎮山に居りました、そして貴下は、那處を廻つて此地へ御出になりましたと不審さうに我を見詰める。

談話の緒のほごれたるに、また一服と煙草つめて燐寸擦れば、生憎の風一ト吹き天より落ちて火は傳らず、チョツと舌打して煙だけ燃えて仕舞ひたるを思はくしげに捨つるに、氣の毒と見てや立寄りて袖屏風して呉るゝも可愛し。オオ御蔭で今度は、うまくついた、と我知らず笑めば、少年も満足したる面して、石の上に我と駢んで腰掛けしが、地につかぬ脚をぶらり／＼と振り動かして、夏草の滋きが中よりついと出たる大稗を蹴るでも無く蹴りでも無く爪先に觸りつゝ、其穂の動ぐに見るとは無し眼を留め

は何様いふことで、と問へども猶答へず。左様詰らぬとは云はぬもの、と云へども更に答へもなまず。側に人あるを忘れし如く沈黙つて居しが突然に、あゝお千代さんと叫び出して、うかとして居たりし我を驚かしぬ。

お千代さんが何様か仕たかと問へば、なにあ何でも無いのでござります、お嫁に行くと云ふばかり、明後日はいよいよ三里ばかり離れた村の物持のところへ縁付くさうで、と云ひし限り後を云はず。

それは目出度い、汝も世話になつた人の身而定まること、定めし悦ばしう思うて居らうと、日の光の漸く梢を離れて、直接に照らさるゝ背の暑くなりしに談話も切上げ時と立上れば、彼方は却つて動かんともせず、悦ばしいことの何有るものか、と不服らしく洩す一語に力入りたり。

好奇の心は少年が意外の一語に惹起こされ、それはまた異なこと、何故かと問ひ返せば、私の詰らないといふのも気が腐つて仕舞つたといふのも、ほかでは無く此爲でござります、此さへなければ、屹度私は出世も仕て見えます、立身も仕て見えます、鐵山の穴の中で生活さうとも、悪い方へは一寸も入らず、どれほど流行

る博奕でも骰子の目さへ見ずに、それこそ鶴嘴の柄ばかり握つても月日を送つて、何年の後には胴巻を大きくして歸り、あのお千代さんに衣類の綺麗なものを買つて遣つて、而して着て貰ひ、東京から来る小間物屋に高価櫛髪挿も誂へて、

買つて遣つて、而して頭に載せて貰つて、其代り今まで通り私の着物を縫つて貰つて、時々煮たもの焼たものでも持つて来て貰つて、岩さん岩さんと弟のやうに呼んで貰つて、女に出来ないいろ／＼の用に使つて貰つて、秋は彼の胡桃の樹の枝を折つて、と命合られて樹登りした

去年のやうに何でも吩咐けて貰つて、家の兄さんよりも弟よりも妾は汝が好きだと云はれて、而して何時までも隣家で居て、何時ぞやも有つたことのやうに時々喧嘩して怒らせられて、後であやまられて、仕舞にはあやまらせられて、

両方無茶苦茶になつて泣き笑ひに笑ひ出して機嫌がいっしよに直つて仕舞ふやうなこともあつて、何でも一生仲好く暮しを仕ませうに、女は縁付くに定つたもので仕方は無いことながら餘所へ行つて仕舞ふとは、あんまりつまらないこと、母さんが亡くなつても彼の人さへ居て呉れば今まで通り鐵山に居ても、手足の爪を剃がし腕脇に疵をこしらへることがあつても、相川

の町で食物に仕て仕舞ふやうなこと無く、必ずこれまで母様のところへ渡しただけのものを渡して、月に一度なり歸つて来て甘えようものを、餘所へ遣るとは親父様が酷いではござりませぬか、私に取つては恩のある人、私の姉だ私の頭を摩でながら自分て云つたこともあり、私も

姉と思つて居た人、岩さんの御母様が亡くなつたら妾が代りに御母様になつてあげよう云つたこともある人、それでござりますもの、餘所へ行かれては私が思知らずになつて仕舞ふかと

おもへば、悲くてなりませぬ、何時ぞや頼まれた六方石の苔入蟲入りのも好いのが見付からいで未だ與らずに居たことまで考出して濟まなくなりました、母様になつて呉れるというたば、

戲談には違ひ無いが、戲談に母様になつて貰つて戲談に私が子になつて、而して孝行は眞實に仕て、水も汲めば火も焼いて御膳の御給仕までして那樣な顔するか見たいものと思つたも空になりまますし、私の樂ば皆消えまます、これ此の着て居る單衣も自分の着古しを直して去年呉れたのでござりまするが、今も破れさうな此衣が破れたら、もう貰へまいかと口惜しくなります、女は何故嫁に行くに定つて居ます、嫁を貰ふ人は何故他家の女を自分の家へ取つて仕舞

あり、自分も鐵山は善い人が少いゆゑ行きたくないと思つて居れど、たゞ朝夕を茫然として何を爲うといふ氣も出ずに居たところへ、貴下の御泊りなされた宿の御主人、母さまにも度々夜具の仕替へなど態と賃よくさせて下され、御慈悲のある彼方が幾干なりと遊んで居る間に取らせて遣らうの意でももあるか、御客様の近邊見物の案内せいのことに出来たりましたのでござります。此様に譯で死穢のある身體故、御島居中へは勿體無いと存じて、御供も仕ませぬのでござりました、と言葉遣ひも年に照らして聞けば左まで拙からず語りたり。

下

おゝ、それは氣の毒な、汝の齡で母さんに離れては困りもせうし、悲くもあらう。然しまあ汝の身體は丈夫さうで、頓で立派な男になるのが眼に見えるやうなが頼もしい。一人になつて見れば、いよゝ大切な身體、よく悪い癖を身につけぬやうにして、そして出世して両親の祭祀を見事にするやうな身分になればならぬ。成程鐵山は善い人も少からうが、男兒が身を立てようといふには此小さな島には限らぬ、世界中が舞臺と云つても可い、日本中が舞臺だと云

つてもよい。知つて居るか知つて居ぬか越後傳吉の譚のやうに江戸へ出て智慧を儲け金を儲け經驗を儲けて歸つて来るもある。あれば江戸を舞臺にして立身したのだ。また江戸の人が此島の鐵山へ捧ぎに来て居るもあらう、それは其人の料簡では鐵山を好い舞臺と思つて居るか左なれば他の舞臺に居られなくなつて此邊に來たてもあらうか。人はいろゝ世渡りはいろゝ、立身出世の道もいろゝ、決して一概には何とも云へぬ。兎に角何をしようにも、汝の身體では意氣込さへ烈しければ、大抵の事なら人に後れを取ることは無く、屹度えらい者になれるに違ひない、退いた退いた見物と車を推して來ながら聲掛けた時の汝の勢といふものは、えらかつた哩、えらかつた哩、今だに耳に残つて居る。彼の調子で何の道にもはまり込んで遣つて退けたら出來ぬといふことはあるまいと思ふ。母さんが死んでも氣を腐らせずに、深切な人の分別に就いて、しつかつとして一人前の男にならねば不幸に當る。汝が話した村長さんの息子のやうなものには羨ましいものではない。得て左様いふ人は果報焼が仕て、果は石の黒と貝の白とを土ばかりの白黒に仕て仕舞うて、樵や公孫樹の三四寸もあらうといふ厚い盤が、もみくちやの黄

色な紙一枚になつた時、基もこれでは面白くないと思疑ふいふやうになるが多い。私にても斯様して遊んで居るが、油斷したら明日托鉢坊主にならうも知れぬ。まあ、何にせよ氣を腐らせぬが第一、と老人くさいことを云ひて諭しけるが、左様いふことの云へた男でも無いにと、那處やらでちら／＼嘲る聲あり。

云はでもの事ながら、氣の毒なる此少年の愛らしく痛ばしきまゝ、いさゝか心の杖ともなれかしに、柄に似ぬこと云ひ終りて、また一服の煙草の煙の中より、如何に聞きしと何ふに、大概合點は行きたるらしく、顧みて我が面を見たる面には、よき教を得たるを謝するが如き色を浮めたり。

言葉無きこと良久しくして、次第に思を深めたるが如く見えしが、彼の少年は頭を垂れしまゞ獨語のやうに、氣を腐らすなと云はれても既に氣が腐つて仕舞つた、立身出世の談は皆能く合點は行つたが出世したとて、あゝ詰らない、草臥儲けだ、何にもならない、母様が岩の供げるものを、鯛にしる鯉にしる食べて下さるではなし、あゝ詰らない、と小さな聲して夢のやうに語り、あとを考へ込んでまた黙りぬ。何様した、岩造さん、氣が腐つて仕舞つたと

不

安

上

今日は上野公園の精養軒で、蓮田法學士が佛蘭西へ留學を命ぜられたため其送別會が開かれた。會は非常の盛會で、參集者は無慮二百名と注された。が、東照宮の森に夕鴉が啼を求めて啼き喚ぐ頃に、人々も思ひ／＼に歸途に就いた。ところで蓮田學士と日頃交情の好い朋友五人ばかりは、猶直に歸途に就くのが惜いやうな氣がするまゝ、學士を擁して後に残つて、更に小締りした綺麗な室に席を改めて、ビールなどを傾けながら會談を續けた。談話は縷々綿々として盡さず、それからそれと興に乗じて種々な昔話しも出る、未來に屬する希望の話も出て來た。蓮田學士は極めて満足に且つ愉快らしい顔色で、飲み掛けた洋盃を卓子の上に置いて、「ヤ、諸君、御互ひに十年前の書生から斯うやつて隔意なく交際して居つたのだから、今更別れるとなると僅二三年の間と思つても、實は僕も良い心持ばかりも仕ないので、女々しいと君

等は笑ふかも知れないが、何となく心悲しいやうな氣もするね。が、然し見るもの聞くものも悉く幼稚な日本から、歐羅巴の文明の中心點とも亦罪惡の中心點とも云ふべき巴里へ往くのだから、定めし種々珍らしい事柄に遭遇するだらうと思へば、また一日も早く彼地へ渡つて見たい心持もする。まだ日本などは文明の度が進まない爲か、但しは人の氣風が元來淡泊なためか知らんが、探偵小説などで見るやうな疑獄と云ふべきものゝ有つた例はない。ところが彼の佛蘭西と來ると、探偵小説の本場とも云ふべき國ぢやないか。して見ると、善い事も非常に進歩して居るだらうが、悪い事も非常に進歩して居るに違ひはない。であるから僕が往つて居る間に、今日は如何なるだらう、明日は如何に變はるだらうと、人々が首を伸ばして次の日の雲行を氣支ふ様な不可思議千萬な一大疑獄が實際に起らぬとは限らぬ。小説は大抵結局が豫想されるものだ。それですら疑獄譚は一種のおもしろみがあるのだから、況して事實であつた日

には面白くないことであらうと思ふね。若し探偵小説のやうなことが實際にあつて、そしてその一段一段を日々刊行の新聞紙で讀んで知るといふやうな場合があつたら、其結局の豫想が出来ぬだけに其興味はまた一しほのことであらう、實に面白くて堪るまいと思ふ。であるからして萬一左様いふやうな奇怪なことがあつたら、屹度僕は諸君に第一に報道して、其興味を煩つて心算お互に隨分探偵小説を愛讀した仲間だからナア。」と打解けて語つた。ウム、左様だ、それは面白からう。是非報道して呉れ。素敵な疑獄でも起ればいゝがナ。近い例がドレーフユス事件だ、ほんとに君報道を怠つてはいけないぜ、などといふ聲が右左から起つた。一座は今にでも大疑獄が起れかしといふ空想を以て蔽はれた。そして人々は既に其空想が半分ばかりは事實にでもなつたやうに感じて、早くも未來の大事件に的無しの想像を馳せて、娛しげに打笑んだ。

中

此中で先刻から一人黙つて居る男がある。これは非常に負けぬ氣の強い男で、そしてまた何事に限らず動もすれば人の談話の腰を折る癖の

ふことが出来るのです、此様な詰らないことを
何故人は悦ばしいものに定めて居ます歟、ほん
とに分らぬことばかり、それで私が面白く無く
思ふのです、と語り出しては胸に在ること言葉
もしどろに眞顔になつて説き盡さんと、最熱心
に脚のぶら／＼も何時か廢めて云ふも可愛く、
なるほどなるほど、それでは汝が其のお千代さ
んといふ娘に、汝のところへ嫁に来て呉れとい
へば好いに、そんなに惚れあつた仲ならば定め
し好い夫婦が出来ようものを、と云ひも終らせ
ず少年は顔に火を焼いて物をも云はず石より飛
び下り、麓を指して一目散に駆け出しぬ。いか
に羞しと思ひや仕けむ、眼障り多き夏木立、は
やくも影は見えずなりける。

其後七年を経ての今年一月、横須賀へ行きし
に、造船所近くにて、我は車上なりしが、立派
なる一人の男の旋盤工か鐵鎚工かと思へたるに
擦れ違ひて、天晴大人とはなりたれど、たしか
にそれと間違ふまじき紅ら顔の往時ながらなる
に、思はず聲かけて岩さんと呼べば、彼方も慌
て、帽を取り、彼此ひとしく壯健で御芽出度な
云ひ交しさま左右に別れぬ。お千代さんを妻に
持ちしやあらずや、御舟石の有らば問ふべかり
しに。

の氣のある方を對手の者に喰べさせるといふ趣向なのである。こんなのはまだ淺薄な事で、譬へば殺さうと思ふ仇怨ある男に自分が近寄らないで二月なり三月なりの間に自然と其男を絶命させることも出来る。その法は蠟燭の中に毒を仕込んで、また象牙の箸にも、仕込める、銀の股引を穿いた箸などは御誂へむきといふものだ。蠟燭をつける、洋燈をつける、飯を食ふ、いづれにしても月日の重なる中に毒が廻つて死んで仕舞ふといふのだ、まことに造作は無いわけさ。又或る藥品を塗つた壁紙を主人の平生居る室の壁に張つて置けば、室内の溫暖の度合の變化に従つて其毒が空氣の中に混じる、其空氣を呼吸すれば長い間には死んで仕舞ふ。或は一本のサイホンラムネを夫婦して飲む、妻は死なないで夫はやがて絶命する、これはラムネの逆り出る口へ、澱粉質の物の中に毒薬を混じたものを着けて置いて最初に夫に注いでやる、洋壺の中にラムネが沸騰して泡立つから毒物を見出す間がなくてぐつと一息に飲み乾す、直ぐに譯無く死んで仕舞ふといふのである。巻煙草に毒を仕込む、そいつを、園遊會で喫ませる、なんといふ段には證據物件を湮滅させるに實に適當だね。

ハンニバルを首として昔時の英雄等が死する目を豫言して死んだのは、大抵自分で自分の秘藏の毒薬を嘗て死んだものが、花を引くばかりが能くも無い、そろ／＼日本人も草でも嘗て見て慰みに毒薬でも手製して持つて居るがよい。現在僕なども今諸君の目に觸れぬ某所に虎や熊の十四二十匹は殺せるほどの薬を持つて居る。まあこんな種類の極手を下し易い簡單な毒殺法ばかりでも僕が知つて居るだけで少くとも二三百はある。まだ我日本の法律で罰せられない殺人法、まだ何人にも發明されない殺人法も僕は知つて居る。自分は或る自分の利益の爲め、或は友人の利益の爲め、若くは一家一國の利益の爲めには一人、二人、五人、十人乃至五十人、百人、千人、萬人までも自分が安全なる地位に於いて必らず殺し得る工夫を案じ得られると堅く、堅く信じて居るのである。若し諸君の中に不倶戴天の親の仇敵が、怨み重なる憎くき仇を有する人があつて、これを殲さんが爲めに僕に一臂の力を假らんと云ふならば、僕は僕の一身を犠牲に供さないで容易く仇敵を殺し得るといふことを請合ふ。昔しの人には貴重なる生命を輕んじて、仇を復すると云へば水盃までして遣つて、而も返討ちなどといふ憐むべき失敗を招いたも

のだ。然し僕は學術の開けた明治の世に生れたお蔭には、掛け換へなき一生を捨てずして必らず成功し得ることを信じて居る。元來多く昔用ゐられた礦物質の毒薬は焼けて灰になつても痕跡が残つて居つて、直に毒殺の證據が顯はれるが、植物質の毒薬は消滅して仕舞つて少しも後に残らない。また、固形體の毒薬は痕跡を遺すが、瓦斯體の毒薬は痕を遺さぬ。凡て斯ういふやうに理をつめて研究して行くから、人を殺して罪を免れる位の事は譯は無いのだ。諸君が平生絶えず用ゐられるその煙草なんといふ種類のものは尤も毒殺の手段を施すに適當したものである。ソレ毒が燃える、死んで仕舞ふ、さうして其毒は焚えて仕舞ふのだから何が残るものか。で必らずしも毒殺とは限らない、人をして體面を失せしめる丈の些々たること、假令ば、噤ませるとか、放屁をさせるとか、乃至、欠伸、居眠などをさせるといふやうなことも容易く成し得られる、御望みなれば如何様なりとも、此處で煙草さへ出し玉ばは今直ぐに僕が空言を吐かぬといふ證據を諸君の御目に掛けよう。また敵の體に近寄つて咀嚙の間に殺すには、これ見給へ、僕の秘藏のこのペンシルの中に藥液が入つて居るが、これで如何なる勇士でも猛獸

「理窟だ、ハ、ハ、ハ、ハ。」

やう
様なことだ。されば其時代でも少し進歩した奴
そのじだい
すこしへんぱ
やつ

一方に毒藥を塗つて置いてそれで切り分けて貼る。

訴人に一瞥された其時の敗訴人の恐ろしい目付が今だに眼前を去らぬのである。ところで、今此の横尾の説を聞くと同時に其眼つきを思ひ出して、そんなことは萬々無いとは思ひながら、若しやあの恐ろしい眼つきの敗訴人に、丁度今新築を初めた事務所の壁紙にでも、復讐の仕掛をされた日には堪つたものでは無い、しかも今度の新築をするのも、その一件の金でするのだからナ、と實際に見た厭な眼つきに空想の附加へをして、自から臆病風に吹かれた。

一座中の年寄の上岡と云ふ男は、並外れた貯金家で、長靴を穿いて雨の日雪の日は勿論の事、快よく晴れ渡つた日にもそれで済ますといふほどに儉約しく暮して居るので、自然有福な上に、貸家を澤山持つて居るため其収入も少くない。ところが此男の店借りに贅學者があつて、久しいあとから非常に店賃を滞らせて居た爲、追ひ立てようとして仕たのも一度二度では無かつた。然るに此頃急に其贅學者の工面が好くなつて、滞つて居た分を綺麗に拂つたばかりで無く、衣服さへ光らせて居るといふ奇談を差配人から聞いたのは、つい兩三日前のことであつた。まさかに當節の贅學者の事だから、頼まれたからとて大場道益をやらかしてもすまいが、貧に逼り

などして、若や。と思ふと、我身にかゝつた事では無いが、何となく忌ばしい心地がした。

此中で一番の好男子と許された下條といふ男は、友人間に誰知らぬものはない嫉妬深い年上の妻を持つて居る、而も自己は入嫁の身であるため、財産を目的にして入つたもの、やう世間には卑められ、家つきの娘との廉で女房には威張らるゝので自分も大に後悔しては居るが、ある事情のために離れることもならず其儘我慢して口惜しさを忍んで居るのである。で折々池の端邊の待合などで下谷の美しいのと隠れん坊な仕て遊んだが、曾て其事が顯はれて、貴郎は、貴郎はなと、小突きまはされた其恐ろしさには、甚く恐縮したさうだ。しかし其美しいのを思ひ切つたかといふに決して然様でないのみならず、其の女もまた自己を一方ならす思つて呉れるといふ難有い寸法なので、今でも内々逢ひ引きして居るのだから、若しこの祕密が許されて嫉妬深い妻の耳に入つたらばどんな珍事が持ち上らぬにも限らない、それこそ彼の美しいのは、まかり間違へば血反吐を吐かされるか何だか知れたものではない、と不安の心を醸した。日頃借金のために身を賣められて居る中山は、此頃また或る名高い高利貸の残酷非道な男

に惱まれて居る。この高利貸は到る處多くの貧民に限らず、世間に地位ある人にも大に憎まれて居る。萬一横尾、いや横尾は眞逆そんな罪惡を犯すやうなことはあるまいが、若し横尾の如き人並勝れた智者に彼の高利貸奴が非道残酷な行爲をして、不幸にして横尾が言つたやうな我日本の法律に於て罰することの出来ない隠微な毒殺法、或は後に痕跡の毫も止まらぬ毒藥で手もなく殺害されるトいふやうなことが起りばすまいか。萬一左様いふ事があつたとすれば其嫌疑は差し詰め此の乃公に懸つて來さうな事だ。イヤ險難だぞ、。根も葉もない冤枉の罪の爲に悲惨極まる牢獄の苦楚を嘗めるなどはあり難くない。ア、早く返金して仕舞ひたいものだが。と心を悩ました。

誰しも皆自分の思ひ浮めたやうなことが實際には起るべくも無いと思はぬで無かつた。

然し實際そんな馬鹿なことがある筈は無いと思ひながらも、猶一種の不安の感じを打ち消すことは出来なかつた。そこで一座皆しらけ渡つて、一言も口を開くものが無いが心の裡の夫々の煩悶は知らず識らず顔面に顯はれた。今まで窓に差したる夕陽は全く向ヶ岡に没して仕舞つて人顔も定かに知れなくなつた。不忍の池に浮

と、我が胸の邊りに輝いて居る金鎖の先に着いて居た金鉛筆を取つて人々の前に差出した、皆々は我知らず手を引込ます。これを見てあははと大笑ひしながら更に立野の肩を叩いて、
「はゝゝゝ、君はまあ其の顔色は何んと云ふ眞面目な顔をして居るのだ、何ぞ謙だよ、この横尾は氣も狂はない、心も確だ、眞逆平常からそんな危険極まる毒藥を携帯してはゐないから安心し玉へ。たゞ僕の説を立徹さうためばかりに聊か辯舌を弄して君等を脅したばかりだよ。然しながら斯う云ふ僕のやうな危険な知識を有して居る人が僅か五六人の此席の中にもあるのだから、四千萬人の我邦人の中には、どんなに危険な、またどんなに辛辣な考案を持って居る奴があるかも知れないといふことは諸君も認めねばならぬ事である。まあ此の如く天保時代の人達と、明治の文明の代に生れた人とは、知識と云ひ、思想と云ひ、總ての點に於て非常なる差があるのだから、犯罪の状態も今後は非常に變化して來るに相違ない。刀や出刃庖丁や、モルロ

と、熱心しんしんに眞面目まじめな口調くこうで説き立てた上、ざろりと眼めを光ひからせて一座ざを得意とくい氣けに見廻みまわした。

勿論醉餘の座談ではあつたが、人を殺して置

いて而も其跡を掩ふことが出来るに近い犯罪の方法があるといふ點に歸着する甚だ不愉快な長話であつたから、横尾の主張が道理らしく聞えるに連れて、當人の意氣揚々たるに反し、成程と思ふにつけて、一同は甚だ無氣味な心持がした。人々は無言となつて仕舞つて、夫々の顔の上に面白からぬ雲を翳がした。

送られて往く蓮田學士は自分の最愛の妻、しか
結婚して間もない最惜し戀ひしの妻を後に残
して一人遙々と萬里の波濤を超えて往くのであ

(254)

太 郎

坊

見るさへまばゆかつた雲の峰は風に吹き崩されて夕方の空が青みわたると、真夏とはいひながらお日様の傾くに連れて流石に凌ぎよくな。聽て五日頃の月は葉櫻の繁みから薄く光つて見える、其下を蝙蝠が得たり顔にひらりと彼方此方へ飛んで居る。

主人は甲斐々々しく、はだし尻端折で庭に下り立つて蟬も雀も濡れよとばかりに打水をして居る。丈夫づくりの薄禿の男ではあるが其餘念のない顔付ば、おだやかな波を額に湛へて、今は十分世故に長けた身の最早何事も輕々しくは動かされぬといふやうなありさまを見せて居る。

細君は焔爐を煽いだり、庖丁のおとなさせたり、忙がしげに臺所をゴトツカせて居る。主人が跣足になつて働いて居るといふのだから、細君が奥様然と濟しては居られぬ筈で、かういふ家の主人といふものは、俗にいふ謂も利生もある人であるによつて、人の妻たるだけの任務は嚴格に果すやうに馴らされて居るのらしい。

下女は下女で白のやうな尻を振立て、縁側を雜巾がけして居る。

まづ賤しからず貴からず暮らす家の夏の夕暮の状態としては、生き／＼として活氣のあるよい家庭である。主人は打水を了へて後満足げに庭の面を見わたしたが、やがて足を洗つて下駄をはくかとおもふと直に下女を呼んで、手拭、石鹼、湯銭等を取り來らしめて湯へいつてしまつた。

歸つて來ればチャンと膳立てが出来て居るといふのが、毎日々々版に招つたやうに定まつて居る寸法と見える。

聽て主人はまくり手をしながら茹鰯のやうになつて歸つて來た。縁に花蓆が敷いてある、提煙草盆が出て居る。ゆつたりと坐つて煙草を二三服ふかして居る中に墨塗の膳は主人の前に据ゑられた。水色の天具帖で張られた籠洋燈は座敷の中に置かれて居る。ほどよい位置に吊された岐阜提灯は涼しげな光りを放つて居る。

庭は一隅の梧桐の繁みから次第に暮れて來

て、ひよる松檜葉などに滴る水珠は夕立の後かと思ふ紛ふばかりで、其濡色と夕月の光の薄く映するのほ、何とも云へぬすが／＼しさか添へて居る。主人は庭を渡る微風に袂を吹かせながらおのれの勞働が作り出した快い結果を極めて満足しながら味はつて居る。

所へ細君は小形の出雲焼の燗德利を持つて來た。主人に對つて坐つて、一つ酌なしながら微笑を浮べて、

『嗚お疲れでしたらう』と云つた其言葉は極めて簡單であつたが、打水の涼しげな庭の景色を見て感謝の意を含めたやうな口調であつた。主人はさ／＼甘さうに一口飲つて猪口を下に置き、

『何、疲れるといふまでのことも無いのさ、却つて程好い運動になつて身體の業になるやうな氣持がする。而して自分が水を與つたので庭の草木の氣勢が善くなつて、生々として居る様子を見ると、また明日も水撒を仕て遣らうとおもふのさ。』

と、云ひ了つてまた猪口を取り上げ、靜に飲み乾して更に酌をさせた。

其日に自分が爲るだけの業務を爲て了つてから、適宜の勞働を仕て、湯に浴つて、それから

いて居る鴨の啼聲が、寒い風に連れて夕闇を破つて、あゝと心細くけたましく耳を劈いた。忽然として電氣燈が大勢の圍んで居た卓子の上に輝いた。一同はハッと我に返つた。

送られて往く蓮田學士は、微醺の興に乗じて最初に由なきことを口に出した爲に一同が不愉快不機嫌の淵に沈んだのを痛く悔いた。折角我が巴里行を送る爲めに盛んな送別會を開いて目出度祝つて呉れた其上、愉快の上にも愉快に飲み且語らうと思ふ心づくしから開いて呉れた第二次會の席上我が談話から斯かる不愉快の光景を惹き出したのは如何にも濟まないことと思つた。

「いや、全く横尾君の言はるゝ通り、何そんなことがあるものか、と満更打ち消すことは出来ない談である。僕がこれから往かうとする佛蘭西は勿論、日本にもどんな珍事が起らないとは限らない。然しながら其様ことが僕の不在中に日本に起らぬため、自分は新聞に依つて日々其の出来事待兼ね首を差伸べて見る樂みが好し出来ないにもせよ、僕は我が親愛なる同胞兄弟の住んで居る日本國に其様な不吉、思むべき厭ふべき凶變の決して起らないことを望まればならぬ、と悟つた。而して僕が留學せんとする佛

蘭西にも其様な恐るべき疑獄などの起らないのを望まねばならぬと感じた。僕は最初は何となく珍らしい疑獄であつたら嘸面白からう、樂しみであらう、是非何か異つたことがあれば宜いと思つたのは甚だ輕卒な考へであつた。僕のみならず諸君に於ても假初ながら今一種の不愉快の感を覺えたらしく見えるのは、蓋し他人の身の上に降り掛つた殃禍、或は他人が泣悲しむべき悲惨なる凶變に遭ふといふやうなことを聞いて、其に興味ある事として樂まんといふが如き不道德極まる發言と思想とに得た罰であつたであらう。」

と云ひ出した。

この眞面目で道理のある言葉に皆々口を揃へて「左様だ、左様だ」と相槌を打つて、辛うじて不氣味なる中より甦つたらしき愉快なる顔に返つた。

暖爐の火はばち／＼と音を立て、燃え、電氣燈の光りは明らかに一室を照らして居る。

一時は人々皆一齊に默然として互の顔を見合つたが、其時の不安の雲がかゝつた顔色は消えて、今は又何人もびえ／＼とした微醉機嫌の薄紅き顔に返つた。麥酒の杯は人々に舉げられた。再び愉快らしい笑ひ聲は起つた。

十六夜の月は早や森の上に昇つて、心地よいまでに澄み渡つた光は窓硝子を透して曇りなき六人の姿を照らした。

な。」

といふ。主人は一向言葉に乗らず、

『ア、何様も詰まらないことを仕たな。何様

だらう、もう繼げないだらうか。』

と猶未練に云うて居る。

『そんなに細かく毀れて仕舞つたのですから、

もう繼げますまい。どうも今更仕方は御座いま

せんから、諦めて御仕舞なすつたが宜う御座い

ませう。』

といふ細君の言葉は差當つて理の當然なの

で、主人は落膽したといふ調子で、

『ア、諦めるよりほか仕方が無いかな。ア、ア

ア物の命数には限があるものだナア。』

と悵然として嘆じた。

細君は何日にもない主人が餘りの未練さを稍訝

りながら、

『貴方はまあ如何なすつたのです、今日に限つ

て男らしくも無いぢやありませんか。何時ぞや

お銅が伊萬里の刺身皿の箱を落して、十人前ち

やんと揃つて居たものを、毀したり、傷物にし

たり、一ツも満足のもの無いやうにしまつた時、

傍で見ていらしつて、過失だから仕方がないわ、

と笑つて済ましてお仕舞なすつたではありませ

んか。彼の血は古びもあれば出来も佳い品で、

價値にすれば其猪口とは十倍も違ひませうに、

それすら何とも思はないで御諦めなすつた貴方

が、何だつてそんなに未練らしいことを仰しや

るのです。まあ一杯召し上れな、すつかり御酒

が醒めて御仕舞なすつたやうですれ。』

と激まして慰めた。それでも主人は何となく

氣が進まぬらしかつた。しかし妻の深切な無に

すまいと思つてか、重々しげに猪口を取つて更

に飲み始めた。けれども以前のやうには浮き立

たない。

『どうも矢張り違つた猪口だと酒も甘くない、

まあ止めて飯に仕ようか。』

と矢張大層沈んで居る。細君は餘り未練すぎ

ると稍たしなめるやうな調子で、

『もう宜い加減に御諦めなさい。』

ときつぱり言つた。

『ウム諦めることは諦めるよ。だがの、別段未

練を残すの何んといふではないが、茶人は茶

碗を大切に、飲酒家は猪口を秘藏にするとい

ふのが、こりやあ人情だらうぢやないか。』

『だつて、今出してまゐつたのも同じ永樂です

よ。それに毀れた方はざつとした蕤花の模様で、

焼も餘り好くありませんが、此方は、中は金襴

地で外は青華で、工手間もかゝつて居れば出来

も好いし、まあ永樂といふ中にも此等は極上と

いふ手だ、と御自分で仰しやあつた事さへある

ぢやあございせんか。』

『ウム、然し此猪口は買つたのだ。去來の暮に

己が仲通の骨董店で見つけて來たのだが、彼の

猪口は金銭で買つたものぢやないのだ。』

『では如何なすつたのでございます。』

『ヤ、こりやあ詰らないことをうかつかり饒舌つ

た。ハ、ハ、ハ、ハ。』

と紛らしかけたが、不圖目を擧げて妻の方を

見れば妻は無言で我が面をちつと護つて居た。

主人もそれを見て無言になつて一霎時は何か考

へたが、やがて快活な調子になつて、

『ハ、ハ、ハ、ハ。』

と笑ひ出した。其面上には早不快の雲は名残

無く吹き掃はれて、其眼は晴やかに澄んで見え

た。此の少時の間に主人は其心の傾向を一轉し

たと見えた。

『ハ、ハ、ハ、ハ、云うて仕舞はう、云うて仕舞はう、

一人で物をおもふ事はないのだ、話して笑つて

仕舞へばそれで済むのだ。』

と何か一人で合點した主人は言葉さへおのづ

と活氣を帯びて來た。

『ハ、ハ、ハ、ハ、お前を前に置いてはちと言ひ苦

『豪氣々々。』
と賞翫した。

手は稍顛へて徳利の口へカチンと當つたが、如何なる機會か、猪口は主人の手をスルリと脱げ縁に落ちた。はつと思うたが及ばない。見れば猪口は一つ跳つて下の靴履の石の上に打つた。大片は三つ四つ小片は無数に碎けて仕舞つた。これは日頃主人が非常に愛翫して居つた壺

のです。そんなものは仕方しかたがありませんから捨すてゝ御仕舞おしまひなすつて、サア一ツ新規しんきに召めし上あれ

悲しい目を見るのではあるまいかと、甚く其時は心を悩ました。然し年は若し、勢氣は強い時分だつたから、直にまた思ひ返して、なんの、心さへ確固なら決してそんなことがあらう筈は無い、と竊に自から慰めて居た。

と、云ひかけて再び言葉が激された。妻は興有りげに一心になつて聞いて居る。庭には梧桐を動かしてそよ／＼と渡る風が、極々静穏な相の手を彈いて居る。

『頭がそろ／＼禿げかゝつて斯様になつては乃公も敵はない。過般も宴會の席で頓狂な雛妓めが貴郎の御頭顱とかけて御恰好の紅絹と解きますよ、といふから、其心ばと聞いたら地が透いて、赤い、と云つて笑ひ轉げたが、左様云はれたつて腹も立てないやうな年になつて、こんなことを云ひ出しちや可笑いが、難儀をした旅行の談と同じことで、今のこちやあ無いから何にも彼も笑つて済むといふものだ。で、マア、其娘も己の所へ來るといふ覺悟、己も行末は其女と同棲にならうといふ積りだつた。ところが世の中の御定まりで、思ふやうにはならぬ骰子の眼、といふ慣例だから仕方が無い、何うしても斯うしても其の女と別れなければならぬ、強ひて情を張れば其娘のためにもなるまいとい

ふ仕直に差懸つた。今考へても冷りとするやうな突き詰めた考慮も起さないでは無かつたが、待てよ、あわてる所でない、と思案に思案して、生きは生きたが、女とはたうとう別れて仕舞つた。あゝ、何時か次郎坊が毀れた時、若しやと取越苦勞を仕たつて、其通りになつたのは情無い、と太郎坊を見るにつけては幾度となく人に見せぬ涙をこぼした。が、乃公は男だ、乃公は男だ、一婦人の爲に心を勞して何時まで泣かうかと、思ひ返して女々しい心を捨て、切り男兒がつて諦めて仕舞つた。然し歳が経つても、月が経つても、どういふ物が忘れられない。別れた頃の苦しさは次第々々に忘れたが、ゆかしさは矢張り太郎坊や次郎坊の言傳をして戯れて居た其時と些も變らずに心に浮ぶ。氣に入らなかつたことは皆忘れても、好いところは一つ残らず思ひ出す。未練とは悟りながらも思ひ出す。何様しても忘れきつて仕舞ふことは出来ない。左様かと云つて其後は如何いふ人に縁付いて、何處に其娘が如何生活して居るかといふことも知らないばかりか、知らうと思ふ意も無いのだから、無論其女を何様斯様しようといふやうな心は夢にも持たぬ。無かつた縁に迷ひ惹かぬつもりで、今日に満足して平穩に日を送つて

居る。たゞ往時の感情を遺した餘影が太郎坊の湛へる酒の上に時々浮ぶといふばかりだ。で、乃公は其後其娘を思つて居るといふのではないが、何年後になつても折節は思ひ出すことがあるにつけて、其往時娘を思つて居た念の深さを初めて知つて、あゝ此様にまで思ひ込んで居たものが、能く彼の時に無分別なを仕無かつたことだと喜んで見たり、また、これほどに思ひ込んで居たものでも、無い縁は是非が無いに今に至つたが、天の意といふものは扱も測られないものではあると、何と無く神さまにでも頼りたいやうな幽微な感じを起したりするばかりだつた。お前が家へ來てからももう彼は十五六年になるが、己が酒さへ飲むといへばどんな時でも必らず彼の猪口で飲んで居たが、談すにも及ばないことだから此仔細は談しも仕なかつた。此談は汝さへ知らないのだから、誰が知つて居よう、唯太郎坊ばかりが、太郎坊の傳言を仕た時分の乃公を能く知つて居るものだつた。ところで此の太郎坊も今宵を限りに此世に無いものになつて仕舞つた。其娘は既に二十年も昔から、存はへて居ることやら死んで仕舞うたことやらも知れぬものになつて仕舞ふ、わづかに残つて居た此の太郎坊も土に歸つて仕舞ふ。花やかで美

い話だ。實は彼の猪口は昔已が若かつた時分、あゝ、今思へば古い、古い、ア、もう、二十年も前のことだ。己が思つて居た女があつたが、ハ、ハ、ハ、何様もちつと馬鹿らしいやうで眞面目では話せないが。』

と主人は一口飲んで、

『まあ好いわ、これもマア、酒に酔つた此場だけの座興で、半分位も虚言を交せて談すことだと思つて聞いて居て呉れ。ハ、ハ、ハ、まだ考へなさつたり足りない年のゆかない時分のことだ。今思へば眞實に夢のやうなこと、全で茫然とした事だが、まあ其頃は乃公の頭髮も此様に禿げて居なかつたらうといふ者だし、また色も少しは白かつたらうといふものだ。何といつても年が年だから今よりはまあ優しだつたらうさ。いや何も左様見つとも無く無かつたからといふ譯ばかりでも無かつたらうが、兎に角ある娘に思はれたのだ。思へば思ふといふ道理で、性が合つたとしてもいふ事だつたか、先方でも深切にして呉れる、此方でもやさしくする。いやらしい事なぞは毫も口に仕無かつたが、胸と胸との談話は通つて、どうかして一緒にいたい位の事は互に思ひ思つて居たのだ。ところが其娘の父に呼ばれて遊びに行つた一日の事だつ

た、此杯で酒を出された。まだ其時分は陶工の名なんぞ一つだつて知つて居た譯では無かつたが、たゞ何となく氣に入つたので、切と此の猪口を面白がると、其娘の父が乃公に對つて、斯う申しては失禮ですが此杯がおもしろいとは御若いに似す御日が高い、これは佳いものではないが丁全の作で、ざつとした中にもまんざらの下手が造つたものとは異ふところもあるやうに思つて居ました、と悦んで話した。さうすると傍に居た娘が口を添へて、大層御氣に入つた御様子ですが、御氣に召しましたのは其杯の仕合せといふものでございます、宜しう御座いますから御持歸り下さいまし、失禮で御座いますけれど差上げたう御座います、ねえ、お父様、上げたつて宜いでせう、と取り做して呉れた。もとより惜むほどの貴いものではなし、差當つての愛想にはなる事だし、また可愛がつて居る娘の言葉も他人の前で挫きたくも無かつたからであらう、父は直ぐ娘の言葉に同意して自分の膳にあつた小いのをも併せて贈つて呉れた。その時老人の言葉に、蕈のことを太郎坊次郎坊といひますから此同じやうな蕈の繪の大小二つの猪口の、大きい方を太郎坊、小さい方を次郎坊などと呼んで居りましたが、一つ離し

てあげるのも異なものですから二つともに適ぜませう、といふので終に二つとも呉れた。其一つが今壞れた太郎坊なのだ。そこで乃公は時々自分の家で飲む時には必らず今の太郎坊と、太郎坊よりは小さかつた次郎坊とを二つならべて、其娘と相酌でも仕て飲むやうな心持で内々人知らぬ悦樂を仕て居た。また偶には其娘に逢つた時、太郎坊が貴娘に御眼にかゝりたいと申して居りました、などと云つて戯れたり、あの次郎坊が小生に對つて早く元の御主人様の御嬢様にお逢ひ申したいのですが、何時になれば朝夕御傍に居られるやうなお運びになりませうかし、などと責め立て、困りますと云つて、紅い顔をさせたりして、眞實に罪のない楽しい日を送つて居た。

と、古時の賤の幸環繰り返して流石に今更今昔の感に堪へざるものゝ如く我と我が顔に手を加へたが、直ぐに其手を伸して更に一杯を傾けた。

『左様斯様するうち次郎坊の方を不圖した過失で毀して仕舞つた。あゝ、二つ揃つて居たものを如何に過失と云ひながら一つにして仕舞つたが、あゝ情無いことをしたものだ。若やこれが前表となつて、二人が離れ々々になるやうな

雁

坂

越

其 一

此處は甲州の笛吹川の上流、東山梨の釜和原といふ村で、戸數も幾千も無い淋しいところである。背後は一帶の山つゞきで、丁度其の峰通りは西山梨との郡界になつて居るほどであるから、勿論樵夫や獵師でさへ踏み越さぬ位の仕方だ。勾配の急な地である。さて前といふと、北から南へと流れて居る吹笛川の低地を越して其對岸もまた山々の連續である。そして此村から川上の方を望めば、いづれ川上の方の事だから高いには相違ないが、恐ろしい恐ろしい高い山々が、餘り高くつて天に闕へさうだから、慮と首を縮めて居るといふやうな恰好を仕て、がんと張つて居る状態は、彼方の邦土は誰にも見えない、と意地悪く通せん坊を仕て居るやうにも見える位だ。其の恐ろしい山々の一ト列りの彼方へ武蔵の國で、此方の甲斐の國とは、全然往來さへ絶えて居るほどである。昔時はそれでも雁坂越と云つて、たまには其の山を越して武蔵

へ通つた人もあるので、今でも怪しい地圖に、道路があるやうに書いてあるものもある。しかし此の釜和原から川上へ上つて行くと下釜口、釜川、上釜口といふところがあるが、それで行止りになつて仕舞ふのだから、それから先はもう何處へも行きやうは無いので、川を渡つて東岸に出たところが、矢張り川下へ下るが、川浦といふ村から無理に東の方へ一と山越して甲州裏街道へと出るかの外には路も無いのだから、今では實際雁坂越の路は無いと云つた方が宜いのである。かういふやうに三方は山で塞がつて居るが、唯一方川下の方へ行けば、段々に山合が潤くなつて、川が太つて、村々が賑やかになつて、終に甲州街道へ出て、それから甲斐一國の都會の甲府に行きつくのだ。笛吹川の水が南へ南へと走つて、此邊の村々の人が甲府々と云つて居るのも無理は無いのである。釜和原は斯様云つたところであるから、言ふまでも無く物寂びた地だが、それでも近い村々に比べればまだしも宜い方で、前に擧げた川上

の二三ヶ村はいふに及ばず、此村から川下に當る數ヶ村も、皆此の村には勝らないので、此村には聊かながら物を賣る肆も一二軒あれば、物持だと云はれて居る家も二三戸はあるのである。

今此の村の入口へ川上の方から來かゝつた十三ばかりの男の兒がある。山間僻地の此邊にしても些醜過ぎる鍵裂だらけの古布子の、しかも御坊さん御成人と云ひたいやうに裾短で桁短で汚れ腐つたのを素肌に着て、何だか正體の知れぬ丸木の、杖には長く天稗棒には短い、五合樽の空虚と見えるのを、樹の皮を繩代りに仕て縛しつけて、それを擔いで、夏の炎天で無から宜いやうなものゝ、跣足に被り髪……まるで赤く無い金太郎といったやうな風體で、急足で遣つて來た。

すると路の傍ではあるが、川の方へ「なだれになつて居るところ一體に桑が仕付けてある其の邊に下の方の低いところで、いづれも十三四といふ女の兒が、流石に邊鄙でも嬌き立つ年頃だけに紅いものや青いものが遠くからも見え渡る扮装を仕て、小簾を片手に、節こそ踏びては居れど、清らかな高い徹る聲で、桑の嫩葉を摘みながら歌を唱つて居て、今しも一人が、

しかつた暖かて燃え立つやうだつた若い時の總ての物の記念といへば、たゞ此の薄禿頭、お恰好の紅絹のやうなもの一つとなつて仕舞うたかとおもへば、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、月日といふものゝ作用の今更ながら強いのに感心する。人の一代といふ物は、思へば不思議のものをちやあ無いか。頭が禿げるまで忘れぬほどに思ひ込んだことも、一つ二つと楔が脱けたり輪が脱けたりして車が亡くなつて行くやうに、段々消ゆるに近づくといふは、はて恐ろしい月日の力だ。身にも替へまいとまでに慕つたり、浮世を愛いとまでに迷つたり、無い縁は是非も無いと悟つたりしたが、まだ何處ともなく心が惹かされて居た其古い友達太郎坊も今宵は碎けて亡くなれば、戀も起らぬ往時に返つた。今の今まで太郎坊を手放さず居つたのも思へば可笑しい。其の猪口を落して擲いてそれから種々と昔時のことを繰返して考へ出したのも愈々可笑しい。ハ、ハ、ハ、ハ、水を弄べば水を得るのみ、花の香は虚空に留まらぬ、と聞いて居たが、ほんとに左様だ。ハ、ハ、どれ、飯に仕ようか、長談を仕た。』と語り了つてまた高く笑つた。今は全く顔付も冴えんゝとした平生の主人であつた。細君は笑ひながら聞きなほりて一種の感に打たれたか

の如く首をかたぶけた。

『それほどまでに思つていらしたものが、一體まあ如何して別れなければならない機会になつたのでせう、何かそれには深い仔細があつたのでせうか。』

とは思はず口頭に進つた質問で、勿論細君が一方ならず同情を主人の身の上に寄せたからである。然し主人は其の質問には答へなかつた。

『それを今更話した所で仕方がない。天下は廣い、年月は際涯無い。然し誰一人乃公が今こゝで談す話を虚言だとも眞實だとも云ひ得る者があるものか。而してまた乃公が苦しい思を仕た事を善いとも悪いとも判斷して呉れるものがあるものか。唯一人遺つて居た太郎坊は二人の間の祕密をも悉く知つて居たがそれも今亡くなつて仕舞つた。水を指さしてむかしの水の形を語つたり、空を望んで花の香の行方を説いたところ、役にも立たぬ詮議といふものだ。昔時を繰返して新しく言葉を貰したつて何にならうか。ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、笑つて仕舞ふに越したことはない。云ば、戀の創痕の痂が時節到來して脱れたのだ。ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、大分好い工合に酒も廻つた。可い、可い、酒は既澤山だ。』と云ひ終つて主人は庭を見た。一陣の風はさ

つと起つて籠洋燈の火を瞬きさせた。夜の涼しさは座敷に満ちた。

が、不幸に家族が少くつて今ではお浪と其母とばかりになつて居るので、召使も居れば傭の男女も出入りするから、朝夕などは賑かであるが、晝はそれ／＼働きに出してあるので、お浪の母が残つて居るばかりで、至つて閑寂である。特に今、母はお浪が源三を連れて歸つて來たのを見て、妻は一す見廻つて來るから、と云つて少し離れたところに建てゝある養蠶所を監視に出て行つたので、此の廣い家に年のいかないもの二人限であるが、そこは巡查さんにも月に何度かしか回つて來ない程の山間の片田舎だけ長閑なもので、二人は何の氣も無く遊んで居るのである。が、上れとも云はなければ茶一つ出さうとも仕無い代り、自分も付合つて家へ上りも仕無いで居るのは、一つはお浪の心安立からでもあらうが、矢張まだ大人びぬ田舎娘の素懐なところからであらう。

源三の方は道を歩いて來た／＼に些胸が草臥て居るから、腰を掛けるには少し高過ぎる縁の上へ無理に腰を載せて、それがために地に届かない兩脚をぶら／＼と動かしながら、丁度其下の日當りに寐て居る大な白犬の頭を一寸踏んで軽く蹴るやうに觸つて見たりして居る。日の光は丁度二人の胸あたりから下の方に當つて居

るが、日ざしに近く居る故だか二人とも顔が薄りと紅くなつて、殊に源三は美しく見える。『餘程ツて。然様さ五日六日來なかつたばかりだ。』

と源三はお浪の言葉に穩やかに答へた。『其様なものだつたかネ、何だか大變長い間見え無かつたやうに思つたよ。そして今日ばまた定りのお酒買ひかネ。』

『あゝ、然様さ、厭になつちまふよ。五六日は身體が悪いつて痼癪ばかり起してネ、己を打つたり擲いたり仕た代りにやあ酒買ひのお使ひはせずに濟んだが、もう癒つたから又今日ツからは毎日だらう。それも好いけれど、片道一里もあるところをたつた二合づつ買ひに遣されて、そして氣むづかしい日にあ、こんなに暑りが悪い筈は無え、大方途中で飲んだらう、道理で顔が赤いやうだ、なんて無理を云つて打撲るんだもの、ほんとに口惜くつてなりや仕ない。』

『ほんとに嫌な人だつちや無い。あら、お前の頸のところに細長い痣がついて居るよ。何時打たれたのだエ、痛さうだネエ。』

と云ひながら傍へ寄つて源三の衣領を寛げて綺麗な指で觸つて見ると、源三はくすぐつたいと云つたやうに頸を縮めて障りながら、

『お止よ。今ぢあ痛くもなんとも無いが、打たれた時にあ痛かつたよ。だつて布袋竹の釣竿の能く撓ふ奴でもつてビューツと一ツやられたのだもの。一昨々日の事だつたがね、生の魚が食べたいから釣つて來いと命令けられたのだよ。』

風が吹いて騒つた日だつたもの、釣れ無いただらうとは思つたがね、愚圖々々して居ると叱られるから、ハイと云つて釣には出たけれども、何様したつて日が悪いのだから、釣れや仕無いのさ。夕方まで骨を折つて、足の裏が痛くなるほど川ん中を彼方へ行つたり此方へ行つたりしたけれども、とう／＼一尾も釣れず家へ歸ると、サア怒られた／＼、此畜生／＼と百ばかりも怒鳴られて、香魚や山鰍は釣れないにしても雑魚位釣れ無い奴があるものか、大方遊んでばかり居やがつたのだらう、此の食ひ潰し野郎めツ、てえんでもつて、釣竿を引奪られて、逃げる／＼を斜に打たれたんだ。切られたかと思つたほど痛かつたが、それでも夢中になつて逃げ出すとネ、丁度叔父さんが歸つて來たので、それで済んで仕舞つたよ。さうすると後で叔父さんに對つて、源三はほんとに可愛い兒です、妻が血の道で口が不味くつて御飯が食べられないつて云ひましたらネ、何か魚でも釣つ

妾あ桑摘む、主お到まんせ、春蠶上簇れば、二人着る。

と、唄ひ終ると、又他の一人が、聲張り上げて、桑を摘め摘め、爪紅さした花洛女郎衆も、桑を摘め。

と唄つたが、其聲は實に前の聲にも増して清い澄んだ聲で、斷えず鳴る笛吹川の川瀬の音をも暫時は人の耳から逐ひ拂つて仕舞つた程であつた。これを聞くに彼の急ぎ足で遣つて来た男の兒は忽ち歩みを遅くして仕舞つて、聲の仕た方を見ながら、ぶらり々と歩くと、女の兒の方では何にか打興じて笑ひ聲を洩らしたが、見る人ありとも心付かぬのであらう、桑の葉越に紅いや青い色をちらつかせながら餘念も無しに葉を摘むと見えて、少時は静であつたが、また前の二人とは違つた聲で、

桑は摘みだし、梢は高いと唄ひ出したが、此聲は前の聲のやうに無邪氣に美しいのでは無かつた。さうすると此を聞いた此方の汚い衣服の少年は、其の眼鼻立の悪く無い割には不愛想で薄淋しい顔に、聊か冷笑ふやうな笑を現はした。唄の主は此様事を知らうやうは無いから、直と續いて、

誰に負はれて、摘んで取る。

と唄ひ終つたが、束の摘んで取るの一句だけに此方の少年も聲を合はせて彌次馬と出掛けたので、歌の主は吃驚して此方を透かして視たらしく、やがて笑ひを帯びた大きな聲で、

『源三さんだよ、憎らしい』と誰に云つたのだから分らない語を出しながら、如何にも雅楽に圓から出離れて、而して振り返つて手招きをして、

『源三さんだつて云へば、お浪さん。早く出てお出でなま。ホ、妾達が居るものだから羞がつて、はにかんで居るの。ホ、猶をかしいよ、此人は。』

と擲擲つたのは十八九の何處と無く嫉味な女であつた。源三は一向頓着無く、

『何云つてるんだ、世請焼め。』と口の中で云ひ棄て、又さつさと行き過ぎようとする。圓の中からは一番最初の歌の聲が、

『何だネお近さん。源三さんに託けて遊んでサ。妾やお前はお浪さんの世話を焼かすともきへすれば宜いのだアネ。サア此方へ來てもつとお探りよ。』

と、少し叱り氣味で云ふと、

『ハイ、ハイ、御道理さまで。』と戯れながらお近は又桑を採りに圓へ入る。そ

れと引違へて俗に現れたのは、紫の絲の澤山ある極粗い縞の銘仙の着物に紅氣の可なりある唐縮緬の帶を締めた源三と同年か一つも上であらうかといふ可愛らしい小娘である。源三はすたすたと歩いて居たが、丁度此時蟲が知らせても仕たやうに不圖振返つて見た。途端に罪の無い笑は二人の面に溢れて、そして娘の歩は少し疾くなり、源三の歩は大に遅くなつた。で、やがて娘は路：路といつても人の足の踏む分だけを残して兩方からは小草が埋めて居る絲筋ほどの路へ出て、其狭い路を源三と一緒に仲好く肩を駢べて去つた。其時や、隔たつた圓の中から復起つた歌の聲は、

妾あ桑摘む、主お到まんせ、春蠶上簇れば、二人着る。

といふ文句を追ひかけるやうに二人の耳へ送つた。それは疑ひも無くお近の聲で、態と二人に聞かせるつもりで唄つたらしかつた。

其二

『餘程此村へは來なかつたネ。』と、淺く日の射して居る高い縁側に身を靠せて話して居るのはお浪で、此家はお浪の家なのである。お浪の家は村で指折の財産主である

其二

『餘程此村へは來なかつたネ。』と、淺く日の射して居る高い縁側に身を靠せて話して居るのはお浪で、此家はお浪の家なのである。お浪の家は村で指折の財産主である

其二

『餘程此村へは來なかつたネ。』と、淺く日の射して居る高い縁側に身を靠せて話して居るのはお浪で、此家はお浪の家なのである。お浪の家は村で指折の財産主である

叔母さんが苛いッたつて雪の降つて居る中を無暗に逃げ出して来て、妾の家へも知らさないで、甲府へ出て仕舞つて奉公しようと思ふつて、夜にもなつて居るのに竊と此村を通り抜けて仕舞はうと爲たちあ無いか。吾家の母さんが與惣次さんところへ招ばれて行つた歸路のところへ丁度汝が衝突つたので、直に見つけられて止められたのだが、後で母様の御話にあ、いくら下りだつて甲府までは十里近くもある路を、夜にかゝつて食物の準備も無いのに、足ごしらへも無しで雪の中を行かうとは惨憺なやうでも眞實に兒童だ、妾が行き合つて止めても仕無かつたら、何様な事になつたか知れや仕無い、思ひ出して怖しい事だ、と仰あつたよ。そればかりぢあ無い、奉公を仕ようと思つたつて諸人といふものが無ければ堅い家ぢあ置いて呉れあ仕無いし、他人ばかりの中へ出れあ、此兒は斯様に譯のものだから黙然だと思つて呉れる人だつて有りあ仕無い。だから他郷へ出て苦勞をするに仕ても、それ／＼の道順を踏まないければ、たゞ彼方此方でこづき廻されて、無駄に苦しい思をするばかり、其中にあ碌で無い智慧の方が付き勝のものだから、まあ／＼無暗に廣い世間へ出たつて好いことは無い、源さんも辛

いだらうが、もう少し辛抱して居て呉れよば、其中に何様か仕てあげるつもりだ、と吾家の母さんが御話したつた事は、彼時の後に妾が話したから汝だつて知りきつて居る筈ぢあ無いかエ。それなのに猶汝は隙さへあれあ無鐵砲なことを爲ようと思ひのかエ。』
と年齢は同じ程でも女だけにませたことを云つたが、その言葉の端々にも此女の伶俐で、而して此兒を育て、居る母の、分別に賢い女であるといふことも現れた。
源三は首を垂れて聞いて居たが、
『彼時は夢中になつて仕舞つたのだもの。そして彼時汝の母様にいろんな事を云つて聞かされたから、それからば無暗の事なんか仕ようとは思つてや仕無いのだよ。だけれどもネ、』と云ひさして云ひ蹴んで仕舞つた。
『だけれども何様したんだエ。あゝ矢張吾家の母様の云ふことなんか聴かないつもりなのだネ。』
『なあに、なあに然様ぢあ無いけれども、…』
『それ、お見、然様ぢあ無いけれどもッてお云ひでも、後の語は出ないぢあ無いか。』
『……』
『ほら、ほら、問へて仕舞つて云へ無いぢあ無

いか。汝は妾達にあ祝して居ても腹ん中ぢあ、何時か一度は、誰の世話にもならないで、一人で立派なものにならうと思つて居るのだネ。イエエ頭を掉つても然様なんだよ。』
『ほんとに然様ぢあ無いッて云ふのに。』
『イ、エ、何と云つてもいけないよ。妾はチャーンと知つて居るよ。それぢあ汝あんまりといふものだよ。何も妾達あ汝の叔母さんに告ぐでも仕や仕まいし、そんなに祝した仕無くつても宜いぢあ無いか。先の内はこんな汝ぢあ無かつたけれど、段々／＼に酷い人におなりだネエ、獸で自分の思ひ通りを押通さうと思ひのだもの。ほんとに汝が人が悪い、怖いやうな人になりだよ。でも御生憎さまだが吾家の母様は汝の心持を見通して居らして、いろ／＼な人に然様云つてお置きになつてあるから、何程お前が甲府の方へ出ようと思つたりなんぞしても、然様はいきません。汝の居る方から甲府の方へは笛吹川の兩岸のほかに路は無い。其の路には汝に無暗なことをさせないやうにと思つて見て居る人が一人や二人ぢあ無いから、汝の思ふやうにあなりあ仕ないよ。これほどに吾家の母様の爲さるものも、汝のために宜いやうにと思つて居らつしやるからだ、御話があつたわ。そ

て來てお茶に仕てあげませうツて、今まで掛かつて釣か仕て居ましたヨ。運が悪くつて一尾も釣れ無かつたけれども、と然も／＼自分か乃公に好く思はれて居でもするやうに云ふの、憎くつて／＼なりあ仕無かつた。それも可いけれど何ぞといふと食ひ潰して云はれるな腹が立つよ。過日長六爺に聞いたら、己の山か何町歩とか叔父さんが預かつて持つて居る筈だつていふんだもの。其ちあ己は食潰しの事は有りあ仕無いぢあ無い。家の用だつて随分深山仕て居るのに、口穢く云はれるのが眞實に厭だよ。汝の母さんは己が甲府へ逃げて仕舞つて奉公しようといふのを止めて呉れたけれども、眞實に餘所へ出て奉公した方が幾干可いか知れや仕ない。嗚呼家に居たくない、居たくない。と云ひながら、雲は無いが何と無く不透明な白少を持つて居る柔和な青い色の天をち一つと眺め詰めた。お浪も此の夙く父母を失つた不幸の兒が酷い叔母に窘められる談は前から聞いて知つて居る上に、しかも今のやうな話を聞いたので、聊か涙ぐんで茫然として、何も無い地の上に眼を注いで身動も仕ないで居た。陽氣な陽氣な時節ではあるが一寸の間はしんと靜になつて、庭の隅の石榴の樹の周りに大きな熊蜂が

其三

ぶーんと羽音をさせて居るのが耳に立つた。

色々な考へに小な心を今さら新に紛れさせながら、眼ばかりは見るもの、當も無い天をちつと見て居た源三は、偶然何の禽だか分らない禽の、姿も見えるか見え無いかに位に高く／＼飛んで行くのを見つけて、全くお浪に對つては無い語氣で、
『禽は好いなア。』
と呻き出した。

『エツ』

と言ひながら眼を擧げて源三が眼の行く方を見て、同じく禽の飛ぶのを見たお浪は、忽地に其意を悟つて、耐へられなくなつたが法然として涙を墮した。そして源三が肩先を把へて、
『また汝は甲府へ行つて仕舞はうと思つて居るネ。』

と然も恨めしさうに、加之少し然様はさせませぬといふ壓制の意の籠つたやうな語の調子で言つた。源三は聊かたじろいだ氣味で、
『なあに、無暗に駈け出して甲府へ行つたつて不可といふことは、お前の母様の談で能く解つて居るから、そんな事は思つては居ないけれ

ど、餘り家に居て食ひ潰し食ひ潰して云はれるのが口惜いから、叔父さんにお濟まないけれども何處へでも出て、何様な辛い思ひを仕ても辛抱を仕て、すこしでも可いから出世したいや。弱蟲だ／＼つて衆か云ふけれど、己だつて男の兒だもの、窘められてばかり居たかあ無いや。』と、他の意に逆らはぬやうな優しい語氣ではあるが、微塵も偽り氣は無い調子で、しみ／＼と心の中を語つた、そこで互に親み合つては居ても互に意の方向の異つて居る二人の間に、忽地一條の問答が始まつた。

『何處へでも出て辛抱を爲るつて、それぢあ矢張甲府へ出ようツて云ふんぢあ無いか。』

と、お浪は云ひ切つて、暫時黙つて源三の顔を見て居たが、源三が何とも答へないのを見て、
『それ御覽、矢張然様仕ようと思つておいでのだらう。それあ汝も、品質が好いからつて二合ばかりづつの御酒を其度々に釜川から一里もある此の釜和原まで買ひに遣すやうな酷い叔母様に使はれて、さうして釣竿で打たれるなんて目に逢ふのだから、辛いことも辛いだらうし口惜しいことも口惜しいだらうが、先日のやうに逃げ出さうと思つたりなんぞは仕ちやあ厭だよ。ほんとに先日の夜だつて吃驚したよ。い

源三は甲府へ逃げ出さうとして意を遂げ無かつた後、恐ろしい雁坂を越えて東京の方へ出ようと試みたことが、既に一度で無く、二度までもあつたからで、それをお浪が知つて居よう筈は無いが、雁坂を越えて云々と云ひ中へ入れたので、突然に鋭い矢を胸の真正中に射込まれたやうな氣が仕て驚いたのである。

源三がお浪にもお浪の母にも知らせ無い位であるから、無論誰にも知らせないで、自分一人で懷いて居る祕密は斯様である。一體源三は父母を失つてから、叔母が片付いて居る縁によつて今の家に厄介になつたので、勿論厄介と云つても幾許かの財産をも預けて寄食して居たのだから全然厄介になつたといふ譯では無いので、そこで叔母にも可愛がらるれば随つて叔父にも可愛がられて居たところ、不幸にして其の叔母が病氣で死んで仕舞つて、聽て叔父が何處からか連れて來たのが今の叔母で、叔父は相變らず源三を愛して居るに關らず此の叔父の後妻は何様いふものか源三を容めること非常なので、源三は終に甲府へ逃げて奉公しよう、山奥の兒童にも似合はない賈いことを考へ出して、既に曾て堪へられぬ境遇を被つた時、夢中になつて走り出したのである。ところが源三と小學からの

仲好朋友であつたお浪の母は、源三の亡くなつた叔母と姉妹同様の交情であつたので、我が親かつたものゝ明で加之我が娘の仲好しである源三が始終履歴の汚れ臭い女に酷い目に合はされて居るのを見て同情に堪へずに居た上、丁度無暗滅法に浮世の渦の中へ飛込まうといふ源三に出會つたので、取り敢へず其の逸り氣な舉動を止めて置いて、さて大に踏ん込んで此の可憫な兒を危い道を履ませずに人にして遣りたいと思ひ、其娘のお浪はまた唯何と無く源三を好くのと、且其の可哀な境遇を氣の毒に思ふのの爲に、此もまたいろ／＼に親切に仕て遣る。此等の事情の湊合のために、源三は自分の唯一の良案と信じて居る『甲府へ出て奉公住みする』といふ事を敢て仕難いので、自分が一刻も早く面白くない家を出て仕舞つて世間へ飛び出したといふ意からは、お浪親子の親切を嬉しいとは思ひながら難有迷惑に思ふ氣味もあるほどである。勿論お浪親子が如何に一本路を見張つて居るにしても、其の眼を潛つて甲府へ出ることは、それほど難しいことでは無いが、元は儉しいので弱蟲々と他の兒童等に云はれたほどの源三には、その親切なお浪親子の家の傍を通つて其二人を出し抜くことが出来無いのであつた。

た。件し家に居たく無い、出世が仕度い、奉公に出たら宜からう、と思はずには居られ無い自分の身の上の事情は繼續して居るので、小耳に挾んだ人の談話から終に雁坂を越えて東京へ出ようといふ心が着いた。東京は甲府よりは無論佳いところである。雁坂を越して峠向うの水に隨いて何處までも下れば、其川は東京の中へ流れて居る墨田川といふ川になる川だから自然と甲府へ行つて仕舞ふといふことを聞きかじつて居たので、何でも彼嶺さへ越せばと思つて、前の月の或朝酷く折檻された揚句に、唯一人思ひ切つて上りかけたのであつた。けれども其處は小兒の思慮も足らなければ意地も弱いので、食物を用意しなかつた爲絶頂までの半分も行かぬ中に腹は減つて来る氣は萎えて来る、路はもとより人跡絶えて居るところを大概の「勘」で歩くのであるから、忍耐に忍耐しきれ無くなつて、怖くもなつて來れば悲しくもなつて來る、とう／＼眼を凹ませて死にさうになつて家へ歸つて物置の隅で人知れず三時間も寐て其の疲勞を癒したのであつた。そこで其四五日は雁坂の山を望んで、あゝ到底彼の山は越えられぬと肚の中で悲しみかへつて居たが、一度其意を起したので、日數の立つ中には段々と人の談話や

れだのに禽を見て獨語を云つたりなんぞして、あんまりだよ。』

と捲き立てゝ猶お浪の言はんとするを抑へつけ

『好いよ、そんなに云はなくつたつて分つて居るよ。おいらあ無暗に逃げ出したりなんぞ仕ようと思つてや仕無いといふのに。』と遮る。

『おや、まだ強情に虚言をお吐きだよ。それほど分つて居るなら何故禽は好いなアと云つたり、だけれどもと云つて後の言葉云へ無かつたりするのだエ。』

と追窮する。追窮されても窘まぬ源三は、

『それあ唯おいらあ自由自在になつて居たら嬉しいだらうと思つたから然様云つたのサ。浪ちやんだつて彼の禽のやうに自由だつたら嬉しいだらうぢあ無いか。』と云ふと、お浪はまた新に涙ぐんで、其言には答へず、

『それ、其の通りだもの。汝にや未だ吾家の母さんの妻だのが、どんなに汝のためを思つてゐるか解らないのかネエ。眞實に汝は自分勝手ばかり考へて居て、他の親切といふものは無ししても關はないといふのだネ。おほかた妾達も

誰も居無かつたら、自由自在だつて汝はお喜びだらうが、あんまり其あ氣隨過ぎるよ。吾家の母様も汝の事には大層心配を仕て居らしてつて、

も少しすると汝のころの叔父さんにちやんと談をなすつて、何でも汝のために悪くないやうに仕てあげようつて云つて居らつしやるのだから、辛いだらうが其様な心持を出さないで、少しの間辛抱を御仕でなくちあ濟ないワ。』としみじみと云ふ其の眞情に誘ひ込まれて、源三もホロリとはなりながら、猶、

『だつて、おいらあ男の兒だもの、矢張一人で出世したいや。』と、自分の思はくとお浪の思はくとの異つて居るのを悲む色を面に現しつゝ、正直に加之強情に云つた其の面貌は全然小兒らしいところの無い、大人びきつた寂びきつたものであつた。お浪は此の自己を恃む心の強い言を聞いて、驚いて目を瞠つて、

『一人でつて。何様一人でもつて?』と問ひ返したが返辭が無かつたので、直と又、

『ぢあ誰の世話にもならないでといふんだネ。』と質すと、源三は術無きやうに、且は憐愍と宥恕とを乞ふやうな面をして、微に點頭た。源三の腹の中は秘しきれなくなつて、是に至つて其の

繼子根性の本相を現して仕舞つた。しかし腹の底には如はいふ癖みを持つて居ても、人の好意に貧くことは甚く心苦しく思つて居るのだ。これは此源三が優しい性質の一角と云はうか、いや此が此の源三の本來の美しい性質で、如何なる人をも頼むまいといふやうなのは、却て源三が性質の中の一或一角が境遇のために激せられて他の部よりも比較的に發展したものであらうか。お浪は今明らかに源三が本心を讀んで取つたので、これほどに思つて居る自分親子をも胸の奥の奥では袖に仕て居る源三の其の心強さが怒めしくもあり、また自分が源三に隔てがましく思はれて居るのが悲しくもありするところから、悲痛の色を眉目の間に浮めて、

『ぢあ吾家の母様の世話にもなるまいといふつもりかエ。まあ怖しい心持におなりだネエ、そんなに強くなならないでも宜きやうなものな。そんな汝ぢあ甲府の方へは出すまいと妾達仕て居ても、雁坂を越えて東京へも行きかねば仕無い、吃驚するほどの意地ッ張りにおなりだらう。』と云つた。すると源三はこれを聞いて愕然として、秘せぬ不安の色を自から見せた。といふものは、お浪が云つた語は偶然であつたのだが、

管の痕が隠々と青く現れて居た。それが眼に入るか入らぬに屹と頭を擡げた源三は、白い横長い雲がかゝつて居る雁坂の山を睨んで、つかつかと山のへ上りかけた。併し、忽にして一ト歩は一ト歩より遅くなつて、やがて立止まつたかと思えるばかりに緩く／＼なつた揚句、うつかりとして脱石に爪端を踏掛けたので、ずりりと滑る、よろ／＼とと跟踏る、ハツと思ふ間も無くクルリと轉つてバタリと倒れたが、直には起きも上り得ないで先づ地に手を突いて上半身を起して見ると、我が村の方は丁度我が眼の前に在つた。すると源三は何を感じたか瀧の如くに涙を墜して、終には噁り泣して止まなかつたが、泣いて／＼泣き盡した果に龍鐘と立上つて、背中に着けて居た大きな團飯を抛り捨て、仕舞つて、吾家を指して立歸つた。そして自分の出来るだけ忠實に働いて、叔父が我が舉動を悦んで呉れるのを見て自分も心から喜ぶ餘りに叔母の醋なさを忘れる程であつた。それで二度までも雁坂越を仕うとした事はあつたのであるが、今日まで臆にも出さずに居たのであつた。

たゞ能く愛するものば、たゞ能く解するものである。源三が懷いて居る斯くいふ秘密を、誰

から聞いて知らうやうも無いのであるが、お浪は偶然にも云ひ中てたのである。併し源三は、我が秘密は飽までも秘密として保つて、お浪との會話を宜い程のところに遮り、餘り歸宅が遅くなつては又叱られるから、といふ口實のもとに、酒店へと急いで酒を買ひ、獨りの盡頭まで連れ立つて來たお浪に別れて我が村へと飛ぶが如くに走り歸つた。

其 四

丁度其日は樽の代り目で、前の樽の口のと異つた品ではあるが、同じ價の、同じ土地で出來た、しかも質は少し佳い位のものである、といふ酒店の挨拶を聞いて、若や叱責の種子にはなるまいかと鬼胎を抱くこと大方ならず、且又鹽文鰐を買つて來いといふ命令ではあつたが、それが無かつたので其代りとして勧められた鹽鰐を買つたに就いても一ト方ならぬ鬼胎を抱いた源三は、びく／＼もので家の敷居を跨いで此の經由を話すと、叔母の顔は見る／＼恐ろしくなつて、其の鹽鰐の簾包みを手にするや否や其でもつて散々に源三を打つた。何で打たれても打たれて佳いといふものがある筈は無いが、火を見ぬ鹽鰐の惡醜い――まして山里の日増しも

の、鹽鰐の腐りかゝつたやうな――奴の簾包みで、方任せに眼とも云はず鼻とも云はず打たれるのだから堪へられた譯のものでは無い、先づ簾は幾條にも割れ裂ける、それでもつて打たれるので簾の裂目のひり／＼したところが烈しく觸るから、極々浅い疵ではあるが松葉でも散らしたやうに微疵が顔へつく。そこへ鹽氣がつく、腥氣がつく、魚肉が迸裂て飛んで額際にへばり着いて居るといふ始末、いやばや眼も當てられない可厭な窘めやうで、叔母のする事は全て狂氣だ。勿論源三は先妻の縁引きで、しかも主人に甚く氣に入つて居て、それがために自分が此處へ養子に入れて生活状態の割には山林やなんぞの資産の多いのを譲り受けさせようと思つて居る我が甥が此處へ入れないのであるから、憎いには飽までも憎いであらうが、一つは此女の性質が殘忍な所爲でもあらう歟、また或は多くの男に接したりなんぞして自然の法則を蔑視した婦人等は、やゝもすれば年老いて女の役の無くなる頃に臨むと奇妙にも心狀が焦躁たり苛酷くなつたり仕たがるものであるから、此女もまた其等の時に臨んで居た故で、もあらう歟、如何に源三の仕た事が氣に入らないにせよ、随分尋常外れた責めかたである。最初仕方が無い

何か耳に止まるため次第々々に雁坂を越えるに就いての知識を拾ひ得た。さうすると又そろそろと勇氣が出て來て家を出てから一里足らずは笛吹川の川添を上つて、それから右手の嶺通りの腰を段々と「なぞへ」に上りければ、そこが甲州武州の境で、それから東北へと走つて居る嶺を傳はつて下つて行けば、終には一つの流に會ふ、其流に沿うて行けば大瀧村、それまでは六里餘り無人の地だが、それから盲目でも行かれる樂な道ださうだ、何でも峠さへ越して仕舞へば、と朝晩雁坂の山を望んでは、其の彼方に極樂でもあるやうに好ましげに見て居た。すると叔父は山排ぎをするものゝ常で二三日歸らなかつた或夜の事であつた、叔母の肩をば揉んで居る中、夜も大分に更けて來たので、源三がつい浮りとして居睡ると、さあ恐ろしい烟管の打擲を受けさせられた。そこで復思ひ切つて其の翌朝、今度は團飯も澤山に用意する、錢も少しばかりづつ何ぞの折々に叔父に貰つたのを溜めて置たを竊に取り出す、足ごしらへも嚴重にする、すつかり支度を仕て仕舞つて釜川を背後に、すん／＼と川上へ上つた。やがて小／＼里も來たところで、さあ此邊から川の流に分れて、もう今まで晝と無く夜となく眼に

したり耳にしたりして居た笛吹川もこれが見納めとしなければならぬといふ場所にかゝつた。そこで歳こそ行かないが源三も何と無く心淋しいやうな感じがするので、川の側の岩の上に少し休んで、鞆鞆と流れる水のありさまを見ながら、名づけやうな知らぬ一種の想念に心を満たして居た。さうすると何處からとも無く人聲が聞えるやうなので、もとより人も通はぬ此様なところで人聲を聞かうとも思ひがけなかつた源三は、一度は愕然として驚いたが耳を澄まして聞いて居ると、上の方から段々と近づいて來る其の語聲は、復び思ひがけ無くも啞に叔父の聲音だつた。そこで源三は川から二三間離れた大きな岩の纔に裂け開けて居る其間に身を隠して見告められまいと潛んで居ると、丁度前に我が休んだあたりのところへ腰を下して憩んだらしくて、そして話を仕て居るのは全く叔父で、それに應答へを仕て居るのは平生叔父の手下になつては排ぐ甲助といふ村の者だつた。川音と話聲と混るので甚く聞き辛くはあるが、話の中に自分の名が聞えたので、おのづと聞き逸すまいと思つて耳を立て、聞くと、なあ甲助、どうせ養子をするほど無い財産だから、鼻が勧める鼻の明なんぞの氣心も知れぬ奴を入れるより

は、恰棚で天賦の良い彼の源三に乃公が有つたものば不殘遺るつもりだ。然様したら彼奴の事だから、まさか乃公が亡くなつたつて乃公の墓を草ん中に轉げさせて仕舞ひも爲めえと思ふのサ。前の鼻にこそ血筋は引け、乃公には縁も何もないが、乃公あ源三が可愛くつて、家へ歸ると彼奴めが叔父さん叔父さんと云ひやがつて、草鞋を解いて呉れたり足の泥を洗つて呉れたり、何や彼やと世話を焼いて呉れるのが嬉しくつてならない。子といふ者を持つたことも無いが、まあ子も同様に思つて居るのサ。そこで乃公あ、今は既排がないでも食つて行かれるだけのことは有るが、まだ仕合に足腰も達者だから、五十と聲がかゝつちあ身體は大儀だが、斯様して排いで山林方を働いて居る、これも皆少でも延ばして置て、源三めに與つて喜ばせようと思ふからサ。どれ／＼今日は三四日ぶりて家へ歸つて、叔父さん叔父さんて彼奴めが榮衛額を見よう、さあ、もう一服やつたら出掛けようぞ。と高話して、やがて去つた。これを聞いて居た源三はしく／＼しく／＼と泣き出したが、程經つて力無げに悄然と岩の間から出て流の下の方をぢつと視て居た。が、堰きあへぬ涙を拂つた手の甲を偶然見ると、こゝには昨夜の烟草

付

焼

刃

其 一

『それだつてお前……』

と、恨めしさうに細君の傳子の顔を見た主人の温間流雄は、傳子と眼を見合せた瞬間に急に我から眼を轉じて仕舞つて、力無く我が膝の邊を無意味に視た。色の小白い、のつべりとした、面長の、しかし下豊の、貧相で無い、おつとりとした人の好ささうな三十前の男で、敷居一つを間にして茶の室に駢んでゐる六疊の室に、郵便の二ツ三ツ插まつた烟草盆を前にして、下手へ向きながら坐つて居る。

『知つて居りますよ、ハイ今日は大祭日でございますよ。ですから國旗はちやんと門口に出させて置きます。』

つんとした氣振りの横顔をば亭主の方に見せて、委細關はず、せつせと纖細に出来て居る品格の好い火鉢の未だ新しいのを拭いて居る傳子は、二十を三ツ四ツも越したであらうか、銘仙の衣服に同じ羽織、頭髮は少し癖のある毛を庇

髪にして居るといふ宛然女學生同様の風で、當世の家庭には珍らしくも何とも無いが、古風者の老婆などから云はせれば、ちつとも奥様らしくも無い若い奥様だ。女振は取立て云ふほどでもないが、色の白いの七難を隠して居るの、先づ好い方であらう、眼つきに一寸賢さうな様子が見えて而して又其邊に何處とも無く愛嬌がある。

『イ、エ、國旗の事を聞くのぢやあ無いよ。今日は其の通り大祭日ぢやあ無いが、だからお前私だつて遊びに出る位の事を仕ても宜いぢや無いかといふのだよ。』

『ですから其あ毫も御止め申しも何も致しはしません、御勝手に何處へでもいらしつて遊んで御いになるが宜いぢやあ有りませんか。』

ぐいぐいと火鉢の銅のオトシを拭いて居る。

オトシはお蔭様で銅割金のやうに光り輝やく。

『左様云つたつてお前、小遣錢も何も無しぢやあ外へは出られや仕無いから、何様か仕て呉れなくつちやあ矢張吾家に居ることになる。』

『だから御小遣錢を遣せと仰あるのですか。』
『實は氣の毒だけれども何様か其様願ひたいので。』

『いけませんよ。其なら一層吾家に寐ていらつしやい。定額だけ進げて置いた上はもう進げられませんか。而してまだ御無くなりなさる時分ぢやあ無いぢや有りませんか。今日御遊びに御出になる位は有つて御在でせう。』

大藏大臣は弗箱見たやうに四角張つて堅い。『ところがもう僅々三十五錢しか在りや仕無い、今しがた調べて見たのだから虚言でも何でも無い。』

さも哀憐を乞ふやうに主人は訴へた、亡國民といふものは斯様なものでも有らうかといふやうな顔付をして。

『何故其様無考に御費ひなさるのでせうネエ。』

まだ月初ちやあ有りませんか。』

彼の訴へるが如きに反して、此は全で叱るが如くである。

『だつて僅々七圓ばかりだもの。烟草屋に借になつて居たのを拂つて、電車回数券を買つて、書翰箋だの状袋だのを買つて、其の次手に田舎へ行つて居るお蝶(姪)が手紙の度にせがむで遣すから送つてやらうとおもつて繪葉書を少し

と諦めて打たれた。二度目は情無いと思ひながら打たれた。三度目四度目になれば口惜いと思ひながら打たれた。それから先はもう死んだ氣になつて仕舞つて打たれて居たが、餘り何時までも打たれて居る中に、障へることの出来ない怒が勃然として骨節々の中から起つて來たので、もうこれまでと源三は抵抗しようと仕舞けた時、自分の氣息が切れたと見えて叔母は突き放つて免した。そこで源三は抵抗もせず、我を忘れて退いて平伏したが、もう死んだ氣どころでは無い、殆ど全く死んで居て、眼には涙も持たずにゐた。

其夜源三は眠り兼ねたが、それでも少年の罪の無さには、曉天方になつてトロリと仕た。さして目眈む間も無く朝早く目が覺めると、平生の通り朝食の支度にと掛かつたが、其間々にそりそろりと雁坂越の準備をばじめて重たいほどに腫れた我が顔の心地悪しさを苦にせず、團飯から脚ごしらへの支度まで悉皆仕て後、叔母にも朝食をさせ、自分も十分に喫し、それから隙を見て飄然と出て仕舞つた。家を出て二三町歩いてから持つて出た脚絆を締め、團飯の風呂敷包みをおのが手作りの穿替への草鞋と共に頬にかけて背負ひ、腰の周圍を輕くして、一ト筋の

手拭は頬かぶり、一ト筋の手拭は左の手首に縛しつけ、内腰にはお浪に會つて貰つた木綿財布にいろ／＼の交り錢の一圓少し餘を入れたのを確と納め、兩の手は全空にして置いて、さて柴蒔鎌の柄の小長い奴を右手に持つたり左手に持つたりしながら段々と川上へ登り詰めた。

やがて前の目叔父の言を聞いて引返したところへかゝると、源三の歩みはまた遅くなつた。しかし今度は前の目自分が腰掛けた岩と少時隠れた大な岩とな、やゝ久しく見て居た其の揚句に突然と聲張り上げて、些なかしな調子で、我は官軍、我が敵は、と叫び出して山手へと進んだ。山鳴り谷答へて、何處にか潛んで居る惡魔でも唱ひ返したやうに、我は官軍我敵はといふ歌の聲は、笛吹川の水音にも紛れずに聞えた。それから源三はいよいよ分り難い山又山の中へ入つて行つたが、流石は山里で人となつただけに、何様やら斯様やら「勘」を付けて上つて、とう／＼雁坂峠の絶頂へ出て、そして遙に遠く武藏一國は我が脚下に開けて居るのを見ながら、蓬々と吹く天の風が頬被りした手拭に當るのを味つた時は、躍り上り躍り上つて悦んだ。併し又振り返つて自分等が住んで居た甲斐の國の笛吹川に添ふ一帯の地を望んでは、黯然とし

て心も味くなるやうな氣持が仕て、しかも其薄すりと霞んだ霞の底から、

桑を摘め／＼、爪紅さした花洛女郎衆も桑を摘め。

と清い／＼澄み徹るやうな聲で唱ひ出されたのが聞えた。もとより聞える筈が有らう譯は無いのであるが。

は切詰めきつてあるので仕方が有りませんから、妾の小遣の三圓のを一圓にして、而して貴郎の七圓にして進げてあるのぢやありませんか。』

『いゝよ、分つて居ますよ、それは其の通りですよ。だが今日のところだけ何卒か特別の御慈悲をもつてネ……。もう約束した時間が直に來るのだから。九時に兩國の停車場で會ふ筈にしているので。』

『いけませんよ、因業のやうですが癖になりまして。何の彼のと仰あつては、近來では定額以上のお金を毎月のやうに御使ひなさるのですもの。』

『そんな毎月のやうになんて、其は甚過ぎる。』
『いゝエ、虚言ぢやありません、悉皆帳面に着いて居ります。御目に掛けませうか。』

『何、見せて呉れなくてもだ。ぢやあ此からは決してもう無理を云ふまいから、今日だけのところを何卒か許して呉れ。』

『何様もいけませんよ。考へて御覽なすつて下さい、家の爲を思つて妾と貴郎とで整然と極めた規則や豫算を、貴郎が先頭へ立つて維持しようとはなさらないで、貴郎が妾を強ひて破壊させようとなさるなんて、其様な分らない理窟が

何處にあります。最初に妾に何と仰あいました、苦難も併にする代りには歡樂も必ず併にしよう、乃公が花見納涼に出る時にはお前にも屹度花見納涼をさせよう、乃公が新しい衣服を拵へる時には汝にも必ず拵へて遣らう、其代り何卒苦しまらうけれども、獨身の時代の借金がついて廻つて遣り切れない此の貧乏世帯を遣り繰つて呉れ。其中には何様か仕て樂な思をさせようからと仰あつたのを御忘れなさりやあしますまい。それなのに何様でせう、まあ、何だ彼だと云つて貴郎は遊んで御行きなさいますけれども、何時の日曜に妾を貴郎と一緒に連れて御出なすつたことが有ります。此家へ参りたては上野へ一度、龜井戸へ一度、それはまだ貴郎が家計の内幕を妾に御明かしなさらないで、借金で表面ばかり塗りくり散らしていらした時分に連れて行つて下すつたほかには、植物園へ一度園子坂へ一度も連れて行つて下すつたことも無いぢやありませんか。今日は大祭日だと仰ありますけれども、貴郎が御一人で御遊びなすつた大祭日は幾日もあります、妾を連れて出て下すつた大祭日は一日も有りません。第一世古戸さんと今日遊ぶといふ御約束をなすつたといふ其が氣に入ります。貴郎は御自分の御懷中

に御小遣錢が無い筈だといふことを知り切つて在らつしやりながら、何様かなるだらうと高を括つて御約束なすつたのに違ありませんが、其は貴郎が餘りといふものでございませう。』

『イヤ、高を括つたといふと大に惡く聞えるが、全く私には其様な氣ぢや無かつたので。今度の大祭日は久しぶりで一緒に遊ぶうちや無いかと世古戸が誘つたのを、厭だといふことが出来無かつたものだから、終約束を仕て仕舞つたのだ。だが既約束を仕て仕舞つたのだから、可否か今云つたところで仕方が無い。今日だけのところを忍耐して呉れたまへ。』

吹藪を唾壺へ穩和しくフツツと吹きながら云ふと、

『いゝえ、いけません。今日ばかりぢやありません。もう二度も三度もその事ですから、貴郎の仰あることを唯々と云つて居る譯には行きません。停車場へ行つて世古戸さんに御會ひになつて、何でも宜うございしますから、宜いやうに云つて斷つて御出なさいよし。斯様いふ元費を節するのが家政の第一義で、其の爲に貴郎の御承認を得て整然と豫算を組んであるので。』

と、例の銅のオトシを復ぐいと拭く。オトシ

買つて、それから世古月に往來で逢つたので、度々變態になりつ放しなので氣になつて居たところでは有り、丁度時分時だつたので一緒に飯を食つたら、此節は然程でも無い家でも大層取るやうになつて居るので、本當に驚かされたよ、一遍に取られて仕舞つて。其からといふものは何にも使はないのだけれども今云つた通りなのさ。しかも其時女中の祝儀は世古月が先へ出して呉れたので宜かつたが、然様でも無かつたら足らなかつた位だつた。』

『何ですネエ、しみつたれた！ 男子の癖に御茶屋の勘定に驚かされたなんて、外間が悪いぢや有りませんか。ですから女中に祝儀をやらなくつちや極りの悪いやうな其様な家へさへ生意氣にいらつしやらなければ宜いのですのに。吾家へ御招びになるが宜いちや有りませんか。』
『成程ネ。しかし其は濟んで仕舞つた事だから仕方が無い。今後は屹度お前の云ふやうに仕ませう。だが其様云つた譯で實際出行くには懷中が餘り悲しいのだから……。それに實は既朋友と約束してあるのだから。』

『御朋友は誰様です。』

『世古月と』

『何處へ行つしやるつて。』

『鴻の臺から眞間邊を、紅葉が有つても無くても宜いからぶら／＼行きをして、小岩柴又あたりへかゝり、兩國からの汽車で行つて上野への汽車で歸つて来ようといふ談なのだ。澤山は要らないから何卒が適宜に……。』

『いけませんよ、癖になりますから。』

『ぢやあ來月の分の前借といふことにして。』

『いけませんよ、其様な事を仰あつては。よく御考へなすつてごらんさい。經濟が紊亂して頻返しが付かないと仰あつたところから貴郎と二人して相談した上に、可厭でしたけれども妾が實家へ行つて頑固な父を説き伏せて大切に仕て居る公債を手離させて、其金でもつて彼の

高利貸の慾野の手を切つて仕舞つて、漸う何様

にか斯様にか前途は樂になつて行かうといふ見

當の付くやうになつたのは終此頃ぢや有りま

せんか。利息こそ公債並で、無いも同然のもの

にはし、猶負債を背負つて居るのですもの、氣

樂を仰あつては困ります。七圓ばかりと不足ら

しく仰あつても、最初を考へて御覽なすつたら

何様です。實にもう弱りきつた、何も彼もお前

に任せるから宜しく行つて呉れ、家政整理の全

權を委れるから、と仰あつた時には、妾が種々

に考へて豫算を組んで、其ぢやあ貴郎の御小遣

は少々ございますけれども此の苦しい瀬を越え

る迄は月に五圓と仕て頂きたいと申しましたら、いや一體の収入が百圓にもならない中から、頭で大きく抜けて仕舞ふ負債の償却金ばかり、そこへ屋賃や、食費や、被服や何や彼やの生活の雜費を持たむのだから中々樂ではあるまい、乃公が五圓小遣を取ればお前にも五圓小遣を遣りたが、考へて見ると何様も其様は出来ないから乃公も三圓お前も三圓と仕ようと仰あつたではありませんか。でも男は外へ御出なさるのですから左様は出来ません、妾は兎に角、貴郎は何様な仕ても五圓は要りませう、と妾が申して、それで貴郎が五圓、妾が三圓と極めたのぢやあ御座いせんか。』

『いゝよ、いゝよ、古い事を復習しなくつても

いゝぢやあ無いかな。お三が臺所で聞いて居や

うぢや無いか。』

『宜うございますとも、お三に聞かれたつて羞

しいことはございません。吾家ばかりぢやあ無

し、何處の家庭にだつて家政の委曲を申せば皆

有る事でございますもの。それから段々と月日

の立つ中に、三圓で宜いと仰あつたのを五圓に

してあげて其で足らず、何様も苦しくつてなら

火ばかりになつて居た奴がころ／＼と疊の上に
轉がり出して、黙々で疊を焼いて居る。主人は
一向それにも氣が付かない、忙然と仕て庭の方
を眺め無く見て居ると、其と知つて細君は飛ん
で来て手に持った布巾で拂ひながら、

『何ですネエ、放心なすつて、不經濟な。家屋は
他人のでも疊替は此方持ちやありませんか。』

其 二

『温間、温間。此室だ、此室だ。』

今發するばかりの汽車の二等室から首を出し
て喚んだのは、鼠無地の奢廣に、同帛で特に仕
立てたフック帽子といふ、少し生意氣の打扮の、
是も三十前の伶俐さうな男で、喚ばれた温間は
其れと見て嬉し喜んで駈け込んだ。切符の色が
異ふので、何か驛員と温間と世古戸と三人で物
を云つて居たが、其も直と濟んで終つて、一車
室に丁度二人しか居ない其の二人が仲好く井ん
で腰を下した時、汽車はごとくと動き出した。
温間は茶つばい奢廣の衣囊から半巾を取り出
して、此も世古戸のやうに服と同じ布で出来て
居る帽子を脱ぎかけて額の汗を拭つた。

『もう少しで後れるところだつたネ。』

『然様さ、何様も氣の長いのと人の好いのは』

君の專賣なのだが、餘り氣の長いのも他迷惑だ
ぜ。僕なんぞは性急だから早くから来て居て隨
分長い間ノツソツとして待草臥れたよ。』
『失敬々々。つい遅くなつて仕舞つた。しかし
まあ好い天氣で何よりだね。』

『ウン、郊外を行かうなんていふのには、天氣
が外れだつた日には哀れなものだが、今日の様
ならばマア何が無くつても好い心持だ。紅葉が
早くつても遅くつても關つたことは無いネ。何
様だい今日はお互に學生時代へ戻つて、野外で
晝飯を喫らかすといふことに仕ようと思つてサ
ンドウィツチの別誂ひといふのを持つて來た
が、』

『其あ妙々。面白いネ。』

『それに市川で晝飯を食ふと市野屋といふ事に
なるだらう。彼家は好いが、何様かして鴻臺の
人達が多く來て居た日には風來者は仕方無い
めに逢ふし、第一彼家で晝を食つて、あれから
川上へぶらついて、川甚で復一杯といつた日に
は、同じやうな鯉や何ぞばかりで鼻を衝く譯だ
からネ。』

『成程』

『川甚も端艇の遠航を爲る時分に行つた限りで
全然其後知らんが、彼の時分はお互に勇氣壯ん

で何を食つても旨かつたナア。』

學生時代を經過して紳士時代に入つたので、
今は普通の物なら既旨いとは思はぬやうになつ
て居ると暗に誇り氣味だ。

『僕は端艇連へは加はらなかつたから其家も知
らんが、ナアに今でも僕は大概の物なら旨いと
思つて食ふよ。』

これは正直で飾りつ氣が無い。蓋し實に賢妻
君の經濟的晚餐よりも大抵の食店物は旨いに違
ひあるまい。

『ハ、君のこの令夫人は實に賢婦人に
は相違無いが、食物調理は餘り御上手ぢやあ無
いからナ。何日のアアカン汁などは實に驚いた
ぜ。』

『えッ。亞當汁？ そんなものは食つたおぼ
えが無いが、何様なものだつたネ其は。』
何程親しい間でも云ひ過ぎたと思つたが、眞
面目に聞かれるので誤魔化すことも出来ず、エ
エ云つて遣つたところで大して怒りもすまいと
口髭を振り／＼、

『亞當汁ぢや無い、アアカン汁だよ。可い、
ソラ青い渦の線の入つて居る觀世駄といふ奴が
あるだらう、彼奴に油揚げの細引いた奴を取り合
せた汁なのだ。其も鯉節でも利いて居れば好い

は拭かれて又一段と光る。

『其様口を尖らせて漢語を使ひ出して、女學生だつた面目を發揮して頑固に拒絶されては困ります。たまの大祭日だから遊んでも宜いでは無いか。』

一服吸つて緩々と氣を長く云ふ。

『ハイ、其は然様です。ですから御遊びなさるなら妾を連れて日比谷へでも上野へでも御出なさいまし、そして吾家へ歸つて御酒でも何でも御飲りなさいまし。經濟的で而して道德的でございます。第一歡樂は必ず共に仕ようといふ御約束が有るぢやあございませんか。貴郎が好い御天氣の日に外へ出て御遊びなさりたければ、妾だつて矢張外へ出て遊びたうございます。黙つて居ても今日あたりは何處か氣の晴れるところへ連れて行つて下すつて宜い筈です。家の中にばかり居てくさくさして仕舞つてならないのです。ほんとに三越の店や白木の店に何様な人形が出て居るかも知らずに、古衣の煮たり焼いたりばかりに氣を屈して苦しんで居るのなんぞは、何も妾だつて些も好ぢやあございません。』

口惜しさうに今度は火鉢の縁を拭き出した。『謝罪つたよ、一々道理だよ。しかし今日のと

ころは世古戸に濟まんから……』
いよいよ折れて優しく低く出る。

『世古戸さんに濟まぬと仰あつて、妾には濟まぬとは御思ひにならないのですか。其様に世古戸さんを御大切になさつたら、世古戸さんが定めし面倒臭い小遣帳を預かつて、而して貧乏世帯の遣り繰りを仕て下さるでせう。』

いよいよ高く強く出て一步も下らない。

流石に男兒だ。これに聞く主人もむら／＼としたと見えて、さつと顔色は變つた。火を探つて居る煙管の頭はぶる／＼ツと顔へて、火入の灰を埒無くほだてた。

『コレ』

と思はず知らず激した調子になつて主人が叱らうとすると、二の句を續がせる間も無く、

『何でございます貴郎は、其様な顔になすつて。妾は決して理の通らないことは申しません。』

暴威を加へようとなすつても其はいけません。何處までも御諫め申すことは御諫め申します。』

と、何様して／＼明治の婦人だから學校すれに招れ切つて居て、舌戦を仕たこともあれば喧嘩を爲たこともあるので、中々自分が正理と信ずるところに據つて居ながら屈するやうなことは無い。猫板を執つて膝に突立て、扱くやう

に右の手で其をぐいと拭き下しながら、昂然として達者に疊み掛けた。主人は其の理の強みと勢の強みにと壓されたのか、ぐなりとして仕舞つて、竹刀を振り冠りながら御胸を打たれて仕舞つたやうに妙に氣の抜けた様子になつた。

『それぢやあ何様しても今日は……』と絶望の悲哀に陥つた聲で、尋ねることも無く云ふと、

『いけません、癖になりますから。』と、言語は明晰で宣告は嚴峻だ。が、流石は女で、

『因業のやうですが如是で無くつちやあ吾家が立ちませんから。それ過般貴郎が御讀みなすつて感心して道理だと評して在らした彼の『成業雜誌』の『鐵石心』といふ論文の教訓を無にしますまいと思ひまして、今日は妾も一寸も自分を枉げない積りで居りましたのです。』

と、まさか愛嬌の積りでもあるまいが附加へた。

『何だエ、鐵石心で亭主に小遣錢を呉れないと御言ひのかエ。アーアツ。大變なものを讀んで聞かせたナアツ。』

と、驚いて呆れてバタリと煙管を落とすと、無暗に吸はれて終つて居た吹煙の、たゞもう紅い

して、而して二人は酔を噴いて居る。
『真間山の石段から門をかけて、下から仰いで見たところも一寸好いし、上から見たのも好いが、此地の矢切の渡のところの景色も唯無造作に田舎びて好いネ。』

『好いネ、是といふところも無いけれども。僕は初めて此邊を見たから猶の事好く思ふかも知れないが、同じ川でも隅田川なんぞとは違つて何様しても阪東太郎の支流だけに滔々として居るやうで嬉しい。しかし草臥たところへ飲つたので大變に酔つた。此家も居心が悪くない好い家だネ。』

『これで料理方さへ最少し至つて呉れると好いのだが、……イヤ何様も年齢の過かない中の方が何でも旨く思へる。』

『僕はアアカン式で一月中済ませて居る故か知らんが、此でも別に不足には思はないよ。』

『またアアカン式といふことを云ひ出したネ。』

僕が悪かつた、堪忍して呉れたまへといふのに、『ナニ、君に中て、云ふのぢやあ無いよ。些譯があつてアアカン式が忌々しくつてならないものだから、つい口に出て来るのなのだ。』

『酔つたネ君は。先刻からアアカン式が忌々しくつてといふことを既四五度云つたよ。』

といふ御當人の世古戸も大分廻つたと見え、杉箸を逆にしたのも知らずに何か啄いて居る。其位だから、まして温間の調子は大に變つて居る。

温間は冷くなつて苦かりさうな酒を呑み乾して、其盃を今さら鹿爪らしく盥洗で洗いで世古戸に擬し、薄鈍く舌嘗めずりをなして、

『今日の江戸川堤の散策は實に面白かつた。御蔭でもつて大に鬱結を散じた。實は君、他人には云はれない不快の煩悶が有つてネ。何とも云へない可厭な氣が仕て居たところを、君の快活な談話と野外の長閑な景色との爲に半日は忘れて終つたよ。嗚呼君は實に僕の親友だ、莫逆の友だ、たゞに同窓の友といふばかりぢや無い、刎頸の友だ、と僕は思つて居る。考へて見ると學生時分から隨分君には世話になつて居る。』

口ばかりでは無い、何かに感じて、全く心底から感謝して居るのは、眼つき顔色に歴然と現はれて居る。仔細は何だか更に分らないが、斯様云はれて見ると世古戸も兄になつたやうな氣が仕て知らん顔を仕ては居られない。元來温間は温厚過ぎて稍遅鈍なので數々同輩から調戲はれたり嘲られたりしたことも少くない。其度に

何時も世古戸は擁護者の地位に立つて侮りを防いで遣つて、此のやうな好人物を嘲笑したりなぞするといふことが有るものと、却つて他の者を叱責する氣味に争つたことが再々だつた。しかし世古戸もまた、温間が餘り不決斷で、養え切らない男で、陰辨魔で、面と向ふと意氣地無しで、執着心が非常に缺けて居るのが、自分の性質と大變に懸隔して異つて居るため、何様かした機會には齒痒さ餘つて、時には嘲弄罵詈したことも無いのでは無かつた。けれども相性とても云ふのだらう、世古戸は罵る、温間は恨むといふやうなことが有つても、復直に二人の間は融和して終つて、オイ君、ウン何だといふ調子に戻るであつた。で今平素餘り不平らしいことを言はぬ平靜の氣性の温間が、實は他には云はれぬ煩悶が有つて云々と云ふのを聞いては、何だかフン然様かと聞かせるのが自分の良心に濟まぬやうな氣が仕て、世古戸は温間を捉へて何で煩悶することが有るのかと根掘り葉掘り聞き出した。最初は自分でも女々しいと思つたかして明白々には話し兼ねるやうの氣味だつたが、實際堪へ餘つて居たので、少しづつ家庭の状態を話して、終には、平生自分の妻の威權が強くて自分を壓抑し、兎角自分の

のだが、君の、君の、君の賢夫人の、は、インベン
町手前を電車で駈けましたといふやうな鯨節の
取り方で、拵へ玉ふのだから降参したネ。」

『ハ、ハ、君は随分惡口は偉いナア。ア、せ
めて其達者な口辯の半分も僕に饒舌することが出
来ると、何は何でも負けや仕ないのだけれど
も、』

『エ、』

『ナアに何でも無いよ。君以様だ、一つ取りた
まへナ。』

『ヤア、斯様な驕つた葉卷を始終喫して居るの
か、』

『何然様ぢやあ無いが君と二人で野道を喫さう
と思つて、來掛に特地取つて來たのだよ。』

『ヤ、其りやあ有難い。併し、だが月末の拂が
膨脹するぜ。』

『アアカン汁だなんて失敬な事を云つた。氣に
障つたら堪忍して呉れたまへ。』

『何、僕の妻の事なんか幾干惡く云つたつて構
はんよ。實際何も彼もアカン式で、僕も弱ら
せられて居るのだからネ。』

『ハ、御挨拶で恐縮だ。夫に惚れて儉約に
なるといふ句があるから、女房の儉約なのは愛
情の濃かな證據で、細君がアカン式になれば

なるほど、其の愛情の保護によつて君の前途は
好い譯になるのだ。僕のやうな獨身極樂蛤蛤主
義も餘り宜くは無いものだからネ。』

『前途は何様か知らないが、現在在は好く無いよ。
それで：：ぢやあ無い、其の然様と、君に今一
寸斷つて置くが、僕に實は今日蕪中を：：』
『何様かしたのが、異しな顔なして！ 盜られ
たのかえ？』

路究して意外の渡船が蘆の間から出て來たや
うな譯だ。

『ウ、先亦然様だネエ。』

『先亦然様だネエだえ？ 何だか變だネ。何處
で盜られたのだえ？』

『ウ、あの、その、：：』

『是はあやまつた！ 何處で盜られたと覺えて
居て盜られるものも無い筈のものだつたのを、
愚な事を聞いた。澤山入つて居たのか？』

『ナアに微少。』

『何の位？』

『極微少サ。』

『極微少つて？』

『無いも同然サ。』

『其ならまだしもだつたが忌々しいことを仕た
ネ。』

『そこで今日は君に何から何まで世話にならな
きやならないのだが、』

『あ、可いともサ、知れた事なのだもの！』

『ア、やつと安心した。ヤ何様も今日は暖かい』

『温間は復手巾を取り出して額の汗を拭つた。』

世古戸はマツチをツと摺つて葉卷を吸ひ出し
た。やがて一室の中に良い香が満ちた。

其三

天氣が明日明後日に變るのであらう、今
時分には稀らしい南風が晝から吹いて居るの
で、上船を悦んで皆帆を張つて溯る。五艘七艘
四艘三艘、或は斷え或は續いて、片流れの水の
清潔な江戸川を廻燈籠の晝の動くやうに進んで
行く。對岸は霜枯時ながら猶少しは緑色を留め
て居て、汀渚の蘆荻は末枯れ果て、居るが、堤
の雜草などは猶地を飾つて居る。帝釋詣の來
る庚申では無し、端艇の來る土曜日曜では無し、
水に臨んで居る川甚の座敷は、たゞ其の一番好
い一室が世古戸と温間とに占められて居るばかりだ。
實際時節違ひの南風が吹く位だから温暖な日
には相違無いが、其でも水邊の初冬である。
併しや、もすれば婢が好意から障子を閉めて呉
れようとするのを、念に懸けてカラリと明け放

妾を連れて日比谷へでも上野へでも御出なさいましと云ふのだから。』

『そんな分らない事は無い。朋友に義理が缺けると云やあ可いのに。』

『イヤ、其も其様云はないでは無い。譬へば君なら君に濟まないからッて云ふと、世古戸さんに濟まないと仰あつて、妾には濟まないと思ひにならないのですか、其様に世古戸さんを御大切にすつたら、世古戸さんが定めし女房役を仕て、面倒臭い小遣帳を預つて貧乏世帯を遣り繰つて下さるでせう、と斯様云つた調子に僕を遣り籠めるのだから敵はない。』

『度し難い婦人だナ。』

『實に度し難い奴だ。何だつて鐵意思といふことを振廻して、鐵意思でもつて亭主が要求する小遣錢なんぞは一厘も與るまいといふことを理想に仕て居るのだからネ。』

『怪しからん怪しからん。東坡を戦かせて河東の獅子吼と云はせた位恐ろしい女だつた陳季常の女房だつて、彼は嫉妬からなのだから恕すべきところもある。品行方正で朋友間でも好人だの君子だのと云はれて居る君に對して、何でも無いに鐵石心だなどといふ下らないものを振廻して頑強に楯を築くとは途方も無い事だ。』

婉順、靜淑は婦人の美德ぢやあ無いか。高が小遣錢といふ名が付く位の些細の阿堵物を憐んで夫に言葉返すなんぞといふのは言語道斷だ。』

『ウン、然様だ、然様だ。其通りだ。』

『何の、高が小遣錢なんぞ。云はば目糞金鼻糞金だ。那方へ何様なつたつて宜い譯ぢやあ無いか。』

『ウン、然様だ、然様だ。其通りに違ひない。』

『又場合に依りやあ女房の指輪や銀兒や衣服なんぞは亭主の小遣に仕たつて差支は無い筈の位のものだ。』

『ウン、然様だ、然様だ。其通りだ。』

『まして朋友への義理、交際なんぞのためとあるなら、何を犠牲にしたつても然るべき譯で、些細の物を憐むなんといふのは以の外の事だ。明智の女房は自己が髪をさへ亭主の交際費のために犠牲にしたぢやあ無いか。』

『ウン、然様だ、然様だ、大に然りだ。引證適切だ、もう負けるもんか。』

『負けるもんか、何を云つて居るのだえ？』

一體誰に負けないのだえ、僕と論するつもりなのか。』

『ナアに、今度は妻と論じたつて負けないつて云ふことなのだ。明智の妻や何ぞ僕に僕の味方

に引出すからネ。』

『何を語らないことを云つて居るのだえ。だから君は下らんよ。論するも何も要りやあ仕ない。其様な度し難い悍婆は放逐して終ひたまへ。』

猪口を温間に擬したが、姉は疾の先刻から居ない。世古戸が注いで與ると徳利底がタラ／＼と四五滴切りだつた。橘吉先生癩癩氣味でハタハタと手を拍くと、もう大抵御錦子だらうと、婢は賢く一本持つて来て、早速に温間に一つ注いだ。談話の様子が何だか何様せ自分には構つて呉れさうでは無いと見たので、すいと立つて去つて仕舞つた。

世古戸は温間に注いで貰つたのをぐつと飲んで勢威愈々壯んだ。『出しつちまひ玉ひ、其様な悍婆は君の爲にならん。實際悍婆だネ、其様な鐵意思だなんといふものを振廻すのは、婦女は意思のものぢや無い、情のものと無くつちやならない筈ぢやないか。』

友人だ君子だと云はれて居る君が其様な間違ひ切つた悍婆を妻にして居るのは不釣合千萬だ。放逐して仕舞ひたまへ、放逐して仕舞ひたまへ。』

これには、流石にウン然様しようとも温間ば言ひ兼ねた。何様して、是非彼女で無くつちや、

思ふやうには仕て呉れないといふことを、雄辯で無い、明白で無い、半吞半吐の調子で、くどくどと、兒童が自分に優しい人に對して何か訴へるやうに、不得要領に述べて立てた。

開いて居た世戸古が酔つて居なければであつたが、たゞさへ氣の疾い、激しい、自分から云へば義侠心に富んで居る、他から云へば干渉家に向う不見の男が、七分の酒氣を帯びて居て聞いたのだから堪らない。聞いて居る中からムツムツして眉間に八字を寄せたり、眼を瞋らしたり、小鼻に力を入れたり、口をムグムグしたり、肘を張つたりして居たが、頓て溫間の話の途切れるのを待兼ねて、

『怪しからん話だ、實に怪しからん話だ。ぢやあ平生君に對して盡く不遜だといふのだネ。そして又今日も君の出遊を甚だしく沮んだといふのだネ。』

と怒り顔になつて念を推して糾した。大變な勢で世戸古が自分に同情して呉れるのを見て、溫間も少しいきり出して來た。

『然様なのだよ、實に憎い奴ぢやあ無いか。平素から僕を蔑視して居るんだからネ。』

『ナニ所天を蔑視して居る。飛んでも無い女だ、引叱るが宜いちや無いか。』

『ところか引叱る位で驚くやうな奴ぢや無いのだからネ。何様して僕が一才一ト言云はうもんなら十言位滔々と口返答をするのだから。そして加之に、是れ羞かしくつて他人には云へないことだけれど君だから云ふが、實は僕の小遣錢まで制限してアテカヒにして渡す外には何程嘆願したつて哀訴したつて一厘も呉れないのだから、實に僕も苦しくつて遣り切れない時があるよ。』

『何だい、亭主の小遣錢を當飼扶持的に極める！ヤ、甚い悍婆だナ。君が入艸でも有りやあしまし。君も亦君だ。何程人が好いと云つたつて女房に當飼扶持を頂戴して居る奴も無いものぢや無いか。そして數願だの哀訴だのつて。馬鹿々々しい、亭主たるものが女房に向つて、何卒か來月の分を前借といふことにして、澤山は要りませんが少々ばかり御貸し下さつて、なんぞと、其様な下らないことを頭を下げて云はれるものかい、面白くもない。』

『ム、まさか僕だつて……、僕だつて男兒だから然様も云はないがネ。』
と云つたが實は今朝も其通りに云つたのだ。

『しかし兎に角數願的に談話を仕ても振向きも

爲ないと云ふのだネ。』

『其様だよ、君の云ふ通り振向きも仕無いでネ……』

『ン、そして、』

『火鉢の銅のオトシを厭に力を入れてグイと拭いてあるのだよ。』

『憎いナア。』

『ア、憎いとも！ ほんとに！』

『ン、そして、』

『何程大人しい僕だつて交際といふこともあるから、義理づくといふのぢや無いまでも休日や何ぞには朋友と一緒に遊ばうといふことも有るわネ。ところが其様な時でも何でも些も頓着は無くつて、何を云つても矢張グイッグイッだから弱るよ！』

『何だえ、其のグイッグイッといふのは。』

『銅のオトシを力を入れて拭いてあるのだよ。だからもう恐ろしく綺麗に光つて居る。』

『何を云つて居るのだい、下らない。だつて君だつて口といふものがあるのだから譯を話したら無教育の婦人ぢやあ無し、合點が行きさうなものぢやないか。』

『ところが譯を云つても先方の勢の方が強いから敵はない。朋友と一緒に御遊びなさる位なら

其處へ色々の事を云はれて段々と世古戸の勢に釣り込まれて終つて、特に傳子が此場に居無いので持前の陰辨慶をばじめ出した。

『違ひ無い、實に君の云ふ通りだ。女の分際として失敬千萬な、人の言ふことを遮つて止めるなんといふのは出過切つた話だ。ナアに僕だつて隠忍して居る間は穩和しいが堪忍袋の緒を斷つて終へば其代り容赦は無いのサ。成程考へて見れば彼の儘は措けない。人を馬鹿にして居る。憎い奴だ。怪しからん。オトシのグイ〜が餘り人を侮辱して居る。妾は決して理の通らないことは申しませんなんぞと云つたが、黙つて聞いて居て置れば宜いかと思つて付上つた奴だ。今に見る、叩き出して終ふから。其時になつて泣かないが宜い。』

『然様だ、確乎として出しつちまふが宜い。辭柄もへつたくれも要つたものぢや無い。』
『ウン、對者が鐵意思なら此方も鐵意思だ。出すと云つたら屹度出して仕舞ふ。』

『偉い！ 其でこそ男だ。一盃與らう。』
温間は偉さうに張肘をして受けて磊落らしく飲んだが、併し生酔の本性違はずで、家へ歸つたら何様爲ようと思ふと、何様したら可いのかさつぱり分らない。で、

『何様しよう先づ、』
と思はず獨語つと、

『何を？』

と世古戸は敏捷に反問した。渡りに船なので、『イヤ家へ歸つたら何様談話の緒を取り出さうかといふことサ。腹は既悉皆確然と定めて仕舞つたのだけれども、僕は談話の才が乏しいので何様して宜いか分らないから。』

と云ふと、世古戸は既切齒を仕て齒痒がつて、丁度今何か挟んで口へ入れた杉箸の尖頭をギリりと咬んで碎いて捨てた。

『仕様が無い男だナ君は。ぢやあ談話次手だから、下らないが教へて與らう。宜いかエ、先づ君が吾家へ歸るのに歩いてなんぞ歸つちやあ不可れ。歸つてから僕と別れるや否や、成るべく威勢の好い人力車に乗つて、ガラ〜ツと吾家へ大した景氣で着けさせるのだ。而して冒頭に車賃を遣れと高飛車に命じて、君は其儘で座敷へ踏反返つて寐るのだよ。何様だ出来るかエ。』

『出来無くてサ。それから。』
『平生と態度が違ふからアアカン先生も氣を吞まれて驚くだらうが、車夫賃を濟ませて終ふと、ソラ屹度詰責調子でもつて、何處で其様に過飲していらした、と賢婦臭く出て來るだらう。』

『ウン、其れもう屹度然様だ。そしたら川甚で犬に君の馳走になつて細君論を仕たといふのかネ。』

『馬鹿ツ。それだから囑左衛門に遣付けられて仕舞ふのだ。其様正直ぢやあ不可い、斯様いふやうに云ふのだ。』

『むづかしいネエ。何様いふやうに。』
『何處で飲んだつて大に御世話だい。懷中に小遣が無かつたつて一個の紳士だ。マサカお傳燭の飲返も仕て來ないから安心するが宜い。と斯様一つ衝てゝ遣るのだネ。』

『ン、ナル程。君は毒言は巧いネー。好い氣味々々々々。彼女も流石にギリリとするだらう。』
『そこで、オヤ是は機嫌が悪いナ、と思ひながらも、他所で暗嘩か何ぞ爲て來たぜめだらうと考へて優しく君を待遇ふよ。』

『困るネ、優しくされちやあ。怒ることが出来なくなつて仕舞ふから。』

『何困ることは有りや仕無い。優しくされても大の字で寐て居るのだ。すると、貴郎其ぢやあ宜いませんからとか何とか云つて婢と二人で床の中かなんかへ早込にかゝるネ。』

『ア、其處で兒童の時石地藏をするといつて行つたやうに突張返つて重くして困らせて遣るの

無くつちや、無くつちやと、甘い母親を口説いて、而して母親の非常の盡力でもつて辛と持った妻なのだもの。何程刎頸の友の言だからといつて、まさか直其に同意は仕さうも無い理窟だ。

『ウー、ウー、あの、ウー、』

『ウーウーウーッて、何を云つて居るのだえ。』

豚が中氣にでもなりやしまし。彼様な悍婆を放逐して仕舞ひたまへといふのに。ハ、ア君は細君に包められて居るので、悪くば云つたものの放逐なんぞは逆も出来ないのだネ。』

『ナニ出来無い事は無いのだが。……あの……その、』

『あのその何だえ、焦つたい人だナ。あのその？』

『あの何様も差當つていい辭柄が無いからネ。』

『辭柄？ 辭柄なんぞは何程でも有るぢや無いが。汝は悍婆で不可から出す、不柔順で不可から出す、面付が氣に入ら無くなつたから出す、餘りアブカンで不可から出す、といへば何だつて立派な條件になる。一體前から氣に入らん婦人だつた。彼様な婦人を妻にして居ると君の不利になる。其の證據には彼女が君のところへ来てからは滅切りと君のところへ人が来なくな

つたらう。君の母堂と君とで居た時分と那方が人が餘計来る？ 朋友が行くと内心ぢやあ餘計な奴が来たといふ様な顔をして居るのだもの。實に君の人望を墮すこと一ト通りぢやあ無いネ。さらけ出して仕舞ひたまへ。跡釜は自然又好いのが幾干でも有らう。古い草を引抜きやあ吃度新しい草が生える。』

復手酌で仰いで其の猪口を擬しめせず。復自ら注いで、而して酒臭い氣を吹いて語り續けた。

『僕ばかりぢやあ無い誰でも是とするよ。恐らく君が彼女を出したからつて非とするものは有るまい。第一彼女が来てから君の母堂は君の弟の靜雄君と一緒に別になるやうになつたぢやないか。それが怪しからん事だ。君の母堂は眞の賢婦人だ、だから彼女の人の爲りを看破して、何にも言はず語らずにするりと別居して仕舞はれたが、僕は靜雄君のところへ遊びに行つて、君の母堂も彼女に對して不満を抱いて居られるに違ひないといふことを確に認めて居る。考へても分るぢや無いが、惣領の妻たるものが母の傍に居て朝夕の世話をしなといふことが何處にあるものか。厭なればこそ母堂も傍を退いて居れるのだ。』

虚實は何様か知らぬが、此様云はれて見ると思ひ當ることが滿更無いでも無いので、親孝行の温間は太に動いた。

『ほんとに然様だらうか。』

『當然サ、誰だつて夫たるものか厭するやうな婦人を悦ぶものがあるものか。他人の妻君の事だから悪いと思つたつて誰でも黙つて居る。併し僕は今の君の話を聞いたので憤激に堪へないから口へ出したのだ。刎頸の友を以て目されて居ながら、君が其様な馬鹿な目に逢つて居るのを黙つて見て居ることは出来ない。他人の事でも腹が立つてならないよ、女の分際として男の言ふことを聞かぬなんぞといふのは。當世其様な女が到るところに多い。怪しからんことだ。逐拂つちまひたまへ。逐拂つちまひ玉へ。御心好しも大抵に仕て貰はなくつちやあ。度が過ぎて君見たやうになると朋友の面汚しになる。意氣地の無いにも程が有るものだ、早速と逐ひ出しちまひ玉へ。』

逐ひ出すと云は無ければ喧嘩でも吹懸けさうな顔つきだ。法界格氣といつて自分に關係の無い事にも無暗に格氣を爲る人があるが、世古戸のは法界腹立とでも云ふのだらう、無暗に怒つてゐる。温間も朝の不満は有り、酒の氣は有り、

い置洋燈の下で編物を仕て居る温間の細君に斯く様いふと、

『あゝ大層遅いことネ。御朋友のところへ話して込んで居らつしやると見える。』

と細君は別に苦にする様子も無く答へた。

『旦那様の御襟飾りになるのでございますか。』
襟襷色と白との絲で何だか綺麗な細長いものを編んで居るのを見て婢が尋ねた。

『然様なの。今仕て御在なされる襟飾も、既大分汚れたやうだからネ。』

と答へながらも編棒の手は休めない。

『ほんとに何様も御器用でもって旦那様思ひでいらつしやることー 大抵當世の方は旦那様の細の羽織や上布の御衣は丸めて戸棚へ突込んで置いて本郷座へでも行つて見ようといふやうな肌合の御方が多いやうでございますのに。』

『ホ、々、妾あまた、女學生あがりは意氣地が無い意氣地が無いといふ噂を能く人の爲るのを聞いて、口惜くつてならないから、一生懸命になつて吾家の爲を思つて、何んでも母様に褒めて頂かうと心掛けて居るばかりなのよ。それで漸く此頃になつちやあ母様も妾を悉皆信用ひて下さつて、淀雄は人が良過ぎて宜けないから汝能く氣を付けてネ、なんぞと云つて下さるやう

になつたので、猶の事骨を折つて、少しでも疾く家の樂になるやうにとばかり氣を張つて居るのなの。だが、其だものだから終夢中になつて旦那様にも負けちやあ居ないやうになつて仕舞ふの。此様なに御歸りが遅くなつたからつて、眞逆旦那様が怒つて在らしつて其爲にとと思ひは仕ないけれども、今朝なんぞは學校で論争でも仕て居るやうな氣になつて仕舞つたので、少し云ひ過ぎたよ。』

がら／＼といふ車の音が家の前に止ると頓て、主人は大醉して踰跟と玄關にかゝつた。

『車賃を忘れ。』

生酔の寢惚聲が異しく大きく響いた。

車夫は賃を得て歸る、婢と二人がかりで靴を脱がせると、温間は復踰跟と茶の間へ通つたが其儘顛倒返つてしまつた。

『何處でまあ此様に過飲していらしつたのです?』

果して稍詰責調子に、案の定の問だ。

『占たッ。』

と淀雄は莞爾としながら、

『何處で飲んだつて大に御世話だい。懷中に小遣が無くつたつて一個の紳士だ。マサカおでん煙酒の飲通も仕て來ないから安心するが宜い。』

細君はぎつくりと驚いて、眼を丸くして主人の顔を見ながら、思はず知らず恐れ怯えて後へ身を退いた。温間先生其の様子を見ると嬉しくつて堪らない。腹の最底の妙なところから、何様だ一番降参したらう、といふ得意極まつた満足の笑が頭を擡上げて來て、戀人から色好い返事でも得た時のやうに莞爾莞爾とせずには居られなかつた。が、一生懸命になつて其笑を蔽した。

『大層な御元氣ですことネエ、眞赤になつて在らつしやいますよ。咽喉は御渴きなさなくなつて? 御冷水をあげませうか。』

復果して豫定の通り優しく待遇はれたので、

『それ見る、何様だ、此方の圖つた通りだらう、』といふ得意の笑が復達上げて來た。併し教へられた通り、優しくされても大の字で寐て居たが、たゞ困つたのは咽喉が恰好眞に渴いて居たので、そこへ御冷水をあげませうかと言はれた

ので馬鹿に水が飲みたくなつたのだ。けれども此處で折れて仕舞つては無得だと思つて忍耐して水を呉れとも、ばずに居ると、飲めなと思ふので餘計咽喉が乾涸びてならない。クツクツと唾液を呑んで、初めて餓鬼道の苦みを仕て居ると、氣を引いて婢は早玻璃碗へ水を盛

かえ？」

『下らないナア、石地藏なんぞ仕たつて何様なるものかネ。然様ぢやあ無い、其時君が脚でもつて、彼女が傍へ寄つて来たところを邪見に蹴るのだよ。』

『無法だネ。』

『無法だつて關ふものかい。そして其處でもつて、エ、打棄つて置いて呉れ、好い心持に酔つて居るのだ、汝が飲ませた酒の酔ぢやあ無いと思つて粗略にする勿い、何處へ酔ひ倒れて寢込まうと乃公の家で乃公の勝手だ、構つて貰ひたく無い、指を付けられるのも厭だ、乃公にやあ構はずとも澤山火鉢のオトシでも拭いてゐるが宜い、と復食はせるのだネ。』

『ン、ナル程。毒言々々。ありがたい、實に好い氣味だ、悉皆敵が討てる。しかし、定めし厭な顔な仕て食つて掛つて来るだらう。』

『勿論サ。其の咬つて掛つて来るのを待つ爲の前藝なのだから。そこで悍婆先生恨みつばく悍り立つて来て、何か御氣に入らないことが有つて御腹立なら御腹立で判然と云つて頂きませう。さあ何事が御氣に入らないで、其様に當言を仰あつたり亂暴をなさつたりなさるのです、さあ其事を伺ひませう。と屹度責め寄せて

来るネ。』

『其様なると困つちまふよ、僕は辯が惡いから』

『馬鹿なことを云ひ玉へ、困る奴が有るものか。サア其様なつたところで君が男兒の勇威を振つてネ。』

『ム、男兒の勇威を振つて、』

『ハ、何も今其様に身體に力を入れて變に武者振ひなんぞを仕なくても宜い。』

『ついで一生懸命になつたものだから。さうして』

『そこで君が起直つてひと沈着沈着いて、コレ、何事が氣に入らないか其が聞きたい!? フン、氣に入つた事でも有るやうなことを云つて居る!』

『些曹達でも精神を洗つて自惚を落して来い。一から十迄十から百迄悉皆氣に入らないは。今日といふ今日ふつゝ飽きて、お氣の毒だが跡釜まで既定めて来た。さあ斯様云ひ出したからには合せものは離れものだ。何を云つても御取

上は無い一寸斷つて置くが鐵意思だからネ。』

と言葉の遣ひやうは少しをかしくつても關ふこととは無い。其から後は何を云はれても、鐵意思だ、鐵意思だよと云ひ通しさへすれば宜いのだ。』

『ン、ナル程。弱るだらうナ。流石の彼女でも屹度閉口して仕舞ふに違ひない。有り難い。

サア来い、悉皆、つたから、もう負けるものか。鐵意思だ、鐵意思だぞ。』

『ハ、ハ、こゝで威張つたつて仕方が無い。ぢやあ其の失敬なアカン先生を退治して仕舞ひたまへ。明日の朝は君も僕も同様に一人者となる譯だから、何か食物の手土産でも持て、訪問

れて遣らう。何様も悪女房なんぞ無い同士の方が朋友の情は深くなつて種々な面白いことが出来るよ。』

『然様だ。ぢやあ先今夜兎に角叩き出して仕舞はう。』

『出来るだらうネ。』

『出来なくつてサ。だが何なら君一緒に僕の所へ来て呉れると宜いナ。』

『ハ、ハ、何處の國に女房を出すのに後見を頼む奴があるものか。』

『でも何だか少し……』

温間は冷えきつた酒をグツと仰ぐと、酒は口の端から散つて膝にだらし無くこぼれた。

其四

『もう御歸りになりさうなものですが大層御遅うございますネ。』

婆やと云はれさうな年齢の婢が、見苦しくな

『一から十まで、ウ、十から百まで、百から又千まで……』

矢張後が云へないで、下らないことを云つてまご／＼して居ると、

『一から十まで、さあ何様しました？ 氣に入らないとでも云つて御覽なさい。たゞ置きませんから。』

と恐ろしい威勢の金切聲できめつけられて、温間は動顛して仕舞つた。

『ウ、一から十まで。エ、仕方が無い！ 悉皆氣に入つて仕舞つて居るは。』

『そんなら何も下らなく當つこすりなんぞを御云ひなさら無くつても好いちやありませんか。』

『だから何も當こすりなんぞは云ひは仕は爲ない。』

『ちやあ矢張オトシを磨げと仰あつたのは本當に磨げと仰あつたので？』

『然様だよ、別にあてつけて云つた譯ではないので。』

『然様。それでは今後は矢張磨きますよ。』

『あゝ、好いとも／＼。』

『懷中に小遣が無くつてと仰あつたのも當つちや無かつたので？』

『然様とも然様とも、當付ちやあ無かつたのだよ。』

『ちやあ矢張今後は定額のほかは一厘だつて懷中へ御小遣を入れてはあげませんから。』

『あゝ可いとも可いとも。』

『一體先刻からなかしな事を仰あつたのは何様なすつたのです！』

『實はあれは世古戸が……。』

何も彼ももう落城して仕舞つた。

世古戸は翌朝食品を手土産に温間を訪うて、そして其の禮謝は今朝は居らぬ筈の傳子の口より聞かされた。

つて来たやうな様子だ。眼を塞いで知らん顔をして居ると、婢の持つて来た洋盥を受取つて、而して自分の口の端へ妻が持つて来て呉れた。片手を徐と頸の下へ入れて、赤子にでも觸るやうに柔らかに親切に聊か頭を抱き起して、餘程爛酔して懶くなつて居るものと思つたか洋盥を口の端へ差し付けて呉れた。

『さあ御冷水を少し御飲りなすつたら可いでせう。』

飲みたくつて飲みたくつて、咽喉はクツクと仕て来た。冷やかな洋盥は乾き切つて干割れさうな下唇に觸れた。我知らず上唇はムズと動き出したが、嗚呼馬鹿々々しいと思ひながら淀雄はドツコイと忍耐した。

『水なんぞ要らない、火なら食つて遣る。』

自暴になつて邪見に叫び出したが我ながら餘り無茶苦茶な言葉で、水なんぞ要らないは分つて居るが、火なら食つて遣るといふのは、自分が火食ひ鳥でももあるやうで實に馬鹿々々しいと我ながら慚じた。

『大變に御酔ひになつていらつしやるのだから、お前御床を展べてネ。お床が敷けたら妾と二人で昇き込むことにしませう。』

猶吾が頭を支へながら細君の斯様言ふのを聞

いて、ソラ来た、愈思ふ通りに事が運んで行くぞ、圖星大申りだ、今見る賜飛ばして驚かして遣るから、と思ふと復得意の笑が込み上げて来て何様もならない。其中に床は敷けた様子で婢の来た聲音が爲た。いよいよだナと思ふと生憎妻は頭の方を持つ、婢は足の方を持った。頭を持つて居るものを踢ることが出来ないと思つて居る間に既宙に舉げられたので、無暗に足を動かして首を振ると女の事だもの二人とも持つて居兼ねた。彘でも轉けたやうに温間は疊に落ちた。生憎の敷居でもつて頭は十分にゴツリ。ア痛いと思ふと、丁度其が怒る張合になつて甚く調子好く物が言へた。

『エ、打棄つて置いて呉れ、宜い心持に酔つて居るんだ。汝が飲ませた酒の酔ひぢや無いと思つて廉くする勿い。構つて貰ひたくない、指を付けられるのも厭だ。乃公にやあ構はずとも澤山オトシでも拭いてるが好いや。』

知れないやうに薄眼を開けて見て居ると、傳子はまた悻然とした様子だ。白い顔は可哀想に少し青くなつて来て、眼はたしかに驚き訝りながら何かの考へを通つて居る。好い氣味、好い氣味、此方の筋毅に入るとも知らないで、今それ理窟らしいことを云つて嚙つて掛つて来るだ

らうと待設けて居ると、果して我が思ふ通りに敵は出ておいでなすつた。

『酔つて居らつしやると思つて黙つて居ります。』

何だが妙に御當こすりなさるのネ。何か御腹立なら御腹立て判然と云つて頂きたうございます。さあ妾の何様致しましたのが悪うございまして、其を伺ひたうございます。』

少し意氣込んで責め寄せて来た其の様子は中悔のことは出来ない。併しお氣の毒だが此方の思ふ壺へ嵌つたのだとも知らなくつてと思ふと可笑くつて仕方が無い。一ト泡も二タ泡も噴かせて遣るから今見るといふ氣で、淀雄は起直つて異に澄ました。

『コレ、何事が氣に入らないか其事が聞きたい?! フン、一から十迄悉皆氣に』

と云ひかけて一寸女房を見ると、凝然と此方を見つめた顔の、眼からは今次の言葉次第で火でも噴きさうな恐ろしい様子を仕て居る。一から十迄悉皆氣に、入らないとても云つたが最期食ひ付かれ兼ねないので、思はず氣が萎えて再度、

『一から十まで。』

と云ひかけたが何様も其の後が云へない。『一から十まで、ウ、十から百まで、...』

また止まつて終つて、また後が云へない。

としふの?』

お釜「いゝエ女なんぞ御戯ひなさるやうな其様な方ぢやあ無いけれども。』

お狐「じらさずと早く云つて下さいな、じれつたいワ、お釜さん。』

お釜「あれで彼の若殿様が其の魔法遣ひでネ。』

お狐「エ、ッ。何ですつて?』

お釜「其の魔法遣ひで居らつしやるものだからネ、今に屹度お前さんは其の魔法の御用をお吩咐かりだらうが、魔法の御修行の御用を命令かるのは誰だつて可厭だらうぢやあ無いか?』

お狐「魔法ッて、彼の自雷也やなんかの? 嫌だよお釜さんは人を調戲つてさ。馬鹿々々しい、そんな事が有つて堪るものかネ。』

お釜「イ、エ、其が有るんだから仕方が無いぢやあ無いが、今に解るよ。』

お狐「何だか可怪いことを御云ひだけれど眞實の事なの?』

お釜「虚言を吐いたつて仕様は有りやあ仕無いワネ。眞實の事だよ。』

お狐「あら! それぢやあ愈々眞實に眞實なの?』

お釜「ハ、ハ、然様さ。眞實に眞實さ。眞實に何にも! 誰だつて知つて居る事だよ。現に

お前さんの前に居たお智世さんといふ人もネ、魔法のいきさつから起つた事で御暇を戴いた位の譯さ。』

お狐「ヘエー。何様いふ譯合でネ?』

お釜「何だネエお前さんは、妾の方へ摺り寄つてサ。あの、若様が一夜お智世さんに對つて法をお使ひなさるとネ、お智世さんはもう全然夢中になつて仕舞つて、坐れと仰あれば坐り、起てと仰あれば立つのさ。』

お狐「ヘエー。若様が其様に魔法が御できになるの? 何だか少しばかり無氣味なことネ。』

お釜「其りやもう大變に高い金銭を御出しになつて御習ひになつたのだから、爲さりやあ何様な素晴らしいことでも何でも造作もなく出来るのださうだよ。それでネ、お智世に對つて仰あつたには、明朝汝が一番はじめにお品に面を會はせた時、「お品さんお前の高慢は止して下さいな、餘り高慢な顔を仕て居ると、それ、それ、鼻の頭が伸びて、垂れ下つて象のやうになり

ます、オホ、ホ、ホ、と笑つて遣るが好い。と、斯う繰り返し繰り返し御命令になつたのだよ。するとお智世さんとお品さんとは前から仲が惡かつたのだから、知つて、お智世さんが然様云つたのだから魔法のきゝ目の所爲だつたか、

次の日の朝大殿様の方と若殿様の御室との間の、彼の御庭に沿つて居るお廊下でもつてネ、お品さんが例の高慢な澄ましきつた顔つきで、お智世さんを見掛けて慇懃に挨拶をすると、お智世さんは御早うとも云は無けりやあ頭を下げやうでも無くつて、突然甲走つた黄色い聲を無暗に張り上げてネ、お品さんお前の高慢は止して下さいな、餘り高慢な顔を仕て居ると、それ、それ、鼻の頭が伸びて、垂れ下つて象のやうになります、オホ、ホ、ホ、と御殿中響いて聞えるほどに笑つたのサ。』

お狐「マア! 甚いこと。怒りましたらうネ。』

お釜「怒るまい事が、怒るまい事か。口頃高慢な憎らしい人で、おまけに驚の嘴のやうな恰好を仕て居る自分の鼻つきを大自慢で居る人だから、皆がお智世さんの言葉を聞いてクツクと笑ふのが聞えると、サア眞實になつてブイと怒つて大殿様の御室へ駆け込んだが、其からは何を申し上げたか泣聲が低く聞えたばかりサで、其の晩お智世さんは御暇が出るといふことになつて仕舞つたので、其の代りにお前さんが來たといふやうな譯になつたのだよ。』

お狐「お智世さんといふ人は馬鹿を見ましたのネエ、可愛さうぢや有りませんか。』

術 競

其 一

お釜『そりやあもう別に勤め辛いといふやうな事は無い御屋敷だけれどネ……』

お狐『だけれどネツて御云ひだと、何か有るの？ 矢張り何か知ら可厭な事でもあるの？』

お釜『お前さんは参上つてから半月ばかりにしかなら無いし、それに丁度年暮からお正月へかかったところだから御上でも御忙がしいものなのでネ、未だ何にも知らずにおいでだが今に御覧なさい……』

お狐『オヤ可怪いのネ、御用の多い時にさへ可厭な事の無い勤め易いお邸でもつて、御用の閑になると却つて可厭な事が有るつて云ふの？ 一體何様なことなの？ 教へて置いてお呉んないナ。エ、エ、若様が何か猥褻らしいことでもなさるの？』

お釜『いゝエ然様ぢやあ無いんだけれど……ぢやあお前さんは眞個に何も知らずに上つたのだネ。』

へ

お狐『氣になる事ネエ、其様な事を云はれると、妾あ初奉公といふ年齢ぢやあ無いけれどもネ、全く今まで御屋敷奉公なんて云ふものは仕た事が無いんだから、たゞさへ何だか妙に心細く思つてゐるのだよ。だけれども年末に此方へ上つてから、別に可厭だともつた事ともひで無いんでネ、内々好い御屋敷へ勤め當てたと悦んで居たところだが、ぢやあ矢張り何か辛い事があるの？ あゝ解つた、奥のお取締りの彼のお熊さんといふ肥つた老婆さんネ。彼の人が岩藤みたやうに底意地でも悪くつて？』

お釜『ナアニ彼の方は見掛は恐ろしくつても心は好い方なんだよ。お前さんの前に居たお智世さんといふ人がネ、彼の方に渾名ををつけて「雷おこし」と云つたワネ、古風もので堅いだけで毒も何も無いつてんで。ハ、ハ、ハ、ハ。』

お狐『オホ、ホ、ホ。』
お釜『彼の方よりや大殿様付きの御小間使のお品さんネ。彼の人が何程交際ひ難いか知れや仕ないワネ。矢張りお智世さんがくツ付けた

名だけれど「オムドロツプしたアほんとに好く付いて居るよ。』

お狐『ヘエー、何故ネエ？』

お釜『髪にシネクネして咬み切れない様子が宛然彼の人そつくりだもの！ 彼の人つたら言葉遣ひは柔軟で人當りは好いけれども、お腹の中はネチ／＼して氣むづかしい、煮え切れない、恨みつばいやうな怒りつばいやうな、そりやあ氣障ア人だからネ。』

お狐『オゝ怖い人ネエ。彼の人が意地悪をするの？』

お釜『ナアニ別に彼の人だつて此方からさへ關はずに置きやあネ、御用の無い時お新體詩とかいふものを駄々で讀んで居て一人で高慢ぶつてゐるだけの人だよ。』

お狐『解らないのネ。ぢやあ何が可厭な事なの？』

お釜『其様なに御聞きだから知らせて上げようがネ、其の可厭な事つて云ふのはお前様の御付き申して居る若様がネ。』

お狐『ハア。』

お釜『あの御優しい、御性質のいい、拔磨様がネ。』

お狐『やつぱり性の悪い御癖でも御有りなさる

拔鷹「フ、ム。何と申す金左衛門。催眠術に就いて云つて見たいことがあると申すのであるか。遠慮は無い、申して見い、聞いて道はす。」金左「はッ、まことに有り難いことで。然らば申します。恐れながら催眠術はキリシタンパテルンの邪法の類で、甚だ以て怪しからん義と金左衛門愚考仕ります。然るに承はり及びますれば御上に於かせられましては、大金を以て獨逸歸りの術者より御傳授を受けさせられたるの由にて、其より深く御心を其事に傾けさせられ、日夜に魔法の御修行をば御積みなさるゝやの御様子、全く以て御本心より出でたることとは金左衛門は存じませぬ。平生御學問に御凝りなされたる餘り天魔に魅られ玉ひて、斯様の事を御好みに相成る義にも立至られたかと存じまする。」

拔鷹「これ金左衛門何を申すのだ。催眠術といふものは決して然様の譯のもので無い。然るべき理があつて然るところの心理的現象で、最も研究を値するところの深奥の道である。であるに因つて予も之を研鑽して居るのだ。決して危険または有害の事では無いから予の自由に任せて置け。」

金左「いや、御自由に御任せ申し上げる譯には

何様しても相成りません、飽まで御諫言を申し上げて御思ひ止まりになつて頂きませれば、君御幼少より御付き申したる金左衛門、面目もござりませぬ。有害の事では無いと仰せられますが、左道邪法を御學びになつては宜しいことは御座りますまい。既に御承知でもございませうが聖人の御語にも、異端を攻むるはこれ害なるのみと御座いますれば何卒々々早速に魔法の書共を御焼棄相成りまして、ふたゝび御顧視これなきやう御斷念遊ばされ度、金左衛門偏に此義御用ゐを願ひ上げ奉ります。今日も既に物蔭にて侍婢共の申すを聞きますれば、今にもまた君の魔法の爲の御用仰せつけらるゝかと、殊のほかに恐怖も仕り、且つ迷惑も仕る様子の昨年未侍婢共の中に喧嘩悶着致し、終に一名御暇下さるゝやう相成りたるも畢竟は由無き御物好故でござりますれば、然様の義に御心を御寄せ相成るは御家御擾亂の基と存じ奉りまする。今にして早く御思棄て相成らぬに於ては、後咎計り難き義でございますれば、新年早々でございしまするが御面を冒して御諫言申し上げます。何卒びつたりと然様の御物好御廢止有らせらるゝやう御賢慮の程を願はしう存じたまつりまする。」

拔鷹「これ暗いいわ金左衛門、制しても制しても予の聲を耳にも入れず何な一人で饒舌つて居る？ 汝のやうな學術的趣味の解らぬ者には申し聞かすも難儀であるが、催眠術は決して魔法でも無い左道でも無いから、安心致すがよい。」金左「とはかり一口口に仰せられまして。」

拔鷹「不安に存するといふのだらうが其は知らんからだ。何も薬を用ゐるでは無し、機關を用ゐるでは無し、危険を起すべき種子は何も無いのであるから、心配する點は更に無いでは無いか。」

金左「然し御上に於かせられまして印を結び呪文を唱へられますと、術が掛けられましたるものは心神昏くなりまして、終に睡を催し我を忘れましたる揚句、御上の命せられますことは如何様の儀でも致しますると承はりしましたが、右は事實の事でござりませうか如何で。」

拔鷹「ヤ、それはもう其の通り、奇々妙々である。白湯を與へて酒だと申せば飲んで酔を發する、灰を與へて砂糖だと申せば舐めて甘いと申す。實に其は神變不可思議のものである。金左衛門其方に法を施して道はさうか。」

金左「何様致しまして。眞平御免下さいまするやうに。」

お釜「だから若様から内々で大紙幣を一二枚頂いて下さつたワネ。」

お狐「全く魔法を使はれると前後の考へが無くなるのでせうかネエ?」

お釜「妾あ何様だか知らないけれどもネ、今にお狐一寸来いつてんで屹度御召びになるだらうから、何様なものだから其時になつたら自然で御解りだらう。」

お狐「可厭な事ネエ、そりやあ大變だわ。オ、可厭だ事、オ、可厭だ事! 魔法の御手習の御草紙になんかされちやあ堪る事ちやあ無いワ。」

お釜「ほんとにサ。だから妾あ、お釜一寸来いと仰あつた時にネ、妾あ魔法の御相手になる御奉公は致しませんから厭でございます、それとも強て御用になさりましたりやあ、一遍に就いて百圓づつ前金に頂きたうござりますつて云つて、やうやうの事に人身御供を免れたよ。」

お狐「ホ、ホ、ホ、お前さんは中々どうして大變に強いネエ。」

お釜「何様して何様してお前其の位に仕無くつちやあ、悪く仕ようものなら魔法責めにされちまふよ。拔鷹様ばかりちやあ無い、拔鷹様の學校の御朋友にも、北利奇之助さんと一ふ富豪の息子さんがあつてネ、其の人も大變な魔法凝り

ださうで、何でも若様と其の人と一緒になつた日にやあ大變な騒ぎだよ、誰でも彼でも捕まへて魔法を使ひたがるのだからネ。」

お狐「大變な變挺な人もあればあるのですネエ。寫眞に凝つた人よりやあどうも始末が悪いこと! 何様しよう、妾あ急に御暇を願はうか知ら。」

お釜「悪い事は云はないから妾の傳が宜いよ、まさか百圓は下さる氣づかひが無いからネ。」

お狐「さうネエ。」

お釜「今夜あたりはお正月でももう七草過ぎで、一體に物靜だから魔法初めなんていふので、お前さん一寸来いの御召喚をいたぐかも知れないよ。」

お狐「嫌ですよお釜さん、無氣味なことネエ。」

其二

石部金左衛門「大分冷えますることでござりまするが、まだ御書見で居らせられまするか。」

若殿拔鷹「お、金左衛門か、何か用事か。」

金左「イヤ御書見中を御妨害致しては相済みません。併し夜に入つてまでの御勉強には金左衛門も盡く感服つかまつります、當世一般とは申しながら、恐れ入つた事でござりまする。」

拔鷹「何も然様感服して貰はんでも可い、學問といふものは一體面白いのだからナ。」

金左「はッ。恐れながら其の、學問を面白いものと仰せられるのが實に有り難いことで御座いますして、金左衛門いよゝゝ以て一ト方ならす感服仕ります。失禮ながら御讀半になり居りますのは何の書でございまして?」

拔鷹「ム、此書か。此書は最新のヒブノチズムの書だナ。」

金左「へ、エ。金左衛門西洋の語は一向に解りませぬが、ヒブノチ……とか申しますると、何の意義でございしますのぞ?」

拔鷹「然様さナ、先づ一般に催眠術と譯して居るナ。」

金左「ヤ、催眠術の書を御讀みになつて居らせられましたので!」

拔鷹「何も然様に仰山に驚くことは無いではないか。」

金左「はッ。では御座りまするが恐れながら其ならば申し上げなければ相成りませぬ。實は如是人靜かなる折を見て御目通り致しましたの、其事に就きまして申上げたくて御座います。恐縮ながら一應御聞取り下されまするやうに。」

等閑にはできぬ事だ。儘に彼は恐怖して不快な覺えに相違無い。彼の眼色、彼の聲、彼の舉動といふものは、彼が自己で自己に暗示した結果に他ならぬのである。先以て研究記録の一頁は石部金左衛門で埋まる譯だ。それはさうして去暮はお智世を試験に供して、大分に種々の事を發明したが、年末年頭の俗事のために大に實際研究を怠つた。彼の北利奇之助は定めし予を凌駕しようと思つて勉強したことであらう。然し彼の男などに後を取る拔磨では無い、予は予で十分に研究を積んで驚かして遣らう。イヤ其に就いてはまた予が工夫した新式の催眠法を、差當り先づ實驗して見ればならぬが、お品は物靜な天性だけれども予の顔を見れば逃げるし、お釜は卑劣な奴で百圓呉れと云ふし、前に掛けたことのある植木屋の梓は其後は來ぬし、お鍋は愚な奴で、直に睡眠する其は宜いけれども、甚だしく涎を垂らして椅子も何もめら／＼にして、其邊中に蛸蟪の這つたやうに致すには汚くて叶はぬ。ハテ誰を實驗に使ばうか、ム、お狐お狐！。來た時から彼女は伶俐で健全で常識の發達して居る、實驗用にば個強の婢だと思つて居た。彼女の事、彼女の事！ どれ召び出して今夜は術始めに一つ試みて遣らう。』

其四

お釜『それ御召だよ、お狐さん。今頃何も御用の有らう筈は無いのだから、屹度魔法の御用に違ひ無いよ、魔法始めて云ふんで。』
お狐『大變だ事ネエ、妾あ何様しようか知らん。』

お釜『何様仕ようツてつたつて逆も仕方有りやあ仕無いよ。石部さんの老夫さんさへ捉へて彼の魔をなさるのだもの！』

お狐『ほんとに困つちまふのネ、まるで魔法に掛けちやあ若殿様は辨々見たやうになつて居らつしやるのネエ。』

お釜『お前さんも中々の口だこと！ 眞實に辨々なんだから叶やあ仕無いよ。宜いサ、妾の傳で百圓とお云ひよ。價で別れ話になるなあ商賣の常だつていふぢやあ無いか。』

お狐『ホ、魔法に使はれ賃を百圓なんていふのは變挺の商賣ネエ。』

お釜『構やあ仕無いよ。ホラ又御召びになつてるよ。』

お狐『仕方が無い。お釜さんも一緒に下さいな。』

お釜『厭な事だワネ。白羽の箭が立つた人だけ

で御勤めなさい。それ又お召びになるよ。』

お狐『あゝ切ない情無い、心細くなつて來た。魔法の御用だと思ふと行く空は無いネ。』

お釜『水盃でも仕て別れようかネ。』

お狐『人！ お前さんは人の事だものだから宜い氣になつてゐるのネエ。宜うござんす、思ひ切つて行つて來ますよ。』

其五

お狐『不景氣で不景氣で仕方が無くつて、碌な事も無いから遊んでるよりやあ増しと、此様なところへ猫を被つて奉公住みか仕たもの、間

が宜かつたら若様でも引掛けて強請の種子を瘡へて、暖まらうと思つた其の甲斐も無く、學問

に凝つてばかり居る無類の堅藏なので、是を御給金限りぢやあ何様も始まらない。まだしも安待合でも稼いだ方が正月だけに宜かつたか知ら

んと、内々には些もう後悔して居たところ、妙なことも有るもので、魔法に若様が凝つて居るとは眞實に稀代な話だが、宜い物好きな馬鹿様を宜い加減に遇つて、何様かして些や若干は捲き上

げたいものだ。昔話に在る楊枝隠れちやあ有るまいが、魔法だなんて馬鹿々々しい、何様なことを爲るのだらう。眞實に身の樂な人は下らな

拔鷹「イヤ、宜いわ、掛けて遣らう、さあ掛けて遣ばさう。然様すると汝も催眠術を魔法だなどと申す其様な頑迷の事を申して意見立を致すやうな下らぬことは皆忘れて仕舞ふ。さ、掛けて遣ばさう、もちつと進め。」

金左「と、と、とんでも無い事でござります、怪しからん事で。」

拔鷹「イヤ、掛けて遣らう、掛けて遣らう、それが宜いわ金左衛門。別に苦しいことでも無し、何とも無くてそれで其方の望むことを遂げ得させる。天に上りたくば天に上らせて與る、空を飛びたくば飛ばせて與る。」

金左「ウーン。」

拔鷹「何だ、其の様な恐ろしい唸り聲を出して。」

金左「ヤ、どうも怪しからんことを仰せられまする。いよく以て魔道御執心の餘り、聊か御逆上の氣味と相見えます。天に上らせ空を飛ばすなどと、然様の事が何として出来ませう。」

拔鷹「イヤ論より證據だ、出来るから奇妙である。さあ汝に掛けて催眠術の奇特を眼前に示して遣らう。」

金左「どう仕りまして、怪しからん事で、實に

怪しからんことで。いよく以て催眠術は魔道に疑ひござらん。正法に奇特無しと申す語の裏を參る事でござれば、其の奇特の有ると仰せらるゝだけに合點があまりませぬ。金左衛門何様あつても御止め申さればなりませぬ。」

拔鷹「エム、呾々と申して煩い老夫である。……よし、嚇して遣らう。」

金左「イヤ何となされます？ 其の様に洋燈を暗くなされまして！」

拔鷹「……」

金左「其の様な御眞面目な怖しい御顔をなされまして金左衛門を御睨みになりまして。若しや是は魔術を御掛けに相成るのではございませんか、無氣味でござりまする！」

拔鷹「もとよりである。もう二三分通りは掛けて居るぞ金左衛門。」

金左「ヒヤア、是は怪しからん、項元がぞくぞく致しまする！ 南無八幡大菩薩、摩利支天神！」

神！

拔鷹「それいよく掛けて来たぞ、何様だ金左衛門！ ビールビールスツボン、アアワーアク

アク、ノーンダヲヨカラウ、ウマカラウソハカ、ゴクリ〜〜。」

金左「是は堪らん、異な心地になつて參つた。

魔術を掛けられては金左衛門一生の瑕瑾になる、逃げるに越した事は無い！」

拔鷹「これ何處へ參る？ 金左衛門。逃げてはならんぞ。」

金左「摩利支尊天、摩利支尊天。」

拔鷹「待て〜金左、掛けて遣ばすぞ金左。ビールビールスツボン。……」

金左「摩利支尊天、摩利支尊天。」

拔鷹「待て〜金左。アアワーアク〜、ノーンダヲヨカラウ。」

金左「摩利支尊天〜。」

拔鷹「ビールビールスツボン。」

金左「摩利支尊天〜。」

拔鷹「ビールビールスツボン。」

金左「摩利支尊天〜。」

其三

拔鷹「ハ、ハ、ハ、ハ。金左衛門の老夫め、大に驚き居つた様子だ。いかに予が催眠術に達して居るからとて、ビールビールスツボンといふやうな呪文で何様もなるのでは無いが、自分の氣でもつて厭な心持になつたと見えて妙な顔をして逃げ居つた。是が眞の當意即妙といふので、メ

スメルでもリーホーでも斯様な事は知るまい。ハ、ハ、ハ、ハ。然し是もまた研究の一材料で、

いことを仕たものだ。だがまあ何でも宜い、出たところ勝負で、大抵に綾なして多少錢かに仕て遣らなくつちやあ。どれ／＼一つ若様の魔法を拜見と出かけようかネエ。チョツ誰か見て居て妾の靈風を褒めて呉れないか知ら。斯う見えても一寸御高い俳優のお狐さんの爲る舉動にやあ、可なりと、好いところがある積りなのだから、見物の無いな些勿體無いやうな氣がするよ。ホ、ホ、ホ、ホ、――』

其六

拔鷹「これお狐、心理生理の二面に渡つて哲學宗教の祕密に觸るゝ神祕深奥の學問の爲にナ、汝の身體を暫時實驗に用ゐるから其の積りで居ろよお狐。」

お狐「アノ何でございまするか解りませんが、怎樣か御免下さいまして！」

拔鷹「解らんナコレ、怖い事では無い、學問の爲である。」

お狐「でも妾を怎樣か爲さりますのですか？」

拔鷹「いや怎樣も致すのでは無い、もちつと手に近う寄つて、たゞおとなしく仕て居れば可いのぢや。子が呪文を唱へ手先を動かすのを黙つて見聞仕て居るとナ、其の中に好い心持になつ

てウト／＼と睡くなる。然様したら一向構はずに寐て仕舞へばそれで宜いのだ。」

お狐「厭でございまするネエ、正體が無くなるのでございますか。」

拔鷹「然様さ、正體が無くなるといふのでも無いが先づ睡くなるナ。」

お狐「お上の前で居睡りを致して御覽に入れるのは餘り御産しいことで、是あ妾は何卒ぞ御免なすつて下さいまし。」

拔鷹「イヤ苦しい無い、軀をいかにも涎を垂らしても免して遣はすから。」

お狐「いくら御免下さいますにしても、これだけは御免下さいまし、女のたしなみに背くこととでございますから。」

拔鷹「大事無い、誰も見ては居らぬし、予ばかりのことである。そんなに頑硬になつて女のたしなみを兎角申さずとも予の命令に従ふが宜い。」

お狐「いくら仰あいましても御産しうございますから。」

拔鷹「困るナ、然様強情では……ム、宜し宜し、最初一度だけの事である、後は又何様にでもなることであらうから、欺すに手無しである、利を以て誘つて遣らう。コレお狐、其の方向か

欲しいものは無いか。」

お狐「欲しいものと申しますと？」

拔鷹「衣服とか髪飾りとか、何かそのやうなもので。」

お狐「妾は虚言いつはりば申しませんが、正直に申しまするが、そりやあ欲しいものは澤山でございます。」

拔鷹「先づ差當りは何であるナ、お狐。」

お狐「お召縮緬が欲しくつて堪りませんのでございます。」

拔鷹「お召は何程ぐらゐ致すものである？」

お狐「品次第でございますけれども、十四五圓なら宜しうございますネ。」

拔鷹「高いナ。も少し手輕なもので欲しいものは無いか。」

お狐「然様でございますネエ、節絲織で十四圓、伊勢崎で八圓、秩父銘仙でも見好いのは五圓位も取られます。」

拔鷹「よくいろ／＼と知つて居るナ。では仕方が無い其の秩父銘仙といふのを買つて遣はす。何様だ嬉しいか。」

お狐「あの妾に買つて下さいますので？」

拔鷹「然様だ。」

お狐「そりやあ何様も眞に有り難うございます。」

妾に命令けてるなあ、畢竟身體は此處へ置いて魂魄だけで北利の家へ行つて来いといふのだよ。人！馬鹿々々しい、鼻の孔から烟草の烟でも出しやあ仕まいし、然様お手輕に魂魄が體から抜けて出て掛る譯のものぢやあ有りあ仕無い。細螺のお化けだつて彼の殻の中から出つきりにやあ爲らないものを、豚の何かの風船に五色の絲でも付けて飛ばすやうに、魂魄が尾を曳いてふら／＼と身體の外へぶらつき出しても仕たら御慰みだらうが、然様したら生憎風でもつて吹きつけられて其の尻尾が電信線に搦まつて仕舞つて、魂魄の立往生していふやうな頓癡氣なことも始まりさうな話だ。仕方が無いから斯様やつて種々の事を思ひながら薄目を開いて惘然とした顔をして黙つて坐つて居ると、今妾の魂魄が北利の家へでも行つて居る最中かと思つて妙な顔をして妾を見詰めて居る此の拔鷹さんの御顔ッたら無いネ。オヤ／＼此の人も眼が二つあるよ！マア感心に鼻が下を向いて着いてる中が可愛らしい、そして眉毛が眼の下に着いても居ないのネー。ホ、これでも矢張普通の人の形を仕ていらつしやるから宜い。魂魄が見えないものだから宜いやうなものゝ、手に取つて検めることの出来るものなんだらうもんなら、

此の拔鷹様の御魂魄なんぞは必定懸が立つて居らつしやるよ！どれ／＼、もう歸つた積りに仕ても宜い時分だらう。宜い加減な茶羅つぽこを振り蒔いて遣ることゝ仕ませうよ。エ、北利さんのところへ行つてまゐりましたか……」
 拔鷹ム、然様か然様か、途中が寒かつたらう。大儀であつたナ。」
 お狐「どうも夜分の事でございますものですからお寒うございましてネ、それに大きな洋犬が居りましたので怖うございました。」
 拔鷹ワン、然様だつたらう。然様だつたらう。寒い晩である！成程彼家には大きな洋犬が居る。ハテ神妙不可思議の事である！！よく分つたものである！！成程天眼通である！神通である！ハッア有り難い辱ない、予は神通を得た！神通自在になつた！安倍晴明が識神を使つたといふのも今思ひ當つたが、晴明何するものぞやだ、もう羨ましくは無いぞ。して北利は何をして居つたか、其を聞かせい。」
 お狐「生憎北利さんは御不在でございますした。」
 拔鷹ナニ、北利は不在だつたと？其は残念だつた！何か別に見聞した事は無いか、有るなら云つて聞かせい。」
 お狐「御女中が二人で北利さんの御噂を仕て居

りました。」
 拔鷹フム、何と申して居つた？」
 お狐「春の事だから大方待合へでもいらして、藝妓でも揚げて遊んでおいでなのだらうと申しまして。」

拔鷹フム、然様か、他には何も申さなかつたか。」

お狐「きつと又藝者を御召びなすつたら其妓に催眠術を掛けるなんて云つては厭がられて御いでだらうつて。」

拔鷹フム、もう他には何も申さなんだつたか？」

お狐「まだ其他には、何様も旦那様の催眠術も宜いけれども、餘り心無しに長つたらしく掛けられると、後で萎頓して疲勞れて仕舞つて、御用の出来無いには弱る、と申して居りました。」
 拔鷹ナル程道理である、是は然様であらう。汝には後で澤山休息させて遣るから賢い主人だと思へ。さ、もう天眼通の實驗も済んだから醒まして遣つても宜いが、ン、まだ有つた猶有つた、暗示力の實驗だ、如何ほど施術者の命令が被術者の覺醒後にも行はれるか試して見なければならん。此の實驗には少し常理に脱れたやうな事を命令けて見れば何様も無意識です

ト泣き眞似を仕て見せたものだ。』

お前もいどちーなら妾もどちーで、どち

お狐『斯様も馬鹿げきつた事が云へば云はれる

した。拔鷹君萬歳だ。さあ覺醒して遣らう。此の水を飲め、此を飲むと了々として悉皆常の心持になる。さあ一口飲め、然様だ、然様だ、それ了々としたらう。』

お狐『ア、ツ、ア、ア、。オヤ、欠伸ばかり出て是あ怪しからないこと！ マア羨ば何時の間に若様の御前で惘然として仕舞つたのでございませう！ 些も存じませんでしたよ。』

拔鷹『ハ、然様で有らう、何も知らんか？』

お狐『何も存じませんが、何かをかしい事でもございまして？』

拔鷹『ハ、いや別にをかしい事も無かつたが、お狐汝は都々逸が上手だな。』

お狐『あら諛ばつかり。』

拔鷹『諛では無いぞ、骰子の一の處お狸のお尻なんぞといふ稀代な文句の歌を汝は知つて居るな。』

お狐『何でもございですが知りませんが他人が唱つて居ましたのは存じて居ります。』

拔鷹『イヤ他人が唱つたのでは無い、汝が唱つたのだ。』

お狐『あらマア諛を仰あいませ！』

拔鷹『虚言では無い、ほんとに汝が唱つたのだ。』

お狐『ほんとに？』

拔鷹『ほんとにサ。』

お狐『マア何様しませう、嫌でございますネエ。』

拔鷹『コレ！ 然様差かしがつて慌てゝ逃げて行かんでも宜い。ハ、ハ、ハ、夢中になつて逃げて行つて仕舞つた。可憐な奴である！』

其 七

お兵『旦那様！ 旦那様！ お起きなさいまし、御客様でございます。』

奇之助『ウーン、ムニヤ、ムニヤ、ムニヤ。』

お兵『朽藁様からの御使です！』

奇之助『使なんぞ待たして置け、睡い／＼、もう一時間睡る。』

お兵『然様はいきません、もう九時ですから。』

奇之助『ぢやもう三十分寐る。』

お兵『いけません。お起きなさい。』

奇之助『老嫗、堪忍して呉れ、眼が開かないもんだから。もう十分寐る。』

お兵『そんなことを云ひながらトロ／＼して居らつしやる、貴下位寐坊の人は有りやあ仕ません。お起きなさい／＼。』

奇之助『もう五分寐る。』

お兵『いけません／＼。』

奇之助『もう一分寐る。』

お兵『何でもすネ下らない！ 何程睡いと云つたつて、一分ばかり睡たつて何になりますものか。お起きなさい、お起きなさい！ 朽藁様のお使といふのは、若い女ですよ、綺麗にお化粧を仕て居る一寸見られる新造ですよ、まあ別嬪ですよ、ほんとに別嬪ですよ。』

奇之助『何だ、別嬪だと。眞實か、眞實か。』

お兵『へ、へ、別嬪といつたら目を御覺ましなすつたよ。』

奇之助『ヤ、失敗つた！ 謀られたか、残念な。起きるのぢやあ無かつた。其の位なら今の夢の續きを見た方が宜かつたつけ。』

お兵『未練な事を仰あるものぢや有りません、見つとも無うございますよ。諛ぢや有りません、ほんとに別嬪なのです。』

奇之助『宜い、もう起きるよ。それ湯を汲んで呉れ。髪道具は揃つてゐるかい！ 剃刀を磨がせて置けと云つたが、研げて居るかネ？ 新聞を膝の傍へ置いて呉れ、食ひながら読むから。坐つたら直に茶が飲めて飯が食へて汁が熱くて難卵の鏡子焼が出来て居て、新聞が置いてあつて、郵便が並べてあつて、萬般の埒の明くや

る事が記憶が有つて爲る事かの判別が出来んから、よし／＼少々出来かねるやうな突飛なことを申しつけて見て遣らう。去年も此の暗示力の實驗では大成功したのだが、お品を相手にさせたために大珍事が起つて、とう／＼お智世に暇を遣るに至つたが、今度は誰を相手にさせたもので有らうか、吾家の中ので、後で紛紜が起つた時に困るし、まさかに往來の者にこれの事を仕掛けると、なかしな事を命じて置く譯にも行きかねるが、ハテ誰に仕掛けさせたものであらう、誰に仕掛けさせたものであらうか？ ア、北利奇之助！ 彼に限る、彼に限る。彼は平生催眠術に就ての自信が甚だしく強くつて、自ら卓絶した術者だと思つて予を軽く視て居る！ いや内々では予を侮つて居る！ 彼を實驗の相手にして遣れば後で取調べるにも何かに便利であるし、且つ少々は甚い事を仕て遣つても彼ならば關はん。彼の鼻を挫くには寧ろ少しは思ひ切つた事を仕掛けて遣る方が可い位である。ヤ、鼻を挫くと云へばお智世にお品を愚弄させたのは實に巧く行つたものだった。しかし餘り巧く行き過ぎたので事になつて仕舞つたが、奇之助は同じ催眠術研究者であつて見れば暗示力實驗の相手にして聊か愚弄したとこ

ろで、お品のやうに無暗にも怒るまい。イヤ怒れば愈い愚弄して遣つても可い位である。すれば先づ相手は北利として、何をさせたものであらう？ ア、鼻を挫くといふところから面白い事を思ひついたぞ、少し甚いかも知れないが、關はん、實驗だ。ウフ、フ、フ、是あ堪へられない、彼の北利めが何様な顔をするだらう、是あ可笑くつて／＼獨りて堪へられない！ これお狐、汝に確と吩咐けて置くから命令通りに致すのだぞ！

お狐「ハイ。」

拔鷹「明朝汝が起きたら起き抜けに直に！」

お狐「起抜けに直に！」

拔鷹「先づ顔を洗ひ、白粉を付け、身じまひを致して！」

お狐「先づ顔を洗ひ、白粉を付け、身じまひを致して！」

拔鷹「北利奇之助を尋ねて、面會を求めろのだ。彼は晏起ゆる寐て居るであらうが、如何様にしても起して強ひて面會を仕て！」

お狐「如何様にしても起して強ひて面會を仕て！」

拔鷹「面を見るや否や思ひきつた大きな聲を揚げてナ、朽葉式催眠術の妙作用は此の通りと申

して、」

お狐「朽葉式催眠術の妙作用は此の通りと申して、」

拔鷹「手の中指無名指と拇指とを寄せて他の指を伸ばしてナ、俗に申す狐々チキの形を兩手とものにこしらへて踊り回ろのだ。」

お狐「狐々チキの形をこしらへて踊り回つて！」

拔鷹「奇之助を化かす心持で散々に躡り立てた上、好い機を見て彼の鼻の端を突然にホーンと指で彈くのだ。」

お狐「好い機を見て突然に鼻の端をホーンと彈いて、」

拔鷹「そしてトン／＼と三歩後へ退つて眼を瞑つて首を振りながら！」

お狐「三歩後へ退つて眼を瞑つて首を振つて！」

拔鷹「フヤラノ、フヤラノ、フンと申して、ベツカッコウを仕て見せるのだ！」

お狐「フヤラノ、フヤラノ、フン、と申してベツカッコウを仕て見せるのだ！」

拔鷹「然様だ、それで可いのだ。」

お狐「ハイ。」

お狐「ハイ。」

拔鷹「確と命令けた通りに爲るのだぞ！」

お狐「ハイ。」

拔鷹「ではもう實驗も澤山だ。予の新式は成功

譲！」

お狐「我は化けたと思へども、こん／＼ちきや狐ちきや。」

奇之助「狂氣で居るのぢや無いかしら、靜になつたり、騷いだり、何だか一向に譯が分らない、惡いいたづらだ。」

お狐「いや／＼のいたづらや、こん／＼。」

奇之助「ウン、ハ、ア、解めた！ 解めた！」

彼の拔磨めが催眠術を施して、暗示を與へて置いて僕を騙るのだナ！ ウン然様だ然様だ！ 其に違ひ無い！ 此女が何も知つた事では無いのだ。怒る譯には行かないし、仕方が無い、仕方が無い！

いづそ早く此女が命令を受けただけの事を果させて仕舞ふ方が宜いのだ。仕方が無い僕も一様になつて踊つて遣れ！ こん／＼ちきや、こんちきや、すつてこすつてこ、すつてこてこ！」

お狐「あぜ道細道廻れ／＼。」

奇之助「あぜ道細道廻れ／＼。ヤツ、膝ツ小僧を椅子へ打付けた。あゝ痛い／＼。何様も身の輕いには敵はない、敵はない！ あッ椅子から卓子の上へ飛び上つた！ とても追及ない！」

お狐「ひらりとくるりと腰を撓へて踊りまうていなうよ。さあもう可からう、コン／＼コンコ

ン、其の御鼻の頭を一ツス様やつてポーン。」

奇之助「あッ、斯りやあ甚い！ 紳士たるものの鼻の頭を弾くなぞは！ そして何だ、妙に氣取つてトン／＼と三步退つて、眼を瞑つて首を振つて。」

お狐「フヤラノ、フヤラノ、フーン。べつかつこーッ。」

奇之助「ヤ、是は怪しからん、人の面を見ながらベツカツコウを爲し而して舌を出すとは！

エ、然しながら怒る譯には行かん術の爲せることであるから。泰然として澄まして居らなければならん。オホン／＼。」

お狐「其の光つた石の入つて居る無名指の指輪を妾に下さる御約束で、」

奇之助「エ、一。是はダイヤモンドだのに。」

お狐「ハイ、其のダイヤモンドのを。下さらなければ穿めて居らつしやる指を咬み切つても頂きますから。」

奇之助「こりや堪らん、咬ひつきさうな顔だ！

進げます進げます。後では取れるだらうが酷い暗示を爲居つたナ。ア、指に穿て仕舞つたら拳を握つて正體を失つて仕舞つた！

ばあやあ、あッ、こゝに此品が有つたつけ、呼鈴さへ忘れて仕舞つた。」

お兵「何でございます。マア大變な騒ぎでした。が。オヤ朽葉さんの御使が倒れて居るぢや有りませんか。」

奇之助「宜い、大丈夫だ、水を持つて來て此の人に澆ける。」

其九

奇之助「何様でございます？ 貴嬢。」

お狐「ハイもう全て夢の覺めましたやうで、何様いたしまして 妾は此方様へ上つて居つたのでございませう？」

奇之助「ハ、ハ、いや何、氣になさる事はありません、まあ御菓子でも御摘みなすつて。」

お狐「好い御座敷でございますこと、御靜かでお廣くつて。」

奇之助「ダチキコツ、ネケンクシリル、クウ、バア。」

お狐「エ、突然に大きな聲をなすつて、吃驚致しました、何でございます。」

奇之助「少し靜安に、靜安に。貴嬢に私の術を掛けるから。それ既掛かつて來ました。」

お狐「驚が羽を掀げるやうな手つきをなすつて何でございますネエ。……ア、然し、掛けられまいといふのも面倒だ、いづそ掛つた風を仕て

うに仕て置いて呉れなくちやあ不可ぞ老嫗!」
お兵「散々寝て御置きなすつて、起きると直に
其の性急が初まりますねえ。」

奇之助「然様悪く沈着いて澄まして居ては不
可! だから日本人は嫌だ。怠慢けて居て不可
といふのだ。何様も東洋一體の悪い習慣だ。早
くしろ早くしろ老嫗!」

お兵「それ又日本人は嫌だがばじまつた。そん
なには急かないでもですよ。それ餘りお慌てなさ
るから頸締が真返つて居ます!」

奇之助「チヨッ、何年経つても襟飾の事を、最初
に云ひ出した自分の言葉でもつて今だに頸締頸
締つて云ひくさる、忌々しい依怙地の婆だナ。」

お兵「でも頸締は頸締ですもの、頸締つて云つ
たつて悪くありません。」

奇之助「宜いよ、宜いよ、汝と言語論を仕たつ
て仕様は無い。早くまあ飯を食ばう。飯だ飯だ
飯だ!」

其八

お狐「いゝことネー富豪つてものは。マア此の
應接間なんかのハイカラで、そして洒落きつて
ゐること! 窓掛の立派なこと! 絨氈の美し
いこと! 緋の絹天を貼つた此の細脚の椅子の

心持の好いこと! 卓子掛の結構なこと! 暖
爐が焚いてあるから此の温暖で心持の好いこ
と! これを思ふと身分があるよりやあ金錢の

ある方が好い。妾の居る家も随分結構には違ひ
ないが何だか窮窶なところがあつて、何様も紗
綾形の襦がまだ何處かに遺つて居るやうな氣
がする! だが斯様やつて丁寧に扱はれるのも
妾が出来るだけ裝飾し込んで下手な令嬢みたや
うに澄まして来たばかりぢやあ無い、矢張り主
人の威光が背後から射して居るからだらう。そ
れにしても例の馬鹿な眞似を一通りは仕無く
ちやあならないのだが、此處のも魔法使ひだと
いふから大概知れた男だ。怖いことはあるま
い、宜い加減に誤魔かして、附加をつけて金錢
でも品物でも何でも奪つて遣れ。オヤ屏の外で
発音がする。そら来た、奇之さんが。此方もオ
ホンと澄まさなくつつやあ。」

奇之助「ヤ、これは御待たせ申しました。初め
て御目にかゝりますが、貴嬢は朽葉様の御親族
でゝも御有りなさいまして。」

お狐「ハイ、イ、エ、あの子から参つて居り
まする召使でございまして、貴郎は御存じはご
ざいますまいが、妾はもー、貴郎をチャーンと
存じて居りますのでございます。…オ、恐ろ

しい香水の匂だこと! まるで眼も何も間いち
やあ居られや仕無い!」

奇之助「ハ、ハ、ハ、然様でしたか、御召使
で居らしつたか、餘り貴嬢が御綺麗なもので御眷
屬かと思ひました。して貴嬢の御來臨になつた
御用と申しますのは?」

お狐「召使だと云つても妾の事を貴嬢々々つて
云つてゐるよ。言葉といひ眼つきの様子ぢやあ女
にやあ鼻の下が鯨尺の方らしい! 打たれる氣
遣もあるまい、遣りかさうかネエ! ハイ、其
の用向と申しまするのは、朽葉式一徹眠術の
一妙一作用一は、此一の一通り。」

奇之助「ヤッ、是やお驚いた! 危く椅子と一
緒に顛倒返つて仕舞ふところであつた! 何
だ! 兩手でコンコンチキを拵へて踊りかゝつ
て来るには驚いたナア。悪い洒落だ、君、止し
たまへ、君、イヤ貴嬢、そんな事を爲ちやあ困
ります、止したまへ貴嬢!」

お狐「こん／＼ちきや、こんちきや、化あかそ
化かそ。」

奇之助「これ然様騒いでば困りますよ貴嬢!
あゝ椅子を顛倒返した! 危い! 危い! 止
したまへ君、戯談しちやあ困ります! 君!
イヤ貴嬢困りますといへば、イヤ貴嬢! 貴

根元は天草残類の妖法でござりませう。』

拔鷹「何もお狐の事から北利氏と一寸閑着を致したとて、其れ最早米解散して見れば何でも無いのだから、左様に咎め立を致さんでも宜いことでは無いか。』

金左「イヤ然様は成りません、是非に御思ひ止まりな。北利様も何御不足の無い御身分で御蕩薬もござらうに、催眠術は悪い御蕩薬でございます。御廢止なさいませ。』

拔鷹「煩さいな何時までも愚圖々々申すと又術を掛けるぞ。』

金左「イヤ、今日は覺悟を仕て参つた以上は既驚きません、死を決して御諷言申し上げるつもり石部金左衛門、金鐵の心でございます。』

拔鷹「何だ、掛けられても恐れぬと申すか。』

金左「全く恐れませぬ。死を決した以上は何が怖うございませう。催眠術でも蝦蟇の術でも邪は正に勝たずでございます。金左今日は覺悟を致して居ります。』

拔鷹「ヤ、面白い。其なら汝若し子の術にかゝつたら何と致す。』

金左「其時は催眠術に降伏致すでございませう。但し掛けませんでしたらば若殿も北利様も術を御棄てになりますか。』

拔鷹「奇之助「オ、十分に術を行つても掛からなかつたら汝の言に従ふ。』

金左「宜しうござる、其儀ならばお掛けなされませ、覺悟致しました。さあ前からでも後からでも御掛けなされませ。端然と袴に手を入れて

磐石と坐りましたる上は、金左惡びれば致しませぬ、御存分に御掛けなされませ。金左は師匠より皆傳を受けましたる小野派一刀流の氣合を以つて身を守りまする。キリシタンパテレンの邪法に屈する如き事は毛頭ござらぬ。』

拔鷹「其の廣言は後で致すがよい、今思ひ知らせて遣る。』

奇之助「僕が先づ掛けませう、僕のが早く掛かるから。』

拔鷹「イヤ、乃公が先へ掛けませう。エヘン。

ウルマノナトコハ、イモクテネー、コクリノナトコハ、パバステネー、トラネルサウネルワツパネルー、トンネルパンネルフランネル、ウトリー、ウトリー、ヒナタネコ。ウルマノナトコハイモクテネー、コクリノナトコハパバステネー。……イヤ恐ろしい爛々たる眼を剥いて予を睨み居るナ。ウルマノナトコハイモクテネー。ヤ此奴中々頑強に抵抗するナ、ウルマノナトコハイモクテネー……。』

金左「是は怪しからん、睡くなつて参つた。ヤ、日蓋が大部分に重くなつてまゐつた。残念なり心外なり、小野派一刀流が催眠術に屈しては。ムムッ。』

拔鷹「占めたぞ、それ日蓋が下つて來たぞ、ウルマノナトコハイモクテネー。』

金左「是は怪しからん、堪らなく睡くなつて來た。エイ、掌の中に小刀を握つて來たは此の時、の爲である。是非に及ばん袴の下で膝に突立て、痛をもつて睡を忘れよう。エイ、アツリ、ア痛！ア痛！』

拔鷹「ヤ、又恐ろしい眼になつて予を睨み居る。何様も御術を遣つた奴の眼は奇妙に据つて居て怖いナ、ウルマノナトコハイモクテネー。』

奇之助「朽葉さん負けてはならん。僕も加勢する。ダチイキコツ、ネケンクシリル。ダチイキコツ、ネケンクシリル。』

金左「サア何人でも來い、邪は正に勝たずだ。アツリ、ア痛！ア痛！』

拔鷹「ウルマノナトコハイモクテネー……。奇之助「ダチイキコツ、ネケンクシリル。』

拔鷹「ウルマノナトコハ……。奇之助「ダチイキコツ、ネケンク……。』

金左「アツリ、ア痛！』

仕舞はうー』

奇之助「占めた。乃公の術の突然式は此の通り卓絶だ。ダチイキコツ、ネケンクシリネル、クウ、パア。それもう眠つた。さあ是から復讐を仕て遣るのは。貴嬢ッ!」

お狐「ハ・イ。」

奇之助「貴嬢。家へ御歸りなすつたら拔鷹様に御對ひなすつて、僕が豫て御用立てゝある金三十三圓三十三錢三厘三毛三絲三忽を御取り立てなさるがよい。即ち其の證書は此處に在ります。此の證書で責めて、是非共取るが宜いです。遺さなかつたら眼へ指を突込んで取るが宜いです。此金は皆貴嬢に逃げます。そして指環は其金を御取りなすつたら返して下さい。」

お狐「ハ・イ。」

奇之助「宜しい。お覺めなさいッ! ダコネシ、ナイ、パア。」

其十

お狐「いけません。何と仰あつても證書が物を云ひます。此の通り金三十三圓三十三錢三厘三毛三絲三忽也、右正に借用と書いてあるぢやありませんか。」

拔鷹「困るナ汝には、そんな大層を出されては

外聞が悪い。證書々と御云ひだけれど、是は汝證書では無い、新聞の號外では無い。讀んで聞かせようか、それ、旅順陥落、ステツセル降伏とあるでは無いか。」

お狐「そんな知らんくしいことを仰あつてもいけません、現にこゝに書いてあります、金三十三圓三十三錢三厘」

拔鷹「左様に書いて無い、號外では無いか。」

お狐「イ、エ金三十三圓三十三錢三厘……」

拔鷹「では無いといふに! 汝喪心したナ。」

お狐「イ、エ金三十三圓三十三……」

拔鷹「發狂したナ喧しい、外聞が悪くて困るといふに。」

お狐「でも、金三十三圓三十三錢三厘……」

拔鷹「ハ、ア、掛けられて來たのだナ。」

お狐「金三十三圓三十三……」

拔鷹「是は困つたものだ、何様したら宜からう。」

お狐「金三十三圓三十三錢三厘」

拔鷹「エ、もう喧しい、誰が知るものか。」

お狐「眼の中へ指を突込んで金三十三圓三十三錢三厘は引掻き出しますから。」

拔鷹「おそろしい顔をして、指を出して掛つて來ては困るでは無いか。」

お狐「でも、金三十三圓三十三錢三厘を下さらなければりやあ。」

拔鷹「あ、喧しい。然様掛つて來ては困る。ア助けて呉れ! 眼の玉の助け舟!」

お狐「さあ金三十三圓三十三錢三厘を御返濟下さいますか何様で、」

拔鷹「返濟するよ、返濟するよ。あゝ情無い。ステツセル降伏の號外一枚で三十三圓三十三錢三厘取られる! 術を掛けられて夢中になつて居るものと争ふ譯には行かす、説いても諭しても解りつゝは無し、忌々しい、奇之助のお蔭で三十三圓三十三錢取られる!」

其十一

金左「畢竟は益無き邪法を御物好に相成りますより、斯様の事も起りますので、金左今日は死を決して御謀め申す以上は、是非とも今後催眠術は御廢止になりますやうに願ひまする。」

拔鷹「又しても邪法呼びをするか、邪法では無いと申すに。」

奇之助「石部さん、其は貴下が知らんからで。」

金左「イヤ何と仰あつてもいけません、催眠術などといふことは有るべからざることで、全く

五

重

塔

其 一

木理美しき楓胴、縁にはわざと赤檜を用ひたる岩疊作りの長火鉢に對ひて話し敵もなく唯一人、少しは淋しさうに坐り居る三十前後の女、男のやうに立派な眉を何日掃ひしか刺つたる痕の青々と、見る眼も覺むべき雨後の山の色を留めて翠の匂ひ一トしほ床しく、鼻筋つんと通り眼尻キリと上り、洗ひ髪をぐるぐると酷く丸めて引裂紙をあしらひに一本簪でぐいと留めを刺した色氣無の様はつくれど、憎いほど烏黒にて艶ある髪の毛の一本二線後れ亂れて、淺黒いながら滲氣の抜けたる顔にかゝれる趣きは、年増嫌ひでも褒めずには置かれまじき風體、我がものならば着せてやりたい好みのあるにと好色漢が随分頼まれもせぬ詮議を蔭では爲べきに、さりとば外見を捨てて堅義を自慢にした身の装い方、櫛の選擇こそ野暮ならね、高が二子の綿入れに縹子襟かけたを着て、何處に紅くさいところもなく、引つ掛けたれんればか

りは往時何なりしやら疎い縞の絲織なれど、此とて幾度か水を漕つて来た奴なるべし。今しも臺所にては下婢が器物洗ふ音ばかりして家内靜かに、他には人ある様子もなく、何心なくいたづらに黒文字を舌端で颯り躍らせなどして居し女、ぶつりと其を嚙み切つてぶいと吹き飛ばし、火鉢の灰かきならし炭火體よく埋け、芋籠より小巾とり出し、銀ほど光れる長五徳を磨き、おとしを拭き、銅壺の蓋まで綺麗にして、さて南部震地の大鐵瓶を正然かけし後、石尊様詣りのついでに箱根へ寄つて來しものが姉御へ御土産と呉れたらしき寄木細工の小鐵麗なる煙草箱を右の手に持たしき管の煙管で引き寄せ、長閑に一服吹うて線香の煙るやうに緩々と煙りを噴き出し、思はず知らず太息吐いて。多分は良人の手に入るであらうが、憎いのつそりめが對うへ廻り、去年使うてやつた恩も忘れ、上人様に胡麻摺り込んで、強て此度の仕事を爲うと身の分も知らずに願ひを上げたところ、清吉の話では、上人様に依怙最良の御情はあつても名さへ響

かぬのつそりに大切の仕事任せらるゝ事は、檀家方の手前寄進者方の手前も難しからうなれば大丈夫此方に命けらるゝに極つたこと。よしまたのつそりに命けらるればとて彼奴に出来る仕事でもなく、彼奴の下に立つて働く者もあるまいなれば見事出來し損するは眼に見えたこととのよしなれど、早く良人が愈々御用命かつたと笑ひ顔して歸つて來られうばよい、類の少い仕事だけに、是非爲て見たい受け合つて見たい、慾徳は何でも關はぬ、谷中感應寺の五重塔は川越の源太が作り居つた、嗚呼よく出來した感心なと云はれて見たいと面白がつて、何日になく職業に氣のはすみを打つて居るゝに、若し此仕事を他に奪られたら何のやうに腹を立てらるるか癪癪を起さるゝか知れず、それも道理であつて見れば傍から妾の慰めやうも無い譯、嗚呼何にせよ日出度う早く歸つて來られうばよいと、口には出されど女房氣質、今朝背面から我が経ひ羽織打ち掛け着せて出したる男の上を氣遣ふところへ表の骨太格子手あらく開けて。姉御、兄貴は、なに感應寺へ、仕方が無い、それで姉御に、濟みませんが御頼み申します、つい昨晚酔ましてと後は云はず異な手つきをして話せば、眉頭に皺をよせて笑ひながら。仕方

拔鷹『ウルマノナトコハ……何様も頑強な奴だ。非常に此方が睨まれるので辛くなつて来た。』

奇之助『何様も偉い奴だ、ダチイキコツ、此方が疲れて来た。ア、怖ろしい眼だ。』

金左『占めたッ、敵は二人とも氣の衰へが募つて来た！ 劍術なら此處でもつて眞二ツに仕舞ふのだが。』

拔鷹『ウールーマーノ……ア、疲れて来た。』
奇之助『ダーチーイーキーコーツ……ア、草臥れて来た。怖しい眼だ、青く光つてゐる！』

金左『此時だッ。エイイツ。』

拔鷹『奇之助』ヒヤーツ。』

金左『ア、思はず知らず發した一刀流の氣合でもつて、魔法遣ひは二人共氣絶して御仕舞ひになつた！ お釜殿水を持つて来て下され。イヤ活を入れた方が早からう。ヤア、エイツ。』

拔鷹『ウーン、ア痛。』

金左『ヤア、エイツ。』

奇之助『ウーン、痛いッ。』

金左『御二人共如何でございまする？』

拔鷹『奇之助』ウー。』

金左『自今斷然催眠術の御道樂は御廢止になりまするやうに。』

拔鷹『奇之助』ウ、ヘーツ。』

金左『若しも再び御用ゐになりまするならば石部金左衛門何時でも御相手になりまする。』

拔鷹『奇之助』イヤもう催眠術を玩弄にするのは止す。矢張り寫眞や玉突の方が宜いから其にする。』

る、親方がのつそり汝爲て見ると譲つて呉れれば好いけれどもなうとの馬鹿に蟲の好い答へ、ハ、憶ひ出して心配相に大真面目くさく云つた其面が可笑くて堪りませぬ、餘り可笑いので憎氣も無くなり、笥棒めと云ひ捨てに別れましたが、其限りか。然る左様かへ、さあ遅くなる、關はすに行くがよい。左様ならと清吉は自己が仕事におもむきける、後はひとり物思ひ、戸外では無心の兒童達が獨樂戰の遊びに聲聲喧しく、一人殺しちや二人殺しちや、醜態を見よ警なとつたぞと號きちらす。おもへばこれも順々競争の世の状なり。

其三

世に榮え富める人々は初霜月の更衣も何の苦慮なく、袖に絲織に自己が好きの衣着て寒さに向ふ貧者の心配も知らず、やれ爐開きちや、やれ口切ちや、それに間に合ふやう是非とも取り急いで茶室成就待合の底廂繕へよ、夜半のむら時雨も一服やりながらで無うては面白く窓撲つ音を聞き難しとの贅澤いうて、木枯凄じく鐘の音凍るやうなつて来る辛き冬をば、愉快いものかなんぞに心得られるれど、其茶室の床板削りに鈍礪ぐ手の冷えわたり、其底廂の大和が

き結びに吹きさらされて疝癰も起すことある職人風情は、何ほどの悪い業を前の世に爲し置き同じ時候に他とは違ひ惱め困ませらるゝものぞや、取り分け職人仲間の中でも世才に疎く心好き吾夫、腕は源太親方さへ去年いるく世話して下されし節に立派なもののぢやと賞められし程確實なれど、寛濶の氣質故に仕事も取り勝り勝で、好い事は毎々他に奪られ、年中嬉しからぬ生活かたに日を送り月を迎へる味氣無さ、膝頭の抜けたを辛くも埋め綴つた股引ばかり我が夫に穿かせ置くこと婦女の身としては他人の見える眼も羞づかしけれど何にも彼も貧が爲する不如意に是非もなく、今縫ふ猪之が締入れも洗ひ曝した松坂綿、丹誠一つで着させても着させ榮えなきばかりでなく見とも無いほど針目勝ち、それを先刻は頑はない幼心といひながら、母様其衣は誰かのぢや、小いからは私の衣服か、嬉いなど悦んで其儘戸外へ駈け出し、珍らしい暖い天氣に浮かれて小竿持ち、空に飛び交ふ赤蜻蛉を撲いて取らうと何處の町まで行つたやら、嗚呼考へ込めば裁縫も厭氣になつて来る、せめて腕の半分も吾夫の氣心が働いて呉れたならば斯も貧乏は爲まいに、技倆はあつても寶の持ち腐れの俗諺の通り、何日其手腕の顯

れて萬人の眼に止まると云ふことの目的もないたゞき大工穴鑿り大工、のつそりといふ思々しい諺名さへ負せられて同業中にも輕しめらるゝ齒痒さ恨めしさ、蔭でやきもきと妾が思ふには似ず平氣なが憎らしい程なりしが、今度ばまた何した事が感應寺に五重塔の建つといふ事聞くや否や急にむら／＼と其仕事を是非爲る氣になつて、恩のある親方様が望まるゝなを關はず臆に此様な身代の身に引き受けうとは、些えら過ぎると連添ふ妾でさへ思ふものな他人は何んと噂するであらう、ましてや親方様は定めし憎いのつそりめと怒つてござらう、お吉様は猶ほ更に義理知らずの奴めと恨んでござらう、今日は大抵何方にか、任すと言上人様の御定めなさる答とて今朝出て行かれしが未だ歸られず、何か今度の仕事だけは、彼程吾夫は望んで居らるゝも此方は分に應ぜず親方には義理もありあつた、しうに上人様の任さるればよいと思ふやうな氣持もするし、また親方様の大氣にて別段怒りもなさらずに吾夫に爲せて見事成就させたいやうな氣持もする、えゝ氣の採める、何なる事が、到底良人には御任せなさるまいが若もい／＼吾夫の爲る事になつたら何の様にまあ親方様お吉様の腹立てらるゝか知れぬ、あ

のないも無いもの、少し締まるがよいと、云ひ云ひ立つて幾千かの金を渡せば其をもつて門口に出て、何やら諄々押問答せし末此方に来りて、拳骨で額を抑へ。何も濟みませんでした、ありがたうござりますと無骨な禮を爲たるも可笑。

其二

火は別にとらぬから此方へ寄るがよいと云ひながら、重げに鐵瓶を取り下して、屬輩にも如才なく愛嬌を汲んで與る櫻湯一杯、心に花のある待遇は口に言葉の仇繁きより懷かしきに、悪い請求をさへすなりと聽て呉れし上、胸に婦屈りなく淡然と平日のごとく仕做されては、清吉却つて心差かしく、何やら魂の底の方がむづ痒いやうに覺えられ、茶碗取る手もおづ／＼として進みかぬるばかり、濟みませぬといふ辭置を二度ほど繰返せし後漸く乾き切つたる舌を濕す間もあらせず。今頃の歸りとは餘り可愛がられ過ぎたの、ホ、遊ぶはよけれど職業の間を缺いて母親に心配するやうでは男振が悪いではないか清吉、汝は此頃仲町の甲州屋様の御本宅の仕事が済むと直に根岸の御別荘の御茶席の方へ廻らせられて居るではないか、良人のも遊ぶは随分好で汝達の先に立つて騒ぐは毎々な

れど職業を粗略にするは大の嫌ひ、今若し汝の顔でも見たらば又例の青筋を立つるに定つて居るを知らぬでもあるまいに、さあ少し遅くはなつたれど母親の持病が起つたとか何とか方便は幾千でもつくべし、早う根岸へ行くがよい、五三様も了つた人なれば一日をふてて怠惰ぬに免じて、見透かしても旦那の前は庇護うて呉るであらう、お、朝飯がまだらしい、三や何でもよいほどに御膳を其方へこしらへよ、湯豆腐に蛤鍋とは行かぬが新漬に煮豆でも構はぬはなう、二三杯かつこんで直と仕事に走りやれ走りやれ、ホ、睡くても昨夜をおもへば堪忍の成らうに精を惜むな辛抱せよ、よいは辨當も松に持たせて遣るわと、苦くはなれど效驗ある藥の行きといた意見に、汗を出して身の不始末を斬づる正直者の清吉、姉御、では御厄介になつて、直に仕事に突走りますと、驚掴みにした手拭で額拭き／＼勝手の方に立つたかとおもへば、既さら／＼ざらつと口の中へ打込む如く茶漬飯五六杯、早くも食うて了つて出て來り。左様なら行つてまゐりますと、肩ぐるみに頭を一つと下げて煙草管を収め、壺屋の煙草入三尺帯にさすがは氣早き江戸ッ子氣質、草履つまかき門口出づる、途端に今まで黙つて居たりし

女は急に呼びとめて。此二三日にのつそり奴に逢うたかと石から飛んで火の出し如く聲を迸らし問ひかくれば、清吉ふりむいて。逢ひました逢ひました、しかも昨日御殿坂で例ののつそりがひとしほのつそりと、往生した鶏のやうにぐたりと首を垂れながら歩行いて居るを見かけましたが、今度此方の棟梁の對岸に立つて、のつそりの癖に及びも無い望みをかけ、大丈夫であるものの幾千か棟梁にも姉御にも心配をさせ其面が憎くつて面が憎くつて堪りませれば、やいのつそりめと頭から毒を浴びせて呉れましたに、彼奴の事故氣がつかず、やいのつそりめ、のつそりめと三度めには傍へ行つて大聲で怒鳴つて遣りましたれば、漸く吃驚して鼻に似た眼で私の顔を見詰め、あ、清吉あーにーいかと寢惚聲の挨拶、やい、汝は大方好い男兒になつたの、紺屋の干場へ夢にでも上つたか大層高いものを立てたがつて感應寺の和尚様に胡麻を摺り込むといふ話だが、其は正氣の沙汰か寢惚けてかと、冷語を幕向から與つたところ、ハ、ハ、姉御、愚鈍い奴といふものは正直ではありませんか、何と返事をするかとおもへば、我も随分骨を折つて胡麻は摺つて居るが源太親方を對岸に立てて居るので何も胡麻が摺りづらくて困

が、いよく塔の建つに定つて例の源太に積り書出せと圓道が命令けしを、知つて知らずに敷上人様に御日通り願ひたしとのつそりが来しは今より二月程前なりし。

其五

紺とはいへど汗に穢め風に化りて異な色になりし上、幾度か洗ひ濯がれたるため其としもみえず、襟の記印の字さへ臙氣となりし半纏を着て、補綴のあたりし古股引を穿きたる男の、髪は塵埃に塗れて白け、面は日に焼けて品格なき風采の猶更品格なきが、うろ／＼のそ／＼と感應寺の大門を入りにかゝるを、門番突り聲で何者ぞと怪み誰何せば、吃驚して暫時眼を見張り、漸く腰を屈めて馬鹿丁寧に。大工の十兵衛と申しまする、御普請につきまして御願に出ましたとおづ／＼云ふ風態の、何となく腑には落ちれど、大工とあるに多方源太が弟子かなんその使ひに來りしものならむと推察して、通れと一言押柄に許しける。十兵衛これに力を得て四方を見廻はしながら森嚴しき玄關前にさしかゝり、御頼申すと二三度いへば、鼠衣の青黛頭、可愛らしき小坊主の應と答へて障子引き開けしが、應接に慣れたるものの眼捷く人を見て、敷臺ま

でも下りす突立ちながら。用事なら庫裡の方へ廻れと情無く云ひ捨てて障子びつしやり、後は何方やらの櫛頭に啼く蟬の聲ばかりして音もなく響きもなし。成程と獨言しつゝ十兵衛庫裡にまはりて復案内を請へば用人爲右衛門仔細らしき理窟顔して立出で。見なれぬ棟梁殿、何處より何の用事で見えられたと、衣服の粗末なるに既侮り輕しめた言葉遣ひ、十兵衛さらに氣にとめず。野生は大工の十兵衛と申すもの、上人様の御眼にかゝり、御願ひをいたしたい事のあつてまゐりました、どうぞ御取次ぎ下されましと、首を低くして頼み入るに、爲右衛門じろりと十兵衛が垢臭き頭上より白の鼻緒の鼠色になつた草履穿き居る足先まで睨め下し。ならぬ、ならぬ、上人様は俗用に御關りはなされぬね、願といふは何か知られど云うて見よ、次第によりては我が取り計うて遣ると、然も／＼萬事心得たぶり。それを無頓着の男の質料にも突き放して。いえ、ありがたうござりますれど上人様に直々で無うては、申しても役に立ちませぬ事、何卒たゞ御取次を願ひますと、此方の心が醇粹なれば先方の氣に觸る言葉とぞ斟酌せす推返し言へば、爲右衛門腹には我を頼まぬが憎くて慥りを含み。理の解らぬ男ぢやの、上

人様は汝ごとき職人等に耳は假したまはぬといふに、取次いでも無益なれば我が計うて得させむと甘く遇へば附上の言分、最早何れも聞いてやらぬ、歸れ歸れと、小人の常態とて語氣たちまち粗暴くなり、膠なく言ひ捨て立んとするに周章して十兵衛。ではござりませうなれどと半分いふ間なく、五月蟬、喧しいと打消され。奥の方に入られて仕舞うて茫然と土間に突立つたまゝ掌の裏の螢に脱去られし如き思ひをなしけるが、是非なく聲をあけて復案内を乞ふに、口ある人の有りや無しや、薄寒き大寺の岑閑と、反響のみは我が耳に墮ち來れど咳聲一つ聞えず、玄關にまはりて復頼むといへば、先刻見たる憎氣な伶俐小僧の一寸顔出して、庫裡へ行くと教へたるにと獨語きて早くも障子びしやり。復庫裡に廻り復玄關に行き、復玄關に行き庫裡に廻り、終には遠慮を忘れて本堂にまで響く大聲をあげ、頼む／＼御頼申すと叫べば、其聲より大なる聲を發して馬鹿めと罵りながら爲右衛門つか／＼と立出で。僮僕ども此狂漢を門外に引き出せ、騒々しきを嫌ひたまふ上人様に知れなば我等が此奴のために叱らるべしとの下知、心得ましたと先刻より僕人部屋に轉がり居し寺僕等立かゝり引き出さむとする、土間に坐

あ心配に頭腦の痛む、また此が知れたらば、女の要らぬ無益心配、其故何時も身體の弱いと有情くて無理な叱言を受くるであらう、もう止めましよ止めましよ、あゝ痛と薄痘痕のある若い顔を憂めながら即功紙の貼つてある左右の額顚を縫ひ物捨て、兩手で壓へる女の、齡は二十五六、眼鼻立ちも醜かられど美味きもの食はねに賦氣少く肌理荒れたる態あはれて、襖襖衣服にそゝけ髪ますゝ悲しき風情なるが、つくづく獨り數する時しも臺所の割りの破れ障子がらりと開けて、母様これを見てくれと猪之が云ふに吃驚して、汝は何時から其處に居たと云ひながら見れば、四分板六分板の切端を積んで現然と眞似び建てたる五重塔、思はず母親涙になつておゝ好い兒ぞと聲曇らし、いきなり猪之に抱きつきぬ。

其四

當時に有名な番匠川越の源太が受負ひて作りなしたる谷中感應寺の何處に一つ非點を打つべきところ有らう筈なく、五十疊敷格天井の本堂、橋をあざむく長き廻廊、幾部かの客殿、大和尚が居間、茶室、學徒所化の居るべきところ、庫裡浴室、玄關まで、或は莊嚴を盡し或は堅固

を極め、或は清らかに或は寂びて各々其宜しきに適ひ、結構少しも申し分なし。そもゞ微々たる舊基を振ひて簡程の大寺を成せるは誰ぞ、法諱を聞けば其頃の三歳兒も合掌禮拜すべきほど世に知られたる宇陀の朗上人とて、早くより身延の山に螢雪の苦學を積まれ、中ごろ六十餘州に雲水の修行をかされ、毘婆舍那の三行に寂靜の慧劍を礪ぎ、四種の悉檀の濟度の法に寂靜の慧劍を礪ぎ、四種の悉檀の濟度の法に音を響かせられたる七十有餘の老和尚、骨は俗界の輩類を避くるによつて鶴の如くに瘦せ、眼は人生の紛紜に厭きて半睡れるが如く、固より壞空の理を諦して意欲の火炎を胸に揚げらるゝこともなく、涅槃の眞を會して執着の彩色に心を染まざるゝことも無ければ、堂塔を興し伽藍を立てむと望まれしにもあらざれど、徳を慕ひ風を仰いで寄り來る學徒のいと多くて其等のものが雨露凌がむ便宜も舊のまゝにては無くなりしまゝ、猶少し堂の廣くもあれかしなど獨語かれしが根となりて、道徳高き上人の新に規模を大うして寺を建てむと云ひ給ふぞと此事八方に傳播れば、中には徒弟の伶俐なるが自ら奮つて四方に馳せ、感應寺建立に寄附を勧めて行くもあり、働き顔に上人の高徳を演べ説き聞かし富豪を德懣めて喜捨せしむる信徒もあり、

さなきだに平素より隨喜渴仰の思ひを運べるの雲霞の如きに此勢をもつてしたれば、上議侯より下町人まで先を争ひ財を投じて、我一番に福田へ種子を投じて後の世を安樂くせむと、富者は黄金白銀を貧者は百銅二百銅を、分に應じて寄進せしにぞ、百川海に入るごとく瞬く間に金錢の驚かるゝほど集りけるが、それより世才に長けたるものの世話人となり用人となり、萬事萬端執り行うて頓て立派に成就しけるとは、聞いてさへ小氣味のよき話なり。然るに悉皆成就の曉、用人頭の爲右衛門普請諸人用諸雜費一切しめくゝり、手脱る事なく決算したるに尙大金の剩れるあり、此を如何になすべきと役僧の圓道もろとも髮ある頭に髮無き頭突き合はせて相談したれど別に殊勝なる分別も出でず、田地を買はむか昌買はむか、田も畠も餘るほど寄附のあれば今更また此淨財を其様な事に費すにも及ばじと思案にあまして、面倒なり好に計らへと銀枯れたる御聲にて云ひたまはむは知れてあれど、恐るゝ圓道或時思さるゝ用途もやと何ひしに、塔を建てよと唯一言云はれし限り、振り向きも爲たまはず簡甲縁の大きな眼鏡の中より微なる眼の光りを放たれて何の經やら論やらを黙々と讀み続けられける

は、御上人様、五重塔は百年に一度一生に一度建つものではござりませぬ、恩を受けて居ります源太様の仕事を奪りたくはおもひませぬが、あゝ賢い人は羨ましい、一生一度百年一度の好い仕事を源太様は爲るゝ、死んでも立派に名を残さるゝ、あゝ羨ましい、羨ましい、大工となつて生ゐる生甲斐もあるゝといふもの、それに引かへ、此十兵衛は盤手斧もつては源太様にだとして誰にだとして打つ墨繩の曲ることはあれ萬が一にも後れを取るやうな事は必ず必す無いと思へど、年が年中長屋の羽目板の繕ひやら馬小屋箱溝の敷仕事、天道様が智慧といふものを我には賜さらない故仕方が無いと諦めて諦めても、拙い奴等が宮を作り堂を受負ひ、見るものの眼から見れば建てさせた人が氣の毒なほどのものを築造へたを見るたびごとに、内内自分の不運を泣きますわ、御上人様、時々口惜くて技倆もない癖に智慧ばかり達者な奴が憎くもなりますわ御上人様、源太様は羨ましい、智慧も達者なれば手腕も達者、あゝ羨ましい仕事なさるか、我はよ、源太様はよ、情無い此我はよと、羨ましいがいつい高じて、女房にも口きかず泣きながら寐ました其夜の事、五重塔を汝作れ今直つくれと怖しい人に吩咐けら

れ、狼狽て飛び起きさまに道具箱へ手を突込んだら半分夢で半分現、眼が全く覺めて見ますれば指の先の鐙盤につゝかけて怪我をしながら道具箱につかまつて何時の間にか夜具の中から出て居た詰らなさ、行燈の前につくれんと坐つて嗚呼情無い詰らないと思ひました時の其心持、御上人様、解りまするか、えゝ、解りまするか、これだけが誰にでも分つて呉れゝば塔を建てなくてもよいのです、どうせ馬鹿なのつそり十兵衛は死んでもよいのでござりまする、腰拔銀のやうに生て居たくもないのですわ、其夜からといふものは眞實、眞實でござりまする上人様、晴れて居る空を見ても燈光の達かぬ室の隅の暗いところを見ても白木造りの五重塔がぬつと突立つて私を見下して居りますわ、とうとう自分が造りたい氣になつて、到底及ばぬとは知りながら、毎日仕事を終ると直に夜を籠めて五十分一の雛形をつくり、昨夜で丁度仕上げました、見に来て下され御上人様、頼まれもせぬ仕事は出来て仕たい仕事は出来ない口惜さ、えゝ不運ほど情無いものはないと私が歎けば御上人様、なまじ出来ずば不運も知るまいと女房めが其雛形をば搖り動かしての迷惑、無理とは聞えぬだけに餘計泣きました、御上人様御慈悲

に、涙ば塵を浮べたり。

其七

木彫の羅漢のやうに黙々と坐りて、菩提樹の實の珠数繰りながら十兵衛が埒なき述懐に耳を傾け居られし上人、十兵衛が頭を下ぐるな制しとめて。了解りました、能く合點が行きました、あゝ殊勝な心掛を持つて居らるゝ、立派な考へを著へてゐらるゝ、學徒どもの示しにも爲たいやうな、老衲も思はず涙のこぼれました、五十分一の雛形とやらも是非見にまゐりませう、然し汝に感服したればとて、今直に五重塔の工事を汝に任するはと、輕忽なことを老衲の獨斷で云ふ譯にもならねば、これだけは明瞭とことわつて置きまする、いづれ頼むとも頼まぬとも其表立つて老衲からではなく感應寺から沙汰な爲ませう、兎も角も幸ひ今日は閑暇のあれば汝が作つた雛形を見たり、案内して是より直に汝が家へ老衲を連れて行ては呉れぬかと、毫も邊幅を飾らぬ人の義理明かに言葉盡すなく云ひたまへば、十兵衛満面に笑を含みつゝ米春くごとく無暗に頭を下げて、唯、唯、

何事に罵り騒ぐそと上人が下したまふ鶴の一聲の御言葉に群雀の輩鳴りを歇めて、振り上げし拳を藏すに地なく、禪僧の間答に有りや有りやと云ひかけしまゝ一喝されて腰の折けたる如き風情なるもあり、捲り縮めたる袖を體裁惡げに下して狐鼠々と人の後に隠るゝもあり、天を仰げる鼻の孔より火烟も噴べき驕慢の怒に意氣昂ぶりし爲右衛門も、少しは慚ぢてか首を俛れ掌を揉みながら、自己が發頭人なるに是非なく、有し次第を我田に水引きく申し出れば、瘦せ鐵びたる顔に深く長く痕いたる法令の皺溝をひとしほ深めて、につたりと徐かに笑ひたまひ、婦女のやうに軽く軟かな聲小さく。それならば騒がすともよいこと、爲右衛門汝がたゞ從順に取り次さへすれば仔細は無うてあら

うものな、さあ十兵衛殿とやら老衲について此方へ可來、とんだ氣の毒な目に遇はせましたと、萬人に尊敬ひ慕はるゝ人は又格別の心の行き方、未學を輕んぜず下可をも侮らず親切に溫和しく先に立て靜かに導きたまふ後について、迂闊な根性にも慈悲の涙み透れば感涙とぞめあへぬ十兵衛、段々と赤土のしつとりしたるとこへ來るところ、飛石の畫趣に布かれるところ、梧桐の影深く四方竹の色ゆかしく茂れるところなど榮り繞り過ぎて、小やかなる折戸を入れば、花も此といふはなき小庭の唯ものさびて、有樂形の燈籠に松の落葉の散りかゝり、方星宿の手水鉢に苔の蒸せるが見る眼の塵をも洗ふばかりなり。上人庭下駄脱ぎすて、上にあがり、さあ汝も此方へと云ひさして、掌に持たれし花を早速に釣花活に投げこまるゝにぞ、十兵衛なかく怯す憶せす、手拭で足はたくほどの事も氣のつかぬ男臺目の茶室に入りこみ、鼻突合はすまで上人に近づき坐りて、黙々と一禮する態は禮儀に媚はれど十分に儼飾なき情の眞實をあらはし、幾度か直にも云ひ出むとして尙開きかぬる口を漸に開きて、舌の動きもたど／＼しく、五重塔の御願に出ましたは五重塔のためでござり

ますと、數から棒を突き出したやうに尻もつた
てて聲の調子も不揃ひに、辛くも胸にあることを
額やら腋の下の方と共に殺り出せば、上人お
もはず笑を催され。何か知られど老衲をば怖
いものなぞと思はす、遠慮を忘れて續りと話を
するがよい、庫裡の土間に坐り込んで動かずに
居た様子では何か深く思ひ詰めて来たことであ
らう、さあ遠慮を捨てて急かずに老衲をば朋友
同様におもつて話すがよいと飽くまで懇しき注
意、十兵衛腕くも梟と常々惡口受くる銅鈴眼
に既涙を浮めて。唯、唯、唯ありがたうござり
まする、思ひ詰めて参上りました、その五重塔
を、斯様いふ野郎でござります、御覽の通り、
のつそり十兵衛と口惜い譯名をつけられて居る
奴でござりまする、然し御上人様、眞實でござ
りまする、工事は下手ではござりませぬ、知つ
て居ります、私は馬鹿でござります、馬鹿にさ
れて居ります、意氣地の無い奴でござります、
虚誕はなかく申しませぬ、御上人様、大工は
出来まです、大隅流は童兒の時からは、後藤立川二
ッの流れ儀も合點致して居りまする、爲せて、五
重塔の仕事は私に爲せていたゞきたい、それ
で参上しました、川越の源太様が積りをしたとは
五六日前聞きました、それから私は寐させぬ

まふが、五重塔の工事一切汝に任すと命令たまふか、若し又我には命じたまはず源太に任すと定めたまひしを我にことわるため招はれしか、然にもあらば何とせむ浮むよしなき埋れ木の我が身の末に花咲かむ頼みも永く無くなるべし、唯願はくば上人の我が愚癡しきを憐みて我に命令たまはむことなと、九尺二枚の唐襖に金鳳銀鳳翔り舞ふ其箔模様美しきも眼に止めずして茫々と暗路に物を探るごとく念想を空に漂はすこと良久しきところへ、例の恰愜氣な小僧いで来りて。方丈さまの召しますほどに此方へおいでなされましと先に立つて案内すれば、素破や願望の叶ふとも叶はざるとも定まる時ぞと魯鈍の男も胸を騒がせ、導かるゝまゝ随ひて一室の中へすつと入る途端に此方をさるりつと見る眼鏡く怒を含んで斜に睨むは思ひがけなき源太にて座に上人の影もなし。事の意外に十兵衛も足踏みとめて突立つたるまゝ一言もなく白眼合ひしが、是非なく疊二ひらばかりを隔てしところに漸く坐り、力なげ首悄然と己れが膝に氣勢のなきたさうなる眼を注ぎ居るに引き替へ源太郎は小物を瞰下す猛鷲の風に臨んで千尺の巖の上に立つ風情、腹に十分の強みを抱きて、背をも肩げれば肩をも歪めず、すつき

り端然と構へたる風姿と云ひ面貌といひ水際立つたる男振り、萬人が萬人とも好かずには居られまじき天晴小氣味のよき好漢なり。されども世俗の見解には墮ちぬ心の明鏡に照らして彼れ此れ共に愛し、表面の美醜に露泥まされざる上人の却つて何れなとも昨日までは擇びかれられしと思ひつかるゝことのありてか、今日はわざわざ二人を招び出されて一室に待たせ置かれしが、今しも静々居間を出られ、疊踏まるゝ足も軽く、先に立つたる小僧が襖明くる後より、すつと入りて座につきたまへば、二人は恭ひ敬みて共に齊しく頭を下げ、少時上げも得せざりしが、嗚呼いぢらしや十兵衛が辛くも上げし面には未だ世馴れざる里の子の貴人の前に出しやうに羞を含みて紅潮し、額の皺の幾條の溝には沁出た熱汗を湛へ、鼻の頭にも珠を湧かせば、腋の下には雨なるべし、膝に載きたる骨太の掌指は枯れたる松枝ごとく岩疊作りによりながら一本ごとに其さへも戦々顫へて一心に唯上人の一言を一期の大事と待つ笑止さ、源太も黙して言葉なく耳を澄まして命を待つ、那方を那方と判かぬ二人の情を汲みて知る上人もまた中に口を開かむ便宜なく暫時は静まりかへられしが。源太十兵衛ともに聞け、今度建つべき五

重塔は唯一つにて建てむといふは汝達二人、二人の願ひを雙方とも聞き届けては遣りたれど其は固より叶ひがたく、一人に任さば一人の歎き、誰に定めて命けむといふ標準のあるではなし、役僧用人等の分別にも及ばれば老僧が分別にも及ばぬほどに此分別は汝達の相談に任す、老僧は關はぬ、汝達の相談の纏まりたる通り取り上げて與るべければ熟く家に歸つて相談して来よ、老僧が云ふべき事は是ざりぢやによつて左様心得て歸るがよいぞ、さあ確と云ひ渡したぞ、既早歸つてもよい、然し今日は老僧も閑で退屈なれば茶話の相手になつて少時居てくれ、浮世の噂なんど老衲に聞かせて呉れぬか、其代り老僧も古い話の可笑な二ツ三ツ昨日見出したを話して聞かさうと、笑顔やさしく、朋友かなんそのやうに二人をあしらうて扱何事を云ひ出さるゝやら。

其九

小僧が將つて來し茶を上人も取り、二人にも侑めらるれば二人とも勿體ながりて恐れ入りながら頂戴するを。左様遠慮されては言葉に角が取れいて話が及う行かぬわ、さあ菓子も扱んでばやらぬから勝手に摘んで呉れと高杯推遣り

唯と答へ居りしが。願ひを御取上げ下されまし
たか、あゝ有難うござりまする、野生の宅へ御
來臨下さりますると、あゝ勿體ない、雛形は直
野生めが持つてまゐりまする、御免下されと云
ひさま、流石のつそりも喜悅に狂して平素に
は似ず、大袈裟に一つぼくりと禮をばするや
否や、飛石に蹴躑きながら駈け出して我家に歸
り、歸つたと言ふ女房にも云はず、いきなり
雛形持ち出して人を頼み、二人して息せき急ぎ
感應寺へと持ち込み、上人が前にさし置きて歸
りける。上人これを熟視たまふに、初重より五
重までの配合、屋根庇廂の勾配、腰の高さ、椽
木の割賦、九輪請花露盤寶珠の體裁まで何處に
可厭なところもなく、水際立つたる細工ぶり、
此が彼不器用らしき男の手にて出来たるものか
と疑はるゝほど巧緻なれば、獨り私に歎じた
まひて、筒程の技術を有しながら空しく埋もれ
名を發せず世を経るものもある事が、傍眼にさ
へも氣の毒なるを常人の身となりては如何に口
惜きことならむ、あはれ如是ものに成るべきな
らば功名を得させて、多年抱ける心願に負か
ざらしめたし、草木とともに朽て行く人の身は
固より因縁假和合、よしや惜むとも惜みて甲斐
なく止めて止まれど、假令ば木匠の道は小な

るにせよ其に一心の誠を委れ、生命を懸けて慾
も大概は忘れ、卑劣き念も起さず、唯々鑿をも
つては能く穿らむことを思ひ、鉤を持つては好
く削らむことを思ふ心の尊きは金にも銀にも
比へ難きを、僅に残す便宜も無くて徒らに北
邨の上に没め冥途の苞と齎し去らしめむこと思
へば惘然至極なり、良馬主を得ざるの悲み、高
士世に容れられざるの恨みも詮するところは異
ることなし、よしゝ我圖らずも十兵衛が胸に
懷ける無價の寶珠の微光を認めしこそ縁なれ、
此度の工事を彼に命け、せめては少しの報酬を
ば彼が誠實の心に得させむと思はれるが、不
圖思ひよりたまへば川越の源太も此工事を殊
の外に望める上、彼には本堂庫裡客殿作らせし因
みもあり、然も設計豫算まで既做し出して我眼
に入れしも四五日前なり、手腕は彼とて鈍きに
あらず、人の信用は遂に十兵衛に超たり、一ツ
の工事に二人の番匠、此にも爲せたとし彼にも爲
せたとし那箇にせむと上人も流石これには迷は
れける。

其八

明日辰の刻頃までに自身當寺へ來るべし、豫
て其方工事仰せつけられたきむれ願ひたる五重

塔の儀につき上人直接に御指示あるべきよしな
れば衣服等失禮なきやう心得て出頭せよと、嚴
格に口上を演ぶるは辯舌自慢の圓珍とて、唐平
子をむぎと嗜み食へる祟り鼻の頭にあらはれた
る滑稽納所、平日ならば南無和尙といへる誣名
を呼びて戲談口き合ふべき間なれど、本堂
建立中朝夕顔を見しより自然と狎れし馴染みも
今は薄くなりたる上、使僧らしう威儀をつくら
ひて、人さし指中指の二本でやゝもすれば兜背
形の頭顱の頂上を搔く癖ある手をも法衣の袖に
殊勝くさく隠蔽し居るに源太も敬ひ謹んで承
知の旨を頭下つゝ答へけるが、如才なきお吉は、
吾夫なかる俗僧にまで好く評はせむとてか歸
り際に、出したまふにして行く茶菓子と共に幾
干錢か包み込み、是非にというて取らせけるは、
思へば怪しからぬ布施の仕様なり。圓珍十兵衛
が家にも詣りて同じ事を演べ歸りけるが、授其
翌日となれば、源太は鬘刺り月代して衣服をあ
らため、今日こそは上人の自ら我に御用仰せ
つけらるゝなるべけれと、勢込んで庫裡より通
り、とある一ト間に待たされて坐を正しくし扣
へける態こそ異れ十兵衛も、心は同じ張を有ち、
導かるゝまゝ打通りて人氣の無きに寒さ湧く一
室の中に唯一人兀然として、今や上人の招びた

きつゝ迂闊々々歩き。御上人様の彼様仰やつたは、
 那方か一方おとなしく譲れと諭しの謎々とは
 何程愚鈍な我にも知れたが、嗚呼譲りたく無い
 ものぢや、折角丹誠に丹誠凝らして、定めし冷
 て寒からうに御寢みなされと親切で爲て呉るゝ
 女房の世話までを黙つて居る餘計なと叱り飛ば
 して夜の眼も合さず工夫に工夫を積み重ね、今
 度といふ今度は一世一代、腕一杯の物を建てた
 ら死んでも恨ば無いとまで思ひ込んだに、悲し
 や上人様の今日の御諭し、道理には違ひない左
 様も無ければならぬ事ぢやが、此を譲つて何時
 また五重塔の建つといふ的のあるではなし、一
 生到底此十兵衛は世に出ることならぬ身か、
 嗚呼情無い恨しい、天道様が恨めしい、尊い
 上人様の御慈悲は十分了つて居て露ばかりも難
 有う無くは思はぬが、呼何にも彼にもならぬこ
 とぢや、相手は恩のある源太親方それに恨の向
 けやうもなし、何様しても彼様しても温順に此
 方の身を退くより他に思案も何もない歟、嗚呼
 無い歟、というて今更残念な、なまじ此様な事お
 もひたすに、のつそりだけで済して居たらば
 此様に残念な苦惱もすまいものを、分際忘れた
 我が悪かつた、嗚呼我が悪い、我が悪い、けれ
 ども、えゝ、けれども、えゝ、思ふまいゝゝ、

十兵衛がのつそりで浮世の伶俐な人等の物笑ひ
 になつて仕舞へばそれで済むものぢや、連添ふ女
 房にまでも、内々活用の利かぬ夫ぢやと嘲れ
 ながら夢のやうに生きて夢のやうに死んで仕舞
 へば夫で済む事、あきらめて見れば情無い、つ
 ぐくぐく世間が詰らない、あんまり世間が酷過ぎ
 る、と思ふのも矢張愚癡か、愚癡か知られど情
 無過ぎるが、言はず語らず諭された上人様の彼
 御言葉の、眞實のところを味へば飽まで御慈悲
 の深いのが五臓六腑に浸み透つて未練な愚癡の
 出端も無い譯、争ふ二人を何方にも傷つかぬや
 う捌き玉ひ、未の末まで共に好かれと兄弟の子
 に事寄せて尊い御經を解きほぐし囁で含めて
 下さつた彼御話に比べて見れば固より我は弟の
 身、ひとしほ他に譲らねば人間らしくも無いも
 のになる、嗚呼弟とは辛いものぢやと路も見分
 かで屈託の眼は涙に曇りつゝ、とばくとし
 て何一ツ愉快もなき我家の方に絲で曳かるゝ木
 偶のやうに我を忘れて行く途中。此馬鹿野郎發
 狂漢め、私の折角洗つたものに何する、馬鹿め
 と突然に嚙つく如く罵られ、痼張聲に膽を冷し
 てハツと思へば瓦落離顛倒、手桶枕に立てかけ
 ありし張物板に我知らず一足二足踏みかけて踏
 み覆したる不體哉。尻餅ついて驚くところ

か、狐憑め忌々しいと、駄力ばかりの近江の
 お兼、顔は子供の福笑い、眼に付け歪めた多福
 面の如き房州出らしき下婢の憤怒、拳を擧げて
 丁と打ち狼臂を伸ばして突き飛ばせば十兵衛堪
 らず汚塵に塗れ。はいゝゝ、狐に誑まれました
 御免なされと云ひながら惡口雜言聞き捨に痛さ
 を忍びて逃げ走り、漸く我家に歸りつけば。お
 お御歸りか、遅いので如何いふ事かと案じて居
 ました、まあ塵埃まぶれになつて、如何なされ
 ましたと拂ひにかゝるを。構ふなと言、氣の
 無きさうな聲で打消す。其顔を覗き込む女房の
 眞實心配さうなを見て何か知らず無上に悲しく
 なつてちつと涙のささくる眼、自分で自分を
 叱るやうに、えゝと圖らず聲を出し、煙草を捻
 つて何氣なくもてなすことはもてなすものの言
 葉も無く、平時に變れる状態を、大方それと推
 察して扱慰むる便もなく、問うてよきや問は
 れが可きやら心にかゝる今日の首尾をも口には
 出して尋ね得ぬ女房は胸を痛めつゝ、其一本は
 杉箸で辛くも用を足す火箸に挟んで添へる消炭
 のあはれ甲斐なき火力を頼り土瓶の茶をば温む
 るところへ遊びに出たる猪之の戻りて。やあ父
 様歸つて来たな、父様も建てるか、坊も建てた
 ぞ、これ見て呉れと然も勇ましく障子を明けて

て、自らも天目取り上げ喉を濕したまひ。面白
い話といふも桑門の老僧等には左様澤山無い
ものながら、此頃讀んだ御經の中につく／＼成
程と感心したことのある、聞いて呉れ此様いふ
話ぢや、むかし某國の長者が二人の子を引き
つれて麗かな天氣の節に、香のする花の咲き
軟かな草の滋つて居る廣野を愉快げに遊行した
ところ、水は大分に夏の初め故涸れたれど猶清
らかに流れて岸を洗うて居る大きな川に出逢う
た、其川の中には珠のやうな小磧やら銀のやう
な砂で成て居る美しい洲のあつたれば、長者は
興に乗じて一尋ばかりの流を無造作に飛び超
え、彼方此方を見廻せば洲の後面の方にもまた一
尋ほどの流で陸と隔てられたる別世界、全然浮
世の塵羶い土地とは懸絶れた清淨の地であつ
たまゝ獨り歡び喜んで踴躍したが、涉らうと
しても涉り得ない二人の兒童が羨ましがつて喚
び叫ぶを可憐に思ひ、汝達には來ることの出來
ぬ清淨の地であるが然程に來たくば渡らして
與るほどに待つて居よ、見よ、我が足下の此
磧は一々蓮華の形狀をなし居る世に珍しき磧
なり、我が眼の前の此砂は一々五金の光を有て
る比類稀なる砂なるぞと説き示せば、二人は
遠眼にそれを見ていよく焦躁り渡らうとする

を長者は徐に制しながら、洪水の時にでも根
こぎになつたるらしき棕櫚の樹の一尋餘りなを
架渡して橋として與つたに、我が先へ汝は後に
と兄弟争ひ闘いた末、兄は兄だけ力強く弟を
終に投げ伏せて我意の勝を得たに誇り高ぶり、
急ぎ其橋を渡りかけ半途に漸く到りし時、弟
は起き上りさま口惜きに力を籠めて橋を盪かせ
ば兄は忽ち水に落ち苦しみ踉いて洲に達せし
が、此時弟は既其橋を難なく渡り超えかかるを
見るより兄も其橋の端を一搖り揺り動せば、固
より丸木の橋なる故弟も堪らず水に落ち、僅
に長者の立つたところへ濡れ滴りて這ひ上
つた、爾時長者は歎息して、汝達には何と見
ゆる、今汝等が足踏みかけしより此洲は忽然前
と異なり、磧は黒く醜くなり砂は黄ばめる普
通の砂となれり、兄も見よ如何にと告げ知らす
るに二人は驚き眼を睜りて見れば全く父の言
葉に少しも違はぬ砂磧、あゝ如是もの取らむと
て可愛き弟を惱せしか尊き兄を溺らせしかと
兄弟共に慚び悲みて、弟の袂を兄は絞り兄の
衣裾を弟は絞りに互ひに恤はり慰めけるが、
彼橋をまた引き來りて洲の後面なる流に打ちか
け、既此洲には用なければ尙も彼方に遊び歩か
む、汝達先づこれを渡れと長者の言葉に兄弟

は顔を見合ひて先刻には似ず、兄上先に御渡り
なされ、弟も先に渡るがよいと譲合ひしが年順
なれば兄先づ渡る其時に、轉びやすきを氣遣ひ
て弟は端を揺がぬやう確と抑ゆる其次に、弟渡
れば兄もまた揺がぬやうに抑へやり、長者は苦
なく飛び越えて、三人ともに最長閑く徐に歩む
其中に兄が圖らず拾ひし石を弟が見れば美し
き蓮華の形をなせる石、弟が摘み上げたる砂な
兄が覗けば眼も眩く五金の光を放ちて居たる
に、兄弟とも／＼歡喜が樂み、互に得たる幸福
を互に深く讚歎し合ふ、爾時長者は懷中より眞
實の璧の蓮華を取り出し兄に與へて弟にも眞實
の砂金を袖より出して大切にせよと與へたとい
ふ、話して仕舞へば子供欺しのやうぢやが佛説
に虚言は無い子供欺しでは決してない、嘗みし
めて見よ味のある話ではないか、如何ぢや汝
等にも面白いが、老僧には大層面白いがと、輕
く云はれて深く浸む譬喩方便も御胸の中に有た
る眞實から。源太十兵衛二人とも顔見合せて
茫然たり。

其十

感應寺よりの歸り道、半分は死んだやうにな
つて十兵衛とどつく布子の袖組み合はせ、腕拱

るのつそり奴を、左様甘やかして胸の焼る連名
工事を何で爲るに當る筈のあらうぞ、甘いばかり
が立派の事が、弱いばかりが好い男兒か、妾の
蟲には受け取れませぬ、何なら妾が一ト走りの
つそり奴のところに行つて重々恐れ入りました
と、思ひ切らせて謝罪らせて兩手を突かせて來
ませうかと、女賢しき夫思ひ、源太は聞いて
冷笑ひ。何が汝に解るものか、我の爲ることな
好いとおもつて居てさへ呉るればそれで可い
よ。

其十二

色も香も無く一言に黙つて居よと遣り込めら
れて、聴かぬ氣のお吉顔ふり上げ、何か云ひ出
したげなりしが、自己よりは一倍きかぬ氣の夫
の制するものを、押返して何程云ふとも機嫌を
損する事こそはあれ口答への甲斐は露無きを經
験あつて知り居れば、連添ふものに心の奥を語
り明して相談かけざる夫を恨めしくばおもひな
がら、其處は伶俐の女の分別早く。何も妾が
遮つて女の癖に要らざる嘴を出すではなけれ
ど、つい氣にかゝる仕事の話故思はず様子の
聞きたくて、餘計な事も胸の狭いだけに饒舌つ
た譯と、自分が眞實籠めし言葉な態と極々輕う

爲て仕舞うて、何處までも夫の分別に従ふや
う表面を粧ふも幾許か夫の腹の底に在る煩悶
を殺いて遣りたさよりの眞實。源太もこれに角
張りかゝつた顔をやばらげ。何事も皆天運ぢ
や、此方の料簡さへ温順に和しく有つて居たな
ら又好い事の廻つて來ようと、此様おもつて見
れば、のつそりに半口與るも却つて好い心持、世
間は氣次第で忌々しくも面白くもなるもの故、
出来るだけは卑劣な鋪を根性に着けず、瀟灑と
世を綺麗に渡りさへすれば其で好いわ、と云ひ
さしてぐいと仰飲ぎ。後は芝居の噂やら弟子共
が行狀の噂、眞に罪無き雜話を下物に、酒も過
ぎぬほど心よく飲んで、下卑た體裁ではあれど、
とり膳陸まじく飯を喫了り、多分もう十兵衛が
來さうなものど何事もせず待ちかくるに、時は
空しく經過て障子の日晷一尺動けど尙見えす、
二尺も移れど尙見えす、是非先方より頭を低く
し身を縮めて此方へ相談に來り、何卒半分なり
と仕事を割與て下されと今日の上人様の御慈愛
深く御言葉を頼りに泣きついても頼みをかくべ
きに、何として如是は遅きや、思ひ斷めて望
を捨て、既早相談にも及ばずとて獨り我家に燵
り居るか、それともまた此方より行くを待つて
居る歟、若しも此方の行くを待つて居るといふ

ことならば、餘り増長した料簡なれど、まさか
に其様な高慢氣も出すまい、例ののつそりで悠
長に構へて居るだけの事ならむが、扱ひ氣の長
い男め迂濶にも程のあれと煙草ばかり徒らに
喫かし居て待つには短き日も随分長かりしに、
それさへ暮れて群鳥啼に歸る頃となれば流石
に心おもしろからず、漸く痼癢の起りくつて
耐へきれずなりし潮先、据られし晩食の膳に對
ふと其儘、云ひ譯ばかりに箸をつけて茶さへ緩
りとは飲まず。お吉、十兵衛めがところへ一寸
行て來る、行違ひになつて不在へ來ば待たして
置けと、云ふ言葉さへとげ／＼しく、怒りを含
んで立出かれば、氣にはかゝれど何とせん方
もなく、女房は送つて出したる後に、たゞ溜
息をするのみなり。

其十三

流つて開きかぬる兩戸に一トしほ源太は痼癢
の火の手を充らせつゝ力まかせにが／＼引
き退け。十兵衛家にかと云ひさまに突と這入れ
ば、聲色知つたるお浪早くもそれと悟つて、思
ある其人の敵に今は立ち居る十兵衛に連添へる
身の面を對すること辛く、女氣の纖弱くも胸を動
悸つかせながら。まあ親方様と唯一言我知らず

褒められたさが一杯に罪無く莞爾と笑ひながら指さし示す塔の模形、母は襦袢の袖を嚙み聲も得たてず泣き出せば、十兵衛涙に濡くばかりの圓の眼を刺き出し、瞞きもせでぐいと睨めしが、おゝ出来した出来した好く出来た、褒美を與らうハッハ、と咽び笑ひの聲高く屋の棟にまで響かせしが、其まゝ頭を天に對はし。嗚呼、弟とは辛いなあ。

其十一

格子開く響爽かなること常の如く。お吉、今歸つたと元氣よげに上り来る夫の聲を聞くより、心配を輪に吹き／＼吸て居し煙草管を邪見至極に抛り出して忙はしく立迎へ。大層遅かつたではないかと云ひつゝ背面へ廻つて羽織を脱せ、立ながら臆に手傳はせての袖疊み小早く室隅の方に其儘さし置き、火鉢の傍へ直また戻つて火急鐵瓶に松蟲の音を發させ、むづと大胡坐かき込み居る男の顔を一寸見しなに。日は暖かでも風が冷く、途中は随分寒ましたる、一瓶暖酒ましよかと痒いところへ能く肩かす手は口をきく其間にがたびしさせず膳ごしらへ、三輪漬は柚の香ゆかしく、大根卸で食はする鮭卵は無造作にして氣が利たり。

源太胸には苦慮あれども幾干か此に慰められて猪口把りさまに二三杯、後一杯を漫く飲んで汝も飲れと與ふれば、お吉一口、つけて置き、焼きかけの海苔疊み折つて、追付三子の來さうなものと魚屋の名を獨語しつ、猪口を返して酌せし後、上々吉と腹に思へば動かす舌も滑かに。それはさうと今日の首尾は、大丈夫此方のものとは極めて居ても知らせて下さらぬ中は無駄な苦勞を妾は爲ます、お上人様は何と仰せか、またのつそり奴は如何なつたか、左様眞面目顔でむつとりとして居られては心配でなりませぬと云はれて源太は高笑ひ。案じて貰ふ事はない、御慈悲の深い上人様は何の道我好漢にして下さるのよ、ハ、ハ、ハ、なあお吉、弟を可愛がれば好い兄ではないか、腹の饑つたものには自分が少しは辛くても飯を分けてやらねばならぬ場合もある、他の怖いことは一厘無いが、強いばかりが男兒では無いなあ、ハ、ハ、ハ、ぢつと堪忍して無理に弱くなるのも男兒だ、嗚呼立派な男兒だ、五重塔は名譽の工事、たゞ我一人で物の見事に千年壞れぬ名物を萬人の眼に残したいが、他の手も智慧も寸分交ぜず川越の源太が手腕だけで遺したいが、嗚呼癩癩を堪忍するのが、えゝ、男兒だ、男兒だ、成程好い男兒

だ、上人様に虚言は無い、折角望みをかけた工事を半分他に呉るのばつ／＼忌々しいけれど、嗚呼、辛いが、えゝ兄だ、ハ、ハ、ハ、お吉、我はのつそりに半口與つて二人で塔を建てようとおもふわ、何と立派な弱い男兒か、賞めて呉れ賞めて呉れ、汝にでも賞めて貰はなくては餘り張合ひの無い話だ、ハ、ハ、と嬉しさうな顔もせで意味の無い聲ばかりはすませて笑へば、お吉は夫の氣を量りかれ。上人様が何と仰やつたか知らぬが妾にはさつぱり分らず些も面白くない話、唐偏村の彼のつそりめに半口與るとは何いふ譯、日頃の氣性にも似合はない、與るものならば未練氣なしに悉皆與つて仕舞ふが好いし、固より此方で取る筈なれば要りもせぬ助太刀頼んで一人の首を二人で切る様な卑劣なことをするにも當らないではありませぬか、冷水で洗つたやうな清潔な腹を有つて居ると他にも云はれ自分でも常々云うて居た汝が、今日に限つて何といふ煮切ない分別、女の妾から見ても意地の足らない愚圖々々思案、賞めませぬ賞めませぬ、何して中々賞められませぬ、高が相手は此方の恩を受けて居るのつそり奴、一體ならば此方の仕事を先漕りする太い奴と高飛車に叱りつけて、ぐうの音も出させぬやうに爲れば成

まいか、頼む頼む、頼むのぢや、黙つて居るのは聴て呉れぬか、お浪さんも私の云ふことの了つたなら何卒口を副て聴て貰つては下さらぬかと、脆くも涙になりゐる女房にまで頼めば。お、親方様、えゝありがたうござりまする、何處に此様な御親切の相談かけて下さる方のまた有らうか、何故御禮をば云はれぬかと、左の袖は露時雨、涙に重くしながら夫の膝を右の手で拵り動しつ掻口説けど、先刻より無言の佛となりし十兵衛何とも猶言はず、再度三度かきどけど黙々として猶言はざりしが、やがて垂れたる首を擡げ。何も十兵衛それは厭でござりまする、と無愛想に放つ一言、吐胸をついて驚く女房。なんと一聲烈しく鋭く、頭首反らす一二寸、眼に角たててのつそりを慕向よりして蹴下す源太。

其十四

人情の花も失さず義理の幹も確然立てて、普通のものには出来るべき親切の相談を一方ならぬ實意の有ればこそ源太の懸けて呉れしに、如何に伐つて抛げ出したやうな性質が爲する返答なればとて、十兵衛厭でござりまするとは餘りなる挨拶、他の情愛の全てで了らぬ土人形でも

斯は云ふまじきを、さりとては恨めしいほど没義道な、口惜いほど無分別な、如何すれば其様に無茶なる夫の料簡と、お浪は呆れもし驚きもし、我身の急に絞木にかけて絞らるゝ如き心地のして、思はず知らず夫にすり寄り。それはまあ何といふこと、親方様が彼程に彼方此方のためを計つて、見るかげもない此方連、云はゞ一ト足に蹴落して御仕舞ひなさるゝことも爲さるは成る此方連に、大抵ではない御情をかけて下され、御自分一人で爲さりたい仕事をも、分與て遣らう半口乗せて呉れうと、身に浸みるほどありがたい御親切の御相談、しかも御招喚にでもなつてのことか、座蒲團さへあげることの成らぬ此様なところへ懇々御來臨になつての御話、それを無にして勿體ない、十兵衛厭でござりまするとは冥利の盡きた我儘勝手、親方様の御親切の分らぬ答は無からうに、胴態なも無遠慮なも大方程度であつたもの、これ此妾の今着て居るのも去年の冬の取り付きに、裕姿の寒げな毒がられてお吉様の縫直しで着よと下されたのは汝の眼には映らぬか、一方ならぬ御恩を受けて居ながら親方様の對岸へ廻るさへあるに、それを小癪なとも思知らずなとも仰やらず、何處までも弱いものを愛護うて下さる

御慈悲深い御分別にも頼り縋らいで、一概に厭ぢやとは假令は眞底から厭にせよ記憶のある人間の口から出せた言葉でござりまするか、親方様の手前お吉様の所思をも能く篤りと考へて見て下され、妾はもはや是から先何の顔さげて厚々間敷お吉様の御眼にかゝることの成るものぞ、親方様は御胸の廣うて、あゝ十兵衛夫婦は譯の分らぬ愚者なりや是非もないと其儘何とも思しめさせず唯打捨て下さるか知られど、世間は汝を何と云はう、恩知らずめ義理知らずめ人情解せぬ畜生め、彼奴は犬ぢや烏ぢやと萬人の指甲に弾かれものとなるは必定、大や烏と身をなして仕事を爲たと何の功名、慾心かわくな醜態するなと常々妾に識された自分の言葉に對しても恥かしうはおもはれぬか、何卒柔順に親方様の御異見について下さりませ、天に聳ゆる生雲塔は誰か二人で作つたと親方様と諸共肩を並べて世に稱はるれば汝の苦勞の甲斐も立ち親方様の有難い御芳志も知るゝ道理、妾も何の様に嬉しかるか喜ばしかるか、若し左様なれば不足といふは藥にしたくも無い筈なるに、汝は天魔に魅られて其をまだ、不足ぢやとおもはるゝのか、嗚呼情無い、妾が云はずと知れてゐる汝自身の身の程を、身の分際を忘れてか

云ひ出したる限り、挨拶さへどきまぎして急には二の句の出さる中、煤きし紙に針の孔、油染みなど多き行燈の小蔭に悄然と坐り込める十兵衛を見かけて源太にすつと通られ、周章て火鉢の前に請する機轉の遅鈍も正直ばかりで世態を知悉ぬ委なるべし。十兵衛は不束に一禮して重げに口を開き、明日の朝参上らうとおもつて居りましたといへば、じろりと其顔下眼に睨み、態と泰然たる源太。應、左様いふ其方の心算であつたか、此方は例の氣短故、今しがたまで待つて居たが何時になつて汝の來るか知れたことでは無いとして、出掛けて來ただけ馬鹿であつたか、ハ、ハ、ハ、然し十兵衛、汝は今日の上人様の彼お言葉な何と聞たか兩人で熟く、相談して來よと云はれた擧句に長者の二人の兄の御話、それで態々相談に來たが、汝も大抵分別は既定めて居るであらう、我も随分蟲持ちだが悟つて見れば彼譬諭の通り、失りあふのは互に詰らぬこと、まんざら敵同士でもないに身勝手ばかりは我も云はぬ、つまりは和熟した決定のところ、が欲しい故に我慾は十分折つて拙いて、思案を凝らして來たものの、尙汝の料簡も腹藏の無いところを聞きたく、其上にまた何様とも爲ようと、我も男兒なりや汚い謀計を腹

には持たぬ、眞實に如はおもつて來たわ、と言葉を少時とよめて十兵衛が顔を見るに俯伏たま、たゞ唯、唯と答ふるのみにて、亂髪の中に五六本の白髪が瞬く燈火の光を受けてちらりちらりと見ゆるばかり、お浪は既寢し猪之助が枕の方にいつ坐つて呼吸さへせぬやら此もまた静まりかへり居る淋しさ、却つて遠くに賣りあるく鍋焼饅頭の呼び聲の幽に外方より家の中に浸みこみ來るほどなりけり。源太はいよく氣を静め、語氣なだらかに説き出すは。まあ遠慮もなく外見もつくらす我の方から打明けようが、何と十兵衛斯しては呉れぬか、折角汝も望をかけ、天晴名譽の仕事をして持つたる腕の光をあらはし、慾徳では無い職人の本望を見事に遂げて、末代に十兵衛といふ男が意匠より細工ぶり此視て知れと残さうつもりであらうが、察しも付かう我とても其は同じこと、さらに有るべき普請では無し、取り外つては一生にまた出逢ふことの覺束ないなれば、源太は源太で我が意匠より細工ぶりを是非遺したいは、理窟を自分のためにつけて云へば我はまあ感應寺の出入り、汝は何の縁もないなり、我は先口、汝は後なり、我は頼まれて設計まで爲たに汝は頼まれはせず、他の口から云うたらばまた、我は受

負うても相應、汝が身柄では不相應と誰しも難をするであらう、だとして我が今理窟を味方にするでもない、世間を味方にするでもない、汝が手腕の有りながら不幸で居るといふも知つて居る、汝が平素薄命を口へこそ出され腹の底では何の位泣て居るといふも知つて居る、我を汝の身にしては堪忍の出來ぬほど悲い一生といふも知つて居る、夫故にこそ去年一昨年何にもならぬことではあるがまあ出來るだけの世話ば爲たつもり、然し恩に被せるとおもつて呉れるな、上人様だとして汝の清潔な腹の中を御洞察になつたればこそ汝の薄命を氣の毒とおもはれたればこそ今日のやうな御諭し、我も汝が慾かなんぞで對岸にまげる奴ならば、我の仕事に邪魔を入れる猪口才な死節野郎と一鋒に腦天打缺かすには置かぬが、つく／＼汝の身を察すれば寧ろ仕事も呉れたいやうな氣のするほど、というて我も慾は捨て斷れぬ、仕事は眞實何あつても爲たいわ、そこで十兵衛、聞ても貰ひにくく云うても退けにくい相談ちやがまあ如是ぢや、堪忍して承知して呉れ、五重塔は二人で建てう、我を主にして汝不足でもあらうが副になつて力を假してはくれまいか、不足ではあらうが、まあ厭でもあらうが、源太が頼む、聴ては呉れ

窮るをまた追つ掛け。汝を心に立てようか、乃至それでも不足か、と烈しく問はれて度を失ふ傍にて女房が氣もわくせき。親方様の御異見に何故まあ早く付かれぬと責むるが如く恨みわび、言葉そゝるに勸むれば十兵衛つひに絶體絶命下げたる頭を徐に上げ圓の眼を剥き出して。一ツの仕事をする二人ではよしや十兵衛心になつても副になつても、厭なりや何しても出来ませぬ、親方一人で御建なされ、私は馬鹿で終りまする、と皆まで云はせず源太は怒つて。これほど事を分けて云ふ私の親切を無にしても歟。唯、ありがたうはござりまするが、虚言は申せず、厭なりや出来ませぬ。汝よく云つた源太の言葉にどうでもつかぬ歟。是非ないこととござりまする。やあ覺えて居よ此のつそりめ、他の情の分らぬ奴、其様の事云へた義理か、よし汝に口は利かぬ、一生溝でもいちづつて暮せ、五重塔は氣の毒ながら汝に指もさませまい、源太一人で立派に建てる、成らば手柄に非ん點でも打て。

其十六

えい、ありがたうござります、滅法界に酔ひました、もう飲やせぬと、空辭誼は五月蠅ほど

仕ながら猪口もつ手を後へは退かぬが可笑き上戸の常態、清吉既馳走酒に十分酔たれど遠慮に三分の眞面目なをためて殊勝らしく坐り込み。親方の不在に斯様爛酔では済みませぬ、姉御と對酌では夕暮を躍るやうになつてもなりませんからな、アハ、無暗に嬉しくなつて來ました、もう行きませう、はめを外す親方の御眼玉だ、だが然し姉御、内の親方には眼玉を貰つても私は嬉しいとおもつて居ます、なにも姉御の前だからとて輕薄を云ふではありませぬが、眞實に内の親方は茶袋よりもありがたいとおもつて居ます、日外の凌雲院の仕事の時も鐵や慶を對にして詰らぬことから喧嘩を初め鐵が肩先へ大怪我をなした其後で鐵が親から泣き込まれ、嗚呼惡かつた氣の毒なことをしたと後悔しても此方も貧弱、何様してやるにも遣り様なく、困りきつて逃亡とまで思つたところを、駄つて親方から療治手當も爲てやつて下された上、かげら半分叱言らしいことを私に云はれず、たゞ物らしく、清や汝喧嘩は時のはずみで仕方ないが氣の毒とおもつたら謝罪つて置け、鐵が親の氣持も好からうし汝の寢覺も好といふものだと、心付けて下さつた其時は嗚呼何様して此様に仁慈深かると有難くて有難くて私は泣きまし

た、鐵に謝罪する譯は無いが親方の一言に堪忍して我も謝罪に行きましたが、それから異なもの何時となく鐵とは仲好になり今では何方にでも萬一したことの有れば骨も拾つて遣らうか貰はうかといふ位の交際になつたも、皆親方の御蔭、それに引變へ茶袋なんぞは無暗に叱言を云ふばかりで、やれ喧嘩をするな遊興をするなと下らぬ事の五月蠅く耳の傍で口説きます、ハハ、いややや語になつたものではありませぬ、え、茶袋とは母親の事です、なに酷くはありませぬ茶袋で澤山です、然も誰をひいた番茶の方です、アツハハ、ありがたうござります、もう行きませう、え、また一本、爛だから飲んで行けと仰るのですか、あゝありがたい、茶袋だと此方で一本といふところを反對にもう廢せと云ひますわ、あゝ好い心持になりました、歌ひたくなりましな、歌へるかとは情ない、松づくしなぞは彼女に賞められたほどでと罪の無いことを云へばお吉も笑ひを含んで。そろ／＼物氣は恐ろしいなどと調戲ひ居るところへ歸つて來たりし源太。おゝ丁度よい清吉居たか、お吉飲まうぞ、支度させい、清吉今夜は酔ひ潰れろ、嗣魔聲の松づくしでも聞てやる。や、親方に立聞して居られたな。

と泣聲になり、掻口説く女房の頭は低く垂れて、鬚にさゝれし縫針の孔が、衝へし一條の絲ゆらゆらと振ふにも、千々に碎くる心の態の知られていと可憫しきに、眼を隠さ居し十兵衛は、其時例の濁聲出し、喧しいわお浪、黙つて居よ。其の話を邪魔になる、親方様聞て下され。

其十五

思ひの中に激すればや、じたくと探ひ出す膝の頭を、緊手と寄せ合せて其上に、兩手突張り、身を固くして十兵衛は、情無い親方様、二人で爲うとは情無い、十兵衛に半分仕事を譲つて下されうとは御慈悲のやうで情無い、厭でござります、厭でござります、塔の建てたいは山々でも、既十兵衛は斷念で居ります、御上人様の御諭を聞てからの歸り道、すつぱり思ひあきらめました、身の程にも無い考を持つたが間違ひ、嗚呼私が馬鹿でござりました、のつそりは何處迄ものつそりで馬鹿にさへなつて居れば其で可い譯、溝板でもたゞいて一生を終りませう、親方様堪忍して下され、私が悪い、塔を建てうとは既申しませぬ、見ず知らずの他の人ではなし御恩になつた親方様の一人で立派に建てらるゝを餘所ながら祝て喜びませう、と元氣無

げに云ひ出づるを、走り氣の源太悠々と聴て居すづいとし身を進て。馬鹿を云へ十兵衛、餘り道理が分らな過ぎる、上人様の御諭は汝一人に聴けというて爲れたではない我が耳にも入れたわ、汝の腹でも聞たらは我が胸でも受取つた、汝一人に重石を背負つて左様沈まれて仕舞うては、源太が男になれるかやい、詰らぬ思案に身を退て、馬鹿にさへなつて居れば可いとは分別が掌實過ぎて至當とは云はれまいぞ、應左様ならは我が爲ると得たり賢で引受けては上人様にも恥かしく第一源太が折角磨いた俠氣も其處で廢つて仕舞ふし、汝は固より蛇蝎取らず、智慧の無いにも程のあるもの、そしては二人が何可からう、さあ其故に美しく二人で仕事を爲うといふに、少しは氣まづいところが有つてもそれはお互ひ、汝が不足な程は此方にも面白くないのあるは知れきつた事なれば双方忍耐仕交として忍耐の出来ぬ譯はない筈、何もわざ／＼骨を折つて汝が馬鹿になつて仕舞ひ、幾日の心配を煙と消し、天晴な手腕を寝せ殺しにするにも當らない、なう十兵衛、私の云ふのが腑に落ちたら思案を繼然と仕變へて呉れ、源太は無理は云はぬつもりだ、これさ何故黙つて居る、不足か不承知か、承知しては呉れないか、え、我

の料簡をまだ呑み込んで呉れないか、十兵衛、あんまり情無いではないか、何とか云うて呉れ、不承知か不承知か、え、情無い黙つて居られては解らない、私の云ふのが不道理か、それとも不足で腹立ててか、と義には強くて情には弱く、意地も立つれば親切も飽くまで徹す江戸ッ子腹の源太は柔和く問ひかくれば、聞居るお浪は嬉しさの骨身に浸みて。親方様、あゝ有り難うござりますと口には出さざれど舌よりも眞實な語る涙をも溢らす眼に返辭せぬ夫の方を氣遣ひて、見れば男は露一厘身動きなさず無言にて思案の頭重く低れ、ぼろり／＼と膝の上に散らす涙珠の零ちて聲あり。源太も今は無言となり少時ひとり考へしが。十兵衛汝はまだ解らぬか、それとも不足とおもふのか、成程折角望んだことを二人では口惜かる、然も源太を心に置いて副になるのは口惜かる、えゝ負けてやれ斯様して道らう、源太は副になつても可い汝の心に立てるほどに、さあ／＼清く承知して二人で爲うと合點せいと、己が望みは無理に折り、思ひきつてぞ云ひ放つ。とッ、とんでも無い親方様、假令十兵衛氣が狂へばとて何して其様は出来ませんものぞ、勿體ないと周章で云ふに。左様なら私の異見につくかと唯一言に返されて、其はと

反人め、謀反人も明智のやうな道理だと伯龍は講釋しましたが彼奴のやうな大惡無道、親方は何日のつそりの頭を鐵扇で打ちました、何日蘭丸にのつそりの領地を與ると云ひました、私は今に若も彼奴が親方の言葉に甘えて名を列べて塔を建てれば打捨つては置けませぬ、擲き殺して狗に呉れます、此様いふやうに擲き殺してと明德利の横面突然打ち飛ばせば破片は散つて血小鉢跳り出すやちん鏘然。馬鹿野郎めと親方に大喝されて其儘にぐづりと坐り沈靜く居るかと思へば散かりし還原海苔の上に額おしつけ既斯様なり。源太はこれに打笑ひ。愛嬌のある阿呆めに搔卷かけて遣れと云ひづゝ手酌にぐいと引かけて酒氣を吹くこと良久しく。怒つて歸つて來はしたものの、彼様では高が清吉同然、さて分別がまた要るわ。

其十八

源太が怒つて歸りし後、腕掛きて茫然たる夫の顔をさし覗きて吐息つくくお涙は數じ。親方は怒らする、仕事は畢竟手に入らず、夜の眼も合さず雛形まで製造へた幾日の骨折も苦勞も無益にした擧句の果に他の氣持を惡うして、思知らず人情無しと人の口端にかゝるの餘りと

いへば情無い、女の差出した事をいふと唯一口に云はるゝか知られど、正直律義も程のあるもの、親方様が彼程に云うて下さる、異見について一緒に仕たとて恥辱にはなるまいに、偏僻張つて何の詰らぬ意氣地立て、それを誰が感心なと褒ませう。親方様の御料簡につけば第一御恩ある親方の御心持もよい譯、またお前の名も上り苦勞骨折の甲斐も立つ譯、三方四方みな好いに何故其氣にはならぬか、少しもお前の料簡が私の腹には合點ぬ、能くまあ思案仕直して親方様の御異見について従うては下されぬか、お前が分別さへ更れば私が直にも親方様のところへ行き何にか彼にか謝罪云うて一生懸命精一杯打たれても擲かれても動くまい程覺悟をきめ、謝罪つて謝罪つて謝罪り貰いたたら御情深い親方様がまさにか何日まで怒つてばかりも居られまい、一時の料簡違ひは堪忍して下さる事もあらう、分別仕更て意地張らずに親方様の云はれた通り仕て見る氣にはならぬかと、夫思ひの一筋に口説くも女の道理なれど、十兵衛はなほ眼も動かさず。あゝもう云うてくれるな、あゝ、五重塔とも云うてくれるな、よしな事を思ひたつて成ほど思知らずとも云はれう人情なしとも云はれう、それも十兵衛の分別が足りいで出來したこ

と、今更何共是非が無い、然し汝の云ふやうに思案仕更るは何しても厭、十兵衛が仕事に手下は使はうが助言は頼むまい、人の仕事の手下になつて使はればせうが助言はすまい、桎梏も椽配りも我が爲る日には我の勝手、何處から何處まで一寸たりとも人の指揮は決して受けぬ、善いも悪いも一人で背負つて立つ、他の仕事に使はれうは唯正直の手間取りとなつて渡されただけの事するばかり、生意氣な差出口は夢にもすまい、自分が主でも無い癖に自己が葉色を際立てゝ異つた風を誇顏の寄生木は十兵衛の蟲が好かぬ、人の仕事に寄生木となるも厭なら我が仕事に寄生木を容るゝも蟲が嫌へば是非がない、和しい源太親方が義理人情を噛み砕いて慈々然惡て下さるは我にも解つてありがたいが、なまじい我の心を生して寄生木あしらひは情無い、十兵衛は馬鹿でものつそりでもよい、寄生木になつて榮えるは嫌ぢや、矮小な下草になつて枯れもせう、大樹を頼まば肥料にもならうが、たゞ寄生木になつて高く止まる奴等を口頃いくらも見ては卑い奴めと心中で蔑視して居たに今我が自然親方の情に甘えて其になるのは如何あつても小恥しうてなりきれぬわ、いつその事に親方の指揮のとほり、此を削れ彼を挽き割れと使は

其十七

清吉酔うては檢束なくなり、碎けた源太が談話ぶり捌けたお吉が接待ぶりに何時しか遠慮も打忘れ、撥されて辭ます受けては突と干し酒盡の敷重ぬるまゝに、平常から可愛らしき紅ら顔を一層澤々と、實の熟つた丹波王母珠ほど紅うして、罪も無き高笑ひやら、相手もなしの空示威、朋輩の誰の噂彼の噂、自己が假聲の何處其處で喝采を獲たる自慢、奪られぬ奪られるの云ひ争ひの未だ樓の獅額火鉢を盗り出さむとして朋友の仙の野郎が大失策を仕た話、五十間で地廻りを擲つた事など縁に引かれ圖に乗つて其から其へと饒舌り散らす中不圖のつそりの噂に火が飛べば、とろりとなりし眼を急に見張つて、ぐにやりとして居し肩を聳たて、冷たうなつた飲みかけの酒を異しく唇まげながら汲ひ干し。一體あんな馬鹿野郎を親方の可愛がるといふが私には頭から解りませぬ、仕事といへば馬鹿丁寧で拂ひは一向つきはせず、柱一本鳴居一ツで諷をいへば鉦を三度も竊ぐやうな緩慢な奴、何を一ツ頼んでも間に合つた例が無く、赤松の爐縁一ツに三日の手間を取るといふのは多分あいふ手合だらうと仙が笑つたも無理は有りませ

ぬ、それを親方が最良にしたので、一時は正直のところ、濟みませんが私も金も仙も六もあんまり親方の腹が大きすぎて其程でもないものを買ひ込み過ぎて居るでは無いか、念入りばかりで氣に入るなら我等も是から羽目板にも仕上げ鉦、のろり／＼と十分清めて基盤肌にも、創らうかと偏見を云つた事もありました、第一彼奴は交際知らずで女郎買一度一所にせず好園鶏鍋つゞき合つた事も無い唐偏朴、何時か大師へ一同が行く時も、まあ親方の身邊について居るものゝ一人ばかり仲間はずれにするでも無いこと私が親切に誘つてやつたに、我は貧乏で行かないと云つた切りの挨拶は、たんと愛想も義理も知らぬ過さるではありませんか、錢が無ければ女房の一枚着を曲げ込んでも交際は交際で立てるが朋友づく、それも解らない白痴の癖に段段親方の恩を被て、私や金と同じことに今では如何か一人立ち、然も懼りながら青渡垂らして辨當箱の持運び木片を擔いでひよろ／＼歸る俄鬼の頃から親方の手について居た私や仙とは逆つて奴は渡り者、次第を云へば私等より一倍深く親方を有難い忝ないと思つて居なけりやならぬ筈、親方、姉御、私は悲しくなつて來ました、私は若しもの事があれば親方や姉御のためと云

つ黒煙の煽りも食つても飛び込むぐらゐの料簡は持つて居るに、畜生ッ、あゝ人情無い野郎め、のつそりめ、彼奴は火の中へは恩を背負つても入りきるまい、確な根性ば有つて居まい、あゝ人情無い畜生めだと醉が陶らす云ひ出せし不平の中に潜り込んで、めそ／＼めそ／＼泣き出せばお吉は夫の顔を見て、例の癖が出て來たかと思つた風情は仕ながら自己の胸にものつそりの憎さがあれば幾分かば清が言葉を道理と聞く傾きもあるなるべし。源太は腹に戸締の無きほど愚魯ならざれば、猪口を擬しつけ高笑ひし。何か云ひ出した清吉、寢惚るな我の前だわ、泣いても初まらぬぞ、其手で女でも口説きやれ、随分ころりと來るであらう、汝が惚けた小蝶さまの御部屋では無い、アツハ、と戯言を云へば尙眞面目に、木樵珠ほどの涙を拂ふ其手をべたりと刺身皿の中につゝこみ、しやくり上げ獻、歎して泣き出し。あゝ情無い親方、私を酔漢あしらひば情無い、酔つては居ませぬ、小蝶なんぞは飲ませぬ、左様いへば、彼奴の面が何處かのつそりに似て居るやうで口惜くて情無い、のつそりば憎い奴、親方の對を張つて大それた五重塔を生意氣にも建てようなんとは憎い奴憎い奴、親方が和し過ぎるので増長した謀

其二十

十兵衛感應寺にいたりて朗圖上人に見え、涙ながらに辭退の旨云うて歸りし其日の味氣無さ、煙草呑むだけの氣も動かすに力無く、茫然としてつく／＼我が身の薄命浮世の渡りぐるしき事など思ひ廻せば思ひ廻すほど嬉しからず、時刻になりて食ふ飯の味が今更異れるではなけれど箸持手さへ躊躇ひ勝にて舌が美味うは受けとらぬに平常は六碗七碗を快う喫ひしも僅に一碗二碗で終へ、茶ばかり却つて多く飲むも心に不悅の有る人の免れ難き慣例なり。主人が浮かれば女房も何の罪なき頑要ざかりの猪まで自然と浮き立たず、淋しき貧家のいと／＼淋しく、希望も無ければ快樂も一點あらで日暮らし、暖味の無い夢に物寂た夜も明かしけるが、お浪曉天の鐘に眼覺めて、猪之と一所に寐たる床より密と出るも、朝風の寒いに火の無い中から起すまじ、も少し睡させて置かうとの慈しき親の心なるに、何も彼も知らいでたわい無く寐て居し平生とは違ひ、如何せしことやら忽ち飛び起き、桶杓一つで夜具の上跳ね廻り跳ね廻り。厭ぢやい、厭ぢやい、父様を打つちや厭ぢやいと、蘇のやうな手を眼にあてゝ何かは知らず

泣き出せば。えゝこれ猪之は何したものと吃驚しながら抱き止むるに抱かれながらも猶泣き止まず。誰も父様を打ちば仕ませぬ、夢でも見たか、それそこに父様はまだ寐て居らるゝと顔を押し向け知らずれば不思議さうに覗き込で漸く安心し仕てもまだ疑惑の暗れぬ様子。猪之や何にも有りはし無いわ、夢を見たのぢや、さあ寒いに風邪をひいてはなりませぬ、床に這入つて寐て居るがよいと、引き倒すやうにして横にならせ、掻卷かけて隙間無きやう上から押しつけ遣る母の顔を見ながら眼をばつちり。あゝ怖かつた、今他所の怖い人が。おゝおゝ、如何か仕ましたか。大きな、大きな鐵槌で、黙つて坐つて居る父様の、頭を打つて、幾度も打つて、頭が半分碎れたので坊は大變吃驚した。えゝ鶴龜鶴龜、厭なこと、延喜でも無いことを云ふと肩を震むる折も折、戸外を通る納豆賣りの、職へ聲に覺える奴が、ちエツ忌々しく草鞋が切れたと獨語きて行き過ぐるに女房ます／＼氣色を悪くし、臺所に出て釜の下を焚きつくれば、思ふ如く燃えざる薪も腹立しく、引窓の滑よく明かぬも今更のやうに焦れつたく、嗚呼何となく厭な日と思ふも心からぞとは知りながら猶氣になる事のみ氣にすればにや多けれど、また云

ひ出さば笑はれむと自分で呵つて平日よりは笑顔をふくり言葉にも活氣をもたせ、潑々として夫をあしらひ子をあしらへど根が慙とせし偽飾なれば却つて笑ひの尻聲が憂愁の響きを遺して去る光景の悲しげなところへ。十兵衛殿お宅かと押柄に大人びた口きながら這入り来る小坊主高慢にちよ／＼と上り込み。御用あるにつき直と來らるべしと前後無しの格口上。お浪も不審、十兵衛も分らぬことに思へども辭みもならねば、既感應寺の門くぐるさへ無益しくは考へつゝも何御用ぞと、行つて問へば、天地顛倒こりや何ぢや、夢が現か眞實か、圓道右に爲右衛門左に朗圖上人中央に坐したまうて、圓道言葉おごそかに。此度建立なるところの生雲塔の一切工事川越源太に任せられべき筈のところ方丈思しめし寄らるゝことあり格別の御詮議例外の御慈悲をもつて、十兵衛其方に確と御任せ相成る、辭退の儀は決して無用なり、早々ありがたく御受申せと云ひ渡さるゝそれさへあるに、上人鐵枯れたる御聲にて。これ十兵衛よ、思ふ存分仕遂げて見い、好う仕上らば嬉しぞよと、荷擔に餘る冥加の御言葉、のつそりハツと俯伏せしまゝ五體を濡と動がして。十兵衛めが生命ばさ、さ、さし出します、と云ひし限り咽塞が

るゝなら嬉しけれどなまじ情が却つて悲しい、
汝も定めて解らぬ奴と恨みもせうが堪忍して呉
れ、えゝ是非がない、解らぬところが十兵衛だ、
此處がのつそりだ、馬鹿だ、白痴漢だ、何と云
はれても仕方はないわ、あゝッ火も小くなつて
寒うなつた、もうゝ寝てでも仕舞はうよと、
聴けば一々道理の述懐、お涙もかへず言葉なく
無言となれば尙寒き一望を照せる行燈も灯花に
暗うなりにけり。

其十九

其夜は源太床に入りても中々眠らず、一番鶏
二番鶏を耳たしかに聞いて朝も平日よりは夙う
起き、含嗽手水に見ぬ夢を洗つて熱茶一杯に酒
の残り香を拂ふ折しも、むくゝと起き上つた
の清吉寢惚眼をこすりゝ怪訝顔してまごつく
に、お吉ともゝ喰飯して笑ひ、清吉昨夜は如
何したかと、颯れば急に危坐つて無茶苦茶に頭
を下げ。つい御馳走になり過ぎて何時か知らず
寢て仕舞ひました、姉御、昨夜私は何か悪いこ
とでも爲はしませぬかと心配相に尋ねるも可笑
く、まあ何でも好いわ、飯でも食つて仕事に行
きやれと和しく云はれてますゝ畏れ、恍然と
して腕を組み頻りに考へ込む風情、正直なるが

可愛らし。

清吉を出しやりたる後源太は尙も考へにひと
り沈みて、日頃の快活とした調子に似もやらず、
碌々お吉に口さへきかで思案に思案に凝らせし
が、あゝ解つたと獨り言するかと思へば懸然な
と溜息つき、えゝ抛ようかと云ふかとおもへば
何して呉れうと腹立つ様子を傍にてお吉の見る
辛き、問ひ慰めむと口を出せば黙つて居よとや
りこめられ、詮方なきに胸の中にて空しく心を
いたむるばかり、源太は其等に關ひもせず、夕
暮方まで考へ考へ、漸く思ひ定めやしけむ衝
と身を起して衣服をあらため、感應寺に行き、
上人に見えて昨夜の始終をば隠すことなく物
語りし末、一旦は私も餘り解らぬ十兵衛の答
に腹を立てしもの歸つてよくゝ考ふれば、
假令ば私一人して立派に塔は建つるにせよ、
それで折角御論しを受けた甲斐無く、源太が
また我慾にばかり強いやうで男兒らしうも無い
話、というて十兵衛は十兵衛の思はくを滅多に
捨はずまじき様子、彼も全く自己を押へて譲れ
ば、源太も自己を押へて彼に仕事をさせ下され
と譲らねばならぬ義理人情、いろゝ思味な考
え使つて漸く案じ出したことにも十兵衛が乗ら
ねば仕方なく、それを怒つても恨んでも是非の

無い譯、既此上には變つた分別も私には出ま
せぬ、唯願ふはお上人様、假令ば十兵衛一人に
仰せつけられますればと、私かならず何とも
思ひますまいほどに、十兵衛になり私になり
二人共々になり何様とも仰せつけられて下さり
ませ、御口づからの事なれば十兵衛も私も互
に争ふ心は捨て居りますほどに露さら故障
はござりませぬ、我等二人の相談には餘つて願
ひにまゐりましたと實意を面に現しつゝ願へば
上人はくゝ笑はれ。左様ぢやゝ左様ぢやゝ。
流石に汝も見上げた男ぢや、好いゝ、其心
掛一つで既う生雲塔見事に建てたより立派に
汝はなつて居る、十兵衛も先刻に来て同じ事を
云うて歸つたわ、彼も可愛い男ではないか、な
う源太、可愛がつて遣れ可愛がつて遣れ、と心
あり氣に云はるゝ言葉も源太早くも合點して。
えゝ、可愛がつて遣りますととも、いと清しげ
に答れば、上人満面微笑にして悦び玉ひつ。
好いわ好いわ、嗚呼、氣味のよい男兒ぢやなと
眞から底から褒美られて、勿體なさばありなが
ら源太おもほす頭をあげ。お蔭で男兒になれま
したか、と一語に無限の感慨を含めて喜ぶ男
泣き、既此時は十兵衛が仕事に助力せむ心の世
に美しくも湧きたるなるべし。

盡して、我の爲ばかり籌るでは無く云うたことを、無下に云ひ消されたが忌々しくて忌々しくて随分堪忍も仕かれたが、扱ひよく料簡を定めて上人様の御眼にかゝり、所存を申し上げて見れば、好い／＼と仰せられた唯の一言に雲霾は既無くなつて、清しい風が天空を吹いて居るやうな心持になつたは、昨日はまた上人様から慈々の御招で、行つて見たれば我を御賞美の御言葉数々の其上、いよく十兵衛に普請一切申しつけたが蔭になつて助けてやれ、皆汝の善根福種になるぢや、十兵衛が手には職人もあるまい、彼がいよく取掛る日には何人も備ふ其中に汝が手下の者も交らう、必ず猜忌邪曲など起さぬやうに其等には汝から能く云ひ含めて遣るがよいとの細い御諭し、何から何まで見透して御慈悲深い上人様のありがたさにつくづく我折つて歸つて来たが、十兵衛、過日の云ひ過ぎは堪忍して呉れ、斯様した私の心意氣が解つて呉れたら従来通り淨く睦しく交際つて貰はう、一切が斯様定つて見れば何と思つた彼と思つたば皆夢の中の物語議、後に遣して面倒こそあれ益無きこと、此不忍の池水にさらりと流して我も忘れう十兵衛汝も忘れて呉れ、木材の引合ひ、萬人足への渡りななど、まだ顔を賣込ん

で居ぬ汝には一寸仕憎からうが其等には私の顔も貸さうしも貸さう、丸丁、山六、遠州屋、好い間屋は皆馴染で無うては先方が此方か呑んでなれば萬事商賈いことの無いやう我を自由に出しに使へ、め組の頭の鋭二といふは短氣なば汝も知つて居るであらうが、骨は黒鐵性根玉は憚りながら火の玉だと平常云ふだけ、扱じつくり頼めばぐつと引受け一寸退かぬ頼母しい男、塔は何より地行が大事、空風火水の四ツを受けける地盤の固めを彼にさせれば、火の玉鋭二が根性だけでも不動が臺座の岩より堅く基礎確と据さすると諸肌ぬいで仕て呉るゝは必定、彼にも頼て紹介せう、既此様なつた曉には源太が望みは唯一ツ、天晴十兵衛が能く仕出來しきへすりや其で好いぢや、唯々塔さへ能く成れば其に越した嬉しいことは無い、苟且にも百年千年末世に残つて云はゞ我等の弟子筋の奴等が眼にも入るものに、へまがあつては悲しからうではないか、情無いではなからうか、源太十兵衛時代には此様な下らぬ建物に、泣たり笑つたり仕たさうなと云はれる日には、なほ十兵衛、二人が舍利も魂魄も粉灰にされて消し飛はさるるは、拙な細工で世に出ぬは恥も却つて少ないが遺したものか弟子め等に笑はる日には馬鹿親

父が息子に異見さるゝと同じく、親に意見を食ふ子より何段増して恥かしがる、生確刑より死んだ後鹽漬の上磔刑になるやうな目にあつてはならぬ、初めは我も是程に深くも思ひ寄らなだが汝が私の對面にたつた、其意氣張から、十兵衛に塔建てさせ見よ源太に劣りにすまいといふか、源太が建てゝ見せくれう何十兵衛に劣らうぞ、と腹の底には木を鑽つて出した火で觀る先の先、我意は何も無くなつた、唯だ好く成て呉れさへすれば汝も名譽我も悦び、今日は是だけ云ひたいばかり、嗚呼十兵衛其大きな眼を濡ませて聴て呉れたか嬉しいやいと、磨いて礪いで礪ぎ出して純粋江戸子粘り氣無し、一で無ければ六と出る、忿怒の裏の溫和さも飽まで強き源太が言葉に、身動きさへせて聞き居し十兵衛何も云はゞ疊に食ひつき。親方、堪忍して下され口がきけませぬ、十兵衛には口がきけませぬ、こゝ、此通り、あゝ有り難うござりますると思ふ魯しくもまた眞實に唯平伏して泣き居たり。

其三十二

言葉は無くても眞情は見ゆる十兵衛が舉動に源太は悦び、春風湖を渡つて霞日を蒸すともいふべき溫和の景色を面にあらばし、尙もやさし

りて言語絶え、岑閑とせし廣座敷に何をか語る
呼吸の響き幽にしてまた人の耳に徹しぬ。

其二十一

紅蓮白蓮の香のかしく衣袂に裾に薫り來て、
浮葉に露の主動き、立葉に風の軟吹ける面白の
夏の眺望は、赤蜻蛉菱藻を颯り初霜向うが岡の
樹梢を染めてより全然と無くなりたれど、赭色
になりて荷の莖ばかり情無う立てる間に世を忍
び氣の白鷺が徐々と歩む姿もをかし、紺青
色に暮れて行く天に漸く黯り出す星を背中に擦
つて飛ぶ雁の鳴き渡る音も趣味ある不惑の池の
景色か下物の外の下物にして、客に酒をば鑑の
子ほど飲ます蓬萊屋の裏二階に、氣持の好さ
さうな顔して欣然と人々待つ男一人、唐棧揃ひ
の淡泊づくりに住吉張の銀煙管おとなしきは職
人らしき俠氣の風の言語舉動に見えながら毫末
も下卑ぬ上品質、いづれ親方々と多くのものに
に立ちたる榊梁林とは豫てから知り居る馴染
のお傳といふ女か。嗚お待ち遠でござりませ
うと膝を置つゝ云ふ世辭を、待つ退屈さに捕へ
て。待遠で／＼堪りきれぬ・ほんとに人の氣も
知らないで何をして居るであらうと云へば、そ
れでもお化粧に手間の取れまするが無理は無い

咎と云ひさしてホ、と笑ふ慣れきつた返しのため
刀筋。アハ、それも道理ぢや、今に來たらば
能く見て呉れ、まあ恐らく此地邊に類は無らう、
といふものだ。阿呀、恐ろしい、何ぞ散財つて
下さります。而して親方、といふものは御師匠
さまですか。いゝや。姫さんですか。いゝや。
後家様。いゝや。お婆さんですか。馬鹿を云へ、
可愛想に。では赤ん坊。此奴め人をからかふな、
ハ、ハ、ハ。ホ、ホ、と下らなく笑ふところ
へ袂の外から、お傳さんと名を呼んで御連様と
知らすれば、立上つて唐紙明けにかゝりながら
一寸後向いて人の顔へ異に眼を呉れ無言で笑
ふに御嬢しかると訓戒つて焦らして底悦喜さす
る冗談なれど、源太は却つて心から可笑く思ふ
とも知らずにお傳はすいと明くればのろりと入
り来る客は色ある新造どころか香も艶もなき無
骨男、ぼう／＼頭髮のこり／＼腮髯、面は汚れ
て衣服は垢づき破れたる見るから厭氣のぞつと
たつ程な練子に、流石呆れて挨拶さへどきまざ
せし／＼急には出す、源太は笑を含みながら。
さあ十兵衛此處へ來て呉れ、關ふことは無い大
胡坐で樂に居て呉れと、おづ／＼し居るを無理
に坐に据ゑ、頓て膳部も具備りし後、さてあら
ためて飲み干したる酒盃とつて源太は撥し、沈

黙で居る十兵衛に對ひ。十兵衛、先刻に富松を
態々遣つて、此様な處に來て貰つたは、何でも
無い、實は仲直り仕て貰ひたくてだ、何か汝と
わつさり飲んで互ひの胸を和熱させ、過日の夜
の我が云うた彼云ひ過ぎも忘れて貰ひたいとお
もふからの事、聞て呉れ、斯様いふ譯だ、過日
の夜は實は我も餘り汝を解らぬ奴と一途に思つ
て腹も立つた、恥しいが肝癪も起し藥も沸し、
汝の頭を打碎いて遣りたいほどにまでも思つ
たが、然し幸福に源太の頭が悪玉にばかり乗取
られず、清吉めが家へ來て酔つた舉句に云ひち
らした無茶苦茶を、嗚呼料簡の小さい奴は詰らぬ
事を理窟らしく恥かしくも無く云ふものだと、
聞て居るさへ可笑くて堪らなさに不圖左様思つ
た其途端、其夜汝の家で陳べ立つて來た我が云
ひ草に氣が付いて見れば清吉が言葉と似たり寄
つたり、え、間違つた一時の腹立に捲き込まれ
たか残念、源太男が廢る、意地が立たぬ、上
人の蔑視も恐ろしい、十兵衛が何も彼も捨て辭
退するものを斜に取つて逆意地たてれば大間違
ひ、とは思つても餘り汝の解らぬ過ぎるが腹立
しく、四方八方何處から何處まで考へて、此處
か推せば其處に變積が出る、彼點を立てれば此
點に無理があると、まあ我の智慧分別ありたけ

てゝ呉れうと、氣性が違へば思はくも一二度終に三度めで無残至極に齟齬ひ、いと物靜に言葉な低めて。十兵衛殿と殿の字を急につけ出し、丁寧。要らぬといふ圖は仕舞ひましよ、汝一人で建つて塔定めて立派に出來やうが地震か風の有らう時壞るゝことは有るまいな、と輕くは云へど深く嘲ける語に十兵衛も快くからず。のつそりでも恥辱は知つて居りますと底力味ある楔打てば。中々見事な一言ぢや、忘れぬやうに記憶えて居よう、と釘をさしつゝ恐ろしく睥みて後は物云はず、頓て忽ち立ち上つて。嗚呼飛んでも無いことを忘れた、十兵衛殿寛りと遊んで居て呉れ、我は歸らねばならぬこと思ひ出したと風の如くに其座を去り、あれといふ間に推量勘定、幾金か遣して風と出つ、直其足で同じ町の某家が闊きたぐや否、厭だ厭だ、厭だ厭だ詰らぬ下らぬ馬鹿々々しい、愚圖々々せすと酒もて來い、蠟燭いちつて其が食へるか、鈍癡め、肴で酒が飲めるか、小兼春吉お房蝶子四の五の云はせず搦んで來い、驕の達者な若い衆頼も、我家へ行て清仙、鐵政誰でも彼でも直に遊びに遣さすやうと、いふ片手間にぐいぐい仰飲る間も無く入り來る女共に。今晚なぞとは手ぬるいぞと穩向から焦躁を吹つ掛けて。飲め、

酒は車懸り、猪口は巴と廻せ廻せ、お房外見をするな、奉婆大人ぶるな、えゝお蝶め其でも血が循環つて居るのか頭上に興花火載せて火をつけろぞ、さあ歌へ、ぢやんゝゝと行れ、小兼め氣持の好い聲を出す、あぐり踊るか、かぐりもつと跳れる、やあ清吉來たか鐵も來たか、何でも好い減茶々々に驕び、我に嬉しい事があるのだ、無禮講に遣れゝと、大將無法の元氣なれば後れて來たる仙も政も煙に巻かれて浮かれたち、天井抜けうが根太抜けうが抜けたら此方の御手のものゝ飛ぶやら舞ふやら唸るやら、潮來出島もしからしからず、甚旬に聞の聲を湧かし、かつばれに滑つて轉倒び、手品の太鼓を杯洗で鏝がたゝけに清吉はお房が傍に癡轉んで銀紋にお前其様に酔ばかり飲んでを稽古する馬鹿驕ぎの中で、一料筒あり顔の政が木遣を丸めたやうな聲しながら、北に峨々たる青山と異なことを吐き出す勝手三昧、やつちやもつちやの末は拳も下卑て乳房の服れた奴が臍の下に紙蒸張るほどになれば。さあもう此處は切り上げてと源太が一言、それから先は何處へやら。

其二十三

蒼鷺の飛ぶ時他所視はなさず、鶴なら鶴の一點張り、雲をも穿ち風にも逆つて目ざす獲物の咽喉、佛把提までは合點せざるものなり。十兵衛いゝゝ五重塔の工事するに定まつてより寐ても起きても其事三昧、朝の飯喫ふにも心の中では塔を噬み、夜の夢結ぶにも魂魄は九輪の頂を繞るほどなれば、況して仕事にかゝつては、妻あることも忘れ果て、子のあることも忘れ果て、昨日の我を念頭に浮べもせず、明日の我を想ひもなさず、唯一ト鎔りあげて木を伐るときは滿身の力を其に籠め、一枚の図をひく時には一心の誠を其に注ぎ、五尺の身體こそ大鳴き鶏歌ひ權兵衛が家に吉慶あれば木工右衛門が所に悲哀ある俗世に在りもすれ、精神は紛たる因縁に奪られて必死とばかり勤め勵めは、前の夜源太に面白からず思はれしことの氣にかからぬにはあらざれど、口頃ののつそり益々長じて、既何處にか風吹きたりし位に自然輕う取り倣し、頓ては頓と打ち忘れ、唯々仕事にのみ掛りしは愚癡なるだけ情に鈍くて、一條道より外へは駈けぬ老牛の癡に似たりけり。金箔銀箔瑠璃眞珠水精以上合せて五寶、丁子沈香白膠薰陸白檀以上合せて五香、其他五藥五穀まで備へて大土祖神植山彦神植山媛神あらゆる鎮護の神々を祭る地鎮の式もすみ、

き語氣圓暢に。斯様打解けて仕舞うた上は互に不妙ことも無く上人様の思召にも叶ひ我等の一分も皆立つといふもの、嗚呼何にせよ好い心持、十兵衛汝も過してくれ、我も十分今日こそ酔はうと云ひつゝ立つて遺棚に載せて置たる風呂敷包とりおろし、結び目といて二束にせし書類いだし、十兵衛が前に置き、我にあつては要なき此品の、一ツは面倒な材木の委細い當りを調べたのやら人足輕子其他種々の入目を幾帳かかゝつて漸く調べあげた積り書、又一ツは彼處を何して此處を斯してと工夫に工夫した下繪圖、腰屋根の地割だけのもあり、平地割だけなるもあり、初重の仕形だけのもあり、二手先または三手先、出組ばかりなるもあり、雲形波形唐草生類彫物のみ書きしもあり、何より彼より面倒なる眞柱から内法長押腰長押切目長押に半長押、縁板縁かつら龜腹柱高欄垂木樹肘木、貫やら角木の割合算法、墨繩の引きやう規尺の取り様、餘さず洩さず記せしもあり、中には我の爲しならで家に秘めたる先祖の遺品、外へは出せぬ繪圖もあり、京都やら奈良の堂塔を寫しとりたるものもあり、此等は悉皆汝に預くる、見たらば何かの足しにもなると、自己が精神を籠めたるものも惜氣もなしに譲りあたふる胸の廣

さの煩悩しきを解せぬといふにはあらざれど、のつそりもまた一ト氣性、他の申濟で我が口濡らすやうな事は好まず。親方まことに有り難うはござりまするが、御親切は頂戴いたも同然、これは其方に御納めなと、心は左程に無けれど言葉に膠の無き過ぎる返辭をすれば源太大きに悦ばず。此品なば汝は要らぬと云ふのかと惱を底に匿して問ふに、のつそり左様とは氣もつかねば。別段拜借いたしても、一句辻瀾り答ふる途端鋭き氣性の源太は堪らず、親切の上親切か盡して我が智慧思案を凝らせし繪圖まで與らむといふものを無下に返すか慮外なり、何程自己が手腕の好て他の好情を無にするか、そも／＼最初に汝めが我が對岸へ廻はりし時にも腹は立ちしがちつと堪へて争はず、普通大體のものならば我が庇蔭被たる身をもつて一つ仕事に手を入るか打擲いても飽かぬ奴と怒つて怒つて何にも爲すべきな、可愛きものにおもへばこそ一言半句の厭味も云はず、唯々自然の成行に任せ置きしを忘れし歟、上人様の御諭しを受けての後も分別に分別濁らしてわざ／＼出掛け、汝のために相談をかけてやりしも勝手な意地張り、大體ならぬものとても堪忍なるべきとこるならぬをよく／＼汝を最憎がればぞ踏み耐

へたるとも知らざる歟、汝が運の好きのみにて汝が手腕の好きのみにて汝が心の正直のみにて上人様より今度の工事命けられしと思ひ居る歟、此品をば與つて此源太が恩がましくても思ふと思ふか、乃至は既慢氣の萌して頭から何の詰らぬ者と人の繪圖をも易く思ふか、取らぬとあるに強はせじ、餘りといへば人情なき奴、あ有り難うござりますると喜び受けて此中の仕様を一所二所は用ひし上に彼箇所は御蔭で辛う行きましたと後で挨拶するほどの事はあつても當然なるに、開けて見もせず覗きもせず、知れ切つたと云はぬばかりに愛想も憎もなく要らぬとは汝十兵衛よくも撥れたの、此源太が仕た圖の中に汝の知つた者のみ有らうや、汝等が工風の輪の外に源太が跳り出すに有らうか、見るに足らぬと其方で思はば汝が手筋も知れてある、大方高の知れた塔建たぬ前から眼に映つて氣の毒ながら非難もある、既堪忍の緒も斷れたり、卑劣い返報は爲まいなれど源太が烈しい意趣返報は爲る時爲さで置くべき歟、酸くなるほどに今までは口もきいたが既きかぬ、一口思ひ捨つる上は口きくほどの未練も有たぬ、三年なりとも十年なりとも返報するに十分な事のあるまで物蔭から眼を光らして睨みつめ無言でちつと待つ

相撲にならぬ身分の差ひ、のつそり相手に争つては夜光の璧を小礫に擲付けるやうなものなれば腹は十分立たれても分別強く堪へて堪へて、誰にも彼にも鬱憤を洩さず知らさず居らるゝなるべし、えゝ親方は情無い、他の奴は兎も角、清吉だけには知らしても可さうなものな、親方と十兵衛では此方が損、我とのつそりなら損は無い、よし、十兵衛め、たゞ置かうやと逸りきつたる鼻先思案。姉後、知らぬ中は是非が無い、堪忍して下され、様子知つては憚りながら既叱られては居りますまい、此清吉が女郎買の供するばかりな能の野郎か野郎で無いか見て居て下され左様ならばと、後聲烈しく云ひ捨て格子戸がらり明つ放し、草履も穿かず後も見す風より疾く駆け去れば、お吉今さら氣遣はしく、つゞいて追掛け呼びとむる二タ聲三聲、四聲めには既影さへも見えずなつたり。

其二十五

材を鉋る斧の音、板削る鉋の音、孔を鑿るやら釘打つやら、丁々かち／＼響忙しく、木片は飛んで疾風に木の葉の飄へるが如く鋸屑舞つて晴天に雪の降る感應寺境内普請場の景況賑やかに、紺の腹掛頸筋に喰ひ込むやうな懸けて

小勝の切り上がつた股引いせに、つゝかけ草履の勇み姿、さう憐憫氣に働くもあり、汚れ手拭肩にして日當りの好き場所に踞蹠み、悠々然と鑿を研ぐ衣服の垢穢き釜もあり、道具搜しにまごつく小童、頻りに木を挽割口儲取り、人さまさまの骨折り氣遣ひ、汗かき息張る其中に、惣棟梁ののつそり十兵衛、皆の仕事を監督りかたがた、墨壺墨さし短尺もつて胸三寸にある切組を實物にする指圖命令、斯様裁れ彼様穿れ、此處を何様して何様やつて其處に是だけ勾配有たせよ、孕みが何寸間みが何分と口でも知らせ墨繩でも云はせ、面倒なるは板片に短尺の仕様を書いて示し、鵜の目鷹の目油斷無く必死となりて自ら勵み、今しも一人の若俊に彫物の畫を描き與らむと餘念も無しに居しところへ、野猪よりも尙疾く塵土を蹴立て、飛び來し清吉、忿怒の面火玉の如くし逆釣つたる眼を一段視開き、畜生、のつそり、くだばれと大喝すれば十兵衛驚き、振り向く途端に鷲向より岩も裂けよと打下すはざら／＼するまで研ぎ澄ませし鉋を縦に其柄にすげたる大工に取つての刀なれば、何かは堪らむ避くる間足らず左の耳を殺さ落さし肩先少し切り割かれしが、仕損じたりと又踏込んで打つた逃げつゝ抛け付くる鉋鉋才植墨壺

短尺、利器の無さに防ぐ術なく、身を鰓へして退く機に足を突込む道具箱、ぐざと踏み貫く五寸釘、思はず轉ぶを得たりやと笠にかゝつて清吉が振り冠つたる鉋の刃先に夕日の光の閃りと宿つて空に知られぬ電光の疾しや遁しや其時此時、背面の方に乳虎一聲、馬鹿めと呼ぶ男あつて二間丸太に論も無く兩脇腕く薙ぎ倒せば、倒れて益々怒る清吉、忽ち勃然と起きむとする襦袢把つて、やい我だわ、血迷ふな此馬鹿め、と何の苦も無く鉋もぎ取り捨てながら上からぬつと出す顔は、八方睨みの大眼一文字口怒り鼻、渦巻新れの兩鬢は不動を欺くばかりの相形、やあ火の玉の親分が、譯がある、打捨て置いて呉れ、と力を限り拂ひ除けむと跳き焦燥を、蟻蝶の如き拳固で鎖腰め。えゝ、じたばたすれば拳殺すぞ、馬鹿め。親分、情無い、此處を此處を放して呉れ。馬鹿め。えゝ分られえ、親分、彼奴を活しては置かれねえのだ。馬鹿野郎め、べそをかくのか、從順く仕なければ尙打つぞ。親分酷い。馬鹿め、やかましいわ、拳殺すぞ。あんまり分られえ、親分。馬鹿め。それ打つぞ。親分、馬鹿め。放して。馬鹿め。親分。馬鹿め。放して。馬鹿め。親。馬鹿め。放。馬鹿め。お。馬鹿め。醜態を見る、從順くなつ

地曳土取故障なく、さて龍伏は其月の生氣の方より右旋りに次第据ゑ行き、五星を祭り、鉦初めの太鼓には鍛冶の道なほ創められし天の目一箇の命、番匠の道開かれし手置帆負の命彦狭知の命より思兼の命、天兒屋の命、太玉の命、木の神といふ旬々、廻馳の神まで七神祭りて、其次の清鉦の禮も首尾よく済み、東方提頭頼吒持國天王、西方尼嚧叉廣目天王、南方毘留闍叉增長天、北方毘沙門多聞天王、四天にかたどる四方の柱千年萬年動くなど祈り定むる柱立式、天星色星多願の玉女三神、貪狼巨門等北斗の七星を祭りて願ふ、永久安護、順に柱の假轡を三ツづ、打つて脇司に打ち緊めさする十兵衛は、幾干の苦心も此處まで運べば垢穢顔にも光の出るほど喜悅に氣の勇み立ち、動きなき下津盤根の太柱と式にて唱ふる古歌さへも、何とはなしにつくく嬉しく、身を立つる世のためしごと其下の句を吟ずるにも莞爾しつゝ二度し、壇に向うて禮拜恭み、拍手の音清く響かし一切成就の祓を終る此處の光景には引きかへて、源太が家の物淋しさ、主人は男の心強く、思ひを外には現されど、お吉は何程さげたりとて流石女の胸小さく、出入るものに感應寺の塔の地曳の今日濟みたり柱立式昨日濟みしと聞く度ご

とに忌々敷、嫉妬の火炎衝き上がりて、汝十兵衛恩知らずめ、良人の心の廣いのをよい事にしつて付上り、うき／＼名を揚げ身を立るか、よし名の揚り身の立たば差詰禮にも來べき筈を知らぬ顔して鼻高々と其目々々を流りくさる欺、餘りに性質の好過きたる良人も良人なら面憎きのつそりめもまたのつそりめと、折にふれては八重縦横に痼癩の蟲跳ね廻り、自己が小鬚の後毛上げて、えゝ焦つたいと罪の無き髪を掻きむしり、一文貰ひに乞食が來ても早張り聲に酷く謝絶りなどしけるが、或日源太が不在のところへ、心易き隠者道益といふ饒舌坊主遊びに來りて四方八方の話の木、或人に連れられて過般蓬萊屋へまゐりましたが、お傳といふ女からきゝました一部始終、いやどうも此方の棟梁は違つたもの、えらいもの、男兒は左様あり度と感服いたしましたと御世辭半分何の氣なしに云ひ出でし詞を、手繰つて其夜の仔細をきけば、知らず居てさへ口惜しきに、知つては重々憎き十兵衛、お吉いよく腹を立ちぬ。

其二十四

清吉汝は尉甲斐無い、意氣も察しも無い男、何故私には打明けて過般の夜の始末をば今まで

話して呉れ無かつた、私に聞かして氣の毒と異に遠慮をしたものが、餘りといへば狹隘な根性、よしや仔細を聴たとしてまさか私が狼狽まばり動轉するやうなことはせぬに、女と輕しめて何事も知らせず置き隠し立て置く良人の判斷は兎も角も、汝等まで私を聲に盲目にして済して居るとは餘りな仕打。また親方の腹の中がみすみす知れて居ながらに平氣の平左で酒に浮かれ女郎買の供するばかりが男の能でもあるまいに長閑氣で斯して遊びに來るとは、清吉汝もおめでたいの、平生は不在でも飲ませるところだが今日は私は關へない、海苔一枚焼いて遣るも厭なら下らぬ世間咄の相手するも蟲が嫌ふ、飲みたくは勝手に臺所へ行つて呑口ひれりや、談話が仕たくは猫でも相手に爲るがよいと、何とも知らぬ清吉、道益が歸りし隙へ偶然行き合はせて散々にお吉が不機嫌を浴せかけられ、譯も了らず驚きあきれて、へどもとなしつゝ段々と様子を問へば自己も知らずに今の今まで居し事なれど、聞けば何程何あつても堪忍の成らぬのつそりの憎さ、生命と頼む我が親方に重々恩を被た身をもつて無遠慮過ぎた十兵衛めが處置振り、飽まで親切眞實の親方の顔踏みつけたる憎さも憎し何して呉れう、ゝ、親方と十兵衛とは

小提灯、闇夜も恐れず鋭次が家に。

其二十七

池の端の行き違ひより飄然と變りし源太が腹の底、初めは可愛う思ひしも今は小癩に障つてならぬ其十兵衛に、頭を下げ兩手をついて謝罪らねばならぬ思々しさ、さりとて打捨置かば清吉の亂暴も我が命令けて爲せし歟のやう疑がはれて何も知らぬ身に心地快からぬ濡衣被せられむ事の口惜しく、唯さへおもしろからぬ此頃餘計な魔がさして下らぬ心勞ひを馬鹿々々しき清吉めが暴動のために爲ねばならぬ苦々しさに益々心平穩ならねど、處辨く道の處辨かで濟むべき譯も無ければ、是も皆自然に湧きし事何とも是非なしと諦めて、厭々ながら十兵衛が家言聞れ、不慮の難をば訪ひ慰め、且は清吉を戒むること足らざりしを謝び、のつそり夫婦が様子を視るに十兵衛は例の無言三昧、お波は女の物やさしく、幸ひ傷も肩のは淺く、大した事ではござりませねば何卒お案じ下されまますな、態態御見舞下されては實に恐れ入りますと、如才なく口ばきけど言葉遣ひのあらたまりて自然と何處かに稜角あるは問はずと知れし胸の中、若しや源太が清吉に内々含めて爲せし歟と疑ひ

居るに定まつたり、えゝ業腹な、十兵衛も大方我を左様視て居るべし、疾時機の來よ此源太が返報仕様を見せて呉れむ、清吉ことき卑劣な野郎の爲た事に何似るべき歟、手斧で片耳殺さ取る如き下らぬ事を我が爲うや、我が腹立は木片の火のばつと燃え立ち直消ゆる堪へも意地も無きやうなる事では濟まさじ承知せじ、今日の變事は今日の變事我が癩癩が我が癩癩全で別なり關係なし、源太が爲うやば知るとき知れ悟らする時悟らせ呉れむ、と裏にいよく不平は懷けど露塵ほども外には出さず、義理の挨拶見事に濟ませて、直其足を感應寺に向け、上人に御眼通り願ひ、一應自己が隸屬の者の不埒を御謝罪し、我家に歸りて、卒これよりは鋭次に會ひ、其時清を押へ呉たる禮をも演べつ其時の景狀をも聞きつ、又一ツには散々清を罵り叱つて以後我家に出入り無用と云ひつけ呉れむと立出掛け、お吉の居るを不審して何處へと問へば。何方へか一寸行て來るとてお出になりましたと何食はぬ顔で婢の答へ、口禁されてなりとは知らねば。應左様歟、よし、我は火の玉の兄かところへ遊びに行たとお吉歸らば云うて置けと草履つかけ出合ひがしら、胡麻竹の杖とばし、と焼痕のある提灯片手、老の歩みの見る眼笑止にへ

其二十八

の字なりして此方へ來る婆。お、清の母親ではないか。あ、親方様でしたか。

あゝ好いところで御眼にかゝりましたが、何處へか御出掛けでござりまするかと忙し氣に老婆が問ふに、源太輕く會釋して。まあ能いわ、遠慮せずと此方へ這入りやれ、態々夜道を拾うて來たは何ぞ急の用か、聴いてあげよう立戻れば。ハイ、有り難うござります、御出掛けのところを濟みません、御免下さいまし、ハイハイと、云ひながら後に隨いて格子戸くゞり。寒かつたらうに能う出て來たの、生憎お吉も居ないで關ふことも出來ぬが、縮まつて居すつと前へ進て火にでもあたるがよい、と親切に云うて呉る、源太が言葉に愈々身を堅くして縮まり。お構ひ下さいましては恐れ入ります、ハイハイ、懷爐を入れて居りますれば是で恰好でござりますると、意氣地なく落かゝる水漬を洲の立つた半天の袖で拭きながら遙下つて入口近きところに蹲まり、何やら云ひ出したさうな素振り、源太早くも大方察して老婆の心の中嘸かしと氣の毒さ堪らず、餘計な事仕出して我に肝煎らせし清吉のお先走りを罵り懲らして當分出

たらう、野郎我が家へ来い、やい何様した、野郎、やあ此奴は死んだな、語らなく弱い奴だな、やあい、誰奴か来い、肝心の時は逃げ出して今頃十兵衛が周囲に蟻のやうに群つて何の役に立つ、馬鹿ども、此方には亡者が出来かゝつて居るのだ、鈍遅め、水でも汲んで来て打注けて遣れい、落ちた耳を拾つて居る奴があるものか、白痴め、汲んで来たか、關ふことは無い、一時に手桶の水不残面へ打付る、此様野郎は脆く生るものだ、それ占めた、清吉ッ、確乎しろ、意氣地の無え、どれ、此奴は我が背負つて行つて遣らう、十兵衛が肩の疵は浅からうな、む、よし、馬鹿ども左様なら。

其二十六

源太居るかと思入り来る鋭次を、お吉立ち上つて。お、親分さま、まあ、此方へと誘へば、すつと通つて火鉢の前に無遠慮の大胡坐かき、汲んで出さる、櫻湯を半分ばかり飲み干してお吉の顔を視、面色が悪いが何様かした歟、源太は何處ぞへ行つたの歟、定めし既聴たであらうが清吉めが詰らぬ事を仕出來しての、それ故一寸話があつて来たが、む、左様か、既十兵衛がところへ行つたと、ハ、ハ、敏捷い、

流石に源太だわ、私の思案より先に身體が疾に動いて居るなぞは頼母しい、なあにお吉心配することは無い十兵衛と御上人様に源太が謝罪をしてな、自分の示しが足らなかつたで手下の奴が飛だ心得違ひを仕ました、幾重にも勸辨して下されと三ツ四ツ頭を下ければ済んで仕舞ふ事だわ、案じ過しはいらぬもの、其でも先方が愚圖愚圖いへば正面に源太が暗唾を買つて破烈の始末をつけられ可いさ、薄々聞いた噂では十兵衛も耳朶の一ツや半分祈り奪られても悔まれぬ筈、随分清吉の輕率行爲も一寸をかしな可い洒落か知れぬ、ハ、ハ、然し惘然に我が拳闘を大分食つて咩々苦しがつて居るばかりか、十兵衛を殺した後は何様始末が着くと我に云はれて漸く悟つたかして、噫悪かつた逸り過ぎた、間違つた事をした親方に頭を下げさせるやうな事をした歟噫濟まないと自分の身體の痛いのより後悔にぼろ／＼涙を漚して居る歟、さ、何と可愛い奴では無い歟、喃お吉、源太は酷く清吉を叱つて叱つて十兵衛が所へ謝罪に行けとまで云ふか知らぬが其は表向の義理なりや是非は無いが、此處は汝の儲け役彼奴を何かなあそれ、よし、其處は源太を抱養するほどのお吉様に了らぬことは無い寸法か、アハ、ハ、ハ、源太が

居ないで話め要らぬ、どれ歸らうかい御馳走は預けて置かう、用があつたら何日でもお出とぼつぼつ歸つて歸り後、思へば済まぬことばかり、女の浅き心から分別も無く清吉に毒づきしが、逸りきつたる若き男の間違仕出して可憫や清吉は自己の世を狭め、わが身は大切の所天なまで憎うてならぬのつそりに謝罪するやうなり行きしは、時の拍子の出来事ながら畢竟は我が口より出し過失、兎せむ咎せむ何とすべきと火鉢の縁に凭する肘のついがつくりと滑るまで我を忘れて思案に思案凝らせしが思ひ定めて應左様ぢやと、立つて簞笥の大抽匣明けて麝香の氣と共に投げ出し取り出すたしなみの帯はそもそも此家へ来し嬉し恥かし恐ろしの其時締めし、え、それよ、懇話つて貰つて貰うたる博多に繩子に束縛も無し、三枚重ねに忍ばるゝ往時は罪の無い夢なり今は苦勞の山繭綯、ひらりと飛ばす飛八丈此頃好みし毛萬筋、千筋百筋氣は亂るとも夫おもふは唯一筋、唯一筋の唐七絲帯はお屋敷奉公せし叔母が記念と大切に秘藏たれど何か厭はむ手放すな、と何やら彼やら有たけ出して婢に包ませ夫の歸らぬ其甲と繭笥も手ばしこく小箱に纏めて、さて其品を無残や儉所の藏に籠らせ、幾干かの金懷中に、淺黄の頭巾

此の正月にも心付して呉れたお吉と氣がついて八五郎めんくらひ、素肌一枚どてらの裾廣がつて鼠色になりし犢鼻褌の見ゆるを急に押し隠しなどしつ。親分、なんの、あの、なんの姉御だと忙しく奥へ聲をかくるに、なんの盡して分る江戸ッ兒。應左様か、お吉來たの、能く來た、まあ其邊の塵埃の無さうなところへ坐つて呉れ。油蟲が這つて行くから用心しな、野郎ばかりの家は不潔のが粧飾だから仕方が無い、我も汝のやうな好い嗅でも持つたら清潔に爲ようよアハ、と笑へば、お吉も笑ひながら。左様したらまた不潔々と嚴整御叱めなさるか知れぬ、と互ひに二ツ三ツ冗話仕て後、お吉少しく改まり。清吉は眠て居りまするか、何様いふ様子か見ても遣りたし、心にかゝれば参りましたと云へば鏡次も打醒き。清は今がたすや／＼睡着いて起きさうにも無い容態ぢやが、疵というて別にあるでもなし、頭の顚骨を打破つた譯でもなければ、整骨醫師の先刻云ふには、烈く逆上したところを滾茶々々に撲たれたため一時は氣絶までも爲たれ保證大したことは無い山、見たくば一寸覗いて見よと先に立つて導く後につき行くお吉、三疊ばかりの部屋の中に一切夢で眠り居る清吉を見るに、顔も頭も膨れ上

りて此様に撲つてなしたる鏡次の腫さが恨めしさまで可憫なる態なれど、濟んだ事の是非も無く、座に戻つて鏡次に對ひ。我夫では必ず清吉が餘計な手出しに腹を立ち、御上人様や十兵衛への義理をかれて酷く叱るか出入りを禁むるか何とかするでござりませうが、元はといへば清吉が自分の意根で仕たではなし、畢竟は此方の事のため、筋の違つた腹立なついむら／＼としたのみなれば、妾は何も所天のするばかりを見て居る譯には行かす、殊更少し譯あつて妾が何とか爲てやられれば此胸の済まぬ仕儀もあり、それやこれを種々と按じた末に浮んだば一年か半年ほど清吉に此地退かすること、人の噂も遠のいて我夫の機嫌も治つたら取成し様は幾干も有り、まづそれまでは上方あたりに遊んで居るやう爲てやりたく、路用の金も調へて來ましたれば、少しなれども御預け申します、何卒宜敷云ひ含めて清吉めに與つて下さりませ、我夫は彼通り表裏の無い人、腹の底には如何思つても必ず辛く清吉に一旦あたるに違ひ無く、未練氣なしに叱りませうが、其時何と清吉が假令云うても取り上げぬは知れたこと、傍から妾が口を出しても義理は義理なりや仕様は無し、さりとて慥で做出來した咎でもないに男一人の寄

り付く島も無いやうにして知らぬ顔では如何しても妾が居られませぬ、彼が一人の母のことは彼さへ居れば我夫にも諒して扶助るに厭は云はれまじく、また厭といふやうな分らぬことを云ひも仕ますまいなれば掛念はなけれど、妾が今夜來たことやら蔭で清を働けることは、我夫へは當分祕密にして。俯つた。えらい、もう用は無からう、お歸りく、源太が大抵來るかも知れぬ、撞見しては拙からうと、愛想は無けれど眞實はある言葉にお吉嬉しく頼み置きて歸れば其後へ引きちがへて來る源太、果して清吉に、出入りを禁むる師弟の縁斷るとの云ひ渡し。鏡次は笑つて黙り、清吉は泣て詫びしが、其後源太の歸りし跡、清吉鏡次にまた泣かせられて、狗になつても我や姉御夫婦の門邊は去らぬと唸りける。

四五日過ぎて清吉は八五郎に送られ、箱根の温泉を志して江戸を出しが夫よりたどる東海道に到る。京が大坂か、夢はいつでも東都なるべし。

其三十三

十兵衛傷を負うて歸つたる翌朝、平生の如く夙く起き出づれば、お涙驚いて急にとゞめ。ま

入ならぬ由云ひに鏡次がところへ行かむとせし
矢先であれど、視れば我が子を除いては阿彌陀
様より他に親しい者も無かるべき屋敷き婆のあ
はれにて、我清吉を突き放さば、身は腰弱弓の
弦に斷られし心地して在るに甲斐なき生命な
がらへむに張りも無くても無くなり何程か悲み
歎いて多くもあらぬ餘生を愚癡の涙の時雨に暮
らし晴々とした氣持のする日も無くて終ること
ならむと、思ひ遣れば思ひ遣るだけ惘然さの増
し、烟草捻つてつい居るに、婆は少しくにじり
出で、夜分まありまして實に済みませんが、あ
の少しお願ひ申したい譯のござりまして、ハイ
ハイ、既御存知でもござりませうが彼清吉めが、
飛んだ事をいたしましたさうで、ハイ、鐵
五郎様から大概は聞きましたが、平常からして
氣の逸い奴で、直に打つのと騒ぎまして
其度ひや／＼させます、お蔭さまで一人前
にはなつて居りまして未だ兒童のやうな眞一
酷、悪いことや曲つたことは決して仕ませぬが
取り上せては分別の無くなる困つた奴で、ハイ
ハイ、惡氣は夢さへ無い奴でござります、ハイ
ハイ其は御存知で、ハイ有り難うござります、
何様いふ筋で喧嘩をいたしましたか知りませぬ
が大それた手筈なんぞを振り舞はしましたさう

で、左様きゝました時は私が手筈で祈られた
やうな心持がいたしました、め組の親分とやら
が幸ひ抱き留めて下されましたと、まあ責め
てもでござります、相手が死にでもしましたら
彼奴は下手人、わたくしは彼を亡くして生きて
居る瀬はござりませぬ、ハイ有り難うござりま
す、彼めが幼少ときは烈い蟲持て苦勞をさせら
れましたも大抵ではござりませぬ、漸く中山の
鬼子母神様の御利益で満足には育ちましたが、
癪りましたら七歳までに御庭の土を踏ませませ
うと申して置きながら遂何彼にかまけて御禮參
りもいたさせなかつた其御罰か丈夫にはなりま
したが彼道の無鐵砲、毎々お世話をかけます、
今日も今日とて鐵五郎様がこれ／＼と搔摘んで
話されました時の私の吃驚、刃物を準備まで
してと聞いた時には、えゝ又かと、思はずどつ
きり胸も裂けさうになりました、め組の親分様
とかが預かつて下されたとあれば安心のやうな
ものの、清めは怪我はいたさせぬかと聞けば
鐵様の曖昧な返辭、別條はない案じるなと云は
るゝだけに猶案ぜられ、其親分の家を尋ねれば、
其處へ汝が行つたが好いか行かぬが可いか我に
は分らぬ、兎も角も親方様のところへ伺つて見
ると云ひつ放しで歸つて仕舞はれ、猶々胸がし

くしく痛んで居ても起ても居られませれば留守
を隣家の衆に頼んでやうやく参りまして、
何うかめ組の親分とやらの家を教へて下さいま
し、ハイ／＼直にまありまするつもりで、何ん
な態して居りまするか、若しや却つて大怪我な
ど爲て居るのではござりますまいか、よいもの
ならば早う遂て安堵したうござりまするし、喧
嘩の模様も聞きたうござりまする、大丈夫曲つ
た事はよもやいたすまいと思つて居りまするが
若い者の事、ひよつと筋の違つた意趣でも爲
た譯なら、相手の十兵衛様に先此婆が一生命
で謝罪り、婆は假令如何されても惜くない老老、
生先の長い彼奴が人様に恨まれるやうなことの
無いやうに爲ねばなりませぬと、おろ／＼涙に
なつての話、始終を知られて一筋に我子をおも
ふ老の終言、此返答には源太こまりぬ。

其二十九

八五郎其處に居るか、誰か来たやうだ開けて
やれと云はれて、なんだ不思議な、女らしいぞ
と口の中で獨語ながら、誰だ女嫌ひの親分の
所へ今頃来るのは、さあ這入りなと、がらと戸
を引き退くれれば、八ッ様お世話と輕い挨拶、提
灯吹き滅して頭巾を脱ぎにかゝるば、此盆にも

れあれ危し又挽んだわ。誰か十兵衛招びに行け
といへども、天に瓦飛び板飛び地上に砂利の
舞ふ中を行かむといふものなく、漸く賞美の金
を飽かして掃除人の七藏爺を出しやりぬ。

其三十三

毫碓頭巾に首をつゝみて其上に雨を凌がむ準
備の竹の皮笠引被り、蒼子合羽に胴締して手ご
ろの杖持ち、恐怖ながら烈風強雨の中を駆け抜
けたる七藏爺、やうやく十兵衛が家にいたれ
ば、これはまた酷い事、屋根半分は既に疾に風
に奪られて見るさへ氣の毒な親子三人の有様、隅
の方にかたまり合せて天井より落ち来る點滴の
飛沫を古簷で僅に避け居る始末に、扱ものつそ
りは氣の働らきの無い男と呆れ果つ。これ棟
梁殿、此暴風雨に左様して居られては済むま
い、瓦が飛ぶ樹が折れる、戸外は全然戦争のや
うな騒ぎの中に、汝の建てられた彼塔は如何あ
らうと思はるゝ、丈は高し周囲に物は無し基礎
は狭し、何の方向から吹く風をも正面に受けて
揺れるわ揺れるわ、旗竿ほどに捲んでばかりき
ちと材の軋る音の物凄さ、今にも倒れるが壊れ
るかと圓道様も爲右衛門様も膽を冷したり縮ま
したりして氣が氣では無く心配して居らるゝ

に、一體ならば迎ひなど受けずとも此天變を知
らず顔では済まぬ汝が出て来ぬとは餘りな
大勇、汝の御蔭で險難な使え吩咐かり、思々し
い此痛を見て呉れ、笠は吹き捲はれる全濡には
なる、おまけに木片が飛んで来て額に打付りく
さつたぞ、いゝ面の皮とは我がこと、さあゝ
一緒に来て呉れ来て呉れ、爲右衛門様圓道様が
連れて来いとの御命令だわ、え、吃驚した、雨
戸が飛んで行て仕舞うたのか、これだもの、塔
が壊るものか、話する間にも既倒れたが折れ
たか知れぬ、愚圖々々せすと身支度せい、疾く
疾くと急り立つれば、傍から女房も心配氣に。
出て行かるゝなら途中が危険い、腐つても彼火
奪頭巾、あれを出しましよ冠つてお出なされ、
何が飛んで来るか知れたものではなし、外見よ
りは身が大切、何程檻樓でも仕方ない刺子半纏
も上に被ておいでなされ、と、戸棚がたゞ明
けにかゝるを、十兵衛不興氣の眼でちつと見な
がら、あゝ構うてくれずともよい、出ては行か
ぬわ、風が吹いたとて騒ぐには及ばぬ、七藏殿
御苦勞でござりましたが、塔は大丈夫倒れませ
ぬ、何の、此れ程の暴風雨で倒れたりするやう
な脆いものではござりませぬわ、十兵衛が出掛
けてまゐるにも及びませぬ、圓道様にも爲右衛

門様に左様云うて下され、大丈夫、大丈夫
でござります、と全然はらつて身動きもせず答
ふれば、七藏少し膨れ面して、まあ兎も角と我
と一緒に来て呉れ、来て見るがよい、彼の塔の
ゆさ／＼きち／＼と動くさまを、此處に居て日
に見ればこそ威張つて居られる、御開帳の儀
のやうに翼を振つて居るさまが見られたら何程
十兵衛殿寛大な氣性でもお氣の毒ながら御氣
がふはり／＼とならるゝであらう、強て強い
が役に立たぬ、さあさあ一緒に来たり来たり、
それまた吹くわ、嗚呼恐ろしい、中々止みさう
にも無い風の景色、圓道様も爲右衛門様も定め
し肝煎つて居らるゝぢやろ、さつさと頭巾な
り半纏なり着るとも被るともして出掛けさつし
やれと遣り返す。大丈夫でござります、御安
心なさつて御歸りと容赦る、其の安心がナチ手
易くは出来ぬわいと五月蟬云ふ。大丈夫でござ
りますと同じこといふ。末には七藏焦れこ
んで、何でも彼でも来いというたら来い、我の
言葉とおもうたら違ふぞ圓道様爲右衛門様の御
命令ぢやと語氣あらくなれば、十兵衛も少し勃
然として、我は圓道様爲右衛門様から互々塔達
ていと命令かりませぬ、街上人様は定め、風
が吹いたからとて十兵衛よべとは仰やりますま

あ滅相な、緩りと臥んでおいでなされおいでなされ、今日は取りわけ朝風の冷たいに破傷風にでもなつたら何となさる、どうか臥んで居て下され、お湯ももう直沸きませうほどに含嗽手水も其處で妾が爲せてあげませうと、破土竈にかけたる羽扇げ釜の下焚きつけながら氣を揉んで云へど、一向平氣の十兵衛笑つて。病人あしらひにされるまでの事はない、手拭だけを絞つて貰へば顔も一人で洗うたが好い氣持ちやと、簾の緩みし小鹽に自ら水を汲み取りて別段憐める容態も無く平日の如く振舞へば、お浪は呆れ且つ案ずるに、のっそり少しも頓着せず、朝食終つて立上り、突然衣物を脱ぎ捨て、股引腹掛着にかかると、飛んでも無い事、何處へ行かると、何程仕事の大事ぢやとて昨日の今日は疵口の合ひもすまいし痛みも去るまじ、泰然として居よ身體を使ふな仔細は無けれど治癒るまでは萬般要領第一と云はれた御醫者様の言葉さへもあるに、無理應じて感應寺に行かると、心が、強過ぎる、假令行つたとて働きはなるまじ、行かいても誰が咎めう、行かて濟まぬと思はるゝなら妾が一寸一ト走り、お上人様の御眼にかゝつて三日四日の養生を直々に願うて来ましよ、御慈悲深いお上人様の御承知なされぬ氣遣ひない、か

ならず大事にせい輕擧すなと仰やるは知れた事、さあ、此衣を着て家に引籠み、せめて疵口の悉皆密着くまで沈黙して居て下されと、只管とどめ宥め慰め、脱ぎしなとて復被すれば、餘計な世話な焼かすとし、腹掛着せい、これは要らぬと利く右の手にて撥れ退くる。まあ左様云はすと家に居てと、また打被する、撥れ退くる、男は意氣地女は情、言葉あらそひ果しなれば、流石にのっそり少し怒つて。譯の分らぬ女の分て邪魔立てするか忌々しい奴、よし／＼頼まぬ一人で着る、高の知れたる蚯蚓彫に一日なりとも仕事を休んで職人共の上に立てるか、汝は少も知るまいがの、此十兵衛はおろかしくて馬鹿と常々云はるゝ身故に、職人共が輕う見て、眼の前では我が指揮に従ひ働くやうなれど處では勝手に怠惰るやら譏るやら、散々に茶にして居て、表面こそ粧へ誰一人眞實仕事を好くせうといふ意氣組持つて仕てくるゝものは無いわ、え、情無い、如何かして虚飾で無しに骨を折つて貰ひたい、仕事に膏を乗せて貰ひたいと、諷せば頭は下げながら横向いて鼻で笑はれ、叱れば口に謝罪られて顔色に怒られ、つく／＼我折つて下手に出れば直と増長さるゝ口惜さ悲しき辛さ、毎日々々棟梁々々と大勢に立てられ

るは立派で可けれど腹の中では泣きたいやうな事ばかり、いつそ穴鑿りて引使はれたほうが苦しいないと思ふ位、其中で何か斯か此日まで運ばして來たに今日休んでは大事の蹟き、胸が痛いから早歸りします、頭痛がするで遅くなりましたと皆に怠惰られるは必定、其時自分が休んで居れば何と一言云ひ様なく、仕事か兩垂拍子になつて出来べきものも仕損ふ道理、萬が一にも仕損じてはお上人様源太親方に十兵衛の顔が向られうか、これ、生きても塔が成ればな此十兵衛は死んだ同然、死んでも業を仕遂げれば汝が夫は生て居るわい、二寸三寸の手斧傷に臥て居られるか居られぬ歟、破傷風が怖い歟仕事が出来ぬが怖しい歟、よしや片腕奪られたとて一切成就の曉までは駕籠に乗つても行かでは居ぬ、ましてや是しき蚯蚓彫に、と云ひつゝお浪が手中より奪ひとつたる腹掛に左の手を通さむとして、撃む顔、見るに女房の争へず、争ひまけて傷をいたはり、遂に半天股引まで着せて出しける心の中、何とも日には云ひがたかるべし。十兵衛もや來はせじと思ひ合ふたる職人共、ちりちりほらりと辰の刻頃より來て見て吃驚する途端、精出して呉るゝ嬉しそ、との一言を十兵衛から受けて皆冷汗をかきけるが、是より一

ッ残りし耳までも扯断らむばかりに猛風の、呼吸さへ爲さず吹きかくるに、思はず一足退きしが居せず奮つて立出でつ、襦を掴んで屹と睥めば、天は五月の闇より黒く、たゞ暗然たる風の音のみ宇宙に充て物騒がしく、さしも堅固の塔なれど虚空に高く聳えたればどう／＼どつと風の來る度ゆらめき動きて荒浪の上に揉まるゝ細無し小舟のあはや傾覆らむ風情、流石覺悟を極めたりしも又今更におもはれて一期の大事死生の岐路と八萬四千の身の毛を豎たせ牙咬定めて眼を睜り、いざ其時はと手にして來た六分鑿の柄忘るゝばかり引据んでぞ天命を靜かに待つとも知るや知らずや、風雨いとほす塔の周圍を幾度となく徘徊する怪しの男一人ありけり。

其三十五

去る日の暴風雨は我等生れてから以來第一の騷なりしと、常は何事に逢うても二十年前三十年前にありし例をひき出して古きを大袈裟に新しきを譯も無く云ひ消す氣質の老人さへ、眞底我折つて噂仕合へば、まして天變地異をおもしろづくで話語の種子にするやうの割輕な若い人は分別も無く、後腹の疾まねを幸ひ何處の火の見た壊れたり彼處の二階が吹き飛ばされたり

と他の憂ひ災難を我が茶受けとし、醜態を見よ馬鹿慾から芝居の金主して何某め痛い日に逢うたるなるべし、さても笑止彼小屋の潰れ方わよ、又日頃より小面憎かりし横町の生花の宗匠が二階、御神樂だけの事はありしも氣味よし、それよりは江戸で一二といはるゝ大寺の腕く倒れたも仔細こそあれ、實は檀徒から多分の寄附金集めながら役僧の私曲、受負師の手品、そこにはその有りし由、察するに本堂の彼太い杜も、櫓でがな有つたらうなどと様々の沙汰に及びけるが、いづれも感應寺生雲塔の釘一本ゆるまず板一枚割がれざりしには舌を巻きて讃歎し。いや彼塔を作つた十兵衛といふは何とえらいものではござらぬ歟、彼塔倒れたら生きては居ぬ覺悟であつたさうな、すでの事に鑿街んで十六間貫通しまに飛ぶところ、欄干を斯う踏み、風雨を睨んで彼程の大様の中に泰然と構へて居たといふが、其一念でも破壊るまい、風の神も大方血眼で睨まれば遠慮が出たであらう歟、甚五郎このかたの名人ちや眞の棟梁ちや、淺草のも芝のもそれ／＼損じのあつたに一寸一分至みもせず退りもせぬとは能う造つた事の。いやそれについて話のある、其十兵衛といふ男の親分がまた減法えらいもので、若しも些なり破壊れで

もしたら、同職の恥辱知合の面汚し汝はそれでも生きて居られうかと到底再度鐵槌も手斧も握る事の出來ぬほど引叱つて武士で云はば諸腹同様の日に逢はせうとぐる／＼大雨を浴びながら塔の周圍を巡つて居たさうな。いやいや、それは間違ひ、親分では無い商賣上臈ぢやさうなと我知り顔に語り傳へぬ。

暴風雨のために準備狂ひし落成式もいよく、済みし日、上人わざ／＼源太を呼び玉ひて十兵衛と共に塔に上られ、心あつて鐵僧に持たせられし御筆に墨汗したゝか含ませ。我此塔に鉤じて得させむ、十兵衛も見よ源太も見よと宣ひつゝ、江都の住人十兵衛之を造り川越源太郎之を成す、年月日とぞ筆太に記し了られ、満面に笑を湛へて振り顧り玉へば、兩人ともに言葉なく、たゞ平伏して拜謝みけるが、それより寶塔長へに天に聳えて、西より瞻れば或時飛檍素月を吐き、東より望めば勾欄夕に紅日を呑んで、百有餘年の今になるまで、謂は活きて遣りける。

い、其様な情無い事を云うては下さりますまい、若も御上人様までが、塔危いぞ十兵衛呼べと云はるゝやうにならば、十兵衛一期の大事、死ぬか生きるかの潮門に乘かゝる時、天命を覺悟して駆けつけませうなれど、御上人様が一言半句十兵衛の細工を御疑ひならぬ以上は何心配の事も無し、餘の人たちが何を云はれうと、紙を材にして仕事もせず魔術も手拔もして居ぬ十兵衛、天氣のよい日と同じことに雨の降る日も風の夜も樂々として居りまする、暴風雨が怖いものでも無ければ地震が怖うもござりませぬと圓道様にいうて下され、と愛想なく云ひ切るにぞ、七藏仕方なく風雨の中を駆け抜けて感應寺に歸りつき圓道爲右衛門に此よし云へば。さても其場に臨んでの智慧の無い奴め、何故其時に上人様が十兵衛來いと仰せぢやとは云はぬ、あれあれ彼搖るゝ態を見よ汝までがのつりに同化て寛意過ぎた料簡ぢや、是非は無い、も一度行つて上人様の御言葉ぢやと欺誑り、文句いはせず連れて來いと圓道に烈しく叱られ、忌々しさに獨語きつゝ七藏ふたゝび寺門を出でぬ。

其三十四

さあ十兵衛、今度は是非に來よ四の五のは云

はせぬ、上人様の御召ぢやぞと七藏愈いきりきつて門口から我鳴れば、十兵衛聞くより身を起して。なにあの、上人様の御召なるとか、七藏殿それは眞實でござりまするか、嗚呼なすけ無い、何程風の強ければとて頼みきつたる上人様までが此十兵衛の一心かけて建てたものを脆くも壊破るゝ歟のやうに思召されたか口惜しい、世界に我々慈悲の眼で見下さるゝ唯一つの神とも佛ともおもて居た上人様にも眞底からは、我が手腕たしかと思はれざりし歟、つくづく頼みしげ無き世間、もう十兵衛の生き甲斐無し、たまゝ當時に双なき尊き智識に知られしを是れ一生の面目とおもて空に悦びしも眞に果敢無き少時の夢、風の風のそよと吹けば丹誠凝らせし彼塔も倒れやせむと疑はるゝとは、えゝ腹の立つ、泣きたいやうな、それほど我は膽の無い奴か、恥をも知らぬ奴と見ゆる歟、自己が爲たる仕事に恥辱を受けてものめめ面押拭うて自己は生きて居るやうな男と我は見らるゝ歟、假令彼塔倒れた時生きて居ようか生きたからう歟、えゝ口惜い、腹の立つ、お涙、それほど我が涙しからうか、嗚呼々々生命も既にらぬ、我が身軀にも愛想の盡きた、此世の中から見放された十兵衛は、生きて居るだけ

恥辱をかく苦情を受ける、えゝいつその事塔も倒れ暴風雨も此上烈しくなれ、少しなりとも彼塔に揺じの出來て呉れよかし、空吹く風も地打つ雨も人間ほど我には情無かられば塔破壊されても倒されても悦びこそせめ恨ばせじ、板一枚の吹きめくられ釘一本の抜かるゝとも、味氣無き世に未練はもたねば物の見事に死んで退けて、十兵衛といふ愚魯漢は自己が業の粗漏より恥辱を受けても生命惜しさに生存へて居るやうな鄙劣な奴では無かりし歟、如是心を有つて居しかと責めては後にて弔はれむ、一度はどうせ捨つる身の捨處よし捨時よし、佛寺を汚すは恐れあれど我が建てしもの壊れしならば其場を一步立去り得べきや、諸佛菩薩も御許しあれ、生雲塔の頂上より直ちに飛んで身を捨てむ、投ぐる五尺の皮囊は潰れて醜かるべきも、きたなきものを盛つては居らず、あはれ男兒の醜粹清淨の血を流さむなれば慈然ともこそ照映あれと、おもひし事やら思はざりしや、十兵衛自身も半分知らで、夢路を何時の間にか辿り、七藏にさへ何處でか分れて、此處は、おゝ、それ、その塔なり。上りつめたる第五層の戸か押明けて今しもぬつと十兵衛半身あらはせば醜を投ぐるが如き暴風の、眼も明けさせず面を打ち、一

小兒の頃此村にまゐつた時村の小兒等と何か惡
 戯をして狂ひ廻つた途端彼觀音様に衝突つて
 怪我をしたことを其時痛かつただけ腹の何處か
 に記えて居つたと見え想ひ出して悟りました。
 ハ、ハ、當時新右衛門といふ仁は三十六七でこ
 ざりましたれば御話中に先代と申されました
 は多分其でござりませう、其配偶のおとわと申
 すは出家の身からは何でも無い筈でござります
 るが、私の叔母に當つて居りますもの故下總
 の千葉に参りました幸ひ、久しく音信を絶し
 て居りましたが今に存生ならば會うても見た
 し物故いたしましたならば墓参もいたしたいと
 存じて此上總の久留里を掛けて此村へ尋れ越し
 ました、と歩き告ぐるを、ハ、ア其様いふ
 事で尋ねらるゝか、それならば好いところへ來
 られたものだ、其おとわといふ先代新右衛門殿
 の後家様は今年六十六でまだ生きて居らるゝ、
 所天の歿くなられた年から中氣で寐たり起きた
 りはして居らるゝが、汝が行かれたら悦ばるゝ
 ことであらう、兎角いふ中彼處に見ゆる還葬が
 今の新右衛門殿の住居だ、あれあれ彼小流の
 傍に五六人兒童の遊んで居る中で一番色の白い
 綺麗なが今の新右衛門殿と先妻との中に出來た
 惣領だ。

其 二

お、彼兒でござりまするか、成程面貌も上品
 に伶俐げな好い兒でござります、其傍に立つて
 居る齡弱の女の兒は妹でもござりまする歟、
 彼兒も眼に立つ容貌好ですが、何にせよ甚い御
 苦勞をかけました、既彼兒に案内いたさせませ
 うほどに御送りには及びませぬ、まことにどう
 も有り難うござりました、と僧は懇懇に一禮す
 れば、無暗に褒めなさるゝな、随分意地ツ張りで
 困らせる兒だ、名は新三郎といひますが其は先
 祖代々彼家の惣領に生れたものが付ける幼名
 ださうで、傍の女の兒はお小夜といつて彼は新
 三郎の妹では無いが、彼二人が此村中の好い
 男好い女だによつて、誰も彼も娘を生まばお
 小夜のやうなを、男を生まば新三郎の様なを、
 欲しいと噂します、此爺の娘なんでも去年
 中腹ツ膨れの間は、口癖のやうにお小夜坊の様
 なを、お小夜坊の様なをと願に掛けて産みたが
 つて居ましたが、産れて見るとハヤ田地が悪い
 が種が悪いが、佛堂装の様に平手とした赤つ面
 の大い兒でござりました、ハ、ハ、ハ、それなら
 此處で御暇申します、早く叔母御へ御達ひなさ
 れませ、とがや／＼饒舌りし末、兒童等が方に

向ひて、カーイ、新坊ヤ、汝のところへ御
 客が來たア、と聲高く呼びかけしが、新三郎
 が此方を一寸見しのみにて返辭もせざるに、あ
 れ、あれだもの、困らせる兒だと獨語しつ、僧
 の類りに禮いふを聞捨てにして元來し方へと歸
 り行きぬ。
 流水に對ひて兒童等の小鰐或は泥鰌なんど
 を釣るかと見れば然にもあらず、頻りに岸邊を
 行き戻りして、勝つた／＼と手を拍ち悦び舞
 るもあれば、奮然と疾く駈行きて一葉茂れる女
 竹の蔭に走り着き其葉を急に採るもあり、旅
 僧は里の兒童等が餘念無く面白げに遊び居るを
 妨げなむも情無しと、渡りかけたる柴橋の此方
 の藪に停まり立ちて笠の中より覗き居るに、
 折しも微吹く風に連れて飛來し蝶の快近く狂
 ひ、晴に浮れて元氣よく啼く雲雀の聲の耳に入
 るなど何れ面白からぬは無く、拙め無みたる丹
 塗の小さき祠の傍の藪さへいと敬かに射し込
 む日の光線に透きて翠色ひとしほ麗はしきに、
 やゝ遠き丘の峽なる雪割花の白雲一朶地を罩む
 るかと疑はるゝまで眞白に咲ける、火の如き
 躑躅花の誰培養はれど眞紅に燃え立ちたる、見
 る眼も覺むる心地して皆天然の佳き意味ある長
 閑き光景の中に遊ぶ無心の兒等、幅濶き笹の葉

風流微塵藏

さ、舟

其 一

春や、過ぎて小山の間やら流れの傍やらに一抹の霞、簇の雪と床しく眺められし桃櫻の花は名残少くなりたれど、日頃は趣き無かりし雑樹も枝頭の嫩芽に姿色をつくる卯月の中旬、田面の活氣はこれから燃え、農家の勤めは漸く忙しくならむといふ天寒からす熱からぬ好時節、木工助木工左衛門源太源右衛門が輩ども女房まじり娘まじりに、傍觀からは遊興らしく、軟き小草を茵として鐵貫鐵を足元に抛り出し、青天井の下に大胡坐かき、晝飯を今終へしまゝ悠々と煙草など喫しながら四圍憚からぬ高難談に笑ひ興じて少時野外労働の疲れを休め居るところへ、黒の布子に同じ法衣同じ丸げけの細帯三重にして、掛絡を横様に引被きたるには似ず鼠の頭陀を正しく胸にし、小さき行李と風呂敷づつみと前後に肩から割つて掛けたる

遍參僧と見ゆるが、立止まりさま深く冠りたる網代笠に白木綿の手甲したる手にかけて打仰ぎつゝ一寸會釋し、此近邊は矢張たしか青柳村のござりませうが、在此村に苗字まで許されしたる青柳新右衛門といふな御存知でございませうならば御教へ下されませぬか、と問へば、權といふ點輕爺掌中で煙草の吸殻を轉がして居しが急に其火を今詰めた煙草に推しつけてスバリと一ト吸吸ひ、新右衛門は何の新右衛門をお尋ねかの、先代の新右衛門なら一昨々年既死にました、好い人であつたに氣の毒なことをしました、今の新右衛門ならまだ死にはしませぬが彼も天道様の御罰で死んだ同然になつて居ります、家も彼通り微祿しただ、一體お力といふ噂が好くない阿魔だからの、然し御出家さまが新右衛門の何かにあたる人では此様こと云つては悪かつた、新右衛門が家は、舊は此村の御寺様より莊嚴な家で教へるにも面倒は無かつたが今は其家を賣るといつて小さな家に引籠つて居るから教へるにも此處からでは、用水につい

て行け呼な傳つて行け上衛門、波に小流れに飛び越せなど大分面倒なことなればねばならぬ、そして一つ間違へば無益路を歩かせるやうになる、え、而倒だ、私が連れて行つて置せよう、ナニ氣の毒なことは無い、私は是でも好い舞を持つて居るので樂隱居々々と皆に羨まれる身だから自分でも樂隱居かと思つて居るだ、野面には毎日出て居るがナニ甲羅を乾しに龜の子の出て居ると同じことで背中か炙つて人の働くを見て居るばかりだから、マア御出家様樂隱居だの、眞實に樂隱居サ、ハア用は無いから送つて上げ味しよと、田舎人の聲料に聞はぬことまで物需つて、ヤレどつこいしよと立上り、歩みこそ遅けれ腰も危げ無く此方へ、と親切に案内するに、僧は大きに悦びて、御蔭で此知れ難い路を心安うたどります、實は愚僧も若齡な此青柳村へは一度まゐつた事のござりまするが、何を申すも丁度三十三年も前の事故跡の跡を吟味するやうな譯で一向覺えがござりませぬ、ただ青柳の家の立派であつたことは小兒心にも留まつたと見え臍氣ながら門の内に板の太木が立列んで居つた態などは今に存じて居ります、それと唯今物を御尋ね申したところを青柳村とは、直あの傍に石の馬頭觀音様のあつたので、

しき女も男も他の兒等を泥と見做さば玉なるべきが、類近々と併せたるは、並頭の速此流に忽然として開けるが如し。少時して彼年長のが、

一同よいかえ、さあ合圖だぞ、一、二、三、と云ひ切る聲の終る終らぬかの境に、一同手中の舟を放てば、舟は心無く悠然と流れに從ひ流ひ去るを、ばら／＼と立つたる兒童等岸傳ひに歩みながら、それ我がのが先になつた、それ汝がのを追ひ越したと餘念も無しに喧々譁する、其には關はず泛々たる舟の微風に颯られて後れ先だち去るを見て何とか思へる黄金色の小さき蝶の雌雄と見ゆるが、狂ひ／＼て一羽はお小夜が舟に停まれば、柳に知るほどの風の蝶の翅にあたるにさへ輕き小笹の舟なれば進むに足を幾干か早めて、そりやもう勝負といふ頃には三尺ばかり先だちて彼柴橋の下に着きぬ。勝つたるお小夜は物言はれど眼元に笑を含むるに、最も負けたる飯鬼大將はたゞさへ少し間の抜けたる面に生氣を失ひて頬膨らかし、も一度爲うと又の勝負を望むもなかく、二番の勝を得し新三郎がお小夜と手を取り交して、小夜ちゃんが一番勝ならば自己は二番の勝でも好いやと先刻には胸いと窄き舉動をなせしにも似ず寛濶なる言葉を出して笑を湛へ、共に悦び顔見合せしに

は目頃睦める交情も見えぬ。

其四

勝負も一回済みたれば好き機なりと旅僧は進みて、輕く新三郎が肩打敲き莞爾としながら、新坊汝が家を尋れて遠くの國から我は來たものだが家まで案内して、といへば、新三は又例の兒童らしからぬ顔して僧の面を覗ひしが、返事もなまず襟を向きて、お小夜の手をば取りしまゝ、彼方へ行つて遊ばうと二足三足歩み出すに、牽かれて同に歩みはすれど此方を見居たるお小夜は新三に、汝のところへ御客さまがと、さも案内せよと云はねばかりに囁きける。されど首を打振て、なめに父さん母さんのところへ來た御客には我は關はない、お祖母さんのところへ來た人ならば連れて行つて逃るけれどと答ふる言葉に耳に入れし僧は不思議に思ひながら、我は汝の御祖母さまを態々尋ねに來たもの故、連れて行て呉れても可からうと告ぐれば、こは不思議なり、新三郎は忽ち此方に馳せ還る其面には又例の滴るばかりの愛嬌を浮めて早くも法衣の袂を把しが、彼我ともに語を發せざる間に袂を突き放ちて、虚言、虚言、人を欺かすな、乞食坊主め、お祖母さんを我が好たと

言つたので其様な虚言を吐くのだらう、と兒童に似合はぬ狐疑の色をいと憎まげにあらはし云ふに、ます／＼異様な感觸のすれども、いよいよ面を和らげて、いや／＼虚言は私の嫌ひ、虚言など吐かぬ證據には汝の御祖母さんの名をおとわといふと知つて居るし、また御祖母さんに此私の權七郎といふ名を知らせて逢はすれば直曉ることゆゑ、遊びたいならそれで可いが、他を無暗に虚言つきなどと云うては濟まぬ、宜敷無い、好い兒は人を疑らぬもの、と語氣なだらかに説き聞かすれば、口惜さうなる顔せしが無言で僧の袂の端を把らへて、家の方へなるべし、切りに曳けば、僧は辭まず、曳かるまゝに歩み行くに、少時して屋の前後老いたる樹の眼に入るものも無く、馬屋も見えず庫も見えれど、木口ばかりは悪き代りに稍新しき家の前に到ると齊しく新三郎は僧を放ちて駈け入りぬ。藁葺なれどもノゾキといふ葺法にもあらねば一見するに福分も癒せたる屋根と共に薄かるべく思はるゝ上に、素人細工と覺しき外壁の處々潰落ちて、一面に見れたるいと可傷なる状態なり。待つ間ほど無く下男らしきが洗足湯を持て來ると共に露れたる女の、齡は三十七八なるべく、額に小皺のヤ、見ゆるに橘袷の襟の色

其三

を採り来りては小舟の形に作りなむと、器用は器用、不器用は不器用にだけ稚心を各々費し、言葉も無くて指頭に孰れも笹を拵り居しが、頼て一人の年長なる亂杭齒に南洋溜めたる大口厚唇、亂髮黒面の醜き兒が、さあ／＼私の舟は出来た、今度は小夜ちゃんに負けない、といふを初めに、我がも出来た、我がも出来たと昔秀才の身代りには永劫到底成るまじき首の兒童等八歳七歳らしきが三人まで云へば、後れじものゝと心急ぎて、我のも出来たと云ひながら彼新三郎は、笹の葉を折返して左と右とに半割きしな今入れ交へ作り了らむとする途端、思はず指の過ちて、笹の葉脆く裂け過ぎ、船は形なく破れたり。ヤアどうせ新ちゃんに負けるのだから仲間を一番脱けてもいゝ、小夜ちゃんのが出来たら直と勝負しよう、と惡まれ口を年長のが叩けば皆々それがよいと異口同音に答ふる折柄お小夜が舟は出来上りぬ、さあ勝負だ和一齊に一枚板の橋の上に列びて一時に放ち流さむとする時急に後より追ひ來し新三郎は泣き聲になり、少時待待つて呉れ、よゝ、小夜ちゃんも待つて呉れ、待つて呉れば我はいやだ、と頬に涙珠を傳はせながら語氣いと逼つて云ひ掛たり。

新三が泣いて待つてといへるを孰も耳に入れざるべき景色なりしが、お小夜といへるが立戻りて、姿は待つてから一同もお待ちと優しき聲して云ひ出づるに、お師匠さんのところの小夜ちゃんが待つてといふから待つて遣らう、と各自岸の小草の上に立ち居て少時息らふ間に新三郎は返りて例の藪より葉を採らむとするを、お小夜は情らしくも懷中よりして、先刻に自己が此次の勝負の料にと取り置ける幅瀾くして色美はしきを探り出して、さあ新ちゃん此を進よう、これでお製作へと渡し遣りぬ。傍の觀る眼にも嬉しく優しければ悦んで其笹の葉を取るかとするに然れ無くて、狐の魚を噉むごとくにお小夜の手より引奪ひて、憎くも人の厚意にて折角呉れしを地に投げつけしまゝ駈け出す舉動の如何にも怪しければ僧は意を注ぎて視るに、泣聲たてし先刻よりはひとしほ苦き顔付して眼尻を釣り上げ肩を緊手と閉ぢたる其相形は恰も大人の憤りしやうにて一點幼兒らしき體なし。不思議の幼兒もあるものかな、假令は如何なる性質のものにせよ、幼兒の面は何處やらに寛やかなるところあるが常なるに、此兒の如く慘く

凄まじげなるばかりにて毫木の和氣も無き面相するものかば未だ見し事あらずと猶よく覗ふに、兒童は流行兒童にて、雨雲去れば山さらに青く明るみ行くやうに、笹の葉舟を作り得て、さあ既出来た、誰にも負けぬ、と岸邊に向ひ駈けりつゝ呼べる時には、丹花の唇の端、秋水清き眼の中などに言葉も及ばぬ愛嬌動きて、過去諸菩薩の童形も之には超えじと思はるゝばかりなるにぞ、旅僧も自己が面上に泛る微笑に自己が胡想が消て我を忘れつ眺め居ける。

柴橋よりは上流なる一枚橋の上に列べる兒等は何れも靄然として彼亂髮の餓鬼大將も、次に控へし顔の色黄なる八歳ばかりの女の兒も、其また次と、また／＼次とに控へし、耳衆の極めて大きなが親の自慢の仕處なるべき兒、窄き額に肩すばらしく太く濃き兒も、各自手に手に舟を持ちて總眼兒の如く身を貼し合はせ、互ひに肩を揺り込まし合ひて合圖次第に首尾よく舟を水に放ちて馳せしめむと、争ひなれども無心の戯れ、無心なれども競争の、遊戯に勝たむ、我勝たむ、との意より身の動作かしこく、水近く腰を低め腕を垂るゝが中に、一番美なる新三郎はお小夜が肩に身を縋らすればお小夜は左りの手か伸ばして新三郎を擁抱く。此は優しく彼は清

去なりなかつた後は、やきもき思へど女の智慧も力も足らねば、葬式こそは寄つて掛つて済したれ内田の家は斷絶同様に今日が日まてなつて仕舞うた、一體汝は何の所存で其様な事仕出かして、そして今日まで如何して居た、定めし譯もある事であらうが靜にそれをまあ云うて、頓て死んで行く此妾の耳に入れて置くが宜からう、彼世へ行つて權左衛門殿に會うたら妾から云うて、汝の不孝の謝罪して置かうと、重き日より云ひつき、末の一句に旅僧が身をば思はず懐ひ出さしめぬ。

其六

退屈氣に行儀をつしみ坐り居し新三郎は言葉の間を見て取りて、襦の方より我が首を欹げながらに婆の面を愛嬌深き眼つきして覗き込み、お婆さま、新は小夜ちゃんのところへ遊びに行つても宜うござりますか、と小兒には似ず客の手前なかれたるらしく怖々に云へば、お可いとも可いとも、小夜ちゃんの家へなら遊びにいつでも惡うはないが能く大人しくして、小夜ちゃんのお母様に可い兒ちやと褒めらるゝやうにしたがよい、然し此年長者によく御辭誼をなしてそれから外へお出、あゝ、權七郎、汝の顔を

見ると直に往時の事ばかり胸に浮んで一同を紹介はせることも忘れて居たが、汝が知つた顔は無からう、此兒は妾の初孫で娘のお作が腹に出来た新三郎といふ頑兒、また此季の富之助といふ其處にごさるお力どのが腹に出来たもあるが今は傳に食はれて出て居るかして見えぬ、さあ御辭誼が済んだら新は早く外へおいで、外へおいで、それからの、權七郎、汝が十四五で此村へ遊びに五助に連れられて來た頃であつたが、それ家の背面の大きな椿の樹に汝が上つて小さな腰刀を振り廻しては、絞りに咲いた大輪の美しい花を無暗に切り落して遣つて笹竹を經に見事な花輪を幾個も作らせ、それを頭上に乗せて二人巫山戯あつたことを記えて居やうが、彼お作は、可愛さうに既亡くなつたわ、何の妾は生きて居たうも無いに存命へて、娘は今の新を生んだ年産後の肥立の惡さから引續いた病に僅三十五で奪られ、七年の法事か今年の二月え、ナニ去年の二月執り行つた、と彼女は汝とは三歳違ひであつたが、汝が家出した其翌年であつたか翌々年であつたか、何でも彼女が十九の時彼女には齡も一つ増りで丁度二十歳の若盛りの其新右衛門殿を嫁あつて銀に貰ひ受けた、三國一のと唯し立てた時には月

題の痕の眞青であつたが今散髪の胡麻鹽にならるゝまで妾は甚い世話を焼かれました、權七郎よう言うて呉れ、新右衛門殿、此人は妾の實家方の、聞ても知つて居られやうが妾には實の兄内田權左衛門が一人子、今は何と云ふか知らぬが權七郎といふたもので二十歳の時に家出したまゝ今日まで音信を聞かなかつたに、何年ぶりになる事やら、ナニもう二十五年になるとか、ア、夢のやうな、眞實に過ぎて見れば覺めて居ながら夢を見たやうな、剛新右衛門殿、二十五年ぶりです思議にも今日會ひました、といふに主人の新右衛門に、初對面の口訕田舎氣質をあらはして恭しく述べ、改めていと朴直に一禮すれば、權七郎もあらためて、往時は久留里の黒田伊勢守様の藩中内田權左衛門が權七郎、當時は黄蘗宗の一僧徒、僧籍は豊前小倉在濟時山金仙寺に屬し居りますれど一所に住せず西南北師を訪ひ來て學道なし自ら義松道人と鳴請にはあれど申すもの、と名乗りて禮を返すところへ、老妾が談話の中より何處かへすべり出で、見えざりしお力と、へらが酒肴を撥げて復に入り來りぬ、義松は疾くお力なば後援ならむと待しければ禮正しくして挨拶せむとする時老婆の、權七郎、其婦人ばのお

は若く、膝の抜けたる藍縷のべんべらものな度家の婦には似合しからず、襦袢に着なしたるさま嫌らしきが、えせ慇懃に手をつかへて、薄皺の寄つたやうな聲の癢に、惡油氣のつき居る如きべたべたとせし調子にて、さあま御挨拶は御後に願ひましょ、御洗足ななさつて下さりませと一寸會釋して、伶俐くさく言ひしが、下げたる首を上ぐる時、耳の後の髪は薄れて地の灰白く透きて見えぬ。

其五

剽輕爺の間は語り、に良からぬものと聞きたりしお力といへるは此女なるべし、と腹の中に思ひながら、僧は草鞋の紐とく、足を洗ひてにじり上れば、薄氣味の悪いほど世辭喋々しく、それ御煙草盆それ御茶と接待かしこく取りなされるに、無骨の此方は返辭にさへ少しく迷ふ心地して、唯生真面目に端坐し居けるが、彼方の室にて新三郎の何やら言ふ聲聞ゆると頓て隔ての破れ襖は内より開かれ、もや／＼として亂れたる白髪頭の半分見えぬ。さてはこれこそ我が叔母上なれ、悲しくも老い衰へ玉ひしものかなと思ふにも、往時の懐かしさを打交へて、我から獨り悄然として待つに、左の手をば主人なるべ

き四十二三と見ゆるに把られて、辛くも膝行出でたるは、見し面影の痕も無く、白霜置ける眉のみの剃刀あてぬ顔に伸びたる、眼は勝夜の星より公微に物見ること疎氣なる、齒無き口元の皺深き、額額の穴のやうに凹み陥没れる、凄じ氣なる老婆にて、これを其昔我母の常々羨み噂されし立つて地に曳く想髪を有たれし人とは誰も見じ、我がいと稚き時の眼にも色眞白に唇眞紅に、光り清しき眼のばつちりとせしと記えし人とは自らさへも思ひ難し、恒河の水の流れ、ごとくに歲月去つて人の衰ふるを事新しく驚くには足られど、變れば變り給ふものと言葉も絶えて首を俛れ、や／＼少時して唯僅に、叔母さま眞に久闊でござりました。往時の重七郎でござりまする、御變事も無く御健勝なで御嬉しう存じまする、と云ひし限り又平伏して頭も更に擡げ得れば、彼方は老人の尙さる腕き涙に聲も頭へつゝ、おゝ權七郎、おゝ、權七郎、宜くまあ尋ねて来て呉れたの、汝も無事で重疊ぢや、あゝ今まで此妾獨り生て居て今日汝に會はうとは思ひかけなかつたが、何處に如何して今までは居た、聞きたい事も澤山ある、話したい事も澤山あるが、何から云はうか尋ねようか胸が充塞になつて姿には云へぬが、まあ二

十歳の時突然に何の譯でか汝の家出した其節の一家の心配、前の日までは暫いでこそ居たれ何の異つた様子も無かつたに由蘊するとして連れて出た五助にはぐれたまゝ、飄然と見えなくなつたといふ、若しや氣でも狂つて溜泊うたか、或神にでも隠されたかと權左衛門は五助を叱つて怒るゝ、五助は水垢離を取つて神野寺の僧堂利明王様に若様の御踪跡が知れませぬならば五助が生命を御取り下されと祈る、妾も青柳の家に來てこそ居たれ若しや其方に見えはせぬかと兄のところから云うて來たに吃驚して所天にも談合し、八方に手を分けて探れるだけばと探つて見ても一向雲か攫むやうで手がかりさへも無く、姉のおかよが縁づいて居る眞里谷の家では嫁を貰ふといふ支度の最中ではあつたけれど其の嫁取さへ一寸横へ退けて心配する、何にせよ姉と妾は他家の者、内田の家は汝ばかりのところを、汝に出奔されては内田の家のみしや養子をするにせよ血系の絶ゆるといふ譯ゆゑ、眼の色を變へて兄様は御老儀の弱りになるも忘れ果てて御奔走、妾も姉も實家の大事に氣が氣では無く夜も碌々に寢はせなんだが、如何しても知れぬに定つて其を病の根に兄様は床へ就かれた限り枕上らず、養子の沙汰もするに及ばぬ中御卒

門下上足の鐵蓋法師といへるが我を先師の遺命により極めて厳しく罵り懲らされしより、再度勇氣を起し立て、諸國の耆徳尊宿を訪ひて山陰北陸より信濃尾勢、大和紀伊、南海山陽經歴り行きて、豊前小倉の金仙寺に隠れ居たまふ海音禪師といへるに圖らず値偶せしが前世の縁でもあることが十有餘年付き従ひ、今に計しは得ざれども、叔母さま御悦び下され、假令一山一寺は得ざれども、證明印可も得べき望みは無きにあらぬ身の上でござりまする。

其八

裁松が語の中に解らぬことは無きにあられど大都合點行きし老婆のおとわは二十五年の其往時より剃髮染衣の身となりながらいまだに一寺の住職ともならぬと聞て少しく悦ばざる歟、苦笑ひして甥の面を打守りつゝ、情りとやらが開けたらば汝の身體から金色の光でも出るかは知らぬが其様に齡を空に費うて欲しがるほどの尊いものか、此邊の小兒が江戸へ出ても十年の年期三年の禮奉公、十三年たてばまあ一廉の壯夫になり濟まして親同胞を喜ばするが、汝は若衆の頃からして學問も能く達たさうに人の噂をするを聞ては行末の頼むしい者見上げたも

のと兄様は固より妾達まで望を懸けて悦んで居つたには似ず、其後は默兒になつたか其態で自分ば満足して居るらしい様子印可證明とかいふものを取りもせぬとは、印可が鳥の名やら證明が南無阿彌陀佛といふことやら一向丁らぬ妾にも、僧侶の方の學問が悉皆成終らぬことと察せらるゝ、二十年餘も經ながら紫色も被す緋の衣も着けぬとは何も了らぬ此妾には有難味が無き過ぎる、極樂へ往生するだけのことならば佛の御名さへ唱ふる時は淨土へまゐるといふことを御説教で聞て妾さへ知つて居るに、左様可憎しく修行に月日のかゝる理由もあるまじ、汝は其様な默兒でも無かつたに如何でも家出の時からして癡愚になつたと思はれる、家出の仔細も問ふなら問ひますまいが我家の斷絶を聞て涙をこぼすほどの根性が眞實有るならば、假令下らぬ迷ひから親を棄て縁者を捨て出家になつたにせよ既今頃は僧都とか僧正とかになつて妾等の眼にも尊く拜まれるやうにある筈なただの通參とは何事ぞ。それに引きかへ汝も知つて居る同じ藩中遠藤兵太夫殿の妹御の彼おしづ殿は、汝が家出すると聞ても無く眞里谷の家へ姉のおかよが是非にと望んで、甚之丞というて居たソレ汝も知つて居よう彼顔色の眞赤な男

らしい好い男の嫁に貰ひ受けたが、頗て初産の世話も焼かずに姉は死ぬ、益齋殿も引續いて卒くなられる、跡は甚之丞が益齋の名を繼いで二十九で御手醫師を勤めらるゝといふ始末、おしづ殿の骨折も大抵では無かつたに、可哀想に六年ばかり前、今のお小夜を腹に持つて居る中所天に先だたれて、眞里谷の家に唯の一人となつて仕舞はれた。加之男兒でさへ身の振りかたに迷ふが多かつた御一新の騒ぎの頃の事であつたが、感心なといふは其處ぢや、お小夜を産み落して身二つになると直に、面倒の多い久留里を引拂ひ、あるたけの東西を此村の土地に代へて、妾を頼りに此村に移り、極々質素に、五人使の婢僕も二人にするといふやうな生活の仕方、ただただお小夜を護り育て、好い舞取る末の幸福を心的に日を送つて今も居らるゝ。性の合ふのかおしづ殿の伶俐なので偏屈の此婆も交際うて行かゝるゝのか知らぬが、おしづ殿所天の存生中から何時となく青柳久留里と隔て居ながら年に三度四度は往來するほど懇意になつた、また一つには益齋殿の亡くならるゝが否や舊の御家老の榎原大藏といはるゝ仁が丁度後妻を捜して居らるゝ矢先に誓と色香の猶残れるお前殿を見られたより無理にもとの横戀慕を、情無くす

力どのというて新右衛門殿の召使ではあるが、
姫殿のために大分なられ、また妾にも新三郎
にも朝夕甚い親切に世話して呉れるる頼母し
い大切な人ぢや、と蹊蹌ありげに云ふ言葉の中
には針の光りあるを、認めしなるべし、お力
が眼は數次主人の面に通ひて何やら訴ふるある
がごとし。されども僧は知らぬに待遇し、口敷
云はず改めて挨拶すれば、お力も亦禮を返して
嫌味の世笑ひを翻しかけつゝ酒盃を僧の前へ
と無造慮にも主人を勧めて出さしめぬ。

其七

手に猪頭を提げて口に淨戒を誦せる往時の
快活漢、被髮調衣で大道に千鳥足踏める婆須
密尊者などはさもあらばあれ、自家の家風は自
家保つゝ我は飽まで毘尼を嚴淨にして、小機小
根のものとは笑ひ笑へ 針の頭ほどなりとも婆
羅夷偷蘭遮の罪を犯すこと無からむと、裁松法
師は主人の心篤くお力の口賢く勸むる酒を一
滴も受けず、只管辭して叔母にのみ話頭を向く
れば新右衛門もお力も少し手持無沙汰に何とな
く羨みて見えしが、お力は堪へずや座を外すを
老婆は心よげに見やりぬ。僧は少しく席をすま
めて、叔母様、何も彼も皆夢と仰りました御

言葉通り眞實に浮世は夢のやうではござります
るが、夢ばかりとは申されませず、消えて無く
ならないものも随分無いではござりませぬ、二
十歳の時に家出いたせし不孝の罪も未だに消え
ず、若氣の過失とは申せ不覺悟なりし恥も消え
ず、父上の御臨終をも外にしたる云はうやうな
き我等が罪は中々抗うても去り難い大々罪、何
とも申し上げやうはござりませぬ、想ひ出せば
二十五年の往時は氣でも狂うてか狐にでも憑れ
てか淺麻しい念慮に踏み堪への無い身を動かし
て前後の分別も無く能くもまあ勿體無い父上の
御厚恩、叔母上達の御愛情、五助爺等が迷惑を
輕う見て家出をして退けたことよ、其時は此權
七が修羅であつたか鬼畜生であつたか、と毎々
懺悔いたしまする、今度も久留里で我家の菩提
寺はたしか高雲寺と覺えて居つたを幸ひに、家
は尋れても分られば其寺へ行て、出家後我家の
何様なりしかを住持に問はむと、先づ母様の御
墓の前に參つて見れば其に列んで立つたるは父
上の御墓と知つた時の其悲しさ、思ひ設けぬで
は無かつたれど又今更の様に口惜しく、僧の身
にては恥かしいことながら讀經申し上げる事も
出来ぬまで胸が塞がつて唯た泣いて倒れまし
た、それより住持に委細をたゞせば内田の家は

疾くに斷絶、青柳眞里谷の兩家より付け届け
のあれば無縁にはいたしませぬがとの返辭に、
我が不所存より先祖代々連綿たりし家を絶やす
までになりしか、嗚呼申し譯の無いこととつく
づく後悔いたしましたが、家出の譯は御尋ね下
さりまするな、御話し申すまでも無く、いづれ
若い頃のひよろつた料簡で爲た下らぬことと
御思ひ捨て下さいまし、久留里を出ましてから
は勝手に自分で鬻を截り、當時京都妙心寺に
鬼頑鐵と云はれたる臨濟の大禪師の居られしな
一目敵に尋ね行きまして、散々に棒を食ひ喝を
浴びせられましたも、一寸なりと動き退くこと
をすまじと、齒を咬んで禪堂に岩と坐る晨の寒
さ、眼を輝かして經藏に心を勵ます夜半の慍さ
をも忍びくして苦學せしかば、時には禪師もい
と優し殊勝なりとて褒め玉へど、根器の下劣
たる故にや二年三年四年五年、七八九年と經れ
ども猶學びの道の底を抜けりと印可を玉ふに至
らば、よくく我を宿業のあはれ拙きものか
なと我身ながらに疎むにつけ、此世で修行成
就せば何時の世をまた待つべきと、自ら濱り
自ら瀝み、餘念も無しに勉めしが、其中禪師は
遷化され、頼む渡りの舟の破れし心地のすれば
茫然となり、一夏を空しく費したるに、頑鐵

のを巧妙に寫し、これが十一十二の兒の筆かと怪まるゝまで能く書くに、此兒は商人とするより畫師にしたが相應であらうと云はぬものも無い位、加之松原屋の店には、宗之助夫婦、友雪が本妻、其が大の黒屋の宗之助が兒長太郎おせい榮二郎といふ三人、番頭若者丁稚下女乳母針妙と都合三十の條も頭數のあることゆゑ、主人夫婦も召使どももそれ／＼の氣兼ね玉之助のためにする、中には無分別に彼に媚び此に諂つてつべこべといふもある、おのづから母が榮二郎をかばうて玉之助を叱れば、主人が隠居への義理に玉之助を護うて我子を叱る、殊に困る、番頭は面倒がる、丁稚共は諍るといふやうな工合になれば、酸いも甘いも吞み込んだ友雪は、いつそ玉之助を畫工とか僧とかいふ變りものに仕立て、仕舞うて、全然本家とは別物にして退けたが好からうと、自己が手元に今では引取り、當人の好むまゝ畫を描かうと遊ばうと勝手次第にして置きますが、一時小生に對うて、此兒か貰うて大人にしては下さるまいか、少けれど生長までの費用として千圓は一時に添ふるつもりとの談話に、成程それも親御の慈悲なるべし、恩情を見込みての御頼みは嬉しけれど、未だ分別も無いものを僧にするのは不同意千萬、就て

は愚僧が生家の模様これ／＼かく／＼相成り居りて叔母が其他確乎なる縁者の存在いたし居るやうならば、生長の後何様なるゝかは知られど内田の姓な名乗らせなし、それにて御不足なしとならば愚僧が心及ぶだけ好かれと育て申すべしと堅い約束を結びました。

其十

さて其約束を結びましたについては小生の腹は如是でござりまする、玉之助も既十二でござりますれば親の傍には置かずとも好く、また四方八方面倒ある中に置きたくも無いが友雪の望みなれば、詣り金仙寺に引取つて、一年なり二年なり讀み書きと畫の道とを我が手元で教へ、知らぬ人ばかりの中へ放つても大丈夫といふ歸になつた頃東京へ修行に出して天晴の名家に就かせ、鄭まれ甲斐のあるほどに育て上げて友雪の囑をも無にせぬ旁ら内田の家の祭りなも絶やさぬやうに爲うとの所思、然し幸ひ我が家出の後何とかなりて内田の家の絶えずにもあらは出家の身として兒を預かるは要らぬこと、好んで餘計の煩ひを來たすでも無ければ、折角見込まれたることなれど册絶いうて仕舞はむと思ひ居りましたが、丁度常陸眞壁の大雲寺下總千葉

の安養院此二つの寺に年來訪うて見たかり、大徳の玉ふを尋ねし奈手に、久留里へまはりて内田の家の何様なりし陳を探れば榮して悲しくも斷絶し居るより、青柳村の叔母様叔父様にも御目にかゝりて此話を申し上げ、御承知あらば眞甲谷の叔母様にも御話し申して、事に確實くするが好ければ、兩家より一應博多の友雪が許へ此方終者勿論異議無く、東海西海幾百里隔りし中にて縁とは云へ不思議にも玉之助殿に内田が家中興いたし貰ふ以上は今度屹度力に相成り及ぶだけは後見いたすべしといふ一札を入れれば、猶又出家の小生金銭等を手にするも厭なれば、千兩の地面を内田玉之助名義で此邊に購つて叔母上なり叔父上なりに玉之助分別一人前となるまで預かり置かれ、當人東京に修行する間萬般御取賄ひ下さるやう確手／＼願ひ申し定めて、其後小生は金仙寺に立歸り、博多へも参り友雪に委細を知らせし上彼の囑の通り玉之助を引取らうと考へ居りました。然し何うて見れば事々案に相違して、叔父上は亡なられ、叔母様も御元氣では居らるれど起居も御不自由な始末、おさく殿かば實は心的にいたして居りましたに既先だたれて仕舞ふ、今の新當門殿には今日初めて御面晤致したばかり、眞甲谷の

るは安けれど、板で鎧靴玉を受けるよりは、森で受けたがよい道理といふのとて、和しう接待うて置いて、突然に此村へ来て仕舞はれた後、前に云うた通り女ながら儼然一家の主人となり、多くの小作人を使ひ使うて、馴れぬことにも脱りなく、青柳の家は仔細あつて如是衰へたれ、眞里谷の家は一年増しに太つて来たて、此村一體ばかりか近村近郷感心なるものぢや凄じい人ぢや女にしては恐ろしいと褒めて噂をせぬものは無い。

其九

眞里谷の嫁のおしづの噂を老婆の仕出す其途端に僧は少しく面の色を變へしが、頓ては泰然として靜に譚を聞き終り、眞里谷の家に歸かれたる叔母様には、早くより好無かりし我身のいろいろ御世話を受けたれば、御懐かしさもひとしほにて今度も久留里で父上の御墓の塵を拂ひし後には先づ第一に尋ねましたが、益齋殿も叔母上も思ひも奇らぬ甚之丞殿も皆既石となられたには桑門の我さへ今さらに覺えて打驚きましたに、今の御話を伺へば、交情の好かつた甚之丞殿の歿くなられたは口惜く痛ましけれど、おしづ殿とやらの男優りなで家の確然と幸

つてあるは我が絶やした内田の家に引較べては其家の幸福、益齋を襲がれた甚之丞殿も草葉の蔭で嘸顧母しう悦んで居らるゝてござりませう。仰やる通り悟りが開けたにせよ手柄にもならぬことに可憐年月を費して紫衣も着めとは家斷絶にさへ關はぬ發心ほどにも無い愚問答、實に御恥かしいことながら、それには些少考へも別にござりますれば墨染の木綿衣を纏うて居るが口惜しうもござりませぬ。然し叔母様御さし下されませ。内田の家に後のあればよし、若し我がために斷絶などして居らば家名は是非に取り立てうと存じて心構へもいたしてござりまする。四恩の内にもいと重き父母の恩を等閑に見て済さう所存は無く、勿論無過る引例なれど釋迦文佛も晩年には父母の許諾の無きものの僧となるをば可とは爲玉はざりしほど故、あらためて茲に申し上げますが内田の家の絶えたるは必ず興しまする覺悟、實は其末も極々の心の底には持つて御尋ね申しましたが、申し上げ難い事ではあれど御宅の狀も思つたとは違つたに心算も仕變へねばならずと申後れて居りました。御承知のやうに小生は幼い時から畫の道と詩文の道とを好みましたが出家の後には謹んで餘計の業をせすに居りしも、自然嗜好ゆゑに稔にあらは

れて所望さるれば担み得ず一枚描き二枚描きに、世の銘畫でか珍重され、其爲思はぬ知じも出来し中、筑前博多の装束屋の隠居で左様といふ風雅人と取り分け親しくなり、今でに其子の玉之助とて今年十二の美しい子を寺中に引き取りこそせれ弟子にするか俗人に育てるか、何にせよ進ませませう貰ひませうと約束しました。仔細は入り組んだことながら其友雪といふが隠居の後妻のお牛といふに生まれましたが、即ち玉之助で、料簡違ひより母のお牛が四年ほど前に其家を見と共に捨て、出奔してからは友雪も既老年なれば復妻を置かうでも無く唯風雅二味に日を消り、玉之助を當主宗之助の方に送り商賣の道を習はせて行末は隱居所だけの財産を譲り相應の商人にせうと、末の子だけに配慮も細かく親のおもうて呉るゝには似ず兒は天禀か知られど不思議の性にて、算盤を教ふれば二天作の五とも六とも記えぬに順子をとつて独り獨り樂を作り、手習ひをさすれば字は書かで店の番頭の似顔を書く、使ひにやれば口上を忘るゝ代りに路傍の狗を引連れて歸つて來るといふ始末にいけぬ童子。されど取りどころは有るものにて、打捨置いて畫をかき居るまゝにすれば半日なり一日なり音もさせずに息を凝して種々のも

にいたりて他をうらむること、一、大事な事も辨へなく打解け人に語ること、と清らかなる聲して露泣みなく女今川を讀みつゝくるお小夜が、小き机にちまふと危坐りて打對へる様何のやうに僻んだ漢が見ても悪うは云ひ難かるべきな、況して母として見る眼には天女とも菩薩とも映るなるべく、常の事ながら我が兒の柔順しく忪げに、厭はしからぬ顔つきして物學びを怠らざるに自然心窩歡びを抱きて何となく面も和やかなる母のお静は、一、正直にして衰へたる人を輕しむること、一、遊びに長じ或は座頭を集め或は見物を數寄好むこと、などと讀み行く本文に意を注げつゝ、これも我兒のためなるべき裁縫をなし居る傍には、お小夜が机を横より覗きて、兩手を膝に新三郎の心の中には復習の早く終れと思ひ居ることなるべけどさも御客様らしく威儀繕うて坐せるものなかしく、庖厨に何か立働ける婢のことゝとさする物音、背戸の彼方に僕の米搗く臼の響きは聞ゆれど、冗語きくものあらざればいと閑靜なる小座敷の床には時好にこそ後れたれ出来おもしろき狩野何某が牧童の小き軸をかけたなへ部には似合はず由ありげなるに、善に還り過ちを改むと易の益の卦大象傳の語を書したる

いと古き額の一邊に掲げあるは問はでも普通の農家ならずと知るゝも道理、こゝはこれ青柳の婆おとわが常に養て養て衰ちざる眞里谷のお静が住居にて、額は此眞里谷の先祖が自ら筆を揮ひて其時より我から益齋と呼び、代々の通號とさへ定めしほどの所由因縁あるものなり。段々讀みに讀みて行くお小夜は母を憚りて、疾く今川を復習ひ終ひて新三郎と遊ぶとはおもへど周章しく物讀むことは惡しと平素戒められ居るに殊更心を静めて讀むとはすれど、假初にも狼がはしく賤しき友に近よるべからず木は方圓の器に隨ひ人は善惡の友によると、いふあたりに讀み到れば、はや此ききは四五枚なりと思ひの駒の先走るに、追ひ付かむとする紅唇の動き忙しく舌軽く、片言交りに一枚済まし二枚撥け退け三枚四枚と饒へ、其人々に隨ひて召仕ふべきことなりめでたくかしく、今川狀終り、と云ひ切るや否書を閉ぢて机の上に額づきしが、上げたる額には紅潮して、美しき眼は水光りを帯び、氣息さへ少しくほすみたるは六歳で今川讀んするまで憎くはあれど流石幼兒の愛度なま可憐さ云ふばかりなし。お静は針持ち居たる手を停めて此方を振り顧みしが、此態を見て微笑を含みつ、お、能くお小夜も復讐ひ

ました、新ちやんも能く待つて居ました、さめ此からは何なりとして二人で中好く御遊びなさい、どれ、御菓子を上げませうと立つて何やら取り出し、二人に等しく分け與ふれば、共に恭しく禮して言葉幼く、ありがたうを彼此同じく云へるも睦まじ。

其十二

聞かれて惡きことではなけれど、新右衛門殿を措きお静殿と叔母様と小生と三人金輪でひそいと内田家再興の相談をなさば、我を頼母しからず見て袖にしたるかと新右衛門殿に好からぬ心地をさする道理にて小生も義理ある中ゆゑ面白からず、とても事に叔母様は御行歩叶はれば兎も角も、小生直々にお静殿の御宅にあらりて委細を申し、御相談を願ひました方が好いやうに存じます、お静どのの御住居は何の邊になりますか御指示さへ下されば尋れて分らぬことはござりますまい、と膝に幾思案かし裁松の云ひ出づるを、何とも心つかねば、それも成程道理の事、お静殿の住居は此家の前より向うへ細徑を辿つて、茶畑の中を眞直に通り抜けるのと桔槔のある草屋の見えやうほどに、其家の茶の樹の植ゑ廻らしてある傍に沿うて少し

叔母様叔父様も御齡から考ふれば左様あるべき事ながら疾くに亡くなられたに加へて甚之丞殿までが黄泉の方と承はり、故郷に歸つた浦島が子の昔話も思ひ合はさるゝやうな心持、何といたして好いことやら茫然となるばかりでござりまする、と長々しく語るは甥なり、聞く身は叔母なり、叔母と甥との絶えて久しき對面なれば互ひに飽かず語りつ聞きつ仕居れど、元が他人の新右衛門は退屈紛らす煙草にも倦んじ果てか何時の間にやら茶の間に退りてお力を敵手に、客の飲まぬで無益となりたる酒を爐畔に喫し居るは、平素の懦弱も推知られて律義の百姓氣質とは誰が眼にも見えぬ振舞なり。老婆はつくづく聞き了りて、汝の話は一々了りたれど明日が生命も知れぬ姜ゆゑ今の新右衛門に其兒の一條頼んで見るが至當ではあるが、實は、と云ひかけ聲を低くし、お作の居た頃は彼様でも無い正直一過の人であつたが、お作の亡くなつた後、彼お力といふ根が木更津の丸久の婢をして居た素性知れず家へ入れてより何でも彼奴の言葉につき業は怠惰、酒は飲む、奢りはする、小博突は打つ、良からぬものとは打交はる、根性も貧するにつれ往時とは違つて來て、道理の無いことにもお力には鱈子にあたればとて自分

には實の子の加之家付の娘の腹から出た大切にせねばならぬ新三郎をお力と共に憎んでは叱りつ打つする。妾が口惜さにツイ口を出せば左様新の肩をお持なさるに依て増長してなりませぬと言に妾を遣返る。齒齧を咬で怒ることも日に一度二度は屹度あるが老人の悲しさには理があつても言ひ負かされ、言ひ勝つても意地に壓される。村名を苗字にして居るほどの青柳の家如斯微祿したもお力めが爲、新右衛門が料簡の間違つて來たもお力めがためと嘔ひ付いてやりたいやうな彼惡魔めが容貌でもよいことか見やる通りの化物顔、あれに迷ふやうな愚癡では無かつたがと折節は憎いよりも可憫に見える時もあるほどの新右衛門が今の品行ゆゑ、汝が玉之助とやらの話をする時傍に居無ければこそ好けれ、若し千兩といふ聲の耳に入つたなら何んなさもししい心を出して、我が確實に後見をいたしませう御案じなされますなどと親切ごかしに云ひ出さうも知れぬ。あゝ厭やゝ忘れても頼みにすな言ひ出すな、惡魔が憑いて居るもの耳に聞かすな面倒ぢや。其様な話ならば、内田の家を立てたいは妾も同じ思ゆゑ、今では子よりも頼母しう思つて居る優しい彼眞里谷のおしづ殿を後に呼んで密と頼んだが何より確

固、女でこそあれ普通の人では無い歟とおもはるゝまで正しい賢い人である。既にお静殿の實家も今は兵太夫殿の子の雪丸殿といふが一人限りで今年其雪丸殿は二十歳にもなるゝか二十一でもあるか東京の何とやらいふ學校に居らるさうなが其の兒の家の財産も皆お静殿の預かつて居て遣らるゝ由。たゞ一人の兄の子ではあり實家の跡目ではあり、是非に立派なものに育て上げいで兄にも嫂にも生殘つた妾が濟みませぬと噂の出る度云はるゝが、其氣の持ちかたの堅固として情の篤く分別の能く廻るには大の男兒も到底及ばぬ。彼お静殿に頼むに限る。彼女の娘のお小夜といふ兒と我家の新とは大の仲好し、先刻も遊びに出て行つたが一寸戻つて來ればよい、お静殿に來てもらふやう呼びにやらうものを、と頻りに姫を罵りてお静を稱讃するを聞き居る僧は頭を垂れて眼を瞑ぎ死せるがごとし。

其十一

今川になぞらへてみづから戒むる制詞の條、一、常のこゝろさし好しく女の道明らかならざること、一、若き女無益の宮寺へまゐり樂むこと、一、すこしき過失とて改めず敗れ

の柱の袖に身を貼け、彼方に我を知られじと笠の下より偷み視るとも神ならざれば心もつかず、悠然として二人の兒童の遊びを笑まし氣に見ながら露はれ出でたるは、往時久留里の藩中に才色雙ひ無き名を得て幾多の士民を悩ませし頃の態こそ今は無けれ、面もいまだ瘦せ黒まず、潤き額に明かなる眼は若き時より特に目立ちて、髪には霜の冒したれ朱唇珊瑚の色猶褪めず、袖の衣服幅狭き帯、裝飾に少しの艶は無けれど、身の舉動より然もなるか、姿勢優しくすらりよして、四十一とは云はるまじき餘香存せる名花の末路の、此家の主人お静なれば、見るより僧は何故か暗に涙を催しけるが、此時夕風颯と吹き來て法衣の袖を翻へしぬ。我あつて、此方へ走り來る足音のするを聞くより、何とか思ひたりけむ僧は逸足出して何方とも無く走り去りぬ。

うすらひ

其 一

天空吹く風の音も死して無言の寒威のみ加は

る雪もよひの夜の心地悪しきに街上行く人の影も少く、暮れてよりまだ間も無けれど商家も客を既見限り大抵店の大戸を下し濡戸だけを障子にして何屋は此方と知らするのみに止まれは、戸外は墨の如く黒き闇を破りて弱々と光を放つ小行燈の蠟燭の記標つけたるが檐端危き荒物屋の前に誰待つとしも無く瞬き燃りて僅に路を照せるばかり、何とは無しに物洩しき永代橋手前を、冠れる鍔廣の帽子の打仰ぐほど軀を眞直にして、凍たる大地に朴商の下駄踏み響かして堂々と歩み行く男あり。熟く記えたる路と見えて彼方に曲り此方に折れ、靈岸島の或小路の突當りなる木更津通船所といへる提灯出でたる家に入り、身を掩ひたる二枚續きの萌黄の毛布かなぐり捨て、轡をも取つて手あらく腰掛の上へ投げつけるに、鐵葉おとしの大火鉢を圍みて待ち合ひ居たりし人々一齊に眼を新來の客に注ぎて伺へば、年齢は二十を二ツ三ツ超えたるなるべし、軀幹高く眉秀でて雪白の面の額こゝとに潤く、辰砂を塗れるやうなる唇。一文字にしてやゝ大なれと漆の如く黒き髪、脩く裂けたる鋭き眼、まづ百人にも千人にも中々見難き美男なるにぞ、女は口に出されど好き男ぞともふ心に貪り視る眼に蔽し難く、男は私に嫉

みを發して、端嚴なれども愛嬌なくて一ト癖あるべき面だましひと小聲で悪く評するもありける。かくて互に少時待つ中船の準備も整へりとの宿の言葉に、皆我先にと争うて宿の裏手に繫り居れる五大方の中に入れば、出船だゝと駈け廻りながら宿の男等が人を呼ぶ聲のみ聞に徹りて、再び新に來るものもなく、水夫の働き忙しくなりて、轡を解くやら碇を抜くやら、其間に船は動き出づる、岸に佇み提灯振り／＼名残を惜むものの泣くがある、送らるゝもののそれに應じて泣き出だすがある、忘れし用の傳言を逢はれ退けて宿の男に船の中から大聲で頼むがある、嬰兒の啼くがある、エ、隣席の人の足を踏んだ、ヤレ後席の人が尻をつゝいた、とわやゝ／＼すること暫時して、濁ても清んだものに聞ゆる船唄の聲起る頃帆を十分に水夫等の張ればよき程に吹く風に送られ船は上總湾を出離れぬ。

拂曉は船木更津へ着くと忽ち風變りて、今なればこそ好けれ昨夜如くは叶ひませぬこととぞざりましたと朝飯したゝめながら甲客乙客挨拶し合ふ中、雪ちら／＼と落し來れば、さてさし當つてこれは又た難儀なことが湧きましたと肩を擧げて臆の上での一甌を二甌と出掛けるも

行き、三尺ばかりの幅の路に逢うたら其を何處までも左の方へ左の方へと傳うて小流れの畔へ出で、向うを見渡せば必ずもうお静殿の家の門の柳の樹が眼に入らう。たゞの農家とは様子も差へば直に知れる筈、よし錯つて知れなくたって其邊に居るものに問うたら屹度門口まで案内して呉れるであらうなれば、一寸會うて来るがよからう。會うたら次手に一昨日新に持たして御遣しの味噲は何して御調製になつたものやら實に結構に頂戴いたしましたと櫻味噲貰うた禮を云うて置いて呉れ。また新が居たらば能く大人しくしてお小夜さんと我儘からの喧嘩などせぬやうにせよと云うて聞かして、と老婆の癖とて細かいことまで云ひ出づるを、うつぶきながら聞き居し僧は、叔母様、それなればまづ行つてまゐりますと云ひつゝ頭を擡げしがあやしや眼には涙を浮めぬ。

如何なる思ひの裏にあればや潤み聲にて叔母様行つてまゐりますと再び云ひて叔母の面を少時隠しし我松は、しみんと一禮して自己が顔をば外向けつゝ立上り様突と室を出で笠引被きて、これなば御めしなされませとお力が出しくれし下駄を穿つて運ぶ足早く七八間は歩みしが、振返りて良少時は昔時に變はりて衰へた

る見るにも悲しき青柳の家を眺めてまたすたすたと致へられたる細徑を辿りぬ。頓て菜畑の中を出抜ければ成程桔槔のある農家見えて、手入れのあしき茶の樹の列べる間に四五羽の家鶏の出つ入りつして遊び居れり。三尺幅の村道の方には椿椎の木などの蓊鬱として茂り合へる一方は田畠の遙かに遠く、田城園域に立る榛の樹の間に今落ちかゝれる日輪紅く天色麗はし。左々と心して三町ばかりも歩み行くに果して小さき流れあり。流れの畔に佇立みて彼方を見るに、右手にあたりて小柴橋ある對岸に椎の皮付を柱としたる門ありて、竹の編戸は靜かに垂るゝ柳の蔭に半埋もれ、横の生垣まだ老いれど見入るゝところ構へ内の樹木の配りも趣味ある清げの住居は、眞里谷お静が娘と共に唯二人して浮世を淡く送れる家なるべし。

第十三

我松たゞちに橋を渡りて眞里谷が家に入るかとすれば、然ばあらずして良久しく魂魄抜けたる人のやうに佇みしゝ動きもせざりしが、思ひ定めてや四五間進み近づくに、一步は一步より遅くなりて、橋に今しも掛らむとする時遂に踏み停まり、却つて後へと二三歩退りぬ。狭霧

籠めたる深き溪に架れる苔滑らかなる岩橋にもあらず、大河にかゝれる老橋の既に朽ちたるにもあらば、渡るに危きこともなきを、超え憚みたる我松は未だ六賊の譚惑に勝る得ぬ木藪の漢と見えて、前へも三足後へも三足、やう／＼五歩六歩進めば忽ち六歩七歩退き、三四歩退き四五歩進み、行きも得ずまた歸りも得ず、小橋の此方をうろ／＼行き戻りせる其有様、眼には知れど何處にか着き居る縁に操られて睡りながらに動けるごとし。辛くも橋の半分まで到りて中を覗ふに、米搗く男の後影は物置らしき小舎の角より少しく見えて其音はいと耳近く聞ゆれど、遙に引き入れて立てる母屋の此方へ向きたる方は小窓の一つあるのみなれば談話の聲さへ洩れては來ず、たゞ山吹の盛りに咲けるが薔薇の柵を隠すまで拂み亂れて美しく媚びたると、家の南の林檎の花の淡紅にしからしきが風のためとは無くほろり／＼と散り落つるとが眼につくばかりなり。あはれ床しき棲居かなと、門の内へ這入らむとせし見居る折しも、愛らしき白き狗の兒の赤き首輪したるが轉ぶやうに走り出で、林檎の花の今落ちしに戯れかかる其後より新三郎はあらはれ出でつゝ、續いてお小夜もあらはれぬ。僧は小橋を急ぎ渡りて門

るに、行歩も心任せならぬ老の悲しさ、圖らずおとわは粗忽しける。優しきまでには至らずとも、普通通の嫁ならむには介抱おろそかなりし故と自己を責めて、姑、庇護ひもすべきを、正妻にもあらぬお力は其を見出すより毒ある眼を先づ閃かし、此寒天に此様なことされましては困りまする、誰か此蒲團を洗ふかと思つて居られまするか、と聲あらゝかに罵りぬ。

其三

身の過失に一言も出だし得れば、無慈悲に辱しめらるゝ恨めしさは骨を削るばかりなれど、たゞ夜具の中に身を縮めて瘡せ細りたる掌の戦ふを合せ、面目も無い、許してといふ顔じつりと打見やり、許しても能く出来ました、三歳や四歳の稚兒ではあるまいし道理が何様の絲瓜が彼様のと種々のことをちやんと御存知で度々御説法なさつた方が富でも既仕ませぬやうな此様な事をなさるといふは、ハ、ア聞えました、指の尖頭も落ちようといふ此雪の日に妾を困らせて腹の底で笑つてやらうとの御洒落でございますね、ハイ深山御慰みなされまし、御慰みになりまするなら此儘にして置いてはどうせ汚穢くつて臭くつて埒りませれば、米の水で洗濯もいた

しませう泣つ面もいたしませう、オヤ涙を御溢しなさいまするの、それほど妾が愛い目を見るのが御嬉しうござりまするか御可笑うござりまするか、フ、涙は此方で溢したい、サア洗はなかつてはいけませぬ、何を愚圖々々して居らるゝ、早速と其處をお退きなさい、と云ひさま搔卷撥れ除けて手荒く蒲團をグイと引けば、肚腸の出し破れ疊の上に半身すり落さるゝ途端に痛むる身體の甲處乙處、痒痛と覺むる土色の面の頬に涙の球亂るゝ折も折とてサラ／＼と紙窓に浮ゆる雪の音して、陰洩る風の刃の如きが寢衣ひとつと剃きなされたる鳥肌立つる身に衝きかかるに、此世からなる阿吒々獄、僅に残りし齒を咬んで忍ぶ寒さに唇さへ白めるおとわの體裁可哀といふもおろかなるを、先刻より次室に居たりし新三は弟の富を相手にして雪燈明を造らむと油に浸せし燈心を圍めて雪に穿つたる小孔に通貫して今しも火を點け、火光の紅きに映る雪の白くて半ば透明るやうなる色せる美しさを、壁だ／＼と賞め悦びて手の凍るをも忘れつ我が掌に載せながら立つては高く擧げ坐つては就て見、弟と二人餘念なく玩弄び居けるが、奥の物音を聞つけて何事ならむと唐襖を明けて、お力が突立ちしさま、妾が夜具をば

引き剥がれて何と知れど泣き伏せるさまを見るより大に驚き、母様堪忍して、お婆様が其では寒い、といふより早く幼童心の我知らず此處までは持つて来りし雪燈明を抛り出して、死せるが如く屈まり居るおとわが肩へ搔卷を掛けにかればお力は怒り、え、此餓鬼は猪口才な、童幼の癖に出過ぎた奴、云ひつくる用は何一つ満足にしたことも無いで餘計なところへ喉を出す、雪に火なぞを點けくさつて妾の足へ何故打付けた、熱い熱い、え、熱かつた、火傷をしながらつたからこそよけれ汝も妾を泣かせる氣だの、え、え、見る疊は雪だらけだわ、間拔め油のついて居る燈心から先へ何故拾はぬ、汝の好きな御婆様は蒲團の上に綺麗なことをなさつたのだ、それは洗はずに置かるゝか、鼻の頭に擦りつけて遣つたら汝にも解つたであらう、寒いのも自分で仕たことなら仕方が無いわ、ナニそれでもあんまりだといふのか、お婆様のことといへば能くつべこべと口を出す奴め、此様なこと仕出かしたのと此始末をつけるのと何方があんまりだ、其様お婆様を最良におもふなら汝の蒲團を貸してあげな、然して汝は蒲團なしで此寒い夜を寝るがよい、何、左様しますと吐すのか、よし／＼一人で夜具片羽から出して

のもあり。兎角する間に風はますく荒れ立ちて、雪を散するやうなりし雪は驚毛と亂れ飛び、緩々然と前に下かとすれば瀟々乎として斜に墜ち、巴給と狂ひ鑲字と飜り、瞬く間に方なるものをば主となし圓きものをば壁となし、大道の芥を埋め隠してたゞ一面の銀世界と變ぜしめけるが、彼諦若く美しき男は、片頬に笑み含みて一升餘りの酒を傾け、悠然として毛布を被ぎつ、萬頃一望白皚々たる中を衝て歩み出しつ、君不去の町離るゝに及び、玉屑粉霰面を撲つにも怯げず應ぜず、聲朗かにいと清く、君見すや昆吾の鐵冶炎烟を飛ばせしを、紅光紫氣俱に赫然たるを、良工鍛鍊す凡幾年、寶勳を鑄得て龍泉と名く、龍泉顔色霜雪の如し、良工咨嗟して奇絶を嘆ず、琉璃の玉匣蓮花を吐き、錯鑲の金環明月生ず、と彼郭振が古劍の篇をさも樂しげに吟じ出しぬ。

其二

老ほど悲しきものはなし、道理も法律も力といふもの無くては通らぬ世に、腕も弱り腰も屈むやうなつては一切埒無く蹴落とされて、有るに甲斐無く待過はるゝも、憤つて及ぶべきにあらず、山に捨てられし昔話を其まゝのことは

今猶到るところに有り勝なり。青柳の婆おとわは生れし年と同じ干支にも既六年前に値うた齡とて、此夏の初め裁松が珍らしくも訪ひ來し頃には、中氣にこそなつて居たれ半身不隨なるばかりにて心はまた活潑として孫を護うてお力と言葉を聞はすほどのことはありしが、如何なる譯あつてか折角雲のやうに忽然として顯はれ來りし裁松が眞里谷のお靜を訪ふと云ひし限り煙のやうに茫然と消えて去し以來、短き歡びの後に残れる長き失望に氣落ちしてか次第々々に身も弱りて、庇廂に蚊柱立つ夏の酷暑氣には肉を奪はれ、團栗落す風の音の情無き秋には骨を溶せさせられしが上、舐りても笑れぬ新右衛門が不孝、死れがしに扱ふお力が舉動に、朝な夕な腹を立せられ肝を煎らせらるれば、膏油の盡きし瓦燈の如く心に張りといふもの衰へ、人無き時はたゞうとんと眠るでも無く醒むるでも無き夢と現の間に休み、お力が理も無き事に柄をすげ新三を手痛き目に遇はすも此頃ははや眼を瞑つて大抵ならば争はず、後を向きておるおろと口惜涙を流しながら、聞かれたらまた怒るべしと口の中にて南無阿彌陀佛と密に唱ふる計りの味氣無き、何の罪を前の世に作り置いて此愛き思ひなすること歟と自らも歎けば、

おいたはしや舊に此邊十ヶ村二十ヶ村きつての常家で、農でこそあれ苗字帯刀の家柄の青柳へ加之武士の家から來られた方が彼様に辛い日を送つて三尊の御來迎も頓てであらうといふ昨日今日を過さるゝこと歟と、二十年ほど前までは使はれ居し與助といふ男の今は二里餘り離れしところに住へるが恩を忘れず折節尋ね來ては家に歸ると必ず妻のおはよといへる是も前には同じく召使はれ居し者と共に少ば天道を疑ふやうにまで傷み合て歎きける。

垢光りのする薄蒲團に破れ揺卷破れ屏風、せめて裾の方に大和風爐でもあらばよけれ、其も無くては若き者として鐘の音の調子高く響く晨家の横手につるせし千葉の風にがさつく夜なんどの冬の寒さに堪ふべくもあらぬに、まして丈夫でもあることか病み衰へたる老婆なれば平常の日とても萎縮勝に辛くも氣息を保てるばかりのところへ、昨日より雲凍つて動かす、膚を刺すが如き寒さ、老をも更に憫まれば、夜すがら顔き慄へ居たれど、蒲團一枚掛け増さうでも無き無慈悲のものゝ手に持つたる是非無さに齒を切つて短き夢にも入る間無く過ごせしに、曉天よりして降り出せる雪に風さへ加りて寒さいよいよますます烈しく、屋内の雛子の水さへ凍

てより知り抜いたるお静は、何様にかして主人の新右衛門を勵まし惡魔のお力を追ひ出し、おとわ新三郎の身は困しくも、心を裕かに消光すやう爲て退けたしといふ思ひの裏にあれば、機に觸れては餘計の苦勞ながら、縁は遠きも住居の近さに此様な事のありし彼様な紛糾がありしと聞くより自然二人を救ふべき考へを様々に運す時もありしが今日しも新三が泣き込みしについて、聞けば聞くほど堪へ難きお力が非道の舉動に快からず、義理ばかりではあれど叔母にあたるおとわの胸の中を察し年齡ゆかぬ新三郎がいたゞしげなる状態を見ては、今降る雪の地へは墜て我が肺肝に凍りかゝる心地して、貰ひ泣きの涙と共に芽ぐみ居たりし分別を出し、改まつて青柳の家を訪ひ、新右衛門殿御在宅ならば一寸お眼にかゝつて御話をいたしたいこととあつて眞里谷からまゐりましたと左様おとりつぎ下されまし、と挨拶に出しお力をばまるきりの下婢あつかひにして云へば、勃然とせしお力突立たるまゝ、主人は臥つて居りますればまたおいで下されましと慥食に答ふる面憎さ。過般新右衛門に僅三十圓の金を貸して與りし時には喋々しくお小夜さまの御行儀がよいの御薫陶がとゞくからのと世辭を五月蟬述べたてし

其口から能く其様に無作法なことの云へたものと呆れ果てながら、御病氣でもござります歟と推返して問へば、喫べ酔つてでと飽まで嘲弄するふてゝしさに、流石のお静も怒りは湧けどちつと堪へて語氣ひとしほ優しく、それなれば御起し申していたゞきたうはござりまするが御氣の毒でもござりますれば叔母さまと少時御話して新右衛門殿の御眼覺を待つといたしませう、御免なされと云ひさまに上りかゝればお力もこれを遮りなく、御勝手にと云ひし限り引込んでまた出で来らず。様子は知つたればお静ずつと通りておとわが常に臥し居るところの三疊ばかりの汚き室に徐に入つて、叔母様靜がまゐりましたと慇懃に挨拶すれば、辛くも寐返りして此方をおき、おゝお静どのか、といふより早く溢すは自己が頼母しくおもへる者の訪来しに嬉しさの餘る涙なるべし。

其六

火一つ出さうでも無く茶一杯出さうでも無く、たゞ疾く歸れと云はねばかりにお力はおしらへど、それを承知のお静は少しも念頭にかけず、しめやかにおとわに對つて、新三郎は妾が方に來て遊び居れば心配に及ばぬこと、今宵は

兎に角に新三郎を泊め置かむと思ふこと、其ために一應ことわりを云はむとて來りしこと、行末かけて新を見捨てざるべきこと、新の伶俐にて村中の評判には小兒らしからずとまで云はるゝほどなること、お力は相手にすべきものならぬこと、新をお力の下につけ置きては新の行末のため好かるまじきこと、御前様も長くはかゝる悲しき目へのみ會ひ居たまはざるやうせむと思ひ居ること、新右衛門殿に角たゞぬやう相談して美しく纏まりさへせば御前様と新三郎とを妾が方に引き取りて御介抱も申し上げ養育もなさむには一向苦しからざること、青柳の家より他へ行き玉ふことの御厭なれば是非無けれど御遠慮は少しもいらぬこと、新右衛門お力の振舞は非道なれど説き諭したりとて到底過ちを改むるやうの效あるまじきこと、十年十五年さきの當人の所存は知れど貰へるものならば今より新を貰うて眞里谷の氏を名乗せさせたいこと、姻縁は無理壓制になるべきものなられど今より新を養子となさば假令當人同士の氣の合はぬにせよ該時になりて新を見棄つるやうのことは萬々せざること、家の惣をたらへて此様なることはいふは無禮なれど當之助といふものある上お力が新右衛門殿の傍離れぬ以上は當人のためには

来い、汝の勝手ですることに妾が手は假してやらぬぞ、今夜寒いといつて泣くな、御父様の中へも潛り込むな、何時ぞやの様に後で謝罪つても許してやらぬぞ、後悔すな、と飽まで意地の悪き言葉に、兒童なれどもお力を恨み祖母を助ける一念に口惜さ悲しさこき交せて自己が蒲團を取り來らむと納戸に向ひ走り行くな、新坊、新坊、妾は蒲團を欲うはない、汝が今夜寒い目して風邪でもひいては妾の今寒い目するより辛くおもふ、と止むる婆も涙なれば、返辭さへせず駈けて去る新三も同じく涙なり。棚に乗りしか踏臺せしか兎角して我が蒲團をば引すり來りて新三は婆に敷かせむとすれば婆はなかく敷かじといふ。此時までも何かがみく罵り居たりしお力は立つて、急におとわに寢衣を換へさせ、汚れし方を新三に押し付け、汝は中々伶俐な兒だと眞里谷の高慢寡婦も云うたが成程中々伶俐な兒で御婆様には孝行だ、お、お、好い兒だ伶俐な兒だ、今に御上から御褒美でも出ませう、お、好い兒だ好い兒だ、好い兒だから御婆様の此寢衣を一寸流水で洗つておいで、お、孝行な好い兒だ好い兒だ、さつさとこれを洗つておいで、盥が汚れる、家ではならぬ、流水へ行つて洗つておいで、と寢衣をかづけ、こづき

まはして大人も戸外へ出るを憚る雪の最中に背戸口より外へと強く押し出ししめ。

其四

突き出だされて新三郎はよろ／＼ばかりと雪の中に倒れ伏せしが起き上りさまお力が面をツツと見詰めて瞬きもせず涙を隠さず、聲も出されば身動きもせず、頭に肩に降りかゝる雪をも拂はす突立てば、おや／＼此兒は恐ろしい眼をして妾を睨みつける、お、怖い眼だ、身が縮む、どれ／＼妾は逃げ出させう、戸でも澤山御睨みなさいと、お力は兩戸をびツしやり開て切り、奥へ行きしか音もせず。されど兩戸を明にもかゝらぬ新三は畦道路嫌ひ無くすた／＼走り走り去りしが、眞里谷の家の門をくぐると齊しく、流石幼兒の域へきれず、聲は立てれどしく／＼と泣き／＼庭口より突然に縁先へ廻れば、雨天の實を眼となして雪の兎を母のお靜が笑ひながらに作りくるゝを、餘念も無くいと樂しげに見居たりしお小夜は吃驚して、あれ新ちやんがと急に叫び、まあ此雪に傘も無しで如何して家を出ておいでか、さあ／＼早く内へ這入つて火にでも御對り、噓寒からうと、お靜と勸り慰むるに、優しくされて尙湧く涙を雪冷かなる

袖に拭ひ、仔細は語らで、叔母さまどうか此寢衣を洗つて下さい、新が一生の御願ひでござりまする、と思ひ詰めたる顔つきして云ひぬ。

何か知らぬが泣て居すとまあ兎も角も此方へ御上り、お、素跣足か可哀想に、足が眞赤になつて居る、勤や盥に湯なとつて新ちやんの足を洗つて上げな、と無理に新三郎を室に上せて、段々糺せば言語に絶えたるお力が無理の一々なり。もう泣かすともようござります、仰りました、汝は家にお小夜と二人で中好く遊んで居るがよい、一寸妾は汝の家へ話に行つて来るほどにお勤は二人と留守して居よ、直に歸れば機嫌を治して少時新ちやん待つておいで、と衣服を改め頭巾被りて僕の木工助引從へ、青柳の家を目ざして立出でけるが、引違へて毛布眼深に打被さたる大の男がのそり／＼と門を入り來て、案内もせず縁に腰掛け、足袋もろともに下駄脱ぎ捨てゝ雪だらけなる毛布を脱し、ぬつとばかりに上り込みぬ。

其五

青柳の家埒なく亂れて新右衛門は有れども無きがごとく、萬事お力が氣儘なれば、おとわは口惜しく新三郎は悲しく日を送れることを、豫

走り勝なる二十歳二十一歳の若俊、如何なることと来りしか、若し學校の不時に休暇となりしかなどにて歸り來しのみならば又案すべきことも無けれどと、徐に學事の模様を尋ね、塾は休みかなんどのて遊びに來し歟と問ひ出せば、雪丸にこゝ笑ひながら、叔母様、僕は退學しました。ハ、學問なぞは既厭です、其御話をしようと思ひてわざと此方へありました、と案の外なる粗率の言を反身になつて云ひ放つに、お静はどきりと胸に涙、おもはず膝の前に進めて面の色を少しく變じ、雪丸、それは何いふことで。

其八

爾時雪丸身動きもせずで叔母が面を少時見詰めて、いと重々しく口を開かむとすれば、お静は一寸首を外向けて、新三を優しき眼に見ながら、新ちやん汝の御父様に妾が歸り云うて來たれば今夜は此家へ汝を泊める、ゆつくりお小夜と彼方へ行つて竹がへしでも仕て御遊び、とお小夜新三を次室に立せ、學問も厭、退學も既獨斷で汝が爲たといふについては確乎とした道理が無くてはならぬ譯、さあ聞きませう其仔細を、雪丸汝も既一人の立派な男兒、兒童では無し、

其坐り丈の高くなつたのと肩の怒つて來たのは自分でも大抵氣がつくであらう、たゞ學問も厭になつたとばかりで我儘を云うて済む餘では無い。兄様の御遺言を受けて十五の歳より汝を預かり十七の春東京の青英義塾へ出して今日まで新聞を見つ世間話を聞きつする度書生の事といへば必ず汝の上を心に浮めぬ時も無く、あゝ雪丸は幸福に能く有り勝の墮落もせず勉強三昧で居てくれるか品行も善くて居てくれる歟と氣遣ひ氣遣ひ、別段悪い噂も無くて學期學期に結果もよく汝が學の進み行くを知る度嬉しや此様でこそ亡き兄上にも嫂上にも妾が頼まれ甲斐はあれと悦んで居たに、今の其言葉は如何いふ理由歟。雪丸、我が身の亡き後は母ともおへ父ともおもへと汝が父上の枕元に妾を置いて汝に向ひ云ひ遣された御言葉は覺えて居やう、子とも看よ弟とも看よ我が亡き後は十分厳しく我に代つて教訓して育てて呉れと汝の前で妾に仰あつたこともまだ忘れずに居るであらう。次第によつては免しませぬぞ、さあ明らか其仔細を御話しなさい。聞きませう。随分道理のあることならば假令は學問を厭と云はうが退學を自分一存で爲て仕舞はうが免しませぬ、然も無ければ屹度開始にはなりませぬ。汝

が身のため又兄上への妾のせればならぬ義理のためにまた其儘では済ませませぬ。雪丸、汝は兒童では無い、さあ其辭を此妾に舍得のゆくやう御話しなさい、忤怛でもあり學問も段々出來て來たであらう汝の所存に無理無法あるまいなれば、考慮も小く書も讀まぬ妾になりと解らぬことは無い筈ゆゑ、さあ一通りお聞かせなさい、と孤を託されたる女だけ談話の中に動かせぬ釘をもさし置き標をも打ち込み置きて問ひ糺すを、蚊の鳴くほどにもおもはぬ顔して、強きを街ふ高笑ひし、ハ、アッハ、アッハッハ、叔母さま、僕は成程既立派な男兒一匹です。如何にも男兒一匹とは何時までも兒童のやうに御手紙の度風邪をひくな暴食すな身を大切にせよと云うてよこさるゝ叔母さまの御眼にも見えまする歟。宜しい。それで既宜しい。くだくだしたことは申し上げずとも宜しいと存じます。男兒が男兒の分別をもつて一身を處置するに不都合はござりませぬ。學問は放擲いたしました。何と仰せられても斷乎として放擲いたしました以上は是非はござりませぬ。御異見はなされても無益でござりますれば確と御斷り申します。ナニ叔母様學問は出來たところであつたりませぬ。書物を讀んで天下を取つた奴は

却つて青柳の家を出る方好かるべきこと、これ等は豫てより考の中にあつたことなること、お力を返すことは到底叶ふまじければ却つて正妻に引き直すかた曲りなりにも平穩なるべきこと、漸々眞里谷のものにすれば青柳の血統は絶ゆるやうの譯なれど漸といふものある上は新の子に立てさせさへすれば青柳の家は却つて殖ゆるといふものなること、成長の後新三郎お小夜を嫌ひ又眞里谷の家にも望まざれば姻縁の事ゆゑ是非なく當人の思ふ通りに任せて勝手にさすべきこと、など優しくも打語らひて慰め居けるに、眞實酒に睡りし情弱の新右衛門眼醒めてお静が前に來ればお静は別に何も云はず、たゞ、御寒うござります、御寒うござります、悪いものが降りまして御寒うござりますと云うて、主人が狼狽して、火を持て來い火を持て來いと叫ぶを聞き流し捨てつ、御老人は定めし冷えることとござりませう、とあてこすれば新右衛門ますゝ困つて頭を掻きぬ。他の事でござりませぬが、此方の新三郎どのを今宵は妾方に御泊め申します間一寸御ことわり申しに出ました、此雪の中で何故か洗濯をなされたさうで、腹を痛められたさうで、いやもう児童といふものは無理な物敷寄をするもので、おたが

ひさまに児童を持つては苦勞は絶えませぬもので、と新右衛門をひそかに責めたりけり。

其七

新三郎が行末のことなどに就ては別に新右衛門に向つて云ひ出づることも無くて、毫末も面倒なる談話をせず、たゞ二三日は新を我が方に預かり置かせて下され、と優しく云ひしのみにてお静は青柳を立ち出で我が家に歸れば、下女のお勘走り出で、遠藤の若様がお來臨になつてお歸りをお待ちでござりまするといふに、今年の夏の休暇にさへ歸省なもせざりし者が、今は修學の最中なるべき時期をもつて、殊更東京より來れること善きか惡きか仔細あるべしと、早くも思案を頭巾やら長合羽やら脱ぎ捨つる間に胸に浮めて、奥の一室に入れば、火鉢を前に控へて嚴然と坐れる雪丸の風采は此正月に見し時よりまた大人びて、肩の幅もつき眼も鋭くなり、二月生れではあれど誰が見ても二十歳とは云ふまじき分別くさい容貌となつたが、お小夜新三を相手にして譚を聞かせ居たりとおぼしく、ガリバルデーが其時に、と勢込んで西洋の人の噂らしきことを云ひ掛け居る其對面には火鉢を挟んで児童二人さも樂しげに聞

き居たり。叔母の歸りて來しを見るより座蒲團をすべり下りて嚴手に挨拶する口のきやう身の舉動吃驚するほど世馴れたるに、お静は微笑を含みて、抜目無く甥の様子を視れば、妾が仕立て、遣りし銘仙の綿入黒紬の羽織、小倉の袴を實體に着けたるところ未だ可愛く、別に都會の風に染みて生意氣になつたるらしき慮も無し。幸に情弱書生の仲間に入りて寄席揚弓場牛肉屋と勉強よりは遊興の方へ身を委ねるやうにもならぬか、遠藤兵太夫といはれては一藩の褒めものなりし兄上の風ほどありて、我が甥ながら勵まされど能く勵み學問ばかりか萬事人には後れざる覺悟の確固なるだけに、學もさだめし進み料簡もやゝ老いて來りしなるべし、此處七八年の大切のところで躓頭さへせれば男兒はそれより器量次第ではあれどまづ幸運の花も咲き福徳の實も結ばるといふものなれば、亡くならし兄上にも嫂上にも妾の面目ある譯なり、何卒惡しきことなかれ横道へ入ることなかと祈る矢先に、今年の夏は歸省すべきを歸省せで今また來べきときにあらぬに來しはそも何ゆゑか、様子に異りは見えざれど一日逢はねば一日だけ人は誰しも變り行くもの、ことに思想の善き方にも惡きかたにも今を盛りに勢力強く

き標河の渡しを越えて爪頭上りの路にかゝれば、日は暖きも川の面を吹き来て、裾より身に浸み入る風冷かに、融けかゝりたる昨日の雪の積の樹くのぎの樹なんどの梢より時々はらりと落ちて、袖やら肩やらにかゝるも何と無く淋しく、中流に舵を拍きて豪語を放ちし祖述の昔時を忍ぶといふにはあらざれど、我若し功を立てずんば何面目に此河を敢て復び渡るべきと大踏歩の足を停めて、慨然として首を回し、我が来し方を振り向き見るに、河水の流れは遡けれど、汀一體淺きところは岸より折れ込みたる篠竹洗ひ出されし灌木の根などを僅の手がかりにして、白き縑をば一條長く布けるが如くに薄水の張居ければ、雪丸少時打案じて莞爾と笑ひ、

ねば玉の夜のあらしの、

呀えん／＼如何に吹き飢、

河浪の瀬に立ちさわき、

河水の寄せしがまゝに、

河浪はやがてかへらず、

河水は流れて去らず、

袴領巾の白く清げに、

薄氷ぞ岸邊に張れる朝日出づれども、

と歌いとをかしく歌ひける。

つゆくさ

其一

鴨頭草のうつろひやすくおもへかも吾が思ふ人の言も告げ来ぬ、と大伴の家持に恨みろ寄せたる往時の女の入り組みたるべき情話は知れれど、鳴神の落つればと離れじと契りかはせし男に疎んじおもはれて極の實の一人物思ひに沈めば味澤相夜晝いはす心悶え身を跪きて苦み嘆くものは當世にも猶絶ゆること無し。小櫃の川の流れを顧み慨然として歌を詠ぜし遠藤雪丸は、それより岩出戸崎を経て、高藏寺の觀音も左の方に見しばかり一拜もせで其まゝ過ぎ、太田を越えて木更津に到れば恰も出舟々々と人を喚び居るところなるに、天運よしと飛び乗つて靈岸島へ其夜に着きしが、自己が假寓へは戻りもせず、四五日のほど恐しき顔して東京市中をば縦横十字に伊字三點に彼處を尋ね此處を訪ひて奔走せし後飄々然と、行李も極めて小さき一つ携へたるのみにて胸に萬般の思ひは苦なるなるべけれど面に怪しき笑を含みつ、新橋よりして汽車一ト飛び、出舟千艘入舟もまた千艘の横濱へ着き、停車場より立出でしに、群集の人

を推分けて、おゝ、若様と濁聲高く叫びながらに後より團扇の如く大なる手をもて簪えさせたる右の肩したゝ叩くものあるを、はて何者かと振りかへりみれば眞里谷の家の僕なる彼林實の木工助なり。木工助、汝は如何して来た、といふを待たず、如何して来たではござりませぬ若様々々、まあ下僕めが宿まで御來臨なさりませ、一昨々日から毎日々々此處に眼ばかりばちばちさせて貴郎が御見えなさるが最後引捕へて逃すまいと一生懸命に待つて居ました、眼は疲れますし足は棒になりますし老人の意氣地なさし腰の骨は痛くなりまますし、イヤハヤ貴郎の御蔭では途方も無いめに逢ひましたが、やれまあ首尾よく捕まへられて下されましたで下僕めが役目も漸く済みました、ありがたうござりまする、さあまあ同行に來て下さりませ、つい直其處の千葉屋の支店でござります、と云ひ、扶を確と把らへて引するやうに連れられて雪丸逃ることも叶はず、橋の彼方の千葉屋といふに到りて導かるゝがまゝ二階へ通る腹の中では、眞里谷の叔母の此港に待居て面倒のこと復云ふか要でも無きかと思ひけるが、通りし室は汚く狭く木工助の他人あるべしとおもへぬほどの様なれば、内々不審を抱く時、老父は忙しく

ござりませぬわ。ハハ、劉項元來書を讀ますです。僕は實際父上に薰陶されて十四五から孔子孟子輩を有難がるだけに書物が解つただけ何年の月日を耗耗しました。糞掃紙に壽命を盗まれたのが今更癪に觸ります。位で、學校などは見るも厭です。取るに足らざる師について取るに足らざる書を讀むは到底僕の敢てすることの出来ない愚なこと故、これより僕は僕の欲する通りに僕の身を終ります。ついでには僕の資産に屬する公債證書も御買ひ置き下されましたる水田も其儘なりと或はまた金子になされてなりと一時に悉皆御渡しを願ひます。從來御保管下されましたる御恩は深く謝しますが、今後は御世話を蒙りますまい。負郭の田の二頃ばかり何としたとて論はござりませぬ。御異見は承はりませぬ。遠藤雪丸は既に一匹の男でござりますれば、決斷致した上は是非はござりませぬ。

其九

にこりくと笑ふのみにて善とも言はれば惡しとも云はで聞き居し主人のお靜は、してまた汝は此先を何しようとおもうて居る。左様學問を嫌ふ上は商業にでも身を入れる氣か、何な

仕ようといふ氣か知らぬが世間も知らずに心ばかり狂しう持つても彼にはたぬ。まあ、つと二三年は堪へて居つて自分の身體の智慧分別を太らせた後徐かに世間へ顔を出しても遅くはあるまいと妾は思ふが、何も汝の料簡を抑へようとか微させまいとか意地の悪いことを云ふでは無ければ、愚昧の妾にも能く合點の行くやうに詳しく話をして下さい。大切の上にも大切におもふ、汝のことゆゑ妾の膽にさへ落ちたこととなら遠藤家の資産はもとより妾の資産も随分汝の自由になさせまいものでもないが、と飽まで優しく角だたずに流石は分別ある女の相手の所存を手繰りにかゝれば、聰明なれどもまだ世馴れざる雪丸得たりと圖に乗つて、いえ、商業にも從事はしませぬ。鐵錫の利を積む商業など假令は陶朱の富を致すまでにならうと面白くは無し。たゞ是からは此雪丸、たゞちに支那へ渡らむ覺悟、何の目的何様いふ手續きなどは御尋ね下さりますな。御尋ねあつても笑つて御答へ申さぬばかり。且は二年か三年か乃至四年か五年か十年。次第によらば我が一生ふたたび御目にかゝらぬやうなるかも知れずと思しめし下さい。大丈夫事をなすに事もし成らず死あるのみです。何なすかは御耳に入れても御眼にか

けたら宜しうござりませうと存する。と意氣に壯んに唾を飛ばして煙かけ輪する狀豪傑らしく、不の字を云はば一ト挫に世破なさむといふ襟幕中々當りがたく見ゆるを、氣にもかける顔つきして、兎も角も其返辭は今夜熟く考へて明日の朝きつぱり何とか挨拶しませう。どうせ汝も今日は此處に一泊するより外にあるまい。まづゆるりと種々の話もしませう聞きもしませう。お小夜の智慧の進んだ狀でも能く見て評をして下さい。お、お小夜といへばお頼み申した教訓書をば能く忘れずに時々送つて下されました。實にお小夜も悦んで先刻汝も見ただけであらう彼青柳の新三郎と二人で何時も阿新丸やら袈裟御前やら牛若やらの話をば妾に聞いては其繪を見て好い娛樂にして居ります。一寸した仔細あつて新三郎を今夜は此家へ泊める筈のところへ汝も幸ひ來合せたれば平素に似合はず賑やかで妾も大層嬉しうおもふ。御客も小兒まじりなればお小夜に主人勤めさせて夕の御膳を出させませう。どれ、妾はお静と共に下ばたらきをしてやりませう。生憎雪の降つたれば齡老つた木工助爺を使ひに出すも不憫ひふ好い御馳走は出來まいが、と云ふ面には和氣溢れて、靜に勝手へ立ち去りぬ。

へ出船のあるとか、それゆゑひとしほ氣を張て御待ち申して居りましたに丁度御目にかゝつたところを考へますと今夜の船で御出發になるのでござりませうか、遠い他國へ御出になるに御支度とても其ばかりの小さな柳行李一つで、さて大膽に萬事を甘く見て居るゝと老父なんどの古代漢に實に驚き呆れまする、まあ御無事で居るゝやう此御守りは御笑ひなさるか知りませぬが成田の不動様の惡事災難除、持つて居りましたを幸ひに老夫が心許りの御錢別にさし上げまする、猶もこれから絶ゆることなく毎日御無事を祈りませうがせめて今宵は埠頭まで御荷物なりと持ちませう、と馴染申妻ある爺の言葉のいつはりならぬは歎びたる頬に傳はる涙にも知るれば坐に雪丸も其誠心を嬉しく見て、何の不動が守り札、摺付木の代りにもならぬと思ひながらも受け納めて其夜出船のシチヤオフ北京といへるに乗る手筈萬端濟まして、野毛の山として夕鴉鳴き渡る頃、木工助迷れて英吉利埠頭にさしかゝりけるが、今しも端船に乗らむとする時、海や黒みて暮るゝに近く、水の面より霧寄せ来る演邊の夕闇薄暗き中にも知るゝ色くつきりと白き面を淺葱の頭巾につゝみたる年まだ若く眉目やかなる女の後より駆け來

りて、雪丸が袖抱ると齊しく、わつとばかりに泣き出しぬ。

其三

仔細を知られば何事歟と胡亂つく爺の手前もあり、無幹すりりとして容貌秀でし若き男に美しき若き女の泣きかゝりし風情眼立ては立停まりてじろゝと視る三人四人の人の手前もあり旁々、雪丸殆んど困ぜしが、低けれどいと力入りたる聲して、黙れ、と一句に厳しく制して女に口を開かしめず、領引提へて端船に移れば、水主は艀を押す、船は動き出す、退潮端の浪あらく舳腹に碎けて水珠散る怖さに女は唯緊手と男の膝に取り付くのみにて言葉も無く、涙ながらに慄へ居けるが、本船に乗り移ると頓て談話する間も無き箇の聲、既拔鎗に間もござりませぬ、御見送りの方は小生等と同時に唯今出まする端船に乗つて御歸りなさられはなりませぬと同船間屋の男の云ふに、唯さへ咽びかへるのみにて能くは口をもきけぬ女の、急きたてられて心迷ひ、動悸高まり喉塞がりて舌の根縮むごとくもある歟、妾も共に御連れなされてと辛くも云ひし一言だけは傍に立つたる木工助の耳にも僅に聞き取れしが其他は何か更に分らず、雪丸

がまた儼然として、其は叶はぬ、此書狀は着せし後に彼地より汝に與らむと認め置きしものなるが、圖らず逢ひし上からは今與へ置く、家に歸りて靜かに讀め、また此金は何といふことでは無けれど與へ置く、泣面するな、首途に忌はし、えゝ女々しいわ、日頃にも似ぬ、と云ひつつ先刻に木工助より受け取りし金悉皆女が袂に押し入れ與ふるを見て、如何なる譯にて如斯計ふかも更に分らぬ木工助は手持無沙汰に立ち居たり。兎角する間にまた忙しく汽笛響きて乗客を送りて來しもの皆立ち去れば、雪丸女の手なとて木工助が手に捉へさせ、木工助、もはや船は出づるぞ、見送り大儀、叔母様にも宜しく汝いうて呉れ、何が何でも此女を途中に過失無いやうに汝陸まで引戻して呉れ、と鋭き聲にて命じつゝ、女の方に振向き、何時まで泣く歟、未練な奴、仔細は後にて書狀で知れむ、何を云ふとも取り上げぬわ、如何にも我は不實なものだ、ム、恨むなら勝手に恨め、泣くなら勝手に陸で泣け、木工助何か遠慮する、引張り出せ、と烈しく罵る傍より、端船は既出ます、御早く御早くと宿の男の急き立つる、歸らじものを取り纏る、兎にも角にも御歸りなされと分らぬながら老夫は勸むる、首を振つてまた

手を打拍きて婢を呼び寄せ、女中衆御茶を頼か
まする、而して帳場の御方にな、御預け申し置
いたものを唯今御持参下され、と確乎云うて下
され、と口重たげに命じける。

其二

主人が持つて出でたる三百圓の紙幣の數を木
工助丁寧にあらためて、懷中せし預かり證と引
換に受取り、其儘それを雪丸が前に推直しつゝ
頭を下げ、これは叔母様より貴郎へ是非にさし
上げよとの事で下僕めが持つてまゐりました、
御受取の證を御一筆願ひます、下僕めが役目
は是だけでござりますれば御受取書さへ頂戴す
れば何處へなりとも御勝手に御出になつて宜し
うござります、と膝無きいふに、して叔母様か
ら御手紙が御言傳でも無かつた歟と問へば、一
向何もござりませぬといふ。此金子は何として
下さつたのかと、又問へば、何か存じませぬが
たゞ貴郎に御渡し申せとのことでござりました
といふ。えゝ分らぬ、何の廉で下さつたのかと
尋ねるに、少し焦れていへば、たゞ御渡し申せ
ば下僕めが役目は済むこととおもつて居りまし
た、何だか一向存じませぬが御渡し申せば宜う
ござります、早く御受取を下さります、といふ。

他に定めし御言葉の有つたであらうに。イエた
だ御渡し申せとばかりで。それでもそれでは分
らぬでは無いか。分らないでもたゞ御渡し申せ
とばかりで。たゞといふことの有らう筈は無い。
無くて何でもたゞ御渡し申せと吩咐つてまゐ
りました、と幾度いうても同じことなるに雪丸
是非なく、何か一向分らぬ此金我には受取れぬ
ほどに木工助汝持つて歸れ、と云ひ捨て席をた
たむとすれば、ドッコイ若様左様はいかぬ、何
でも彼でも貴郎に上げて歸つて来い、と此爺は堅
く命令られて居ります。それなら何様いふ仔細
で乎。仔細は何か存じませぬがたゞ差上ぐれば
それでよいので。たゞでは分らぬ。分らなくて
も何でも彼でも。えゝ馬鹿老夫め分らぬ奴。馬
鹿でも宜うござりまする、何でも彼でも御渡し
申せば下僕めの役目は済むのでござりまする、
と無理にも懷中へ捻込まむ勢ひなれば、雪丸今
は已むを得ず、兎に角叔母様より下されしもの
には相違なきことゆゑ然らば從順に受取りませ
う、と受取證認め老夫に渡せば、木工助額の汗
を拭ひて、やれゝ甚い骨を折りましたが、御受
取り下さりまして先づ下僕めが役は済まし
た、實は先日御立ちの時、今一言云ふことがあ
る、木工助後を追ひかけて是非雪丸を連れて来

よとの御命令ゆゑ一生懸命に御跡を慕つて、つ
い木更津まで走りましたが、一ト足違ひで船は碇
を抜いて仕舞つたところ、仕方無くすこすこ
と戻りましたに、よい、其様ならば木工助汝
此金をもて横濱に行き、千葉屋といふが確實な
宿と豫て噂に聞いて居れば、其家に泊つて金子
を預け、毎日々々怠らず、停車場にて見張つ
て居よ、一旦云ひ出した上からは中々思ひかへ
すことなき遠藤一家の者の氣性、ことさら血氣
の雪丸なれば必ず十日とたゝぬ中に外國行き
の船ある日を目ざして濱へ見えるで有らう、よ
く氣をつけて見外すな、逢うたら何でも彼でも
此金子を必ず渡して来い、渡しさへすれば其で
よい、文も言傳も別に無い、途中で掏ぬけにや
らるゝな、能く氣をつけよと残りの無い御差圖
通にいたしまして、漸く唯今肩掛けになりまし
たが、若様、貴郎は遠いところへいらつしやる
と薄々お勘から承はりましたが、もう此老
夫なぞは二度と御眼にかゝることも出来ませ
ない、何様かして立派になつて御歸りなさる時
まで生きて居りたうござりまするが何時御歸り
なりませう歟、なに何時といふ定めも無いと仰
やりますればこれがお別れ、宿の主人にきゝま
すれば今宵は上海香港などいふ遠いところ

荷葉盃

其一

雪丸叔母の諷めを聴かて、野心の暴風に身を任せ、分別ありげの無分別もて無二無三に飛び出したる後二月は、眞里谷のお静やもすれば日の没る西の方を仰ぎ、雲の濃ふ天を望みて、湧きあがり来る物思ひの色を隠せず面に上ばせしが、思ひ決めしところや出来けむ、心安まるべき便や得けむ、何時となく然る氣色も無くなり、相も變らずお小夜を愛しみ育つるばかりに夙く起き夜半に寐れていと安らかに其日其日を笑顔で暮しける。青柳が家はお力が我儘、新右衛門が情弱に運は柱と共に傾き、主人より始めて末々にいたるまでの根柢朽ちたる機同然に腐り行きて、まづ飲んだが今の得と眼前だけの口腹を卑しくも新右の圖る間に、お力は何かにつけてくすねを身につくる算段を運らしながら有るに任せて先妻の着物をしだらなく着切つては抛り出してまた他のを着るといふやうな狀態、それを見真似の子守までが遣り散りたる小銭を密と袂に隠し、戸外へ出て餉菓子に換ふるにいたる始末なれば、假令は黄金の生る

樹ありとも枯れずには居まじきを、まして古川の水も乾涸るゝに近くなりし際、何條長く此家を保つべき、氣の毒ながら分散は頼てのことなるべしと誰しも噂し合ふに及びぬ。我が爲たことでもなきに此中に居て零落の連坐を受ける起居不自由の老婆おとわと何も知らぬ新三郎とは、貧苦を受けさせらるゝのみか譯も無きに邪魔者餘計者といふ廉より朝夕口穢く罵り辱しめられしが、彼雪の日に衣を洗はせむと新三郎を窘めしお力が無慈悲の舉動を聞きしより且堪へかねて、我が家は日の射し工合の極めて好くて暖かなれば寒さの中だけおとわ殿を我が方に置きてまゐらせむ、さすれば聊か疾病の苦も薄らぎ玉ひて身のためにも悪からまじ、といふを名にしてお静はおとわを我が家に引取り、いと親切に介抱しやり、また新三にも讀み習字をさせては濟まれば我が方に日々通はせ玉はむにはお小夜を訓ふる次手をもて鳴藩がましけれど妾教へむと新右衛門に云ひ入れれば、流石にお力も味を容れかれ、午前だけの暇を新三に勝手にせよと與へけるに、他の人には露眺み難き新三も眞里谷の家に通ふなば喜びこそすね厭ひはせれば、誰促されど自ら進みてお小夜と共に日課を受くるを、我が兒と齊しく愛しみて教へ導くこと

油斷なし。

かゝりしほどにおとわ新三は暗黒なりし世を出でて稍光明ある地に入りしが、喜悅よりして氣の弛みしか、おとわが病は一且輕みて其後どつと悪しくなりぬ。

其二

其年暮れて新三郎九歳お小夜七歳、新三が異母の弟當之助五歳となりしが、一方には眞里谷一家のものの優しき待遇を受くれど一方には理も非も無く慥食至極にお力より接はるれば、新三は普通の兒童のやうに無邪氣にすらりと生長たず、知らざる人を見る時は身を欲てて遠ざかり、物陰などに隠れ居て竊に饒ふといふやうなる可愛氣の無き舉動多く、我が父母に吩咐けらるゝ用事を聞くにも遙かに離れし壁の隅戸の際なんに身を小さくして雇まり居り、すべてに對して明瞭に返事することさらに無く、堅く口を閉ぢたるまゝ上眼づかひをなほとして人の面の色を視る其態慙むべしとは云へまた憎らしき風情なり。されども眞里谷の家に來りてお静お小夜に對する時は幼稚き胸にもお静お小夜を好くおもへばや其舉動も是は別の兒かとおもはるゝまで活潑になりて、清しき

取り付く、えゝ未練なと突き退くる、汽笛は忙しく高く吼ゆる、錨を巻く音がリリリと響き渡る、宿の男も木工助に力を合せて離れじとする女を酷く引離す、如何するのだと端船の内より枯びし聲にて船頭の呼ぶ、遂に女は力及ばず擔ぎ出されて端船に投ぐるやうに移され、氣も稍狂ひて泣き叫ぶ間に船は小山の動ぐが如く次第々に船首を轉すれば、身をば跳きてますます泣く女は頭を空にして打仰ぎ見る、流石男も舷端に立ち端船の方を見下すに、此時全く日は沒りたり、餘光に其とは知らるれど既眉も眼も明らからず、互ひの思ひは暮烟に埋れぬ。

其四

シタイカフベキン號に乗り組み出て出し人々を送りし人等の乗れる端船は次第々に漕ぎ戻して、市街に燈火のちらほらと點き初むる時棧橋に着けば、誰しも少時は振り願つて、渦巻きの上る黒煙りを空に曳きつゝ遠ざかり行く本船の行方を見送り居しが、皆それ／＼の船宿さして別離の恨みを抱きながら思ひ／＼に散りかゝるところへ、來りし洋服扮装の丈いと高く逞しき人、車を下りて、失策たりと言獨語き、沖を瞻道

りて突立つたるまゝ身動きせれば、正體も無く泣き亂れたる女を介抱し憐みたる木工助爺は其人の見る眼も如何はしく、兎に角老夫めが宿に御來臨なさりませ、泣いてばかり居られたとて埒の明くことではござりませぬ、雪丸様は既出で御しひなされたことゆゑ此處に何時まで如斯して居られるものでもなし、老夫がとつくりと御話も何ひ御相談もいたしませうし、また雪丸様の叔母様もござりまするなれば、次第によつては叔母様にも申し上げて何様ともなりませうに、まづ／＼宿へ御來臨になりませ、日は暮れましたし、寒くはなつてまゐりまする、さあ開分け無く泣いてばかり居られすと老夫めが悪いくことは申しませぬから同志に此方へ御いでなされ、と袖を捉らへて引きにかゝり、氣を揉み焦れと女はたゞ首を垂れて歎歎くのみ返辭もなさず。傍に立ち居し大男は雪丸といふ名を老夫の口より出せしを耳に留めて二人をしげしげ視居たりしが何か點頭き爺に對つて、老夫そなたは雪丸を送つて來た歟、又雪丸は今出た舟で愈々出た歟、其泣いて居る女は何か、と太き聲に鷹揚に問ひかくれば、さても禮義の缺けた物の云ひざまをする奴かな。雪丸様を呼びつけにする此奴は何かと木工助勃然としながら顔を

上げて見るに、面はよく分らねど鼻高くして眼輝き、頬鬚顎髭もじや／＼とぞの如く生えたるさま田舎漢の眼には何となく豪傑さうに見ゆるに膽を抜かれて、ハイ、ハイ、雪丸様は唯今の船で御出發になりました、老夫は雪丸様の叔母様の御用でまゐりました、傍にお送り申し上げましたので、ハイ、此娘は何か老夫も知りませぬが雪丸様を引き留にかゝつたもので、ハイ、如何いたしまして雪丸様は引留められるやうな方では中々／＼ござりませぬ、此娘子を突き放して、老夫めに託けて別に口もきかれず其儘立つて仕舞はれましたで、と片手は娘の背撫でつゝ有りしがまゝを答ふるに、男は笑つて、應、よし／＼、ム、雪丸め、能く道りをつた、老夫、其娘には關はずともよい、彼雪丸に交誼のあるほどの女に無分別のことを仕出來ゝ乃至また價値の少い涙ばかりばら／＼と何時まで溢して居るやうな下らぬものは有る筈ない、ナニ大丈夫だ介抱せずとも、大膽不敵の男の兒に交誼を持つてゐる女が下らぬことをする氣遣ひ無い、關はず捨て、置いて見よ、自然と泣き止むことであらう、アハハと輕く打笑ひて車夫を従へ此處を去りぬ。

て必ずしもに我儘すな、自分勝手な云ひかけて、やんちやの喧嘩などするな、行儀よくして大人しく好い兒と人に褒めらるゝやう、よく叔母様の仰しやる通りを守つて立派な男兒になつて其から屹度御恩を報せ、婆は汝の眞實の母のおさくと同處に遠いところから善惡ともに見て居ますぞ、よく此婆の今云うたことを一生忘るゝなと慄ひ／＼に云ひ終りて、あゝ、お静殿には何様いふ縁でか甚い御世話になりました、死んで御恩は忘れませぬ、新右衛門めもお力めも棄てた妾を拾ひ取つて昨日までも今日までもの御介抱、御禮の云ひ様もござりませぬ、とても現世で御恩を報すことは出来れど、出来るならば屹度草葉の蔭からなりとせめてはお小夜様の御身の御幸福なば祈りませう、新三が上は此後とも何分ともに願ひます、と云へばお静は氣を引立てむと、何の叔母様其様に何やら心細いことを仰らずともよいものを、及ばすながら新様の事には屹度啄を容れて悪い運には向かぬやう妾が何でも庇護しますれば、まあ御心配なされますな、追付來臨とのことゆゑに新右衛門殿お力どのも頼で見ゆるでござりませうと云ふに老婆は苦い顔して、あゝ云うて下さるな、厭な厭な新右衛門お力、妾が此方へ参つてからは此方

へ義理にも毎日見舞に來べきを遂に一度もまだ來ぬ薄情者の新右衛門、それを左様まで仕込んだお力の惡魔女、顔を見るのもあゝ可厭々々、あゝもう御暇申します、南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛と靜かに稱名し初めて其後は復び他のこと云はず、たゞ佛願の力を頼み、無難の念に身を委れて西方淨土の嬰兒たらむと慈父の御名をいと微に呼びかけ呼びかけつ漸く氣息の細りて遂に絶ゆれば、狂氣のやうになりて新三は祖母様々々と呼び、謹慎深きお静さへ我を忘れて高く叫べど答は無く、櫓に吊して信夫草に懸れる風鈴の有りとも知れぬ曉風に搖られてしづ心も無く鳴りたりし。

其四

義理を知らぬにも人情を辨へぬにも大抵程のあつたものなり、現在青柳の家を繼いで居ながら有るか無きかに妾を扱ふのみならず、縁も左までに近うば無き眞里谷の家にお静殿の好意から引取られ居るを、それでよいわと見舞もせず澄し切つて知らぬ面に過し居るお力新右衛門の腹の冷たさ、あまりといへば畜生同様、人間の皮被らせて置くも惜しいほどな物の道理の解らぬ奴め、今でこそ新右衛門と云ひ居れ、

まだ與茂作と名乗つた頃は何様な態して居かつた、實體なといふばかりを取柄にして先代が鑑識自慢から見抜いての婿には呼んだものの、碌な簞笥一つ持たうでは無し、御姫で候て來られた體では無かつたを、何から彼から皆此方で仕て遣つて恥かしからず迎へて呉れた其重恩を忘れた歟、世の中の狀の變つたより御武士衆へ御用達てたものの一時に倒れとなつて身上の痛んだは是非も無けれど、おさくの亡くなつた後は霜柱の潰えるやうに、意氣地もなく是といふ廉も無く、ぐづ／＼と家を零落させて持直さうといふ氣も出さず、加之木更津の茶屋女、素性も得知れぬ流れ渡りのお方に鼻毛を数まへらるる大白痴漢大腰拔、それを仕込んだお力の惡魔め、如何に鄙しい根性なりとも人の形をなし居るからには少しは此家のお静殿にも愧づべきものを、馬の骨め牛の骨め、と棄てし同様にされたる口惜さの餘りにおとわは折節新右衛門お力を恨み罵りしが、遂に一回訪ひもされぬ二人が所行はまことに恨まるべき理あれば、一日の半分餘りを眞里谷が家に暮らす新三は老婆が獨語のやうにくど／＼と唧々恨むを聞く度ごとに小兒心に道理と聞きなして、老婆が涙か貴ひ泣きしては小さき拳を握り固めてお力の我儘

眼よりは愛嬌の光りゑ溢らし、冴えたる聲には時に暢やかなる笑ひを添へて、平常は水を引結べる口の端を春の湖の波と軽く揺がし、さも樂しげに笑ひ興する其態はまた類なく、愛らしきこと云ふばかり無ければ、お静はいふく愛しむに、愛しまれて新三郎はいふく懐き甘えけるが、眞里谷の家の者にはあれど、お勘木工助等に對しては露長閑なる心を持たず、猶我が家に居て繼母などに對することき舉動をなしぬ。かゝれば自然誰彼も新三郎を愛するもの無く、新三もまた愛されたりとおもふこと無く、お静おとわの他には如何なる人の出で來りて優しき言葉を掛け與るとも其を眞實とばせざるほどに手をつけ難き餓鬼なりと村中のもの噂し合ひて、物云ひかくるものさへ無く、遊び仲間の群兒等まで、意地悪根性、つむじまがりと渾名を付けて囃りものとし、ねぶ一丁の除物と何ぞにつけては侮り辱しむれば、左様されて堪へ忍ばぬ氣質の癖の尤ふりたる新三、時には自己に三歳も四歳も長けたるものを敵手として必死と争ひ闘ひて執念く恨み纏はるまゝ、初めは甚く撲たれ搦かれ足腰きかぬやうにされても遂には敵手を根器負かしに負かすも一度二度ならず、始末にいけぬ戻ものの行末何となるべき歟

と大抵の者思ひ避くるも道理まんざら無きにあらぬ新三が上にまた一つ旋毛をまがらせ根性を悪くせしむることの出来ぬ。

其三

人間にあるべき定命盡きれば、他よりは死ねがしに扱はれ、自己よりも疾く冥き世に入りなむとまで思ひても、縋の如き生命却つて絶えれど、前世の業果て往生の時來れば、人には惜まれ我々からも今少時と現世を愛むにせよ攝魂の使者に敢無く誘ひ去らるゝものにや。おとわ眞里谷が家に引取られてより醫藥はもとより朝夕な取賄ひさへ何一つ届かぬ限なく待遇されて、左様さるゝべき筋ならぬに左様さるゝ心苦しさはあれど、お力新右衛門が情無き舉動を見て、日に夜に幾度と無く胸に懊悶の雲を湧かし袖に涙の雨をばふらし、神も道理もあらぬ世のやうに人も身をも恨み居けるよりは氣も長閑に身體も休息まれば、おのづと病も輕みて、眞里谷に移りし年の翌春、村の稻荷の初午祭りとて里の兒童等が藍染き着物に平常服を着換へて遊びさぐめきし頃は稻元氣も増し、折節來りし新三を相手に青柳の家の榮えし往時、倉廩は幾棟ありし、僮僕は何十人使ひし、秋の收穫時倉

入れの祝ひは如何ほど盛んたりし、年暮の餅搗きは如何ほど賑やかなりし、鎮守の祭禮には毎年我家より幟一對神酒神饌を社に納め五駄の酒を村中の若者に出したれば何程家のものの評判よく尊敬せられし、今日初午のことなれば行つて見よ赤倉稻荷にも其頃我家より奉納せし幟の今に在るべしなど、お藤にて聞くお静が是ぞ乞食の糸圖話と世に云はるゝことなるべしと老婆の心の中を察していぢらしがるも知らず、動もすれば唾液の涸るゝ舌もてくどくどと長たらしく彼此一時間の餘も語り続けしほどに勢ひづきしも、菜の花咲き麥の穂出づる頃より又ぶりかへして次第に悪しく、お静が實意に木更津から醫者まで迎へて手を盡せしかど老病なれば是非に及ばず、姿も見せて一睡を死出の川長鳥の鳴いて行く森影黒く星淡き曉天方に薄雲の消ゆるが如く世を逝りぬ、犯せし惡事のあらざればか臨終の態いと安らかに、さして苦しげにも見えず、お静に扶けられて身も掻卷に寄せしまゝ、四五日前より左右離れず引添ひ居たる新三郎が手を把りて、光彩の輝き眼に少時は言葉も無くて瞻視居つゝ、新や汝は此婆が亡くなりし後は何事も此家の叔母様に御願ひ申して必ず立派な男兒になれ、お小夜様とも能う仲好くし

みつなどして緩々と従ひ來しが、例の小流れの
 畔に來かゝりて眞里谷が家も早見ゆべくなると
 齊しく急に駈け抜け先立ちたるは早くお小夜と
 遊ばむとてならむとお静に笑み含みつゝ呼び留
 めもせで後に付き行くに、十分伸びて地に手の
 届くほどなる彼の柳の緑色濃く涼しき蔭の下
 の門の柱に身も隠せて、白き單衣に紅き帯した
 る青児のお小夜が薄紅の蓮花の若を左も無心
 げに拵り居る傍には見なれぬ又一人の、手織ら
 しき紺の單衣着たる色白の八歳が九歳なるべき
 女の兒の、此もおなじく蓮の若の白きを玩弄び
 ながら佇み居りて、二人が足下には咲きたる花
 を走りしと覺しく紅き花瓣の五點六點落ち散り
 在る其風情の優しきに引替へ、新三郎は彼の兒
 をば彈りしにや、橋の此方の左手なる、枯れて
 禿けた大板の蔭に悄然と隠れて、手の没るゝ
 ほど窺め持ち居し藤豆の花を投げ出し、足もて
 頻に蹣跚り居たり。あゝ又僻心を起せしか、可
 憫のものとお静小手招きして従ひ來させむとす
 るに既勘戻はじめて昔を人に向け、蟬の如く、樹
 に粘きしまゝ離れむともせぬ氣色を見すれば、
 例の通り心任せにするより他無しと其儘にして
 橋にかゝるに、お小夜は走り寄つて母様と飛び
 つき、彼兒は首を下げて拙けれど敬禮するを

誰ぞと見れば二三度に見たこともありて、其高
 からぬ鼻をかしき眉つきに記憶ある與助の娘
 のお春なり。お小春坊が、能くまあお來た、
 阿爺と同伴に、お、左様、それは好つた、さあ
 さあ此方へ御來、妾が居なくていけませんでし
 た、お小夜も内へ御入りなさい、片影の出来るま
 で戸外へ出てはなりませんと母様が云ひました
 にと云ひつゝ、戸内に入れば二人は勝手の方へ駈
 け去り、お勘は走り出でて迎へ、嘸まゝ御熱う
 ござりましたる、木工助殿も御苦勞といふ傍
 より、與助爺のこゝと頭を出し、御歸りなさ
 れましたか、いやはや花い暑氣でござりまする、
 一寸御伺ひに御不在へとりまして何ばや別に用
 事でもござりませぬが、折角來たものだから御
 眼にかゝつて行けとお勘殿の云はれます故、そ
 れも左様だとお力づらの讒訴話など仕ながら御
 待ち申して居りましたで、お勘どのから砂糖水
 やなんど頂戴いて甚い造作に預かりました、有
 難うござりまする、これやい、春ッ子、嬢様と
 蔭でトチ狂つて居ずと汝も此處へ來て御辭儀を
 せい、蛙の子は蛙で馬鹿でござりまする。

其六

與助が訪ひしには別段の仔細も無く、たゞ自

己が家近くなる蓮田の蓮根蓮花を手土産にして
 自然慕はしく思ひなしたるお静を、青柳が家へ
 孟蘭盆の舞舞がてらに尋ねしのみなれば、お静
 も好きほどに待遇ひて晝飯を與へなどしつゝ、今
 年の麥の出来好かりしこと、雨も照りも今まで
 の分で行かば稻の結果も豊饒なるべきこと、此
 頃流行る西洋種の家鶏の卵子を能く生して飼ふ
 に得あること、醤油を醸る小糸近所では家猪を
 畜ふことの割合よき田など甚なり其へと云ひ出
 づる世間の雑話の相違となり居けるが、心に
 孚のあるものは必ず愚癡のある常例とて、何
 彼の末より青柳が家の噂に移ると等しく、今ま
 ではばつりくゝ話して居し爺の、手に持ちし
 團扇も捨て、散々に故の主家の衰微を歎き、果
 はお力新右衛門を恨み罵りて青柳の家を潰しに
 出て來たやうなものともて云ひける。心ありて
 にはあらざるべけれど訴ふるるとき緑言の底は
 少しは愁訴して責めては新三を後見して良き者
 に仕立て上げ呉れよの情もあるなるべく、新様
 は幸幅に此方へ始終出入りなされて種々の事を
 見習ひ聞習ひなされば、豈夫情弱にはなられ
 まい、屹度良い人にならるゝと有らうとは存じ
 ますが、御傷はしや母様は無し父様は有つて
 も彼通りなり、お力は朝夕に呵責め散らして根

を口惜がり、我父の賄申妻なまか歎き恨み居けるに、今度いよく冥き界の人と老婆のなりし時も、其少し前に既危しと見てお静より使を馳せさせ新右衛門を呼びしに、直様走り出たらむには臨終に逢ふべき間は十分ありたるを例の愚圖々々に其期に及ばず、程經たる後お力と共にのろりと入來りて涙一滴さすに他人でも死にしやうの挨拶する新右衛門の其口よりは熟柿臭き香の洩れ、お力の衣よりは今草薺から引出して着換て來たりしとおぼしく麝香の氣進りて人を撲ちければ、亡骸に取り着き物狂はしきまで泣き悲しみ居たる新三郎も歎歎すら猶止まぬに、重げに險の腫れたる眼の尻をや、稜角立たして涙ながらに恨み睨みぬ。

心腐りて分別も牛は無くなりたる新右衛門は何事もお力が指揮任せにするを近き頃の常とすれば、末期の水も我が取らでは濟み難き義理ある母の葬式をさへ品よくば真里谷が家より出させむと面倒入費を厭ひて怪しからぬ勝手云ひかけしが、すべてに實意の及ぶだけを盡して寛洪に人を接ふお静も、あまりといへば増長したる不所存と此には少し打腹立ちて、道理あらぬことなれば儼然と御謝絶り申しますと言葉を正くして亡骸を一旦青柳が家に戻しける

に、理の當然なれば是非無しとおもひながらも、お力新右衛門猶顔を膨らし、式ばかりなる葬儀を執行ひけれど、あれが青柳の家から出る葬式か、と人の嘲み笑ふまで見すばらしく、掛無垢さへ無きさし荷ひの棺柩を諸人の見る眼に暴しければ、左様はさせじと云ひ争ひて餘計の御指揮と云ひ退けられたるお静も快かられば、耳にすることのそろ／＼解つて來る齡なる新三郎は猶の事、不吉と聞てわざ／＼申間に出て來りし往時おとわに使はれたる與助夫婦の、齒を嚙んで口惜しがること一方ならず。されど傍より何といつても解らぬ主人の採り上げれば何とも彼とも是非に及ばず、死んだ後まで不幸にとわは無慘や葬られぬ。

其五

草市其處此處に立ちて、苧殼賣る聲喧しく街衢を渡ることこそ無けれ、盂蘭盆近くなれば邸にも邸は邸だけの習慣ありて、家々魂祭りの準備に忙しく、枝豆根芋瓜茄子など供へ物取りに圖へ出づる女もあれば、花からしめて抑々淋しく可哀なるみそ萩を桔梗女郎花菫の鉢まじりに折取つて歸る小兒もあり。平常の意憤漢が急に思ひ立つて何處やらの沼から出して來し連

の花に其葉其根を添へたるを片荷にして、觸らば壊れむ粗末の燈籠を在々賣り行くもあり。いよいよ其夕となれば迎へ火を焚き、いよく其日となれば細經讀ますなど別に異りたることも無し。青柳が家にてはおとわ亡くなりての初の盆なれば供養も取り分け丁寧にするべきなれど、例のお力新右衛門が自墮落に左したる事も爲さぬのみか寺詣りさせぬといふを新三郎より一聞いてお静他の事ながら慍かすおもひ、お勤お小夜に不在護らして木工助爺を引從へ新三と共に菩提所に到り、形ばかりの墓標の前後の草を拂ひ、香花を手向け、圓伽を供し、住持に布施物取らせなどして懇に冥福を默禱し終り、頓て歸るさの道を辿るに、折節天熱くして衆漏る日の光りも頭を灼くかと思ふばかり烈しく、綿雲峯の聳えしやうに疊まり重なりて東の方に峙たる様、見る眼も眩く心地するに加へて足下なる路傍の草の熱香のほや／＼と暖かに人を蒸せば、熱苦しさに堪ふべくも無くて、早く我家に行き着かむと心を焦躁つを新三郎は悠々として無頓着に、此頃お静より貰うたる赤藁帽子を阿彌陀に被りて露天より照り付くる日をも怯れず、小溝の傍の機織草を手持する短き棒に要も無く打きつ、圓の端なる藤豆の花房を摘

りて云へば其儘にして置きしが、お小夜それを小耳に挟んでか箸を措くと直すりと脱け出でて、迷藏戲して遊びし時共に隠れし記憶ある藪蔭または門の扇の蔭など其處此處迷れし末、立枯れしたる大樹の幹に身を寄せしまゝ此時までも動かすありし新三を見出し、突然にわつと叫んで驚かせば、聲色に其とは悟りながら尙撈戻て樹に聚りて面を埋めむばかり抱きつくを、左の肩に右の手打掛けながら横顔覗き込むに、眼かれじとして彼方向きしが、右向けば右より、左向けば左より差覗かれて新三叶はず、ばあど云ひながら急に振り顧ればお小夜却つて大驚き二歩三歩よろゝと後退りして眼を圓くして、新三と面を見合せしが、見合す途端彼此ともに一時にふつと笑ひ出し、互に心解け合ひて、手を取り交し何事が語らひながらお小夜が家の方へと行くに、榛の梢に物の音あり。見れば蜻蛉の小さが、いと大きな網を張り居し色美しくしき女郎蜘蛛に得られて、今や蜻蛉の命の絶えぬに羽を鼓き身を悶蹴けど、斷つこと及ばぬ無慈悲の絲に尾を掬められ脚を縛られ、頓て果つべき状態なり。あれ可哀想な、蜻蛉が死ぬ、新ちやん彼を救助けて、とお小夜は空を指さし示すに、同じく梢に眺めながら新三郎は笑

を含みて、やあ面白い、蜘蛛めが勝つか蜻蛉が負けるか、いい氣味い、氣味、小夜ちゃん黙つて見ておいで、今に蜻蛉が食はれて終ふ、と左も面白げに云ひ做せば、お小夜は堪へぬ顔付して、だから救助けて遣らうといふのに、あゝあれ片羽捲き縮められた、林を捜して蜘蛛の巢を斷つて助けて遣りたい、といへど新三は毫も感ぜず、隔はずともよい、見ておいで、蜘蛛は身體が小さくても中々強いものだから屹度蜻蛉を逃がしはしまいと云ふ時忽然物蔭より草履を抛ぐるものありて、恰も好く巢の最中に、物の見事に中てしかば蜻蛉も蜘蛛も諸共に草履と共に地に墜たり。

其八

誰が爲しことかと見る間も無く、藁草履片穿きにして露はれ出でしは例のをかしきお春にて、落ちし草履を穿くと齊しく、野分の風より恐ろしきものに巢を破られて欲ふことの三分で叶ふべきところを地上に取つて墮されし蜘蛛の、驚き迷ひ逃げかゝるを追ひかけて酷くも踏み殺せば、お小夜は縛めの絲條に兩翼の自由を失ひながら悶え蹴ぐ蜻蛉を逸早く拾ひ取り、一々蜘蛛の絲を解き斷ちて放ち遣らむとする

に、新三は蜘蛛をお春の踏みしを見るより急に駈け來つてお小夜が手の中の蜻蛉を引攫むが早きか地に抛げつけて、物凄き眼にお春を睨みぬ。思ひもかけず望みを失つたるお小夜の泣きたげなる顔、道理も無く憤つたる新三が腹立顔、呆れながら新三が面を輕蔑むやうなる眼つきして打譲り居るお春が例のをかしき顔、彼此互に轉瞬ほどは言葉も無くて視合はせしが、育ちの育ちだけに粗野のお春堪忍せず、何故蜻蛉を殺したと云ひかゝれば、何故蜘蛛を踏んだと新三よりも云ひかゝりて、幾度繰りかへせど其争ひ決まらず。お春めよお止まとお小夜の止むるをも耳にかけず、女だてらに大膽なるお春は自己が無難も長けて手足も大きな頼みてや新三を捻ぢ伏せて謝罪らせむと組みかゝれば、厚弱けれど男の兄だけ危く見えても急には負けざりしが、微力の悲しき腰砕けて遂には取つて押へられたり。されど中々謝罪らむとは云はざるのみか採み合ひ口惜さの餘りの力を齧れて呀とは叫びながら、眼とも云はず鼻とも云はずお春は新三が面を撲つに、鼻血忽ち逆り出でて頬に頬に紅亂れ、見る眼も厭なる態をなしぬ。

が得知れぬ素性の身を以て勿體なくも撲ち打
擲もするといふ話、おのれ憎い奴、いづそ其無
理云うて新様を酩酊するところへ撞見うたら、
唐突に横餐を拳の角の没るほど打撲いて亡く
られた御隠居様新様の胸の中のもやくやを一度
に啗らして呉れうと思つても左様云ふ場合にも
逢はず、世間體を繕ふことは面憎い程上手ゆゑ、
今日も朝方まゐりましたに何や彼や世辭八百な
薄い唇でつべこべと轉り、氣色の悪くなるに
やにや顔をして、小産しい春ッ子を好い兒の憎
惻の兒のと褒ちぎつた末に、何といふかとおも
へば、與助さんはまあ幸福な、此の兒が大きく
なれば左團扇だわと吐言しましたが、何處の國
に鼻といへば蓮根をぼんと切つたやうに孔の見
えて居て、眉といへば十六角豆のやうに可笑し
く長い容貌好しがあるものですか、それを好い
兒といふさへ腹の立つに、生長すれば左團扇
とは木更津あたりの噂に聞く娘の前尻を賣つ
て安樂に世を渡るといふことを、此與助が什兼
ねと見て左様云ふ欺、おのれ自分の腹に比べて
入を測る街妻め、左様き木更津の丸久へでも遣
りましたら馬鹿な男の引懸つて呉れまいもので
もござりませぬと、彼奴が居つた茶屋の名を素
破抜いて皮肉を云つて呉れようと、つい咽頭ま

で出はしましたが、口那殿が見えませんでしたゆゑ其
も悪いと遠慮して残り惜いことをしました、世
辭にさへ其通りなれば毒口は狼達者、眞實彼奴
の舌頭でちく／＼とやられましては私にでさへ
辛防が出来さうも無くおはれまするに、身體
も弱く歸も行かぬ新様の幸さは何程でござりま
せう、考へ出しても御傷はしうて何日も吾家で
も云ひ暮します、然し今日ちらりと聞きますれ
ば木更津の雜穀乾物商ひの御存知もござりま
せう勝浦屋清兵衛と申すが肝煎つて、江戸の何
とかいふ雜穀屋へ丁稚奉公に新様を出すのこ
と、大方家へ置きたうないからの事でお力めが
新右衛門様を徳漬めたでござりませう、勿論こ
れは確乎としたことではござりませぬが、鐵の
頭二ツ梨の頭一ツを足金して焼直して貰ひに先
度此村の牛造に頼んで置きましたを今朝催促に
行きました時、其家の鳴が前方勝浦屋に居たも
の故、二三日前に盆前なで一才舊の主人を尋ね
た折聞いて來ての話でござりますれば、滿更形
の無いことでもござりますまい、何も新様を出
奉公させるには當らぬことながら、家に居らる
るよりは當時の有様ならば寧江戸へ出られた方
が他人の中に入るは辛いやうなもの、却つて
御當人の爲には好かも知れませぬ、けれども御

歸もまだ往かず、西も東も知らぬ人ばかりの中
へ出らるゝは案じられることでもあり、何とか
此方に新右衛門様から御話でもござりましたな
ら、良い御思案を御出し下されたうござります
る、新様を此地へ置いたが可いやら江戸へ出し
たら可いやらからしてが、彼様面倒に入組んだ
家内の關係で見れば此爺には分別に及びませぬ
から唯可いやうに願ひまする、此方は屹度新様
のため可いやうにして下さるに違ひはないと存
じて居ります、唯幾重にも願ひまする、あゝ大
に長坐をいたしまして御邪魔を甚うしました上
御馳走にまでなりまして何ともばやもう恐れ入
りました、蓮が宜しければ又持つて上りまする、
氣の注かぬことをいたしましたが今度まゐる時
は大きな螢を澤山懷様にさし上げませう、や
い春ッ子お暇をせぬか、ホイ居なかつたか、
これはしたり、ハ、毎度喉に叱られます通り
粗忽漢で。

其七

午飯の時お静お勤に吩咐て、其邊に新三の居
らうほどに連れて來てお春お小夜ともに仲好く
膳につかせぬ、と新三を探させしに、御歸りに
なりましたか御見えなされませぬ、とお勤の歸

へる滑稽見さへ夥伴に入れば、詰らぬことにも笑ひ興じて、お小夜が家の方に向ひて歩みは移さざるにあられど従ふお勘の迷惑するまで緩々と遊び行ける。三太といへるは眞里谷が家の小作人三藏といふものの兒にて心足らぬ性質なれば、年こそ上なれ、平生新三の玩弄物となり、木に上れといへば木に上り、田に下りといへば田に下りるやうな能毒無しなるにぞ新三が機嫌を損ずることも無く常に從ひ遊び得けるが、我兒のお小夜新三と共にお勘に譲られ今我が家の前を通り過ぐるを見るより、眞黒々の藁屋の中より三太の母は大聲あげて、お勘殿ちと寄つて行きなされ、三坊も新ちやんと一寸此處へ來い、よい物やるわ、と呼びかけぬ。

其十

立寄れといふものを振りもぎりも仕兼ねてお勘三太が家に寄れば、頭上を掩ひし汚れたる手拭とつて板間の塵埃を拂ひ、さあ、此處へお掛けなされ、不潔代りに好い風の來るだけは妾の家の御馳走だ、と三太が母は拙き世辭を鐵槌のむら剥げしたる齒の紫色がかりたる齒齦と共に見ゆるも知らいで投げ出したやうに演べ立

て、吾兒の日頃厄介になる禮謝心にや、折節丁度造へたる寒天に黒砂糖山ほど掛け、好ければ、何杯でも御代へとお小夜はじめ皆々に侑める。む、好いもの呉れるとは此のことかと少し頬を膨らしながら三太一人代ゆるわ、五六杯まで代へ食ひて、腹が裂くるわ、もう止すがよい、新ちやんとお嬢さまの行儀のよいのを些見做へと、猶一杯と皿つき出せしに止められし時、箸を地上に抛りつけて誰が此様な不甘味のものをもう食ふものと威張りかへりぬ。お小夜お勘が中途に寄り道して、何の彼のと遊び居るとは知られば、もう歸るべき頃なりとお静待ち設け居るところへ、御免なされといふ聲す。はて聞き慣れぬと木工助いぶかりつゝ立出で見れば、おもひもかけぬ青柳のお力にて、彼見るかけ無き草の家より能くも如是びらしやうした衣服で出て來られたものと唾吐きかけて遣りたいやうな輕衣着て、青光りのする甲斐綱張の衆觀みかけ立ち居たり、何かは知られどお力の來しといふに、呼び入れしお静對面すれば、段新三の世話になりて嬉しき山を新右衛門が言葉として丁寧に繰りかへし、扱も彼も九歳でござりますれば、草取りの手傳ひ柴木の運搬びなどもさせます筈でござりまするが、まさか

に其も偶然なり、殊さら身體も勝れて丈夫といふ方では無ければ、到底農夫には不向きなり、また假令は僞つたところで農夫では一生大したることも出來れば、どうか行末よいことになるやうなこともあるならば今からそろ／＼身を其方に入れさせたいと存じて居りましたに、幸ひ木更津の勝浦屋清兵衛様といふが肝煎つて江戸の同商賣の方へ奉公に出して遣らうとのこと、今の分て青柳の家からは、此儘たゞ成長なつたというて新三に其の曉渡さう財産のあるでも無ければ、どうで家に置いて碌なことの有らう譯も無し、いつそ九歳十歳から他人の中から見せて商家に賢う生長たせ、先祖の業は繼がずとも一廉の商人にならるゝやう爲て置いたが當人の得と料簡いたしまして、商用で此の邊廻つて行き居られます清兵衛殿の明日歸らるゝを幸ひ連れて行て貰ふことに定めました、木更津から先も清兵衛殿の東京へ行くとき連れらるとの話ゆゑ、まことに安心でござりまする、此方には段々新な御品屋におぼしめして種々御世話下されましてに、御ことわりもせず唐突に彼を東京へ遣りましてと存じまして、今までの御禮かた／＼一寸御歸りに上りました、呉れ／＼も色々御世話下されまして眞實に有り難うござり

與助殿の歸らうといはるゝにお春坊の見えぬは大方お小夜と一所に遊んでであらう、木工助其邊を見て來よと主人の命令するに、木工助近傍を見巡りて此地に來かゝり見れば、お春は赤き額を眞赤にして髪振りさばき、新三が上に馬乗りになり居り、新三はまた眞青の額を鼻血塗れにして組み敷かれ居る、其傍にはお小夜爲すべき術もなく唯うろ／＼として佇み居れり。これはと呆れ果て、急にお春を抱き退け、新三をいたはり、何で喧嘩をなされたか、えゝまゝ鼻血を如何にかせれば、と忙しく袂を探つて怪しげの紙とり出し圓むる間に、執念深き新三一寸の隙にも恨みを忘れて、お春に又もや攫みかかつて小鬟の毛をば差り取れば、これに腹立つてお春も新にむしやぶりつくを、えゝ何方も何方だ、五月蠅過ぎる、汝が一體女の癖に餘りお嬢婆な、と狼狽て叱りながら木工助お春を突き退け、お嬢婆まあお春を連れて早く御家へ御歸りなされ、兩方此處に置いてはいけぬ、とお小夜にお春を連れ去らすれば、流石女だけにお小夜に逆ふことまではず、不承知顔して伴はれ行きしが、少し離るゝと頓て衣服の塵を拂ふなどいよく女に粉れ無し。兎角して木工助は新三が鼻血を止め、額を拭ひ、背後の土を

拂ひ遣りて、身體が改むるに別段仔細も無ければ、まあ／＼爺と一所に御來なされませと連行かむとするに、いやだと言、振りもぎつて駆け去りぬ。

其九

木工助爺の連れかへりたるお春を見るより與助は譯も無く無茶苦茶に吾が兒を叱り罵りしが、お小夜が母に新三とお春とが喧嘩せし概略を語るを聞きていよく憤り、新様を我が舊の御主人様の坊様とは豫て言ひ聞かしてあれば知つて居らうに此尼め、と打ちも仕かれぬ有様に散々に云ひ懲せしかど、お靜が止めずば拳固の一ツ二ツは頭上加ふべきところを、左まで口穢くさへも叱らで済ませ、いやもう飛んだ長坐をいたしましたと律義に辭誼して、木工助お勘にもそれ／＼告歸の挨拶する間、お春は口にくそ出され二の腕の痛みに堪れば密に袖を捲りて祝るに、齒痕あり／＼と残りて血は流るゝまで出でされど肉は殆んど咬み取られかゝり居れば、恐ろしき氣丈夫のもの、爺が爺だけ色を動かさけるが猶我が父に訴へようでも無く、其まゝ袖を下して蔽ひ隠すを、お靜眼敏く見つけて、清き水に塵埃を洗ひ去り、根が腫の家だけ貯

へある何やらの藥を塗りて細帯を施し遣り、歸るに臨みて膏藥一具、菓子一包、別けて女の悦ぶなる鹿の子の小巾着簪など與らせやれば、恐れ入ります恐れ入りますと日續けにして與助親子は悦び歸りぬ。

謝禮を取つて教ふるといふにはあらねど、小川の雑魚を漁り檐下の狗の兒を颯りなどして尊き幼時の日を消さすべきにあらずとのお靜が好意より、近所の牛太丑松等が兒五六人を預かりて、お小夜新三を自家で教育む次に、讀書習字算盤の概略をいと優しく教へやれば、規則といふやうなる物なきまゝ嫌と思ふ時は來ざれども、大抵毎日二人三人乃至五人六人の兒童は面白半分みづから進んで來るに、お春と爭ひし其翌日は常に缺かさず來る新三郎遂に見えず。明日はとお靜心待ちに待ちしに其翌日もまた見えず。爺のこととて他の兒童等も來ぬが多きに、遊び敵を待ち焦れたるお小夜淋しさに得堪へて新三を訪はむと云ひ出せばかならずとも新三に會はゞ自家へ連れ來て遊ばせよと云ひ含めてお勘を從者に出し遣りけるが、一日會はざりしに仲好き同士の交情ひとしほ濃うなりて互ひの遊び平常よりは面白きに、搦てゝ加へて何事も新三郎が云ふまゝになる魯鈍の三太郎とい

兒童にも思ひつきといふことは有る習ひにて、半開きになりたる荷の葉を新三把出だして兩手に捧げ玩弄するに、緑の色のうはしくして翠玉の大盃とも云ふべければ、此中に云ひて差し出すな、木工助も可笑がりて、麥湯に砂糖を加へたるを、銚子などより酒注ぐごとく土瓶傾けて其中に注ぎ與ふるに、朱塗の大杯なら大江山の酒吞童子といふ姿にて飲まむと首を杯中に埋むがごとく低くしたる其狀可笑とも何とも云ふべきやうなく、お小夜の横合より長くて細き莖を銚子ながら其一端を杯中に入れ吸ひ試むるも風情あり、頓ては新三も大盃を木工助爺の手に渡してお小夜を學び莖を銚子甘露々と美味がりぬ。

其日お新三を問ひ試みるに、我家を出づるか嬉しとは思へ可厭とは思はず、知る人も無きところに行かむは厭にはあれど可きことならば随分堪忍もすべし、されど此村を出でむには、お小夜等にも逢ふこと難くなりて共に遊ぶ機も無くなるべければ悲しく淋しう思ふ由など問ひに連れて答へたり。強て東京行を可厭とも云はば、齡もまだ足らぬことなり、今二三年は我が手元に置きて朝夕何くれと無く心づけ遣らむと、強ても青柳に云ふべき心算にてありしが、

思ひのほかは齡儼りの分別ありて、丁稚奉公のあらまし、斯様いふものといふことか説き聞かせしに、合點の行きたると覺しく、怖さも半分無きにあられど、家に居て朝に夕にお力か呵責に逢はむよりばと、決心といふまでには至らねど思ひ傾きたるらしければ其意に任せて止めぬこととなしぬ。

翌日果して新三は東京に遣らるゝことになり、清兵衛に連れられて眞里谷が家に立ち寄れば、これを少時の分れとお小夜も悲しみ、新三も名残の惜みけるが、お小夜が足の堪ふるほどは送り行かむとお静の云ふに、みな同意して木工助ばかりを今日留守に、馴染の例の小狗まで尾をば振り／＼従ひ行きぬ。此月此日二人別て、一人は世といふものの中に入り、一人は母の懷中に伺いつまでもと止まりけるが、酷きは青柳の家の者にて、一人送るものも無かりき。

きくの濱松

其 一

一年第一の厄日二百十日も無事に過ぎたか、

やれ嬉しや、豊稔萬作、今歳は藏入が樂みなと農家の男女喜び合ひしは僅四五日前なりしに、昨日の卯時より曇りそめて辰刻に溢れ出したる大雨の尻を人情知らずの風の神めが推し、降るほどに吹くほどに、稻の穂は倒るゝ、田の畦は潰ゆる。立木は折るゝ、家は傾ぶく、一切亂離粉灰となつて了うての今日の此の日本晴の天の色の美しさ。蒼々として空に一點の塵も無く、小面の憎い嘉殿が得意氣に羽を伸してとろゝと鳴きながら轆を描いて舞うてござるは下界の狼狽歎息を氣の毒ともせず笑うて、歎思へば人間ばかりは神様とやらに馴られに生れて来たやうなものなり、親田に種子を下してより、植着け、草取り、水の世話、幾千の辛苦は疲勞だけ詰て茲に終りたれば。

東小倉足立山の麓に枳殼積みたる石の垣を折り繞らしたる一ト櫓への、門には古びし額掛かりて剝落したる緑青地に其の金字のみ光り牙けく金仙禪寺と讀まれたる寺内に松の落枝落葉を掃き居る僧僧四五人あり。いづれも齡は十五六、鼠色の布子に腰法衣、晝に見る如き打扮して、竹箒を取り餘年も無しに昨夜の暴風雨の噂しながら頻りと門より本堂まで、翠影婆娑と立列なりたる松の樹蔭を掃き居けるが、中に齡や

ますると言葉賢く新右衛門が名代に演べぬ。あはれ新三明日は知らぬ人ばかりの中に入らるゝと知らでお小夜と何して遊び居るやら。

其十一

可とも不可とも一句の言葉も出さず、唯左様でござりまするかと思ひ挨拶してお力を歸せし後、お静何となく世のさま／＼人のいろ／＼を彼此と考へ居けるに、門内ざわ／＼と兒童の笑ひさゝめく聲して、年甲斐も無くお勘までが笑ひ崩るゝ態の見ゆるが如く哄然響きて聞ゆれば、何事して左までには興するぞと立上つて小窓より外の方を見るに、心足らずの三太連の葉を頭上に被りて太腿の出づるを隠はす衣裾高く掲げ、何か知らず跳ね舞ふ傍には、お小夜掌を拍ちて歌ひ難し、お勘新三は腹笑ひ出して太鼓拍つやうに打敲き拍手取りながら、いづれも得知れぬ郷俗歌を興に乗じて歌ふ態にて、流石の謹み深きお静さへ面上に笑ひを上するを免かれぬほど、三太の高く躍り低く舞ふ身振といひ、或は開き或は闔づる手付といひ、馬鹿々々しくもまた可笑ければ、いづれも其を打笑ふに加へて三太自らも嬉しがりてや顎も脱しかれまじく哈々と笑ひ應げるなり。我等が家のお背戸

さ出て見れば、松の樹三本に杉三本、合せて六本根を見れば、根さは根草が生ひかゝる、梢さには鴨が巢をかける、昨夕生れた鴨の子が、今朝は這ひ出てちよ／＼と、と歌ふに連れて、お小夜は掌を拍ち、新三は腹を敲き、三太は無茶苦茶に踊ること蛙兒の如きに、お勘さへ浮されて瓶のやうに肥え太りたる腹を敲けば、皆々わつと笑ひ出せしが、餘りに跳れて跳れ疲勞しか地上にどざりと臥轉びしまゝ三太少時は眼ばかり動かし、あゝ草臥たゝと獨語ちぬ。應もあらばに捲り上げたる裾をも下さで鼻の頭に玉なす汗を漉へながら荷の葉笠を被ぎ歪めて、身をへの字形手なくの字形に塵土の中へ横たへつ、鼻息ばかり荒くしたる其態にまた皆笑ふ時、お勘王人が窓の中より覗ひ居るを不圖見つけて、周章狼狽へ、首を縮め、勝手口へと走せ去れば、お小夜新三も心付きて、急に沈着顔を作れど、額の汗は生憎に髪をも濡らすばかりなり。ホ、大分面白さうな、新ちやんの難しも上手なれば三ちやんの踊りはまた眞實に巧い、誰も草臥たらうに、さあ此からは家へ入つて遊ぶがよい、勝手へ廻つてお勘に足を洗つて貰つて御上りお上り、といふを半分聞きもあへず死んだやうに寐居し三太はむく／＼と起きるが早きか物蔭に突

其十二

と逃げ込み、新三お小夜は裏へ廻りぬ。
さあ／＼誰君も家へ上つてお遊びなされ、爺がよい事を教へてあげます、と木工助何か面白きことあり顔に誘へば、三太一番に洗ひし足を拭きもあへず遠慮無しに座に着きて手／＼膝に置き、爺の面を然も不思議げに眺め居るに、木工助はく／＼と笑ひながら、水桶に投げ入れある與助が土苴の蓮の花葉を其まゝ縁の端に持來て、小さき一つの莖を取り、摘み折つては長く出づる絲を頻りに撚り集め、往時中將姫といふ姫様は此藕の絲で曼陀羅と云ふものを織つたさうな、誰君も此から絲を取つて御覽なされと老人は老人だけに愚にもつかぬことを云へば、三太は顔を膨らし頭を擡げて、く／＼と鼻を鳴らし、何の詰らない、馬鹿々々しい、それより藕の其莖で砂糖水でも飲んだ方が餘程美味て有り難いや、一昨日隣家の婆様に教へられてから昨日も今日も自家で飲んだが、おい／＼爺さん砂糖水でも調製へて呉れないか、錢獨樂で絲をとるやうな詰らないことを教へて呉れずとも、と云ひさして大に笑ふ其尾について新三お小夜、砂糖水をと強需みける。

はそれまでなり、元來僧は五明に通達せねばならぬ其五明の中工巧明に繪畫は攝せらるるものゆゑ、往古の高僧いづれも皆丹青の技に秀で玉ひたるなれど、普通の畫師のなす如きこととなさむは律に觸るゝ廉なきにしもあらざれば、裁松原より好める道のことにはあれど敢て自ら技を露がむとは更に思はず、たまゝ香料顏具料等の名をもて報酬などを得ることありとも一錢なりと身にはついで、先づ師の海音禪師のために費し盡して、餘れるをも寺中の僧等が衣食の足しにと役僧義海に必ず與へ居たりけるが、中津の雜賣屋此度金仙寺のため破損に及びし浴堂の改築なして呉れたるより其義理もあり且は懇望の切なる芳志もあり、是非に我が意に滿つるほどの者ななし出でて饒らむと漸く描きかけたものを、危くも玉山のため無にせられむとせしかば大きに驚きしなり。

三

故郷上總へ行きて見れば青柳眞里谷皆すべし様子の変れるに友雪より頼まれしことも一應は謝絶るべしと思ひ定めて小倉へ歸り、其後博多へ寺用ありて廻りし序に友雪方へ音問れ、

久々無沙汰の挨拶より王之助の身の上について話し出し、一旦御話はありたれど、故郷の現狀如是如是なれば、王之助殿を内田の家へ御貴ひ申したところで、御成人までを御後見いたすべき小生は方外の身なり、上總に然るべき親族は無し、萬一小生が病なにとに罹らば如何ともし難ければ、王之助殿を御貴ひ申す儀は折角の御談なれど御ことわり申した方が穩當のやうに存じますと云ひけるに、友雪流石は心得たる老人なれば、早くも餘計の苦勞を背負ひ込むまじと裁松が腹に定めしとは見て取りたれど、其物堅くて思慮の遠いところまで届くにいよく頼もしくて、王之助に内田を名乗らせ置けば裁松如何に方外の身なればとて世話をせぬことはあるまじく、又裁松の蔭にさへ立たせ置けば萬々當人のため悪きことは無かるべし、随分千兩二千兩つけて遣るといへば子の無き者は相應の身代にても貴ひに來べきが、なまじなるところへ婿養子に遣るほど親の無慈悲は無しと我が往時此家へ婿に來し時のことさへ思ひ出して子の行末のためを圖るに、どうでも風流氣あつて商家には向かざる王之助のことゆゑ裁松に任すより他好き道なしと思ひ定め、何も彼も我が方では申すまじきなれば

一切御自分次第となされて王之助を御貴ひ願ひ度、失禮なる申分ながら拾つる兒にも添へ物する習ひなれば子の可愛さより眞以て十分勘考の上貴僧を見込御頼み申したる儀につき御親類の有る無し、頼もしからぬ頼もしきに隔たらず、御存念通りと定めて彼めを御貴ひ下さるまじきや、何處までも貴僧を信じての上御頼み申入るゝなれば、別に面倒なること無く御勝手に御育て下されたしとの返答。それでも厭とは流石に云ひかれ、且ばさうまで云はるれば王之助を教訓して我が家を起して貴ひたく無きにあらず、終に合點して王之助を引連れ歸り、上總へ信書幾度か往復の後、内田氏をば冒さしめぬ。

物やさしき裁松絶えて叱り罵ること無けれども餘りの惡戯に腹たちて、以後を懲らむと許々と道理を説き聞せ、平生餘りに我意任せなるとより他の人を凌ぐことの多過ぎることまで十分に戒め、畢竟此繪にもまだ何か書かれざりし中我が見つけたればこそよけれ、左無くば思はぬ苦みを我に興ふるところなりしと云ひ掛くるや否玉山は、今までさへ平氣の面して聞き居りしが手を拍つて笑ひ出し、御師匠様、申しませうか、吃驚なさりまするな、落書は仕て居りま

や劣りたる五分刈頭の小僧の掃く箒の先の力

餘りて反齒の鎌僧の法衣の裾に松子一つ打當つ

れば、ヤイ玉山め、氣をつい、汝のやうに亂

暴に掃いては掃除が何にもならぬ、後からく

鷹が散ると口を失し罵る傍より、五分刈り頭

め謝罪れ、汝は平生高慢で全體我等を馬鹿に

して居る、謝罪らなければ此箒で頭をコツと

造つてやるぞと白雲頭、巾着頭、才徳頭な

んどの者等尻馬に乗り立掛かりぬ。

鳳眼とかいふ細き眼を掩ふまでに薄紅の臉

は頬と共に膨らみて、下りたる眉つきに愛嬌あ

る玉山、早くも身を交して五六間ばかり飛び退

き、何な味噌指り坊主めが、悪くばお打ち、逃

げ出すわ、ばかりながら足がある、あ、べか

こうと戯るれば、此奴め、獅たずに置くものか

と箒を取つて追ふもあり、松子取つて投ぐるも

あり、折角掃きしも無益となつて昨夜の態をま

た茲に、折夜落葉狼藉たり。

頻りに逃ぐるを追ふこと愈々急なるにぞ、手

を空さまになして玉山盲目走りに走る途端、堂

の方より出て來し僧の胸にハツタと衝突れば、

僧は笑を面に浮べ、また争鬭か、わんげくな

と云ひつゝ直ちに取つて押ふる其手をすりと

掛り脱けて、お師匠さまか、バ、パーと聲のみ

遣し逃げ去りたり。

其二

十人寄れば十種の人の氣性、大悟徹底したと

虚言にもせよ先は云はるゝ御釋迦の十大弟子で

さへ迦葉は剛く須菩提は柔しくて乞食をするに

も相違ありしとか申せば、まして權兵衛八兵衛

の酒好き餅好きそれゝなるは當然ながら、世

に玉山ほど不思議な習氣薰染を以て生れたるも

あらじと、師の栽松の折に觸れては云ひ出づる

通り、實に玉山はまた十二の兒童なれども不思

議の性にて、自己が師の他の者といへば大人兒

童の別無く、頭から愚人と見侮りてか毫末も遠

慮の舉動無く、饒舌りたれば饒舌り騒ぎたけ

れば騒ぎ、能く笑ひ能く戯ぶれて、如何なる氣

むづかしき男、位高き人の前をも露懼からず、

日々自己が氣まゝ氣隨に飛び跳ね遊び廻るほど

に、初めは誰しも厭ひ嫌へど、此方さへ馴染て

見れば無毒無邪氣の臆面無しにて、却て可愛ら

しくこそはあれ憎みたうても憎まれぬ愛嬌ある

兒なれば、終には玉山々々と呼び囃して菓子

一つも自然と與ふるやうになり、勝手に任せて

遊ばせ置き、紙筆を與へ顔料を與へて、天性の

嗜好から上手に描く畫を所望なんどするに、い

よいよ増長して我儘はずれど、聊しきことは更

にせぬより海音禪師にまで玉山よ玉山よと和

しき御聲をかけて愛まるゝに至りぬ。栽松圖

らず玉山が他の鎌僧等と挑み合へる認めて捉

へ懲さむとせしに早くも逃げ去りたれば是非に

及ばず、鎌僧等が喧しく玉山の非を訴ふるを

聞き捨てにして自己が房に歸りて見れば、こは

如何に、玉山獨り端然と我が座を奪ひて枱張り

にせし我が描きかけの畫に打對ひ、筆を含みて

眺め居たり。

南無三、其畫に惡戯されては我が十餘日の丹

青は水の泡ともなつて亡せむと、何をするぞと

叱るが疾きが振き取る如く奪ひ返して、見るに

筆をば加へし痕無し、嬉しや扱は此狼狽、まだ

一筆をも加へざりしかと思ひながらに正しく坐

して、以後またかゝる事をせぬやう十分叱つて

懲し呉れむと吃度面を打護るに、恐るゝならむ

と思ひの外銜みし筆を其まゝにして師の面をば

打仰ぎ、言葉も發せず、いと長閑氣に、少しは

甘えたる顔なり。

中津の雜貨屋といへる蒙家より懇篤に頼まれ

て、辭むに辭みかれ、囑に應ずるからは面白き

もの描かむと工夫に工夫の上冬の田家の圖を

なせしに今半途にして玉山の筆か加へられな

其五

齡にはませて小僧らしきほど才發して何事も能く解れど流石童兒だけありて優しくさるゝ方には馴染易く、三度に一度錢ある時は正太郎が菓子なんぞ振舞ふに、早くも親しくなつて互ひに戯談も云ひ合ふやうになれば、正太が方にも玉山が可愛く、玉山が方にも筆屋の好もしく思ふものから、筆催促に行つて來いと師の一言に悦び應じて、門を出るや否橋賣りの惣六爺がところの黒狗を従者に連れ、四本足と二本足の競走、いづれが疾きと云はぬばかりに市中をさして走りける。筆屋の小丁稚店先の上間にて革に毛を包み、すくもを塗して毛の膩を取り居る背中を丁と擲き、乙公、獨樂は上手になつたか、矢張り乃公より下手だらう、明いて居るなら少し貸せやい、上へ抛つては紙で受けて十五遍までは仕て見せるぞと用事は既傍にして自己が遊びの語にかゝれば、小机を前にして眞鍮の小櫛に筆の毛を扱ひ居たりし主人の正太は仕事しながら、奥の間の火鉢の前に坐りて何か饒舌り居る婆の談話に耳を假し居しが、オ、玉山様か、よく御來臨だ、さあ此方へ御上りなされ、幸ひ我が何や彼や常々頼む婆様に今

貰うた萩の餅がある、乙吉と二人で喫るがよい、ヤイ乙吉汝も此處へ來て御相伴せい、我も一つ意地穢なせうかい、婆様あり難う、御蔭で小さい御客様にも御愛想があつて何よりだ、と剥げかゝつた一ツ重の蓋を取つてさし出すに、御禮を言はるゝほど甘く出來てもあめわ、と笑ひながら婆はスバ／＼御先煙草、得意の色は目にほに見えたり。

コレ乙、御客様さへまだ手を御つけなさらぬに、汝のすくもだらけの手を突然突込まれて堪るか、仕事といへば愚圖り／＼と急には中々仕居らぬ癖に、食物とさへいへば一番に馳せ出る鄙しい奴め、まあ手の尖でも洗つて來いと叱られて後へ退る乙吉を見て笑ひながら、コレ／＼亭主、汝も中々賢い奴ぢや、御師匠様に頼まれた刷毛と筆とを何時造るのか、度々催促しても出來ぬが、今日も大方出來て居らぬな、そこで使ひの此玉山に萩の餅を食はせて胡麻かさうといふのであらうが左様に行かぬぞ、然し折角呉れたものゆゑ、乃公は食ひたくもないが食つて置くぞ、と笑ひながら遠慮氣も無く食ひばじむれば、呆れて眼を睨りたる婆を見ながら、玉山様の賢いには何共云はう言葉が無い、あやまり入つてござりまする、併し唯今かゝつて居ま

する刷毛さへ出來れば御註文だけは悉皆出來まする、ならば出來ました筆の分だけ今日御持歸りになりませ、刷毛三本も出來次第近日持て參じますると、眞顔になつて亭主の云ふ言葉の終るを待兼ね、ハ、宜いわい、小生の役目は既済んだから、これから緩々餅を食つて獨樂を廻して遊んで歸る、乙吉、汝は叱られたので食ひたさうな顔は仕ながらもじ／＼して居るな、可哀想に、此處へ來い、幾干でも食へ、我が興る、其代り乃公に獨樂を假せ、と無理に獨樂を假り受けて、裏の物干杭の下にて切りに獨り遊び居けるが、何かは圖に乗りてべちや／＼と饒舌る彼の婆が聲のするに何事ならむと思はず耳を立てぬ。

其六

長煙管に煙草詰めながら婆は少しく正太が方に身を向かせて、それはいけない、破壊といふもの、左様いふことを云うて居て済むものならば世間は滅茶苦茶、子も無くなれば親も無くなる、家は門列斷絶して捨子と父無し子ばかりが平一面に出來る筈だが、誰しも若い中はお前のやうなことを云うて居るもの、も少し歸が行けば世話を焼く人が無くてもドツコイ是では治まり

する、と云ひ出づるに、裁松再び吃驚して、
なに、落書を仕てあるとな。

其四

玉山が一言に又吃驚して其指さす方を檢む
るに、成程心づきて見れば我が描きしにはあら
ぬ小禽二羽三羽を描き添へあり。されど此處に
は恰も我が同じものなほ描き添へむと既に腹案
なし居けるに、筆も拙からず描きしなれば、全
體の畫を害れもせず、從つて眼に觸りもせざり
しが、思へば不思議にも能く其位置より其題目
まで暗合せしものかな、勿論此圖の遠近左右を
微細に吟味し光景風情を詳く見て取りたらむ
には此處に小禽の二三羽の無くてはならぬこと
なるが、半成りたる圖を點檢して此處に此物あ
るべしと悟りし上に描き中てしならば眞に行末
恐るべく、又此圖をば一瞥して思慮分別の暇
無く、直ちに此物此位置にあつて面白かるべし
と感じて描きしものならば愈々以て畫三昧に靈
性既に入りたるものにて、筆こそ今は尙幼稚け
れ、畫道の神祕は會得せしものといふべく、い
と恐ろし、いづれにもせよ此兒の後來餘事にか
けてはいざ知らず丹青の技に於ては恐らく我が
測られぬところにも或は到らむかも知るべから

ず、最良の慾目か知らざれど、我が手許に連れ
來りしより一日一日上達して、今にても既世間
に名を知られし畫人の幾干かを凌ぐ技倆はあり
と見ゆるに、今幾年かの功を積まば如何に不思
議の域に入るらむ。たゞ畫道にも學問の無くし
ては不利のこと多しと、論しに論して、讀書を
勧め詩文も學べと常に勧めむれど、兎角書卷を
厭ふのみが未來のために悪かるべしと心掛り
のことにはあれど、畫の一技には此上とも自ら
嗜好を衰へさすことさへなくば我が助言は殆
んど用無きほどならむと舌を揮つて感歎なし、
叱言も遂に何處へやら、たゞ惡戯をば以後はす
な、と輕く云ひたるばかりにて其日は事無く済
ませけり。

金仙寺を距る左まで遠からぬ小倉の町に中山
堂といへる古くより筆墨文具を商へる鋪あり
て、主人の正藏と云ひしは去年の夏の流行病
に、藥といふ間も無く此世から奪られ、其女房
も落膽せし折から柳散る頃終に無常の風に誘は
れて冥途へ行きしが、たゞ一人残りし倅の正太
郎といへる今の主人、齡は二十五の遊び盛りな
り、家に定まる女房は無しなりなれど、幸ひ
商賣の道には疎からず筆造ることは親父の正
藏にも優りたりと云はるゝ程なれば、居馴染た

る家に不祥の紙札斜に貼るやうにもならぬのみ
か、商賣の額は同じくとも食ふ口の減つたるよ
り先は却て氣樂に生活して行きける。されど正
太は年若なり、頭の抑へ手も無ければ腕は好け
れど自然疎漏に萬事なり勝にて、特に洗へられ
たるものなど打捨て置きて好める酒の酔の餘り
に一夜半夜を他所で遊びて過ぐす時もなきには
あらぬものの、自己が好みに筆造らせむな
んと云ふは孰れ文人墨客の輩にて多少算盤づくめ
なる世人と異なる節もあれば、一日二日約束を
違へたりとて強て責むることなまなきめのみな
らず、金錢ばかりを貴しとせぬ一種變りし氣象
ある正太を愛する傾きさへあり、されば正太は
一月に何程利を見て何程費すものか、敢て能
くは知らず、朝夕燈炊のことを窺れて小さき店
の手助けまでする小僧一人と二人輩らし、別段
奢りといふでも無けれど、有れば棒手振に大盡
がられ、無ければ深庵で三度四度と済ましなが
ら平氣な顔して居るといふ調子なるが、畫僧裁
松もまた此男を愛して此前月より刷毛二つ筆
四五本を箱み置けるに、玉山を走らせて催促す
る二度三度と及べど、何時も今少しの間とのみ
にて埒明かす、今日こそばとて玉山を一日町へ
と遣はしける。

エヘ、エヘ、それでも表面は獨身者が氣樂で好いと云ひ立てゝ居る裏には何處の娘でなければ合點が出来ぬなんといふ望みがあるのでは無いか、若し左様ならば其様に又骨折つて見もしよう、いつまで今の儘ではいけぬ、と縷々酒々と獨身住みの非を説き諭せば、正太は老練の舌端に敵ひ難くて返辭もなせず、にやり／＼と笑ひ居けるが、始終を聞き居し玉山は笑ひながらに水口より首さし出して、ヤイ／＼饒舌婆の世話焼婆め、紫色の齒齲を出して、エヘ、エヘ、エへと笑ふ奴ヤイ、老耄婆の饒婆め、汝は説法上手だが會者定離といふことも知るまい、正さん、我が加勢を仕て其婆を一寸負かして遣らうか。

其七

思の外の機合より嘴を容れられしさへあるに、齡は成人にも達せず惡口は堪忍し難きほどなれば、重ね／＼老婆は怒りて、えゝ、此小僧が何れ知らずに餘計な口を敵かうより獨樂でも廻して居るが好い、まだ乳臭い汝達か分ることでは無いほどに、黙つて彼方へ行つて居な、御饒舌婆でも大きに御世話、えせ小賢しい猿松め、會者定離でもア草履でも關つたことでは少し

も無い、他のことを何とぞ役とかいふ其隙に口の端の萩餅の餌でも取るがよい、見たくても無い穢い顔をして居ながらに何を云ふ、と急ぎ込んで唾液を噴き／＼叱れば、玉山袖もて口の端を拭き／＼此方へ上り來り、婆さん其様に怒らすともだ、汝は元來愚蒙だから顛倒といふことを知るまい、憚りながら乃ハ様は御師匠様に聞いたので悉皆立派に心得て居る、食ひたい飲みたい惜しい欲しい可愛い憎い損だ徳だと思つて、其に従ひ動くが世間の人のすること、可愛いから大切にする憎いから打た／＼く損だら廢す徳だから爲ると一々道理が有るやうだが、可愛い憎い損だ徳だは一時的の假の思ひ故に頓で色々變つて行き、残るは自分の仕出來した業力ばかりとなるは必定、それだに其處を人點しないで此では如何だ、彼では此様だと氣を揉み焦るが顛倒といふもの、左様で無くてさへ人間に生れただけに有つて來た因縁で引廻さるる上、迷ひを取つて顛倒を簡造眞實のことと思ひ、泣いたり笑つたりした日には、鞠を追ふ猫と同様、一生果しのありやうが無い、ナント乃公様の説法えらいものか、如何だ／＼、女房を持つたんといふは、大顛倒の大間違ひ、損徳づくから割り出して婆い云ふやうになるもの

か、病氣の時は看病して呉れたにしろ、死ねば矢張り左様ならだ、女房を持ては屹度保護別れるといふことがあるし、第一女は意地が悪くて、邸格で、世話屋で、喧しくて、直に乃公の事をお師匠さまに告げ口したりなんぞして、頭髮が臭くて、母人ぶつて、高慢で、赤子なんぞ生みくさつて、きやあ／＼と泣かせくさつて、悪いことばかり澤山ある、それだによつて此乃公は女のしなく氣取りくさつて歩行くに町で出逢ふ時は何時でも唾液を足の前三尺ばかりのところに向つて必ずふい／＼と噴きかけて遣る、家鶏でも雌は醜い、雄が綺麗で立派でよい、正公汝も乃公の黨になつて女房を持たぬのがよい、女なんぞが語るものか、と口賢くも聞きしこと見しこと自分が思ひしことを打交にして云ひ出づる、條理は立たれど言葉むづかしく、老婆には解せぬことさへあり。エ、生臭氣な味噌め、聞き囁りの片言に自己が出鱈目な交せて饒舌つたとして誰が聞くものか、筆を貰つて早速と歸れ、そろ／＼暮れて來るも知らぬか、と怖ろしい顔し再び罵れば、流石に兒童なり、自己が命令られて來し要事を急に思ひ出して、そんな筆を受取らう、また此次に遊びに來るぞ、婆さん其時また我に萩餅を持つて來て呉れ、と勝手

がつかぬと自分から料簡をして下世話で云ふ破れ鍋に綴蓋、それ相應の縁を組んで、それから十代二十代の遊びの孔を埋めて行く中親父殿となつて眞の末の樂みが出来、いよく動かない確固な料簡が据わるといふもの、ナニ關ふものか女が欲しければ姉妹嬢ひに行き、酒が飲みたければ料理屋に走る、紙幣の一枚か二枚持てば筆屋分際、榮耀は足る自由が出来ない時尻を据ゐて出精すれば如何にかならぬことは無い、と悟りとかいふものを聞いた人のやうに云うて居れば、一寸聞きは流れ河の水のやうに清淨潔白で好いやうなもの、それは潮時が好い中の太平樂、年中一ツ潮もさへれば年中一ツ風も吹かず、人の身だもの病氣も無くては濟まず、世の中の廻り合はせなりや職業の隙もあらうといふ譯、さあ左様なつた曉には世間を屍とも思はなんだ洒落た顔つきにハの字を劃いて、弱つたところで一人苦しむ、何程美しい姉妹でも煎藥の世話一ツして呉れば乙吉にさへ劣らうし、平常が平常で有れば有り従ひの生活さまで有つた日には悪い潮にかゝつた時何と動きの取りやうも着くまい、紙幣の一枚か二枚があれば此處では生命を取り留める藥劑を買へやうといふ場になつて初めて平日の不始末を悔むやうで

は役には立たぬ、さあ是でもまだ獨身が氣樂で好いとは云はれまいに、エエエ、それ口をもぐつかせて云ひ破らうとしても老婆の云ふのが道理なれば、何とも仕様はあるまいかの、エエ、エエ、エエ、第一手近に日々の無益な廢りも獨身者では中々少いことでは無い、乙吉も主人思ひの感心な好い兒ではあるが矢張り男は男だ、五厘買へば二人暮らしに十分な菜を一錢買つて、先刻も見て居れば、ト、ト、と隣りの鶏を呼んで殘餘を御馳走して居る始末、今來た小僧さんの連れて來た狗も彼調子では此老婆なんぞが態々買つて奢りとする生尾魚の中落ぐらゐには随分ありつくことであらう、金の下の無益火・洋燈の點火放しなどは失費の段ばかりでは無く眞に危険いが、男ばかりなら氣の廻らぬも無理は無い、縫ふものには掛けても此老婆があればこそ、又住居も近くであればこそ可けれ、仕立下しなら何處でも縫はうが、解いて縫いで張る表、天地するやら何様の此様のと面倒なことをする裏、それも絹布なら知らぬ事平常着までを他の手に掛ける譯にはなる事でない、というて一々着捨て、仕舞ふは何程汝の働きがあつたにしても此方づれでは冥利も悪いし、出来もせぬ、それ／＼、段々胸に中ることが多

かる、何にしても獨身者では埒が明かぬ、姉妹嬢ひ送げて藏を立てた男は世界に一人も無い、家があつて女房が無ければ、戸があつて辛張棒が無いやうに締りが悪く、車に轆の無いやうに兎角行く先が覺束無い、得て一人者には十分親の腰を嚙つて好い氣になつて居るやうな長閑氣な手合が友になつて一緒に飲みたがり遊びたがるもの、左様いふ手合の交際といふ其交際は無禮講で、未まで徹することでは無く、律義の人や有福の人には見限らるゝ交際なれば詰りに餘り褒めたもので無いが、左様いふ中にも巻き込まれるは車に轆の無い咎ゆゑ、女房を持てば左様いふ手合は、彼奴も話せぬ、藏を建てて所存になつたか可哀想なと蔭では散々笑はうが自然傍へは寄つて來ず、笑ふが僻みといふものなれば笑ふに任せて置いたが好い、同じ交際でも、腹に耐へのある人は飲みに出る、獨身者は飲んで出る、一つは保養にもならうが、一つは身の毒にもならうでは無いか、出入の差ひは何程だらう、さあ、是程云へば返す言葉は大抵無い筈、我を捨て、女房持つと極めたがよい、汝の親父殿にも御親母様にも心易くした此婆が云ふのに悪いことは無いから頼むとあるなら探しても上げよう、見立てゝも上げよう、エエ、

其九

萬事分別に及ばざる時はどうなるものか決行
て見ると乗り出すか、まあ、廣めようと萎縮
んで後に退るかなれど、平均した上では、後に
退る方過失をせぬだけの利はあるべし。正太郎
一生の大事を定むるに就て、二十二一の齡に
もあらねば我が及ぶだけの思慮を運らし、到底
持つなら廣く搜して能く選んだが割合なりと、
自己より年上の世帯持とさへ見れば嫁の世話頼
みしが、金仙寺よりの歸り路、目指す朋友の家
に寄つて、久しく會はなんだが、相變らず歟、
と突と入れば、ム、正様が珍しい、例の通り
御一人様で、寒間向うの松坂屋の剃刀を研いで
遣つた禮に甘鹽の煮の魚を女様が呉れたから此
奴は強氣と一杯やり掛けた所だ、時に御手ぶら
で御來臨かな、ハ、ハ、ハ、此りやあ話せない、ハ
ハ、オイ我は燈を點けるから棚から箸を勝手に
出して呉れ、骨道の方を啄ぐがよい、葉唐辛
子の煮たのに菜漬に此きりといふのも凄じいが
酒はウソとある、と談話も軽く身も軽く、小き
室の正中に龜裂の入つたる火屋の洋燈を早くも
點て出したり、

オ、煙は丁度だと客が鐵瓶より徳利を抽

き出せば、亭主は竹の簾の上で直に菜漬を切る
獨身者住ひの無作法さも、互ひに平氣の笑ひ顔
して、どうだ忙しいか。ナニ、冷風が吹いて來
ると懶惰に人になつて來るから頭はあるが顔は
無くなるわ。左様が、此頃次手に來て呉れまい
か、ム、承知だが下物のありさうな時行かう。
ハ、ハ、鹽鰯魚なら何時でもあるわ、え、不洒
落なことな云ふまいぜ、時に汝は女房を持たう
と探して居るといふ話だが眞實の事が冗談か。
まんざら無根といふでも無い、それ彼の、親父
や母親の亡くなつた時種々と世話をして呉れた
家主も勧めるし、彼家に居る彼の家主の叔母だ
とか云ふ婆めも切りと勧めて呉れるので、乃公
も何時まで一人でも居られないから持つ氣にな
つたわ。フ、ン、左様して的確でも清いて居るの
か。的確が着いて居るどころか、まだ的確のあの字
の影も無いのさ。的確のあの字は彼奴のあの字が
聞いて來れる、白はつくれない此奴め、馬鹿をい
へ、あいつが如何なるものか、あんなものを女
房にするほど御日出度は無。それでも汝に
は些なかしわ。置いて呉れ、奢らないぞ。ハハ
ハ、素敵に眞面目だが、だが眞劔に女房を持つ
のか。大層念を推すでは無い、眞劔の話さ、
洒落では無い。フ、ン、無益だわ、語らないわ

まあ廢しにした方が好からう。何故々々。何故
といつて、汝も女の尻の冷いか暖かいかも
知らないで今まで育つた童子では無し、大抵世
間の雌の價値の通り相場も解つて居やうに、今
さら買ひ込んで、此の柿は思ひの外に酸かつた
と白痴が廉價柿を購つた後で泣面するやうな眞
似をするにも當るまい、オット、此白丁の方
に御手つかずの五合があるのだ、何様して平常
の女に半月でも一ト月でも此方等が一所に居
られるやうな者があるものか、伶俐で美麗で才
法を心得て居る女があつたら知らぬ事、まづ
素人屋のお娘には鐘と太鼓で搜しても、百が者
なら九十九まで大丈夫無いに極まつて居るし、
有つたところで此方連の御掌に入る筈が無い、
といつて男を食つて來た女を女房に誰しも
御免は知れた事だ、容貌の沙汰は贅澤の空談だ
と傍へ除けて置たにせよ、十九二十歳の小女郎
は甲斐性のあつたものでは無い、甘やかされて
育つたものなら、糠味噌桶へ手突込むのに氣
味が悪がり、蚊帳を疊むに頭髮を厭ふと云ふ工
合の年頃だもの、どうして、残つた飯を糲にす
る乾にする、楊枝の廢りを唾壺掃除に使ふ、
轆轤の古いのを圓雜巾に使ふ、小巾を取つて
置いて、物の前坪が斷れた時の用にとまで

この事のみ云ひ散らし、出来たるだけの筆受取つて、黒来い／＼と馳せ歸りけるが、後は少時靜にて、頓て主人が口を開き、三言四言物云ひしは、良き縁あらば女房を持たうと心を決せし由なり。

自己が言ひ分の微りしに先は悦びて、例の齒齧を出しながらエへ、エへ、エへと笑ひ、あゝ、さう料簡がついたらば先づ既丈丈夫、そろ／＼と藏も立つであらう、縁邊は急いでならぬ、汝の料簡さへ極つたなら心掛けに心掛けて探した上、念に念を入れて此姫が好い女房を持たさうほどに、樂みにして待つがよい。

其八

二十五は昔時より男の厄年といへり、思ふ女とならば引組で交刺も仕かれまじといふ二十一の頃とは違ひて、少しは分別もあるだけに他の異見をも軽く見做し、自然危険い深みへ入るか、左なぐば大抵太い慾より思はぬ世路の陷穽へ脚を突込み勝のものなり。筆屋正太郎年積つて今二十五歳、前厄に父母を失ひたれば既災難を取り越してか、春より以來無事安樂には暮せしが、折節女房早く持たすば一生の不幸福と勧め呉るゝ人の言葉の耳に留り、又或時は自己

から女房が無くては不都合なと、一寸した衣類の縫裂きにつけ、晚く歸つて酒一杯に勞れを休めたく思ふにつけ、然思はぬことも無きにはあらざりしを、口巧者なお桂婆に説き立てられ、加之散々に獨身者の弱味の眞正中を云ひあられて、何と返すべき言葉無く、玉山が饒舌り散らせしは小兒の放題として耳をも假さず、遂に良き縁さへあらば女房を持つに異存なしと其場にて云ひせしものの、婆の歸りて後考ふれば、節儉しても幾干か要るべき費用の準備も十分ありとは云ひ難く、談話に聞けば太閤様さへ建屏風に土盃で儀式を濟されしといふことゆゑ、それは兎も角もととしたところで、肝心の嫁に何んな者が來て呉れることやら、眼一つ鼻缺けなんどこそ見合ひの席にも知るゝことなれ、根性の曲りくれりば扱置き氣味の悪い出臍さへ衣服一枚着て居らるれば見做せぬ話、媒妁口は三割四割慥に懸直のあるものと踏み倒して買ふにせよ、中れば無難中らねば六十年の不作、能く／＼考へて見れば樗蒲一を張るより險難な仕事、堅い頼母子講に入つた方が、算盤に載るだけ大丈夫な事な位のものとはいへ、どうでも人間一生に、一度は持たては濟まぬ上、持たぬに數々不都合あれば、今さら引

込み思案は出さぬが、遠慮は損ゆゑ飽までも氣に入る女のある迄は随分首を振り通さうが、もう其上は神様任せ、南無天神様八幡様天照皇太神宮様觀音様、御心當りがござりますなら容貌が好くて愛嬌があつて發明で眞實者で経針が出来て茶こしらへが上手で來た朋友に後で褒められるやうに小機轉が利いて居る何でも一番よろしいのに撞突るやうに願ひます、と右往左往に心馳せて無益に思ひを勞れさせしが、一日二日三日と過ぎ、七八日経て、彼松に豫て頼まれ居たりし廟堂の出來上りしかば、西小倉の傳吉といふ遊び仲間を歸路に訪はむと思ふを兼ねて金仙寺に行き、延引の謝罪がてら又の註文を頼み聞え、日も暮れますれば又何ひます、左様ならばと一禮して我松法師が房を出てぬ。

廊下傳ひに庫裡口を出て、門の方へと歩み行きしが、本堂の傍に觀音堂の小さきがありて、今しも一人三十前後の女の菩薩に祈願を果してか再拜なし其前より足いと徐かに歸るもの見ゆるに、正太何思ひけん、突と堂前に走り到りて、暖日合掌良久しき後堂内に膝行上り、御籠の箱を頭に頂き、吉内悔吝一か六か、出た所勝負とがやり／＼。

と今丁度歸らうとしたところであつたが、歸家つて來たとは強い、此様子で女房さへ好いのを持つたら身代は屹度伸びるに違ひ無い、エへ、エへ、エへ、と挨拶せむとする乙吉を遮つて饒舌り出しぬ。

胸に異つた所存の出來たれば、正太郎他所他所しく聞き流して、碌に受け答へもせず、半跣を結んで微温茶を飲みさし、ナニ、老婆、錢がないので遊ばぬばかりさ、料簡が卑屈になつたので遊ばぬといふ譯では無いわ、アハ、と打消しながら、流石に正面から嫁取りは嫌になつたと言ひ兼ねれば、二の句の接條を無くして黙り居るに、それと悟つてか悟らずに、婆は相變らず乗り出して、過般歸つてから吾家にも此婆の話したこと汝の言つたことを話したら、吾家でも夫婦とも悦んで、叔母様能くまあ正太郎殿を説得なされました、小生も豫て左様思つて居るし三三度は其と無く勸めたこともありましたが、まだ其時は合點せぬ顔つきでしたに、當人が左様思ふやうなつたば何よりのこと、既正様も大丈夫の人になつたといふもの、吉事は急げとやら、兎角魔がさして料簡の變つたりなんぞせぬ中、我等ともく相應の口を探して一日も早く芽出度ことを見ませうとの挨拶、それ

から婆は心當にして居た某處の娘を目ざして彼翌日直に其家へ出掛けて行くと、惜いことに先月の木良い衆に望まれて既式も済み、明日とか明後日とか里歸りだといふに、落膽したが、眞に其の娘は容貌なら氣質なら手藝なら、好い、好い、好い娘であつたれど、釣り落した魚は大きかつたからとて詮が無ければ、其は諦めて其より好いのを探したが、扱探すとなると無いもので、悪いのなら幾干でもあれど、折角他に頼まれて桂庵口で糊付にするも嫌なれば、眞實に好いのを好いのをと探して見ると、容貌の好いのば氣質が悪く、家の爲になるやうなのは餘り黒闇天女なり、たま／＼容貌も氣質も好いと思へば悪い兄があり叔父がありで、兎角之なといふのが無い、あゝ、口限をして急ぐことでも無いが、あゝいふ考への出た機に一日も疾く好いのをと、切りに吾家でも心配する中、不圖宿下りをして此婆の姪の兄のお初といふが來たので祕事は睫毛の譬喩の通り手近に彼兄があつたものを彼女なら如何かと思ひついて、と云ふ時正太は腹の中に今年春の骨正月頃家主の家より出掛けたる姿を見かけし彼色白のぼつとりとした十七八の娘のことか、彼女なら饒眼の下に赤黒子の小さくないのが有つたので、捨てた女で

も無いに氣の毒なと爾時思つた覚えありと思ひながら、猶聞き居れば、それから吾家の夫婦にも歸つた後で話して見れば、眞に年齒と云ひ身幹と云ひ氣が付いて見れば丁度相配ひさうであつたものをといふ話さ、婆が云うては身品屋のやうではあるが、縫針も一通りは出来る。容貌も左の眼の下に一寸した黒子があるばかりで、色は白し、眼鼻立は何方かと云へば先づ好い方、と云ふに正太は又腹にて、それ／＼、とう／＼彼女だつたな、満更惡くは無い女だ。

其十一

吾家の亭主は彼の娘の叔父に當れば、折節は出入りするにつけ、近所の事なり汝も見知つて居やうも知れぬが、縁に續がつて居る婆のことゆゑ桂庵口は猶のこと眞に露ばかりも叩かぬ、簞笥長持吊臺とまで實のところは支度も出來ず、押張つて嫁で候とは云ひ兼ねる態といふことも斷つて置きます、親でも有つたら又左様でもあるまいが、何を云ふにも親父は七年前母親は四年も前に亡なつて終うて、他に兄弟は無し、眞に可憫の獨身者、鯨皮でさへ親の無いのは廉價といふに況して女の兄は親が無くては三割も四割も減價る道理と吾家の夫婦が惘然に思つ

氣が働くには遠い／＼の百里も手前にまごまごして居る位のものだ、餘り役に立ちは仕無い、又貧乏に育つた奴は兎角萬事が生ぜざいで、目上が來ても下駄を直さず、叔父の前でも立話を仕掛けるといふ調子が有り勝の上、くすれ錢で買喰ひをする。亭主の不在に饒舌り夥伴を引掛り込む、叱れば叫く、撥ては咬ひつく、何程論しても訓へても始末にいかぬと云ふのが多い、廣い世間のことだから一概には云へないが氣質の良い手技の出来るものが有つたにしろお互連のところへは來なければ餘所の寶、左様云つたら腹も立たうが汝の身代も有り餘るでは無し、まづ来る者は碌では無いと初手から思つて居れば違ふ、又亭主を持つ女の身になつても矢張り十の九までは思ふ通りの者は持てまい、して見れば男も女も縁を結ぶが最期の介、互ひに不承をせねばならず、瘡我慢して居ればならぬ、乃公も故郷に居た時は今の汝のやうに考へ、女房を持つたこともあるが、最初の鼻は何かに無しに氣に入らないで擲き出す、二度目の奴は先方から出て行く、世間體もあれば三度目の奴には随分此方の我を折つて見たが、主人を持つより女房を持つは氣骨の折れるやうな氣がして、え、糊糠の蟲が合點しないわ、篋棒

な、世間の奴等は情婦を持つた覺えが無いので山の神が無ければならぬと思ふか知らぬが、商賣屋物の味を知つた舌で鹿角菜に油揚げが難有がれるものか、ハクシヨと云へば「どてら」を落せて呉れ、ボンと鳴らせば酒を飲ませて呉れる世界もあるのに、甲羅に似せた穴を穿る蟹見たやうに堅くなつて、九尺二間の城廓に亭主で候の宿碌で候のと義者張つたところで始らないと、遂々女房を抛り出して今歳三十三彈りながら御覽の通りだ、無益だ無益だ、廢しにするが、女房を持つては何でも斯でも堪忍といふことをせれば治まる瀬が無い、詰らないわ、女房が無くても堪忍すれば其堪忍で如何でもなるものだ、女房の御蔭は少しも無い、同じ堪忍する位なら一人で堪忍したが好い、寢息の臭い女を抱くより厭風の立つた女房を持つて居るのは耐つたもので無い、無益だ、保證ひ屹度無益だ、第一汝女房を持つて見る、彼奴の生靈の所爲ばかりでも半年無事には居られまいぞ、え此の生白けた白茄子野郎の色男めやい、一杯よこせ、饒舌り草臥れた。

其十

堂を管れる納所に寫して貰ひし觀音繪第七

十一の文句は解れれど、内といふ一字に疑惑を起して心弱くなりしところを、又傳吉に散々云はれて、成程女房詮議も善し惡しなりと、歸る路すがらも思案に思案して、寧の事に當分嫁な貰ふ語は廢したが過失あるまじければ、先づ控へたが得なりと思ひ續し、酒に熱る領元を冷々と吹く秋の夜風に何となく分別と一緒に縮まして、足遅く我家の門に漸く來れば、表の大戸は既下して微に燈ばかり中より洩れたり、今歸つたぞ乙吉、嚙淋しかつたであらうと、漕戸を開けて突と入るに、待兼たといふ顔つきして火鉢の傍に居たる例のおばこ頭髪の彼の老婆は、オ、能くまあ歸つてお出だ、感心々々、一軒の主人がそれで無くては立行かぬ、エへ、エへ、エへ、實は過般の話で先刻から出掛けて來て待つて居たが、餘り歸家の遅いので、汝に限つて彼様いふ話もある矢先に家を明けるやうなことも有るまいとは思ひながらも、イヤ何と云つても若い人のこと、酒でも飲んだところを碌で無しの朋友に語はれでもすれば、地體男兒の好きな遊蕩を嫌だと云つて歸る譯にも行くまい、なれば今夜は必定那處へか泊つて來るであらう、折角持つて來た話ではあるが、此様いふ調子では仕方が無い、又話を持つて歸るより他は無い

にして我家を走り出でぬ。

東の市街外れに蠶齋と名乗れる怪しき奴あり、魚串か團子の串が得知れぬ竹串を拵り散らして、大膽不敵にも他の身の上を吉と云ひ凶と云ひ、高慢な顔つきして白痴威しのむづかしい文句を列べて、山墳連山、氣憤歸藏より周易までを生吞にしたやうな大言を吐き、天地陰陽有形無形森羅萬象何でも公乃の合點せぬことは無い、三世を見透し五臟を見破る我が眼力は、遠くは天眼を得た阿那律尊者、藥王樹を持つて居た者婆にも劣ることは無いと他の心配不幸福を我が食物にする不徳極まつた商賣をしながら、二言めには勿體無くも聖哲を一つ穴の狐かなんぞのやうに我が味方として引出し、罪の無い男女に盲滅法の判斷をして與ふれば、誰かさるゝ愚夫愚婦は自己のことを賣卜者には御客様とも云はれずして蔭では亡者々と云はるゝさへ知らで、親に明かさず子に明かさぬ秘事さへ洩らして相談掛け、呉るゝ返辭の曖昧模糊何が何やら解らぬを自分の氣から買被つて、成程思ひ中りすると感激尊信する輩も少からず。無學の悲しさには正太郎、魂の據りどころ無きまゝ、耳に插みし人の噂に縋り、蠶齋先生の判斷を頼むと、我が料簡は半分腹け敷のやうになつて五六町ばかり歩み行きけるに、果報男め、何處へ行く、まあ一寸寄るがよい、話して聞かせる吉事があると、無理に袖を取つて引張るは、過般會ひしを幸ひと、小生もいよいよ女房を持つて身を堅めようと思悟を極めました、就ては割合はしいものも御座りましたら御世話を願ひますと堅くなつて頼み置きし小間物屋の卯平次にて、これも親の代からの知人、我には齡の二倍餘なる藥罐頭の頓狂老夫なり。さては此處にも嫁の口があつてかと思ひながら、心は急げど振切りも仕兼ねて、引かるとまゝに内に入れば、老夫に配しては齡の若いべたべたとした妻までも笑ましげな顔して立迎へ、店の後の薄暗き一室に通して茶を濟みし後、例の頓狂には似ず分別臭い咳拂ひをして、吉事といふは他でも無いが過般の語に就て此様いふ話が昨日ぶつかつて來た、實は肝心の代物を今日見てから話をしに行かうと思つたが、前から知つて居る老夫が噂の語では容色も十人並、手藝も相應に出来るさうで、支度も左様云うては怒らるゝか知らぬが先づ借家住居して居る人には過ぎるといふほどなさうな、實をいへば實家は近在の農家で可なりな生活を仕て居るが、一旦縁づいての出戻りだ、然し不縁になつたのも決

して悪い筋では無く、先方の男が養子で何様やら養母と怪いより兎角採めに採めた末、到底これでは行末の見とめがつかぬといふところから親が先へ承知して引取つたといふ譯だ、それゆゑ今度ば身分は何様でも心が清しくて面倒の無いところへ縁付けて遣りたいとの知の料簡、汝なら差あたり恰好といふのだが、如何だ見る氣は無いが、それとも男は初縁だのに女の再縁といふ一段に氣が進まぬか知らぬけれど、見るは法樂、見たがよいわ、見て好くつても汝が厭て貰はうも知れぬ、ハ、ハと笑へば女房も笑つて、好かない老夫さまめ、お巫山戯なさるな、見るなら正襟姿が御從者をいたしませう、と右左より勧め込みぬ。

女は兎に角、心の消しき面倒の無い男のところに遣らむといふ其刻の所存は聞きどころなりと、之にも正太郎心は動かしが、それにつけても蠶齋先生の易を頼んで吉内を知りたければ、にやくやの返辭して、いづれ又歸路に伺ひますと飛び出しける。

根柢こそ仕てあれ門構へにて小さき式臺つき玄關仔細らしく、耳の遠き爺の挨拶尊大なるに、先づ臆を抜かれて、正太郎おづ／＼座に

て、彼の京屋といふ大家の小間使ひに入れて置いたが、氣質が好いやら彼家の御新造の氣に入つて、衣類も段々貰ひ溜める、頭上の物も貰ひ溜める、畢竟は一人で身の周圍を調製へたやうなもので、今では全然二た子の裕たたまゝで來るといふほどでは無い、縁邊は無理強にはならぬものの表具より畫の品とも云へば、肝心本尊の常人をさへ彼なら一生連れて遣らうと思つたら支度の無いのは免して下され、苦勞は随分知つて居る娘なり歸る家は無い孤兒なり、辛防が出来ぬといふやうな甘えたことの必ず無い眞實婆が請合ふが、兎に角一應見る氣は無いか、見たいとならば、何時でも汝の都合次第にして其となく呼んで見せようが、何と正様氣は無しか、進まぬ話と思ひなされるか、と婆は無法に饒舌りつくる此方に既に乙吉が睡倒けて廚の聲高し。

いふ、彼の黒子女ならば、齡も相應なり、容貌も可厭といふ方で無し、眼の下の黒子は涙黒子と云へば氣にかゝるものの、老婆の話では氣質も良さうなり、孤兒といへば厄介面倒の我が肩に掛つて來る氣遣ひも無く、又たゞの娘よりは幾分か世馴れて浮世の癖も他人の中に採まれただけに知り居るなるべし、支度は到底で我等風情のところ來るものなれば、最初

り十分を望んで居る、萬一立派な支度を持つて職人の我等が家に來るものあらば、其こそ再縁とか不具者とか何處かに仔細が無くては叶はぬ道理ゆゑ却つて此方は望ましからず、婆が云ふ通りならば、十の者八分まで批を入るゝところも無く、丁度似合つた縁なるが、傳吉の言ふたやうに悪いことは女房に持つた後幾件も出て來て其に堪忍せねばならぬと極めたところで、堪忍一かぬるほどの悪いことは出ては來まいか、觀音様の御圖は凶婆の言葉では全く吉傳吉の戲談半分云うたことでは、畢竟詰らぬ、無益な話、貰はうか、廢さうか、廢さうか、貰はうか、え、迷ふ、明日八卦見に見て貰うか、何とか思案を定めようか、お、玉山めが過般顛倒だと云ひ居つたが、貰ふが顛倒か廢すが顛倒か、いつそ貰うて仕舞ふと極めようか、いやいざとつこい六十年を櫻浦一に賭けるのだな、え、一ト思ひに謝絶つて仕舞はうか、婆は怒るだらうし、我は何時までも此態だらうし、はて何と挨拶仕ようか、兎に角一應見合を仕ようといふだけを今云うて置かうか、然し又左様すれば謝絶る段になつて骨が折れる、嗚呼困つたと今更のやうにへどもどして徒に持つた火柴の端に豆のやうになつた火を摘んだり放した

りなし居たり。

考へに考へて漸く考へ出した返辭は、其御話の娘ならば實は見たことが無いでも無ければ、別に見合といふやうなることも爲るには及びませぬ、いづれ熟く思案の上何と御返辭いたしませう、との火の徹らざる挨拶にて、婆は、それなら今日ば夜も更けた、又來ませうとて歸りけるが戸締りして後床に就いても正太は更に寢就かれず、寢ながら又繰りひろげて讀む觀音籤第七十一、道業未成らざる時、何ぞ期せむ兩ながら宜しからず、事煩はしくして心緒亂る、飄つて作す音律徊、え、何の事だか解らない、第一兩ながら宜しからずとあるが貰ふのも廢すのも兩方共に宜くないといふのか、それとも此外に他から又一つ話があつて其も共に宜ないといふのか、少しも解らぬ、觀音様も不親切な。

其十二

正太郎其夜更くるまで雜念に心亂れて睡りがたく、曉天がたまで床下の寒蛩の秋を我世顔に鳴く聲々を耳にしたりしが、夜も明けなむとする頃辛くも夢に入りて、乙吉のがたびしと庖廚事する音に眼覺むるが早きか、朝食もそく

れが家が吹壊されて自分は胃虚する基だ、先こ
 れはこれと仕て置いて後の口を觀た上、兩方合
 はせて判斷を下して遣らう、と復例のがちやり
 ばち／＼なすること良久しかりしが、卦面を見
 つめて前のエヘンと寸分違はぬ咳拂ひして口を
 開き、本卦は水雷屯、之卦は水地比、屯は困と
 同じく不自由の姿であるが困よりは料簡の確乎
 としたところが見ゆるから、此話については、汝
 の料簡が浮つて居ぬと見える、比は比和の義
 で人の心の美しい働きである、屯の内卦の
 震變じて坤となつたは甚だ宜しい、昔時畢萬が
 晉に仕へむとして筮して得たが此卦此變爻で、
 左傳の閔公元年の條にある通り、エヘン、震
 は土となり、車は馬に従ふ、足之に居り、兄
 之に長とし、母之を覆ひ、衆之に歸す、合して
 能く固く安んじて能く殺す公侯の卦なりと云ふ
 ほどで、傳にも比は樂むとある、申し分無い卦
 だ、併し此話の方の女は根性に耐へはあるが
 容貌は前のより美しくない、色なども湧て居
 す辯才は足らず萬事上へ出るより下へ沈む方で
 腹の底は中々剛いが表面は控へ目な上に、段々
 苦勞の中に日に送つた者に違ひない、汝が此女
 を娶れば角立つて面白くことは無くとも日々に
 沈靜と樂しく送るやうになるばかりで無く金錢

も少しは出来るやうになる、加之女の方から水
 が土に浸み入るやうに汝に實意を盡して来る故
 汝は別に思慮分別も用ひず從來通り生活して行
 けば無病息災安樂で済むが、此縁談は大急ぎに
 急いでせねば他へ外れて仕舞ふ、孤陰孤陽の卦
 というて卦はよくても兎角縁談なぞには空虚に
 なつて仕舞ふから歸るが早いか直に話を堅める
 が好い、兩方合して考へるに矢張り後の口が好
 い、是非後の口のに極むるが好いが唯吳々も早
 くせれば空虚になるぞ、判斷一應はこれだけ、
 決して相違等は無いと説き立てられて煙に巻か
 れ、急げ／＼と云はるゝに愈々周章で、五十錢
 を取るゝに躊躇もせず、遺失たる者でも拾ふ
 やうな氣になつて駆け出しぬ。

其十四

蟲齋が方よりの歸るき、再縁といふに氣は進
 まれど一々思ひ中ることある判斷の言葉には強
 ても隨ふが可からむと、小間物屋が話に乗る氣
 になつて卯平次が方に寄れば、事は不思議にも
 湊まり合ふ時あるも、にて、應、正様か、たつ
 た今先刻の語の御當人を連れて、買物がてら市
 に居る親類を尋ねに出て來ましたが御宅の前を
 通りますので御無沙汰の御詫ながら一寸伺ひま

したと、其母御が妾と知り合ひなで、此處へ見
 えましたが、未だ一町とは行かれますまい、惜
 しいことに煙草二三服喫む間疾く御來臨になつ
 たら其と無く御覽になる好い便りであつたにと
 女房の云ふ、傍より、亭主卯平次口を出して、
 女の足ゆゑ此通りを市の方へ眞直に一町か其處
 等行つた程にしかなるまい、裏通りを正様と二
 人で行けば、それ彼の一方は足袋腹掛を賣つて
 居る店、一方は葎簀茶屋のある辻で落合ふ路の
 順ゆゑ、ゆる／＼と行つたところで此方は男の
 足なり路は少し捷徑なり、かならず此方が葎簀
 茶屋にでも入つて居る前を通るに違ひ無い、如
 何だ正様見たが好いでは無い歟、餘り無造作な
 ことではあるかと云ふに、正太郎は蟲齋が疾く
 せよ急いでせよと云ひし言葉胸にあれば、其氣
 になつて、ム、左様しませうと早出掛け足なり。
 卯平次これに笑を含みて、さあ／＼と出掛けれ
 ば、莞爾と笑ひながら當人も隨ひ行く腹の中
 には艶の長びした氣にしてでも居るなるべし、
 僅四五町と歩いて例の曲り角へ出で、用も無け
 れど葎簀茶屋に入りて無益な濃茶を飲み居ける
 が、果して向うより月子連れに來る女あり。
 あれ／＼彼だと袖を曳かれて今更に心を動かさ
 ながら、正面より視るに、先に立つたるが儘に

つけば、床の間には庖丁の庖の字を初めにして
艾の包紙で覺えたる神農といふ字黃といふ字
湯といふ字など讀めぬ字澤山交りに書いたる大
きなる幅かゝりて、其前には白木の三寶青銅
の香爐など列び居れり。むづかしさうなる書物
積み疊れしを右にして潤い机の前に悠然と坐り
込みたる霜降頭髮のひとを、これぞ先生と思ふ間
も無く、白眼の黄ばんだる眼にて此方をきろり
と睨み玉ふが早きか、鐵枯れし聲にて、ム、汝
は女のことて來たなと一言も云はぬ先から見徹
されて、言句も出し得ず正太郎は忽ち臍を奪は
れる。

其十三

千人の脈を考へなば素人でも大抵の醫師に
はなるべければ、まして功を經たる賣卜者の他
の胸中ぐらゐる大方猜せぬ筈は無し、二十の色慾
四十の慾、二十代の男の態々易を立てゝ貰ひに
來るは多く情事に係り、四十代の男のは金錢に
係るものと、先は定まつたることなれば、懸齋
の言ひ中しに不思議は無けれど、正太郎には恐
ろしくも奇しく思はれて、此先生の言葉に違ひ
はあらじと妄信し、如何にも仰やる通りの事で
御易を願ひ度く、わざ／＼參じましたが、實は

縁談の口が前後二つござりまするところ前の方
が宜しうござりませうか後の方が宜しうござり
ませうか、又兩方ともに宜しうござりますまい
か、詳しく御判斷をなされて下さりませと眞心
を面に露して一點の冷かし氣無く頼めば、大
蝦蟇のやうに大なる口をへの字なりに結び居し
蟲齋鷹揚に題で挨拶して、左様ぢやろ左様ぢや
ろ、よし／＼、兩方ともに一々詳しく判斷して
進せよう、と机の上の小さき香爐に白檀の屑
を拵り込みながら云ひ、何か知れぬと古びたる
錦切の袋より簪竹を取り出して、香の烟りの上
に翳し、少時眼を瞑きて口の内に何やら獨語し
末、がちやりと分けてばち／＼と撥き敷へつ、
算木を弄つて、復がちやりのばち／＼、復算木
を弄る、同じ様の事幾度か済して後、むづかし
げな顔作つて卦の面を眺め考へしが、エヘン
といふ咳拂ひを合圖に此方を見て、これは最初
の方の口を考へたのであるから其心して聞く
がよろしい、卦は困の大過に之くといふ好から
ぬ卦で、澤に水無し、草木魚鼈以て生くる無き
が困即ち惱み苦み動きの取れぬ姿、さて之卦
の大過は水過ぎて草木を没する形である、云は
ば獨身で下につく相手の無いが困であるが今
此話の女を娶れば何事も大に過ぐるといふ調

子で却つて前より好くないことになる、稻は早
越より兎角水過ぎて收穫を過つものゆゑ獨身の
不自由よりは女房を持つて亭主の好きな赤烏帽
子を爲るところからして不幸福に陥るものだ、
此卦面を味うて見るに困の内卦の坎變じて巽と
なつたに因り、夫が女に従ふの象、水が風に
散らさるゝの象だて、又外卦は始終兌である
に因り女は美しく辯才あつて小器用な者と見
える、此女を娶つて見い、必ず汝は鼻息を伸
ばして随分夜も早く寐るといふやうに機嫌を取
るに相違ない、水風に散らさるゝも其處の姿で、
畢竟汝の疲れになる、風水を換すほどなれば萬
物を吹き損ずる道理ゆゑ此女は汝の家を吹壊
して仕舞ふ、十兩の生活が十五兩二十兩と鰻
上りになつて終に家の棟も撓むやうになるばか
りで無く汝は腎虛癆瘵やうの病氣になり女は遂
に見えなくなる、餘程憫まれならぬことで、
本文には石に困み痰癆に據る其宮に入つて其妻
を見ず凶とある、大過の裏面生卦で云へば女
は其の背面を見せ男は震の怒りを起す象で甚
だ好ましからぬ卦だが、待てよ、エーと、哭ば
従ふなり入るなり和ぎなり他より見れば悦び
なりだから、ハ、ア、汝此女には今から餘程氣
があるな、いよ／＼怪しからんことだ、一體そ

ては凶も吉に吉も凶にならぬといふ道理のあること無ければ、話も是まで進んで来し上は、寧ろあの黒子姫を貰うて了けうかと思はぬ節も無きにはあらず、されど流石に不吉と卜はれたるに心進まれば好い加減の挨拶して一日一日と目を過しけるに、某日のこと、彼の婆例の如く来て、此方の話もあることなり又何にしても當人の身な定むべき頃なれば、御主人の京屋様には、好い縁あつて嫁歸かせますにつき御暇を下されませと願うたところ、其は芽出度い、此後とて何ぞの時には出入するがよいと殊の外の御懇命で、此も初に取らせい、彼も初に遣れと數々の物さへ頂き、無類の上首尾で家へ引取つて参り、既昨日からは婆等と一所に居ります仕儀、かういふ機會でもあることゆゑ一日も早う話を纏めて當人にも安堵させ妾等も安堵し、又初が御主人様にも一應は申し上げて悦んで頂きたい考へ、段々と延引になつては話に魔もさすことのあるもの、今日こそは毅然として挨拶をして下さりませ、と眞顔になつて談し込むに、事斯うなつては心弱き正太郎の謝絶も爲しかれ、下世話に能く云ふ「だら／＼急」に愈々お初を貰ふことに定めぬ。

橋渡しはお桂婆なれど、定まる式には媒酌人

無くてはならず、誰の彼のと擇まうよりも平生親切にして呉る、彼の卯平次を頼まむといふ正太郎が發議に、お初の里分たる差配人の徳藏も見知り越の問とて、それ好からむと兩手をあぐれば、異議に及ばず其と定め、正太郎より卯平次に頼み入るゝに、先日の話の煙となりしに、何かな筆屋に對して一と手柄と思ひ居る折柄、卯平次も二も無く承知して、宜しい、萬事合點したと大受合ひに受け合ひ込み、齡若ければ能くは未だ俗事を知らぬ正太郎を導き助けて、略禮ながらも結納の取り交せなんだ萬般な遺無儀式だけ済し呉れる。

其年秋も漸半ばして萩の花は既に盛り過ぎたれど菊には早き暑からず寒からずの好き日、百舌鳥引せし人の撞木に媒鳥を宿まらせたるを手にして歸る頃より、正太郎徳藏二人が家の間を人々往來し初めて、暮るゝに及び花嫁來りぬ。物馴れたる卯平次夫婦が周旋に一切快く埒明き、皆々芽出度限りを云ひ盡して此夜を千代の初めぞと祝し歸りけるが、實に此年此月此夜正太郎が腑に落ちざること一つありたり。

お初は其夜睡りしや將睡らざりしや其明る朝暗きより起き出でて炊事の働さも手ばしこく、身分無き者の妻には相應しく身を動かして、早

一廉の世話女房なり。固より左様はあるべきものの、御實家の教訓の程も見え御當人の發明さも推測らるゝと、近所合群の計は上の上にて、正様も幸福なまづ彼様した調子で行けば身代も頓ては長びようと先を取越して速歸する者さへある位なりける。

其十七

正太郎腹に一つの不快は懷けど色にも出されば他の知らう様無く、會ふもの孰も新婦を賀して、羨ましき半分馳るさへあり。酒を被つての惡洒落に強て他所の色を漁らせむと企てるさへあり。さらでも心易き同士落合ひたる際の席にては年甲斐も無く老いたる者までが雜話の種に其噂仕出して笑ひ興すれば、若きは猶更群衆の聲喧しく罵り騒ぎて、今度彼を毒める折には鷄卵を送つて笑うて遣らう山の藪を手土産にして馳つて呉れうと、外所の娛樂を我が心配にして入らざる詮議に力辯を出すが多く、其様なこと仕た昔時も爲れた昔時もあるものには、大に白痴な世話焼どもめ、彼等が幼稚立には犬の交尾うたに沙を掛けた愚えが屹度あるであらうと笑はるゝも知らず力味廻るも世の態とていとわかし。されば此有造無造の騒ぎのため、今まで

其なるべく、齡には老けたるコツリとせし肉づきの色浅黒き女にて、下險の特に薄黒きは深き憂に沈める如く、眼鼻立の悪いにはあらねど、蟲が好かぬといふものか、打看るより直女房に持ちたいと云ふ考は何處へやら、此奴は少し考へ物と反對の想さへむらくと湧き上りぬ。

其十五

見つけられては面倒なりと卯平次知らぬ顔して母子を遣り過ごし、如何だ、満更老夫が言葉に虚言もあるまいかと笑つて云へば、腹には思へ口へ出しては氣に入らぬと云ひ放ちも仕兼ねるより、正太郎笑ひ合むばかりに挨拶を済まして、可否を口に云はず、何方つかず胡麻化し居けるが、不前圖を通りかゝる小僧を見れば彼の玉山が師の用達しに覺し急ぎ足にて歩けるなれば、話を外らすに幸ひの傾りと呼び入れて、胡麻れな鹽煎餅など與へ、歸りならば同伴に歸らむと云ひかくるに、卯平次は猶察し得て彼に角と横合より女のこのみ云ひ出せば兒童ながら敏捷き玉山、早くも夫と悟つて、例の口軽く調子づいたる語氣もて、やあ正様は過般乃公が諗して遣つたも關はず女房を持たうと見合をしたのか、馬鹿な面な、と暫りける。

卯平次には好い加減の挨拶して別れ、玉山と共に我家の方へと歩む途中、乃公は此處から寺へ歸ると鹽煎餅嘴みつゝ横徑へ玉山入れば、唯一人となつて一倍思案に沈みながら漸く家に歸り、乙吉、留守に誰か來たかと云ひかけて奥に通るに、彼の婆は來り居て、例の如く火鉢の傍に構へ込みたり。

今見し娘も厭なれど、龜齋先生が言葉に違ひなくば此婆が話の娘貰うたが最期、家へ退轉する、我が身は病むと云ふ此上も無い大事に及ぶ譯、二つに一つを取らば、再縁よりは初縁が好ましく、色の黒いのよりは色の白いのが欲しく、ことさら我が儘といふもの歟知らねど卯平次が世話のは見るより心進まで何と無く厭なれば、畢竟此婆の話のに定めたけれど、さりとて惡事災難は恐ろしく、無事息災は望ましかれば、未來は中るか中らぬが知らねど、現に眼前のことに就ては、我が心中を見ぬき、小間物屋の老夫が話の女の容貌をも云ひ中てたる程ゆゑ、一旦定めし上になつて、言葉通り中つた曉には堪つたものにあらず、何にせよ能く考へての挨拶をすること大切なりと腹に問ひ腹に答へ、今日はまだ御返辭を確乎とすること出来ませぬよ、斷然婆に云ひ渡しける。

其十六

易は不思議にも愈々中りて、明る朝の事なり、卯平次筆屋が店に來り語る仔細を一々聞けば、昨日彼の母子づれ市中へ來しは他ならず、縁談についての事なりしがいよくそれと定まるところあつて、先方の急ぐに任ぜ五月六日とも云はぬ中に兎に角與入をいたさせますと歸路に又母親様が寄つて悦びながらの話でござりましたれば自然彼の話は御聞き捨てを願ひまする、いづれ又他に良い口もありましたら御世話いたしますつもりと、堅くなつて丁寧に斷りを云ふにぞ三百遺した氣もせれど先づ此話は空虚となりぬ。

迷うて、考へて、考へて、迷うて、遂に考へる及ばぬところに至りし頃、どうやら我が身を投にして仕舞ふが事に臨みて凡人の做し勝な態なり。愚昧は愚昧だけに物を慮ふ習ひとて、正太郎も兎や角と思案せざりしにはあらざりしが、卯平次が話に虹と消えて亡せけるに、一方のお桂婆は間が隙かな尋ね來て、少しは厭味交りにお初を貰ひ呉れすやと促すまゝ、えゝ、龜齋先生の列斷はあるものの、云はば當るも八卦、中らぬも八卦、我が一心の持ちやうに依つ

とは氣遣ひながらも、ぢち／＼だら／＼と、あ
とひき、あびたれ、縁起め、惡丁寧、人々それ
ぞれの辭を出すまで飲むものなり。正太郎も成
る口とて、最初は早く切り上げて歸らむとのみ
胸に思へば、受くる猪口には七分注がせ、擬す
には満々注ぐやうにして敵手さへ酔はば引外す
算段と心掛けたるが、一杯一杯又一杯、何時
しか人の膽を膨れさせる魔水肚腸に浸み渡るに
及んでは、雜話を下物に悠然と尻落着けて飲み
交し、耳にはなかしき傳吉が虚誕交りの滑稽談
に大口開いて笑ふ聲さへ高くなしける。

何様だ正様、女房を持つて面白いが、ナニ是
と云つて面白いことも無いとか、ハ、ハ、虚言
を吐け、其當座と云つて人間一生一番面白い嬉
しい何と無く心持がほやり／＼として始終春風に
微酔の面を吹かれて居るやうな覺えのする時だ
もの、面白くなくつて居るものか、白く切つて
も無益だ、乃公だつて覺えがある、朝も負けず
に夙く起きて他人さへ見て居なければ水も汲ん
で遣らうかとするまで此方が優しく思つて遣れ
ば、先方も汁の實の大根を刺して、仰しに花鰻
と膳の上に花を添へて忠義をあらはす、些少の
ことでも其が他人には云へない嬉しさで、奴さ
んが脆く恐悦する、女房は又奴の御機嫌に共

悦びする、といった調子で朝晩を持ち切るから、
幕を奪ひ合つて座敷を掃く、生れもしない兄の
論をする、絲を買つて来れば野郎が馬鹿な面を
して手に懸けて居て絲巻に巻かせる、髪結が来
れば唯が突然に丸髻に結はして置いて後で取かし
さうに徐と似合ましたかと云ふ、から埒も無く
下らない飯事をして、げた／＼にや／＼笑ひ通
して日を送る奴さ、たま／＼外へ出ると云つて
も今までとは違つて横からも堅からも氣をつけ
て呉れるから下帶も褌帯になつて取をかくぬや
うなのを締め、足袋も扣紐のぶら／＼したのを
穿いては出ぬといふやうになるばかりか、出口
まで送る次手に精粹の襪の飛び出して僧正廻照
の衣のやうになつたを袖口から手を突込んで整
然と直して呉れる、肩のフケに氣をつけて拂つ
て呉れる、而して早く御歸りなすつてと吐す、
歸れば其處等片付けて置いて猫の兒なら咽を鳴ら
しうに悦びくさる、是が何で獨身者の時分歸
つて見れば火鉢の灰は冷たくなつて居る、小僧
は狗と遊んで居るといふ頃にならう事か、ナニ
正公、どうだ乃公の云ふ通りだらう、ハ、ハ、そ
れ見る、汝も身装が小鮮潔になつたし、年中耳
の中の不潔男であつたが今日は清潔に光つて居
る、イヨ此奇生め、顎も剃鬚つてあるな、ハ、

ハ、醜態が見る、女房なんぞを持ちくさつて薄
ら清楚になり居つた、どうだ家を出る時早く歸
つて来てと云はれたらうが、ハ、ハ、奇生め、
歸りたいか。

其十九

ハ、ハ、如何だ、乃公の云ふことに虚妄はあ
るまい、懨りながら見送しの御眼鏡は恐ろしい
ものだらう、フン、寄らず觸らず唯にや／＼と
ばかり笑つて居るな、ハ、ハ、其が好いのさ、挨
拶に困つた時は、ハ、ハ、だ、がな正公、其嬉し
さも長くは續かないで、三月か百日か経てば、
大抵女に可愛がられた覺えの今までに無い奴で
さへ何とも思はなくなるに、況して賣物の手剛
い奴に揉まれたり未熟の奴を仕込んだりして相
應に女を觀る眼も明いて来た男では堪ること
では無い、何とも思ふなくなるところ歟反對に
缺點も見つければ好かない處も澤山見つける、
さあ一つ悪いところが覚えて来ると彼處にも此
處にもと其から其へ聯續つて悪いところばかり
見えて来る、爲ることが鈍間に見える、頼く見
える、不得切に見える、表面ばかりに見える、
此方へ向いて居れば額の出たのが眼につく、後
から見れば領足の坊主なのが馬鹿臭く見ゆる、

嫁など貰うて身を堅むるを甘がつて居たりしやうの男には、得て間違ひに實地を立て、何の、筈極め、女房の傍にへばり着いて乾堅まるほど老は仕ないわ、女房持った留守居のためだ、憚りながら女房を守つて今から別金を調るやうな卑屈奴とは男が異ふと、極々内心に左様でも無いながら無暗に男がつて瘡我慢の交際を張り、茶屋這入り穴這入りに一鼻掛けて先に立ち、天晴好男兒の顔付する間も無く家には紛紜を湧かし外には惡き借金をして、折角の縁は合せ物離れ物の譬喩通りになり、三方四方面白からぬ顔して終るもある習ひなれど、根が臆病といふにはめられど氣弱の實の正太郎は幸ひ其處へは在り込まず、随分男の耳にしては聞きづらき厭味を云はるゝこともあれど、大抵耐へて口數きかず、まづ無事に分別の棍を取つて、職業さへ満足にして花客を失錯らず、義理さへ堅く守つて朋友をあしらへば、誰が何と云はうと世渡りに間違ひは無しと、朝は夙より起きて職業に勵み、夜は盡日働きて疲れ休めを膳の上の一徳利に定めて其より多くを用ひず、無用の外出をせず、適々出でて早く歸り、今までとは異ひて萬般締りある調子に身を持てば、彼の嫁様も發明で居て高ぶらず彼男も理由が分つて居

て締りのある丁度似合ひの好い夫婦と近所の評判も好く、徳藏夫婦おけい婆も和合の様子を見て安堵し、卯平次夫婦も世誼甲斐ありとほくほく悦び居たりける。

手蔓あつて長崎の知人より羊の渡り毛、鹿の夏毛、秋毛、其ほか貂狸など種々の珍らしき毛を少量にはあれど手に入れたれば、正太郎大に悦びて、口頃自己を最良にして呉るゝ諸方へ註文受けに行きける次手、令仙寺の菰松法師が方へも音聞れ、嫁貰ひ悦びに兼ねて筆筆さまたま製作へよと云はれ、大に悦びての歸りさ、不圖向うより來る男を見るに久しく見えざりし例の遊び朋友の傳吉なり。

其十八

惡意のある男とは思はれど考へて見れば有益になる朋とは云へぬ奴と過般から氣のついた傳吉に出合ひて、正太郎少し嬉しからぬに加へて妻を持ちし後未だ會はれれば若くは今日歸られやせむとの恐れもあり、此奴の舌頭にかゝつては逆も敵はれば近寄らぬが耳に厭なことを入れぬだけ徳と、何氣無く挨拶して其儘別れむとすれば、何に然様こそゝと歸宅を急ぐにも當らないでは無いか、昨夕岩床で出來た源兵衛に

一寸手を出して好い迎が出たので憚りながら今日は汝に貸はれようとは云はない、何處か其處邊で一杯飲らう、や、還装は身出度かつたな、其時乃公も顔を出すのであつたが角極の一も擔ぎ込みたと思つて居たので其が出來なかつた紛れ逢行き損れた、無い時は堪忍して呉れ、ハハ、其は左様と何は減法美しいさうだな、客つても好いぜ此畜生め、甘いことを仕くさつたと惡魔山戯に巫山戯て昔中を一擲きなんとし、還引させぬ巧い調子で近邊の煮賣屋へ誘ひ込むに、元來氣弱の正太郎、一言二言は他の日のことに仕ようと辭みしも辭みきれず、振りもぎつて逃も仕兼ねて隨ひ入り、鯛のめしたやら鰯の煮浸しやらで飲みはじめぬ。

飲む口の者ほど意地のきたなきは無く、敵の陣中でも隨分爛醉し、死人の枕頭でも隨分浮れ出し、猪口を持つたが最後押立尻して歸らむとは仕ながらも酔さるれば後へは退かぬものゆゑ、下戸は飲酒家を罵つて飲む奴は乞丐と云ふも無理ならず、臺所の炊爨の泣言、小兒の癡損ひ、細君の眉の皺、いづれ上戸とて人間なれば解らぬでも無く察せぬでも無けれど、眼の前に尻の重い徳利のある限りは吾が尻も輕くは仕かれて、根が生えたか、腰が抜けたかと嘲らるゝ

吼る聲のするので何となく怖くなりませんでした、と云ふ片手に表の戸締りし済して、針箱をも縫かけしものをも取片付けにかゝるは早くも臥床を設けむとなるべし。正太郎此言に哈哈と笑ひ出して、小兒ではあるまいし狗の吠るが何で怖い、其ほど怖くば今度来た時魚の頭でも與つて此後は吼えぬやうに能く頼んで置くが好い、から将も無いハ、それは左様と折角汝の貰うたものを我のにしては義理が悪いが好いわ、其代りに細の一つも買つて與らう、と云つたばかりで出来るか出来ぬか知れぬが、まあ當にせずに樂みにして居ると云へば、おやお其はありがたいこと、其なら是から幾枚でも拵てあげては妾のを其御代りに拵て頂きます、まあ眞實にありがたうござります、と斯様御禮を先へ申して置きましたから、其時になつて知らぬでは厭でござりますと此方も笑ひを含みて云ひ、其は些酷すぎるやうだと打消し、なに結構でござりますと云ひ張つて、汝は狡猾、いえ貴郎が狡猾と罪の無い閑着の末は笑ひばかり残りぬ。

斯くて其後日々無事に近所で嫉むほど陸まじき若夫婦の一家、和氣霽々と過ごしけるが、好いことばかりは續き難く、儉約しても婚禮の當

時にかゝりし失費、其後の何や彼や、極めて些少のことながら日々の生活も今までよりは較奢りの傾きあること、唯一人とは云へ頭數の殖えしことなごに加へて、職業の一寸閑暇になりて間屋の數仕事ばかり爲るやうなれるまゝ、收る錢の減りしに、素より財産とても無き職人の米櫃がたつき易く、一人生活せし時の、無ければ素飯に醬油をかけても濟ませしとは違ひて正太郎今年初めて世帯の苦しさな覺えけるが、不思議にもお初何處よりか足らざる分を足して間を缺かす、はて面妖なとは思ひながら別に他所より取つて來るとも見えれば、大方京屋に使はれし中貰ひ溜し金の幾許か今に持ち居るを出すなるべしと思へば、心には我が甲斐無くて女房の臍繰耗かするを氣の毒には考へつゝも、また倍にして與る時もあるべしと氣を廣くして、幾干ほど如何して有ち居る歟と改まつて訊ひも仕にくきまゝ、何様して幾干ほど持ち居るといふことも知るよし無く、唯何とがして耗かせきらぬ中我が收る金を多くしたきばかりの思案に暮れつゝ日を送れど、運命は意に任せず、誇言にして仕舞ふ氣では云はざりし細購つて與ることも實に虚言となつて終らむとしける。されどお初の實眞やかにして萬般我がためにすること

は初に毫末も變られば、是にばかり憂なも慰めて、あはれや氣儘者の正太郎毎日一合の寢酒なさへ此頃は廢めける。

其二十一

困つても慰む便宜のあるに正太郎其日々と暮し行きけるが、幸ひに又定つたる間屋仕事その他に自己が好みの筆頼む人も出來て來たれば、少しは勢もつきて、無沙汰見舞ながら金仙寺へ行き、四方八方の雜談の末、困り切るといふまでにはならざりしも、近き頃職業の思はしからざりし由を訴へけるに、裁松少時打案じて、貧僧は方外の者なれば生計の道には暗きが其方のためを思つて試みに云はば、筆造りの傍に刷毛造りをしては如何に、算盤持つてのことは知られど、靴刷毛羅紗刷毛其他各種の刷毛つくることは人の話に利潤多き者のやう聞き込みたることあり、汝の腕にて刷毛造ることは少し手慣れさへすれば何の造作も無いことであらうに、と致へ吳れしを思ひつきの發端にして其より段々其道の様子を糺し、終に刷毛造りを仕始めけるに、其間屋の受も好くて、根の締りの緩みも無く毛の脱けるといふことも無しとの評判に、思ひ切つたる大嵩の註文負はせられ、忙

爲を思つて酒を控へると云つて呉れる所存をなし
ならしといは知りながらも、誰某が酒の界見を
して呉れた時は親切が肝に浸みて涙さへ出さう
になつたが同じことでも口のきやうの差へば
差ふものだと待時嫖つた女に比較して今の有
り難く無く思ふ、一體最初は女房、珍しさに恐
悦がるものの次には慣れて別段嬉しがらぬやう
になり、又其次には互ひに面白くないところを
見つくるやうになるのが通例なれば、女房と疊
は新しいのに限るといふ古い諺も自然と道理
で、女房の方でも亭主と疊は新しいのに限ると
口でこそ云はないが腹には思つて居るに違ひな
い、其處で互ひに面白くないから云ひ合も出か
す、喧嘩も出かす、到底此女を女房には持つて
居られない、到底此人を良人にしては居られな
いと、兩方の胸に恐ろしい想を浮めることも
暫時はあるやうになる、其想が増長すれば手
も無く離縁となつて仕舞ふが、左様無いまでも
畢竟女房といふ奴は、嬉しくも有難くも無い膳
の上の「ひれ澤庵」同様なものと同様が極つて仕
舞ふ、笑つてはいけない、女房といふ者は「ひ
れ澤庵」同様なものと傳吉が云つたが、成程眞實
に「ひれ澤庵」だと首をかしげて汝が感心する
のも直もう眼に見えて居ることだ、ハ、ハ、ハ、さ

て、それ、「ひれ澤庵」と相場が極ると自由さへ
利けば男兒だもの、他所へ出て甘いものを喰は
すには居ない、汝も皆目野暮といふでは無し、
如何して長く「ひれ澤庵」では済まないに決つて
居る、其上汝は「眼はし」の利いて大抵の細い
ことに腹も立てば悦びもする奴、一つ料簡が
逆になつて睨んだ日には孔明が女になつて働
いたとて缺點を見つけてじぶくるだらうに如何
して普通的女で治まるもの歟、だがまあ辛抱し
て今の教訓んで造るがよい、氣に入らなくつ
て返ひ出して二度めのを持つと又不思議のもの
で、白痴の料簡が知らないが先のが好く思へて
来るもの、女房を三四人も持た奴に聞て見ろ、
吃度誰でも最初のを好かつたといふから可笑し
い、ハ、ハ、ハ、大きに下らないことを一人で饒舌
つた、ア、酔つた、どうだ、時に、久しぶりだ、
一所に例のところに行かう、これ此通りだ、今
日は乃公が亭主になるわ、と云ひかけて袂から
二三枚の紙幣の大小交りしを握み出して示しな
がら、好いでは無いか、さあ行かう、吃驚すま
いぞ、何の、一ト晩ぐらあ交際つたとて「ひれ
澤庵」が恐くもあるまい、ハ、ハ、ハ、困つたとい
ふ御顔つきだな、何だ汝だつて嫌ひのところだ
はなし、待つて居る奴もあるものを、まんざら

牢屋へ行くやうな心持もすまいに、ハ、ハ、ハ、何
をうぐ／＼して居るのだい。

其二十

更けはしたれど其夜辛くも傳吉が引外して、
霜かと新ふ月の影を踏みつ我が家に歸り着きし
正太郎、四隣の閑寂とせるに少し憚りながら雨
戸を軽く敲くに、二ツとも敲かせず唯と答へて
出迎へしはお初にて、乙吉は既察たる態なり。
朋友に會うて無理に飲まされたで此様に遅うな
つた、ア、胸苦しい、水を呉れと云ひかけて火
鉢の前にどつかと坐り、眼前に見つく洋燈の下
を心とも無く見れば我が購うた覺えも無き大物
が誰が爲にとてか経ひかけてあるに、勝手より
汲んで来て呉れし冷水を呑みさして、ちつと眼
を留め居れば、何處で召上りましたか顔さへ青
くまでなつていらつしやるに能く歸つて来て下
されました、乙吉を睡させて仕舞うてから所在
の無さに、京屋様から頂いた此雙子綿の其儘に
してあつたを引出して、縞柄が御氣には入るま
いか知れませれど召しても可笑くは無い縞ゆゑ
妾が幾枚も着ようよりは昔郎の平常の綿入にと
裁つて仕舞うて経ひかけて居りましたが、彼裏
通りの紺屋の狗が人にでも咬みつきさうに時々

ぞこなひめと毒馬を逞しくする傍、手を舉げ無性に打ち敵けば、男は口を開かざれ、毒焰内に漲るかと思ふばかりの怖き眼して瞬もせず婆を睨みぬ。

何も知らずに來かゝりし卯平次、此體を見て大に驚き、仔細を問へば正太郎も分らず、ただ此男の亂暴せしといふだけにしてお初、お桂が何とて此男を或は怖れ或は怒るも知れざれば、兎に角、私が世話せし男、一ト先連れ歸つてと、半分は狂氣になつて食つてかゝるお桂を引退け連れ歸りたる後は嵐の和きたる如く、鼻緒の切れし下駄ばかり室の隅にぞ寂しげに飛び散り居ける。

其二十三

馬鹿め、狂人め、乞食野郎めと彼男歸りし後口小言たらふお桂婆其邊を掃きつ拭ひつする間に、徳藏が方へお初に逃げて行きしよしお桂が話に分りに迎ひにやられし乙吉お初と共に立歸れば、見るに顔色はまた悪けれど漸く胸の動悸も収まりし様子して、嗚呼恐ろしかつたと云ふも口の中、今はたゞ我が夫の何とぞ思ひし何とか思へると唯それを心配するらしく、女氣の案じかれてか眼を潤ませ身を小さくして正太郎

が出す言葉は怖々に待つ風情、罪の其身に眞實有りや無しやは解られど先づ其萎れし態あはれなり。

不意の騒ぎに好い心持は勿論せれど、驚と仔細を聞き理非を糺して其後に何とも所存定むべく、彼様な男めした後暗きことでも仕てあり、何とか云はるべきことでもある女ならば、合せものは離れもの、後刻とも云はす唯今直離縁狀書て與る法もあれ、と十分腹には強み持ちながら、遊蕩の一つもして難かしき色の出入りも仕た覺えも無きにあらぬ男だけ表面は然り氣ない顔に柔しい語氣で、自己夫婦にお桂を合せて火鉢の傍に三人の座定まり、微温茶の一杯済みて後、お初、一體今の男は彼は何奴、どういふ譯で見ると其まゝ汝は逃げた、何程貧乏神のやうな怖ろしい姿して居る男にせよ其を見たと直聲まで立てゝ逃げ隠るゝといふには仔細が無くしては濟まず、男も一寸店頭に來て殊更乃公に使はれようといふ身で居ながら汝に見ると狂氣のやうになつて追うたは矢張仔細が無くて叶はず、よく／＼の仔細なればこそ彼様前後知らずにもなるといふもの、大抵のことでは假令何の様なことのあるとも理不盡の事を仕ようとて出来るものでは無い、晝日中加之市中で馬鹿な騒

ぎが起つては町内の衆へも濟まず、第一小いながらも店は店彼様のことがあつたと人の評判になり口の端に歌はれては店の疵になるは固より、瘡せても枯れても男一疋の乃公の外聞面目も廢るといふもの、然し今度のところは次第によつて自己は何と世間に歌はれようも耐忍せまいでもないが二度あられては耐るものか、全體あれば如何いふ譯の男が包まず話すがよい、眞直に云へ、隠し立ては却つて其方のためにならぬわ、今までの濟んだことは如何あらうとも隠さぬがよい、隠しだして小器用に口を利たら尻の割れた其時仔細は假令理でも非でも乃公を瞞いたと云ふ箇狀で二言と云はせす二言と云はぬぞ、怖がることは少しも入らぬ、たゞ有體に一部始終を云うたら好いと尋ねるに、お初は涙ぐむのみにて疊の塵を捻るばかり急には答も仕かぬるを、横合よりしてしや／＼り出でたるお桂は引取り、エヘエヘへと例のをかしらぬに笑ひ聲させ、何のあの馬鹿野郎の狂人めに理由も談話もあるのですか、餘り馬鹿馬鹿しい話で話したところが虚言のやうな呆れ物の云はれぬこと、マア御聞きなさい、今の世の宗玄とでも云ひたい奴の彼の馬鹿めには幾干お初も婆も好い心配をさせられた歟知れませ

しきは眼の廻るほどなれど其に連れての骨折甲斐あるに心を勵まして朝夕を職業三昧に送りける。

小倉は流石に九州咽喉の地とて、此地の物貨は何によらず中國にも流れ出易く又た在方へも溢れ行き易き習なれば、正太郎といふ好き相手を得たるに間屋は悦びて、此商賣今一ト伸しせば他市の同業を凌ぎ倒さむことも困難からずと張り込める間際、毛の賦を脱くに手間のかゝるを厭ふ餘り正太郎毎夜の工夫を積み、容易く賦の取るゝ薬水を考へ出しければ、極めて面倒無しに仕事の捗るまゝ愈々間屋乗り地になつて、利潤は幾分を與ふる筈の約束整へ、一働きして貰はむと額に油を浮めて頼みぬ。

今は筆より刷毛の方本業になつて、乙吉一人を相手では手廻り兼ねるやうなりければ、卯平次に頼みて、手空で遊び居る若い男もあらば業の覚え次第仕事の出来次第相當の賃錢を與ふこととして遣して下されと云ひ遣りけるに、云ひ遣りしより四五日にして頭垢だらけの汚れ頭髮に恐れなる凹み眼、身軀ひよろりと高く、馬顔にて血色悪く食相なる男の垢光りのする冷さうな素袷褌に着たるが、卯平次の添へ手

紙持つて來しかば、正太郎それとは察しながらも手紙を取つて讀まむとせしが、元來四角な文字は一向不得手の男に卯平次が古風の假名少き候文、これはと困つてお初〜と呼ぶに唯と答へて立出しお初、店頭に腰かけ居たる男を見るより呀と聲立て逃げ込みたり。

其二十二

お初が奥へ逃げ入りし態のたゞ事ならず見ゆるに正太郎のこれはと驚く間もあらせず、病人くさき今來し男は、唇までを眞青にして戰々とし身を顫はしながら踰垣と追ひ縋りしが、氣の土りしに足元脆くも物に躓きて敢無く膝を折り倒るれば、何かは知られど、汝狼藉者と背に跨がつて取つて押ふる主人を助けて乙吉までが辛張棒もて處處はす打擲くに、男は恨の眼の中に湯玉と涙を沸らして、齒を切り奥の方を打見るばかり聲も得立てず、お初の早くも那方へか身を隠せし様子に力抜けてか抵抗もせねば、身近にありし細紐にて後手に縛せしまゝ引据ゑて、乙吉を制し退めつ、汝、狂人め、面を見せい、何の意恨で理不盡に土足で他の家へ踏込む、名は何と云ふ、那處の奴だ、お初に何か云ひ分ある歟、云へ、聞て呉れう。早く吐せと言葉鋭

く糺し問ふに、男は頭を垂れしのみにて返辭もなす泣き居るさま兩に違ひたる脱毛の鶏の濡れ縮みしに異ならで、他所の見る眼にも痛ましき、氣の毒とも思はぬ向う三軒兩隣りの若い者ども、喧嘩過ぎての椿干切木持ち、役にもたため捻鉢巻して裏口表口に佇み、中の様子を窺へるが、正様、其奴に物云はせずと警察に突き出して仕舞へば好いにと云ふもあればいや、疵のつかぬやうに思ふさま撲つて逐放して呉れたが身に浸みて懲りるであらうと云ふもあり、それも正氣で仕たことで無いならば些憫然なと宥むるあれば、彼面貌を見い。とても碌な人間ではない一ト癖ある奴に定つて居れば袋叩きが一番と煽動もありて、驕然と他の疝氣を吾頭痛にする手合の無益世話焼く後面の方より、人を掻き分けて現はれ出しお桂婆、誰彼を排退て裏口より入ると直に、皺だらけの面をひとしほ皺だらけにして鐵漿の薄剃したる向齒を咬み露はし、此大白痴め、まだ付纏ふか、猫でも少し氣のきいたのなら既芥溜の隅へ入つて死んで仕舞つて居る時分だに、業つくばりめ、未だ死なない歟、汝の肉を食ひ刮いても飽足らないほど此方にこそ恨みのあるにお初に向つて何とする氣か、此疫病神、狂氣漢め、此大阿呆め、此死

家風を崩すまいと大事を取る歟知られど、長年召使うた久四郎を出来たても無い戀のため直に返ひ出すとは聞えぬ酷さ、むかしの武士の家なら知らぬこと町家の處置にしては、道理では左様あつても當然のことながら、餘り嚴過ぎる制敗とは誰が見ても噂をすべし、お初もまたまだ獨身の頃、それほどまでに思ひ呉るゝ男を一途に怖しとして身を縮めるやうな性分とは平素の舉動に鑑へ合せて見るに受取り難し、これは何でも入組みたる綾が無くては叶はぬこと、明日卯平次を音問れて彼方の話も聞て見たら何様いふ檻樓が出ようも知れずと其夜寐られぬ床の中に十分思ひを練りたりける。

其二十五

卯平次は自己が世話せし男の身の上の悲しきことなど詳しく告げて成らうことなら儼ふに決めて貰はむと正太郎が方に自ら赴きしに、當日思はぬことの湧きて上を下へと筆屋が家の騷動、何事ならむと驚き周章つ走り寄つて見れば、何かは知らず久四郎が事を仕出かせし様子に、いよいよ驚きて直様連れ歸り、物に馴れたる老功の處置巧く、先づ十分に効り慰めて氣を安堵かせ、さて夜に入りて、如何いふ譯にて彼處の家

にて亂妨せし歟、定めし仔細のあることならむが包まず老夫に聞かせては呉れまいか、と物柔かに尋ね問ふに、男は涙を浮むるのみにて、何事も思なる身の上のこと、一々申し上げるまでもござりませぬ、御慈悲には何卒其譯御尋ね下さりまするな、たゞ小生が幾重にも悪うござりまする、折角御世話下されし御家へ對して氣の取り上せし、前後を忘れ彼のやうなこと致しましたは何共今さら申し譯がござりませぬ、彼處のお初といふものには愈々恨みを懷けばとて、撲たれ擲かれしましたのは皆小生が悪いからの事、假令は何とされましても御恨み申す様はござりませれば、只如何様にも筆屋様の御氣の済むやうに小生の身をなさいまして御勘辨をしてお上へ突き出されても仕方の無いものを御連れ歸り下されました御恩は何とも申すやうござりませぬ、折角の御志を無にしました上、貴老にまで御迷惑をかけました罪は何とも恐れ入りまするが幾重にも御勘辨を願ひまする、思へば何方向いても済まぬことばかりいたしましたは身の思さよりとは申せのめ、と生面御眼にかけることも出来かぬほどの仕儀、嗚呼生きて居ても生甲斐の無い身の末を何樂しみて生きて

居ることもござりませぬが未だ死なうにも死にかねることのあるので惜かぬ生命を惜んで居りまするが、未練な奴と思し召さうと彼お初めに關することの御尋ねばかりは御免を被りまする、思ひ出してさへ勃然として總身の血が頭へ上るやうな心持、頭骨にでも咬みついて遣りたくなりしますと、未だ聲さへ怪しく慄はして告ぐるに、卯平次ますく深き仔細のあるならむと思へば聞かて心済まず、これさ若い人だとして一筋氣に左様云ひ退けたものでは無い、何の正太郎が家を騒がした位、何程の罪になることでも無ければ、ツイ一寸頭を下げて悪かつたと謝罪れば、彼方でも無闇に撲つたは済みませんでした、何か何分御勘辨をと云ふ位なこと済んで仕舞ふわさ、併し汝が彼お初といふ女房に云ひ分なんどの有ることならば今日は済んで最終は済まぬことでは無いか、顔を互ひに覺えあつた上は、正太郎ばかりを良とは思はぬ、事を捌くは老人の役、此様々と仔細を告げて呉れたら、其上の老夫の分別は理のある方に團扇を上げて、何とか計らばうでは無いか、云ひにくい角もあらう、話すと無念に思ふ角もあらうが、何にせよ迂濶に人の腹の事を他所へ洩すやうのことませぬ、安心して入譯を乃

其二十四

んが、眞に廣い世間には馬鹿もあれば狂氣漢もあるもので、彼奴は京屋に手代をして居た久四郎といふ野郎ですが、親は無し兄弟親類は無しといふので京屋の旦那さまにも御隠居さまにも不便がられ、頼ては一廉の男にして遣らうとまで思つて居て下さる御恩をも汲みわかつ、根が馬鹿ゆゑに増長して何時かお初に悪戯を仕かけ、附けつ廻しつ仇したるいことばかり五月蠅するに、お初はまた堅い稟賦の者ではあり、御奉公を大切とばかり心掛けて居たものではあり、返事もせずに暮す中、嘗無くされても馬鹿だけに執心深く、如何いふ譯でか他に女もないやうに恐ろしい威しまでかけて嫁らしいことを云ふに、堪らなくなつて此女が婆に仔細を明し、京屋様御主人の有り難いは山々なれど此様いふ譯で怖ろしければ御暇を願つて歸りたいと云うたことも一度二度では無かつたが、其辛い中に採まれるのが辛防といふもの奉公といふもの、あゝ優しくして下さる御主人様を捨てて御暇願はうとは冥利も恐ろしい、汝の心さへ堅くば男も恥ぢて改心しよう、と諭して泣く泣く京屋様へ歸せられた其度ごと、其譯なのでお初はあの馬鹿めに成るだけ顔見られぬやう御奥にはかり居て苟且にも御新造様の御傍を離れ

ぬやうして居たに、猶懲りすまに隙を覗ひ傳をもつては云ふことしかれば生命を取るといふやうな身慄ひの出るほど恐ろしい文を幾度と無く古風に遣したが、悪いことは露はれるもので其手紙を御隠居様が御拾ひなされ、以ての外の御立腹で、年頃のことゆゑ身銭を使つて外所でするほどの醜行ならば大目に見まいものでも無いが、番頭の次にも坐つて家の締りもせうといふまで仕立上げて遣つた身で居ながら、家の内を淫猥にせうとは料簡のつきどころの違つた奴、今さら口惜いが乃公を眼鏡遣ひの白痴主人にしたつた憎い者め、赦せぬ、追ひ出す、出て亡せし、と誰が何と云うても御聞入れなく返出して仕舞はれたが、其逐ひ出されたにつけても自己を悪いとは思はず、お初を恨んで京屋様の周囲を其後も徘徊、夜盗と間違へられて僕の作平といふに用心棒で酷く殴られたこともあつたさうな、其様いふ白痴が如何かして今日此處へ見えたりか知れぬが半狂亂になつて追ひ駆けたらし、思へば何處までもお初に苦勞さする疫病神か死損ひか、擲殺しても足りない奴、狗でも食うて殺して欲しい狂漢め、と腹立しげに説明かしぬ。

眞實お桂の云ふ通りならば、お初に一點何といふべき廉も無く、たゞ久四郎の大馬鹿に困るのみの事なれど、其も今は定まる夫持てる身といふこと説き諭さば何程分りの悪い男なりとて不承知ながらも其戀思ひ止まるは知れたことゆゑ先づ此後に面倒無し、萬一理不盡の横戀慕を其上でも止めれば、手出し仕たところを取つて押へて性根に染み徹るほど撲つて撲つて撲ぬいて呉るゝばかりと、正太郎一應は考へながら、又一ト足退つて考へて見れば、何程馬鹿なりとお桂の話通りの様の馬鹿げた男の世の中に有らうやうも無く、狂漢にしたところで初手から狂漢でも無かつたらうに餘りといへば人間並はづれた一部始終の所業、些草双紙の話じみて、實際に有るべき筋には遠し、久四郎とて臍腑の脱けて出来て居るでもあるまいに、分別も智慧も義理人情も一切無茶苦茶で戀さへ叶へばと吼り立う筈は無く、馬鹿は馬鹿だけに相應の料簡無くては叶はず、加之お桂が言葉の中に京屋の旦那様御隠居様にも不便がられて行末は一廉の男にして遣らうとまで思つて居られたと云へば満更馬鹿で無いは必定、又京屋の隠居も

れど、主家の用も一トしほ身に浸みて一毫にて御主人のためよかれと、口も手も勇ましく働かして勤めけるが、寸善尺魔、此悦びは敷きになりぬ。

其二十七

情ある主人夫婦が言葉に蔭にて聞きしより行本に樂ある身の、今は別意を抱くべきにもあらすと思義一方に働きて居て、折節お初が面を見る度、我さへ首尾能く猶三四年勤め遂げなれば彼優しうて可愛らしい奴に良人と呼ばれ册かれて陸まじく世に暮すべき身と獨り私に悦びつ、飯にも茶にも算盤持つにも帳合するにも此事ばかりを思ひつめて忘れ得ぬ久四郎、或時お初に好き機会を得て、御主人様御夫婦がこれこれの思召と委細を語り、汝が心さへ變らで居て呉るれば一日を千秋の思はしても三四年のところをザツと辛防して後暗いこと無く豫ての思はく通りになるゝといふものと云ひけるに、面を紅めて羞かしげに心の變るの變らぬのと此方申すこと、三年はおるか五年十年でも貴郎さへ移り氣を出して下されば辛防するに辛いことはござりませぬ、貴郎も其氣で旦那様の御氣に入るやう能う勤めて下さりませ、妾

も氣に張をもつて出来るだけ奥様の御心に叶ふやう如才無く働きます覺悟と、袖の下にて私と握りし手を握返して我が耳に燃ゆるやうな唇を觸れさせながらの細々話、折柄丁稚の辨松めが、久殿々々廣島から来た註文の狀が見えぬが何處へ置いたと旦那が尋ねてござりまするわが喚き立つるにチャツと飛び退き、情を残して奥と表とへ回顧りながら分れけるが、其後お初が我への實意は福が宿ると云ひまするから甲子の夜に縋ひましたと小やかなれども器用に出来たる財布を呉るゝ、主人の用に懸錢を集めに他所へ出る前玉子の御符とか何とか云へる尊き御符の入りたるを途中に怪我など無いためと囊ぐるみに假して呉るゝ、何彼につけて鹿略ならぬに、我が身は何時も美しくて又暖かき春の霞の立てるが中に包まれたるやうの心地して、久四郎たゞ朝夕を嬉しく送り迎へ居けるも、果實の味は日に變りて初手甘いのが爛れもし、又誰いのが甘くもなる世の常なみの態なれば新に恨むは愚昧ながら、何時かお初が舉動は變りて、我に秋風立ちしやあらすや、他に意を屬けしや如何に、逢ふたびごとに我を袖にし、よそくしくするやうに見え出しぬ。

彼女に限りて左様は無き筈、無情と見るは我

が僻眼にて他に知られど悟られまじの氣遣ひよりして彼様するならむと一應再應は思ひ返し思ひ返して見て合點の行かぬ廉のあるに、何とも思ひ惱みたる久四郎の千々に心を碎き居るとも知らでや番頭當八の或夜意外のことを話しぬ。

其二十八

京屋の番頭當八といへるは既此家に二十年餘に勤め越したる白鼠、今は一軒の家を持つて妻もあり子もある身の上なれば、日々通ひ勤めて朝に來り宵には戻るを恒とせるが、古參老功の者と奥への出入も許され、折節は泊りまして、内外の相談に洩るゝことなく關る大切の男、今の主人は一目置いて待遇ふほどなり。生れつき正直一徹の古風者、猿巧の働きは出来ぬ代りに物の道理を踏み外す氣遣無く、止まるところに止まれば横杆でも動されぬ氣象なれば、随分主人の非と見れば面前にて責め諫むることを憚からぬ位なるが、用無く閑暇ある時は丁稚小僧をも相人に物優しく打解けて長閑氣なる浮世話、罪にならぬ雑談をもすれば、久四郎はじめ誰彼も厳しきやかましき老夫と思ふ割には馴染み合ひて、遠慮はありながらも心易くし

公に云うたら何様共また乃公の所存を吃度つけよう、云ふには及ばぬ、申しませぬの一點張で壓制けられては第一乃公も乃公が世話した男の事から彼處を騒がした其云ひ譯にも事を缺く此處の道理を汲み分けてもお初を恨む因縁ぐらの話を惜むことはあるまい、死ぬの生きるのなんぞといふ左様むづかしい大袈裟なことをいふのは悪い料簡、云はぬといふを強て是非に聞かうでは無いことながら、薄更汝を袖にして思はればこそ無益にせよ如是口をきく此乃公に、話さぬとのみ云ひ切るは些酷からう、と説き諭せば、涙流して打聞居し久四郎や、面を上げ、御親切な御言葉は骨身に浸みてあり難うござりまする、申すも辛い身の恥でござりまするが、申されば既済みませぬ、一體如はいふことでござりまする、まあ可笑いと御輕蔑無く概略御聞き下されませ。

其二十六

忠義も一徹なれば馬鹿に見え、神信心も一途なれば狂氣らしく見ゆるが上、我が事ならば奥いものに蓋をしても他の事ならば錦の裏を指しても悪く云はむとする世の中に、戀の俘となつて悶え苦む者ほど氣の毒にも他眼に馬鹿々々し

く見らるゝは無く、當人の眞の涙も他には南京玉位にしか見られず、生るの死ぬのと號泣きつ獻款しつする聲も笑ひ話の嘲弄に埋められ仕舞ひ勝のものなり。久四郎が身の上も聞けば恩蒙に可笑氣なれど、其身になつて見て思ひ遣ればあはれに悲しき節もあり。元は小倉の在生れ、父母には顔も覚えぬ頃棄てられて叔母一人の手に生長せしが、丁稚奉公から京屋に勤め勤めて今は天晴男一人前、頓ては暖簾も分けて貰はうかと云ふまでになりしが、不圖彼お初が小間使ひに京屋の奥へ來りしより、心猿驢意馬狂ひ初めて、一丁目見し時若い同士の何となく上氣して、互ひに面を紅うせしを抑の發端に、此方に優しき情を懷けば穂に見ゆるがして彼方に背無くはせぬ舉動眼色の勘違ひかは知られ無きにはあらず覺えらるゝより、愛着の念は漸く長じて、一日の中懸け違ひて面を見ざることあれば何か物足らぬ心地なし、或は其人の他の男と睦まじげに物語るを見ては、由無きこととは自ら知れど勃然と面白からぬ心地なすに至り、遂には苟且の些々たる事も心に掛かりて半夜を夢に入らで済ますうつら／＼の雜慮三昧、生命賭けても此念を何日かは遂げむとまで思ふやう物狂はしく成りゆきて兎せむ角せむ

との迷ひの末は、何日まで云はで止むべきや、兎ても角て我が胸を告げず済むべき譯にはあらずと辛くも思案を定めしが、さて思案は定めても心は怯れ、幾度か幾度か感情に一つ路を往き復らせし擧句、虎の尾を踏む思ひして、それとばかりほめかせしに、明らかにこそ答へざれ厭にはあらぬ様子なれば、いよいよ心の躍る矢先、不圖奥の間の茶座敷にて主人夫婦の雑話の次にお初の噂し居たるに鋭き耳の早く留まりて忍び聞くととも知らざるらしく、萬般に渡りて氣の届くお初の起居動作の賢げなるを褒め合ひて、男では久四郎女ではお初、揃ひも揃うて好い若者を表奥とも置きあてた、と主人の云へば、何方も丁度似合はしい齡、首尾能う互ひに勤め上げて久四郎が小くとも一軒の店を出すやうにもなつた曉はお初を娶はせて遣つたら、と内儀の云ひ出るに、ハツと驚きて其儘店に駆け戻り、如是までとは思ひもかけざりし御主人の御情、若しや内儀の我が様子を悟られてのことならば羞かしいとも有り難いとも何共云はう言葉さへ無しと、坐す方々藤ながら伏拜みて涙にくれながらも嬉しいやうな羞かしいやうな腹の奥のむづ痒いやうな不思議の氣持して、先は悦び樂みつ、それよりは其爲といふにはあら

の騒ぎも既打絶えていと淋し。

其二十九

考へれば考ふるほど解らぬことあり、當八殿の言葉も満更出鱈目らしく思はれぬは過般店と奥との通路の縁にてばつたり出會ひし時我を見と齊しく嚴正な顔して後へ引返せし舉動といひ、其三日後我が遣りし文に今までは二日と間を置かせず何様にか彼様にか返事よこせしものが今に何とも目顔での挨拶さへせざると云ひ、如何にも蹊蹺のありげなるが、此處は一應是非にお初が思はくを慥にして置かれれば心の濟まぬ仕儀、さりとて彼様まで云ひ交した中、よもや他意はあるまいなれば、疑つて却つて此方の心の浅いやうに思はるゝも羞かし、ええ、如何なりと此儘にして成行を見よう歟捨て置かう歟、とは思つても堪忍がならぬ、ええ、これほど乃公は思ひ切りの悪い奴でも無かつたに、斯様今までに迷ひ込んだことも一向無かつたに、如何して斯様は馬鹿になつたと自分て悶て自分で苦み、夜を平日より長く覺えつ曉天方まで寢もせて惱みぬ。

然も其翌日の事なり、奥藏へ物を藏むる折柄、首尾よくお初に會ひぬ。幸ひ四邊に人も無し、

思ふ坪の良き機會と小股走りに馳せ寄つて袖を把へ、恨の数々云はむとするに、今までは我が面を見るも先方よりも笑を泛めながら歩みよつて帖然と身も寄せ、我が腮の下に頭を突込むやうにして話を聞きしものが、つんとして回顧る眼の中を矢くし、何をなさります久四郎殿、御用がござります、其處を御放しなされませ、と聲こそ大きくは立てざれ荒氣なく云ふに、何が氣に濟まいで左様はつん／＼とする、云はう恨みも澤山あれば聞きたいことも溜つてあると言葉忙しく云ひ出づるを、頭から打消して耳にもかかず、知りませぬ、知りませぬ、あた厭らしい此人は、妾を把へて何となさる、御放しなされと力を入れて袂を拂ふに、赫と逆上て、放さばこそ、こゝ、これお初、それでは違はう、濟むまいぞと夢中になつて引据ゑむとする男の面を平手にびつしやり、あれ旦那様かと聲を立てられ、はつと驚き手をゆるむる途端に、つるり、逃げて行かれぬ。さてはいよく心變りか、汝お初今さら唯置かうや、男兒一匹袖にされた儘でおめ／＼引込まうか、枕並べて寐こそせざれ末の末まで約束しながら、言葉は反古にしても可いとは云はせぬ云はせぬ、云はせられぬ、何處の馬骨に心を寄せて我に背を見

するか知らぬが何安穩で世に住ませうぞと虚空に一人腹立ちしが、若や二人が間を悟つて、しやくりかなんぞせしものあるより我を實情の無いものと恨みでもして彼様せしこと歟と猶未練の迷ひも少しは無きにあらず、も一度口利く折を得て簾と紐さむ紐さむと明暮胸にはこればかりを満たせて時を待ち居たれど、いよく我を疎むかして、五日に三度三日に二度は少時樂しく語ることありし以前には引替へて、遂に其後機會を得ず、たま／＼顔見る時はありても籠を脱けたる食より疾く我が近くをば避けて去るに流石未練も残り無く、必定變心しくさつたか、憎い女めと齒を切り涙を吞みて、昨日も床られず今日も寝られず、心火の逆上肺に祟りて、病むとは無けれど一日々々衰へ行く身の瘡するわ／＼。

されどお初が對手の知れぬに、斷念め斷念め、斷念め切つて萬一と思ふ未練はありしが、其年熱き坂中の頃、魂祭りの夜のことなりし、人々納涼に外へ出でし後には丁稚の居睡るばかり、お初一人が蚊遣火の薄く煙れる室の縁に團扇つかひて居るさまの櫓に吊せし盆提灯の光に透きて葭戸の彼方にそれと知るれば久四郎は恐る恐るも奥に忍びぬ。

居ける。

一日の事、店の帳合遅くなつて、雨さへ降り出しければ番頭殿も今夜は此方へ泊ることしたがいとの御内儀の言葉に、左様ならばと例のことなれば別に辭退もせず、奥へ呼ばれて主人の前にお初が酌の酒まで飲せられて、ほくほく悦び、麴て店の方へ退き出けるが、微酔の心よく、舌輕くいゝの雑話を久四郎相手に語りける中、今日お奥にてお初の酌で御酒頂いたといふことより、久四郎が耳立て、聞き居るとも思はず顔に、彼女も一寸綺麗なが眼の下、黒子が玉に大疵、惘然なこと、と云ひ出せば、如何にも其通りなれど、取廻しも小機轉が利て如才無く、心がけも好いらしいに其難も消えませうと久四郎挨拶しけるに、いや／＼左様で無いと禿頭を左右に振り、如才ないは汝の云ふ通ぢやが心がけは好いと思へぬ、我が今まで知つた女に小機轉の利たものは大抵不實輕薄なが多い、彼女も亭主を持つまでには饒に男の二人三人は持ちさうな奴と云ひ張りぬ。昨日此頃の舉動に疑ひをこそ抱き居れ、今に可愛うて可愛うて珠にも寶にも代へがたく思へる女を惡く云はれて好い心持はせず、これはなかし、番頭殿の、何ぞ見たことでもあつて左様見

透しの八卦見みたやうに云はるゝことかと内心に笑ひを藏して久四郎又問へば、あると／＼、屹度此眼で見たことがあるが、如何でも彼女は胡麻摺らしい、既に此間奥の離れで、と云ひかけて急に口を閉ぎ、どつこい、口は禍災の門、無用のことは云ふまい云ふまい、嗚呼醉つたな、と云ひながら自ら口の端を捻つて、痛いと呼んで笑ひに消しぬ。

久四郎其上を問ひはしたけれど其にも及びかれて、番頭殿の氣作なと同じく自己も笑に紛らしたつ、麴て床には就きたれど、妄念い／＼起りて胸のもや／＼に寝られ、ばこそ、粗忽なことは酔うても云はれぬ番頭殿がお初の評は餘り酷いに相違ないも、不實輕薄と彼女を見定められたには、何ぞ手證のあるらしい口ぶり、亭主を持つまでには二三人も男を持ちさうなと、ハテ彼女が、彼のお初が、彼の、三年でも四年でも貴郎の心さへ變つて下さられば辛抱しませうというた彼のお初が、何で其様なことがあるものか、思ひ思つた我にさへ猥りなことも無くして居る彼お初が、何で男を二三人、番頭殿の醉の體語、怪しからぬ體語、不埒な體語、何の彼の當八めが何を知つて居るものか、然しお初が頃日の舉動は合點の行かぬ、疑はしい、といつ

て他に誰を何様する。當八殿は彼通りの人、三藏が、溝へ落ちた袖のやうな脂疱だらけの黒い面、あれでもあるまい、五助が、聲變りしたばかりの小僧上り、其餘は残らず丁稚ばかり、僕の作平が、鼻は立派だが年中頭を塵で霜降にして居る和様の蝦蟇仙人とも云はう奴、向う三軒兩隣家、凡そ此處邊に眼に立つ男は如何考へても見あたらず如何にして其様なことのあらう道理が無い、あつて堪るもの敷、が、當八めが言葉では、二三人も男を持つ、胡麻摺、奥の離れで何とやらと云ひかけて口を閉ちたが、何が、胡麻摺、ハテ胡麻摺とは些なかしい、奥の離れ、ブン奥の離れといへば御隠居様の居らるゝところ、奥の離れで如何したといふのか、ハテナ、口を閉いで急に自分の口の端を番頭殿の捻られたは、ハテ、胡麻摺とな、奥の離れとな、よもや御隠居様が、又御隠居様に、口は禍災の門とな、して見れば云うて悪いことに違ひないな、ハテナ、奥の離れ、胡麻摺、口は禍災の門と番頭殿の自ら云ふ、合點のならぬ、ム、もしや、御隠居様の、何、馬鹿な、其様なことのあらうものか、けれども萬一、もし、ひよつと、いや何、まさか、と思ひ迷ふ筈には五助が齒を咬む音のみ更け行く夜の物靜さを破りて響き、杵走りする鼠

娑婆で眞面目に働いたとて、アーア、何の楽しみがあるものか、生きて面白くない我が身に骨を折つて飾をつけ、實體な、發明な、人が好いの、譯が分るの、と云はれたい願望も今は無いれば、怠惰漢の、馬鹿の、鈍いの、と云はれても其丈のことと思ふばかり、御主人様が御叱りなさらずに黙つて叱られませう、朋輩衆が誘うなら頭を低くして誘られて居よう、飯も強て食ひたうも無ければ湯茶も強て飲みたうも無く、爪が長うならうが髪が汚れようが今さら思へば鉄刀を持つたり石鹼を使うたりする人が詰らぬ無益をするやうに見えて自分では手さへ動かす氣にならず、ならうことなら底の深い、光の無い、風の音のせめ、人の來ぬ、極々靜かな小さい谷間のやうなところ、此身が今悉皆此儘引取られて、それきりにすやうと睡り死に死んで仕舞ひ、而して片端からづく／＼と雪の解くるやうに消えて仕舞ひたいやうな、あゝ何事も諦め、可厭なと長太息つく／＼自己が心から心を映らせて世を味氣無く思ひなし居たるが、戀しさは愛き身に添へる影なれやと人の云ひしは虚言ならで、思ひ棄れど離れれば、嘲るやうな鴉の聲に、億餘の夢を破られ、今日も暮ぬと告げ渡る遠寺の鐘の音に茫々然たる胸を拍れても一日一日

死にきらず。精神安ければ怪異無く、精神亂るれば不思議の多くなるものにて、久四郎が身の周圍には不思議の事の多くなりぬ。其第一は番頭の當八が何かは知られど底意ありげの眼殺して輕蔑む如く我を睨むと思はるゝこと、其第二にはお初めの衣装の前々より小清潔して居たるは知りしが此頃取りわけ色もよく品も上りしものを着るやう見ゆることにて、是は特更に心の惹かゝる範圍なり、其第三は主人の内儀がお初なばじめ皆の者を前々よりひとしほ優しく待遇ふやうに見ゆる中にたゞ我のみをば今まで通りにするかと如何にも思はるゝこと、此の三つをば主にして其他の小さき不思議さは一々云ふに堪へぬながら、是皆自己が邪猜より思ひなすにはあらざるやと自己ながらと思ひ消して見ぬにはあられど、其他のことは思ひかへしも随分成るべし、たゞお初めが身の衣装の美麗になりしといふ不思議は何とあつても解くべきやうなく絶えず胸にぞ残りける。

其三十二

今一度、猶一度と未練の文も三度四度五度に及びぬ、されど一向臆だとも潰れたとも返しし無きに愈々切な沸したる久四郎、最早今度こそ

は是かざりと又懲りすまに一通長々しく認めて無理に與へけるが、文造るだけのことになさへ先方に受取らう氣の無いことなれば苦心は中々想の外にて、危き瀕を渡り人の眼關を超ゆるが上、取らじと云ふを強て取らする其度ごとに幾度か胸を躍らし膽を縮めぬ。

京屋が主人喜太郎夫婦はかれて信する太宰府の天満宮參詣にとて博多の顧客の歸るを送りがてら僕等の作平を連れて三四日家を明けますと出かけし後の事なり。番頭當八帳場格子を前に控へて嵩高の仕入帳水上帳出入帳判取帳それそれを當つて見て油斷なく眼を通し居る相手は久四郎を初めとして三藏五助等、いづれも眞面目に働き居れば、丁稚等まで老實に身を動かして居けるが、主人が不在のこととて隠居の喜右衛門、今年積つて五十六にはなりながら岩疊づくりの緒ら顔、まだ艶々しき眼の中を光らして酒肥りの身を重げに運ぶ梵音のし／＼、折々店に立出て番頭殿御苦勞な、久四郎も三藏も皆の者も大儀なが、主人の留守は猶よく氣をつけてと愛嬌ある二重腮を動かかしつゝ莞爾やかに云うては奥へ入られける。其日は一日事も無く、其翌日も亦無事なりしが第三日めの夕暮方奥の方より丁稚の彦が何かは知らず狼狽たる顔して馳せ

其三十

庭前の松の葉越の月鮮かに蒔繪見る如く美し
きを餘念も無しに眺め居たるお初不圖ふりかへ
りて久四郎が影を見るより突と立つて避けむと
するを、此時遅く彼時疾く、辛くも把へて下に
引据ゑたる久四郎が面ざしの恐ろしさ、眼眦は
裂けたらむ如く吐く息は火炎を吐くかと思は
るゝばかりなれば、鷹に捕られし雀の身のお初
は顫き慄へつゝ唯俯伏して縮み居るを把へし男
も顫ひ聲にて、打ちも擲きもせぬものを其様恐
ろしがることも無い、過般からの舉動といひ今
また私の影を見ると直ぐに逃げようとする態と云
ひ、如何でも私を袖にして他に心を移したに違
ひはあるまい、これお初殿、さうでは済むまい
濟ませまい、汝の心が變つたれば既それまでと
は云ひながら餘りそれで醗過ぎよう、段々堅
い約束した上から云へばたゞでは置かぬと、き
つぱ廻して邪見に出ることも知らないでは無け
れど、私が氣では左様でない、たゞ何處までも
何處までも汝を可愛う思うて居れば、心變りの
した女め勝手にし居れと思ひ捨てゝ仕舞ふのが
男兒らしいとは千も承知萬も承知して居れど、
眞實を云へば左様は出来ぬ、永劫末代思ひ切れ

ぬ、假令汝が如何あらうと此一念は捨て切らぬ
から其氣で如何とも勝手にせよ、男兒の顔を潰
した女め憎い奴めと何程意氣地の無い私だとして
思はぬではなけれど、又えゝもう思ひ切つてと
斷念めぬでもなけれど、思つても斷念めても何
の因果か思ひ切りも斷念切りも出来ぬ身の、い
つそ身でも投げて死なうか首でも吊つて死なう
歟とまで思ふ今日此頃の胸の苦しさ、少し推量
して呉れても好かりさうなと私は思ふ、此様い
ふことを聞くにさへえゝ五月蠅と厭がるか知ら
ぬが最初から汝が苦無くして呉れたなら思ひ切
りもしたらうものを、怒じ優しくして呉れただ
け、其言葉が耳に遺り其顔付が目に残つて、思
ひ切らうにも思ひきれず死なうにも死にきれぬ
此朝夕の四苦八苦、つまるところは何處へ行く
恨みと汝は思うて居る、夜も碌々に睡られず、
三藏殿や五助殿の鼾の聲商切りの簪を毎夜々々
聞き明かして精神も聞く忙々となり、生きるに
樂みない日を送れば今日が何日ぞといふことも
忘れて皆に暮碌したかと罵られ笑はれたことも
一度二度では無い位、自分が顔を洗ふときに思
はず見て取る水鏡にさへ、あゝ瘦せたことのと
我と氣のつくほどの此の癪れも汝の眼には見え
ぬか、えゝ情無い、此程云ふに彼方向いて空耳

潰して居て呉れるわと、愚癪の涙をほろり／＼
と續して口説けどお初は單に誰にてもあれ來て
くれよかし、一時も早く逃れむと思ふばかりの
眼色せしが、折節五助の戸外の方より物音さし
て歸り來れる様子を見るより、五助殿一寸來て
下され用があると肝ばしつたる聲を上ぐれば、
女の頼みに返辭よく何事かと云ひつゝ此方に來
るらしければ、久四郎は庭の方へ突と下り立つ
て跣足になり樹蔭に少時身を隠しぬ。
いゝ／＼お初が情無さの遺恨に堪へかれ、久
四郎は暇あることに満腔の恨を一々數へ擧げ
て、我すら身の毛立つほどのいと恐しき文を作
り、あはれお初に手渡しせむと機を圖りて待ち
居たり。

其三十一

よき機は得たり、捉へ得たり、逃げむとする
袖を把つて袂に恨みの文は入れたたり、されども
見しや捨てしや知らず返事は文にも眼色にも無
し。白痴と笑はば他の笑へ、最早堪忍なり難し
と拳を固めて男泣きに泣く宵々重なつては、算
盤取つても過ちを彈き込みし五玉を正さう心
懶く、なに世の中が三五十五歟、十八にもなり
二十にも強い者が爲ればなる不道理な恨めしい

御暇にでもなられてはと案じ煩うて御返事なんぞは固よりいたしませれど胸一ツに藏めたざり大抵は御文も封のまゝ焼捨て、成るべくは御奥にはかり居て袂や懷中に恐しい御文も入れられぬやうと心掛けて居りました、其文は如何して落ちて居りましたか存じませぬが、妾が申すことに虚妄のござりませぬことは其を開いて御覽になつても大抵は様子で知れませうとの白狀、何を賢女立てに小賢しいこと云ふと思ひながら明けて見たれば、これ此狀だ、番頭殿、讀んで見て笑はつしやい、女の背無いの恨みながら威迫半分に愚癡半分の百萬陀羅、成程お初が言葉の通り、あゝ若い女には似ず考慮の深い見上げたものとお初を思ふにつけ、引替へて久四郎めが愚にもつかぬ不埒の段々呆れて物も云はれませぬ、サア、久四郎、仕たいにも分疏は何と毫もあるまいが、頭を垂れたざりで居るは自分でも既あやまつたか、白痴た奴め、汝のやうな白痴は小倉で人にも知られた京屋の店には片時も置けぬ、汝のために店が世間の物笑ひになる、主人の面に泥を塗る奴、出て失せ出て失せ、たつた今出で失せい、といふ勢ひ鋭く、番頭當八が傍より執り成しするゝ聴かれゝこそ、若い中にはあり勝の女郎買ひなどした過失なら

又勘辨の仕やうもあるが家を亂さず此不始末、決して赦せぬ、番頭殿止めさつしやるな、喜太郎夫婦が歸つたら老夫が出したと云ひます、何をうちゝ其處に仕居る三藏五助、此白痴を戸外の方に掴み出せ、との嚴しき言葉に久四郎はらゝと涙を墮して、申さうやうもござりませぬ身の不心得、何と仰せられても恐れ入るはかござりませぬ、幼少よりの海山の御恩を碌に報じもせて此不始末ゆゑ御腹立は御道理なれど思知らずとは御情無い、神様佛様より有り難う思つて居る御主人様に見放されては此久四めが世に住む甲斐も既ござりませぬ、御暇受けて行かう先は死ぬより他に見えませれど居れば居るだけ御腹立も深い道理と、離れにくい此家様をば残念ながら後にします、御丈夫にはいらつしやれども既御歳なり、是からは寒さに向へば御持病の御養生能く御壯健に何卒御渡りなされませさらば御暇いたします、當八殿長々御世話になりました、旦那様御内儀様にも何卒よろしく願ひます、三藏殿五助殿皆様御世話になりました左様ならばと云ひは云ひても心迷ひて猶立ち兼ねるを、隠居は愈々一階の聲に少しの膠氣もなく、汝に身體の世話焼かれう敷、無益こと云はずと立つて行けと云へばやうゝ頭

を上げて立つ時、奥に泣き聲の忍び音ながら聞ゆるは遂にやさしい言葉一つ掛けたことは無けれど三年以來此我に實意を運べる乳母のお大と覺しけれど、お初は那處に潜めるやら影さへ見せれば空しく奥を憚りながらも覗き入れたるばかりに中の口より出で、履物穿いて萎々と五六歩行けば、背後にてひそゝ何か囁き合ひて我を笑ふか笑ひ聲さへするは正しく三藏五助、汝先々月のこと、朝疾く惡所から歸つて青い息つき一兩と二歩今無くてはと我に絶つて立替へさせしを今に歸さぬ横着者めが自分の事に柵に上げて氣の毒とも此我が上を思つて呉れぬばかりで無く、好い狀ぢやとて笑ひくさる敷、えゝと思はず拳を握つて跟々と歩む後より駆け來つて足に纏はり尾を振りゝゝ無心に戯れるは京屋に飼はれし赤犬のバとて小さき時より取り分け我に馴れし狗なり、あゝ情無い世の中に我を思つて呉れるのは此狗ばかりとなつて終うたか、えゝ脇の下が風に冷たい、オ、ハ、脚を踏だか、堪忍して呉れ。

其三十四

昨日まで今日まで頼みきつたる京屋より逐ひ出されて歸らうに家は無し行かうに的も無き

其三十三

來り、番頭様、御隠居様が恐ろしい御顔なされ
て、直當八を呼んで来いと嚴しい仰り様でござ
りますとと慄へく云ふに、當八は云ふに及ば
ず、久四郎三藏五助も何事かと驚く間も無く、
手にせし筆を耳にしながら駈つけしが、當八
を捉へて警るとおぼしき隠居の聲高く、不埒千
萬、不取締、憎い奴、疎略、怪しからぬ、と
語勢鋭く種々の惡き言葉の洩れきこえぬ。

何事の起りしか知られど彼様まで番頭殿の叱
りを受くべき過誤のありし仔細は無き筈と皆々
の思ふところへ懸て當八、これと同じく怒氣満
面の容態してツカくと戻り来るや否、ついに
無い慥食聲にて、久四郎殿、御蔭で大層御隠居
様に今までに無く褒められました、御呼びにな
ります、直と御いで、えゝ何を愚圖々々して居
るのか、御隠居様が御呼びになる、と攫みかゝ
らむばかりに云ひぬ。

さては南無三、我が上か、お初のため歟と久
四郎は一時に赫と氣を上ぼせしが、逃げて済む
べきこととなれば、無理に心を硬くして奥と
店の僅少の間の日に何度となく歩み慣れし板
敷を踏み足さへしどろに、霧の渡せる棧にて
も踏み行く如く心地しつゝ首を俛れて隠居の
前へ。

恐ろしく久四郎の座に着て少しく首を昂ぐる
を見るや隠居の喜右衛門は雷の如き聲をあびせ
かけ、ヤイ久四郎、よくも汝は優しくして遣る
恩に狎れて、家の亂れも構はずにお初に對つて
不義云ひかけたな、かりにも當八殿の次席に坐
る身では無いか、他の者が左様いふことをする
を見たら蔭で内々不心得を諷して思ひ止まらせ

もすべき年功身分で居ながら自己が先に立つて
の不埒は何事だ、大白痴め、汝は誰が拾ひ上げ
て手簡も書ければ算盤も彈けるやうに眼鼻を明
けて呉れたと思ふ、此様なことするやうな其恩
知らずの料簡では一人で男兒に成り済したやう
にも思つて居るだらうが、白雲頭に青漬くつ垂
らしてうろ／＼居つた餓鬼の頃の見じめの狀
を見せて呉れたい、親は無し兄弟は無し諸人に
なつて遣らうといふ親類さへも無い奴を惘然に
思へばこそ連れて来て手も伸ばし足も伸ばし、

今日が日までに仕て遣つたに、主人を盲目にし
て家の内で不埒をせうとは言語に絶えた不屈者
め、愛想もほと／＼盡き果てた云ひ譯云ふな、
證據がある、何なくど／＼云はうとも今さら取
り上げることではないぞ、此文が物を云ふ、なう

當八殿、悪いことは出来ませぬ、丁稚の疹めが
封のまゝの此文を拾つて宛名の讀めただけに、
お初が名を呼びながら、丁度老夫が昨夕から疳
癪の氣味があつたで猪の目へ灸をして貰つて居
るところへ何の氣も無く持つて來たを、背後か
ら來たなら心もつかなくなかつたらうに前から手
にして遣つて來たで早くも久四郎が筆らしいと眼

が留まり、一寸見せいと手に取つて見れば愈々
それに違ひないは不思議とお初を回顧つて見る
に疾や顔の色を變へて小くなつて居る始末、必
定主人の目を掠めて念頃し居るか不屈者と、灸
を終うてから段々紮明して見るに、旦那様の御
眼に入りました上は申すまいと思つたことなれ
ど、申しませれば身の明白が立ちませぬから何

も彼も打明けて申しますれば、實は久四郎殿に
色々のこと云ひかけられましたは餘程前からの
こと、空恐ろしい旦那様の御眼つまを偷んでま
あ怪しからぬと一言に明るいとこで申すこと
も存じて居れば、御新造様に私と申し上げるこ
とも知らぬではござりませぬ、久四郎殿も御
家のためには不料簡さへなく勤められるれば随分
とならるゝ方なり、是から御出世もなさうとい
いふ方なりまた妾なんぞよりは古くも此家に居
らるゝ方なりと思ふにつけて、詰らぬことより

獨語して、居ぬと云うて呉れと云へば、既御在宿になりますと申しましたといふにます／＼癩瘡は起りたれど、いや／＼お大といふにも限らず、他に心當りの女も無けれど又何のやうな人かも知れず、京屋を出る時泣き聲を頼みもせぬに立てくさつたが其時は薄腹の立つたまで厭で堪らぬ奴ながら若しもお大なら、ム、京屋の様子も聞くによし、心にかゝる今朝の夢見も萬一眞實で有らうも知れば開糸して遣るに好い捉へ者、えゝ忍耐して會つて呉れうと、それなら仕方が無い、會つて遣りませうといふ。寢て入り来るを見れば案の定、白に手足を生したやうな御乳母殿なり。

見るから蟲睡が走つて厭で堪らぬを我と我が心を叱りながら、大眞面目の儼然とした顔付に何の御用で御いでかと云はぬばかりの無愛想なあらはし、默然と控へ居れば、先方は疊の破れたる壁の潰れたる天井の無き戸障子に満足なものの一つも無き室の中の酷たらしき態を見廻はして既眼の中を涙ぐませ、何からいうて好いことやら思ひも寄らない御氣の毒なこととて後は何やら口の中になつて仕舞うて分らぬことを鼻つまらせて云ふ其情は斯様なつた我を慰めて呉るゝ心切と知らぬにあられど、頭から其鼻聲が

よく／＼性でも合はぬものか瘡に障つて堪らず、来たかとも云はず挨拶なしで居れば、八寸膳にすれ／＼といふ膝をすゝめて、何日も左様委さへ見れば怖い顔をして居すと、来たかと位優しいことを云つたと誰へ濟まぬといふこともあるまいに、ほんに／＼此家へは如何して尋れて来たと思つて居られる、容易い心配では来られませぬ、不意に起つた昨日の始末で汝が御店を直と出られる其跡を丁稚の六めに少しの錢を遣つて頼んで見届けて貰つた上、勿體ないことながら御主人様に虚言を云つて今日だけの御暇を頂き、やつとかつと此家へ尋れつき、宿の人に心付して漸く會はせて貰うに左様むづかしい顔ばかりせずと汝には分りきつて居る妾の胸の中を少しは汲んでも可さうな、昨日も昨日とて畢竟は彼のお初めから起つたこと、今の身になつて此様なところに燻はつて居られるも誰がした事と思つてか、彼の碌で無しの生畜生のお初阿魔めを見て退けて妾が心を聞いて見る氣は出ませぬか、ア、怖い、そんな顔をして睨ますものだに、碌で無しの生畜生のと云つたのが御氣に觸つたのなら堪忍して、よう堪忍して、よう／＼、堪忍して、よう、此通り謝罪します、成程彼の子は歸も若いし色も白いし、

妾は姿なり色も精しい、ハイ彼兒は中肉妾は肥つちやう、彼兒は骨細の繊細な質、妾は無骨の無體なり、御氣に召さないのは知れたことではあるが見目より心ともいふこともある、彼兒は汝を何様思つて居る、妾は汝を何様思つて居る、較べて見たら分らうに、それにまた／＼狼者の彼兒の腹の恐ろしいことを汝は知らず居るが、話をしたら其も妾が妬みて云ふか岡焼で云ふかなんぞと思はれては埋らない故云ふまいが、昨日の事も彼様なるとは妾は全然一昨日から知つて居たので、如何かして汝に云はう教へようと思つて居ても汝は例の妾の顔を見ると直に人の大勢居るところへ逃げて仕舞ふので、わくせきと氣ばかり探んでも間に合はず、とう／＼見す／＼昨日の仕儀、口惜しいとも悲しいとも餘所見して居た妾の胸は今思ひ出してさへどき／＼とする位、ほんに其時は御隠居様の前に出て、何も彼も構ふことは無い、濁り水の底の泥まで掴み出してと思つたが、え、其譯を聞きたいとエ、いや、云ひますまい、話しますまい、猜みや嫉みで云ふことと思はれるのが妾に辛い、彼兒の悪い事を云つたら復怖ろしい顔をされて怖ろしい眼で睨まれませう、些、妾が埋らなすぎる、何、何、屹度エ、屹度妾を睨

身となりたる久四郎が差當つての當惑、もとより身から出せし鎗に他を恨みふうことも無けれど、宿無しとまで成り下がりは是も誰がため、畢竟は彼のお初めがためと思ふにつけ彼につけ、一々お初めの恨しからぬことも無く、今夜は那處に睡らうこと歟、明日より何様して生活さうこと歟とさま／＼に屈託する胸のむしやくしやすの中を縦横十字に躍り居るは憎いも可愛も今は了らぬお初といへる悪魔なり。

畜生ッ、外道め、狗め、猫め、彼様まで此久四郎に約束しながら變替して地獄へ我を突き落しきつた此恨みは那處へ行かうぞ覺えて居なれ、金輪奈落汝をのめ／＼世に活かさうか、此儘死なうが一念は火の珠になつても頭の上を繞つて離れぬ、屹度憂い目を見せて遣られれば永劫末代心が済まぬと齒を切つて京屋の方を回顧る途端、雪白の掌を合せて、久様赦して、妾が心から仕たことではござりませぬものと那處でかお初が云ふやうな心地のするに、燃え立つた火炎は忽然消えて、美しい黒い髪、白い額と映り合つた露を湛へし眼の清しき、向う齒二枚の玉を銜みたるやうなが、紅は點されど天然花より紅なる花の蕾の唇の蔭に微に露れたるお初が佛眼前に立てば、えゝ未だ此

の我を惱ますかと我と我が心を叱つて思はず聲を立てしに人の聞きはせざりし歟と四圍を見廻はしてホツと息つき、夢路を辿りて歩むとも無く小倉の市街の盡頭に出でぬ。

持合はせし端錢の有りといへば有り無しといへば無いといふべきほどなるに怪しき宿りを索めて其夜は露宿もせざりしが、假令青空の下に寝て星の「目はじき」に身の愚さを蔑視まるゝやうな氣持のせざりしにせよ何として好い夢にありつくことの叶ふべき、彼や是やに徹宵寝られで、冷汗ばかり足の關節にかきしが、曉天方に少時眼垂める夢の中、乳母のお大があり／＼と彼の精狗のハチを牽き来て、いと親切に問ひ慰め呉るゝ話の本、お初殿は御隠居様の御手がついてと云ふ其言葉半分開かて勃然として汝お初と怒つて突立つ我が身より紫色の火炎のぼつと迸り出しにアツと叫んで苦むと見て、寤むれば破れ障子に風のからかふ音ばかり淋しく聞えて何も無し。

木賃同様の安旅館に腰を据ゐたる久四郎、復び此家を立ち出でて何を何様といふ意も無ければ其儘朝も起き出でず、垢臭い蒲團の中に睡るでも無く起きるでも無くものつそりとして、他に話を仕ようでも無く隠りかへり、溜息ばかり漏

し居けるが、不思議、不思議、合點の行かぬ、貴郎を尋れて御女中が見えましたが、と宿の小女郎が取つぎぬ。

其三十五

見らるゝも羞かしき此處へ昨日の今日といふに如何して知つて誰の尋れて来て呉れしか、お初か、いや／＼お初めの来よう筈は無し、お大か、それとても我が此家に來しといふことを知らう筈は無けれど、假令知つたにせよ何の考へで我を殊更尋れて來しか、日頃彼の肥つた大きな身體を振り廻して仇嫌らしく我が後を追ひかけ、反吐の出さうなしたゝるい眼付して障つて欲しや落ちて見せうの風をするが可厭で可厭で堪られれば、風下にも居ぬやうにして、彼女の影が見ゆれば突と立つて逃げ、物云ひかけられさうになれば突と後向きになるほど、情無くして遣りたる報を今見せて、我が此の態を、それ見よと笑はうとて來しこと歟、えゝ無益しい、時を失へば語らぬ奴にも馬鹿にされる、お初に話せうにも文渡さうにも彼奴が間がな隙かな我が後につくので如何様に邪魔になつたか知れず、散々困らせきつた上に又此家まで來て祟るとは好淫婆め、好い加減にし居れ、會はぬ／＼、と

心當もある、汝の氣さへ是だけに思ふ姿の心を些は可憫と見て御免なら仕様模様もまたあります、返辭の無いは不承知か、氣に食はぬとの腹立か、俯伏したがり黙つて居るはまだお初めを思ひきらずに口惜涙でござりますが、これほど姿が情を立つるに、え、情無い、聞分の無い、と云ひつゝ手をもて推動かせば、こはそも如何に、泡を噴き出す切りしまゝ顔は土色、眼は瞑ちて、何時か男は呼吸絶え居るに、呀と驚き度を失ひしお大は下司の本性を出し、關係を恐れてか四圍を見廻し、人無き様子に漸く息つき、出したる金子を手早く藏め、那處とも無く逃げ失せぬ。

其三十七

恍惚として夢のやうに眼を開き見れば宿の主人夫婦を首とし人々我を取り巻きて、やれ氣がついたか既しめたと悦び勇む狀なるにぞ、僅は憤怒に身を攻められて我知らずなりしと覺えし時心を失ひし歟と漸く悟りは悟りても猶身の中の例ならぬやう覺ゆるに言葉も出でず、其儘ちつとして他のする通りになり居れば、醫師とおぼしき男來りて仔細らしく脈など候ひて歸ると頗て生姜の香の苛く高き熱き藥を飲ませ

られしが、少時する間に二十里も歩いて疲れたごとく耐へ心無くなりて復た困々と睡りに入りぬ。

暖かい生活するものに冷たい情を持つものあれば寒けき生活をするものに暖かい情をもつものもあり。緣でこそあれ久四郎が圖らず宿りし舍の主人の已之助といへるは貧乏は仕て居るものの物の分りの早きが上に少しは男を賣りたがるところもありて、久四郎が身の上を早くも合點し、大店の番頭か手代か知られど何れ左様いつたものが女のことか金のいざこざで店をかぶり、世間有り勝の淺瀬へ今初めて舟を乗りかけたといふお坊さんに相違はない、見たところ根性も惡では無さうな眼つき口つき、惘然ながら病氣といつて死もすまい、加護つて置いてやれ、なあ女房、と同氣求めて何處から引張つて來たか平常の娘で生長つたらしくは無き女房に云へば、いぼじり巻にした頭髮の亂れを齒の粗い櫛で邪見に引掻きながら、左様さ氣の毒な、好い男だに逐ひ出すのも無慈悲、汝が一ト晩取られて來たと思へば濟むこと、十日や二十日は無錢で置いても知れたもの、何せ溜めよう宗旨では無し、藥餌も飲ませ美味物も妾が澤山食はせて遣つて艶々した好い色氣の男に仕立て遣るから

に今に御覽だ、と答ふるにもまた一風流あり。亭主は聞て莞爾つきながら、ム、ム、左様して汝が調戲へば好い、男の好いのは徳をするな。ヘン、お巫山戲でない、二才ではあるまいし、好い男と云つたのが御癪か。ハ、ハ、左様ぢやあ無いが、美味物は乃公に食はせて貰ひたいからだ。

熱病といふもの醫者様仲間での通り文句では何様なことが知られど、兎角人間不幸福の時攫むものにて、あばれ久四郎、戀と恨みとの二つに攻められし上を熱病にまで攻められ、身心の苦にほと／＼堪へかれ、助くるが御役の神様にさへ疾死なせと眞に祈るほどまでになりぬ。

ひとり寝

其一

我を口入れて呉れし卯平次之恩を忘れて、顧みざるにはあられど、世話して貰ひて行きし家の主人の女房を見れば恨みある女なるに分別無くなりて、先方をも驕がせ、卯平次にも迷惑かくるに及びしが、兎に角に我が惡しとは知らぬにあらぬ久四郎、仔細を尋ねられて包み得ず、

みつけれエ、そんなら仔細を話させう。

其三十六

氣を落付けて能くまあ妾のいふことを篤りと聞いた其上で怒るとも如何とも汝の好にしがよい、仔細は斯様いふ譯、聞たら定めし業も煮えるであらうが、實はもう餘程前のこと、坊様と一所に妾は次の間に寝て居る其上の間で旦那様と御新造様との寢物語を聞くとも無しにうとうとしながら聞けば、何様や御隠居様めがお初めに手を御つけなされたとか御心を御かけなされた様子とかで困つたことの持上つたと密御話したさるゝ様子、それから妾も法界悋氣の要らぬ世話ではあるけれどお初め素振り御隠居様の御動靜にも心をつけて見て居ると、何ぞにつけて御隠居様は御年甲斐も無くお初めと彼兒を御呼びつけなされたがる。お初めは又御隠居様のことと云へば身に引受けて忠義顔に働く、御隠居様の御眼遣ひも平常では無く、お初めが身のあつかひも妙にしなくなして媚びつくばかりで無く、機には奥の御別房で見ると見られることも眼に入り、聞いて居られぬ聲の聞えたこともある、其中段々お初めの着物が變つて来る、帶留が意氣になつて来る、帯が高等にな

つて来る、襦袢の襟も前のやうに平金では無い絢金の刺繍の入つたのになつて来る、頭上の物も洋銀のは無くなるといふ調子で都て身の周圍が光つて来た、其は男の汝の眼にも大抵見えたことであらう、好い齡をした御隠居様も御隠居様なれば、何程襦につきたがるが當世だとて長右衛門の親父とも云ひさうな御隠居様を捉へて慾てお牛の形を行くお初めお初と小面が憎くて腹は立てど、内でこそ云はぬ外では襦袢買と評判の御隠居様が好いことななさるだけのこと、それを姉好で自分の腹形を悪くするには當らないと、見ても見ぬふり聞ても聞かぬふりにして居ると、一昨日の夜丁稚の彦を彼の別房へ御呼び込みなされて御隠居様の長い間の密々話、彦といふ奴は彼の通りの猪口才の小兒、御隠居様の命令ではあり幾千錢か貰つたに圖にのつて何様なことでも仕ようといふ者、昨日のことも彦の關係なれば儘に其夜の話から出たこと、又其夜に彦めの出た後お初めが御隠居様に呼ばれて行た故、要らぬことなれど何かと耳を立て、聞けば御隠居様の聲として、久めも明日限り梵天國、汝も安心するがよい、頓て程經て身の定りも何とか着けて遣らう程にくさくするなと仰れば、あゝもう妾ものうくしまし

た、疫神病の逐ひ出されるとは實に嬉しうござりまする、それは左様でも一つ叶へば再一つとかで、是から又旦那様御夫婦が何と仰ることだやら其が心配でなりませぬと云ふを、ハテ左様くよくするなといふに、喜太郎夫婦は何と云はうが高で乃公の倅のこと、乃公が斯様といひ出すに彼等が何と云へるものか、と背中ても撫て居て云はるゝやうな様子、さては汝を謀計に落して旦那様御夫婦が宰府へ行かれた不在を幸ひ明日は御店を逐ひ出すこと歟と妾は吃驚したけれど汝に仔細を告げる間も無く昨日の仕儀、腹が立つて、口惜しくて、悲しくて、妾の胸は何様なだつたか、三年このかた陰に陽に汝のことのみ思つて居た妾の胸の苦しさは其時御隠居様に口穢く叱られて居た汝より勝すとも劣ることでは無い、今日も今日とて、これ見て下され、えゝ厭な奴、しみたれなと厭がるゝかは知らぬが、何をせうにも差當り汝に不自由をさせてはと御給金やら不時の頂戴やら溜めて置たを皆悉皆身につけて持つて來た十兩足らず、些少ではあるが妾の心ばかりちや取つて置いて下され、いとしい汝に使用うて貰へば妾の本望、此様な嬉しいことにはない、必ずとにも遠くへなんぞ斷りなしに行つて下さるな、妾に

夫婦の談話の末は久四郎が身の上に移りて、まだ床込みもすまい、起して来い、一杯飲まして静かに自體を尋ねた上何とか分別つけて遣らうと亭上のいふ尾について、ア、それが好うござります、来てから突然病氣騒ぎで碌々身軀を尋ねませす、妾も今日まで身體に障つてはと汝の差圖の無い事ゆゑ何も聞かずに居りましたが、呼んで来て見ませう、寐込んで居ますまい、一昨日の夜妾の云うた察しの中るか汝の云うた察しの中るか聞ませうが、此頃の様子では既氣味の悪いことも口走りもすまいと思はれるやうに大分落ついて来た顔付、然し構へて汝の例の手酷い言葉をお掛けなさるな、勃々とも爲せるやうな事があつては取り上ばせて分らぬ事を又云ふやうにならうも知れぬと女房は云ひさし、態々立つて此方に近づき、立て着け悪くて緊平合はぬ襖の隙に口をつけ、久様久様、まだ寐は仕まい、騒いで居たので寐つけれなかつたらうに、起きて来て一盃御飲り、亭主でも汝に話がある、と呼ぶに知らざる類もならず、帶しめ直して襟元つくるひ、ヘイ有難うござります、と手代氣質のまだ脱け口上津義に禮云ひながら夫婦と洲濱に坐りける。

ム、血色も綺麗になり、眼も過般中のやう

に怪しぐどんよりとして居なさるめ、既半月も経つたならば舊の好い男兒になるだらうが、左様したら又女の子が唯は置くまい、アハ、ハ、まあ、一つ飲むがよいお淺、汝の云つた通り艶々とした好い男になるのも頼で、汝明日顔を刺つて遣るがよい、暫だけがまだ病人くさくて可憐男兒を損なさせる、との亭主が冗談に、さう、明日刺つてあげよう、左様して其刺刀次手に汝の顔のめ切れの止まつた時分ごろりと菱切つてあげよう、と女房も三分の酒氣を帯びたる挨拶、久四郎ばかりは酔うても居ず遠慮もあるに、生真面目な顔してもち／＼として居たりしが、世馴れた夫婦が中に聞かれて二盃三盃と強らるゝに、病後の酒の利日は疾し、奥底も無く話し合ふ嬉しさはあり、何時か酔ひて、幾日ぶりかで珍らしく凍つたやうに今までなり居し顔の紅を漸く解いて笑ふ聲さへ洩すやうなりけるが、お淺己之助夫婦の者が何十年か交際ひたる朋より篤く骨肉の兄弟より優しく我が身の上を問ひ呉るゝに、云はで一生了つて退けむと包みしことも愚癡まじり聊つか如く語り明しぬ。

お初が薄情、隠居が陰險さ、お大が五月蠅さ、三藏五助が面の憎さ、我が身の甲斐無き打交ぜ

て泣き顔半分恨み顔半分に長たく一部始終を告げ終れば主人己之助笑ひ出して、汝も餘程時代男だ、ハ、久公、確乎するが可い、大抵それは當り前だわ、少しも兎や角爲ふことは無い、お初とやら云ふ女も其又京屋の隠居といふも誰やら彼やらも皆普通の男や女だ、世間に澤山有りふれた男や女だ、珍しくもない、それらを一々薄情だの陰險いの五月蠅の面が憎いのといふは悉皆汝の白痴さ、斷念なさい、下らない、世間は大抵そんな者が寄つて集つて組立てゝ居るものだと定めたら腹も立つまい、詰りば汝が世間を能く知らないからして四苦八苦するばかりの事、其又女を一ト晩でも汝が抱て寝たとても云ふことならば随分と堪忍の出来ぬこともあらうが、どうせ懲から隠居なんぞの云ふことをさへ聴く様な面白くない女なんぞは二貫か三貫袂に入れて行けば今夜が今夜直と往來中でも拾はれるわ、アハ、ハ、ハ、下らない、女兒童の讀む草双紙に書たところでダレ場の話だ、汝も立派な男兒だに、思ひのほかに下らない、京屋の身代だとして鬼が造つたものでもない、根性さへ締めてかゝつたら汝の老夫になる時分には案外汝が今の話の隠居の事をして又餘所の世間見すの好い御坊様に苦勞をさせようも知れぬ

語り續ぐる趣き次の如し。

誰しも惜む生命を捨てゝ死なうとするさへあるを、死なうとして又死ねぬ身の情無きに、我はほと／＼我を折り盡し、どうなりともならばなれに心な持て濟ぬ／＼と思ひながら宿の夫婦の爲て呉るゝまゝになり居けるに、猶此世に居て辛苦を受ければ前世の罪の消えぬとにや、病は日々に輕くなりて、有るが嬉しくも無き生命を取りとめ、盡の息にて昨日も今日も照る日の光り月の光りを變ること無く見て過しぬ。

久公如何だ、少しは好いか、病氣は随分氣持次第で快くもなれば悪くもなるに、小さな根性を持つてくさ／＼とするやうなことはせぬが好い、何をするにも資本の身體を盡末にしては初まらぬ、エ、コレ、禮など云ふには當らない、人間は相見互見だ、どうしてまた我が汝に何處で厄介になるかも知れぬは、マア寛潤に心を持つて身體を好くして仕舞つた上では又何とか其上の相談にも乗つて進よう、貧乏なして金は無いが思ひ遣りば有るつもの乃公がところへ來たのも縁、悪くはしまいから結々飲むもの喰べるものを飲食して身體に力を出さねばならぬ、段々仔細のある身らしいが、何事も強い者には負ける世の中と極めて置いて、奴自分が強い者

になりさへすれば好いのだから別段あせることも無いわ、乃公も前には女の手で丁度今の汝の姿になつたこともあるが、いや其時は頼まうものは世間に無し、西へ向いても東へ向いても恨みのある者ばかりで、寧死にたい死んで退けたいと泣面になつて苦んだが、今になつて見れば夢のやうで、何の馬鹿々々しい、彼様思つたのも生きて見れば生きられる瀬があるものを、何を顛倒して彼此を恨み過つたかと自分から自分の愚癡が可笑くなる位、世間は何の廻り燈籠、憎いのも百日か二百日で往つて了へば可愛いのも嬉しいのも百日か二百日で済んで了ふ、總身の筋骨がうづくほな腹の立つことも少し遠ざかつて見れば左程でも無いから可笑い、まあ／＼虚言は云はない、乃公の言ふ通りになつて緩りと養生して居るがよい、ア、氣のつかない、長話をして魂氣を使はせては悪かつたにと優しく慰めて呉るゝ主人の親切、骨身を浸みて嬉しく、立つて行く後影を涙を墮して護りつめぬ。

力こそ脱けたれ肉こそ落ちたれ又根氣こそ乏しくなりたれ十日を過ぎ二十日を過ぎては枕に頼らでも踏も拾へ草履ならでも頭かやうになりけるが、身の勢ひの舊に復ると共に今まで呆

漢の如くなり居しやうには心を持ち居ることのなれば、何ぞにつけてお初を恨む念は勃々と火の如く燃えあがり、我が身を果敢なむ愚癡は沮洳の地を水の浸すやうに湧きて、思はれど恨みは無き京屋の主人夫婦、報すに報されぬ情を荷へる宿の主人夫婦への義理も人情も辨へぬにはあられど、他には告げぬ胸の中には迷ひの黒雲ばかりを貯へぬ。

其二

梢を染むる夜の雨さら／＼と窓外に音づるゝほかにば物の響きも無きしめやかなる折柄、珍らしく今宵は泊り客も皆無なるに宿の夫婦は差向ひの酒おもしろげに飲んで誰に遠慮も無き談話の聲高く、女房も成る口の調子よきには亭主と同じほどに笑ひ興じて、情婦で會つた往時でも語る際他には解せぬ節々き事どもを彼一句此一句睦まじく語り合ひては笑ひに入る様子、今は病氣も殆ど身を去りしが起きて居ても何一つ爲て見たき望みもなければ爲よう目的も無く強合なく世に在る自己の暇さへあれば單に睡りを貪るが癖となりたる久四郎、今日も今日と暮るゝと頓て夜具引被ぎて用の無きまゝ睡りに就きしが、聞くとともに無しに蔭で聞き居れば、

其四

三日ばかり経つて例のお金といふは来り、少時お淺と笑ひ交りに談話して歸りしが、後にて久四郎お淺よりお金が談話の段々を開けば聞くほど萬々一の望みも絶えたる次第にて、我が阿呆拂にされし翌日の葬方主人夫婦は立歸りしこと、久四郎に罪はありとて其處置は又無慈悲過ぎと主人は隠居を些ば恨みし様子ありしこと、假令は御隠居様が何と仰せありしにせよ我が神詣りの不在の中なれば幾重にも久四郎がために執り成し置きて我が歸りを待つやうにせば宜かるべきを、分別無くて叶はざる番頭の身にありながら左様せざりしは、主人の心をも兼ねず朋輩の情合にも缺けたりと番頭の當八を主人の叱りしといふ事、三藏五助も朋輩のために再三執成すべき身をも一言も云はず黙り居しは是亦情合なき根性と散々不興を受けしこと、お初もまたお初にて久四郎のためを思つて今まで包み居しとならば文などは他の眼にかゝらざるやう焼くとも捨つるともして退くべきを他に拾はれなんどせしとは少しく辻褄合ひかぬることにて、人情といふものが左様ではあるまじき筈と不興を受けしといふ事、よし又久四郎は罪

あるものにて追ひ出されしにせよ、彼が親も無く兄弟眷屬も無くて京屋が家を吾家と親の家ともして育ちしものとは誰しも知れるに、其の行く先の如何ならうとも考へず那處へ落つべき筈と概略ながらに其行先のところをも誰一人として聞き置かざりしは、店の者も奥の者も皆揃ひに揃ひたる人情無し奴ばかりと一同な主人夫婦の罵りしこと、と以上幾箇條の事だけは我が身にとりて溜飲の下るやうの心地のする御主人様のありがたい話なれど、さてお初が腹では慥に疫病神同様の久四郎めが居らすなりしは此上なき悦びと思ひ居るか、元氣よく樂しげに日を送るといふこと、隠居がお初に手をつけしとは隠居の素振お初の動靜に主人夫婦を始め誰しも今は承知したれど、年老つたる親の事なりお初も險難なる喰せものといふではなしとの含みより主人夫婦も見て見ず知つて知らずの風に爲居れり誰と一言悪くも云はぬといふこと、自然お初が増長して此頃にては高慢の鼻を高くし、望むがままに買うて貰へる挿頭衣裳の美しく精き頭に戴き身に纏ひ欣々として搾り氣なく済まし居るといふ事、乳母のお大が何かにつけてお初と口論起したるより甚く隠居の怒りに觸れ、此四五日前逐ひ出されしといふ事な

んどは聞くにも堪へず、其場は久四郎もお淺が手前、苦笑ひして意を包み、つく／＼思ひ斷ちました、面白氣の無い彼様な女を今まで何とか思ひましたは全く迷ひでござりました、いやもう怒りも致しませれば恨みも更に致しませぬ、未練氣無しに思ひ捨て、當家の御分別に御絶り申し、此さきの身の立て方を何卒宜しく願ひますと云ひては退けたれ、思へば、能くも我をば欺いて幾千の思ひを勞れさせしな、烈火で焼いて水に落せば鐵さへ性を失つて鍛冶滓となり果てるものを、正直一途他の事は夢に知らで安らかにたゞ日を送つて居た此の我を散々迷はせ悦ばせ置いたる上に、冷水どころか氷のやうな冷たいところに蹴落して、能くも我が魂魄の安らかさを奪りくさつたな、居るにも居られも起つにも起たれず、大地に仆れてのた打ち廻るよりほかは無いやうな目に我をあはせて、四苦八苦させ、それで汝は舌を出して馬鹿ないうて笑ひくさるぞ、あゝ我は馬鹿に違ひない眞に我は白痴に違ひない、如何にも馬鹿に違ひないが馬鹿にせよ白痴にせよ、恰憫な人に斯様まで慰みにされて笑はれうため馬鹿だとして世に出来ては居まい、可笑しくは澤山笑うて呉れ、陰で指さしてなりと舌吐き出してなりとも笑

位だ、思ひ切れ思ひ切れ、恨むな泣くな其様な事に、意は親切なるべけれど露同情を表しくれぬ言葉に久四郎はさしうつむきて黙する傍より、それは左様でも左様ばかり一酷にもまた云へぬものと、流石女は優しくも味方になつて呉るゝらしき語氣にてお淺の口を出しぬ。

其三

氣は勝つても女は女なり、お淺は久四郎が話も身に染みて聞き、一概に云ひ消して仕舞ふ良人の言葉を、左様ばかりも云へぬものと傍より寛めて、久四郎に打向ひ、而して此後如何しようと思つて居る事が、話の様子では正可にお初が折れて出て今さら汝に謝罪つたと、それに汝が應じもすまい、隠居に恨みのあつたところで主人の親であつて見れば指さしするもの叶はぬ筈、三藏五助乳母のお大それらは假令憎からうが五月蛇からうが畢竟は脇佛的に取らうといふものではあるまいなれば、久四郎様、よく其處を考へて御覽、如何しようとか此様しようとか云ふ考があつてこそ出来無いながら相談相手にもならうが、たゞ何といふことも無しに、恨む悲む腹を立つといふだけでは、まあ妾が憎へば汝の姉であつたところ

で加勢の仕方も無いではないか、一體汝はお初を如何爲てやらうと思ひの歟、多寡が心の甲斐無い女を、打つにしても斬るにしても初まらないには極つて居るし、又假令汝に初めの通り優しい心を寄せたにしろ、一旦寐がへり打つた女を笑顔で迎へるもなまいが、ハ、ア黙つて御座の様子を見れば、番頭の言葉、隠居の素振り、お初の身の周囲の光つて来たといふ事、お大の眞實らしい告口、と種々の事はあるにせよ畢竟片口、そこで汝の未練はあり、まだお初が眞底からいよく我を嫌ふのか、都ては傍でし細工殿と疑ふところもあるからして、清潔淨白には料簡をつけられる段もあると見える、然し久様、何によらず餘り長たし考へるは大きに考へ負をするもの、既い加減に斷定の札をつけて了ふが良さうな、移いで金でも些出れば女は降るほど寄つて来る、選取見取でお初より幾倍よいの持った方が儘に利方に當るらしい、と云つて一旦思ひをかけた女のために身まで失敗り、事の様子も胃の腑に落ちるまで合點出來ずにぐづぐづで終つて仕舞ふといふも出來まい、斯様して見たら如何であらう、妾の知つた髪結が折々京屋の噂をすれば多分彼家を顧客に持つて居るには間違無いらしいが、其

又お金といふ女が齡もまだ若し顔も綺麗な小才の利れる面白い女の癖に、蕩樂肌で流れ渡りの大莫連で、三味線さへ小兒の時から知つたら唯では居られない身と自分から云つて居るやうな凄しい者、生れは儘東京在だが何處を如何うろついた末か此地へ流れ込み、故郷は近いし話合ふといふので既かれこれと一年ばかり妾と懇意にして居る中、随分事と品に寄つたら惡法も書けが詭計もし兼ね女ではあるが、扱また物の分りの早い、挨拶上手の、きび／＼とした、俠氣のある一ト風の女ゆゑ、明日にも來たら妾から一部始終を話し込んで何とでもしてお初が腹の間違ひの無いところを探つて貰うて上げよう、其代り其返事次第で汝もすつぱり從來の無益を切り棄て、生れ替つて良人の云ふ通りに身體を持つたが可い、念晴しのためお金にいうてお初が胸を探らせよう、それでも諦めつける事が出來ぬとはよも汝もいふまいと云へば、たゞ久四郎は嬉し涙を墮すのみ返事もなし得てありけるが、果して次の日お金といふ身幹の高すぎるほどの、眼鼻の立派過ぎるほどの、髪結には惜しい／＼女の來りて女房のお淺と共に女だてらに酒をばしめ、頻りに何か語りあひぬ。

心をとり直して眼を明き疵をあらたむるに、疵はさしたることにあらねど血は思ひのほか多く出で、薪のそげやら柴屑やら足下近くの塵芥は血潮に染みて紅色なせるが、中に閃りと光るものあり、不思議と心をつけ見れば焚き付けなるとなこなすため置かれしものと覺しけれど、刃もまた鋭く錆にも多くは蝕はれて居らぬ刀の折れ、人斬るものの成の果が斯く落魄れて女房の無念さに仕舞ひ遣れられたる奴に相違無く、幸ひ籠身も襪襦布もて手ごろに纏きある世話の無さに、手に取つて見て莞爾と笑ひ、天を仰いで又笑ひ、袂の中の様子の袖をめりくと扯り切つてくるりと巻きつ、懷中にして又笑ひ、雲足繁き天の盡頭に四日の月の微く白みて、折柄雁の一連の鳴き渡り行く夕間暮、那處とも無く紛れ去りぬ。

其月其日の夜に入つて秋雨淋しく降り出し、時候も急に寒くなりしに、道行く人も途斷え勝なる十時近く、表通りの家列びには引違へたる裏通りの、一方は小家疎に野菜作る畠などつききて、小流を隔てたる一方は板塀或は杉籬或は横の籬など連り、少し離れて蔵物置なんども見ゆる好き町家の裏手つゞきの物寂なる細徑を雨も厭はず辿りく、後先見廻はし、流を

渉り、植込の根を彼方此方探りて、下枝あがりし地づきの罅隙より忍び入りたる久四郎、勝手は知れど心の應すに一歩行きては立駐まり、二歩行きては立止まりつゝ、庭樹を鳴らして降る雨の音を便りに次第々々母家へ近づき紛れ寄りける。

其六

お初といふ奴に心を盡はれし發端より利那の間も念を其に繋げざること無く、夢にも現にも自然絶間なく我からとは無しに意の注きたりければ、頭の中剃より足の神泉まで知つて知つて知り抜き、障子の外の咳一つにも他の人が否かを判ち、嬉しい折には何様眼遣ひする羞かしには那樣首を曲げるといふまで洩らさず承知して、平生眞夜中近くには必ず一度用足しに行き、又こくめに雨戸を開きて如何な寒夜にも手を淨むるといふことも、寝つかれて居し幾夜さの覺えに照らして明らかなるに、汝、今宵も左様するなるべし、笑うて笑うて馬鹿の白痴のと云つて居られたるべき其馬鹿め白痴めの此乃が汝の思ひも寄らぬところより現はれ出でて今宵こそ馬鹿の上にも馬鹿なことを仕掛けて呉れうに、泣くな吠ゆるな、恨みを復し仇を報う

といふほど伶俐らしいことをする者とは我を思ひもすまいが、成程恨みを復さうとせし仇を報はうとせぬ代り、偷まれたか壊されたか往時に復れぬ我が心と同じ命には汝が身も屹度遇はせて呉れで置かぬ、へ、へ、イヤなに小癪な、大袈裟な、左様な事ですでは無けれど、枝に残つた栗の毬が、盞の入つた無花果同然、手のつけやうも無くなつた此壊れものの我が身體を斯様いふやうに仕て下された伶俐なお人に擲きつけて寧生を命ぐみ獻げて仕舞ひまするばかり、へ、へ、汚れたもの御取りになれば御手の汚れると同じ事で、壊れたものを獻げますれば御氣の毒みたらやうな譯ながら御身體も共に壊れませうが、へ、へ、それは何共御辭退はなりませぬわ、と鉢前に立てる南天樹の根方に、繁れる葉蘭を推分けて隠れ居る久四郎、寛に餘る雨の水の、頭に肩に生憎澁き落つるは肉も截る如く冷たきも胸に燃え立つ執着瞋恚の毒火の威力に打忘れて、今や今やと待居けるに、夜半過ぐれと森々寂々たるのみにて咳きする者一人無く、我が身や死せる世や朽ちたる、若の臥被に掩はれて地下に睡らば斯もあらむと思はるゝまで閑然と靜かに更け行けば、若しやお初の今は早此家には居らぬにあらざるか、御主人

へ、辛き損じの鐵のやうに鍛冶洋となつて仕舞うた此の久四郎が不幸は定めし伶俐な人から見たら可笑うてゝなるまいに、澤山笑ふがよい、笑ふがよい、たゞ笑うて仕舞うたら慈悲ぢやほどに、心で叱つても制めても心に任せぬ今の心の惱ましさを何にも知らずに居た往時に復して呉れ戻して呉れ、財を偷めば一兩取つても罪になるが馬鹿は馬鹿だけに千兩にも萬兩にも代へまいと思ふ此の心といふものを偷み取つた人は罪にはならぬと伶俐といはれ、偷まれたものは問拔といはれ阿呆といはれて好い慰みになつて仕舞ふが、それを今口惜しいとも恨めしいとは思はぬ、たゞ慰んで笑うて仕舞うた上は返して呉れても好い此の心をば往時通りにして呉れぬのが恨めしい、ア、財を偷めば罪せらるゝ、心を偷めば御伶俐の人様、物の分りのよい御人、榮ゆる御人、榮しげに日を送る御人、智慧の賢に他をかけ、幼稚い時から御恩になつた御主人様にも離れさせて而して後で馬鹿な奴のと御笑ひくださる御人、美しい精いものを頭に戴き身に纏うて欣々と濟まして居らるる御人、アアツ、畜生ッ、勲め、笑へ、笑へ、笑ふ蛇め、へ、へ、へ、如何いたしまして、馬鹿が御伶俐な御人を畜生の蛇のと申せた事では

ござりませぬ、澤山御笑ひ下されまし、ウフ、ウへ、へ、へ、へ、成程なかしい愚癡な奴ではござりまする、ウフ、ウフ、彼の熱病者が乾き裂けさうな咽やら口やらに火のやうな氣息、左様して死にかゝつた心が刈れた草の三日めに未練らしく持つて居る縁のやうに残つて居た其時よろゝと地を這はせた念慮の可笑さを笑つて下されまし執念の深い馬鹿ではござりまする、ウフ、ウフ、フ、フ、フ、左様、左様、細い薄い、御器用な煙のやうな舌を閃々と御出しなされて御笑ひなされまし、畜生ッ、笑ふ蛇め、いえ怪しからぬ、如何いたしまして馬鹿の癖に大それた事を申しまする。

久四郎様、如何か御爲か、何かぐづぐづ云つておいでのか、他の物音が、何だか微に怪しな笑ふやうな聲が聞えるでは無いかと云ひつゝお淺は久四郎が引退きし室に入れ、えゝ、無氣味な、今まで居しと思ひしに煙となりしや影も無し。

其五

破れかゝりし物置の横手を狐のやうにするりと脱けて水口へ廻りかけ、引立耳に内の動靜を伺へば天の奥へか人一人臺所には居ぬ状なり。

人情も深き主人夫婦に負くは濟まぬと思ひながらも、這ひ身になつてそろりゝと半分明きたる腰高障子の蔭を傳ひつゝ、首さしのばして覗ふに能く片づきたる流し元の、入口に伏せて乾しある手桶は邪魔なれど其の廻りかゝれる大水廻の向うの羽目の庖刀挿には望むところの大出刃の菜切と共に懸り居て、一寸其上に引懸けられたる小き穴の目の間より然も鋭れさうに心地好く凄き光を刃は放つて我が眼を射るに、胸はいよゝゝ寒氣を覺え腰はわなゝ顫ひ出でぬ。えゝ、膽甲斐無い、へ、へ、へ、これが馬鹿のところか、これが意氣地無しのところか、畜生ッ、笑へ、笑へ、笑ふ蛇め、とがたゝししながら伸び上がった、箆取り下し、今や庖刀の柄に手を觸れむとする時、お淺の足音して、氣味の悪い人の、久四郎様、久四郎様、那處にも居ぬかえ、つい今までは居たと思つたに那處かへ行つたか影も見えぬ、と獨言しつゝ此方へ探しに來る様子、南無三寶見つけられてはと物置の方へ引返して身を潛めむとする途端、轉がし捨てゝあつたりし薪割臺に足つゝかけて拇指の爪突刺がせば、痛さに堪へず齒を咬みしめて、其儘其處に音もさせず少時は踞んで眉根に皺、片手に傷を緊乎と捺へて兩眼固く閉ぢ居たりしが、漸く

意が無いではないか、情の深いにも程のあつたもの、寝返り打つた女に痛い目を見せたとして何の男兒が立つても無い、愚癡も大抵既見限り時、悪い事は云はぬ乃公の分別につきな、京屋の御主人様が物の了解が早くつて、びつたりと家中に口止めされたればこそ汝も如是して居らるゝものの、あの時若しも夜盜と云ひ做されて突き出されたら何とする、幾千齡が若いにする乃公の彼程云つて聞かした事も忘れて彼んな業をするとは汝も解らな過ぎる、京屋様の思はるゝところ、乃公のいふところを酌んでも決してもうも彼んな態をしてはならぬと氣をつけるがよい、お初とかいふ女も、彼の翌日に相應の手當を遣つて主人夫婦が隠居の邪々を如何しても聞かずに遂に逃出したと云ふ話、此様なもの家に置いては假令不埒が露程も當人の身にないにせよ何ぞの拍子で何様な騒ぎに家の名を傷けるやうな事の出来ようも知れませればとの主人の言葉には隠居も争ひかれて、お初を去ると、いやもう碌で無い奴の續きは碌で無いもので、お初の叔母とかいふ婆が京屋へ坐り込んで強請をかけ、相應な手當を貰つて居る上又一と塊り隠居の懷中から奪つて行つたさうな、みな左様いふほど碌で無い血族の者に思ひをかけた

といふのは能く／＼汝の不運、然し相手も出されてあれば少しは汝の腹も癒えやうから此邊で忘れて仕舞ふがよい、幸ひ明日から乃公は左る大家に頼まれて旅行を五十日する故汝を荷物持に頼まう、熊本在の鑛山までの往復りを同勢十人ばかりでするのなれば途中も随分おもしろからうし、又其旦那に取り入れれば汝の身位何とでもなる、大腹中の大山氣のある中々勝れた器量人で、乃公を最上にして下さる人ゆゑ汝の身の上をも頼ては頼んで見るつもり、如何だ久公、めそ／＼せずと些げ豪氣な其旦那の氣にでも同化れて見るが好い、と残る方なき主人が親切に背かうやうは無く、鑛山見の同伴となり行けるが、聞きしに違はず大江藩之助といふ男の度胸の太き根性骨の堅固さ、往復十日餘を費し金子も千兩近く捨てゝ、とゞのつまりは此山見込み無しと一切水の泡に屬しけるにも關はらず、萎む色など鶴の毛ほども無く大口開いて氣作に物語り氣作に飲み、同伴一同にも過分なほどな賞錢取らせて歸りけるには久四郎たゞ驚嘆のほか無かりける。

いよ／＼鑛山に大江の掛かると定らば久四郎が身の上頼み聞えむと思ひ居し已の助も其事外れたるに云ひ出しかれて少時黙り居る事と定め

しが、久四郎が身にとつては今や一日も遊び居る事の心苦しく、何ぞ職業を／＼と尋ねし末、不圖主人の知己なる卯平次の來てこれ／＼と筆屋正太郎が方にて人の欲しき由を主人に語り、心當りは無きやと問ひ居けるを傍聞して、小生ではと自ら望んで筆屋が方へ赴きたるに、ばつたり其家にて出合ひしは其家の女房類したる奴、今に忘れぬお初なり。

其 八

久四郎が身の上の逐一、聞けば聞くほど惘然にもあり又馬鹿々々しくもあるに何と云ひやうは無くて卯平次老夫は其まゝ沈黙りけるが、さて此一部始終の仔細を打明けて正太郎に語るべきか語らざるべき歟、話さば正太郎お初を妻には持つて居ざるべく、風波を起して離縁の戻すのと捫着はしむるは知れた事、假りに頼まれて媒妁せしとは云へ其式を擔任うて爲し身としては、起りし風波をも取り替むべき筈なるに、我が口より而倒を湧かし出しては齡甲斐も無き捌きなれば、飽まで知らぬ顔にすべき歟、たゞ一時は騒がするとも、久四郎が話によつて見れば到底善人では無いお初といふを寧ろ縁さした方が正太郎のため良きかも知れば、一切を

様の兩制敗とて我が爲お初を出し玉ひし歟、又は隠居の別にお初を那邊の家に、か圍ひ置く歟と疑團煩りに起る時しも、人の此方へ来る氣色して障子を開く音響きぬ。驚破と固睡を呑んで待つに縁側歩む聲音は確然に記憶ある奴にて、片手に雪洞拂へけむ戸の隙を洩る數條の光は黒闇の間をば歩に従つて動き移れり。引そばめたる刀の折れを又今さらに緊しく把つて、思はず高くなる氣息を辛くも和めつ機を候ふ此一刻の長き事千秋もまた音ならず、兎角する中戸戸の格子をかたりと脱す響すれば、途端に總身の毛孔立て熱血頭に衝き上り、今更胴さへ顛ひ出でしが、斯とは如何で内にて知るべき、雨の飛沫に濕ひたる戸道の滑りのよきまゝに、するりと一枚戸を引き退くれば、燭光さつと逝ると同時に此方の眼には顔灰白く糲糊と見えたるお初の姿、言句を出す間もあらばこそ、すつくと立つて弓手に掴みし衣裾を手元に引く拍子右足と右手と共に進んで、力一杯切り付けしが心慌て、戸の縁の親骨十分切りつたり。アレーと叫ぶ聲、蹴返す雪洞、いよく慌て減多切りに斬らむと焦つて打下す刃は敢なく折角掴みし衣裾を截れば、仆れかゝりしお初は必死と振り切り捨て、奥へ逃入る。汝逃がしてなるべきや

と亂れ心の分別亡せて追ひ縋らむと縁へ片足かくるが疾きか聲が疾か耳を貫く顛ひ聲に、ど、ど、どらばうと大喝するは紛はむとして紛ふべくもあらざる主人の叫びしなるにぞ、氷の流を浴る思ひに身體縮みて力も脱け、一二歩後へ退る時、日頃よりして腕立自慢の僕の作平親父がどす聲、背面の方より何かは知らず耳に響くに我を忘れて逃げ出せば、足音烈しく追ひ来る様子、僅に生垣押し破つて彼の小流れの縁に出しが、畜生といふ聲の下、碎くるほどに肩を撲たれて、身を横さまに流れに落つる機に下女の明朝洗はむとて水に浸して置きたりしが水底にありし鐵鍋に響先烈しく傷つけぬ。

其七

作平がため危く捕へられむとせしを振り切つて逃げ出したる久四郎、已之助が方より他に行くべきところも無ければ、辱を包みて意氣地無くも立歸り、面體のたゞならぬ態、小鬢先の怪我、衣類の濡れ浸りたるなど數々不審を立てらるゝを能きほどに云ひ繕ひけるが、怪しみて糾すかと思ひのほか、已之助夫婦はじろりと一瞥せしのみにて、此方の云ふがまゝに聞き流し、疵薬を呉れ衣服を與へくれし上、何にも云はず

に、休め、とばかり云ひ捨て、其夜は事無く皆眠りけるが、明る目になりても前の日の事については何一つ糺しもせず、其次ぎの日もまた同じく、互ひに知らぬ顔にて済ましけるが、左様されては又久四郎の胸の苦しき却つて責め問はるゝにも増し、たゞ此前途を如何にせむと悶ゆるばかりに愈々阿呆の如くなり、我すら我と自分が身は性の亡せたるにはあらずやと思ふほどに茫然となりて日を暮らしける。
喃、久四郎、左様考へてばかり居たとて天から福も落ちては来まいに、まだ料簡の梶を治して一番生れかはらうといふ思案はつかぬか、何と如何だ下らぬ事ばかり考へ込んで何時も同じ筋を腹の中で繰り返して居ては人間が馬鹿になる、過般から何度も云うた通り悉皆古いことを忘れて一ト持き仕出して見なさい、犬も歩けば棒に當る、世間は狭く見るもので無い、錢さへ有れば威も自然付き、智恵分別も自然出て、樂しく今日を渡る事も出来やうに、くさくするは男兒でない、心の亂れた時と見た故、彼の四五日前、夜更けて汝の歸つて来た時は何も云はずに黙つて居たが、お金の内々の風評で乃公は知つた、小鬢先の傷もたゞの怪我ではあるまい、刀の折れは何處へ置いて来たえ、餘りに智

と覺えたもので金を持つて品物を取り返しに來たところ、乃公が賣つて仕舞つたといふとサア苦情をつけ出して、何故一應の挨拶なしに賣つた貨物を賣れと云つては頭から頼まなんだ。價が好いからと勝手に賣つたは汝の慾が過ぎて居る、品物を返せ、戻せ、借りた金は返す、戻す、直貨物を返せ、返せずば相場だけの金で返せと云ひくさるでは無いか、そこで乃公も勃然として此様云つてくれたが道理だもので源右衛門も腹は立つたが口は開けずに歸り居つた、マア聞きなさい、斯様いうただ、是は面白い事を承はります、些合點がまゐりませぬ、成程最初から賣つて呉れとは御頼みなさらなかつたに相違ないが、御用立つた金の期限が來ても御返辦が無いゆゑ品物を賣つたに不思議はござるまい、其爲の抵當といふものではござらぬか、それほど大切の大豆なら最初から抵當なんぞになさらぬがよい筈、畢竟價をよく賣つたのは私の耳衆にある事で、汝の世話にかゝつてでは無い、又價をよく賣れたればこそ其様な事を云ひかけらるゝが若し今當時より價が下つてであつた日には、賣つても元金になりませぬ、其時汝に向つて、是だけ丁度元金に照して現今の價では不足になる、其の分として何錢何厘入

れて欲しいと我から云うたら汝が從順に金を遣す賊危いものだ、汝の言葉に従へば一圓二十何錢といふもの我から遣らねばならぬが、那處の國に貸して利足を取られるといふ法があるものか、馬鹿々々しくて愚にもつかぬ、金借りた上利を取らうとは汝も餘程蟲が好すぎる、と斯様突撥いたで仕方無しに歸り居つたが何と乃公がの道理では無いか、ところが臭いもの身知らずで其後は何ぞにつけて乃公が事を悪く云ひくさる、イヤハヤ貸借は爲まいものだ、と云ふ傍より下作の男が尾を續いで、貸借も左様なら嫁取り婿取りも其通り、何でも迂濶にならないうことだ、聞かしたか乃公の舍弟めが嫁貰つてから放蕩になつたことを、仕業も能くすれば人間も堅氣な其癖男振も我とは違つて村の娘子が何とかいふほどで、まあ今の者には珍らしいと村長さまの御隠居などにも大の虫眉にされて居た位であつたに、堅い上にも尚ほ身を堅めてと嫁を持たせて遣つたところ、夫婦中もよし、嫁も伶俐なり、これでは愈々安心と我等はじめ頼もしく思うて居ると、動顯したは其嫁めが來てから丁度九月で色の冴えた眼鼻立の整然とした好い男の兒を生み居つたので、何程骨を折つたにしろ餘り早く出來たと蔭でさへ云ふ位

なれば舍弟めは猶の事、大方御土産だらうと強ぐ嫁をも責めたさうな、けれども嫁は無實な疑念受けたものだ何としても強情を張る、不思議な日は日の立つに連れ其兒めが舍弟めに容貌が似て來るので嫁はいよゝ暗い事は無いといふ、舍弟めは何様も日數まで數へて見たところで合點しない、月足らずといふもある事と我が云うても合點しない、いつて嫁を出さうとしても如何しても嫁は無實だといつて出て行かぬので遂に自棄酒の暴れ飲みを初める、手當り次第近所の娘や後家を摘む、から持も無い身持になつて仕舞ひました、と我が弟の恥を忘れて語るに、ア、世には似た事もあるもの、女といふは得て其様なもの歟と我が身の上にひきくらべて、思ひ寄すれば酒も不甘くて、其處をふらりと立ち出でたる正太郎、夜は更けたり、家へ歸るは面白からず、行くべき道を横へ外れて、我が女房より古い馴染の彼奴を訪うてと惡所に到りぬ。

其十

昨夜の大酒に眼の中を赤くして加之九時過ぎといふに歸り來りし正太郎、我が家へ這入る足もしどろに、ゆらゆらと搖ぎ込みて火鉢の傍に

放開けてお初はつの履歴りきは如是々々と、京屋きやうやの隠居いんきょに手てなつけれしこと、日前じつぜんの利りに眩くらみて久四郎くしやうらうといふ男おとこを無情むじやうくせしこと、襦袢じゆたんを包かみて知らぬ顔かほに生娘なむすめで候まうで嫁よめに來きしことなど話はなしたる上うへ、正太郎しょうたろう腹はら立つてお初はつを離縁りえんと云いひ出でさば、如何いかにも道理ぢりと合あ樋ひを打ちうち、一ひとと思おもひに離縁りえんさせて仕舞しまふべき歟や、ア、それも面倒めんたう、座ざなりで過すこせば過すこして行いかるゝ他の事ことに左様さやう力ちから痛いたみ入いるゝまでも無い、餘計よけいな苦勞くらうを背負せおふでも無ければ好よい加減かへんに挨拶あいさつして濟すまして終しまふが世話せわ無しといふもの、然し隠かくした事ことの露あらわれぬ例れいも無ければ、頓とんでは竟いにお初はつが上うへの正太郎しょうたろうに知らるゝは定さだりきつたこと、爾時にぎひになつて不親切ふしんせつな老夫らうふめ知しつて居ゐながら隠かくし立たしてと思おもはるゝも嬉うれしからずと、老功らうこうの身みにも那方なほうを取とつて好よきかの分別ぶんべつに迷まよひ居ゐたるが、兎うに角かくに汝なは已いま之助のすけが方かたに歸かへり居ゐよと久四郎くしやうらうを歸かへして後のち、獨ひとりり煙草えんそうを伽がにしてまじゝとなし居ゐたるところへ、御免ごめんなされと入り來きりしは正太郎しょうたろうなり。

卯平次うへいじ正太郎しょうたろうとの差さ向むかひ話はなに、段々だんだん問とはれて包かみきれず、久四郎くしやうらうが身みの上うへの概略がいりやくを告つぐれば、つく／＼聞ききたる正太郎しょうたろう、さして怒いかりし色いろも見みせず、左様さやうでござりましたか、成程なるほど思おもひ當あたることもござりますると云いつたぎり其そのについて

は一言ひとことの相談さうだんさへ掛かけず、重かさね／＼久四郎くしやうらうを氣きの毒どくなと噂うわさして歸かへりければ、卯平次うへいじは按おしに相違さうゐして狐きつねに誑おどされしやうに茫然ぼうぜんとなりぬ。

卯平次うへいじが家いえを面めん白はくからぬ顔かほして立出たちでてし正太郎しょうたろう郎らうは懷手くわいすしてぶらり／＼と何なにを思おもひけるとも自らさへ知らで歩きけるが、夜風よふうの寒さきに胸むねの中の淋しみしさも増ふす思おもひなし、ア、詰つらめ、詰つらめ、女房にようばう持もつてとう／＼厭いとな思おもひをする歟や、忌々いさしい、獨ひとり身みで居ゐれば好よかつた、胸むね糞くその悪い思おもひをするわ、人の思おもひのかゝつた女を女房にようばうにして居ゐるのも寢覺ねかくのよくない、京屋きやうやの隠居いんきょとかが食くひ餘あましを賞しょう祇ぎするも鈍おろい話はなだ、馬鹿ばかな、何なんだ、こんな事ことかと初手はつてから思おもはないでも無なかつたに、フ、世間よかんは大抵たいていこんなものか、アア女郎にようらう買かひが矢張やじやう好よかつた、これが賣うちの買物かひものの女をにつけての事ことであつたら面白おもしろからうに乃公のこうの家いえに起おこつた事ことでは興きようが無い、ヘン女房にようばう持もつて何處どこが好よい、ア、アと頻しきりりに歎なげきし末不圖眼すふとめにつきたる饅飩屋まんどうやの店頭みせあたまに人の二人ふたり三人居ゐて可笑おかしげに笑わらひ興きようするさまに、乃公のこうも暖あたたかいもので一杯いっぱいと羨うらやみ心起こころおこつて突つと入りぬ。

其九

饅飩まんどうを茹ゆる釜かまの湯煙ゆえんり輕かろく飄ひらりて渦うず巻まく家の

中うち、土間どまの將凡しやうふんに腰こしかけて列び居ゐたる三人さんにんの男おとこの中うちの、一人ひとりは五十いそばかりの角面かくめんの老夫らうふ、其右そのみぎなるは鼻はなの低ひゝて唇くちべの厚あつい四十しじゆ恰好かうかうの下作げさく男おとこ、其左そのひだりには赫黒あかるくろい面の頑丈がんぢやう作りなる毒どくの無なささうな是こゝも四十しじゆ近い奴やつなるが、いづれも饅飩まんどう一二いちに碗わんを食くひさして、一杯いっぱい何錢なんせんの盛さか酒しゆの筒つつ茶碗片手ちやわんぺんてに、周圍あたりをかれす世間話よかんわを高聲こうせいにするは、問とはても知るべき近在者きんざいしやの、市中しちゆうへ何なんかを賣うりに來きての途端とたんなるべし。寒ささと胸むねの鬱陶うつたうしさに我われが身みを此家このいえに飛とび込こませたる正太郎しょうたろうも、饅飩まんどう一いち碗わん酒しゆ一杯いっぱいに身體しんたいや／＼暖ぬかくなりて同じく將凡しやうふんに腰打こしうち掛け、腹はらの加減かへんを強氣きやうきに利きく、ああ好よい酒しゆだ、もう一杯いっぱいと亭主ていしゆを相手に一いちツ二ふたツ話はなして、後のちは聞きくとも無し三人連さんにんづれの雜話ざわつを聞きつゝぐびり／＼と飲のみ居ゐたれば、中央ちゆうやうの老夫らうふが高慢氣かうまんきに、兵六ひやくろく殿のの云いはつしやる通り眞實食しんじつしきすのも借かるもの悪い、乃公のこうと源右衛門げんゑもんとの中うちたがひも畢竟ひつじやうは四俵しはうの豆まめを擔か當あに相當きやうたうの錢せんを用立ようたてつたから起おこつた事ことで、約束やくさくの日ひが來きても源右衛門げんゑもんは返辨へんべんして呉くれれぬ、豆まめは丁度價ていどあが上あつて賣う時ときといふ場合ばいばうでありするから乃公のこうが打賣うちうつた、抵當ていどうに取とつたものを打賣うちうらうと如何いかしようとな金を返かへされば此方こなたの勝手かたてで理窟りくつはあるまい、それを其四五日しごふにち過ぎて源右衛門げんゑもんめが豆まめの價あがよくなつた

がるほどの事も無い、宜しい、老夫が話をつけて遣らうが、汝も一應當人に衝突つては見たらうの、なに、當人は打捨て置いたと、それは不可、正様ほどにも無い分別の手ぬけといふものだ、斯様にふ事には得て双方にも中に立つ人にも思はく違ひのあるもので、假令ば久四郎の談にせよ當人は間違ひの無いつもりで居てもお初に云はせれば又思ひ違ひ見違ひのあるもの、お初が云ひ分も屹度其通り久四郎に云はすれば虚言とも偽りとも見ゆる事のあるに相違なく、京屋の隠居は隠居でまた一ト筋立つた理窟を持つて居るに相違ない、必ずしも一方ばかりを眞實と思ひ込んでは悪いわ、お桂が汝に云うた中には知つて居て云はぬところもあれば我が田へ水を引いたところもあるには定つてゐようけれど、今一度物柔かにお初を十分正して見たら如何な肉曲の泥を吐かうも知れぬほどに其後思案をつけたがよい、どうもお初といふ女は久四郎の話できけば腹の黒くて悪く伶俐なやうに思はれるが、老夫の思ふところでは左様で無い、一寸器用な女には相違ないが左程に悪く伶俐といふでも無ければ必ず腹の黒いでも無い、離別は何時でも出来る事ゆゑ能く糺した後、如何して厭だとなれば、其時は老夫が出掛けて計ばう、

と道理なる助言に成程と合點して、歸る道すら細密に工夫を過し、家に入るとき顔つきから今朝とは變へて物優しく、戯語なんども二ツ三ツ云ひて、無事に其日の暮にいたりぬ。心はこゝにあらねども身は夜に入るまで職業に委ねし主人の正太郎、燈火のつきて後猶一時間も出精して、ア、草臥た、もう廢さう、お初どうした、膳は出来たか、徳利をつける、どれ／＼燭の出来る間に此處を片付けて、仕舞ほう、と細工場を取片付けて毛だらけの前掛けを脱ぎ捨て、身振ひなしつ奥に入り火鉢の前に胡坐組めば、膳の上の一陶は例の如く人待顔なり。ヤレヤレ昨夕は飲み過ぎたで半日の職業も今日は辛かつたが、掬爲るだけの事をして斯様して飲むと取り分け甘い、オ、乙吉に平日の通り我に關はず先へ夜食させて仕舞へ、感心に乙も頃日は能く働く、今朝も歸つて来て見れば我の不在でも怠惰で居す頻りと毛の脂を取つて居たが、彼様働いて呉るれば我も嬉しい、先刻戸外へ出た時見たが、例の芝居小屋に此頃大阪から來た手品遣しばかり小遣を遣れ、飯を食つて仕舞つたら乙吉汝行つて見て来い、と主人の思ひがけなき機嫌の好さに乙吉雀躍喜して常には五杯も食ふ

飲を僅三杯で止め、有難うござりまする、行つて参じます、歸路に購物でもござりまするなら購うてまゐりませう、御家様御用はござりませぬかと忠義をあらはして莞爾つきながら出掛ける後は差向ひの全く二人限り、正太郎猪口をお初に擬して、一杯遣らう、まあ／＼飲め。

其十二

彼の事といひ此の事といひ、昨夜良人の歸家ざりしといひ今朝の機嫌の悪かりしといひ、今又打つて變つて調子の好きといひ、自己に弱點は十分あり、良人の心の測り難くはあるに、お初は安き心もせず、何事も云はるゝまゝに唯唯と温順しく、腫物に觸るやうになし居る胸の中、乙吉の例に無く出し遣られしも仔細の無くては叶はれば若や二人限りにして置いて恐ろしい事でも云ひ出さうといふ良人の腹歟、久四郎が事より急に愛想が盡きて離縁と云はるゝか出すと云はるゝか、それとも底の底までを糺しぬかうと云はるゝか、根ほり葉ほりに問ひぬかれたら何と答へて可いことやら、明しては見下げるゝことも隠し遂げたが可からうか、隠さず云うて容してと誠心こめて泣きついたが却つて可いか、それすら分らず、心底からして親切と

どたりたりと倒れたまゝ、仰向になり居れば、久四郎がこゝより以來さらぬだに鬼附を掲げるお初は昨夜歸られざるに一倍恐ろしくなりて魂も身に添へてありたるを、又此意にいよく恐ろしき増して、怖るゝ傍に寄り、御歸りなされましも口の内云うて、小搔卷と枕とを取り出し、貴郎、それでは御頭が下つていきますまい、と枕をさせにかゝるに、えゝ打棄つて置け、構ふなく、汝の世話に受けたくないわ、觸るな醜婦め、枕が仕たくば獨でする、餘計なお世話だ可笑くも無いと頭から慥鬼邪言の言葉返さう句も無ければ其儘無言で後へ退るが早いか、乙古々と何か働き居る小僧を懇々呼んで、枕を持つて来い、搔卷をかけて呉れとの意地の悪い仕様、二ツ三ツ咳拂ひして痰を吐かうとするらしいに唾壺を持つて行けば眼を睨いだまゝ手近の手拭で知らぬ顔に既拭き取つて仕舞ふ。カッ／＼と咽喉の乾いた音をさするに心づいて酔醒めの水を持つて行けば、えゝ水は厭だ湯が欲しいといふ。湯を持つて行けば、えゝ忌々しい熱過ぎるといふ。水を點して行けば、えゝ鈍癡鬼め、氣味の悪い微温さだわ、そつと申せばがつと申すで悪く人のいふことを弄かす、此方で云ひたい事を先廻りして云ふ。何と

も彼とも手のつけ様の無いに慥に逆うてはと沈黙つて居れば、岸破と跳ね起きて、ヤイ懶惰者め、他が歸つて来たに朝食飯はする事もせぬか、腹が饑つたわい、腹が饑つて居るわい、饑くて死にさうだわい、此引ずりめ、汝が食うて仕舞つたとて私の腹が膨るゝかやい、筈棒め、鈍癡鬼め、他所で寝て来れば草臥て居るわ、可愛がられて歸つて来たのだ、美味いものでも食はされないでは身體が舊には復らないわ、何を胡亂胡亂して居るのだ、此百姓め、冷えた味噌汁を煖められたとて其で飯が食へるものか、ドツコイ昨宵の有る煮まいぞ、コレ教へて遣る、よく聞いて置け、可愛がられて御歸りの時はな、簡易いところで湯豆腐に熱燗、其後は淡泊としたる水難炊、汝が氣が利いてゐれば葱の心をばらりと行かうといふところだ、御慈悲の深い御好みで先づ此様な事と定つてゐるとは知られえか、此百姓め氣をつけくされ、ア、腹が耗つて死にさうだ、疾く調理ろ、愚圖つくなえ、オイ、朝の食は晝食はせまいなと散々毒口を叩きし末盧か實か又横になつて睡る様子、漸く難炊の出来たるに、もし／＼と搖り起せば、面白い夢を折角見て居たに何が口惜くて起しくさつた、仇忌々しい、汝等と一所に生きて居る此世

界の中には無い好い思ひをして居たところを半分に壊されて仕舞つた、と起きると直に欠伸交りに又毒を云つて、左様々々、行かねばならぬところがあつた、とツイと立上りさま帶しめ直し、折角こしらへた難炊も無益にさせて、那處へかは知らず出て仕舞ひぬ。

其十一

夜一夜考へて料簡をそれと定めたる正太郎、表面向き媒人の卯平次が許に赴きて、平日とは違ふ談話振眞面目くさく、折角御骨折を以つて貰ひ受けましたるお初の上につき、又々御面倒かけますは恐れ入りますと、御承知の通り仔細の分りました以上は、何分にも連添ひ居ること出来難く、篤と勘考いたしました上いよいよ離別致さうと存じ寄りました、固より最初からお初身元確乎と御承知あつて御肝煎下されたでも無く、此方より願うて御媒めいたして頂いた上此様なことを又願ひまするは何とも申し様も無く恐れ入りますと、何卒お初身元へ一應貴下様から御話し下されて埒を明けて下されたうござりまする、と四角四面に云ひ出づれば、何というても物馴れたる卯平次の挨拶軽く、大分堅くなつて御出掛だの、何も左様もつかし

ても受けきれずなつて宿へ下らうとは思ひましたが、左様しては又、染々談話も出来ぬがら思ふ人と朝夕一ツ家に居て顔見合ふだけの娘みも無くなる譯と辛いを堪へて勤め居れば、付け廻しつ御主人風を吹かしつ間がな隙がなく口説きたてらるゝに殆々精魂盡きて、宿へ下ると心を決め、家へ戻つて叔母のお桂に委細を打明け御隠居様が如是々々と告げましたに、そんなら御暇をそれと無く願うて遣らうと云はるゝかと思ひのほかな失り聲で、當世の女ほどにも無い、慾を知らぬも程のあるもの、假令齡が釣り合はふが合ふまいが、對手は大家の御隠居様なり如何間違つても損は行かぬ、汝が情夫でもあると云ふなら知らぬこと、左も無ければ云はるゝ通りに従順しくなるがよいではないかと無慈悲な返答、徳藏夫婦も同じ腹で、宿へ下るなどとは以の外な不心得、情夫があつて其の爲に御隠居様の仰やることに従へぬといふなら其は汝の勝手で、逃げるとも走ると隨意にするがよい、つい此先日まで育てて遣つた我への義理を考へたなら其様な我儘の出来た事でもあるまい、汝の身にして見たところが、親は無し支度は無し、那處へ御嫁で候で嫁かれるものか、氣の利いた女なら此方から膳を掴めても左様い

ふ對手を掌球に取つて、身の周圍から頭の物まで疾にこしらへて貫うて居る筈、如何して御暇を願つて遣るのは大不承知、とつても着かぬ御望みだ、と情無い事を云はれ、ア、母様が父様ならば斯様云うては下さるまいにと悲しんだところで仕方無く、泣きたいやうには思つて見ても御店の久四郎とこれ／＼と明けても云はれず京屋へ歸れば、他の氣も知らいで、齡にも慚ぢず五月蟬ついて廻らるゝ御隠居様の恐ろしさ、成るべく御傍に行かぬやうにと氣をつけ避けても御主なれば、呼ばれて舞になつても居られず、春や、暮れて、拾時の或夜の事、肩を揉めとて呼びつけられ、是非なく御傍に參つて怖々御背後へ廻れば、御肩へ掛けた差が手を捉つて、無體と云はうか邪見と云はうか有るまじさ御振舞に、ハツと動顔して振りもきりにかゝるを取つて押へて動かし玉ばす、聲を立てうなら聲を立てなれ、倅夫婦の手前、店の方大勢の手前、此我に好い恥をかゝせなれ、と憎へやうもない凄じい顔付なされての強い御言葉、口惜しくばあれど流石に大聲もあげかれて遠慮すれば、よい事にして遂に此身を悲しいとも腹立しいとも云ひ様の無い目に御逢はせなされた其日より、陰へまはつては数々の下され物、猫撫聲

ににや／＼笑ひ、身の縮むほど厭で／＼堪られど、明けては誰に云ひやうも無く、又此事を久四郎様に云ひもならねば、隠して居る底氣味の悪さ、胸の苦しさ、顔を見るたび恐ろしい神様の前にでも出たやうな心地して、我と責めらるる憂さ辛さに、自然と思ひの色に出て歟、心廻りと勘違ひして何ぞにつけては厭味を云はれ、云ひ説くことは知らぬにあらねど、暗いことのあるに舌も滲つて口も利けず、それ／＼又わざと口さへ利かぬ歟と久様は合點するやうな調子に、彼方此方が段々と「ぐりり」はまになつて、迎へ此事露れた曉にはよも赦しては下さるまいと思ふ念の日に／＼増すにつれ、末の望の無くなつて目前の厭な思ひばかり募り、終にはほとと眞實に、執念く思はるゝが却つて厭になつた頃、不圖久様の恐ろしい恨みの文を御隠居様に見つけ出され、それからそれと組されて隠し了せず、有體に始末を云へば、如是せよ如是せよとの差圖、それ／＼と過むれば久四郎がためを思つて歟との一句に詰められ、心ならずも云ふ通りになつて見れば、旦那様の御不在に彼人は梵天國、それまでは旦那様御夫婦にも御隠居様との中を御承知で取りわけ御最居になりしものが、宰府から御歸りになつて其事を聞か

いふでも無けれど斯様いふ時に叔母様が傍に居て下さらば、其分別も借りて見たいと左右思案に暮るゝ末は若き者の心弱く他を頼む氣ばかりになつて猪口を受けたる手先さへ自然と顫ふを見ぬ顔して、今さら云ふでも無いけれど、お初、汝は何によらず乃公に對つて隠し立をするほどに遠慮氣を家へ來てから既日數さへ大分立つたに未だ持つて居る事もあるまい、と語氣は優しくけれど底意ありげの言葉は果して良人の口より洩れ出でたり。さてこそ大事と怖るゝ唯と答へも口籠りて、漸く乾したる猪口を返せば、何事も無き様子して満々注がせつ下に置き、ムム、よし、其様なら尋ねようが、決して餘計な心配せずには彼の久四郎が一條を悉皆細に話して仕舞つて酒の下物に聞かせるがよい、濟んで仕舞つた事を今から何様の彼様のと云ひませぬわ、笑つて仕舞へば好いでは無いか、お桂が話した通りでもあらうけれども脱漏もあらう、汝の口から今一度話して聞かせて貰ひたい、悉皆聞かれば乃公の氣も濟まぬといふもの、汝もまた何か乃公に隠して居るやうでは寢覺の悪い思ひも仕ようといふものだに、少しは話し悪い事でも、乙吉は居す汝と乃公限り、尻も喚き合ふと諺にいふ夫婦の中に遠慮は却つて隔意だ、

構はず云うて退けたが好い、包み隠しをされて見れば、假令は然し無い事にせよ他に知られて濟まぬほどの悪い事のあるでは無いかと疑はずとも好いことにまで疑念も随分かかる習ひ、一體何程馬鹿にしても初手から無情されて居ては彼様まで男兒が理非わからずの無法も仕掛けぬ道理ゆゑ汝も多分最初彼の久四郎めに優しい眼遣ひ位は仕たに相違無からう、なんの、男も女も同じこと、乃公を女にしたところで、齡も相應なれば身體も不具では無い男に親切を盡されて憎い筈は無い、それを又沒義道と情無くするやうでは、全でそれは、人情義理の分らぬ獸類、まさか汝と分らず家では無し、人の愛情に感ぜぬことは無からうに、構はないわ、久四郎を最初は何様思つた、其後は如何思つたと聞かされて話すがよい、と輕く云はれて包み難く、其時は斯様後節は如是と仔細の大概を口までは出しかけしが、云ひにくき事猶存と、云はば如何にと懼るゝ心の湧くとに、自ら怯心が來て、いえ、隠すではござりませぬが久四郎めは初手から嫌ひで、優しい眼遣ひしますところか、笑顔一つ見せた事さへござりませず、何も彼も叔母様の御話しなされた通りでござりますると怖々云ひ切る。左様一醜に云うて仕舞ふな、と

笑ひを含んで重ねて問ふ。いえ、全くと又口を閉づる。たしかに左様かと念を押す、ハイと確然答ふる途端、ハ、ハ、ハ、と笑ひ出して、じろりと此方を見る眼凄く、虚言を云へ、お初、汝太い奴、隠し丁せようと思ふか、淺慮な、丁稚の彦めを種子に使うて京屋の隠居と同謀になり、隠居の猪の目に汝が灸をして居るところへ久四郎めが文をわざ／＼持つて來させた謀計はなかなか巧かつたナ、と急所をさされて、え、とばかりお初は後へ反りかへりぬ。

其十三

お初が驚きたる様子を見て取つたる正太郎勢にかゝりて責め問へば、今は包むに包みきれず、一言一句涙になりて言葉のつきもたどたどしく一部始終を打明けけるが、其大抵は久四郎が云ひしところに異なられど、虚偽か眞實かいざ知らず、當人が身にして見れば條理の立つたる入譯あり。仔細を如何と尋ねるに、成程最初は久四郎様が好意に絆され、憎からず思つて優しい挨拶もしましたなれど互ひに前途大切の身と思へば淫猥の舉動などは露ばかりもせず、何年かの後を樂んで居ましたに、廣合より不意に起つて御隠居様の無體な仰せ、柳に受け

に痾を起して腹を虚空に立たる正太郎、遂にお初を離縁に決めけるが、一つは自己が齡のまだ若きより、彼様な女で事を済ませば何時でも女房は持てるものと高を括りての念慮が腹の極々底の方に自己は知られど存ればよりの事なるべし。

お初は離縁れぬ。傳吉は鼻を動かして、乃公の云つた事に違ひはあるまい、どうだ正公恐れ入つたかと得々として笑ひぬ。卯平次は氣の毒がつて呉れぬ。されど蔭では他所の茶話にして面白がりぬ。久四郎は如何せしや、お初の離縁は我がせし事よりなりしと聞て那處とも無く消えて失せぬ。已之助夫婦は久四郎が死にしならむと惘然がりぬ。徳藏が家にはお桂婆が罵る聲お初が泣く聲日々起りしが、頓てお初が近所の人の眼にかゝる事は無くなりぬ。京屋の家は相變はらず榮え、隠居はいよく壯健にて念佛一通申さうでも無く暮しぬ。乙吉は主人が酒色に亂れ出せしに用のみ多くて困りきり、蠱毒は名人と噂に立ちぬ。

金仙寺が庫裡の白壁に得知れぬ異様の畫はかかれぬ。街道筋の葎簀茶屋に老いたると若きと二人の男の休み居る前をば母子と覺しき女の連れ立つて過ぎ行く態なり。惡戯せしは何奴と

糺すまでも無く當人の玉山揚々としてゐしやぢやうりの圖玉山ふがくと稚き文字もて認め置きければ、散々に師の裁松はしめ皆の者に罵り懲らされしが、大和尚の海音禪師は衆徒の噂に知り玉ひて、一覽し玉ひしをち笑つて玉山が頂を摩し玉ひしぎり何と叱りもし玉はざりければ、玉山いよく増長して、えらいかえらいか此寺中で乃公の繪の解つたは大和尚様ばかり、他の奴等は何の畫とさへ知れぬのであらうに、消すなくと呼はりて舞ふやら跳るやら大得意になり居しが、當人の心にてはお初を其圖中の女と思ひ做し居るなるべけれど、流石兒童なり、それだけは誤りなりし。

さんなきぐるま

其 一

昨日までも今日までも、室の内には膝を駢べて坐し、戸の外には手を組み合ひて行き、蜻蛉取りにも、摘草にも、火巡しの戯れ、竹がへしの遊びにも、離るゝこと無く陸みあひて、たま一人見えぬ時は、小夜ちゃん居なければと他の兒童等との鬼ごつこにも新三郎の面白

がらす、新ちやんが居ないからと捉迷藏にもお小夜の乗氣にならぬほどの交情なりしに、馬鹿の三太郎なんぞにお小夜新三郎いろゝと彼家此家の塀やら壁やらに樂書されても厭には思はざりし相合衆の其相手の新三郎が、如何いふ譯でか稚心には合點のゆかぬ事にて、突然に今日東京といふ遠いところへ、知らぬ人に連れられて行かると聞いたるお小夜の本意なき、母様、何で新ちやんは其様なところへ遣られるの、母様留めて下さいな、悪いこと仕たのなら謝罪つて、堪忍して貰つて、いつまでも東京といふところへ行かないで居られるやうに謝罪つてと母にせがむも二度ならず。清兵衛附つて横合より、いえ、東京といふところへ新さまの行かれるのは悪いことをなされたからでは無く、これから段々好い人になられるために行かれるのです、お嬢様も生長なつてから一遍行つて御覽なされ、それは一年中此地の鎮守様の御祭禮よりも賑やかで、面白いものも澤山あれば美麗なものも澤山ある眞に結構な好いところでござりますと、一つはお小夜を慰めつ、一つは新三に條公を厭がらせじと云ひ紛せば、今さら何とせむ術なきにお静も傍より口を添へて、新三郎さんは男の兒ゆゑ何時まで田舎に居

るとから妾を見る眼には何時も角を立たせらるやうなつて何と無く面白からず、若や腹の悪い女めと御蔑視かと自分から安い心も無い中、久四郎様が刀の折れを持って妾を斬らうと入られた隙に且那樣から御暇となりしが、濟まぬほど十分に御手當を頂いて家へ歸ると頓て、徳藏が勿體なくもお桂を煽動て京屋様へ坐り込み、また餘分にお金を頂いて來たとやら、其上ならず妾に向つて妾奉公せよの、且那取りせよの、左無くば家の飯は食はせぬのと無體な云ひかけ、つまりは妾を食はうといふ腹かと見ゆるほどの薄情さに、那處へなと嫁けて下され、妾奉公且那取りは厭でござりまする、強て其様なこと爲よと云はるゝならば、御世話にはなりませぬ、お上でも道理のある方なら加護うて下さりませう、又妾の云分を通して下さいらば實は何の彼のと頂き溜めたお金の中二十兩だけを進げませうと妾の懐中金を拂くつもりになつて云うたれば、妾話は廢棄にして御縁で此方へ來らるゝやうになりました譯、包み隠しを致しましたは全く足らぬ心からして悪い事でござりましたが、今申すに塵ほども眞でない事はござりませぬ、どうぞ赦して下さいませ、堪忍ならぬ、出て行けと彼久四郎が事よりして仰や

らるれば、申し解く言葉は些もござりませぬが、神様も御覽なされ、此家へ來るつてからは他心持つた事は兎の毛ほどもござりませぬ、今御腹立が御解け無くて堪忍ならぬと仰やれば、徳藏がところに歸らうやうも無い身の上、遠いところへ此家から直に行くよりほかは無いと覺悟はつけて居りまする、と思ひ入つての懺悔なり、斯様と腹には定めて居しも開いては流石に恩愛もある夫婦の情とて一概に、堪忍ならぬ、出て失せろ、とも云ひかれて正太郎腕組みせしまゝ言語無し。

其十四

えゝ、可笑くも無い分疏三昧、人を好くして開いて見れば、道理らしいところもあれど、假令隠居が何様あらうと自家のお桂が何様あらうと、又徳藏夫婦が何様あらうと、自分の身體は自分の身體、自己の仕た事を他が爲したことといふ云ひ開きは役にばたゝぬ、一旦斯様と思つた事を中途で捨て、毫も關はず、久四郎には遠ざかり、隠居には祕密を明かすとは、襟元につく料簡と云はれたところで仕方の無い譯、久四郎の身になつて見れば、恨むも道理、怒るも道理、乃公にしても其儘では置かぬ仕儀、まして

や隠居に過られてとは云へ、見すゝ久四郎が身に難儀を掛くるに知れた手筈の相槌打ちになつたとは言語に絶えた薄情さ、もとより當時は既久四郎を無くもがなと思つて居たには違ひあるまいなれど、苟且にせよ片時にせよ、憎くも無く思つたこともある男を、巢を焚かれた鳥、穴を崩された獸のやうに困る目に會はせて、知らぬ顔に同じ日輪様の御照りなさる世界にのめめ仕込んで居ようとは、智慧が足らぬか膽が太いか、蟲の好過ぎる話といふもの、加之一々眞實やら、身勝手を入れた虚言で捏ちた事やら知れず、悉皆眞實にして聞いて面白くない心の持ちやう、連も行末長く添うて居ることなんぞは眞平々々、水を交ぜた酒のやうに利き力の無い此様な女は女郎にしても三月とは馴染んで居られぬ我的氣性、此方の痾が病が知られど何も堪忍して女房を持つて居るにはあたらぬ、傳吉めが云つた通り一切無益になつて仕舞つたわ、彼奴にそれ見た事かと云はるゝも口惜けれど、痾瘡に觸る、厭で堪らぬ、泣言は聞たくない、さらけ出すばかり、何の女房が無くても事は缺かぬ、女房が無いので餓死もせぬ、酒は却つて獨身者が可笑く飲む、馬鹿々々しい白痴づらな、七里結界、逃げて亡せろだ、と無暗無法

さあ既新三も十分休んだであらうに、是から木更津までさへ歩けばそれで好いのゆゑ、思ひきつて出掛けよう、何時まで御送りになつても果のござりませぬことなれば、お嬢様も是で御歸りなさるが宜しい、あなたも眞實に御苦勞様でござりました、と清兵衛煙草入を腰に挿して立上りにかゝれば、お靜も一寸會釋して、それなれば清兵衛様此處で御分れ申しませう、御如才もござりますまいが、海といふものも舟といふものも全で知らぬ兒の事でござりますれば、船の中など氣を注げて遣つて下さりませ、若船にでも酔ひましたら先刻彼兒に藥を遣つてござりますれば何卒服ませて遣つて下され、又東京へ着きましてから町馴れする間だけは恤つて遣つて下さるやう先方の御主人様に能う願うて置いて下さりませ、と吾が兒でもあるやうに親切の情の溢るゝ頼み、聞て清兵衛ぐつと受け込み、いやも夫は御心配なさりまするな、新右衛門殿とは古いからの馴染の野生ゆる其子に粗略はござりませぬ、今度江戸へ出すやうにしたも實は野生が勧めて爲たというてもよい位なこと、今のやうに朝晩こづかれ通して居ようよりは此子のためと東京へ出す譯でござりませれば、酷いところへ遣るでもござりませぬ、

左様いふ腹ゆゑあなたの御言葉が無くても十分先方へも頼んで遣りまするが、それにしても酷いのは新右衛門殿、富次郎ばかり子でも無からうに何程街妻のお力めに卷かれたればとて、他人のあなたば此處までも送つて遣つて下さるに親の身で門口から二三間も見送つて遣らす、又街妻めが爲ることはいへ、着替の衣服、手拭なんぞも、碌には呉れても遣らぬとは傍觀からさへ餘り情愛が薄過ぎて見えます、けれどまあ何も好し彼も好し、此兒が立派な一人前になれば皆消えて仕舞ふ些細なことで、毒も云はずに出て來ましたが、よろしうござりまする、御案じには及びませぬ、一切野生が氣をつけて遣りまする、今度荷にして既船へ廻して置きました大豆やら米麥やらが彼地へ着きさへすれば野生も些暖まれるゆゑ、奉公前に一日か二日東京見物もさせて遣りませう、ア、是は餘計な事を饒舌つて居ました、時に新と御嬢様とは、おゝ、彼處に居たか、何をして遊んで居ることかと、お靜もろとも立寄り見れば、肩を寄せ合ひ頭をか駢べて、互ひの隻手に輪をなしたる一條の色の細きを繰りて五つの指頭に錯綜はせ、それ猫又よ、水よ、障子よ、今度は鼓でむづかしと兩人して取る綾の遊び、「かたあや」といふ

他愛も無きこととして餘念も無く興ぜるにぞ、思はず清兵衛笑ひを含みてお靜が面を一寸見つ、これを分けるは酷いやうなと我知らず獨語せしが、さあ新、出掛けよう云ひ出づると彼此齊しく、さあお小夜も歸りませう、此地で御別れしませうとお靜も云へば、新三は清兵衛を、お小夜は母を、これも彼此齊しく見しが、母様、「あやしは一人では操れないものをと濕み聲して、云ふかと思へば既涙を新三が袖にお小夜は漣さぬ。

其 三

木更津に着きたる時は日まだ高かりしが雨雲天を蔽ひて今にも降り出さむとするやうなる景色に何となく市中も夕暮じみて、それ／＼の所要果さむと馳せあるく人の足も忙しげに、降らぬ間の事と船着場へ送り込む荷物、同じところより揚ぐる荷物の車の往來も烈しければ、直其傍らなる勝浦家の店頭に今しも携へ來られて腰掛け居たる新三郎は、寂しき村より初めてかかるところへ出でたる身の物珍らしくて、眼も放さず戸外ばかり打護り、人呼ばう聲、馬叱る聲、車の響き、下駄の響きに耳を騒がせられて茫然となし居けるが、其處に居ては店の者の邪

でもよくない、それで東京へ奉公に行き、立派な人になるゝやうに、此お方に連れて往て頂かれるの、汝は少し淋しくとも女の兒ゆゑ家に居て順從して居ればなりませぬ、今に立派な人になつて新三郎様が歸つて來られる其時は汝も此様な我儘者のいたづら娘では済みません、好い兒になつたと新様に吃驚させるやうになつて褒められなくては笑はれます、汝が好い兒になつて優しく待つて居さへすれば屹度新様は歸つて來られる、而して定めしいろゝの好い御土産も下さるゝから、分らぬことを云うてはいけぬ、と辛くも難し慰めて、愛らしき眼に露ふくみつ別れとも無き遊び相手の新三郎をぢつと見つむる我が兒の頭を撫で摩り、漸く合點させるが、振れし氣性の新三郎は面を彼方に突と向けて、同じ心の眼にあらはるゝを清兵衛はじめ誰にも彼にも見らるゝが厭といふ風なしぬ。

さてあるべきにあらざれば木工助ばかりを留守にして、お小夜が足の堪ふるほど、お静は吾が兒を引き連れて清兵衛新三を送りけるに、手を取り交して先に立ち行くお小夜新三は何事かを語りあひつゝ十間或は二十間ほど駆け隔りては此方を顧み、此方の及びく頃になれば、

復駈けつけて路傍の草を摘むやら小禽を指さし嘯くやら、何かは知らず常の如く互ひに罪無く戯れけるが、これぞ此の往きて返らぬ月日の態を寫して流るゝ河水の本は如何なるところに行くかと、舟渡しする流れに臨みて新三が上をお静は感ずる小櫃の川を過ぐれども、お小夜は更に疲れし體なく、岩出の村を横きりても足もとどめす先へと進み、戸崎を過ぎなば堪へずやならむと思ふにも似ず、新三と共に大空を飛ぶ女蝶男蝶の翼に疲れを見せざる如く戯れ駈けて長々しき一里に餘る原を抜け、土地訛りにはたあくらと呼ぶ高藏寺の觀世音の前まで遂に到りけるが、流石に疲れやしたりけむ皆には先だちたりけれど、堂に上ると其儘に、二人は足を投げ出して肩を駈べつ箕のやうに欄干を背にして坐り込み、清兵衛お静等の來るを例の小狗と共に待ち居ぬ。

其二

あれ御覽なされ、お嬢様もとうゝ御草臥なさつたと見え、新様と一緒に彼の御堂の上に休んでいらつしやりまするが、よくゝ新様と御分れなさるが御厭と見えて、よくまあ此處邊まで歩いて御いでなさりましたこと、私等では

さへ草臥ましたにと、お小夜等二人を指さして下婢の告ぐるに、日傘さし傾けて彼方を見ながら、ほんに小兒といふものは一方氣の後前無し、心に眼のある中は何も彼も忘れて仕舞つて居るもの、併しお小夜が此邊まで歩いて來ようとは妾も思ひがけなかつたが、牛に導かれて善光寺では無く兒童に引かれて觀音様に思はず御詣りするやうになりましたもの、定めしお小夜が歸路にはがつかりして仕舞うて汝の世話になりませう、とお静の云ふ其後を取つて清兵衛が、如何にも如何にも、歸路に負はれてでなければ濟まぬほど嬢様は御草臥でござりませう、御元氣とはいへ能く御歩なされましたには驚きました、男の足でも此溫氣で是だけの道程を歩いては野生などは随分樂でござりませす、腿が些は挽くなつたやうに覺えまする、燐寸も丁度ありますければ御堂で煙草休みとしませう、床は高いし、屋根は厚し、風入の好くて涼しいお堂、あなたも御休みなされませ、と云ひゝ歩みて堂に上り、袂の燐寸を取り出して蹲み込みつゝ、すつばゝと煙草を吸へば、お静も堂の御本尊を禮拜して後二三服、少時は四方を見晴しながら疲れを休めて居たりける。

く立續きたる人家、勢ひよき人力車の掛け聲、美き衣着たる土女の往来、いづれ耳目を劫すものならぬは無ければ、たゞうろ／＼と氣を吞れて、新三茫乎とすな、我に相失たれ何とすると清兵衛に心づけるゝまで我と我を忘れけるが、清兵衛が定宿土總屋といふに入りて漸く安堵の思をなしぬ。

ア、幸ひに昨夜の船は揺れもせて熟く寐られたれば、左まで疲勞も身に覺えぬ、どれ／＼用事を果しに掛らう、夕方には間違無く戻つて来る故其までは汝一人で待つて居よ、退屈ならば能く／＼路を聞いて近所を見物でもして来よ、此家を忘るな、迷うたらば靈岸島上總屋と巡查様になり他人様になり尋ねて歸つて来るがよいと云ひ置きて、清兵衛は朝餉終ふと直出で去つたれば、取り残されて唯一人となりたる新三郎、心淋しく無聊に堪へず、寝つ起つして歸りを待ちしが、小櫃川の景色、お小夜が家の門の柳、小狗、昨日見し高藏の觀音堂、お靜の優しさ、髪の白い木工助老夫、頬の紅い下女、憎きお力、是等の者に交るゝあどなき心を奪はれ居ける。

其翌日も清兵衛は昨日の如く朝風くより出で行きければ退屈の餘りに、築地の御堂より明石

町あたりの居留地を見て廻りなば丁度よい退屈晴しならむとの宿の男の教に任せ、行くことは首尾よく行きて本願寺を見つ居留地も見つ其壯大なと清潔なとに驚きて歸りしが、歸りは路を過ちて、行けども／＼方角違か靈岸島には歸りつかず、まご／＼するところを疾風のやうに駆くる車夫に背後より一喝されて冷汗を流しなどしけるが、恐る／＼巡查に路を幾度か尋ねて辛くも暮方に宿に戻れば、清兵衛は既歸り居て、築地へ行きたること、路を失ひしことなど聞いて打笑ひ、よし／＼それでも歸つて来たは感心、明日は汝を連れて出て浅草の觀音様を拜まして遣らう、高倉の觀音などは譯が違ふ、吃驚すまい、楽しみにしな、と笑つて其夜は済みにける。

其五

鎮守の祭禮よりほかには賑はしきことを知らざりし新三初めて浅草の觀音に詣り、石路に下駄の響き絶ゆること無く肩袖摩り合ひ老若群集する雑沓の中に入りて、聞いた口の塞がらず呆れ惑ひ村道ばかり悠々と歩きつけし癖こそあれ熱鬧の間を行いたる覺えなければ、動もすれば人に突當つて鈍癡めと罵られ、人の足に

我が足踏まれて思はず痛いと呼ぶとき反對に間拔めと叱られ、賑やかさには懲り／＼して、早く自家の周囲のやうな淋しいところへ出たいと眞底から愚癡を顯し、二三年も立つて自家へ歸つて見たら早く東京の賑かなところへ出たいと云ふやうにならうものと清兵衛に散々笑はれる。

浅草上野も清兵衛が慈悲に見せて貰ひ、藏前通り、廣徳寺前、御成街道、萬世橋、日本橋、京橋、銀座も教へられぬ。されど中々東京が四角なところやら丸いところやらも合點行かず、東西南北も覺束無きに、其翌日清兵衛に連れられて、目見えといふことまでも無く、神田多町の乾物問屋坂本屋喜藏と呼ぶ清兵衛が得意にて豫て話合ひ定まり居し方に今日より丁稚と定められ、乃ち清兵衛受人にて萬事埒明き、宜く御願まなしまするといふ一言を後に遣して、唯一つの心頼みと今の今まで總つて居たりし清兵衛には振り棄てられ、全く馴染の人も無き見ず知らずの中に我一人となりたる悲しさ、今さら清兵衛が袂の中にでも隠れて居らるゝものならば内々故郷へ歸りたきやうの心も湧き出でて、厭で堪らぬお力の居る我が家なれども戀しくなり、眞里谷が家の庭前の林檎の樹蔭

魔になる、此方へ入つて遊んで居な、良人は今船の出前て何やら彼やら忙しい故居たり立つたりして居るゝ、彼方此方に用もあれば一時ばかりは出たり入つたりもさるゝ事、汝に關つては居られぬ、大事無い、知らぬ人として遠慮すまい、サア此方へ来て居なといふに、えゝ、何を迂論々々として居る、ソレ其處を退きやれ、人様が御出になつても其處にほんとして汝に居られては御掛けなさる事も出来ぬわ、サア早速とな、此方に来て居なといふに、鈍間な兒ではある、オ、これは千葉屋の旦那様、何か御用でござりまする歟、靈岸島の上州屋様へ此御狀と此お送り物、ハイ左様申しませう、イエ御禮を仰るまでもござりませぬ、どうせ上州屋様へは良人でもある其次手でござりまするし、お互様でござりまする、御歸りでござりまする歟御茶もあげませんで、慥に御預り申しました、左様ならば、と云ふところへ引き連れて五十餘りのむづかしい顔の老夫入り来れば、これは作左衛門様能う御來臨なされまし、まあ此方へ御上りなされまし、ハイ左様仰るは御道理で、ハイ、ハイ、でござりまする故良人でも只今一應御ことわり申しに上るというて居りました、御心配なされませぬ、御約束通り二十九日には歸

つてまゐる筈で、さらりと埒明けて進ませます、ホ、御念の入つた、まだ歸りませぬ歸りませぬで追ひ拂ふなんぞと、ホ、その様な手の悪い事は致しませぬ、どう致しまして、貴下を失錯つては大事でござりまする、ハイ、ハイ、東京へまゐりますと早く申し上げて置かなかつたが此方の手ぬけでござりました、屹度、必ず、間違なしに、宜しうござりまする、歸り次第に、御分りになりましたか、ハイ、イエ御念の入つた事で、もう御歸りになりますか、御苦勞さまでござりましたと仔細は何か新三には知れど賢げに云ひくるめて返して仕舞ふ清兵衛が女房の口のみめくしき、新三は一人呆氣に取られて、まじく／＼と坐り込み居けるが、其前をすつと通つて主人の清兵衛、お松一寸東金屋から印南屋かけて行つて来る、新三待つて居な、好いといふ時に乃公が連れて行くからの、と云ひ置き遣々立出でぬ。

狐の離れしやうになつて口を開かず坐り居る新三を顧みて、何か汝は考へ込んで居るのか、家へでも歸りたくなつたか、ム、頭を振るのは左様でも無いのか、一寸聞いたが汝の家には悪い母さんがあつて汝も随分悲しい日なみて居たとの事、東京へ出て辛抱して立派な人に

なるがよい、ナニ公も怖がるほど辛いもので無い、能く正直に働きたすればそれでよいのさ、迂闊して居てはいけません、東京の商人の店は何處でも此様な姿勢が店のやうに手ぬるい事ではない、十倍も百倍も事が多くて忙しい繁昌なものゆゑ、能く氣をつけて研子として居なければ勤まりませぬ、と女房の親切に云ひ聞かして呉るゝに今此店の忙しさを見ればかりにて驚き居た新三は、是より十倍百倍事が多くて忙しきものと聞いていよく鬼胎を抱き、何のやうにまあ忙しき中に我身のこれより入る事が、能く勤まらうか、叱られうか、優しい人も其店に一人二人は居て呉れようかと小き胸を痛めけるが、其後萬事を済まし果して、さあ時刻も好し、船に乘らむと主人の身支度なして、出づるに伴はれ、勝浦屋が女房店の若者三人に送られて、棧橋より端舟、端舟より本船と、いよく船に乗り込む時、何となく足の中心も縮むやうに、胸の正中も冷えるやうに覺えて、そぞろ悲しくなりぬ。

其四

新三が初めて永代橋際に着いた時の驚きはまた比ふべきもの無し、坦々たる道路、果な

ますといふ其丈の御證に御屋號を頂戴する事が出来ますれば此よりありがたい事はござりませぬ、と柔和しう云うて出たるに、理非善惡にも疎い人達、屋號さへ遣れば済むとの事に何の否やを云はうやうなく、それならば好し、おこのについて此後毫も異存は無いの、屋號の事は如何なりと其方の勝手にするが好いとて、親類一同何の氣もつかず列座の中で立派に返答して了うたりしが、中に坂本屋が遠縁にて美濃屋の隠居の作阿といふ法體の老人たゞ一人、座の人人に打向つて、作阿一人は此座に居て此事につき可否ともになゞ一言も云はなんだといふ事だけを皆様が覺えて置いて下され、と何やら底意のありげな事を云はれけれども誰一人耳引立てて取合ふものもあらざりき。

其七

喜藏が坂本屋の親類一同おこの親子に對して、餘りといへば我を見下したる身勝手と恨を抱きたるか否かは知らず、坂本屋が店を出づると直に芝の神明前に坂本屋と名乗りて同じ商賣を小體ながらに始めたり。資本は何處より才覺し出せしか、舊の主人方を出づる時に、手切とは云はず語らずに突きつけられし百兩ほどの

金は、受くべき所以なしとて突き戻して來しよしなければ、いづれ何人が喜藏が不幸を憫み呉れたるものあるに頼みて仕出せし事と思はれけるが、氣性だけに人は世を經る習ひとて、商賣にかけては素より迂闊ならざり男の勵みを抱いて働にかゝりたる事なれば、店の賣買は知れた事ながら彼を此方へ此を彼方へとの算用かしこく、視る目聴く耳疾く鋭くて、仲間賣買の仲に立ち入り取る口錢も少からず、又一つには喜藏が身の上の様子知つたる間屋達の愛顧の力を加勢に得れば自然と人も同じ事なら彼男に得つけてやれといふやうに仕て呉るゝより、捨つる神あれば祐くる神、苦責らるゝ兒は憫然がらるゝといふ工合に、綺麗清淨と坂本屋を出しだけ行路難と驕つた奴の面倒がる世界を安々渡つて行く調子もあつて、二年三年、五年めには既すつと太つた身代となり、店の肩幅も街面に廣くするに至りける。是には引替へ舊の主家坂本屋の方は娘と通じたる榮吉の、身元も左邊惡からで、浦和在に藏ニタ戸前馬二三匹もある農家の次男といふことより、出來た事なら寧出來して仕舞うたがよいと、世上一體でいへば粹とか通とかいふ捌き方を母はじめ親類一同で仕て退けて、終に不埒を禮義で包み、濁つた四海波靜かに事は

は治まりしが、禮で初つた夫婦ならば和にもとどまるべし、色で會つた往時が在れば如何で眞實の夫婦合ひと其夫婦合ひの別あるところが長持すべき。夫が女房に調戲へば女は亭主に甘えて縛れつ粉れつ巫山戯あふ其下には威のきかず商賣には粗略になる根元なるに、仲が好過ぎて一日の帳合もまだ済まぬ内から女房の身として男に酒を酌むれば、亭主殿は御座所の御機嫌取りに物見遊山を成らぬと云つた例無く、知らず識らず互に奢侈増長して失費多くなる傍、油斷に食はれて帳面は店のものの不届の尻を拭ひ居るやうになり行き勝なれど、病内臟に伏すれば掌の甲の損傷ほどにも思はぬ凡火眼の言き悲しさで心もつかず、初に女の兒の誕生、次に男の兒の日出度さ、芽出度々々々に浮き立つて祝賀に莫大の張込み、さても其後二人が結びの神様と崇めた時の長病、遂に往生、日出度も哀傷もこれ皆貧乏神が一つ誰團扇の裏表から扇ぎ出した風とは悟らで、笑つたり泣いたりして居る間に流石の身代も礎際から柱が朽ち、床下ではつかしが倒れて、榮枯盛衰天地返し、家質流れて代が替る世はからくりの先達御替りといふ時が來り、焦躁つた山の、がつたり、がつたり、坂本屋夫婦は柳島の寮へとか引籠り

が直近くらゐ駆けても行つて例の如くお小夜と遊びたくも思へど、能く辛抱せよ、奉公中途で歸つて来ても家へは入れぬと父様の厳しく仰り、彼のお力めの其尾について、歸つて来たらずには置かぬ、擲き出すぞ追ひ拂ふぞ、屹度閤は跨がせぬと怖し眼して睨みつけしことも眼に浮み来て、能く辛抱せよと清兵衛に吩咐られしを背か力に無く、歸りだきにも何様して好きやら其も分らず詮方無しに、涙の沸き来るばかりなり。

其六

坂本屋の主人喜藏といふは齡のころ四十を五つ六つ超えたる岩疊つくり大痘痕の醜い男にて、打殺しても死なざるべき恰幅、眞黒な顔に錐を列べたやうな太い毛の眉つき恐ろしく、獅子鼻、へのじ口、どこを何様とて褒めどころも無き風采のものなれど、其代りには心意氣烈しくて言語明晰と、苟且にも懷中手して遊び居ると云ふやうな事無く、商賣にかけて押つ戻しつ競り合ふ場合に臨んでは満身に慾の充ちて針一本刺し込もう譯も無い位な有様、といつて道理も人情も關はず自己がためばかりといふにはあらで、随分女房にも優しく子にも甘く、店の者に

も酷くは無ければ、町内での評判も更に悪からぬのみか、好いも一通りならす好くて、喜藏が身の上知つた人は若いものの龜鑑にとて其一代記を町での古顔より語り傳へ云ひつぐほどなるが、好いとなれば人は附加までして褒めらるゝもの故少しは潤色も雜れるか知られど、聞けば一應聞く價値あり。

今の坂本屋より二町程隔てしところ二十年ほど前は矢張同じ屋號の坂本屋とて同じ雜穀乾物商ふ老鋪ありしが、喜藏は其家の奉公人、生れは房州の濱波太、波打際砂に匍匐ひ、磯の藻鹽木吹き奇せ貝を玩具にみて育ちしが、相應な家でさへ冷飯食ひといふ二三男に生れて兩親の世話届かず、少しの手蔓を幸ひに坂本屋の丁稚とされしが抑々江戸へ出て他の中へ出てし發端、それより段々勤め上げて主人の氣に入るこゝと大方ならず、これならば家も譲つて惜からず、我亡くなると我が家は大丈夫と日頃思はれてか、男の兒無くて唯一人の秘藏娘おこのといふがありしに、配せよと親類一同に遺言して老病のため主人は亡せられ、一旦坂本屋は喜藏がものと定まりしが、祝言は忌中ゆゑの、一周忌済むまでとて無かりしも道理、娘のおこのといふは容貌美しく諸藝にも暗からず育ちばしたれ、

心正しからで疾くより喜藏が次の席の手代榮吉といふ生白けたる男と父の病中より乳繰り合せて、お染久松の芝居事を其儘好い氣になつて戯れ居しを、知つても懲らす事知らぬ母はまことの狗可愛がり、却つて喜藏がやうな醜男に娘を一生添はす事はと生の兒だけに娘舂辰の得手勝手、夫の遺言の明かなるをも顧みず親類の誰某を語らつて喜藏に幾千かの手切金遣つて逐ひ出さむとの談判にかゝりたれば、此處は随分善人でも承知のならぬところ、是非ともおこのを貰はうと云はうか、坂本屋の身代二つに分けて貰はうと云はうかの場合なれど、涙ばかり翻して小くなり居たる喜藏が、何といふ歟と思へば、不承知の不の字も云はず、金のかの字も云はず、たゞ亡くなられた旦那様の御恩は假令は小生の御店を離れますればとて中々忘れられませねば、責めては是より小生が何商賣を致さうとも當家の御暖簾を分けて頂いた心で新坂本屋となり、又御許し下さらば坂本屋と其儘をなり名乗つて、商賣いたしたうござりまする、御不縁なは是非も無い事、親類を考へて見ますれば固より釣り合はぬ事でござりますれば當然の事と存じまして聊か不思議にも存じませぬ、たゞ別段に落度あつてといふ廉で無く御店を出

上げ涙を流して、口には沫を噴き足には次團太を踏み、金切聲を急に絞つて生死を争ふやうに騒きたつるは匂々なり。智者でも子には眼の無きが世の常なれば、無學の者の無理は無けれど、其度毎に女房はもとより、流石堅固漢の喜藏も、やれゝ泣くな、泣くな甚坊、誰が泣かした憎い奴め、オ、此の變り繪が歟、此の變り繪は是よりしか變りやうはない、ム、それで腹を立つたか、ム、悪いゝ此繪が悪い、好いのを又買つて遣りましよ澤山變る面白いのを買つて遣りましよ、コレ辨吉、汝が一體譯が分らぬ、相手して遊んで居て泣かせるといふ事があるか、何だ汝口をへをするナ、汝が云はずとも是きりしか變らぬ變り繪を猶變らせるといふ甚が無理なば分つて居るわ、其無理をいつて責めるのが小兒の常だに、それを汝が何とか欺しやう嘘しやうもありさうなものを、是つきり變りませぬ、變らせるといふは坊さんが無理、と木折りに云うて仕舞ふから甚も泣いて引裂いて捨てる筈、汝が悪い、甚に謝罪れ、えゝまだ分らぬことを云ふか、馬鹿め鈍癡め、汝が悪いでは無いが謝罪れと云つたら早く謝罪つたが好いでは無い歟、まだ面を膨らしくする歟、謝罪れゝ、サアゝ辨吉も謝罪つたから甚も堪忍して遣るが好い、

辨吉の憎い奴め、オ、甚、叩頭して居るのを打つては無いぞ、もう好しゝ、堪忍して遣れ、といふやうな工合に愛に溺れて眠暗み、子の無理を親が通して遣る事少からず、他家の兒が日本地理讀む聲は耳に入らで、我が子の「さいはい」刀を腰に横へ帯を馬と勝に當てつ、進めゝと軍人の眞似して遊び振の中たゞの一ヶ所でも器用らしいところがあれば、あの能く大將らしに似せる事はと眼に留むる親馬鹿の世の習ひ、其子に取つては有り難き親の情の餘りなるべけれど、奉公人に取つては此上迷惑のものは無し。商賣一切は主人の喜藏が切つて廻せば、店には總支配の番頭といふべきもの無く、いづれも五角に使はるゝ三人の若いもの百二郎善三三郎と、十三ばかりの中小僧の辨吉とだけなるが、商賣の小からぬ割合に人の少きは主人喜藏が日頃大の自慢の條條に奥に藝婢のお熊、女房の里より従て來しお類といふ女房が遠い遠い縁類の小女子、喜藏が世帯持ち初めより今に離れて殆ど主人が叔母かなんぞのやうになつて仕舞ひしお重の三人は些多きやうなれど、例の女房おえつがお重お如の居らでは困るよりなるべし。手代三人の中千三郎は芝に店のありし頃より仕へしものにて、一番若けれど一番主人

の氣に叶ひ、手元を放して田舎廻りもさせらるる身、善三は中年より使はれしもの、百二郎は舊の坂木屋に勤め方も實體になし居りしが、主家分散の曉、俗に云ふ乗馬上りの役立たずとなつて手に職もなく商賣せうに資本は無くて困り居たりしを喜藏が拾つて來たりしなり。新三郎今初めての奉公に、主人より炊婦まで此通りの此家に来て其後如何に。

其十

新三郎は先第一に主人の喜藏が、恐ろしき顔つき、力のある聲つきに甚く怖れ、我が面を見らるゝ度我が身に用ひかけらるゝ度に、睨みつけられ叱りつけらるゝやうの心地して、成らうことならば一日主人に顔も見られず用も命合られず居らむと思ふ心の外に出でて、新三郎は我を見ると何時も狐鼠々々仕くさるが、盜賊猫のやうな根性を男は持つて居るもので無い、汝の舉動は盜賊猫のやうな、と終に一時罵られしが、眞實、育ちが育ちにて父母にも疎まれながら生長せし新三が、心に怖るゝ人に對ひての舉動は盜賊猫のやうなりけむ。次に主人が秘藏子の甚吉が痛と我儘とは初めよりして堪忍なり難く、來て其翌日少しの争ひして泣

ければ、他年の本懐此時と手を拍ち悦びもやしつらむ腹は見えざる喜藏は、芝より今の仕居の多町に移りて小さけれども坂本屋の暖簾を掲けしぞ天鳴なりける。

其八

おこの夫婦は江戸にも仕居しかぬるやうの事仕出してか跡を晦まし、那處と知れぬ町舎へ赴きけるとの事、多分は男の故郷に恥面を包み、田のいきれの夏は奥く、案山子の姿の冬は淋しきところに面白からぬ顔つきして暮し居るなるべしと、噂ばかり折節あれど影を見しといふもの無くなりぬ。

多町へ出でしより、喜藏が勢ひは日の出の如く、爲る事も爲ることも利進に叶ひて、愈々取引も廣くなれば人の用ひも厚くなり、油の廻りよき車の走りの能きにつれて重荷をも搬び得るやうに、好い上には好い日の出来、彼此手都合よくなりしに、搞て加へて酒を飲まうでは無く遊興を仕ようでは無く、一汁一菜に満足して日じりく押しに身代の根を固め行くよりほか無ければ、数代續きし町人の由緒ある者すら今は坂本屋を輕くは見ず、娘を遣らむ妹を呉れむと云ひ込むも少からぬほどになりしが、船に懲

りては駕籠をも思むか、身分よきところより、持參金の光り添ひ、吊褌長持の石のつきたる嫁貰ふことは遂て辭退し、暫く無妻で忠實なる婆一人に黄飯を賄はせ居し後、猪牙掛りの他の親切口も途斷えし潮を見計らひて、電光石火、何時の間にやら身分も支度も技も容貌も何一つ取るところ無き女を貰ひ、彼が女房持つたかと他に氣のつかるゝほどの變りめをも見せぬ我が業三味、其當座と川柳に穿たれた數々の思も盡されば、新婚後の閉居に先生如何渡らせ玉ふと冷かされさうなところの裏をかつて博識を草いた呂東萊を學ぶても無く、一分一厘我が領分には牛を賣り損ふ女の嘴を容れさせて、汝は北に居よ我は南に働くとばかり、平生に異らず引續き勵み居ければ、頓て出来し今の惣領の甚吉が行木親を泣かす愚物になつて月謝出して習はせし字で賣家と書かば知らぬ事、今のところでは傾かむとも見えぬ確固な身代、彼家は間口を廣くせめだけ罷り間違つても急に腰の碎けはすまじと一方には評され、坂本屋の名跡立て居つて潰さざるが感心と一方には評され、併しなから底意は黒か白か知れぬ奴とまた他の一方には評され居けるが、善人にはあらぬにせよ卑格くはあらず、悪人にはあらぬにせよ醜に毒はあ

る男らし。喜藏が女房に褒めて云へば御心好し、惡く云へば割引のつく貨物、他の家の提灯を我が家のものが借りて来たを返す時に燭燭を新しくして遣るだけの事も迂腐り忘れ、亭主の繩杵も催促されてから洗ひ、訓へらるれば唯と答へ、叱らるれば謝罪り、罵らるれば縮まつて仕舞ひ、褒められても左程勇まず、煽動られても乗らず、目下に安く見られても腹たゝす、慾も薄ければ情も鈍き代りには彼方向けといへば三年も彼方向いて居るべきほど辛抱強く、自分の髮の亂れしも關はず顔に生毛の桃の實のやうに生えしも氣のつかぬ其癖決慮ある人に見ゆることは士百姓が公方様の御駕籠でも望みし如く恐ろしがるといふ風なり。

新三か上二人は此主人此女房なるに、まだ一人甚吉といふ七歳の男の兒一人あり。

其九

甚吉といふ一人息子が普通の餓鬼であらばこそ、親父が勝氣を受け繼いだるに母親の甘い教訓で育つたるなれば、我儘氣儘はぶに及ばず、疳の蟲の所爲とか俗にいふ精神病染みたる振舞さへ折に觸れては爲すことありて、何か自己が思ふ通りにならざる事のある時は、眼尻を吊り

て無事で好いかも知らん。ホ、ホ、然し親父さん御如才はあるまいが、左様三拍子も四拍子も揃つた好いお婿さんがあればよいがさ、第一おこのさんに釣合ふだけの容貌持の男でさえも捜して急に有りはしまい。其は他所外を捜しても有りはしますまいが、矢張彼家の久松ならば他の事は兎も角も容貌だけは釣合ひませう。オオ彼の御家の御商賣には似合はない人形のやうな綺麗な男が見えるがついぞ名を聞いた事が無い、彼が久松といふのかれ。なほに譯名でござりまする、眞實の名は榮吉といふさうですが、誰云ふとなくお嬢様をお染、彼人を久松として仕舞つてその飛沫で彼の頑丈作りの大痘痕の眞黒な飛頭さんを善六といふさうでござりまする、善六にしては何處となく意地骨が張つて居るやうに見ますが、好い面の皮の譯名でござりませんか、何でも人の噂では譯名ばかりの事では無く眞實の事まで彼の御家が酒屋通りでありはしまいかねぞと申しますが、若し左様ならば一ト騒ぎ屹度出来るでござりませうと、楽しみにして待つて居ります。コレ圖に乗つて怪しからぬことを、お徳舌も宜い加減になさい、妾はもう一ト風呂入つて出浴ます、汝も其心算で早速となさい。

・其二

響は聲無きところに起らず、影は形のあらざるに獨り生ずる譯も無ければ、相違はありとも噂といふもの原くところ無きはあらず、坂本屋の娘おこのといへるは、たゞさへ一粒種の二なきものと愛でらるべきを、ましてこれは天の生せる麗質光り輝くばかりなるに、加之さへ鈍からで女の有つべき萬般の技藝教ふるに能せずと云ふ事無ければ、ねぶるやうにして母には甘やかされ、懐くばかりにして父には護られ、幾多の歲月春長しなへに仁風膏雨の恵を得て、憂き事知らぬ仙家の花と心長閑に育ちけるより、妖嬈たる治癒餘りありて、金絲亂るゝ翠雲の髪飾り、蘭香動く彩霞の袖の翻り、見るものをしめて眼もあやに心も空にならしむれど、閑閑の訓誡の足らざるまゝ、相如が琴心を解せし卓氏の女の才にまかせ、韓重が道術を愛せし吳王の媛の跡を追ひて、若氣の過失の是非なしとは云へ、何時しか家に召使へる榮吉といへるが面貌も清く氣立も優しきを、微少の事より可愛と思ひ染みたりしを抑々戀の山入りの麓路にして、招けば來り呼べば應ふる言はれど語る眼の色を互ひの枝折と辿り合ひ、迷ひ／＼て上るほどに人目

の關も越え果て、同じ高峰に見る月の影よりほかに知るものあらじと果敢無き契りを結びけるが、他は瞞くべし自己は瞞くべからず、形は蔽ふべし香は蔽ふべからざる道理なれば、折に觸れての彼の舉動、時につけての此の狀態に心の底の祕事も思はず知らず穂に出て、父母にこそ未だ覺られざれ、嫉妬まじりの人の口にはやう／＼噂さるゝに至りぬ。されば二人は鬼胎を懷きて、おこのが稀世の美しさを見知り聞知り戀ひ焦れて縁を結ばむ婿にならむと由緒ある家より云込み来るものある度に、稻穂隠れに遊べる小雀の鷹の羽音を聞く思つて色を失ひ胸を痛め、如何は爲さむと憂ひ悲み、若く父様母様のあらぬ方より人を迎へて此縁組めと仰らばとて妾は郎を外にして男持たうの心は無ければ嫁と首をふりとほして、それでも徹せぬ其時は、其婚禮の白無垢を直に最期の死装束、身を捨てるより思案は無いと男の膝に泣き伏せば、其も畢竟はわたくしから故、貴嬢ばかりを先立て、何ながらへて居られませう、同じ旅路に手を取つてと、芝居よりほかには辛いことも味はぬ娘一條よりほかに考へ無き若き男の無造作に危険い話をせしこともありしが、幸にして何の思ふところあつてか主人は何時も入婚の

かせしかば直に主人に頭を撲たれしが、其よりいよく腹の底には甚吉を恨む心絶えず、つとめて我と違かり居ぬ。喜藏甚吉は主人筋なればまだ堪へどころもあるべし、同じ小僧の辨吉が新参を侮りて、何かにつけ嘲み笑ひ、言葉が可笑きとては口眞似して鬨り、物を知らぬが可笑きとて日本橋は二本ある故二本橋といふの、鹽町は鹽屋ばかりの、油町は油屋ばかりのと虚言をいうては我が眞に受るを哄と笑ふ、其上甚吉と二人黨になつては無理を云ひかけ困窘せて手を拍ち難すなどと、随分咬みついて遣りたけれど、奉公といふものは此様なものと小兒心に耐へけるが、幸ひ善吉百二郎千三郎いづれも意地の悪き人ならず、主人が女房は可も不可も無けれど炊婢のお熊老女のお重が可愛がつて呉るゝに少しは慰むところもあり、店の掃き、拭き、小買物、使ひ早間の走り行きなんどは家に居てさへ仕たことなれば、左程苦にもならず、爲る事はすべて家に居てお力に迫ひ廻さるゝより樂な位なれば、兎に角に辛抱して、大急ぎの使ひの苦しき暑き夏より朝々の睡帯掃除辛き寒き冬も越し、其日々に逐はれながら一つ歳をとりぬ。

あがりがま

其 一

美しいも美しいといつて彼様にも美しい御人があるかと思へば、妾風情は消えても仕舞ひたいやうな心持がして、傍へ寄るさへ氣がひけるよ。ほんに左様でござりまする、斯様申しては臆面無しで御座りまするが、夫人なんぞはまあ随分何處へ出ても御負けなさる御容貌でもござりませんの、彼の御嬢様と御列びなさんと何だか妾は悔しいやうな氣が爲まする、夫人もうこれから成るだけ遠くへ離れていらつしやいまし、左様なさとと夫人も矢張り御美しく見えますから。ホ、竹が何程氣作だとつて人様も聞ていらつしやるに馬鹿なことを御云ひでない、御容貌自慢が鼻の端に見えて居るそれあの横町のあの何でさへ、おこのさんに比べては鶴の傍へ家鴨を出したやうになつてしまふものを、妾なんぞが何様なものなれば、御口元といひ目のしほと云ひ、其他の御顔道具といひ、何處に一つ可厭なところが無くつて、而して御髪の見事さ、髮際の好さ、丈のすらりとして高くもなく低くも無く、肩のなだらかで張りもせず

瘡もしない配合の好さ、肌はといへば今見た通り雪のやうに純白で、玉のやうに潤澤があつて、御湯上りにも全て露が少時も留まつて居られまいかと見るほどすべしとし清らかなあの膚理の濃さ、後から見ればまた其首筋の尋常さ、頂髪際の畫にも無い上合さ、あればかりでも大概の男は慄へつくだらう。えゝもう男衆は慄へつくどころではござりませぬ、十町も二十町も先から見に来る者もありますし、又町内の若衆達は彼家の噂になりますと宛然狂氣同様で、斯様な事を申して居りますと聞きました。彼家の如きは此多町の花だ、一人娘の事だからいづれ婿取をせすばなるまいが、下手な婿めを取らせては親父が何と云はうとも江戸中響いた此町の花に傷をばつつけるの故黙つて居ては我等が笑はれる、男が光氏よりも好くつて、氣性があつて、家柄で、商業上手で、合性で、黠の打ち處が無いといふなら一ト肌腹で視ばうけれども、然もない時は横に出ては縁組させて堪るものかと、寄ると觸ると力んで居りますさうで、れえ夫人さん大きに御世話な餘計な吹火直漢の御せつかいでござりませぬか。オヤノそれは大變だれ、美しいのも普通外れると飛んだ苦勞をまうけるもの、さうして見ると姿置が却つ

て、草束れせる水雲のわざとならで二條三條玉
 を延べたる領元にはらりとほつれかゝりたる其
 美しさ又氣高き、美し過ぎて凄かりしといふ
 さへありしと噂されける。初七日も束の間に過
 ぎ二七日三十七と七日々々の追福供養も度重な
 りて涙の乾きさらざるに四十九日も既經てば、
 還り来るは我が身の心配、若し母様も義理堅く
 彼の喜藏面を婿にせよと強ひて仰らば何とせ
 む、今さら返すべき言葉は肩かぬ冥途の父様の
 御遺言に背かうにも背かれず、去りて偏屈一
 方の彼の喜藏めに片時たりとも妻と呼ばれて此
 世に生きようと思ふなければ、所詮義理披きとな
 つて動かれぬ時は逃ぐるか死ぬるか二つに一つ
 と思ふ由な榮吉に告ぐれば男も後へは退かれぬ
 仕儀、御恩を受けたる此家様へは仇で返すの理
 には當れど絶體絶命是非もなし、惡意の無きは
 神佛も定めし御存知あるなるべし、如何にも逃
 ぐると思案を定めて夫も萬一叶はずば身も殺す
 より外は無し、と戀に凝つては怖いもの無き臍
 の緒堅めし返答なり。かくとば知らぬ美濃屋の
 作阿、頭顱は法體したれども生得の世話好き善
 根作り、陰徳になると誰より聞きてか若き時よ
 り自ら望みて湯灌すること今度に至つて七十四
 度といふほどなる心掛の老夫なれば、自己が受

合つたる坂本屋の後の事、一ト骨折らずばなる
 まいぞと指かゝなへて百ヶ日の来るを待つて居
 たりけるが、愈々其日も来りければ親類一同坂
 本屋へ寄りしか機會に列座の中にて、授百ヶ日
 も慶障なく又脏漏も無く済ませたれば定めて亡
 位も御満足にて目出度御國へ行かれました事と
 老夫は存じまする、それにつけても早速に決め
 ればならぬ後の事、彼時亡位の御遺言に老夫
 が御返辭しました故差出がましい事ではござれ
 ど一應所存を申します、御存知通り亡き御人
 は大分此家の爲にもなつた御人の事ゆゑ誰一人
 彼の御遺言に否やを云はう方も別段御座りませ
 まい、さすれば既百ヶ日も今日で過ぐるといふ
 ことなれば一日なりとも運び早く御遺言通りお
 この殿に喜藏殿をば嫁娶せて此家の永く榮ゆる
 やう圖るが何より亡位への供養にもなり此家の
 爲になるといふものでござりまするによつて、
 喜藏殿親分には無遠慮ながら美濃屋夫婦を相成
 らしても苦しうござらぬ、媒酌役は遠縁の仁に
 て誰君ぞ御勤め下されまますや宜しく御談合下
 されまして、成らう事ならば今日一切の内決だ
 けをいたして仕舞ふやう仕度ござりまする、お
 この殿喜藏殿御二人の御料簡は伺ふまでも無
 く、御親父の御遺言なり御主人の御遺言なりな

れば固より御異存は無い筈と存じまする、と一
 同を見渡して角ばつて説き出したる。

其四

猫の額ほどの土もたゞ置かぬ江戸の事なれ
 ば廣しといふでは無けれど、流石に舊家の庭の
 樹立も折合よくて、何時の代の主人の好みにて
 か見どころある石燈籠も立てる坂本屋が裏の方
 に、月まだ出でぬを好き機と忍びやかに語り合
 ふは云はずと知れしおこの榮吉、男の耳に口寄
 せて、ほんに今日あめ美濃屋の御隠居様めが入
 らざる宴の身の上を御遺言々々と御遺言こか
 しに決めて仕舞はうと云ひ出した時は、どつき
 りとして座にも耐らず、徐々と次の間に退り出
 したれ、後の状況も知りたければ、又立戻つ
 て襖越に聞く耳欲つれば、一座の人も少時は母
 様の口を切らるゝを待つて居て何とも答は無
 かつたが、妾は其時母様が何と御挨拶なされう
 かと氣が氣で無くつて踏む足の踵も疊に着か
 ぬやうな、何とも云へぬ胸の苦しき、幸ひ母様
 が言葉靜かに此家の爲を思つて何かと御世話下
 さるゝ段々の御心添ふことに御始しう存じます
 る、然し縁邊の事ばかり義理づきめ利益づきめ
 にもなりませぬもの、當人同士の性の合はぬで

話を頭から氣にせず、母は娘の容貌自慢に、男の容貌が責めては家の榮吉よりも勝れいではと云ふに、云ひ込み多しといへど大概半分にもならで團圓つかす破れければ、讀賣に歌はれ淨瑠璃に仕組まるゝやうな不幸福も起らず過ぎ來けるに、おこの十八の花の盛りといふ年の、春まだ寒くて籠飼の小禽も鳴き渡る頃より、大切の父の病に染て卯の花くだち降り續く中に、老體の助かるべくも無く衰へ果てゝ、我も今は是までなり心たしかなる中に云ひ置くべき事ありとて、親類の誰呼びつどへ、わたくし先旦那に見立てられて此家を續きしより幸福にして掛れば皆ぐだけの報酬を得てこゝまで來ましたれば今さら何の云ふ事も御座られど、心懸りなば後の事、我が亡き後は女ばかり、是非とも婿を取られれば濟まれど、減多な者は入れられませぬ、持參金など多く持つて入り來る者は必ずとも心の確固で無いものゆゑに、決して家には入れられませぬ、容貌は醜く生れは賤しけれど、何十年來此我が試して見立てたものある故其男をば娘の婿に、是非させ度で皆様の御來臨を應々願ひました、おこのも我の云うて置くこと自己が我儘なんぞより決して背いてはなりませぬ、と鐵聲して云ひ出づれば又今更に胸をいゝろかせて

答へもなさず俯伏くおこの、さて其婿とは誰人と皆々齊しく主人の面を轉瞬もせず打守れば、他でも無いが店の喜藏、心の底に強みがあつて、萬般の事に注意細かく、何事にも無し押なせぬ辛抱人、皆様どうぞ御力添して彼をば婿にして下され必ず家のためになります、これを老夫が一生の御頼にして阿彌陀様の御願に随つてまゐりますると、疲れきつたる身を強て一禮すれば女房はじめ親類一同有喜鉢の岩のやうな彼の大痘痕の喜藏めに女雛のやうな此娘をと呆るゝばかり返辭は出す、まさかに生命の瀬戸にかゝれる病人捕へて其は成らぬと義者張ることも出來ざれば何と答ふるものもなく、たゞ茫然たるばかりなるに、おこのは伏して忍び泣くのみ、一室少時音絶えて物淋しくも靜かなりしが、今は遠縁の親類なるが年長的美濃屋の隠居の作阿といふが、さて御道理な御遺言、飽までも此家のためな思つて口頃から御思案になりました事かと存じまして、先代の満足のほども察しやられます、列座の皆様たしかに承はり置きましたゆゑ御安堵なされて猶御心丈夫に御加養なされましと挨拶すれば、凄きまで疲せたる面に微笑を含みて、嗚呼、忝うござりまする、これで、私も先代に冥途で遇つても面晴なとほ

くほく悅びて、其後の明け方、有明の燈と共に腕くも消えて復び言葉の通はずなりぬ。

其三

思ひもかけざる父の言葉におこのは比ふべくも無く驚きしが、驚く間も無く父の逝けるに心また動揺して、初めて知りし死別の悲み堪へ難く、平生愛にあまえて我儘強く折々に御言葉もどきて怒らせ申したる事もあり、勿體なさ、御生命ある中に何一つ孝行らしき業もせざりし口惜さ、願ふ事は必ず許され、望むものは必ず與へ玉はりし其事を許し物を賜はる時の御面貌の慈愛深く優しげに見えて、商賈のわけあつて露はして笑を含み玉ひし有様など想ふにつれて果しなく胸に溢めは、何といふ譯も無くおろおろ涙のみ溢れて物いふ序もあやまちがちに手にもつものも取落すばかり、悲うつゝとも自ら別かで母香を焼けば自己も焼き、母御佛の名を唱ふれば自己も唱へつ、都てたゞ母をたよりて學び、龍旗淋しう先立つて行く葬送の式をも清しけるが、上下ともに色無き衣着てしなしたつき隨へるおこのが其日の風情、紅白粉の氣の無きに憂ひ顔のひとしほ白く、常よりは褪めたれど猶紅色濃き珊瑚の唇固く締め

粗略にはすまいと先を見越しての御利益ごかし
の似而非親切、老父も異存を立てないので此春
態々故郷から出て来て、小生を呼び出し猶撫摩
に利害を説いて行きましたが、小生は返辭も仕
ませなんだ、其後老父のところより人も參れば
狀もまゐり、いよく自己も汝等兄弟二人それ
でれ家を持たせて隠居をしようとおもふゆゑ、
豫ての語に異議が無ければ三方四方の利益にな
ること、早速御主人に此譯を御話し申して御暇
を願ひに自己が出向くとのこと、義理ある母に
生の父二人が二人、やいの／＼と小生へ逼る慈
愛の難題、云ひ逃れうにも逃れう事無く、ぢや
とて濟まないことながら汝と斯様した仲となつ
て微塵も離れて生きよう空は無し、それに其の
連子のお爲といふが普通の奴でも有らう事が、
顔は眼玉が三個も無けれど母に能く似た似而非
賢女の、二口めには義理ぢや道理ぢやと世間咄
の次手にも高慢しやくれたことないふ憎態面、
それさへあるに仇いやらしい眼遣をして、此正
月お暇を頂き一寸家へ顔出した時も小生の身
邊へ何ぞといふと媚びつきたがりくさり居つた
其の堪らなさ、思ひ出しても腹が立つほど、旦那
様の御病氣にかこつけて一も二も無く、今其様
な勝手な事を申し上げられる時では無いと撥返

して遣りましたれば少時經つて同じ事の書狀、
丁度此方から御亡くなりなされたを知らせうと
して居た矢先なれば、それどころの騒ぎでは無
い御店の大事御愁傷の最中、當分そんな事は含
いて下され、と手強く云ひ退けましたで老父も
駈け付けて其折の御手傳ひなどは致しましたれ
ど兎の毛ほども其事は云はず、寝しやと思ふ間
も無く復昨日の傳言、頓て既百ヶ日も御濟みな
されば自己が近々出て行つて御暇の事をお願ひ
申す、此方には口も明かせぬ口上、小生に暗い
事が無ければ無茶苦茶にでも我を通さうところ
なれども、情無い、胸に弱點が有るゆゑに兎角
の思案も挨拶も怯れが有つて出来かれますが、
こればかりでも小生はもう胸をついて居りま
すに、汝の上にもかゝる難儀、畢竟と云へば皆
小生が悪いに極まれど其ないうて今さら何の益
にも立たず、覺悟が互の眞實くらべ、捨身にな
るより他に好い工夫は何とも着きませぬ、四方
八方へは濟まぬながら野の末山の奥へなり、潛
んだとても御日輪様のついて廻つて下さらぬ譯
も無ければ、と言葉急に切々として語る時しも
障子のさらりと明く音しておこの／＼と呼ぶ聲
す。あれ母様の御呼びなさる、と風に別れて飛
ぶ蝶のひらりと退いて然らぬ顔、額を照らす

秋の初十八九日の月の光りに、早速の答の聲清
く、はい、たゞ今そこへまゐりまする、倍り綺
麗な空故に月を眺めて居りました、といひつゝ
歩み近づけば、月は座敷でも見られまする、夜
露が下りやうに庭へ出すとも。

其六

其魂膽は坂本屋の寡婦と鈴鹿屋の主人との外
知るもの無けれど、石菖鉢の岩のやうな喜藏は
酷くも體面のみ好く坂本屋の店より追ひ退けら
れぬ。遺言は心神亂れし父の言葉の非を果すの
は却つて不孝なりとて唐土とやらの孝子が用ひ
ざりし例とに依つて反古とされぬ。羊羹屋の
隠居は親類一同の意見に逆らうても甲斐無けれ
ば強て我も立てず手を退きぬ。これにておこの
が身の上の黒雲は無くなりて榮吉まで悦喜する
間も無く此度は榮吉が頭の上に吉星光が放つ
て、故郷へ歸らずも濟むやうになり、似而非賢
女を妻にせずとも濟むやうになり、落人になら
むとせしものが打つて變つて坂本屋の花婿とな
る始末、當人とおこのとは云ふもさらなり榮吉
が老父は涙を溢して悦び兄は躍り上りて悦
び、江戸と浦和在との間に人の往來繰る如くに
して、遂に其年冬の十月黃道吉日、花燭の輝

折角結んだ縁組の解けて仕舞つて、男は兎に角、女は一生廢りものとなつて終るも世にある例、彼の時の御遺言と云ひ、又其場に片相手の喜藏も、席末に小くなつて聞いて居りました事ゆゑ、何様御遺言を反古にはなりません、何日かはおこなを何とか致されば済みませぬが、夫にしても當人を能く納得させました上で無ければ叶はぬこと、能く妾が當人に申し含めて心底をも十分明らかにしてからでも左のみ遅いと云ふでは無ければ、此御返事は其時まで少時御預り申して置き、何れ近々御宅へ伺ひ又御相談願ひませうと理の當然を云うて退けられたので、彼の世話焼の御隠居も口を噤んで仕舞うた様子、妾は眞實婚して家の母様大明神と蔭で拜んで居たものの、其から皆様御歸りになる時、汝も知つて居る平時から母様の御最良になさる鈴鹿屋様だけを達てと母様が御引止めなされ御居間で何か御話し合ひ、おこの汝は他へ行て居よとの御言葉に聞く事もならず、濟まぬ事ながら氣にかゝれば私と立聞をして見ても御聲が低い故聞きとれず、たゞ氣の迷ひか鈴鹿屋様が妾の名をば折々言ふやらちらく耳に入るばかり、多分は矢張り妾の身の上、若し御談合果てた後は母様の前へ呼び出されて妾は何様い

ふ御談をされようも知れぬ今の場合、あれ彼の中の文は映らず、父様よりも平生から可愛がつて下さる母様の事ゆゑ正可に無理は仰やるまいと心頼みにしては居れど、御遺言と云ひ家のためといふ廉といひ美濃屋の御隠居家の喜藏への義理といひ若し萬一喜藏めに縁を結べと仰やるまいとも云へぬ仕儀、何程可愛がつて下さればとて汝との中は明けては云へず、豫く約束した通り妾は強情張り通すが昨日汝の故郷から來た使の人は彼は何、若しや何日ぞや云うて來た故郷へ一旦立戻つて浦和とやらへ世帯を持って其催促の語では無いかと妾は心配する、汝は妾に隠して云はれど世帯を持てとの話のあることから見れば汝に見合はす嫁御の心算まで必ず無くてはならぬ筈、汝も其を知らぬ筈は無いに妾に隠すだけ他人おしひが水くさい、妾は此様に苦勞して居るのに汝は胸の中を妾に割つては見せないとは餘り情の無き過ぎる、と人目恐るゝ立話の中にも縛れつ縛れつ口説罷るが戀の癖なり。

其五

男は女に怨言を云はれて、左様仰やられて

は小生が何か不實のやうにも聞えますが其れどころではござりませぬ、云はすに居たは悪けれど小生の今の心配は汝に増すとも劣りはせず、知つての通り小生と兄との兩人の生の母といふは小生が出来るかと顧て亡くなり、今ある母は皆経て後娘一人を連子に入つて來ました似者非賢女、世間に能くある繼母とは差つて小生等兄弟を酷く待遇すやうのことは些少も無けれど其は表面、内心云へば自分の兒ばかり好かれと思つて居るなれど何せよ女の事なれば家を取らせよう計畫も成らず、それゆゑ事無く濟んで兄は嫁さへ三年前に親類内より取りしほど、追付父も家を譲つて隠居をするに決つたところ、小生も此家の御蔭で一本立になつて仕舞うて自分で別家する日には繼母殿は斷の腹で父に冥途へ行かれた後は那方向いても生さぬ子にかゝつて月日を過すより他に身體の遣り場も無く、自分の生したは女なれば何様なところへなりとても縁づける仕方の無いので、それでは自分の行末が樂み無いと思つてか自分の連子の其娘を無理に小生へ押付けて、小生に浦和へ雜穀鉢を出させうといふ腹の思案、左すれば小生も財産を母の助言で少からず分けて貰つた義理と云ひ女房につながる縁といひ、必ず自分を

く入り来るを何ぞと見れば其狀猫の如くにして
鋭き角ある名を知らぬもの、あなやと驚く間
も無く一つはお須磨を爪にて爬き一つは榮太郎
を角にて衝く、喚ばむとするに聲出すして、彼
方の長閑に歌ひ笑ふ聲のみ耳に聞ゆる利那、心
の中は四苦八苦、立たむとすれど足腰立たず、
やうやくにして辛くも呀と、一聲叫べば俄然と
して我に歸りし破屋の中、ありしは往時、覺む
ればたゞ今の今まで絲を抽き居し紡車の手な
とりしまゝ目睡み居たるものと覺しく、人さへ
何時しか座にありて、オイおこの殿、目が覺め
たかえ、自ら好いての難行苦行、夜の目も寢
ずに絲を抽るに聞いたが其の疲れと見えて未だ
日も暮れぬに愚老が來ても知らないほどに睡り
込んで、榮華の夢でも見て居なすつたか、乞食
の夢の二の膳つき、さめたら悔しく淋しい事だ
らうよ。

其八

思はぬ惡夢に驚かされて心地好からぬさへあ
るに、顔見ることも厭はしき宗安といへる數醫
のため皮肉の言葉聞かせられて、返辭なすべ
き力も無く、悄然として四圍見廻し長太息つく
つく身の冷汗を拭ふばかりおこの風情、倅

のみは往時を残して妻れても猶花の香の全く無
きにあらぬに似たれど、幾何の辛さに愛さに老
いて貧に勞苦に寢れたれば美人の末路また悲む
べく、肩膝透きたる衣寒げに、心見ゆるまで嚙引
きたる帯は宛然繩の如く、たゞ一條の脱毛にさ
へ眉を皺めて愁ひたりし其黒髪も油乏しくそそ
け立つて、鬢に霜こそまだ犯され絲抽く綿の纖
塵の雪、元結埋むるばかりに積れり。されども
天の龍翼か否か眼の光りはまだ麗はしく頬も醜
きまでには瘦せて、澤は失せたれ、焦げ黒まざ
る面の色は何一つ汚れぬもの無き貧家の中には
似合はしからず白くして、磨かば今にも璧と輝
るべく思ひ遣られ、彼様して居てさへ三十四五、
六とは越さじと見ゆるものを、顔に剃刀、髪に
油、二子織でもよし新しき衣、綿入りでもよ
し黒繩子の帯と身の周圍をばつくらせなば、三
十越したか否まだ賤と見る者の眼を迷はせやう
に、惜しい女を貧が腐らすと村の者の評するも
無理ならず、來年四十の坂にかゝるものと見え
えぬ女振り、今しも言葉少時絶えて往時の追想
目前の愁ひに沈みて惱める態、汲めば汲むべき
可憐さあるに、流石情を知らぬ男も熏らす煙草
の烟の中より惚々として覗み居しが、心づきて
や爐の縁にがちりと煙草管の音させて、急に下

眼に此方を見下し、他にばつかり口をきかせて
何時まで何を考へ込むのか、寢はれずに能く聞
いて貰はう、他でも無いが過日も催足なした此
春の汝の亭主が病氣の時飲まして遣つた彼の藥
代早速と勘定して貰はう、千住へ遣つた娘の
許へ手紙を遣つて頼みます故、返事の來次第必
ずとも何とが御挨拶致しますと云ひ出してか
ら既一ト月、返事は來ないか、それともまた出
來ぬと云つて來たといふのか、手紙の肩かぬ管
も無く、肩げば返事の來ぬ理も無い、親が娘へ
頼む無心、而も親父が病氣の藥代、厭だと言
を振り様も無い、來たらば早速と遣して來れ、
何程醫者が仁術でも藥代取らずに濟ますもの
か、あのものので胡麻かしても左様は行かれ
え宗安様、是より骰子を把る日が多い村中御存
知の惡たれ者、風邪でも疎に人のかゝらぬ我の
藥を貰つたが其方の不覺で少し位高くなつて
もまあ仕方が無い、此方は取らずには置かない
から何様でもして早く遣すが好い、醫者は平凡
だが其代りに毒はさつぱり盛らなかつた。亭主
の死んだば乃公に代つて後引き受けた醫師の所
爲だに、其醫師めには診察料まで拂つて乃公に
は藥代まで拂はぬといふが癪に觸る、無理は些
も云はないぞ、醫は仁術の乃公さまの言葉に非

き愁の闇を破つて思ひ思はるゝ同士天下晴れての夫婦とはなりぬ。在郷者でこそあれ榮吉が親も土藏の二タ戸前三戸前有てるものとて支度萬端隨分張り込ませたれば坂木屋の婿としては四圍の見る眼も取かしからず、媒酌人は學問ありて口利と人々も一目置く鈴鹿屋なり、坂木屋が親屬一統、美濃屋の隠居を除きては皆欣々として、幾千代かけて榮ゆべしと無性矢鱈に悦びぬ。近隣ではお染久松の演劇も見る事叶はて口あんぐり、え、彼の粹な母親めが定めて若夫婦に閑の中でまで狀様大明神大明神と拜まれて居るであらう。

鈴鹿屋が譚の分つた話の仕方、母親が子に思ふ慈愛の處置に、千秋萬歲萬々歳、めでたしめでたしと決着はつきぬ、さて是からがどんなものか、以上は發端、談話の拾鐘。

其七

生死の岐れ路と人の云ふ産の苦も事無く済みて生聲清く高らかなるを聞くに頓て家内中賑はひさゝめきて男の御子様御子様と呼ぶ聲の耳に入れば、おすまを生したる時とはまた異りて嬉しき骨髄に浸み透るやう覺えしが、産の褥の中の日ば立つに遅けれど今日は既七夜なり、一

家の男女皆いそぐと笑を含みて立働く中に日頃出入の彼誰さへ交りて家の内に歡びの聲絶ゆる間無く、座敷には賀儀連べにと一門の敷を盡して美濃屋の若夫婦鈴鹿屋の親子三人を首に滑稽家の尾張屋兵六、馬鹿丁寧の伊勢屋平三、才覺自慢の山城屋三之助、お心好しの大和屋、三人前と蔭言いはるゝ其女房の饒舌なお鈴、紙屋の仙花堂、木綿屋の河内屋、などより主人が俳諧の師の雪外宗匠は我が花の先生の一枝軒老人と連立つて來り、御取れ醫者の達竹老、長唄の御師匠様杵屋お六其娘のお花様に至るまで招きし客招かざりし客合せては凡そ何十人なるべく、後には産婦室と座敷との間の幾度か往復して彼方の様子を悦ばしげに一々告げし氣に入りの婢のお銀さへ疲れてか唯もう大層に御賑やかに御寄り遊ばしましたと云ふばかり、山も出来るほど贈物を受けて羨も挨拶に骨が折れるやうなつたと母親が一寸來られての御話、蒸般見聞に嬉しからぬは無し。時立つほどに酒も程よく巡りたりと思はれて彼方とは幾室か隔たれど人々の歡び語る聲高くなりて御師匠様が物の音達竹老が調聲聲其の他まで一つになつて此方に聞え、主人が欣々たる顔つきも想へば眼前に見ゆる心地す。小心が大切と覺えたれば

靜かに總領娘のおすまが大人しく我が傍去らぬを相手にして譯も無き行儀の事など語り居るに、幼心に弟を持しが嬉しくてか時々嬰兒の寝顔を覗き込みては笑顔として、母親、妾はもう是から此兒の姉妹になつたのねえ、ねえもう妾は姉妹なのねえ、などと霞顔になつて云ふも可笑しく、おもう汝は姉妹になつたのゆゑに足からは猶おとなしく仕なければ此嬰兒に笑はれますと云へば、合點の行きたる態して、それで乾度、おとなしくして、晩から祖母様に抱かれて寝ても泣きませぬから、赤い簪兒の大きいのを母親姿に下さいましと請求る素振もいと興あり。あゝあげますとも、銀に左様いうて綺麗なのを澤山汝に上げませうと云ひつゝすやゝ睡り居る榮太郎をばつくゞ見るに人の言葉に露若はす眼元元妾を其儘、またお須磨をばつと見るに似るとて斯様も似るものか夫の顔に瓜二つ、耳つきまでも其の父そつくり、此方を見る眼の涼しさは、抑まだ晴れて夫婦とはならざりし其幾年か前、男の爺の十代の時に宛然異ならず。お須磨や此處へと磨けば、あゝいと答へて寄らむとする時、乳母のお親がけたまはし何が叫びて横明け轉ぶが如く逃げ込む途端に、追ひ駆け來りし異の態、欠よりと馳

りをして直に六三様が家の收穫の手傳にまゐりますから晩には屹度少しなりと御米を貰つて歸りますると、十二や十三の小さな胸を痛めて日毎に艱難辛苦、見すく此頃は瘦せて来るほど、斯様いふ運命の中ゆゑに御恩になつた薬代もあげたいと思はぬではなけれど今が今では上げられませぬ、此處をば何様が汲み分けて娘の許が返事の来るまで少しの間御待ちなされてと裾にとりつき泣いて頼めば、突立ちながら梯を咀み咀み空噓ぶきて取り合はず、頼て此方へ振り向きさま核二三ツふいと吐き出し、待てない、待たない、乃公が困る、然し汝や榮太郎の話を聞けば滿更乃公も憫然だと思はぬでもない、然しそれほど云ふのなら乃公も困らぬ汝も困らぬ分別があるが話して遣らうか、いや待て是も無益だらうよ、無益な話はせぬがよい、汝は勝手に困りなさい、乃公は汝に困らせられる所以が無いから承知が出来ぬ、さあ早く金を遣こせ、無いでは濟まれえ濟まされない。

其十

言はむとしてまた口を噤みし宗安が語の調子に、畢竟は面白からぬことと察せしものの、右を向いても左を向いても足を出すべき路無き折柄

たゞ一條の行くべき方を認めし思ひなせるおこのは、如何なる事歟と聞きたくもなり、而て少しく和らげて、妾も助かり汝にも都合の好くなる分別とは何んな思案でござりまする、何様にも斯様にも動きの取れぬ女一人に見一人の今の妾に出来る事なら、苦しいことでも厭ひませぬが、何故聞かしては下されませぬ、話を仕かけて半分で無益だらうとて廢めずとも一應云うて見て下され、聞ての上での妾の料簡、ではござりませぬか宗安様、と云へば宗安鼻の端を少し皺めてせうら笑ひ、聞ての上の妾の料簡、フ、其料簡が人がまし、何も小癢を云はずともよい、其御分別に就きまする、何様か宜敷願ひまする宗安様と云ふのならば、聞かせて遣るまいものでも無いが、と飽まで恩を被せての言ひ草、兎に角聞かむと笑を含んで、先それなら其御分別に就きまするとして宗安様何様か御知らせ下されませ、と下から出ればいよく高ぶり、ム、先といふ言葉だけが何だか少し妙で無いがそれほど言ふなら聞かせて遣らう、苦しいことでも何でも無い、此分別に就きさへすれば汝も浮み上るといふもの、今の苦勞に引かへて滑りな仕さうな備後表の疊の上に絹布ぐるみで儼然と構へて居られる仕儀だ、他でも無いが

彼の勇造殿、嗚には三年前に死なれて田地田畠何一つ不足が無いが老朽た齡でも無いに唯だ一人、何様や汝に氣がある様子で何ぞにつけては汝の爲に力も出せば金も出し、汝の事といふときは眼を鰐にして耳を兎にするのは傍から可笑いやうだ、定めし汝も馴合で男も持った粹の果、大方察して居る事だらうが、何と一番若やいで彼の勇造殿に縁付かないか、此乃公が口をきけば先方はもとより二ツ返辭、それを疑ふ事は無い、何様だ左様すれば乃公は固より藥代も取れる祝儀も貰へる、汝は一日夜晝かけて果無く廻す紡車、鼻の孔まで綿の塵で埋めて鰐鰐排いでも高が五百が一貫しか取れぬ地道の勞働をせうより餘程身も樂で、云ふ目の出よう云ふものだ、玉なら琢ぐが可いぢやあ無えか可惜持った美貌を埋めて垢穢の中から顔を出して居るのは餘り訝えない業だ、亭主が死れば二度の縁を何處から非難が打てるものか、位牌が出刃でも振りばしまし、當世信女は朱を入れないで白粉傅けるが流行物だわ、な、左様しなせえ左様しなせえ悪いやうには仕てやらぬ、と辯にまかせて説きつけたたり、さてはと合點する事あつてや、おこのは怒に身も慄ひ、え、汚らばしい、好い齡した婆を執へて再縁よばばり、

道なことはあるまい、さあ出して呉れ、遣して呉れ、是から米川の裏山の勝負に出掛ける資本にするのだ、何だと今は出来ませぬと、惡たれものの宗安様だぞ、甘く見くさると唯は置かぬぞ、なに、何様が御情にだと、へん、おなざけと仁術と一所にされて堪るものか、御仁慈は當世何處でも賣切れ申し候よ、仁術で藥を遣つて御仁慈で藥代を免しては仁術が無錢になるから乃公は嫌だ、さあ拂つて呉れ、達て出来ずば酒を飲ませて呉れ、と坊主頭顱を振つて云ふ此漢少しく馬鹿と見えたり。

其九

無禮不法の数々盡せる宗安が言葉も女一人と侮ればぞと我身の甲斐無さを啣つと共に口惜しくもなれど、云ひ破るべき術も無き今の境界の悲しさ、鹿手袋では誰に遇うても頭を上げさせぬほどの家柄の末が斯まで村内の破落戸に見下げらるゝかと思へば亡夫も定めし恨めしかるべしと、今日しも心ばかりの物供へし佛壇の方を打見やるにも溢れ来るものは先づ涙にて、眼前に立つは已往の事のみ、男はと云へば村の束れもせしものの家の統に生れ、妾はと云へば一寸の土も黄金になる江戸の草分の家に生れて、

互ひに何一つ置しからず生活せしに、人の詭計に罹るやと思はぬ禍災に逢ふやらして此の貧の苦みは何たる事ぞや、親切らしき勇造殿の世話に任せて亡き夫の病氣の最初に頼みたる醫師は誰あらう此の宗安、初手に羽織も着て来り、道理らしき切口上、殊勝な顔して脈を取りしが、夫の病氣は重るばかり、癒りさうにもせざる故苦ししい中の無理算段、娘が健氣な志に才覺し出した金をもて浦和から招んだ御醫師様に診察をして頂けば、此宗安めが盛つた藥は役にも立たぬ風邪藥、病氣は昔時の癆症とて今では肺病といふ難病、空しく診察届かざるより既手後も大手後となつて望みも無しとのことに、此宗安めが憎いやら勇造殿の恨めしいやら、云うても其處では還られば、無益と聞いても神の力人の力で若もやと療治を頼みし甲斐も無く、遂亡くなられたは先々月、四十九日の今日の今往時の夢をまざぐと見て唯さへ泣きたい其矢先此宗安めが雜言過言、夫を殺せし同然の其藥すら腹立しきに何を用ひしかは知らず言葉に絶たる高い藥價、段々聞けば一昨年頃より新開村へ流れ込みし素性も知れぬ渡りものと歟、此様な奴めに頼みしが此方の不運といふものの勇造殿が恨めしいと腹では右に左に

と想は馳すれど口には出せず、世馴れても猶世を豊に送りしものの餘習として氣の弱ければ半句も吐けず、頭を下げて唯ほろろと口惜し涙にくれ居るさま野分に折られし花力無く露を溢すが如くなり。宗安これに氣を焦ち、えゝめめそと能く泣く女だ、挨拶する敷と思つて居れば算が啞か人形か、咩とも寸とも云ひくさらぬ、あゝ退屈したゝ、さあゝ返辭をして貰はう、飲んだ藥をたつた今出して返して貰はうか、それとも錢を貰はうか、藥を返すか錢を出すか、さあ何様したのだ愚圖々々するな、愚圖々々する中壽命が減るよ、あゝ退屈したゝ、と云ひつゝ四方を見廻して縁の取れたる折敷に乗せて小さき柿の佛前に供へありしを見つけ出し、や好いものが上げてある、柿買ふ錢はあつたと見えるな、何も亡位が白骨になつて柿をば食ひも仕まい、此奴を饗應にでもなつて汝の返辭を待たうかとそのそゝ立ちて鴛鴦みにすれば、餘りに腹立たしくて、えゝ惡巫山戯をなされますな、今日は亡夫の四十九日、何仕度にも仕様の無い悲しい中で彼の榮太郎が孝行心、年端も行かぬに野山を涉獵つて漸と探つて来た少しの木の実、母様これでも亡父様に御獻なされて下されませと、今朝暗い中に妾へ渡して、これから御墓参

く二重抵當を仕たに當つた詐欺同然、汚名を受ければならぬ始末、そのみならず汝親子が長く憂き目を見ればならぬも公邊の法ゆゑ退引ならず、私も其では餘りと散々苦勞心配したれど法律といふ者も知られば好い分別は逆も出す、困つて困つて困りぬいたところ幸ひ法律に明るく人の浦和から來たを好い機會と、無理に頼んで汝の思案私の思案も縋ひ錯に好い相談をつけようとして連れては來たが汝の家へ他人を招くも餘りゆゑ、彼の村盡頭の鯉屋へ入つて一寸待つて居て貰ふとして、汝をわざ／＼呼びに來た、日も暮れかゝれば榮太郎も追付歸つて來るだらうし、取られるものは何もあるまい、私と一緒鯉屋へ來てよく相談を和熟させう、榮吉殿の死後の名を全くするかせぬかの境、汝の愚圖愚圖する時で無い、直と同道して行きませう、と手を取るばかりに急きたたり。

雲の袖

其一

齡はと云へば十四なり、骨格はと云へば太く逞しからぬ方なり、容貌は美しけれど膂力は乏

しく、智慧は賢しきも經驗無ければ、如何ほど貧に慣れ世に揉まれたりとてまだ一人前とは許さるべきならねば、村第一の家柄の末なり、村第一の美女の子なり、村第一の薄名の者なり、村第一の孝行者なり且つ村第一の美少年なりと云ふに人々の憐みも深く思も厚くかゝりて、彼で済むことならば同くは彼にさせて一升の米なり一貫の錢なり取らせて遣れと誰にも可愛がらるゝまゝ、二日も遊ぶ日とては無き榮太郎、自身も父には離れて、野仕事のため屋敷き母と二人限りなるに、幼稚ながら一生懸命と働らく甲斐々々しさ、徒跣に亂髪、何處も彼處も塵埃まぶれとなつて汗拭く間無く馳廻る様を見ては、他の女さへ子を有つたるは、其心根がいぢらしいと大抵袖を濡らすが定なり。今日は亡き父の正當四十九日、零落果てすば斯く／＼すべきものぞと昨夜母に聞けるに、殊更未明より起き出でて野の花幾枝樹の果幾顆を式ばかりに家廟へ供へて、墓へも参り落葉をも掃ひ果て、直に其より豫て頼まれたる六三爺がところへ來ての大働、朝より暮るゝまで六三が女房のお萱婆と共に立列んで、稻扱の前に腰の痛くなる骨折をしながら、時々お萱婆に我家の往時は榮え富みしこと、我母の往時は天人ほど美しくて

鳳凰ほど立派な衣裳も着たことありしこと、母が江戸より持つて來りしといふ象牙の内裏簾には某年の桃の節句お萱を始め村中の女等魂を消して驚きしといふこと、我が姉のお須磨も我も我が五歳六歳の頃までは美衣着て花より綺麗に玉より光り輝きて生長しこと、我が父の村第一の善き人なりしことなど話されて、皆までは眞實と思はれど、そゝる心に往時戀しく、それがまた何として臺所には片耳とれたる鍋、母様が頭には束の缺けたる木の櫛の現時の狀とはなつたる歟合點行かすと疑ふのみ、別に質しもせざりしが、仕事の全く果るに及んで、定め通りの米一升の外にお萱より味噌漬大根の眞黒なるを二本貫ひて、躍り上るほど打悦び、秕の散りしところだけ未だ暮れ残りし地の上に頭を付けて、またどうか御手傳ひさせて下されませと言葉を遣して歸りすがら、定めし母様の待つてならむと自然と足も早め勝に家へと指て戻る道の左に庚申塚も見えたり、こゝより畦路わづか一丁、既家の中も同然と闇を探つて家に着き、母様たゞ今歸りましたと云へども更に返辭なし、母様榮が戻りました、母様、母様、母様と一段一段聲高くして呼べども更に答なし。眞暗なるに燈火は無し。胸は忽ち鼓うちぬ。悲し

ことさら人も有らうのに勇造殿は縁者のこと、
其様な戯けた事が成らうか、え、無益しい、
もう聞かせませぬ、と斷然云へば彈かれて、宗安
躍起と膝立直し、よし、それならそれはよい
が、乃公が藥代は何様して呉れる、さあたつ
た今拂つて呉れるか、藥をこゝへ出して呉れる
か、さあ、何様だ、愚圖々々するなと退引させ
ぬ矢筈掛短兵急に責めたてられ、心もしどろ氣
も惑亂、何と答へも泣くばかりのところへ戸外
の方よりして、其藥代は乃公が遣る。宗安待て、
と云ひながら、すつと入り來し大の男、誰ぞと見
れば鬼鎧仙の生命知らずといふ綿入、香玉とか
呼ぶ地太の羽織、足響かしてのさり／＼と歩む
風情に幅を見するが、見るから憎き勇造なり。

其十一

今宗安の話なきとて底氣味わく思ひたりし
其勇造に入り來られておこのは愈々心よから
す、面を外向けて言葉無き其に引替へ宗安は急
につくる空笑ひ、へ、これは旦那様、旦那がお
いでにならうとは些も知らずに飛だ幕を出して
居るところを御覽になられて、へ、面目次第
もござりませぬが、何も私だとて好んで婦人を
苦めつけるではござりませぬ、餘り蟲の好い事

ばかりを云はれるのでつい業腹紛れ、思はぬ毒
口もききました、醫は仁術でござりますれば斯
様まで云はすと可いのですが、私も随分苦しい
ので、と露れかゝる膝血を衣で顔に掩ひなが
ら眞面目になつて述べ立つれば、煙草管へて
長閑氣に聞き居し勇造皆まで云はせず、好いわ
宗安、細事云はすと金さへ貰へば用はあるまい、
何程だ、何だと、九兩餘だと、それ十兩遣る、
端錢は呉れる、と財囊探つて投げ與ふるに、其
を汝に出させてはおこの云ふ間に宗安は既
懷中へと振込んで、旦那眞實に済みません、へ、
御寛りとなされませ、それならおこの様汝の方
は既済みしましたで、藥代は慥に棒をひきます、
取れ無い錢の思はず取れたも旦那の通つた御捌
き故、へい旦那様有り難うござります、おこ
の様左様なら、と云ひつゝ外へ立出で際勇造と
眼を見合はして何やら顔を一トしやりなし、
其儘遂に歸り行きぬ。談話途斷れて男も語らず
女も言はれば室の中は少時極めて寂然となりし
が、目前危急を救はれたるに底意は何か知らざ
れど兎に角謝禮は述べねばならずと、彼宗安め
が醫者に似合はぬ無慈悲な掛合も理の當然ゆゑ
答へさへ出ぬ必死の場合を御救ひなされて下さ
れたで妾は漸と生きた心地、御禮はいうても盡

きませぬ、今が今では此御恩を速も御返し申す
ことは出来かねますけれど必ずともに一生忘れ
はいたしませぬ、とおこのが折目正しくする其
挨拶を打消して、謝恩を望んで事を仕ようか、何
のこれしき、頭を下げるは廢にしてくれ、其は其
にして置いたところで、此は此にして話されば
ならない大事の起つたにより、今日は態々遣つ
て來たが、苦勞に苦勞を重ねて居る汝にかゝる
又一ト苦勞、聞かせる乃公さへ辛いけれど聞て
貰はればならぬことだ、と頼母し氣にも心配顔
して云ひ出るにぞ、此方は新に驚きて、抑何事
かと胸を躍らせ、してまた其は何様いふ事と進
んで問へば彼方は急かす、他でも無いが榮吉殿
が分らぬことを仕て置かれたで何とも今は困
仕儀、定めし綾のあつた事で此様いふ事を仕て
置かれた譯でも有らうが今となつては問ひ談合
もする事ならず、たゞ當惑をするばかり、と云
ふは汝も薄々知つて居ようが私の方へ去年の冬
に抵當に入れたさつた八反ばかりの僅の畠が、
不思議な事には白幡村の茂平次殿にも抵當とな
つて幾千か借りてある由、私の方が先口ゆゑ訴
訟になつても私が損をするといふ譯は無いな
れど、私の手に是非入るべきものと云ひ張る日
には、茂平次殿から金を借つたば、榮吉殿が全

始終を語り出しぬ。此方はもとより再三再四問うて告げられざりしこと、遺失無く聞きて自己が方に及びますべき事ならば何かは知られ母の憂ひを除かむものと耳を聳つれば、憤に震ふか恨に震ふか聲さへ母は打震ひて、あゝ聞かすでも無いことと忍耐は仕たれど妾だけが辛い目受けて済むことでも無ければ話して聞かせまするが、必ずしも亡くなられた御父様やまた此妾を甲斐無いものと恨んで御呉で無い、今日あの醫師の宗安めが来て例のやうに藥代催促、汝も知つて居る通りに御父様も亡くしたば畢竟彼めが仕たやうなものであれば、藥代を遣らぬといふでは無いに、此方の手詰りを知りながら無理無體な苛催促、云譯しても聞て呉れず、困りぬいた其のところへ勇造めが不意に出て来て、情らしく立替て呉れたばよけれど其後で語るを聞けば御父様が一つの地所を勇造と茂平次殿と兩方へ八重抵當に入れて置かれたとの云ひ分、よもや貧に逼ればとて八重抵當は公儀の御嚴禁、まさか其様なことをして置きはなされまいと思へど此方に證據は無し、先で加之も親切らしく、其については浦和から法律とやらに明るい人の來たを幸ひ頼み込んで鯉屋に連れて来て居れば相談せむため鯉屋へ來いと妾を急

に急立て、連れて出たのは畜生めの民、妾は二重抵當と聞くより何の分別も無く、絶れるものなら勇造に絶てなりと頼み込んで、何卒亡位様にも惡名つかず丸く済むやうにと思ふばかりで連立へ行けば、鯉屋には別に待つて居る人も無く、不審して問へば今一寸外へ出られたのであらうほどに少時待つてといふ傍、酒を取るやら肴を取るやら、胸に充滿苦勞のある妾を捉へて飲めの干せとの五月蠅猪口を突つける仕儀、少しは勃然として來たれど何彼につけて世話になり殊更これから又世話になる身と思へば忍耐して厭々ながら相手になれば、増長してか悠々と何時まで経ても酒事ばかり、折に觸れての言葉のほしには妾に對つて有るまじき惡巫山戯なをいふ始末、往時であつたら一言に赤恥かせて遣らなれど、侮られても腹の立てぬ弱味があれば下手に出て優く受けて居る内に、酒の段々廻ると共に聞くに聞かれぬことを云ふより、妾も堪忍なりかれて、厳しく一言云うて退けたれば、大分立派なことを云ふの、と氣味の悪い言葉を前置にして、露して来る狼ものの本性、實は法律を知つた人とは此勇造の事だわやい、乃公より他に汝の亭主が仕て置た不埒の其尻を收結めることの出来るものがあるものか、

氣の毒ながら榮吉の亡者に此世の罪を被せて汝等母子を泣かせようと又汝等を助けようと此乃公一人の胸にあるのだ、罪過は其方で仕出した事、親切づくで言つて遣つたも其方が左様いふ理窟押を立派に云ふなら此方でも人情は無い理窟押し、出るころへ出て埒を明ける、だが左様しては花も實も無い、これ無心に水心、惡くは仕ない乃公の云ふ通りになつて居たがよいと、羞かしい、此妾に對つて厭らしいことを云ひかける憎さ、埒破いてもやりたいほど憎けれど此方の弱點につけ込んで慈悲と脅迫の兩面ぞめ、悔しいばかりで返辭は出來ず、妾は口を嚙んだ限り一言吐かず黙つて終ひ、ちつと考へを凝らしました。

其 四

思へば、時を得たとて、勢に乗る人で無し、の、元彼の勇造といふ奴は汝の御父様の出られた家に兒童の時から使はれた身で、汝の御祖父様の御慈悲ゆゑに御父様の義理ある妹同然のおため殿といふものの婿にせられたのなれば、云はば本來は家從筋、落魄ても此方は主筋、汝も知つて居るおため殿、彼人はまた御祖父様の眞

き聲にてまた一ト聲母様と呼べど猶答なし。引火奴を捜して爐へ手をかざすに爐の火は全く種も絶えたり。身體は忽ち寒さを覺えぬ。辛くもマツチ木に火を點けたれど室の中には紡車の淋しく靜に残れると家廟へ供へし少しの樹果を誰が食ひしにや其核子やら心やら其邊に狼藉たるとあるのみに異狀も見えず、茫然として燈火を手に、たゞ顧みて我が影の破れし壁に映るを見るに影は劇しく震ひ動けり。

其二

平生かゝる例は更に無かりしに何として私にも告げず母上の外へ出られしぞ、急用ありてか人に連れられてか、別に急用の有る筈も無く、母上を連れて行くべき人の有りとも思へず、何も彼も其儘にして出で行かれしは豫て心構へしてにはあらざるべきが、などと迷に時を移すに従ひ兒童ながらも覺束無き分別を様々に逞らしけるが、毫の合點もゆく由なければ空しく立つ坐りつして心を煎るのみ爲む術無し。所詮待つても甲斐無からむ五兵衛殿にも權兵衛殿にも告げて思案を借らむものを、と憂ひの涙に眼も昏く、草履つまかけ走り出むとする時、外よりはたはたと人の駆け来る足音して轉ぶが如くに入

り来るものあり、それと此方は早くも見て、お、母様か案じましたと、迎ふれば又彼方にも、あゝ榮太郎かと云ひさして、氣息も絶ゆげに框に腰掛け、胸を摩りて安堵の體なり。見れば髪さへ甚く亂れ、顔面の色は青ざめて眼の光り平常とは異ひ、地を履むことを何よりも氣持悪がり玉へる身が、脛も露に跣足なれば、必定何か仔細あらむと新に起す又一ト心配、洗足の水汲み来る間にも何事ならむと案じける。時經て榮太郎は、爐に火も熾り茶も沸きたればと夜食ごしらへ、常ならば母も手を添へらるるなれど、今宵はものさへ言ひ玉はず悄然として坐したるまゝ身動きすらも仕玉はざるは、よくよくの苦勞に氣を奪られ玉へばぞと皆一人して萬般働き、頓て膳をば直しけるに、妾は物も欲しうは無ければ汝は先に食べるが好いと左も懶げにたゞ一言、御腹でも痛うござりまするか御氣分が悪うござりまするか、と云へども答へて頭を掉るのみ。是非無く榮太郎は夜食を終り後片付も手早く済まして、母の機嫌を伺ふに、首うなだれて兩手を膝に重れたるまゝ眼さへ閉ぢ、死せるが如く靜に坐れり。先の程より今や口を開いて何とか胸の中を告げらるゝか、今や有りし事どもを

斯く／＼と知らざるゝかと待居けるに、前村の鐘の音かう／＼と聞えて夜はいたづらに更け行けど遂に何とも云ひ出さぬ母の心中推しかれて、如何はせむと躊躇しが、五月蠅すれば何に寄らず眉を擧めて厭ひ玉ふ癖を知りつゝ二度三度問はば必ず例のやうに厭はれむのみ甲斐あらじと孝子の一心居睡りもせず、同じく靜かに坐し居たるはさりとてはまた衰えたるに、此淋しさを我物顔の鼠憎しや物咬む音させ、頓ては壁の隅の孔より、ちよろりと出て人の前を突と走りて行く音するに、矢よりも駛く畜生ツと鋭き叫の一聲の母の口より發せしかば、愕然として似氣無き事と母の面を仰ぎ見るに、涙は緒絶えし珠と散りて、唇きつと咬みしめつ、眼ざし凄く無きところを睨み玉へる其風情、たゞ事ならず思はれて慄然と身の毛もいよ立ちぬ。

其三

思はず放ちし一ト聲に自己と驚きたるおこのは吾が兒の手前もはしたなしと思ひ返してぢつと堪へば堪へけれど、男兒と違ひて女の情の脆くも遂に堪へかれて、假令云ふとも益無しとは知らぬにあらねど、案じ顔せる榮太郎に一部

口惜しいが何様とも出来ぬ、お父様といひ妾といひ随分人に慈悲なかけた事の無いでは無ければ、段々世間を渡つて見れば人は狗より頼母しく無く、恩を知らぬが伶俐のやうに思はれも思ひもする浮世、假令ば今の必死の場合を泣て告げても左様ですかと鼻であしらはるゝは知れた事、誰一人往昔の好誼を思つて呉れるものがあるまい、妾が本町に居た頃は使つた男女も何十人、それが恩でも返さう事が、少しの此方の油斷を見れば皆自分だけの徳を計つて主人の藏に穴を明ける鼠同様の振舞をするばかり、汝の生れた其時なぞは此村の寺なんどの廣さよりはまだ廣い家の中に一家親類出入の者まで人浪立つほど詰め込んで潮の湧くやうに賑かだつたが今音信を通するものは全然有りは仕ない位、過般の御速夜にも淋しく三四人寄つたばかり、美衣被れば人が隨き、破草履穿いて居れば人にも逐はれる道理ゆゑ、恨むでは無けれど餘り世間の人が恨めしい、鈴鹿屋なんといふ夫婦は揃つての薄情もの、媒妁した恩に被せて妾の御母様の亡くなられた後は誰憚らず無心も持つて來れば詐計にもかかけ、散々に他の財産で自己の腹を肥して置きながら、今は好い生活をして居るさうな、先方からも音信せれば此方

からも音信せぬゆゑ確とは知らぬがまこと左様ならお天道様も佛様も無い世の中、悪い事は仕たが勝、されたが負といふもので、義理も要らねば人情も要らず、あの勇造めばかりなば恨むにも當らぬ譯なれど、さしづめ困つたは三十七兩、八反の畠で借りてあるのと今日立替へて貰つたと合せて其丈になるとやら、茂平次殿の方へ三百兩に入つて居るといふ事は妾も知つて居つたなれど勇造めに少許りのお金を其畠で借りて有らうとは全然聞た事は無し、何様考へても八反の畠に二十兩餘りとは餘り差ひのある話、何か仔細の有つた事であらうなれども死人に口無し、先方は證文を楯に取つて出来ぬと知るゆゑ三十七兩持つて來たらばいざ知らず、左なば其方の出やう次第で位牌に恥もかゝせればならぬと妾に逼る憎さ、どうやらかうやら返事をせず其場を濁して酒に酔はせ、盛潰して置いて逃げては來たが、明日にも又來て逼るは必定、詮方無しに亡位の御名前のため又一つには汝のために妾の身を捨てゝと思ふ料簡より、濟まぬとは知りながら妾の身體を、狼の餌になつたと思つて彼勇造めに任さうかとまで考へたれど、どう思つても、どう思つても、幾度思ひかへしても、たゞ勇造が憎くばかりなつて妾に

出来ぬ事、勇造めの自由になる位なら死ぬるがましと思ひます、と云うてお金の才覺はとも出来よう筈は無し、死んだらまさか冥途まで彼の勇造が追うて來まいと思ふにつけても、死ぬは易けれど後に遺す汝の上を思へば死も死にかれて、と言ひかけて既胸塞がりしや面を掩うて岸破と伏せば、同じ思の榮太郎も恨と無念と切なさにと握り固むる早蕨の拳を膝に置きしまゝ、音もせず降る春雨の機端傳ふ玉水と涙を墮すのみなりける。

其六

あゝ繰返しては果の無い愚癡、いへば云ふほど悲しいばかりで何の益にもたゝぬこと、もう止めませう、夜も更けたれば汝はまた明日の勞働もある身ゆゑ能く寐ないでは毒になりま、案じて呉れるは嬉しけれど餘り氣を揉んで貰うて却つて妾が汝を案じる、なに譯は無い些少の金錢、妾が才覺仕出して彼の憎らしい勇造めの果れた顔を見て遣るつもり、ちと心當もあるゆゑ今から文を書く間汝は構はず先へお休み、起て居られては却つて妾の心が散つて困ります、まあ左様云はずと寐るがよい、遠慮はいらぬ、そしてまた空心配もせぬがよい

實の子でも何でもないなれども御祖父様が憫然
と思つて少しの田畠を譲つて遣られた位の譯で
あるに、其縁につながる勇造の分として亡きお
ため殿にも濟まぬ筈の無理無作法、主筋と云ひ
家の正統と云ひ一體ならば勇造が往時を思つて
一から十まで世話して呉れても好い妾等の其貧
乏につけ入つて妾を自由に仕ようなどとは話に
さへもならぬこと、妾が咄と合點して意に従
つたら二重抵當の其謬文を灰にしてやらう、ま
た朝夕も不自由無くして遣らう、榮太郎も我が
子の分にして行末財産を譲つても遣らうと、二
言めには自身の事足るを誇りがに飽まで此方の
貧をあげて、如何だ〜と笠にかゝつての言刺、
今でこそは斯様貧に寢れて居れ妾も元は土百
姓の勇造づれに指さされるでは無い身の上、江
戸の本町で土藏造りの光り輝いた中で育つた
者、汝の御父様と芽出度く夫婦になつた時媒妁
人をして鈴鹿屋といふ悪い奴に謀られたのが不
運の基で、柳島といふところへ引移つた時は既
困りに困つた末なれど、それでも其折持つて移
つた家財は車に十五六輛、まだ〜此村邊の富
有家なんどと汝の羨む家なんどより二倍も三
倍も豊饒で有つたが、段々續く不幸に爲る事も
爲る事も齟齬ばかり多くなつた折も折とて汝

の御父様の兄様が亡なられ、後に子は無し弟は
無し、勿論おためは有つても他人、血統といふ
では無いの故、御祖父様の御計ひ叔母様の談合
づくで御磨を後取りとの内約束、おすが成
人するまでは他人でも無い榮吉故、江戸の商賣
が思はしからずば田舎へ来て居て後見がてら無
事に生活すが宜らうとの御祖父様の仰に御道理
と此村へ移つて来て間も無く、跡を追うて叔母
様も亡くなられ、引つゞいて御祖父様も亡くな
られ、二軒一緒に成て仕舞うて田地田畠も少か
らねば苦も無く生活して居る其頃は彼の勇造め
は始終出入り、頭を疊につけ通しておためもろ
とも此家へ来ては追従輕薄をして居たより、ま
さかに悪い事もすまいと氣をゆるしたがり此方の
あやまり、今日の今まで悟らなんだが確に彼め
が謀計にかけて種々の事をお父様にさせては自
己を肥したに相違は無いと思はれる、汝の御父
様はそれはそれは損徳知らぬでは無けれど心の
氣高い儼りとした風雅の御氣性、難かしい書も
他に習はで獨で讀で樂まるゝほど尋常のものに
は過ぎた學問もあり、詩もお出来なされば歌も
俳諧もなさつたは、困しくなつても御慶なされ
なかつたなれば汝も定めし知つて居ようが、彼
通り農家に生れて商家に育つた方には似合はぬ

風雅ゆゑ何時と無く人々に計られ計られて、積
んだ鹽の水となるやうに零落れても左まで他を
憎がりも恨みもなさらず、妾に弗りとも他の噂
などなされた事も無い位、勇造はまた何日とな
しに財産を太らして彼通りにはなつたれど、妾
は何も聞かされて居らぬに知らう道理は無けれ
ば、今日まで彼はたゞ金貨しを仕たので太つた
事とのみ思つて居たれど、今日の先刻合點の行
つた彼奴の惡心、氣がついて見れば思ひ合はす
ことは二ツも三ツも四ツもある、全く今の貧乏
も彼奴に計られたに違ひないと悟れば憎さも幾
百倍、他の財産を謀計にかけて困らせた上猶飽
足らず妾をまでも驅らうとは、鳥と云はうか獸
と云はうか、妾の腹を立ちに立つても無理ではあ
るまい榮太郎。

其五

不幸福とは云ふものの斯様も不幸福のつゞく
ものか、力になる人は秋の木の葉の剥落るやう
に一人々々と亡くなつて仕舞ひ、少しは談合の
足にもならうといふおすまは千住へ奉公に出た
れば、後は那方向いても汝と妾と二人限り、遠
隣んでは呉れるものの村の人々は他人の事、遠
いながら縁類にあたる勇造は彼通りなり、あゝ

戻るほどに、と云紛らせど合點せず。今頃何處へいらつしやります、達て御用があるならば私が行つて参ります、夜半に何處へ、何處へと問はれて、さあ、その、あのと答に窮する様子に、いふ、それと察して扶取る手にばら／＼と涙を墮し、顔ひ聲に、母様あなたば冥途とかいふ遠いところへ、いらつしやらうと御思ひなされてではございませぬか、先刻から榮は睡はしませぬ、皆見て知つて居ります、私も一所に連れて行つて、と云へば云ふ子の思より云はるゝ母の胸の辛さ、一句一句に大斧もて身を劈開る心地して我身を支へも得ず、猶紛らさむと踏堪へても蔽ひかれたる神思の惱亂、さかし立てる霜柱の日に力無く潰る如く、引かるるまゝに崩折れ坐りて榮太郎をばき抱きつゝ言葉も得出さず咽返りぬ。母様、母様が遠いところへ行つしやるなら此榮も同伴に連れて行つて下さい、私も死んで仕舞ひたい、生きて居たて御父様は無し、姉様は居す、他は皆惡徒ばかりで私を窘める、汝の父親は馬鹿野郎の、汝は家が貧乏なので根性曲りになつて居るの、すれ蟲の、死神面のと村の兒童等にも容められて生て居たつて詰らない、六三の家の老嫗や源右衛門殿の寡婦なんぞ可愛がつては呉れまする

が彼家の兒等も私を見れば狗を嫉けたり栗の穂なんぞ投付たり、私を遊嬉のたれにして、泣かせては何時も逃げて行きます、私も寧ろ死んで仕舞つて御父様の居るところへ行きたい、私も先刻から床の中で死んだら何様かと思つて居ました、母様一所に死にませう、と年端も行かぬもの口より死といふ事を云ひ出されて、流石に斯様まで分別せむとは思ひもかけざりし母の驚き、自己の浮世を倦み果てたるも忘れて急に言葉忙しく、飛んでも無い事をお云ひで無い、汝はこれから前途の長い花も咲かうといふ身體、心次第で今汝を笑ふ奴輩を見返す事も、窘める奴輩を窘め返す事も出来ないには限りませぬ、妾は汝のお父様に亡くなられたで生きて居ても到底半分死んだ身體、とてもこの事に身を捨てて汝のためにもなるやうにと後の事までも考へて置た事ゆゑ死なうとも思つたなれど汝に今其様な事云ひ出されては死ぬにもなかく死にされる、汝はどうぞ生存へて佛様の前に上げて置た彼の手紙通り江戸へお上り、左様すればまた汝一人は必定助けて一人前の立派な男兒に仕て呉れる好い叔火様もある事ゆゑ、かならずとも妾の言葉を反古になしてはなりません、若しまた強て妾の言葉に負けば七生親で無い、妾

の子とは汝をせぬ、と云ひ切るや否や心を鬼にし、取り纏れるを突放して身を起さむとする母親、振牽られしと取りつく子、母様それは私は厭、母様の子で無いなどと云はすに私も一所に連れて行つて、左様で無ければ一人になつても私は一人で死にます、あれ誰ぞ来て、母様が、と叫ぶも一生懸命なれば、えゝ聞分の無さすぎると叱つて焦躁る母も必死、果なく互に揉合ひたり。

其 八

如何に云へども識せども全く開入れざる吾兒の執拗なるに弱り果てゝ脅迫しつ叱りつ逼むれど、妾亡くならば跡を追うて必ず死すべき面での、一毫も言葉に従はぬには何とも此の上爲む術無く、おこのは終に我を折つて、それほど汝が一所にと我を言ひ張れば妾はもう心を反して死にませぬ、もといゝ妾の身を捨てようとしたは汝を思つての事、汝に死なれては妾の苦心も露甲斐無いこと、何様な苦勞も切なさも汝の身には代へられぬ、妾は現世に猶残つて吾身の業の盡きるまで苦を受けようと思ひ定めた、もう何様に辛ければとて決して妾は思はしい考などば起されば、汝も行末長い身をむざと捨てよ

と無理に吾子を寐させ置ておこのは小き燈のもとに誰へ當ての文かは知らず筆とりあげて認め初めぬ。貧苦の中に日を送るより齡には増て智慧走れる榮太郎、今年十三なれば、母は涙の長物語を聞きたる後に何としてか直に夢に入るを得べき。廣くもあらぬ室の隅に夜具とり展べて横にはなりしも、晝間六三の女房より聞きし我家の住時の態、今日のみならず幾度か話されたりし我母が江戸に住みし頃の榮華のさまを思ふにつけて今の貧しさ口惜く、あゝいろゝの悪い奴が居なかつたら此様に辛い目ばかりは見まいものを、母様が彼様お口惜がりなさるも悪い奴のため、姉様と一所に居られないのも他のため、今頃姉様ほどのやうな苦い事を仕ていらつしやるか、人の話では悲しい辛い奉公と云へば定めし矢張泣いて、母様のところへ來たい、自己にも逢ひたいと思つていらつしやるだらうが、あゝ逢ひたくても談話を仕たくても夫も出來ず、えゝたつた一人の自己の姉様とさへ一所に居れないといふのも矢張金銭が無いからか、惡黨に欺たれて家が貧乏になつたからか、勇造の畜生は大惡徒、宗安めも彼奴惡徒だ、話で覺えた鈴鹿屋といふ奴は元より惡徒の大將、皆惡徒、悪い奴、何故惡徒が多からう、長

福寺の和尚様も、ム、あれも他の金ばかり取るから惡徒に違ひ無い、村一番の學者の銀兩、あれも法螺吹き爺だから惡徒に違ひない、皆金錢のある家の子には優しくして我のやうな貧乏ものといへば落つた椎の實を拾つてさへ散々過般も叱りくさつた、畜生、惡徒、無益だ、自己は活て居ても窘められるばかりだ、母様も窘められて居るばかり、姉様も左様だ、お父様も窘められて死んで仕舞つたのだ、あゝ自己は母様が惡然だ、姉様が惡然だ、他家の奴は皆惡徒で、人を窘めて、而して美しい衣服を着て、美しいものを食つて、吾家のものは皆善い人で、人に窘められて、而して加之に自己なんぞは惡徒の兒童にまで襤褸を着て居るから汚いのだ、雑食だから力が無からうのだと笑はれる、詰らない、生きて居ても、何様なる、死んだらば、死んだ先には何も無からう、睡たやうならば死んだがよい、自己は死なう、母様は何様なさる、母様も死ぬがよい、姉様も死ぬがよい、久兵衛爺が呉れるといつた今年解の彼の美麗な可愛い雄鷄も既になくなつた、可愛いけれど仕方が無い、一昨日吾家の周圍へ残らず蠶豆な蒔いて實が出来たらば母様にあげてと思つたも無益になつた、と彼の事此の事諺も無く思ひつ

づけて眼は閉ぢ居れど心は痛す、頓ては徐と細眼を開きて母は如何にと打見るに、文書き終ひて靜に座を立むとせらるゝところなれば、仔細は無いけれど見とがめられじとまた眼を閉ぐに、吾せぬやうに立上りて假に家廟とせし棚に文をば置きて又靜に坐り玉へる様子にて、其後何のけひはせれば、少時して又薄眼に視るに、打仰ぎつゝ涙を拂つて今や我が方に向かむと玉ふ風情なり。知らぬ振りして元の如く睡れる態を粧ひ居るに斯とは更に知り玉はてや枕ながらに我が頭を抱きて、頬接などやし玉ひけむ、氷のやうに冷たきもの、吾が頬に觸るゝと均しく涙なるべし熱雨は濺ぎぬ。ハツとばかりに思はずも抱きつかむとする間もあらせず、吾せぬやうに退り玉ひて、抜き足小疾く戶外の方に去らむとせらるゝ様子なれば、此夜此體常事ならずと、頭髮に猛火のつく想して起るが早きか追蹕つて、母様榮を連れ行つて。

其七

吾兒に急に引留められて打驚きたる母のおこのは二歩三歩戻されしが騒ぐ心を推隠して、お榮太郎目が覺めたらば風邪ひかぬやうに其まゝ寐て居て少時の間留守して居よ、姿は直に

を作る間に、母は梅干鹽揚げを晝の支度と豫に包みて猶風呂敷に巻込みつ、腰につけよと渡し呉るれば、有り難うござりまする、そんなら母様行つてまゐりまする、屹度待つて居て下されませ。おゝ待つて居ます、能く途中に氣をつけないではなりませぬぞ、歸りは遅くば泊つて來るが好い、必ず焦躁つて無理をすまい。ハイ行つてまゐります。氣をつけて、と、溢るゝばかりの互の情、小笠頂き、草鞋穿き、文こそ無ければ甲斐甲斐しき端折り姿の後影を、見送る母は紅葉せし葛の纏へる門柱に縋つて少時眼も離さず、送らるゝもの送るもの涙ならぬは無かるべし。あはれ孝子の門を出でていかなる運の神にや會はむ。

其 十

浦和宿へ出るまでは慣れし路とて人にも聞かず行きけるが、夫より前途は千住が何處にあるやら那の路取つたが近いやらも全て知らねば人に問ふに、鳩が谷へかゝつて行くが可らうと教へられ、其鳩が谷へ行きまするばと又問うて根岸村より大谷場村までは聞き得しが、其處から前途は又其處で教へて貰へてと面倒がりて左様まででは知らせて呉れず。有難うござりますると

禮言うて別れて途中も幾度か尋ねゝ大谷場までは行きしが其處よりは又進めず、もし鳩が谷へは何様まゐりますと忙しげに稻を掛乾して居る男に問へば眞直に行けばそれでよいさと情も親切も無い棒挨拶、二度尋ねなば怒られもすべし是非無く眞直に行けば、忽ち衝當りに出て右左那方へ曲つて可分らず、物貰ひと覺しき鼠色装束して尺八吹きながら通りすぎる男呼びかけて鳩が谷へは斯様まゐりますかと云へば、此方をじろりつと一目せしまゝ、れゝゝんと吹く音を遏めずに行つて仕舞はれ、漸く一人の閑暇さうな婆様に尋ねれば餘程の遠耳にて埒明かざりしが、辛くも談話通じて、やれやれ知らぬ路を遠くへ行くのかよ、鳩が谷へは此處を右へ少し行くと行弘寺様といふ御寺がある、其の直先を左へ斜方に大きい方の路を取つて突當つて左へ一寸行て右へ折れて、氷川様の御祠の前の路を逶迤ながら沿いて行つて用水の縁を通り越したら眞直に何處までも辿り、辻になつたところを過ぎて小溝を越して、路が支になるところへ出たら右へと取つて行きさへすれば先づ鳩が谷へは大抵行かれる、鳩が谷から又千住へ行くには草加へ出て行けば知れよいが大分迂路になつて仕舞ふ、第一誰か教へたか鳩

が谷へ迂回するが可ない教へただ、ム、汝は鹿手袋近所か、それならば猶の事、今度ばもう蔵か戸田まで大路を來て其から河に沿いて千住へ出るがよいと親切に教へられて心強く教へられし通り鳩が谷へは出でしが、それより又幾度と無く問ひつ尋ねつして、知らぬ道に兒童の足の抄取らず、短き秋の日の傾く頃千住の宿の端にかゝりぬ。豫て聞ける扇面亭といへるは何處ぞ、其家にさへ着けば姉様にも會ふこと出来むと思ふにぞ心勇みて頻に問ひ、漸く尋ね出したり。嬉しや此家かと足の運も疾くして近づき見るに、焼杉板の外圍ひして、骨細き家作り正面に見え、硝子に御料理と讀ませたる瓦斯燈の小さき行燈は門の上にかゝれり。客も全く無き體なれば遠慮するにはあらねど、知らぬ人の家を訪ふことの何と無く怖さやうなる心地しながらおづ／＼と進み入りて、出て來る人もなと見廻せど人は見えず、是非無く御免なさいましと案内乞ふこと三四度して漸く内より、誰だえ其處を明けも仕無いで、と云ひながら人の板の間歩みて此方へ進み來る音す。御免なさいまして腰を屈めて外より障子を明けむとする時内よりもまた引明けるが、車のつきたる障子なれば響をなして急に明き、無作法に沓拔にも

うなんどとは夢にも思はず居てお呉れと云へば漸く安堵の顔して、母様へ居て下されば榮は何處へも行きませぬ、何程一日労働いても、またいろ／＼と寝られても、辛抱し通して大人になり、屹度持いで母様に澤山孝行いたしますと涙の中に悦びを少し浮めし其風情、時雨る片手に樹間より日ざし洩れたる如くなり。

されど眼前に聞へたる勇造が事は如何にせむ、死を止まると一つ時におこのが胸はそれに撃たれぬ、榮太郎が胸もこれに撃たれぬ。二人は一度死より出て新に再度死に入れる如く互に無言なりしが、幼き智慧の有らむ限りを盡して榮太郎は口を開き、母様心配なされまするな、榮が好い事を考へました、過般姉様のところから来た御手紙にあの姉様の御主人といふは御慈悲の深い極好い方と書てあつたといふことなれば、私は明日千住とかいふところへ行つて、姉様に逢つて譯を話し、姉様と二人で一生懸命に其の御主人に御願ひして金銭を貸して貰つて來ませう、それよりほかに仕方はありません、屹度左様したら若干かの金銭は姉様が借りて下さることが出来ようと私は思つて居ります、母様も御案じなされますな、一日かゝれば往て復ることは造作も無いところと聞て居ります

ば知らぬところでも尋れて行つたら行かれませう、明日は早く朝食を持って私が出掛けて歸路には紙幣をもつてまいります、と左も得意げに云ひ出せば母は又候わが娘に苦勞をかくる事と思ふに、氣はすまねど百計盡きて是より外に路無ければ、如是思はざりしにあらぬまゝ覺束無しとは知りながら萬一にひかされ、合點の意を口よりは先づ面に云ひぬ。

其九

其翌日の朝未明、一睡の間も無く榮太郎先づ起き出づれば、もとより睡らでありしと見ゆる母も忽ち起き出でて、兩戸練り明け戸外を見るに、薄紫の天色、朝霧深く地を罩めて遙彼方の雜木山の頂ばかり深みて見えたる宛然沖の小嶼の如く、萬籟未だ起らざる靜さ例ふべきもの無く、露の重りに堪へかれてほろりと枝を辭する木葉の風に舞はで直に落る秋のあはれもいと深し。室を掃ひ水を汲む榮太郎が甲斐斐しき手助けに勝手業も早く済みて、一つ膳に親子の對ふ頃漸く雀の鳴き出せば、箸を拾く時分僅に紅き日は簪狀して頭だけ見せぬ。母様それでは昨夜私が云つた通りに今日は是から、千住へ行つて姉様に遇つて歸つてまいります

する、心配せずに待て居て下さいまし、遅くとも榮は屹度歸りまする、榮の居ない中に昨夕のやうな事を母様が爲されますれば榮も後から御同行をします、不在でも屹度私が歸るまでは何ともなされまするな、屹度でございしまする、よろしうございしまするか、また勇造めが來ましたら何様とも勝手にするがよいと嚴敷叱つて御遣りなさいまし、金さへ遣れば彼様な奴に是からは口もきかないで済みます、金さへ擲付て遣れば済みます、屹度待つて居て下さいまし、と熱心籠めて云ひ出づるに、おこのは幾度か點頭で、汝も案じる事は無い、妾は汝を瞞しはしませぬ、好かれ悪かれ汝の歸るまでは必ず待つて居ます、してまた汝は千住へ行つて今日歸つて來るとお云ひだが若し遅くなつて先方で泊れと云うて呉れたら御泊りなさい、夜道をかけるは好くないゆゑ急かすと途中氣をつけるがよい、夜になるぞと思うたら必ずともに頼んでなりと千住へ泊めて貰つて明日早く立つが危氣無くて一番好い、わかりましたか、能く母の言葉通りにするがよいと識し返すも熱心なり。それではいよいよ出かけますと、土間に下り立ち藁を擇つて、慣し手工のかしこも、細綿、足の指にかくる、編込む、括る、槌で打つと早くも草鞋

て、汝はお須磨の弟といふか、これは好いものに出會した、能く聞いて置いてくれ大變な事だ、汝の姉は平九郎が最初は連れて來たのだが扇面亭へ奉公させたに強情者で主人の云ふ事を肯かす、奉公不動で仕方が無ければ平九郎が所へ扇面亭では突返す、平九郎は前借金返さねばならず、困りぬいて居る學乃公のところへ話を持込んで來たのが縁となつて、まさか知り合つた中で知らぬ顔も出來めえと乃公が何處かへ世話をして遣る筈に極めて、家へ引取つて四五日置て遣つたに、恩も義理も全然分らねえ汝の姉は、何様思つたか一昨日の朝乃公を出しぬいて何處へか隨德寺、姿を隠して仕舞つたので後の騒ぎは大した事、扇面亭から金を出した其代物を無くしては平九郎は云ふに及ばず、乃公も平九郎も謝罪つたと素手で話は済まされず、平九郎も乃公も血眼になり、肩けるところへは肩をする、心當りへば人を出す、多分汝のところへも我家の傳五といふ奴が突留がてら談判に行つた筈、平九郎が家に居ないのも大方そのため奔走して居るのだ、一體汝が最少し齡でも老けて居れば唯は歸らせられないところ、一ト理窟乃公が控で、お須磨を今直此處へ出すか、左無くば最初平九郎が手から出した金に雜用添へ

て直渡すかと云はうところだが、汝は兒童、云つても母が明かないから免して呉れる、其代りには家へ歸つて母に能く此譯を云ふがよい、若また當人が其方へなごだ廻つたら早速に、平九郎なりまた扇面亭なりへ、知らせの手紙を遣されば其方の義理が濟むまいぞと嚴然傳へて置くがよい、乃公は此から其爲に詮議を其手の筋の人に頼みに行くから汝には長く構つて居られぬ、と案の外なる挨拶に、頼みしことは空となつて新に一つ加へし憂愁、失望落膽極まれは茫然として涙も出でず、筋骨痠えて力も無くなり、何と返辭をせしやらも自ら覺えず元來し道な夢の如くに幾町か辿り、エイ簞小僧めと車挽き行く男に叱られて驚き避くる拍子に、ハッ和我に還れば何時か我身は既に千住の盡頭に歩みかゝり居りぬ。日は既西に傾きて卒さゝば逢くべきまで低く、高き樹の梢に百舌の聲淋しく聞えて、空腹の俄に痛むが如きを覺え、先刻までは張りつめし一心に飯食ふことも忘れ果たりしが今は是非無く欲しからぬ掬飯を腰より取り出し、湯茶も無きに無理食なして、さて家に歸つて何とせむ、母に會うては何と云はむ、勇造めが挨拶は何とすべき、姉様の行先は何處なるべきなど、別に捉へどころは無けれ

ど一つとして心に關らぬものならぬは無きに、思ひは亂麻と續るれば我と我を忘れて疲れ足引き江戸袋といふところにかゝりぬ。日は既全く暮れたれど昨夜とは違ひて空晴れたれば舍人あたりより月の出たに、冷き光を便として、一心はたゞ何となしに深き憂に暗みながら、首を俛れて歩める風情、假令木佛でも惘然と思すべし。

其十三

え、もう矢張死ぬるばかりか、生きて居たて仕方は無い、御父様は亡し、姉様は行方知れず、たゞ一人の母様は窘められて今死なうとして居られる、惡黨どもは金持にもなり、威張つても行く、詰らない世界だ、樂みは無い、嗚呼漸の思で母様の死なうとなさるを止めはしたが、これから歸つて今日の始末を話したら何と仰ることだらうか、而して第一姉様が行方知れずになりましたと乃公に話が出來ようか、出來ない、とても母様に左様云ひ出すことは出來ない、たゞ會へ無かつたと云うて置かうか、餘り茫乎とした事だと詳しく聞かれては虚言が露現れて仕舞はずには居まい、會つたが金銭は出來なかつたと云うて置かうか、それで

下りず、及腰して女の明けたる事まで眼に映りぬ。榮太郎が前に立てるものは二十二三の肥り肉の、首純白に塗り上げたる下品なる女の、加之弱りしへんべらもの引纏ひつゝ細帯のみせる血色悪きものなりけり。

其十一

ついぞ見た事の無い小僧さんだが汝は一體何處からおいでだ、何をきよろ／＼妾の顔を見るのだよ、厭な兒だね、と饒舌つけられて、榮太郎どきまきしながら脱いだる笠を荷厄介につつつ、ハイ私はあの姉様に會はうと思つてまゐりましたと云へば、フン姉様に會はうとつてかえ、一寸とお千代さん來て御覽よ、可愛らしい好い容貌の兒だがね、飛んだ石童丸を造つて居るよ、と返辭は外にして奥へ向つて高聲に話しかくるに、頓て奥より出で來し女の此も同じ細帯姿しどけなく頭ばかり美しく光れるが、ほんに綺麗な小僧さんだね、だが小僧さん汝た姉様では分らないでは無いか、と笑ひながら砂利聲で問返しぬ。ハイ私はあの浦和在白幡村の榮吉の倅榮太郎と申しますが、會はればならぬ事があつて姉様を尋ねてまゐりました、姉様の名はお須磨と云ひます、と人に應じて歟火の

やうな顔になつて述べれば、後より出し女のくつくつと笑ひ出して、ねえお久米さん、母の名を聞いたらお弓と申しますとでも云ひさうで、異に芝居がかつて居るでは無いか、然し懸然に何だか屈託顔をして居るよ、お須磨と云へば彼の強情娘では無かつたか、と云ふ尾について前の女の、左様々々彼の娘の弟に違ひ無いよ、と云ふところへ立出し一人の男、廣袖の衣服に三尺帯、女等の會釋する様子に主人とは見ゆれど、何處か宗安めに似たところあつて怖らしき顔つきせるが、何だか蔭でちら／＼聞たがお須磨の弟が尋ねて來たと此兒の事が、成程好い兒だ、お須磨に似て居るところもあるが女にすればお須磨よりまた二三段男好のするゝ、好い容貌だな、女なら大した奇貨だが何だつて男に生れやがつたのだらう、ナアお千代、はゝゝ、何だ姉に會はして呉れとか、お須磨は今家に居ない、いやもう汝の姉のためには、初手から承知で存んで買つたが随分疲を疲れせられた、最初判人の平九郎といふ奴が連れて來たのだが乃公の家の用には足りないから今では戻してあるが金はまだ取れないので手を焼き切つて居る、會ひたくば平九郎が所へ行つて逢へ、南の方へ四五町行くと左に加納屋といふ質屋があ

る、其裏へ入つて平九郎と聞きな、と云はれて皆は解れど姉の居ざるに落膽して疲勞も急に出でたる心地し、涙もぢつと湧き來れど堪へて龍鍾暇を告げ、表へ出でて、また問ひ／＼知れ難き仕居を尋ね當て、平九郎様は此家かと言へば、ア、といふ返辭は引寄せられたるがくり戸の中より邪見に洩れ來りぬ。家は歪みて壁は崩れし其體恰も吾が住める家の如きに榮太郎は不審を胸に起しながら段々問ふに、主人は不在にて三十七八の、薄痘痕ある眉毛の延びたる、聲のがさ／＼と大なる女一人居しが、家にも今はお須磨は居す、すつと此より南へ大きな橋を渡つてから又四五町行き、左へ曲つて湯屋の背面に當るころの辨次郎といふものところへ尋ねて行け、其男の手に吾家から渡してあるからとの心細い挨拶なり。いゝゝ、力は抜けたれど今度こそはと思ふに一生懸命となつて漸く辨次郎を尋ね當てぬ。

其十二

姉に會ひたき一心に辛くも辨次郎といへるを尋ね宛て、問へば、これも其の甲斐無かりけり。四十に近き小作りの男の加之面上は骨立つて見えたる貧相の憎らしき奴が、薄き唇を動か

何とでも云へ、格闘でも来い、理窟でも来い、たゞ此儘で済ますものか、此様な大きな負傷をしては家へ歸つて母様に聞かれた時に返辭が無いやい、乃公の大切な母様に、其母様に済むやい、吾家までついて来て謝罪れやい、厭か、厭では承知が出来ぬ、汝の血も此鉢に塗つて持つて歸つて云譯にする、もう一寸も汝のやうな惡徒なぞには負けて居ない、横着者め黙つて居ずと返答しろ、と罵つて顔ふ、肩咬みつ、鎌の柄緊しく握り固めて答を待つたる其風情、羽翼まだ成らぬ鷹の兒の既鴻鵠を攫まむとして怒れるごとき有様なり。油斷なく眼を注ぎつゝ、泰然はらつて言葉のはし／＼聞き味ひ居し男は、意外に、漸く笑ひを顔に泛べて、數次獨り點頭けるが、乃公が悪かつた、堪忍して呉れ、汝の家へも行つて詫よう、だが乃公ばかり悪いでは無い、汝は乃公の行く先に立つて頭を俛れながら足の運びもたど／＼しく遅く歩けば乃公はまた急いで後から行かうとする、オイ小僧さん氣をつけなと聲をかけながら右へ寄つて乃公が通らうとすれば汝はまた聲が耳へ入つたか入らなかつたか、生憎間が悪く右へ振れて行く、左へ乃公が寄れば汝がまた左へ寄る、廣くも無い路で乃公が後から急ぎ足で來た前に拍子悪く汝

が立塞がつたゆゑ、險殺躓いて二人共に轉ぶところを、早速に乃公が平手で推退けたばかりだが、汝の足に堪へが無く乃公の方に餘があつたで、思はぬ怪我をさせた譯、惡く取つて呉れるな、此通り謝罪る、鳩が谷へ行けば藥も買つて遣る、汝の母様に謝罪も仕よう、が、一體汝は何處のものだ、六七里ばかりは今日歩いたな、家は鳩が谷か野田あたりかと、優しく出られて榮太郎は、さては此人の背後より來しにも心付ざりしほどなれば、聲掛けられても我が屈託の耳に入らざりしより斯る負傷も起りしことか我も折れけるが、其と同時に火の大人に謝罪らせしも今更氣の毒の思ひしつ、且は六七里今日歩いたの、と見抜かれて少し心驚き、汝の言葉が眞實なら私も惡かつた、堪忍して下さい、無暗に怒つたは済みませんでした、と改めて一禮する兒童氣の正直さ、また愛すべき趣きあり。これに双方心解けて、互ひに鳩が谷を目指せるなれば、同じ道行く縁に引かれ、此方は足を少し早め彼方は遅めて伴れだち歩みぬ。

其十五

負傷は厭處にもあらず、左して大なるにもあらねば、榮太郎も相手の優しきに心全く解て

隨ひ行きけるが、未明よりの心身の疲れと、肚裏の饑ゑたるに於て、淺けれど痛みはある今の傷に、いよ／＼元氣衰へたれば兎角に後へ距り勝なり。初の程は男も振りかへりては立止りて及びつゝを待つこと數次なりしが、跛足引き引き泣きさうになつて歩むを見るに見兼ねてや、小僧よ、歩行づらいかの、地體疲れて居る上に今の負傷を乃公がさしたで定めて餘程辛からう、よし／＼乃公が背負つて遣らう、と背を向けられて、これはまた餘り厚過ぎた人の親切と一度は驚き、一度は氣の毒になつて左右無く意こは従はざりしが、小僧の癖に洒落つくさい遠慮などするものではない、十貫も無い汝なんぞが背負つても背負つた氣がする男が、大力だから遠慮するな、と笑つて云はれて辭み難く、それなら少しの間だけ甘えて負はれますから何時でも下してくだされませと背に取りつけば、成程大力と云ひしに違はず、輕々と負うて何の苦も無げの大股歩行、語に聞た天狗とは此様なものかと榮太郎は少し底氣味惡くもなりしが、男は下より身體に似合はぬ小さき聲して、大きに談話が仕よくなつた、汝は浦和の在というたが、今夜の中に家まで歸ると云つても連も左様はなるまい、此疲れた足で馴れぬ路を夜にかけて如何

は矢張母様に死ねといふのも同じこと、有つた通りに云うて仕舞へば、今までだけで母様の苦勞はト方でない上に、又御心配を増させる道理、あゝ何様しよう、何様も斯様も、仕方あるまいか法は無からうか、萬一家に歸つて見た時姉様が来て居たら何と仕よう、虚言はなかなか云へない、姉様がお逃げなさつたといふも何様いふ譯か知らないけれど譯の無い事は決定あるまい、あの辨次郎も矢張勇造みたやうに惡徒でもありはしまいか、姉様もまた父様や母様同様に善いゆゑ惡徒どもに窘められて辛さ悲さに堪へられず死なうと思つて逃げられたか、同じ死ぬなら家へ歸つて母様と榮と皆一所に、いやゝ飛んでも無い、厭な事、母様を死なせて堪るものか、姉様を死なせて堪るものか、嗚呼榮も死にたくない、母様も姉様も父様のいらした時の通り皆一所に生活したい、貧乏しても一つ家で、假令叱られても泣かせられなくても一つ家で、三人揃つて生活して居たら此様な嬉しい事は無からうに、もうそれは到底出来ないに決まつた、金錢の所爲で到底出来ぬ、惡徒のせゐで到底出来ない、金錢が惡徒に加勢をして而して正直な善い人を窘める、乃公等は窘め殺されかつて居るのだ、えゝ窘め殺される

のが口惜しい、母様を窘め殺させて堪るものか、姉様を窘め殺させて堪るものか、残念だ、口惜しい、母様も姉様も乃公も皆、惡徒の手の中、金錢のために窘め殺されて仕舞ふのか、其金錢さへ此方で持てば譯は無いのだが其も出来ず、あゝ母様は、姉様は、蜘蛛手に亂るゝ憂愁と不平に、我が脚の地を踏み居るか但しは雲を踏み居るかさへ分らぬごとく、半分は全く夢と迷ひて月の光りの空に消えしも心なければ覺え知らず、幾度と無く樹の根小礎に蹴躓づきては爪を痛めつゝ、覺えなくも辿り行くに、忽然背後に人あつて、えゝ此小僧と大喝せしと思ふ同時に、吾身は早くも平手に推退けられたりし勢餘つて路の傍の霜枯小草猶簌立てる中へと酷く倒されつ、何かは知らず硬きものに臂の邊を傷けられたり。痛さと不意とに驚きて、急に身を反し検め見れば、誰か棄て置きし鍔鐔の柄はまだ朽れど其刃先の半は折れて残れるが地に横はりて之がために切られしなるべし鮮血は痛むあたりを撈る手に紅色模糊と着きたりければ、これを見るより此失意に失意を重ねし少年は何とか念を起しけむ彼の鍔鐔を右手にして菅笠白く月下に行く旅装せし丈いと高き男の後に驚直に追ひ、左手に緊手と袂を捉らへぬ。

其十四

悠然として足疾く去りし男は袂を捉へられ急に背面を顧阿しが、女にても見たきほどの比類無き美少年の憤を含みて怖れ氣も無く打仰ぎつゝ我を睨める面は限なく月の光に照らされたれば、清しき中に凄みを帯びたる眼ざし、のびやかに麗しき額、優しけれども昂れる眉、堅く結べる唇の紅なるなど一々明かに見え渡りぬ。此方よりは頂に月光を負へる人の如之俯伏きたるを見ることなれば定かには見えねど、其高き鼻、圓なる眼、張り出でたる顎、大きな口、全體すべて恐ろしげなる立派の男と見て取りたるが、彼方は黙して我が面を孔の明くほど見詰むるばかり、言はむとせざる風情に、十分激せる榮太郎は、えゝ此老夫の酷い奴、理由も無いのに背面から来て人を無闇に打倒し、挨拶もせず何で行く、見る此鍔を、折鍔を、草の間に捨てあつた此鍔鐔で乃公は負傷した、小兒だと思つて馬鹿にして非道なことを仕居るなやい、さあ謝罪つて行け詫言しろ、汝も屹度弱いものを窘めて威張る惡徒だ、もう汝等に負けては居ない、謝罪ならぬなら汝の臂も乃公の負傷ほど切つて呉れるわ、さあ、えゝ、老夫

る事無く、蒲團を列べて打臥しけるが、彼男こそ榮太郎二件三件雑談する間に黙々と／＼と返事も疎くなりて頓ては鼾の聲をも立てければ、思ひつくせぬ辛配ある榮太郎は如何で睡らるべき。夜具打被りて音をさせず静まり居れども打睡も得ず、追々四圍も寂然となり、遙彼方の時計の音も十一時を告げ十二時を告ぐるも、明かに聞取り得たり、萬斛の愁ひ千緒の情に胸を痛めて猶夢には入る事叶はぬ榮太郎のまじ／＼として夜具の中に潛み居るとは知るや知らずや、傍に臥し居し彼男は榮太郎にも忍ぶ／＼して極めて静に起き出でたり。何事ならむと思ふにぞ夜具の袖より窺ふに餘りの不思議さに胸を撃たれぬ。疊道具と見えたる包を彼男は徐と床の間より取り、疊の絲を入れたる如く見えたる、くるりと巻きて二つに折りし筵を伸ばして其中より取り出せば、油絲と思ひの外に油絲は、僅に外觀を装れるばかり、紙幣の一塊を取り出して、數を讀みつゝ、其中少しを除けて残りたる舊の如くに、又巻き込みて床に置き、除けたる分を風呂敷やうのものに包みて自己が胸につけて藏し置きたる財藏に入れ、之を舊の如くなし、烟草二服か三服か吸ひ、其儘睡に就きたりける。事の本末何とも知れば茫然とせし榮太郎は痛く

心を騒がせて愈々睡り難くなりぬ。

其十七

話に聞きし護摩の灰とかいふものの旅路には兎角つき勝なるより、其な怖れての用心に人目を瞞く計謀事、疊の絲包と見せたる中に大金隠せるものならむとは小兒心にも直に解せしが、寢られぬまゝに又思へば、とはいふものの合點行かず、幾干錢か知られど打見しところ何百圓といふ大金を持てるは少し此男の身體の容子に釣合はれば、若くば此も惡徒にて人の金など取りしものにはあらずやなど疑ひを起せば左様かとも想ふ途端、何とは無しに惣毛堅ちて空怖ろしくも覺えけるが、いや／＼矢張此人は決して惡き人にはあらず、自傷せたるを氣の毒がりて我を恤り藥を惠み其上此家へ泊めて呉れしほどの御方が何として惡漢なんぞであらうものか、何で惡漢が他人の我を同伴にして一ツ室に寢込まうものかと思ひ返して、思へば眞に疑ひなし、酒に酔ひては面白みに笑ひ崩れて寢につけば前後も知らず今まで寢たる此人が何で惡漢ならうぞといふ／＼惡徒ならぬに決め、漸く心の安堵を得たれば之に氣の緩みしが、一ツの事に氣の緩むと同時に我が上の事、

猶それよりも我が母様の上の事など心に湧き來りて、昨夜の今頃母様が遺害なされて身を捨ててと戸外の方に出掛けられしを退めし時の、其母様の蒼白かりし面の色、唇近くの筋の擧りてか、びり／＼と肉の動き玉ひし其氣味の惡さ、亂れたる髪の御面にかゝりたる。薄暗かりし燈火に其髮筋の陰翳の朦朧たるが、いと凄き御面を幽靈のやうにまで凄く見せたること、此世の別れと覺してか我を抱きて頬指し玉ひたりし時の其御顔の水のやうに鐵のやうに冷かりしこと、我が顔に澆がれたりし御涙の火の雨ほどに熱かりしこと、勇造めの憎きこと、今朝家を出し時涙片手に門柱に憑りて母様の我を見送り玉ひし時の其お顔の心細げなりしこと、扇面亭の婢めらの厭に我を笑ひしこと、平九郎の鼻の骨立ち瘦せて葺需に即功紙か麒麟紙か貼りたる風の好かぬ様なりしこと、其慳貪に面倒臭いといふ顔して追ひ拂ふやうに我をあしらひし口惜しさ、辨次郎といふ奴の口先賢く我を遠ひしことなど、其より其と思ふにつけて口惜しくもなり悲しくもなり、いくそくばくの愛き思ひも皆金のため金のため、嗚呼金が欲しい、金が欲しい、澤山でも無い五十兩ばかり有りさへすれば惜くてならぬ勇造が面へ擲きつけて、母様

して行かれるもので無い、第一路に迷ふは必定、犬に吠えられ人に疑はれ何様な災難に遇はうも知れぬ、悪い事は云はぬ乃公と一所に鳩が谷に宿つて明日立て、汝は錢を持つて居まいが旅籠も乃公が背負つて造るから左様するがよい、もうこれから悪々家へ歸つたところで家でも寝て居るに違ひない、と云はれて又も榮太郎は我が懷中に旅籠錢の無きことまで見抜かれたるに愕然とせししが其親切に絆されて、あゝ有難い嬉しい人、善人とばまあ此様な人歟と思が八分、何と無しの怖さが二分にて背の上より、それから何卒左様してと小兒らしくも頼みかくれば、おゝ承知した、理解が好いな、汝は中々大したものだ、今は貧乏で苦しくても後には優しいものになるぞ、それなら宿で造るとして汝に云つて知らせて置が、宿屋は規則が面倒なもの、小兒がたつた一人で旅して、加之夜になつて泊るなど云へば必ず疑つて謝絶するのがまづ習慣だから、乃公の倅の積にして造るから汝も其氣で居て、乃公を父様とするがよい、分つたか、合點したか、ム、よし、伶俐だから能く解る、忘れまいぞ汝のためだ、乃公は一體疊職人、持て居る包は其道具だ、忘れまいぞ其積にしない、いゝか合點か、ム、よし、これで泊りの段は極まつた

として汝の身の上を些聞かうか、浦和在から千住へつた其歸路だと今しがた聞いたが、一體何の理由で年も行かない汝が一人千住へ今日に出掛けたのだ、幾度も今まで行つたことがあるのか、いゝえ左様では無いと、大概解つた、汝は親父はもう無いな、もとは相應に金満家だつたが今では貧乏して居るのだな、今日は左様して金を取りに行つたが金が出来無かつたな、何様だ大抵當つたらう、と五分も違はず云ひ中られて榮太郎ますゝ驚き怖れ、ハイ其通りでござりますると云ひし限り何も云はざれば、男は小首を少時傾け、それにしても些汝の言葉に合點の行かないところがあつたが、と云ひさして榮太郎が顔を一ト目見、汝の母は綺麗な人だな、何ぞ悲しい譯があつて金が急に要用なのだな、なぞといふ中鳩が谷へ頓てかゝれば談話は止めて、店のかゝりも醜陋からぬ奥州屋といへる旅宿に着き、親子の態して一ト間に通りぬ。

其十六

さあ榮太郎風呂に入つて来い、疵口に湯の浸みぬやう緊手抑へて一ト浴したら乃公が藥も貼けて造るから關はす先へ行きな、如様汝に頼みがある、これで一寸くり絆創膏を其邊で買つて

來てお呉れ、剩錢は汝の好に仕ねえ、と小札抛り出して吩咐なり。榮太郎風呂に入りて少時して出で來れば既絆創膏に座に在つて我を待顔の役男は、もう出て來たか、鴉の行水同様だな、ハ、ハ、どれ疵處を出せ見て遣らう、フム思ひのほかな負債をさせたが、ナニ何でも無い三分か四分だ、二三日経ては治つて仕舞ふわ、斯様此の藥を貼つて置けば今時分だから臆も持つまい、さあよし、これでもう治るわ、と乃公も一つ入つて來よう、如様乃公が出て來たら直膳にして而して何か定格のほかに美味いもので一煙つけて貰はうぜ、と云ひくゝ手拭提げて浴室へ行きしが、頓て歸つて、出でたる膳に打向ひ婢を相手に戲言云ひつゝ飲みかけるところへ宿の男の、御面倒様ですがと云ひかけて入り來るは定例の宿帳付なり。よし來た、乃公が自筆で付けるゝ帳を取つてさらゝと認むるを榮太郎横より覗けば、浦和在鹿手袋村疊職人中錄九郎三十九歳同く倅榮太郎十四歳とこそ記しけれ。

機嫌上戸の酒賑はしく好き程に飲み終ひて、飯も榮太郎と共に済ませば、明日は早立とするから宵の中に勘定してと婢に命令て之を済ませ、寢るよりほかに能は無き宿屋の食後に爲

起すに、行燈程よく暗くして彼縫包は我を待てり、覺悟はしても今さらに怖さに轟く胸の動悸は自己と自己の耳にも聞え、蒲團の上不起直りて眼を目的の彼物にちつと留めて瞬もせず視つむる中に那處よりとも無く陰風ぞつと身に吹き入りて氷を浴びたる如くなり、懷中寒く顫慄生じて、漸く坐りこそは仕たれ、膝はなかなか立て兼たり。嗚呼もうこれは到底出来ぬ、如何して出来るものでない、廢さうくと顫つて元の枕に就きけるが、又少時してひそかに起出で、がくつく膝を緊手と押へ、齒の相觸れて響をなすを、きりりと堅く咬み締めて、音せぬやうに彼男が脚の方より襖傳ひに床の間目がけて進み寄り、戦ふ手先をさしのべて彼縫包に、一たび觸れしが、此時恰も何時なりけむ那室かにて打つ時計の鐘の極めて緩くボンと鳴りしに驚きて手を我知らず収め、背にしと冷汗かきぬ。斯くては果てし此男の起出ぬ間に仕果せむと再び手を伸べ把らむとするに、燈火のバツと明るくなりしに愕然として腰掛けつ其儘蹲まり屈みて息をもつかず燈を見るに、何事も無く猶燃え居て、たゞ金皿に今落ちしばかりと見えたる燈華の熄えて黒まむとしつ、微么に白き煙を縷と上せ居り、油の香ひは鼻を撲ちぬ。

其十九

又もや風せし榮太郎は居縮みしまゝ小さくなりしが、時経るまゝに自ら勵まし、三度彼の物に指を觸れぬ。此度は全く音もさせず我が手に取るを得たりければ怖き中にも悦びありて敏捷く包を解き果しが、中より出しは十圓五圓の紙幣と思ひの外なるもの、長きありまた短きある女の櫛が裁縫の篋のやうなる形せる薄き木片の大小合せて十餘枚、何に用ふるものとも知れぬ怪しの器物のみ眼に映りて、確に剩餘を舊の如く入れしと見しは儼目なりしか、搜せど金のかの字も見えず、あまりの事不思議さに愕然として何とせむ意も出でず自失する時、背後に微々と笑ふ聲して、いや此小僧め太い奴だ、引捉へて公邊の手へ突き出したらば何とする、と低き聲音に罵るは何時の間にかは眼覺め居たる此縫包の持主なり。逃ぐるも逃ぐべき隙あらばこそ、隠すも隠し得べきならねば、あゝ御免なされませ、御免なされませ、何も取りは致しませぬ、私の辛いはよくれども私が公邊へ突き出さるれば母様までが死にまする、何卒御慈悲に御海容を、と立ちも得せず必死となつて涙に頼む切々たる聲いと悲し。彼鎌九郎といへる男は

之を見るより打黙頭き、ム、免しては遣れない事だが、何さま汝が歸も行かぬ身をらで盗賊と出掛けは仔細く無くては叶はぬこと、シツ、聲が大きいわ、馬鹿め。汝の身の上だぞ、他に聞えては疑はれる、深夜に親子が旅宿やなぞでの長話は誰が聞ても不審を立てる、これ怖いことは無い、めそ／＼泣くなよ、突き出して遣る位なら初手から乃公が聲を立てるわ。よいか斯様しな、初めて逢つた其時から尋常では無いと見て取つた偶然らしい汝の身の上、一切包ます如何いふ譯で乃公の包を眼がけたといふまで一應云ふがよい、次第によつては力にも随分なつて遣るまいでも無い、これ、こゝへ入れ怖くは無いわ、左様して夜具の中に居て談話をすれば他所の耳へは何も聞える事で無い、と左の手には自己が掛けたる搔卷少し捲げながら耳に口つけての密々話、兎角の分別も無く此男の意に随ふよりほかには何とすべくもあらぬ今の場合の榮太郎は怖る／＼も、言葉につきて同じ夜具の中に石の如くになりて入れば、えゝまあ何といふ冷い身體になつて居ることだ、これさ左様堅くなつて鹽にあつた海鼠のやうにこるりと仕て居られては寒くてならぬわ、母に抱かれた氣で遠慮無しにのさばるが好い、何も怖がることは

其十八

の苦勞は抜けるものを、今夜の今も母様は此榮が歸つて来るか、首尾は何様か、千住で姉様が御金を算段出來たか何様かと氣を揉んで眼も合はさずに御出にならう、それを如何して明日歸つて姉様は御行方知れずになり、お金は皆無出來ませんなどと榮の口から云はれうか、云うたら母様がおゝ左様かとたゞ聞たなりに居られうか、乃公の不在にも勇造めが無理言ひに來たに違はあるまい、今、今も何様な日に大切の母様を合はして居ようも知れぬ、彼勇造めに窘められて何様に母様が御口惜がりなされていらつしやらうも知ればせぬ、あゝ飛んでも直に家へ歸つて見たい、母様に直と逢がない、話仕度いが、それにつけてもお金が無ければ、歸つて何の役にもたゝず、あゝ五十兩、たつた俺に五十兩だが、と血の出るばかり涙と共に身を絞つても出ぬは金、夜具の襟をも濡らし果て、零々寂々たる眞夜中獨り苦しみ泣き沈みしが、不圖眼を開きて傍を見れば、我が床近く敷き展べたる男の床を一つ越して、行燈の火に能くは見えれど雨染つきたる仙人の繪の掛物かゝれる床の間に、先刻に知りたる疊緑の簾包は憑りかゝりて在り、あゝあの中には五十兩を三ッも四ッもあるものを、

嗚呼此男が彼の金を貸して呉れ、ば造作も無いこと、母様が生きゐるの死ぬのと仰やる苦も脱げれば、乃公が心配も從つてなくなり、其前途は又此榮が持ぎ次第で働きさへすれば、母様の御言葉の通り乃公等を笑つた憎い奴を笑ひ返して遣ることも出來ようものを、夜も明けたらば仔細を話して頼んで見ようか貸せと云はうか、いやゝ逆も貸しては呉れまい、つい先刻までは見す知らずのもの、加之童子に貸しては呉れまい、私は金を持つては居ないと云はれた時には既それまで、其簾の中に在らうものをとは何様しても云へようことでは無い、あゝ貸して呉れ、ばよいけれどなあ、母様も乃公も助かるがなあ、貸しては呉れまい、云つても無益、乃公と母様とは何様でも斯様でも惡徒めらの其お蔭で生命を奪られて仕舞ふのかなかあ、如何かして彼の金が欲しいが、到底貸しては呉れば仕まい、實事を云つても嘘と聞かれて、童子の癖に何を云ふかと思はれて仕舞ふに相違は無い、眞實に受けて聞て呉れたところで承知をしては呉れまい、あゝあの金が欲しいがなあ、と口に唾の出るやうになりて、復次横眼に打見れば、

彼の簾包は舊の如く淋しく床の壁に倚りて、物音も無き室の中、たゞ彼男の振動をすつぱり被り前後知らずの舂の聲がうゝとさするのみ。貸しては呉れまい、欲しいがなあ、あれさへあれば、あゝ欲しい、貸すまい、借りたまい、あゝ欲しいと甲斐無き想を車の輪と幾度無益に廻らせしが、我身の苦しさ母の上の悲しさ辛さに思ひ迫りて、欲しさに凝りて凝りし餘り忽然として、あゝ彼金を黙つてでも借りたいものと思ふ途端、それでは竊盜といふものと自己から心づくや否、ハツとばかりに驚きて急に眼を閉ぢ身を縮ませしが、さりとて金は猶欲し、他に求むべき路は無し、えゝ母様には代へられぬ、濟まぬは眞實に濟まねなれど決してたゞは取らぬつもり、何日か一度は借にもして必ず榮が返しますれば、少時の間貸して下され、父様は無く母様ばかりの其唯一人の母様が、お金が無くては活き兼ね大切の場合でござりまする、あゝ濟みませぬ濟みませぬが、何卒免して下されませ、家へ歸つて母様の御難を拯うた上ならば、打つとも切るとも何様にでも榮が身體をして下されまし、今のところを少時の間どうぞ免して免してと心の中には彼男に兩手を合せて涙になり、罪を謝びつゝ意を決めて首を徐と擡げ

無えか、ナニ盗賊はもう仕まいと、ハ、夫も宜からう、道理だ、然し汝はもう盗賊だよ、次第によれば今夜の中に乃公は云はないが汝が捕まる、暗いところに臭い飯、下らない奴に抱き寝をされて途方も無い目に合はされる、母は助けられず、姉は會へぬ悲しい事になるだらう、ハ、乃公が何で肌虱の役人なんぞに汝の事を訴へなんぞするものか、だがなあ今夜萬一すると肌虱めが御來臨になるぞ、ム、もう大抵は来る頃だ、オ、噂をすれば影がさすだ、あれ聞け門口が明したやうだ、あれが慥に左様らしい、出る、汝の夜具にくるまつて居る、好いか親子だぞ、親子だぞ、確乎しないと汝が捕られる、乃公は寝込むぞ、汝が挨拶しろ、それッ、と云ひさま榮太郎を夜具の外面に突き出して掻き卷被さつ雷の如き鼾の聲を轟かせぬ。驚き呆れし榮太郎は動揺なして言葉通り我床の中に入ると同時に、二人三人の足音して、襖をさらりと明くる響し、も御客様と亭主の聲す。彼男は猶鼾をつけぬ。再び呼ばれて是非無くも榮太郎は覺めたる風を粧ひつゝ、微に答應へて起き上り眼を睜けけは警察の提灯先に巡查二人、鐵挑燈手に宿の手代、迷惑顔せる宿の主人と、合せて都合四人の男が我が枕邊に立列べり。

其二十一

提灯さしつけて榮太郎の面を見たる一人の巡查は言葉も左まで角立てず、汝の姓名は何といふ、同伴の男は何者だと問ふに此方は大切の所と、ハイ、私は浦州在鹿手袋料のもの、榮太郎と申して舊曆で十四になります、親父は疊職田中銀九郎と申します、千住在へ職で頼まれて參つて居りましたのを呼んで歸る路で遅くなりしましたから泊りました、と一生懸命になつて云へば、彼方は一々點頭ながら後ふり顧りて一人の巡查と耳打なして去らむとせしが、後の巡查は踏止まりて、寝たる銀九郎が夜着引捲りつ顔に提灯を近づける。今や露はる、此男が今まで自ら威張りたる盜賊の所業の露はれて、大事にや及ぶと榮太郎の私に心を痛むるに似ず、彼男は猶覺めざる風して、全く寢惚れし態の如くウ、と囁語のやうに唸り、兩手を伸して身に檢束無く、だらけきつたる醉後の熟睡、面さへ柿のやうに紅く人事も更に辨ぜぬ體、不審打つべきものとも思へず。されど職務に抜日は無き巡查は少時考へて呼起さむとなす折しも、いえもう此方は只今子供衆の御答へなされました通り、疊職の銀九郎殿とて胡亂

な方ではござりませぬ、宿でも古い御馴染様御酒を上つて此通り御酔ひなされてでござります故急には起きもなされますまい、と極合より亭主が何知らぬまゝ差出て云ふは、宿の間に貰ひし茶代に對しての義理に折角快く寐込みしところを起させじと思ふばかりの心やるべし。亭主に如是と證言せられて、起す氣の毒と思はぬでも無き巡查は思ひ返しやしけむ、それならば又他の座敷へ案内せいと言ひながら室の外へと立去りぬ。一ト息つきたる榮太郎は漸く虎口を逃れし思ひして彼男が方を顧るに猶其儘にて鼾の聲は舊の如くに盛なれば、豈夫寐込みはすまじけれど、それとも若くは寐入りしかと疑ひ惑ふばかりなりしが、頓て家内は又寂然として、來しものは去り、寢めしものは再び寐しと思はるゝ頃、遠慮氣も無く笑ひの聲を高く洩して彼男は、馬鹿めが乃公と知りも得ないで、ハ、ハ、と嘲笑ひ、いや榮太郎大出来々々々、此程の事は吃度出来ようと初手から乃公が見て取つたが、中々行末頼もしい、汝は吃度強いものになる、どうして今の挨拶よりは教へたつて鈍癡に出来ることでは無い、少し聲つきに震へはあつたが、二三度も此様な事を重ねれば立派なものになつて仕舞ふわ、さあ斯様なれば何も

無い、いやまあ綺麗な胸もとだぞ、一所に斯様して寐て見れば近優りの仕て眉つき眼つき何から何まで能くも、悉皆上出来に出来てゐるな、ハ、羞しがるな、ほんとに恍惚として仕舞ふわ、業平の幼立でも此様は行くまい、見て居る中に乃公の身體が唾液になつて流れて仕舞さうな氣持が爲て来る、ハ、ハ、汝が女ぢやあ大變だが男で乃公も罪を作らぬ、と戲言云ひ云ひ夜具引被けは、問ふも語るも聲は中に籠りて外には聞えずなりぬ。

其二十

榮太郎が身の上の悲しき話を逐一聞たる彼男は開了ると共に勃然として、今までの調子とは打て變りたる聲音、沈みたる力強き重々しき語氣にて、よし、解つた、もう好いわ、泣くな榮太郎、乃公が汝の孝心をト力出して買つて終うた、安心せい、汝の苦勞も今夜限りだ、汝が辛苦は是から皆乃公の肩に擔げて立つ、憎い奴等も對治して遣る、汝や汝の母は儼り正直過ぎるので、他の話を検味もせず、頭から眞に受けて爲すともよい心配までを爲て居るのだ、それを附込み女一人兒童一人の汝等親子を食物にする卑劣の奴等は何共云はうやうが無い

鼻屎惡徒、好いわ乃公が踏倒して遣る、第一勇造とかいふ奴に八反の地を抵當にして汝の親父が金を借りたといふのが地體虚妄の話だ、其奴めの捏造事だ、話の皮を引剥て反對に泥を吐かせた上、謝罪狀と内済金若干かを取つて遣るのに造作は無い、必ず乃公の云ふ通りだ、それから扇面亭とか又平九郎とか辨次郎とか云ふ奴等も慥に臭のする奴等だ、心配するな汝の姉のお須磨といふのも其奴等の手にあるのには違ひないわ、逃げたといふは捏造事だ、飽までお須磨を食はうといふので、一旦當人を煙にして、死跡の籍を被らせでも仕ようと思つて居る事だ、いけ太々しい畜生めら、此奴等の油もト搾絞めて玉と一所に奪つて呉れる、ハ、ハ、惘然に西も東も碌で無い奴等ばかりに取りつかれて、汝の母の清潔な胸や、汝の小さな胸の中に、無益な波風を立てゝ居たの、嗚呼世も恨むな他も恨むな、世間は神代の時分から今の今まで又末の世まで、大抵こんなものだよ、弱ければ何時も強いものに宥められるが當然の理窟のやうになつて居る、正直なものは曲つた事が出来ないだけに半分の弱味があれば、曲つた奴は何でもするだけ其丈強いといふもので、兎もすれば惡徒が幅をするのは是非も無いわ、けれども

好いわ、惡徒だと又それを責める責め方の無いでも無ければ氣を腐らすな、吃驚するなよ此乃公はな、世間を不殘敵にして、自分の生命を玩弄物にして居る我儘もの大將だ、腹が立てば人も殺す、涙が湧けば蟲も助ける、位のある奴は親の仇で、財に誘ふ奴は乃公の子の仇、政府の役人は肌の氣だ、汝に聞かせても解るまいが、卑劣漢のために都合の好く組立つて居る此世界は、打壞しても大事無いわ、高が乃公様が負けたところで、乃公の生命より上越したものを世間に奪られる氣遣は無い、好きな事して遊ばぬは損、瘡に觸る世の中に未練は無いから何時でも頼み次第で此世間に睨を呉れて遣る分のこと、どうだ榮太郎、好い生活だらう、ハ、ハ、吃驚すまいぜ、先刻汝が見て疑つた彼品は何だと思つて居る、ハ、ハ、教へて遣らうか、驚くなよ、彼品は世間の卑劣漢が是で大丈夫と頼みにする錠前といふ卑劣なものを、氣の毒だけれど何の苦も無く降参させて、乃公の云ふ事を聞かせるものだ、ハ、其様に應える事は無いわ、ナニそれなら汝は盜賊とか、ハ、ハ、まあ左様よ、大抵そんな名のつくものさ、これ何様そんなに堅くなつて慥へる、氣の小さい奴だ、汝も乃公の宗旨の中へたつた今入つたものぢやあ

包んで負へ、好いか、此次の宿の古手屋の、大きなで買ふのだぞ、と家並外れの人氣無きところで錢鈔を渡されたり。面倒とは思へど命けられたるに抵抗すべきやうなければ之にも従うて、次の宿にて云はれし品々買ひ調ふれば、應能く出来した、感心々と頻に褒めて、宿外れの小き辻堂の内に入り、見張をさせ置き衣服を改め、胸下駄穿きて立出る十郎を見れば別人の如く、黒の羽織に光る衣服、今までの職人打扮とは打て變つたる立派さ、榮太郎はたゞ呆るゝばかり、頓て舊の股引半纏は襷錢箱に捲入れて、どうだ榮太郎何と見える、ハ、汝にも今に好い衣服をさせるぞ、と笑ひながらに十郎は悠々として先に歩み、王子といへるところにかゝりしが、帽子蝙蝠傘は自らこゝで求め、車を僦うて下谷に着き、兎ある旅店にいと押柄にすつと通ひて疲勞を休めぬ。

お泊り歟といへば、いや二三件所用を濟ませて最終の汽車で横濱へ行くといひ、横濱の御定宿へと問へば、今までの定宿で不取扱ひした故よい宿へ案内せいと云ひ、宿帳つけに來れば仙臺國分町士族涌谷春章、僕一人と威張かへつて記し、三之介汝は疲れて居やうほどに湯にでも入つて緩りと休め、乃公は所用を濟ませ

て来る。オイ車を一挺根津須賀町まで頼んで呉れと、萬般傲然として今までとは悉皆變りたる調子なり。榮太郎はたゞ煙に巻かれて云ふなり次第になり居れば、惡魔の大將と心中にて怖れ居たりし男は去りて、形も影も無くなりぬ。根津とかいふところに行きて何事をか爲すならむ、また我が留守の母様は定めて首を長くして待ちてや居玉はむと思ふにぞ、居ても立つても居られぬ心地、逃れむにもまた逃るゝ術なき身は蛭多き深田の中に落ちしが如き想して一切無茶に惱苦せしが、疲れに疲れきつたる身の我知らず何時か睡りに入りて、隣座敷の人の聲に驚き覺むれば、短き目の既暮れかゝりて、此日の夕は都も淋しく、無心の鐘の聲さへも悲しさ添ふるに、如何してか彼の十郎は還り來らず、好き人ならすとは思へども此ま、彼男の歸らずばと取越し苦勞するに連れ、流石に胸も安からず、市街に沿ひたる表二階の欄杆に憑りたゞ一人、燈明ちらほら見え初むる大路に人の往來を眺めぬ。

其二十三

夜食の膳も出てたれど同伴に離れし身の心細く、たゞ一人箸を取るにも、物食ふべき方さ

へ衰へたれば胸のみ先づ塞がりて汁も膽も咽に通らず、そこゝに茶を飲み仕舞ひて、空しく十郎が歸りを待つに、八時は過ぎ九時は過ぐれど音沙汰なし、若や我を捨て、其儘に那處へか行かれしか、よもや彼人が其様な無慈悲な事は仕て呉れまいに、いやゝ政府の役人を肌、のなんぞといふ人のことなれば若や中途で取押へなどせられはせぬ歟と疑慮さへも少しは起りて、いよゝ安き心も無きところへ忽ち覺音あらく、襖を互落離引明くるを誰ぞと見れば彼男なり。待ちに待つたるところとて喜悅の色を面に湛へて、應御歸りになりましたかと立出て、やれ待遠であつたらう、さあもう此地の用は濟んだ、これから横濱へ行くばかりだ、どうだ小僧よ、乃公の不在に能く察られたか、ナニ寐入つたと、ハ、頼母しいところのある奴だ、と機嫌よげに語ひつゝ、勘定濟ませて、人車はト飛、新橋といふ賑かなるところに着きぬ。横濱とかいふところまで連れて行かるゝか、あゝもう今日で二日立つに家では定めし母様は心配なして居られうにと思ふ間も無く手を取られて引摺るやうに引廻され、濱へ行くかと思ひの外に濱より汽車の今着きて人のぞろゝ各自が指

彼も打明けて仕舞ふから安心して乃公の指揮につくが好い、決して汝の不爲は圖らぬ、鎌九郎とは口から出まかせ、乃公の本名も云つゝ聞かさう、何を隠さう此乃公は元松前の二本差、前髪立から昇れた舉句が城下に尻を向けて走り、歌に能く云ふ忍路高島、それから増毛鬼鹿と磁石のやうに北へ向いて宗谷の岬から樺太地、到るところで癪癪に觸るが最後蟲押へに人も随分あやめた末、山丹人めが積んで来た舟一艘の錦やら蟲の集玉やら種々の財寶を奪つて路用をつくり、此世に腹を立てて居る荒武者どもも随へて春の彼岸の白日和に三板舟を掠めて向う地へ渡つてからは滿洲地、吉野城まで押込んで乗るか反るかの荒仕事に面白い夢も可成見た該時乃公は二十一、最後が酷い目に遇つて手下八人は火刑の杭の上の霧と消えたが乃公は露西亞の地へ逃げて兀孫尹といふ可笑い奴の許に匿まばれて死にもせず、段々奇妙な運を攫んで話せば長い榮華と困苦のんだら筋の夢を見た末、今でも日本は愚、跨にかけて居る何千里の土地の何處にもまた家も無く籍も無い天から許されの我儘者、一寸した事の間違から不美事をして立去る途中、汝は實は借物にして、下らぬたゞの盜賊で捕られまいため親子に化けて、首尾よく奴

等に手盛を食はせた、ハ、ハ、ハ、まだ今日一日汝を頼む其代りにはこれ榮太郎、姉も取戻して遣る、母も救つて遣る、汝に金も呉れて遣る、好いか、乃公が名に必要があつて汝にだけは知らせて置く、能く覺えて居る、たゞ汝が覺えて居ればそれでよいのだ、如何な目に遇つても他には云ふな、蟬崎十郎宗連と士族くさいも可笑いがこれが眞實の乃公の名だ、サアもう鶏の聲が聞える、睡からうけれど途中で寝かす、こゝに長居は危いのだ、さあ出掛けるのだ、支度なせい。

其二十二

憂愁と悲みと驚怖とに揉まれ和られて榮太郎は、今や全く自己が身を自己が意にて使ふべき力も失せて木作りの偶像なんぞの如くなり、たゞ十郎の云ふまに、唯、諸々と従ひけるは是非無しと云へ懸然なり。宵より豫て吩咐置ける事とて朝餉も夙く出づれば、彼の鎌九郎の十郎は榮太郎と共に膳に對ひて之を濟ませ、いざとて連立ち立出けるが、朝風袂に襟に寒く、天まだ全く明けきらず、路行く人も更に無し、十郎少しも榮太郎には言葉もかけず街道を左に折れて小徑に入り、得知れぬ路を無理に行けば、行

き極めども榮太郎も後れじものと随ひ行くに二時間ほど経て又一つの、いと大きな道に出でぬ。此處を那處と知りませぬど人家も列びて、朝商の店付湯けに紺の暖簾の風に飄りて見ゆる家さへ少からず。これ榮太郎乃公は後から緩緩行く故、汝は先へ立つて歩いて風呂敷一つと汝と乃公との足袋と下駄とか、好い加減に見て買ふがよいと紙幣渡さるれば、何かは知らず三町ばかり駆け抜けて云はれし品々買ひ調へぬ。よし、敏捷い、能く買つた、今度は少しむづかしいが、しつかり遣れよ、用はこれぎりだ、丈が八寸より上ある男の縮入上下二枚と、それに釣合ふ羽織一枚、博多かなんぞの男帶、これだけを汝が買つて来るのだ、ナニ譯は無い、何でもよいのだ、三十兩ある、これを持つて行け、氣に入らなかつたら還しに来ます、岩槻在のものですが毎日此處を通りますから否やは明日云ひに来ますが、品は何でも好いなれど官員になつて急に餘所へ出る人の支度で、子供の私が頼まれたのゆゑ成るべく一度で済むやうに體の好いのを見て下され、と斯様云へば論は無い、先方で見立て、呉れようから最初に金員を出して仕舞うて遣されるものを其風呂敷に包んで来れば造作も無い、汝の腰の空風呂敷に其下駄二つは

居る乃公が覺らずには居ぬ、早く悟れば素人の五人十人ば投げ退けても急度明日は汝に會ふ、よいか慌るな、駈けるな、礫三つだぞ、忘れまいぞと云ひ了りて返事も聞かず立去る十郎、猿の如くに土藏の足場を攀ち登るよと察せられしが姿は早くも苔と闇とに掻消されて、後は寂寥々と天地も死せる如く靜かに、あれが北ぞと指さし教へて呉れし一つの星は轉瞬して消ゆるが如くまた明けく、打仰ぎ見る我が額を冷き光もて射れり。此家の主人は如何なる人ぞ、彼の十郎は何として此堅固なる藏を破る、藏を破るか他のところより入るかは知られど罪も無き此家の主人の財寶を奪ふは、あゝ悪いこと、良くないこと、と思ふにつれて榮太郎が心は自由に動き出しぬ。あゝ奪られて困らぬ人はあるまい、家でも往時柳島へ移つた其夜盜賊のため家に傳へた種々の寶物を取られて遂に出ぬと母様の御話しなされたを聞たも一度や二度では無い、あゝ此の家が惘然だ、あの十郎は虎が狼、乃公には優しいやうだけれど、どうしても好い人ではあるまい、平氣で威張つて人の物を取るといふのが好からうか、あゝ惡徒だ、狼だ、勇造よりも悪い奴だ、畜生、乃公は惡徒の弟子に仕ようとする惡徒、大惡徒だ、大惡徒だ、摩でも立

て、此の家を助けて遣らうか救つて遣らうか、えゝ何故乃公は彼様な奴と一所になつて此處まで來たらう、ア口惜しい事を乃公は仕た、昨夜のやうな事をさへ乃公は仕なかつたら此様な男に連れられずとも済んだものを、あゝ何も彼も乃公が悪い、彼の大切な母様のたつた一人の子の此の榮が大惡徒の弟子にされて、今盜賊の手傳をして居といふのか、えゝ口惜しい、あゝ惡かつた間違つた、もう此の榮は此一生、惡徒の同伴へ入つて仕舞つて、曲らない人になることは到底出來ないに決つたか、あゝあの御星様が神様ならば、神様どうぞ御助け下さい、惡徒の傍から榮を離して母様の傍へ遣つて下さい、それから後は死んでもよろしい、昨夜は私が大變な悪い事をばいたしました、何んな罰でも御加なされて而して赦して下さいませ、死んでも決して神様を御恨み申しはしませぬが、どうか今一度生きて居る中母様に會ひたうござりする、と何處を目的とは無けれども人の最後の念慮には神の御影の映すものか、漆の如く眞黒なる闇に佇みて偽り無き熱誠の涙ばろく／＼と、黙して答へぬ地に墜す、此時我を忘れ居たるに、肩たゝかれてハツと驚き身動きなせば、これ榮太郎、定めて無益な考へをして居つたら

う、さあもうよいわ、何だナ、鼻をつく／＼音させて、ハ、ア泣いたな、これ、道理だが、涙では團糕一ト串賣つては呉れぬ醜い世界だ、何を泣くやい。

其二十五

我を悔んでの口惜涙とは聞なれば十郎の見る由も無く、さあもう乃公の用は済んだ、怖いことは無い、隨て來いと手を執つて曳かるれば、汝此の大惡徒めとは思ひながらも振擧るだけの意地も張れず、前の通りの魂魄無しとなつて言葉も無く、隨ひ行きぬ。既仕事も爲果せたることなれば那處かに落着くべしと思ふには似ず、十郎の虎狼は四邊見廻はし小聲になつて、汝は定めし疲れたらうが、今一軒乃公が見て置た仕事を仕ようといふところがある、それさへ済ませば乃公の肩にかゝつて居る大切の用も済み、汝の事も一切埒を明けて遣れる、苦しからうが左程でもあるまい、是非遣つて呉れ、それから先は極樂に汝を入れて遣る、と云ひつゝ先へ立つて歩めば、酷いにも程のあるもの、他の藏を破つて尙足らず、どれだけ奪れば足るといふか、また一軒を潰さうとは虎より酷い強慾無情、と呆れて眼を睜りしが、咽まで出てゝも夫を非道

す方へと立去る群に入り、今方着きたる新橋を背後になして一二町行くかとすれば、忽ちに車な轡うて麴町の兎あるところまで走らせたり。今宵は空も打曇りて雨含も雲掩ひかさなり、月は全く光も洩らさず、此處は何處か知らざれど門構へいと大なる家のみありて、道行くは角燈提げたる巡查の靴音淋しく折節非常を警むるあるのみなれば、榮太郎は薄氣味悪くて、ひつたりと十郎に依り添ひて行きぬ。目ざすところのあればにや物も云はざる十郎は、たま／＼榮太郎に問ひ掛け話しかけられても答へせず、足並正しく道路の中央を歩みて少時行けるが、那の家の門前に立てる燈火の光も更に届かざる暗きところに立止まりて榮太郎が耳に口を寄せ、さあ榮太郎しつかり頼むぞ、汝に盜賊を乃公はさせぬが、乃公は働くのだ此處の家で、と恐ろしげなる低き聲に力を強めて告ぐれば、告げられて榮太郎は慄ひ出し、總身よりして冷汗を流し、私は何様すればよいのかと問はむとする間に身を起せし十郎は既丈高き黒板塀の手がかりも無からむと見えし塀に取りつき、壁錢蜘蛛かなんどの如く不思議にも這ひ上るよと見えしが忽ち身を跳らせて音もさせずに中に入りぬ。取り残されてこればと許り驚き當惑す

る榮太郎は心も無くたゞ裏面の様子を耳引立てて伺ふに、彼方も塀の際に依りて耳語らしき忍音にそれその其處の羽織と下駄を持つて右へと傳うて行けと云ふ聲す。これに初めて心づきて何時の間に羽織と下駄とを捨てしと呆れて脚下の闇を搜るに、成程二品遣ち散りあれば今さら逃げむ勇氣も無き身の、云はるゝまゝに拾ひとりて塀を右へと傳ひ行くに、塀は忽ち戸一枚だけ音無く内より開きたり。不思議と見るに十郎は指頭をもて塀をたゞきつ來よと招くにさも似たれば近づき寄るに、闇なれども彼十郎は黒闇にも眼の見ゆるかして我が袖を、むづと握みて引入るゝに、引かるゝまゝに中に入れば塀は初めの如く閉ぢられ、少の變異を残しもせず。榮太郎たゞ舌を巻きて驚嘆しつゝ、塀を搜りて考ふるに此處はもとより表の口ともまた裏口とも思はれずして、非常の口かなんとなるべし、たゞ一面の塀と見ゆる中に一枚開き戸ありて中より錠の卸され居たりと覺しけれども其甲斐無く、十郎がため事も無く錠は解かれて捨てられたるべし。

其二十四

誰の家とは知らされど雲間を洩るゝ星の光り

に透して見れば棟高くして、簷廻りもいとこのびやかに、いづれ華族か官祿ある人の住居に相違なしとは幼き眼にも見え渡りて、昨日此頃逢り換へなんどの工事にかゝりて尙最中歟と思はる大なる土藏の足場かゝりて苦など彼方此方葺きかけあるが闇の空にも高く立てり。齒の根も合はず顔ひ居たる榮太郎は既虎の頭に腰打掛けし思ひなして進まむにもまた退かむにも我から何とせむ心は無く、羽織に包みし下駄を持ちて茫然として立ち居れば、袖か曳き／＼十郎は落の内の隅の方なる物置乃至は從者待と見ゆる一ト棟の小屋の傍に誘ひ來りて、さあ此處に居れば汝は安心、若し屋の中が騒がしいと見たらば今の出口から出て靜に北の方へ行け、決して駭けるな慌てるな、あれあの星が北にあたるぞ、而して人車が居たならば裏間の宿まで乗つて行つて新橋で相失たといへばよい、黙つて泊つて居るがよいぞ、それから汝に大事の頼みは別でもないが錠三つだ、若し家の内の人々が騒いで大勢雨戸を明けて出さうに見たらば彼處の藏の屋根へ必ず一つ投げて呉れ、乃公は彼處の藏の屋根から働きたむのだ、一つで屋根へ居なかつたら逃げながらでよい何處ぞかの塀になりとも二つ投げて呉れ、静かな此夜中起きて

と十郎の云ひしか知らず、主人も低頭平身したり。

其二十六

能くは何とも知れざれと思ふところを遂げしと覺しく少時して彼の十郎は例の如くに悠然として此方をさして歩み來り、我が面をば指さしながら、皆おいどんが顔を覺えて巡査殿に訴へたがよか、ハ、ハ、ハ、と臨阿さまに冷笑して、さあ皆行け、と同類の戸外に衆くるかの如く榮太郎に對つて戸越しに命ずれば、時折顔を出しては私に内の態を見たる榮太郎は歸路と合點して裏通りへと足疾く脱けたり。後より續いて出し十郎、駈け去る榮太郎が後を追うて四五町ばかり歩みしが、忽然として呀と叫び、汝、失敗た、素足だな、下駄は如何した、何處へ捨てた。徒跣で夜深に東京を歩いて咎められずに済むかと聲こそ低げれ忙しく問へば、いや、下駄は此處に持つて居ますと急に答へつゝ、腰より取りて賢くも忽ち穿て歩むにぞ十郎ふと笑を洩らして、よし、それならそれでよし、あれ見よ先方から巡査が来る、此通りだから浦斷するな、東京を出るが大切だぞ、何でも乃公の眞似をしろと云ひつゝ、疾歩に歩みたり。此方は

進む彼方は來りて忽ち巡査と撞れ違ひしが、撞れ違ひさま注意深き巡査は角燈の光を向けて二人をじろり打見遣り、怪むところやありたりけむ待てと一ト聲叫んだり。南無三大事と驚きたる榮太郎は既腰痠えて立つたるまゝに縮みけるが、十郎少しも驚かず、後ふりかへりて立止り、何か御用でござりまするか、と、たつた今彼の家を去りし時薩摩辯道ひしには似ても似つかぬ純粹の江戸言葉。何用があつて那處へ行く、姓名身分を一應云へと、慣れ切つたる言葉つき、油斷無き眼ざしは流石に敵手も都會の警吏なれど、沖を超えたる曲者の此方は更にびくともせず。私は下谷西黒門町十番地住居の菅野道雄と申すものでござりまする、銀座尾張町日々新聞日報社員、一毫も御嫌疑を惹くべきものではござらぬ、今夜當直いたせる折柄、これなる小僧が自宅より馳せまゐつて獨て病臥いたし居れる老母の病氣差し迫りたる由を申すにつき取るものも取り難へす一寸歸宅いたすところでござります、と辯舌明かに、強て退めなば一ト議論にも及ぶべき勢をもてをき開けば巡査も疑も半ば解けたる面はせしが猶意に落ちずや、角燈の光の及ぶかぎり詳しく二人の容子を見て、泥足なして下駄を穿き居る榮太郎が方に眼をとめ、

汝は何だ何者だ、眷族か召使か、名は何といふと厳しく問ふに、榮太郎はいよく保へ出せしが、何も怖い事は無い、有儘にさつさと申し上げると、力づけては呉るゝやうなもの之餘り助にもならぬ十郎が、一ト言に漸く口を開きて、田舎から出て使はれて居る、榮太郎と云ひますものと名だけは遂に實を吐きぬ。田舎は何處か近在かと追ひ掛け問はれて仕方無く、浦和在鹿手袋利と再び實を吐きけるが、親父は何といふ、母があるかと根問ひをされて、今度は母をいたはるばかりの一念に、ハ、ハ、ハ、父様も無く母様も過般死んで仕舞ひましたと、頭隠さで尻隠す甲斐無き虚言を云うて退くるもやうなり。差出口には此處ぞよき所、打捨て置きては危しと十郎より口を出し、右様の譯で私の老母と此兒の母親と往昔同處に勤め向いたし居つたる縁により引取つて世話をして居ります。と云ひ切つてまた語を足し、まだ御尋問の廉がござらば速かに御尋ね下されませと怒氣を含んで逆に遇れば巡査は一寸會釋して、宜しうござる、御隨に御通行なさいと手を引ぬ。然らば御免、さあ來い榮と、十郎先に立つて後を隔す行けば、榮太郎も虎口を逃れし思ひ、また問はれの間と急ぎ足になつて必死と歩みを運びぬ。

と云ひ切る一句は口より出せず、たゞ心の進めぬまゝ後へと隔り勝なるのみ、されども悪魔の十郎めに、やれ可憫然に脚が痿えたか、今さら何とも仕方ない、遣るところまで遣るほかに中途で休みやうも無い、どれ身體を出せ、乃公が背に乘れ、負うて遣らうと背を出されては辭みやうなく脚の痿えと共に心の不平も痿えて、弱き兒童の此の強き男に敵ふべくもなければ、黙して其意に隨ひけるに、十餘町ほど歩きたるゝ覺しき頃には、晝ならばいと賑やかなるべき人家きつしり建ち續きたる町へかゝりて、流石に都の大路と著く夜は更けたれど道行く人にもちらほら留ひて街を照らす軒の燈火も數見えたり。此様に人の多きところで仕事の何として成るべきと、背より下されて榮太郎は疑ひしが、例の無言になり果て、十郎は榮太郎を後に隨へ、忽ち曲り忽ち折れて裏の通りに出でしが早きか前後見廻して一つの板塀を何の苦も無く跳り超えつ、内より小さき木戸を開き、細き路次様の家と家との狭間を過ぎて其突當りの木戸をも開けば、其處は表の通りと見えて何と無く陽氣に思はれぬ、前後の木戸を斯く捻ぢ明けて閉ぢあるやうに粧ひ置ける十郎は、今や母屋と離れて裏通りの方近く建てる一つの藏に立寄

りしが、如何なる術や施しけむ藏の細戸の錠は脱れぬ、土戸はもとより開きありたり、直ちに入るかと案の外に、これ榮太郎此の藏は目的にはせぬ難業藏、今明けて遣る汝は中へ入つてこれを五六挺點火して處々に樹て置き、而して少時立塞がつて光を蔽して居るが好い、それから乃公が此方向きの兩戸一枚引剝して内に入つたと見たならば燭光を内へ射し入るやうに汝は入口を飛び退いて、母屋の外側の兩戸なんぞに汝の姿を見せないでこゝへ術突つて音をさせる、隣家に知るゝほどにはすまいぞ、決して家の奴輩が外面へは出ぬから怖れるな、此家の主人は油斷の無い面、たゞでは行けぬで一ト仕懸食はせて脅迫して奪つて遣るのだ、さあ此を以て乃公の云ふ通りに仕て呉れ、愚圖々々するな、仕事にかゝれば慈悲は無い、えゝ盡くるな置き去りにするぞと云はれて手を出せば、遙遠されたるは百日蠟燭五六挺、發火奴一箱例の羽織の三品なり、いよく怖れ慄ひつゝ、仕事にかかれは慈悲は無いの一語に恨めしさもまた増せど抵抗ひ難くて、音もさせずに引明けられたる藏に入り蠟燭幾挺點火し果て、戸口に出でて光を蔽へば、此間に既に兩戸の尻に何をかなし

て無造作にも一枚放ち捨てたる十郎つか／＼と内に進み入りたり。今こそ大事、我身も彼の男と共に、家の人々に聲立てられなば、捕へらるべしと胸に早鐘つきながら土藏の入口飛び退きて、十郎が入りし口の傍の戸に身を打寄せつゝ逃ぐる用意と我が下駄も脱ぎて腰につけ、生きたる心地も無く居ける。それに引替へ悠然たる十郎は下駄のまゝに入りて忽ち戸近く眠り居たる男を蹴起し、引縛りて柱に繋ぎ、其傍の小僧二人も苦無く縛りぬ。家内の人の眼を覺まさば必ず呼ばむ叫ばむと榮太郎の思ひしには似もつかず餘りに譯無く靜なるに少しは榮太郎も怖れを減じて、兩戸にこゝゝ觸れながら内の様子を伺へば、藏より射し入る光によりて彼の十郎が口に銜へし明晃々たる匕首はいと物凄く輝きて、今しも五十ばかりなる婢と見ゆるが青き類して縛られつゝあり。日前に見る此光景に榮太郎胸痛くなりて猶睨ふに障子襖を引き明け、猶奥深く進み入りたる十郎は主人が寢間と見ゆるところに入りて女房らしき女を忽ち縛りたり。此物音に眼覺めしかして勃然と起きたる此家の主人の屹と此方を見たる顔、燈に遠ければ定かならねど眼圓に睨張つて鬼とも紐むべき相なれば、榮太郎きよつと驚きしが、たゞくやくと聞えしばかり何

す西新井だぞ、さあもうこゝで今日一日か明日一日かの僅の間だが別れになる、途中氣をつける、歩行なよと、云ひく握りし手を分てば、假初ながら浅からぬ縁ありてかして榮太郎は別るゝことの何と無く兄か父かに別るゝ如く悲しくて、左様ならばと別離の挨拶するも半ば聲消えて後を眼瞼の露に云はせ、ちつと後影を見送れば、十郎もまた十數歩行過ぎて此方を顧み、互に顔を見合はする利那に彼此の無限の感慨話りも敢へず、掛聲急に馳せ来る青菜の荷車に互の姿を隔られて其まゝ遂に別れ果てぬ。榮太郎教へられし如く少し戻りて車を僦ひ、西新井かけて浦利まで、好いか車夫さん西新井をかけて浦和へ行くのだと再三確と念を推し、今しも曳き出させむとする此時遅く彼時早く、南の方より疾風の如くに馳せ來し車の上より、待てと鋭き叫び聲の雷の如くに射出されたりと思ふ間も無く、我が衣の領に手ばかりぬ。ハツと驚き動揺して甲斐なくも身を跳きつゝ後を見れば、見覚えのあるも道理や先きに我を調べし巡査にまされなし。教へられし通り云ひ逃がれむと焦慮、ど今度ば口も明かせず、兎も角も先づ屯署へ來い、と引致されては争ひ難く、警察のつかまつて居さうな丸木の欄の前に立たせられて、一

段高いところから嚴重險峻の聲恐ろしく糾明され、こりや榮太郎隠し立てば身のためにならぬぞ、其方昨夜實名不詳の男と共に多町の雜穀商坂本屋喜藏方に於て強盜いたせしこと其方の遺留品によつて、證據明白なるぞ、同伴の男の本貫姓名並びに行先も定めて知らう、疾く正直に申し立てい、未だ成人にも及ばぬ其方、正直に申さば御上でも御憐愍下さるぞ、疾く實を云へ、さあ如何ぢやと、云はればならぬやうに問はれけるが、何として彼の大恩人、男兒の中の男兒のため、加之今わが姉のため奔走して呉れる彼の人のため不利益となることを云はれうぞと、決心堅く口を結びぬ。

其二十八

初めの一日は榮太郎が戻らざるに、さては都合能く金錢の出来たる其爲大事を取りて今宵は歸らざる嘸と悦びしが、其悦びは空となりて二日めの正午過ぐれど歸らず。今朝千住を立たて遅くとも、もう歸るべき筈なるにと門口まで出て望むことも幾度といふことを知らず。されど音沙汰全く無ければ、おこのは漸く案じ出して、若しや都合の好からずして思ふ通りにならざるより歸るも歸り憎しとてお須磨とともに

無益な念慮を疲らせ居るでは無かるべきか、それならばまた手紙のひとつもお須磨の手より送すべきに、それさへ無きは萬が一途中で不幸でもありしか、あゝ氣厭りなと立つ居つゝ、風の音にも立上りて外面の方を見たりしが二日めの夜も遂に歸らず、三日めの夜も猶歸らず、いよいよ心配は長じけるも、何となすべき方便も無ければ、今夜は是非無し。明日一日に若し歸らずばたゞは置けず、肩けるところへも人々頼みて肩け置きて千住へ行き、一度はお須磨が主人と頼む人にも娘の禮をいうて其旁々に榮太郎が居らば直ちに連れて歸らむ、居らずば八方きゝ糺して確と行方をさぐり來むと思案は定めたりけるが、心の底には明日は必ず何事も無く歸り來れと神に佛に念じけるを、無憐や神も佛も聞き玉はでか、明けて其日の朝の鴉も雀も常の如くは鳴けど、吾兒は聲も無く影もさゝすて、思ひもかけず、來よとも云はぬ彼の勇造は例のさゝ歩みして、懸聲もせずぬつと入り來ぬ。こればと驚く此方の様子を冷かに見て無氣味なる笑を含みつゝ座に直り、いやなにおこの、乃公が來たとて其様に立つ舞ひつせいでまゝあ下に居て云ふことを聞け、巧く一杯乃公に食はせて過般の夜はよくも逃げたの、汝の方で左

先刻に車上で初めて渡しし萬世橋も渡し復し、
晝間暫く憩みたる旅店の前をも通りぬけ、いづ
くとも知らず十郎が行くに任せて尾きけるが、
風寒き大道の傍に小さなる腹糞園ひして、特凡
一ツ二ツ置きならべ、大福と書きたる行燈赤く
挑げて、物賣る夜商人の店の傍に、二人乗りの
人車引き捨てて車夫と見えたる白髪交りのいが
栗頭の大男が高聲に、今夜ほど酷いめに遇つ
た事は無い、夕方出でから坂本まで、それから
神田、それから芝と段々南の方へ釣られて、終
ひが京橋でおいときば、どうかして吉原へ一
ぱい乗せて行きたいと思つても全て人ば無し、
悉皆殺を絞つて仕舞つた、仕方が無いから是か
ら門へ行つて朝歸り待つとしたが、障泥の上
が白くなるほど霜の降る中に安閑としてゐるく
らの堪らないことは餘りありやしない、と愚癡
な語るを聞くよりも十郎ずつと腹糞の中へ入つ
て、あゝ寒い晩だ此處へ来い、小僧大福を買つ
て遣らう。

其二十七

呟はれて榮太郎ついでに入りつ、いと暖かき
大福餅幾個が取りて打啖ふに、職業に如才は無
き車夫の腰を屈めて、もし旦那へ、那方へ御出

でなさるか知りませぬが召して遣つては下さり
ませぬか、といへば此方は思ふ坪と、ム、乗ら
ぬでも無い價次第で、二貫で干住まで持つて行
くか、といふに彼方は二つ返事、相談たちまち
出来たれば店の老父へ若干か造りて、車に打ち
乗り曳き出させたり、榮太郎これに助かりて初
めて吻と息をつけば、十郎大方それと察して、
これ榮太郎草臥たか、もう案じるな此の車の千
住の橋にかゝる頃には夜もしらゝと明けて來
よう、朝食を済ませたら心細からうが乃公は別
れる、といふは矢張汝のため、他でも無いが
汝の姉のお須磨といふが行方知れずになつたま
までは済まして置けぬ、扇面亭より辨次郎とか
いふ奴等めに一寸會へば一ト眼で乃公が見極め
る、若しも彼奴等の悪計で隠した手品などであ
れば否應云はせず泥を叩かせて、お須磨を連
れて手土産に汝の家を尋ねて遣り、それから勇
造の埒も明ける、もう心配はちつとも無い、車
に乗つて西新井へかゝつて家へ歸るがよい、何
と云つても乃公の行くまで勇造の方は構ひつけ
るな、訴へる氣遣は少しも無い、訴へるゝと
云ふばかりだ、よし解つたか、車錢やら途中
の雑用やらに十兩進る、愚圖々々云ふな、汝に
は錢金で禮を返さうといふほど卑劣な乃公では

無い、男兒は金地づく人情づくだ、金銭は車
の油同様、高が世界の油なので、世界の廻り
を好くするばかり、眞個の男兒の交際は人情鏡
べ齊地くらべ、こんなものは商賈になるばかり
だわ、たゞ乃公から金を貰ふは嫌だ、汝が思
ふなら汝の意地は立て、置くが、左様角張るに
も及ぶまい、まあ取つて置け、好いか榮、人方
車で浦和まで行けよ、必ず後から乃公は行く
乃公任せにしる、悪くはせぬぞと低聲の話を咀
嚼でくゝめるやうに親切な首尾、榮太郎一々
合點して、大惡徒と思ひたりし今の先刻の念ひ
は忽ち那處へやら、心から底から嗚呼ありた
い男兒の中の眞の男兒とは此人かと腹の底には
手を合せて拜まぬばかりに感じ入りて感佩涙
遏めあへず、短しきにもまた咽せかへりしが、猶
此後の心得になるべきことども教へらるゝ中、
夜はほのゝと明けかりて、果して千住の橋
にかゝる頃には市場に赴くものさへ三々五々
と前後しぬ。此の宿は青物鹽物の市立つ處と
て蕎麥屋飯屋の朝早くより店を明け居るも少
かられば十郎車をそれに着けさせ、暖かきもの幾
種かに腹を補ひ立出でけるが、乃公はこれより
扇面亭へ直に出かける、汝は少し後へ戻つて車
を見次第必ず西新井へかゝつて行け、よいか必

中ぬと云はぬばかりの顔つきして、さも鄙しめつ勇造を再び彼男は見下しけるが、急に頭を下げ身を低くして、これは初めて御眼にかゝりまする、小生は鎌九郎と申しまして亡くなられた榮吉殿とは幼少頃の兄弟分、何分御見知り置れて下さりませ、どうやら一寸榮太郎から聞きましてには榮吉殿が何か貴下に飛んでも無い御迷惑をかけて置かれたさうで、いやもう定めし困られたからでもござりませうが眞實に相済みませぬこととござります、わたくしに御覽の通りの無骨者ではござりまするが、榮吉殿とは兄弟分の誓約も致した者でござれば、圓らす此度おこの殿とも邂逅ひました上からは何とか相談もいたしまして小生から改めて御話に上りまする、いやもう亡くなられた榮吉殿の恥辱は矢張小生にもおこの殿にも逃れぬ恥辱、それを厭うて其上におこの殿をも御世話なされて下されうとの思召はまことに有り難い御芳志、亡位も定めて悦びませうし小生に取つても眞實ありがたうござりまするが、まだ小生は悉しい事も能く承はり及びませれば、おこの殿から委細な承知いたしましたる其上で今晚御宅へ伺ひませうほどに、どうか御在宅を願ひますと、事情はまだ能く呑み込まぬらしけれど、下手に

出でて居き切つたる挨拶、勇造黙つて聞き居たりしが、鳥無き里の蝙蝠の驕りに馴れたる押柄顔、それでは汝様が榮吉と幼少時の兄弟分だつたといふので厄介話を自分の肩にかけて立たうと云ひなさるのか、親兄弟でも面倒な事は成るだけ他にかづけるのが當然な世間の習ひだに、汝も餘程茶人だね、ハ、然し何程何様云つても空手で來ては話には頭から成らないと思つて貰はう、好しかえ、素手ではどうせ無益だよ、それを承知で御來臨なら何時なりとも御來臨なせえ、フン巧者に口ばきゝなすつても口ばかりでは肩の動し損と云ふものさ、どれまづ左様いふ譯ならば家へ歸つて寝てでも待たう、いやおこの殿、汝はまあ好い、弟分に出て來られたが、元が他人だ、餘り臍をさらけて見せて愛想を盡かされなさるな、旅鳥では無し此の乃公に矢張依つたが安泰だらうに、と憎まれ口をたたきつゝ突立上つて、どれ行きませう、ヘイ群興の御客様、まあ御緩りとなされませと云ひ捨て戶外へ立去れば、おこのお須磨は眉を皺めて、まあ憎らしい毒口ばかり、飛んだ失禮な数々を御聞かせ申して済みませぬ、定めし御氣色にも觸りました事でござりませうが御勘辨を、と右より齊しく詫言れば、客は却

つて笑ひ出して、取るに足らざる彼奴等の惡體口は牛の角に止つた蚊ほどもに思ひませぬ、フ、フ、フ、ナアニ御構ひなさるな、それよりも先づ伺つて置きたいのは彼の勇造めが榮吉殿から入れて置かれた證文を持つて居りまするか、又それを確實に御覽になつた事があるのでござりまするかといふ一條でござりまする、榮太郎殿から残らずに一應伺ひはしましたが是が分明といたしませぬ、榮太郎殿がまだ御歸りにならぬとあるは心配ながら、もう頓て歸つて來られませう、わたくしの事はお須磨殿も榮太郎殿も詳しく御承知でござりますれば緩りと御聞下さる、何ぞ不思議に榮太郎殿に御眼にかゝつたより及ばずながら御心配は皆取り除いて上げますつもり、これは亡位様への小生の御恩報でござりますれば御心置なれ、何事なりと尚御相談を御かけなされませと、高ぶりもせず、こせつきもせぬ世に頼もしげなる男氣の言葉におこは夢みる心地、助くる神の我家へ天降りましませしかと幾十日來初めての眞實の悦びを得たる嬉しさ、言葉には云ひあらばせぬ思ひなるべく、頭も下げしまゝ頃には擡げもあへず深く謝しつ、やうやく徐に口を開いて、榮太郎はまだ歸りませれば、往時は何の様な事からして亡くな

様いふ出様をすれば此方も曲つて出る意地の悪い出様も知つて居るが、何も地獄の鬼のやうに酷くばかりも出度くはない乃公、どうだえおこの、羞かしがる齡でも怖がる齡でもあるまいものな、無益な口をきかせるだけが野暮といふもの、それとも遂て乃公を袖に亡位へ情を立てるといふならそれは其方の勝手だが、男兒に恥をかゝせただけの報は吃度有るものと思つて貰はう。なうおこの、これさどうしたものだまた黙つて、料簡な腹の中へたくし込んで腹の底で乃公の量なひくのか、何も考へることは無い、二つに一つの返答だわ、どうだ、位牌に泥を塗つて、汝等親子に辨償の枷をかけさせて呉れうかの、それとも乃公の意について何様か何分身の振り方をこれから頼み申しますと縋つて来るなら乃公は任侠だ、なんで汝等に此様な悲しい明日の米を氣遣ふといふやうな目を見せて置くものか、五玉と一つ玉の差違よりまだ大きな差違、減算と乗算の何方が身のためになるかは小兒でも直に解らう事では無いが、これぞ那方を向いて居る、空囁いては済むまいに、と今日は前の日に引代へて頭から通り、次第々々に、一句は一句聞くに忍びぬ忌味の數々、半分は有迫を加へて無禮の振舞を爲しも仕兼ねぬ兇惡

殘忍の面構へ、臂力があらば張裂めても遣りたけれど、女一人の爲むかたなく、氣ばかり焦れて涙ばかり空く溢れつ困じ果てたる折柄、戸外に人の聲音す。嬉しや榮の歸りしかと思ひのほかに榮にはあらで立派に粧ひし妙齡の女は娘のお須磨なり。こればと驚き、嬉しさ餘つて、おゝお須磨かと飛び立つて迎ふれば、母様とより語は出す、泣きながら縋りつく娘、互に少時は抱き合せて嬉しさにもまた涙なりしが、お須磨に伴れられ隨ひ來りし大の男の面方に鼻いとき高く眼つき鋭く容貌如何にも逞しきが徐に此方に見て、此は何人か、豈夫これがおすまの主人にもあらじと疑ふにつけ、お須磨はまた何様してこゝに來りしか、それも榮太郎は如何にせしと不審は續いて群り起り、お須磨あの御方は那家の方か、また榮太郎は如何しましたと問へば、問ふより問はるゝ方のおすまを始め彼男まで不審の色を急にあらはし、では榮太郎は歸りませぬか、それでは母様此御方の御噂を少しも御ききなまりませぬか、はて面妖な榮太郎は那處に胡亂つて居る事やら、榮太郎もまた妾も此お方には一ト方ならぬ大恩を受けて危いところを逃れたばかりか段段と、これ御覽なされ此の身の周圍も矢張此の

御方にこしらへて頂きました、そのみでは無く母様御悦びなされませ、猶此後とも母様の方にもなつて下さうと眞に御親切に仰やつて下さる此方はあの御父様と御幼少とき仲よしで兄弟分になつて居られたさうな鎌九郎さまと仰やつて今は京都に御住ひなさる御不自由の無い御身分の、ほんに／＼ありがたい御方でござりまする、母様好く御禮を云うて下さりませ、榮太郎が御眼にかゝつたり往時を忘れず厚い御情、榮太郎ももう疾に歸つて此の御話をした筈なのに舌も遲しと忙しく引合はすれば、彼男はいと鷹揚に口も開かず一禮して、じろりと横眼に勇造を睨みぬ。

其二十九

思ひがけざる邪魔の入りて勢ひ自己に利無くならむとするを見るより勇造は、手持不沙汰に不平演じて烟草薫らし居たりしが、お須磨は厭な奴の座にありとは思へど知り合ひの中とて嘗無く知らぬ顔も満更出来れば、これは勇造様暫く御眼にかゝりませんでした、何時も御達者で御結構なと、故意と勇造の名を鎌九郎に聞えよがしに挨拶するに、さてはいよく此奴めか、初手から若くば此奴ならむと思ひたりしが思ひ

主人はそれを却つてまた徳漁るやうな魔の振りかた、段々聞けば十何兩とかお金を取つて主人が承知で妾を其厭らしい爺めの自由にするのと約束したとか、左様と知つた時の妾の驚き母様察して下されませ、初めの約束に其様な事は無い筈と争つても、主人は馬鹿に仕くさる女め、世間一體かういふものだわ、朋輩どもにも聞て見る、左も無く誰が大金を出す、人を馬鹿にして給金の前借を踏まうといふ料簡か、左様はさせない其積りで居よ、厭なら厭でよし前借を綺麗に拂つて食ひ扶持を置て行くなら我儘も通して遣らうが左も無くば、なか／＼氣隨はさせられぬ、と前借を枷に無慈悲な云ひ狀、母様の許へ此事を申したとても御苦勞をかくるばかりと堪へてもとう／＼辛防仕切れませれば、或夜の事でござりました、妾は何處までも我を張つて、最初の約束に肌身まで汚して奉公するとは云はぬといふを頼みの楯にして必死と主人と争ひましたに、最初は主人も強く出て、強情なめ騙賊めと随分攫みか／＼りも仕さうに、又手ごめにもして云ふことを聞かせさうにも仕ましたれど、妾も覺悟を極めまして、叶はぬときは御上の手を御借り申しても行るところまで行つて見ようと一生懸命些も負けず強情な

張りましたれば、先方であう／＼我を折つて、とても妾は手に乗らぬと悟つてか彼の平九郎を呼んでひそ／＼相談した末妾を平九郎へ渡しまして、前借は屹度取り戻して渡して呉れば合點ならぬと緊しい談判を纏めました、妾に取つては平九郎も先方について此方を言つた憎い奴ではござりまするが、生活といへば漬物も一本買ひするほどの中で妾を預かつた氣の毒さ、餘り働きも無い男で實は商賣も女郎上りの女房がきりもりする位ゆる分別も思案も別には出ず、たゞお須磨様如何しませうと妾に料簡をきくばかり、妾も母様に御苦勞は成るだけ懸けたく無いと存じて成らう事なら堅氣の家へ來公をして、其前借で扇面亭の方の借を返して仕舞ひたいほどに左様いふ口をと頼みに頼めど、所詮堅氣では其のやうな高の大きい前借の出来よう筈は爲いとの投首、扇面亭よりは慈悲無くも毎日のやうに酷い催促、他人の中に介まつて妾も日がな一日心配、病氣も出るかとおもふほどでござりましたが、平九郎の女房が口をきくまゝして同じ渡世仕ながら平九郎とは打て變つて世間に澤山額も賣れて才覚もあるとか噂される辨次郎といふに妾の話を持つて行き、それより其男にも幾度か會つては互に相談しました、

と云ひかけて一ト思まづ休みぬ。

其三十一

其辨次郎といふ男は何かに抜目の少しも無い思ひ遣りのとゞく賢しい人で、他に半分口を利かせれば後は大概承知して仕舞はうといふ伶俐者、妾を引取つてからも何一つ不自由はさせず御客様に仕て置て、一日彼方へ行つたり此方へ行つたり駆け歩き、乳母子守の口入れから旅藝妓茶屋女娼妓の周旋何といふことなく八天狗働いて居ながら、家ばといへば火鉢一つ竈一つのがんから住居、勿論衣服は見苦しいといふでもありませぬが掛割には餘り不審な生活方と最初ば妾も疑ひましたが、其後解つて見ますれば何でも素性に仔細のある相應の容貌の若い女に家を持たせて圍つてあるので、其女に何も彼も注ぎ込んで住居の方は商賣の爲ばかりに表向を仕てあることと合點が行き、此様いふ生活もある事かと思ひました、平九郎の手から辨次郎の手に渡された妾は爲る事も無く二日三日四日五日と日を重ねて居りますけれども辨次郎は妾に一ト言何にも云はず、たゞ其儘に置ます故妾も居づらくて或日此方から何様ぞ仕様はあるまいかと口を切りましたに辨次郎も投首しての屈託

りました良人と貴下の交情が結べてあるものや
らも存じませぬが、往時を思つて下さる御心の
有り難さは何と申しやうもござりませぬ、あの
勇造めが手に持った證文といふは話ばかりで
まだ妄へ見もしませぬが、御覽の通りの我儘
無法、上見ぬ鶯の強いに任せて妾等親子を窘
めます其非道さは御話にも何にもなつたも
のではござりませぬ、お須磨も此様に御世話な
なされて下さりましたと承はりますに、又勇
造の方のことで御世話になつては済みませぬ
が、お須磨、一體汝の御主人の方の様子は如何
になりました、榮太郎が歸つて話をせぬゆゑ妾
は虚空に案じてばかり、何様して此の御方に榮
太郎が御眼にかゝつて又汝は何様して此御方の
御供をして此家へ來たのかさっぱり解らず、一
應妾へ汝から摘んで話を聞かせてと云へば、
お須磨の居ざり出でて語らむとするを少時と過
め、それは後から緩々とお須磨様から御聞なさ
れませ、まづ勇造めの一ト廉を小生は埒明けて
まゐりまして、其後御話もいたしませう、それ
では只今申しました證文はまだ御覽にならぬ
といふのでござりますとな、承はれば三十四
十の端金に八反何畝の抵當のよし、餘り相違が
ござりますれば勿論勇造めのこしらへ事、證文

も、無いに極つて居ります、よろしうござります、
氣を大きくして平氣になつていらつしやしま
せ、これから浦和へ小生は一寸まゐつて自用な
達して今夜勇造めを對治して十分仇を取つてあ
げます、憎い蛆蟲めでござります、引摺つて
來て御詫なさせて其後緩り往時話も又お須
磨様榮太郎殿の此後の事も御話し申しませう、
左様ならば、と云ふかと思へば颯風の如く身を
起して、おこのとおすが驚きとむむる間も
あらせず走り出でて、お須磨が追ふも及ば、こ
そ、鎮守の森の蔭にかくれて妾は忽ち消え失
せたり、何といふまあ不思議の人。

其三十

止めもするかと氣遣はれての事でもあらうが
餘りといへば性急なと采れて獨語く母を宥め
て、いえまあ母様御きゝなされませ、彼の方ば
かりは眞に／＼優しいかとおもへば氣味の悪い
ほど怖しく、強いかとおもへば子供のやうに罪
の無い何とも御氣性の知れぬ方、母様はまだ御
怒りになつたところを御覽なさられなれど、
それは／＼其の御怒りなかつた時の凄さ、眉を
御堅てなされるでも齒を御咬みなされるでも無けれ
ど、御顔も御身體も鐵でも出来て居るかとお

もはれるやうに一寸の操りも御無くなりなされ
て、一句一句に極く精選りぬいた詞を御出
しなされる其時ばまるで別の方かとおもふ位、一
言でも間違つたことを云はうなら、ころりと首
でも振れさうな操り、脇で見て居ても冷汗が流
れました、あゝまだ何も彼も御話をしません
でした、母様妾は大變な眼に逢ひました、平
九郎といふ男の手から扇面亭といふ家に奉公し
ました其當座はまことに優しく仕て呉れます
し勤めも辛いことは無いゆゑ好い御主人と思ひ
込んで少時勤めて居りましたに、其後節々來て
は遊んで歸つて行かるゝ草加在の大盡だとかい
ふ老爺が妾を捕へて厭た事を頻りに云ふので逃
げまれば、御客を粗末にして成るかとお上人の
の以の外の不機嫌、餘の御客なら何のやうに
御相手も勤めませうけれど彼の大盡、無理はか
り仰るゆゑにどうぞ御免と泣て願へば猶怒つ
て、四ツ道になつて酌をしるとか一本足で給侍
をしるとか御客がまさか云ひますまい、人間に
出来ることを爲よといふに何にも無理は無い筈
と案にも棒にもかゝらぬ亂暴な命令、あんまり
無體なと思ひながら段々家の様子を見れば、朋
輩の人は皆それ／＼家の御客の云ふなり次第、
猥褻の事を仕ちらして却つて手柄のやうな顔、

る見る平九郎が頭は隆起て佛像の螺髪のやうになりしました。

其三十二

餘りの亂暴に妾も驚いて止めようとは思ひましたれど怖さに續んで手出しもならず、そこちする内平九郎は拳の下から悲しい聲を出して、あゝ御免なされませ謝罪する、私等が悪うござりました、といふに手を緩めて、さあ皆白狀して仕舞へ、汝と辨次郎との間に機關をこしらへてお磨を食はうとしたに違ひはあるまい、不埒なものめ、と叫い言葉に抵抗へず、恐れ入りました、仰やる通り辨次郎が法を書きまして此女を一旦隠した上扇面亭の方を半歩踏んで其後籍の出来次第遠國へなりと遣つて仕舞はうといふ企圖でござりました、と聞けば恐しい惡計の段々を白狀して居る其所へ飛んで来て割つて入つたは辨次郎、平九郎よりは沖を越えた惡徒の本性をあらはして鎌九郎殿にも負けては居ず、赤くなつたり青くなつたりしていろいと最初は口をききましたが、平九郎が泥を吐いて仕舞つたに力も無く、僞籍へ嵌めてお磨を食はうとした不埒者め免さぬぞ、愚圖々々云はば赤い筒袖着せて呉れうか此乃公をたゞも

のだと思ふと違ふぞ、今では京都に住んで居るが、お磨が親とは兄弟分、代言人も仕て居れば公事訴訟なら此方の手のもの、出るところへ出て白い黒いを何時でもつけて遣らうほどにお磨は理でも非でも今日連れて行くから左様思へ、とめだてするなら腕づくでも裁判沙汰でも持て来い、お磨が世話になつて居た間の食ひ扶持は一文も遣らぬ代りに汝等に惡計もさせて遣らぬゆゑ、有り難いとおもつて犬つくばひして三度拜謝して禮を云へと、何處までも強い一言に辨次郎も敵はず我を折つて言葉の出無くなつたを機會と、お磨さあ来い、扇面亭へ一應渡りをつけて置いて母のところへ連れて行くと妾を引立てれば、左様はさせぬと争ひかゝる辨次郎、えゝ此の馬鹿め、惡徒には思ひ切りの惡いと蹴倒して妾を無理遣り扇面亭へ連れて行つてまた一ト談判、初めは物柔かに前借を御返し申して引取ります、御用にもたゞいで飛んだ御迷惑をかけました、私はお磨が叔父でござると云ひ入れて主人に氣をゆるさせ、前借金のある證文を見ると齊しく悉皆變つて、やい亭主汝の家は娼妓屋をして居てお磨を娼妓に傭つたのかとおもへばたゞの料理茶屋、お磨はたゞの酌女、それに何として枕をもつて客に添寝をさ

せようとした。此證文に何とある、お磨は鑑札を何處から受けた、此證で處女に前尻で打がせうとは怪しからぬと云ひさま突然證文を傍の火鉢に投げ込んで、ハ、亭主め有り難いとおもへ、たゞ三十兩の損だけで汝はお磨に露ほども懸け構ひの無いものとなつた、文句があらば何處へでも云へ、破でも無い營業の冥加として、たまには乃公のやうなものに逢ふのも其方の災難拂ひの御祈禱代りになる事だ、と取つてもつかれぬ強い勢ひ、食つてからうにも齒の立たうといふ隙さへ無いに、強い人にかゝればまた彼のやうな者は弱いもので、一言も返せず、泣きさうな顔して居るばかり、委細構はず妾を連れて、すいと立つて仕舞うて外面へ出ても扇面亭は考へがあつてか黙つた限り、此方は全て強吹く風のやうに悠々として出て、妾をば或家へ連れ込んでから初めて彼方の身の上話、榮太郎が仔細あつて妾に逢ひに來て本意無く歸つた其途中、不圖した事から聞き合つて見れば家の親父様とは彼方の兄弟分であつたといふより一ト肌脱いで下されて、先づ妾を危い瀬から出して下されたといふ一缶一什何つて妾もつく／＼と平九郎辨次郎等の企圖の段々を悟つて見れば思ひ合はす節も一つや二つで無く、ほ

顔、さればござります、他でも無い兄弟同様に
交際つて居る平九郎が難儀を見るに見兼ねて彼の
女房に頼まれたを厭とも云はす汝を連れては來
たものの堅氣なところで金を出さぬは何處でも
通例、初手に平九郎が扇面亭の様子を委く汝に
云はなんだが手脱といふやうなもの、田舎
の茶屋女で前金を澤山出すといへば云はずと知
れた慶味事をするものとは解りきつて居るに、
左様で無いと思つて居つた汝の方も手脱で無い
とは云はれない、それを今云つたとして何様でも
なるでは無いが理窟は此様なものさ、ところで
扇面亭は出した金を取り戻さずには居ないも道理、
汝の方は入用があつて借りた金の残つて居
よう筈は無し、平九郎は仲に立つた口銭のほか
一文の得をしたことでは無いが差し詰り扇面亭
からは矢の催促、何程汝を責めたとして仕方が無
ければ責められもせず、世話した玉に故障があ
つて而して其前金が戻せぬなどと云はれた日に
は仲間から弾き出されて商賣も出来無くならう
といふ切迫つまつた仕儀、何様か仕法はあるま
いかと泣きつかれて私も仕方は無く、兎に角乃
公の方へ遣して置け、随分口を探して遣らうと
汝を引取りは仕たものの、なか／＼甘い口は無
く、今でも平九郎は責められ通し、智慧分別の

底をはたいても始末に行かぬは金銭の事、何様
か汝に仕様はあるまいか、と反對に先方から相
談をされて、當惑のほかに何も無く、弱り切つ
て居れば先方も弱つて、それなら仕方は無い、些
悪い筋のことではあれど汝が身を一時隠して居
て下され、隠れどころも乃公が心配するほどに
黙つて隠れて呉れさへすれば、肝心の玉が逃げ
て仕舞つて何とも仕方の無いほどに、捜し出す
まで待つて呉れと扇面亭の方は一寸延ばしに延
ばして置いて、其中好い口を見つけ次第前借をし
て其金を返す手都合にして置かう、と云ひます
る故妾も是非無く、何様が宜しく願ひますると
辨次郎の云ふなりになつて居まして、預けられ
た先は前に申した妾の家、爲すことも無く寐つ
起きつして居ますと、昨日の武頭平九郎が來て、
大金を出してもお須磨といふ女を取られば男が
足たぬ乃公はお須磨と云ひ交した情郎だと云ふ
恐い立派な方が私のところへ今見えて、さあ
お須磨を出せ此處へ出せ、一旦預つた汝が口か
ら知らぬとは云はせぬ、何處へ遣つた、直連れ
て來たら兎に角にまづ話は後にして汝に五兩
骨折を呉れる、それともお須磨が何様あつても
行先知れぬといふ事なら汝と辨次郎を訴へて扨
帯犯に落して呉れると法律政と金責にされて私

は抵抗へず、辨次郎兄貴に今他所へ出て不在
ふ相談する間は無し、どうか一寸私の家まで
お須磨様來て下されませ、と狼狽きつて揉下で
頼むに、妾は吃驚果て、左様いふ情郎は持
たぬ覺えぬと云ひ張つても平九郎は夢中同様、
私が五兩になるか乃至扨帯犯で辨次郎と二人訴
へられるかのところゆゑ是非一寸來てと無理に
妾を引出す、え、どうなるものか、怪しい其男に一
應逢つて見ようと思つてきめまして出て行つて
迷つて見ますれば、平九郎が家の中央に座をし
めて居られたのは彼の鎌九郎さま、岩疊づくり
の威のある容顔、見るから恐ろしいなるに妾は
胸を轟かせて平九郎の背後に隠れて居れば、
鎌九郎さまは妾を見るよりそれと察してか、つ
かつかと立上つて驚掴みに妾を引寄せて、洪鐘
のやうな聲朗かに、お須磨安心せ、もう大丈夫、
狐狸等の穴にはもう汝を落さぬ、奴等には食
はせぬ、平九郎來い、五兩遣るぞと云ふかと思
へば、榮螺殼のやうな拳を固めて平九が横面を
突然強く一つ擲いて驚き怒るを見下しながら、
やい野郎め、これ五兩では拜謝をせぬな、まだ
不足なら十兩にも二十兩にも増して遣らう、と
猫の兒でも扱ふやうに襦袢とつて膝に引服き、
大の拳でまた一つ、どうだ野郎とまた一つ、見

うで、ハ、御戯談ごぎだんな、御物ごものお奇きな、御磨ごまなされませ彼かれ様さまな婆ばな、人が御酔興ごすいこうと笑わらひまするわ、御廢止ごはいしなされませ、それほど彼の親おや子こを思おもひめして下くださるならば何様どうでござります母おかあより娘めいの方かたを御世話ごせわなされては如何いかなもので、お須磨ごもが承知しょうちなすまいとは、ハ、氣きの弱よわい御遠慮えんりょ勝かちな、承知しょうちも不承知ふしょうちもござりますものか、當人あたひの仕合せ母ははの安堵あんどう左様さよう願ねがへれば私わたしも此上このへの無ない大安心だいあんしん、是非ぜひとも親おや子こを説得せつとくします、ヘイ満更まんさら御思召ごしめしの無いでもないで、それなら願ねがつたり叶かなつたりでござりまする、まあ御重ごしんなされませ、今夜こんや私わたしはこれからどうせお須磨母ごもはは子こが家いえに厄介やくがいになりませ序ついでに母はは子こを説得せつとくしませう、あゝそれに付つて旦那様だんなさまですおこの一寸御逢ごあひひなされて返済はんさいの金かねは儘ままに取とつたと一ト言いふ云いつて遣はなつて下くだされませぬか、女おんなは氣きの小いもの、私わたしの口くちからばかりでは安心あんしんしますまいから御迷惑ごめいわくでもおこのに優しい御挨拶ごあいさつをなされて下くだされますまいか、お須磨ごもの話はなしもおこのの氣舌頭かしたうに云いひ廻まわされて、勇造ゆうぞうは一つは五十兩ごじゅうりょうを得たる悦よろこび一つはお須磨ごもを我がものにするを得たる悦よろこびといふ悦よろこびに、自己おのれが勝手かての理ことわりにつけて厚面皮こうめんぱにはもまた今更いまさらおこの意いを此方こなたに傾かたかせむ

と、鎌九郎が我が今までの所行を知らぬらしき
に、乗じ、酔の勢の考へ渡くも、左様いふ譯な
らぬに頼んでお須磨を取り持つて貰ひたい、成
程おこのに一言云つて安心させて置くもよから
う、どれそれならば出掛けませうかと既煙草入
れを腰にすれば、勘定済ませて鎌九郎も立上り
つゝ笹屋の小提灯を借りたるに路を照らして村
道を三町四町と迫りけるが、小石に躓きた
りと覺し躊躇として勇造に衝突ると齊しく提
灯をばつたり消して、えゝこれはまあ鈍い事な
した御免なされ、と月はあれども昨日今日の雨
もよひなる空黒き闇の中にて鎌九郎は勇造に打
詫びぬ。

其三十四

生醗本性達はず勇造は自家が足元の危きな
忘れて、提灯は消えても大事無い、汝には田舎
道の解り難からうが眼が無くなつても乃公は歩
ける、こ、こ、この手につかまつて來なさいと
先に立つて鎌九郎を導きけるが、また少時して
鎌九郎は下駄踏み返して勇造にどんと一ト當り
衝突し、あゝもう聞れない路で大きに弱ります
と叩けば、挨拶はいらぬさ、此様な難路に聞
れぬ人の聞くは道理と云ひく猶も先に立つて

遂におこのが家に着きしが、酒には酔つたり氣
ははずんだり、頭から顔の締りを崩して、おこのの
どの、もう心配はなさるゝ。此仁の手から元利揃へて彼の件金は受取つた、汝は眞實に好い弟分に會つて飛んだ幸福に向いて來たの、乃公も根から葉から此仁の氣象にはとんと惚れて仕舞うた、お須磨も何かえ此仁の肝煎で奉公を下さつて來たかえ、母の傍に一所に居られて定めもし嬉しい事だらう、これから母子の料簡次第でもつと好い運にもなるだらうよ、大そう美しくなり居つたので、頭髮を光らせて紅をつけて左様にして居ると見違へるほど立派な姉様、汝で此家の運も聞かう、如孝君が肝心だよ、決して浮氣など仕なさんな、我儘は身のためにならぬよ、ム、鎌九郎殿、乃公が居ては談話の邪魔になるだらう、それでは頼むよ先刻の諒を、古報を持つて来て呉れば骨折は盡まぬ、汝にも叱度それだけの禮をする、と云ひつゝ厭味たらしき眼してお須磨を幾度も偷視して、漸く家路に歸りけるが、寒風にも止まぬ泥塵の恣心地、あゝ有難い、五十兩手に入れたとお須磨めの役ほやほとと事かげて感念を今に手占めることが出来る」とば天竺様に餘程乃公には甘く出来て居つていない、ハ、ハ、ハ、げー、あゝ、好い心持だ、金

んに母様慄然としました、家の御父様が彼の方の兄弟分になつた源は、彼方の齡がまだ若かつた時、戀に迷つて無分別な情死とやらをなされたかゝつたところを家の御父様が助けて御送りなされたが抑々後端のまた最終のたつた一度の邂逅で、其時彼方が家の御父様に、今月今夜生命の御恩になつて他國へ走る路用まで下された御情は何時御報い申すことが出来る歟存じませぬが必ずともに決して忘却は致しませぬと誓言たてて弟分になつて御別れなされたさうで、それから年経て江戸へ出る度に御尋なされたも一度二度では無けれど、向知れなかつた由、お蔭で妾は身の周囲もこれ此通りにして賣き小遣にせよと御金も頂き母様に御眼もじも出来るやうになつた嬉しさは全て夢、たゞ扇面亭や辨次郎其他がまた何とか彼とか云うてまゐりはしまいかとそれが心配でなりませぬが、彼方の仰やるには何というて來ても先方は無意文、怖るゝことは決して無い、云ひがかりだと云ひ切れば論にもならぬとの御話、妾は呆れたり驚いたり、今だに魂魄が身に添はぬやうな心持がいたします、勇造が方々屹度今に忽ち埒を明けて下されませうが、何だか後が怖しうござりまする、と悦びの中にも弱き女氣の前途な

氣遣うて物語りぬ。

其三十三

勇造家に歸りて後馬鹿な顔して待ち居たりしが日暮に及べど正體知れぬ彼の鎌刃郎は猶來らず、今かくと待ち草臥れて夜食、濟ませ一人居たるに、夜の九時過とも覺しき頃使ひの者の笹屋といへる小料理屋より來りて渡す狀を讀み下せば此處まで御運び下されたとの文言なり。合點と頓て身を起して笹屋に到れば是は如何に笹屋に客は一人も無く、これゝの男の乃ふを待つて居るべき筈なが何様した事と聞けば、其御方は存じませれども浦和の方から人力車夫が手紙を持てまゐりまして、書狀の中には貴下へ上げた別封が入つて居りましたが、其添狀には此手紙を勇造殿に届けて呉れ、左すれば勇造殿の御來臨になる頃か其より少し後れて我等も其家へ向く故下物も澤山準備して勇造殿に一口口先づ上げて置く呉れ、其方に馴染は無けれども夜の深くる故前もつて告げて置く、との行渡つた御手紙で、信に受けさせうとてか御金まで入つて居りましたれば、旦那まづ御上りなされて召上つて居て下されませ、と客を外らさぬ女主人の如才はあらぬ取成しに、それ

も左様かと勇造に引かるとまゝに座敷に入り、婢を相手に侑めらるゝまに、一杯二杯と飲み、やゝ久しくこそ待居たりけれ。さゝども例の男の影もさらになされば酒にはかり空しく酔ひて下らぬことのみ一人して儘否り居けるが十時過ぎ十一時近くなりし頃突然として彼の男は笹屋に來り、席につくより頗りに低頭平身して、いえもう大きに遅なりました、仰やつた通り素手では御眼にかゝるまいと存じましたため何かと手間取り、まことに恐れ入りました、さあどうか御一つ御過ごしなされてお流れを下し置かれませ、と下にも置かぬ愛想の好さ、二三獻汲むと既大醉ひに酔つたるらしき高調子、あゝもう樽が小さいので、私は此通りの酔ひ様、いや餘り酔はぬ中用事だけを濟ませて仕舞ひませうほどに、失禮ながら旦那何卒これを御改め下されませ、これは五十兩ござりまする、少々は餘分になりませうが御不足でも其は何や彼やおこの親子がこれまでに御世話かけました雑費として御取りなされて下されませ、證文はへい只今御持ちなされませぬか、ナニ宜しうござりまする明日でも、旦那のやうな御仁體な方に疑ひはござりませぬ、私に能くば存じませぬがおこのを御世話なされうと旦那が仰やつた事のあるさ

れなも無理に辭め、飄然として闇の中へ紛れて入れば、お須磨はたゞ神か佛の化現かと闇を望みて佇めり。

鹿手袋をも差の後に浦和の宿へさしかゝりて小き辻堂の横を過ぎり用水堀の芝橋を今や鎌九郎渡らむとする時忽ち平服せる巡査二人あらはれ出でて待と叫びつ取つてかゝるを二度三度遣り違はせて、手近き一人を眼よりも高くさし上るよと見る間に堀へ水音させてさんぶと打込み、一人を足蹴に蹴飛ばせば蹴られて生氣を失ひ果て、後は雜木に聳ぐ風、堰のあたりの水の聲のみ残りたり。

其三十六

神田多町の雜穀問屋坂本屋喜藏といへるが方に入りし賊の犯罪事件ほど事實の真相を知り難きは無しと其筋の人の噂し合へるも宜なり、犯罪者の一人と認めらるゝ榮太郎が坂本屋の地内に遣せしものといふ一紙の書狀にて其文の意了解し難く、用紙の粗なるに比べては女文字の筆蹟見事に、加之も奇なるは其名宛の坂本屋喜藏と慥に記されたと、其發信者の榮太郎が母となるなり。文は極めて飾りも無き短きものに遺書らしく思はるゝ悲酸の氣の紙上に溢るゝ

ばかりのものなり。

一筆しめしまゐらせひ、打絶えての後俄にさしあげすひ文且は憎しきともおぼしめすべき妻よりのなれば定めし〱御手にも觸れさせ玉はずひはむとは存じまゐらせひへども、妾一生にこれ一つの御願ひゆみ枉げて御讀取りなされひよう念じあげまゐらせひ、思ひ數へひへば、ふたむかしほど前方、亡き父上様の言葉にそむき今更空恐しくも御前様を餘所に我儘なる思ひを遂げひしが、それより段々不仕合のみ打續き、今は連合にも先だたれひて、なされ無き暮しいたし居りひところ、神様の御罰にや、とて此世にはながらへかね潮にかゝりひて我が身を捨てひより分別も無く此月此夜罪深き身をはたしひ、まことに〱御願ひすしにくきところにはひへども、たゞ一つの心がかりにひ此榮太郎は、まだ子供にて甲斐無きものにひへば、ひとり後に遣しひふびんさに氣もくれ心も消えすひ、なにとぞ〱榮太郎此文を持ち御もとさまを頼りまありひ節は、亡き坂本屋先代にめんじて御救ひ取りなされひて、

水汲み火たきをさせられひともなかく〱苦しからずひゆみ小僧になりと御使ひ下され、骨身も固りひやう成りひはは御突放しなされひとも如何やうになされひとも御存分に願ひあげひ、不所存致せし妾より此やうなる事願ひ得ひ譯にては無くひへども、今だに坂本屋の名を御傳へ下されひやうなるまことに〱あり難き御思召の御許様を御頼りゆし上げひよりほかに、廣い世間にたゞ一人も頼まれて下さるべき方も見えぬあはれなる今の母子を助くると思しめして御聞入れ下されひよう臨終の身の切なき思ひ入り深く御住居の方ふしながみてくれ〱も願ひ上げ、我儘にひひし妾の子と思しひはば御憎しみもあらむかと存じひて幾度か筆も取りたゆみひが、なにとぞ〱妾の兄とはおぼさすいて御許様にむかしの坂本屋を一つ残さず御譲りやむとせし先代の一人の孫めがおろかなる母のためにかくおちぶれひて罪も無き歸ゆかね身に苦患を受けひかと思しめし下されひて御助け下され度ひ、切なき心の中のいろ〱何ほど申しあげひともつきず

も欲しいが女も欲しい二つに一つは那方取る、ハ、ハ、畜生、有り難い、寒薺め、此勇造め甘いことを仕居るわ、どうだ、あのお須磨の黒目勝の眼の美しさ、彼の眼で羞かしさうに一寸と見られて、もし勇造様いや勇造様では無い答だぞ、左様々々もし旦那様へ、なんかと云はれた日には堪るものでは無い、ヒ、ヒ、金も欲しいや女も欲しい、兩方占りやあ死んで好い、と鼻歌交り囁語交り我家近くへ來かゝりけるが、堅く鎖せる我が家の、庇廂の下の暗さの内より待てとト聲鋭く發する、拍子に人の聲咎烈しく、ばら／＼と此方に駈け來りて、有無を云はせず麻細緊しく引縛られて、あれ／＼と腕きもあへず、懷中袖中檢めらるゝ中に角燈照らせる巡查も來りて、いや此奴めが袖中に入れて持つたる此品は犯罪用に供せし錠を開くもの、え、何をいふ勇造め、屯署へまあれと引立てられて開いた口も閉がらぬ間に今までの悦びは苦と早變り、思はぬものの我が袂から出たるも狐に魅まれたる如きばかりにて合點行かす、忽ち舞臺に送られぬ。

其三十五

一家再生の恩を受けたる其を謝するに路は無

けれど責めてはしみるゝ禮にても演べむとおこのは可造が歸りを幸に鑑九郎が膝近く首を下げて涙まじり、思になりたる數々を謝すればお須磨と共に泣きて一家の神と俯し拜むに、鑑九郎はいと冷かに、其様に仰やられては此方が却つて迷惑いたしまする、榮太郎殿の歸られぬは心配ながらこれもまた遠からず見えるでござりませう、彼の勇造めは財産もあらかた無くなつて居りまするし、今夜此家から歸り路我が家近く多分御上の御手に逢つたでござりませう、ハ、ハ、明日になつて私の此の言葉が中つて居りましたら今申し上ぐる通りに此後の處置かなさるが好うござりまする、榮太郎殿が歸られ次第此の百五十兩を路用にして家田圃を片付けられて東京へ行つて何なりと親子三人で御生活なされ、長く此地に御出になれば屹度勇造めが父歸つて來て、好からぬ事を仕懸けませう、行先知れずになされて置いて東京へ行かれるが一の策、私も長くは遊んで居られず、遠いところに待つて居る朋友に逢はねばなりませぬ故此後の御世話は届きかねます、今夜浦和まで出て居ますれば明日になつて都合も好し、かた／＼御暇いたしますと、百五十兩を其處に置いて鳥の立つやうな囀をいえ／＼今までの御情だけ

でも御恩の報じよう無いに何様して此金が頂けませう、御用／＼ござりませうか此を深に御立ちなされずとも一日二日緩りとなされて下されば母子のものが困りまする、深い御世話を下されました御疲れを御休め申すことも碌には出来ず致しませぬが、今夜に責めてお須磨と安御足ななりと摩りまして、穢い家の内でも御氣樂にお休ませ申しでも致しませいで、と右左より精一ぱいの實情を吐して止むるを、ハ、御構ひ下されませぬ、恥を申されば理が聞えませぬが、私が丁度二十歳の頃、お須磨様を見てと思ひ出たす同じ齡ほどの女と遇われ、交情になつたす思にも死なうとした時の榮吉様に助けられた御恩返しに、聊ばかりの事をして上げましたとて未だ足らぬと私は思つて居ります位、また榮太郎殿には御願ひ申して置いた事もありまするし、浮世は相見互の事、また御眼にかゝる事もござりませう、御止めなさるば却つて御恨み、人の愛情は人に自由を與へて下さるより他はござりませぬ、どうぞ此後御無事に御生活なされて榮太郎殿お須磨殿の行木榮えまするやう、と云ひ置いて如何に云へど止まらず、それでは責て浦和まで御送り申してと云ふをも肯かす僅お須磨に十町ほど送られて、こ

我に寄せたる心の中推測り見ればあはれさに涙も溢れて、身の程を思へば他にこそ少も見せざりけれ、極の極々心底には及ばぬ戀に身を碎きて一生遂に忍び通せし床しき其のおこのが今も猶腹の底から憎からう譯は無く、好し、我が身にかけて其子を慈しみ育て得せむと思ふにも既榮太郎は自由無き身と今はなりたり、家の小僧めの新三郎めが生賢しく落散りし書狀を警察に訴へ奉げたれば是非無しとは云へ我家で榮太郎に縄かけしも同じこと、亡きおこのも何とか思ふべき、有り金残らず取られしは心外なれど榮太郎のせしとは限らぬ災難なるを、返す返す小僧めが出過ぎたる所行憎し、我に先づ其の書狀をば見せしものならばおこのが子に未決監の飯は食はせまじく、直に浦和在に尋ね行きておこのが亡き後も弔ひ、榮太郎も引取らむものを、今は我より何といふとも警察の眼より御疑ひの晴れざる中は榮太郎の免されて出づべき瀬もあらじ、勿論榮太郎の疑はしからぬといふでは全く無けれど、小兒の事なり賊をせしでも先づ無からむと思はるゝに、偶然な事をしたるもの、と賊難の悔しさは二の次にして強き男は強きだけ情にも強く、おこの頼みを空しくせまじ、とそれ／＼の道を盡して榮太郎の疾く免

されて出るやうと頻りに心を勞しける。賊難事件は猶落着せず、其筋の人々に入換り立ち換り坂本屋を音問れ種々の事訊ひ尋ねれば、喜藏は浦和在に行くことも叶はず日を經る中に、今日は彼の文のH付をもて推せばおこのが七日の忌にあたる日とおもふにぞ、商賣の暇を偷みて日頃信する冬木の辨天に詣りて救苦無樂の大菩薩願くは亡きものの冥途の闇に法光の恵みを與へさせ玉ひて正佛果を得せしめ主へと真心こめて祈念し終り、嗚呼あの小町娘とも云はれしものが斯く成り果れば成り果するものかと往時を思ひ今を思へば、常は商賣の損得よりほか何も考へざる身にも愴然として物悲しく、家に歸りて夜に入れば、自ら佛前に燈明淨水香花を供じて、店も常よりは早く仕舞はせ、家内寂然と伏鉢の響淋しく、佛名唱へて夜を更かし、凡火心にもつく／＼と因縁の不思議なるを思ひ知りけるが、其夜も明けて次の日の晝榮太郎が上の様子を聞かむと警察署に赴きけるに驚くばかりなる事に逢ひぬ。榮太郎は今や犯罪者と認むべき證無きなもつて、召喚訊問されたとこの母のおこのと姉のお貞磨と共に免され出づるところに行過じたる喜藏の驚き、死せしとおもひし其おこのが枯れても残

る若き時の花の傍、猶中々見るべき風情無きにあらぬが、今しも榮太郎を伴ひて嬉しげに出来るに行逢ひたるなれば言葉も出でざりしが、開きにくき口を無理に開いて、これはおこのさ御久しうござりました、私も榮太郎様の御身の上につきましては及ばすながら心配も致しまして只今も様子を聞かむとありましたところ、まあ此處では御話もなりませぬ、私方までは是非一寸御出なされて下されませ、と頭を下げて周章つゝ忙しく云へば、往時使ひし喜藏なりしかと見たるおこのは、じろりと眼を外れて見返ることもせず、これは喜藏殿でござりましたか、御心配下された御蔭様で榮太郎も好いところの御飯を頂きました、大きにありがたうござりました、妾の文を恥かゞやかしい警察の眼にまで御入れなされて御願ひを無にもせず、能く／＼榮太郎を結構なところへ御世話下されました、往時の御返報はたしかに母子で頂きました、もう澤山でござりまする、と云ひつゝ車に乗じて、何程云うても聞かばこそ親子三人は上野の方をさして何處とも知れずなりしは能く／＼縁の遠なるものか、喜藏が情は仇となつて、おこのには往時の返報をせし歟と思はれていと遠く恨まれ卑まれ、二十年前の免をま

いへば、筆のあまりは彼の世とやらより御夢路になりと御傳へすことも出来いばはと致果なき事を心あてに惜しき筆とめいかしこ

この

坂本屋喜藏様

と認めて堅く粘付じせるを、若し證據の手がかりもやと聞き見たるは名宛の當人喜藏を立會はせて警官のせしことなれば、それまでは誰も見ざりしと覺し、之に添ひたるは榮太郎宛の之よりも猶短文にて、たゞ此文を持ちて江戸多町の坂本屋喜藏を尋ねよとあるばかりなる一封なるがこれさへ封じめは解かれずありたり。世に盜賊のかゝる信書を齎らしつゝ其名宛の人の家にて惡事を働くといふ例あるべしと思へす、信書は特に奇怪なる意味を含みて一應にては解しも得ざる文面なり、警官も殆ど洞透し得ぬ事の不思議さに手がかりも無く、たゞ榮太郎と今一人の男を一應訊問せし調査の報告と坂本屋の裏にて拾ひし右の信書を主人にも告げず迅速に警官に訴へし坂本屋の小僧の新三郎が申し立に一線の道の通じ居るを見しより、榮太郎及び一人の男の面を見知りたる調査の浦和へ通ずる千住と王子と板橋との三路の中の千住を

擇びて追跡したるが案の如く榮太郎を捕へ得たるまでの事にて、榮太郎は何程間へども事實を吐かれば詮議の蔓は榮太郎が母のおこのを訊問すると彼の日報社員と名乗りたる曲者を捕るより他なし、然るに嫌疑者榮太郎が家に同類の立廻る事もあらむと浦和の署にては特別このを引致せずして伺ひ居しに同日同夜時間の前後は不詳なれど一方にては疑はしき一人を捕へて訊問するに、伏罪はせざれど袖中には犯罪用品に相違なきものを所持す其のみならず日頃の行跡も宜しからざる勇造といふ村内の悪まれものなるが、家宅を一應檢分するに金品藏匿の心構へをなせりと覺しく生活の乏しからざるものの割には不思議にも家に一金も無く、家内のもものを糺せども毫も要領を得る能はず。また一方にては平服せる巡查二名を撃ち墮して姿を隠せるものありと覺しく、たゞ村人の意見せる二名の死體によりて其の推察を下すに過ぎざるのみ。これら要領を得る能はず。兎に角勇造には最も深く疑ひかりて嚴しき訊問を受けさせられぬ。されども事の模様は知れぬに警官も迷へる其中へ、猶不思議なるは被害者の坂本屋喜藏より、榮太郎が舊主の伴に相違なき遺散したる書狀によつて承知致したるが、

如何にも彼の狀を持ちまゐりしならば察するところ偶然にも夜陰に及びて我家を潮々尋ねあてし折、賊はまた丁度我が家を立ち去る節にて、警官の眼をあざむかむため賊の脅迫折帶するところとなつて倉卒に引き行かれしものなるべく、其周章の間ゆゑに捕者に宛てたる書狀をも遺失したることにても無くば、一團合點まありませす、と榮太郎を庇護する氣味ある申し立てなせる一條なり。世に被害者の加害者とおぼしきものを庇護ふといふかゝる不思議の事あるべしや。

其三十七

非常の損害を受けたれどこれには屈せぬ坂本屋喜藏が、我へ宛てのおこのより、其往時我を卑み疎んじて榮吉と我儘を仕通せし主人筋ながら憎からぬでも無き其おこのより、往時を詫びて、世界に我をたゞ一人の頼もしきものと頼めばこそなれ最期の際にこまゝと頼みこしたる信書をば、警官と共に讀みたる時の異様の感じは筆にも及ばじ、手紙によつて見る時はおこのは既に死したるなるべく、若き時の心には内々忌々しからぬでも無かりししながら、我を嫌ひしは縁の無かりしだけの話、最期に臨みて孤を

年譜

慶應三年

七月、江戸に生る。

明治四十二年夏、『露伴叢書』再刊の時に當り、予巻頭に記して曰く、

博文館予が舊文を新刊するに當つて、予に求むるに自傳を爲らんことを以てす。予これを辭す。聽かざる也。已むを得ずして自ら傳ふ。曰く、露伴は武州の人なり、慶應三年七月江戸に生る。其の乳兒たるに當つてや、孱弱多病、死して而して蘇るもの數次。譬曰く、此兒憫む可し、命の瘍せざらば則ち身の廢せんこと必せりと。父母悲傷し、哀々劬勞、擁護したる方む、而して後繼に全きを得たり。又や、長ずるに及んで眼を病む、天日な仰ぐ能はざるもの數十日、眼目枯坐、心ひそかに聲を分とす。幸にして癒ゆるを得たりと雖も、目力終に人に及ぶ能はず。伊呂波を關女史に受け、九歳市めて小學に入り、十三歳業を卒ふ。次で或は東京府中學に、或は菊池氏私塾に學び

しが、故有りて皆業を卒へすして止む。十七歳より後世路に遼遼として、嫻嫻今に至る。詳しく言ふに足らざる也。それ今の私の我に於ける我猶之を厭はんとす、況んや昨の私の我に於ける、我豈敢て之を傳ふるを欲せんや。是の如きもの即ち是我也。我たゞ吾が深く感じて而して忘るゝ能はざるものを記するのみ、是亦蓋し我ならんのみ。

明治十五、六年

夜々菊池松軒先生に就きて聽講、年少無知と雖も、程朱の學の藩籬を窺ふを得たり。

明治十六年

電信修技校に入る。給養生となりて自ら支へたる也。

明治十七年

同校卒業、實務を執る。

明治十八年

判任に補せられ、次で北海道後志に赴任す。

明治二十年

官を棄て出京す。乃ち免官せらる。

明治二十一年

『露園々々』と草す。

明治二十二年

讀賣新聞社客員となる。

五月、『風流佛』刊行。

明治二十三年

國會新聞社に入る。

六月、『葉末集』刊行。

明治二十四年

谷中に一廬を購ひ、獨居す。

十月、『新葉末集』、『二宮尊徳』、十二月、『勇魚捕』刊行。

明治二十五年

七月、『寶の蔵』、十月、『尾花集』刊行。

明治二十六年

谷中を去る。

三月、『眞西遊記』、九月、『枕頭山水』刊行。

明治二十七年

東京府下寺島村字番場に寓居す。春末より夏に亘り、病みて死に瀕す。冬、窮困の故を以て、都を去り、上總に寓す。

明治二十八年

二月、『日蓮上人』、六月、『有福詩人』刊行。

明治二十九年

出京、芝に寓し、小田直太郎氏謀略を以て

た新に結び増したるは不思議にも思ふにまかせ
め世なりける。

勇藏は袖より怪しき品の出たる實證あるに嫌
疑深く厭しく糾問されけるが不思議なる書狀の
警察署に來りしによつて猶深く疑ひを受け窘
められぬ。書狀は立派に認めたる男の手にて
其又言を擧ぐれば次の如くなりし。

汝等、能く見ゆへ、能く考へゆへ、さ
て後自ら愚なるを悟り候へ、汝等に教
ふべくゆ、榮太郎といふ兒は我が拐帶し
て汝等の眼の中に投ずるの砂粒とせし
みなり、勇藏は我が愛撫して汝等が眼の
前に跳る空花たらしめしもののみ、但し
疾く勇造を宥して我を捕へよ、我はたゞ
汝等が眼の鼻の如く、汝等が耳の臍の
如く鈍くして、常に悪人の手を借らすん
ば悪人を捕らふる能はざるを笑ふのみに
いぞや。

汝等が衣食の源をつくる一人

此書狀の結果は勇造の嚴しく責めらるゝの
みなりしが、云はすと知れたる彼の十郎は手
拍つて笑ひ居るなるべき歟、其後絶えて分明
ならず。

昭和二年十二月一日印刷
昭和二年十二月五日發行

現代日本文學全集 第八篇

著者 幸田露伴

發行者 山本美

印刷者 君島潔



發兌

東京市麴町區內幸町一丁目三番地
幸ビルテナイング階段

改造社

電話 銀座座
一四〇二番
一七三〇番
一五五八番
一五五八番

山室氏を娶る。將棋に耽る。

十二月、『さゝ舟』刊行。

明治十九年

國會新聞編輯解社。

春陽堂に『新小説』を起す。妻の諫によりて漸く將棋に遠ざかる。

二月、『きくの濱松』、『僥倖』、『ひげ男』、五月、『ひとり寝』、八月、『雲の袖』刊行。

明治三十年

神田に移居す。次で寺島利字新田に移る。

七月、『水上語彙』、八月、『新羽衣物語』刊行。

明治三十二年

一月、『小萩集』、八月、『伊能忠敬』刊行。

明治三十四年

長女を得。

九月、『譯言』、十一月、『長語』刊行。

明治三十五年

六月、『露伴叢書』刊行。

明治三十七年

次女を得。

明治三十八年

一月、『出處』刊行。

明治三十九年

一月、『天うつ浪第一』、三月、『潮待草』、六

月、『天うつ浪第二』、『不滅庵物語』刊行。

明治四十年

長男を得。此年同地に新居を營む。

一月、『天うつ浪第三』、五月、『はるさめ集』、十一月、『蝸牛庵夜譚』刊行。

明治四十一年

一月、『寶の山』、『玉かつら』刊行。

五月、京都帝國大學講師を囑托さる。

同月、『小品十種』、九月、『頼朝』刊行。

明治四十二年

京都帝國大學講師を辭し、歸京す。

六月、『露伴叢書』刊行。九月、『露伴叢書』(再刊後編)刊行。

明治四十三年

妻病死。

明治四十四年

一月、『露伴集第一』、五月、『露伴集第二』刊行。

明治四十五年 大正元年

五月、長女を失ふ。

七月、『努力論』刊行。

十月、船尾榮太郎氏嫁約、兒玉氏を娶る。

大正三年

四月、『修省論』、八月、『洗心錄』刊行。

九月、願に依り京都帝國大學講師を囑托さる。

解かる。

十二月、『立志立功』刊

大正四年

八月、『悅樂』刊行。

大正八年

三月、『幽情記』刊行。

大正十三年

小石川に移居す。

九月、『冬の日抄』刊行。

大正十四年

九月、『幽秘記』、十二月、『蒲牛氏卿・平將門』刊行。

大正十五年 昭和元年

三月、『名和長年』刊行。

四月、『活死人』を草す。

同月、『頼朝爲朝』、六月、『洗心廣錄』刊行。

七月、『蘇東坡と米元章』を草す。

十一月、長男病歿。

昭和二年

寓居を轉す。

一月、『龍姿蛇姿』、六月、『春の日抄』刊行。

十月、『武田信玄』を草す。

GTU Library
2400 Ridge Road
Berkeley, CA 94709
(510) 649-2500

GTU LIBRARY



3 2400 00559 7756



改造社